静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第15集

中通遺跡・寺海土遺跡

第二東名No.130地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－3

２０１２

中日本高速道路株式会社東京支社

静岡県埋蔵文化財センター

序

本書は、浜松市浜北区に所在する中通遺跡と寺海土遺跡の発掘調査報告書です。第二東名高速道路の建設に伴って行われた浜松市内の発掘調査では、すでに刊行しました大門西遺跡・大平遺跡と中屋遺跡に次ぐ、３冊目の報告書となります。

中通遺跡では、合計200基をこえる数の縄文時代早期の炉穴や30基以上の集石が発見されています。東海地方では最多となる炉穴の発見とマスコミに大きく取り上げられたこともあり、調査中から全国的にも大きな話題となってきました。寺海土遺跡では、鎌倉時代の河川や溝が発見されており、多くの遺物が出土しています。

本書では、調査によって発見された遺構や遺物を報告するとともに、それらを総合的に検討することで得られた新たな知見も報告しています。中通遺跡では、縄文時代の人びとが合理的な観点から炉穴を築いていたことや、専門家の間でも様々な意見のある炉穴の機能に関する見解を提示しました。寺海土遺跡では、先に報告された中屋遺跡の調査成果ともあわせて検討し、鎌倉時代における岩水寺を中心としたこの地域の姿を示すことができました。

両遺跡ともに、個別の遺構・遺物の分析にとどまらず、様々な視点から地域の歴史の一端を明らかにできたことが、今回の調査の大きな成果であるといえます。

現在この周辺では、「遠州山辺の道」の整備事業として、産業や自然、史跡、文化財といった地域資源つなぐ散策コースの整備が進められています。中通遺跡もそのルートの一つになっていますが、本書にまとめた成果は、当時の遺跡の姿をより具体的にイメージいただける内容になっていると思います。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社ほか、各関係機関の御支援、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成24年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田　順也

例　言

1　本書は、静岡県浜松市浜北区根堅に所在する中通遺跡と寺海土遺跡の発掘調査報告書である。なお、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、市町村単位にて実施している。浜松市では本報告書が３冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浜松市－３」とした。

2　調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　中通遺跡と寺海土遺跡（第二東名№130地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は次のとおりである。

確認調査　平成12年９月～12月、平成15年４月～10月
本調査　　平成16年１月～平成18年２月
資料整理　平成21年９月～平成24年３月

4　調査体制については、第１章に別記した。

5　本書の執筆は、武田寛生、足立順司、鈴木三男、小川とみ、株式会社加速器分析研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボが行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　次の業務については、委託により実施した。

写真測量等業務　株式会社フジヤマ（平成16・17年度）
掘削業務　株式会社林工組（平成16年度）、株式会社中村組（平成17年度）
遺物洗浄・注記業務　小林建設株式会社（平成16年度）
整理作業員派遣業務　NTTマーケティングアクト（平成17年度）
放射性炭素年代測定業務　株式会社加速器分析研究所（平成17・18年度）
出土種実同定業務　パリノ・サーヴェイ株式会社（平成22年度）
出土品付着物分析業務　株式会社パレオ・ラボ（平成23年度）
木製品樹種同定　国立大学法人東北大学学術資源研究公開センター（平成23年度）
整理作業・保存処理業務　株式会社パソナ（平成23年度）

8　発掘調査では次の方々にご指導、ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

池谷信之、小濱学、渋谷昌彦、谷口康浩、戸田哲也、広岡公夫、藤澤良祐、矢野健一（五十音順･敬称略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　座標は平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの一辺は10ｍとし、アルファベット（Ａ～）と算用数字（１～）を用いて、その位置を表示している。東西方向が西から１・２…、南北方向が北からＡ・Ｂ…と設定している。

3　方位については、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。

4　発掘遺構は、遺構の種別を示す次の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。

SD　溝　　SE　井戸　　SF　土坑　　SH　掘立柱建物

SR　河川跡　　SP　柱穴・小穴　　SX　その他

5　遺構番号は、遺構種類ごとの通し番号としている。番号は、基本的に現地調査で付されたものをそのまま使用したが、遺構種類が変更されたものについては、新たに別の番号を付している。また、現地調査では調査区ごとに通し番号が付与されていたため、本報告書では上一桁に調査区名を付した4桁（中通遺跡のSPのみ5桁）の番号で表示して区別した。

6　遺物番号は、遺跡・種類・遺構・挿図の別に関わらず、すべて通し番号を付している。

7　図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図中に表記している。

8　遺物の実測図の縮尺は、縄文土器は1/2または1/4、石器は4/5または1/2、金属製品（銭貨を除く）は1/2、そのほかは1/4を基本とし、各図にスケールを付した。

9　銭貨の拓本は、すべて原寸大で掲載している。

10　周辺の地形図については、大日本帝国陸地測量部「二万分の一地形図（明治23年）」、国土地理院「二万五千分の一地形図（平成19年発行）」、浜北市「二千五百分の一地形図（平成3年発行）」を複写・加筆して使用した。

11.　土器・陶磁器の分類・編年に関しては、主に以下の文献に依拠した。

松井一明1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究25』静岡県考古学会

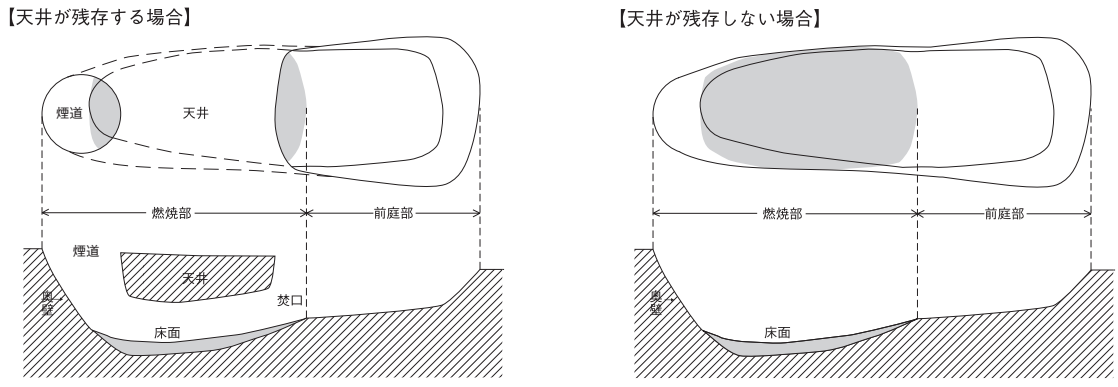
藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

鈴木正貴1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

瀬戸市1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』

12　本報告書では、基本的に平成23年4月現在の市区町名で記し、必要に応じて旧市町村名を併記している。なお、所属については、当時の所属機関名を記している。

13　炉穴の各部位については、下図の名称を使用している。



静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 15 集

中通遺跡・寺海土遺跡

目　次

序 / 例言 / 凡例

第１章　調査の方法と経過 …… 9

1　調査に至る経緯 …… 10
2　調査の体制 …… 12
3　調査の方法 …… 13
4　調査の経過 …… 15

第２章　位置と環境 …… 19

1　遺跡の位置 …… 20
2　地理的環境 …… 21
3　歴史的環境 …… 23

第３章　中通遺跡 －縄文時代－ …… 27

1　概要 …… 28
2　炉穴 …… 31
3　集石 …… 185
4　包含層・攪乱出土遺物 …… 215

第４章　中通遺跡 －古代～近世－ …… 219

1　概要 …… 220
2　掘立柱建物 …… 224
3　小穴 …… 278
4　河川 …… 280
5　溝 …… 284
6　井戸 …… 290
7　土坑 …… 294
8　その他の遺構 …… 300
9　包含層・攪乱出土遺物 …… 306

第５章　寺海土遺跡 …… 321

1　概要 …… 322
2　掘立柱建物 …… 325
3　小穴 …… 335
4　河川 …… 336
5　溝 …… 347
6　井戸 …… 366
7　土坑 …… 371
8　その他の遺構 …… 383
9　包含層・攪乱出土遺物 …… 388

第６章　理化学的分析 …… 399

1　放射性炭素年代測定（AMS 測定） …… 400
2　種実同定 …… 405
3　土器付着物の赤外分光分析 …… 412
4　樹種同定 …… 415

第７章　総括 …… 431

1　縄文時代 …… 432
2　古代～近世 …… 439

図版 / 抄録

図版目次

図版１　遺跡とその周辺
図版２　中通遺跡　炉穴と集石（１）
図版３　中通遺跡　炉穴と集石（２）
図版４　中通遺跡　炉穴と集石（３）
図版５　中通遺跡　炉穴と集石（４）
図版６　中通遺跡　炉穴（１）
図版７　中通遺跡　炉穴（２）
図版８　中通遺跡　炉穴（３）
図版９　中通遺跡　炉穴（４）
図版10　中通遺跡　炉穴（５）
図版11　中通遺跡　炉穴（６）
図版12　中通遺跡　炉穴（７）
図版13　中通遺跡　炉穴（８）
図版14　中通遺跡　炉穴（９）
図版15　中通遺跡　炉穴（10）
図版16　中通遺跡　炉穴（11）
図版17　中通遺跡　炉穴（12）
図版18　中通遺跡　炉穴（13）
図版19　中通遺跡　炉穴（14）
図版20　中通遺跡　炉穴（15）
図版21　中通遺跡　炉穴（16）
図版22　中通遺跡　炉穴（17）
図版23　中通遺跡　炉穴（18）
図版24　中通遺跡　炉穴（19）
図版25　中通遺跡　炉穴（20）
図版26　中通遺跡　炉穴（21）
図版27　中通遺跡　炉穴（22）
図版28　中通遺跡　炉穴（23）
図版29　中通遺跡　炉穴（24）
図版30　中通遺跡　炉穴（25）
図版31　中通遺跡　炉穴（26）
図版32　中通遺跡　集石（１）
図版33　中通遺跡　集石（２）
図版34　中通遺跡　集石（３）
図版35　中通遺跡　集石（４）
図版36　炉穴出土遺物
図版37　炉穴出土縄文土器（１）
図版38　90 号炉穴出土遺物
図版39　炉穴出土縄文土器（２）
図版40　炉穴出土石器
図版41　189 号炉穴出土縄文土器
図版42　炉穴出土石核・剝片など
図版43　集石出土遺物
図版44　SR1001 出土遺物
図版45　SD 出土遺物
図版46　SF4007 出土遺物
図版47　SE・SF・SX 出土遺物
図版48　SX4012・SH 出土遺物
図版49　包含層･攪乱出土遺物（１）
図版50　包含層･攪乱出土遺物（２）
図版51　SR1001 ～ 1003 出土遺物
図版52　SR1006 出土遺物
図版53　SR2002 出土遺物
図版54　SR2003・2004 出土遺物
図版55　SR・SD 出土遺物
図版56　SD2004 出土遺物
図版57　SD2005・2006 出土遺物
図版58　SD・SE・SF 出土遺物
図版59　SX1012 出土遺物
図版60　SX1004・1008 出土遺物
図版61　SF 出土遺物
図版62　SF・SH・包含層出土遺物
図版63　包含層・攪乱出土遺物
図版64　中通遺跡　SH（１）
図版65　中通遺跡　SH（２）
図版66　中通遺跡　SH（３）
図版67　中通遺跡　SH（４）
図版68　中通遺跡　SH（５）
図版69　中通遺跡　SD（１）
図版70　中通遺跡　SD（２）
図版71　中通遺跡　SF・SE・SX
図版72　寺海土遺跡　SH
図版73　寺海土遺跡　SR（１）
図版74　寺海土遺跡　SR（２）
図版75　寺海土遺跡　SE1001
図版76　寺海土遺跡　SD
図版77　寺海土遺跡　SX1004･SF
図版78　寺海土遺跡　SX1012
図版79　寺海土遺跡　SX・SF
図版80　SR1001 出土縄文土器（１）
図版81　SR1001 出土縄文土器（２）
図版82　SD・SE・SF 出土遺物
図版83　SF・SX 出土遺物
図版84　SX3226・4012 出土遺物
図版85　中通遺跡　木製品（１）
図版86　中通遺跡　木製品（２）
図版87　金属製品
図版88　SH・SP・SR 出土遺物
図版89　SR・SD 出土遺物
図版90　SD2004 出土遺物（１）
図版91　SD2004 出土遺物（２）
図版92　SD2004・2005 出土遺物
図版93　SD・SE・SF 出土遺物
図版94　SF 出土遺物
図版95　SX1004･1008･1012 出土遺物
図版96　SX1012･包含層出土遺物
図版97　寺海土遺跡　木製品
図版98　SE1001 出土木製品
図版99　墨書土器（１）
図版100 墨書土器（２）
図版101 墨書土器（３）
図版102 瓦

第１章　調査の方法と経過

１　調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和 62 年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第 28 回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東海市に至る延長約 270 ㎞の第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約 170 ㎞である。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年 12 月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月 24 日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月 17 日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月 11 日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月 27 日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月 29 日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月 18 日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は 136 箇所、調査対象総面積が 1,453,518 ㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年 11 月 19 日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は 133 箇所、調査対象総面積は 1,286,756 ㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年 12 月 13 日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組している。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の№94地点、浜北市大平の№136地点、同市四大地の№137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により、平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付で協定変更を行っている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、埋蔵文化財発掘調査は、中日本高速道路株式会社横浜支社に引き継がれている。

第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜松市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

浜松市（旧浜松市と旧浜北市）内における、確認調査を必要とする対象地点とその範囲の選定は、静岡県教育委員会の指導のもと、浜松市教育委員会及び、浜北市教育委員会が行った。その後、路線範囲の変更、側道やサービスエリアなどの本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡所在の再確認によって、対象地点範囲の変更や新たな対象地点の追加が行われた。最終的に、浜松市域では、本線およびサービスエリア建設範囲内で10箇所、工事用道路建設範囲内で２箇所の対象地点が選定された。この内、周辺の発掘調査や分布調査などによって、周知の遺跡となっていたのは、５地点である。その他の７地点については、周知の遺跡を含まないが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

調査を必要とする対象地点には、静岡県内で通し番号による地点名が付けられており、浜松市域において対象となった10地点については、№129～139地点となっている。ただし、いずれも確認調査の着手前に付けられたため、周知の遺跡を含んでいなかった地点に関しては、必ずしも地点名と遺跡の範囲とが合致していない。本書で報告する中通遺跡と寺海土遺跡の範囲は、いずれも130地点に相当する。№130地点については、中通遺跡と寺海土遺跡以外にも篠場瓦窯、上海土遺跡、大門西遺跡、中屋遺跡の４遺跡が含まれている。なお、県の組織の改編に伴い、埋蔵文化財調査は、平成23年度より静岡県埋蔵文化財センターが引き継いでいる。

２　調査の体制

中通遺跡・寺海土遺跡に関する調査体制は、表１の通りである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団静岡建設局における各工事事務所の範囲に合わせて「工区」を設定し、各工区単位で調査体制が組織されている。そのため、表１は浜松工区として組織された体制の一部となっている。

中通遺跡と寺海土遺跡の確認調査および本調査は、浜松市浜北区尾野の浜北現地事務所を拠点にして、平成 12 年度と 15 年度に実施した。本事業については、現地調査を優先するという方針から、浜松工区における全遺跡の現地調査が終了した後に、整理作業を実施している。本遺跡の資料整理および報告書作成作業は、袋井市小山の袋井整理事務所において、平成 21 ～ 23 年度に実施した。ただし、出土遺物の洗浄、注記、写真の整理・収納、各種台帳作成などの基礎的な整理作業の一部については、現地調査と並行して浜北現地事務所で実施している。

出土遺物の保存処理作業については、静岡市駿河区谷田の埋蔵文化財センターにおいて実施した。

表１　調査体制

		H12 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度	H21 年度	H22 年度	H23 年度
所　長		斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	天野 忍	石田 彰	勝田順也
副所長		山下 晃	飯田英夫	飯田英夫				
常務理事		伊藤友雄	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	天野 忍	石田 彰	
総務部（総務課）	部長	伊藤友雄	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫			
	次長		鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	松村 享	松村 享	八木利眞
	課長	杉木俊雄	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	松村 享	松村 享	八木利眞
	専門監						稲葉保幸	
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸			
	総務係長	田中雅代	山本広子	佐藤美奈子	佐藤美奈子	山内小百合	瀧みやこ	瀧みやこ
	事業係長							村松弘文
	事業担当	鈴木秀幸	鈴木秋博	鈴木秋博	中鉢京子		中鉢京子	
調査部（調査課）	部長	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	石川素久			
	次長	及川司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	及川 司 稲葉保幸		
	課長	及川 司	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川 司	中鉢賢治	中鉢賢治
	工区主任	西田光男						
	係長					富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志
	調査担当	西田光男 梶葉良久	水野功太郎 高見健司 武田寛生 鈴木秀樹	筒井京 中谷哲久 伊藤嘉孝 武田寛生	筒井京 佐々木和也 伊藤嘉孝 高見健司	平塚智久	高橋 岳 足立順司	武田寛生
保存処理						西尾太加二 大森信宏	西尾太加二 大森信宏	大森信宏
調査内容		確認調査	確認調査・本調査	本調査	本調査	整理・保存	整理・保存	整理・保存
備　考		財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						静岡県埋蔵文化財センター

3　調査の方法

（1）確認調査

中通遺跡と寺海土遺跡の確認調査は、130 地点の確認調査として他の遺跡とともに実施されている。条件が整い委託者からの要請があった範囲について、平成 12 年度と平成 15 年度に実施された。

実施にあたっては、得られる情報量が多いことなどから、トレンチを掘削して調査することを基本とした。トレンチの掘削は、重機の進入が容易なことから、表土や耕作土等は重機で掘削する方法を用いた。ただし、この場合においても、遺物包含層の掘削や遺構を精査する作業については、人力によってその把握に努めた。

調査区のトレンチを掘削する際には、主として土層の確認と遺構の発見に力を注いだ。土層については、各トレンチ四方の壁の土層断面を検討し、その高さや土色、土質などを記録した。遺物や遺構が発見された箇所においては、遺物包含層や遺構面の確定に努めた。

出土遺物は、出土した層位と位置を確認し、記録した上で取り上げることを基本とした。しかし、まとまって出土した場合や、遺構の性格を示している遺物が出土した場合などについては、本調査を実施することを前提に、出土位置に残すこととした。

現地での記録図面は、調査区全体図（トレンチ配置図）が 1 /200、土層断面図や柱状図は 1 /10 を基本として作成した。その際の測量基準点は、平成 12 年度は三角点や第二東名の工事関係用基準杭、平成 15 年度は新たに基準杭を打設して使用した。記録写真には、作業工程撮影用と併行して 35 ｍｍ判カラーネガを用いた。

（2）本調査

中通遺跡が東西約 185 ｍ･南北約 75 ｍ、寺海土遺跡が東西約 85 ｍ･南北約 75 ｍを範囲とする。ただし、工事の及ばない現道や安全確保が困難な狭小な場所については、遺跡の状況について検討を行った上で、静岡県教育委員会の指導の下、一部調査範囲から除外している。

調査は、平成 15 年度末から 17 年度まで実施しており、工事の優先度に従って、調査区を中通遺跡では５区、寺海土遺跡では２区に分け、順次調査を実施した（図１）。また、中通遺跡の３区では、北側の調査が終了した後に、道路の付け替え工事が行われ、工事完了後に元の道路部分の調査を行っている。両遺跡は、国道によって隔てられてはいるが、ほぼ同時期に調査を行っており、基本的には同様の調査方法をとっている。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。両遺跡におけるグリッドは、大グリッドと小グリッドからなっている。大グリッドは一辺 10 ｍの正方形で、調査範囲の北西にあたる座標（X= － 128760　Y= － 65000）を起点として、北から南へ A･B･C…、西から東へ１･２･３…と、アルファベットと数字の組み合わせによって表記している。小グリッドは、１つの大グリッドを４分割した５ｍ四方の正方形で、大グリッドと組み合わせて A １ － NW などと記している。なお、2002 年４月１日からの改正測量法の施行によって、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、中屋遺跡の発掘調査はすべて日本測地系に基づいている。そのため、本書の平面座標は、世界測地系であることを明示したものを除き、すべて日本測地系で表記している。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、作業員棟・簡易トイレなどの設置とともに、重機による表土除去を開始した。その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力によって遺構検出面までの掘削作業を開始した。調査区のほとんどの部分では、表土･盛土除去後、まもなく第１検出面（地山）に達した。第１検出面に達した場所については、随時、遺構の検出作業を行った。検出された遺構

は、まず遺構の半分を掘削し、土層断面によって埋土の状態を観察･記録した後に、全体の掘削を行った。ただし、柱穴とみられる遺構については、まず上層を数㎝掘り下げて柱痕跡の有無を平面的に確認した。柱痕跡が確認されたものは、その部分を一段深く掘り下げ、図や写真の記録を行った後に、遺構の半分を掘り下げた。なお、中通遺跡の炉穴に関しては、中・近世の遺構と同一の第１検出面で検出されているが、埋土が地山と近似していたために、検出作業は非常に困難な状況であった。遺構検出面での確認に努めたが、未検出の炉穴の存在が想定されたため、上面での調査が終了した後、重機で地山を掘り下げながら遺構の有無についての確認を行っている。炉穴の存在が確認された範囲については、掘り下げを中断して、遺構の調査を実施し、最終的には第１検出面から約２ｍ下方までこの作業を繰り返した。

発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。ただし、各調査区ごとに１番から番号を付した結果、遺構番号が一部重複することとなったため、本報告に際して全ての遺構について、先頭に調査区の番号を付した遺構番号に改めている。また、遺構の種類ごとに１から番号を付しているため、遺構の種別を変更したものについては、新たに番号を付している。

遺構から出土した遺物については、出土状況図の作成または、出土地点の三次元座標を計測した上で取り上げることを基本とした。ただし、土砂とともに流入したとみられる遺物については、基本的に層位ごとに取り上げている。包含層出土の遺物については、遺物が集中するなど特別な場合を除いて、５ｍ四方の小グリッドごとに取り上げた。中通遺跡の炉穴に関しては、埋土中に有機物が存在する可能性が想定されたことから、床面直上の埋土については現地でフローティング作業を実施している。また、集石の礫についても、現地において、個数･重量の計測や集石間での礫の接合関係についての調査を行った後、廃棄している。

現地の記録図面としては、空中写真測量によって、設定したグリッドに沿って、100 分の１縮尺の地形測量図と 20 分の１縮尺の遺構図を作成した。また、特に細部の記録が必要なものについては、10 分の１縮尺の記録図面を作成した。遺構の現地記録写真の撮影は、６×７判（モノクロ）と 35 ㎜判（カラーリバーサル）を用い、全景写真等については４×５判も一部使用した。作業工程の撮影には 35 ㎜（カラーネガ）を使用した。

掘削業務は株式会社林工組（平成 16 年度）と株式会社中村組（平成 17 年度）、空中写真撮影・写真測量と遺構図作成作業の一部は株式会社フジヤマに委託して実施している。

（３）資料整理・報告書作成

両遺跡に関わる資料整理および報告書作成作業は、平成 21 年度から開始した。ただし、出土遺物の洗浄･注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行っている。作業としては、出土品の分類・仕分け、接合、拓本、実測作業や、遺構図面の編集、各図の版組、トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、平成 22 年度までは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が業務を行い、平成 23 年度からは静岡県埋蔵文化財センターが業務を引き継いでいる。

遺物の写真撮影は、４×５判（モノクロネガ・カラーリバーサル）、６×７判（モノクロネガ・カラーリバーサル）を用いて、当センター写真室において行った。

出土した木製品と金属製品の保存処理作業については、当センター保存処理室が実施した。木製品の樹種同定については、東北大学学術資源研究公開センターに委託した。

炭化物年代測定は株式会社加速器分析研究所、種実同定はパリノ・サーヴェイ株式会社、土器付着物分析については株式会社パレオ・ラボ、整理作業・保存処理業務は株式会社パソナに委託して実施している。

4　調査の経過

（1）現地調査

中通遺跡と寺海土遺跡の現地調査（確認調査・本調査）は、工事の工程や道路の付け替えが必要であるなどの事情により、複数回に分けて行われている。また、基本的には地点を単位として調査が実施されたため、確認調査では 130 地点に含まれる他の遺跡とともに調査が行われている。

以下、調査年次ごとに現地調査の経過について記すことにする。

平成 12 年度　（期間：平成 12 年 9 月 29 ～ 12 月 4 日　調査名：№ 130 地点確認調査その 1）

寺海土遺跡の確認調査を実施している。№ 130 地点の確認調査として、東側に隣接する中屋遺跡の確認調査とともに実施されており、寺海土遺跡の周辺について人力の精査が行われたのは 11 月に入ってからであった。調査以前には水田として利用されており、地表面から須恵器片などが採取されていたため、古代を中心とする遺跡の存在が想定された。

図 1　中通遺跡・寺海土遺跡 調査区配置図（S＝1：2500）

一部未買収地が存在したために、対象範囲の南西部と北東部にトレンチを８本設定して調査を行った。調査の結果、南東部では南北方向の溝が検出され、南側中央部では水田跡とみられる遺構や土坑などが検出された。溝については、一部遺構の掘り下げを行っており、山茶碗が出土したことから中世の遺構であることが確認された。包含層からは、山茶碗や土師質土器のほかに、須恵器や土師器なども出土しており、古代から中世の遺跡の可能性が高いと推定された。なお、この時水田跡とみられていた遺構は、本調査により河川跡であることが明らかになっている。

部分的な調査ではあったが、ほぼ全域で遺物が出土したことに加え、溝などの遺構が北側の未調査部分にも続くことが確認されたことから、対象範囲の全域を本調査の対象とすることとなった。また、同時に実施された東側の確認調査において、遺跡の存在が確認されなかったことから、この範囲については、中屋遺跡とは別の遺跡として扱うこととなり、現在寺海土遺跡となっている。

平成 15 年度　（期間：平成 15 年 4 月 14 日～ 10 月 31 日　調査名：№ 130 地点確認調査その３）
（期間：平成 16 年 1 月 9 日～ 3 月 25 日　調査名：№ 130 地点本調査Ｘ期）

№ 130 地点の範囲内において、それまで用地買収等の事情によって調査に着手できなかった、約 26,000 ㎡の範囲を対象に実施された。この一部として、中通遺跡周辺についての確認調査が行われている。対象範囲は、大半が宅地となっていたため遺物の散布は確認されていなかったが、宅地内に集石と石塔が発見されていたことから中世墳墓群の存在が想定された。

ほぼ全域に合計 39 本のトレンチを設定し、調査を実施した。調査の結果、西端と東端を除くほぼ全域で、土坑や小穴、溝などの遺構が検出され、中世から近世の陶磁器が多数出土した。また、一部のトレンチでは拡張を行い、非常に濃い密度で小穴を中心とする遺構が分布することを確認している。さらに、龍泉寺の南西のトレンチでは、焼土を伴う遺構が検出され、内部から縄文早期の土器が出土したことから、縄文時代の遺跡も一部存在することが明らかとなった。

なお、西側は、雲岩寺Ｃ古墳群（№ 130 地点）から続く丘陵斜面であるが、厚さ数㎝の薄い表土の直下は岩盤となっていた。東側は、竜泉寺と国道 362 号線の間となる部分であるが、1.5 ｍ程の厚さで盛り土が行われていた。盛り土の除去後、トレンチを広げて安全を確保しながら現地表面から深さ３ｍ程まで掘削を行ったが、基盤層に到達しなかった。湧水が激しく危険性が高まったため、その時点で調査を断念した。また、掘削中に排土内の遺物の有無についての確認を行ったが、遺物は確認されなかった。河川や湿地等の可能性が高いと推定されたが、国道に挟まれた狭小な土地で調査の安全確保が困難であり、遺物も出土しなかったことから、本調査の範囲からは除外された。

図２　確認調査

図３　本調査

この調査結果から、西端と東端を除く、ほぼ全域を本調査の対象とすることになった。なお、東側で存在が明らかになっていた寺海土遺跡とは、中心となる時期が異なっている可能性があることや、国道によって大きく分断されていることなどから、別の遺跡として扱うこととなった。

中通遺跡では１月から本調査に着手した。１区と２区の表土除去を行い、一部包含層掘削と遺構検出作業を行った。河川跡や小穴が検出された。

平成 16 年度　（期間：平成 16 年４月５日～平成 17 年３月 28 日　調査名：№ 130 地点本調査Ｘ期）

中通遺跡では、前年度から引き続いて１・２区の調査を行うとともに、３・４区の調査を実施した。中世から近世の遺構は、確認調査の結果から推定されていたように、非常に密集した状態で遺構が検出された。特に、柱穴とみられる小穴に関しては、合計で千基をこえる数で発見された。一方で、縄文時代の遺構は、当初数基程度とみられていた炉穴が 50 基以上、確認調査で未確認であった集石が 20 基以上検出された。また、炉穴に関しては、上面での検出が困難なものも多数存在するとみられ、検出面の掘り下げが必要であることが明らかになった。そのため、縄文時代の遺構に関しては、工事の関係から優先度の高い３区の北側と南半部分について、先行して調査を完了させることにした。

中・近世の遺構の調査が完了した 10 月に報道提供を行い、新聞等によって調査成果が報道された。10 月 16 日には現地説明会を開催し、約 320 名の参加者があった。また、10 ～２月には、小濱学氏（三重県立斎宮歴史博物館）、戸田哲也氏（玉川文化財研究所）、池谷信之氏（沼津市埋蔵文化財センター）、矢野健一氏（立命館大学）、谷口康浩氏（國學院大学）、広岡公夫氏（大谷女子大学）による調査指導が行われている。

寺海土遺跡では、遺跡の北半にあたる１区を対象に、９月から調査を開始した。調査の結果、河川跡や土坑などが検出され、河川からは山茶碗を中心とする中世前期の土器が大量に出土した。また、井戸からは井戸枠材や曲物が良好な状態で遺存し、枝を土坑の上に被せた遺構が発見されるなど、木製品も比較的多く出土した。

平成 17 年度　（期間：平成 17 年４月５日～平成 18 年２月 27 日　調査名：№ 130 地点本調査ⅩⅡ期）

中屋遺跡では、３区の北半部と５区の調査を行った。また、道路の付け替え工事の完了後には、元の道路部分についても調査を実施した。３区では、最終的に 200 基以上の炉穴が確認され、東海地域では最大の数の炉穴群として注目された。５区では炉穴や集石も発見されたが数は少なく、主に中世から近世の遺構が検出された。７月には、炉穴と集石の剥ぎ取り作業が行われている。

６月には縄文時代の遺構全容がほぼ明らかになったため、報道提供を行った。新聞等によって調査成

図４　現地説明会（１）

図５　現地説明会（２）

果が報道され注目された。６月 11 日には現地説明会を開催し、350 名の参加者があった。また、６月 30 日には、浜松市立伊佐見小学校の児童の遺跡見学が行われている。

寺海土遺跡では、南半部の２区について調査を行った。前年度に北側で確認された河川の続きや、東西方向の大規模な溝などが発見された。調査がほぼ完了した 10 月に報道提供を行い、新聞等によって調査成果が報道された。また、10 月８日には現地説明会を開催し、250 名の参加者があった。

平成 18 年２月 27 日には両遺跡ともに調査を終了し、当事業における現地調査がすべて完了した。

（２）資料整理

前述のように、出土遺物の洗浄・注記や台帳作製等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていた。また、保存性の観点から、中通遺跡から出土した炭化物の年代測定を、平成 17 年度と 18 年度に整理作業よりも先行して委託により実施している。

中通遺跡と寺海土遺跡の資料整理が本格的に開始されたのは、平成 21 年９月からである。両遺跡は国道によって分断されているが、隣接する遺跡であることから、対比の必要性も考慮して同時期に整理作業を行うこととした。

平成 21 年度は、寺海土遺跡を中心に、分類・仕分け、接合、復原、実測などの作業を実施した。寺海土遺跡では、流路や溝などから、中世前期の遺物が比較的良好な状態で多量に出土していることが明らかとなった。

平成 22 年度は、寺海土遺跡とともに、中通遺跡の出土品の分類・仕分け、接合、復原、実測、版組、トレースなどの作業を行った。中通遺跡では、近世の遺物が最も多く、途絶えることなく出土していることが明らかになった。３月７日には小濱学氏（三重県教育委員会）、３月 23 日には藤澤良祐氏（愛知学院大学）による調査指導が行われている。また、寺海土遺跡から出土した種について、種実同定を委託により実施している。

平成 23 年度は、継続の作業に加えて、中通遺跡の炉穴や集石の図面編集、版組、トレースなどの作業を実施した。そして原稿執筆を行い、これらを編集して報告書を作成した。炉穴に関しては、個々に土層断面図が作成されていたために、切り合う炉穴間における整合性の把握に苦慮したが、切り合う多くの炉穴においてその築造過程が明らかとなった。また、前年度の整理作業で寺海土遺跡から漆とみられる黒色物の付着する土器が発見されたため、委託により分析を実施している。

なお、整理作業中においても、出土遺物や写真等については、随時公開した。

図６　復原作業

図７　実測作業

第２章　位置と環境

１　遺跡の位置

中通遺跡と寺海土遺跡は、静岡県浜松市浜北区根堅の、天竜浜名湖鉄道岩水寺駅から北西に約 400 m に位置する。南西から北東に向かって国道 362 号線が、両遺跡を横断する形で通っている。両遺跡は、龍泉寺の門前の道路を境にして、隣接する形で位置している。

中通遺跡は、東西は人形山と呼ばれる西側の丘陵裾から龍泉寺の門前までの約 225 m、南北は北側の丘陵裾から国道 362 号線付近までの約 150 mが遺跡の範囲となっている。その東に位置する寺海土遺跡は、東西は龍泉寺門前からかつて国道 362 号線となっていた東側の道路までの約 110 m、南北は龍泉寺付近から調査区の南側の道路付近までの約 190 mが遺跡の範囲となっている。

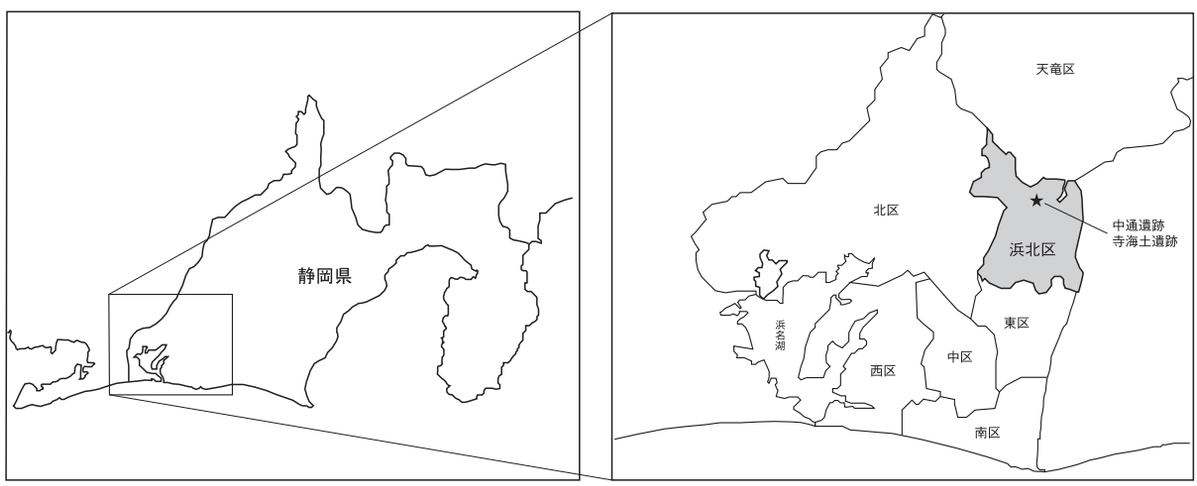


図８　浜北区の位置

図９　遺跡範囲図（Ｓ＝１：5000）

2　地理的環境

浜松市は静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の新居町・湖西市と接している。平成 17 年の合併により、浜松市・浜北市・天竜市の３市と、水窪町・佐久間町・春野町・引佐町・細江町・三ヶ日町・雄踏町・舞阪町の８町、龍山村の１村が一つとなり、現在は浜松市となっている。平成 19 年には政令指定都市となり、現在では７つの行政区（中区・東区・西区・南区・北区・浜北区・天竜区）が置かれている。浜松市は、総面積は 1511.17 ㎢で、東西 52 ㎞・南北 73 ㎞もの広大な範囲に及ぶ。その中で、第二東名関連の発掘調査対象地は、浜北区及び北区の丘陵沿いに集中する。したがって、ここでは、浜北区から北区にかけての丘陵沿いの地域を中心に、地理的環境をみていくことにする。

地形としては、山地および丘陵と、三方原台地、河岸段丘、沖積平野に大別される。北部は、赤石山脈の南端にあたる、標高 200 ～ 300 ｍ程の山地となっている。山地の南側には、標高 100 ～ 200 ｍ程の丘陵が連なる。丘陵では、開析が進行しており、掌状に伸びる小尾根がいくつも形成されている。山地は、約２億５千万年前の古生代にできた、砂岩やチャート、石灰岩などからなる。丘陵の一部は、約５～ 15 万年前の砂礫やシルトからなっており、浜北区の根堅周辺の地域には石灰岩地帯も確認される。主に山林として利用されている。

図 10　明治期の地形図（１：40,000）　「明治 23 年二万分の１地形図」（大日本帝国陸地測量部）を縮小・加筆

浜北区の西部から北区にかけては、三方原台地が広がる。三方原台地は、かつては、天竜川を挟んで東側の磐田原台地とつながっていたが、地殻変動によって隆起した後、天竜川による浸食によって２つに分割された。形成されたのは、約 10 万年前のリス・ヴェルム間氷期とみられる。台地上は標高 100 ｍ程の平坦面が広がり、全体は南西方向に傾斜している。天竜川によって運ばれた礫質を中心とする第四紀層が厚く堆積しており、その上に赤褐色～橙褐色の土壌が覆っている。台地の南部は、市街地となっている。北部では、都田テクノポリスなど開発も進んでいるが、多くは果樹園として利用されてきた。

河岸段丘は天竜川によって三方原台地の東方に形成された段丘で、上位と中位、下位の段丘とに分けられる。上位段丘は富岡段丘と呼ばれ、約３万年前に形成されたとみられている。標高 50 ～ 60 ｍ程で、砂礫層からなり、その上を赤褐色～橙黄色の細粒土質が覆っている。浜北区平口付近から、三方原台地に沿って南へ広がっており、一部根堅にも確認される。茶畑や果樹園に利用されている。

中位段丘は姥ヶ谷段丘と呼ばれ、約２万３千年前に堆積したとされる。標高は 50 ｍ程で、砂礫層からなり、表層は赤褐色～黄褐色の土層に覆われている。下位段丘とは、10 ～ 30 ｍ程の比高差があり、その間には段丘崖もみられる。上位段丘と同様に、根堅に一部見られる他、宮口から内野付近にかけての地域に、三方原台地に沿って広がっている。多くが果樹園や茶畑として利用されている。

下位段丘は浜北段丘と呼ばれ、鹿島付近から平口にかけて広範囲にみられる。約１万２千年前に堆積したとされる。標高は 15 ～ 45 ｍで、南東方向に緩やかに傾斜している。沖積平野とは、大きいところで数メートルの比高差があり、段丘崖もみられる。砂礫層からなり、その上を黒色土や赤褐色土、粘土などが覆っている。特に「黒ボク」と呼ばれる黒色土は、浜北段丘の大部分で最上層に認められる。果樹園や畑地として利用されており、近年では宅地化が進んでいる。

下位段丘の東側には、天竜川よって形成された沖積平野が広がっている。天竜川が運搬した砂や礫によって形成されており、その範囲は上島から中瀬、貴布祢、小松など、市街地の大部分に及んでいる。平野には、網目状に広がる低水路（旧河道）が認められ、かつて小河川が入り組むように流れていた様子がうかがえる。緩やかな傾斜の平坦地で、主に畑地や宅地として利用されている。

また、根堅から内野にかけては、氾濫平野も確認される。北部の山地や三方原台地から流れ出た小河川によって形成された低湿地で、大部分がシルトや粘土からなる。排水が悪い地域で、主に水田として利用されている。

浜北区北部の段丘上には、丘陵に沿って東西に国道 362 号線が、浜北段丘の縁辺には南北に国道 152 号線が通り、根堅で合流して天竜川を渡る。この地域は、天竜川西岸における南北・東西交通の要所の一つとなっている。

遺跡の周辺に目を移すと、中通遺跡の北側には丘陵が位置し、西側にも丘陵が張り出す。西側の丘陵には所々に石灰岩の岩盤が露頭している。かつては、その採掘が行われており、その際に大きく抉られた採掘場や、石灰岩を焼いた穴の跡なども残されている。北側と西側の丘陵は、谷によって隔てられている。谷からは小河川が派生し、調査区の西側を通って南へ流れている。遺跡から国道を挟んで南側は、低地となっており、水田として利用されている。中通遺跡は、丘陵裾の狭い微高地上に位置しており、調査前は大半が宅地として利用されていた。また、遺跡の北に隣接する龍泉寺には、境内に湧水によってできた龍泉池と呼ばれる池がある。常時湧き出す豊富な水は、寺海土遺跡の調査区南側を沿って南東へ流れ、現在も下流の耕作地の重要な水源となっている。寺海土遺跡から東に約 100 ｍには、谷ノ奥池から流れる荒巻川が南北に流れる。狭い用水路のような形となっているが、谷ノ奥池の南側には河川の痕跡を示す谷状の地形が残る。寺海土遺跡は、その南側に位置し、周辺よりも一段低い土地となっている。調査前には、水田として利用されていた。

3　歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、天竜川東岸の磐田原台地に比べて少ない。浜北区根堅の丘陵地に所在する根堅遺跡（27）では、人骨や動物化石が発見されている。昭和35年に石灰採石場で多くの動物化石が発見され、昭和37年と38年には東京大学によって調査が実施されている。遺跡は石灰岩の割れ目にできた洞窟で、堆積層がⅠ層からⅣ層に分けられている。人骨が発見されたのはⅡ層とⅢ層で、Ⅱ層のものを上層人、Ⅲ層のものを下層人として報告されている。動物化石としては、Ⅱ層で哺乳類５種と鳥類１種が、Ⅲ層で哺乳類５種と両生類１種、は虫類１種、鳥類１種が発見されている。石器などの遺物は、採集されていない。近年、放射性炭素年代の測定が行われ、上層人骨が約13900～14200ＢＰ、下層人骨が約17900ＢＰという結果が得られている。梶池遺跡（55）では、ナイフ形石器や細石刃、石核などが発見されている。浜北区宮口の段丘上に位置しており、平成９年に浜北市教育委員会によって発掘調査が行われている。ただし、遺跡の中心は縄文時代中期であり、旧石器時代の遺物は少量出土した程度である。

縄文時代

遺跡のほとんどは中期以降であり、前期までの様子については不明な点が多い。早期とみられる縄文土器が、大屋敷遺跡（53）で採集されている程度である。大屋敷遺跡は、比較的広い平坦面が確保できる段丘上にあり、現在でも地表面において比較的容易に黒曜石などが採取できる。遺跡では、中期初頭から後・晩期の土器も出土しており、この地域における居住域の一つであったと推定される。

中期以降の主な遺跡としては、富岡大谷遺跡（62）や梶池遺跡（55）、染地石遺跡、大屋敷遺跡（53）、北谷遺跡（25）などがあげられる。いずれも、三方原台地上か中位段丘上に立地している。梶池遺跡（55）では、竪穴住居が１軒検出され、中期初頭の土器が出土している。北谷遺跡（25）では、中期中葉から後・晩期の土器が出土している。遺構は明確ではないが、未製品を含め多量の石器が採集されていることから、石器製作遺跡であった可能性が指摘されている。富岡大谷遺跡（62）では、竪穴住居が５軒、染地石遺跡では竪穴住居が１軒検出されており、いずれも中期後半の土器が出土している。

弥生時代

前期については、北谷遺跡（25）や芝本遺跡（31）などで土器片が出土しているのみであり、明確でない。中期から後期にかけては、低位段丘の東側の芝本遺跡（31）や東原遺跡（32）で集落が営まれる。芝本遺跡（31）は、昭和39年から数次にわたって、発掘調査が行われている。竪穴住居が11軒検出されている他、方形周溝墓や土器棺墓なども発見されている。主に中期から後期にかけての土器が出土している。東原遺跡（32）は、芝本遺跡の南に隣接する。昭和40年から、32次にわたって発掘調査が行われている。合計140軒以上の竪穴住居、方形周溝墓や土器棺墓も発見されている。遺物としては、後期中葉から後葉のものが主体を占めている。芝本遺跡を含めて、約140000㎡にもおよぶ、弥生後期の大集落が存在すると推測されている。

古墳時代

古墳時代には、丘陵や三方原台地に多くの古墳が築造される。前期に古墳がつくられるのは、赤門上古墳や権現平山７号など、三方原台地の縁辺部である。中期には、古墳の数が増加し、三方原台地縁辺では、権現平山古墳群や神明社上古墳群、観音ツブラ古墳群、辺田平古墳群など多くの古墳が築造され、

1	中通遺跡	13	二俣城	25	北谷遺跡	37	大屋敷Ａ古墳群	49	野口前遺跡	61	大平城址
2	寺海土遺跡	14	鳥羽山城	26	泉Ａ古墳群	38	大屋敷Ｂ古墳群	50	土取Ⅱ遺跡	62	富岡大谷遺跡
3	中屋遺跡	15	百々原遺跡	27	根堅遺跡	39	大屋敷Ｃ古墳群	51	土取Ⅰ遺跡	63	沢上Ａ古墳群
4	大門西遺跡	16	向野遺跡	28	泉Ｂ古墳群	40	大屋敷古窯跡群	52	土取遺跡	64	沢上Ｂ古墳群
5	上海土遺跡	17	向山Ａ古墳群	29	雲岩寺Ａ古墳群	41	北屋敷Ａ古墳群	53	大屋敷遺跡	65	沢上Ⅲ遺跡
6	篠場瓦窯	18	向山Ⅰ遺跡	30	雲岩寺Ｂ古墳群	42	北屋敷Ｂ古墳群	54	大屋敷墳墓群	66	沢上Ⅰ遺跡
7	赤佐中学校内遺跡	19	向山Ⅱ遺跡	31	芝本遺跡	43	新屋遺跡	55	梔池遺跡	67	沢上Ⅱ遺跡
8	雲岩寺Ｃ古墳群	20	向山Ｂ古墳群	32	東原遺跡	44	新屋古墳群	56	男池遺跡	68	白昭Ⅰ遺跡
9	高根山Ａ古墳群	21	御馬ヶ池古墳群	33	勝栗山墳墓群	45	吉名古窯跡群	57	新原古墳群	69	姥ヶ谷古墳群
10	大平遺跡	22	勝栗山Ａ古墳群	34	泉墳墓群	46	譲栄Ⅰ遺跡	58	梔池古墳群	70	山林遺跡
11	蜷原砦	23	勝栗山Ⅰ遺跡	35	高根山Ｂ古墳群	47	譲栄古窯跡群	59	志野古墳群	71	二本ヶ谷古墳群
12	毘沙門堂砦	24	勝栗山Ｂ古墳群	36	高根山Ｃ古墳群	48	譲栄Ⅱ遺跡	60	志野遺跡	72	二本ヶ谷積石塚

第 11 図　浜松地区周辺の遺跡（Ｓ＝１：50,000）

古墳群を形成する。さらに、雲岩寺Ｂ１号墳（30）や御馬ヶ池２号墳（21）など、北部の丘陵や段丘上にも古墳が認められるようになる。

後期になると、北部の丘陵や段丘で、築造される古墳の数が急増する。その大半が、主体部に横穴式石室をもつ小型の円墳で、一帯には向山古墳群（17・20）や勝栗山古墳群（22・24）、泉古墳群（26・28）、雲岩寺古墳群（８・29・30）、高根山古墳群（９・35・36）、大屋敷古墳群（37 ～ 39）など、数多くの古墳群が形成される。中通遺跡の西側の丘陵には、雲岩寺Ｃ古墳群（８）が位置し、第二東名建設に伴う調査によって、南側の斜面に築かれた 17 基の横穴式石室が発見・調査されている。

このように、多くの古墳が確認されるにもかかわらず、それ以外の遺跡については、調査例も少なく、不明な点が多い。集落は、低位段丘上に立地する東原遺跡（32）で認められる程度である。東原遺跡では、竪穴住居が４軒、掘立柱建物が２棟発見されている。いずれも、古墳時代後期の遺構とみられている。

古代

律令制下において、浜北区北部地域は遠江国麁玉郡、北区北部は引佐郡に属すると推定される。昭和 31 年に他町村と合併する以前、浜北区根堅周辺には赤佐村が存在した。字名としては失われているが、自治会名や学校名などに、現在でも「赤佐」の名称が用いられており、根堅周辺の地域は『倭名類聚抄』にみられる麁玉郡４郷のうちの、「赤狭」郷にあたると推測される。

遺跡としては、北部の丘陵や台地・段丘の縁辺に、多くの窯業遺跡が確認されている。段丘の東側斜面には、篠場瓦窯（６）が築かれている。篠場瓦窯は、第二東名に伴って発掘調査が実施されており、瓦窯が３基発見されている。軒丸瓦は、川原寺式と石川廃寺式のもので、軒平瓦は重弧文と連珠文、竹管文が出土している。これらの軒瓦や平瓦、丸瓦のほかに、鴟尾なども出土している。瓦窯の操業していた時期は、７世紀末から８世紀初頭にかけてである。供給先は判明していないが、遠江における白鳳期の瓦窯としては初期のものの一つに位置付けられる（静文研 2004）。東ノ谷瓦窯は、雲岩寺Ｃ古墳群（８）の西側に位置したとされる瓦窯である。発掘調査は行われていないが、かつて平瓦や丸瓦、鴟尾、須恵器などが採取されている。採取されている須恵器などから、８世紀中頃の瓦窯と推定されている（武田 2009）。吉名古窯跡群（45）では、現在までに９基の窯跡の存在が確認されており、３基について発掘調査が実施されている。９～ 10 世紀に操業した灰釉陶器の窯跡で、硯や陶製の九輪、瓦なども生産されている。大屋敷古窯跡群（40）では、６基の窯跡の存在が確認されている。このうち２基については、発掘調査が実施されており、10 ～ 11 世紀に操業した灰釉陶器の窯跡であることが明らかとなっている。これらの他にも、平安時代の窯跡が４ヶ所で確認されており、窯業生産が盛んに行われた地域であることを示している。

集落遺跡については、向山Ｉ遺跡（18）や東原遺跡（32）、大門西遺跡（４）、中屋遺跡（３）で建物跡などが検出されている。向山Ｉ遺跡（18）では、奈良時代の竪穴建物が３軒と平安時代の溝が１条発見されている。東原遺跡（32）では、奈良時代前半から中葉までの竪穴建物 10 軒や土坑、溝などが検出されている。大門西遺跡（４）では、７世紀後半から８世紀にかけての竪穴建物が７軒と掘立柱建物が 11 棟確認されている。ほかに井戸や土坑なども検出されており、小規模な集落が展開していたことがうかがえる。中屋遺跡（３）では、竪穴建物が５軒と掘立柱建物が 32 棟検出されている。中心となる時期は８世紀で、土坑や大規模な溝なども検出されている。

中世～近世

中世には、根堅から宮口にかけての丘陵に、多くの中世墳墓群が築かれる。中でも勝栗山墳墓群（33）は、江戸時代からその存在が知られており、久安二（1146）年銘の陶製五輪塔形経筒外容器が出土したと伝

えられている。昭和 30 から 40 年代にかけて開墾が行われた際には、多数の石塔や蔵骨器、蓬莱鏡などが発見されている。採取された遺物などから、12 世紀から 17 世紀にかけて造営されたと推測されている。泉墳墓群（34）では、周囲が方形に区画された集石墓が発見されている。大屋敷墳墓群（54）でも、同様の集石墓が発見されている。中心部に主体部をもち、上部に石塔が建てられている。

中屋遺跡（３）では、中世前期の大規模な溝が検出されている。溝は東西 160 ｍ・南北 210 ｍの範囲を長方形に区画する溝で、溝の内側には土塁が構築されている。ほぼ全域から瓦や塼が出土しており、寺院の可能性が高いと推定されている。岩水寺の東側に位置する北谷遺跡（25）でも類似する瓦が出土しており、岩水寺と関連する遺跡として注目されている。区画の東側では河川跡が検出されており、河川の両岸には護岸施設が築かれている。護岸施設の基底部には、螺鈿鞍と呪符木簡が埋納された状態で出土している。中世後期から近世には、建物や井戸、溝、墓などが築かれ、集落が形成されている。

遺跡の調査事例はあまり多くないが、史料などには断片的にこの時期のものが残されている。暦応２（1339）年の「足利尊氏寄進状」には、「遠江国宮口郷相模国広河郷　備前入道跡　地頭職事」とあり、宮口に北条宗長の所領が存在したことがわかる（静文研 2010）。北条宗長は、名越流北条長頼の次男である。官位は従五位下備前守左近将監で、能登・安芸・豊前３ヶ国の守護を兼務した、幕府内でも有力な人物であったとされる（北条研 2001）。

岩水寺に関しては、『遠江国風土記伝』に北条時頼の廻国伝承が残されている。それによると、貧しい僧の姿で訪れた時頼に対し、当時隆盛を極めていた岩水寺の僧たちが横暴な態度をとったため、後にその咎めによって寺領を召し上げられたというものである。また、これとは逆に岩水寺には、寺の西に位置する八幡宮周辺の土地が、時頼によって寄進されたという伝承が残されている。その真偽はともかくとして、当時岩水寺が大きな勢力をもっていたことと、北条氏との何らかの関係を有していたことを伝える話として理解される。なお、岩水寺には秘仏の本尊として、慶派の仏師による作とみられる、重要文化財の地蔵菩薩立像が伝えられている。その由来については残されていないようであるが、鎌倉との関係が指摘されている（文化庁 2011）。

中世後期には、多くの禅宗寺院が建立される。中通遺跡･寺海土遺跡の周辺だけでも、応永年中（1394 ～ 1427）に安泰寺、明徳４（1393）年に雲岩寺（龍泉寺）、室町期には大宝寺、永正年中（1504 ～ 1520）に常光院、明徳元（1390）年に庚申寺、永正３（1506）年に陽泰院が創建されている。現在の国道 362 号線沿いに、数百ｍごとに寺院が林立するような状況となっている。

江戸時代には村が編成され、遺跡の周辺は雲岩寺村となる。雲岩寺村は、村高 109 石・18 戸で、岩水寺村の入会となっていた。中通遺跡の北側に隣接する龍泉寺は、江戸時代になって、雲岩寺から龍泉寺に寺名を改めている（静文研 2010）。

引用・参考文献

浜北市　1989『浜北市史　通史上巻』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『大門西遺跡』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『中屋遺跡』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『静岡県埋蔵文化財調査研究所年報』20
北条氏研究会　2001『北条氏系譜人名辞典』新人物往来社
武田寛生　2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第 21 号
文化庁文化財部 2011「新指定の文化財」『月刊文化財』573 号

第３章　中通遺跡 －縄文時代－

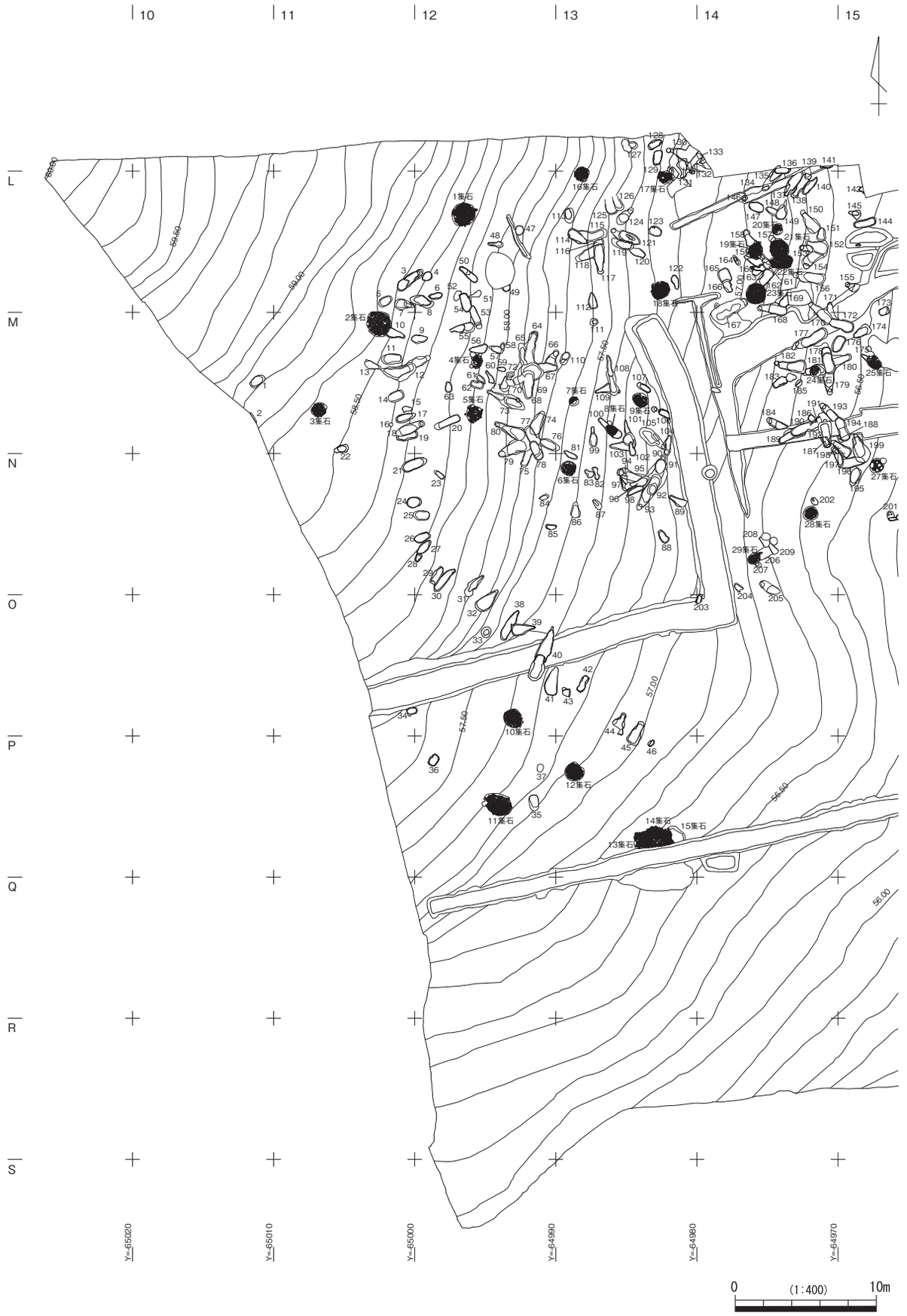


図 12　中通遺跡（縄文時代）遺構配置図（１）

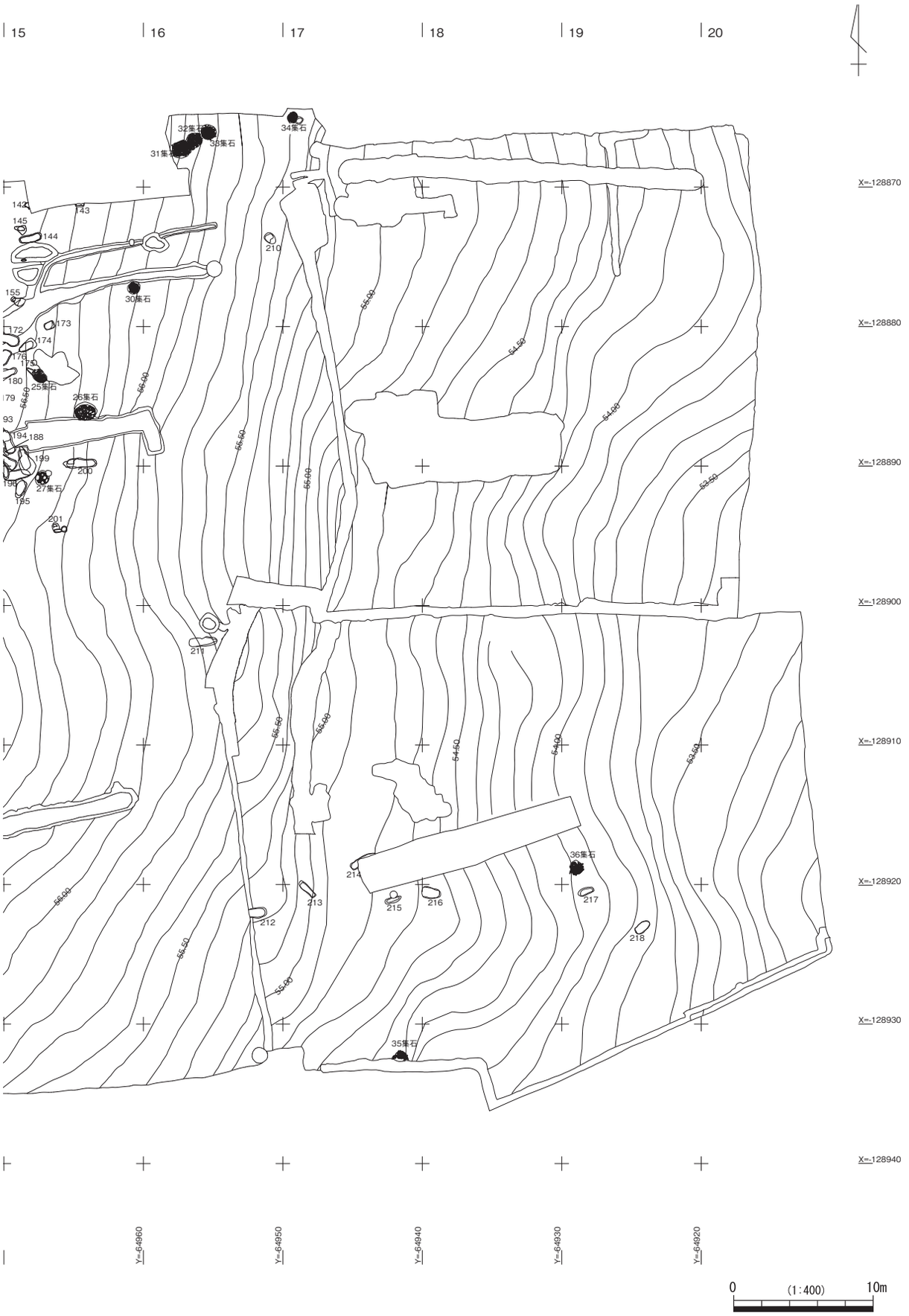


図 13　中通遺跡（縄文時代）遺構配置図（2）

１　概要

炉穴

炉穴は合計 218 基発見されている。調査区の中央北側にあたる、３区の北側を中心に密集して築かれており、一部調査区南東側の４区にもみられる。多くの炉穴で改築されている状況が確認されており、改築には前進させるタイプと、放射状に築くタイプが認められる。前進させるタイプは、天井の崩落土を除去した後、奥壁からトンネルを掘って燃焼部を築いており、元の燃焼部は前庭部として利用している。放射状に築くタイプは、前庭部を共有する形で前後左右に炉穴が構築されている。燃焼部内は、厚さ数㎝にわたり被熱して赤化しており、橙色に熱変する部分が認められるものも確認されている。また、燃焼部内では、床面に礫が配置されたような状態のものや、被熱しない礫が詰め込まれた状態で出土している例も発見されている。

なお、炉穴に関しては、埋土が基盤層（地山）と近似していたこともあり、炉穴ごとに検出できた面が異なっている。そのため、中近世の遺構が検出された面を第１検出面とし、そこから掘り下げた深さを明記することとする。

また、炉穴内から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施しており、9400yrBP ～ 9700yrBP という測定結果が出されている。これらの炭化物の多くは、埋土中から出土した小片であり、直接的に炉穴の築造年代や廃絶年代を示すものではないが、廃絶年代の上限を示すデータといえる。

集石

集石は合計 36 基確認されている。炉穴と同様に、３区の北側を中心に一部４区でも検出されている。いずれも土坑内に被熱した礫が詰め込まれた状態となっている。規模の大小はあるが、最も良好な状態で遺存していた 21 号集石では、合計 9212 点･総重量 472 kgの礫が出土している。多くの集石において、土坑の底部付近に礫の少ない堆積層が確認されるという特徴がある。また、炭化材が出土している事例もみられるが、土坑に被熱の痕跡が認められるものは少ない。被熱しているものも、壁面に薄い焼土が確認できる程度であり、被熱の度合いは弱く、土坑内での燃焼が明確なものは検出されていない。

炉穴と同様に、出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施しており、9400yrBP ～ 9700yrBP という測定結果が出されている。ただし、埋土中に含まれていた炭化物の小片を除き、明確な炭化材に限ると、9470yrBP ～ 9640yrBP という年代にしぼられる。集石の築造された年代は、9500yrBP を中心とする年代とみてよい。

遺物

遺物としては、炉穴から縄文土器や石器などが出土している。縄文土器は、撚糸文土器や押型文土器など早期初頭に位置付けられるものである。その大半は、土砂とともに炉穴内に流入したものであるが、166 号炉穴や 189 号炉穴では、まとまった状態で床面から出土している。石器は、石鏃や楔形石器、石槍、石匙などで、石核や剥片も出土している。

集石からの遺物の出土はほとんどなく、撚糸文などの縄文土器の破片が数点出土している程度である。27 号集石では、石皿が集石の礫として転用された状態で出土している。

包含層や攪乱からも、数は少ないが炉穴や集石のものと同様の早期の縄文土器が出土している。これらのものの大半は第１検出面から掘り下げた際に出土したものであり、多くは上面で検出されなかった炉穴に伴う遺物と推定される。また、攪乱などからは、一部中期の縄文土器も出土している。

2　炉穴

1号炉穴（図14・15）

2号炉穴とともに、他の炉穴とやや離れて3区の北西部に位置する。第1検出面から約120㎝掘り下げた位置で存在が確認されている。検出できたのは燃焼部の底部付近のみであり、第1検出面から床面までの深さは140㎝となる。主軸は北東－南西方向で、北東側が煙道となる。

燃焼部は長さ85㎝・中央付近の幅65㎝で、中央付近がやや膨らみ奥がまるくおさまる楕円形となっている。床面から壁面にかけてのほぼ全体に、厚さ3㎝程の被熱による赤化した焼土面が確認できる。埋土は含有物から3層に分けられているが、いずれも地山に近いややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落は確認されていない。

燃焼部の内部では、人頭大程度の礫が数個検出されている。いずれの礫にも被熱の痕跡は確認されなかった。床面直上からの出土であり、自然に流れ込んだとは考えにくい大きさであることから、炉穴の使用直後に入れられたものと推測される。

この炉穴では、出土した炭化材について、放射性炭素（C 14）年代測定を行っている。資料自体は、埋土とともに流入したものであり、炉穴の年代を直接的に示すものではないが、9440 ± 50 yrBP という測定結果が得られている（詳細は、第6章－1に記載）。石器や土器などの遺物は出土していない。

2号炉穴（図14・15）

1号炉穴から約2ｍ南側の調査区端に位置し、遺構の大半は調査区外となっている。第1検出面から1.2ｍ下方で発見されている。平面的に検出できたのは底部の一部のみであるが、調査区の壁面に燃焼部の断面が確認されている。

壁面の土層をみると、燃焼部の幅は70㎝で天井が内部に崩落した状況が確認できる。燃焼部の幅は

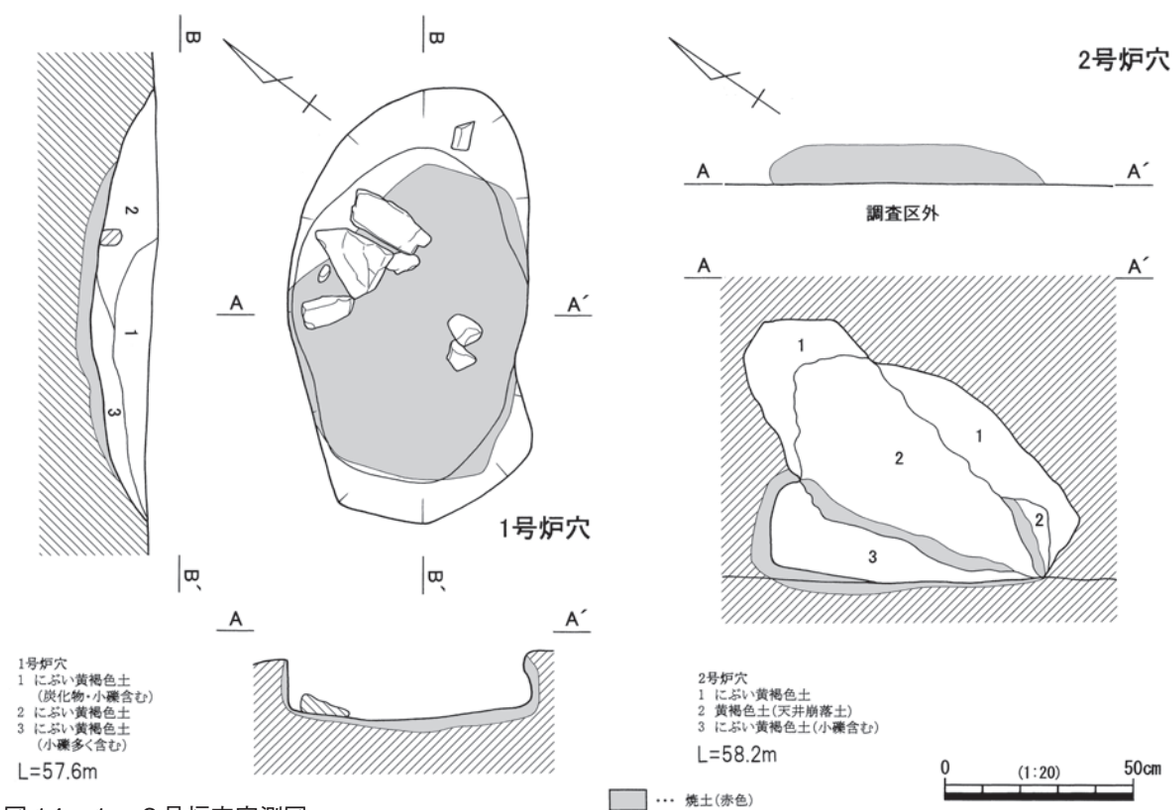


図14　1・2号炉穴実測図

やや大型であるが、遺構を斜めに切っている可能性もある。天井までの高さは、約 30 ㎝程に復原でき、第１検出面から天井までの厚さは約 90 ㎝・床面までは約 120 ㎝となる。床面から側面・天井まで赤化した焼土面が認められ、厚さは床面で５㎝程となっている。平面的にほとんど確認できていないため、長さや方向については不明である。遺物は出土していない。

３号炉穴（図 15・16、図版６・40）

１号炉穴から北東へ 12 ｍに位置し、第１検出面より約 50 ㎝下方で検出されている。第１検出面から床面までの深さは、約 80 ㎝である。主軸は北東－南西方向で、北東側が煙道となる。焼土面が２ヶ所で確認されており、２基の炉穴が連結している状態のため、手前の床面が少し立ち上がり、幅も狭くなる中央付近を挟んで手前（南西側）の炉穴を３号炉穴①、奥（北東側）の炉穴を３号炉穴②とする。

①は、燃焼部のみ確認できる。燃焼部の長さは約 90 ㎝、中央付近の最大幅は 65 ㎝となっている。燃焼部の奥の幅は不明瞭だが、焼土の幅を目安にすると 45 ㎝程と推定できる。焼土は床面と左側の側面で確認されており、赤化した焼土面の中央には橙化した面が検出されている。焼土の厚さは、橙化した面が約３㎝、赤化した面が最大で８㎝程ある。

②は、天井や焚口部が崩落しているものの、ほぼ全体が残存している。燃焼部は、長さ 80 ㎝、最大幅 60 ㎝の規模で、奥に向かって幅が狭くなる、二等辺三角形に近い形状となっている。①の燃焼部を前庭部として利用している。焼土は床面と壁面に赤化面があり、床面の中央付近には橙化面も認められる。厚さは、橙化面が約３㎝、赤化面が最大で７㎝となっている。

埋土は含有物によって大きく２層に分けられるが、両者とも基本的には地山に近いにぶい黄褐色土で

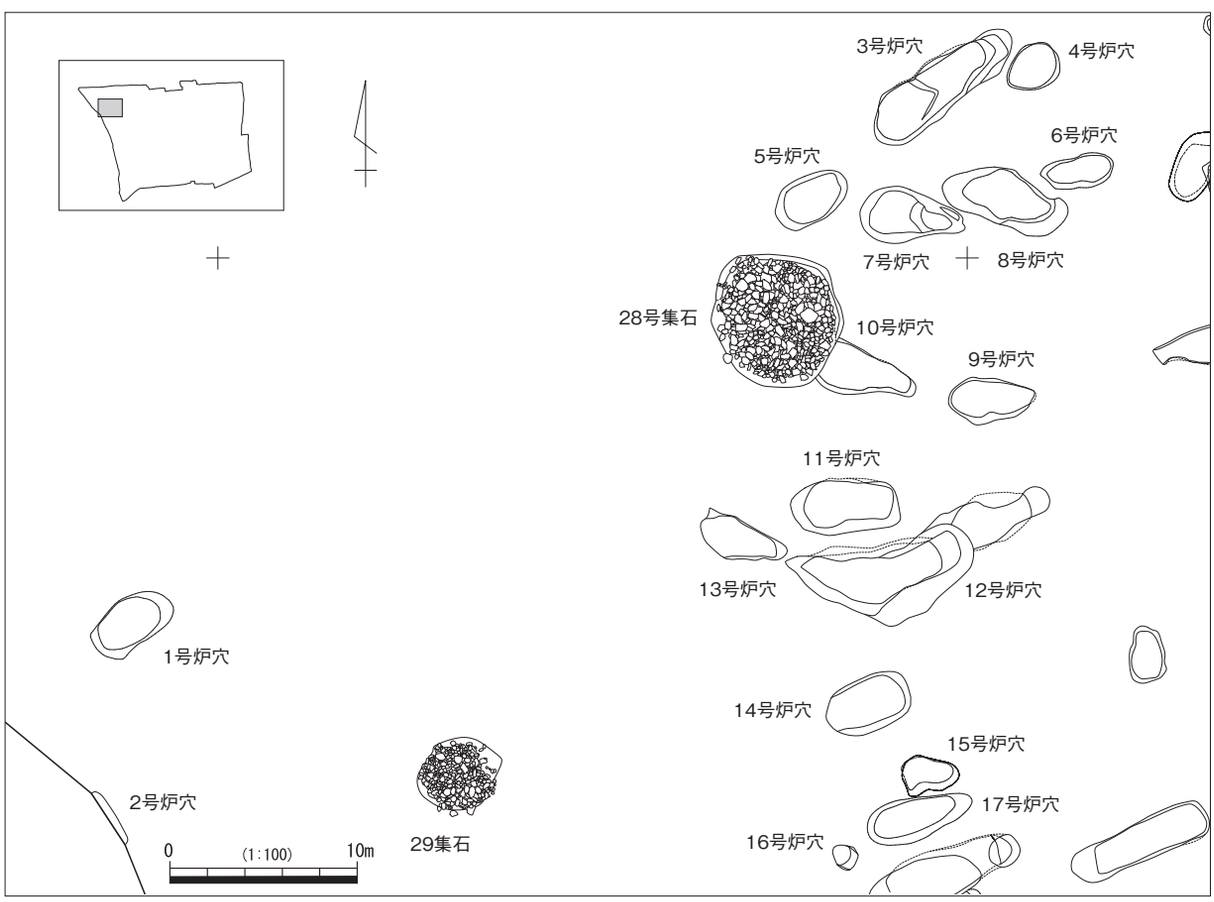


図 15　１～ 17 号炉穴配置図

ある。土層において切り合い関係が認められないことから、①の天井が崩落した後、その崩落土を除去した上で、奥にむかって新たに②を築き、①の跡を前庭部として利用したものと考えられる。

遺物としては、埋土から石器が出土している。1は瑪瑙製のスクレイパーである。2は石鏃の未製品で、シルト岩製のものである。この2点のほかに、シルト岩の剥片が1点出土している。

埋土から出土した炭化物のC 14年代測定では、9440 ± 50 yrBPという結果が得られている。

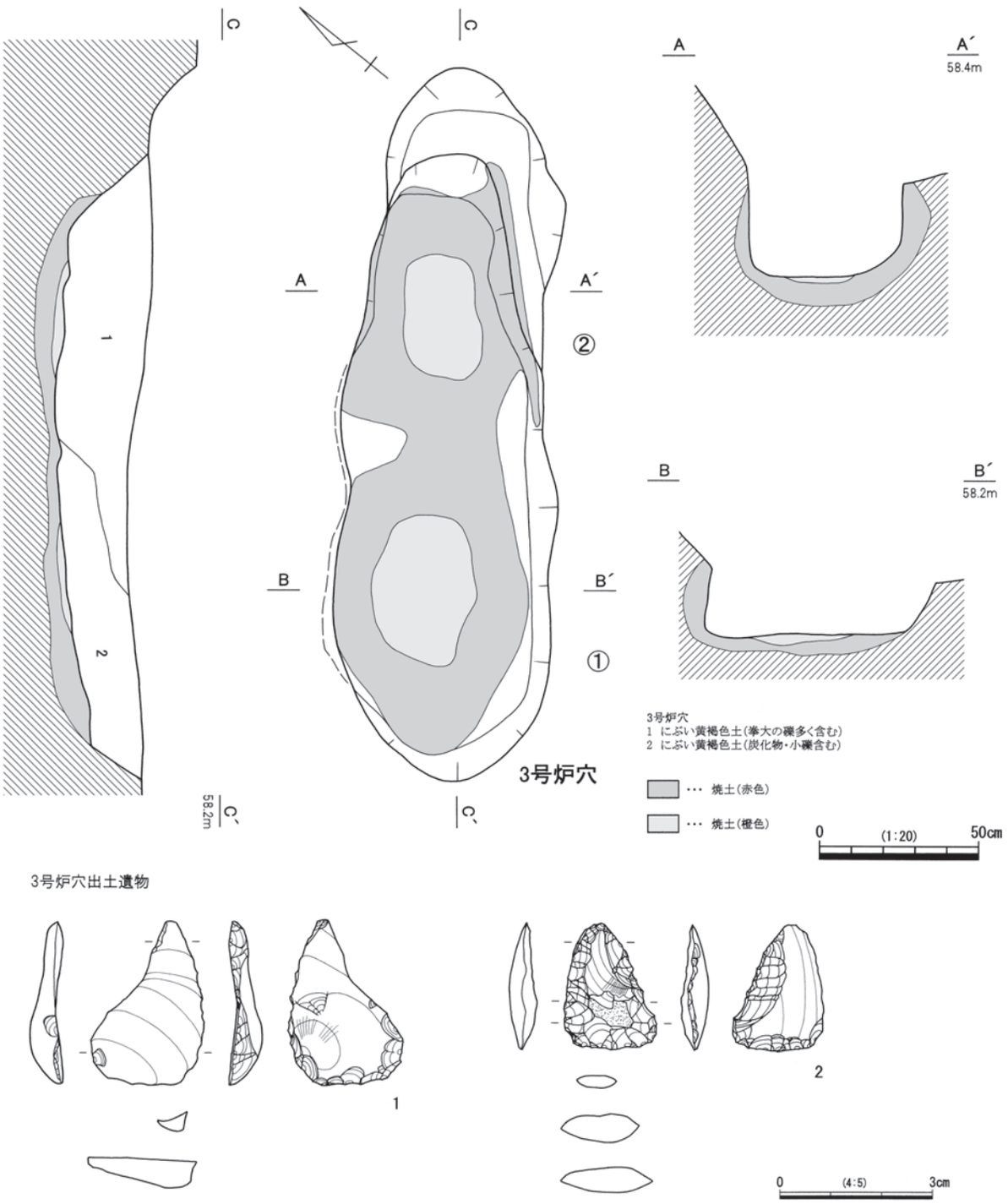


図16　3号炉穴実測図・出土遺物

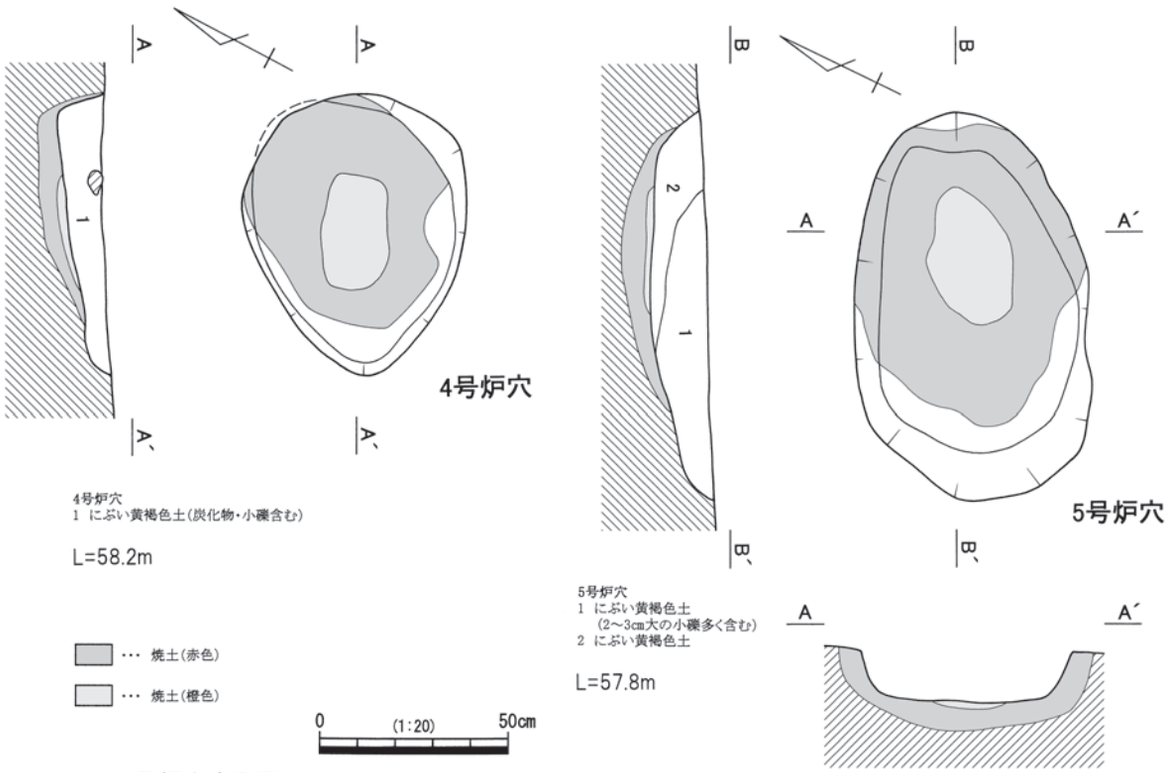


図 17　４・５号炉穴実測図

４号炉穴（図 15・17）

３号炉穴の南東側に隣接する。第１検出面の 20 ㎝程下方において、燃焼部が検出されている。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。主軸は北東－南西方向で、長さは現存で約 70 ㎝と小型の炉穴である。

燃焼部は、中央付近で 70 ㎝と最も広くなり、奥が丸くおさまる楕円形の形状となっている。焚口付近を除き、ほぼ全面に焼土面が検出されている。赤化した焼土面の中央やや手前側には、橙化面が確認されている。焼土の厚さは、橙化面が約２㎝、赤化面が最大で６㎝となっている。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落は確認されていない。検出時の状態における位置関係では３号炉穴と接していないものの、前庭部の広がりを考慮すると、本来は前庭部付近で切り合っていた可能性が高い。

埋土から出土した炭化物のＣ 14 年代測定では、9460 ± 40 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

５号炉穴（図 15・17、図版６）

３号炉穴から 60 ㎝程南西に位置する。第１検出面から約 80 ㎝下方で検出されている。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝である。主軸は北東－南西方向で、３号炉穴と近似した方位をとっている。

燃焼部から前庭部の一部が検出されている。燃焼部は長さが 85 ㎝、中央付近の最大幅は 60 ㎝、奥の幅は 30 ㎝程である。焚口付近でも幅がほとんど変わらない、卵形に近い形態となっている。燃焼部には、ほぼ全面に赤化した焼土面が確認されており、中央付近には橙化面も検出されている。焼土の厚さは、橙化面が約２㎝、赤化面が最大で６㎝程となっている。埋土は、含有する小礫の量から大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近いにぶい黄褐色土である。

埋土から出土した炭化物のＣ 14 年代測定では、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

６号炉穴（図 15・18）

３号炉穴から 1.5 m南東に位置する。主軸は東－西方向で、東側に煙道が設けられている。

燃焼部は 90 ㎝の長さで検出されている。なお、手前側では焼土面が検出されておらず、焚口に相当することも考えられるが、断面図をみる限り掘り過ぎによって焼土が失われた可能性が高いため、全体を燃焼部と見なすことにする。第１検出面から約 30 ㎝下方で検出されている。第１検出面から燃焼部の最深部までの深さは、約 65 ㎝である。燃焼部の幅は、中央付近の最大幅でも 45 ㎝と狭い。奥近くまであまり幅が変化せず、奥が丸くおさまる楕円形に近い形状である。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り過ぎとみられる手前側を除き、全面に赤化した焼土面が検出されている。燃焼部の中央付近には、橙化した焼土面が確認されている。焼土の厚さは、橙化面・赤化面ともに厚い部分でも３㎝程である。埋土の状況については、実測図が残されていないため不明であるが、調査時の所見記録によると天井の崩落は確認されなかったようである。

燃焼部の中央付近の床面からは、10 ㎝程度の大きさの礫が出土している。堆積状況がわからないため明確ではないが、床面から出土しており被熱の痕跡がないことから、炉穴の使用後に人為的に置かれたものの可能性もある。

埋土から出土した炭化物のＣ 14 年代測定では、9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

７号炉穴（図 15・18）

５号炉穴の東側 50 ㎝に位置する。主軸は東－西方向となっており、東側が煙道となる。第１検出面

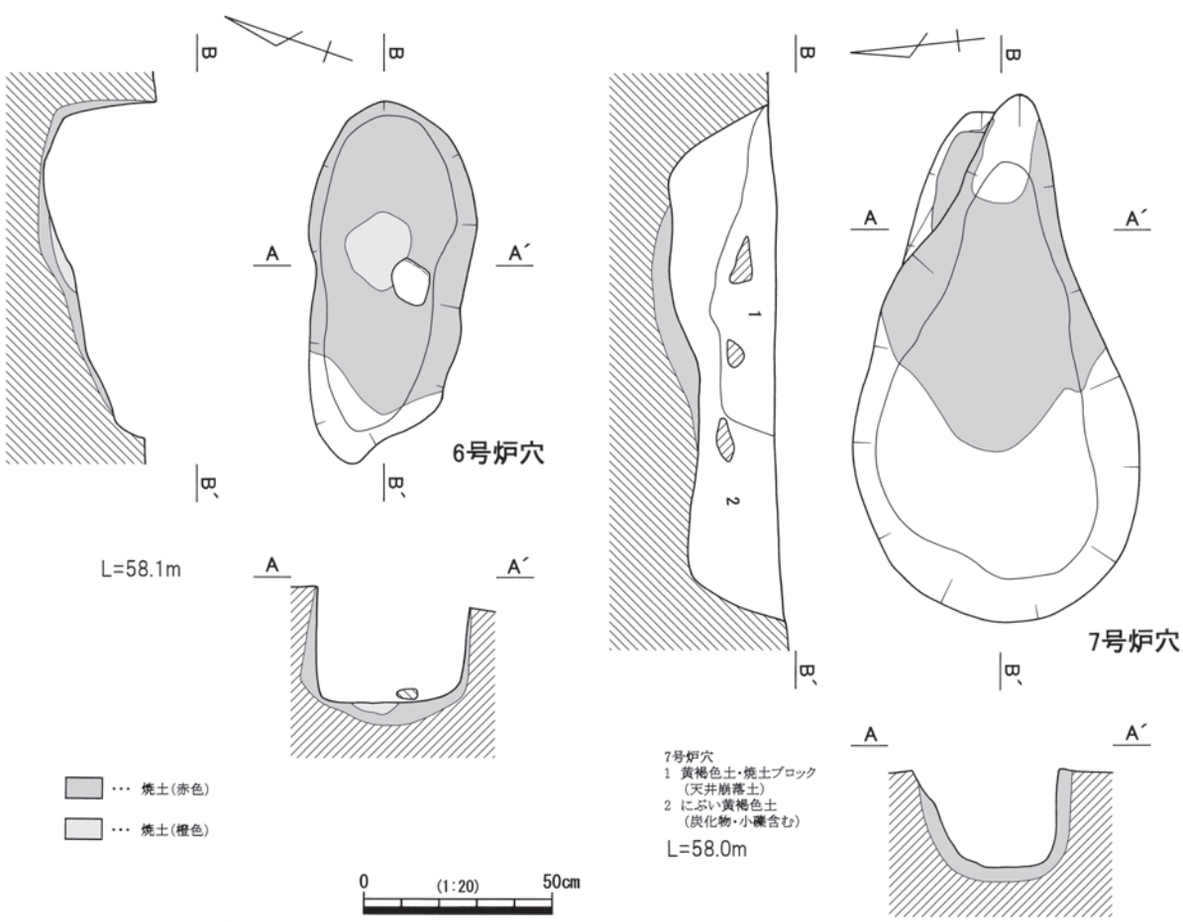


図 18　６・７号炉穴実測図

の 50 ㎝下方で検出されており、第一検出面から床面までの深さは約 75 ㎝である。

燃焼部は長さ 95 ㎝で、幅は焚口付近が最も広く 75 ㎝となっている。煙道に向かって幅が狭くなる二等辺三角形の形状である。奥壁は斜めに立ち上がる。焚口の前面には、前庭部が 45 ㎝程の長さで検出されている。焼土は燃焼部の床面と側壁のほぼ全面に確認されており、床面の最も厚いところで６㎝の厚さがある。奥壁では焼土が確認されていないが、断面図からみて掘り過ぎの可能性も否定できない。燃焼部の上層では、天井の崩落土とみられる黄褐色土（地山）と焼土ブロックの堆積が確認されている。床面からやや浮いた位置に堆積しており、炉穴が放棄された後、やや時間が経過した後に天井が崩落していることがわかる。

遺物としては、剥片が２点出土しており、うち１点は二次加工がみられ、石鏃の未製品の可能性がある。出土層位についての記録はないが、おそらくは２層からの出土であろう。また、埋土の１層と２層の境付近では、径 10 ㎝程度の礫の出土が確認されている。土層断面図からは、炉穴がある程度埋没した後に礫が入れられ、さほど間を空けずに天井が崩落している状況をみてとれる。

埋土から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を行っており、9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。

８号炉穴（図 15・19）

７号炉穴の東側に隣接し、第１検出面より 40 ㎝程下方で検出されている。西側と東側の２箇所で焼土面が検出されおり、２基の炉穴が連結している状態にある。西側を８号炉穴①、東側を８号炉穴②と

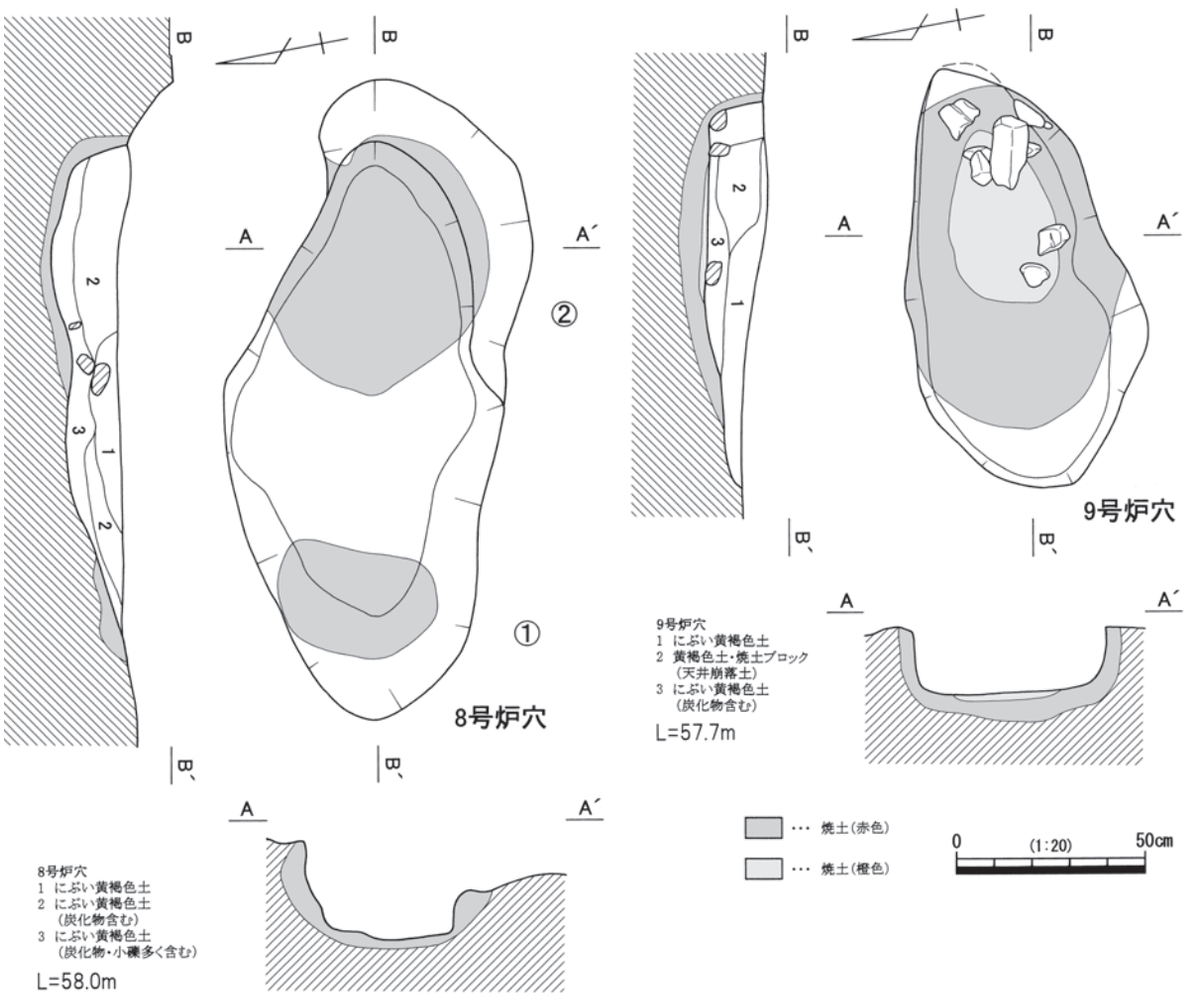


図 19　８・９号炉穴実測図

する。

①は部分的にしか残存しない。明確ではないが、東－西方向を主軸とし、東側に煙道をもつ炉穴とみられる。赤化した焼土面が長さ30㎝・幅40㎝の範囲で検出され、厚さは最も厚い部分で５㎝程となっている。②とともに埋没しており、奥壁の立ち上がりは遺存しない。①の天井が崩落した後に、崩落した土砂を取り除き、そこから前進する形で②が築造されたものと推測される。

②は東西方向を主軸とし、東側に煙道、西側に焚口をもつ。燃焼部は、長さ60㎝・最大幅55㎝で、焚口部分が広く奥に向かって狭くなる二等辺三角形の形状である。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。赤化した焼土が床面・側壁・奥壁の全面にみられ、厚さは最大で４㎝程ある。第１検出面から床面までの高さは、約70㎝である。前庭部は、①の跡を利用しており、長さは100㎝となっている。

①②ともに、土器や石器などの遺物は出土していない。

９号炉穴（図15・19、図版６）

８号炉穴から南へ2.5ｍに位置する。第１検出面より約60㎝下方で検出されている。東－西方向を主軸とし、東側に煙道をもつ。

燃焼部は長さ90㎝・最大幅60㎝の規模で、焚口付近が最大幅となり奥に向かって狭くなる二等辺三角形に近い形状となる。奥壁は直立気味に立ち上がり、オーバーハングしている部分もある。燃焼部内の全面に赤化した焼土面が認められ、中央やや奥寄りの場所には橙化した焼土が確認できる。焼土の厚さは、赤化面が最大で約６㎝、橙化面が約２㎝となっている。第１検出面から床面までの高さは、約85㎝である。埋土は、大きく３層に分けられており、第２層で黄褐色土（地山）と焼土のブロックが混じる天井の崩落土が確認できる。床面との間に第３層を挟んでおり、炉穴の使用後多少の期間を経た後に、煙道側の天井が崩落していることがわかる。

燃焼部からは、10～20㎝程度の大きさの礫が10点程出土している。いずれも床面直上から出土しており、被熱の痕跡は確認されていない。使用時のものとは考えられず、大きさや周辺の状況から自然に流入するとも考えにくい。炉穴の使用後（廃棄時）に、人為的に入れられた可能性が高い。

埋土から出土した炭化物についてＣ14年代測定を実施しており、9520±50 yrBPという結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

10号炉穴（図15・20、図版６）

９号炉穴から西へ１ｍに位置し、西側の一部は２号集石によって失われている。第１検出面より約50㎝下方で検出されている。長軸は南東－北西方向で、南東－北西側に煙道をもつ。

燃焼部は長さ90㎝・最大幅55㎝の大きさで、焚口付近が最大幅で奥へ向かって狭くなる二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。奥壁の大部分を除き、床面と側壁のほぼ全面に赤化した焼土面が確認されており、燃焼部の中央付近には橙化した焼土面も検出されている。焼土は最も厚い部分で、赤化面・橙化面ともに約６㎝と厚い。第１検出面から床面までの高さは、約80㎝である。前庭部はほぼ平坦で、25㎝程の長さで検出されており、西側は28号集石に切られている。埋土は含有物から大きく３層に分けられているが、いずれも基本的には地山に近似したややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落は確認されていない。

土器や石器などの遺物は出土していないが、切り合い関係から、28号集石より先行する遺構であることは明らかである。なお、埋土から出土した炭化物のＣ14年代測定では、9610±50 yrBPという結果が得られている。

11 号炉穴（図 15・20、図版７）

10 号炉穴から南へ 1.5 ｍに位置する。第１検出面よりも約 80 ㎝下方で検出されている。長軸は東－西方向で、東側に煙道をもつ。

燃焼部は、長さ 105 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模である。幅は奥では 55 ㎝と焚口部に比べてやや狭くなるが、全体的には長方形に近い形状となっている。奥壁は斜めに立ち上がるように検出されているが、焼土の立ち上がりをみると、実際には直立に近い状態で立ち上がっていた可能性もある。燃焼部内では、奥壁の上方を除くほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されている。焼土は最も厚い所で約７㎝の厚さがある。第１検出面から床面までの高さは、約 110 ㎝である。前庭部は、約 15 ㎝の平坦面を経て、約 25 ㎝の高さを比較的急な傾斜で立ち上がっている。作業スペースとしては狭小であり、焼土を伴わない前庭部に関しては、検出し切れなかった可能性もある。埋土は、大きく２層に分けられている。このうち上層の第１層は、焼土ブロックが混じっており、崩落した天井の可能性もある。

焚口付近の床面からは、径 10 ㎝前後の大きさの礫が、十数個発見されている。被熱の痕跡がみられないことから、炉穴の使用時に用いられたものとは考えにくい。焚口部に集中しており、炉穴の使用後（廃棄時）に置かれたものである可能性が高い。

床面付近から出土した炭化物について、C 14 年代測定を行っており、9380 ± 50 yrBP という測定結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

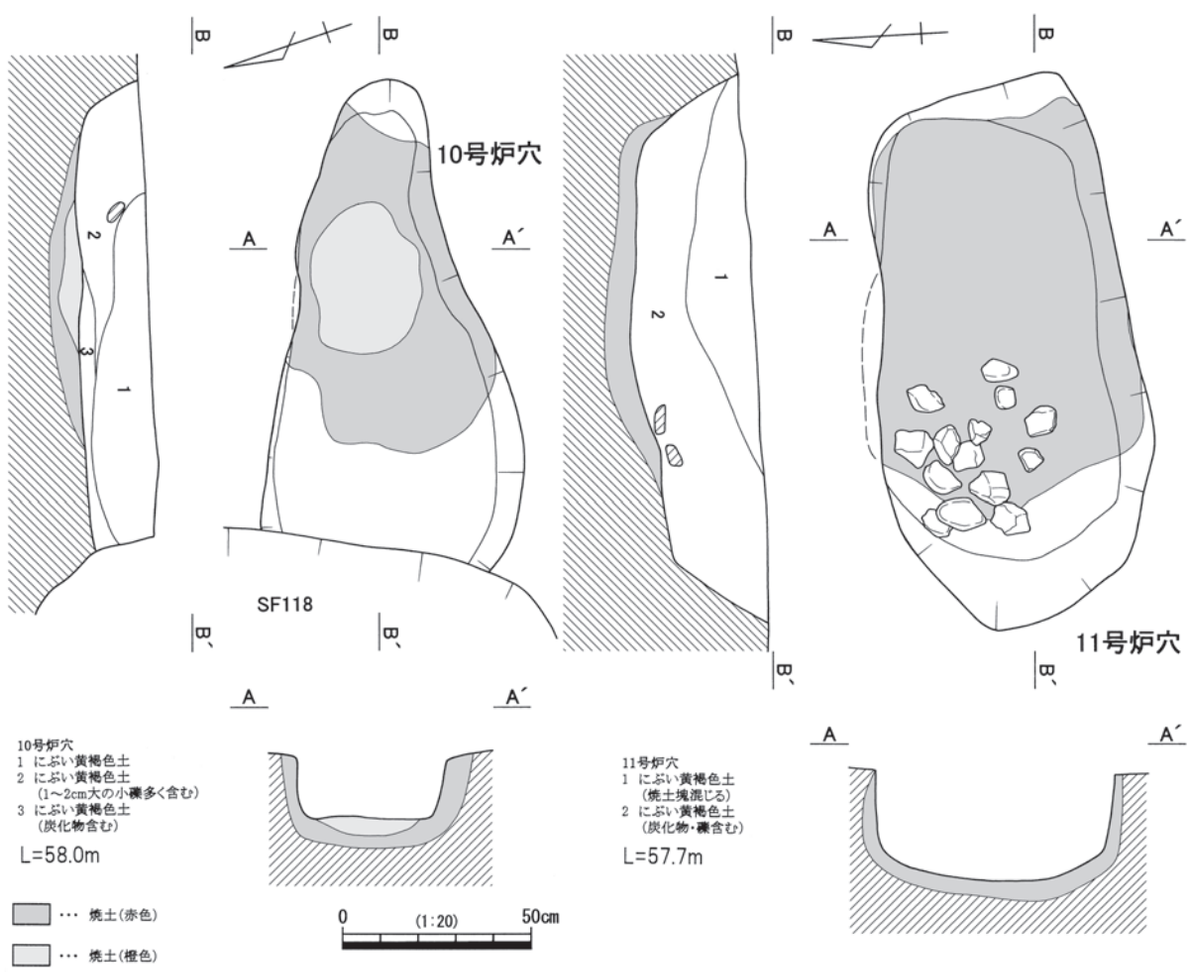


図 20　10・11 号炉穴実測図

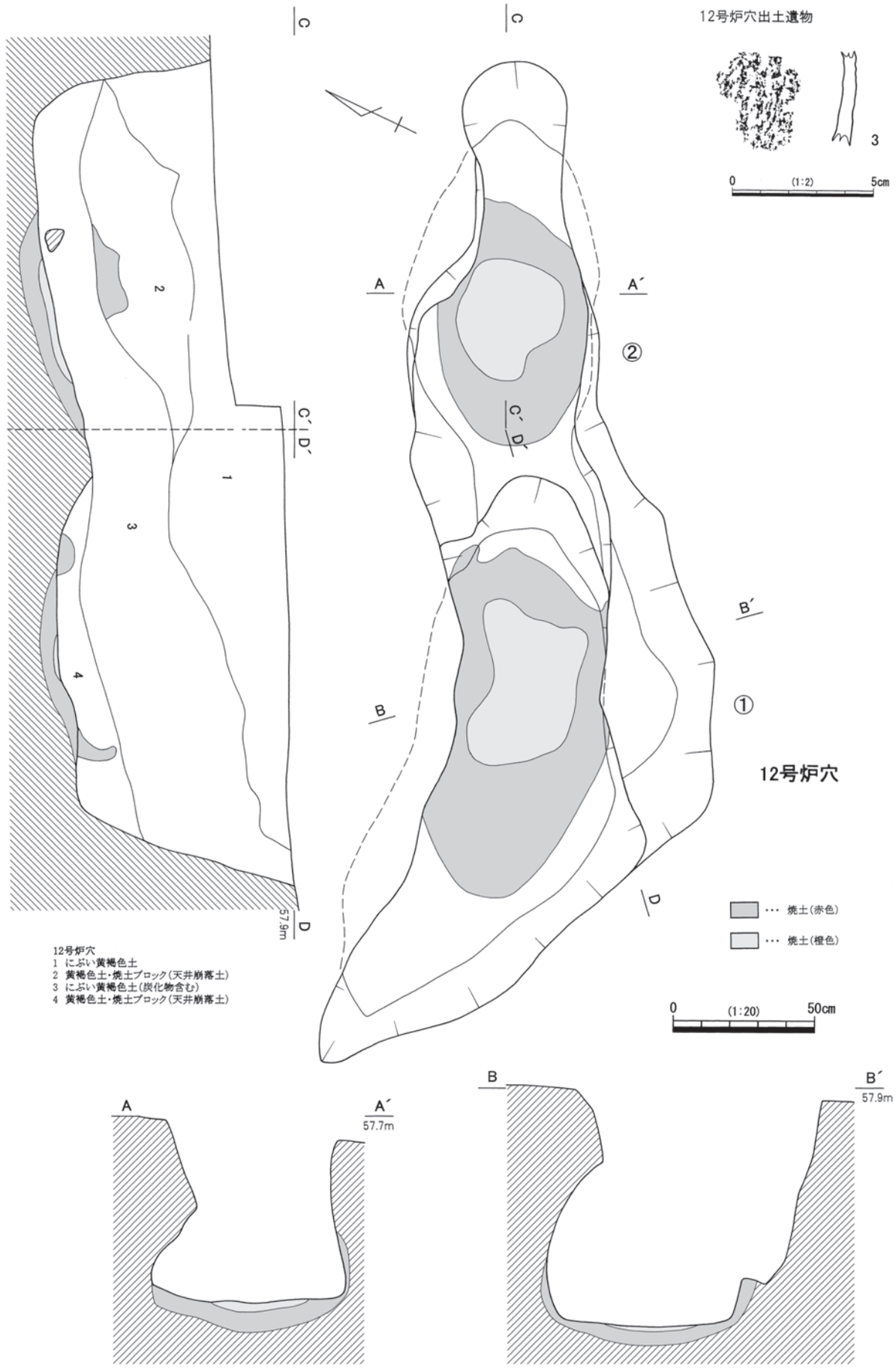


図 21　12 号炉穴実測図・出土遺物

12 号炉穴（図 15・21、図版 37）

11 号炉穴の南側に隣接する。２基の炉穴が連結した状態となっているため、手前を 12 号炉穴①、奥を 12 号炉穴②とする。

①は、東－西方向を主軸とし、東側に煙道をもつ。第１検出面から 50 ㎝程下方で検出されている。燃焼部は、長さ 130 ㎝・幅 70 ㎝の規模であり、焚口付近がやや狭くなるが、全体的には二等辺三角形に近い形状となっている。燃焼部では、床面と側壁のほぼ全面で、赤化した焼土面が検出されている。燃焼部のほぼ中央、やや奥寄りの場所には橙化した焼土面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面が約２㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 135 ㎝と深い。前庭部は、北側に斜めに細長く延びるように検出されているが、この形状は足場としての合理性を欠いており、南側が検出し切れていない可能性が高い。南側も北側とほぼ対称に広がっていたとすると、平坦面が最大で幅１ｍ・長さ 50 ㎝程に復元できる。①の埋土としては、大きく３層に分けられており、最下層には地山と焼土ブロックが混じる天井の崩落土が確認されている。その上層は②と共通しており、②と同時に埋没していることが分かる。①の天井が崩落した後、崩落土を除去・整地して、その奥に新たに②が築造されたものとみてよい。

②は、①と同じく東側に煙道をもつが、主軸は①に比べてやや北寄りの方向に設定されている。第１検出面から 70 ㎝程下方で検出されている。燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模であり、焚口部分の幅がすぼまっており、やや楕円形に近い形状となっている。床面と側壁のほぼ全面で、赤化した焼土面が確認されており、中央部では橙化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、①と同様に約 135 ㎝と深い。奥壁はほぼ直立して立ち上がっており、被熱が弱かったのか、明確な焼土面は検出されていない。天井は崩落しているが、側壁の形状からみて、床面から 20 ～ 30 ㎝程の高さと推定される。前庭部には、①の跡を利用している。埋土は大きく３層に分けられており、最下層である第３層の上に、天井の崩落土が確認されている。

遺物としては、①の埋土上層から、縄文土器１点と剝片２点が出土している。３は縄文土器の胴部片であり、外面には撚糸文が施されている。直接炉穴に伴う遺物ではないが、年代を知る上での参考になろう。また、埋土から採取した炭化物２点については、Ｃ 14 年代測定を実施している。測定の結果は、9480 ± 50 yrBP と 9680 ± 50 yrBP という年代である。

13 号炉穴（図 15・22、図版７）

12 号炉穴の西側に隣接して位置している。第１検出面から 110 ㎝下方で検出されており、西側は第１検出面からの掘り下げの際に失われている。主軸は南－東方向で、東側が煙道となる。煙道が 12 号炉穴の前庭部の端に接するような位置関係にあるが、切り合い関係については確認されていない。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模である。奥に向かって直線的に幅が狭まる二等辺三角形に近い形状で、焚口部では幅がやや狭まる様子をみてとれる。奥壁を除き、床面と側壁の全面に、赤化した焼土面が検出されている。中央やや焚口寄りには、橙化した焼土面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは約 130 ㎝と深い。奥壁は、斜め上方へ立ち上がり、焼土面は検出されていない。埋土は、大きく上下２層に分けられているが、基本的には地山に近似したややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の様子は、確認されていない。

燃焼部内からは、径 10 ～ 20 ㎝の礫が多数発見されている。このうち、床面から出土したものは、被熱の痕跡がみられ、特に礫の上面に顕著に確認されている。これらの礫は、炉穴の使用時の状況をほぼ

保っているとみてよい。燃焼部内に礫を集め、その上で燃料を焚いていたことがわかる。炉穴の具体的な使用法の一例を示す事例として注目される。主に第１層から出土している礫については、被熱の痕跡が確認できず、第２層の堆積後のものであるため、床面の礫とは別の目的で炉穴の使用後（廃絶後）に入れられたものとして区別できる。

床面付近から採取した炭化物について、Ｃ 14 年代測定を行っている。この炭化物は、礫の状況などからみて燃料の残片である可能性が高い。測定の結果、9490 ± 50 yrBP という結果が得られており、炉穴の年代を示すデータの一つとして注目される。土器や石器などの遺物は出土していない。

14 号炉穴（図 15・22、図版７）

12 号炉穴から南へ 1.5 ｍに位置する。東－西方向を主軸とし、東側に煙道をもつ。第１検出面より約 140 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 105 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模である。奥まで幅がほとんど変化しない、長方形に近い形状である。床面・側壁・奥壁のほぼ全面に、赤化した焼土面が確認できる。中央やや奥寄りの位置には、橙化面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面が約３㎝と比較的薄い。第１検出面から床面までの深さが約 155 ㎝あり、非常に深い位置にある炉穴といえる。奥壁は、やや斜めに立ち上がっている。埋土は、含有物の違いから上下２層に分けられているが、基本的には地山に近いややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

奥壁側の床面からは、30 ㎝程の大きさの礫が２個出土している。出土状況からみて、人為的に置かれたものと判断できるが、被熱の有無などの記録がなく、どの段階で置かれたものかは不明である。

床面付近から採取した炭化物のＣ 14 年代測定を実施しており、9460 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

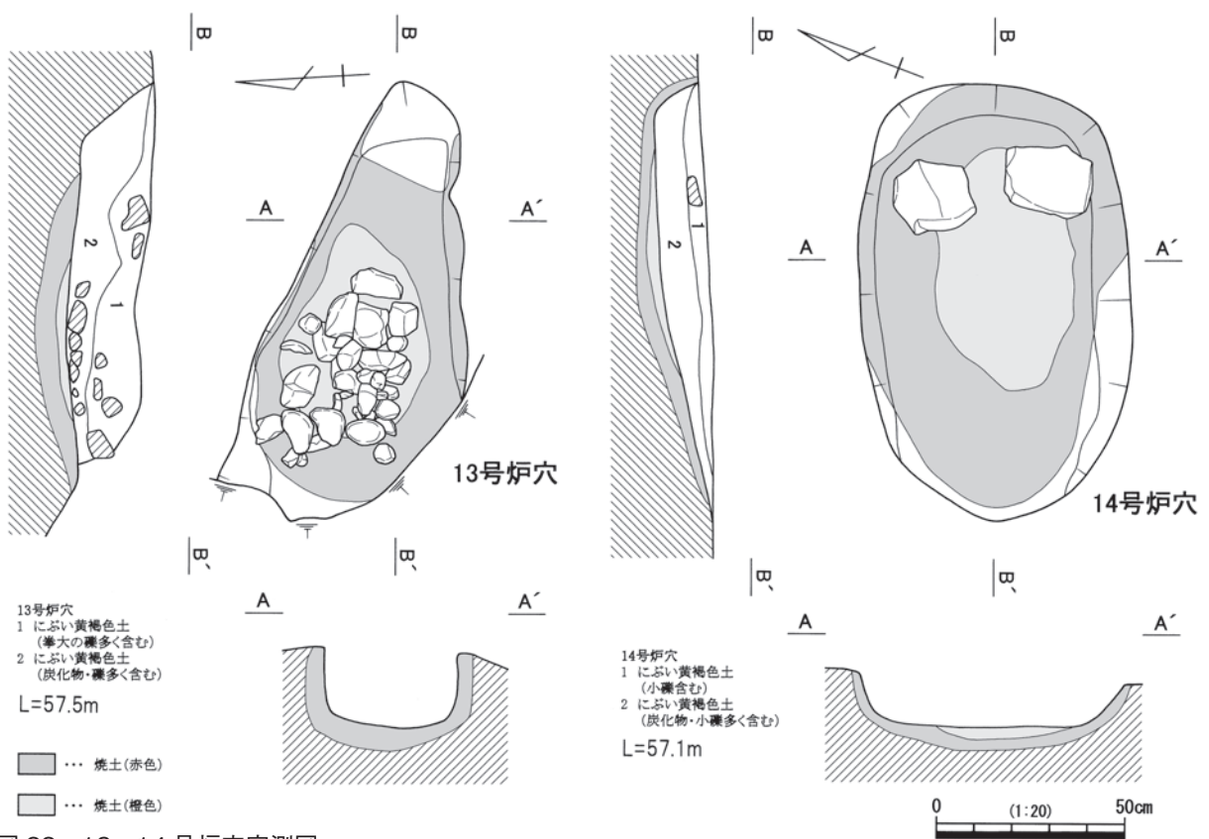


図 22　13・14 号炉穴実測図

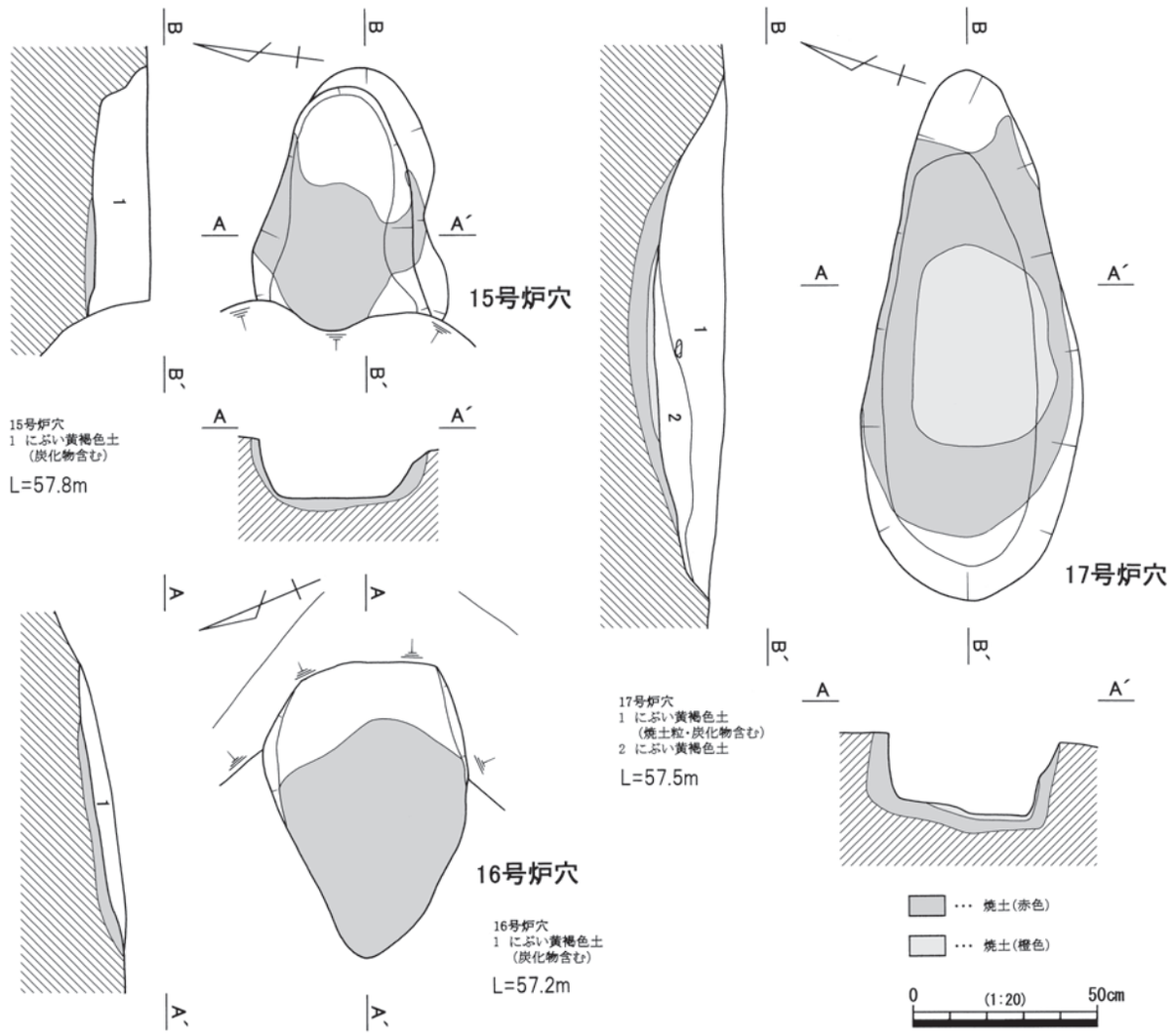


図 23　15 ～ 17 号炉穴実測図

15 号炉穴（図 15・23）

14 号炉穴から南へ約１ｍに位置する。主軸は東－西方向で、東側に煙道をもつ。第１検出面から約 60 ㎝下方で検出されており、西側は第１検出面から掘り下げた際に失われている。

燃焼部は、残存する部分では長さ 60 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模となっている。床面と側壁では、部分的に赤化した焼土面が検出されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 75 ㎝である。埋土は、地山に近いややくすんだ黄褐色土の単層であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

全体的に遺存状態が悪く、土器や石器などの遺物も出土していない。

16 号炉穴（図 15・23）

15 号炉穴の南西側約 1.5 ｍに位置する。第１検出面から約 130 ㎝下方で、焼土面が発見されたことから存在が確認された。そのため、確認されたのはほぼ燃焼部の床面のみで、大部分が掘り下げの際に失われている。主軸は南東－北西方向とみられるが、煙道がどちら側なのか明確でない。

燃焼部の床面とみられる赤化した焼土面は、長さ 65 ㎝・幅 50 ㎝の範囲で検出されている。焼土の厚

さは、最も厚い部分で２㎝程である。第１検出面から床面までの深さは、約 100 ㎝となっている。

埋土から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9450 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

17 号炉穴（図 15・23、図版７）

16 号炉穴から東へ約 50 ㎝に位置し、15 号炉穴とほぼ平行して隣接する。東－西方向を主軸とし、東側に煙道をもつ。第１検出面から約 95 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 105 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、焚口近くで最大幅となり、奥へ向かって直線的に幅を狭くする二等辺三角形に近い形態である。奥壁を除き、床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土面が確認でき、中央付近には橙化した部分も検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が約２㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 115 ㎝である。奥壁は、比較的緩い傾斜で斜め上方へ立ち上がる。埋土は、上下２層に分けられているが、基本的には地山に近いややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の様子は確認されなかった。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9630 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

18 号炉穴（図 24・26、図版８）

17 号炉穴の南側約 50 ㎝に、ほぼ平行して隣接する。主軸は東－西方向でやや北に振る。東側に煙道をもつ。第１検出面から約 100 ㎝下方において、一部天井が残存する状態で検出されている。19 号炉穴と切り合っており、19 号炉穴よりも新しい炉穴であることが確かめられている。

燃焼部は長さ 135 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、奥が丸くおさまる楕円形に近い形状となっている。奥壁を除き、床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土が検出されており、中央やや奥よりには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 160 ㎝と非常に深い。天井は 25 ㎝程の長さで残存しており、床面から天井までの高さは約 30 ㎝となっている。煙道は直径約 40 ㎝の円形で、奥壁はほぼ直立気味に立ち上がる。前庭部は、長さ約 50 ㎝・幅 55 ㎝程の平坦面がある。埋土は大きく３層に分けられており、最下層の第３層の上に、天井の崩落土（第２層）の存在が確認されている。

燃焼部の中央から奥にかけての床面には、10 ～ 20 ㎝程の礫が出土しており、煙道の直下には長さ 40 ㎝・幅 20 ㎝程の大型の礫が縦に入れられた状態で発見されている。いずれの礫にも、被熱の痕跡は確認されていない。煙道の大型の礫をはじめ、自然に流入したとは考えにくく、炉穴の使用後（廃絶時）に人為的に入れられたものとみられる。

埋土中から出土した炭化物について、Ｃ 14 年代測定を実施し、9570 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

19 号炉穴（図 24・26）

18 号炉穴の南側に位置し、北半は 18 号炉穴によって失われている。主軸は東－西方向で、東側に煙道をもつ。第１検出面より約 100 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 100 ㎝で、残存幅は 40 ㎝である。奥で幅がやや狭まるようであるが、全体的には長方形に近い形態と推定される。ほぼ全体で赤化した焼土面が検出されており、奥寄りの位置には橙化面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 140 ㎝ある。奥壁はやや斜め上方に立ち上がる。前庭部には長さ 20 ㎝程の平坦

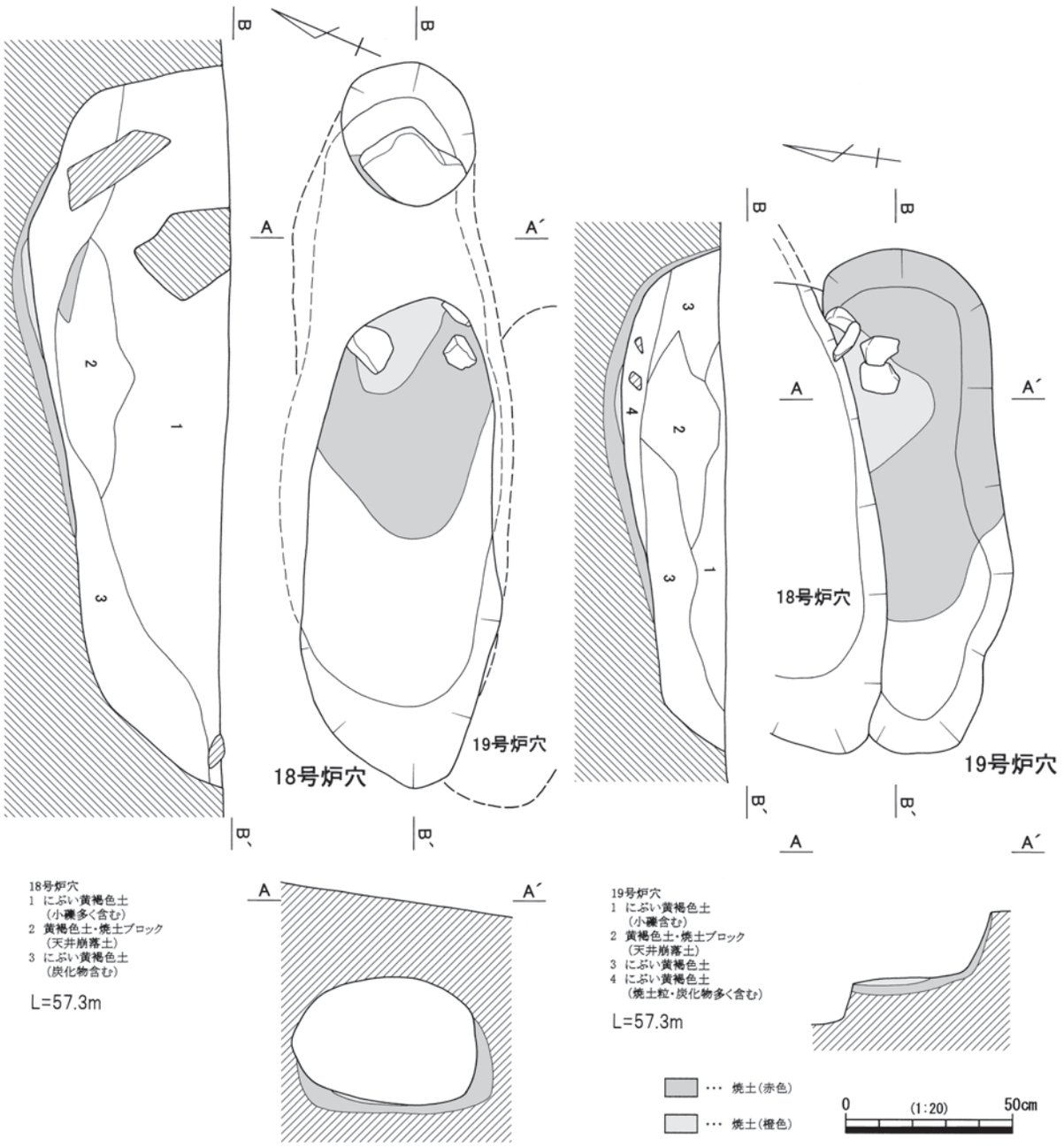


図 24　18・19 号炉穴実測図

面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられており、５㎝程の厚さで堆積する最下層（４層）の上に、天井の崩落土（２層）が確認されている。

奥寄りの位置の床面からは、径 10 ㎝程度の礫が 4 個出土している。いずれも被熱の痕跡は認められず、炉穴の使用後に入れられたものとみられる。

土器や石器などの遺物は出土していないが、遺構の切り合い関係から、18 号炉穴に先行して築かれているのは明らかである。どの段階で 18 号炉穴が築かれたのかは明確でないが、強度の面から考えて、19 号炉穴が埋没した後に 18 号炉穴が築かれた可能性が高い。

20 号炉穴（図 25・26、図版 8）

19 号炉穴から東に約 2 mの、ほぼ延長線上に位置する。主軸はやや北寄りの東－西方向で、煙道は東側となる。第 1 検出面の約 75 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 115 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で、焚口から奥まで幅がほぼ変わらない長方形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出され、中央部には橙化面も検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 5 ㎝、橙化面が約 4 ㎝となっている。第 1 検出面から床面までの深さは、約 100 ㎝である。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっている。前庭部には、長さ 40 ㎝・幅 40 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく 3 層に分けられており、部分的に崩落した天井（2 層）が確認できる。

燃焼部奥の床面からは、径 10 ㎝程度の礫が 6 個発見されている。いずれも被熱の痕跡が確認できないことから、炉穴の使用後に入れられたものと推測される。

遺物としては、埋土中から剝片が 1 点出土しているのみである。なお、埋土中から出土した炭化物については、C 14 年代測定が実施されており、9570 ± 50 yrBP という結果が得られている。

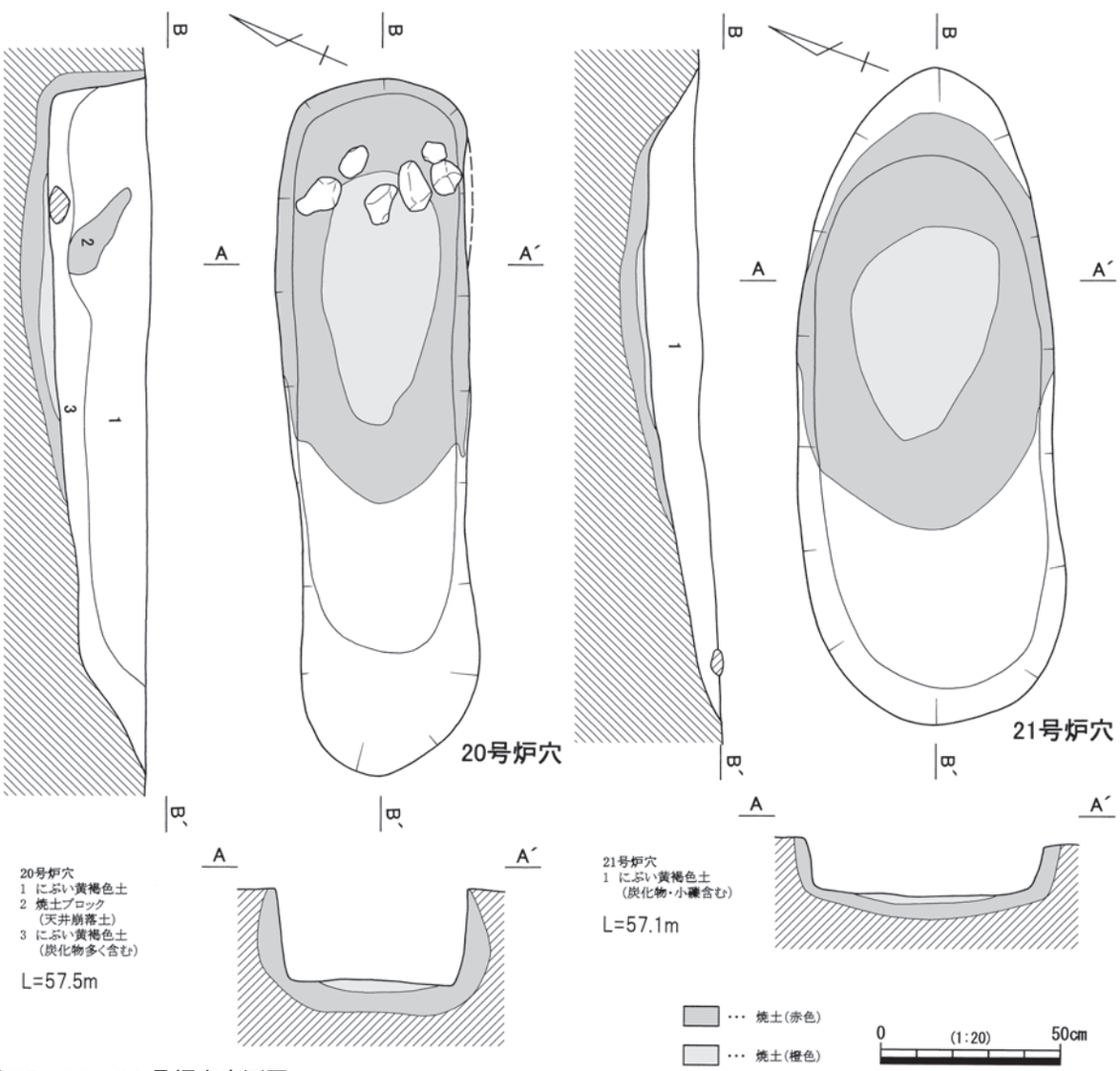


図 25　20・21 号炉穴実測図

21 号炉穴（図 25・26、図版８）

19 号炉穴から南へ約２ｍに位置する。主軸はやや北寄り東－西方向で、煙道は東側につく。第１検出面から約 115 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 105 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、全体的には卵形に近い形状である。奥壁の上半を除いて、ほぼ全面に赤化した焼土が検出されており、中央付近には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が約２㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 135 ㎝である。奥壁は斜め上方へ立ち上がり、上半には焼土面がみられない。前庭部には、長さ約 40 ㎝･幅約 60 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は、地山に近似したややくすんだ黄褐色土の単層であり、天井の残存や崩落は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物について、Ｃ 14 年代測定を行っており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

22 号炉穴（図 26・27）

19 号炉穴の西約４ｍに、やや離れて位置する。主軸は東－西方向であるが、煙道は西側となる。第１検出面から 150 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 85 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、全体としては卵形に近い形態となっている。奥壁を除き、床面と側壁の全面には赤化した焼土面が検出されており、中央部には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面が約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 160 ㎝と深い位置にある。奥壁は緩やかに斜め上方へ立ち上がり、焼土は確認されていない。前庭部は掘り下げにより失われている。埋土は、含有物の違いから大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近いややくすんだ黄褐色土である。天井の痕跡は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9670 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

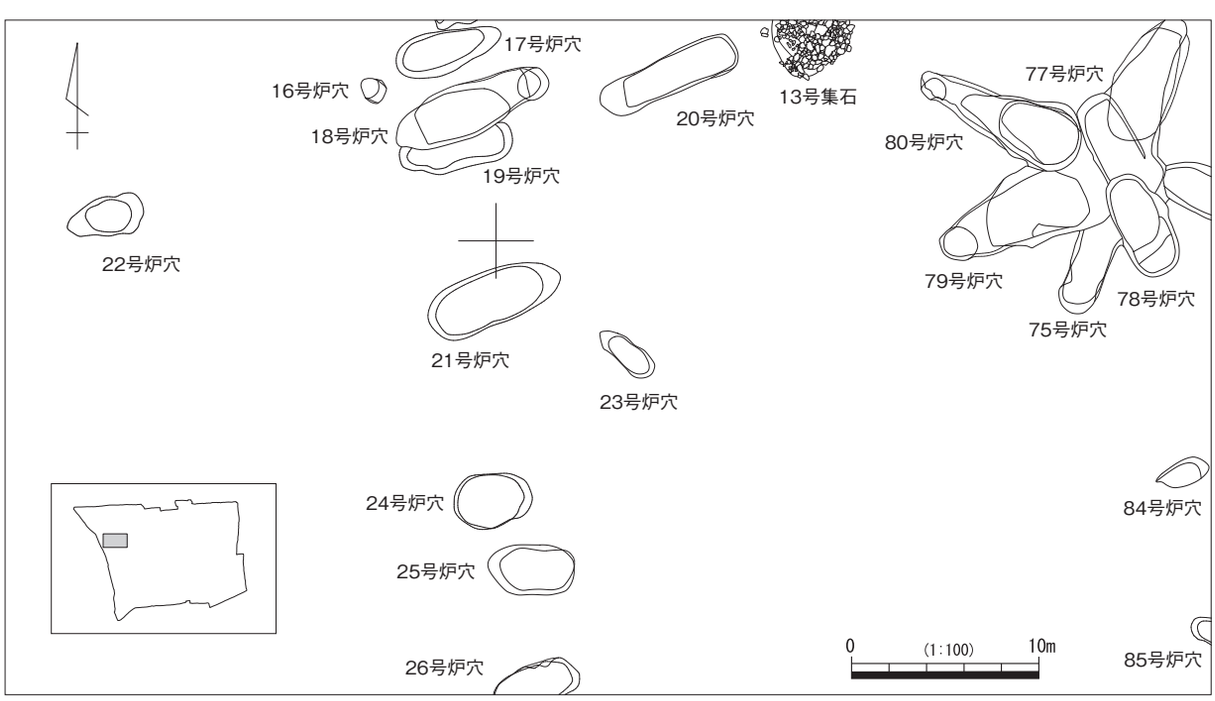


図 26　１８～ 25 号炉穴配置図

23 号炉穴（図 26・27）

21 号炉穴から約 1.5 m南東に位置する。周辺の炉穴とは異なり、主軸は北西－南東方向であり、煙道は北西側につく。第 1 検出面から 75 ㎝下方で検出されている。

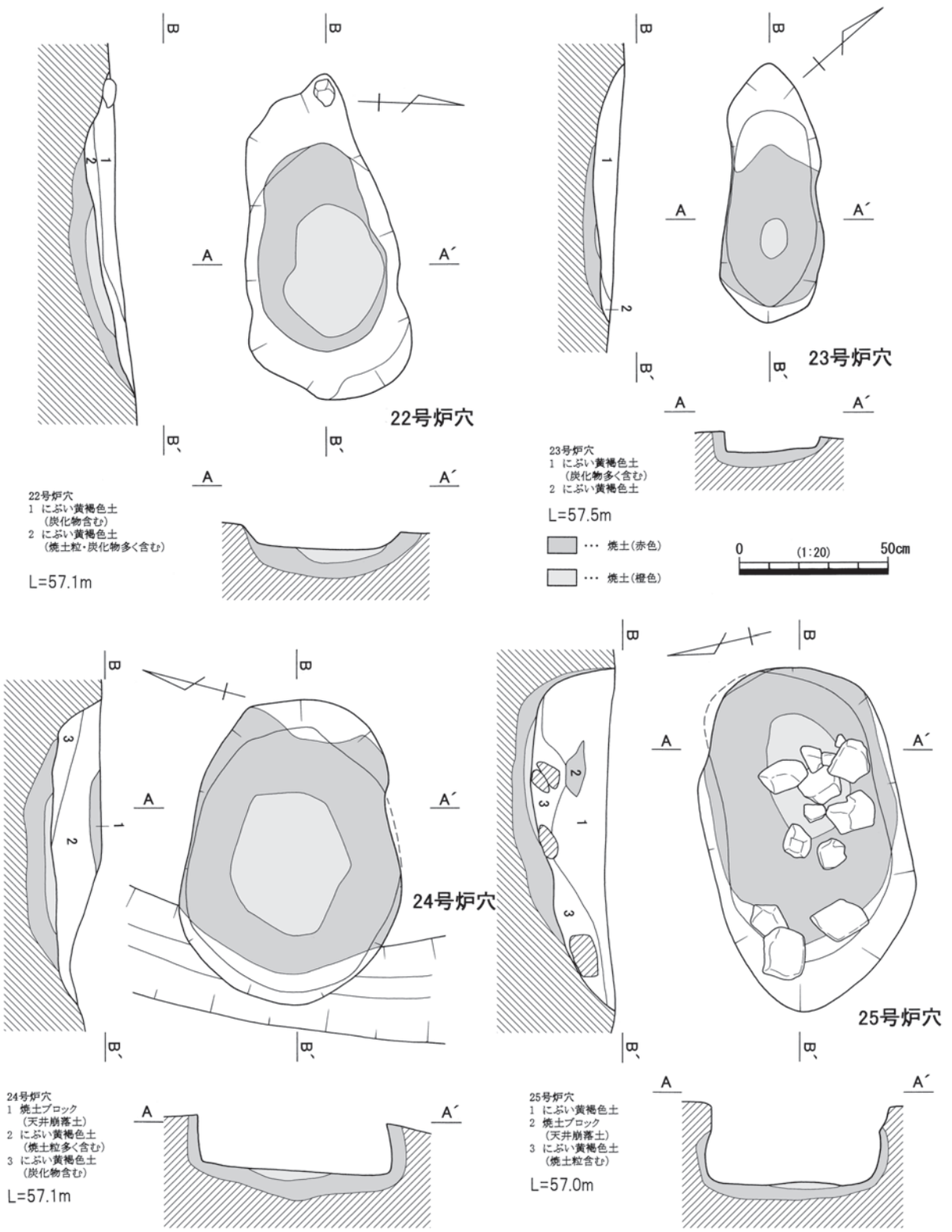


図 27　22 ～ 25 号炉穴実測図

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 25 ㎝と、残存状態が悪いとはいえ他の炉穴と比べて小型である。奥の部分を除き、床面と側壁には赤化した焼土面が検出されている。また、範囲は狭いが中央付近には橙化した焼土面も確認されている。焼土は、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が１㎝程度である。第１検出面から床面までの高さは、約 85 ㎝である。奥壁は非常に緩やかな立ち上がりであり、掘り過ぎてしまっている可能性も考えられる。

埋土中から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を実施しており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

24 号炉穴（図 26・27）

21 号炉穴から南へ約 2.5 ｍに位置している。主軸は東－西方向で、煙道は東側につく。第１検出面から約 115 ㎝下方で検出されており、西側の一部が掘り下げの際に失われている。

燃焼部は長さ 80 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模であり、全体的には卵形に近い形態となっている。奥壁の中央を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。中央付近には橙化面も確認されている。焼土の厚さは最も厚い部分で赤化面が８㎝、橙化面が３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 130 ㎝である。奥壁は斜め上方へ立ち上がり、中央部には焼土面がみられない。埋土は大きく３層に分けられており、最上層（第１層）には崩落した天井とみられる焼土ブロックが検出されている。第２層にも焼土粒の含有が確認されており、天井が徐々に剥落している様子がうかがえる。

埋土中から出土した炭化物についてのＣ 14 年代測定を実施しており、9670 ± 60 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

25 号炉穴（図 26・27、図版９）

24 号炉穴の南側に隣接して位置する。主軸は東－西方向で、煙道は東側につく。第１検出面から約 130 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、全体的には長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が確認されており、中央やや奥寄りには橙化面も検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝、橙化面が約３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 150 ㎝と深い位置にある。奥壁は少し斜めに広がってはいるが、直立気味に立ち上がる。前庭部は、ほとんど平坦面を設けておらず、緩やかな傾斜となっている。埋土は大きく３層に分けられており、崩落した天井とみられる焼土ブロック（第２層）が確認されている。第３層でも焼土の粒の含有が認められてはいるが、第２層とあわせても天井の崩落土としては少ない。天井の崩落は部分的に留まっており、上方に天井が残存していた可能性が高い。

床面からは、10 ～ 20 ㎝程度の大きさの礫が出土している。この礫については、被熱の有無の記録がなく不明な点が多い。ただし、橙化する焼土面の周辺に集められている礫は、13 号炉穴の状況と近似しており、使用時に用いられている可能性がある。土器や石器などの遺物は出土していない。

26 号炉穴（図 28・29、図版９）

25 号炉穴から約 1.5 ｍ南に位置する。主軸は東－西方向で、煙道は東側となる。第１検出面より約 125 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 110 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、全体としては長方形に近い形状となっている。床面・奥壁・側壁の全面に赤化した焼土面が検出され、床面の中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面が約４㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、

約 150 ㎝と深い位置にある。奥壁は、直立気味にやや斜め上方へ立ち上がる。なお、手前側は焚口から直立気味に立ち上がっており、前庭部と呼べる部分が認められないが、検出作業が不十分で、掘り足りていない可能性が高い。埋土は大きく 4 層に分けられており、天井の一部が崩落している様子がうかがえる。ただし、量としては少ないことから、天井の大半は上方に残存していたものと推測される。

燃焼部奥の床面上からは、10 ㎝程度の大きさの礫が発見されている。いずれの礫にも、表面に被熱の痕跡は認められなかった。自然に流入したものとは考えにくいことから、炉穴の使用後（廃絶時）に人為的に入れられたものと推測される。

床面付近から採取された炭化物の C 14 年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

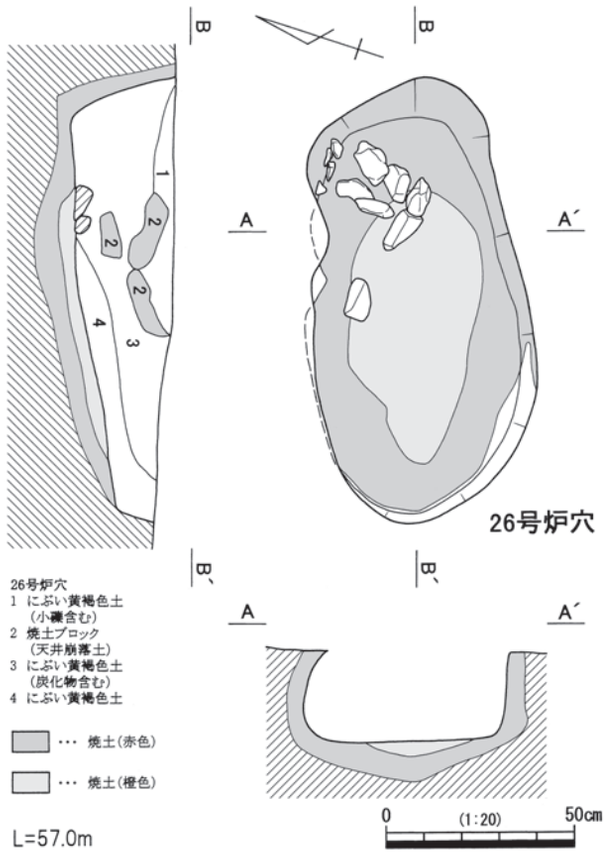


図 28　26 号炉穴実測図

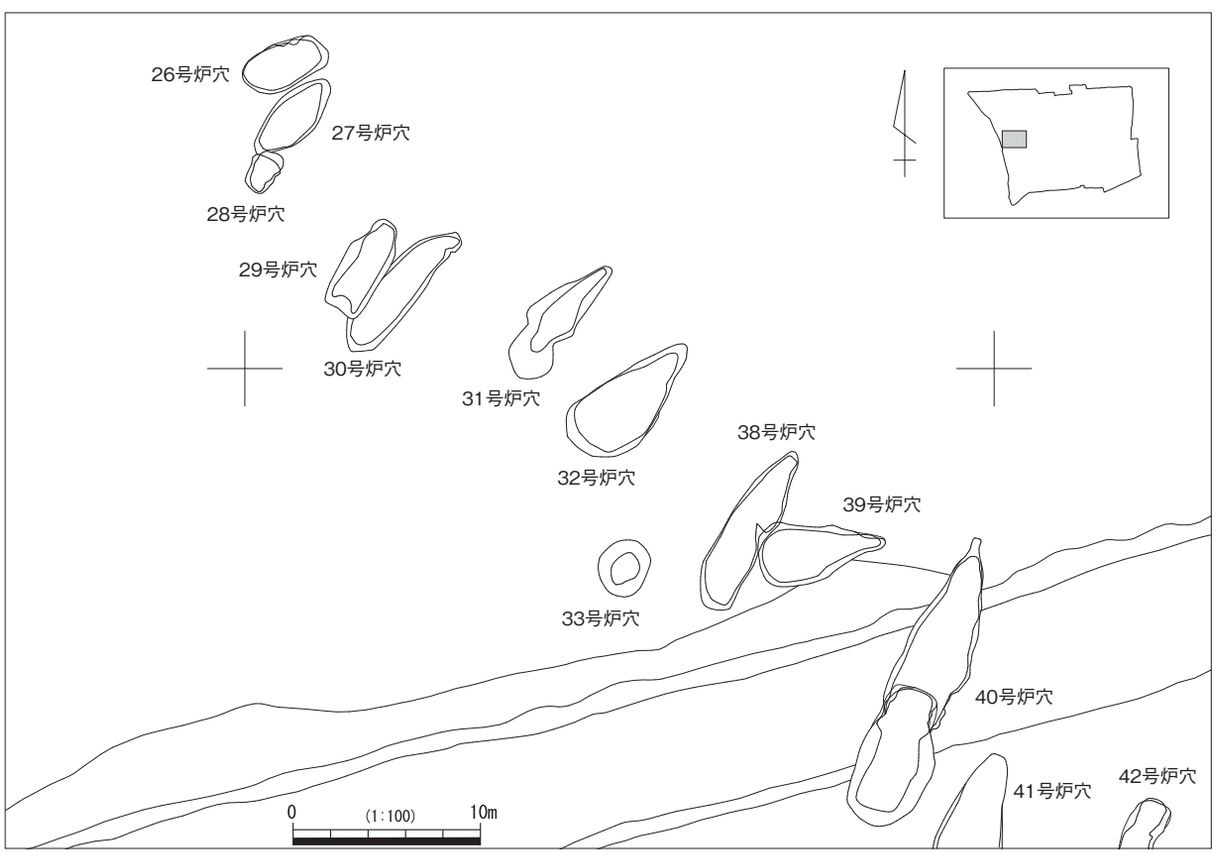


図 29　26 ～ 33・38 ～ 40 号炉穴配置図

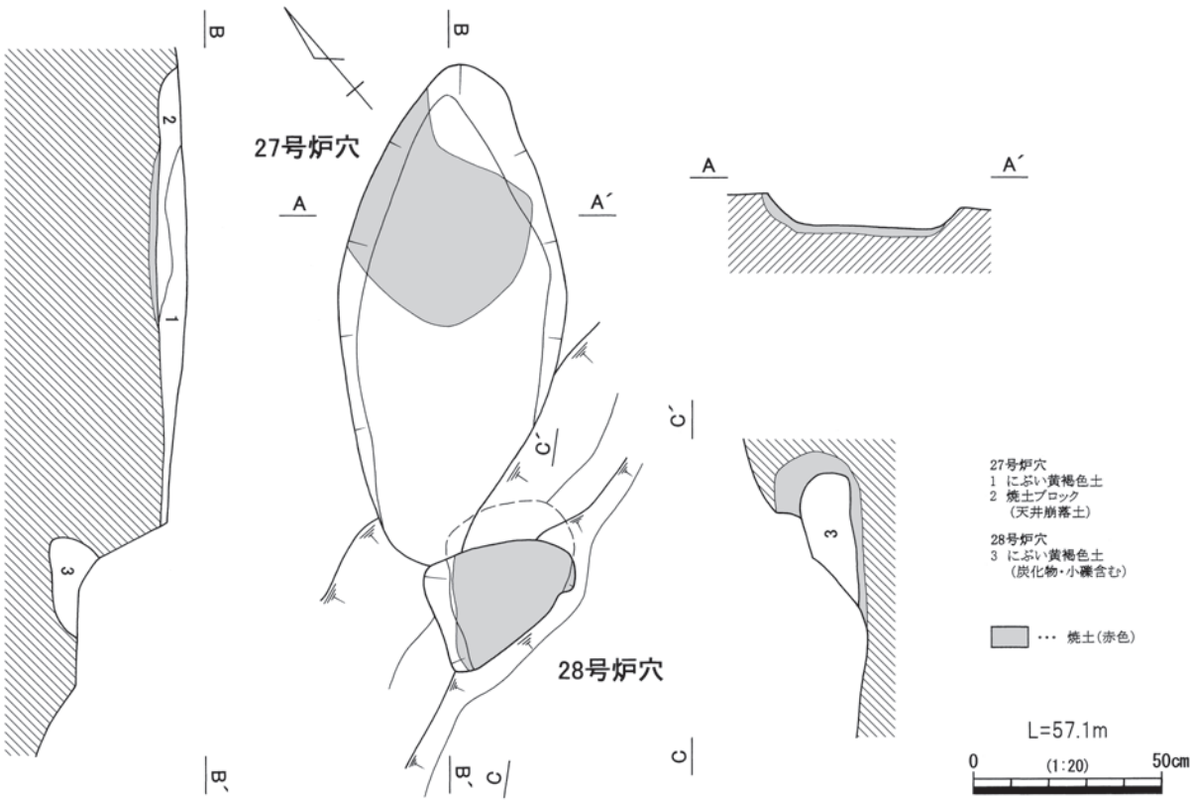


図 30　27・28 号炉穴実測図

27 号炉穴（図 29・30）

26 号炉穴の南側に隣接する。主軸は北東－南西方向で、煙道は北東側につく。第１検出面から約 115 ㎝下方で検出されており、床面近くでかろうじて検出されたような状態である。西側は、第１検出面からの掘り下げ作業で失われている。

燃焼部は長さ 60 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状となっている。床面の中央と北側の側壁で赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分でも２㎝程度しかない。焼土の検出されていない南側の側壁に関しては、掘り過ぎにより失われた可能性も考えられる。第１検出面から床面までの深さは、125 ㎝である。前庭部には、長さ 60 ㎝・幅 45 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は、大きく２層に分けられている。このうち下層にあたる第２層に関しては、調査時には天井の焼土が崩落した土層と認識しているが、床面と崩落土が混在している可能性もある。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9480 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

28 号炉穴（図 29・30）

27 号炉穴の前庭部に位置する。大半が第１検出面からの掘り下げ作業で失われており、部分的に把握できた程度である。主軸の方向も明確でないが、側壁の状態などからみると、主軸は北西－南東方向で、燃焼部の奥が検出されている状態と推測される。

燃焼部は、長さ 40 ㎝・幅 45 ㎝が残存するのみである。床面と側壁には赤化した焼土面が確認でき、厚さは最も厚い部分で７㎝程である。第１検出面から床面までの深さは、約 155 ㎝と深い。埋土は、地山に近いややくすんだ黄褐色土の単層である。

土器や石器などの遺物は出土していない。

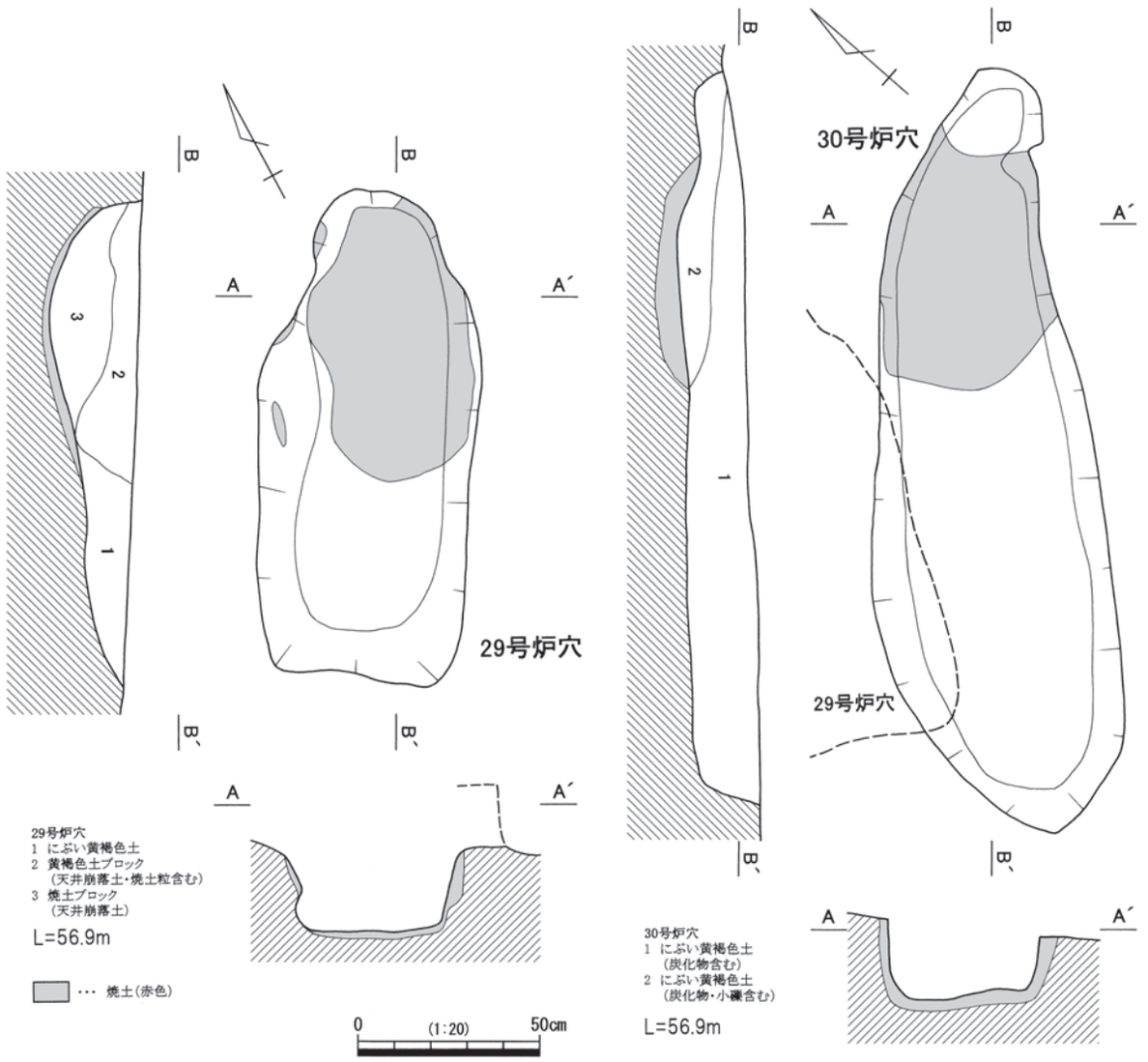


図 31　29・30 号炉穴実測図

29 号炉穴（図 29・31）

27 号炉穴から南東へ約２ｍに位置する。第１検出面から約 130 ㎝下方で検出されている。30 号炉穴と前庭部が重複し、本炉穴が先行している。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がある。

燃焼部は長さ 75 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、西側の側壁に関しては掘り過ぎている可能性が高く、全体的には楕円形に近い形状であったと推測される。床面と東側の側壁の全面には、赤化した焼土面が確認されている。掘り過ぎとみられる西側の側壁では、部分的に焼土面が確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝程度である。第１検出面から床面までの深さは、約 150 ㎝と深い。奥壁は直立気味に立ち上がり、下半には焼土面が確認される。前庭部は、幅 40 ㎝・長さ 40 ㎝程の平坦面が設けられており、緩やかに立ち上がる。埋土は大きく３層に分けられており、燃焼部には崩落した天井（第２・３層）が検出されている。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9670 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

30 号炉穴（図 29・31、図版９）

29 号炉穴の南側に前庭部を一部接する位置にある。29 号炉穴と角度をやや異にしているが、主軸は北東－南西方向であり、煙道は北東側につく。第１検出面から約 110 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模である。奥が小穴状に広がっており、調査時には炉穴の一部として認識しているが、その部分だけ焼土面が欠失しており、掘り過ぎである可能性が高い。全体的には卵形に近い形状であったと推測される。その部分を除き、床面と側面の全面には、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約７㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 130 ㎝である。奥壁は、直立気味に立ち上がっていたものと推測される。前庭部は、幅 50 ㎝・長さ 115 ㎝程の長大な平坦面を設け、端は直立気味に立ち上がっている。埋土は、含有物の違いによって大きく２層に分けられているが、いずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。

遺物としては、埋土から剝片が１点出土しているのみである。なお、埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9520 ± 50 yrBP という結果が得られている。

31 号炉穴（図 29・32）

30 号炉穴から南東へ約２ｍに位置する。２基の炉穴が接合した状態で検出されている。２基の境は明確でないが、くびれている部分より手前を 31 号炉穴①、奥を 31 号炉穴②とする。いずれも第１検出面から 70 ㎝下方で検出されている。

①は長さ 60 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、燃焼部の一部が検出されている。主軸は南－北方向で、煙道は北側となる。床面と側壁のほぼ全面で、赤化した焼土面が確認されている。厚さは、最も厚い部分で約５㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 125 ㎝である。奥で②とつながっており、奥壁の立ち上がりの状況については不明である。埋土は第１層によって②とともに埋没しており、天井の崩落土は確認されていない。崩落土を除去した後、奥壁付近から横穴を穿ち、新たに②を築造している様子がうかがえる。

②はほぼ全体が検出されている。主軸は北東－南西方向で、①とはやや軸が異なっている。煙道は北東側となる。燃焼部は長さ 120 ㎝・最大幅 65 ㎝で、奥に向かって直線的に幅が狭まる二等辺三角形に近い形状である。焚口部分で幅を少し狭め、①の跡を前庭部として利用している。全面で赤化した焼土面が検出されており、中央付近の床面と側壁には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が６㎝、橙化面が２㎝程となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 140 ㎝である。奥壁は、やや斜めではあるが、ほぼ直立に近い状態で立ち上がっている。埋土は含有物の違いから大きく２層に分けられているが、いずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9570 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器といった遺物は出土していない。

32 号炉穴（図 29・32）

31 号炉穴から南東へ約 1.5 ｍに位置する。主軸は北東－南西方向で、煙道が北東側につく。第１検出面から約 70 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、床面の焼土を基準とすると、長さ 60 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模となる。ただし、奥壁から 120 ㎝程の場所にも、側壁の一部に焼土面が検出されており、掘り過ぎ等により焼土面が失われている可能性がある。土層断面に記録されている焼土（第２層）も、床面と崩落土が混在したものであろう。実際は、燃焼部が長さ 110 ㎝・最大幅 80 ㎝、前庭部が長さ 70 ㎝・幅 80 ㎝程度の規模と推測される。

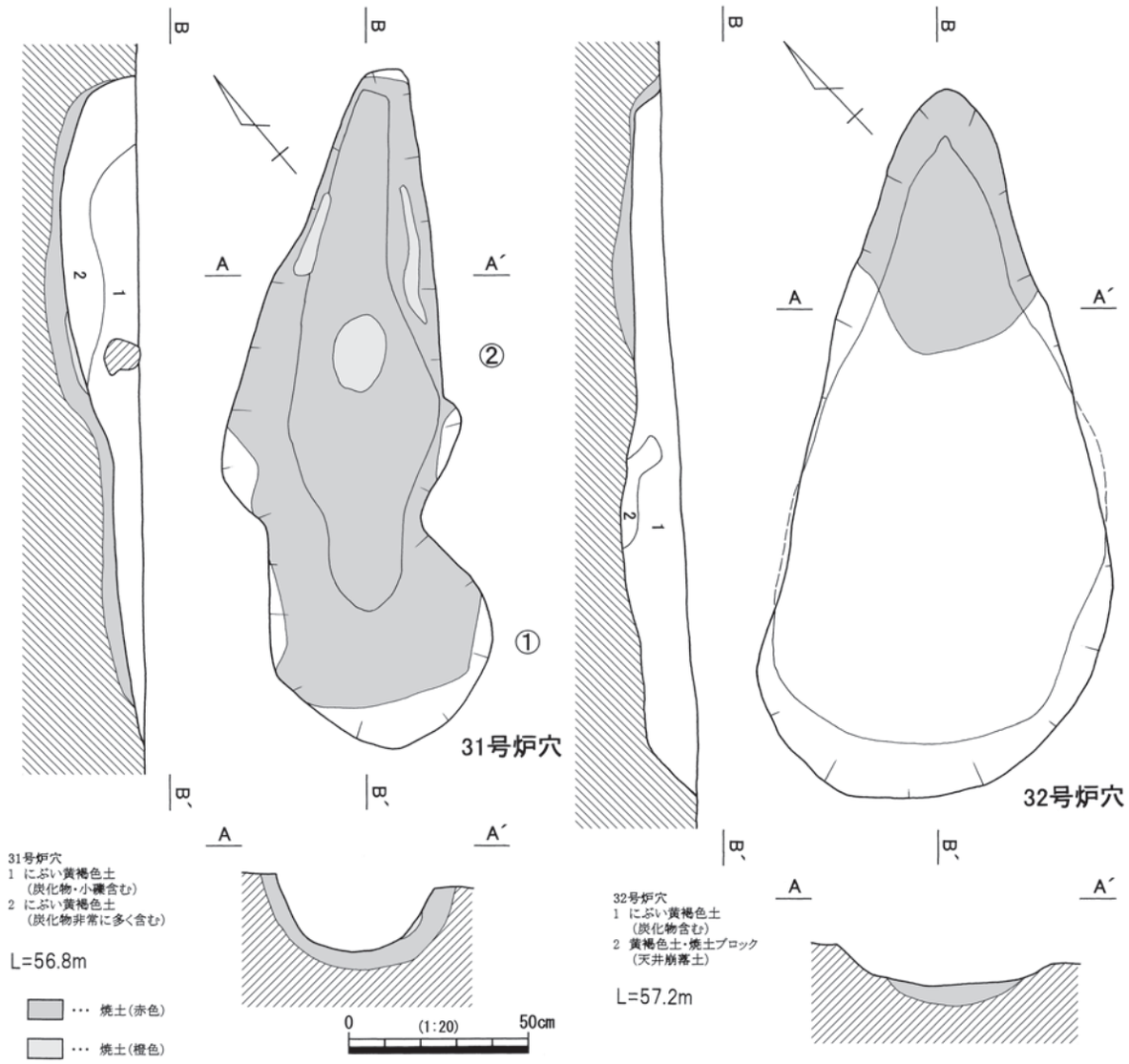


図 32　31・32 号炉穴実測図

第 1 検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝である。

埋土中から出土した炭化物について、C 14 年代測定を実施しており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

33 号炉穴（図 29・33）

32 号炉穴から南へ約 2 ｍに位置する。検出できたのは、燃焼部の一部のみである。主軸は明確でないが、周辺の炉穴と同様に北東－南西方向であろう。第 1 検出面から 110 ㎝程下方で検出されている。

燃焼部は、残存する部分で長さ 70 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模である。床面と側壁の全面で赤化した焼土が検出されており、中央やや手前寄りに一部橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 11 ㎝、橙化面が約 2 ㎝と比較的厚い。第 1 検出面から床面までの高さは、約 120 ㎝である。奥壁は斜め上方へ立ち上がっている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存・崩落は確認されていない。

土器や石器などの遺物は出土していない。

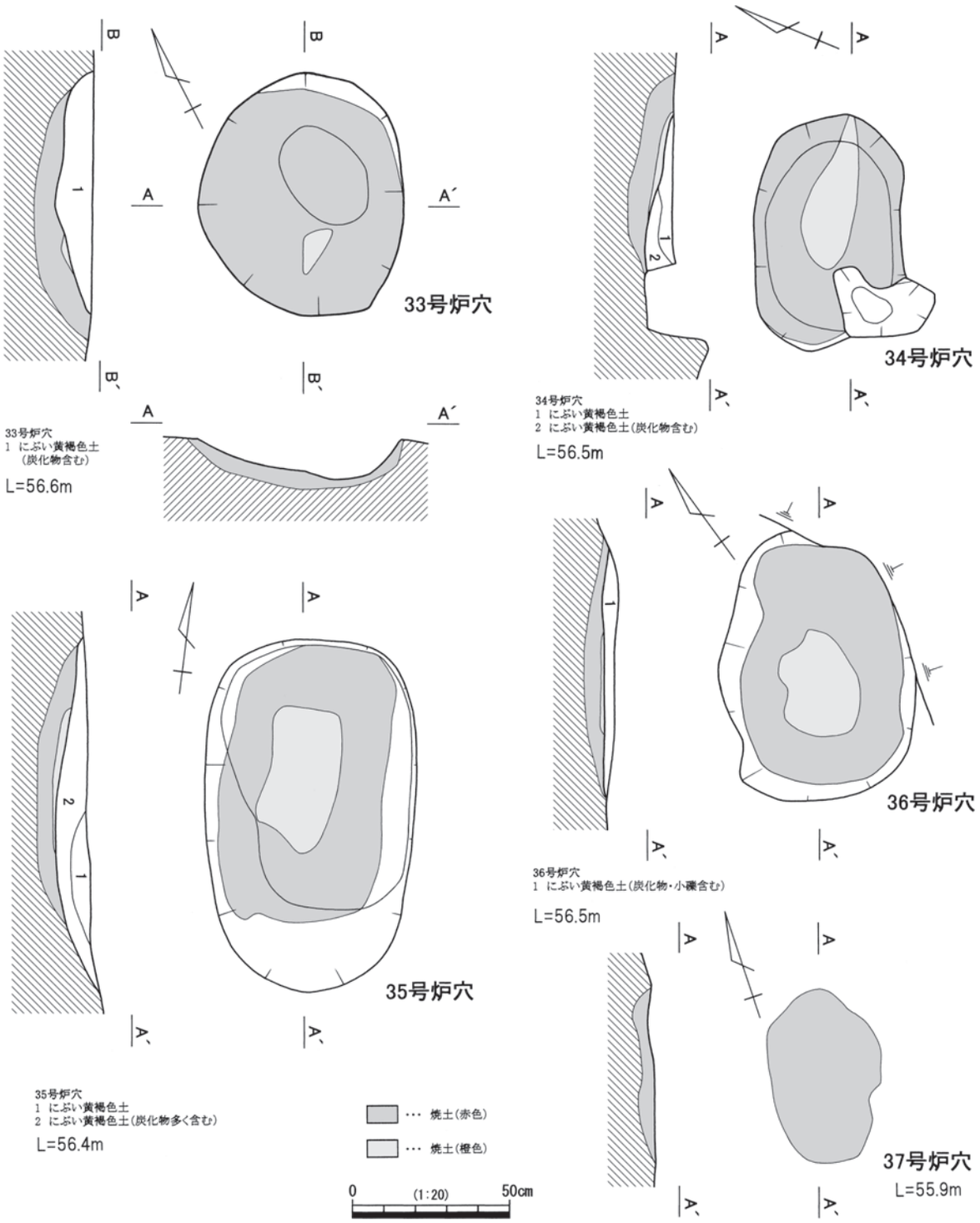


図 33　33 ～ 37 号炉穴実測図

34 号炉穴（図 33・34）

33 号炉穴から南西に約８ｍとやや離れた場所に位置する。燃焼部の一部が確認されている。手前右側に小穴のようなものが記録されているが、調査時の所見によると遺構ではなく、誤って掘り過ぎてしまった部分のようである。主軸は東－西方向で、東側が煙道となる。第１検出面から約 115 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 65 ㎝・最大幅 45 ㎝が残存する。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央奥寄り

には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 135 ㎝である。奥壁と前庭部は検出されていない。埋土は、含有物の違いから大きく２層に分けられているが、いずれも基本的にはややくすんだ黄褐色土である。天井の崩落土は確認できない。

遺物は、埋土中から剥片が１点出土しているのみである。埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9650 ± 50 yrBP という結果が得られている。

35 号炉穴（図 33・34）

34 号炉穴から約 10 ｍ南東に位置する。主軸は南－北方向で、北側が煙道となる。第１検出面より 85 ㎝程下方で検出されている。

燃焼部は長さ 90 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、長方形に近い形状となっている。検出面付近を除き、床面と壁面には赤化した焼土面が検出されており、床面中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約２㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 100 ㎝である。前庭部は平坦面がほとんどなく、緩やかな斜面となっている。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的にはいずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土であり、天井の残存や崩落は確認されていない。

土器や石器などの遺物は出土していない。

36 号炉穴（図 33・34）

34 号炉穴から３ｍ南に位置する。主軸は北東－南西方向であり、北東側に煙道がつく。第１検出面より約 115 ㎝下方で検出されており、東側の隅は掘り下げ作業の際に失われている。焼土面が確認され

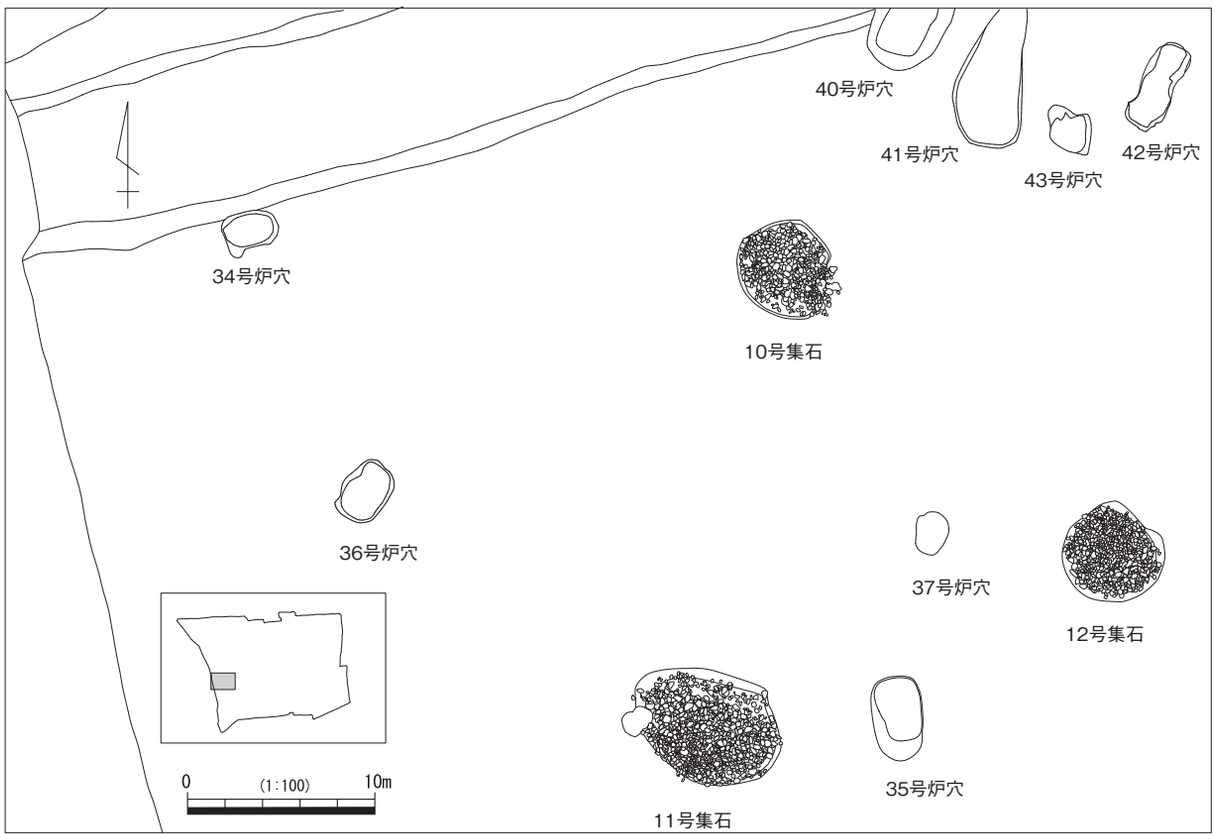


図 34　34 ～ 37 号炉穴配置図

たことにより、燃焼部の床面付近で辛うじて検出することができた。

燃焼部は長さ 85 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で残存する。大半が失われているため不明瞭ではあるが、楕円形に近い形状であろう。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前側には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は１㎝程度である。第１検出面から床面までの深さは、約 120 ㎝となっている。埋土は、床面から４～５㎝程度が残るのみであり、天井の痕跡は確認されていない。

土器や石器などの遺物は出土していない。

37 号炉穴（図 33・34）

35 号炉穴から約 1.5 ｍ北に位置する。第１検出面から約 145 ㎝下方で、床面とみられる焼土面のみが検出されている。主軸の方位は明確でないが、焼土の形状や立ち上がりから、南－北方向と推測される。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 55 ㎝・幅 35 ㎝の楕円形である。厚さは、最も厚い部分で約５㎝である。遺物は出土していない。

38 号炉穴（図 29・35）

33 号炉穴から東へ約１ｍに位置する。第１検出面から約 70 ㎝下方で検出されている。東側の 39 号炉穴の前庭部と切り合う位置関係にあるが、39 号炉穴の前庭部よりも低い高さで検出されているため、調査の段階で切り合い関係については確認できていない。２基の炉穴が連結した状態で検出されており、全体の中央付近の焼土の断面が立ち上がる所を境にして、手前側を 38 号炉穴①、奥側を 38 号炉穴②とする。いずれも主軸は北東－南西方向で、煙道は北東側である。

①については、燃焼部と前庭部が確認されている。燃焼部は最大幅 50 ㎝・現存長約 60 ㎝の規模である。奥壁が②の築造により失われているため、実際はもう少し長かったものと推測される。床面の全面に赤化した焼土面が検出され、中央から奥にかけて橙化面も確認される。側壁に焼土は確認されておらず、②の築造時にすでに崩落していたか、掘り広げられたものと推測される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝である。前庭部には、長さ 50 ㎝・幅 50 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は単層で、②とともに埋没している。天井の崩落土が確認されていないことから、崩落土を除去した後、奥壁から横穴を穿つ形で②が築造されたものと推測される。

②はほぼ全体が検出されている。燃焼部は長さ 105 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、全体的には二等辺三角形に近い形状である。奥側の一部を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央付近には橙化面も確認できる。床面の奥側は部分的に焼土を欠いているが、側壁には焼土面が検出されており、掘り過ぎによって失われている可能性も考えられる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝である。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。前庭部は①の跡を再利用している。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層であり、天井の細片とみられる焼土粒を部分的に含んでいる。大規模な天井の崩落は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9620 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器といった遺物は出土していない。

39 号炉穴（図 29・35、図版９）

38 号炉穴の西側に位置し、前庭部で 38 号炉穴と切り合う位置関係にある。前述のように、検出面が異なるため、調査段階で切り合い関係は把握されていないが、記録通りに前庭部の輪郭が存在したとす

れば、39 号炉穴が後出するといえる。主軸は東－西方向であり、東側に煙道をもつ。第 1 検出面から 55 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 115 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、煙道に向かって急激に狭くなる二等辺三角形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出され、中央付近には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が 7 ㎝、橙化面が 4 ㎝である。第 1 検出面から床面までの高さは、約 75 ㎝となっている。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。前庭部には、長さ 40 ㎝・最大幅 70 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく 4 層に分けられており、天井の崩落土（第 3 層）が確認されている。崩落した天井には、焼土面も遺存しており、塊の状態で崩落していることがわかる。

埋土中出土の炭化物について C 14 年代測定を実施しており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器といった遺物は出土していない。

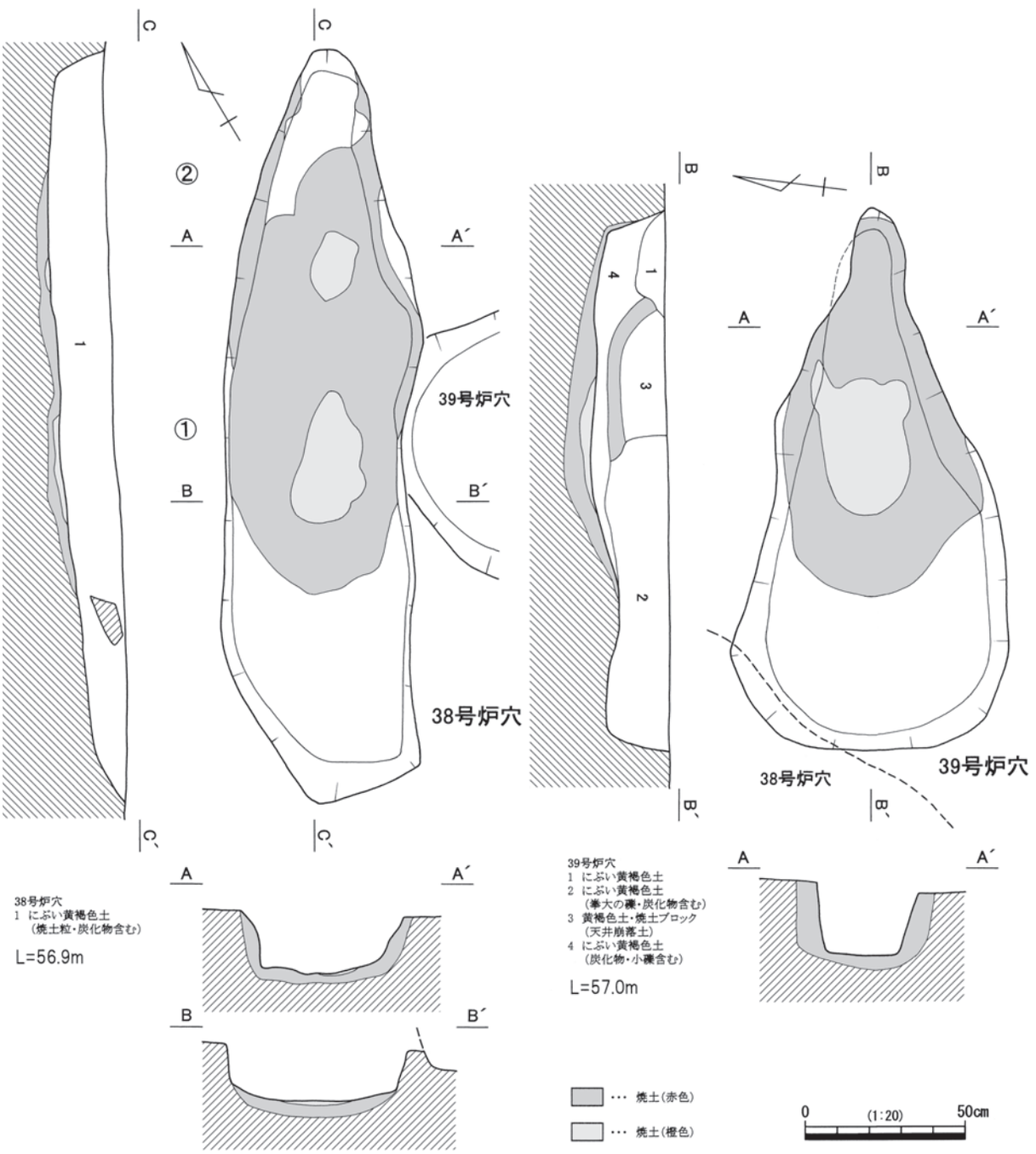


図 35　38・39 号炉穴実測図

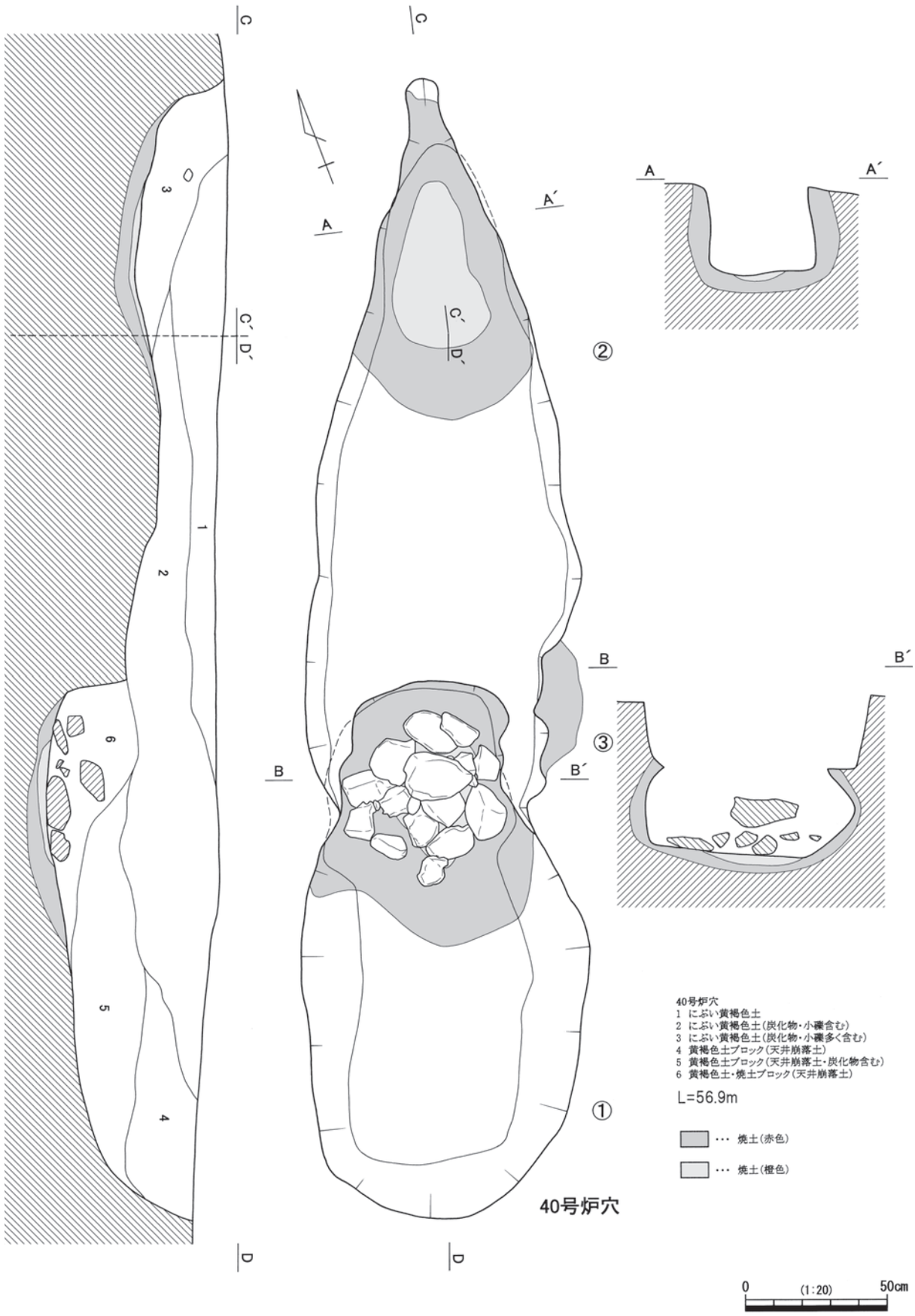


図 36　40 号炉穴実測図

40 号炉穴（図 29・36、図版 10）

39 号炉穴から約２ｍ南東に位置する。２基の炉穴が結合する状態で検出されているため、手前側を 40 号炉穴①、奥側を 40 号炉穴②とする。また、検出面において別の焼土面が検出されており、それについては 40 号炉穴③とする。いずれも、第１検出面から約 60 ㎝下方で検出されている。

①は②の前庭部よりも深くなっており、天井は欠くもののほぼ全体が確認できる。燃焼部は長さ 90 ㎝・最大幅 90 ㎝の規模で、奥壁の幅はやや広いものの、全体としては二等辺三角形に近い形状となっている。全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面が約３㎝ある。第１検出面から床面までの深さは、約 115 ㎝である。奥壁は、ほぼ直立する状態で立ち上がる。前庭部には、幅 60 ㎝・長さ 75 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられており、このうち燃焼部に堆積する第６層は、天井の崩落土である。前庭部側にみられる第４・５層は、天井の崩落土か②を築造した際の排土と推測される。最上層の第２層は、②の前庭部と共通する埋土である。①の天井の崩落後、奥壁側から②を築造し、①を埋め立てて②の前庭部をつくり出している様子がうかがえる。

②の燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、全体は二等辺三角形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央部には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。前庭部は、前述のように①を埋め立てて、幅 40 ㎝・長さ 180 ㎝の広い平坦面を設けている。埋土は大きく３層に分けられており、天井の残存や崩落は確認されない。

③は、幅 15 ㎝・長さ 50 ㎝の範囲で焼土面が検出されているのみである。②を掘り下げた後に発見されており、②との切り合い関係については不明である。②の埋没後に設けられた炉穴の可能性もある。

②の燃焼部の中央付近の床面からは、20 ㎝程度の大きさの礫が集められた状態で出土している。いずれの礫にも、被熱の痕跡が確認されている。橙化面の位置とも一致しており、礫の上で燃料が燃やされた可能性が高い。13 号炉穴と同様に、ほぼ炉穴の使用時の状態を残す事例として注目できる。

遺物としては、②の上層（２層）から剥片が３点出土しているのみである。なお、埋土から出土した炭化物のうち３点ついて、Ｃ 14 年代測定を実施している。①から出土したものは 9450 ± 50 yrBP と 9630 ± 50 yrBP、②から出土したものは 9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。

41 号炉穴（図 37・39）

40 号炉穴の東側に隣接する。第１検出面から約 50 ㎝下方において、焼土面が検出されたことにより存在が確認された。焼土面の広がりから、主軸は南－北方向と推定される。

燃焼部の床面とみられる赤化した焼土面は、長さ 65 ㎝・最大幅 40 ㎝の範囲で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約８㎝となっている。土器や石器などの遺物は出土していない。

42 号炉穴（図 37・39）

41 号炉穴から東へ約２ｍに位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道をもつ。第１検出面より約 75 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 95 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、全体は長方形に近い形状となっている。奥側を除く床面と側壁で赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前寄りには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは約 110 ㎝となっている。奥壁はほぼ直立しているが、天井崩落土の焼土と混同して掘り過ぎている可能性もある。前庭部としては、長さ 60 ㎝の平坦面が設けられている。別の遺構が存在すると誤認して掘

削されているため、幅については不明瞭ではあるが、燃焼部よりやや広がるか同程度の規模と推測される。埋土は大きく３層に分けられており、燃焼部の上面には天井の崩落土が確認できる。

埋土中（第３層か）から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9440 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

43 号炉穴（図 37・39）

42 号炉穴の南西側に隣接し、第１検出面より約 90 ㎝下方で検出されている。燃焼部の一部が残るのみである。南側の幅がやや広いことから、南－北方向を主軸とし、北側が煙道になると推測される。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 50 ㎝・最大幅約 45 ㎝の規模で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝である。床面からは 10 ～ 20 ㎝程の礫が出土している。被熱の痕跡が確認されており、炉穴の使用時に用いられたものとみてよい。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9590 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

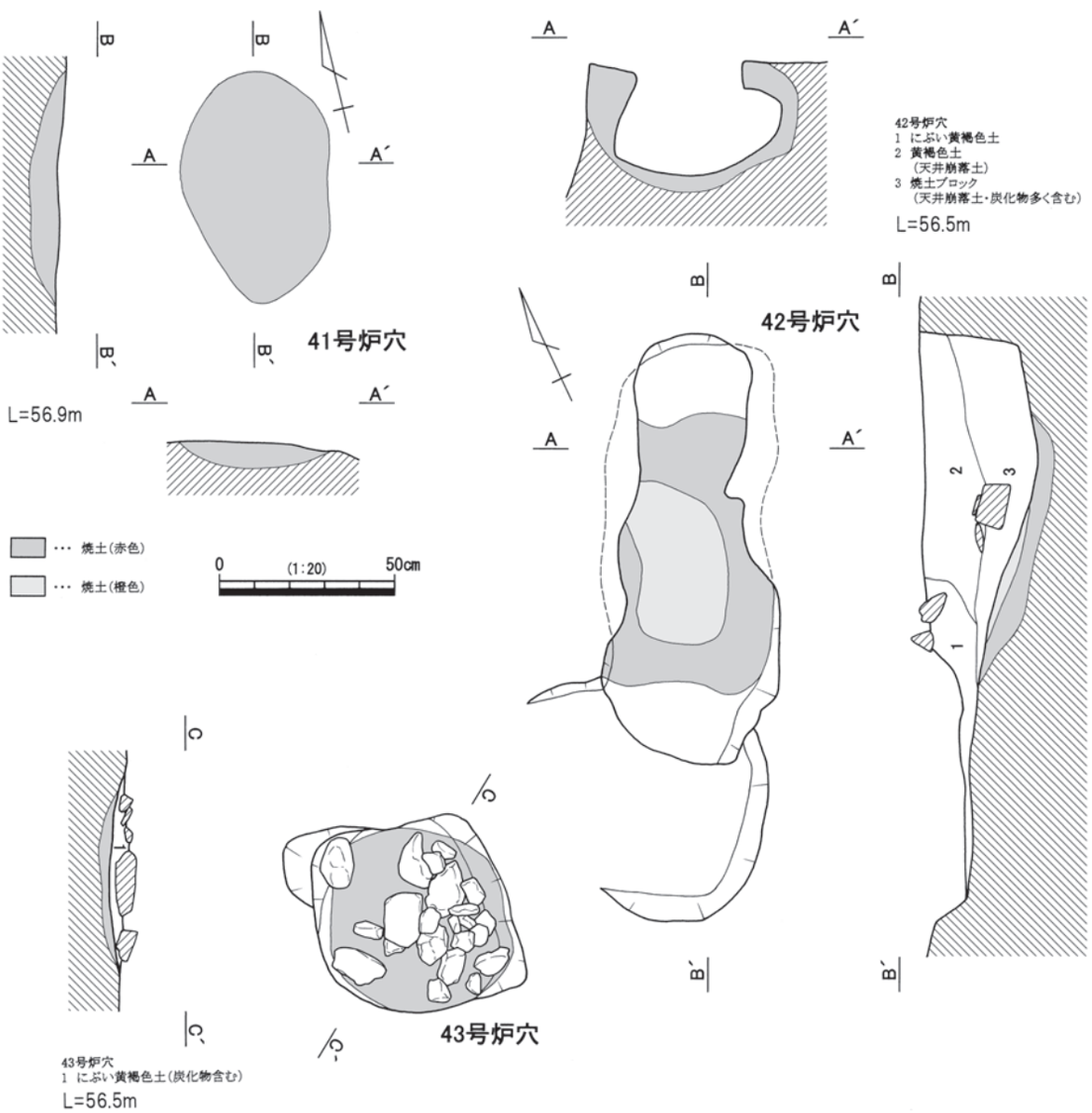


図 37　41 ～ 43 号炉穴実測図

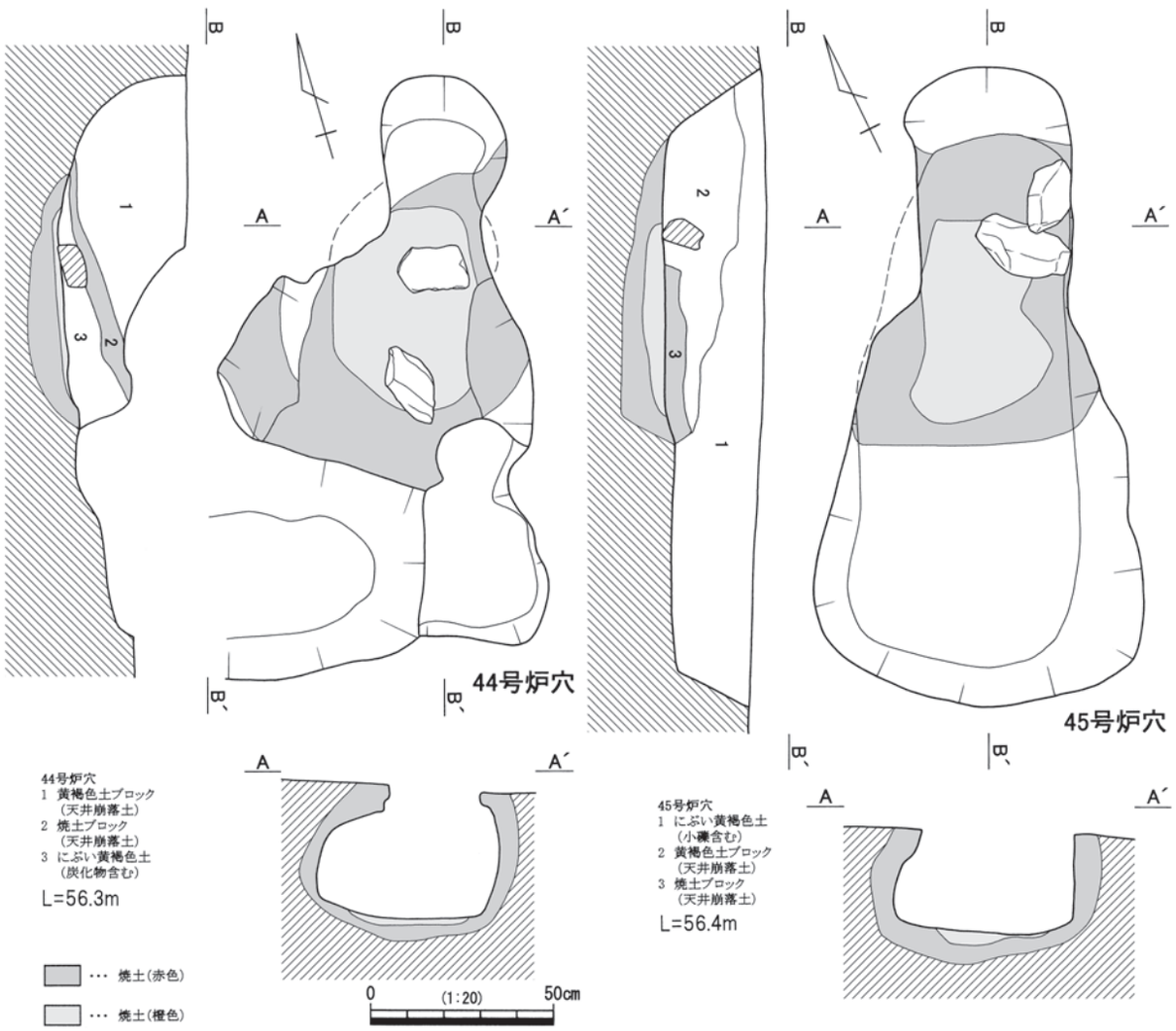


図 38　44・45 号炉穴実測図

44 号炉穴（図 38・39、図版 10）

43 号炉穴から約 4 m南東に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第 1 検出面より約 85 ㎝下方で検出されており、南側は掘り下げ作業の際に失われている。

燃焼部は長さ 100 ㎝・最大幅 85 ㎝の規模で検出されており、全体的には二等辺三角形に近い形状である。奥壁と側壁の一部を除き、赤化した焼土面が検出されている。床面の中央やや奥寄りには、橙化した焼土面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 9 ㎝、橙化面が約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 115 ㎝となっている。奥壁は、やや湾曲しながらほぼ直立気味に立ち上がる。埋土は大きく 3 層に分けられており、天井の崩落土（第 1 ・ 2 層）が確認されている。

床面の中央部からは、礫が 2 個出土している。いずれも被熱していることから、炉穴の使用時に用いられたものである可能性が高い。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、測定の結果 9560 ± 50 yrBP という値が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

45 号炉穴（図 38・39、図版 10）

44 号炉穴の南東側に隣接して位置する。44 号炉穴と同様に、主軸は北東－南西方向で、北東側が煙

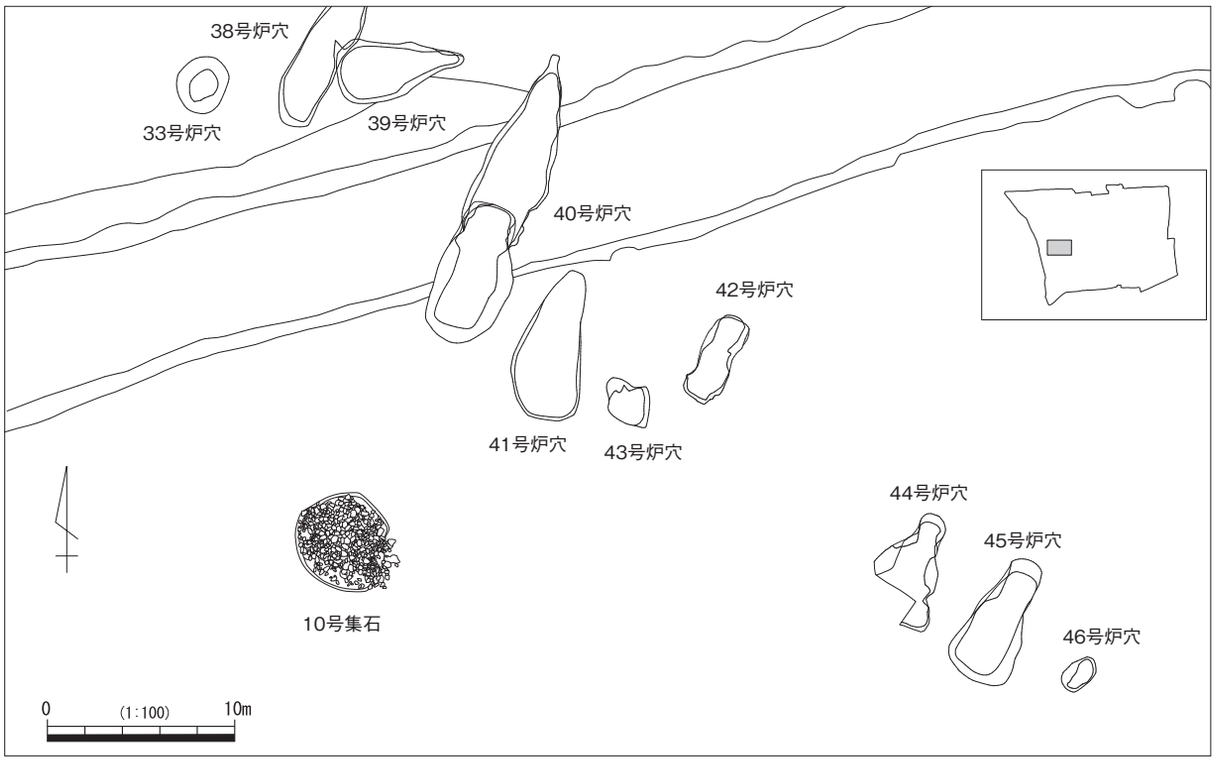


図 39　41 ～ 46 号炉穴配置図

道となる。第１検出面より約 70 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 85 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、奥壁がやや幅広ではあるが、全体的には二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前側には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が 12 ㎝、橙化面が６㎝と全体的に厚い。第１検出面から床面までの高さは、約 95 ㎝となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がっており、焼土面は検出されていない。前庭部には、長さ 60 ㎝・幅 60 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は、大きく３層に分けられている。床面上に天井崩落土（第２・３層）の存在が確認されており、使用中または使用直後に天井が崩落している様子がうかがえる。

燃焼部の奥壁付近の床面からは、長さ 30 ㎝程の大型の礫が２個出土している。いずれも被熱の痕跡が認められており、炉穴の使用時に用いられた礫である可能性が高い。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9520 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

46 号炉穴（図 39・40）

45 号炉穴の南東に隣接する。第１検出面より約 110 ㎝下方において、燃焼部の一部が検出されている。掘り下げる過程において、焼土が検出されたことにより、辛うじて存在が把握できており、炉穴の大半は失われている。主軸の方位は明確でないが、隣接する 44・45 号炉穴と同様に、北東－南西方向であると推測される。

燃焼部は大部分が失われているが、長さ 45 ㎝・幅 30 ㎝の楕円形に近い形状で検出されている。部分的に欠いてはいるが、赤化した焼土面が確認されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約５㎝である。埋土は、炭化物の有無により２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存・崩落は認められない。土器や石器などの遺物は出土していない。

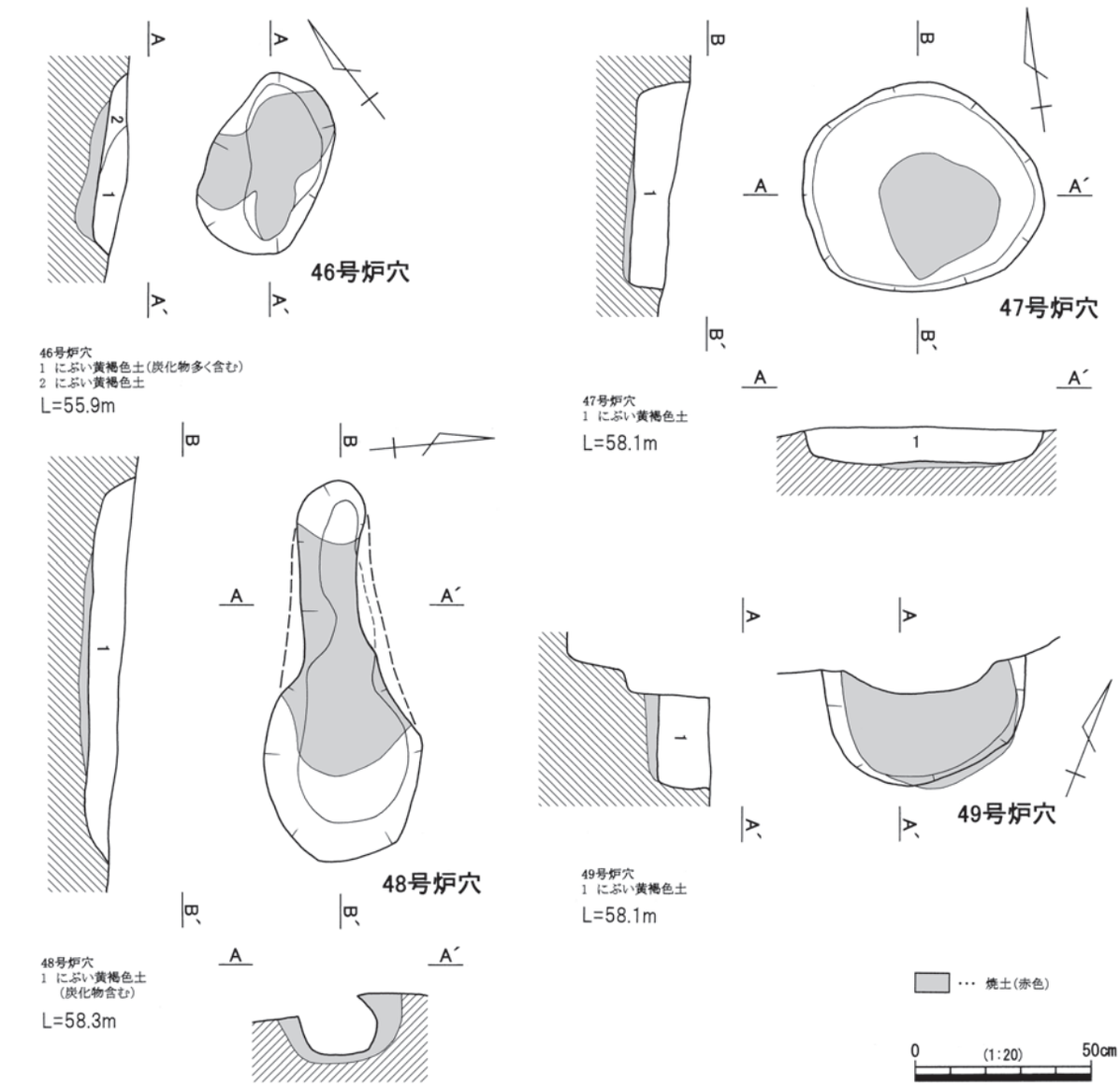


図 40　46 ～ 49 号炉穴実測図

47 号炉穴（図 40・41）

３号炉穴から約８ｍ北東に位置する。第１検出面において検出された倒木痕の底部において、焼土面の存在が確認されている。焼土面の確認のみで調査を終えているため不明な点も多く、炉穴ではない可能性もあるが、一応炉穴の燃焼部の痕跡としてとらえておく。

赤化した焼土面は、直径 35 ㎝程の範囲で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分でも２㎝程と薄い。第１検出面から床面までの深さは、約 10 ㎝である。

48 号炉穴（図 40・41）

47 号炉穴から約１ｍ南西に位置する。主軸は東－西方向で、煙道は西側につく。第１検出面において検出されている。

燃焼部は長さ 80 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模であり、全体的には二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面で赤化した焼土が検出されている。焼土の床面の厚さは２㎝程であるが、側壁の上部では最も厚い部分で約８㎝ある。第１検出面から床面までの深さは、約 10 ㎝となっている。中央付近の

断面図から、床面から天井までの高さは 20 ㎝程度と推定される。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。前庭部には、長さ 10 ㎝・幅 30 ㎝程の平坦面しか確認できない。作業スペースとしては狭小であり、検出面より上方に平坦面が確保されていたものと推測される。埋土は地山に近似する黄褐色土の単層であり、残存・崩落した天井は確認できなかった。土器や石器などの遺物は出土していない。

49 号炉穴（図 40・41）

48 号炉穴から３ｍ南側に位置する。北側は攪乱により失われている。第１検出面で検出されており、攪乱の壁面に焼土面がみられたことから存在が確認された。焼土が立ち上がる南東側が側壁にあたるとみられ、主軸は北東－南西方向と推測される。壁面が直立気味に立ち上がる形で掘られているが、焚口側となる北東または南西側については、調査時に掘り足りていない可能性が高い。

焼土面は、東西 55 ㎝・南北 25 ㎝の範囲で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝である。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。第１検出面から床面までの深さは 15 ㎝である。土器や石器などの遺物は出土していない。

50 号炉穴（図 41・42）

49 号炉穴から北西へ２ｍに位置する。焼土面が２ヶ所で確認されていることから、手前側を 50 号炉穴①、奥側を 50 号炉穴②とする。主軸は北西－南東方向で、北西側が煙道となる。第１検出面から約 20 ㎝下方で検出されている。

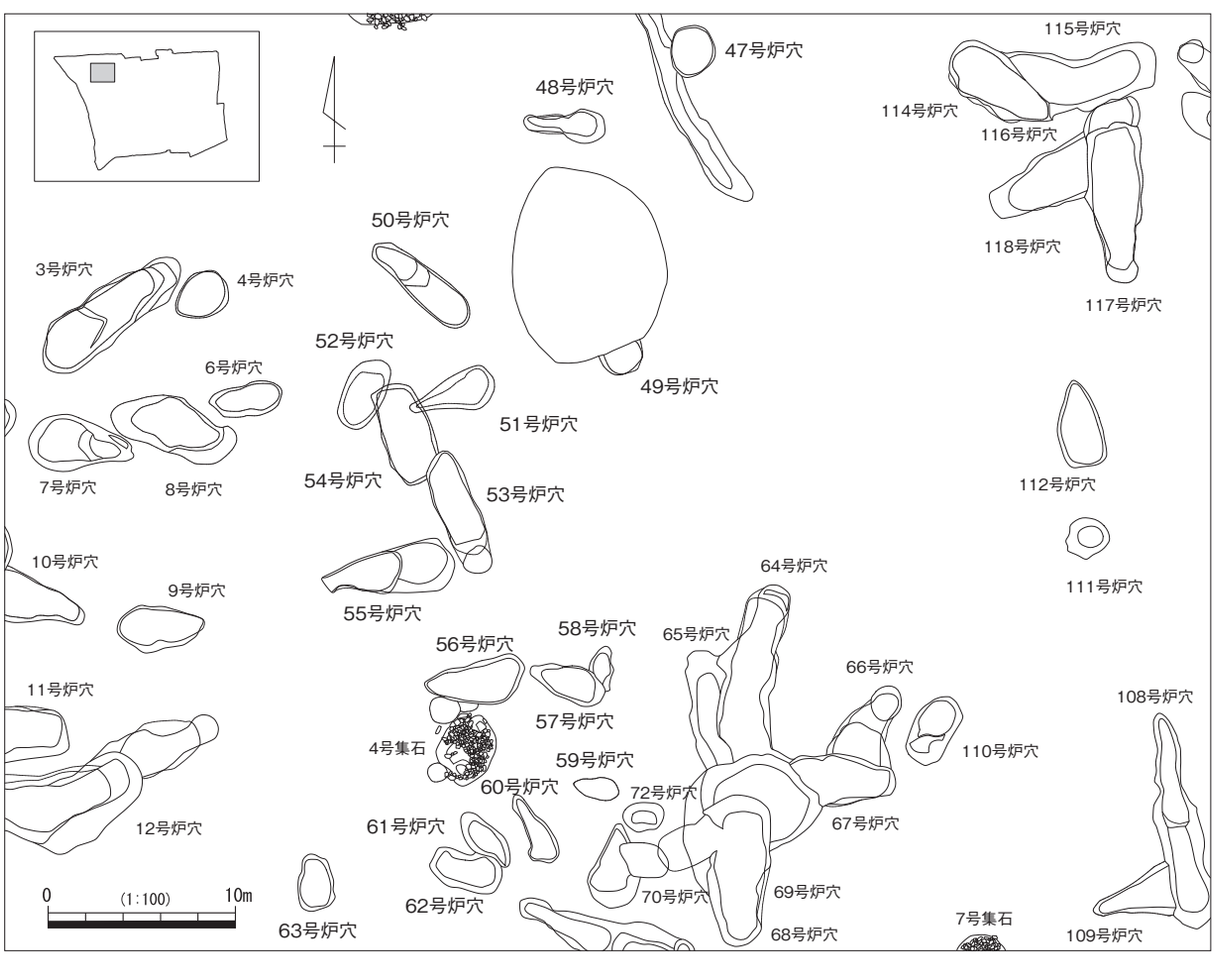


図 41　47 ～ 63 号炉穴配置図

①の燃焼部は、長さ 45 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で検出されている。床面と側壁の全面に赤化した焼土が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分でも約２㎝と全体的に薄い。第１検出面から床面までの高さは、約 30 ㎝である。奥壁の立ち上がりがなく②とともに埋没していることから、①の天井が崩落した後、崩落土を除去し、奥に向かって②が築造されていることがわかる。

②の燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で検出されており、全体的には楕円形に近い形状であ

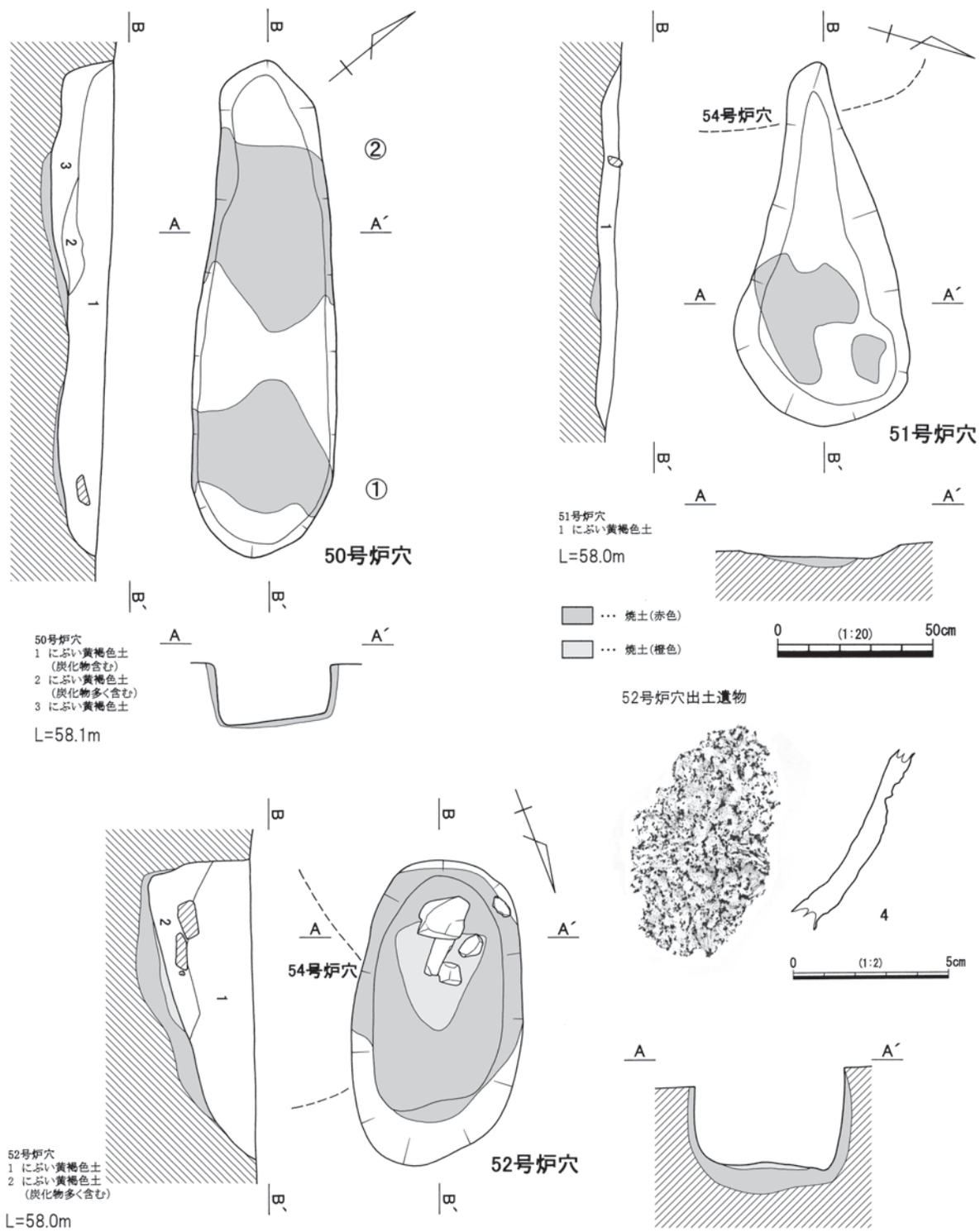


図 42　50 ～ 52 号炉穴実測図・出土遺物

る。奥側を除き、床面と側壁には赤化した焼土面が確認されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約３㎝となっている。第１検出面から床面までの高さは、約 35 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がり、①の跡を前庭部として利用している。埋土は、含有物の違いから大きく３層に分けられているが、基本的に地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9520 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

51 号炉穴（図 41・42）

50 号炉穴から南へ約１ｍに位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。焼土が検出されたことにより、辛うじて炉穴の存在が確認できた。位置的には、奥壁付近が 54 号炉穴と重なる。54 号炉穴は、51 号炉穴の床面から 40 ㎝程下方で検出されており、厳密には切り合い関係は確認できていないが、51 号炉穴の輪郭が検出されていることから、51 号炉穴が後出するものとみられる。

燃焼部は長さ 110 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状となっている。部分的に赤化した焼土が検出されており、厚さは最も厚い部分で３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝である。奥壁の床面付近は、斜め上方へ緩やかに立ち上がる。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。土器や石器などの遺物は出土していない。

52 号炉穴（図 41・42）

51 号炉穴の西側に隣接する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道をもつ。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。54 号炉穴と一部重なる位置関係にあるが、床面よりも 54 号炉穴の検出面の方が低いため、実際には土層などによる切り合い関係は確認できていない。ただし、重なる部分に 52 号炉穴の焼土面が検出されていることから、52 号炉穴が後出するとみてよい。

燃焼部は長さ 95 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。焚口付近を除くほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央奥寄りには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面の最深部までの深さは、約 85 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落は確認できない。

燃焼部の奥側からは、床面から少し浮いた状態で径 10 ㎝程の礫が発見されている。いずれの礫にも、被熱の痕跡は確認されていない。１ヶ所に集中しており、自然に流入するとは考えにくいため、炉穴の使用後（廃絶後）に人為的に入れられた礫であると推測される。

埋土の上層（第１層）からは、縄文土器が出土している。４は胴部の破片であり、外面には撚糸文が施されている。図示したもの以外にも、細片が数点出土している。なお、埋土中から出土した炭化物についてはＣ 14 年代測定を行っており、9420 ± 50 yrBP という結果が得られている。

53 号炉穴（図 41・43、図版 11）

51 号炉穴から約１ｍ南に位置する。54 号炉穴と切り合っており、53 号炉穴が後出することが確かめられている。主軸は南－北方向で、煙道は南側につく。手前と奥で検出面が異なっており、奥は第１検出面から 45 ㎝、手前が 65 ㎝下方で検出されている。２基の炉穴が連結しているため、橙化する焼土面がくびれている付近を境に、手前側を 53 号炉穴①、奥側を 53 号炉穴②とする。

①の燃焼部は、長さ 65 ㎝･最大幅 50 ㎝の規模である。奥壁が失われているため、形状は不明であるが、

幅はほぼ変わらないため楕円形に近い形状と推測される。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥側には橙化面も確認されている。焼土面の最も厚い部分は、赤化面・橙化面ともに6㎝となっている。前庭部は、平面的な検出は不十分であるが、土層断面図から長さ40㎝程の平坦面が設けられていることがわかる。埋土は2層に分けられており、②と共通している。②を築造した際に、①の跡を前庭部として利用していることがわかる。

②の燃焼部は、長さ75㎝・最大幅50㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁の上部を除き、全面で赤化した焼土面が検出されており、中央部には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、①とほぼ同様で、赤化面・橙化面ともに最も厚い部分で約6㎝である。第1検出面から床面の最深部までの深さは、約95㎝である。奥壁は、やや斜め上方へ立ち上がる。煙道は直径30㎝の円形で、床面から天井までの高さは25㎝である。前庭部は、①の燃焼部と前庭部を利用している。天井の崩落土は確認されない。掘り下げ作業により大半を失ってしまったが、天井は残存していたものとみてよい。

埋土の最下層（第2層）から出土した炭化物のC 14年代測定を行っており、9450 ± 50 yrBPという結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

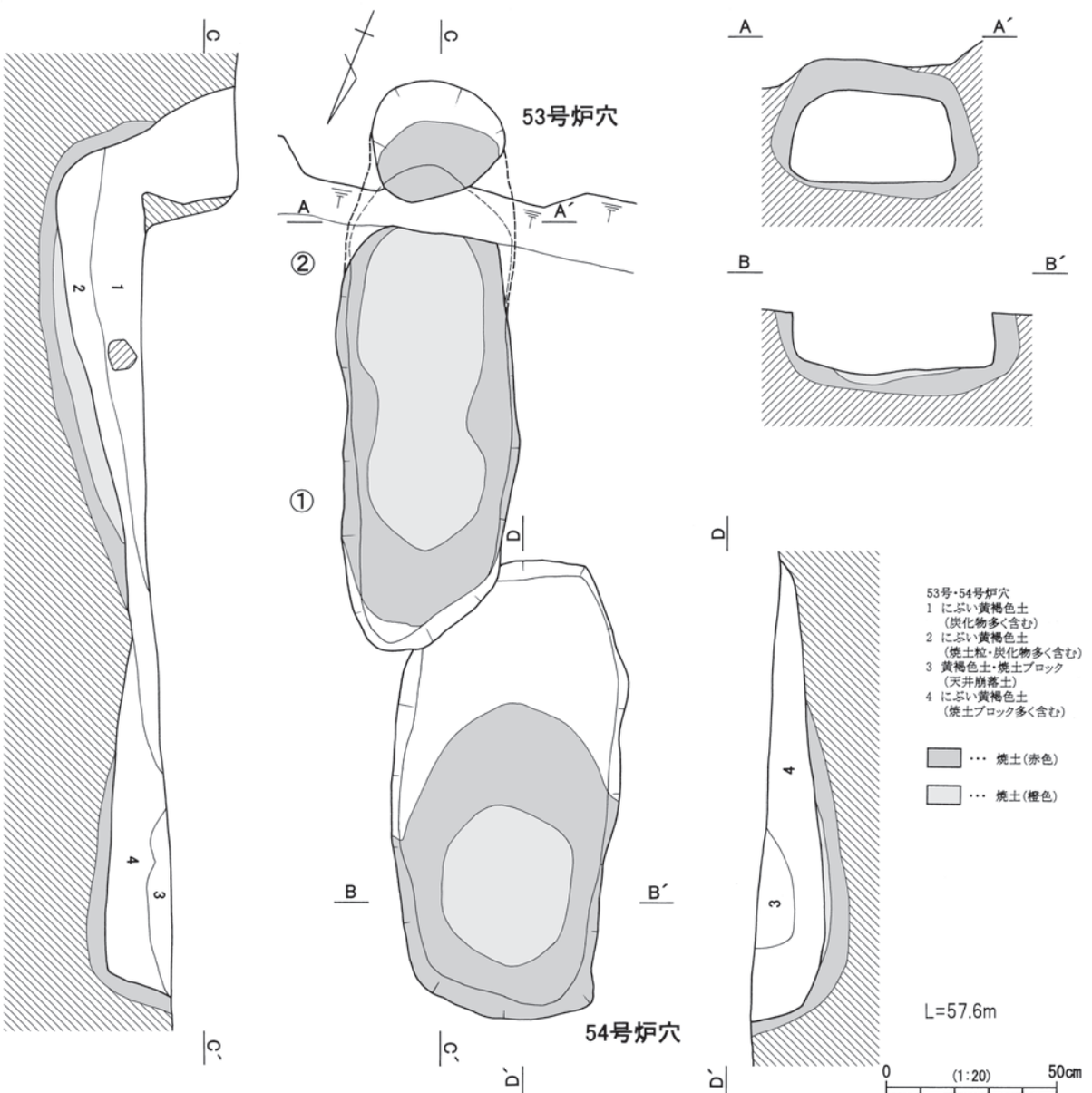


図43　53・54号炉穴実測図

54 号炉穴（図 41・43、図版 11）

53 号炉穴の北側に、一部切り合う状態で隣接している。前述のように、53 号炉穴より先行する炉穴である。主軸は南－北方向で、煙道は北側につく。第１検出面より約 65 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 90 ㎝・最大幅 65 ㎝で、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央部には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝・橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面の深さは、約 90 ㎝となっている。奥壁は直立に近い形で立ち上がる。前庭部には、幅 55 ㎝・長さ 30 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は２層（第３・４層）に分けられているが、いずれも天井の崩落土である。炉穴の使用中か使用直後に大規模に崩落したとみてよい。

遺物としては、埋土中から剝片が１点出土しているのみである。なお、埋土の最下層（第４層）出土の炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。

55 号炉穴（図 41・44）

54 号炉穴から南へ約１ｍに位置し、前庭部が 53 号炉穴の煙道に近接する。２基の炉穴が連結している。中央付近をやや掘り過ぎてしまっているため、不明な部分もあるが、便宜的に掘り過ぎて低くなっているところを境に、手前側を 55 号炉穴①、奥側を 55 号炉穴②とする。主軸はいずれも東－西方向で、西側が煙道となる。第１検出面から約 20 ㎝下方で検出されている。

①の燃焼部とみられる焼土面は、長さ 55 ㎝・幅 50 ㎝の範囲で検出されている。第１検出面から床面までの深さは、約 30 ㎝である。壁面に焼土面が続かないことから、②の築造時に前庭部として幅が広げられている可能性が高い。焼土面の厚さは、最も厚い部分で厚さ４㎝となっている。埋土は２層に分けられており、下層（第２層）には焼土ブロックを含む天井の崩落土が確認されている。上層（第１層）は②と共通しており、同時期に埋没していることがわかる。①の天井崩落土の大半を除去した後、奥へ向かって②が築造され、①の跡は前庭部として利用されたものと推測される。

②の燃焼部は、長さ 65 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形態となっている。奥壁の上部と掘り過ぎている焚口付近を除き、全面で赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、側壁の最も厚い部分で約４㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝である。奥壁は非常に緩い傾斜となるように検出されているが、やや特異な形態であり、掘り過ぎの可能性が高い。実際は、側壁の焼土が切れている付近で、立ち上がっていたものと推測される。前庭部については、前述のように①の跡をやや広げ、長さ 60 ㎝・幅 55 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の崩落土は確認されていない。

１層から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9520 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

56 号炉穴（図 41・44）

55 号炉穴から南東へ約１ｍに位置する。平面的には区別できないが、断面をみると焼土が立ち上がる様子が確認でき、２基の炉穴が連続していることが分かる。明確に区別はできないが、焼土が立ち上がる付近を境に、手前側を 56 号炉穴①、奥側を 56 号炉穴②とする。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面から約 20 ㎝下方で検出されている。

①の燃焼部とみられる焼土面は、長さ 50 ㎝・幅 40 ㎝の範囲で検出されている。北東部が広くなっており、壁面に焼土が認められないことから、②の築造の際にやや広げられている可能性が高い。第１検出面から床面までの深さは、約 30 ㎝である。埋土は単層で②と共通している。遺物は出土していない。

②の燃焼部は、長さ 60 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で確認される。不明瞭ではあるが、全体的には卵形に

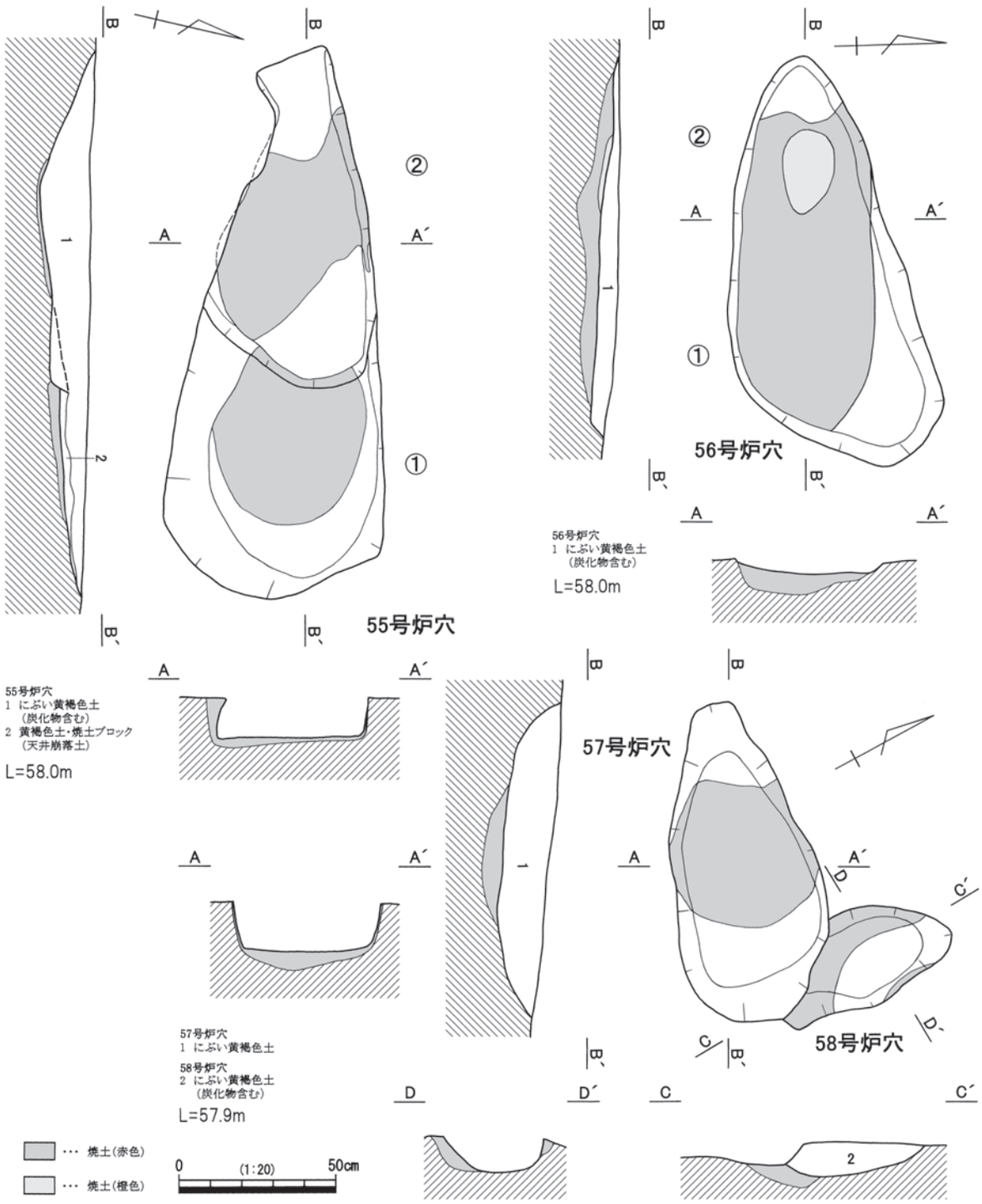


図 44　55 ～ 58 号炉穴実測図

近い形状である。奥側の一部を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央付近には橙化面も確認できる。焼土面は、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 30 ㎝となっている。前述のように①の跡を前庭部として使用しており、長さ 50 ㎝・最大幅 55 ㎝のややいびつな形をした平坦面が設けられている。埋土は、地山に近似したややくすんだ黄褐色土であり、天井の残存や崩落土は確認できない。遺物は出土していない。

57 号炉穴（図 41・44）

56 号炉穴の東側に隣接する。58 号炉穴と切り合っており、58 号炉穴より後出することが確認されている。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 55 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模であり、全体は二等辺三角形に近い形状である。奥壁付近を除く床面と側壁で、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝である。奥壁は湾曲しながら上方へ立ち上がる。前庭部には、長さ 15 ㎝・幅 40 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は単層であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

58 号炉穴（図 41・44）

57 号炉穴と切り合っており、57 号炉穴より先行することが確かめられている。燃焼部の一部のみであるためやや不明瞭ではあるが、主軸は南－北方向で、北側に煙道がつくと推測される。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 40 ㎝・最大幅 30 ㎝の規模で検出されており、南西部は 57 号炉穴によって失われている。一部を除いて床面と側壁には、赤化した焼土面が検出されている。北東部で帯状に焼土がない部分があるが、掘り過ぎてしまった可能性が高い。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝である。埋土は単層で、天井の残存や崩落土は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

59 号炉穴（図 41・45）

57 号炉穴から１ｍ南側に位置する。第１検出面より約 25 ㎝下方において、焼土面のみが検出されている。焼土面の形状から、主軸は東－西方向であると推測される。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 60 ㎝・最大幅 30 ㎝の楕円形である。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝となっている。土器や石器などの遺物は出土していない。

60 号炉穴（図 41・45）

59 号炉穴から南西へ約１ｍに位置する。主軸は北東－南西方向で、煙道は北東側につく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

幅 20 ㎝・長さ 55 ㎝の範囲で、燃焼部の床面と側壁とみられる焼土面が確認されている。ただし、炉穴として掘削されている範囲に比べ、焼土面があまりに狭い。調査所見から、この炉穴については不十分な状態で調査を終えている可能性が高いようであり、焼土面以外の部分については、不確実であると見た方がよい。第１検出面から焼土面までの深さは、約 30 ㎝である。遺物は出土していない。

61 号炉穴（図 41・45）

60 号炉穴の西側に隣接し、62 号炉穴と切り合う。土層の記録がないため、前後関係は不明である。主軸は北西－南東方向で、南西側が煙道となる。第１検出面より 25 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 60 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模であり、全体的には楕円形に近い形状となっている。奥壁側を除き、床面と側壁のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは約 40 ㎝となっている。前庭部には、長さ 15 ㎝・幅 20 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は、地山に近似するややにぶい黄褐色土の単層であり、天井の残存や崩落土は確認できない。土器や石器などの遺物は出土していない。

62 号炉穴（図 41・45）

61 号炉穴の南西側に、一部切り合う形で位置している。第 1 検出面より 25 ㎝下方で検出されている。主軸は東－西方向で、断面で焼土が西側でやや立ち上がっていることから、煙道は西側と推定される。ただし、掘削の範囲に比べて、検出されている焼土面の範囲があまりに狭く、壁面の焼土もほとんどみられないことから、焼土面の周辺に関しては掘り過ぎている可能性が高い。

燃焼部の床面とみられる焼土は、長さ 45 ㎝・幅 25 ㎝の楕円形で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 3 ㎝となっている。第 1 検出面から焼土面までの深さは、約 30 ㎝である。埋土は大きく 2 層に分けられており、下層（第 2 層）には天井の崩落土とみられる焼土ブロックが確認される。量が少ないため、部分的な崩落の痕跡とみてよいであろう。

埋土中から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を行っており、9670 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

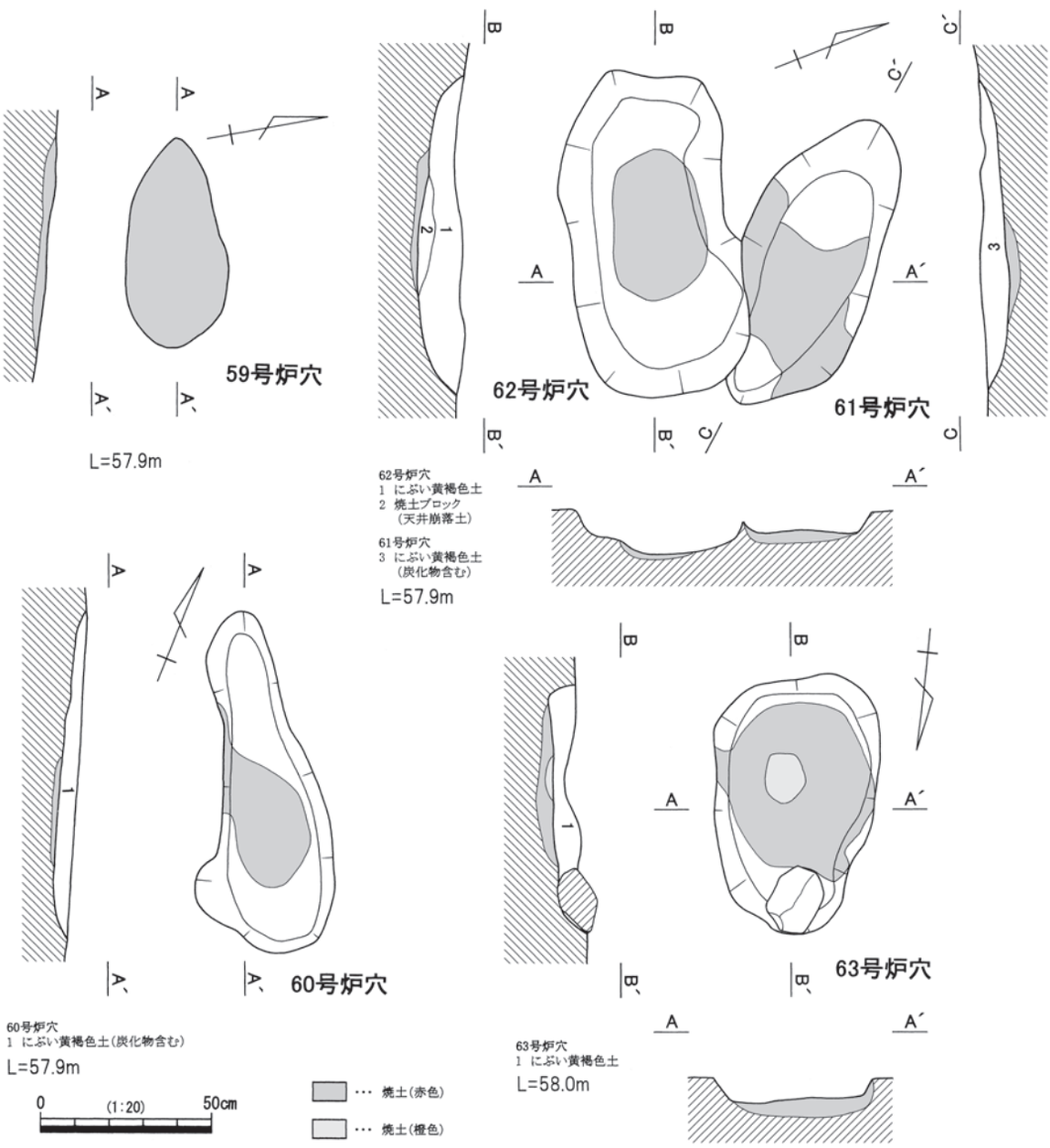


図 45　59 ～ 63 号炉穴実測図

63 号炉穴（図 41・45）

62 号炉穴から 1.5 m西側に位置する。主軸は南－北方向で、煙道は南側につく。第 1 検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 50 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で、全体的には楕円形に近い形状である。床面と側壁のほぼ全面に赤化した焼土が検出されており、中央付近には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部は、長さ 10 ㎝・幅 20 ㎝の平坦面が確認されているが、作業面としてはあまりに狭小であり、検出が不十分であった可能性がある。埋土は単層で、天井の崩落は確認されていない。前庭部からは、20 ㎝程の大きさの礫が出土している。被熱の痕跡は確認されておらず、炉穴の使用後に置かれたものと推定される。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

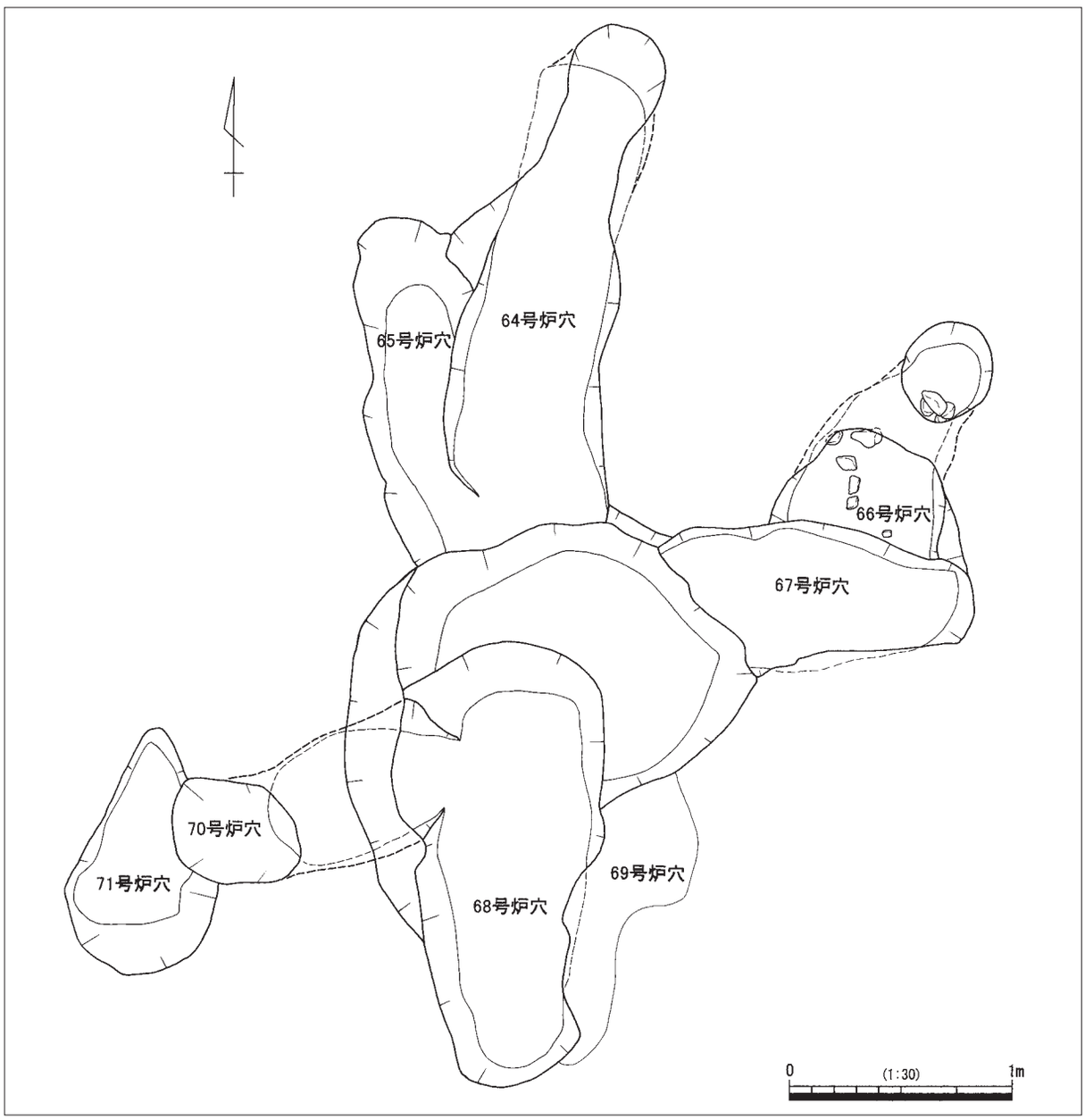


図 46　64 ～ 71 号炉穴配置図

64 号炉穴（図 46・47、図版 11・40・42）

58 号炉穴から北東へ約 2 ｍに位置する。放射状に複数築かれる炉穴群の 1 つである。2 基の炉穴が連結しているため、手前側を 64 号炉穴①、奥側を 64 号炉穴②とする。主軸は①が南－北方向で、②はやや軸を東に振っており、いずれも北側が煙道となる。第 1 検出面より約 45 ㎝下方で検出されている。

①の燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模が残存する。不明瞭ではあるが、残存する部分から全体は卵形に近い形状であったものと推定される。床面と壁面のほぼ全面に赤化した焼土面が確認でき、中央付近には橙化面も検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 8 ㎝、橙化面が約 1 ㎝となっている。埋土は、地山に近似する黄褐色土の単層である。

②の燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模であり、全体としては長方形に近い形状である。奥壁

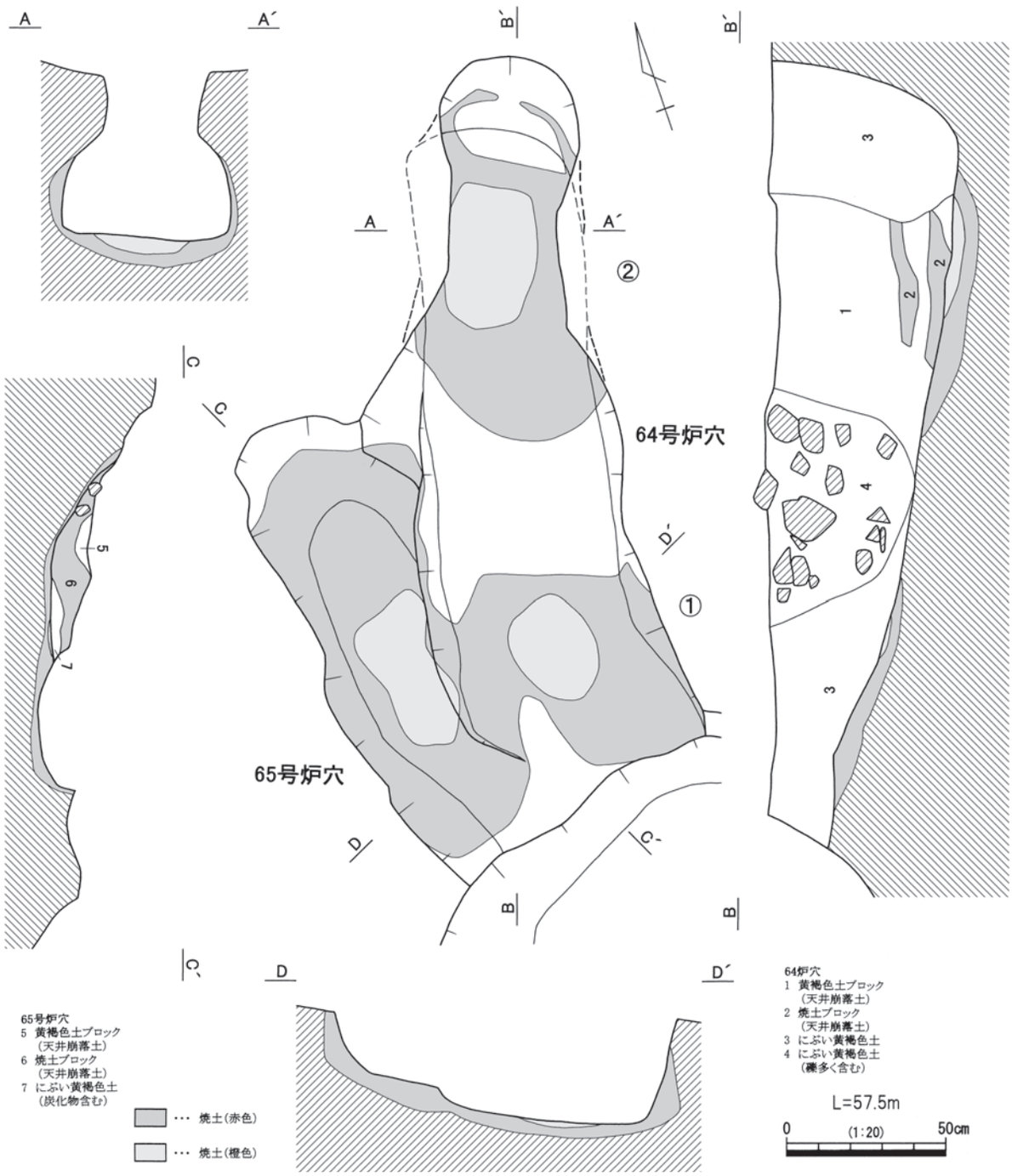


図 47　64・65 号炉穴実測図

の一部を除き、全面に赤化した焼土面が検出されている。中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約105㎝となっている。奥壁は湾曲しながら上方へ立ち上がる。前庭部は①の跡を利用している。埋土は大きく４層に分けられており、このうち第１・２層は天井の崩落土である。第３層は、天井崩落後の埋土で、煙道部と①の埋土とが共通していることから、①の跡を前庭部として利用していることがわかる。第４層は、上面から掘り込まれており、礫を多く含んでいる。調査時には認識されておらず、細部の記録も残されていないが、集石の可能性が高い。なお、手前側の土坑が先に完掘されてはいるが、本炉穴の底部と67号炉穴の第１層とはほぼ同じ高さであり、実際は本炉穴が67号炉穴よりも後出するものと推定される。

遺物としては、縄文土器と石器が出土している。５はチャート製の石鏃未製品で、６は瑪瑙製の楔形石器である。７はシルト岩の石核である。図示したもののほかに、縄文土器の細片が１点と剝片が１点出土している。いずれも埋土から出土した遺物として取り上げられているため、集石とみられる第４層のものが混在している可能性もある。なお、埋土中から出土した炭化物のＣ14年代測定では、9540 ± 50 yrBPという結果が得られている。

65号炉穴（図46・47）

64号炉穴の西側に位置し、東側の部分で切り合っている。土層断面図としての記録はないが、調査時の所見によると、64号炉穴に切られていたようである。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面より約45㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ115㎝・最大幅50㎝と長い。全体的には楕円形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前側には橙化面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約80㎝となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。部分的な土層断面図しか残されていないが、奥側では天井の崩落土（第５・６層）が確認されている。

埋土中から出土した炭化物についてＣ14年代測定を行っており、9540 ± 50 yrBPという結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

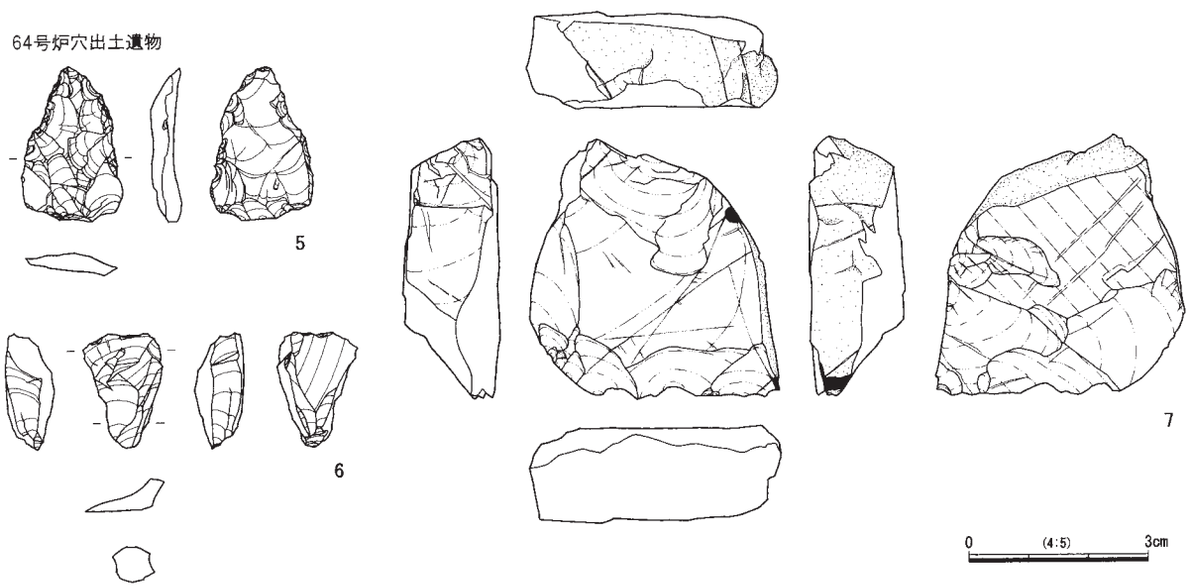


図48　64号炉穴出土遺物

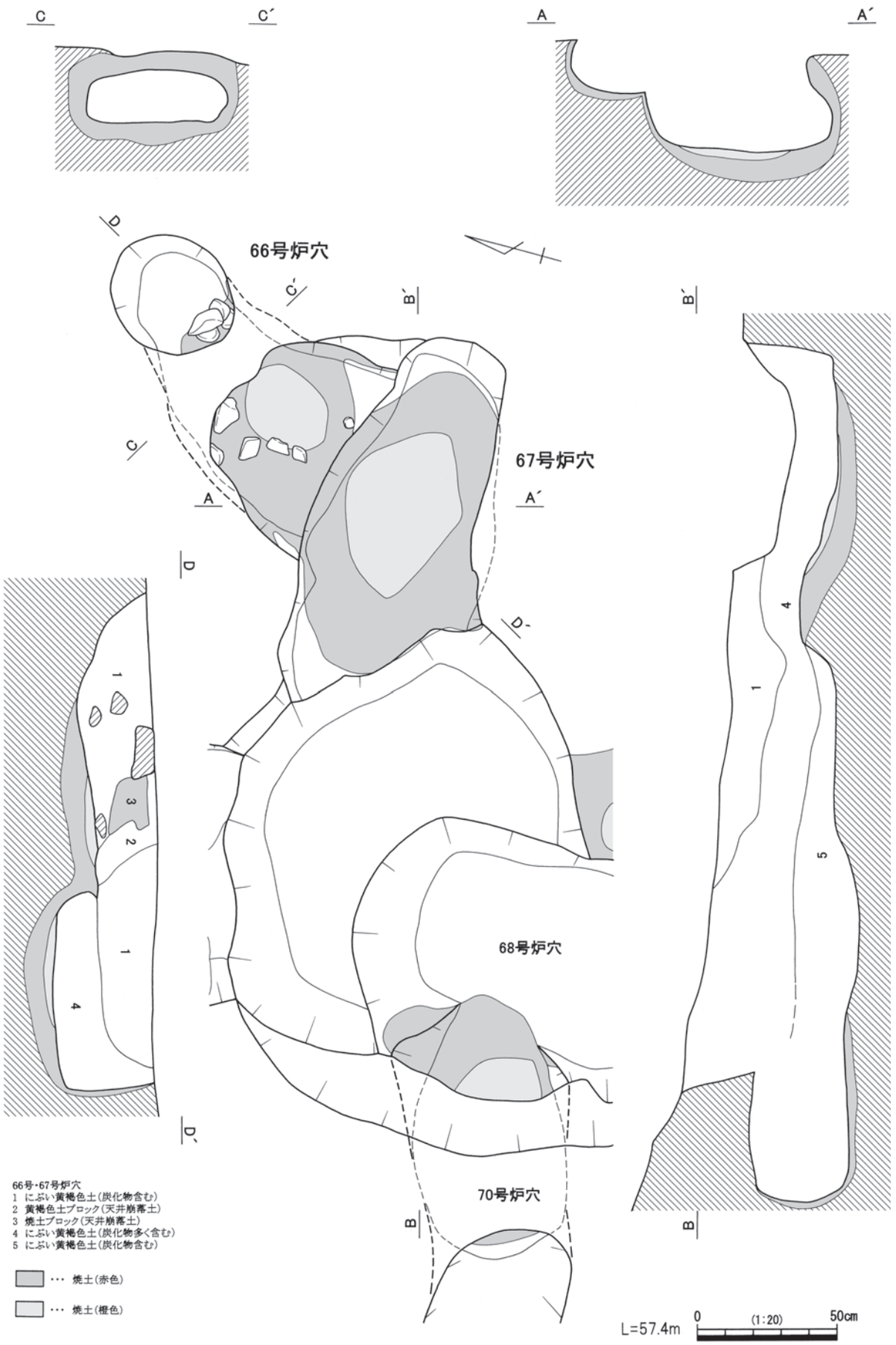


図 49　66・67 号炉穴実測図

66 号炉穴（図 46・49、図版 11）

64 号炉穴から東へ約１ｍに位置する。前庭部において、67 号炉穴と切り合っている。主軸は北東－南西方向であり、煙道は北東側につく。第１検出面より約 45 ㎝下方で検出されている。一部ではあるが、天井部が遺存する。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模であり、全体は二等辺三角形に近い形状である。奥壁側を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面が約３㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 75 ㎝となっている。奥壁は緩い傾斜で立ち上がる。煙道は直径 45 ㎝で、天井は約 20 ㎝の幅で残存し、床面から天井までの高さは 15 ㎝となっている。前庭部は、土層断面での確認のため具体的な形状は不明であるが、埋土（第１層）が 67 号炉穴の埋土上層と共通しており、67 号炉穴の跡を利用していたことがわかる。埋土は大きく３層に分けられており、天井の崩落土（第２・３層）が確認できる。

床面付近からは、10 ㎝程度の大きさの礫がやや散らばった状態で出土している。多くに被熱の痕跡が確認されており、炉穴の使用時に用いられた可能性が高いが、使用時の位置を保っているか否かについては明らかでない。土器や石器などの遺物は出土していない。

67 号炉穴（図 46・49、図版 12・37・40）

66 号炉穴の南側に位置する、放射状に築かれる炉穴群の一つである。先述のように、切り合い関係から、66 号炉穴よりも先行することが確認されている。主軸は東－西方向で、煙道は東側につく。第１検出面より約 45 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模であり、全体的には卵形に近い形状である。奥壁を除き、全面に赤化した焼土面が検出されており、中央付近には橙化面が確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 11 ㎝・橙化面が約３㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部は、平面的には確認できていないが、土坑状の部分を利用していたことが土層断面からみてとれる。埋土は地山に近似する黄褐色土の単層で、天井の崩落土は確認されていない。しかし、後に 66 号炉穴の前庭部として利用されていることからみて、66 号炉穴の築造時に天井が残存していたとは考えにくい。第４層の堆積後に天井が崩落し、その崩落土を除去した窪みを前庭部として利用するかたちで 66 号炉穴が築かれたものと推測される。

遺物としては、縄文土器と石器が出土している。８は胴部の破片で、小破片のためやや不明瞭ではあるが、山形の押型文が認められる。９はシルト岩製の石匙である。この他に、縄文土器の細片１点と剝片が１点出土しており、いずれも燃焼部の埋土（第４層）からの出土している。また、第４層から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。

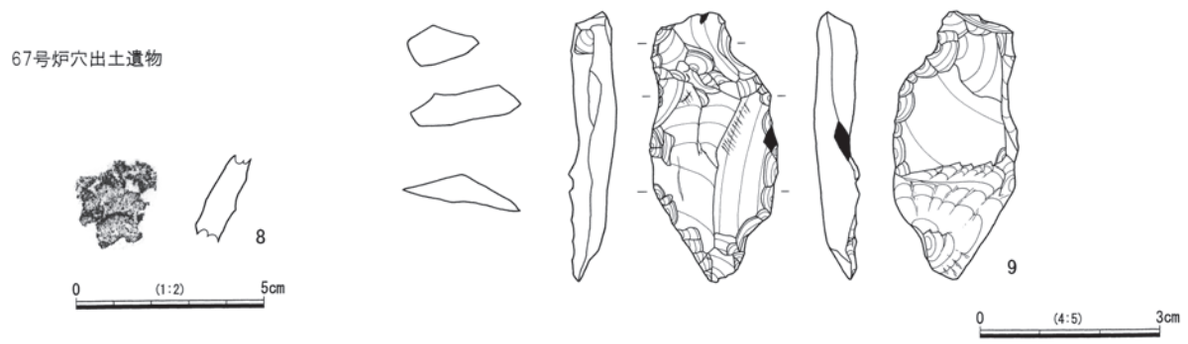


図 50　67 号炉穴出土遺物

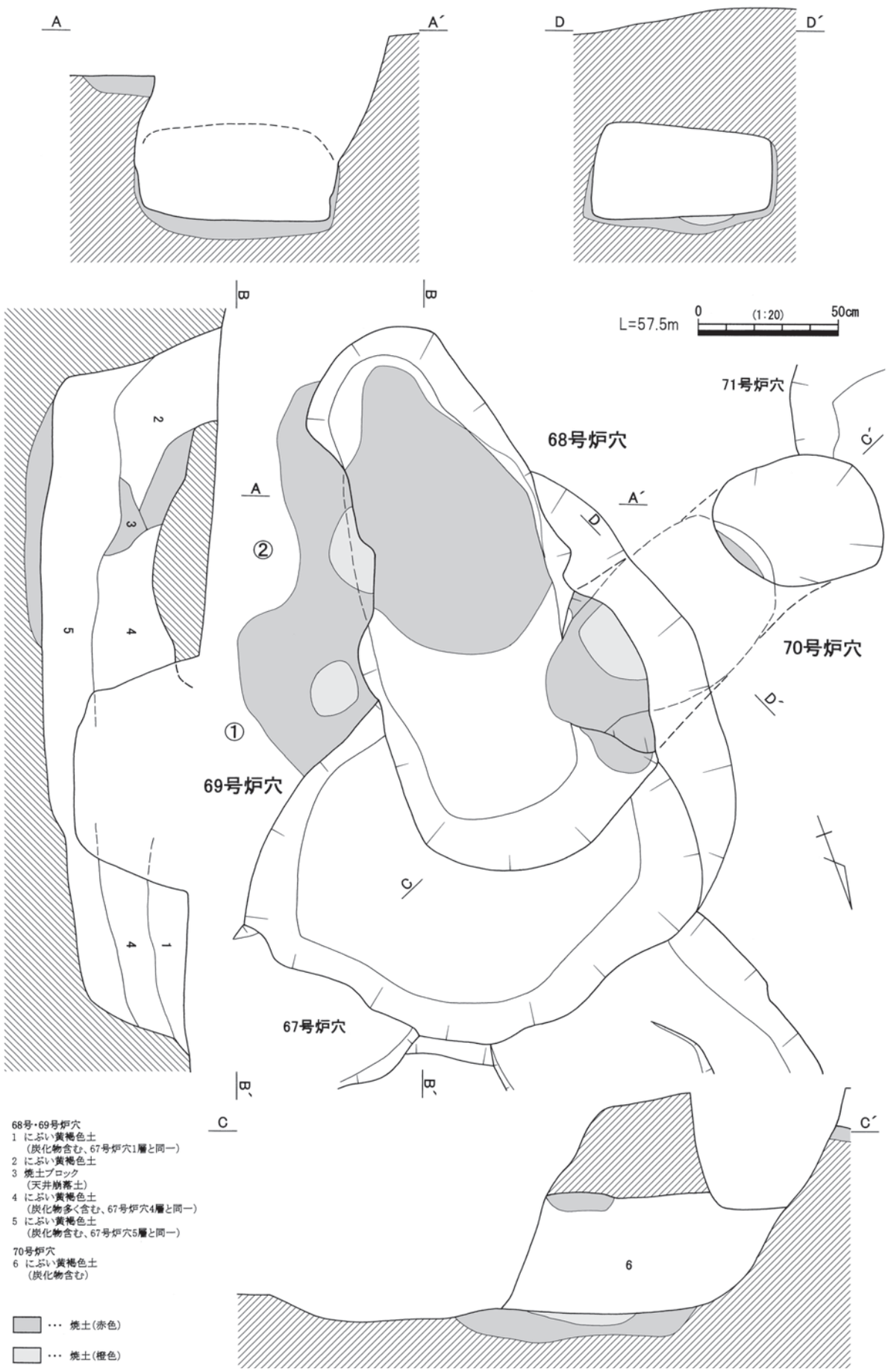


図 51　68 ～ 70 号炉穴実測図

68 号炉穴（図 46・51）

放射状に築かれている炉穴群の一つで、南側に位置する。南－北方向を主軸とし、南側に煙道をもつ。第 1 検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。図化以前に崩落してしまったため、平面図には表現されていないが、断面図で明らかなように天井が残存していた。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模であり、全体的には楕円形に近い形状である。奥壁付近を除くほぼ全面に、赤化した焼土面が確認されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約８㎝となっている。第 1 検出面から床面までの深さは約 105 ㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がり、上方ではやや斜めに広がる。土層断面図から、煙道は直径 35 ㎝の大きさで、床面から天井までの高さは 35 ㎝程度と推定される。前庭部は、長さ 60 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が検出されているが、実際は土坑状の部分全体を利用していたとみてよい。埋土は、大きく５層に分けられており、このうち第３層は部分的な天井の崩落土である。第１・４層は、67 号炉穴の第１・４層と同一の土層である。これにより、67 号炉穴より先行して築かれた炉穴であることがわかる。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9690 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

69 号炉穴（図 46・51）

68 号炉穴の東側で焼土面のみが検出されている。第 1 検出面より 40 ㎝下方で検出されている。68 号炉穴等を掘削した後に発見されているが、切り合い関係については明らかでない。橙化面が２箇所で確認できることから、２基が接合しているものと推測される。北東側の橙化面周辺を 69 号炉穴①、南西側の橙化面周辺を 69 号炉穴②とする。いずれも南－北方向を主軸とし、南側に煙道がつくものと推測される。

①の燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 55 ㎝・幅 40 ㎝の規模で残存する。中央には橙化面が確認される。②は長さ 85 ㎝・幅 70 ㎝の範囲で残存し、北西側に橙化面が確認される。68 号炉穴の断面図から、②の赤化面は７㎝程の厚さであることがわかる。

70 号炉穴（図 46・51）

放射状に築かれている炉穴群の一つで、68 号炉穴の西側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 40 ㎝下方で煙道が検出されており、天井が約 50 ㎝の長さで遺存する。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、全体としては楕円形に近い形状である。奥壁を除いてほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央部には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面が約４㎝と厚い。第 1 検出面から床面までの深さは、約 105 ㎝である。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。煙道の直径は 55 ㎝である。ただし、小穴と誤認され途中まで掘削されたものが再掘削されており、実際よりも大きくなっている可能性が高い。床面から天井までの高さは 35 ㎝である。前庭部は、68 号炉穴と共有しており、土坑状の部分全体を利用していたとみられる。埋土は、地山に近似するにぶい黄褐色土の単層（第６層）であるが、高さから 68 号炉穴の第４層と第５層を、単一の土層と認識したものと判断できる。68 号炉穴と 70 号炉穴は、ほぼ同時期に使用された可能性が高いと推測される。

埋土中から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を実施しており、9600 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

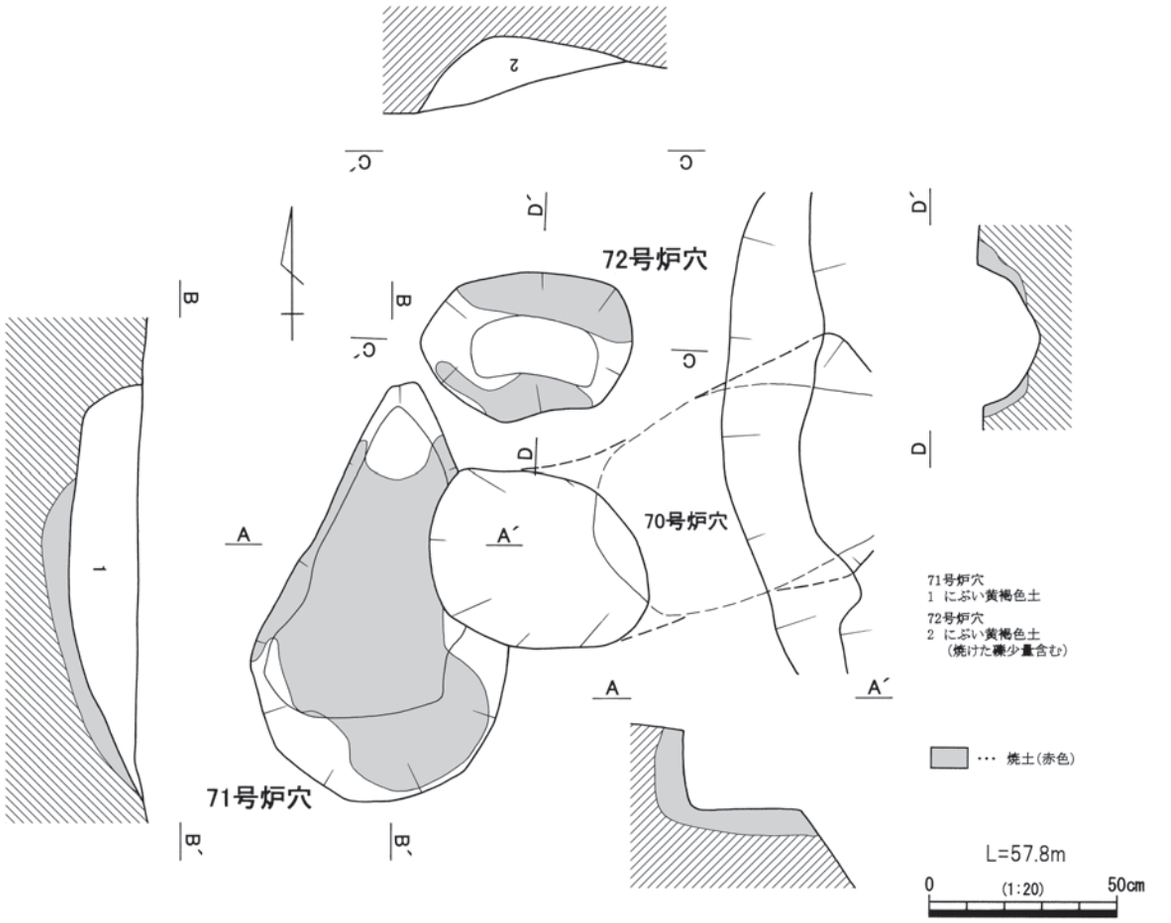


図 52　71・72 号炉穴実測図

71 号炉穴（図 46・52）

70 号炉穴の西側に位置しており、一部で切り合っている。現地では 70 号炉穴の煙道を先に掘り下げているが、これは中近世の小穴と誤認したことが原因であり、切り合い関係を正確に示しているとは考えにくい。切り合い関係が逆であった可能性も十分にある。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第 1 検出面より 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模であり、全体としては二等辺三角形に近い形状である。奥側の一部を除き、ほぼ全面で焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 7 ㎝となっている。第 1 検出面から床面までの深さは約 40 ㎝である。奥壁はやや湾曲しながら上方へ立ち上がる。埋土は単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物について C 14 年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

72 号炉穴（図 46・52）

71 号炉穴の北東に隣接する。第 1 検出面より約 20 ㎝下方で、燃焼部の一部が検出されている。主軸は東－西方向で、西側が煙道となる。

燃焼部は、長さ 55 ㎝・幅 45 ㎝の規模で残存する。側壁のほぼ全面で焼土が検出されており、床面に焼土がみられないが、掘り過ぎの可能性が高い。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 3 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは約 35 ㎝となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。埋土は単層で、焼けた礫が少量混じるようであるが、おそらくは地山由来の礫であろう。遺物は出土していない。

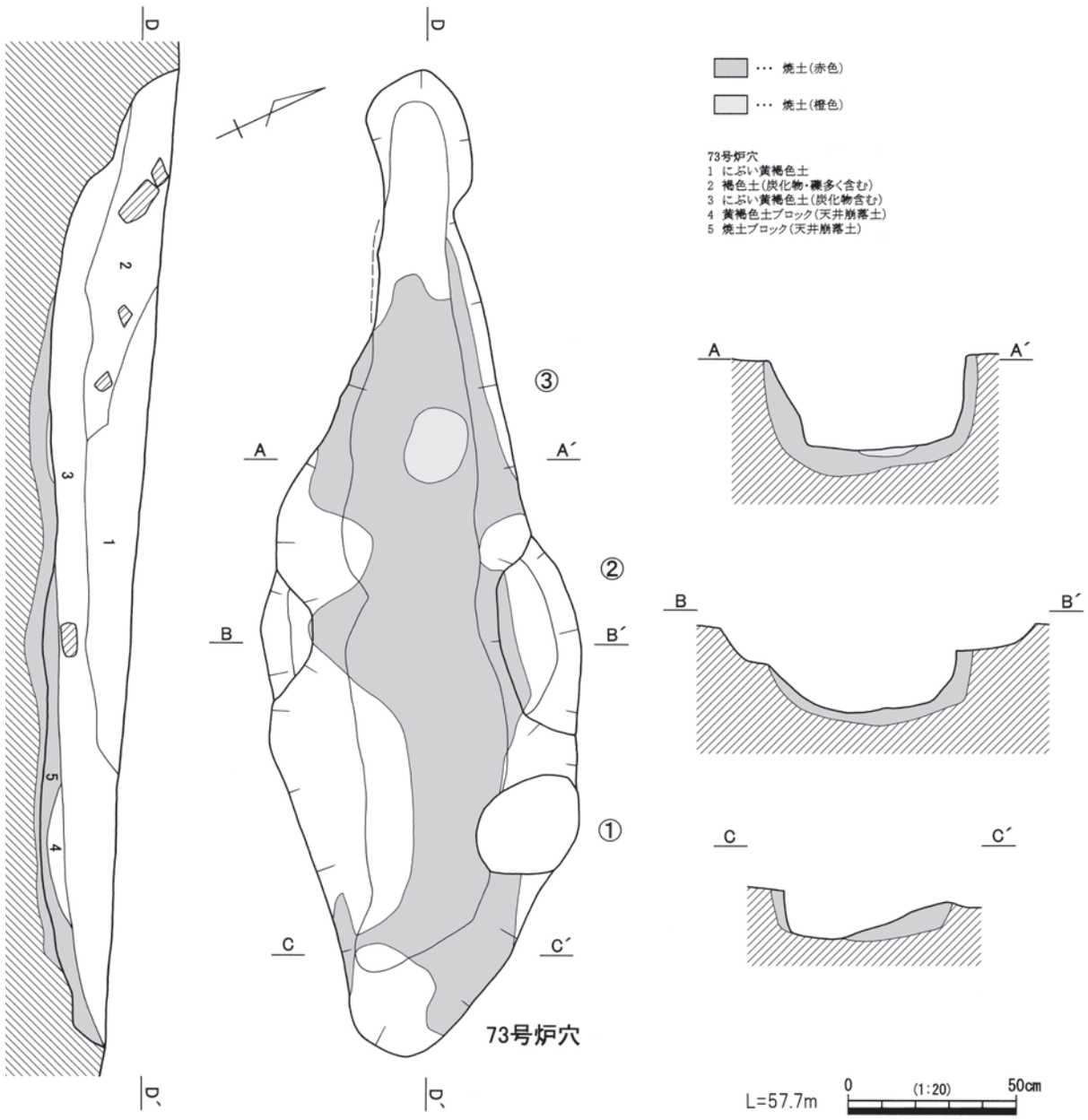


図 53　73 号炉穴実測図

73 号炉穴（図 46・53、図版 12）

71 号炉穴の南側に隣接する。第 1 検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。３基の炉穴が連結しており、くびれている部分を境に手前側から奥に向かって、73 号炉穴①・②・③とする。主軸は北東－南西方向で、煙道はいずれも北東側につくものと推測される。

①の燃焼部は、長さは約 90 ㎝で、②と③の築造時に改変されているため不明瞭ではあるが、幅は 60 ㎝前後と推定される。床面と側壁の一部で焼土が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分でも 4 ㎝程となっている。第 1 検出面から床面までの深さは約 45 ㎝である。

②の燃焼部は、長さ 60 ㎝・最大幅 60 ㎝前後の規模と推定される。床面と側壁のほぼ全面に、焼土が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 6 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 45 ㎝となっている。①の跡を前庭部として利用している。

③の燃焼部は、長さ100㎝・最大幅70㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形状となっている。ただし、先端に取り付いている円形の部分に関しては、断面や焼土の広がりからみて、掘り過ぎている可能性が高い。奥側を除いて、床面と側壁には赤化した焼土面が検出されており、中央の手前寄りには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは約50㎝となっている。前庭部には、②と①の跡を利用している。

埋土は、全部で５層に分けられており、このうち第４・５層は天井の崩落土とみられる、焼土や地山ブロックである。その上面が③の床面とほぼ一致することから、③の築造の際に②の崩落土を除去・整地して前庭部を築いている様子がうかがえる。③の天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

遺物としては、埋土から剝片が１点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物についてＣ14年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBPという結果が得られている。

74号炉穴（図54・55、図版13）

73号炉穴の南に位置する、放射状に複数の炉穴が築かれている炉穴群のうちの１基である。北東－南西方向を主軸とし、北東側に煙道がつく。第１検出面より約35㎝下方で検出されている。前庭部で77号炉穴と切り合っており、74号炉穴が後出することが確認されている。

燃焼部は、長さ120㎝・最大幅70㎝の規模であり、全体としては二等辺三角形に近い形状である。

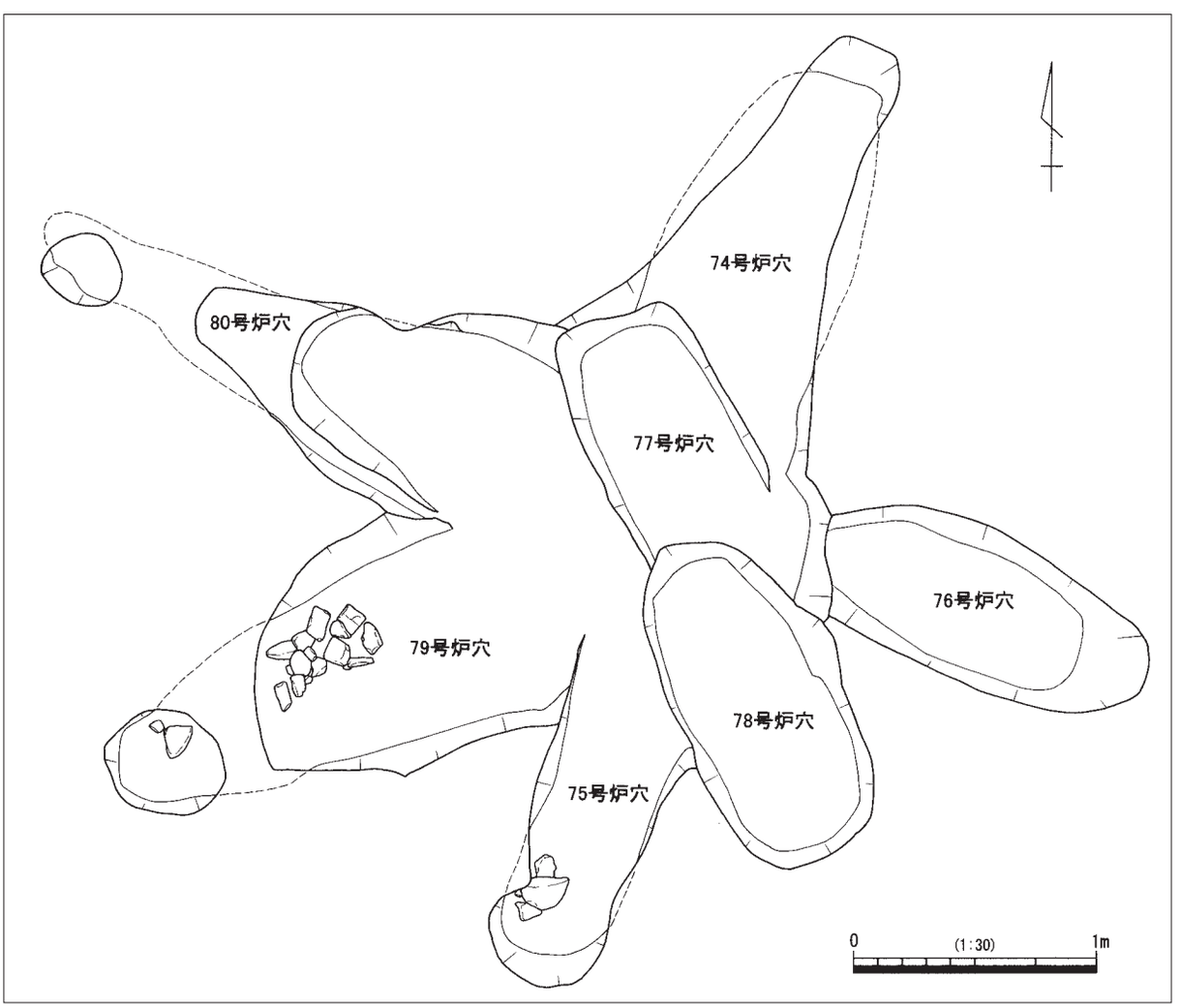


図54　74～80号炉穴配置図

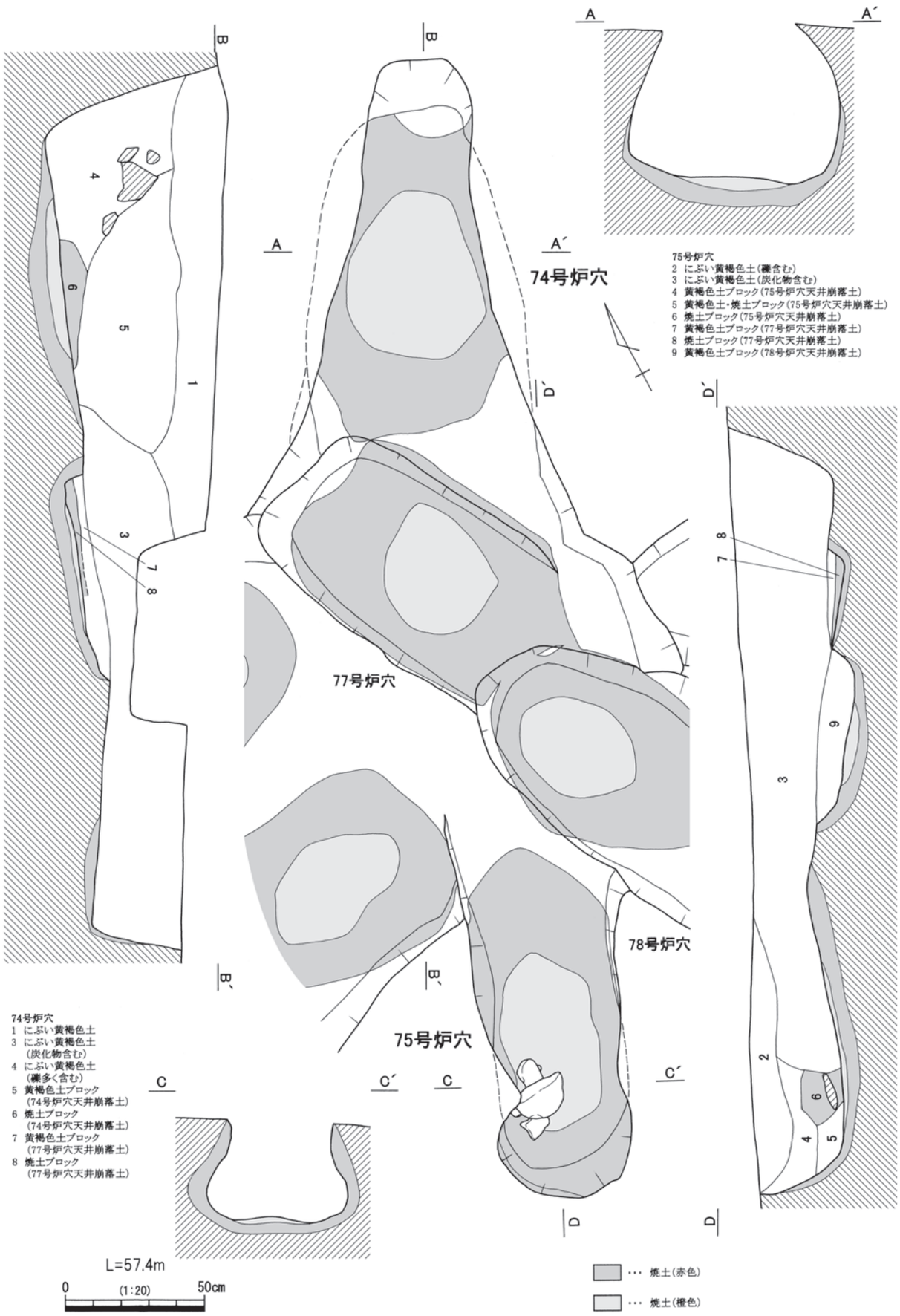


図 55　74・75 号炉穴実測図

奥壁を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面が約５㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝となっている。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。77 号炉穴の跡など、炉穴群の中心部分の平坦面を前庭部として利用している。埋土は大きく７層に分けられており、このうち第５・６層は天井の崩落土とみられる地山・焼土ブロックである。燃焼部の床面に接しており、使用中または使用直後に天井が崩落したものと推測される。また、第７・８層は 77 号炉穴の天井崩落土であり、その上面が 74 号炉穴の前庭部となっていることから、77 号炉穴の廃絶後に築かれていることがわかる。

遺物としては、縄文土器と剝片が出土している。縄文土器は、摩滅して文様が不鮮明な図化できない程の細片である。剝片は２点出土しており、１点には二次加工が認められる。また、埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9450 ± 50 yrBP という結果が得られている。

75 号炉穴（図 54・55、図版 13・37・40）

炉穴群を構成する１基であり、74 号炉穴の南側に位置する。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。第１検出面から約 40 ㎝下方で検出されている。前庭部において 78 号炉穴と切り合っており、78 号炉穴より後出することが確かめられている。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、全体的には楕円形に近い形状である。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝となっている。奥壁はやや湾曲しながら立ち上がる。前庭部には、炉穴群の中心部分の平坦面を利用している。埋土は大きく８層に分けられており、このうち第４・５・６層は天井の崩落土である。崩落土は床面に接しており、炉穴の使用中または使用直後に天井が崩落したことがわかる。第７・８層は 77 号炉穴、第９層は 78 号炉穴の天井崩落土であり、その上面が前庭部となっていることから、75 号炉穴が両炉穴よりも後出することが明らかである。また、第３層は、74 炉穴と共通する埋土であり、西側に隣接する 79 号炉穴の埋土にもなっていることから、この３基の炉穴については、同時期に存在していたとみてよい。

燃焼部の奥側の床面からは、10 ～ 20 ㎝程度の大きさの礫が発見されている。被熱の有無については、記録がなく不明であるが、上から天井崩落土で覆われる形になっており、使用時または使用直後に入れられたものであることは間違いない。

遺物としては、埋土から縄文土器と石器が出土している。10 は縄文土器の胴部の破片であり、表面には縄文が施されている。縄文土器としては、この他に図化できない細片が１点出土している。11 は石鏃の未製品で、石材は黒曜石である。他には剝片が１点出土している。また、埋土中から採取した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9520 ± 60 yrBP という結果が得られている。

図 56　75 号炉穴出土遺物

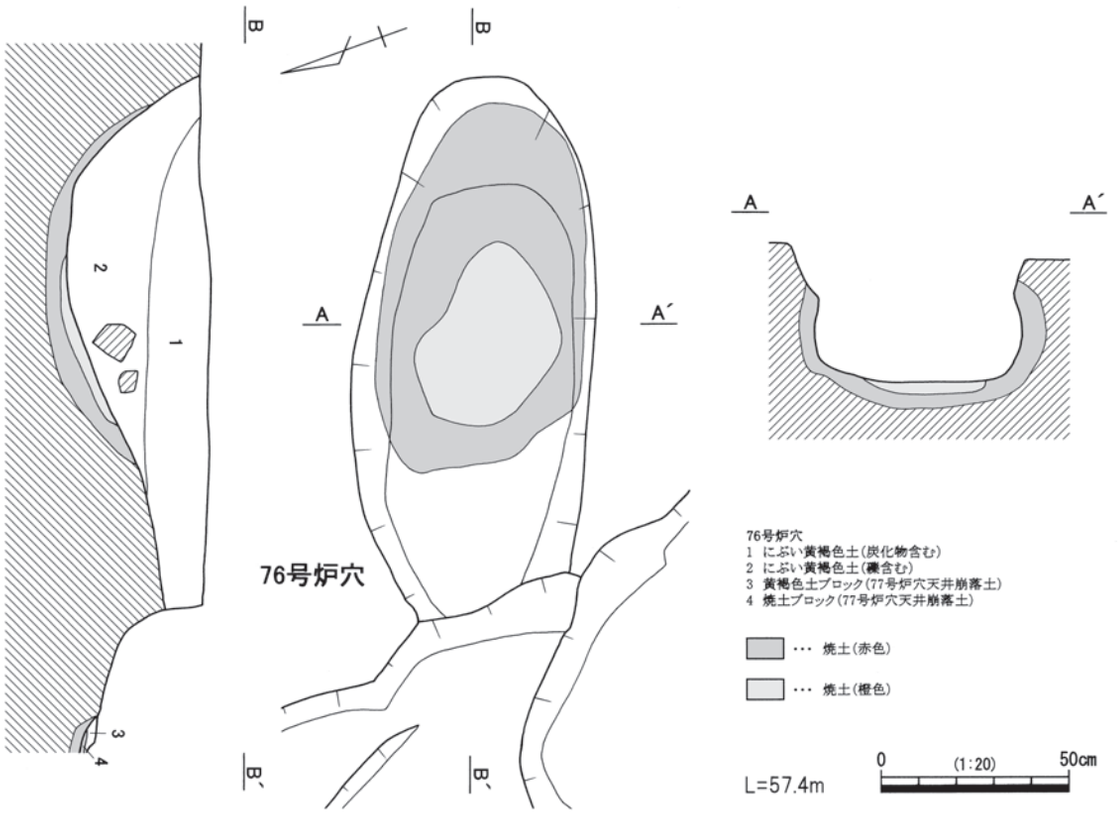


図 57　76 号炉穴実測図

76 号炉穴（図 54・57、図版 13）

炉穴群を構成する１基であり、炉穴群の東側に位置する。主軸は東－西方向で、東側に煙道がつく。第１検出面より 35 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 75 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模であり、楕円形に近い形状となっている。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。奥壁は比較的緩い傾斜で斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 40 ㎝・幅 40 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられているが、いずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

他の炉穴を掘り下げた後に検出されているため、他の炉穴との切り合い関係については明らかでない。比較的近い位置にある 75 号炉穴の土層断面に、76 号炉穴の土層が認められないため、前庭部は切り合っている部分が少ないものと推測される。ただし、高さ的には、75 号炉穴の第３層の上半程の高さにあたっていることから、第３層を切ってつくられている可能性が高い。この炉穴群の中では、最も新しい炉穴であるとみてよいであろう。

埋土中から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を実施しており、9750 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

77 号炉穴（図 54・58、図版 13）

炉穴群の中央付近に位置する。北西－南東方向を主軸とし、北西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 60 ㎝下方で検出されている。74・78 号炉穴と切り合っており、74 号炉穴に先行し、78 号炉穴より後出する炉穴であることが確かめられている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模であり、長方形に近い形状となっている。ほぼ全面で赤

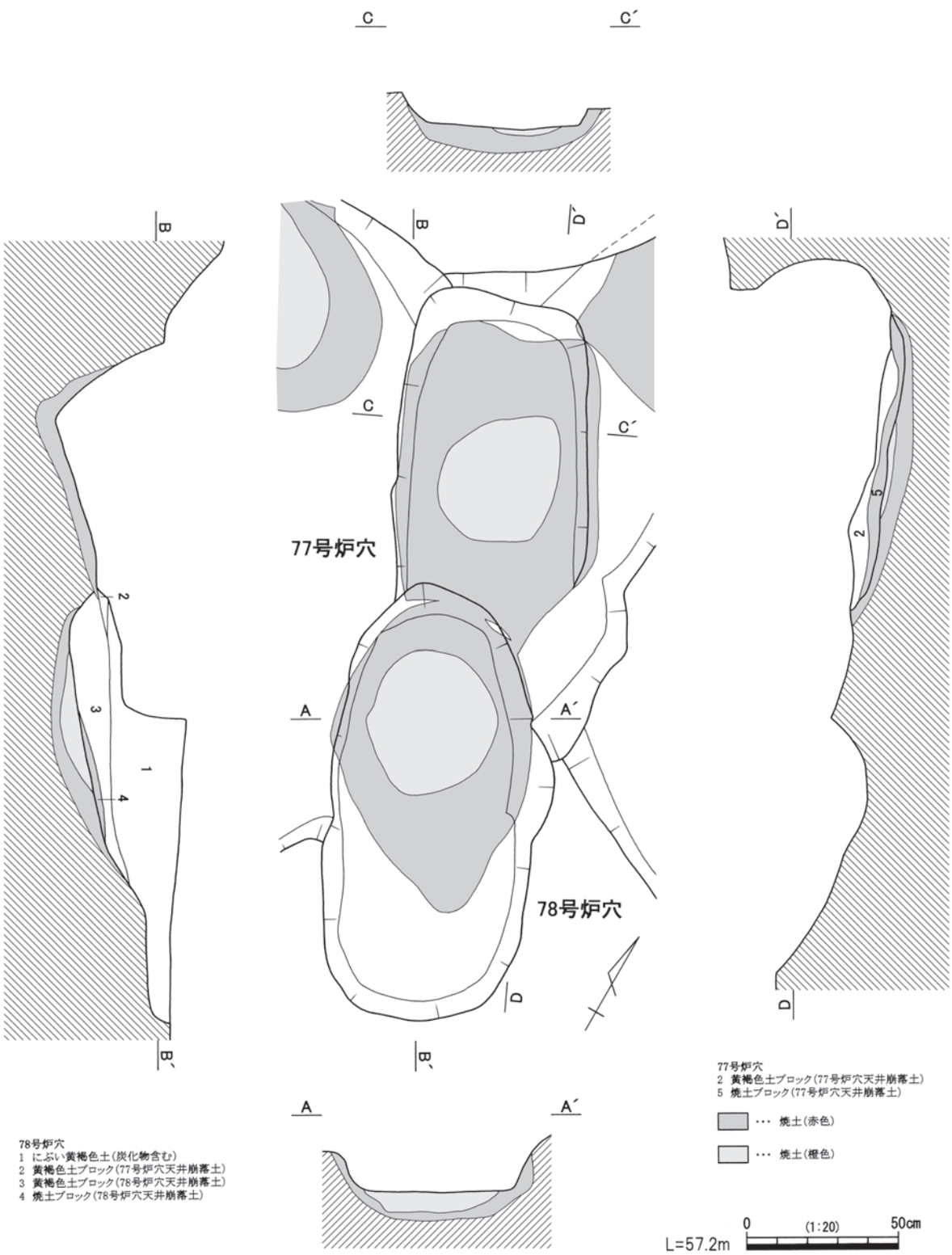


図 58　77・78 号炉穴実測図

化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面が約２㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝である。奥壁は床面から斜め上方へ立ち上がる。前庭部は 78 号炉穴の跡を利用しており、長さ 60 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２・５層）が確認される。また、78 号炉穴の天井崩落土の上面が、前庭部の床面となっている。78 号炉穴の天井が崩落した後、崩落土の除去・整地を行い、奥に向かって 77 号炉穴が築かれている様子がみてとれる。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9700 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

78 号炉穴（図 54・58、図版 13）

炉穴群の南東部に位置する、この炉穴群で最初に築かれた炉穴である。主軸は北西－南東方向であり、北西側が煙道となる。第１検出面より約 45 ㎝下方で前庭部側が検出されている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模であり、全体は楕円形に近い形状である。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥側には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 80 ㎝となっている。わずかしか残存しないが、奥壁は斜め上方へ立ち上がっている。前庭部には、長さ 35 ㎝・幅 55 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、下層（第３・４層）には、天井の崩落土が確認できる。先述のように、天井の崩落土を除去・整地した後に、奥に向かって 77 号炉穴が築かれている様子が見て取れる。

埋土中から出土した炭化物のＣ 14 年代測定を実施しており、9440 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

79 号炉穴（図 54・59、図版 12・13・37）

炉穴群の南西部に位置し、２基の炉穴が連結した状態で検出されている。手前側の焼土面を 79 号炉穴①、奥側を 79 号炉穴②とする。多少軸の振りは異なるが、いずれも東－西方向を主軸とし、西側に煙道がつく。第１検出面より 40 ㎝下方で検出されている。

①の燃焼部床面とみられる焼土面は、長さ 80 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で検出されている。全体的には楕円形に近い形状となっている。赤化した焼土面の中央には、橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 105 ㎝となっている。奥壁や側壁は、②の築造の際に改変され、そのほとんどを失っている。

②は、①に比べて主軸をやや南に振る形で築造されており、一部天井が遺存する。燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、卵形に近い形状となっている。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 120 ㎝となっている。煙道は直径 45 ㎝の円形で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。天井は約 20 ㎝の幅で残存している。床面から天井の残存部までの高さは約 40 ㎝である。前庭部には①の床面が利用されており、長さ１ｍ以上の緩やかな斜面となっている。燃焼部の床面からは、10 ㎝程の大きさの礫が多数発見されている。被熱の有無に関する記録が残されていないため詳細は不明であるが、天井が崩落する以前に入れられたものであることは間違いない。

埋土は、大きく６層に分けられており、②の燃焼部には天井の崩落土（第３～５層）が確認できる。また、隣接する 75 号炉穴との関係は、高さからみて、第２層が 75 号炉穴の第３層、第１層が 75 号炉穴の第２層に相当するとみてよい。これにより、同じ埋没過程を示す 74・75・79 号炉穴は、ほぼ同時期に存

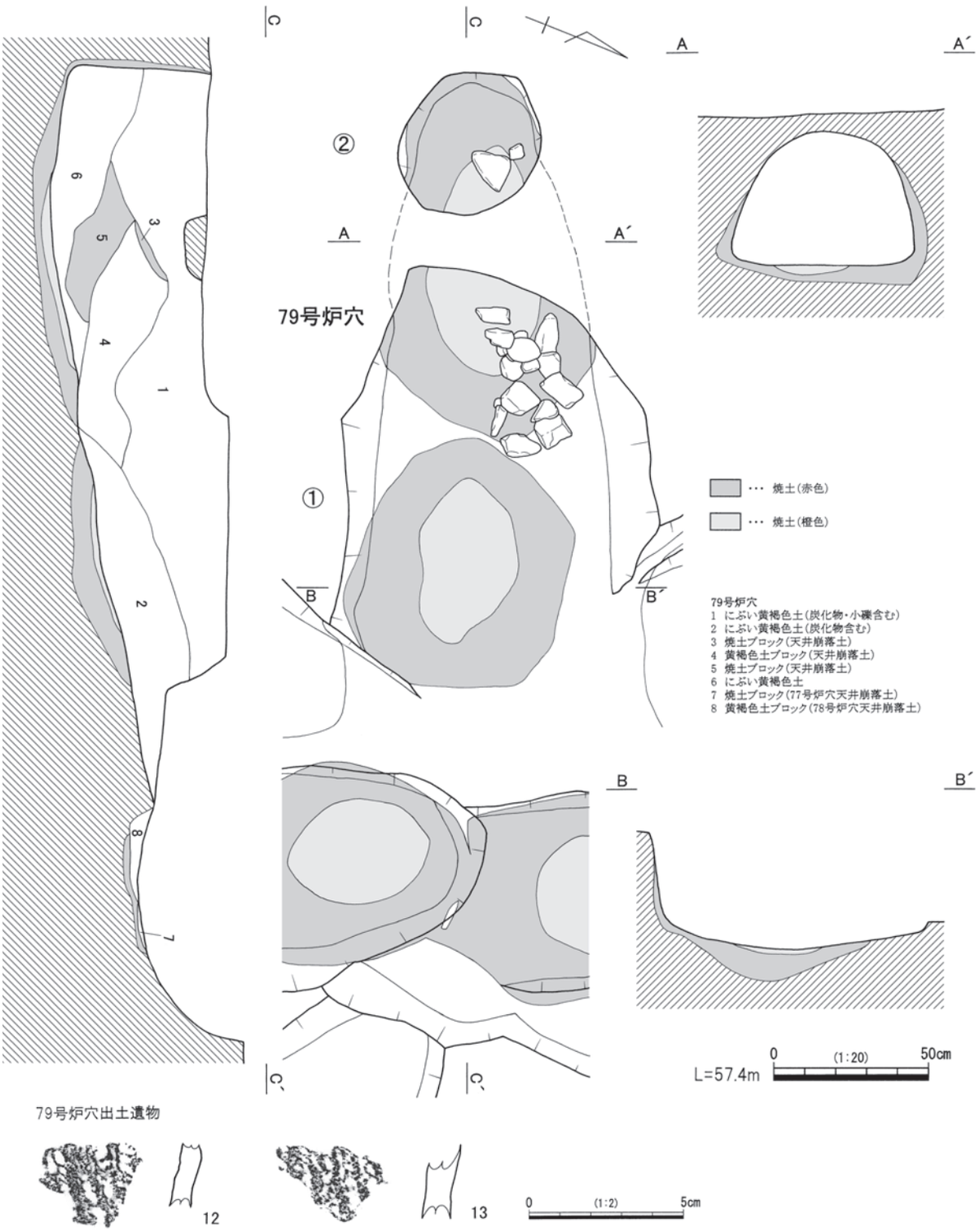


図 59　79 号炉穴実測図・出土遺物

在した炉穴として認識できる。

遺物としては、剥片 1 点と縄文土器が出土している。12・13 は縄文土器の胴部の破片であり、外面には撚糸文Rが施されている。いずれも埋土の最下層（第 6 層）から出土している。なお、埋土の最下層から出土した炭化物についてC 14 年代測定を実施しており、9760 ± 50 yrBP という結果が得られている。

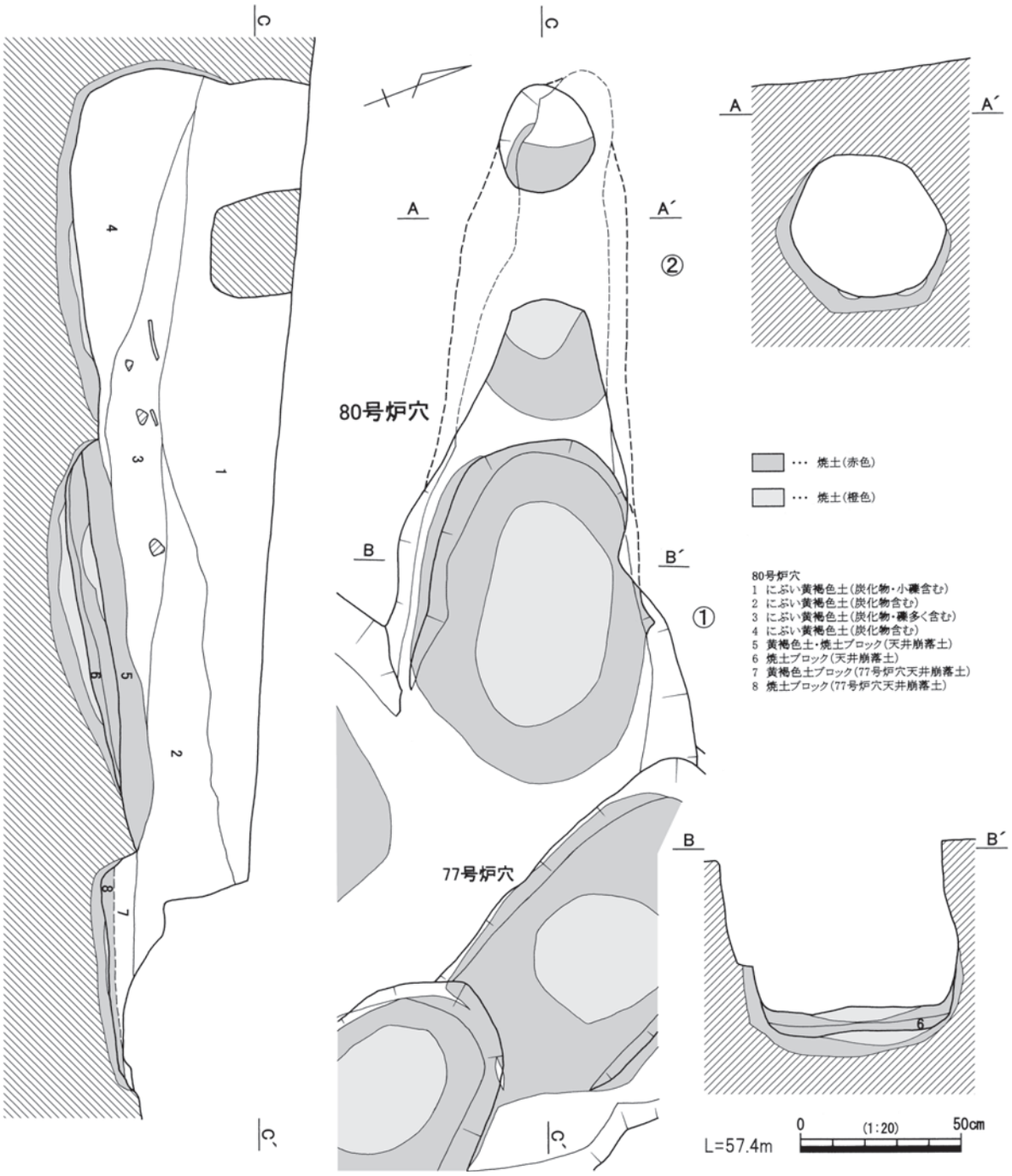


図 60　80 号炉穴実測図

80 号炉穴（図 54・60、図版 13・14・37）

炉穴群の北西部に位置する。２基の炉穴が連結した状態で検出されており、手前側の炉穴に関しては、床面の改築が行われている。手前側を 80 号炉穴①、奥側を 80 号炉穴②とする。いずれも主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。

①は床面が２面確認されている。上面を第１床面、下面を第２床面とする。燃焼部はほぼ同規模で、長さ 100 ㎝・最大幅 70 ㎝であり、楕円形に近い形状となっている。第１床面は、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りに橙化面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約５㎝となっている。第２床面は、第１床面より８㎝程下方にあり、全面に赤化

した焼土面が検出され、中央には橙化面が確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面・橙化面ともに約５㎝である。第１検出面からの深さは約 110 ㎝となっている。第１床面との間に焼土ブロックの堆積（第６層）がみられることから、天井内部の小規模な崩落はあったものの、炉穴そのものには大きな損傷がなかったため、床面を整地して再度使用したものと推測される。②の築造の際に奥壁の大半は失われているが、湾曲しながら上方へ立ち上がっている。炉穴群の中央を前庭部として利用している。東側に隣接する 77 号炉穴の天井崩落土の上面が、前庭部となることから、77 号炉穴より後出する炉穴であることがわかる。

②には天井が一部残存している。燃焼部は長さ 110 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模であり、全体としては楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 105 ㎝となっている。煙道は直径 30 ㎝の大きさで、奥壁はややオーバーハング気味に湾曲して立ち上がる。天井は 30 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 40 ㎝である。前庭部には①の跡を利用しており、①の天井崩落土を除去・整地して平坦面を設けている。

埋土は大きく６層に分けられている。①には天井の崩落土が確認できるが、②においては明確に確認できない。隣接する炉穴との関係は、高さなどから第２層が 74 号炉穴の第３層、第１層が 74 号炉穴の第１層に相当するとみられる。これまでの成果を総合すると、74・75・79・80 号炉穴は、ほぼ同時期に存在していた可能性が高い。

遺物としては、縄文土器が出土している。14 は口縁部から胴部にかけての破片である。外面には、ほぼ全面に縦走縄文（ＲＬ）が施されている。胴部は上方で最大径となり、直立した後、口縁部でわずかに外反する。口縁部の復元径は 28.5 ㎝である。図示したもののほかに、同一個体とみられる破片が複数出土しており、多くの破片は埋土の第３層から出土している。大きさなどからみて、炉穴内に残されていたものが埋没の過程で破片になった可能性が高い。なお、埋土中から出土した炭化物についてはＣ 14 年代測定を実施しており、9540 ± 50 yrBP という結果が得られている。

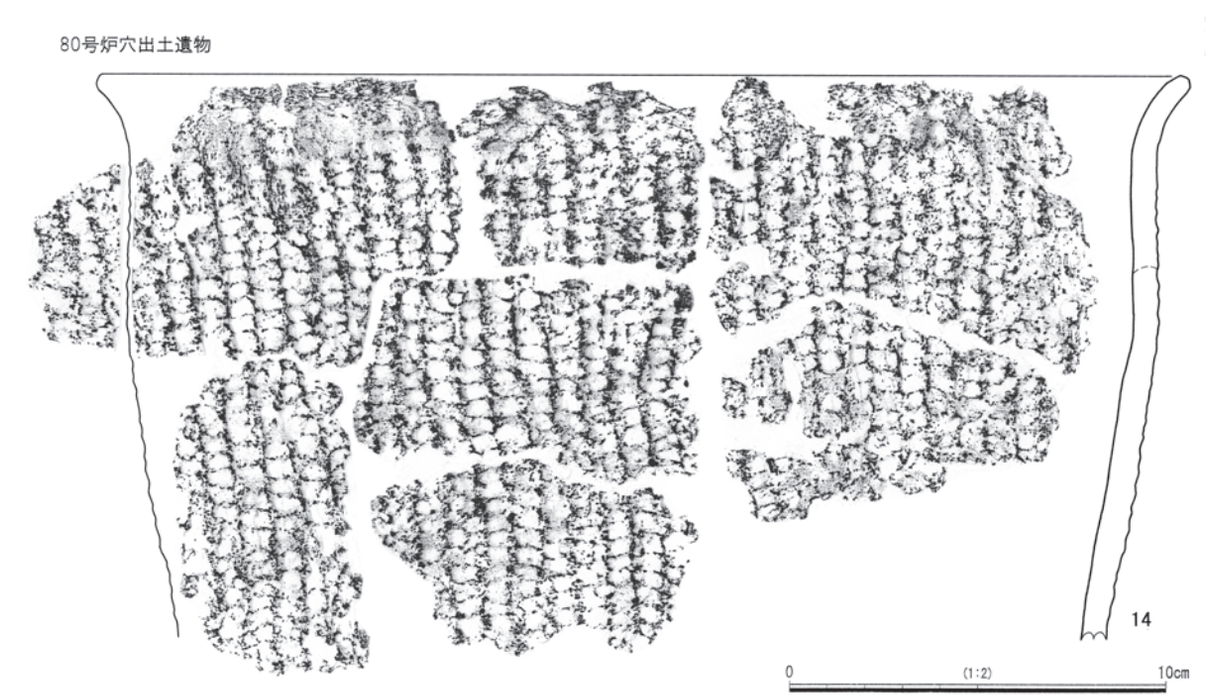


図 61　80 号炉穴出土遺物

81 号炉穴（図 62・63）

76 号炉穴から南東へ１ｍに位置する。主軸は北西－南東方向で、煙道は北西側につく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 68 ㎝・最大幅 38 ㎝と小型であり、全体としては楕円形に近い形状である。奥壁側の一部を除いて、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 30 ㎝となっている。奥壁は斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 18 ㎝・幅 22 ㎝の平坦面が設けられているが、足場としては狭小である。前庭部の大半は、検出面よりも高い位置に広がっていたものと推測される。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

82 号炉穴（図 62・63）

81 号炉穴から南東へ約２ｍに位置している。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。位置的には、西側の中央付近で一部 83 号炉穴と重複している。調査所見では、西側は「攪乱によって失われていた」とされるが、おそらくは 83 号炉穴と切り合っている状態を誤認したのであろう。不確実ではあるが、83 号炉穴に切られている可能性が高い。

燃焼部は、長さ 54 ㎝・最大幅 42 ㎝の規模である。失われている部分が多いため不明瞭ではあるが、全体としては楕円形に近い形状であろう。床面と側壁には、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝となっている。遺物は出土していない。

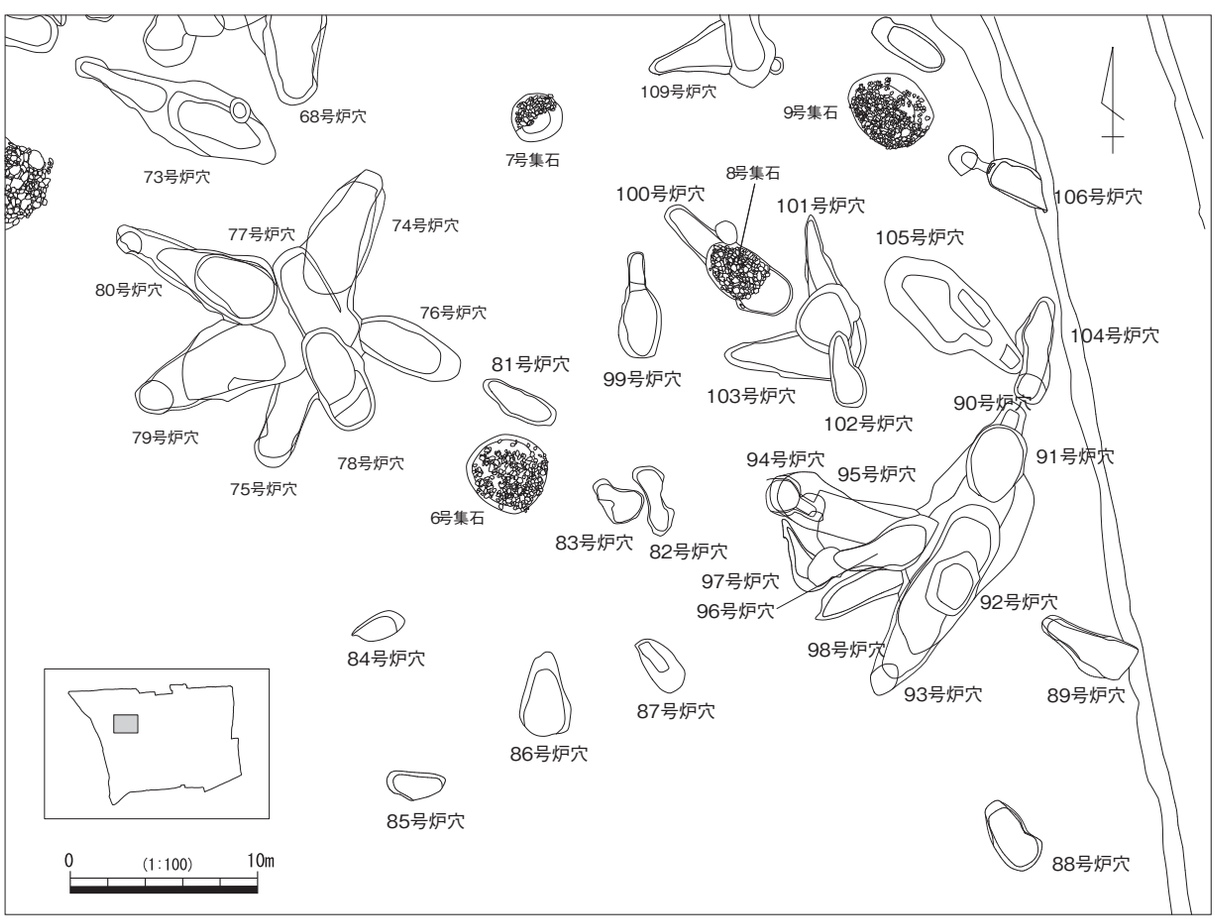


図 62　81 ～ 106 号炉穴配置図

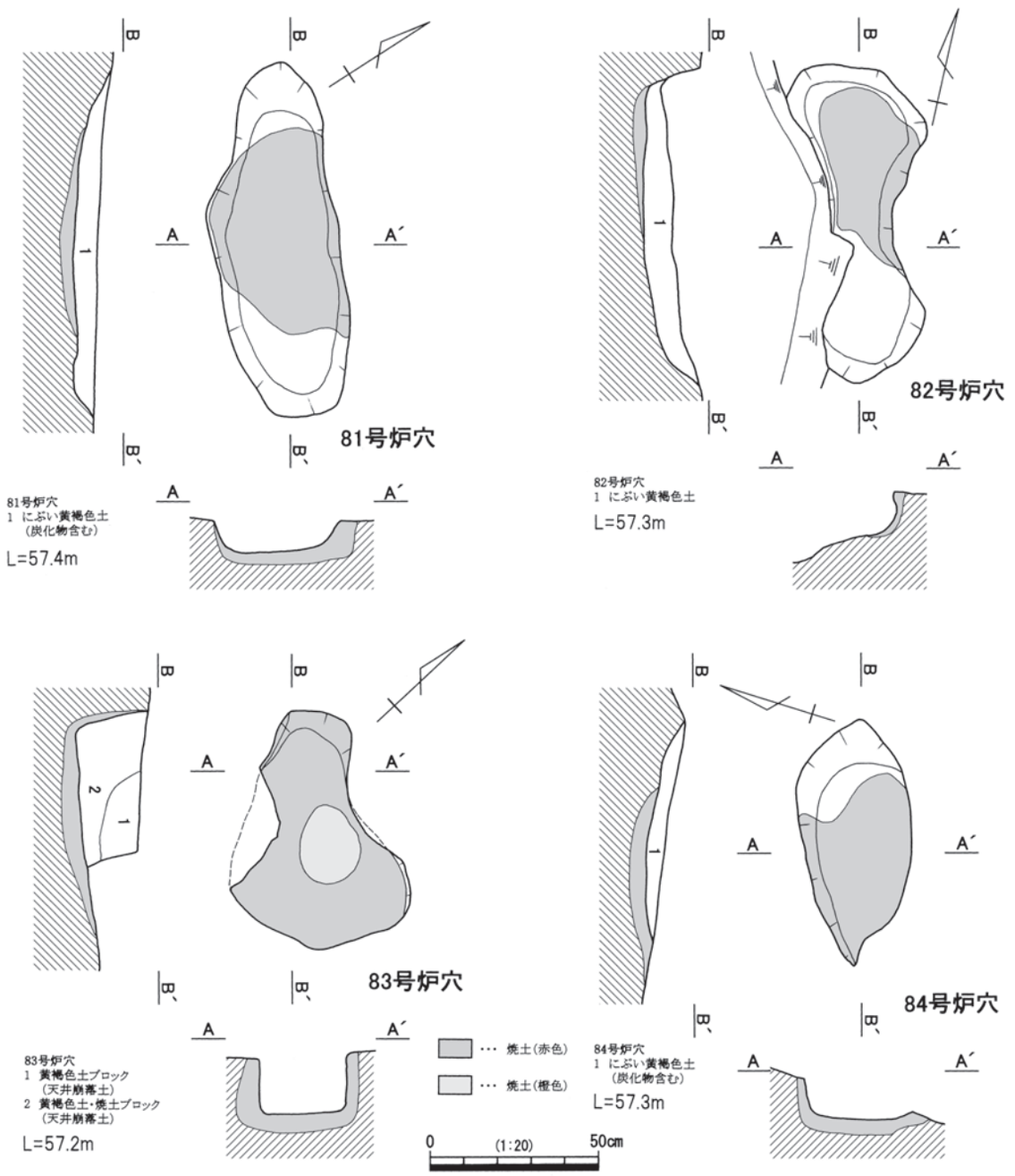


図 63　81 ～ 84 号炉穴実測図

83 号炉穴（図 62・63）

82 号炉穴の西側に位置する。前述のように、前庭部側が一部 82 号炉穴と切り合っていたと推測され、82 号炉穴を切っていた可能性が高い。主軸は北西－南東方向で、北西－南東側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。

燃焼部は、残存する長さ 66 ㎝・最大幅 54 ㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形状となっている。全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。赤化する焼土の厚さは、最も厚い部分で約 6 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。埋土は大きく 2 層に分けられており、いずれも天井の崩落土である。遺物は出土していない。

84 号炉穴（図 62・63）

83 号炉穴から 3.5 ｍ西に位置する。第１検出面から 30 ㎝下方において、燃焼部の一部が発見されている。主軸は東－西方向で、煙道は東側につく。

燃焼部は、長さ 60 ㎝・幅 34 ㎝の規模で残存する。不明瞭ではあるが、おそらくは楕円形に近い形状であろう。奥壁側を除いて、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝となっている。奥壁は非常に緩やかな傾斜となっているが、掘り過ぎている可能性も考えられる。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。

85 号炉穴（図 62・64）

84 号炉穴から２ｍ南に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面から 30 ㎝下方で検出されている。燃焼部の一部が確認されている。

燃焼部は、長さ 66 ㎝・幅 38 ㎝の規模で残存する。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前寄りと側壁の一部には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面が約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。奥壁付近の床面からは、炭化材が出土している。出土状況から、これらの炭化材については、炉穴を使用した際の燃料である可能性が高い。このうちの２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9250 ± 60 yrBP と 9520 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物については出土していない。

86 号炉穴（図 62・64、図版 40）

85 号炉穴から北東へ約２ｍに位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。北側と南側で検出面の高さが大きく異なるが、南側は第１検出面から 70 ㎝掘り下げた高さで検出されている。前庭部については、第１検出面から掘り下げた際に失われている。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 68 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土は、最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面が約４㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝である。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。埋土は大きく３層に分けられ、床面上には天井の崩落土（第２・３層）が確認できる。

燃焼部のやや手前寄りの床面からは、約 10 ㎝程度の大きさの礫が、集められた状態で出土している。多くの礫に被熱の痕跡が認められることから、炉穴の使用時の状態を留めている可能性が高い。

遺物としては、石器が２点出土している。15 はシルト岩製の石槍の未製品である。加工が途中の状態であり、下半を欠いている。製作中に折れてしまったのであろうか。埋土から出土している。16 は石皿である。花崗岩製で、上面には使用による摩滅が確認できる。他の礫とともに、床面から出土している。４分の１程度の破片の状態であり、接合する破片も出土していない。炉穴では、石皿としてではなく、礫として利用していたものと推測される。

87 号炉穴（図 62・64）

86 号炉穴から東へ約 1.5 ｍに位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面より 35 ｍ下方で検出されている。燃焼部の床面付近において、かろうじて検出できた炉穴である。

燃焼部は、長さ 76 ㎝・最大幅 42 ㎝の規模で残存しており、卵形に近い形状である。床面や側壁で、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約５㎝となっている。奥壁はほとん

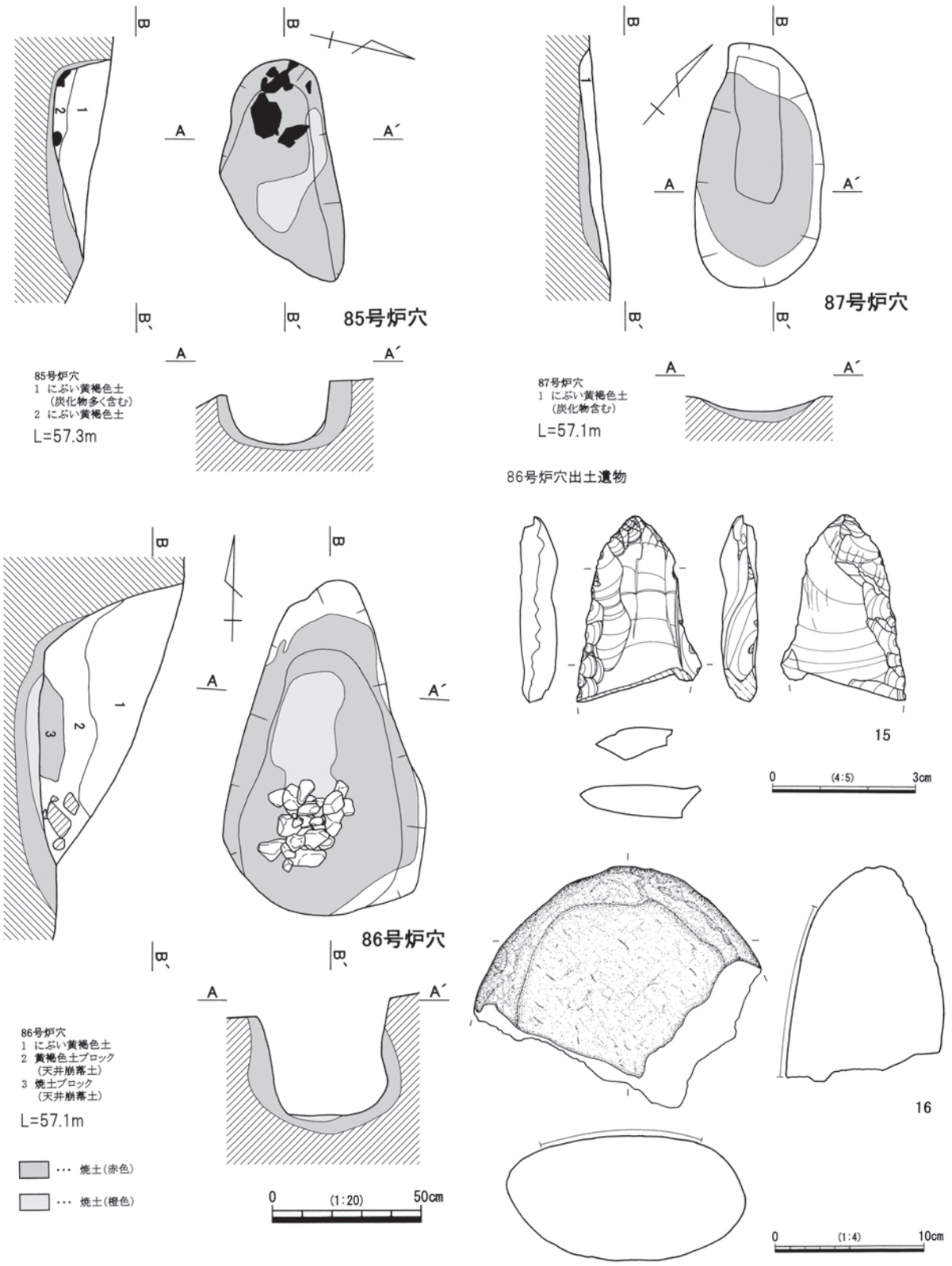


図 64　85 ～ 87 号炉穴実測図・出土遺物

ど残存しないが、下端付近は斜めに立ち上がる。埋土は、地山に近似する、ややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の崩落土は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

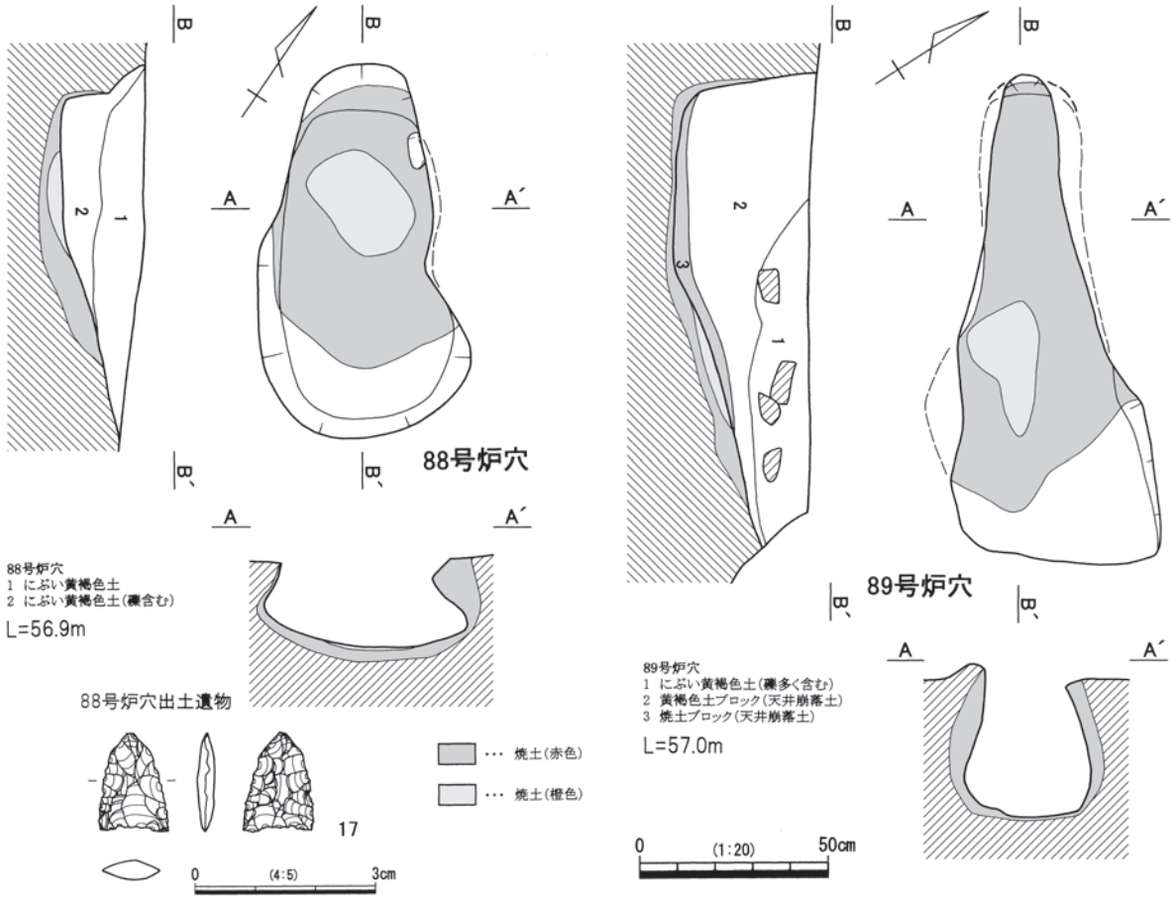


図 65　88・89 号炉穴実測図・出土遺物

88 号炉穴（図 62・65、図版 14・40）

87 号炉穴から約５ｍ南東に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 68 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、楕円形に近い形状となっている。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。上半が斜めになっているが、おそらくは掘り過ぎによるものであろう。前庭部は緩やかな斜面となっている。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

遺物は、埋土から石鏃が１点出土している。17 はチャート製の石鏃で、長さ 1.5 ㎝・幅 1.1 ㎝と小型のものである。埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9580 ± 60 yrBP という結果が得られている。

89 号炉穴（図 62・65）

88 号炉穴から北東へ３ｍに位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、東側は宅地の擁壁による攪乱で失われている。

燃焼部は、長さ 110 ㎝・最大幅 58 ㎝の規模であり、全体的には二等辺三角形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央手前寄りには橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最

も厚い部分で赤化面が約５㎝・橙化面は約２㎝である。検出面から床面までは、深さは約 30 ㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がる。埋土は大きく３つに分けられており、第２・３層は天井の崩落土である。天井崩落後の埋土である第１層では、10 ㎝前後の大きさの礫が多数確認されている。出土状況の記録がないため詳細は不明であるが、第１層の下面付近に集中しており、天井の崩落後に意図的に入れられている可能性も考えられる。

遺物としては、縄文土器１点と剝片が２点出土している。縄文土器は、表面の摩滅が著しく文様が観察できない細片である。いずれも埋土から出土している。

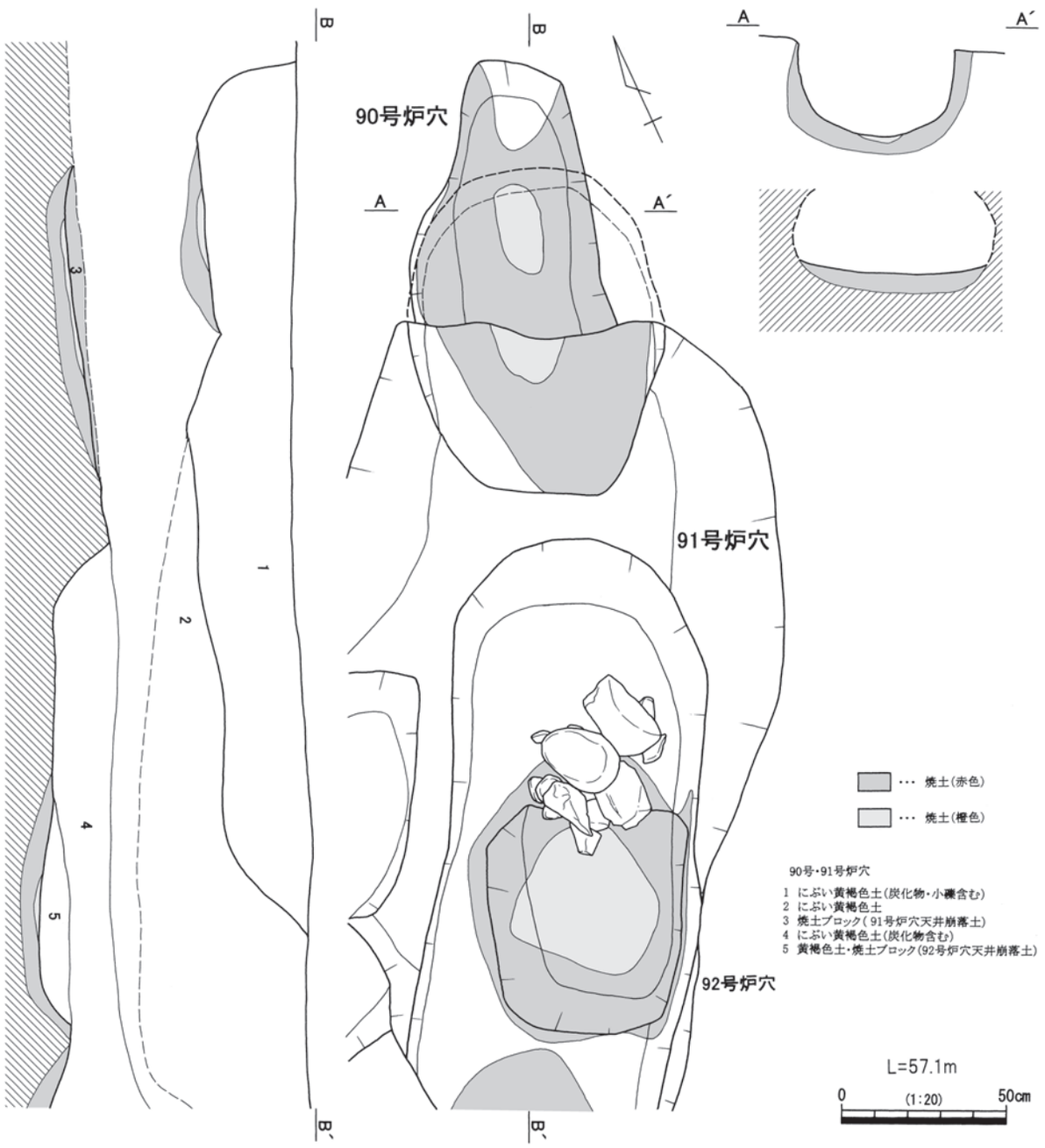


図 66　90・91 号炉穴実測図

90 号炉穴（図 62・66・67、図版 33）

89 号炉穴の北西にある炉穴群の一つである。炉穴群の北東部に位置し、91 号炉穴と上下に重なる位置関係にある。炉穴群の中で１基のみ、第１検出面で検出されている。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。燃焼部は、長さ 72 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で検出されている。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面が確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝・橙化面は約２㎝となっている。奥壁は湾曲しながら直立気味に立ち上がる。埋土は単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

検出されている状況は以上の通りであるが、燃焼部の焼土面が手前で直線的に切れている点や、前庭部が深くなっている点など、90 号炉穴については正確に検出されていない可能性が高い。この１基のみ第１検出面で検出されたことから、複数の炉穴が重なっているとの認識がないまま、前庭部を掘り広げてしまったようである。特に、前庭部として検出されている形状や深さは、ほとんど当てにならないと考えた方がよい。

遺物としては、縄文土器や石器が多数発見されている。ただし、調査所見によれば、92 号炉穴の上面付近まで 90 号炉穴の遺物として取り上げたようであり、明らかに炉穴群の様々な遺物が混在してしまっている。遺物を炉穴ごとに分離することができないため、「90 号炉穴周辺出土遺物」として報告する。

18 ～ 21 は口縁部の破片である。外面にはＲＬ斜走縄文が、内面の口縁端部にはＲＬの横走縄文が施

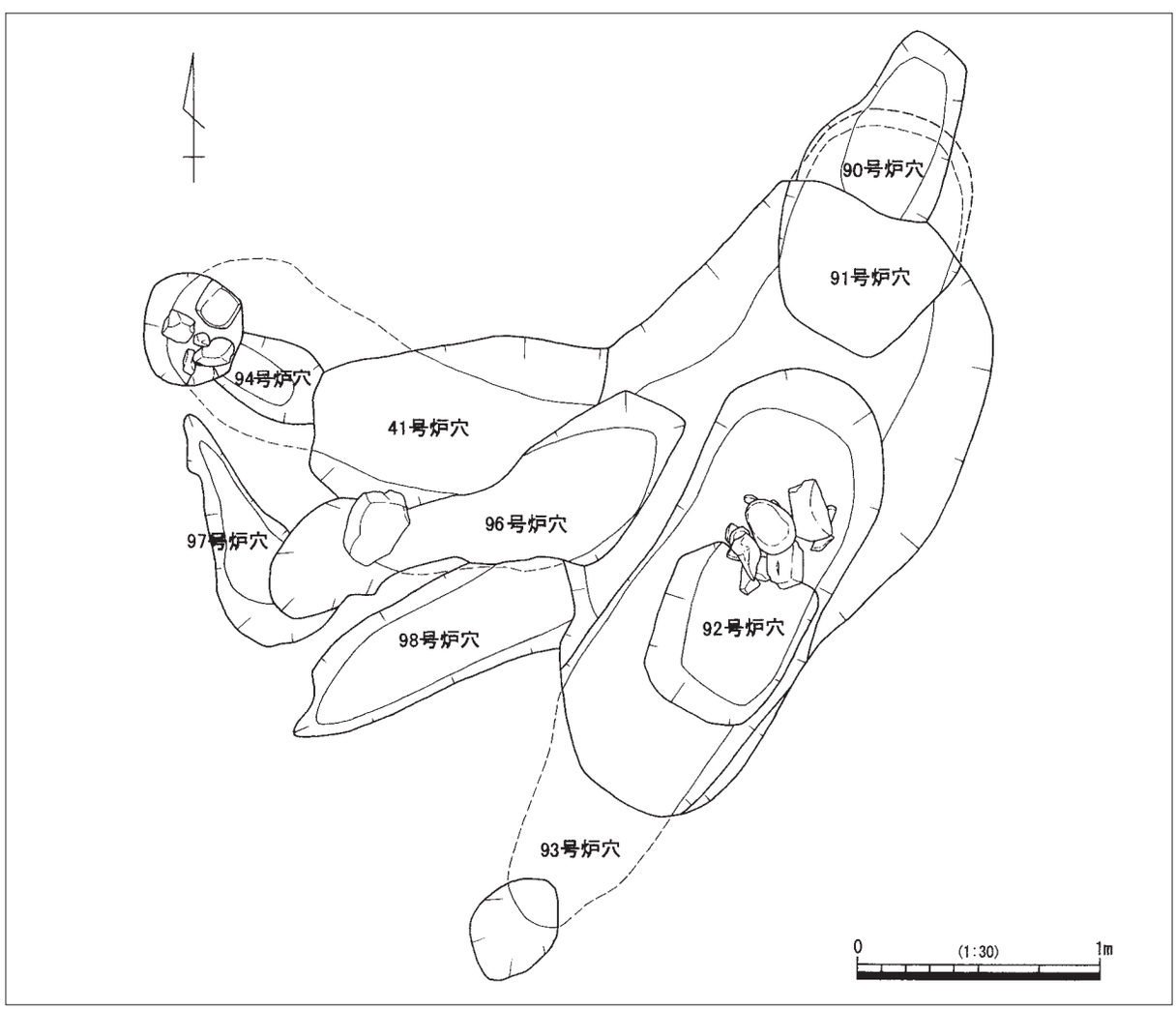


図 67　90 ～ 98 号炉穴配置図

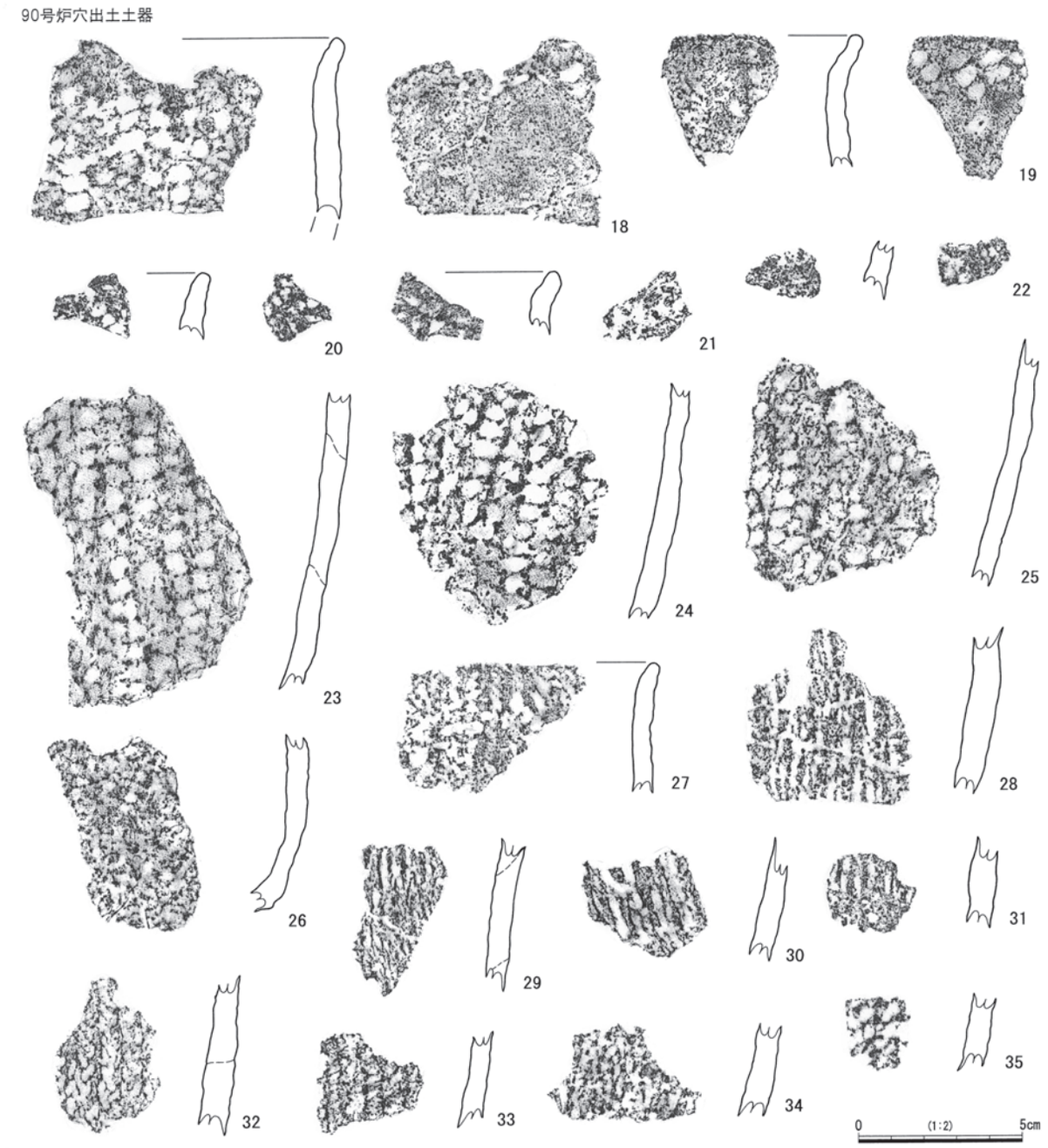


図 68　90 号炉穴周辺出土遺物（１）

される。口縁部はわずかに外反する。22 ～ 25 は胴部、26 は底部の破片である。いずれも外面にはＲＬ縄文が施されている。27 ～ 34 は、外面に撚糸文が施されたものである。27 は口縁部の破片であり、外面にはＲ撚糸文が施され、口縁部はごくわずかに外反する程度となっている。28 ～ 35 は胴部の破片である。28 ～ 31 にはＲ、32 にはＲの組紐、33・34 にはＬ、35 にはＬＲの撚糸文が施されている。

36 ～ 39 は石鏃である。36・38・39 はシルト岩、37 は瑪瑙を石材として用いている。40 は流紋岩製の石槍で、基部を欠いている。41 ～ 45 は楔形石器である。41・42・44 はチャート、43・45 はシルト岩を石材として用いている。46 はシルト岩製の局部磨製石斧である。縦方向に大きく破損しており、破片の状態で出土している。47 は石核で、石材は珪質シルト岩である。図化したものの他に、剥片が多数出土している。

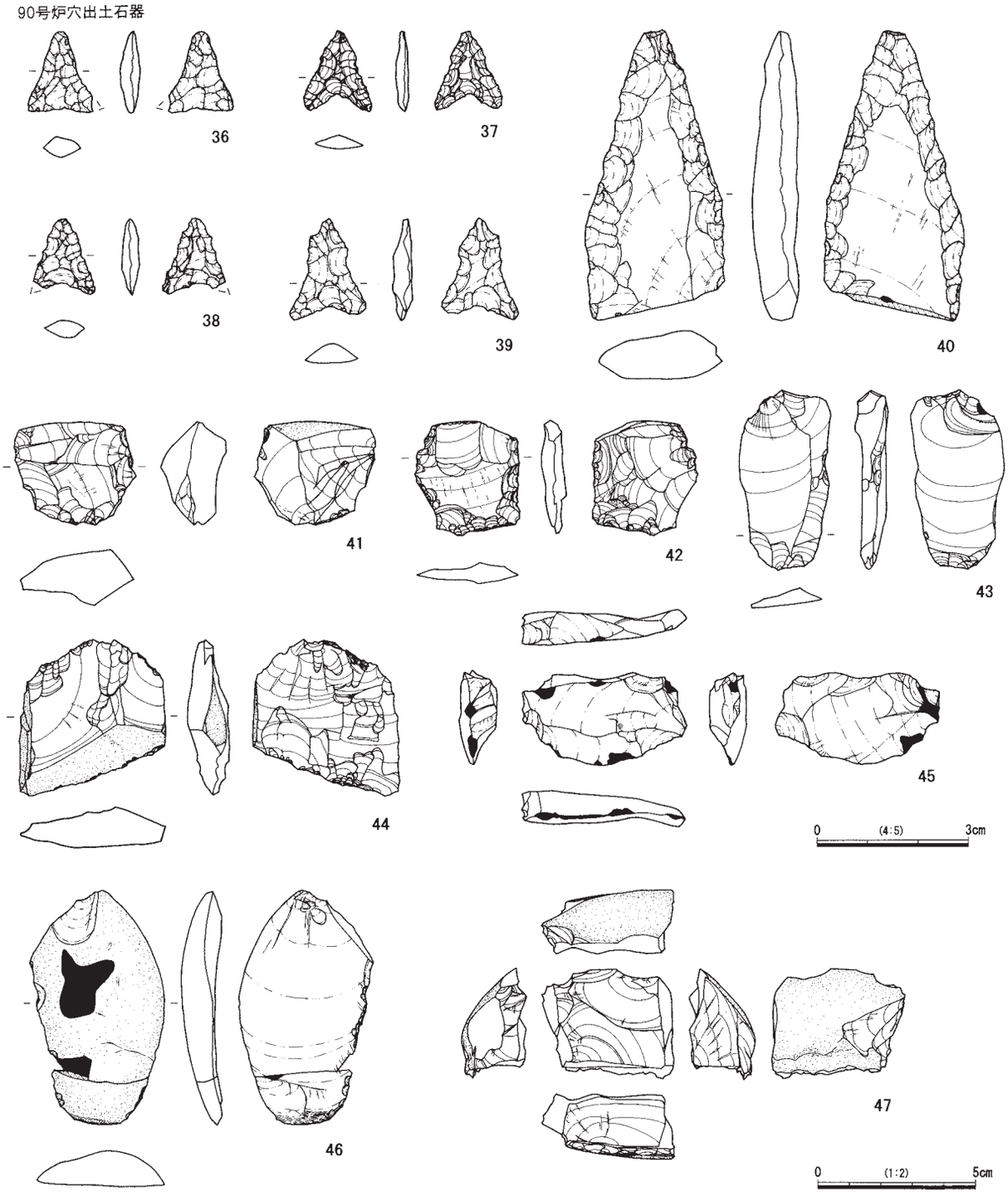


図 69　90 号炉穴周辺出土遺物（２）

先に述べたように、これらの遺物は、炉穴群の中心部分の埋土から出土したものであり、個別どの炉穴に伴うものか峻別することはできないが、ほかの炉穴・炉穴群と比べて、石器や剥片を豊富に出土している点が注目される。

なお、同じ状況で炭化物も採取されているが、これも炉穴群の中心部からの出土として扱うべき試料である。C 14 年代測定の結果としては、9580 ± 50 yrBP という数値が得られている。

91 号炉穴（図 62・66・67）

90 号炉穴の下層にほぼ重なるかたちで位置している。90 号炉穴の検出時には存在が認識されておらず、約 60 ㎝下方まで掘り下げた段階で検出されている。そのため、燃焼部は床面付近が検出されているのみであり、上部の状況は明らかでない。

燃焼部は、長さ 94 ㎝・最大幅 78 ㎝の規模で検出されており、全体としては楕円形に近い形状である。床面の全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面が約１㎝である。ごくわずかではあるが、床面の上に天井の崩落土とみられる焼土ブロック（第３層）が確認されている。上部の状況が不明なため断定はできないが、全体が崩落しているとすれば、90 号炉穴の構築が困難になることから、燃焼部内の部分的な崩落に留まっているものと推測される。また煙道についても、位置的には 90 号炉穴と重なる可能性もあるが、90 号炉穴の調査時に検出されていない以上、不明とせざるを得ない。前庭部は、92 号炉穴の跡を利用しており、92 号炉穴より後出する事が明らかである。

遺物については、91 号炉穴としては取り上げられていないが、先述のように 90 号炉穴出土とされているものに、前庭部の遺物が混在している可能性が高い。

92 号炉穴（図 62・67・70、図版 14・15）

91 号炉穴の南側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 70 ㎝下方で検出されている。本炉穴群で最初に築かれた炉穴である。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で検出されており、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面の最も深い部分までの深さは、約 95 ㎝となっている。奥壁の下部はやや斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 40 ㎝・幅 60 ㎝の平坦面が確認できるが、93 号炉穴の築造時に多少改変されている可能性もある。埋土は大きく２層に分けられる。燃焼部内には、天井の崩落土（第４層）が確認されている。上面が 93 号炉穴の床面と同じ高さであり、上層の埋土（第１層）が 93 号炉穴と共通することから、92 号炉穴の天井崩落土を除去・整地した後に、93 号炉穴が築かれていることがわかる。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

93 号炉穴（図 62・67・70、図版 14・15・37・42）

92 号炉穴の南側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。天井が一部残存する。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 68 ㎝の規模で、全体は二等辺三角形に近い形状となっている。天井部を除くほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝となっている。煙道は直径 45 ㎝の大きさで、奥壁は斜め上方へ立ち上がる。天井は約 45 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 40 ㎝となっている。天井が部分的に剥落していることから、実際にはもう少し狭かったとみてよい。前庭部には、92 号炉穴の跡を利用し、長さ 130 ㎝の広い平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、燃焼部内には一部剥落した天井とみられる焼土（第２層）も確認できる。

前庭部からは、20 ㎝程の大きさの礫が集められた状態で出土している。この礫についての観察記録

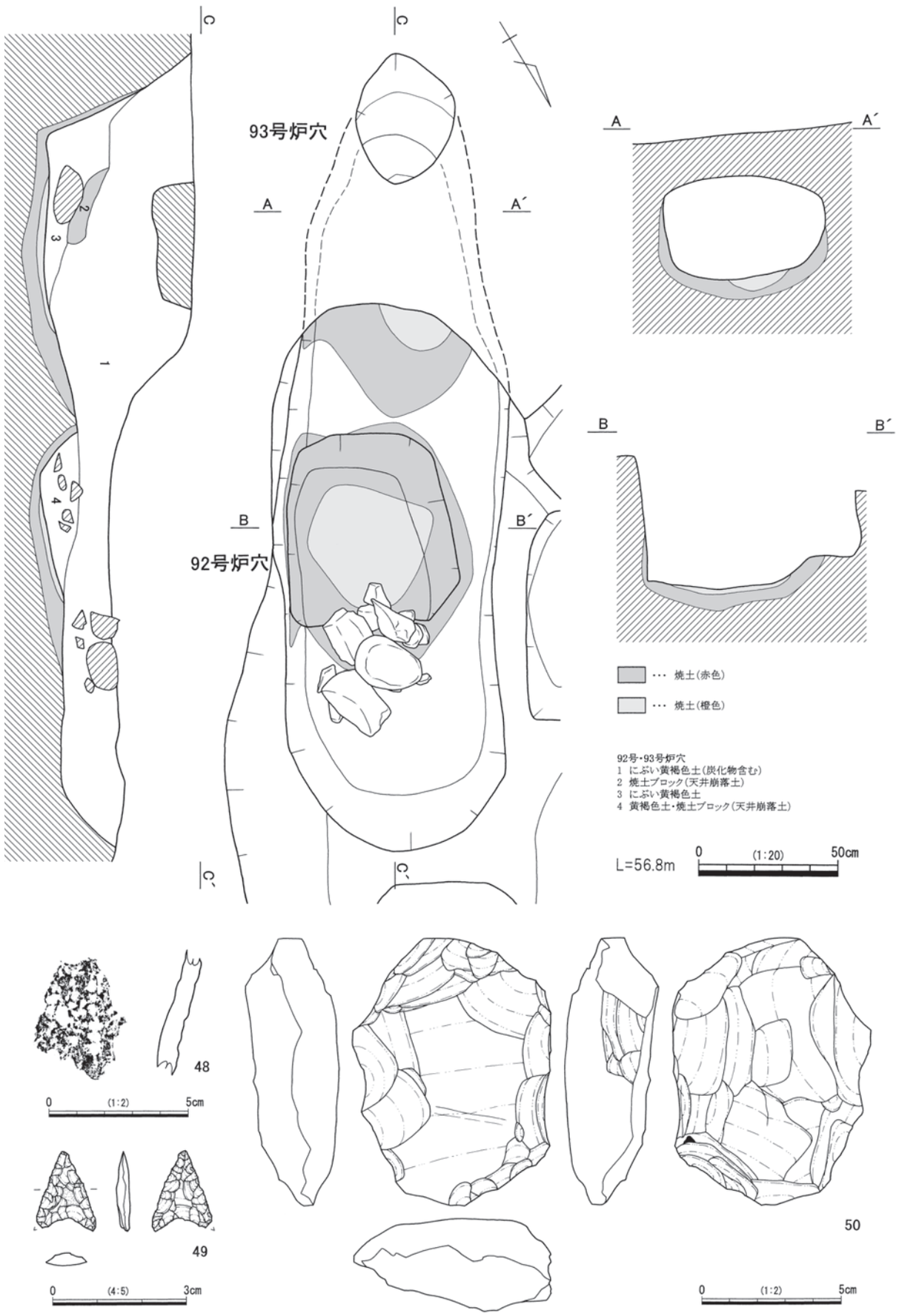


図 70　92・93 号炉穴実測図・出土遺物

などが残されていないため詳細は不明であるが、何らかの理由で人為的に集められたものとみてよい。

遺物としては、縄文土器1点と石器2点が出土している。48は縄文土器の胴部の破片であり、外面にはＲＬ撚糸文が施されている。49はシルト岩製の石鏃で、50は安山岩の石核である。いずれも埋土から出土したものである。また、埋土中からは炭化物も採取されており、Ｃ14年代測定により9560±50 yrBPという結果が得られている。

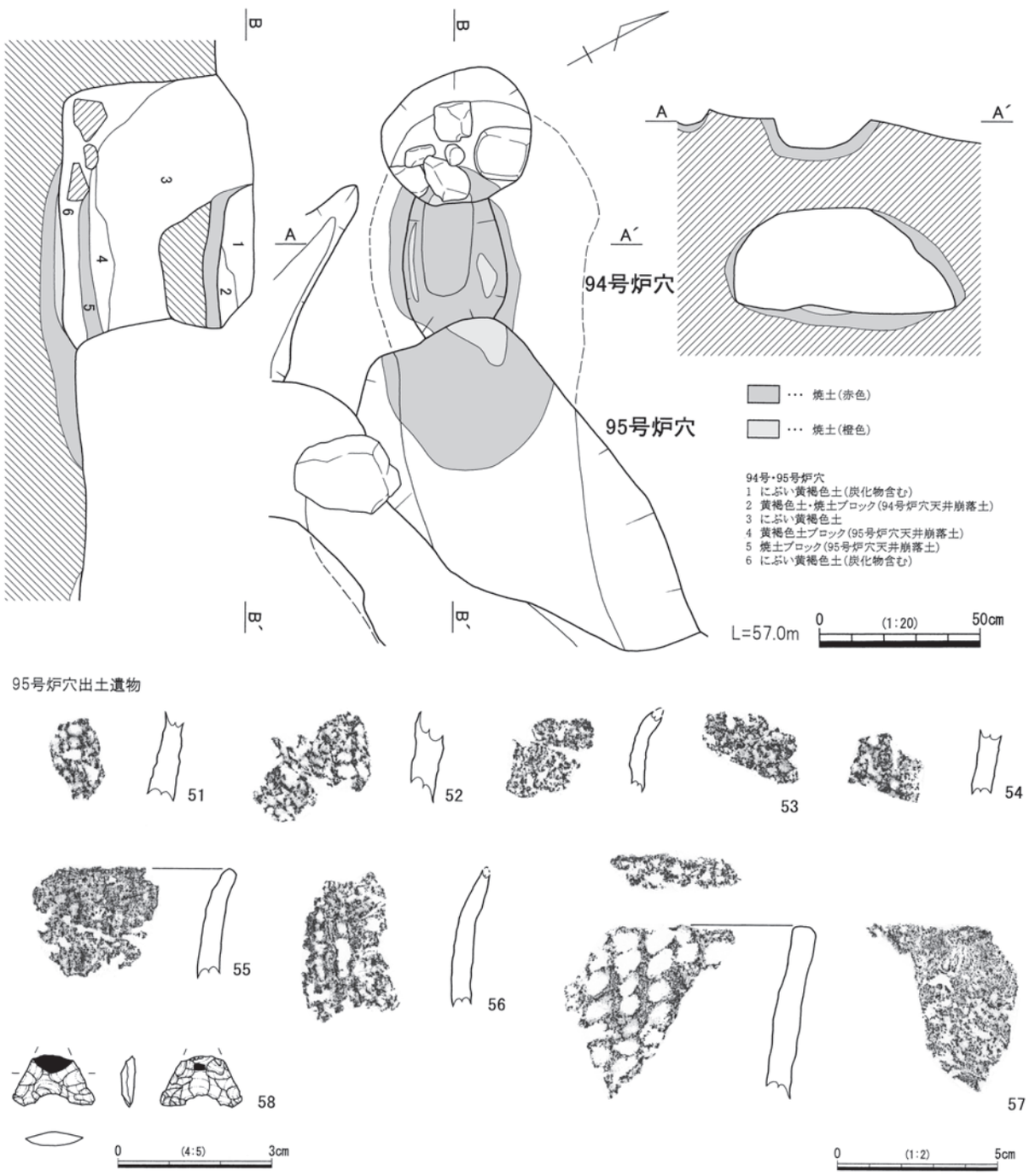


図71　94・95号炉穴実測図・出土遺物

94 号炉穴（図 62・67・71、図版 15）

炉穴群の西側に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。95 号炉穴の掘り下げ後に、天井部で存在が確認されているため、前庭部は未検出である。95 号炉穴との前後関係については、現地では確認できていないが、高さなどからみて、95 号炉穴の埋没後に本炉穴が築かれている可能性が高いと推測される。

燃焼部は、長さ 35 ㎝・幅 30 ㎝の規模で検出されており、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、部分的に橙化面も確認できる。赤化した焼土の厚さは、最も厚い部分で５㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられており、床面上には天井の崩落土とみられる焼土ブロック（第２層）が確認できる。土器や石器などの遺物は出土していない。

95 号炉穴（図 62・67・71、図版 14・15・37・40）

94 号炉穴の下方に位置する。94 号炉穴と同様に、主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。隣接する 96 号炉穴とともに、前庭部側を大きく掘り下げた段階で、焼土面が検出されたことにより存在が確認されている。一部天井が残存するが、そのような発見の経緯からみて、検出されている以上に残存していた可能性もある。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模であり、全体は楕円形に近い形状である。奥壁と天井の一部を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が９㎝、橙化面は３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。煙道は直径 35 ㎝の大きさで、直下の燃焼部の幅よりも狭い。天井は約 35 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 30 ㎝となっている。天井の剥落が確認できることから、実際はもう少し低かったものと推測される。前庭部は 96 号炉穴の床面につながる。埋土は大きく４層に分けられており、床面から５㎝程上に天井の崩落土（第４・５層）が確認される。量が少ないことなどからみて、内部が一部剥落した程度とみてよい。

奥壁側の床面からは、10 ～ 20 ㎝程の大きさの礫が集められた状態で出土している。観察所見が残されておらず、被熱の状況が不明のため、炉穴の使用時に用いられたものか否かについては明らかにし得ない。ただし、大型の礫が多く、奥壁側に集められた状態で床面から出土していることから、自然に流入したものとは考えにくい。

遺物としては、縄文土器と石器が出土している。51 ～ 57 は縄文土器である。51 と 52 は胴部の破片であり、外面にはＲＬ縄文が施文される。53 は口縁部の破片であり、外面にはＲＬ縄文が施文され、磨滅しているため不鮮明ではあるが内面にも施文が確認できる。非常に薄手で、口縁部は外反する。54 は胴部の破片で、外面にはＬ撚糸文が施される。55 ～ 57 は口縁部の破片である。55 と 56 は、外面にＲ撚糸文が施文され、口縁部はやや外反する。57 はやや厚手のつくりで、口縁部が外反しない。外面にはＬＲ撚糸文が施され、口縁端部にも施文が確認できる。58 は凝灰岩製の石鏃で、先端部を欠いている。図示したものの他に、縄文土器片と剥片も多数出土している。これらはいずれも、前庭部付近を掘り下げた際に出土したものであり、出土層位については不明である。

燃焼部内では、土器や石器などの遺物は出土していないが、埋土から炭化物が採取されている。Ｃ 14 年代測定を行っており、9540 ± 50 yrBP という結果が得られている。

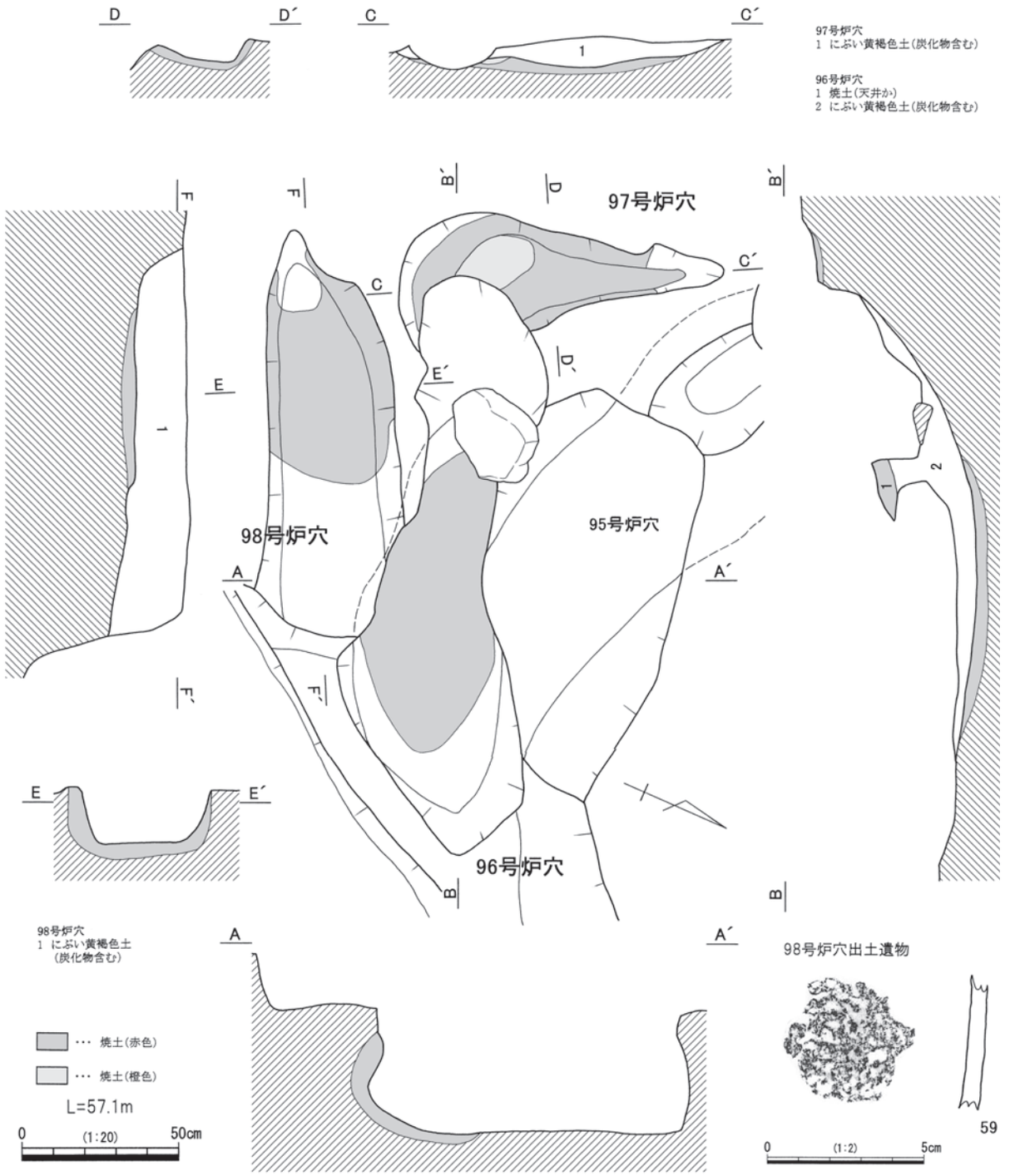


図 72　96 ～ 98 号炉穴実測図・出土遺物

96 号炉穴（図 62・67・72）

95 号炉穴の南側に隣接している。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第 1 検出面より 30 ㎝程下方で検出されているが、輪郭をはっきり検出しない状態で、95 号炉穴の前庭部とともに掘り下げられている。そのため、土層の記録もほとんど残されていない。

燃焼部は、長さ 100 ㎝･最大幅 45 ㎝の規模で、ややいびつではあるが二等辺三角形に近い形状となっている。床面と側壁には、全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 5 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは､約 80 ㎝となっている。奥壁は湾曲しながら立ち上がる。

前庭部は 92・93 号炉穴の方へのびる。土層の記録が残されていないため不確実ではあるが、前庭部の高さが、92・93 号炉穴の前庭部上端となっており、同様の状況にある 91 号炉穴と近い時期の炉穴である可能性が高いと推測される。少なくとも､93 号炉穴よりも後出するものであることは確かといえよう。埋土の記録はごく一部のみであるが、燃焼部の上方で焼土（第２層）が検出されている。天井の残存か崩落土であると推測される。

奥壁側では、30 ㎝程の大きさの角礫が発見されている。礫についての観察記録がないため被熱の有無については不明であるが、炉穴の使用時の状態とは考えにくい。炉穴の使用後（廃絶時）に、煙道から落とし込まれている可能性が高いと推測される。

土器や石器などの遺物は出土していないが、埋土中から炭化物が採取されている。２点について C 14 年代測定を実施しており、9580 ± 50 yrBP と 9600 ± 50 yrBP という結果が得られている。

97 号炉穴（図 62・67・72）

96 号炉穴の西側に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道をもつ。第１検出面より約 30 ㎝下方で、燃焼部の底部付近が検出されている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模であり、全体としては二等辺三角形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、手前側には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝となっている。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。天井の残存や崩落の痕跡は、確認されていない。なお、96 号炉穴に一部切られる形で図化されているが、前述のように 96 号炉穴については輪郭がはっきりしないまま掘り進められた経緯があり、切り合いが正しいという確証がない。96 号炉穴との先後関係は不明としておく。

遺物としては、磨滅が著しく図化できない縄文土器の細片が、２点出土しているのみである。

98 号炉穴（図 62・67・72、図版 37）

96 号炉穴の南側に隣接する。主軸は南西－北東方向であり、煙道は南西側につく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ約 70 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模であり、全体としては卵形に近い形状である。奥壁側の一部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約５㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は幅 30 ㎝の平坦面が設けられており、長さは 50 ㎝まで確認されている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。

なお、現地では 92・93 号炉穴の方が先に掘られているが、これは 92・93 号炉穴の掘り下げ後に 98 号炉穴が検出されたためであり、切り合い関係を反映したものではない。土層の記録がない以上、確かめる術はないが、前庭部の高さは 90 号炉穴とほぼ同じである。90 号炉穴とともに、この炉穴群における最終段階の炉穴の一つである可能性が高いと推測される。

遺物としては、縄文土器と剥片が出土している。59 は縄文土器の胴部の破片であり、外面にはＲ撚糸文が施されている。埋土の上層から出土している。このほかに､縄文土器の細片３点と剥片が１点が､埋土から出土している。

99 号炉穴（図 62・73、図版 15・42）

98 号炉穴から約 4 m北西に位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 60 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で焼土面が検出されている。奥側の細くのびる部分については掘り過ぎの可能性が高く、全体としては二等辺三角形に近い形状であったと推定される。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 5 ㎝である。床面の最も深い部分までの深さは、25 ㎝となっている。埋土は 2 層に分けられているが、焼土面の立ち上がりの様子からみると、第 2 層は地山であろう。奥壁はやや湾曲しながら立ち上がる形態と推測される。前庭部も深さはやや掘り過ぎているようであるが、規模としてはほぼ同程度とみてよいであろう。長さ 45 ㎝・幅 40 ㎝程度の平坦面が設けられている。

遺物としては、剥片が 1 点出土しているのみである。60 はシルト岩を石材とする剥片であり、二次加工が加えられている。なお、埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。

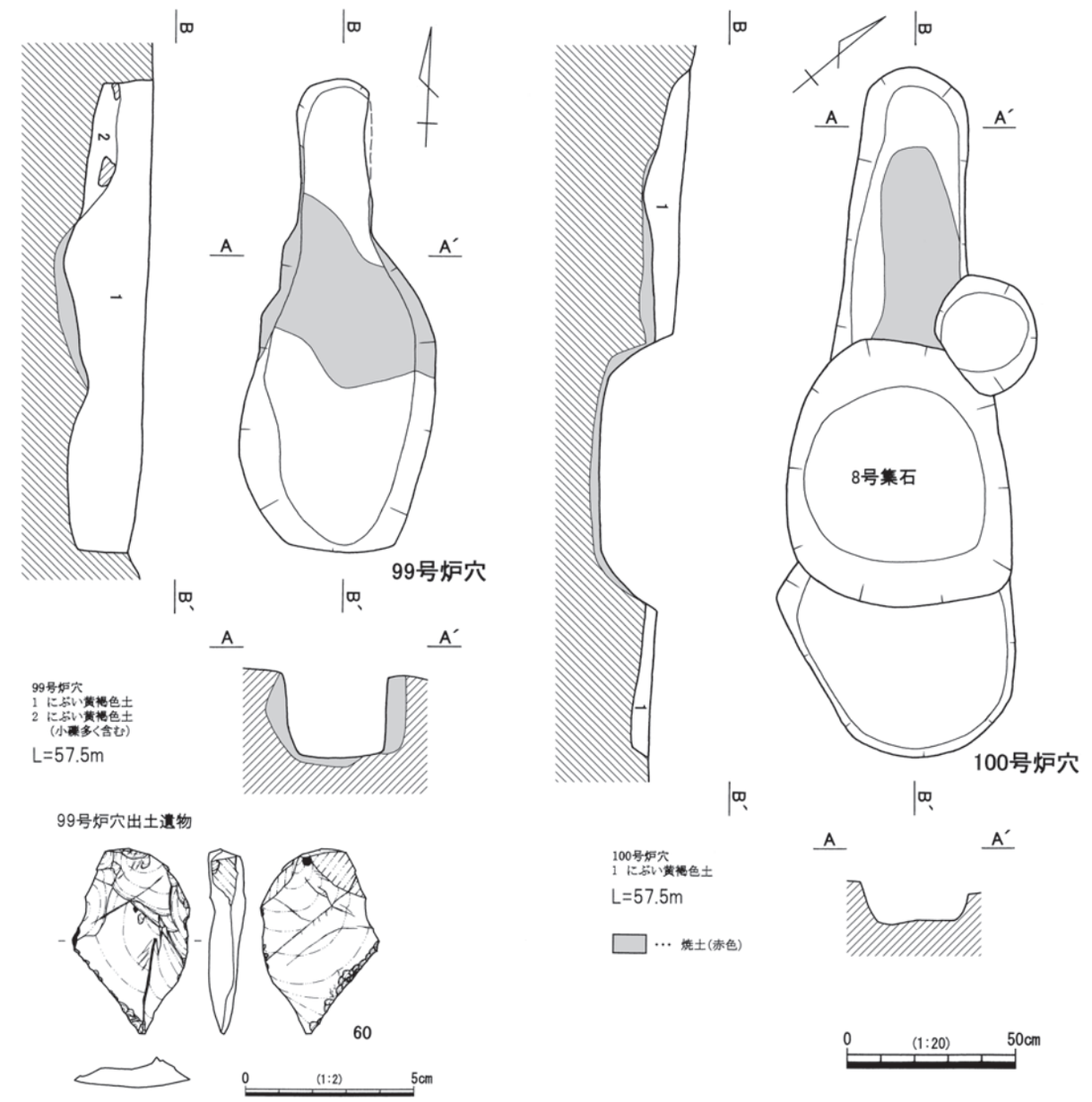


図 73　99・100 号炉穴実測図・出土遺物

100 号炉穴（図 62・73）

99 号炉穴から約１ｍ北東に位置する。主軸は北東－南西方向であり、北東側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。中央付近が８号集石によって失われており、100 号炉穴が先行して築かれていたことがわかる。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、現存長 60 ㎝・幅 20 ㎝の範囲で確認されている。調査では一回り大きい形で認識されているが、おそらくは掘り過ぎであろう。燃焼部の形としては、二等辺三角形に近い形状と推測される。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約３㎝である。前庭部には、幅 60 ㎝・長さ 40 ㎝以上の平坦面が設けられている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。

遺物としては、図化できない細片であるが、検出面から縄文土器の細片が８点出土している。

101 号炉穴（図 62・74、図版 40）

100 号炉穴の東側に隣接しており、前庭部側は攪乱によって失われている。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。奥側は細長く掘られているが、側壁の焼土が続いておらず、掘り過ぎの可能性が高い。

燃焼部は残存部で最大幅 50 ㎝、長さは焼土面の立ち上がりから 55 ㎝前後と推定される。掘り過ぎの部分を除き、全面で赤化した焼土面が検出されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約９㎝と厚い。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。土層の注記には、拳大の礫を含むとされているが、掘り過ぎの部分の地山礫と推測される。

遺物は、石器が１点出土しているのみである。61 はシルト岩製のスクレイパーで、検出面から出土している。

102 号炉穴（図 62・74）

101 号炉穴から攪乱を挟んだ南側に位置する。主軸は南－北方向であり、北側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。103 号炉穴の前庭部と切り合う位置関係にある。102 号炉穴の検出面が低いため、調査時に土層による切り合いの確認はできていないが、103 号炉穴の輪郭が確認されていることから、103 号炉穴が切っていたとみてよいであろう。

燃焼部は、残存長 75 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で、楕円形または二等辺三角形に近い形状と推測される。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土面の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝･橙化面が約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝となっている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。

103 号炉穴（図 62・74）

102 号炉穴の西側に位置しており、前庭部が 102 号炉穴と一部重複する。前述のように、切り合い関係は 103 号炉穴が 102 号炉穴を切っていると推測される。主軸は東－西方向であり、西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。北東部は攪乱によって失われている。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、全体としては二等辺三角形に近い形状である。奥側の一部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、20 ㎝である。奥壁は、多少掘り過ぎているようではあるが、焼土面の立ち上がりから斜め上方へ立ち上がるものと推測される。前庭部には、長さ 60 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。

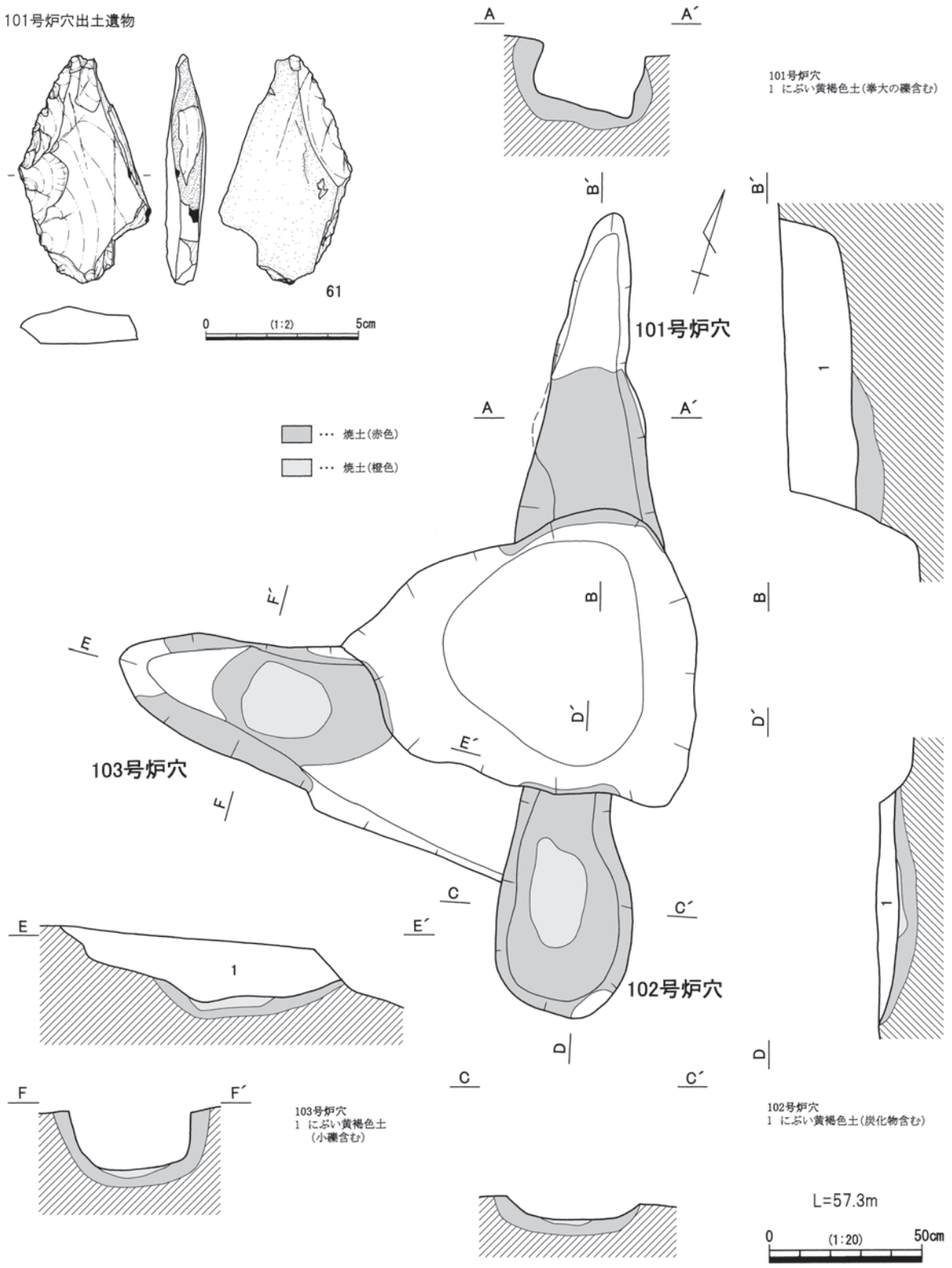


図 74　101 ～ 103 号炉穴実測図・出土遺物

埋土から出土した炭化物についてC 14 年代測定を行っており、9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

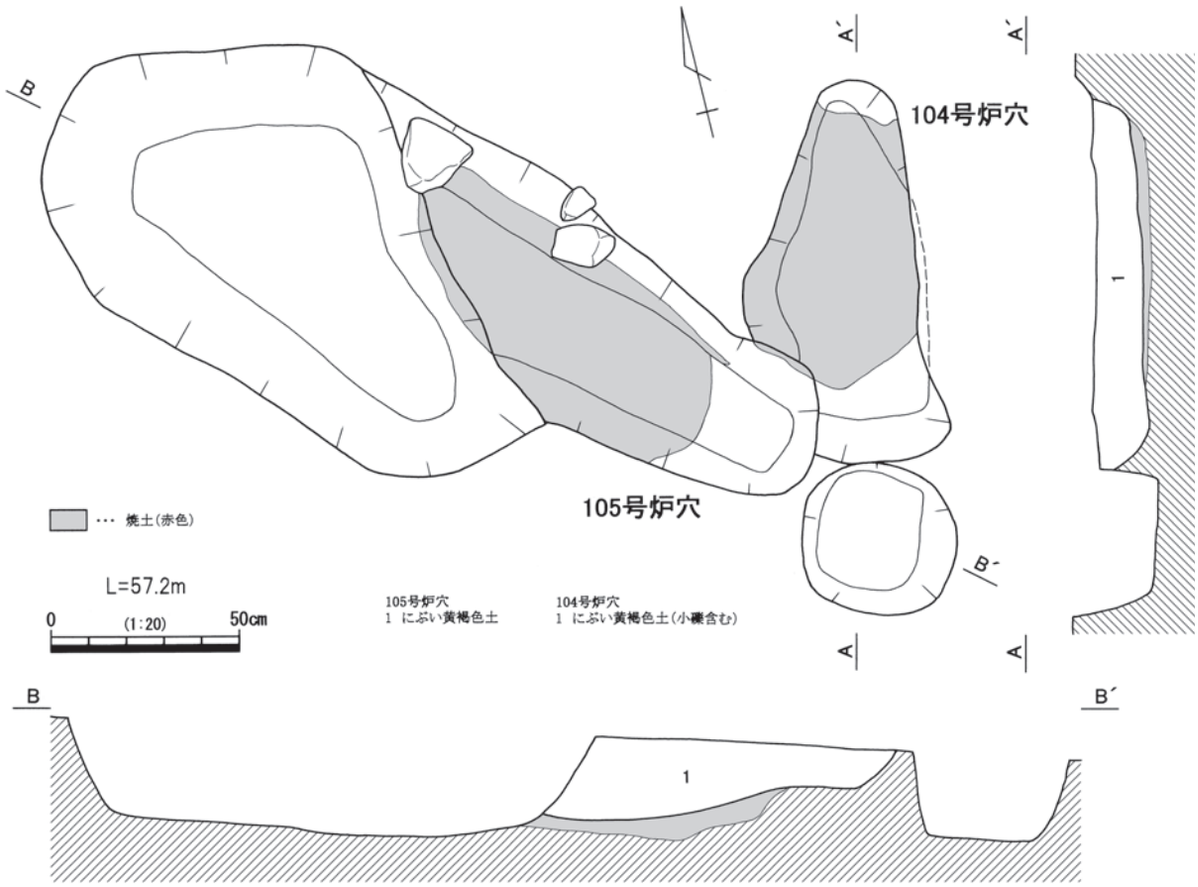


図 75　104・105 号炉穴実測図

104 号炉穴（図 62・75、図版 15）

103 号炉穴から３ｍ東側に位置する。主軸は南－北方向であり、北側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。焚口付近で 105 号炉穴と重複するが、切り合い関係については記録がなく不明である。

燃焼部は、長さ 75 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で、全体としては二等辺三角形に近い形状である。床面と側壁の全面で、赤化した焼土面が検出されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは 20 ㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部には、10 ㎝程の奥行きの平坦面が確認されている。埋土は単層で、天井の残存や崩落の痕跡は認められない。

遺物としては、埋土から剥片が１点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9690 ± 50 yrBP という結果が得られている。

105 号炉穴（図 62・75、図版 15）

104 号炉穴の西側に一部重複して位置する。主軸は南東－北西方向であり、南東側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。攪乱により、前庭部側が大きく失われている。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模が残存する。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されている。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約７㎝である。第１検出面から床面までの深さは、25 ㎝である。奥壁は、やや斜めに立ち上がる。埋土は単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

遺物としては、図化できない縄文土器の細片が１点出土しているのみである。

106 号炉穴（図 62・76、図版 16）

105 号炉穴から北東へ約 2 mに位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。東側は攪乱により失われている。

燃焼部には、手前から長さ 90 ㎝・最大幅 45 ㎝の範囲のほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 4 ㎝、橙化面が約 2 ㎝である。焼土面の範囲は、ちょうど天井が残存したとされる部分の前面にあたっており、そこを境に

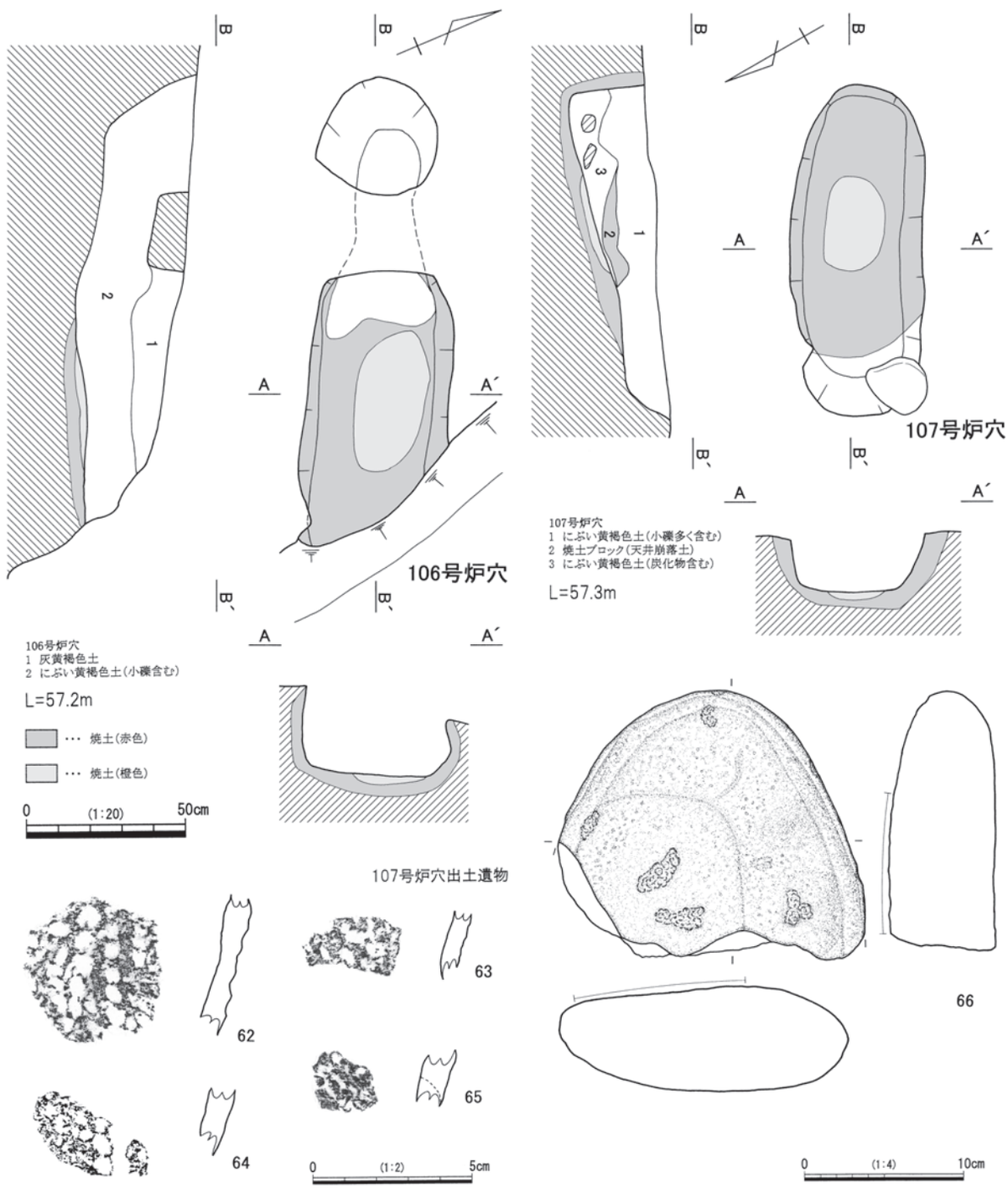


図 76　106・107 号炉穴実測図・出土遺物

全く被熱しないというのは、いささか不自然である。調査所見によると、ほとんど地山との土質の違いがなく、天井の検出は非常に困難であったとされている。その点を考え合わせると、天井は残存しておらず、天井の前面とされた部分が奥壁に相当するとみたほうが自然である。

遺物としては、埋土中から剥片が２点出土しているのみである。また床面付近からは、炭化物が採取されている。２点についてＣ 14 年代測定を実施しており、9490 ± 50 yrBP と 9560 ± 50 yrBP いう結果が得られている。

107 号炉穴（図 76、図版 37）

106 号炉穴から約 1.5 ｍ北東に位置する。主軸は南東－北西方向で、南東側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面が確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が７㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面の最も深い所までの深さは 24 ㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部は奥行き５㎝程の平坦面が設けられているが、足場としては狭小である。掘り足りていないか、緩やかに傾斜する前庭部であったと推測される。前庭部の検出面付近から、石皿の破片が出土している。埋土は、大きく３層に分けられており、床面上には焼土ブロックが確認されている。分量的に少なく、天井が部分的に剥落したものと推測される。

遺物としては、縄文土器と石皿が出土している。62 ～ 65 は縄文土器の胴部の破片であり、外面に 62 ～ 64 はＲ撚糸文、65 はＬ撚糸文が施されている。いずれも埋土から出土している。66 は石皿で、石材は花崗岩である。前述のように前庭部の検出面付近から破片の状態で出土している。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

108 号炉穴（図 77、図版 16）

107 号炉穴から約２ｍ北東に位置する。主軸は南－北方向であり、北側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。前庭部は 109 号炉穴と共有している。奥壁側が溝状に長くのびるような形で検出されているが、おそらくは掘り過ぎであろう。壁面の焼土が消える付近まででであったものと推定される。

焼土が残る辺りまでを燃焼部とすると、燃焼部は長さ 95 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模になる。全体としては二等辺三角形に近い形状であろう。焼土面の厚さは、最も厚い部分で約５㎝である。前庭部は、長さ 40 ㎝程の平坦面を経て 109 号炉穴の前庭部と連結する。埋土は含まれている礫の量から、大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。いずれも 109 号炉穴と同じ堆積を示していることから、両炉穴が同時に埋没していることがわかる。天井の残存や崩落の痕跡は確認できない。土器や石器などの遺物は出土していない。

109 号炉穴（図 77、図版 16）

108 号炉穴の南側に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。108 号炉穴とともに第１検出面で検出されている。

燃焼部は長さ 100 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁の一部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。中央やや手前寄りには、橙化した焼土面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは 25 ㎝である。奥壁はやや湾曲しながら直立気味に立ち上がる。前庭部には、奥行き 30 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が設けられており、108 号炉穴の前庭部とつながる。埋土は、前述のように 108

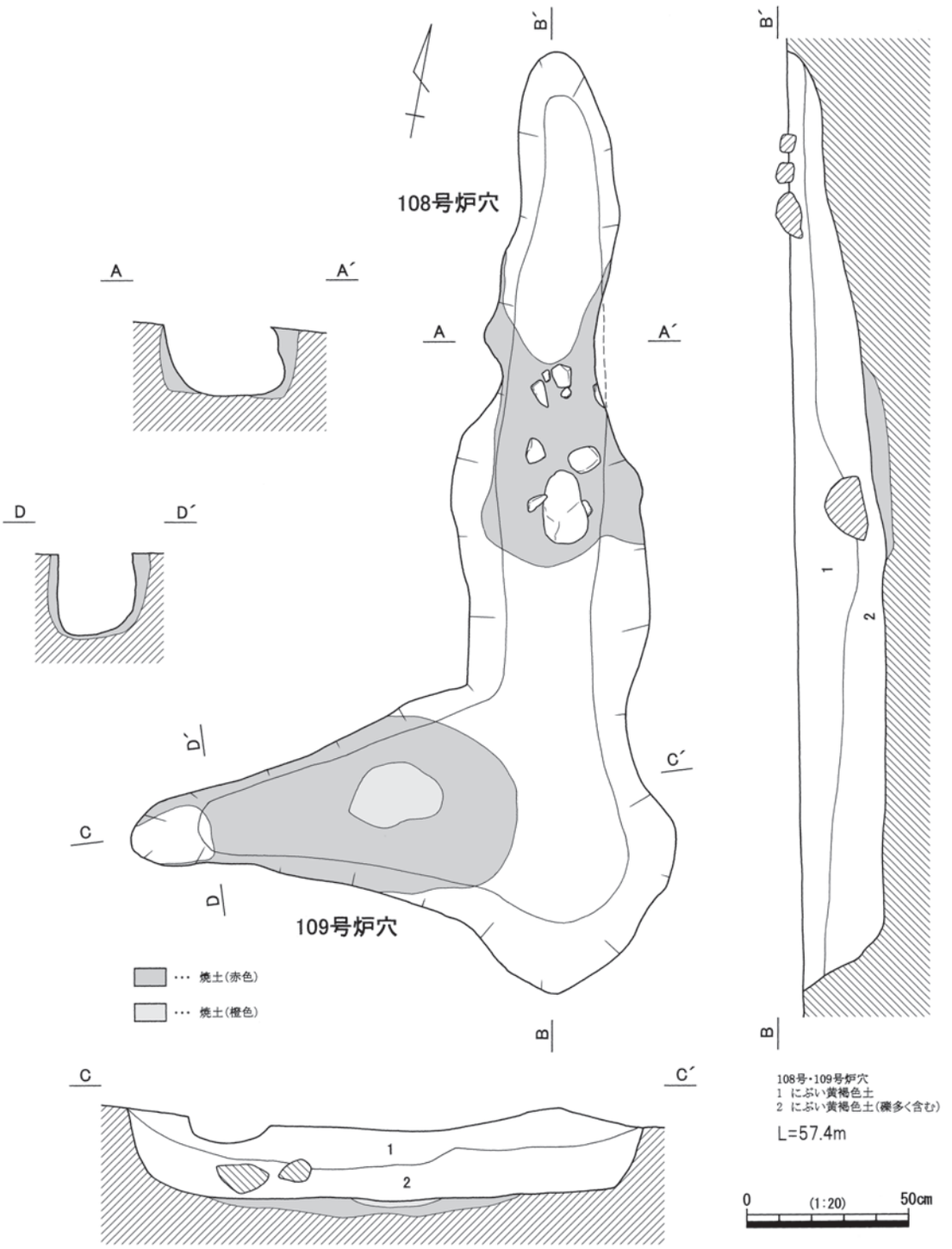


図 77　108・109 号炉穴実測図

号炉穴と同じ堆積となっており、同時期に埋没していることがわかる。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物についてC 14 年代測定を行っており、9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

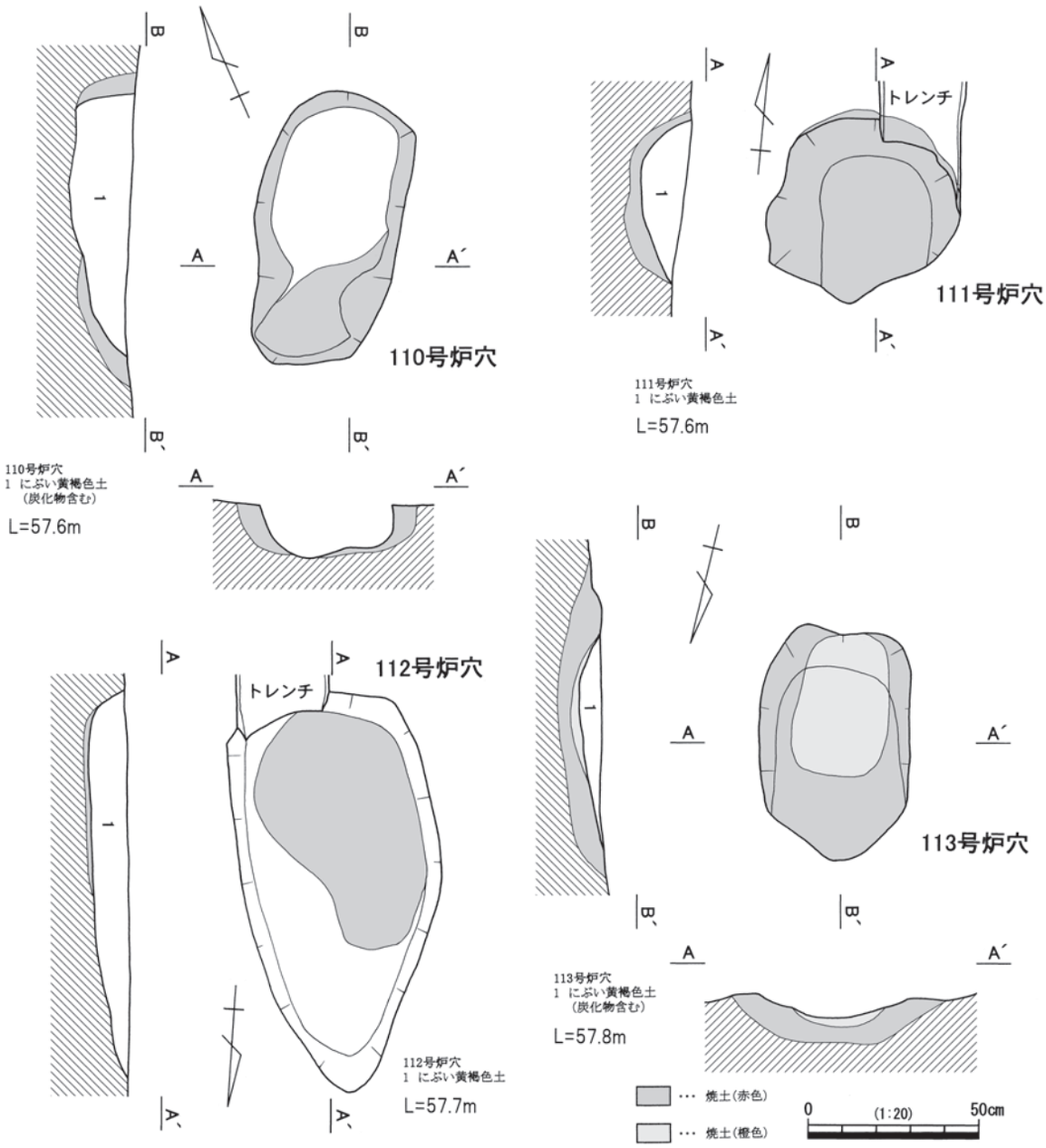


図 78　110 ～ 113 号炉穴実測図

110 号炉穴（図 78）

109 号炉穴から約３ｍ北西に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面で燃焼部が検出されている。

燃焼部は、長さ 75 ㎝・最大幅 44 ㎝の規模で残存し、奥壁側の床面を除いて赤化した焼土面が検出されている。焼土面が検出されていない部分は、もともと薄かった可能性もあるが、おそらくは観察・記録の不備であろう。焼土の厚さは、最も厚い部分で約７㎝である。奥壁はほぼ直立する。埋土は地山に近似する黄褐色土の単層であり、天井の残存・崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から出土した炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9450 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

111 号炉穴（図 78）

110 号炉穴から約３ｍ北東に位置する。主軸は南－北方向で、北側が煙道となる。第１検出面において、燃焼部の奥壁側のみが検出されている。

燃焼部は、長さ 40 ㎝・最大幅 57 ㎝の規模で残存している。一部だけしか検出できていないが、楕円形に近い形状であったものと推定される。全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。第１検出面から床面の最も深い部分までの深さは、14 ㎝となっている。奥壁は斜め上方へ立ち上がる。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。遺物は出土してない。

112 号炉穴（図 78・83）

111 号炉穴から約１ｍ北側に隣接する。主軸は南－北方向で、煙道は南側となっており、隣接する 111 号炉穴とは対置する位置関係にある。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 80 ㎝の規模であり、床面には赤化した焼土面が検出されている。焼土は最も厚い部分でも１㎝程しかなく、あまり火熱を受けていない様子がうかがえる。第１検出面から床面までの深さは 10 ㎝である。前庭部は明確な平坦面をもたず、緩やかな斜面となっている。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

113 号炉穴（図 78・83）

112 号炉穴から約６ｍ北側に位置する。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。第１検出面で燃焼部の奥壁側が検出されている。

燃焼部は、長さ 56 ㎝・幅 44 ㎝の規模で残存している。全面に赤化した焼土面が検出されており、奥側寄りには橙化面も確認される。焼土は最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面は約３㎝と全体的に厚い。奥壁は下端しか残らないが、断面の状況から、湾曲しながら直立気味に立ち上がる形態であると推測される。埋土はほとんど残存せず、天井が崩落した痕跡は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

114・115 号炉穴（図 79・80、図版 17）

113 号炉穴から約１ｍ南に位置する。第１検出面より約 35 ㎝下方で検出されている。中央付近を境にして、西側を 114 号炉穴、東側を 115 号炉穴として調査されているが、焼土面の広がりや土層の堆積などからみて、連続する３基の炉穴である。改築の都度改変を受けているため明確な区別はできないが、おおよそ壁面と焼土のくびれている部分を境に、東から 115 号炉穴、114 号炉穴①、114 号炉穴②とする。なお、114 号炉穴①については、現地では北半分が 115 号炉穴、南半分が 114 号炉穴として調査している。そのため、遺物についてはいずれの炉穴のものか区別できない状況にあることから、114・115 号炉穴出土としておく。

115 号炉穴の燃焼部は、長さ約 90 ㎝・幅約 60 ㎝の規模と推定される。主軸は東－西方向で、煙道は西側となる。床面と側壁には、赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面が約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 65 ㎝となっている。奥壁は改築の際に失われているが、前庭部はほとんど平坦面をもたず緩やかな傾斜となっている。埋土は大きく３層に分けられている。第３層は天井から剥落した焼土が確認される。第２層は焼土である。この焼土は高さと位置関係からみて、116 号炉穴の床面である。

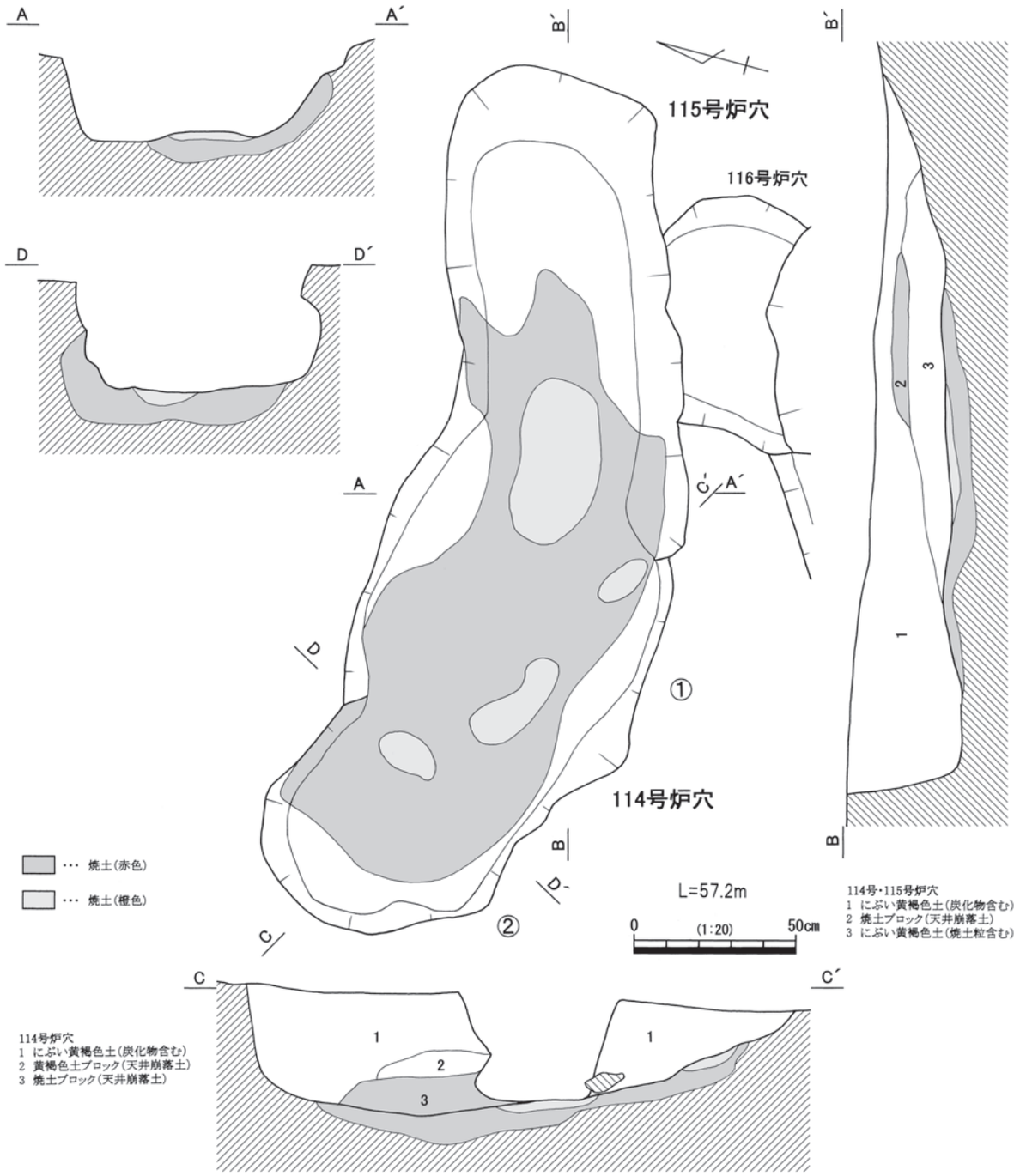


図 79　114・115 号炉穴実測図

第１層は、114 号炉穴①②と共通する埋土であり、115 号炉穴の天井崩落土を除去し、前庭部として利用している様子がみてとれる。

114 号炉穴①の燃焼部は、長さ 70 ㎝・幅 60 ㎝程の規模であったと推定される。主軸は北西－南東方向であり、北西側が煙道となる。床面には赤化した焼土面が検出されており、東側にわずかに橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。側壁に焼土面が確認できないことから、114 号炉穴②の前庭部として利用する際に幅が広げられたものと推測される。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。埋土は 114 号炉穴②と 115 号炉穴と共通しており、天井の崩落土は確認できない。114 号炉穴②の前庭部として利用するため、天井の崩落土は除

去されたものと考えられる。

114 号炉穴②の燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、楕円形に近い形状となっている。奥壁と側壁の一部を除き、赤化した焼土面が検出されており、中央手前寄りには２ヶ所橙化面が確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が 10 ㎝、橙化面が３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 75 ㎝となっている。奥壁は下部でやや湾曲した後、直立気味に立ち上がる。前庭部としては、114 号炉穴①と 115 号炉穴の跡を利用している。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２・３層）が確認されている。

遺物は、埋土中から剥片が２点出土しているのみである。埋土中から採取された２点の炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9540 ± 50 yrBP と 9580 ± 50 yrBP いう結果が得られている。

116 号炉穴（図 80・81）

115 号炉穴の南側に位置する。第１検出面より約 35 ㎝下方で、燃焼部の一部が検出されている。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。断面図では 115 号炉穴に切られるように表現されているが、これは 115 号炉穴の掘り下げ後に発見されたことによるものであり、現地調査において切り合いの確認は行われていない。前述のように、115 号炉穴で確認されている焼土（第２層）は、116 号炉穴の床面と推定される。116 号炉穴は、114 号炉穴①の築造後に設けられたことがわかる。

燃焼部は、長さ 40 ㎝・幅 75 ㎝の規模で確認されている。ただし、上記のように、115 号炉穴の土層断面図で床面が確認できるため、現地で認識されているよりも実際には大規模に残存していたはずである。床面のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、奥側には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 45 ㎝となっている。埋土は単層で、117 号炉穴と共通しており、同時に埋没していることがわかる。奥壁が失われており、側壁に焼土が残存しないことなどからみて、117 号炉穴を築く際にやや幅を広げ、前庭部として使用されたものと推測される。遺物は出土していない。

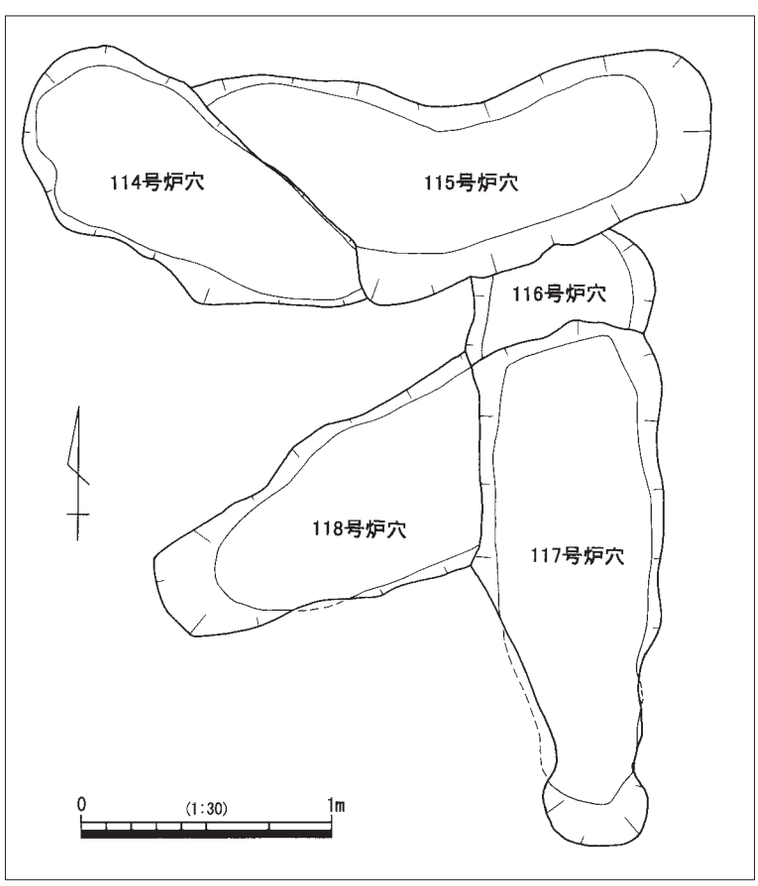


図 80　114 ～ 118 号炉穴配置図

117 号炉穴（図 80・81、図版 17）

116 号炉穴の南側に位置する。主軸は南－北方向で、南側が煙道となり、116 号炉穴の跡を前庭部の一部として使用している。第１検出面より約 35 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 135 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、奥壁に向かって直線的に幅が狭くなる二等辺三角形に近い形状である。床面と側壁の全面で赤化した焼土面が検出されており、中央手前側には橙化面も確認される。

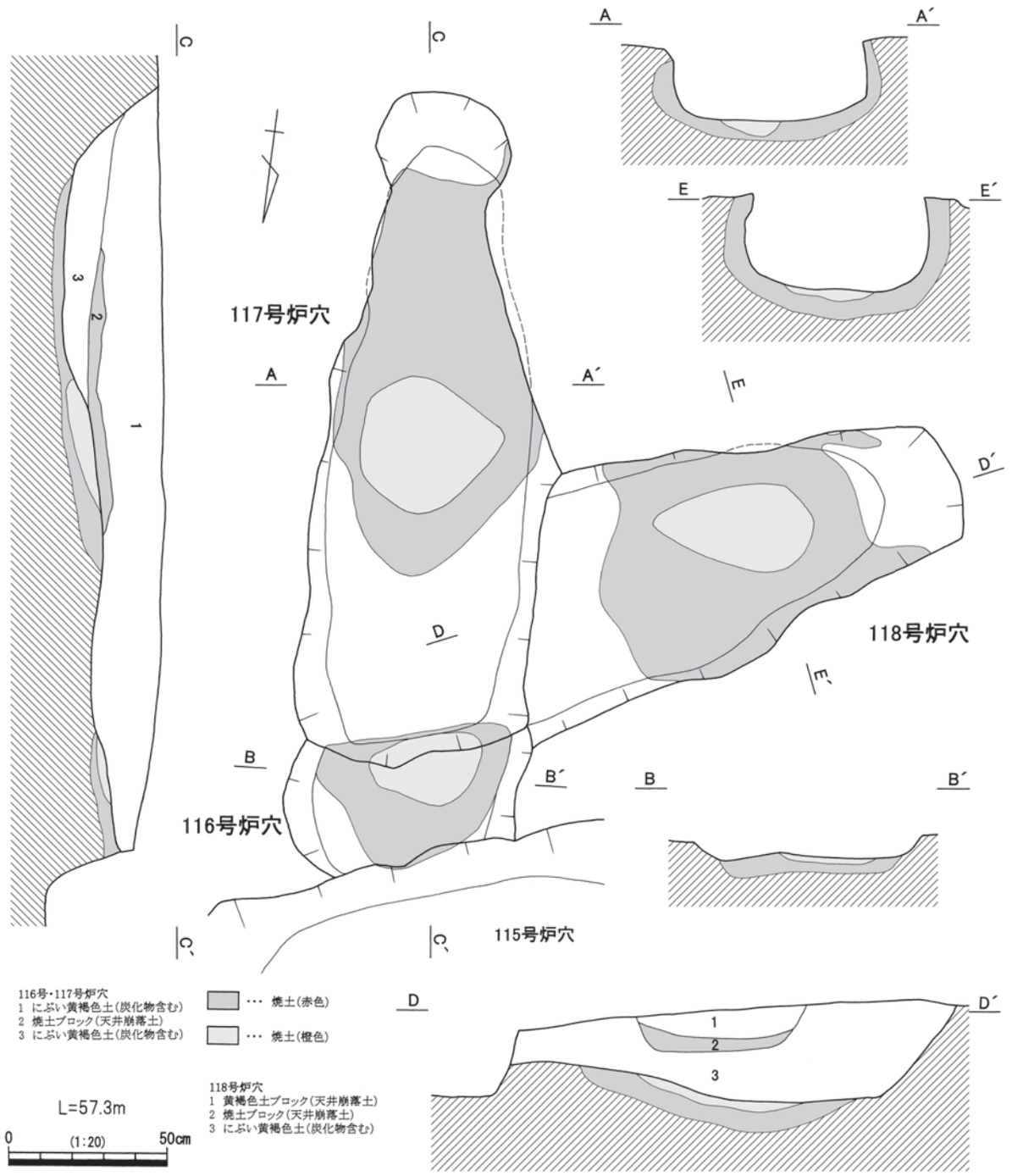


図 81　116 ～ 118 号炉穴実測図

焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面・橙化面ともに約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 55 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は、長さ 50 ㎝・幅 55 ㎝程の平坦面が設けられ、116 号炉穴の跡付近で緩やかな傾斜となる。埋土は大きく３層に分けられており、燃焼部では天井の崩落土（第２層）が確認される。

遺物としては、埋土から剝片が２点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9620 ± 50 yrBP いう結果が得られている。

118 号炉穴（図 80・81、図版 17）

117 号炉穴の西側に位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 35 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁付近を除き、床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 7 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 55 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は長さ約 20 ㎝が残存する。埋土は大きく 3 層に分けられており、燃焼部では床面から 10 ㎝程浮いた位置に、崩落した天井（第 1 ・ 2 層）が確認できる。現地調査においては、117 号炉穴が切っていたと判断されているが、非常に近似した埋土であることを考えると、その確実性にはやや不安が残る。他の炉穴群の築造順序を参考にすると、117 号炉穴よりも一段高い位置にある 118 号炉穴は、やや埋没した 117 号炉穴の前庭部の窪みを利用する形で、別の方向に向かって築かれたとみるのが自然といえる。不確実ではあるが、118 号炉穴の方が 117 号炉穴よりも後出する可能性が高いと推測される。

土器や石器などの遺物は出土していないが、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9610 ± 50 yrBP いう結果が得られている。

119 号炉穴（図 82・83、図版 17）

118 号炉穴から約 1 ｍ東側に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第 1 検出面から約 10 ㎝下方で検出されている。120・121 号炉穴と切り合っており、120 号炉穴より後出することが確認されている。121 号炉穴との先後関係については、記録が残されておらず不明である。

燃焼部は、長さ 110 ㎝・最大幅 56 ㎝の規模で、全体は楕円形に近い形状である。奥壁が非常に緩い傾斜で、形状もややいびつであることから、奥壁側はやや掘り過ぎている可能性が高い。恐らくは、礫が確認されなくなる辺りで立ち上がっていたのであろう。床面と側壁には赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 3 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 25 ㎝となっている。埋土は大きく 2 層に分けられており、上層（第 1 層）は、120 号炉穴と共通する。前庭部として、120 号炉穴の跡を利用していたことを示している。第 2 層では、10 ㎝程度の大きさの礫が大量に発見されている。被熱の痕跡が確認されていないことから、炉穴の使用時のものとは考えにくい。埋没過程で移動しているものも多いようではあるが、天井の崩落土が検出されていないことから、炉穴の廃絶時に入れられたものと推測される。遺物は出土していない。

120 号炉穴（図 82・83）

119 号炉穴の南東側に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第 1 検出面から約 10 ㎝下方で検出されており、床面付近が辛うじて残っている。奥壁は 119 号炉穴により失われている。

燃焼部は、長さ 56 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模であり、卵形に近い形状である。床面と側壁の全面に赤化した焼土面が検出されており、中央手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 6 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 15 ㎝となっている。埋土は単層で、119 号炉穴と共通する。遺物は出土していない。

121 号炉穴（図 82・83、図版 18）

119 号炉穴の北側に隣接する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第 1 検出面から約 10 ㎝下方で検出されている。橙化した焼土面が 2 ヶ所で検出されており、２基の炉穴が連結した状

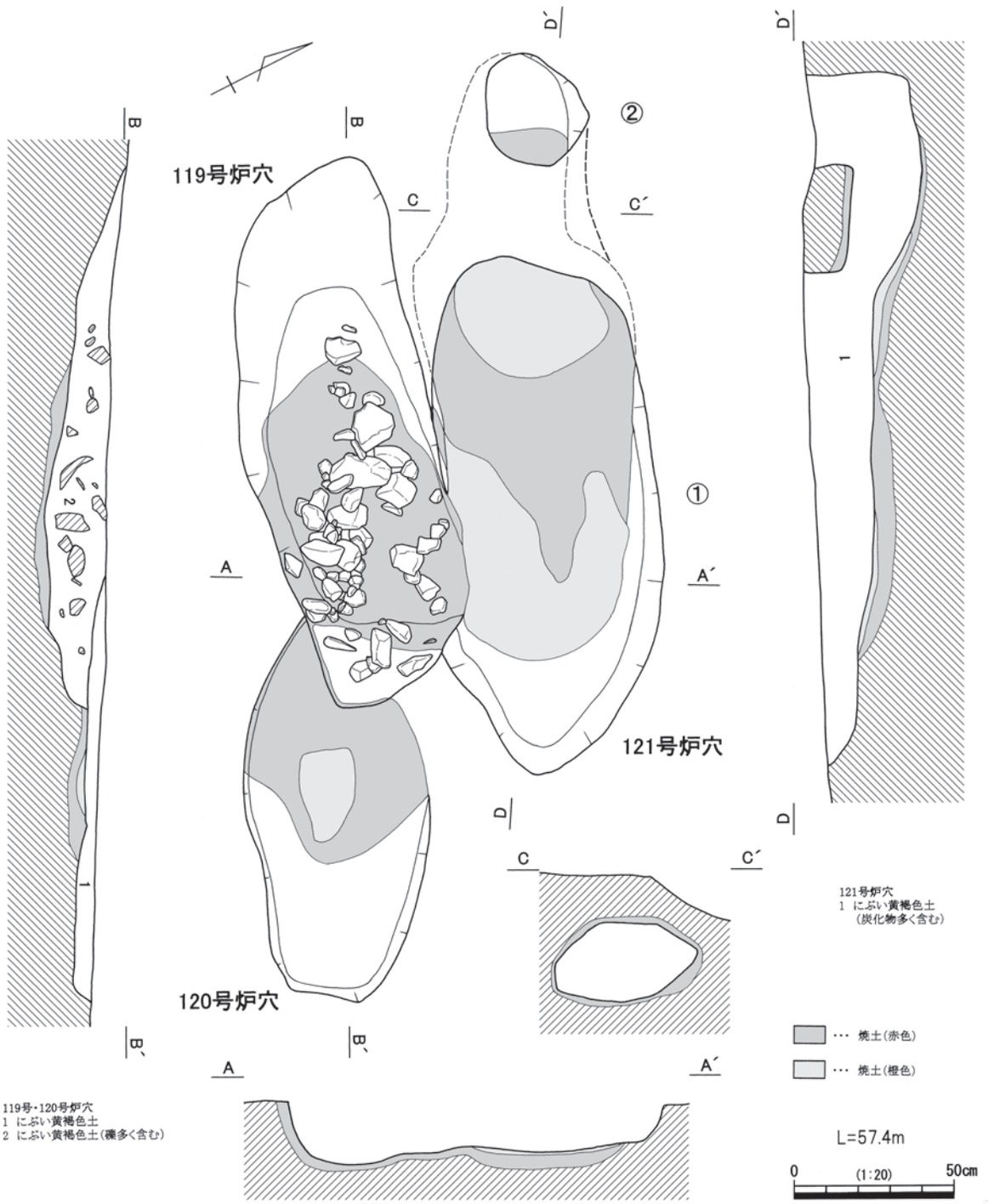


図 82　119 ～ 121 号炉穴実測図

態で発見されている。焼土が立ち上がる中央付近を境に手前を 121 号炉穴①、奥側を 121 号炉穴②とする。

①の燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で残存する。床面全体に赤化した焼土面が検出されており、手前側には橙化面が広い範囲に確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 6 ㎝、橙化面は約 1 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 25 ㎝となっている。奥壁は、②の築造により失われている。前庭部は、25 ㎝程の長さで平坦面が設けられている。

②の燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、天井が一部残存する。床面・側壁・天井の全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前側には橙化面が確認される。焼土の厚さは、赤

化面・橙化面ともに約3㎝である。第1検出面から床面までの深さは、約40㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。煙道は直径約30㎝の大きさで検出されている。天井は約30㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは、中央付近で20㎝、焚口側では15㎝程となっている。前庭部には、①の跡を利用して広い平坦面を設けている。

埋土は単層で、①と②が共通していることから、②の前庭部として①の跡を利用していることがわかる。天井の崩落した痕跡は確認されておらず、廃絶時の炉穴の状況をほぼ保っているものと判断される。遺物は出土していない。

122号炉穴（図83・84）

120号炉穴から約3ｍ南東に位置する。第1検出面において、床面がわずかに残存するような状態で検出されている。

長さ18㎝・幅10㎝の範囲で、赤化した焼土面が検出されている。炉穴としては、南北方向に長い形に検出されているが、炉穴としては焼土面の範囲があまりにも狭く、その厚さも1㎝程しか検出されていないことからみて、炉穴の輪郭が正確に検出されているとは考えにくい。実際は、炉穴の掘り方は残存せず、検出面において焼土面の一部が残る程度であった可能性が高い。そのため、炉穴の主軸方位については、不明としておきたい。遺物は出土していない。

123号炉穴（図83・84、図版18）

121号炉穴から約1.5ｍ北東に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第1検出面において検出されている。

燃焼部は、長さ70㎝・幅70㎝の規模で、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約9㎝、橙化面は約5㎝である。床面までの深さは20㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は長さ10㎝程の平坦面が設けられているが、足場としては狭小であり、調査時に掘り足りていない可能性が高いと推測される。埋土は大きく2層に分けられており、検出面付近で天井の崩落土とみられる焼土ブロック（第2層）が一部確認できる。遺物は出土していない。

124号炉穴（図83・84）

123号炉穴から約2ｍ北東に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第1検出面より約30㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ95㎝・最大幅68㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除くほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央の奥寄りには橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約7㎝、橙化面は約2㎝である。第1検出面から床面までの深さは、約70㎝となっている。天井は、約40㎝の幅

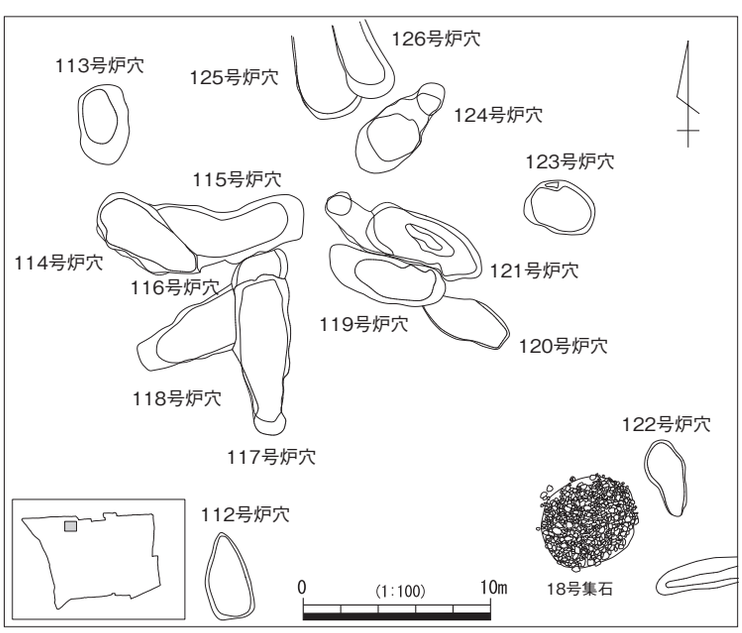


図83　112～126号炉穴配置図

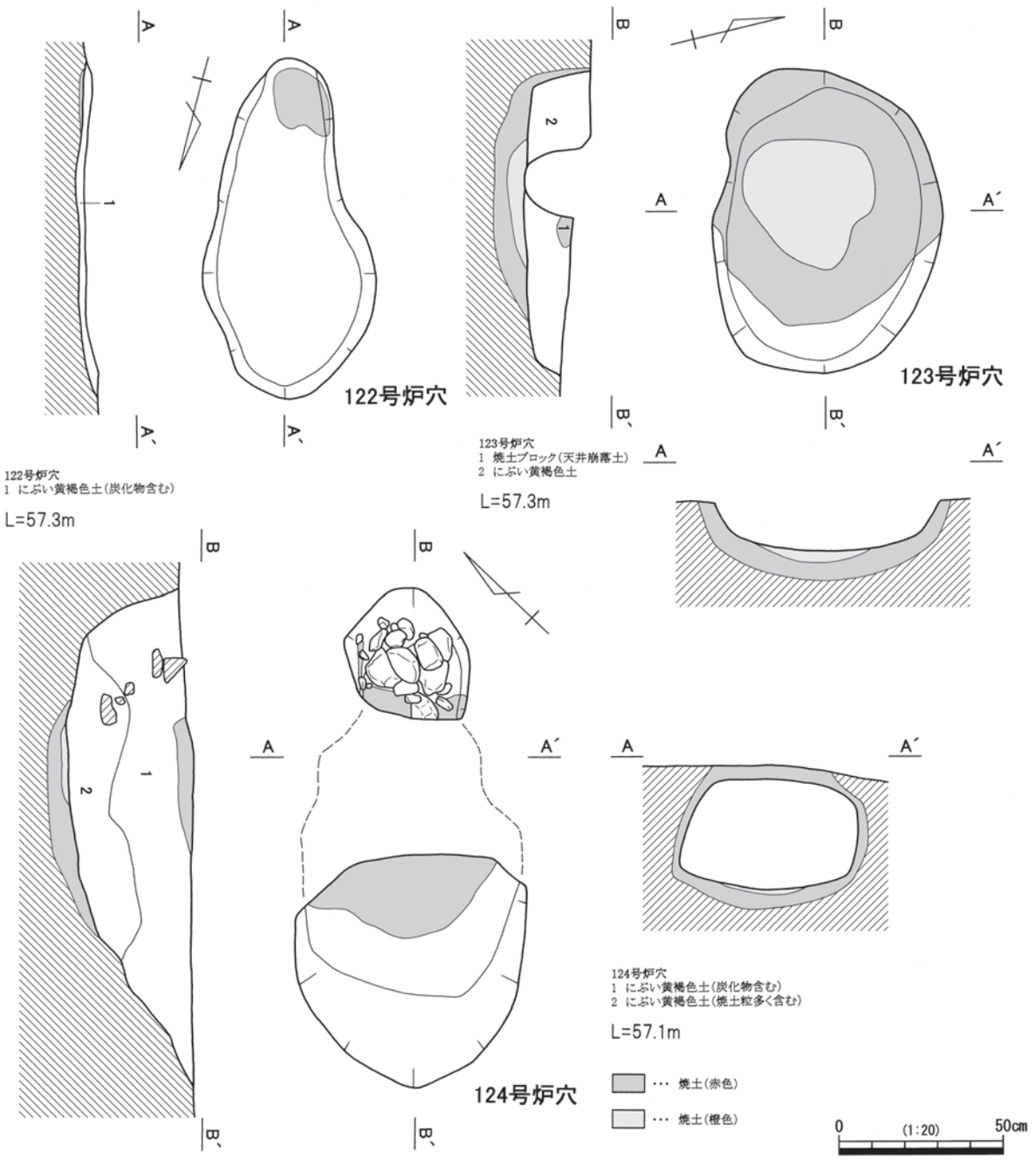


図 84　122 ～ 124 号炉穴実測図

で残存しており、床面から天井までの高さは 33 ㎝となっている。煙道は直径 38 ㎝の大きさで、奥壁はやや湾曲しながら斜め上方に立ち上がる。前庭部は、平坦部がほとんどなく、緩やかな斜面となっている。埋土は大きく２層に分けられており、下層（第２層）には天井や側壁の剥落とみられる焼土粒が確認されている。

燃焼部の煙道直下では、10 ～ 15 ㎝程度の大きさの礫が、詰め込まれた状態で出土している。被熱の有無についての記録は残されていないが、出土状況からみて炉穴の使用時のものとは考えにくい。炉穴の使用後（廃絶時）に、意図的に詰め込まれたものとみてよいであろう。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

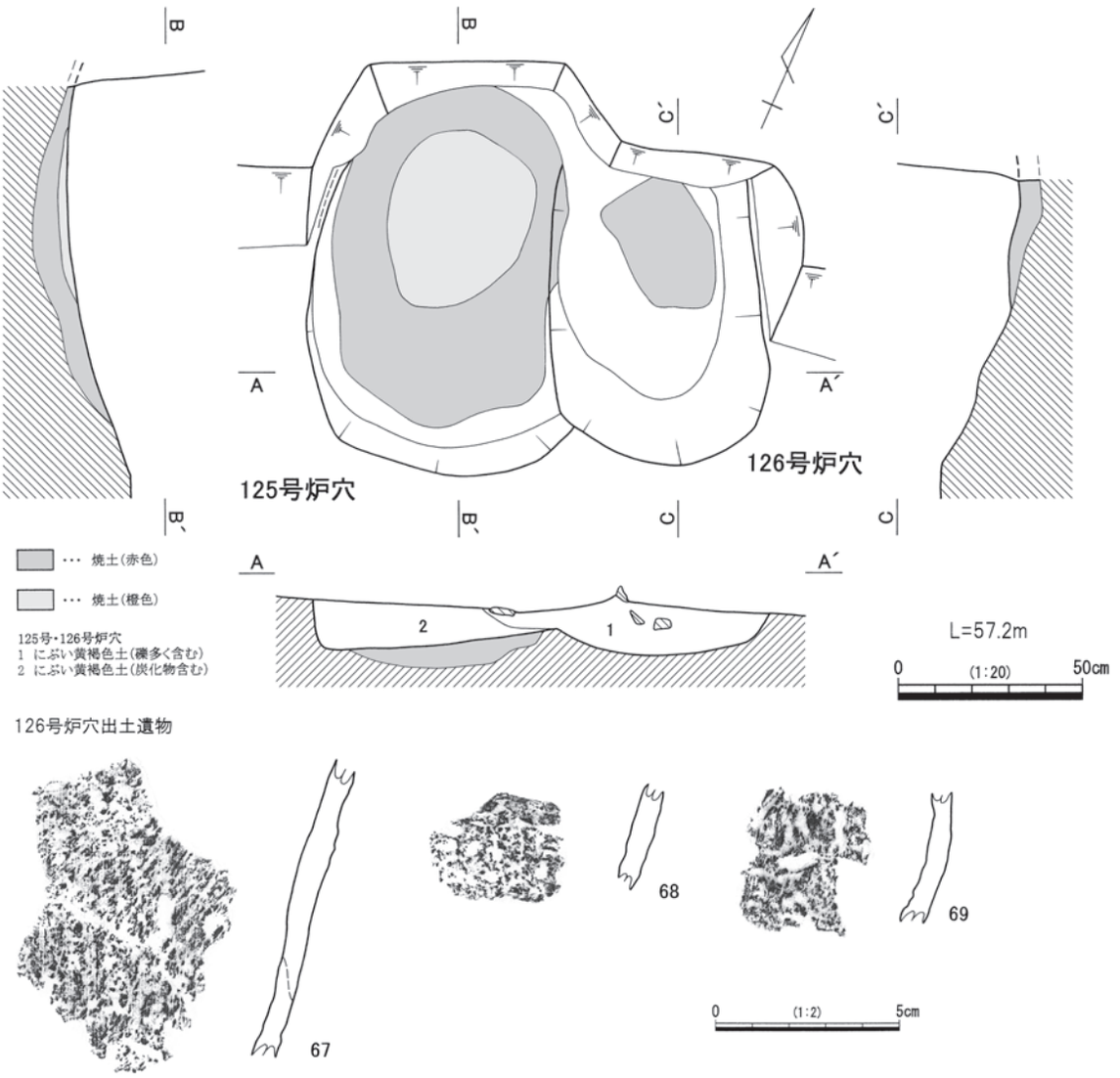


図 85　125・126 号炉穴実測図・出土遺物

125・126 号炉穴（図 83・85、図版 18・37）

124 号炉穴から北西へ約 50 ㎝に位置する。いずれも主軸は北西－南東方向で、北西側が煙道となる。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。調査区の境に位置しており、先に調査を終えていた北側の調査区では検出されていないため、部分的にしか状況が確認できていない。東西方向を主軸とする１基の炉穴として検出されたが、掘り下げた結果、２基の炉穴が並んでいることが判明している。

125 号炉穴の燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模である。床面のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。

126 号炉穴は、長さ 35 ㎝・幅 30 ㎝の範囲に焼土面が検出されている。奥壁側が未確認ではあるが、焼土の範囲が狭く、側壁も被熱していない。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 60 ㎝となっている。

埋土は大きく２層に分けられており、126 号炉穴の埋土（第１層）が 125 号炉穴の埋土（第２層）を切っているとされる。しかし、126 号炉穴は焼土面が側壁に至っていないことからみて、幅を広く掘り過ぎている可能性が高い。また、並列して築かれている状況から、両者にそれほど時間的な隔たりがあると

は考えにくく、仮に埋土を側壁とした場合、強度的に側壁が維持できるかどうかの疑問もある。実際は、側壁を共有するような形で、並列して築かれていた可能性が高いと推測される。

遺物としては、126 号炉穴の埋土から、縄文土器が３点出土している。いずれも胴部の破片であり、67 と 68 にはＬ撚糸文、69 にはＲ撚糸文が外面に施文されている。また、１基の炉穴として掘り下げている過程で採取された炭化物のため、どちらの炉穴に伴うのか特定できないが、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

127 号炉穴（図 86・87）

126 号炉穴から約４ｍ北側の、調査区北端付近に位置する。主軸は東－西方向で、東側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。西側は中・近世の小穴によって失われている。

燃焼部は、長さ 50 ㎝・幅 45 ㎝の規模で残存する。楕円形に近い形状と推測され、全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約５㎝である。第１検出面から床面までの深さは、10 ㎝である。奥壁はやや湾曲しながら立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられており、床面から少し浮いた状態で天井の崩落土（第１層）が確認されている。

奥壁近くの床面からは、10 ㎝程度の大きさの礫が１個出土している。被熱の有無に関する記録が残されていないため、炉穴の使用時に用いられたものかどうか明らかではないが、天井の崩落する以前に置かれていたのは間違いない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

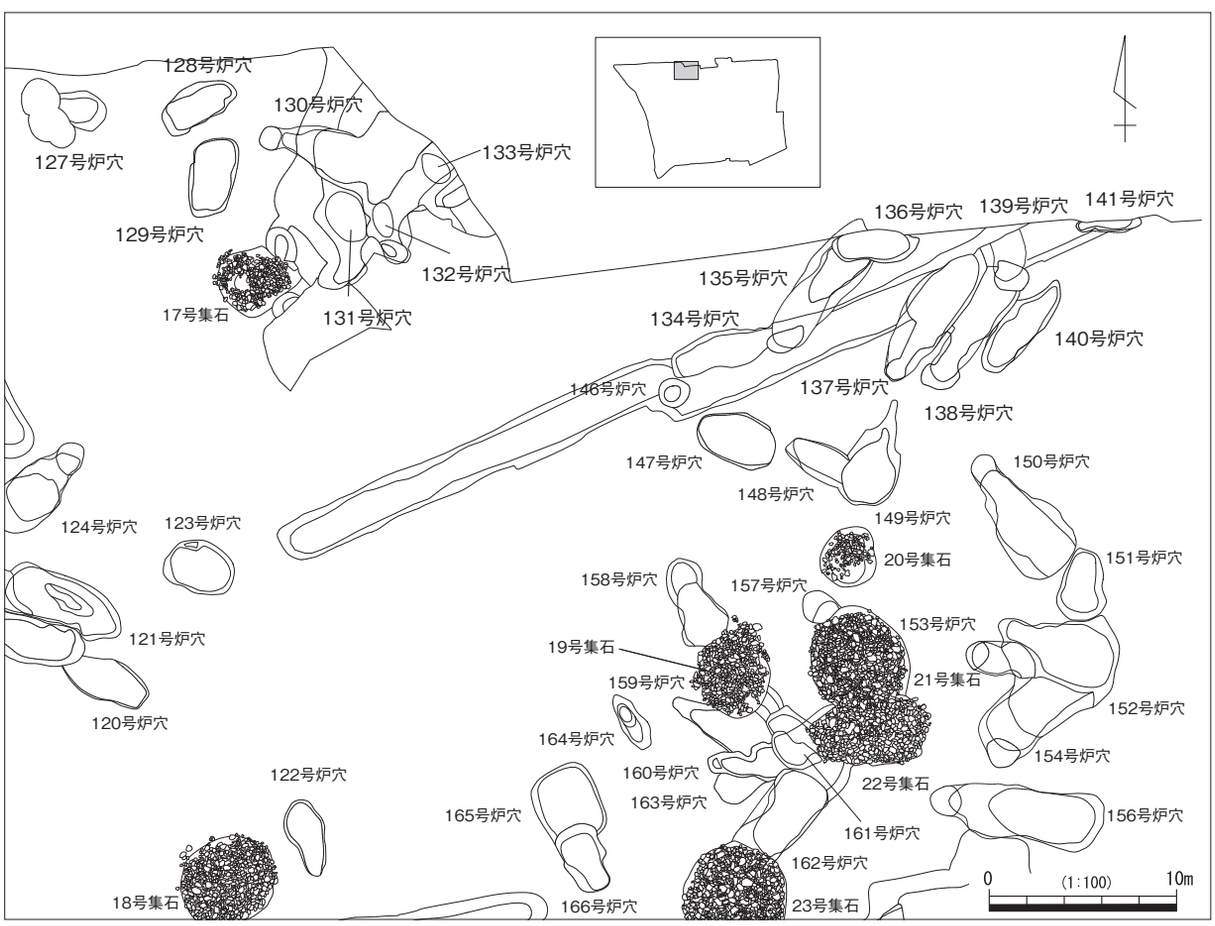


図 86　127 ～ 141 号炉穴配置図

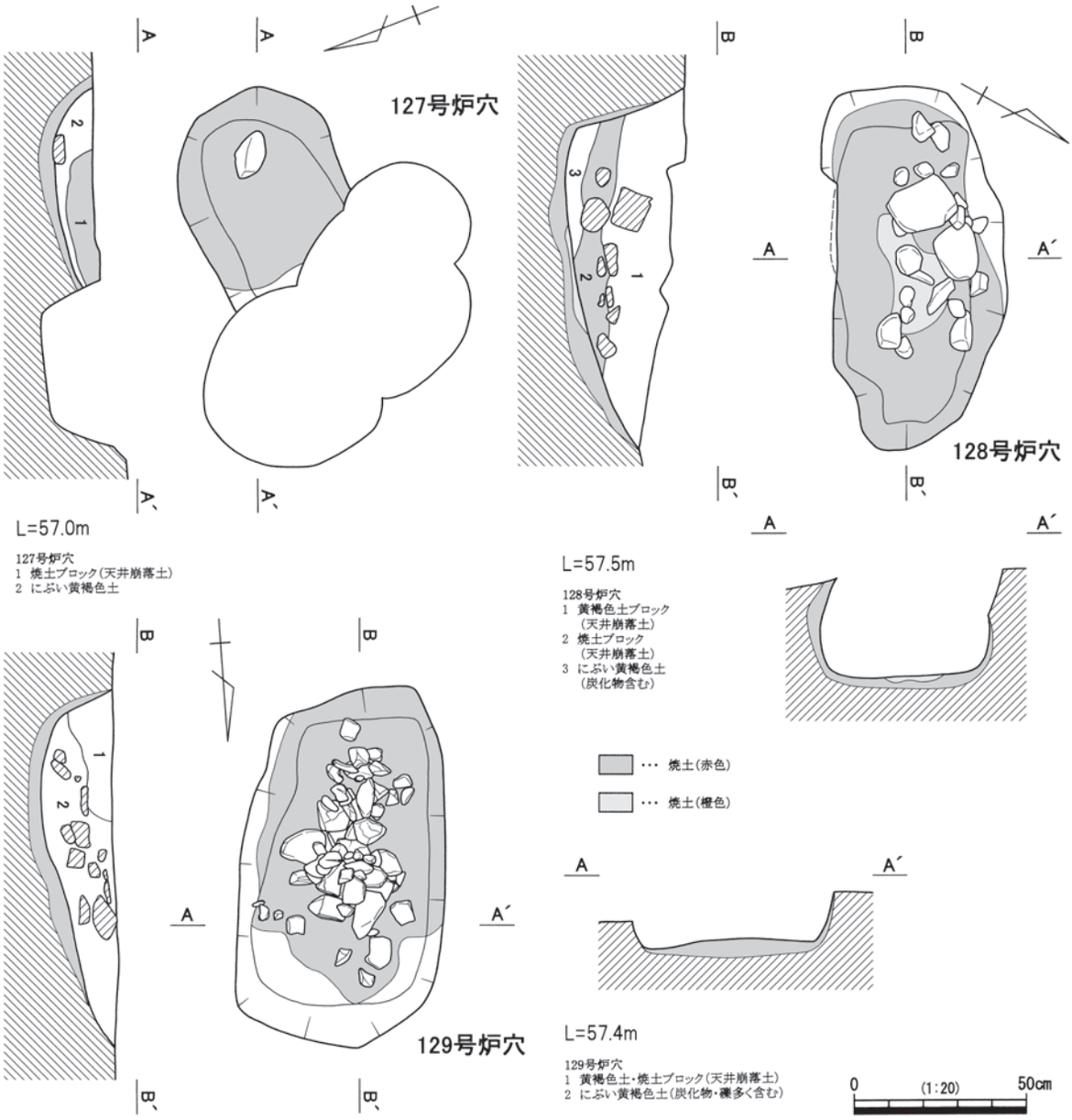


図 87　127 ～ 129 号炉穴実測図

128 号炉穴（図 86・87、図版 20）

127 号炉穴から約 1 m東側に位置する。主軸は南西－北東方向で、煙道は南西側につく。第 1 検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模であり、長方形に近い形状となっている。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 7 ㎝、橙化面は約 3 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、35 ㎝となっている。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。埋土は大きく 3 層に分けられており、天井の崩落土とみられる焼土ブロック（第 2 層）が確認できる。量的に少なく、地山があまり混在していないことから、天井内部の焼土部分が剥落したものと推測される。

燃焼部では、床面付近から 5 ～ 20 ㎝程度の大きさの礫が出土している。厳密には床面からやや浮いた状態ではあるが、土砂の流入により浮き上がったのであろう。礫の被熱の有無に関する記録がないた

め、炉穴使用時のものか否かは判断できないが、下部の礫が剥落した天井の堆積（第２層）に覆われる形となっていることからみて、それ以前に燃焼部内に入っていたことは明らかである。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

129 号炉穴（図 86・87、図版 20）

128 号炉穴から南へ約 50 ㎝に隣接する。主軸は南－北方向であり、南側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 82 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、奥壁側の幅がやや狭まるが全体としては長方形に近い形状である。ほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは 20 ㎝である。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられており、上層に天井の崩落土（第１層）が確認されている。

燃焼部内の床面付近からは、５～ 15 ㎝程度の礫が多量に出土している。少し散らばってはいるものもあるが、多くが燃焼部の中央に集められた状態となっている。被熱の痕跡が確認されないことから、炉穴の使用後（廃絶時）に入れられたものと判断される。土器や石器などの遺物は出土していない。

130 号炉穴（図 86・88）

129 号炉穴から東へ約１ｍに位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。この付近一帯には倒木痕が重なっており、大規模に掘り下げた結果、いくつかの炉穴が検出されている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、全体としては卵形に近い形状となっている。床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央奥壁寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約３㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。煙道は直径 26 ㎝の大きさで、奥壁は斜め上方へ立ち上がる。天井は 42 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは、最も狭い部分では 15 ㎝しかない。前庭部については、倒木痕として全体が掘られているため、状況がはっきりしない。埋土の状況についても、土層の記録が残されていないため不明である。

燃焼部から前庭部にかけての床面からは、10 ～ 15 ㎝程度の礫がいくつか発見されている。いずれも被熱の痕跡が確認されていることから、炉穴の使用時に用いられた礫の可能性が高い。

遺物としては、埋土から剝片が１点出土しているのみである。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9680 ± 60 yrBP という結果が得られている。

131 号炉穴（図 86・88）

130 号炉穴から南へ約 50 ㎝に位置している。周辺の炉穴と同様に、倒木痕を掘り下げた結果、燃焼部の床面とみられる焼土面が検出されている。検出された高さは、第１検出面より約 50 ㎝下方である。焼土の形状から、主軸は北東－南西方向と推定されるが、煙道がどちら側かは不明である。

赤化した焼土面は、長さ 75 ㎝・幅 50 ㎝の規模で検出されており、中央付近には橙化面も確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約３㎝、橙化面は約２㎝である。床面のみの検出であり、遺物は出土していない。

132 号炉穴（図 86・88）

131 号炉穴の東側に隣接する。倒木痕を掘り下げの結果、斜面などから燃焼部の床面とみられる焼土

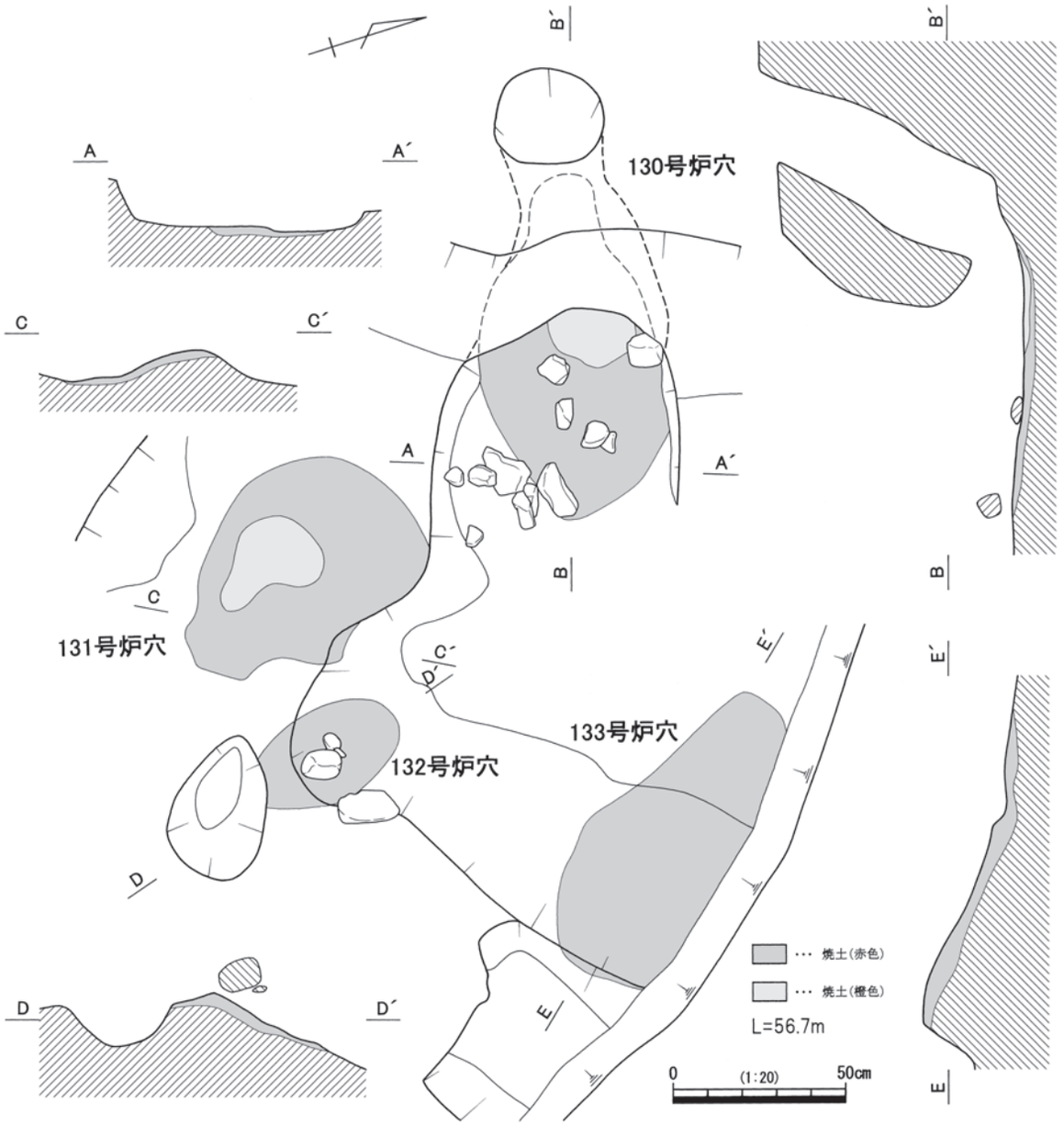


図 88　130 ～ 133 号炉穴実測図

が検出されている。検出された高さは、第 1 検出面より約 50 ㎝下方である。焼土の形状から、主軸は北東－南西方向と推定されるが、煙道の位置は不明である。

焼土面は、長さ 45 ㎝・幅 25 ㎝の規模で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 3 ㎝である。遺物は出土していない。

133 号炉穴（図 86・88）

132 号炉穴から北東へ約 1 ｍに位置する。倒木痕の斜面で、燃焼部の床面とみられる焼土が検出されている。検出された高さは、最も低い部分で第 1 検出面から約 70 ㎝下方である。焼土の形状から、主軸は北西－南東方向と推定されるが、煙道の位置は不明である。東側は調査区外となっている。

焼土面は、長さ 94 ㎝・幅 40 ㎝の規模で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 7 ㎝となっている。焼土面のみの検出であり、遺物は出土していない。

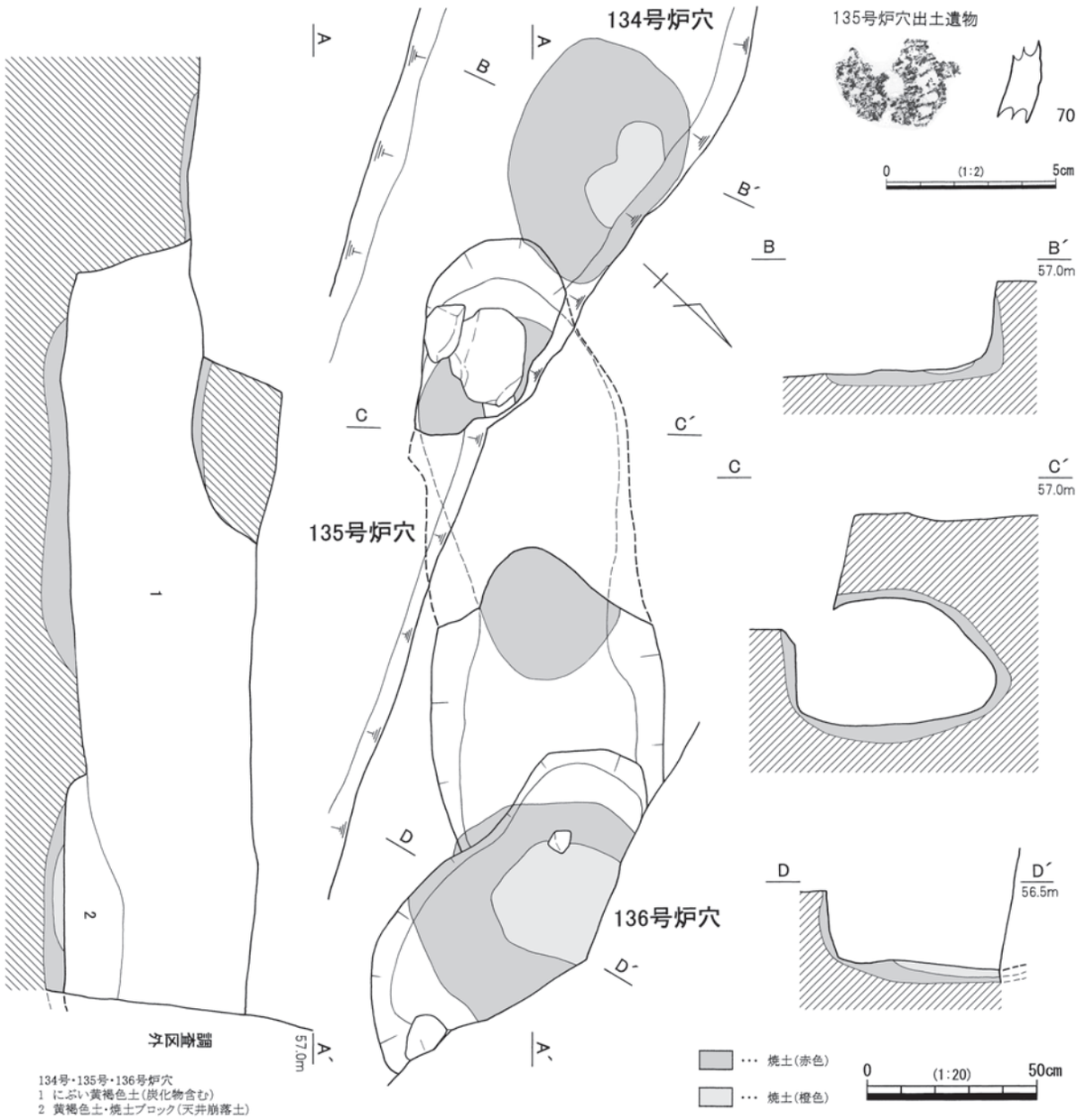


図 89　134 ～ 136 号炉穴実測図・出土遺物

134 号炉穴（図 86・89、図版 20）

133 号炉穴から約４ｍ南東に位置する。攪乱の底部および壁面において、燃焼部の床面と側壁とみられる焼土が検出されている。主軸は東－西方向とみられるが、煙道がどちら側につくかは不明である。

燃焼部の赤化した焼土面は、長さ 64 ㎝・幅 50 ㎝の規模で検出されており、中央北側の側壁寄りに橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 25 ㎝となっている。床面のみの検出であり、遺物は出土していない。

135 号炉穴（図 86・89、図版 37）

134 号炉穴の東側に位置する。主軸は南西－北東方向であり、煙道は南西側につく。第１検出面で検出されており、攪乱により一部失われているが天井が遺存している。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 63 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面に

赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約９㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、55㎝となっている。煙道は一部攪乱により破壊されているが、直径35㎝程の大きさと推定される。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。天井は幅40㎝程が残存している。床面から天井までの高さは37㎝である。前庭部には長さ40㎝・幅50㎝程の平坦面が設けられ、136号炉穴の跡を利用している。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層であり、136号炉穴と共通する。

燃焼部の煙道直下からは、20～30㎝程の大型の礫が詰め込まれた状態で出土している。被熱の有無に関する記録は残されていないが、出土状況からみて炉穴の使用時のものとは考えにくい。炉穴の使用後（廃絶時）に入れられたものとみてよいであろう。

遺物としては、埋土から縄文土器が１点出土しているのみである。70は胴部の破片であり、外面にＲＬ縄文が施されている。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ14年代測定を行っており、9600 ± 50 yrBPという結果が得られている。

136号炉穴（図86・89）

135号炉穴の北東に一部重複する形で位置している。土層断面から、135号炉穴より先行して築かれていることが確認されている。第１検出面で検出されており、北側は調査区外となる。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。

燃焼部は、長さ80㎝・最大幅50㎝の規模で検出されている。北側は調査区外へ続くことから、幅はこれ以上の規模となる。全体としては卵形に近い形状となっている。床面と側壁の全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、55㎝となっている。埋土は大きく２層に分けられており、床面上に天井崩落土（第２層）が確認できる。上面が135号炉穴の前庭部となっていることから、天井崩落土を除去・整地し、前庭部として利用していることがわかる。

埋土中から採取された炭化物についてＣ14年代測定を行っており、9500 ± 50 yrBPという結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

137号炉穴（図86・90、図版19）

136号炉穴から南へ約50㎝に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。攪乱により、前庭部側の上部が壊されているが、全体的には比較的良好に遺存している。南東側に隣接する138号炉穴とは、側壁を挟んで並列する形となっている。天井は、検出時には遺存していたが、調査中に崩落してしまったようである。

燃焼部は、長さ114㎝・最大幅68㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除くほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは55㎝である。奥壁は湾曲しながら直立気味に立ち上がる。煙道は直径30㎝程の大きさで、床面から天井までの高さは20～30㎝程度と推定される。前庭部には、長さ65㎝・幅55㎝の平坦面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられており、床面上には天井の剥落土とみられる焼土ブロック（第３層）が検出されている。またその上に堆積する第２層にも、天井の剥落とみられる焼土粒が確認されている。

燃焼部の奥壁側では、10～20㎝前後の礫が多量に発見されている。第４層の上面に沿う形で積み上がっており、炉穴の使用時のものでないことは明らかである。ただし下方のものは床面に接しており、天井の剥落土である第３層が上から覆っていることからみて、最後の使用からさほど時間を経ずに入れられたものと推測される。遺物としては、埋土中から剥片が２点出土しているのみである。

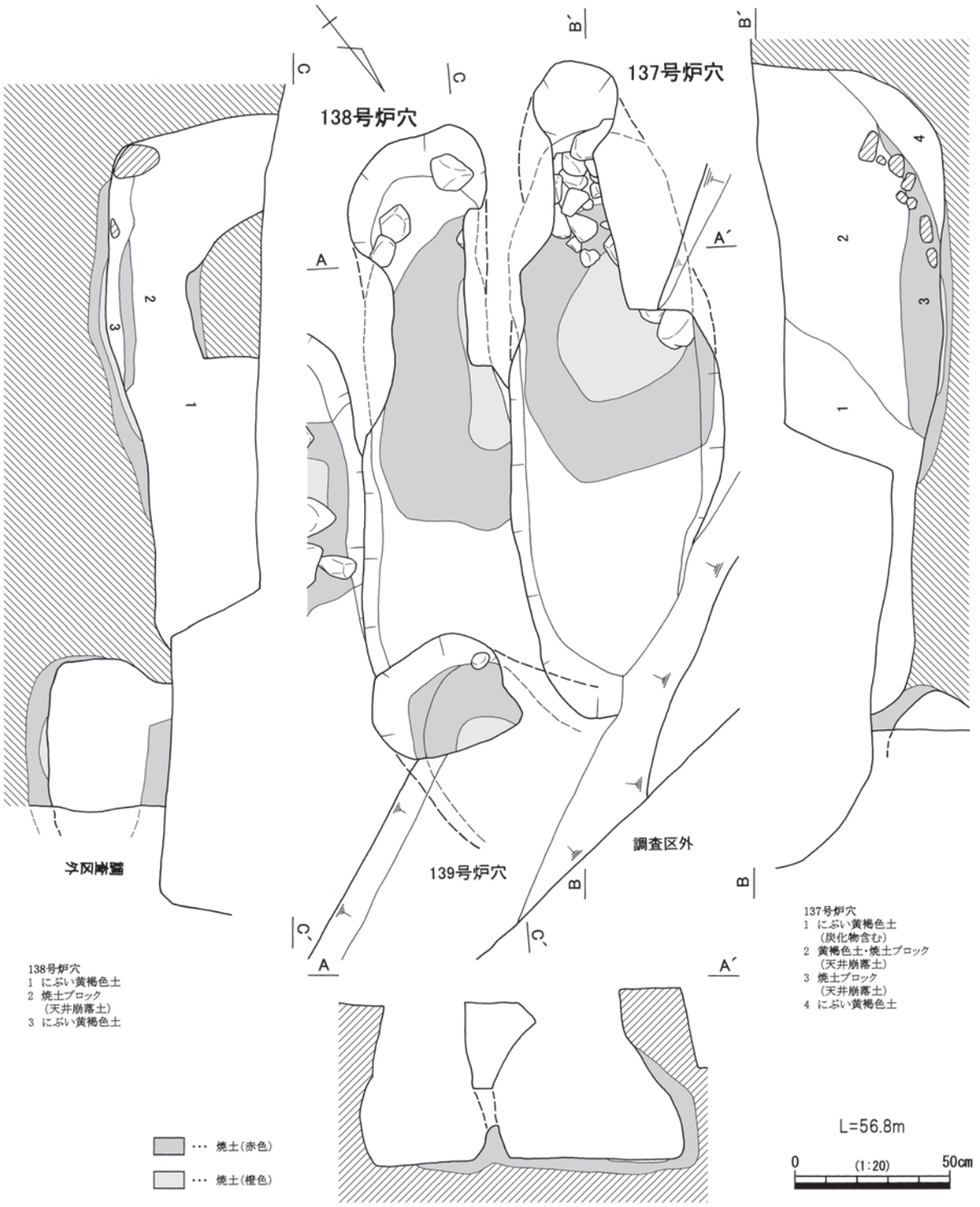


図 90　137・138 号炉穴実測図

138 号炉穴（図 86・90、図版 19）

137 号炉穴の南東側に隣接している。主軸は南西－北東方向で、煙道は南西側につく。第１検出面で検出されている。天井の中央部分は、認識できないまま掘り下げてしまい失われている。

燃焼部は、長さ 112 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除くほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央の側壁寄りには橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは 50 ㎝である。煙道は

直径 30 ㎝前後の大きさと推定される。床面から天井までの高さは、残存部では 27 ㎝となっている。残存するのがやや側壁寄りのため、中央付近ではもう少し高いかもしれない。前庭部は、攪乱で一部失われているが、長さ 35 ㎝程の平坦面が残存する。139 号炉穴と切り合う位置関係にあるが、いずれも攪乱の底部での検出のため、切り合い関係については明らかでない。埋土は大きく３層に分けられており、床面から５㎝ほど上に天井の剥落土とみられる焼土ブロック（第２層）が検出されている。

燃焼部奥壁側の床面からは、10 ～ 15 ㎝程の大きさの礫が出土している。被熱の有無についての記録はないが、隣接する 137 号炉穴と近似した状態であり、炉穴の使用後（廃絶後）に入れられたものである可能性が高い。土器や石器などの遺物は出土していない。

139 号炉穴（図 86・91、図版 19）

138 号炉穴の北東側に位置する。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。大半は調査区外となっており、確認できたのは煙道と燃焼部の一部である。

燃焼部は長さ 60 ㎝・幅 65 ㎝の規模で確認されており、調査区外へと続く。床面には、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、橙化面も確認される。確認できた部分の焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約３㎝である。煙道は直径 40 ㎝程の大きさで、床面から天井までの高さは 32 ㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられており、床面上には内部の剥落土とみられる焼土ブロックが確認される。

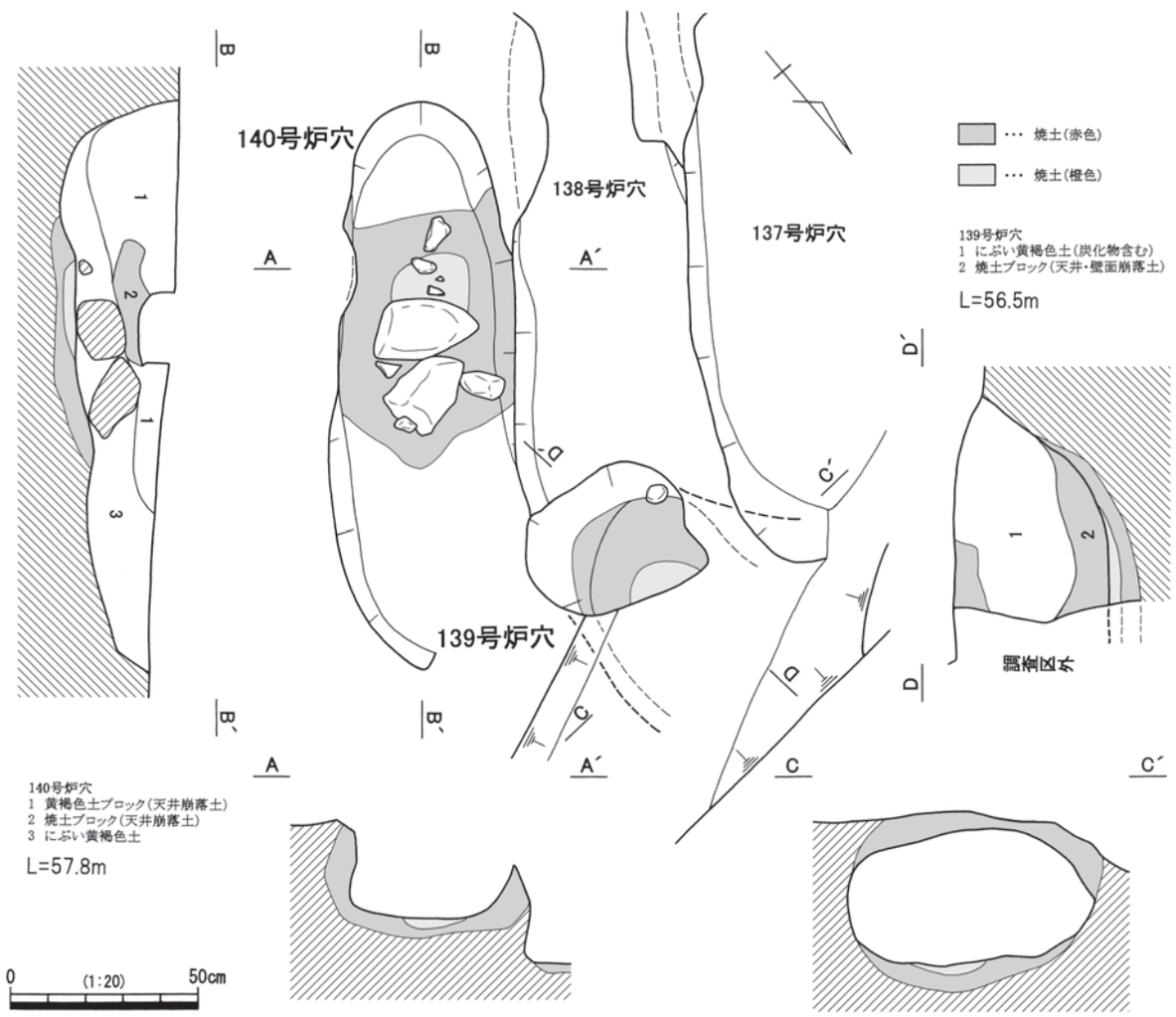


図 91　139・140 号炉穴実測図

遺物としては、埋土から剥片が３点出土しているのみである。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9600 ± 50 yrBP という結果が得られている。

140 号炉穴（図 86・91、図版 19・20）

139 号炉穴の南側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく、138 号炉穴とは並列した位置関係にある。第１検出面で検出されている。調査所見では 138 号炉穴を切っていたとされるが、それを示す土層断面図は残されていない。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 46 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁付近を除く床面と側壁で赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの高さは 25 ㎝である。奥壁は、やや斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 50 ㎝・幅 40 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、床面から 10 ㎝程上に天井の崩落土（第１・２層）が確認される。

燃焼部の焚口寄りの床面からは、30 ㎝程の大きさの礫が出土している。被熱の痕跡が確認されていないことから、炉穴の使用後（廃絶時）に入れられたものとみてよい。土器や石器などの遺物は出土していない。

141 号炉穴（図 86・93）

140 号炉穴から約１ｍ北東に位置する。調査区境で一部が発見されており、大半は調査区外となる。主軸は東－西方向で、東側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 70 ㎝の規模で、幅は調査区境まで 17 ㎝確認されている。全形は不明であるが、楕円形に近い形状と推測される。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で、赤化面が約８㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 55 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部がないような状態で掘られているが、焼土のある部分のみの調査で終えてしまい、掘り足りていない可能性が高い。埋土は大きく４層に分けられており、床面から 20 ㎝程の高さで天井の崩落土（第１・２層）が確認されている。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9650 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

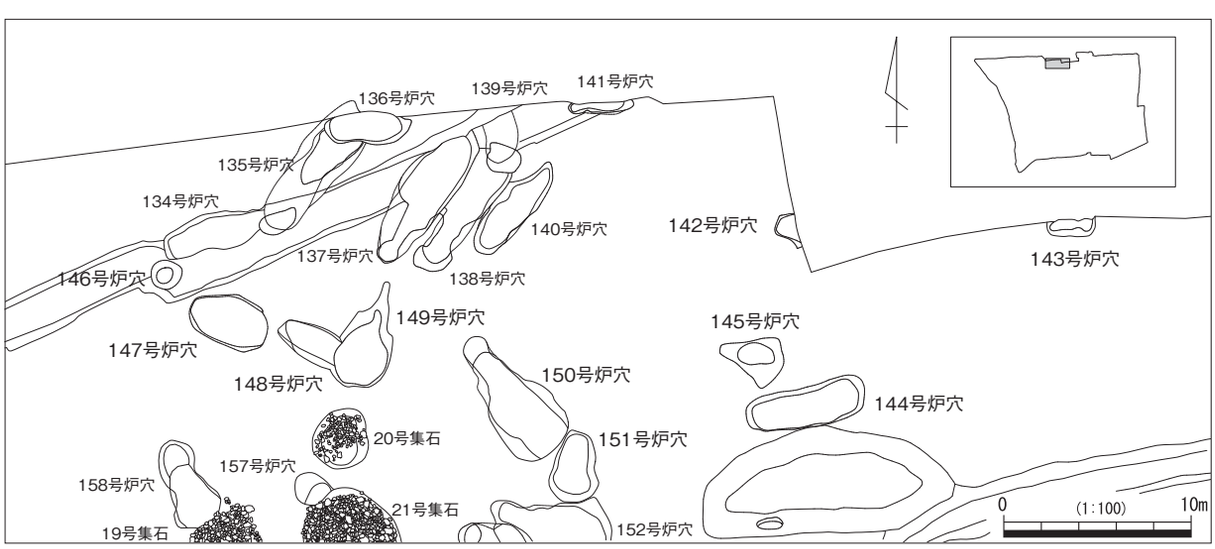


図 92　142 ～ 151 号炉穴配置図

142 号炉穴（図 92・93）

141 号炉穴から約 3 m南東に位置する。東側が調査区外となっており、燃焼部の一部が検出されているのみである。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 30 ㎝・幅 35 ㎝の規模で確認されており、調査区外へと続く。ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 4 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは 15 ㎝である。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

143 号炉穴（図 92・93）

142 号炉穴から約 4 m東側に位置する。調査区境で発見されており、ほぼ北側半分が調査区外となっている。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は長さ 60 ㎝であり、幅は調査区境まで 25 ㎝の規模で検出されている。奥壁側で赤化した焼土面が検出されており、一部橙化面も確認されている。赤化した焼土の厚さは、最も厚い部分で約 4 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 45 ㎝となっている。奥壁はやや湾曲して立ち上がる。埋土は大きく 2 層に分けられており、部分的に剥落した天井（第 2 層）が確認されている。

埋土中から採取した炭化物についてC 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

144 号炉穴（図 92・94、図版 20・42）

143 号炉穴から約 4 m南西に位置する。主軸は東－西方向であり、西側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 115 m・最大幅 55 ㎝の規模であり、楕円形に近い形状となっている。全面に赤化し

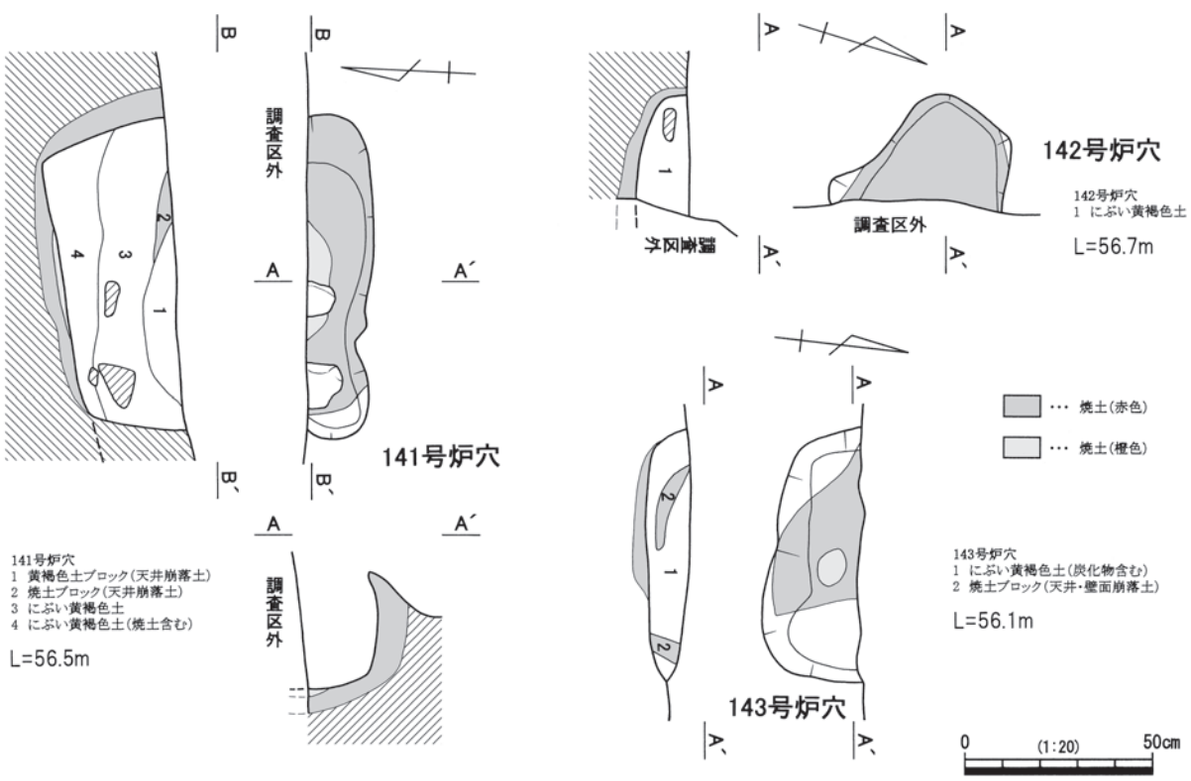


図 93　141 ～ 143 号炉穴実測図

た焼土面が検出されており、中央奥寄りには橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、25㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ25㎝・幅45㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられており、最上層には天井の剥落（第３層）と崩落土（第１層）が確認できる。

焚口付近の床面からは、平面図は作成されていないが、拳大程度の礫が集中して出土している。大半の礫に被熱の痕跡が確認されており、炉穴の使用時に用いられたものである可能性が高いと推測される。

遺物としては、石核が１点出土しているのみである。71はシルト岩製の石核であり、埋土から出土している。埋土中からは炭化物が採取されており、Ｃ14年代測定を行っている。床面直上から採取されたものは9540 ± 50 yrBP、埋土中から採取されたものは9430 ± 50 yrBPという結果が得られている。

145号炉穴（図92・94）

144号炉穴の北東に隣接する。主軸は南東－北西方向で、南東側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、床面に長さ50㎝・35㎝の規模で焼土面が確認されているが、側壁に焼土が検出されていないことから、両側壁についてはやや掘り過ぎの可能性が高い。焼土の厚さは、最も厚い部分でも約２㎝と薄い。第１検出面から床面までの深さは、約10㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は平坦面をもたず、緩やかな斜面となっている。埋土は単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。遺物は出土していない。

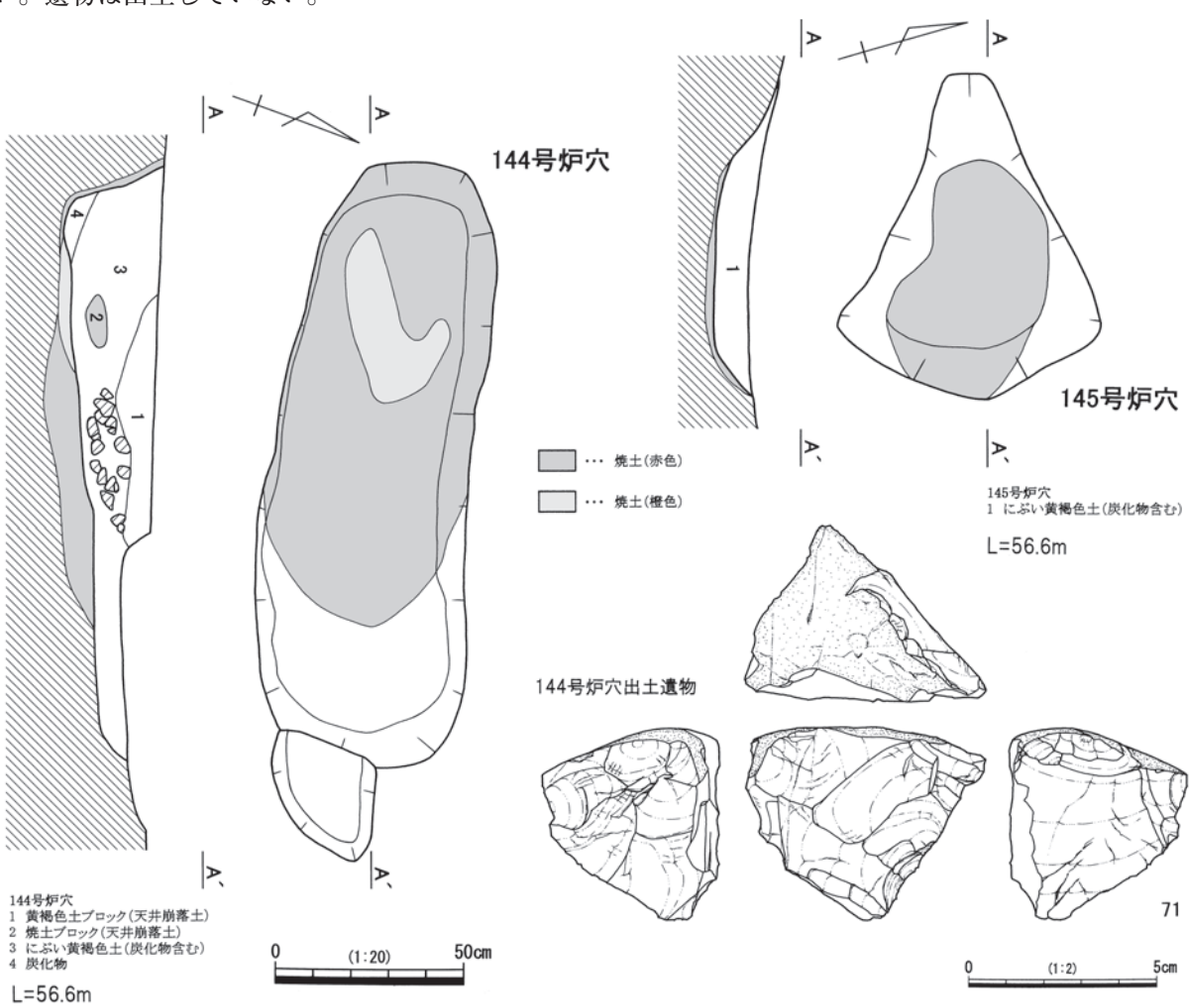


図94　144・145号炉穴実測図・出土遺物

146 号炉穴（図 86・92・95）

134 号炉穴から南東へ約 50 ㎝に位置する。攪乱によって大半が失われており、焼土面がわずかに確認されている程度である。焼土面が立ち上がっていることからみて、主軸は南西－北東方向で南西側に煙道をもつものと推測される。第 1 検出面より約 15 ㎝下方の、攪乱底部で検出されている。

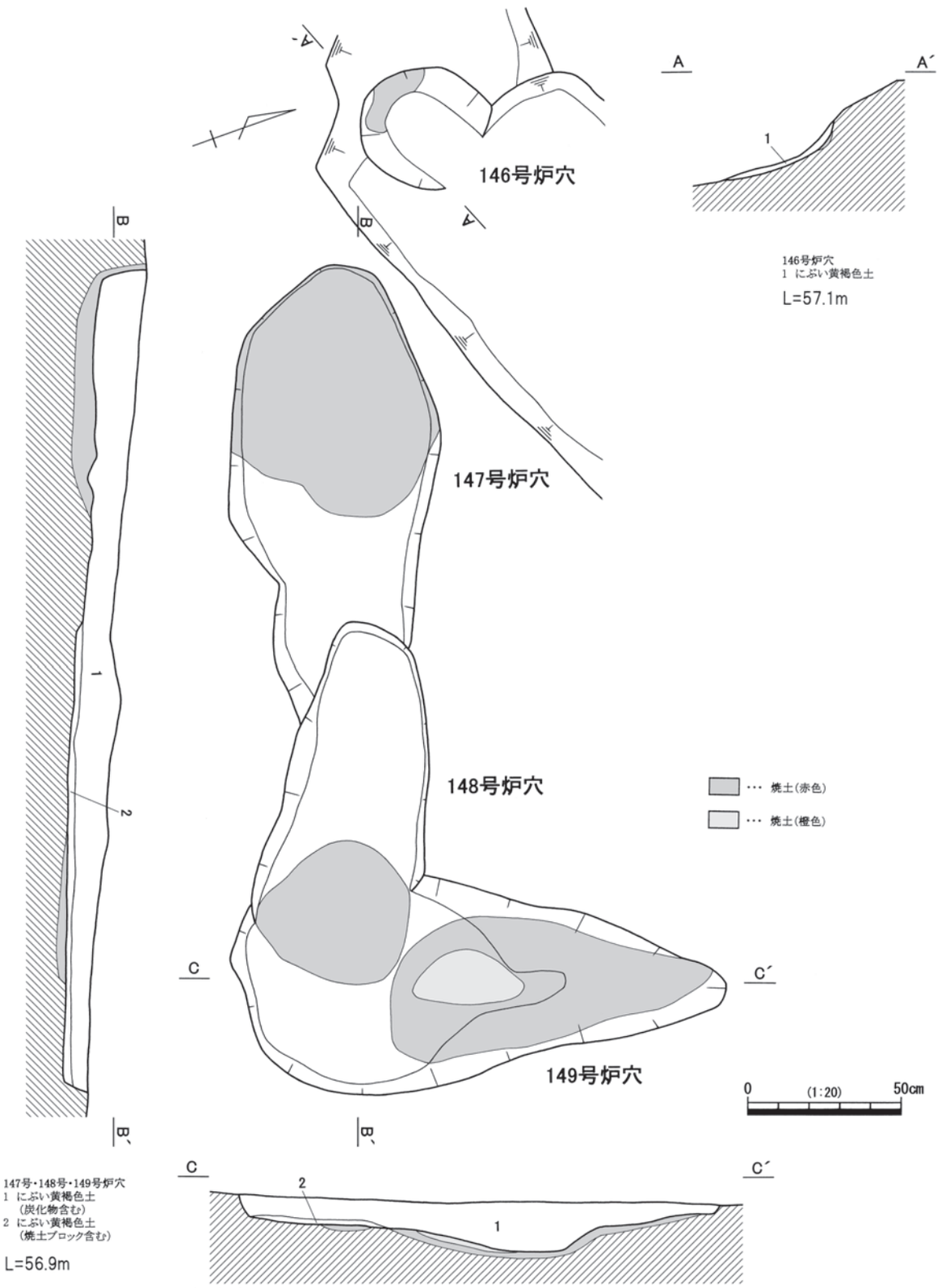


図 95　146 ～ 149 号炉穴実測図

燃焼部とみられる長さ 35 ㎝・幅 40 ㎝程の掘り込みが検出されているが、焼土面は奥壁側の一部に確認できる程度であり、全体的に掘り過ぎている可能性も考えられる。埋土は、底部付近でわずかに確認されており、天井の残存や崩落の痕跡は認められない。

埋土中から採取されたとされる炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9600 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

147 号炉穴（図 86・92・95）

146 号炉穴の南東側に隣接する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、前庭部は 148 号炉穴の跡を利用している。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、卵形に近い形状となっている。全面で赤化した焼土面が検出されており、焼土は最も厚い部分で約７㎝の厚さがある。第１検出面から床面までの深さは、15 ㎝である。奥壁は、やや湾曲しながら直立気味に立ち上がる。前庭部は、148 号炉穴の跡を利用して広い平坦面が設けられている。埋土は単層で、148・149 号炉穴と共通している。遺物は出土していない。

148 号炉穴（図 86・92・95）

147 号炉穴の南東に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ約 115 ㎝・最大幅 48 ㎝の規模で検出されており、全体は二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁から約 70 ㎝手前側に、直径 48 ㎝の大きさで赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝である。埋土は大きく２層に分けられており、下層（第２層）には天井の崩落土とみられる焼土ブロックが確認される。上層（第１層）は 147・149 号炉穴と共通しており、天井の崩落後、崩落土を除去して多少の整地を行って、147 号炉穴と 149 号炉穴を築いている様子がみてとれる。遺物は出土していない。

149 号炉穴（図 86・92・95）

148 号炉穴の北側に位置する。主軸は北東－南西方向であり、北東側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、先述のように 148 号炉穴の跡を前庭部として利用している。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状となっている。床面と側壁のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約３㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは 15 ㎝となっている。奥壁はほとんど残らないが直立気味に立ち上がる。前庭部は 148 号炉穴の跡を利用しており、長さ 40 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられており、148 号炉穴と同じ堆積となっている。天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。

遺物としては、埋土から剥片が１点出土している。

150 号炉穴（図 86・92・96、図版 21）

149 号炉穴から約１ｍ南東に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面から前庭部側を約 25 ㎝掘り下げた段階で炉穴の存在が確認されており、その時点で奥壁側の掘り下げを止めたため、奥壁側は第１検出面で検出されている状況にある。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、卵形に近い形状である。床面と側壁のほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い

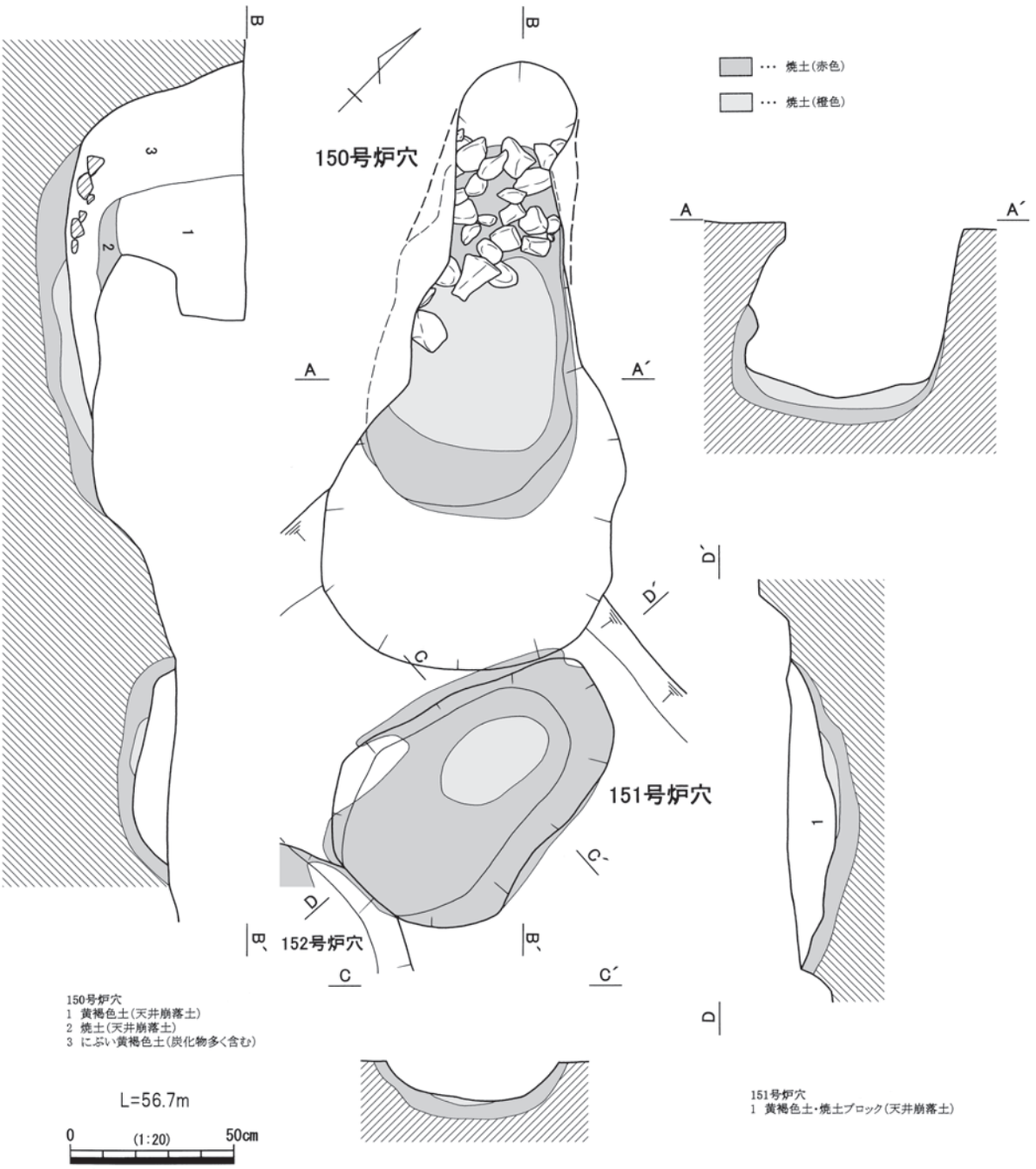


図 96　150・151 号炉穴実測図

部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面は約 7 ㎝と厚い。奥壁は、湾曲しながらやや斜めに立ち上がる。前庭部は平坦面がほとんどなく、緩い斜面となっている。埋土は奥壁側が残るのみであるが、大きく 3 層に分けられる。床面から 10 ㎝程の位置に、天井（第 1・2 層）が塊の状態で落ちている様子が確認される。

奥壁側の床面からは、10 ～ 15 ㎝程の大きさの礫が、敷かれたような状態で多量に出土している。いずれの礫にも被熱の痕跡が確認されており、炉穴の使用時に用いられた礫の可能性が高い。土器や石器のなど遺物は出土していない。

151 号炉穴（図 86・92・96）

150 号炉穴の南側に位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第 1 検出面より約 25 ㎝下

方で検出されている。奥壁側が 150 号炉穴と、前庭部側は 152 号炉穴と一部重複する位置関係にあったとみられるが、検出された段階で既に切り合う部分の土層が失われていたため、土層による切り合い関係は確認できていない。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、奥壁側の幅がやや狭く卵形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝である。埋土は、地山と焼土ブロックの混在した層であり、天井の崩落土とみられる。遺物は出土していない。

152・153 号炉穴（図 86・92・97）

151 号炉穴の南側に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面において、152 号炉穴と 153 号炉穴が一体になるような形で検出されており、最終的に２基存在したことが確認されている。燃焼部の焼土面を分離することは難しいが、焼土面の厚さは 153 号炉穴の付近が２㎝程であるのに対して、152 号炉穴の付近は約９㎝と厚い。実際は一部重複する部分も存在するであろうが、燃焼部については、焼土の厚い範囲を 152 号炉穴、薄い範囲を 153 号炉穴としておく。

152 号炉穴の燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、厚さは最も厚い部分で約９㎝である。第１検出面から床面までの深さは約 32 ㎝である。奥壁はやや斜め上方へ立ち上がる。前庭部には、長さ約 45 ㎝・幅 85 ㎝の広い平坦面が設けられている。埋土は単層で、154 号炉穴の前庭部の埋土と共通する。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。しかし、燃焼部は 153・154 号炉穴の前庭部と重複する位置関係にあり、天井が残存していたとは考えにくい。152 号炉穴の天井が崩落した後、153 号炉穴か 154 号炉穴のいずれかを築く際に、崩落土は除去されたとみてよいであろう。

153 号炉穴は、一部天井が残存する。燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。手前側の床面と側壁に赤化した焼土面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で約２㎝である。煙道は直径 35 ㎝程の大きさで、奥壁は直立気味に立ち上がる。床面から天井までの高さは、15 ㎝程と狭い。土層に関しては、記録が残されていないため不明であるが、152 号炉穴の土層に切り合い関係が認められないことから、前庭部に関しては 152 号炉穴の跡を利用していたとみてよい。第１検出面から床面までの深さは約 35 ㎝である。

遺物としては、重複する部分の埋土から、縄文土器１点と剝片３点が出土している。縄文土器は表面の摩滅が著しく図化できない細片である。重複する部分の埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9720 ± 50 yrBP という結果が得られている。

154 号炉穴（図 86・92・97、図版 21・37）

153 号炉穴の南側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは 45 ㎝である。煙道は直径約 35 ㎝の大きさで、奥壁はやや斜めに立ち上がる。天井は 25 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 32 ㎝である。埋土は大きく５層に分けられており、燃焼部の焚口側には天井の崩落土（第３・４層）が確認されている。やや崩れてはいるが、ほぼ塊の状態で崩落している様子が見て取れる。前庭部の埋土（第２層）は 152 号炉穴と共通し、152 号炉穴の跡を前庭部として利用している。

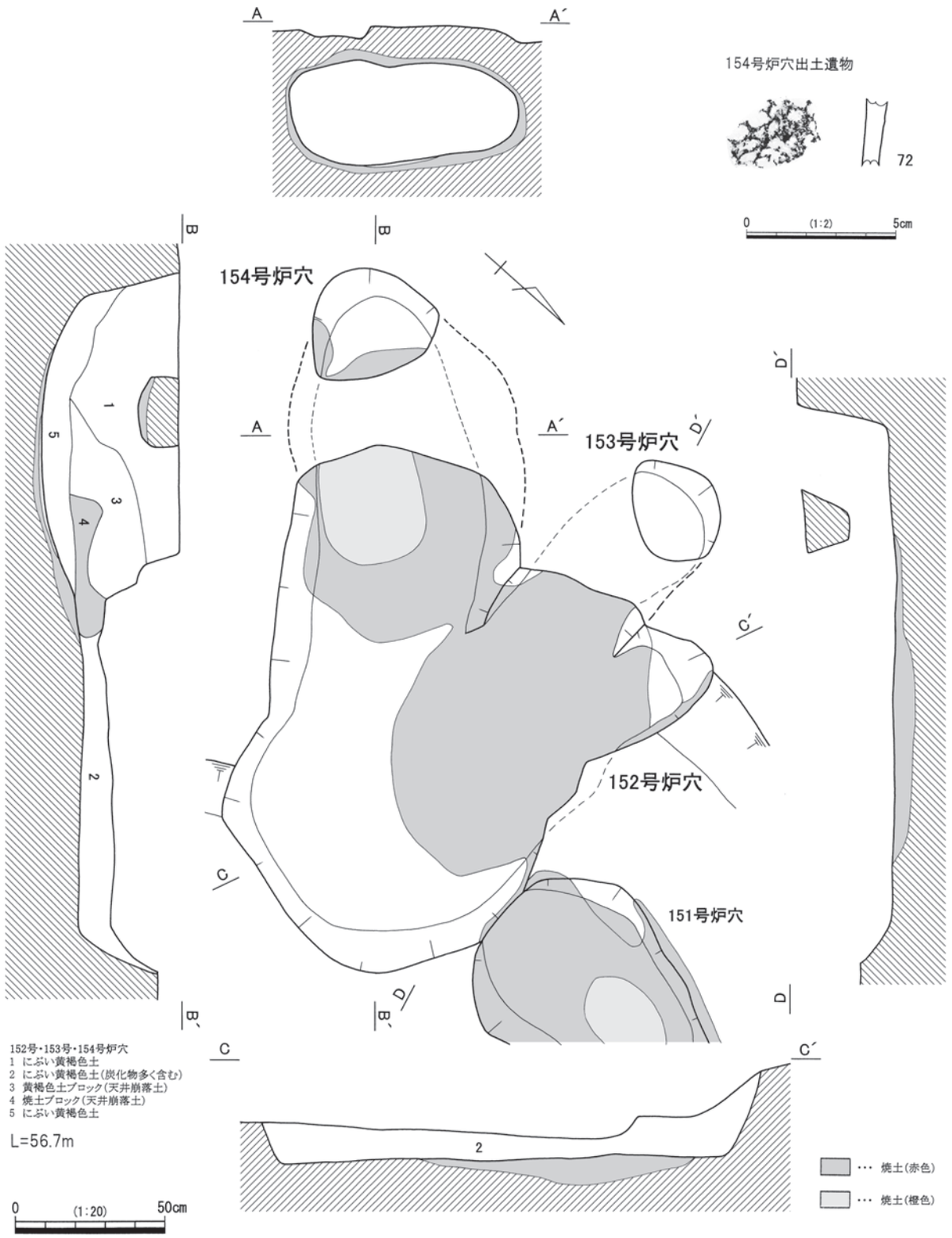


図 97　152 ～ 154 号炉穴実測図・出土遺物

遺物としては、埋土から縄文土器 6 点と剥片 1 点が出土している。72 は縄文土器の胴部の破片で、外面にはＬ撚糸文が施されている。図化できる縄文土器はこの 1 点で、他は細片である。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

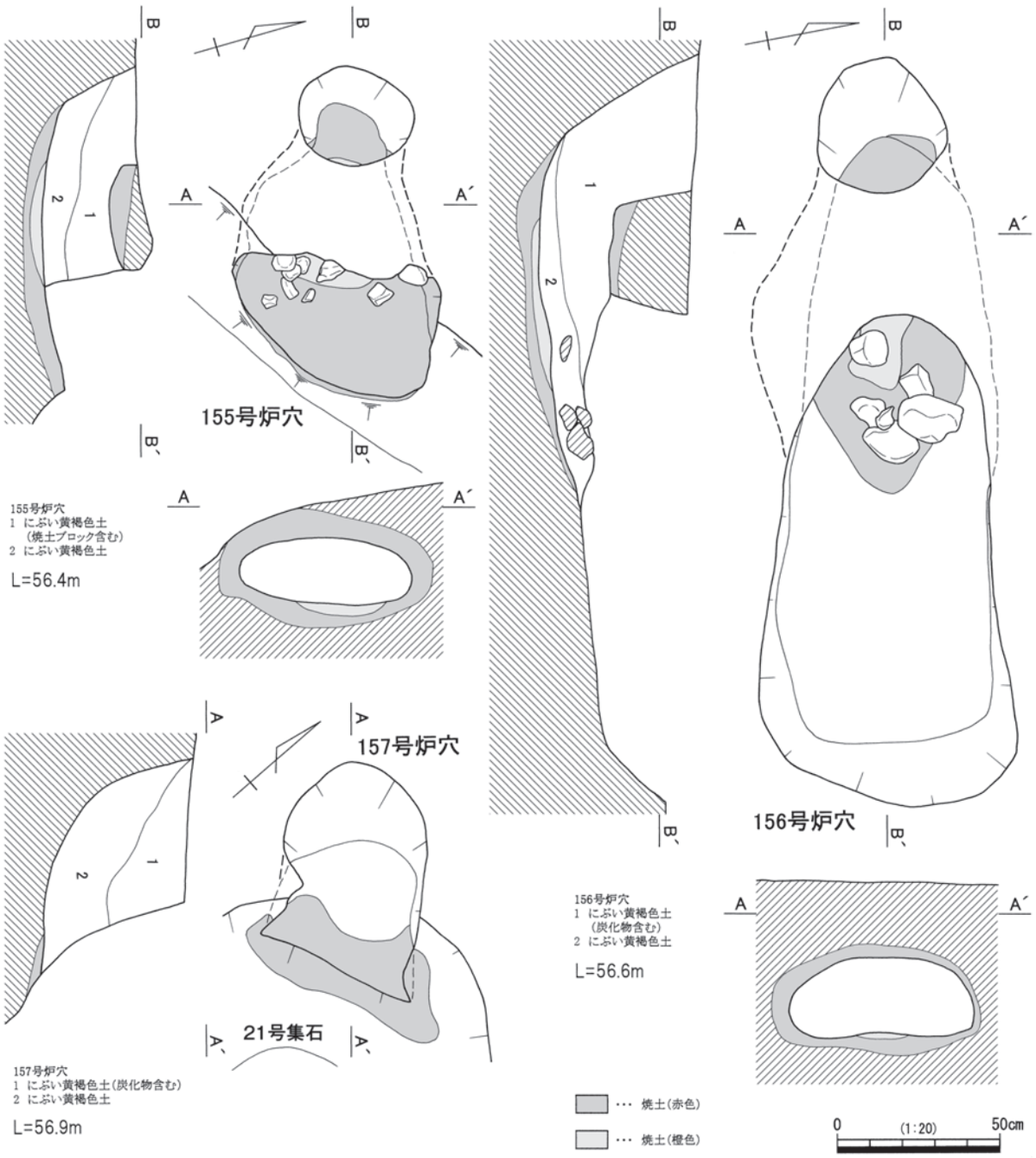


図 98　155 ～ 157 号炉穴実測図

155 号炉穴（図 98・103）

154 号炉穴から約３ｍ南東に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、南東側は攪乱により失われている。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で残存し、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、全面に赤化した焼土面が検出されており、中央の奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは 30 ㎝となっている。煙道は直径 30 ㎝の大きさで、奥壁は斜めに立ち上がる。天井は 30 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 20 ㎝となっている。埋土は大きく２層に分けられており、上層（第１層）には剥落した天井の焼土が混じる。

燃焼部の床面からは、10㎝程度の大きさの礫が散らばったような状態で出土している。いずれの礫にも被熱の痕跡が確認されている。原位置は保っていないかもしれないが、炉穴の使用時に用いられたものと推測される。土器や石器などの遺物は出土していない。

156 号炉穴（図 98・103）

155 号炉穴から約２ｍ西側に位置する。主軸は東－西方向であり、煙道は西側につく。第１検出面で検出されている。最初前庭部のみが検出され、不明遺構として一旦調査を終えているが、後に再精査を行い燃焼部と煙道の存在が確認された。

燃焼部は、長さ 110 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除いて、全面に赤化した焼土面が検出され、中央のやや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、45 ㎝となっている。煙道は直径 40 ㎝の大きさで、奥壁は斜めに立ち上がる。天井は 38 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 21 ㎝である。前庭部には、長さ 75 ㎝・幅 65 ㎝の規模の平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。焚口付近の天井と前庭部の土層については、前述のように不明遺構として扱われたためか、記録が残されておらず、詳細は不明とせざるを得ない。ただし、調査所見に部分的に焼土が確認されたとあることから、焚口付近の失われている天井についても、遺存または崩落していた可能性が高い。

燃焼部の焚口寄りの床面からは、15 ～ 20 ㎝程の大きさの礫が出土している。礫に被熱の痕跡が認められなかったことから、炉穴の使用後（廃絶後）に入れられたものと判断される。遺物としては、埋土から剝片が２点出土しているのみである。

157 号炉穴（図 98・101・103、図版 21）

156 号炉穴から約４ｍ北西に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、大半が 21 号集石によって失われている。

燃焼部は、長さ 40 ㎝・幅 50 ㎝の規模で残存する。床面と側壁の一部に、赤化した焼土面が検出されており、厚さは最も厚い部分で約３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、45 ㎝である。奥壁は、湾曲しながら直立気味に立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。土層の切り合い関係から、明らかに 21 号集石よりも先行して築かれていることがわかる。遺物としては、埋土中から剝片が２点出土しているのみである。

158 号炉穴（図 99・101・103、図版 21）

157 号炉穴の西側の炉穴群の中で、北西部に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、前庭部には 19 号集石が築かれている。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。焚口側の床面と側壁には、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約７㎝である。第１検出面から床面までの深さは、25 ㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 70 ㎝・幅 75 ㎝の広い平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられており、床面から数㎝上に天井の崩落土（第１層）が確認されている。なお、天井崩落後の前庭部には 21 号集石が築かれているが、前庭部の形状に手が加えられていないことから、前庭部をほぼそのまま穴として利用したとみてよいであろう。

燃焼部の床面上に薄く堆積した第２層の上面からは、10 ～ 20 ㎝程の礫が集められたような状態で発

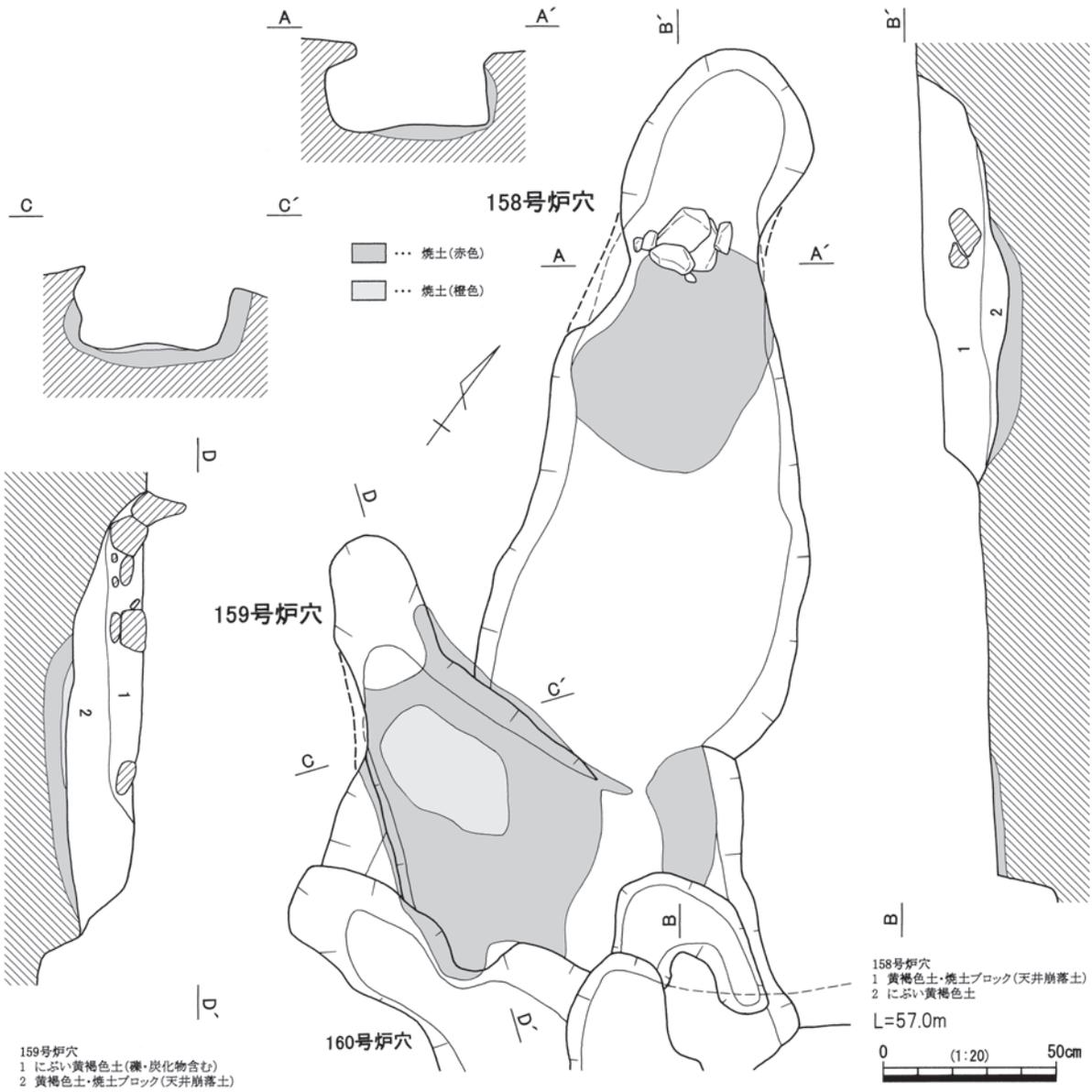


図 99　158・159 号炉穴実測図

見されている。被熱の有無に関する記録はないが、出土状況から、炉穴の使用後やや時間をおいて入れられたものとみてよいであろう。土器や石器などの遺物は出土していない。

159 号炉穴（図 99・101・103、図版 21）

158 号炉穴の南側に位置する。主軸は北西方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、北側を 158 号炉穴、南側を 160 号炉穴と接している。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模であり、二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁を除きほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。奥壁はやや湾曲しながら立ち上がる。埋土は大きく２層に分けられており､床面上には天井の崩落土（第２層）が確認される。上層（第１層）には礫が多数確認されており、高さは 158 号炉穴の前庭部とほぼ一致する。これらは７号集石の広がりとみた方がよい。土層の切り合いでは確認できないが、このことから、159 号炉穴は 158 号炉穴よりも先行する炉穴である可能性が高いと推測される。土器や石器などの遺物は出土していない。

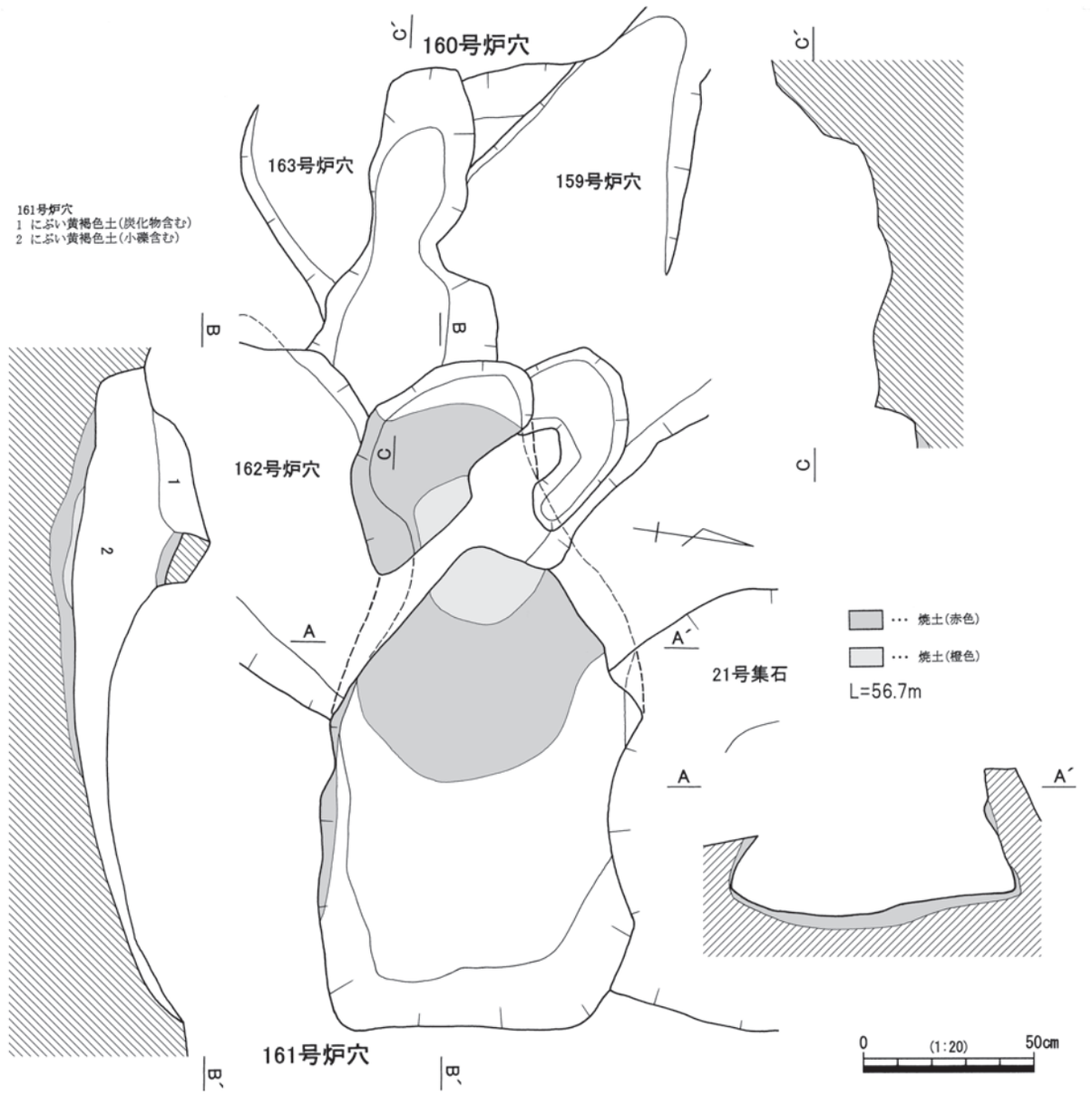


図 100　160・161 号炉穴実測図

160 号炉穴（図 100・101・103、図版 21）

159 号炉穴の南側に位置する。第 1 検出面で検出されているが、焼土面は確認されていない。調査所見によると、土の色がややくすんではいたが、輪郭もほとんど把握できないような状態であったようである。周辺の 159・161 ～ 163 号炉穴と接してはいるが、切り合い関係もはっきりしない。

そのような状態で掘り進められたためか、土層の記録は残されていない。また、床面の断面図をみる限り、凹凸が激しく一定していない。炉穴ではない可能性も十分に考えられる。少なくとも被熱の痕跡が確認できないことから、炉穴であったとしても使用されていないことは明らかである。

161 号炉穴（図 100・101・103、図版 21）

160 号炉穴の東側に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されており、162 号炉穴と 21・22 号集石に切られていることが確認されている。一部天井が遺存する。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 85 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ

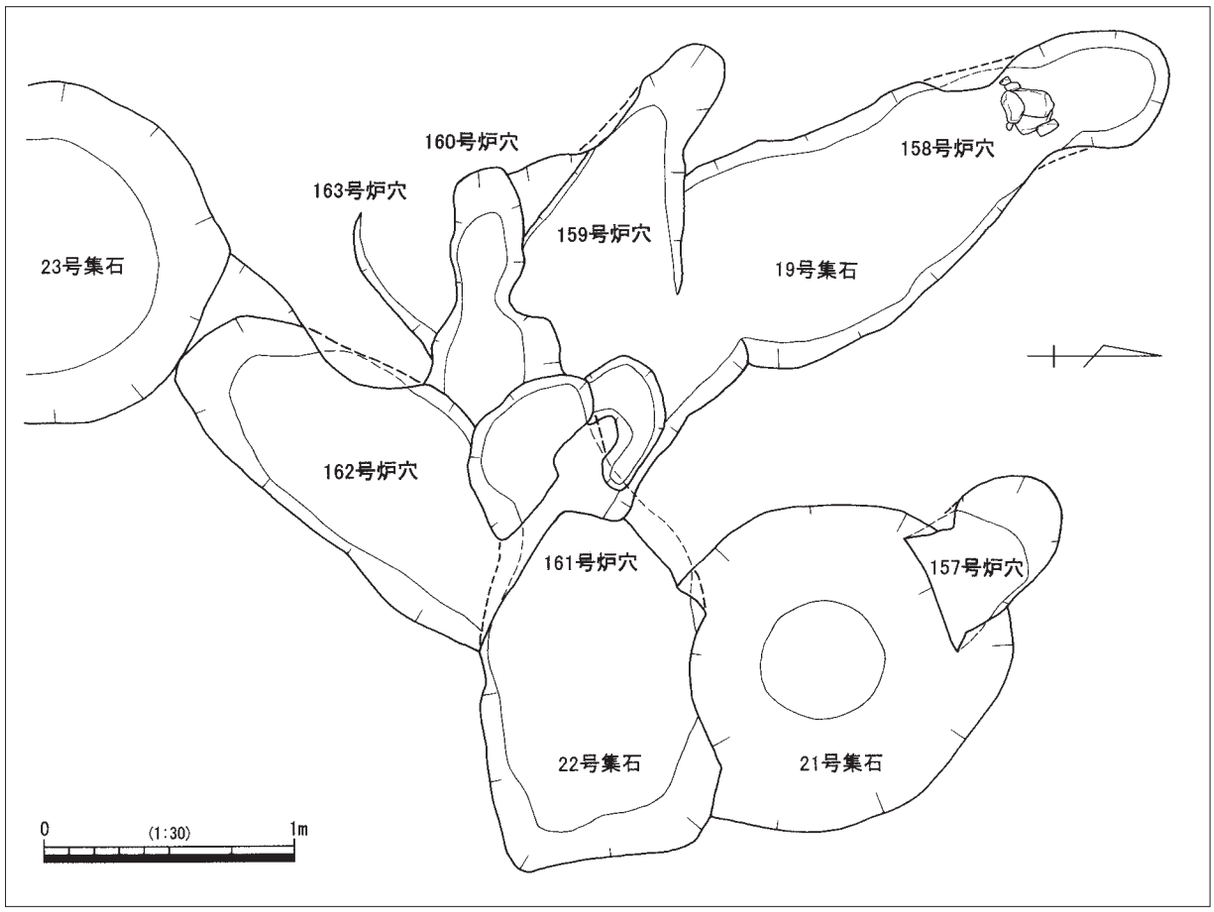


図 101　157 ～ 163 号炉穴配置図

全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、40 ㎝となっている。煙道は 162 号炉穴によって一部失われているが、直径 30 ㎝前後の大きさと推定される。奥壁は直立気味に立ち上がる。床面から天井までの高さは 25 ㎝となっている。前庭部には、長さ 55 ㎝・幅 80 ㎝程の広い平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられているが、高さからみて第１層は 162 号炉穴の埋土である。このことから、162 号炉穴は、161 号炉穴の埋没後に築造されていることが明らかである。また、前庭部には、161 号炉穴の埋土（第２層）を掘り込むかたちで５号集石が築かれている。おそらくは、大半が埋没し浅い窪みとなっていた場所を掘り直して、集石を築いたのであろう。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9540 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

162 号炉穴（図 101・102・103、図版 21・24）

161 号炉穴の南西に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、161 号炉穴より後出することが確かめられている。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは 30 ㎝である。奥壁は斜めに立ち上がる。21 号集石によって失われているが、前庭部は残存部で長さ 45 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が確認されている。埋土は、奥壁側の土層しか記録が残されていないが、地山に近似するややくす

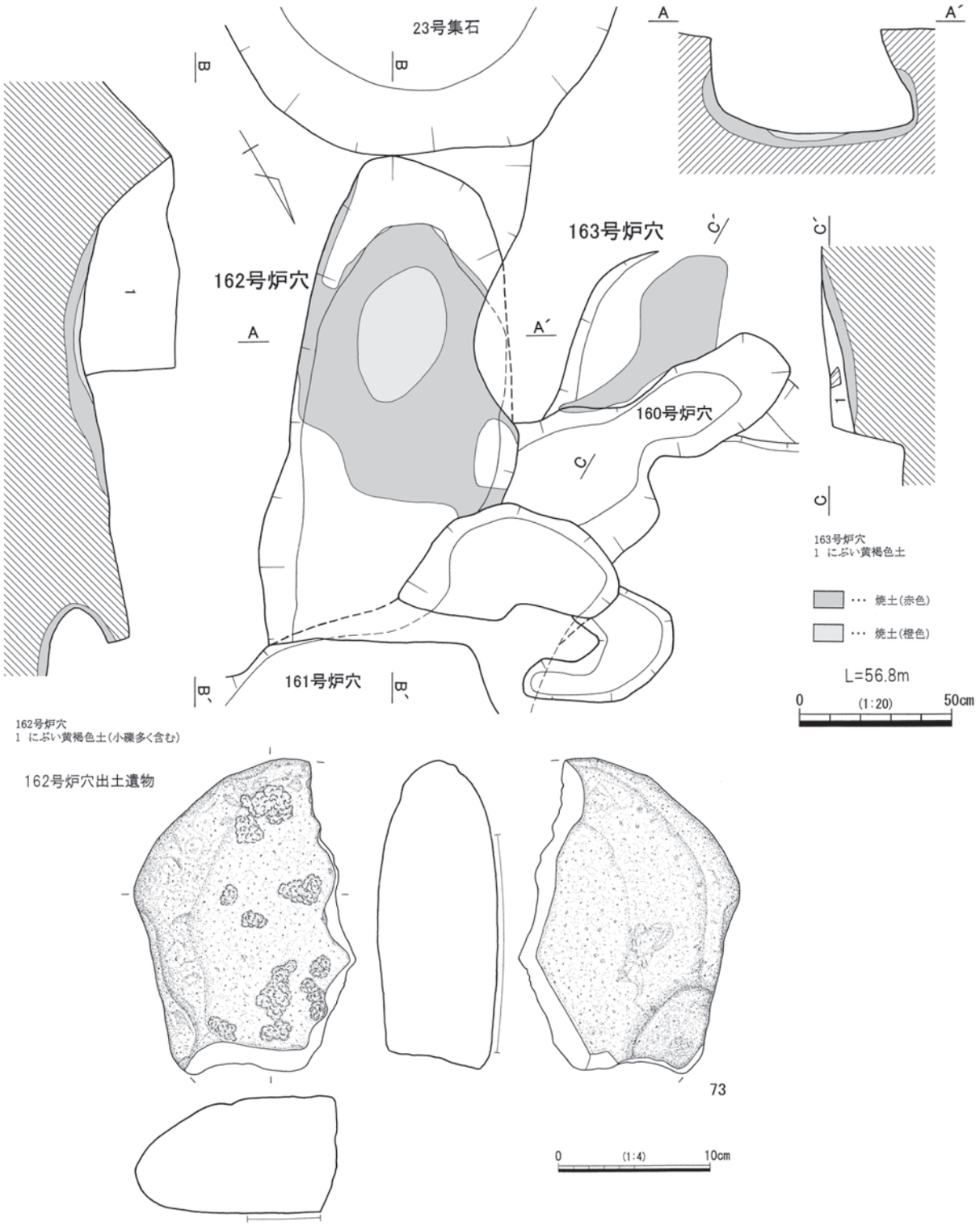


図 102　162・163 号炉穴実測図・出土遺物

んだ黄褐色土の単層である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

遺物としては、石皿が 1 点出土しているのみである。73 は石皿の破片で、具体的な位置については不明であるが、埋土中から出土している。石材は石英班岩で、表面には使用による摩滅が確認できる。

163 号炉穴（図 101・102・103、図版 21）

162 号炉穴の西側に位置する。第１検出面で検出されており、床面付近でかろうじて存在が確認されている。主軸は東－西方向であるが、どちら側が煙道であるか判然としない。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 60 ㎝・幅 25 ㎝の範囲で確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分でも３㎝ほどしかない。北側は 160 号炉穴に切られているように図化されているが、先述のように 160 号炉穴の存在自体確実性が乏しく、切り合い関係が正確に捉えられているかどうか疑わしい。また、側壁らしき落ち込みが認識されているが、被熱の痕跡が認められず、炉穴の輪郭とは考えにくい。実際は、検出面の段階ですでに、床面のみしか残存しない状況であったとみた方がよい。土器や石器などの遺物は出土していない。

164 号炉穴（図 103・104）

163 号炉穴から約 1.5 ｍ北西に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面で燃焼部の床面付近が検出されている。

燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 35 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは 10 ㎝である。奥壁は斜めに立ち上がる。埋土は、地山に近似する黄褐色土の単層で、天井の遺存や崩落の痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

165・166 号炉穴（図 103・104、図版 24・37・39）

164 号炉穴から約１ｍ南西に位置する。ともに第１検出面で検出されており、調査当初は１基の炉穴として調査されている。165 号炉穴は、長さ 100 ㎝・幅 80 ㎝の長方形で検出されているが、焼土面が床面の一部にしか確認できないことから、掘り過ぎの可能性が高い。焼土面が西側に偏っていることからみて、166 号炉穴の奥に同じような幅で存在したものと推定される。

165 号炉穴の燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 55 ㎝・幅 40 ㎝の規模で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約８㎝である。166 号炉穴の燃焼部は、長さ 75 ㎝・幅 55 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約７㎝である。奥壁は湾曲しながら立ち上がる。奥壁付近の床面からは、10 ㎝程度の大きさの礫と縄文土器が、

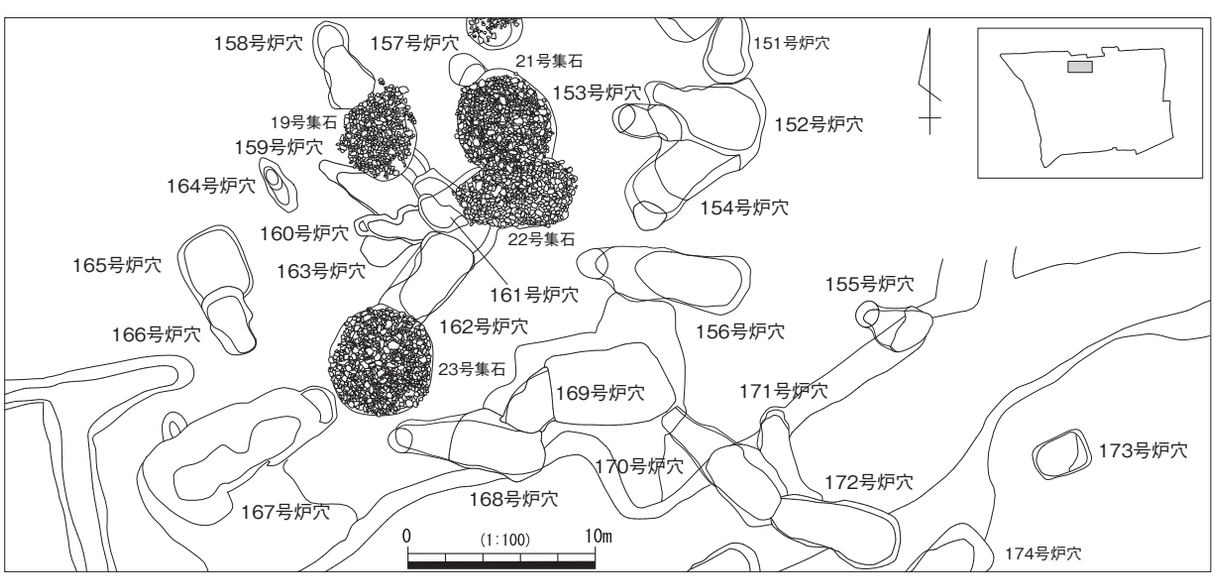


図 103　152 ～ 173 号炉穴配置図

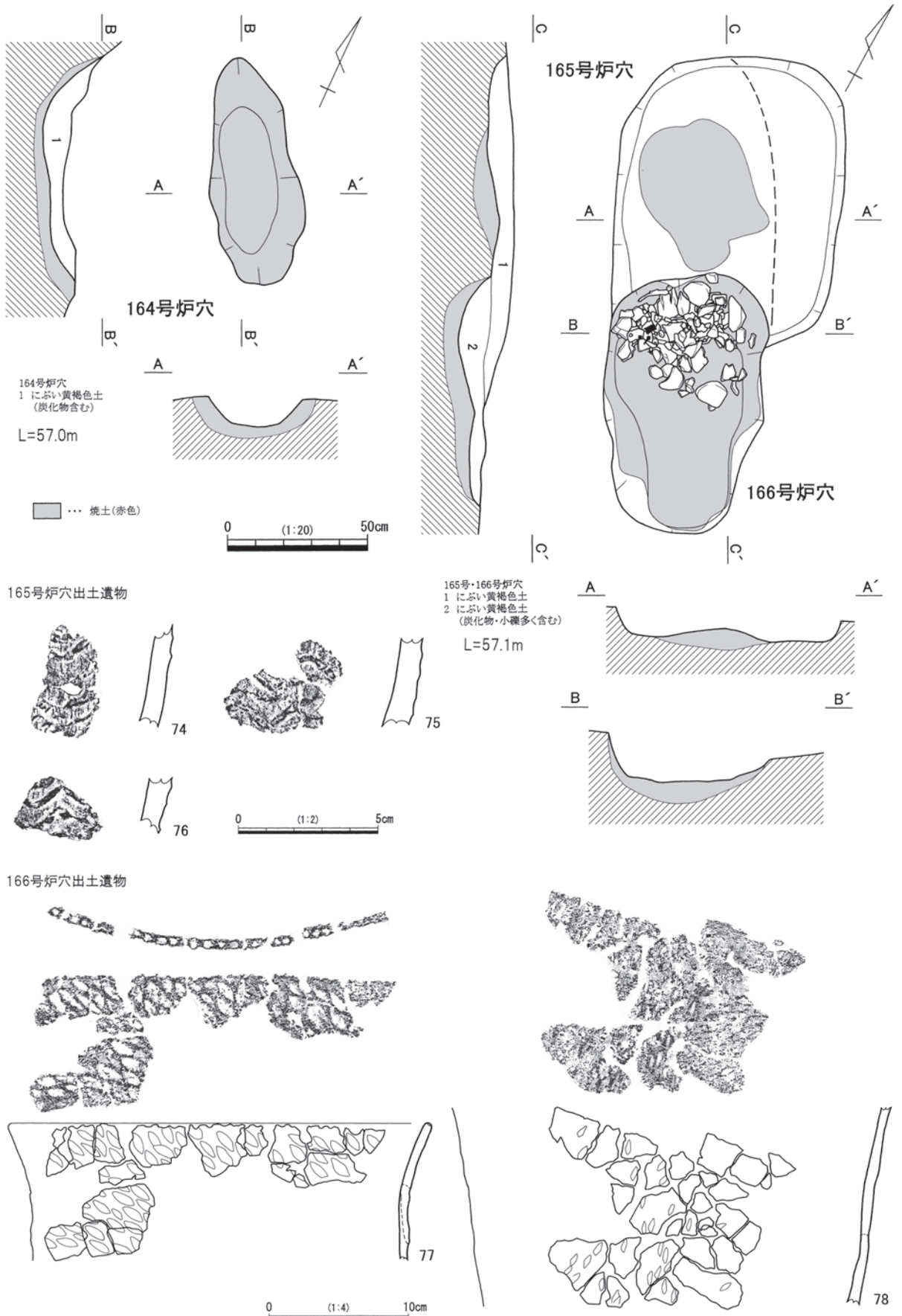


図 104　164 ～ 166 号炉穴実測図・出土遺物

集められたような状態で出土している。礫にはいずれも被熱の痕跡が確認されており、炉穴で用いられたものの可能性が高い。埋土は大きく２層に分けられており、第１層は 165 号炉穴と 166 号炉穴に共通する。天井の崩落土は確認されていないが、他の炉穴の例などからみて、166 号炉穴の天井崩落後に崩落土を除去し、165 号炉穴の前庭部として利用したものと推測される。

165 号炉穴の遺物としては、埋土から縄文土器が３点出土している。74 ～ 76 はいずれも胴部の破片であり、外面には山形の押型文が施されている。

166 号炉穴からは、奥壁付近から縄文土器の破片が多量に出土している。細片で摩滅の著しいものが多いが、判別できるものはいずれも外面に楕円押型文が施文されており、同一個体であると推定される。ある程度の大きさまで接合できた２点を図示する。77 は口縁部、78 は胴部である。口縁部は外反し、口縁端部には刺突文が施されている。口縁部の復元径は、28.8 ㎝である。

なお、床面付近と埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を実施しており、9700 ± 60 yrBP（床面付近）と 9500 ± 50 yrBP（埋土中）という結果が得られている。

167 号炉穴（図 103・105）

166 号炉穴から南へ約 1.5 m に位置する。第１検出面で検出されている。

長さ 290 ㎝・幅 100 ㎝の規模と認識されているが、焼土面が確認されるのは南側の壁面の一部のみであり、炉穴の輪郭を捉えているとは考えにくい。

壁面に焼土面が確認されることから、炉穴が存在したことは間違いないであろうが、全体的に大幅に掘り過ぎているとみてよい。規模や形状の分析は意味をなさないため、検出された焼土面の紹介に留めたい。

なお、土器や石器などの遺物は出土していない。

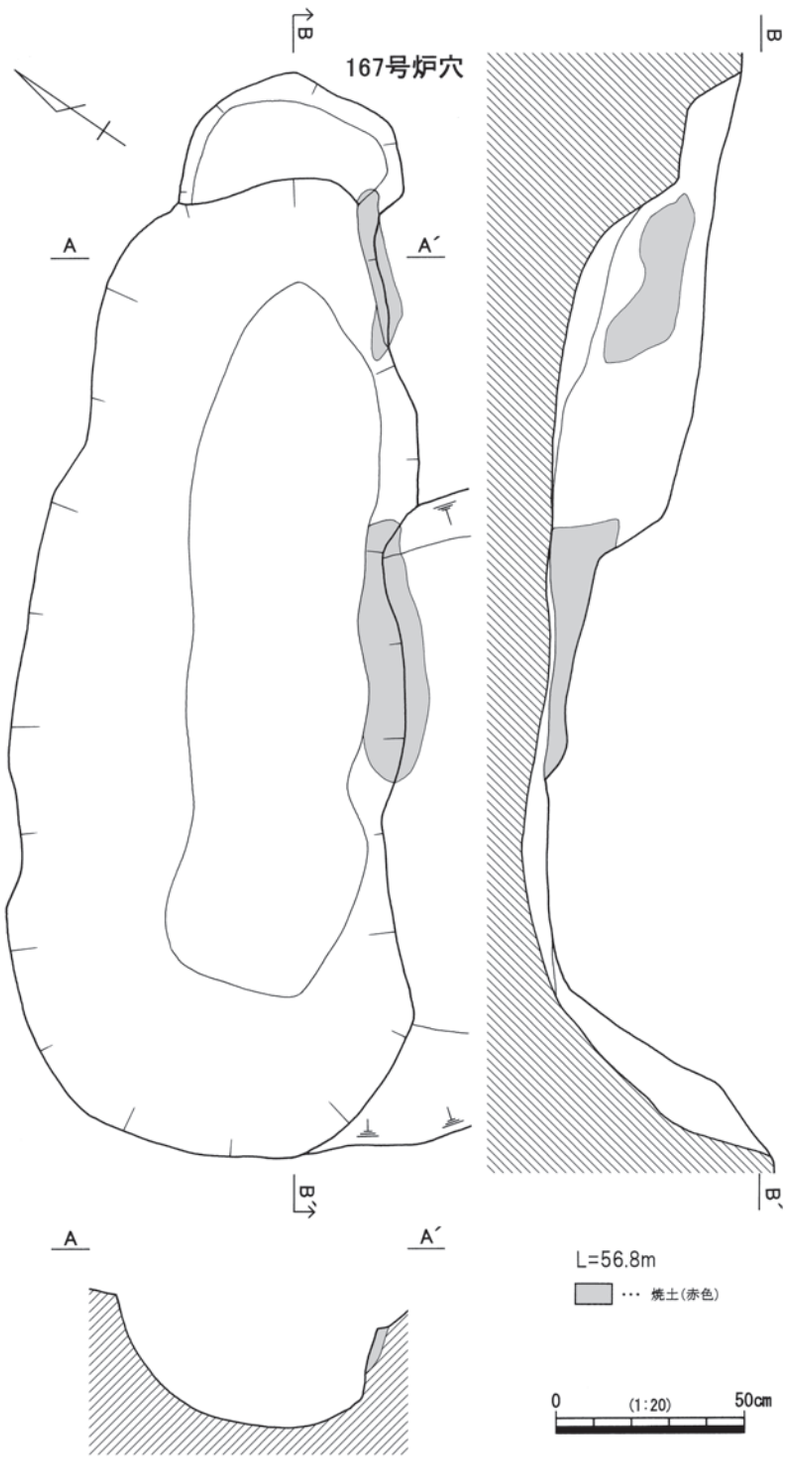


図 105　167 号炉穴実測図

168 号炉穴（図 103・106、図版 23）

167 号炉穴から約１ｍ東側に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、天井が一部残存する。焚口付近から前庭部にかけては、攪乱によって一部失われている。

燃焼部は、長さ 135 ㎝・最大幅 80 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状となっている。奥壁側を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前側には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、65 ㎝となっている。煙道は直径 32 ㎝の大きさで、奥壁は直立気味に立ち上がる。天井は約 50 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 34 ㎝である。前庭部には、長さ 65 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には天井から剥落した焼土ブロック（第３層）が薄く堆積し、焚口付近には大きく崩落した天井（第２層）も確認できる。前庭部の高さ

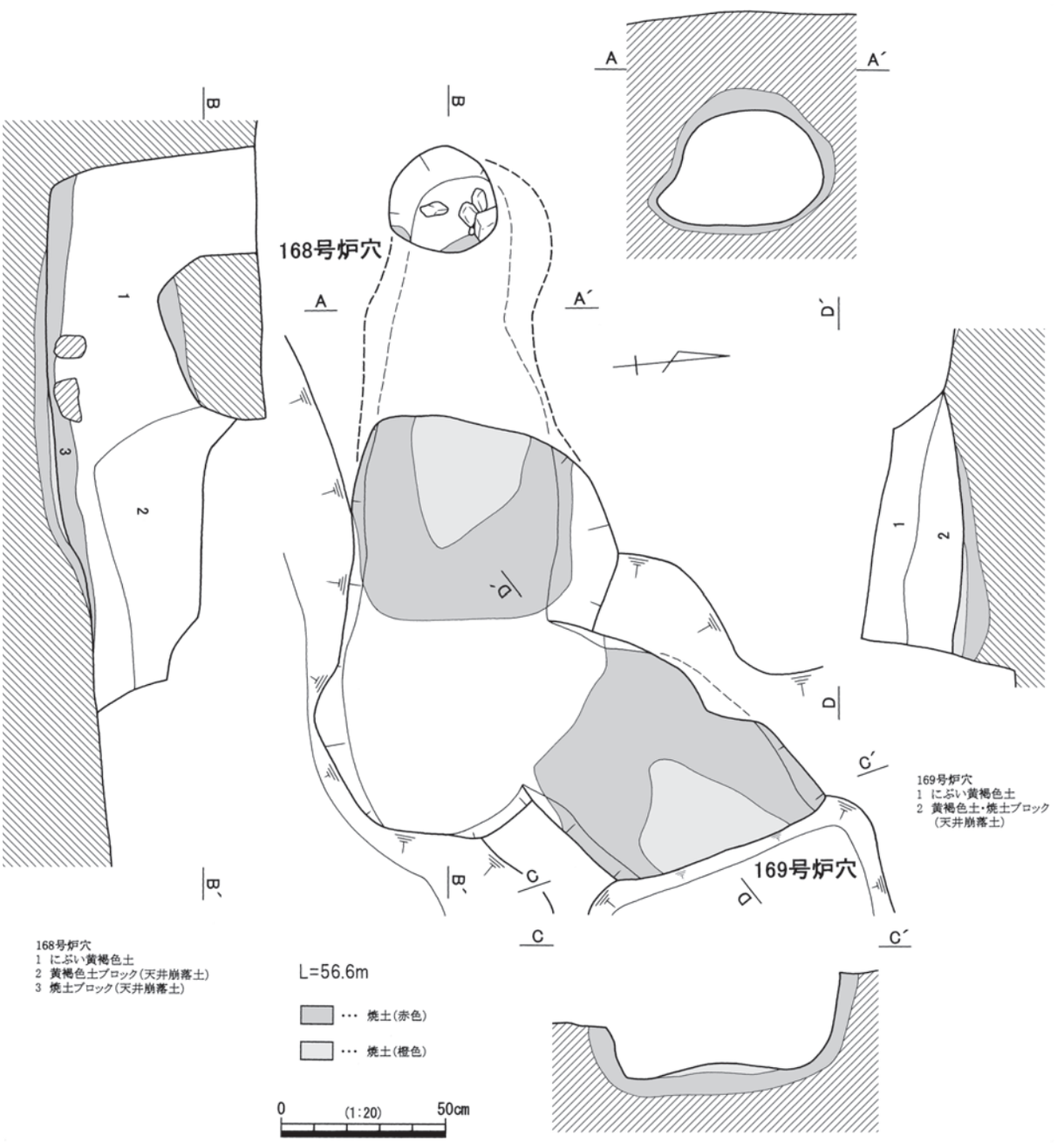


図 106　168・169 号炉穴実測図

は 169 号炉穴の天井崩落土の上面となっており、埋土（第１層）が共通する。169 号炉穴の天井崩落後、崩落土の除去・整地を行い、168 号炉穴を築く際に前庭部として再利用していることがわかる。

燃焼部の中央から奥壁にかけての床面付近からは、10 ㎝程度の大きさの礫が出土している。礫には、被熱の痕跡が確認されている。床面からやや浮いているものもあり、原位置は保っていないであろうが、炉穴の使用時に用いられた礫の可能性が高い。

遺物としては、縄文土器と剝片が各１点出土しているのみである。縄文土器は、文様の判別ができない程の細片である。いずれも埋土からの出土である。なお、床面付近から採取された炭化材のうち２点についてＣ 14 年代測定を実施し、9690 ± 60 yrBP と 9540 ± 50 yrBP という結果が得られている。

169 号炉穴（図 103・106、図版 24）

168 号炉穴の東側に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方の攪乱の底部で検出されており、奥壁側は攪乱により失われている。

燃焼部は、長さ 65 ㎝・最大幅 66 ㎝の規模で残存する。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。埋土は大きく２層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２層）が確認される。上層（第１層）は 168 号炉穴と共通しており、同時期に埋没していることがわかる。先述のように、169 号炉穴の天井崩落後、崩落土の除去・整地を行い、168 号炉穴の前庭部として再利用されている様子がみてとれる。遺物は出土していない。

170 号炉穴（図 103・107、図版 24・40）

169 号炉穴から約２ｍ南東に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。前庭部は、第１検出面より約 50 ㎝下方にあたる攪乱の底部で検出されている。奥壁は攪乱により失われている。

燃焼部は、長さ 120 ㎝･最大幅 70 ㎝の規模で残存し、二等辺三角形に近い形状である。奥壁側を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面・橙化面ともに約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 75 ㎝となっている。天井は 52 ㎝の幅で残存し、床面から天井までの高さは 26 ㎝である。前庭部には、長さ 70 ㎝･幅 60 ㎝の平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられており、床面上には剥落した天井とみられる焼土ブロック（第２層）が薄く堆積する。前庭部付近の土層は記録されていないが、171 号炉穴の焼土面が失われている点から、171 号炉穴より後出する炉穴と判断される。

遺物としては、楔形石器と剝片が各１点出土しているのみである。いずれも埋土から出土している。79 は楔形石器で、石材はシルト岩である。なお、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

171 号炉穴（図 103・107）

170 号炉穴の東側に隣接する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面から約 50 ㎝下方にあたる攪乱の底部で、燃焼部の床面が検出されている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で検出されており、170 号炉穴により一部失われている。全形は把握できないが、奥壁側の幅が狭いことから、卵形か二等辺三角形に近い形状であろう。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央には橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。奥壁は湾曲しながら斜め上方へ立ち上がる。埋土は、奥壁側と前庭部側の一部に残存するのみであり、天井が残存したか否かについては判断できない。前庭部の埋

土は 172 号炉穴の天井崩落土の上に堆積し、172 号炉穴の第 1 層と同一であるとみなされる。171 号炉穴は 172 号炉穴の天井崩落後に築かれ、172 号炉穴の跡を前庭部として利用していたことがわかる。

奥壁付近の床面からは、10 ～ 20 ㎝程の大きさの礫が集められたような状態で出土している。被熱の有無に関する記録がないため、炉穴の使用時のものか否か判断できないが、出土状態からみて、人為的に入れられたものとみてよい。土器や石器などの遺物は出土していない。

172 号炉穴（図 103・108、図版 39・42）

170 号炉穴の南東側に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。一部攪乱の底部で確認されているが、全体は第 1 検出面より 20 ㎝下方まで掘り下げた段階で検出されている。焼土面が２箇所に確認されており、２基の炉穴が連続しているものと推測される。手前側の焼土面付近を 172 号炉穴①、奥側を 172 号炉穴②とする。

①は長さ 52 ㎝・幅 38 ㎝の規模で赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で

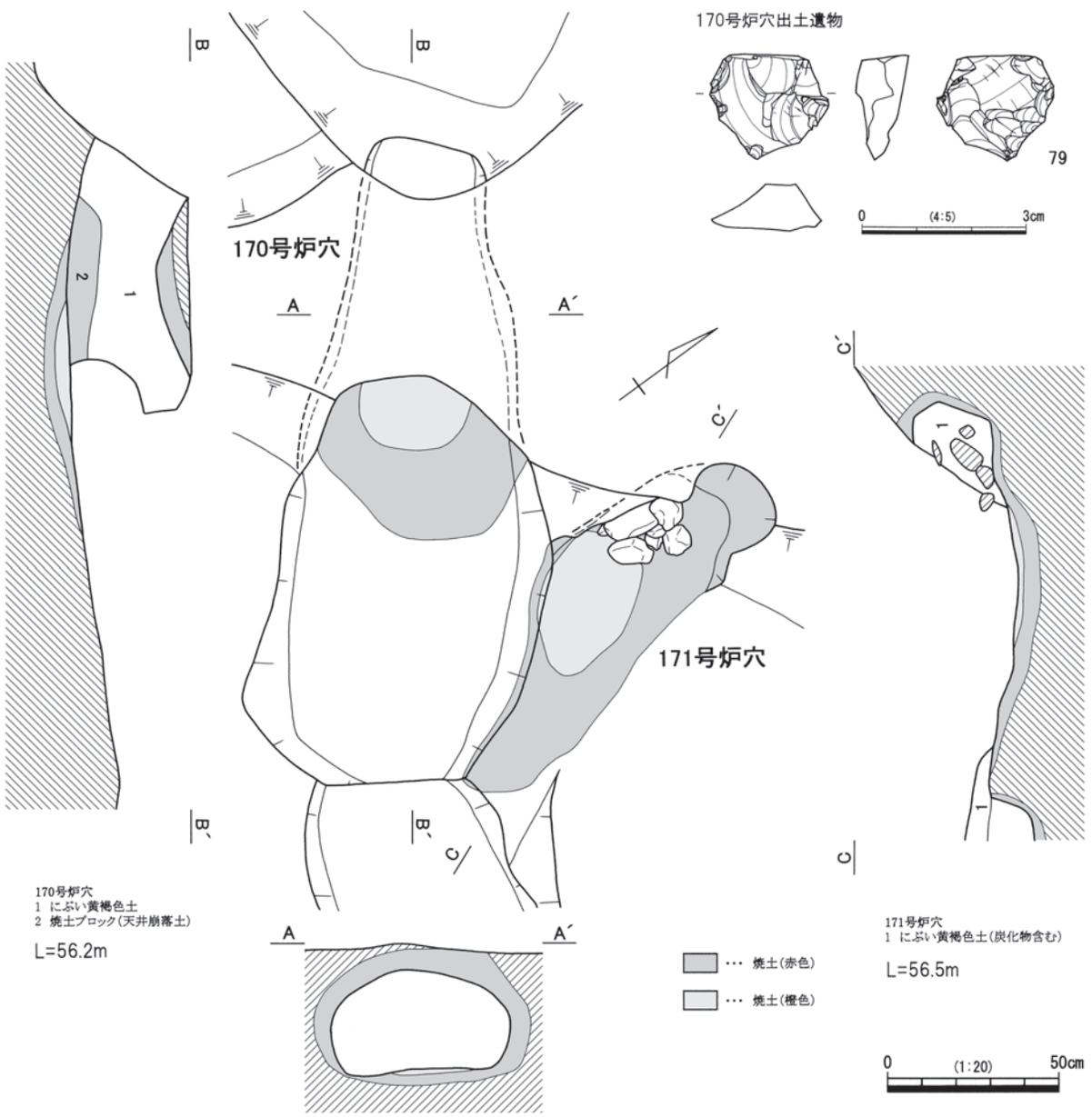


図 107　170・171 号炉穴実測図・出土遺物

約６㎝である。壁面に焼土面が確認されないことから、②の築造時に広げられたものと推測される。

②の燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。前庭部には、①の跡を使用して長さ 90 ㎝・幅 70 ㎝の平坦面が設けられている。

埋土は、大きく２層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２層）が確認される。前述のように、上層（第１層）は 171 号炉穴と共通している。

遺物としては、縄文土器と石器が出土している。80 は縄文土器の胴部の破片である。外面には RLR 縄文が施文されている。81 はシルト岩製の石核である。これらの他に、縄文土器の細片数点と剝片１点が出土している。いずれも埋土上層からの出土である。また、埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

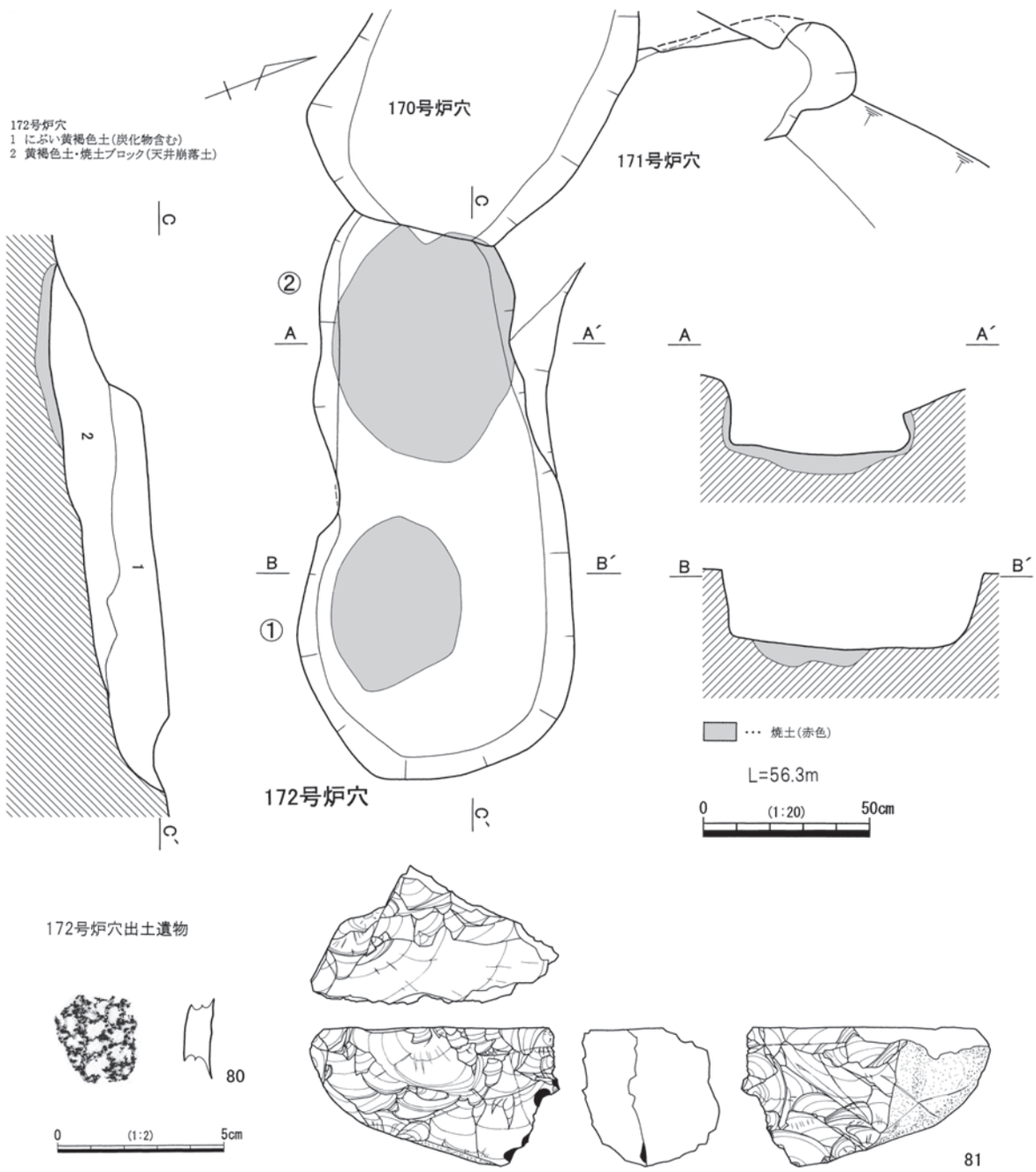


図 108　172 号炉穴実測図・出土遺物

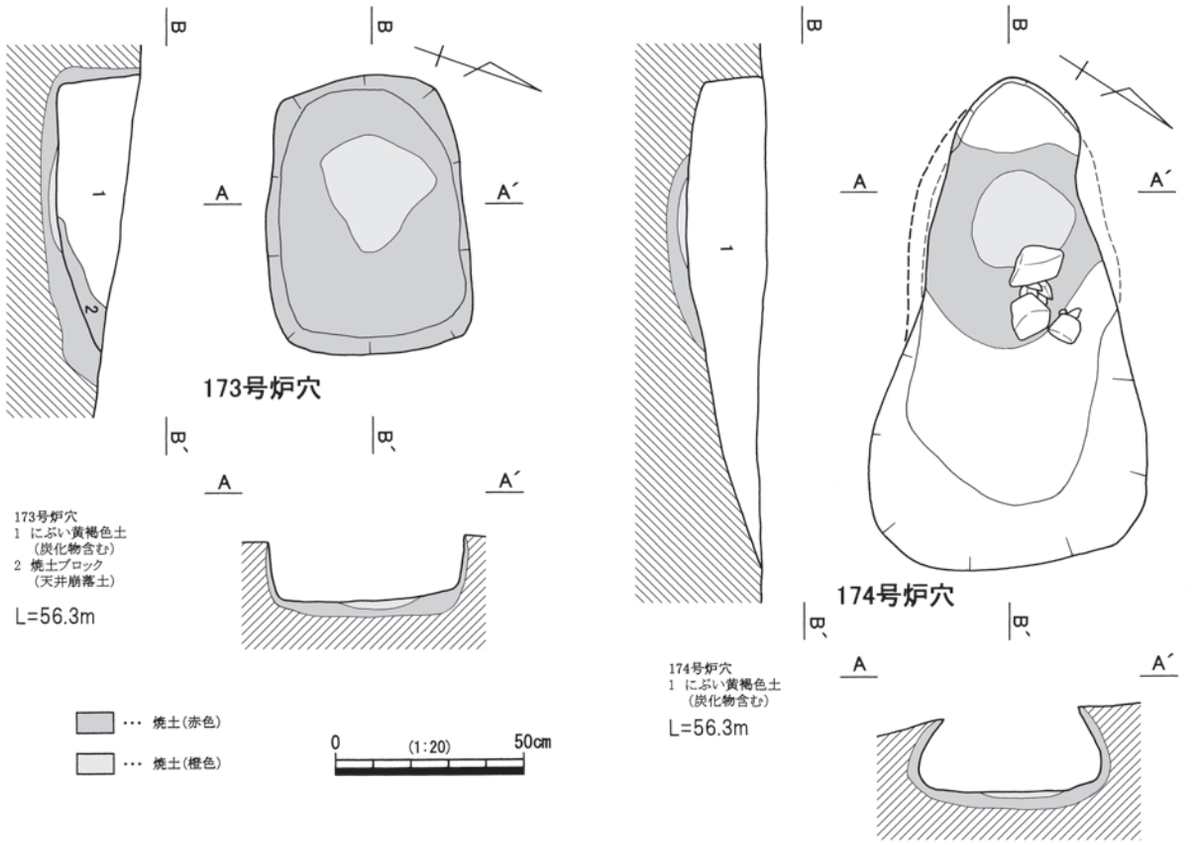


図 109　173・174 号炉穴実測図

173 号炉穴（図 103・109・110）

172 号炉穴から約 3 m東に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 53 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 8 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。埋土は大きく 2 層に分けられており、床面上には天井の剥落土とみられる焼土ブロック（第 2 層）が確認される。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

174 号炉穴（図 109・110、図版 25）

173 号炉穴から約 2 m南西に位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で、卵形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 5 ㎝、橙化面は約 3 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部には、長さ 40 ㎝・幅 50 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落の痕跡は認められない。

焚口付近の床面からは、10 ～ 15 ㎝程度の大きさの礫が出土している。被熱の痕跡が認められていな

いことから、炉穴の使用後（廃絶時）に入れられたものと推測される。

遺物としては、埋土から縄文土器が１点出土しているのみである。文様の判別ができない程の細片である。埋土中から採取された炭化物について、C 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。

175 号炉穴（図 110・111）

174 号炉穴から約 1.5 m南に位置する。主軸は北東－南西方向であり、北東側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、前庭部側は 25 号集石によって失われている。

燃焼部は、長さ 75 ㎝・最大幅 46 ㎝の規模で残存し、二等辺三角形に近い形状である。奥壁付近を除くほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前側には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、25 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。埋土は単層で、焼けた小礫を多く含んでいることから、天井の崩落土である可能性が高い。175 号炉穴の天井が崩落後、前庭部を掘り広げて 25 号集石が築かれたものと推測される。土器や石器などの遺物は出土していない。

176 号炉穴（図 110・111、図版 25・40）

175 号炉穴から約２m北西に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 74 ㎝の規模で、卵形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっ

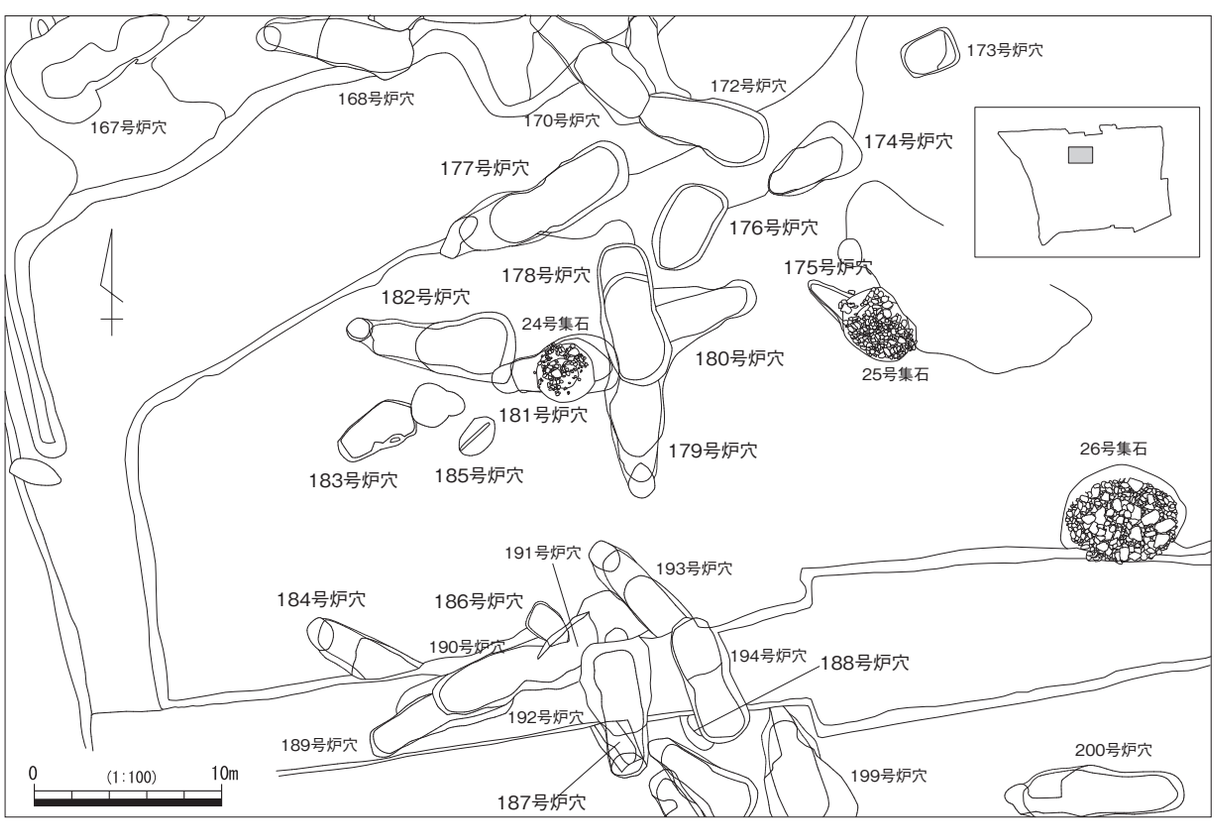


図 110　174 ～ 188 号炉穴配置図

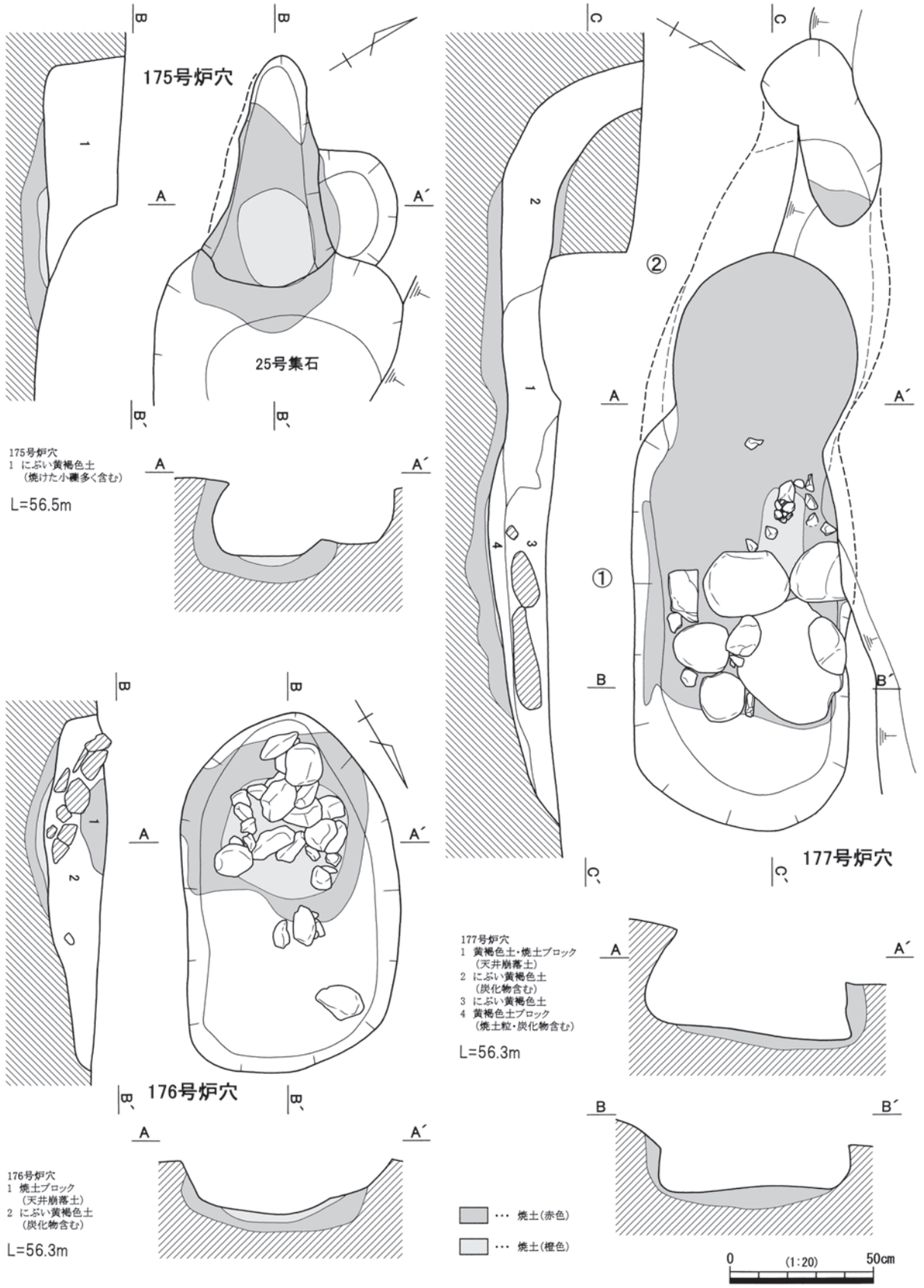


図 111　175 ～ 177 号炉穴実測図

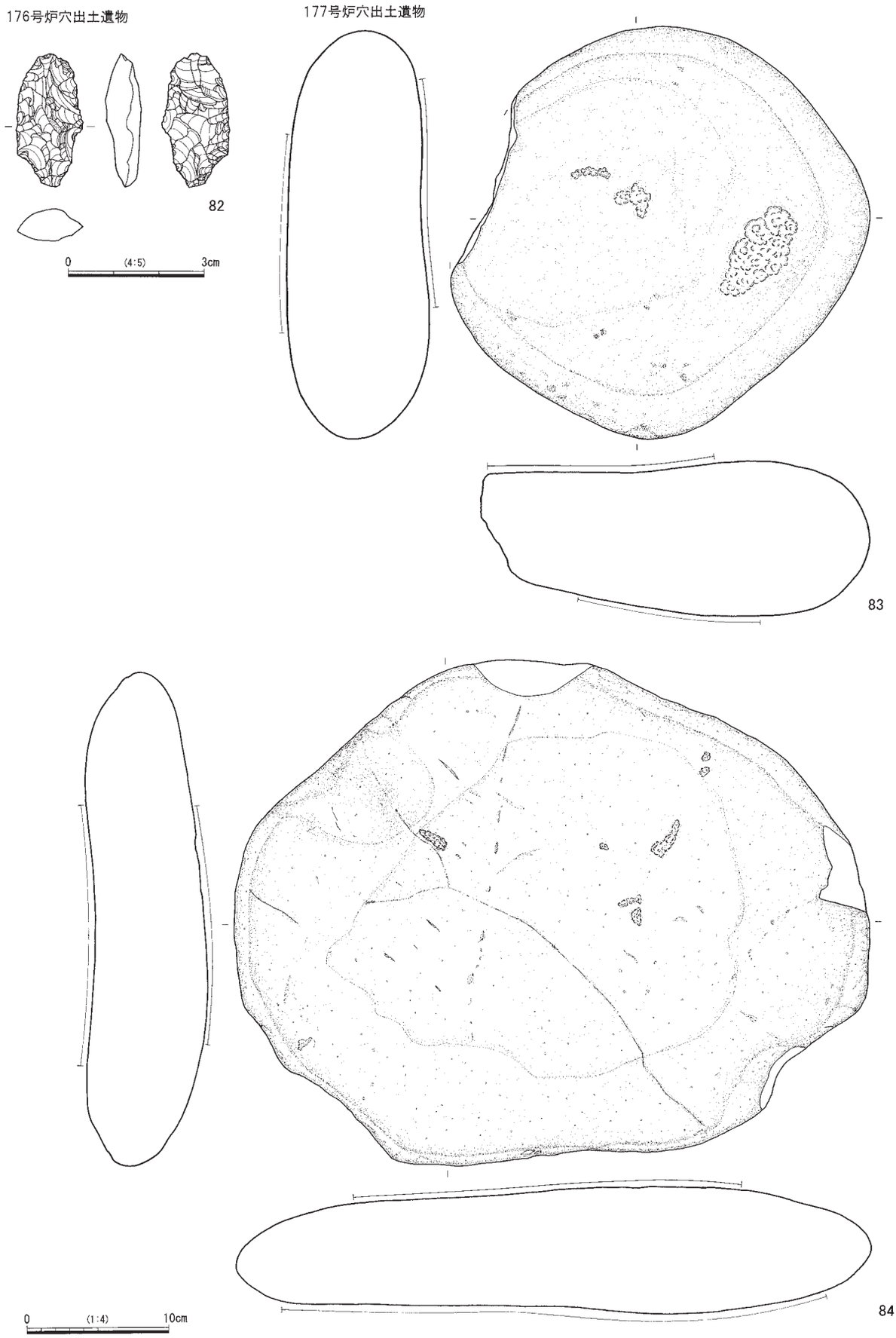


図 112　176・177 号炉穴出土遺物

ている。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部には、長さ 50 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられており、燃焼部の上層には天井の崩落土（第２層）が確認される。

燃焼部の床面からは、10 ～ 20 ㎝程の大きさの礫が集められた状態で出土している。ほとんどの礫に被熱の痕跡が認められており、炉穴の使用時に用いられた礫の可能性が高い。

遺物としては、黒曜石製の有舌尖頭器（82）が１点出土しているのみである。床面付近の埋土から出土している。

177 号炉穴（図 110・111、図版 25）

176 炉穴から約１ｍ西に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。煙道側の一部は第１検出面で検出されているが、大半は 30 ㎝程の深さの攪乱の底部で検出されている。２基の炉穴が連結している。焼土面が立ち上がる付近を境に、手前側を 177 号炉穴①、奥側を 177 号炉穴②とする。

①の燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模で、楕円形に近い形状であったと推測される。側壁の一部を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央付近には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 55 ㎝となっている。

②の燃焼部は、長さ 110 ㎝・最大幅 78 ㎝の規模であり、卵形に近い形状である。奥壁を除き、全面に赤化した焼土面が検出されており、その厚さは最も厚い部分で約８㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 50 ㎝となっている。煙道は一部攪乱によって失われてはいるが、直径 17 ㎝程の小さなものであったと推定される。奥壁は、湾曲しながら徐々に直立気味に立ち上がる。天井は約 50 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 18 ㎝と狭い。前庭部には、①の跡を利用して広い平坦面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられている。①の床面上には天井の崩落土（第４層）が確認でき、その上面は②の床面の高さと一致している。①の天井崩落後、崩落土を除去・整地して、②の前庭部がつくられたことがわかる。②の焚口付近の床面上には、②の天井の崩落土（第１層）が認められる。

②の前庭部床面に相当する第４層の上面からは、20 ～ 40 ㎝程の大きさの礫が集め置かれた状態で出土している。小さな礫は別にして、床面に置かれた扁平な礫は、その大きさからみてもほぼ原位置を保っているとみてよい。このうちの２点については、石皿（56・46）であることが確認されており、前庭部の機能を考える上で注目すべき事例といえる。

遺物は、前述の前庭部から出土した石皿２点のみである。83 は一辺 27 ㎝程度の方形に近い形状で、厚さは約 10 ㎝である。石材は珪質シルト岩であり、一部欠けている。84 は長径 45 ㎝・短径 35 ㎝程の楕円形に近い形状で、厚さは約８㎝である。石材は砂岩である。いずれも、表面には使用による摩滅が確認される。なお、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 60 yrBP という結果が得られている。

178 号炉穴（図 110・113、図版 26）

177 号炉穴から南へ約１ｍに位置する。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。178 ～ 181 号炉穴により構成される炉穴群のうちの１基である。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・幅 80 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央付近には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。前庭部には、長さ 75 ㎝・幅 60 ㎝程の大きさで、緩い傾斜となる平坦面が設けられている。埋土は大きく２層に分けられ

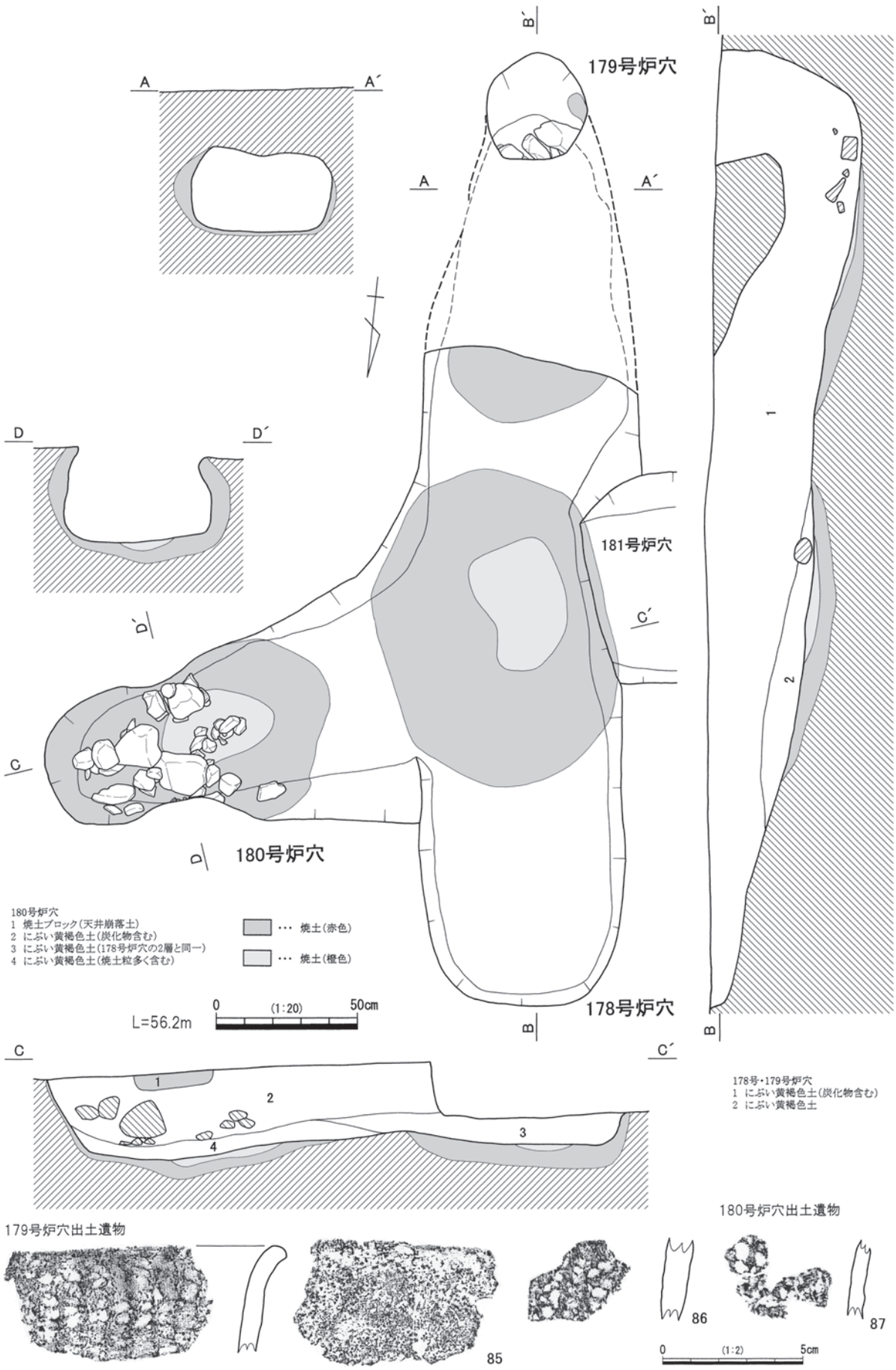


図 113　178 ～ 180 号炉穴実測図・出土遺物

ている。天井の崩落土は確認されていない。下層の第２層は、180 号炉穴の第３層、181 号炉穴の第４層と同一である。180 号炉穴の前庭部は第２層の下面、179・181 号炉穴の前庭部は第２層の上面に相当する。このことから、178 号炉穴の燃焼部の跡を前庭部として利用する形で、180 号炉穴が築かれ、その後 179 号炉穴と 181 号炉穴が築かれていることがわかる。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。ただし、この試料に関しては、正確には「178 号炉穴付近」の埋土から出土したものである。第１・２層どちらから出土したものかは不明ではあるが、いずれにせよ 178 号炉穴に直接伴うものではない。土器や石器などの遺物は出土していない。

179 号炉穴（図 110・113、図版 26・39）

178 号炉穴の南側に築かれている。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。第１床面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 110 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。床面と側壁のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 80 ㎝となっている。煙道は直径 40 ㎝の大きさで、奥壁は湾曲しながら徐々に直立する。天井は約 70 ㎝の幅で残存し、床面から天井までの高さは 25 ㎝となっている。前庭部には、178・180 号炉穴の跡を利用している。埋土は単層で、明確な天井の崩落土は確認されていない。

奥壁付近の床面からは、10 ㎝程度の大きさの礫が集中して出土している。いずれも被熱の痕跡が認められていないことから、炉穴の使用後（廃絶後）に入れられたものと推測される。

遺物としては、縄文土器が数点と剝片が１点出土している。85 は縄文土器の口縁部の破片である。口縁部はやや外反し、外面にはＲＬ縄文が施文されている。86 は胴部の破片である。72 と同様に外面にはＲＬ縄文が施されている。縄文土器については、この他に図化できない細片が数点出土している。いずれも埋土から出土している。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9310 ± 50 yrBP という結果が得られている。

180 号炉穴（図 110・113、図版 27・39）

178 号炉穴の東側に築かれている。主軸は東－西方向で、東側に煙道がつく。第１床面より約 30 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 60 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部は 178 号炉穴の床面を利用している。埋土は大きく４層に分けられている。燃焼部の床面上には、天井から剥落した焼土粒（第４層）が検出されている。また、下に少し落ちた状態の天井（第１層）も確認できる。

燃焼部の第４層の上面には、10 ～ 20 ㎝程の大きさの礫がまとまって出土している。礫に被熱の痕跡は認められず、天井の焼土が剥落している第４層の上面からの出土であることから、炉穴の使用時のものとは考えにくい。炉穴の使用後（廃絶後）に入れられたものとみてよいであろう。

遺物としては、埋土から縄文土器が２点出土している。87 は胴部の破片で外面には RLR 縄文が施文されている。残る１点は、図化できない細片である。なお、床面付近から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9570 ± 60 yrBP という結果が得られている。

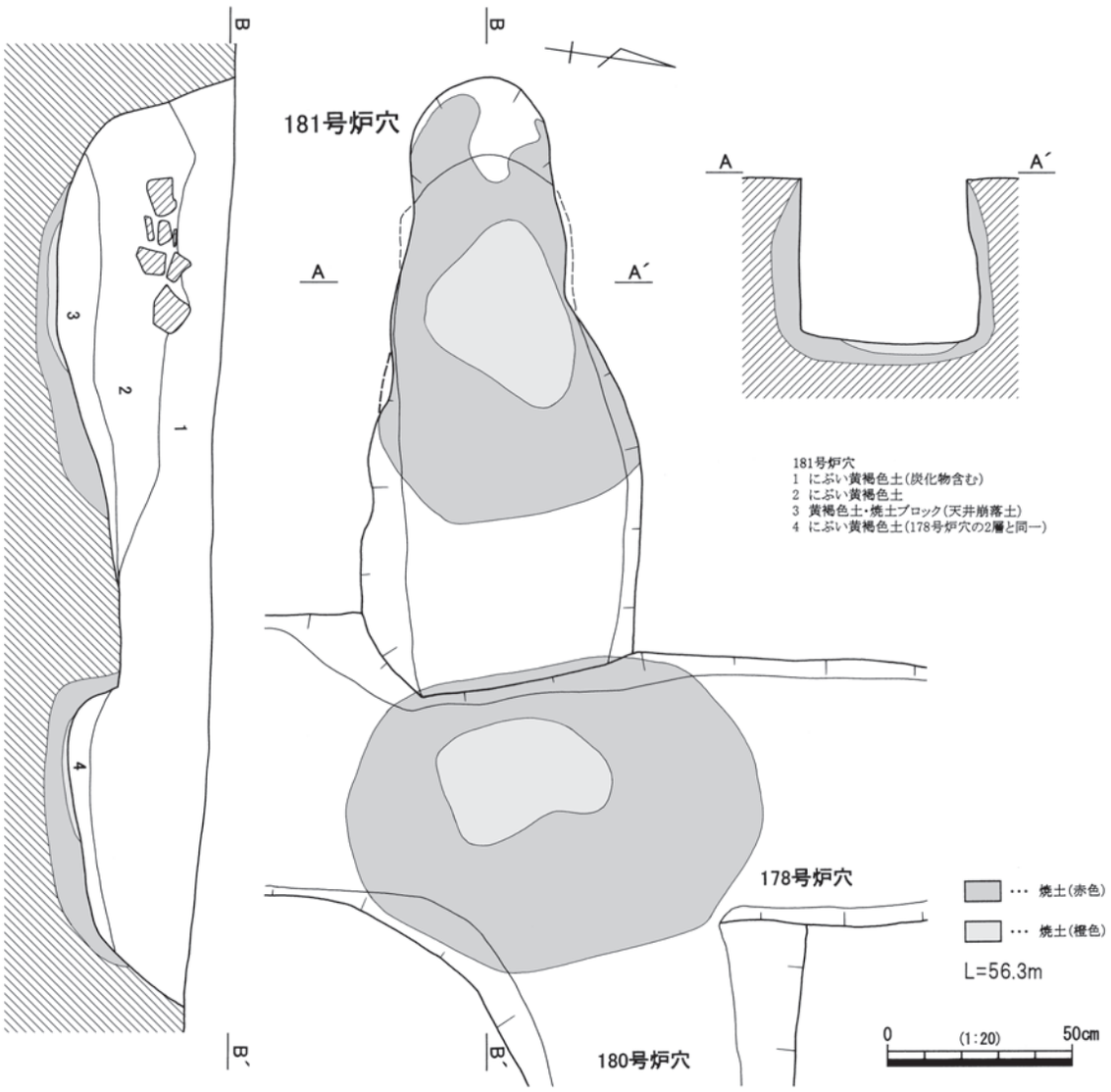


図 114　181 号炉穴実測図

181 号炉穴（図 110・114、図版 27）

178 号炉穴の西側に築かれている。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１床面より約 30 ㎝下方で検出されている。燃焼部から前庭部にかけての、検出面より高い位置には 24 号集石が築かれている。土層の関係が判然としないが、窪みとなった炉穴の跡を利用して築かれたものと推測される。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁の一部を除くほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面が確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 75 ㎝でとなっている。奥壁は湾曲しながらやや斜めに立ち上がる。前庭部は 178 号炉穴の跡を使用している。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２・３層）が確認できる。

第２層の上面付近からは、10 ～ 15 ㎝程の大きさの礫が出土している。第２層が天井の崩落土であることを考慮すると、炉穴の上に置かれていた礫が天井の崩落によって入り込んだ可能性が高い。

遺物としては、埋土から剝片が１点出土している。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9450 ± 50 yrBP という結果が得られている。

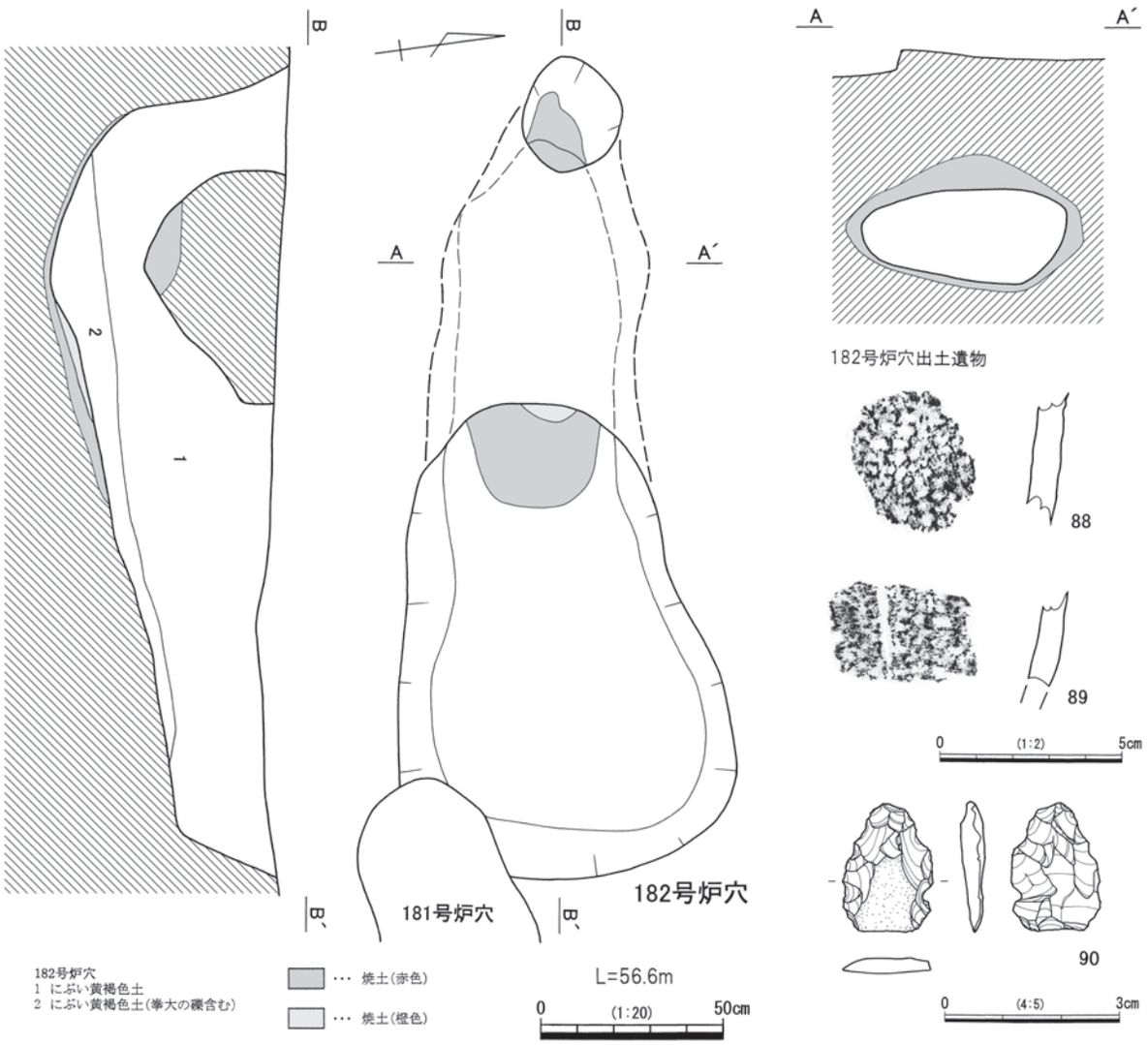


図 115　182 号炉穴実測図・出土遺物

182 号炉穴（図 110・115、図版 27・40）

181 号炉穴の西側に隣接している。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第 1 検出面で検出されている。182 号炉穴の前庭部と 181 号炉穴の煙道とは、一部重なる位置関係にあるが、検出面が異なっており切り合い関係は明らかでない。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは 60 ㎝となっている。煙道は直径 30 ㎝の大きさで、奥壁は湾曲しながら直立気味に立ち上がる。天井は約 65 ㎝の幅で残存し、床面から天井までの高さは 25 ㎝である。前庭部には、長さ 85 ㎝・幅 75 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく 2 層に分けられており、明確な天井の崩落土は確認されていないが、おそらくは礫を多く含むとされる第 2 層に一部含まれているものと推測される。

遺物としては、縄文土器と石鏃未製品が出土している。88 と 89 は縄文土器の胴部の破片である。外面にはＲＬ縄文が施文されている。縄文土器はこれら以外にも、図化できない細片が数点出土している。90 は瑪瑙製の石鏃未製品である。いずれも埋土から出土している。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9520 ± 70 yrBP という結果が得られている。

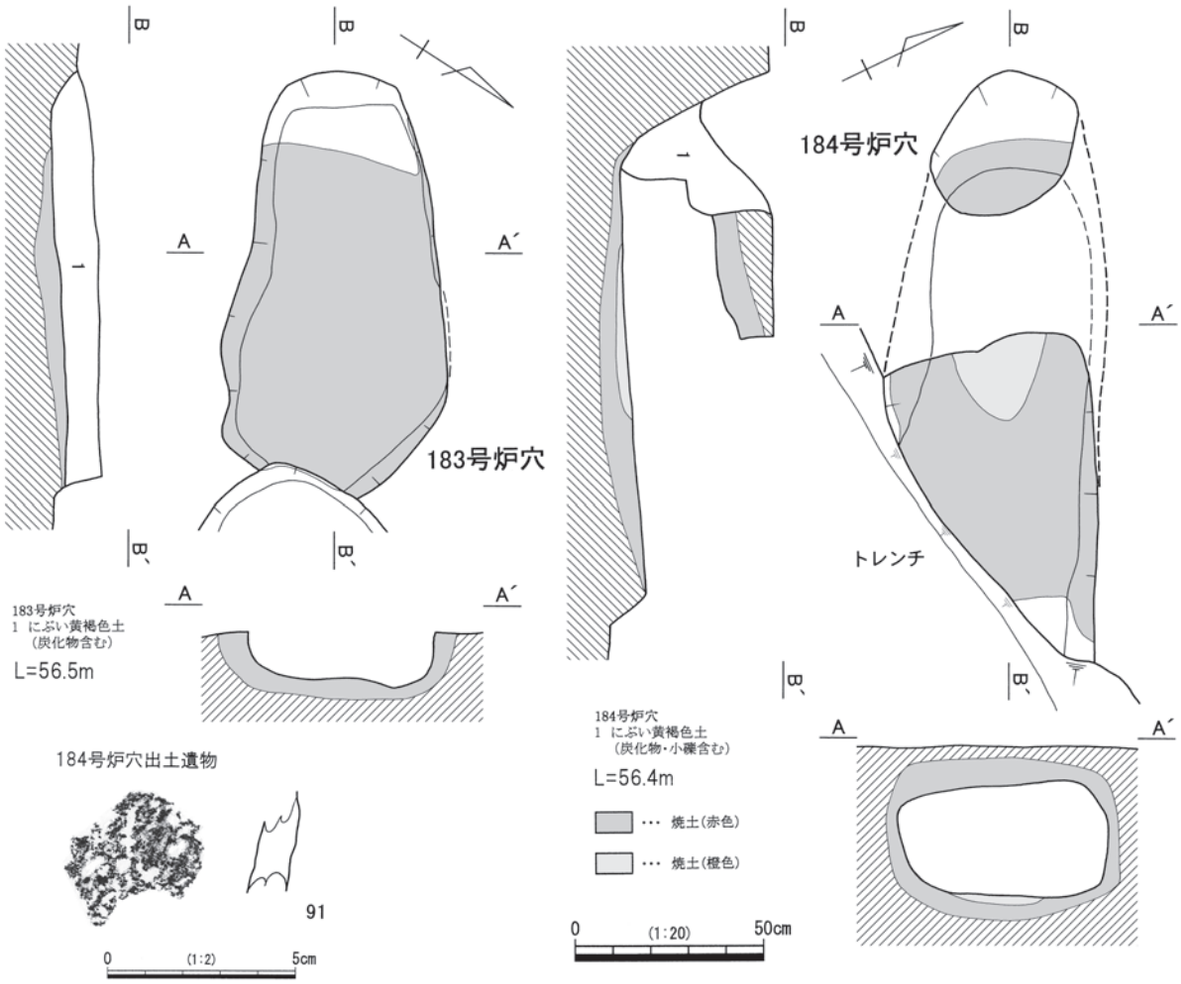


図 116　183・184 号炉穴実測図・出土遺物

183 号炉穴（図 110・116）

182 号炉穴から南へ約１ｍに位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。東側は中・近世の遺構により一部失われている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、卵形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。遺物は出土していない。

184 号炉穴（図 110・116、図版 39）

183 号炉穴から約３ｍ南に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より 30 ㎝程下方で検出されている。南側はトレンチによって失われている。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で残存し、全体は楕円形に近い形状である。奥壁を除きほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。煙道は直径 37 ㎝の大きさで、奥壁は斜めに立ち上がる。天井は 32 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 25 ㎝となっている。

遺物としては、縄文土器が３点と剝片が１点出土している。91 は縄文土器の胴部の破片である。外面にはＲＬ縄文が施文されている。他の２点は図化できない細片である。また、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。

185 号炉穴（図 110・117）

183 号炉穴から約１ｍ東に位置する。第１検出面において、床面の一部が検出されている。主軸は北東－南西方向とみられるが、煙道の位置については判然としない。

燃焼部の床面とみられる焼土面は、長さ 42 ㎝・幅 48 ㎝の大きさで検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝である。土器や石器などの遺物は出土していない。

186 号炉穴（図 110・117）

184 号炉穴から約２ｍ東に位置する。主軸は南東－北東方向であり、南東側に煙道がつく。第１検出面より約15㎝下方で検出されている。南側はトレンチにより失われている。下層には191 号炉穴が存在する。

燃焼部は、長さ 60 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で残存する。一部しか残存しないが、二等辺三角形に近い形状であると推定される。ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙

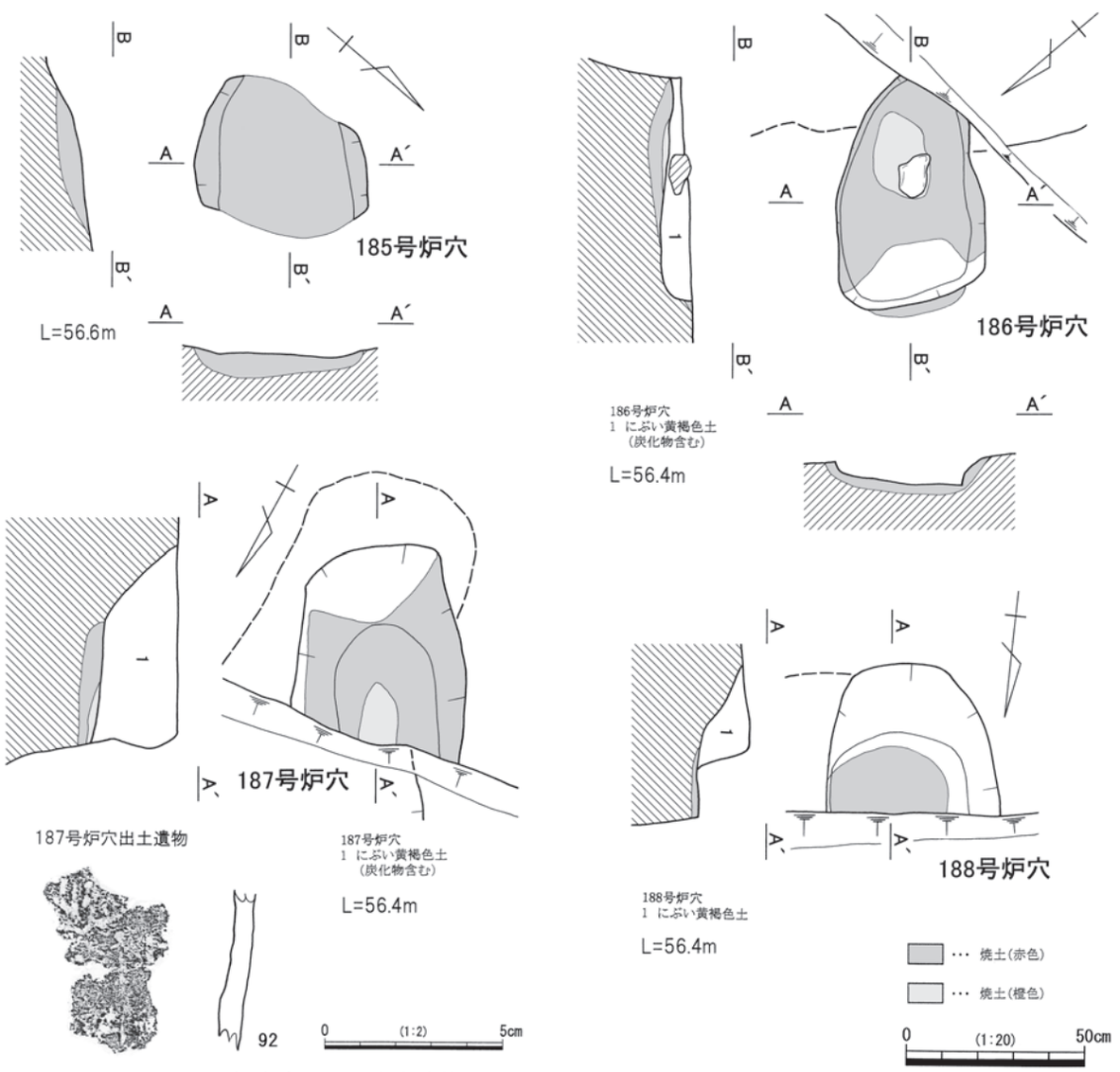


図 117　185 ～ 188 号炉穴実測図・出土遺物

化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約２㎝である。焼土が確認されない部分は、掘り過ぎにより失われている可能性が高い。

遺物としては、埋土から縄文土器が２点出土しているのみである。いずれも図化できないほどの細片で、文様も識別できない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。

187 号炉穴（図 110・117、図版 39）

186 号炉穴から約 1.5 ｍ南側に位置する。主軸は南東－北西方向で、南東側に煙道がつく。北側はトレンチによって失われている。第１検出面で検出されており、下層には 192 号炉穴が位置する。

燃焼部は、長さ 35 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で残存し、長方形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。埋土は単層で天井の残存や崩落の痕跡は確認されない。

遺物としては、縄文土器が３点出土している。92 は胴部の破片で、Ｒ撚糸文が施されている。他の２点は図化できない細片である。いずれも検出面付近から出土している。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。

188 号炉穴（図 110・117）

187 号炉穴から約１ｍ東に位置する。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、下層には 194 号炉穴が位置する。北側はトレンチにより失われている。

燃焼部は、長さ 20 ㎝・幅 40 ㎝の規模で残存する。床面に赤化した焼土面が検出されており、厚さは最も厚い部分でも２㎝程である。奥壁は斜めに立ち上がる。遺物は出土していない。

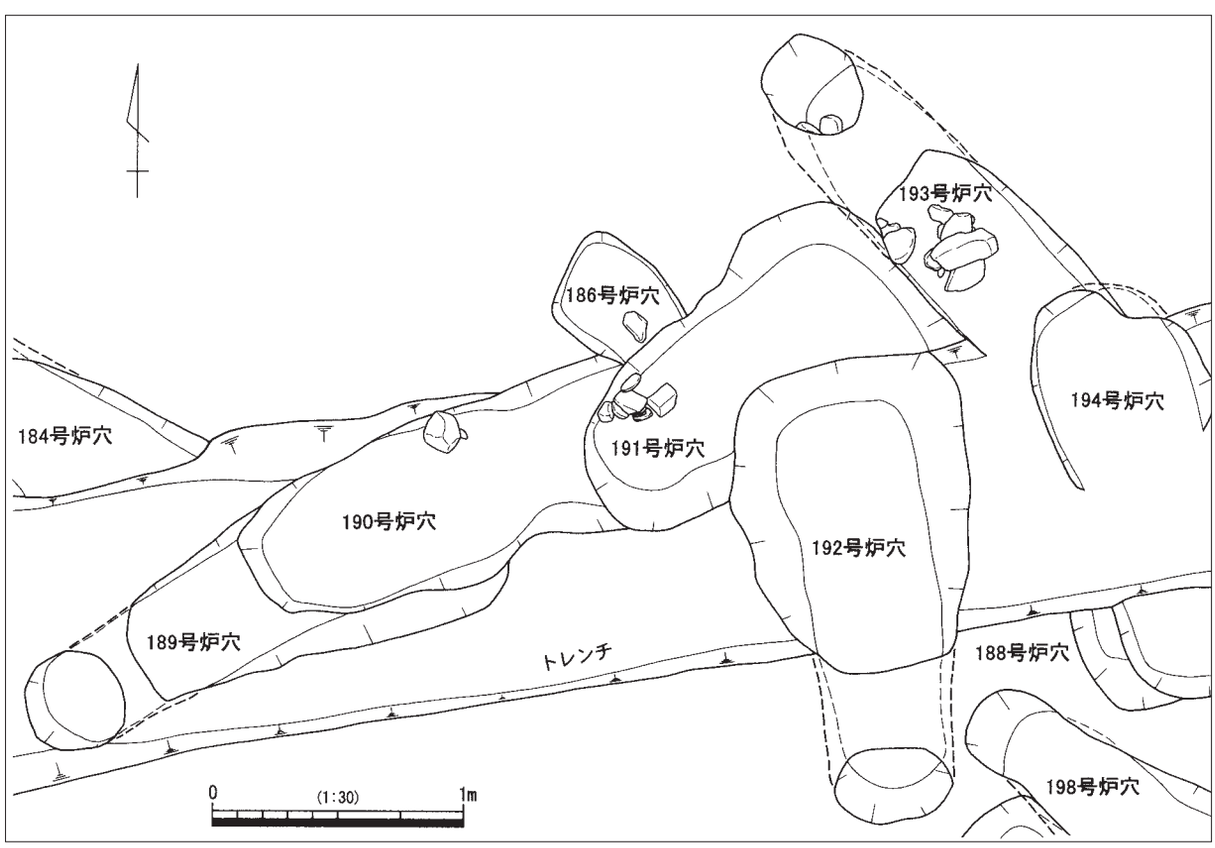


図 118　189 ～ 194 号炉穴配置図

189 号炉穴（図 118・119、図版 27・41）

184 号炉穴から約 1 m南に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 60 ㎝下方の、確認調査のトレンチ底部で検出されている。確認調査において焼土を伴う遺構として検出され、その年代や性格、規模などを知るために、遺構内部の調査も行われている。そのため、遺構は天井の下部を残して、確認調査の段階でほぼ完掘されている状況にある。また、遺物についても、

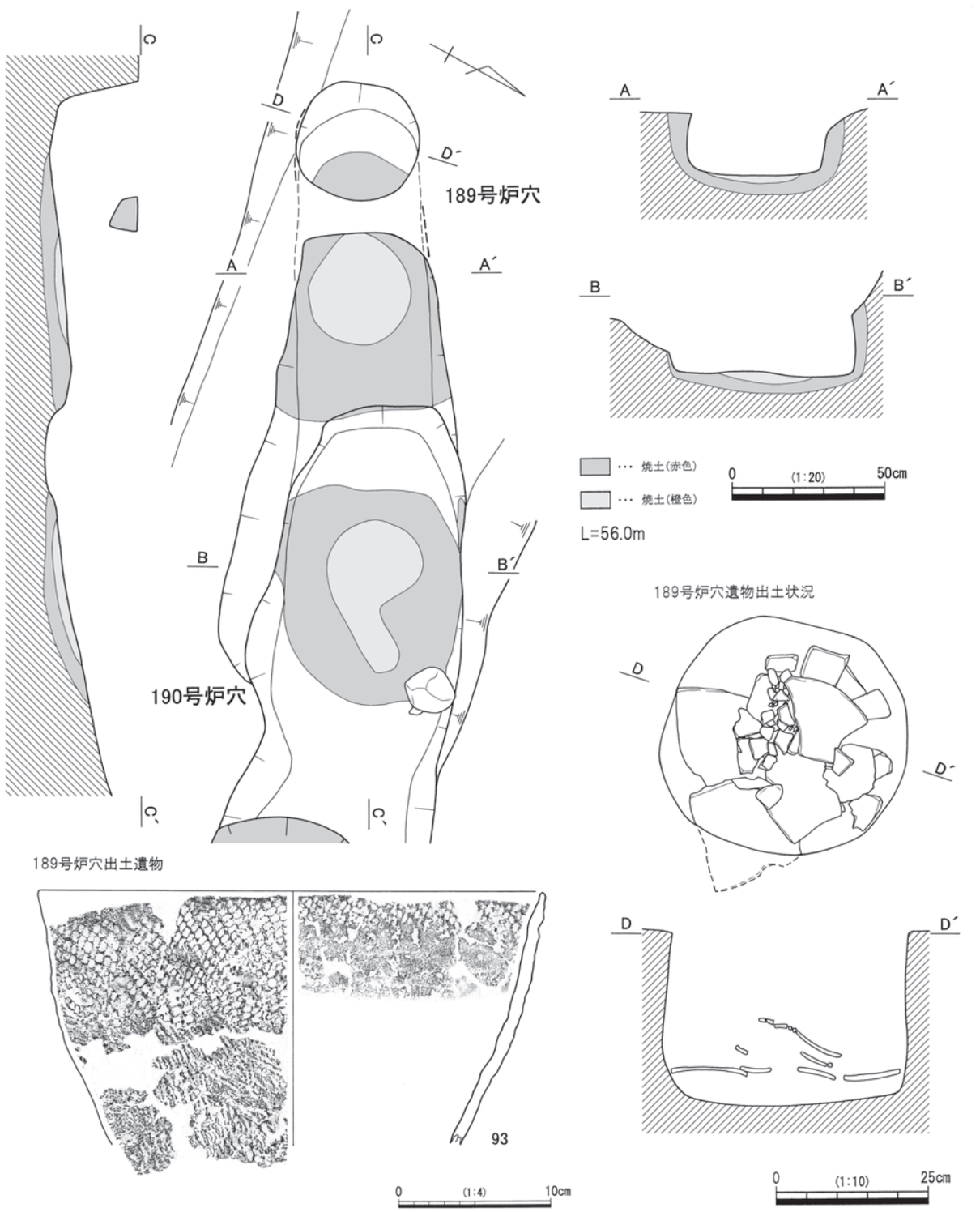


図 119　189・190 号炉穴実測図・出土遺物

確認調査で発見されたものについては、取り上げ作業まで実施されている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 58 ㎝の規模で、焚口部の幅がやや広くなってはいるが、全体としては長方形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 90 ㎝となっている。煙道は直径 38 ㎝の大きさで、奥壁は直立気味に立ち上がる。天井は 10 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 16 ㎝と狭い。土層の記録が残らないため不明な点も多いが、190 号炉穴の跡を前庭部として利用していたものと推測される。190 号炉穴の南側側壁の上半は、焼土が広がらず、傾斜も緩くなっている。おそらくは 189 号炉穴の築造時に、前庭部として掘り広げられたものと推測される。

遺物としては、煙道直下の床面から、縄文土器がつぶれたような状態で出土している。93 は、これらの破片を接合・復原した、縄文土器の口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部は外反せずハの字状に広がり、口径は 53 ㎝に復原される。外面には、上半に RLR 縄文、下半には RLR の撚り戻しが施文されている。内面には、横位の RLR 縄文が口縁部に施されている。接合できなかった細片が多少残っているが、その量は少なく、明確な底部の破片も確認できないことから、底部については元々欠損していたとみてよい。また、復原された土器の大きさは、炉穴の各部位の規模よりも大きく、形を保った状態でこの場所に置くことは不可能である。上方から落ち込んだ状態で出土していることから、この土器に関しては底部を欠いた状態で煙道の上部にはめ込まれていた可能性が高いと推測される。埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。

190 号炉穴（図 118・119）

189 号炉穴の北東側に位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 60 ㎝下方の、確認調査のトレンチ底部で検出されている。189 号炉穴と同様に、確認調査の段階で内部の調査までほぼ完了している。

燃焼部は、奥壁側をやや掘り過ぎてはいるが、長さ 90 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、楕円形に近い形状となっている。掘り過ぎてしまっている奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 90 ㎝となっている。前庭部には、長さ 40 ㎝程の平坦面が設けられており、191 号炉穴の跡を利用していたものと推測される。遺物は出土していない。

191 号炉穴（図 118・120）

190 号炉穴の東側に位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。燃焼部の南半は確認調査のトレンチで、北側は第１検出面より約 25 ㎝下方で検出されている。一部 192 号炉穴により失われているように図化されているが、実際は確認調査の際の掘り過ぎによるものである。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で残存し、楕円形に近い形状となっている。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝、橙化面は約７㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 60 ㎝である。奥壁は下部が残存するのみであるが、やや斜めに立ち上がる。前庭部には長さ 45 ㎝の平坦面が設けられている。埋土の記録が残されておらず、天井の残存・崩落の有無については不明であるが、位置関係からみて 191 号炉穴の天井崩落後に、その跡を利用して 190・192 号炉穴が築かれているものと推測される。

確認調査で掘られた部分は失われているが、奥壁付近の床面からは、10 ㎝前後の大きさの礫が出土している。被熱の有無に関する記録がなく、炉穴の使用時のものか否かは不明であるが、人為的に入れ

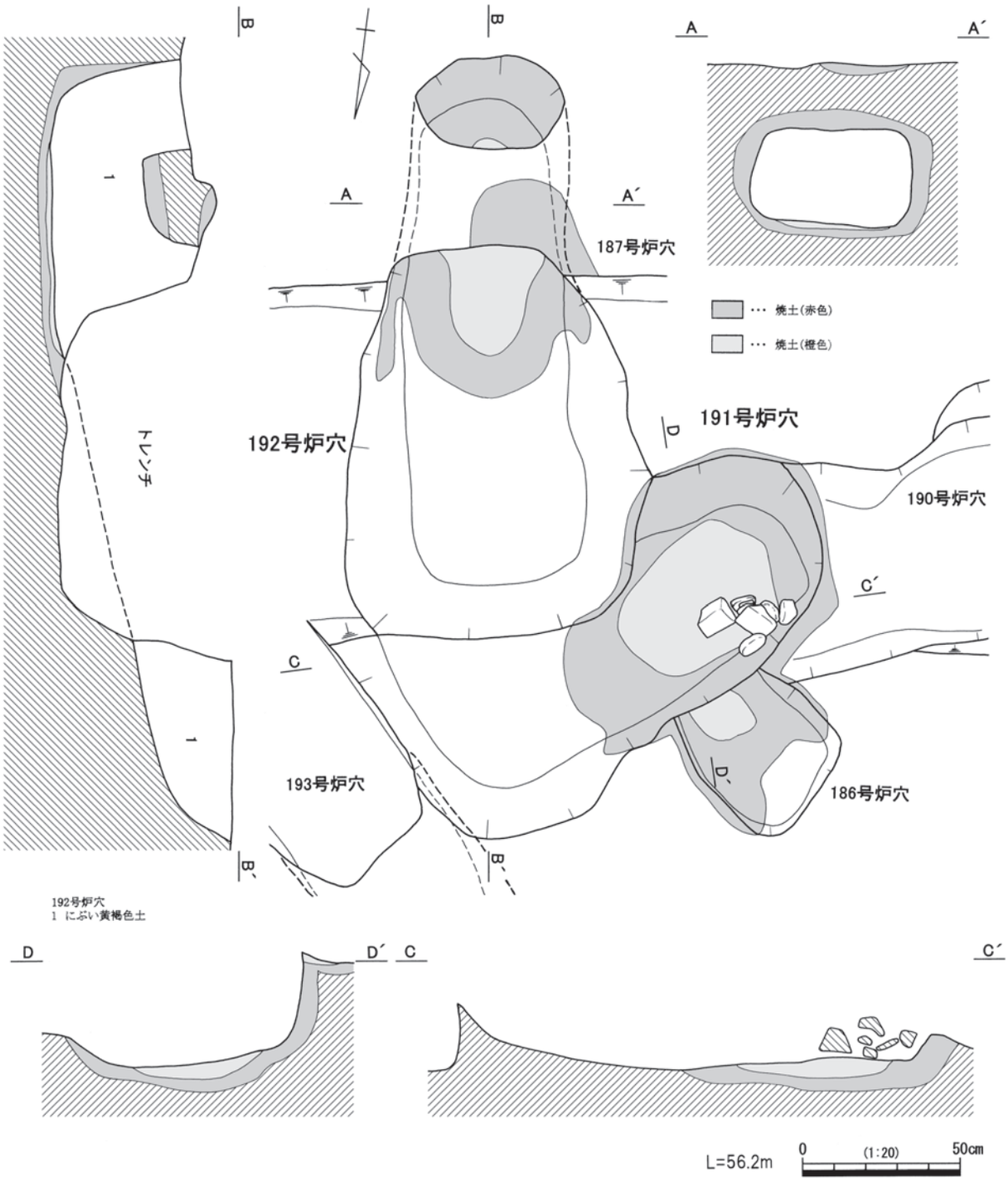


図 120　191・192 号炉穴実測図

られたものとみてよいであろう。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

192 号炉穴（図 118・120、図版 28）

191 号炉穴の南側に位置する。主軸は南－北方向で、南側に煙道がつく。北側は確認調査のトレンチで、南側は第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。天井部の上面には 187 号炉穴が築かれている。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 90 ㎝となっている。煙道は短径 28 ㎝・長径 48 ㎝の楕円形で、奥壁はやや斜めに立ち上がる。天井は 30 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 30 ㎝である。確認調査の段階において、前庭部が大きく掘り下げられているが、焼土面の状況からみて不自然であり、掘り過ぎである可能性が高い。おそらくは、緩やかな傾斜で 191 号炉穴の前庭部に繋がっていたものと推測される。埋土は単層で、天井の崩落土は確認されていない。

遺物としては、埋土から剝片が１点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9570 ± 50 yrBP という結果が得られている。

193 号炉穴（図 118・121、図版 28）

191 号炉穴の東側に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。191 号炉穴と一部重複する位置関係にあるが、191 号炉穴の掘削後に 193 号炉穴が発見されているため、切り合い関係は明らかでない。

燃焼部は、長さ 93 ㎝・最大幅 53 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁の上半を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや手前寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約８㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝となっている。煙道は直径 43 ㎝の大きさで、奥壁は湾曲しながら直立気味に立ち上がる。天井は 30 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 38 ㎝となっている。前庭部には長さ 30 ㎝程の平坦面が設けられている。トレンチにより土層が失われているが、194 号炉穴の跡を前庭部として使用していたものと推測される。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には小規模な天井の剥落土（第３層）と、大規模な天井の崩落土（第２層）が確認される。

燃焼部からは、10 ～ 20 ㎝程の大きさの礫が出土している。いずれも第３層の上面に置かれており、被熱の痕跡は認められていない。炉穴の使用（廃絶）から、しばらく後に入れられたものとみてよい。

埋土の最下層（第３層）から採取された炭化物について C 14 年代測定を実施しており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

194 号炉穴（図 118・121、図版 40）

193 号炉穴の南東に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。燃焼部は確認調査のトレンチ底部で検出されており、前庭部は第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されている。燃焼部の焚口側は確認調査のトレンチによって失われている。前庭部の上方には、188 号炉穴が築かれている。

燃焼部は、長さ 70 ㎝・最大幅 68 ㎝の規模で残存する。焚口付近が失われているが、全体としては楕円形に近い形状と推定される。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 80 ㎝となっている。奥壁は下部が残るのみではあるが、やや斜めに立ち上がる。前庭部は、トレンチの南側に長さ 40 ㎝・幅 55 ㎝程の平坦面が確認される。トレンチによって大部分が失われているが、埋土は奥壁付近と前庭部に残されている。第１層は 193 号炉穴の前庭部の堆積であり、194 号炉穴の上面に 193 号炉穴の前庭部が設けられていることがわかる。土層としては確認できないが、

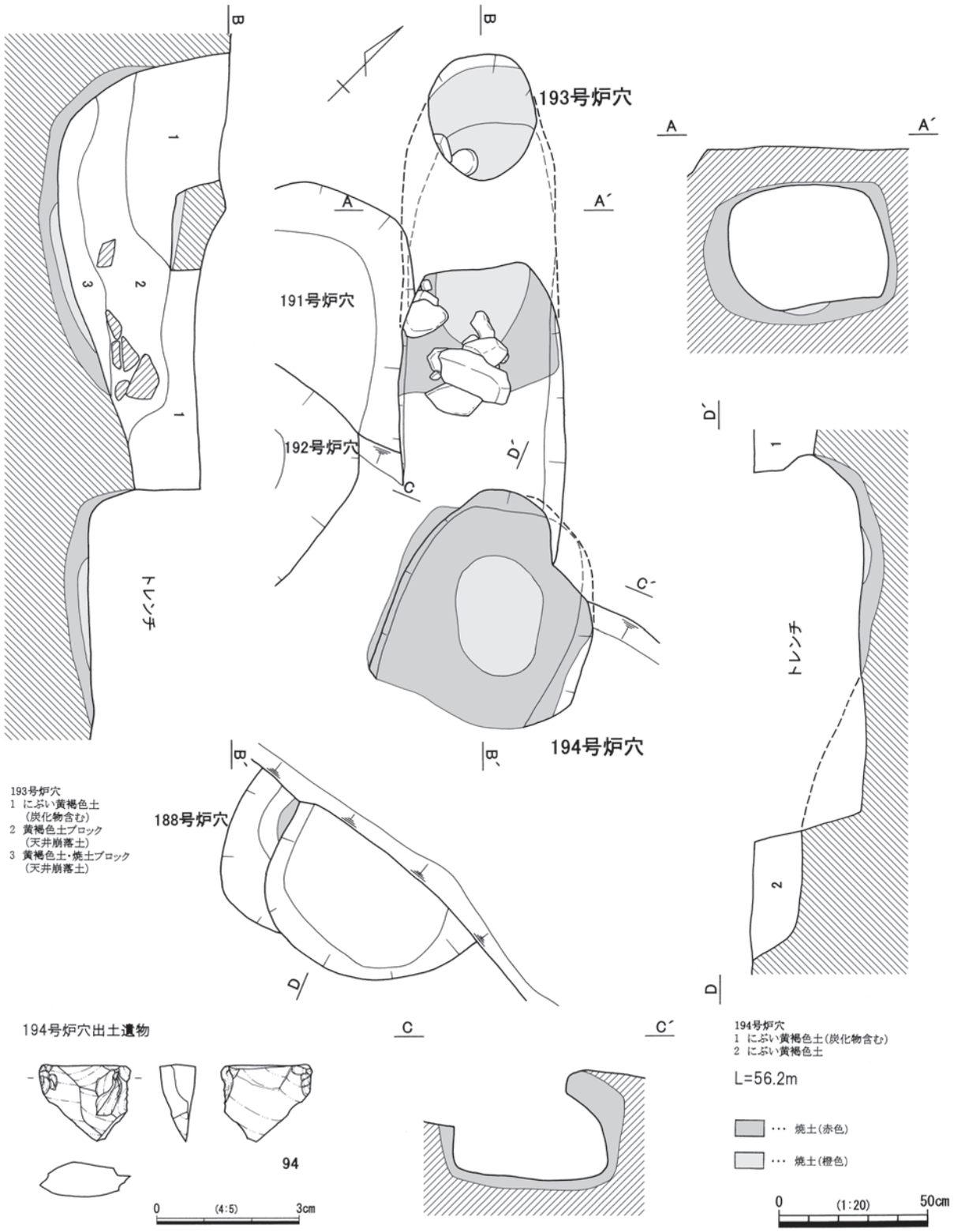


図 121　193・194 号炉穴実測図・出土遺物

194 号炉穴の天井崩落後、その跡を前庭部として利用したものと推測される。

遺物としては、楔形石器（94）が 1 点出土しているのみである。石材はシルト岩で、埋土から出土している。なお、埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9660 ± 50 yrBP という結果が得られている。

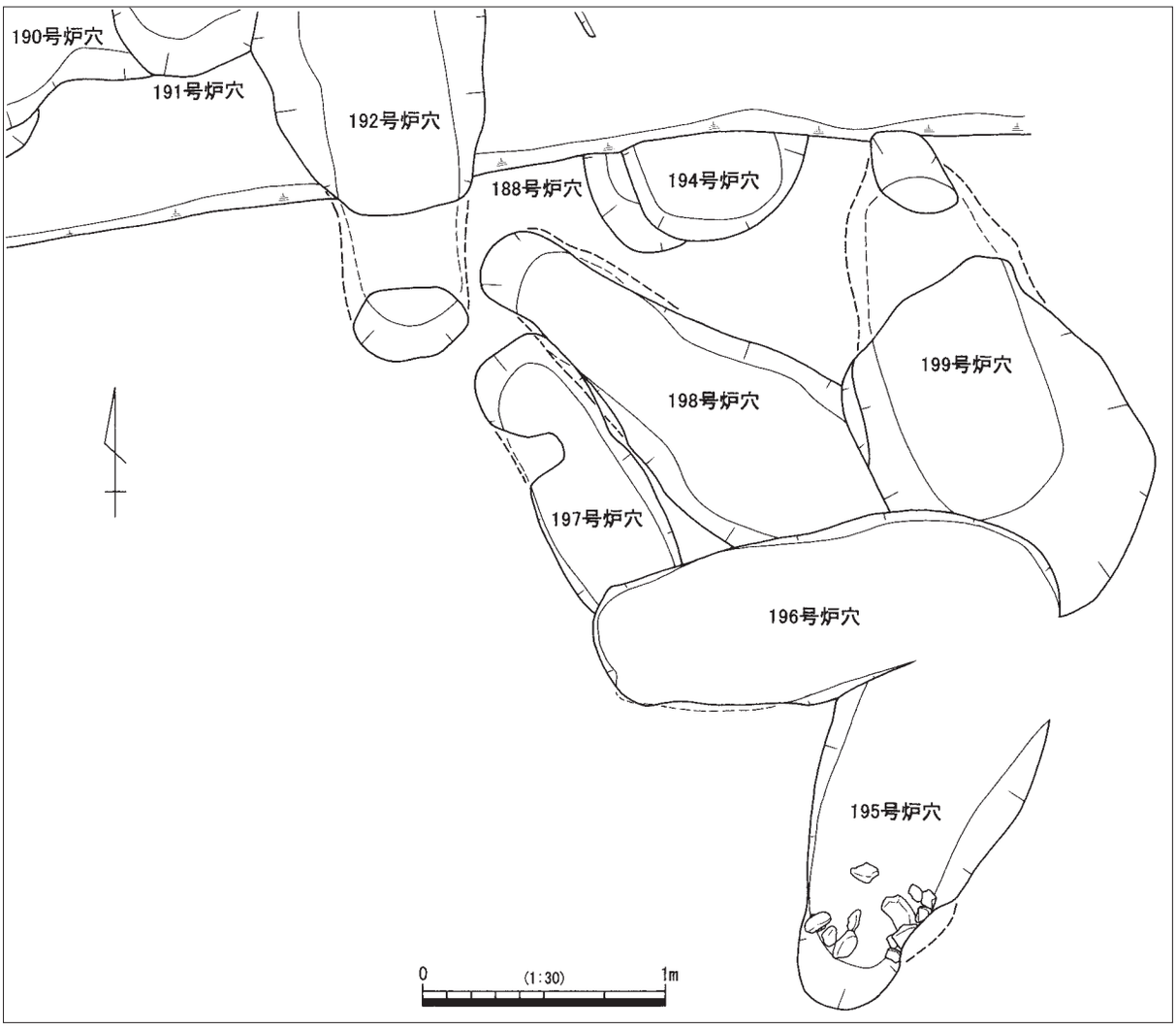


図 122　195 ～ 199 号炉穴配置図

195 号炉穴（図 122・123、図版 29・39）

194 号炉穴から約３ｍ南に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 50 ㎝下方で検出されており、前庭部を 196 号炉穴と共有する。

燃焼部は、長さ 108 ㎝・最大幅 80 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除きほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 80 ㎝となっている。奥壁は湾曲しながら斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 75 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく３層に分けられており、床面上には天井の崩落土（第２・３層）が確認される。

燃焼部の奥壁付近の床面からは、10 ～ 15 ㎝程度の大きさの礫が出土している。被熱の有無に関する記録がないが、第３層に覆われていることから、使用中または使用直後に入れられたものとみてよい。

遺物としては、縄文土器４点と剥片１点が出土している。95 は縄文土器の胴部の破片で、外面には組紐の撚糸文が施文されている。埋土の最下層（第３層）から出土している。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9690 ± 50 yrBP という結果が得られている。

196 号炉穴（図 122・123、図版 29）

195 号炉穴の北西側に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。第１検出面より約 50 ㎝

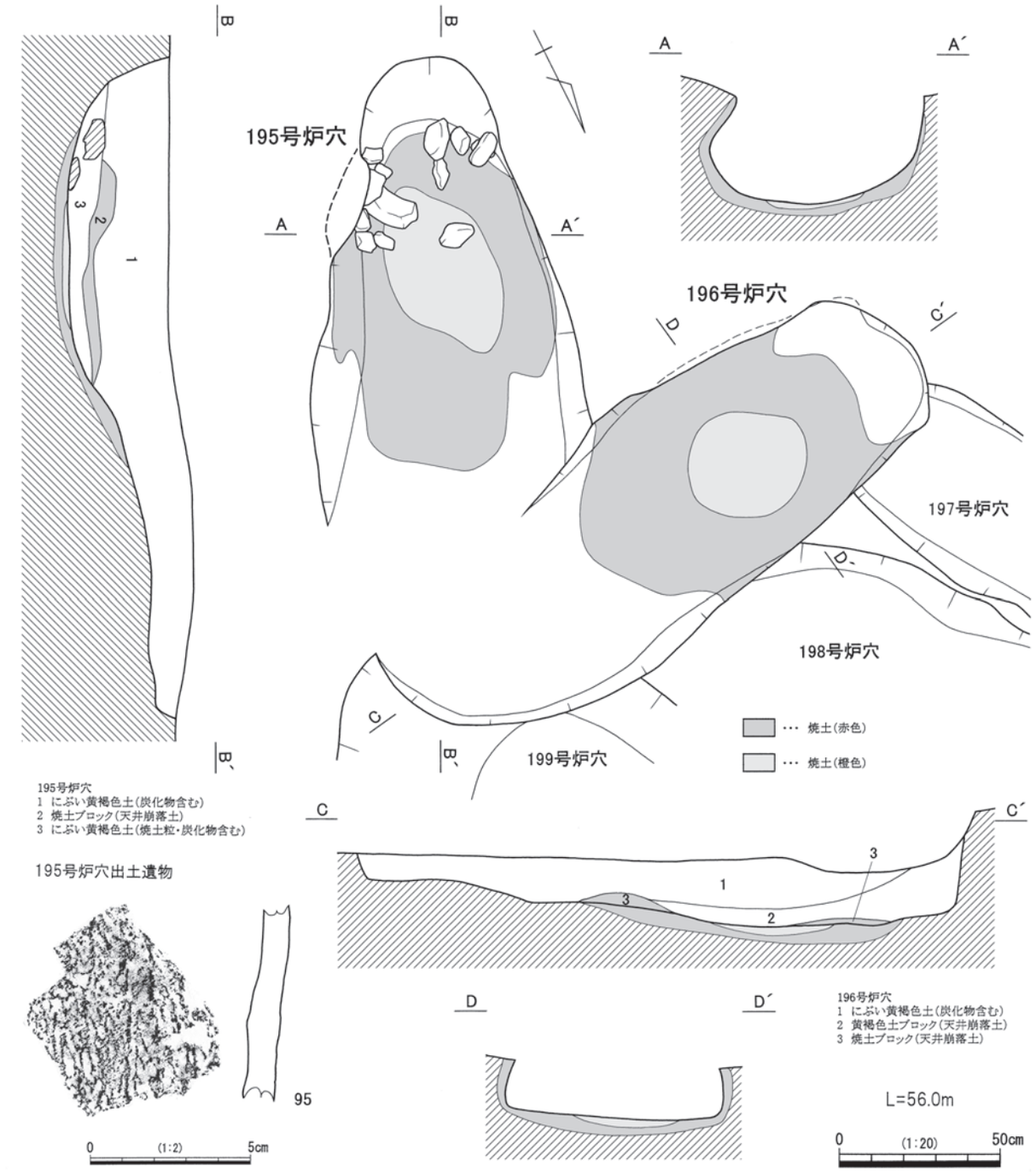


図 123　195・196 号炉穴実測図・出土遺物

下方で検出されている。195・197 ～ 199 号炉穴と重複する位置関係にある。

燃焼部は、長さ 115 ㎝・最大幅 70 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 6 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 70 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部には長さ 70 ㎝程の平坦面が設けられており、195 号炉穴と共有する。埋土は大きく 3 層に分けられており、床面上には天井崩落土（第 2 ・ 3 層）が確認される。

遺物としては、埋土中から剝片が 1 点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。

197 号炉穴（図 122・124、図版 29）

196 号炉穴の北西に位置する。主軸は北西－南東方向であり、北西側に煙道がつく。198 号炉穴とほぼ並列する位置関係にある。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 48 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。奥壁の上部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、最も深い部分で約 70 ㎝となっている。一部天井が残存しており、煙道は直径 40 ㎝程の大きさと推定される。奥壁はやや斜めに立ち上がる。天井は東側半分が約 15 ㎝の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 25 ㎝となっている。埋土は大きく４層に分けられており、床面から 10 ㎝程の高さに天井の崩落土（第２・３層）

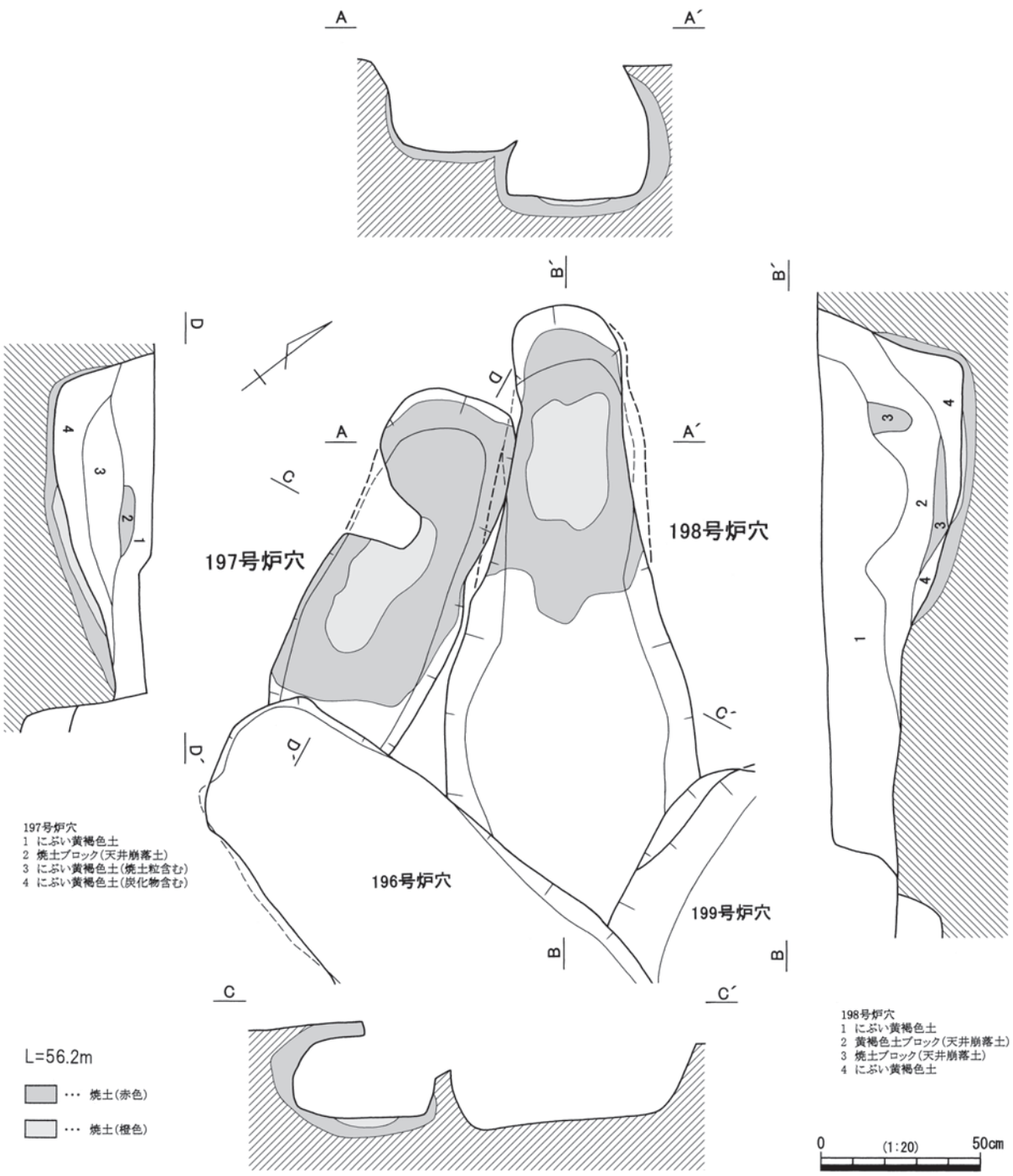


図 124　197・198 号炉穴実測図

が確認される。196 号炉穴の付近は、ややくすんでいたために、先に大きく掘られてしまっている。切り合い関係については明らかでないが、高さからみて、196 号炉穴の天井崩落後、しばらく後に窪みとなった部分を前庭部として利用して 197 号炉穴が築かれたものと推測される。

遺物としては、埋土中から剝片が 1 点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9440 ± 50 yrBP という結果が得られている。

198 号炉穴（図 122・124、図版 29・30）

197 号炉穴の北東に隣接する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 55 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁の上部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 5 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 85 ㎝となっている。奥壁は斜めに立ち上がる。前庭部には、長さ 85 ㎝・幅 65 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく 4 層に分けられており、燃焼部には天井の崩落土（第２・３層）が確認できる。197 号炉穴との前後関係については、判然としない。同時期に併存した可能性もある。196 号炉穴との関係は、197 号炉穴と同様に、196 号炉穴の天井崩落後の窪みを前庭部に利用していると推測される。

遺物としては、埋土から図化できない縄文土器の細片が 1 点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。

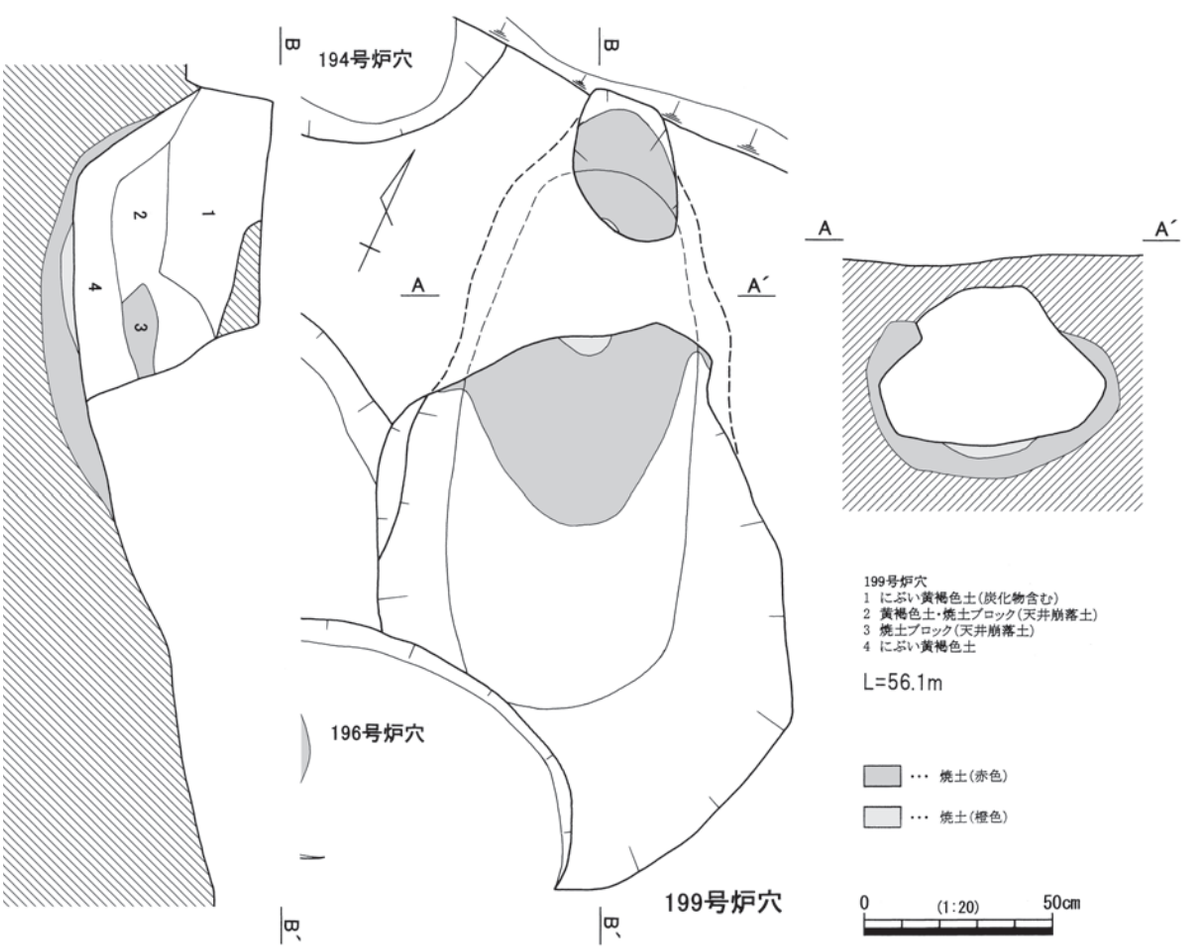


図 125　199 号炉穴実測図

199 号炉穴（図 122・125）

198 号炉穴の東側に位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されており、奥壁の上部はトレンチにより失われている。一部天井が残存する。

燃焼部は、長さ 95 ㎝・最大幅 80 ㎝の規模で、卵形に近い形状となっている。奥壁の一部を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、中央やや奥壁寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約９㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 90 ㎝となっている。煙道は長径 40 ㎝・短径 27 ㎝程の楕円形で、奥壁は斜めに立ち上がる。天井は 25 ㎝程の幅で残存しており、床面から天井までの高さは 36 ㎝となっている。前庭部は、長さ 50 ㎝・幅 60 ㎝の緩やかな斜面が設けられ、196 号炉穴の前庭部につながる。

燃焼部の埋土は、大きく４層に分けられている。床面から 10 ㎝程浮いた位置に、天井の崩落土（第２・３層）が確認できる。焚口から前庭部にかけての埋土の記録が残されておらず、隣接する炉穴との前後関係については明らかでない。遺構の高さからすると、196 号炉穴とは前庭部が同じ高さであり、198 号炉穴は高い位置に築かれている。本炉穴群においては、195・196・199 号炉穴は近似した時期の前庭部を共有する炉穴で、これらがある程度埋没した後に、その窪みを利用して 197・198 号炉穴が築かれていると推定される。

遺物としては、埋土から剥片が２点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物について C 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP という結果が得られている。

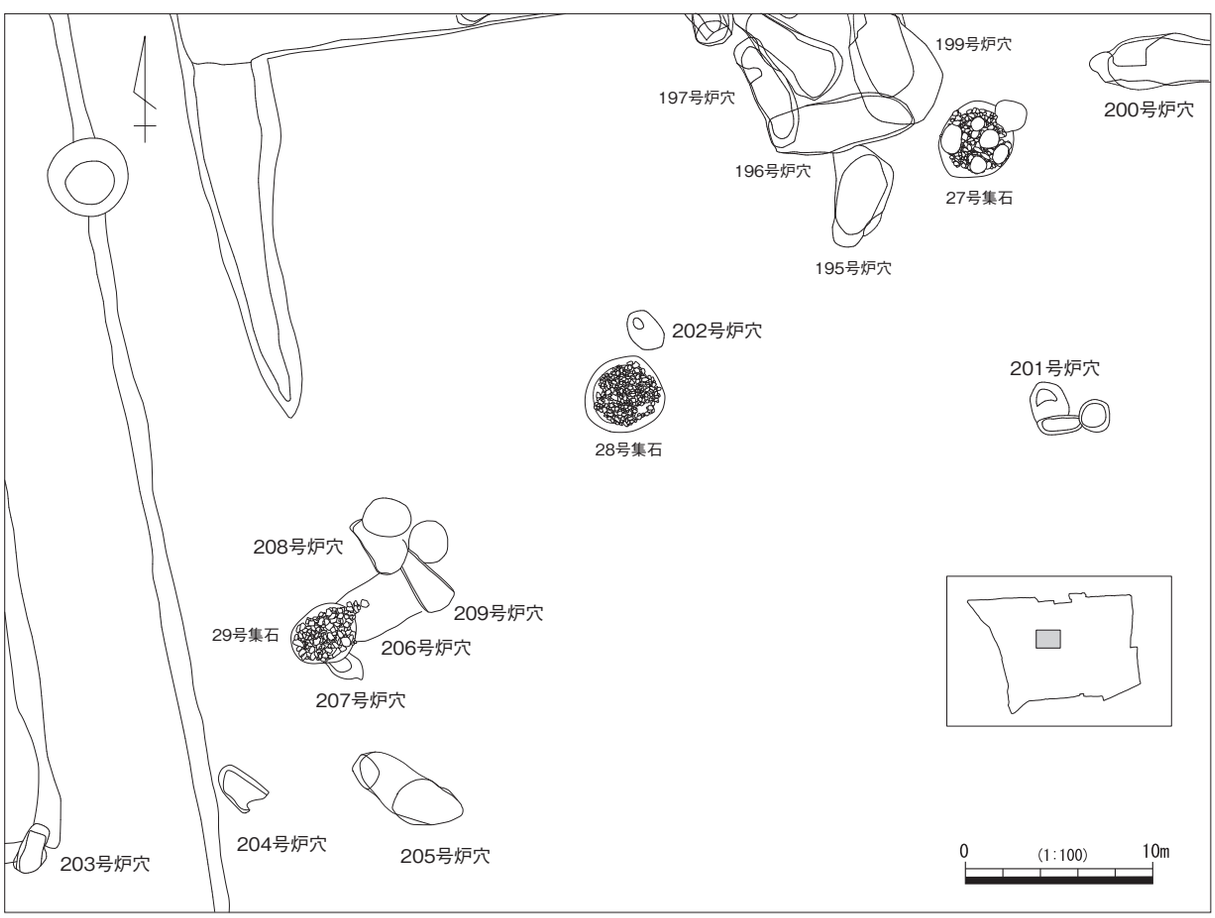


図 126　200 ～ 209 号炉穴配置図

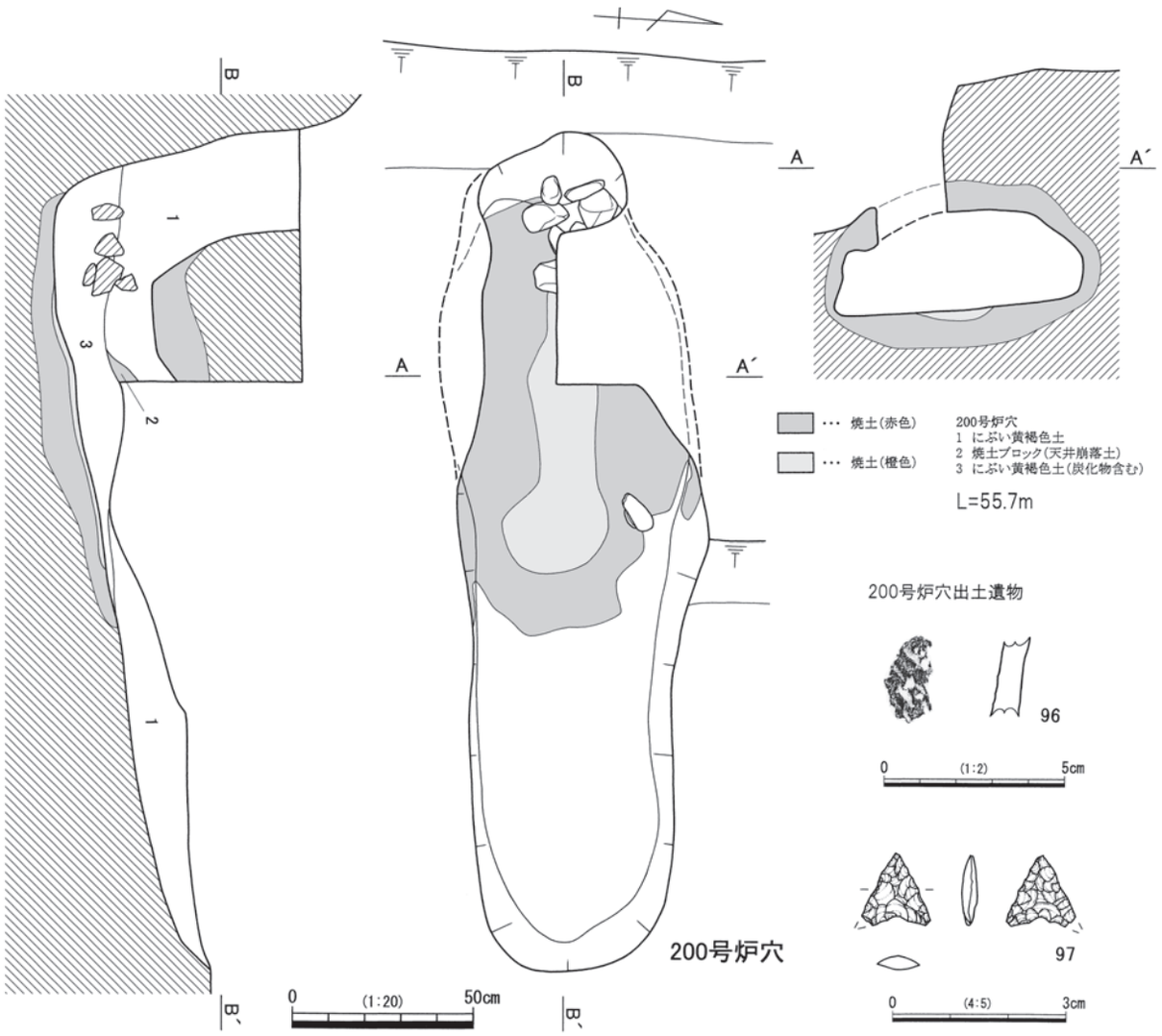


図 127　200 号炉穴実測図・出土遺物

200 号炉穴（図 126・127、図版 30・39・40）

199 号炉穴から約 3 m東に位置する。主軸は東－西方向であり、西側に煙道がつく。重機による掘り下げの途中で天井の焼土が検出され、炉穴の存在が確認された。奥壁側は、第 1 検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。前庭部側は、それよりさらに 30 ～ 40 ㎝程下方での検出となっている。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 68 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除く全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 9 ㎝、橙化面は約 2 ㎝である。煙道は直径 28 ㎝の大きさで、奥壁はやや斜めに立ち上がる。天井は、南側半分と東側を調査の過程で失っているが、40 ㎝程の幅で残存する。床面から天井までの高さは、27 ㎝となっている。前庭部には、長さ 85 ㎝・幅 50 ㎝程の規模の平坦面が設けられている。埋土は、燃焼部の奥側と前庭部の一部しか残らないが、大きく 3 層に分けられている。第 3 層の上面に、天井の崩落土とみられる焼土ブロック（第 2 層）が確認される。

燃焼部の奥壁側からは、10 ～ 15 ㎝程の大きさの礫が集められた状態で出土している。大半の礫に被熱の痕跡が確認されていることから、炉穴の使用時に用いられたものの可能性が高い。床面から 10 ㎝程浮いた状態となっているが、流入した土砂（第 3 層）の影響によるものであろう。

遺物としては、縄文土器 2 点と石鏃 1 点が出土している。96 は縄文土器の胴部の破片である。小片

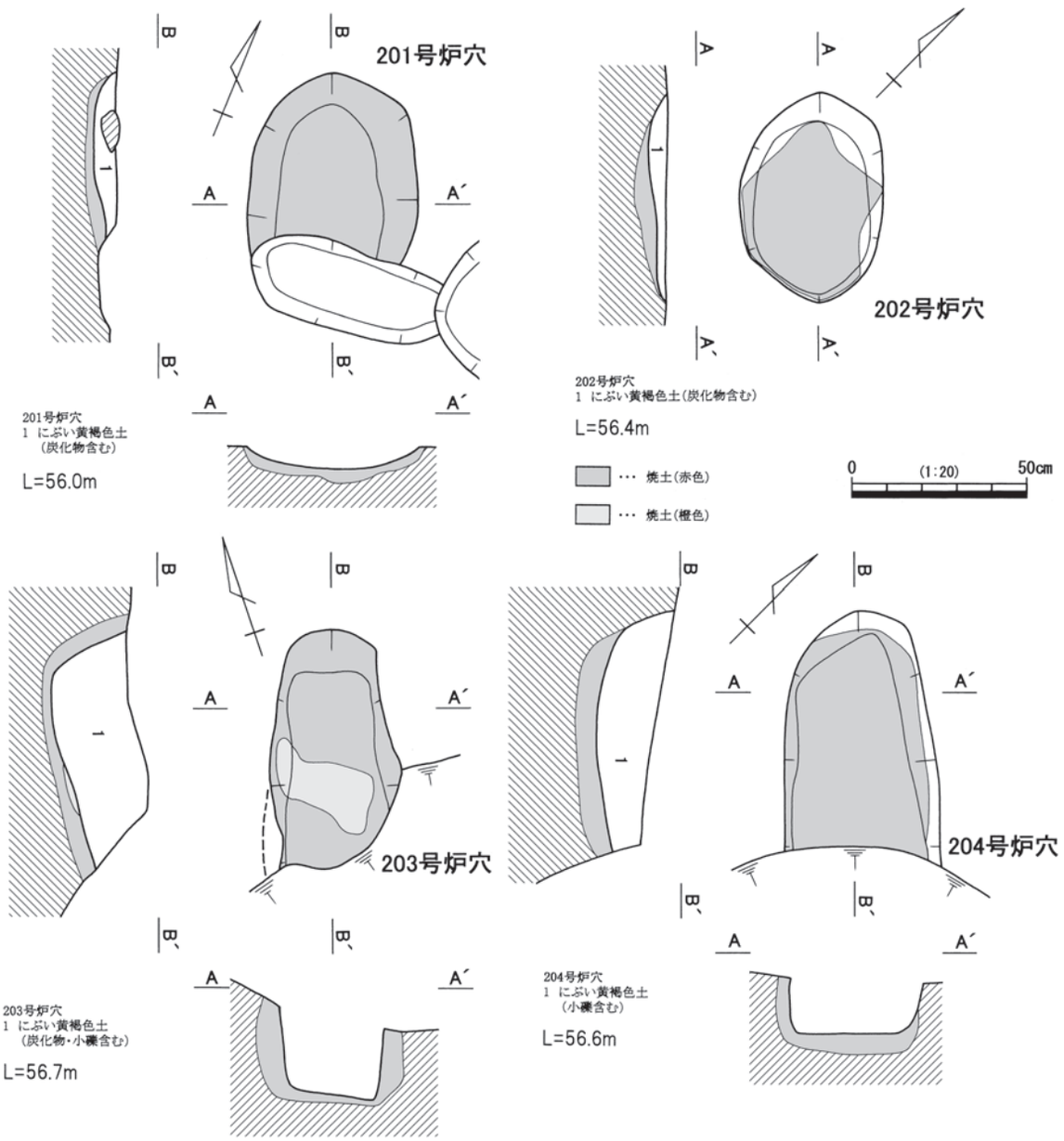


図 128　201 ～ 204 号炉穴実測図

ではあるが、外面にＲ撚糸文による施文が確認される。もう１点は、さらに小さな図化できない細片である。97 はシルト岩製の石鏃で、基部の一部が欠損している。いずれも埋土からの出土である。埋土中から採取された炭化物についてはＣ 14 年代測定を実施しており、9590 ± 50 yrBP という結果が得られている。

201 号炉穴（図 126・128）

200 号炉穴から約５ｍ南東に位置する。主軸は南－北方向で、北側に煙道がつく。第１検出面より約 35 ㎝下方で検出されている。床面からわずかに５～６㎝残存する程度であり、手前側は中近世の遺構により失われている。

燃焼部は、長さ 38 ㎝・最大幅 48 ㎝の規模で残存し、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝となっている。埋土は、地山に近似するや

やくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認できない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9630 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

202 号炉穴（図 126・128）

201 号炉穴から約５ｍ西側に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。燃焼部の床面がわずかに残存している。

燃焼部は、長さ 50 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で残存し、楕円形に近い形状である。奥壁側を除いて、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。埋土はわずかに残存する程度ではあるが、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

203 号炉穴（図 126・128）

202 号炉穴から約 11 ｍ南西に位置する。主軸は北東－南西方向で、北東側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されており、南側は攪乱により失われている。

燃焼部は、長さ 55 ㎝・最大幅 38 ㎝の規模で残存する。一部しか残存しないが、二等辺三角形に近い形状であると推定される。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 60 ㎝となっている。奥壁は斜めに立ち上がる。埋土は地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層で、天井の残存や崩落の痕跡は確認できない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

204 号炉穴（図 126・128）

203 号炉穴から約３ｍ北東に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されており、南東側は攪乱により失われている。

燃焼部は、長さ 60 ㎝・最大幅 44 ㎝の規模で残存し、楕円形に近い形状と推定される。奥壁と東側の側壁の一部を除き、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。東側の側壁で、焼土面が検出されていない部分があるが、掘り過ぎにより失われたのであろう。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁は斜めに立ち上がる。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

遺物としては、埋土から縄文土器が３点と剥片が１点出土している。縄文土器は、いずれも図化できない細片であり、文様も識別できない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9500 ± 50 yrBP という結果が得られている。

205 号炉穴（図 126・129、図版 30・39）

204 号炉穴から約２ｍ東側に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第１検出面より約 60 ㎝下方に位置する。南側は攪乱によって失われている。

燃焼部は、長さ 100 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。奥壁を除き、全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約７㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 95 ㎝となっている。煙道は直径 30 ㎝程の大きさで、奥壁はやや斜めに立ち上がる。天井

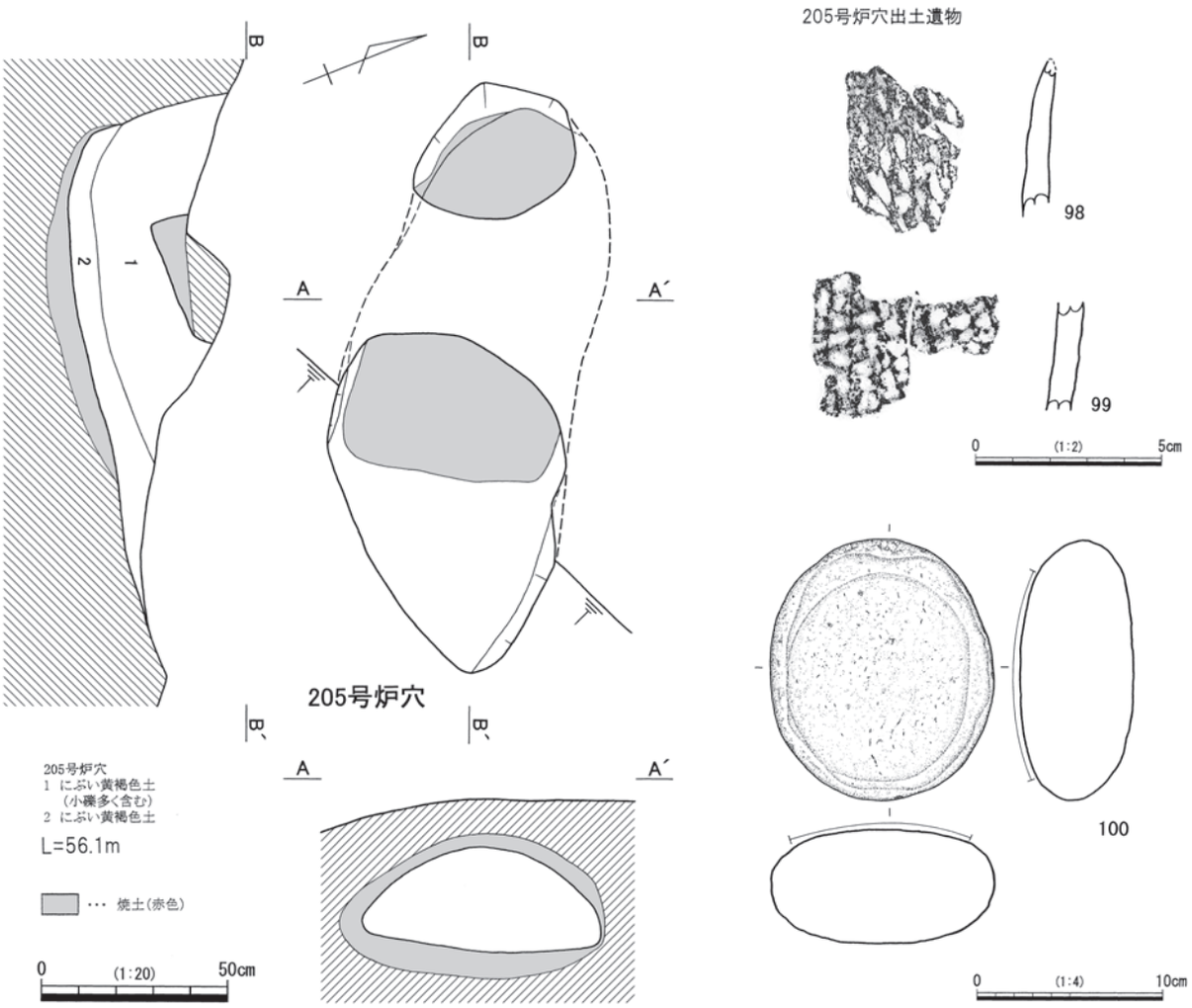


図 129　205 号炉穴実測図・出土遺物

は 32 ㎝程の幅で残存し、床面から天井までの高さは 22 ㎝となっている。前庭部には、約 40 ㎝の長さで平坦面が残存する。埋土は含まれる小礫の量により大きく２層に分けられているが、基本的には地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。残存する範囲では、天井の崩落土は確認されていない。

遺物としては、埋土から縄文土器と石器が出土している。98 は口縁部の破片である。口縁部は全体的にやや外反し、外面にはＲ撚糸文が施文されている。99 は胴部の破片である。外面にはＲＬ縄文が施されている。図示したもの以外にも数点出土しているが、いずれも文様が識別できない細片である。100 は花崗岩を石材とする磨石である。表面には使用による磨滅が確認できる。石器としては、他に剥片が１点出土している。

206 号炉穴（図 126・130、図版 31）

205 号炉穴から約２ｍ北側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。29 号集石により、煙道部の上半が失われている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 68 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約８㎝である。第１検出面から床面までの深さは、60 ㎝となっている。奥壁は湾曲しながらやや斜めに立ち上がる。前庭部には、長

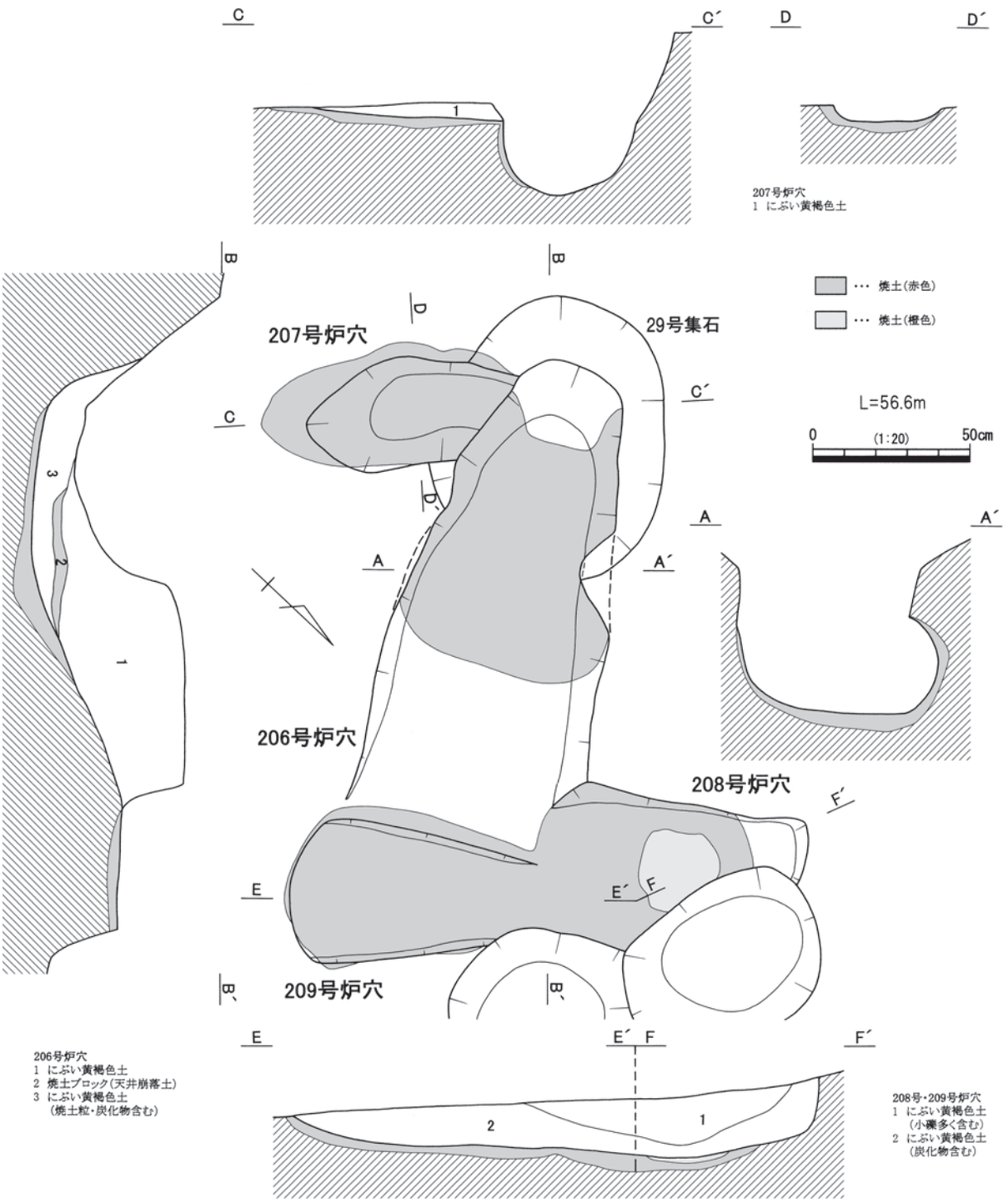


図 130　206 ～ 209 号炉穴実測図

さ 50 ㎝・幅 60 ㎝程の平坦面が設けられている。埋土は大きく 3 層に分けられており、床面上（第 2 ・ 3 層）には天井の剥落とみられる焼土が確認できる。東側に隣接する 208・209 号炉穴との関係は不明な部分も多いが、206 号炉穴の第 1 層と 208・209 号炉穴の第 2 層は同一の土層とみられる。206 号炉穴と 208 号炉穴は、同時期に存在していた可能性が高い。

遺物としては、埋土から剥片が 1 点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物 2 点についてＣ 14 年代測定を行っており、9460 ± 60 yrBP と 9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。

207 号炉穴（図 126・130、図版 31）

206 号炉穴の南西に位置する。主軸は北西－南東方向であるが、煙道がどちら側につくか判然としない。第１床面より約 30 ㎝下方で検出されている。206 号炉穴や 29 号集石と重複する位置関係にあるが、検出面が異なっており、現地で土層の切り合い関係は確認できていない。ただし、石が入っていた様子からみて、29 号集石に切られているとみてよいであろう。

燃焼部の床面とみられる焼土は、長さ 75 ㎝・最大幅 35 ㎝の規模で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝となっている。第１検出面から床面までの深さは、約 35 ㎝となっている。埋土はわずかに残る程度であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9600 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

208・209 号炉穴（図 126・130、図版 31）

206 号炉穴の北西側に位置する。第１検出面において、２基の炉穴が連結した状態で検出されている。主軸は北西－南東方向で、いずれも煙道は北西側につく。北東部は中近世の遺構により失われている。

208 号炉穴の燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で、一部失われているものの、全体としては二等辺三角形に近い形状であると推定される。奥壁付近を除くほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約２㎝である。第１検出面から床面までの深さは 20 ㎝である。奥壁はやや湾曲しながら直立気味に立ち上がる。前庭部には、209 号炉穴の跡を利用している。

209 号炉穴の燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で、二等辺三角形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約３㎝である。奥壁は 208 号炉穴を築く際に破壊されている。

埋土は大きく２層に分けられている。いずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土のようであるが、燃焼部の上部にあり小礫を多く含む第１層については、天井の崩落土である可能性も考えられる。高さなどからみて、第２層は 206 号炉穴の第１層と同一の土層とみられる。遺物としては、208 号炉穴の側の埋土から、剥片が２点出土している。

210 号炉穴（図 132）

他の炉穴と離れ、調査区中央北側の３区と４区の境付近に位置する。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されており、燃焼部の一部が残存する。部分的にしか残存しないため判然としない面もあるが、主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつくと推測される。

燃焼部の床面とみられる赤化した焼土面は、長さ 65 ㎝・幅 45 ㎝の範囲で検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約６㎝となっている。燃焼部の形状は、長方形に近い形状と推定される。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。奥壁付近の床面からは、５～ 10 ㎝程度の大きさの礫が出土している。被熱しているものがほとんどで、炉穴の使用時に用いられた礫の可能性がある。遺物は出土していない。

211 号炉穴（図 132、図版 42）

調査区中央の５区の北西隅に位置する。周辺に炉穴は検出されておらず、単独で存在する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。西半は３区、東半は４区と調査時期が異なっているため、検出面に差異が生じている。第１検出面より、西半は約 90 ㎝下方、東半は約 50 ㎝下方で検出されている。西側と

東側の２ヶ所に焼土面が検出されており、２基の炉穴が連続する状態となっている。手前側を 211 号炉穴①、奥側を 211 号炉穴②とする。

①の燃焼部の床面とみられる焼土面は、南側で部分的に検出されている。②の前庭部として利用するため、②の築造時に改変されているものとみてよい。規模としては、長さ 90 ㎝・最大幅 65 ㎝程度であったと推定される。

②の燃焼部は、長さ 90 ㎝・最大幅 60 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。床面と南側の側壁のほぼ全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約５㎝、橙化面は約１㎝である。第１検出面から床面までの高さは、約 100 ㎝となっている。前庭部には①の跡を利用している。

埋土は大きく３層に分けられており、①の底部には焼土ブロック（第３層）が確認されている。この第３層は天井の崩落土として認識されているが、層状になる焼土も存在したとされており、床面の焼土と天井の崩落土とを混同してしまっている可能性が高い。①の天井崩落土の除去・整地を行った際に、床面を削っている可能性も考えられなくはないが、ほぼ①の床面に相当するものと捉えてよいであろう。遺物としては、埋土からシルト岩の石核（101）が１点出土しているのみである。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9440 ± 50 yrBP という結果が得られている。

212 号炉穴（図 131・132、図版 31）

211 号炉穴の 20 ｍ南に位置する。主軸は東－西方向で、西側に煙道がつく。大半が第１検出面より約 20 ㎝下方で検出されており、東側は第１検出面からの掘り下げにより失われている。

燃焼部は、長さ 85 ㎝・最大幅 75 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。床面と南側の側壁には赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約６㎝、橙化面は約４㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 45 ㎝となっている。奥壁はやや湾曲して立ち上がる。前庭部には、長さ 30 ㎝・幅 56 ㎝の平坦面が残存する。埋土は大きく２

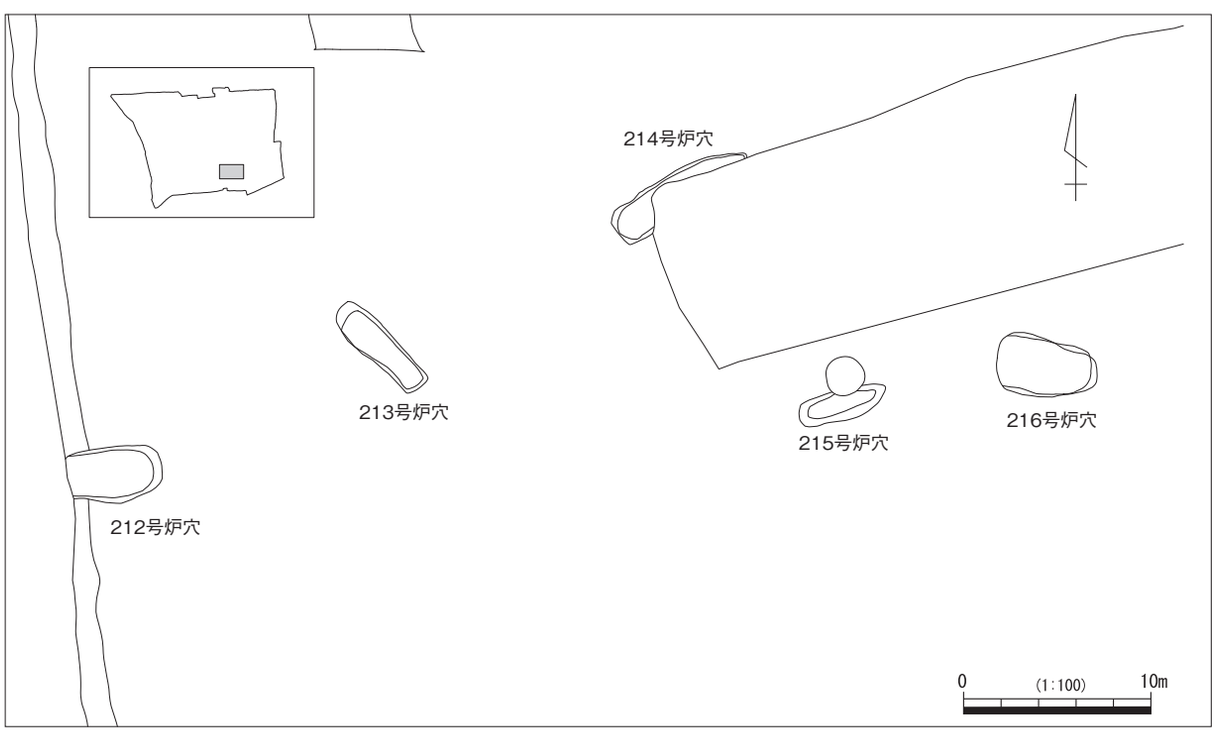


図 131　212 ～ 216 号炉穴配置図

層に分けられており、床面上（第２層）には天井の剥落とみられる焼土粒が確認される。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9350 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

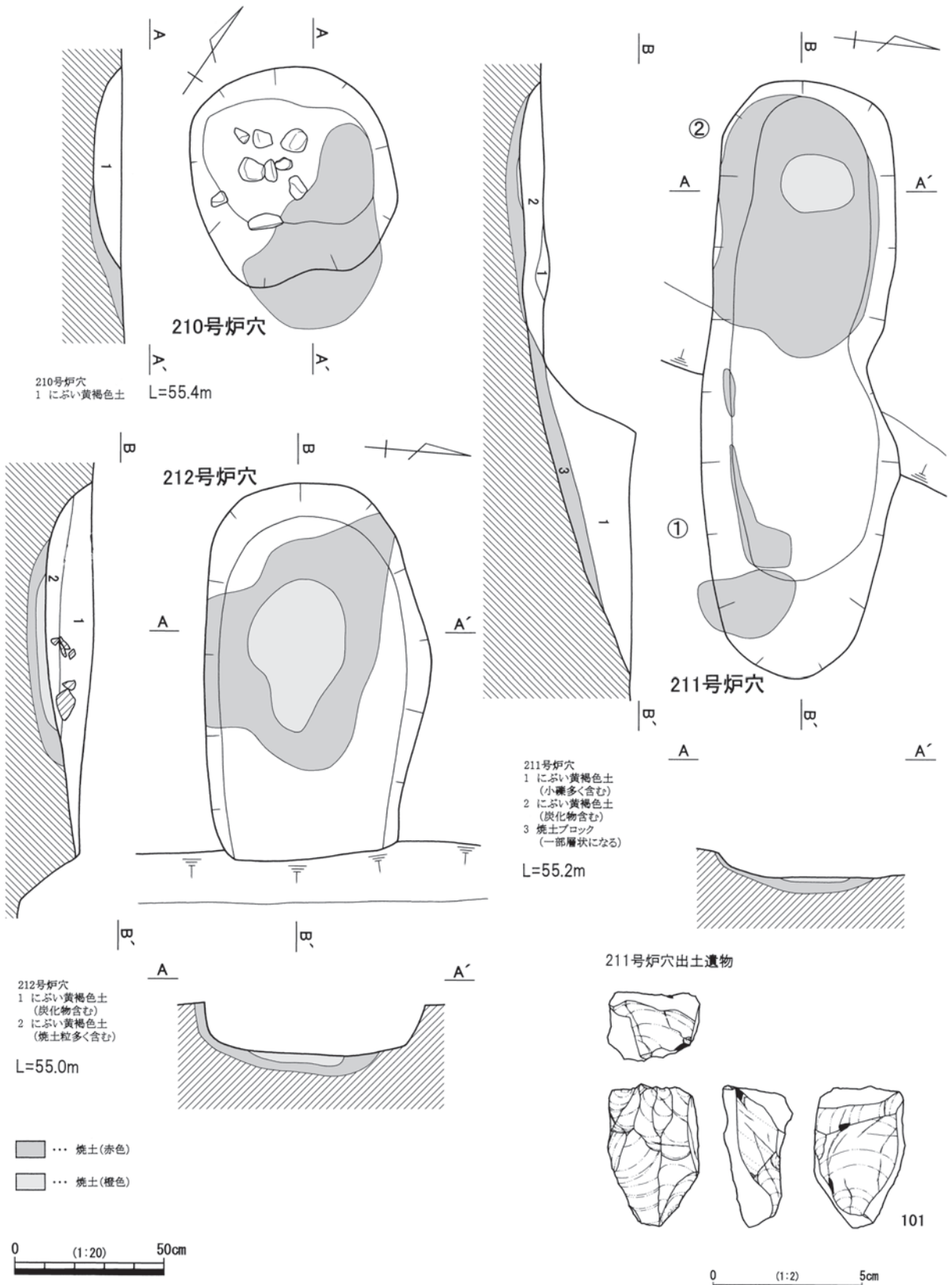


図 132　210 ～ 212 号炉穴実測図・出土遺物

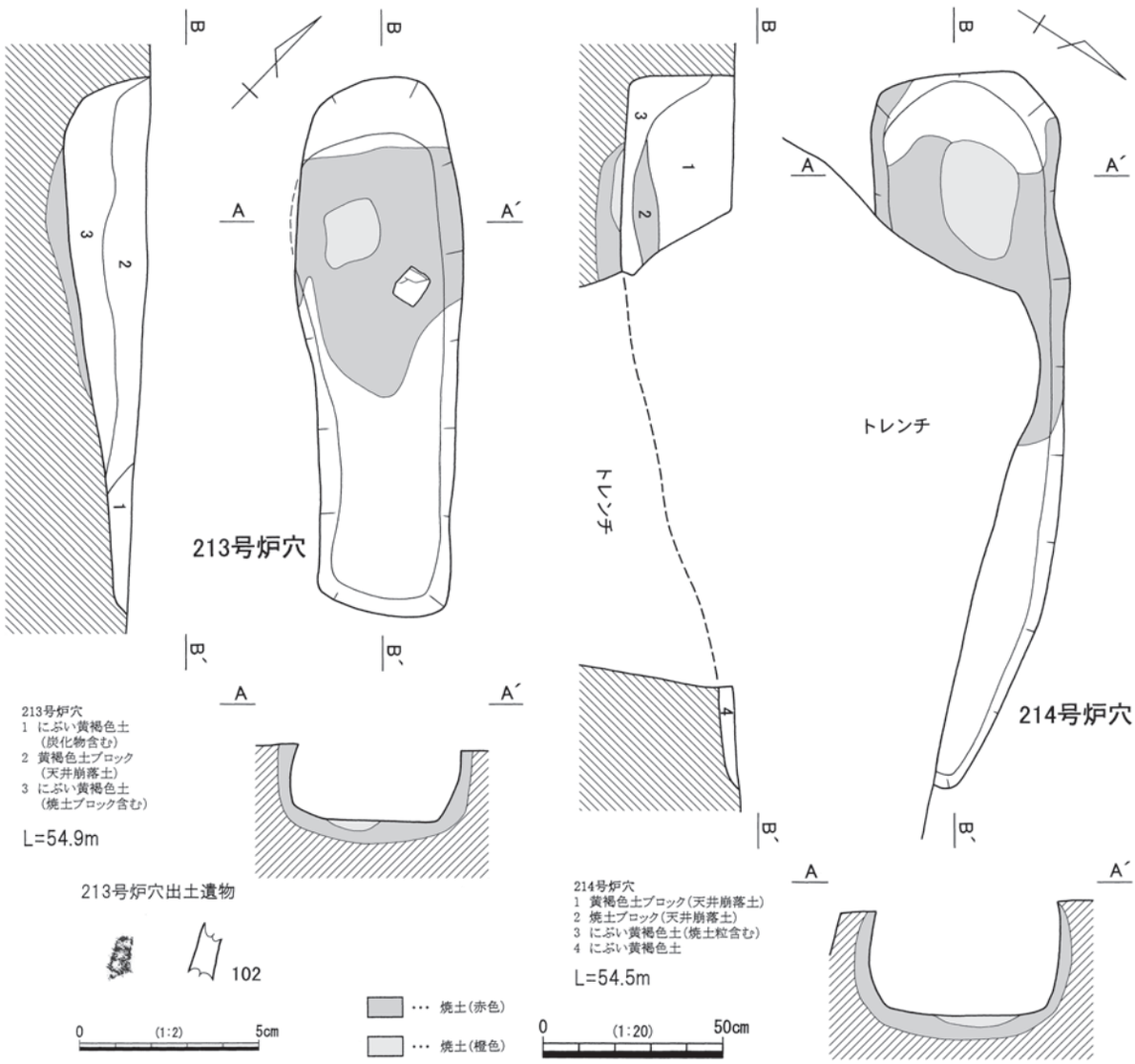


図 133　213・214 号炉穴実測図、実測図

213 号炉穴（図 131・133、図版 39）

212 号炉穴から 4 m東に位置する。主軸は北西－南東方向で、北西側に煙道がつく。第 1 検出面より約 20 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 75 ㎝・最大幅 45 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。奥壁を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央には橙化面も確認される。焼土の厚さは、赤化面が約 6 ㎝・橙化面は約 3 ㎝である。第 1 検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁はやや湾曲しながら直立気味に立ち上がる。前庭部には、長さ 55 ㎝・幅 28 ㎝の規模で平坦面が設けられている。埋土は大きく 3 層に分けられており、燃焼部には天井の崩落土（第 2 ・ 3 層）が確認される。

遺物としては、縄文土器が 1 点出土しているのみである。102 は胴部の破片であり、細片ではあるが外面にＲＬ縄文が施文されているのが確認される。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。

214 号炉穴（図 131・133）

213 号炉穴から約４ｍ東側に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 30 ㎝下方で検出されており、南東側の大半はトレンチにより失われている。

燃焼部は、長さ 105 ㎝・最大幅 50 ㎝の規模で残存する。奥壁付近を除き、ほぼ全面で赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。奥壁は直立気味に立ち上がる。前庭部は、長さ 90 ㎝で平坦面が設けられている。埋土は大きく４層に分けられており、燃焼部には天井の崩落土（第１・２・３層）が確認される。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

215 号炉穴（図 131・135）

214 号炉穴から約３ｍ南に位置する。主軸は南西－北東方向であり、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されており、前庭部の一部が中近世の遺構により失われている。

床面の焼土が記録されていないが､土層断面図には焼土ブロックとされる面（第２層）が確認できる。側壁の焼土とつながる高さにあることから、床面の焼土に相当する可能性が高い。これを床面とみた場合、燃焼部は、長さ 55 ㎝・最大幅 40 ㎝の規模で、楕円形に近い形状となる。奥壁付近を除き、ほぼ全面に赤化した焼土面が認められ、南側の側壁に一部橙化面も確認できる。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約４㎝、橙化面は約１㎝となる。第１検出面から床面までの深さは、15 ㎝である。奥壁はやや斜めに立ち上がる。前庭部には、緩やかな斜面が設けられている。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

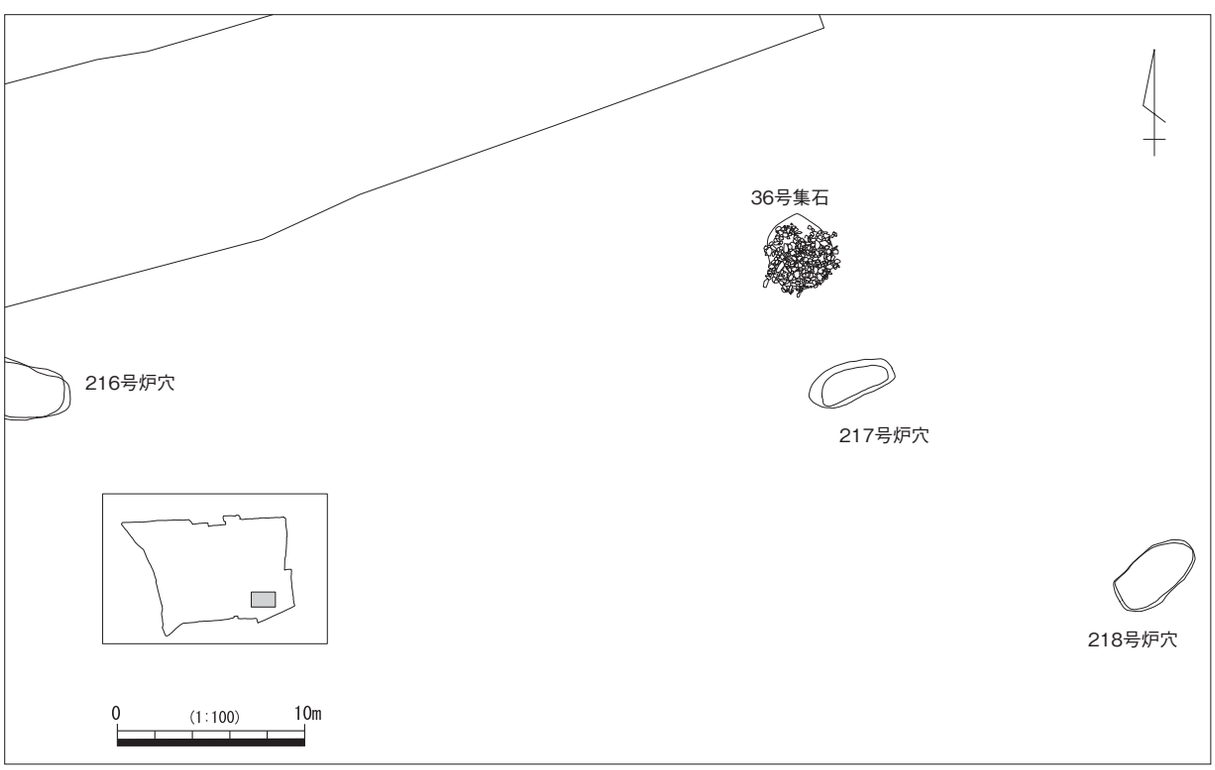


図 134　217 ～ 218 号炉穴配置図

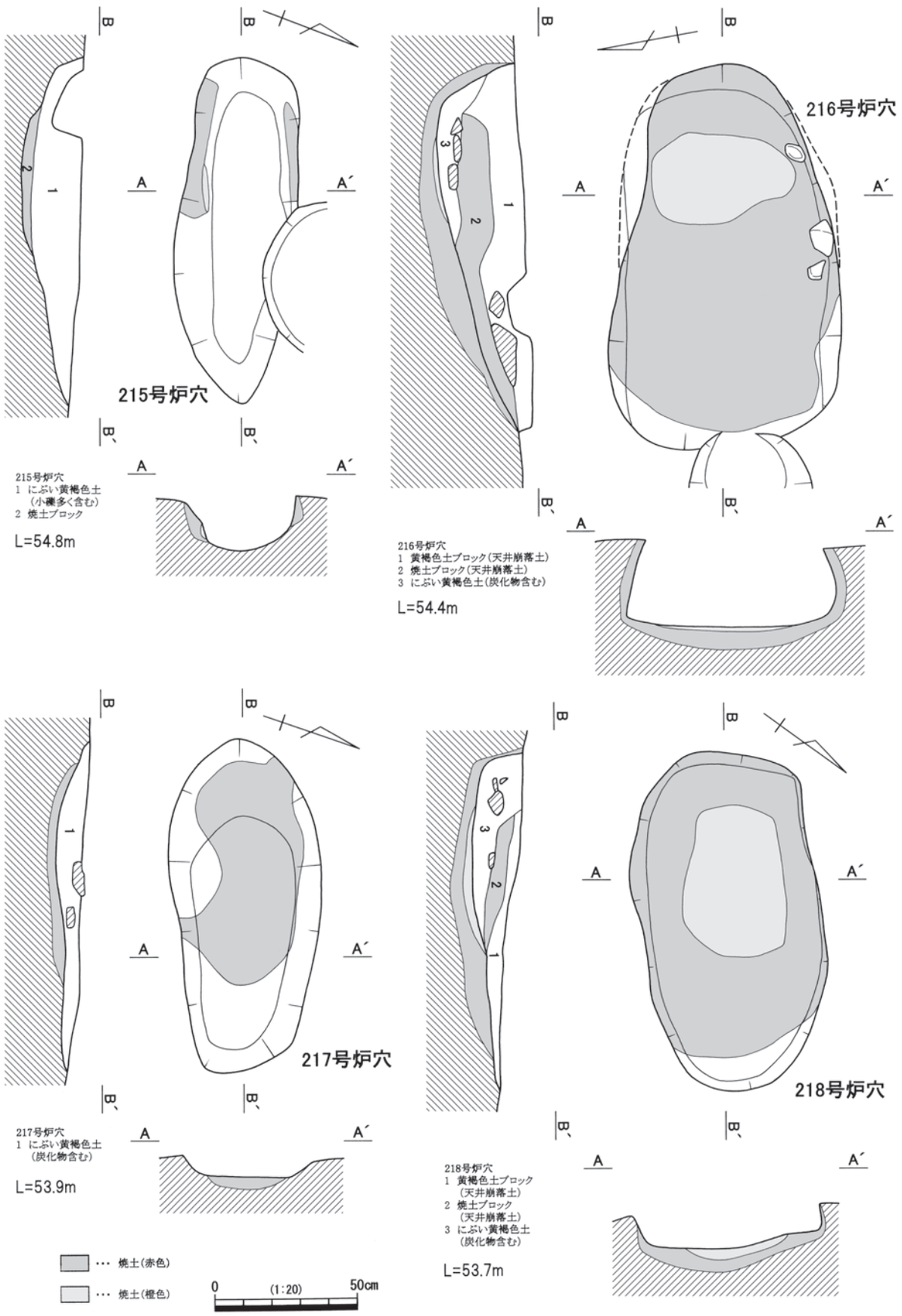


図 135　215 ～ 218 号炉穴実測図

216 号炉穴（図 131・135、図版 31）

215 号炉穴から約２ｍ東に位置する。主軸は東－西方向で、東側に煙道がつく。第１検出面より約 60 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 120 ㎝・最大幅 80 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約 10 ㎝、橙化面は約２㎝と厚い。第１検出面から床面までの深さは、約 60 ㎝となっている。奥壁はやや斜めに立ち上がる。埋土は大きく３層に分けられており、天井の崩落土（第１・２層）が確認される。断面図にはいくつかの礫が記録されているが、他の記録がなく詳細は明らかでない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9570 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

217 号炉穴（図 134・135）

216 号炉穴から約 11 ｍ東に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面で検出されている。

燃焼部は、長さ 80 ㎝・最大幅 52 ㎝の規模で、楕円形に近い形状である。床面のほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されている。側壁にはほとんど焼土が検出されていないが、おそらくは掘り過ぎであろう。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝となっている。床面付近での検出のため、奥壁の形状は判然としない。前庭部には、長さ 20 ㎝・幅 25 ㎝程の平坦面が確認される。埋土は、地山に近似する黄褐色土の単層であり、天井の残存や崩落の痕跡は確認されていない。

埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を実施しており、9580 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

218 号炉穴（図 134・135）

217 号炉穴から約５ｍ南東に位置する。主軸は南西－北東方向で、南西側に煙道がつく。第１検出面より約 25 ㎝下方で検出されている。

燃焼部は、長さ 104 ㎝・最大幅 65 ㎝の規模で、長方形に近い形状である。全面に赤化した焼土面が検出されており、床面の中央やや奥寄りには橙化面も確認される。焼土の厚さは、最も厚い部分で赤化面が約７㎝、橙化面は約３㎝である。第１検出面から床面までの深さは、約 40 ㎝となっている。奥壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は大きく３層に分けられており、天井の崩落土（第１・２層）が確認される。断面図には、奥壁付近に礫が集中している様子がみてとれる。しかし、他に礫に関する記録はなく、詳細は明らかでない。土器や石器などの遺物は出土していない。

3　集石

1号集石（図136・137）

調査区の北東部に位置する。第1検出面で検出されているが、検出面では土坑の端に沿って一部礫が認められる程度であり、上面の土を中心に向かって除去したところ、全体に石が詰まっている状態が検出されている。中心の礫が、検出面よりもやや沈んでいる状態にあったことがわかる。

土坑は、長径167㎝・短径159㎝のややいびつな円形であり、深さは検出面から最深部まで39㎝となっている。平坦な底部から、湾曲しながら斜め上方へ立ち上がる。土坑内からは、被熱した礫が大量に出土している。礫は底部まで密に詰まっている。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土が、礫の

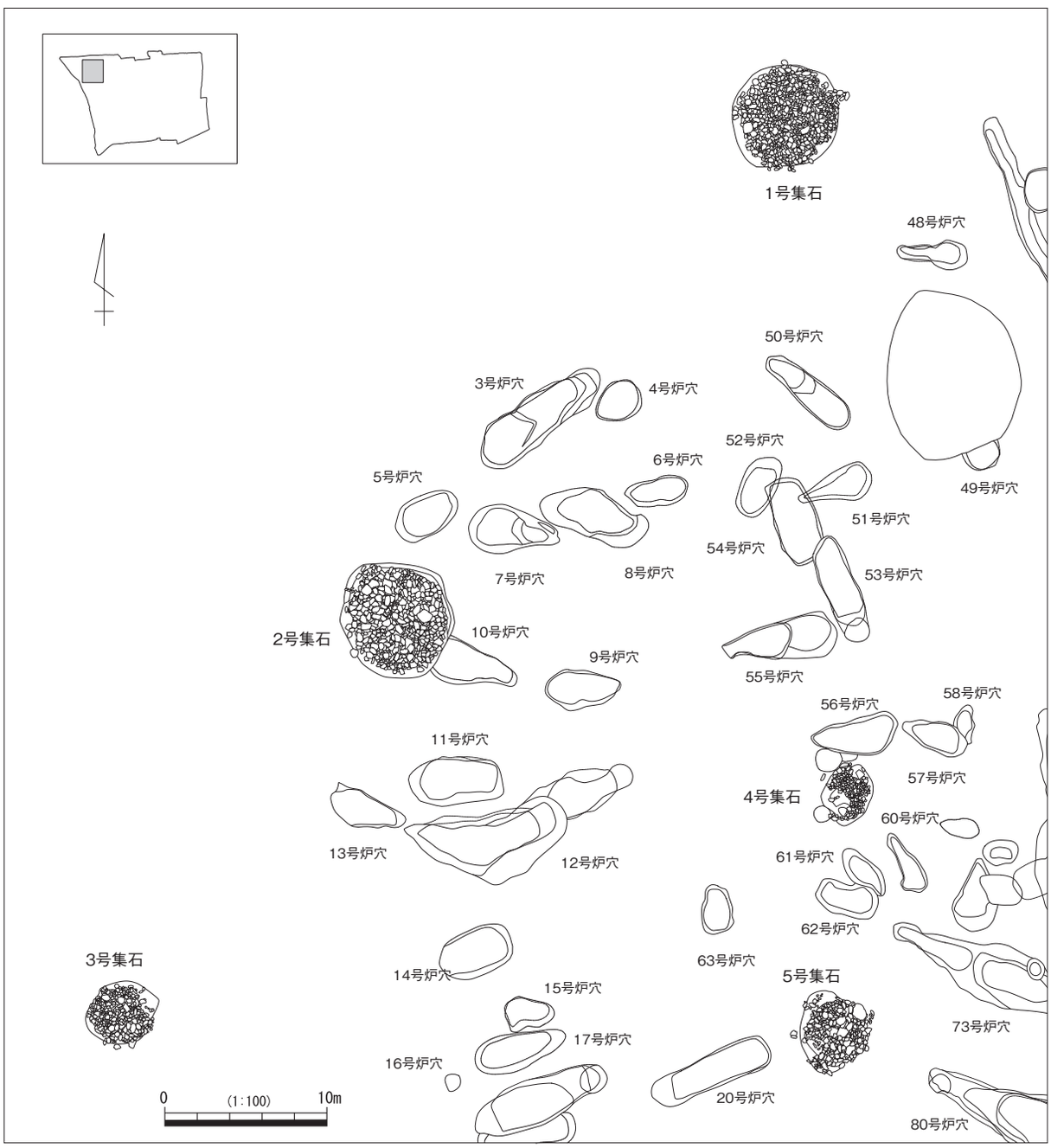


図136　1～5号集石配置図

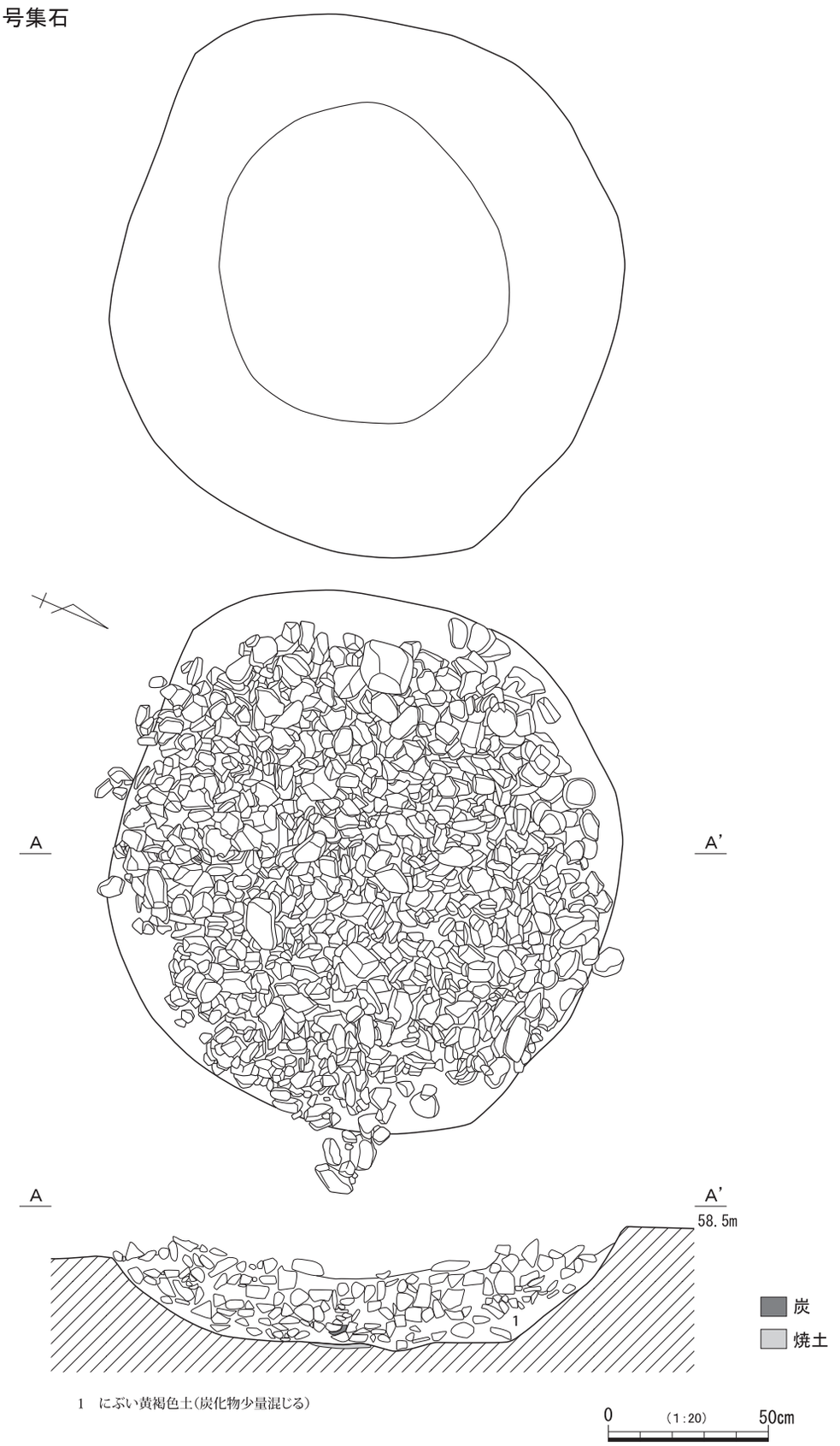


図 137　１号集石実測図

隙間に入り込んでいる。壁面に焼土など被熱の痕跡は確認されない。底部には一部焼土が検出されているが、全体に広がるような状態ではなく、淡い赤色で被熱の度合いとしては弱い。土坑内で火を焚いた明確な痕跡は、確認できない。

炭化材と呼べるほど形を保った炭化物は出土しておらず、埋土中に炭化物の細片が少量含まれる程度である。採取された炭化物２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9620 ± 50 yrBP と 9460 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

２号集石（図 136・138、図版 33）

１号集石から約 10 ｍ南西に位置する。10 号炉穴とともに、第１検出面より約 50 ㎝下方で検出されている。１号集石と同様に、礫は中心が沈んだ状況となっており、礫の上層には地山に近似した土が堆積していたものと推測される。10 号炉穴の前庭部を切るかたちで築かれており、10 号炉穴よりも明らかに後出する遺構である。

土坑は、長径 182 ㎝･短径 175 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 65 ㎝である。第１検出面から土坑の最深部までの深さは、約 115 ㎝となる。土坑の中心が深くなるすり鉢形に近い形状である。土坑内には、総点数 4575 点・総重量 618 kgの被熱した礫が詰まっていた。土層は大きく２層に分けられている。底部には、炭化物が多量に混じる土（第２層）が確認されており、礫が入っているのはその上面からである。礫と接する上半の壁面には、焼土が検出されている。焼土は淡い赤やピンク色の色調で、被熱の度合いとしては強くない。

底部付近（第２層）からは､ほぼ一面に粉末状になった炭が検出されているほか､ある程度形状を保った炭化材も多く出土している。土坑の底部に被熱の痕跡が認められないため、ここで火を焚いてできたものとは考えにくい。これらの炭に関しては、外部から持ち込まれたものとみてよいであろう。これらの炭化材のうち２点についてＣ 14 年代測定を実施し、9640 ± 50 yrBP と 9610 ± 50 yrBP という結果が得られている。

遺物としては、第２層から縄文土器の破片（103）が１点出土しているのみである。103 は胴部の破片であり、表面の摩滅が著しいが、外面にはＲＬ縄文の施文が確認できる。

３号集石（図 136・139、図版 33）

２号集石から約８ｍ南西に位置する。第１検出面より約 50 ㎝下方で検出されているが、検出面より上方の状況については判然としない。

土坑は、長径 110 ㎝・短径 100 センチの楕円形で、検出面から最深部までの深さは 40 ㎝である。第１検出面から土坑の最深部までの深さは、約 90 ㎝となる。底部の平坦面から、湾曲しながら斜めに立ち上がる。土坑内からは、総点数 1572 点・総重量 149 kgの被熱した礫が出土している。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。基本的には単層であるが、底部付近は炭化物が多くやや暗い色調となっている。底部付近は礫が少なく、10 ㎝程上から礫が密に詰まる状況になっており、この点においては２号集石と近似した状態にあるといえる。土坑の底や壁に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化材といえるほど大きなものは出土していないが、埋土中には炭化物の細片が含まれていた。採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9640 ± 50 yrBP という結果が得られている。

遺物としては、縄文土器の破片（104）が１点出土している。104 は口縁部の破片である。口縁はやや外反し、外面にはＲＬ縄文が施文されている。上層の礫の間から出土している。

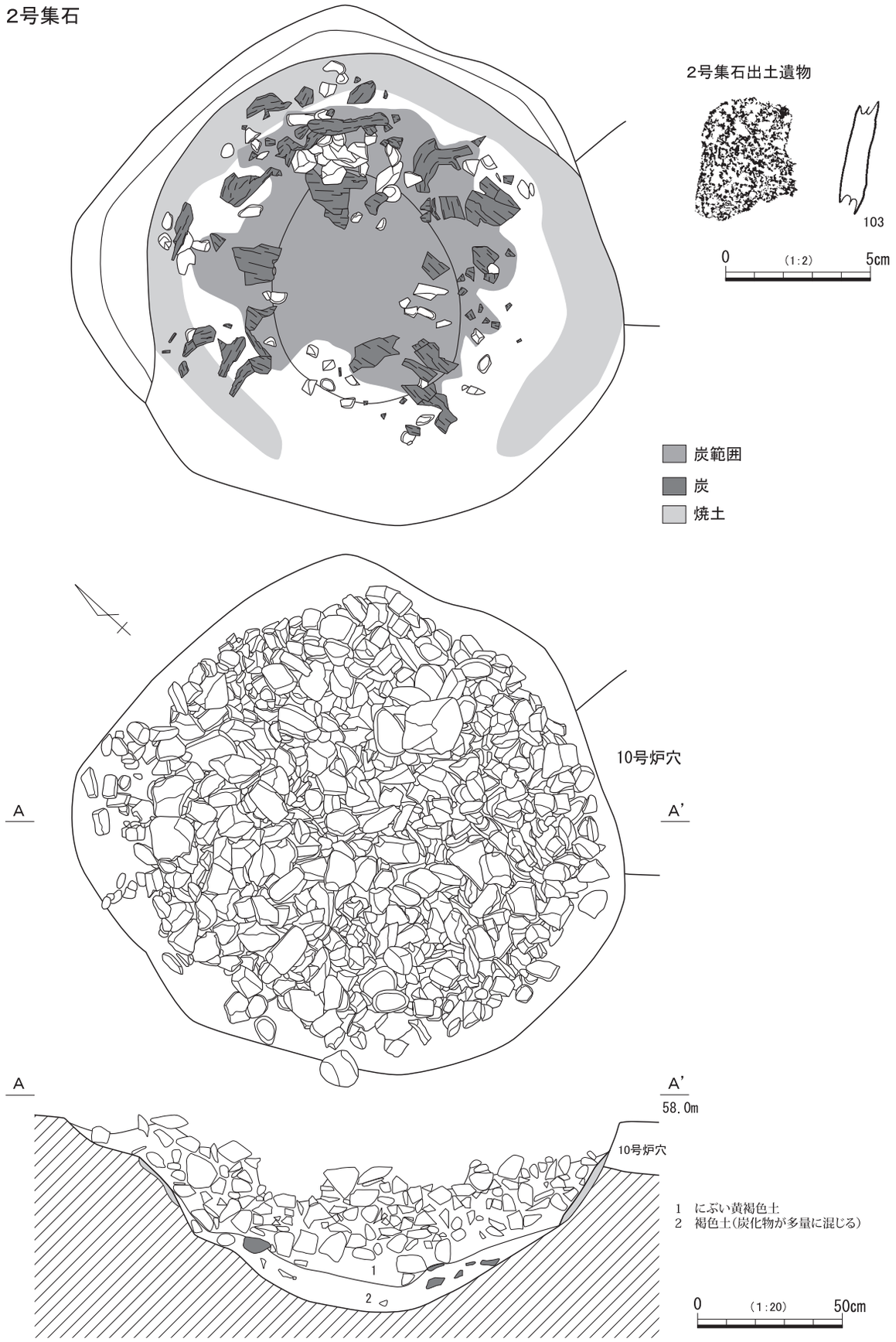


図 138　２号集石実測図・出土遺物

４号集石（図 136・139）

２号集石から約７ｍ南東に位置する。第１検出面で検出されており、中・近世の遺構によって、多くの部分が失われている。

土坑は、長径 85 ㎝・短径 78 ㎝の楕円形と推定される。検出面から最深部までの深さは 28 ㎝となっている。底部の狭い平坦面から斜めに立ち上がる。土坑内からは、総点数 961 点・総重量 40 kgの被熱した礫が出土している。埋土は大きく２層に分けられており、いずれも基本的には地山に近似した土であるが、底部付近（第２層）は炭化物をやや多く含むため暗い色調となっている。礫が入るのは、第２層の上面からである。土坑の底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は細片が埋土中に少量混じる程度であり、炭化材と呼べるような形状を保ったものは確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

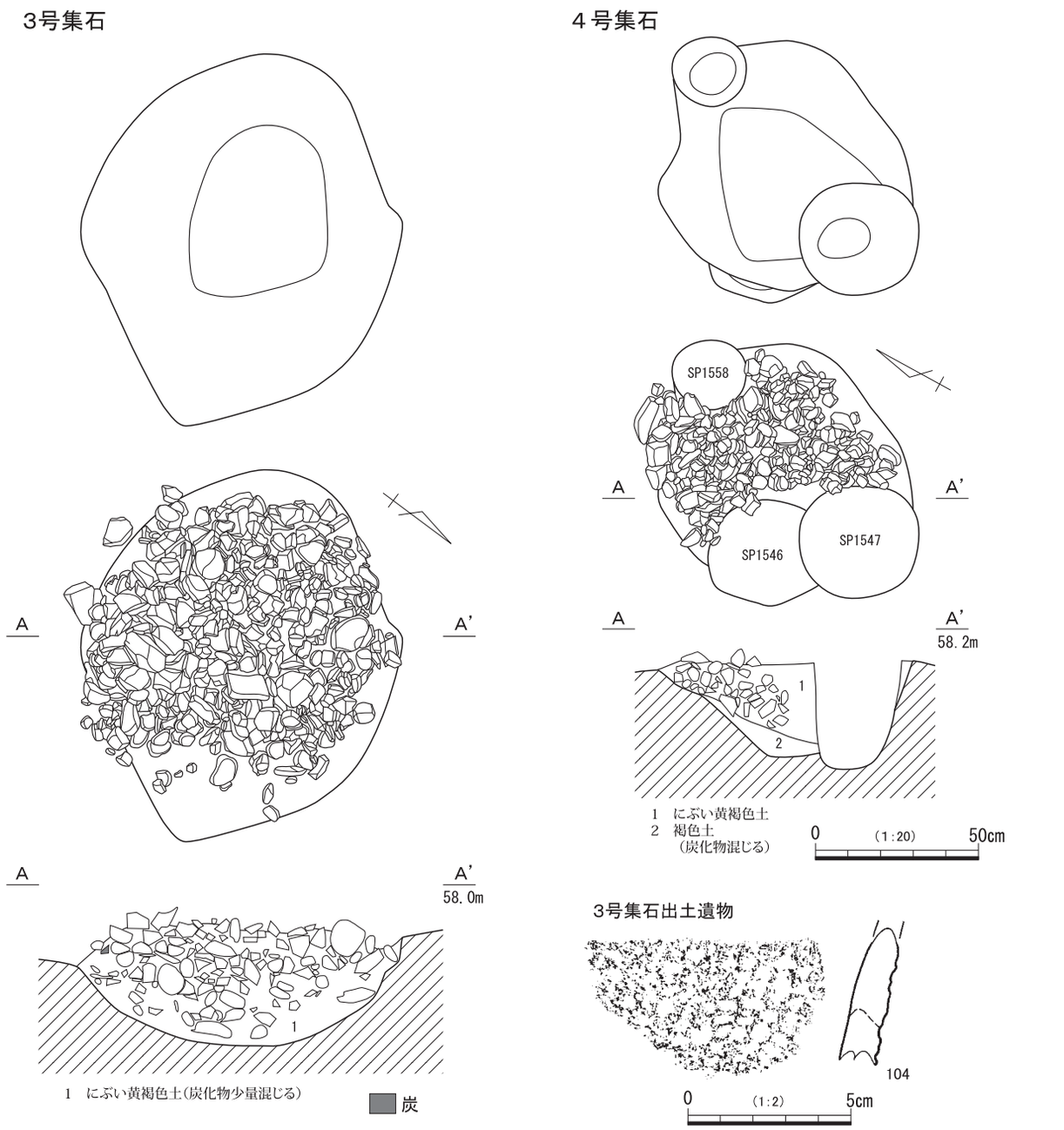


図 139　３・４号集石実測図・出土遺物

５号集石（図 136・140）

４号炉穴から約４ｍ南に位置する。第１検出面で検出されており、西側の一部が中・近世の遺構によって失われている。

土坑は、長径 94 ㎝・短径 90 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 50 ㎝となっている。中心部が深くなるすり鉢形となっており、底部から湾曲しながら上方へと立ち上がる。土坑内からは、総点数 2482 点・総重量 200 kgの被熱した礫が出土しており、一部土坑の外にも礫の散らばる状態が確認されている。５～ 10 ㎝程度の大きさの礫が主体であるが、一部 20 ㎝程もある大型の礫も認められる。埋土は単層であるが、底部付近は礫よりも土が多く堆積する。壁面の一部には、被熱の痕跡が確認されている。焼土はピンク色に近い色調であり、被熱の度合いとしては弱いといえる。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度である。採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

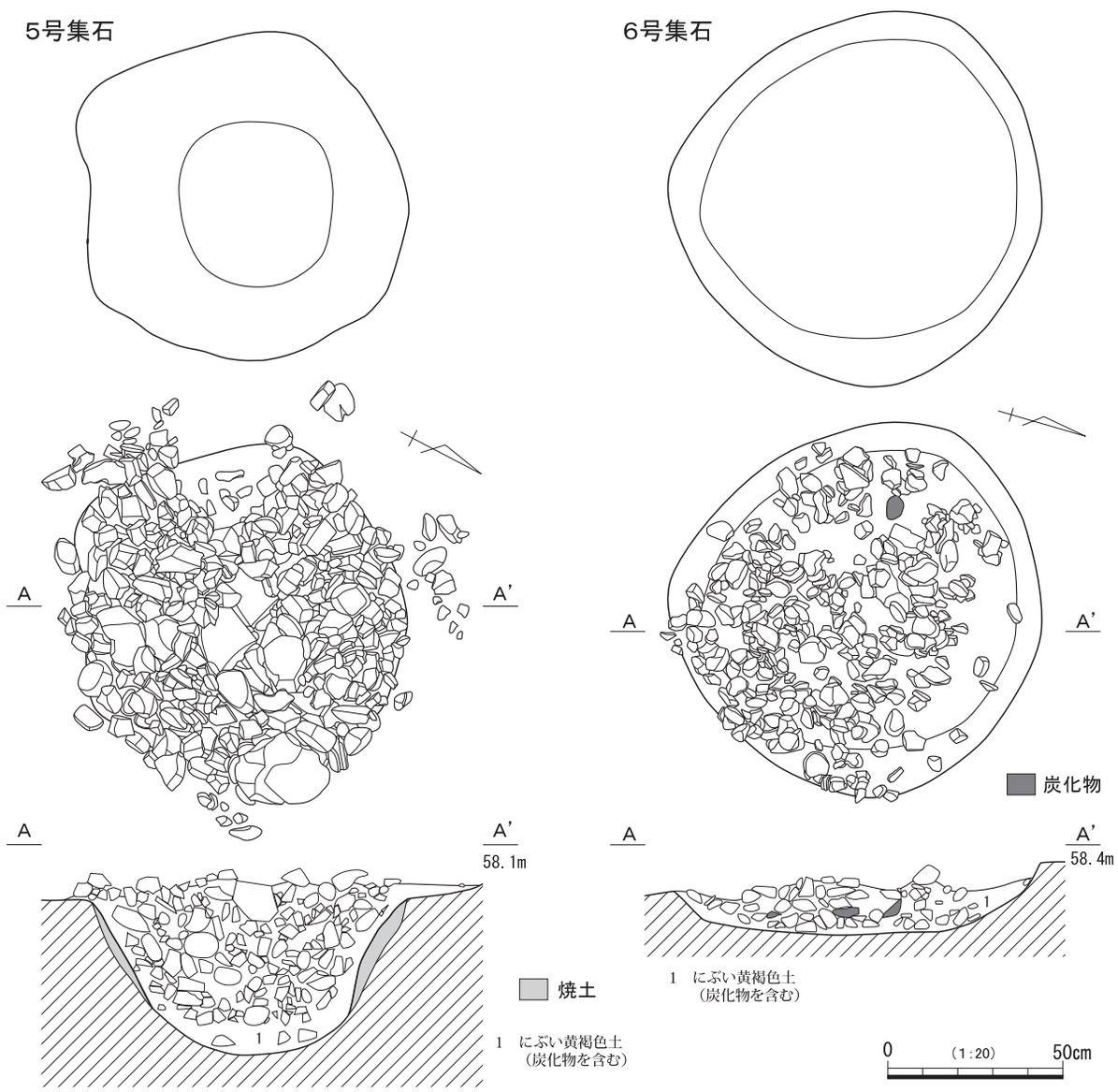


図 140　５・６号集石実測図

６号集石（図 140・141、図版 33）

５号炉穴から約８ｍ南東に位置する。第１検出面で検出されている。

土坑は、直径 105 ㎝のややいびつな円形であり、検出面から最深部までの深さは 19 ㎝と浅い。底部の平坦面から、湾曲しながら斜めに立ち上がる。土坑内からは、総点数 1345 点・総重量 57 kgの被熱した礫が出土している。土坑の大きさに比べると礫は少なく、密度もぎっしりと詰まっているのではなく、疎らに入るような状況となっている。礫の大きさも、５～ 10 ㎝程度の小礫が大半である。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。土坑の底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度であり、炭化材と呼べるほど形状の残るものは出土していない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9760 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

７号集石（図 141・142）

５号集石から約７ｍ東に位置する。第１検出面で検出されている。礫が北半分しか図化されていないが、調査所見によると検出時には全面に広がっていたようである。

土坑は、直径 65 ㎝の円形であり、検出面から最深部までの深さは約 30 ㎝となっている。底部の平坦面から直立気味に立ち上がる。土坑内からは、総点数 241 点・総重量 10 kgの礫が出土している。礫は土坑の上面に薄く入れられている程度であり、他の集石に比べて量も少ない。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

底部から約 20 ㎝上の礫までは、炭化物を多く含む褐色土が堆積しており、少量ではあるが炭化材も出土している。採取された炭化材のＣ 14 年代測定を行っており、9560 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

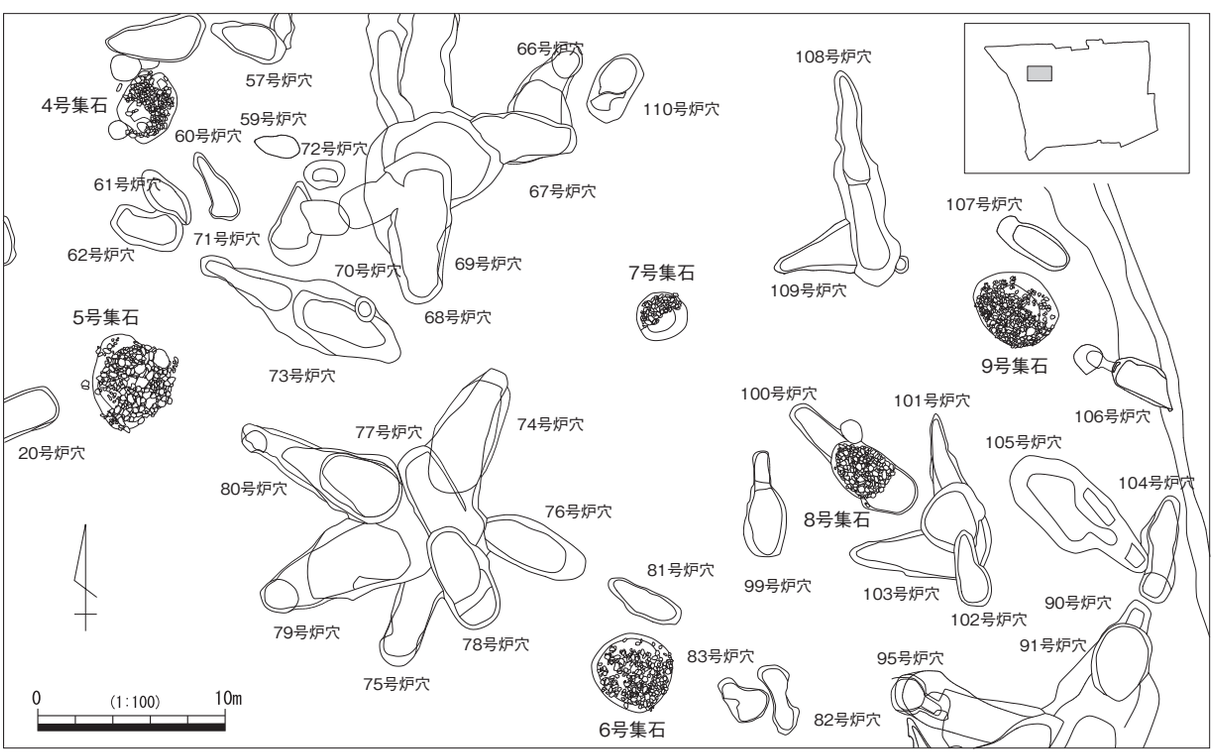


図 141　６～９号集石配置図

８号集石（図 141・142）

７号集石から約３ｍ南東に位置する。第１検出面で検出されている。100 号炉穴を切って築かれており、100 号炉穴より後出する遺構であることが確かめられている。

土坑は長径 78 ㎝・短径 68 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 15 ㎝と浅い。底部の平坦

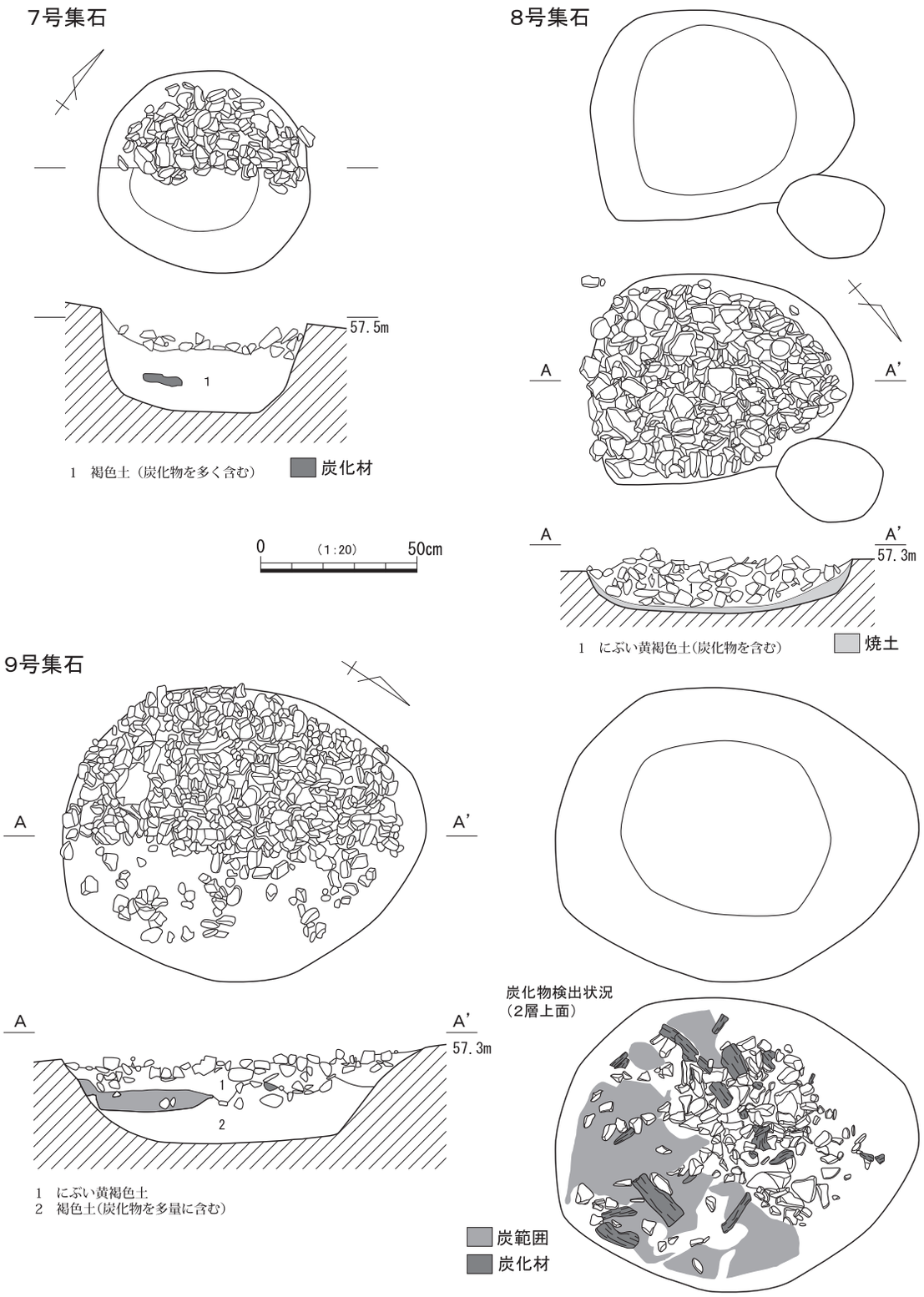


図 142　７・８・９号集石実測図

面から湾曲しながら直立気味に立ち上がる。100 号炉穴の焚口付近に位置しており、炉穴の床面よりも深く掘られていることから、天井の崩落により窪みとなった部分を掘り直して築かれたものと推測される。土坑内からは、総点数 974 点・総重量 58 kgの被熱した礫が出土している。５～ 10 ㎝程度の大きさの礫が、底部まで詰まった状態となっている。埋土は、石の隙間に確認される程度である。底部と壁面のほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されており、土抗内で火を焚いた可能性が高い。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度であり、炭化材と呼べるほど形状の残るものは出土していない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

９号集石（図 141・142）

８号集石から約３ｍ北東に位置する。第１検出面で検出されている。東半の礫が少ない状態で図化されているが、調査所見によると検出時には全体に礫が詰まっていたようである。

土坑は、長径 110 ㎝・短径 94 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 26 ㎝となっている。底部の平坦面からやや広がる形で斜めに立ち上がる。土坑内からは、総点数 2342 点・総重量 86 kgの礫が出土している。５～ 10 ㎝程の小礫が多い。埋土は大きく２層に分けられており、礫は上層（第１層）に集中する。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

底部には炭化物が多量に混じる土（第２層）が確認されており、その上面からは炭化材がまとまって出土している。炭化物はほぼ全体に広がるが、焼土などの被熱の痕跡が確認できないことから、これらの炭化物は外部から持ち込まれた可能性が高い。採取された炭化材のＣ 14 年代測定を行っており、9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。遺物は、礫の隙間から黒曜石の剝片が１点出土しているのみである。

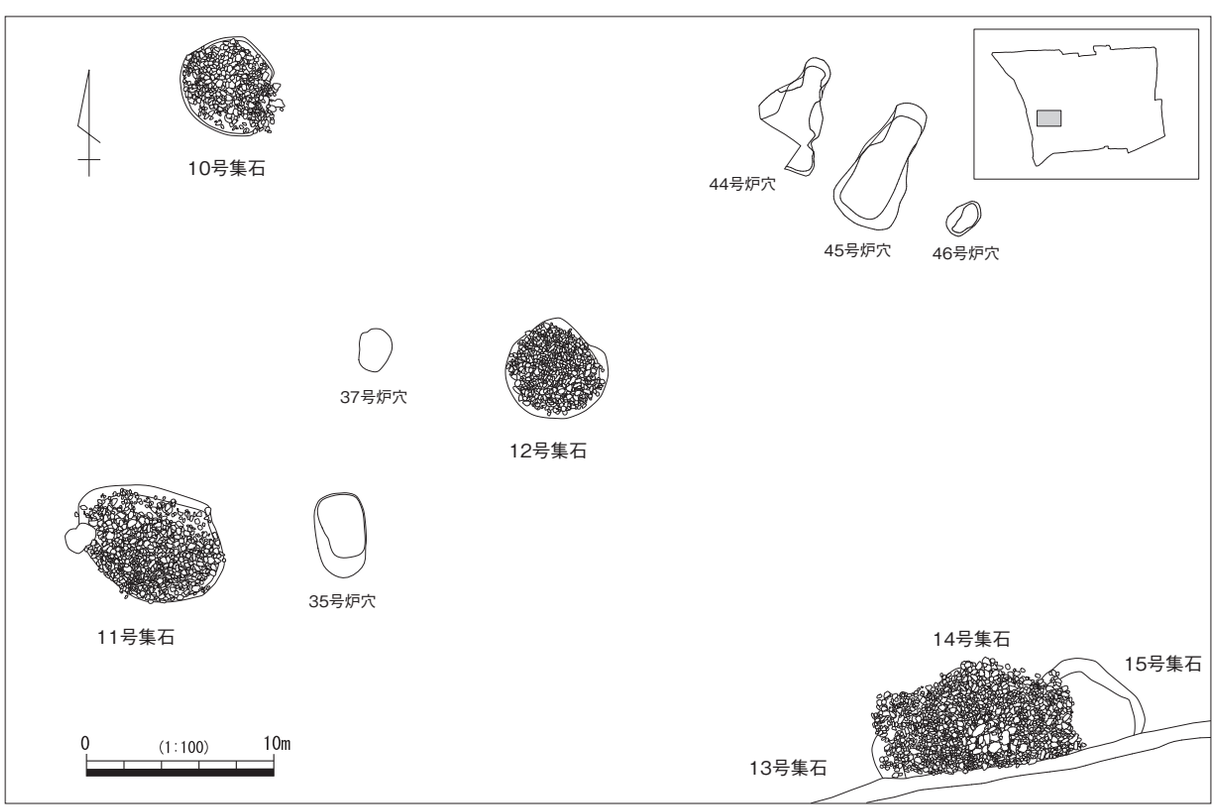


図 143　10 ～ 15 号集石配置図

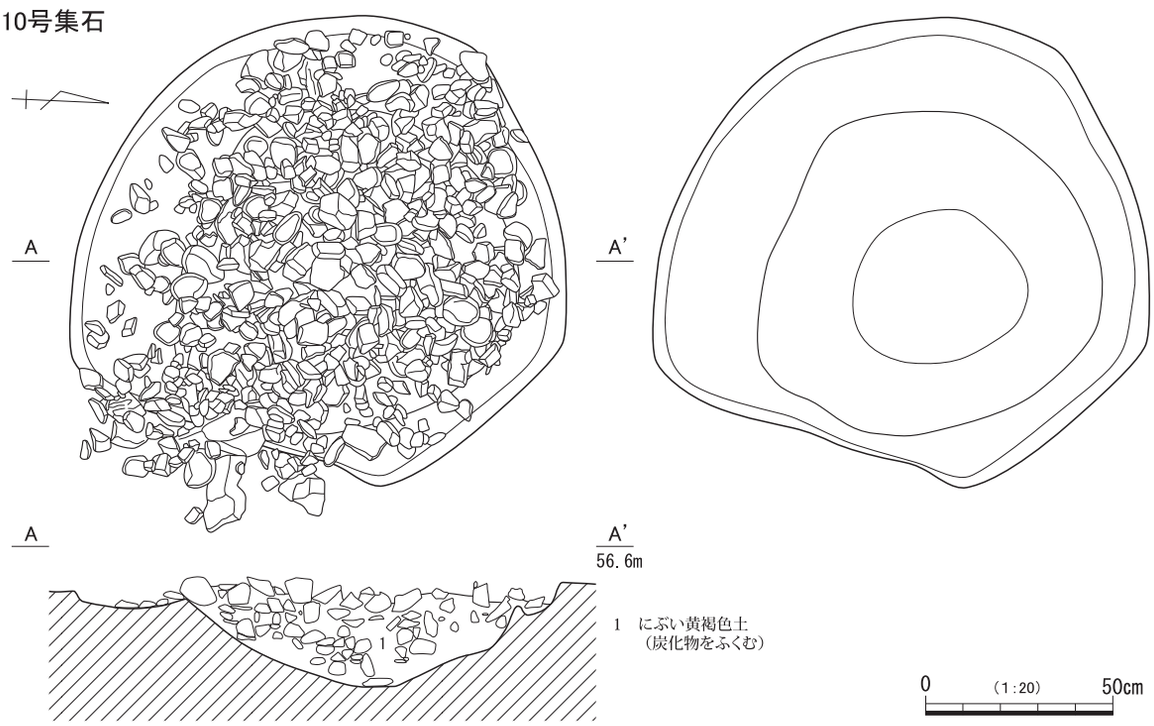


図 144　10 号集石実測図

10 号集石（図 143・144、図版 33）

６号集石から約 18 ｍ南西に位置する。第１検出面より約 90 ㎝下方で検出されている。

土坑は、長径 131 ㎝･短径 123 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 27 ㎝である。第１検出面から底部までの深さは、約 120 ㎝となる。中心部が深くなるすり鉢形となっており、底部から湾曲しながら上方へと立ち上がる。土坑内からは、総点数 1226 点・総重量 79 ㎏の被熱した礫が出土している。礫は土坑の上方に密集し、底部付近ではやや疎らな状態となっている。埋土は、地山に近似するややくすんだ黄褐色土の単層である。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度であり、炭化材と呼べるほど形状の残るものは出土していない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9640 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

11 号集石（図 143・145、図版 33）

10 号炉穴から約６ｍ南に位置する。第１検出面より約 40 ㎝下方で検出されている。中・近世の遺構により、西側の一部が失われている。

土坑は楕円形で、長径 200 ㎝･短径 150 ㎝と大型である。検出面から最深部までの深さは 22 ㎝と浅い。第１検出面から底部までの深さは約 60 ㎝となっている。やや凹凸のある底部から緩やかに立ち上がる。土坑内からは、総点数 2982 点・総重量 152 ㎏の礫が出土している。５～ 10 ㎝程の小礫が大半で、底部まで詰まった状態になっている。埋土は石の隙間に入る程度である。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度であり、多少大きめのものもあるが、炭化材と呼べるほど形状の残るものは出土していない。採取された炭化物２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9550 ± 50 yrBP と 9540 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

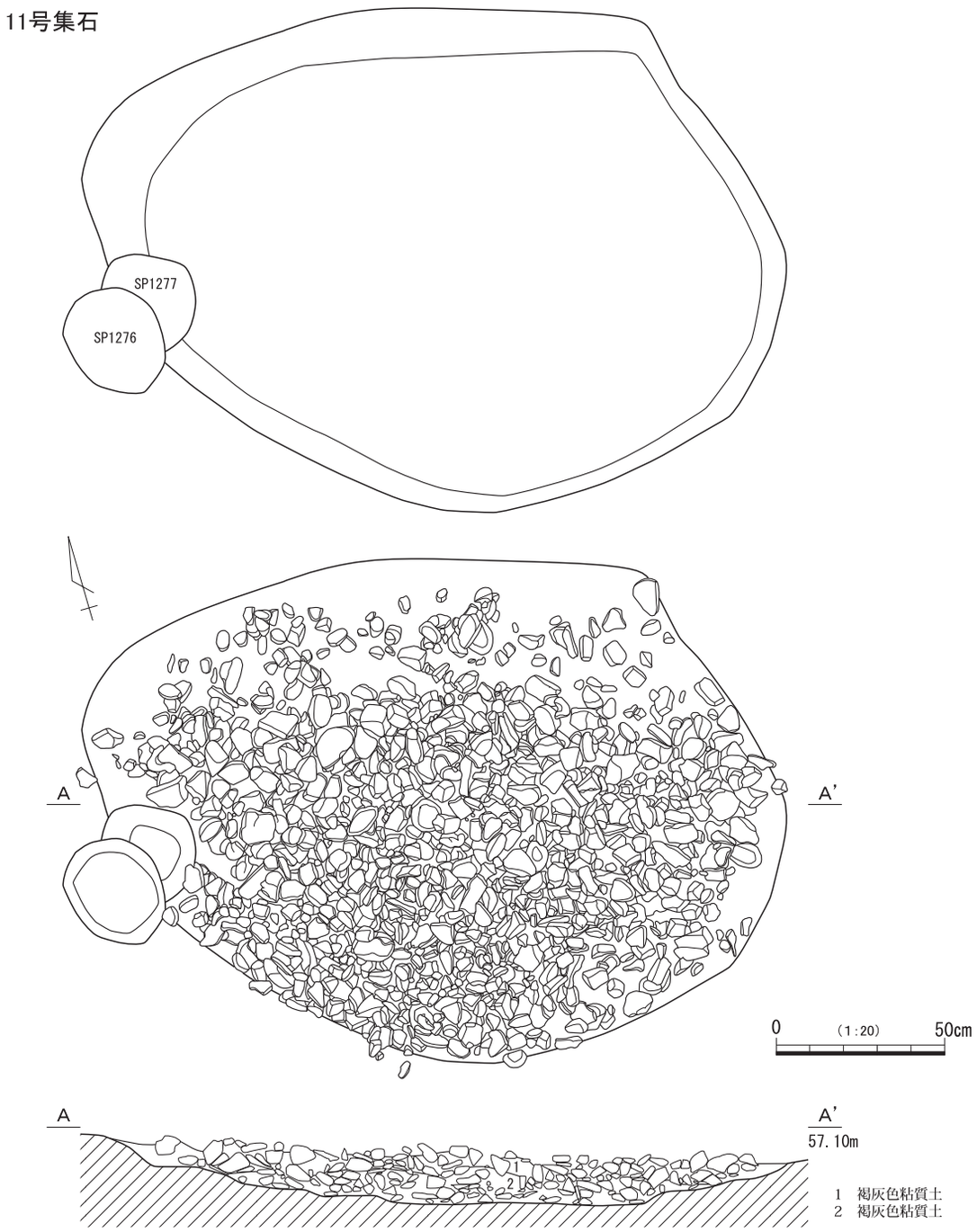


図 145　11 号集石実測図

12 号集石（図 143・146、図版 33）

11 号集石から約 6 m東に位置する。第 1 検出面より約 120 ㎝下方で検出されている。

土坑は、直径 135 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 10 ㎝と浅い。第 1 検出面から底部までの深さは、約 130 ㎝となっている。やや凹凸のある底部から、緩やかに立ち上がる。土坑内からは、総点数 1448 点･総重量 70 kgの礫が出土している。5 ～ 10 ㎝程の小礫が大半となっている。埋土は大きく 2 層に分けられているが、第 2 層の赤褐色土は焼土である可能性が高い。

炭化物は、埋土中に細片が混じる程度で炭化材は出土していない。埋土中から採取された炭化物のＣ 14 年代測定を行っており、9390 ± 50 yrBP という結果が得られている。遺物は出土していない。

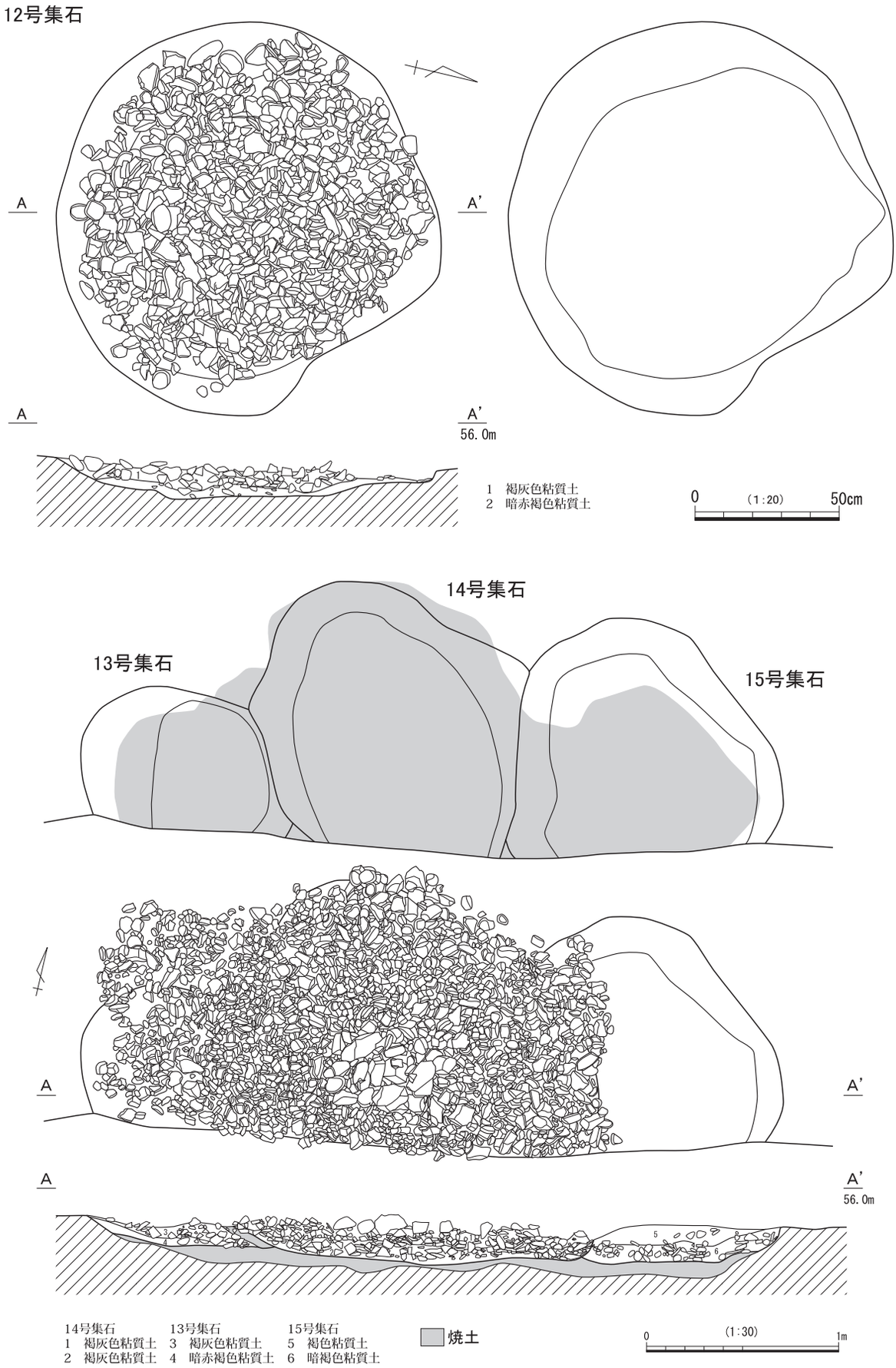


図 146　12 ～ 15 号集石実測図

13・14・15 号集石（図 143・146）

12 号集石から約 7 m南東に位置する。第 1 検出面より約 80 ㎝下方で、3 基が連続する状態で検出されている。南半はトレンチにより失われている。

13 号集石は、14 号集石により東側を失っており、全体の規模や形状は判然としない。検出面から最深部までの深さは 12 ㎝である。西側は底部から緩やかに立ち上がっている。土坑内からは、総点数 1255 点・総重量 29 kgの礫が出土しており、ほとんどが 5 ～ 10 ㎝程の小礫である。

14 号集石は、13・15 号集石を切る形で築かれている。土坑は、短径 150 ㎝・長径 160 ㎝以上の楕円形と推定される。検出面から最深部までの深さは 22 ㎝である。底部から湾曲しながら立ち上がる。土坑内からは、総点数 9183 点・総重量 447 kgと多量の被熱した礫が出土している。5 ～ 10 ㎝程の小礫が大半であるが、上面の中心付近には 40 ㎝程の大型の礫も確認される。

15 号炉穴は、14 号炉穴によって西側を失っている。土坑の規模は判然としないが、形状はおそらく楕円形であろう。やや凹凸のある底部から湾曲しながら立ち上がる。検出面から最深部までの深さは 20 ㎝となっている。土坑内からは、総点数 1576 点・総重量 87 kgの被熱した礫が出土している。礫は一部だけが図化されているが、実際は土坑の全体から出土している。

埋土はいずれも単層で、炉穴による差はほとんどなく、礫の入り方や焼土面によって区別できる程度である。13・14 号集石は検出面から底部まで礫が詰まっているが、15 号集石では上層に礫の少ない状態が確認できる。いずれの集石にも、底部から壁面にかけて焼土面が検出されている。

炭化物は、13・14 号集石では埋土中に細片が混じる程度であるが、15 号集石では底部から炭化材が数点出土している。13・14 号集石の埋土中から採取された炭化物各 1 点、15 号集石の底部で採取された炭化材 2 点についてC 14 年代測定を行っている。13 号集石の炭化物は 9550 ± 50 yrBP、14 号集石の炭化物は 9620 ± 50 yrBP、15 号集石の炭化材は 9550 ± 50 yrBP と 9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

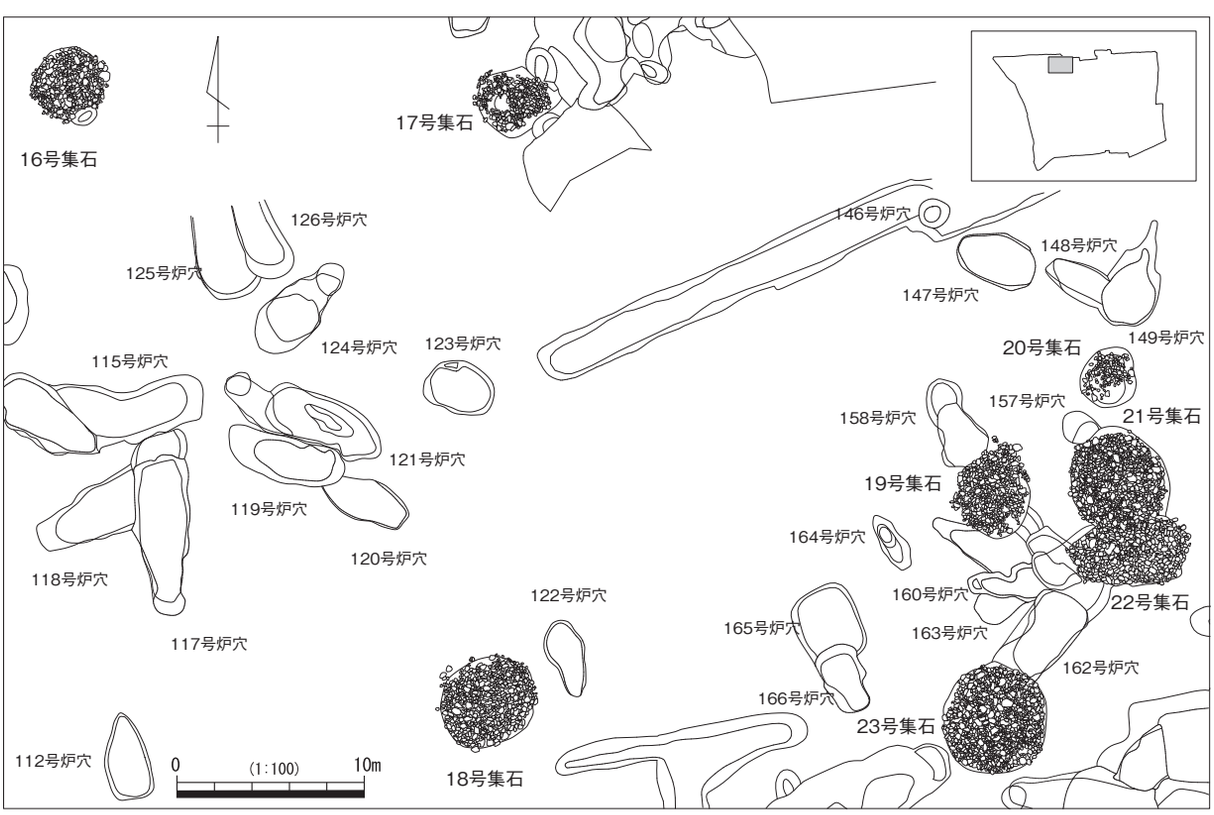


図 147　16 ～ 23 号集石配置図

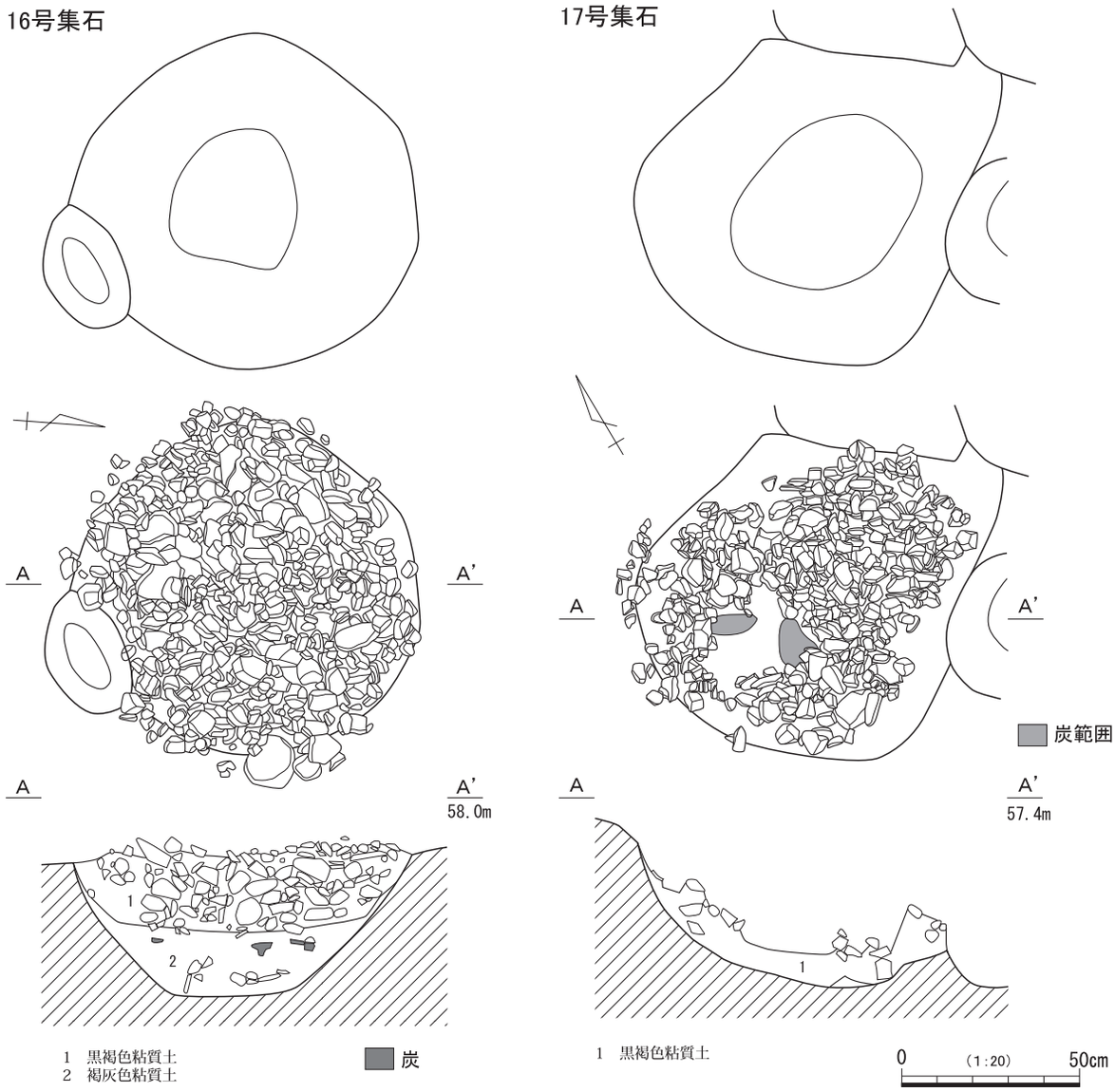


図 148　16・17 号集石実測図

16 号集石（図 147・148、図版 35）

１号炉穴から約９ｍ東側に位置する。第１検出面で検出されており、中・近世の遺構により南側の一部が失われている。

土坑は、長径 100 ㎝・短径 94 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 40 ㎝となっている。底面から斜めに広がるように立ち上がる。土坑内からは、総点数 2646 点・総重量 128 ㎏の礫が出土している。５～ 10 ㎝程の小礫が大半となっている。埋土は大きく２層に分けられているが、基本的にはいずれも地山に近似するややくすんだ黄褐色土である。礫は主に上層（第１層）から出土しており、下層（第２層）には少量含まれている程度である。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、細片が土に混じるほか、下層（第２層）の上面付近から炭化材がいくつか出土している。採取された炭化材２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9630 ± 50 yrBP と 9530 ± 50 yrBP という結果が得られている。遺物としては、埋土から黒曜石の剥片が２点出土しているのみである。

17 号集石（図 147・148、図版 35）

16 号炉穴から約 6 m東に位置する。第 1 検出面で検出されており、部分的に中・近世の遺構や攪乱などにより失われている。図化されている礫は主に底部付近のものであるが、上面には礫が少なく土が堆積していたようである。

土坑は、直径 90 ㎝前後のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 43 ㎝となっている。底部から湾曲しながら立ち上がる。土坑内からは、総点数 1020 点・総重量 33 kgの被熱した礫が出土しており、そのほとんどが 5 ～ 10 ㎝程度の小礫となっている。埋土は単層となっているが、前述のように主に礫が入っているのは底部付近であり、上層には礫をほとんど含まない土が堆積していた。

炭化物は、埋土に混じって細片が出土している程度であり、炭化材と呼べるような形の残るものは出土していない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9670 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

18 号集石（図 147・149、図版 35）

17 号集石から約 8 m南に位置する。ほとんどが第 1 検出面で検出されているが、調査区の境に位置しており、南側の一部は検出できないまま失われてしまっている。

土坑は、直径 134 ㎝前後の円形と推定される。検出面から最深部までの深さは 22 ㎝である。底部からやや湾曲しながら斜めに立ち上がる。土坑内からは、総点数 2227 点・総重量 159 kgの被熱した礫が出土している。礫は 5 ～ 10 ㎝程度の小礫がほとんどであるが、一部 15 ㎝程度のものも含まれている。埋土は大きく 2 層に分けられており、土坑内のほとんどに礫が詰まっているが、底部には薄い土の堆積が確認されている。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土に混じって細片が少量確認されている程度で、炭化材と呼べるような形の残るものは出土していない。土器や石器などの遺物は出土していない。

19 号集石（図 147・149、図版 32）

18 号集石から約 7 m北東に位置する。第 1 検出面で検出されており、158 号炉穴の前庭部に築かれている。158 号炉穴の床面とほぼ一致していることから、炉穴の廃絶後に前庭部の窪みを利用して築かれているものと推測される。

土坑は、長径 110 ㎝・短径 90 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 15 ㎝程と浅い。底部から斜め上方に広がる形で立ち上がる。土坑内からは、総点数 1073 点・総重量 43 kgの被熱した礫が出土している。礫は大半が 5 ～ 10 ㎝程度の小礫である。埋土は大きく 2 層に分けられており、18 号集石と同様に、底部には礫の少ない土が薄く堆積している。底面や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土に混じって細片が少量確認されている程度で、炭化材と呼べるようなものは出土していない。遺物としては、埋土から黒曜石の剥片が 1 点出土しているのみである。

20 号集石（図 147・149、図版 32）

19 号集石から約 2 m北東に位置する。第 1 検出面で検出されている。南半の礫が図化されていないが、調査年次が異なっており集石と認識しないまま除去されてしまったようである。

土坑は、直径 78 ㎝程と小型のややいびつな円形である。検出面から最深部までの深さは 22 ㎝となっている。底部から湾曲しながら立ち上がる。除去されてしまった南半の礫を除き、土坑内からは、総点数 472 点・総重量 18 kgの被熱した礫が出土している。実際にはこの 2 倍程度の礫が入っていたものと

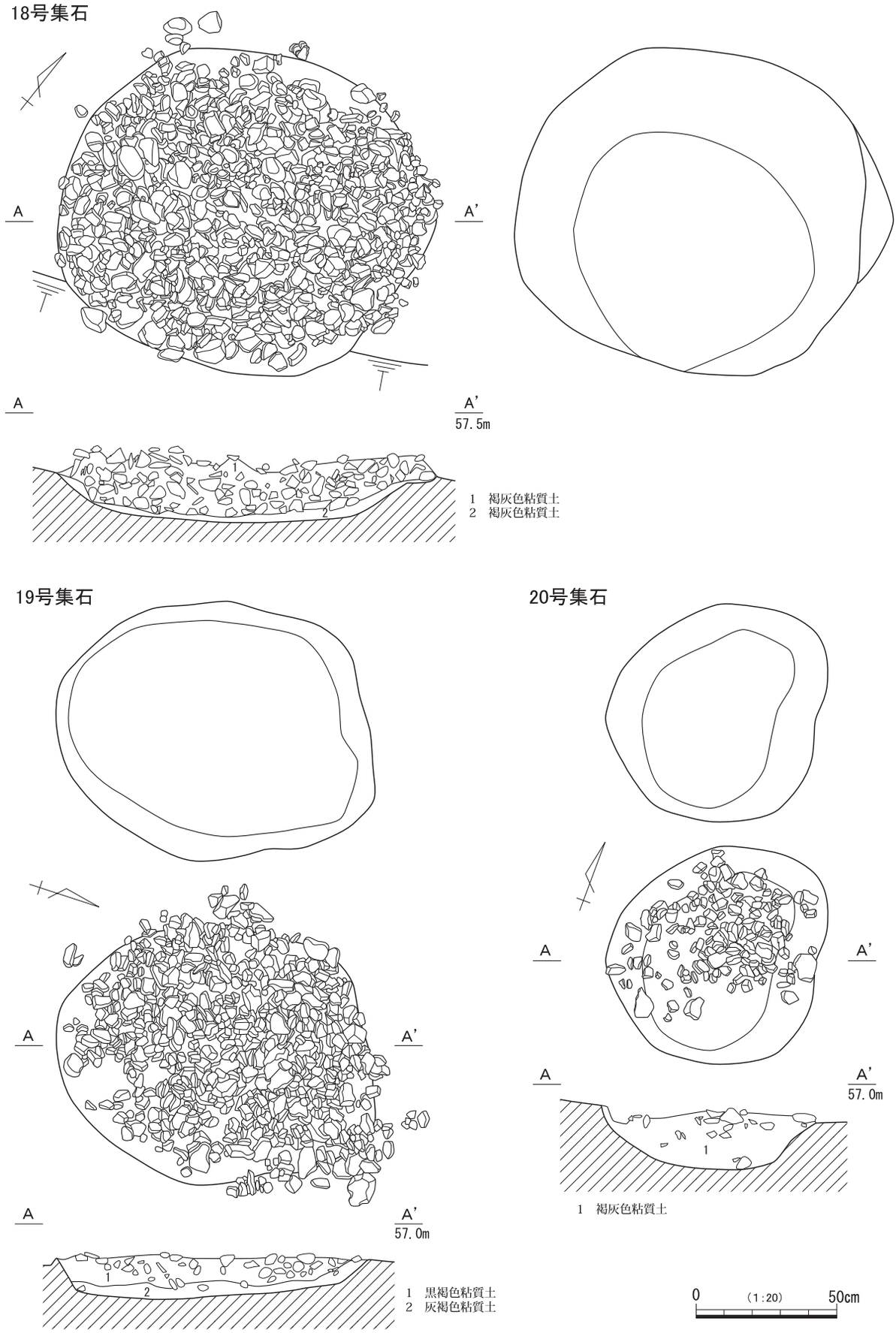


図 149　18 ～ 20 号集石実測図

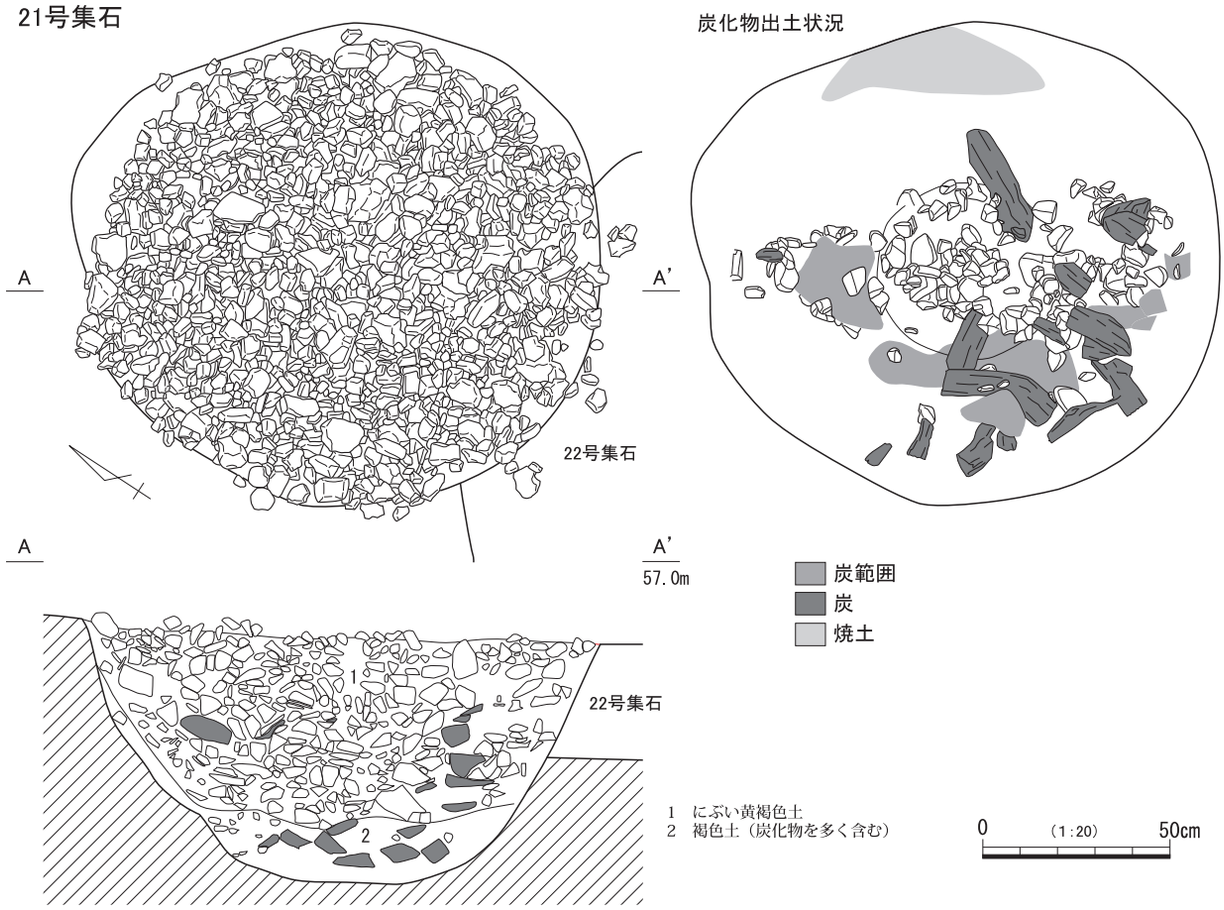


図 150　21 号集石実測図

推定される。礫は５㎝程度の小礫がほとんどで、一部 10 ㎝程度の大きさのものを含んでいる。埋土は単層で、他の集石に比べて礫が少なく、埋土中に疎らに入るような状態となっている。底面や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、埋土中に細片がわずかに混じる程度であり、炭化材は確認されていない。土器や石器などの遺物は出土していない。

21 号集石（図 147・150、図版 32）

20 号集石から約 0.5 m南に位置する。第１検出面で検出されており、157 号炉穴を切っている。また、22 号集石とも重複しており、22 号集石より先行することが確かめられている。

土坑は、長径 130 ㎝・短径 125 ㎝のややいびつな円形である。検出面から最深部までの深さは 66 ㎝である。底部から湾曲しながら立ち上がる。土坑内からは、総点数 9212 点・総重量 472 kgと大量の被熱した礫が出土している。礫は大半が５～ 10 ㎝程度の小礫であるが、15 ㎝程度のやや大型の礫も混じっている。埋土は大きく２層に分けられており、主に礫が入るのは上層（第１層）である。壁面の一部に赤化した焼土面が確認されている。

炭化物は、埋土中に細片が含まれるほか、炭化材も出土している。炭化材は、礫の間にも一部確認されるが、主に下層（第２層）の上面付近から出土している。採取された炭化材２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9510 ± 50 yrBP と 9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。遺物としては、礫に混じってシルト岩の剥片が１点出土しているのみである。

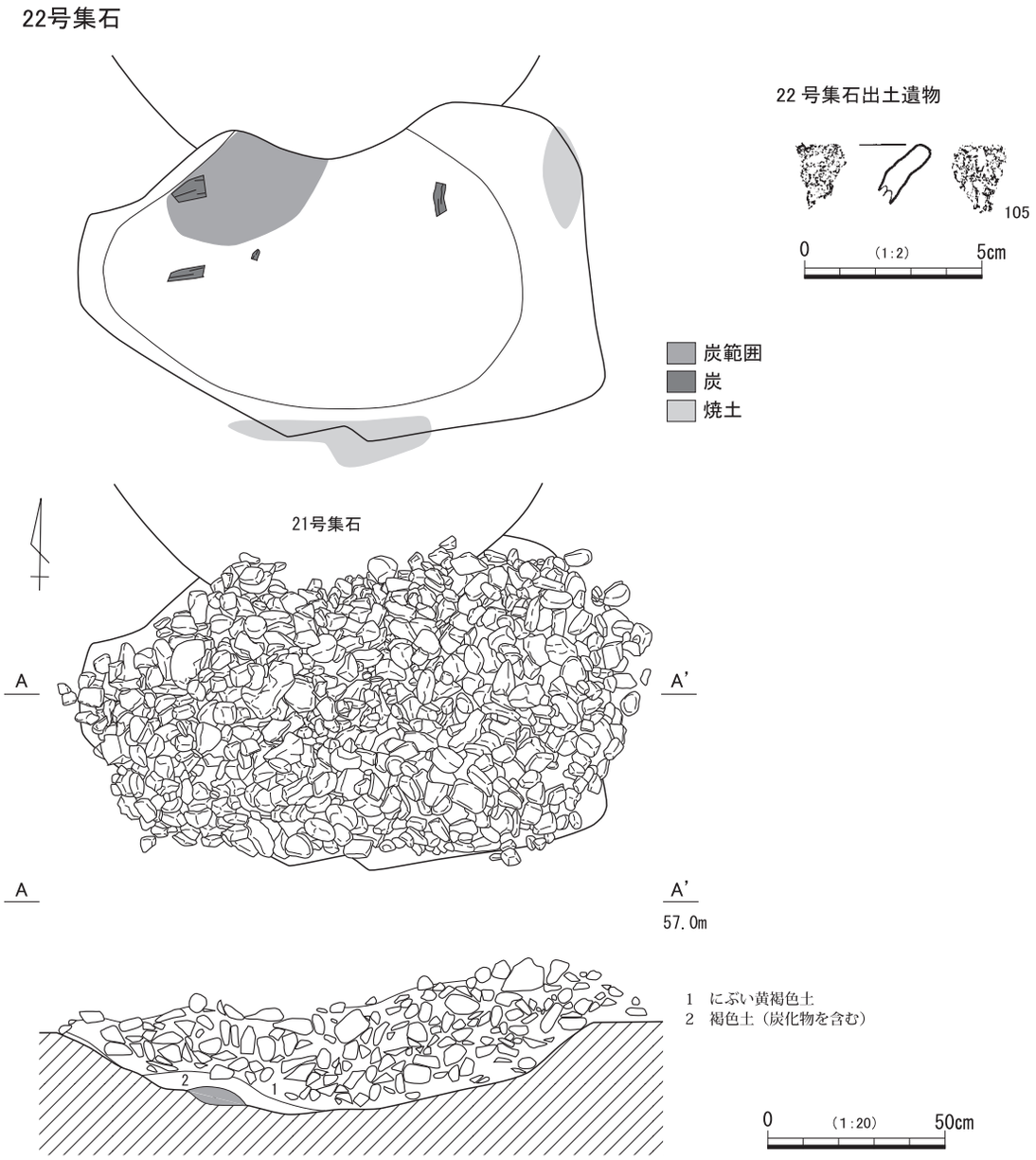


図 151　22 号集石実測図・出土遺物

22 号集石（図 147・151、図版 32・43）

21 号炉穴の南側に接している。21 号炉穴とともに第 1 検出面で検出されており、21 号炉穴に先行して築かれていることが確認されている。

土坑は、長径 145 ㎝・短径 90 ㎝程度の楕円形と推測される。検出面から最深部までの深さは 30 ㎝である。やや凹凸のある底部から緩やかに立ち上がる。土坑内からは、総点数 1966 点・総重量 126 kgの被熱した礫が出土している。礫はほとんどが５～ 10 ㎝程度の小礫である。埋土は大きく２層に分けられており、底部の一部に礫のほとんど入らない土の堆積が確認されている。壁面の上半の一部には、赤化した焼土が検出されている。

炭化物は、埋土中に細片が含まれるほか、底部には細片が集中する部分が検出され、少量ではあるが炭化材も出土している。底部から採取された炭化材についてＣ 14 年代測定を行っており、9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。

遺物としては、埋土から縄文土器が１点出土している。105 は口縁部の破片であり、外面にはＬ撚糸文が施されている。内面にも文様らしきものが確認されるが、磨滅が著しく判然としない。

23 号集石（図 147・152、図版 32・43）

22 号集石から約３ｍ南西に位置する。第１検出面で検出されている。

土坑は、直径 140 ㎝の円形であり、検出面から最深部までの深さは 40 ㎝となっている。底部からやや湾曲しながら立ち上がる。土坑内からは、総点数 7032 点・総重量 355 ㎏の被熱した礫が出土している。礫は大半が５～ 10 ㎝程度の小礫であるが、15 ㎝程度のやや大型の礫も混じっている。埋土は大きく２層に分けられており、主に礫が入るのは上層（第１層）である。壁面の一部に赤化した焼土面が確認されている。

炭化物は、埋土中に細片が含まれるほか、炭化材も出土している。炭化材は、主に下層（第２層）の上面付近から出土しており、その周辺には細片も集中していた。

遺物としては、縄文土器２点とシルト岩の剥片が１点出土している。106・107 は胴部の破片であり、外面にはＲＬ縄文が施されている。いずれも埋土から出土している。

24 号集石（図 153・154）

23 号集石から約７ｍ南東に位置する。第１検出面で検出されている。位置としては、181 号炉穴の前庭部上面にあたる。検出面が異なっているため判然としない部分もあるが、炉穴の廃絶後にその窪みを利用して築かれたものと推測される。確認調査において半分程度の深さまで掘られているため、図化されている礫は少ないが、本来は全面に詰まっていたようである。

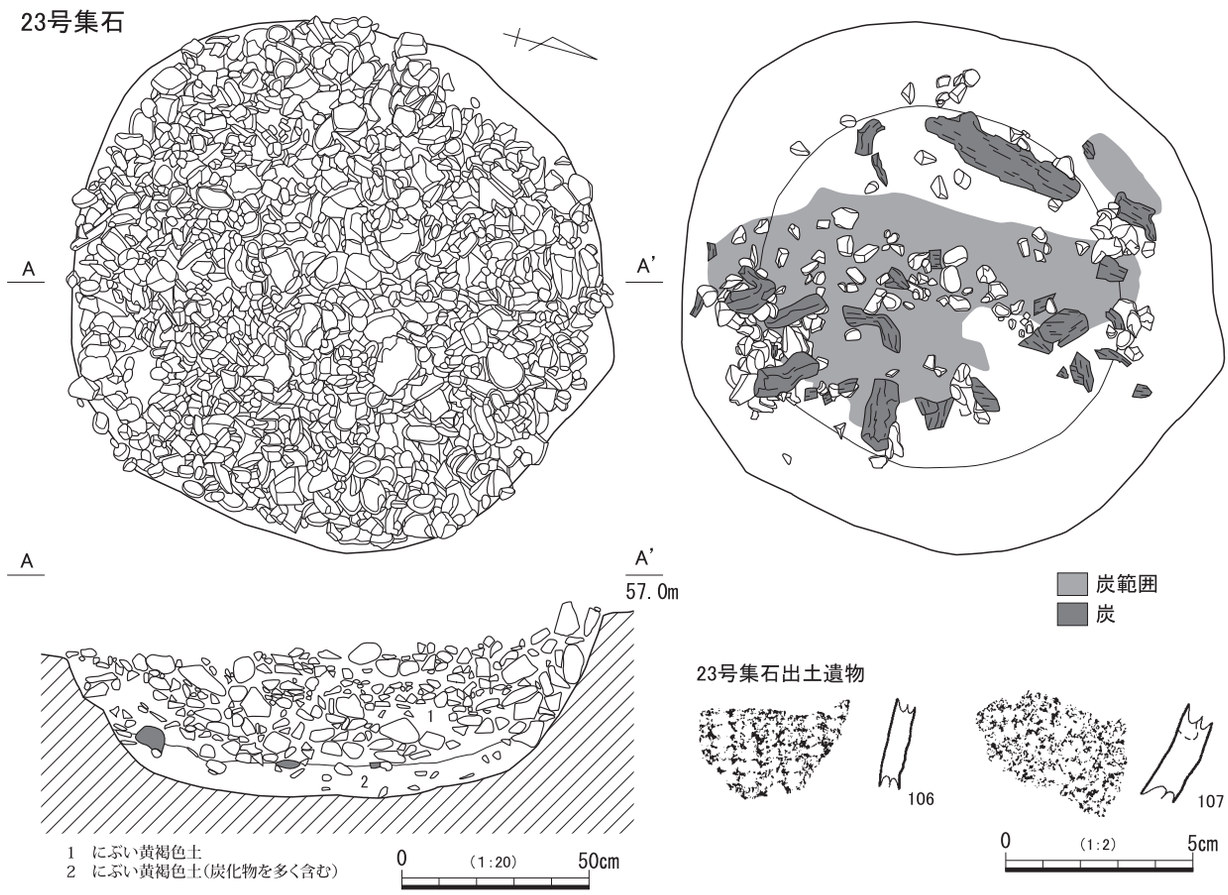


図 152　23 号集石実測図・出土遺物

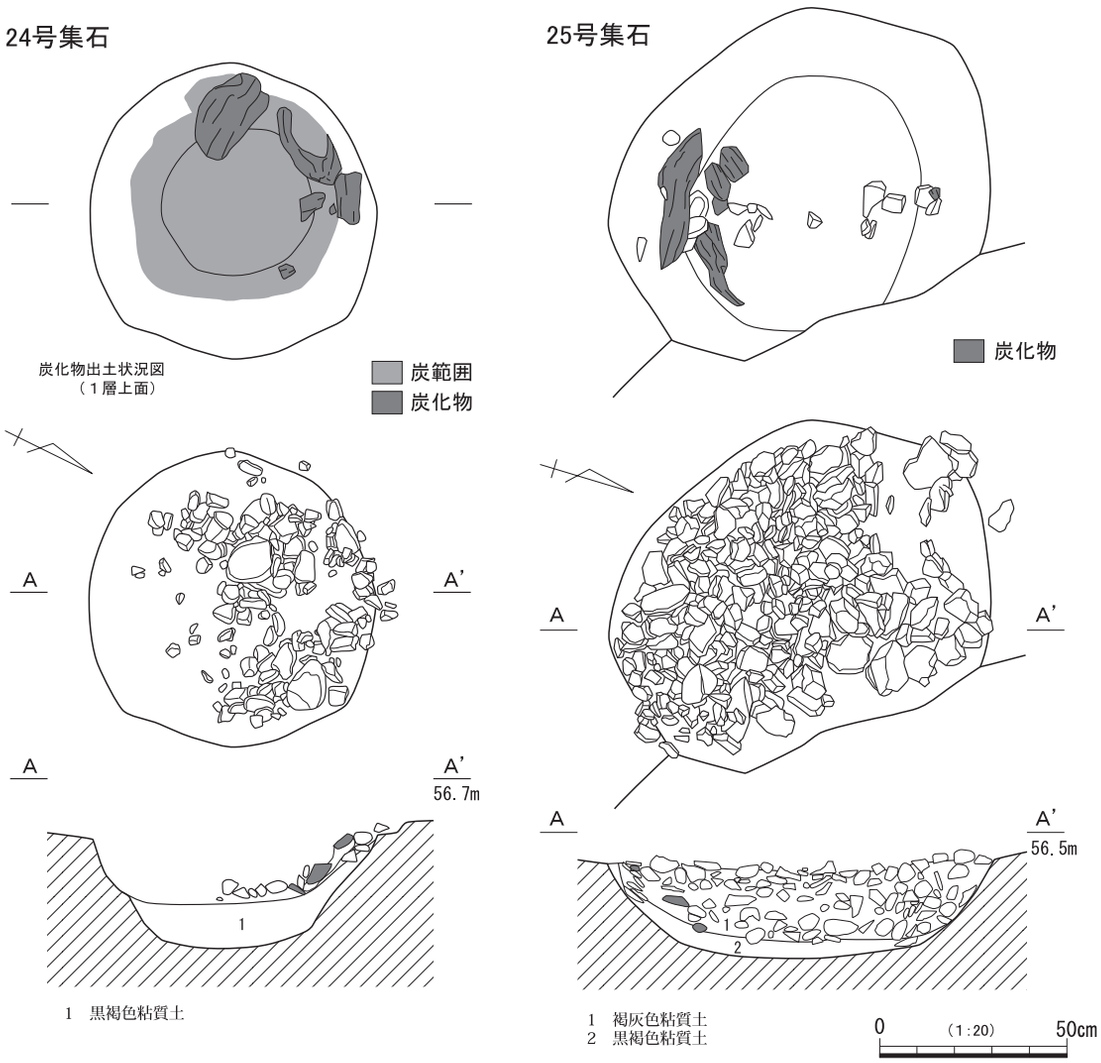


図 153　24・25 号集石実測図

土坑は、長径 78 ㎝・短径 72 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 30 ㎝となっている。底部から上へ広がる形で立ち上がる。一部しか残らないが、土坑内からは総点数 570 点・総重量 23 kgの被熱した礫が出土している。５㎝程度の小礫が多く、一部 10 ㎝程度の礫が認められる。上半がすでに掘られているため、確認できた埋土は底部付近の第１層のみである。第１層には、礫がほとんど含まれていない。底部や壁面に焼土などの被熱の痕跡は確認されない。

炭化物は第１層の上面で集中して検出されており、一部炭化材も出土している。採取された炭化材２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9580 ± 50 yrBP と 9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

25 号集石（図 153・154）

24 号集石から約４ｍ東に位置する。第１検出面で検出されており、東側は攪乱により失われている。175 号炉穴の廃絶後に、前庭部付近にできた窪みを掘り直す形で築かれている。

土坑は、東側が失われているが、100 ㎝前後の径の円形または楕円形と推測される。検出面から最深部までの深さは 24 ㎝である。底部から湾曲しながら上方へ立ち上がる。土坑内からは総点数 1504 点・総重量 109 kgの被熱した礫が出土している。５～ 10 ㎝程度の大きさの礫が主体となるが、10 ㎝程度の

やや大きめの礫が多い傾向にある。埋土は大きく２層に分けられており、底部には礫をほとんど含まない層（第２層）が薄く堆積している。底部や壁面に、焼土面などの被熱の痕跡は確認されない。

炭化物としては、礫の隙間に細片が混じっているほか、第２層の上面付近において炭化材もいくつか確認されている。採取された炭化材についてＣ 14 年代測定を行っており、9470 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

26 号集石（図 154・155、図版 32・43）

25 号集石から約４ｍ南東に位置する。第１検出面で検出されており、南側はトレンチによって失われている。

土坑は、長径 160 ㎝・短径 117 ㎝以上の楕円形と推定される。検出面から最深部までの深さは、60 ㎝となっている。底部から上方へ向かって大きく広がる形となっている。土坑内からは総点数 4739 点・総重量 491 ㎏という大量の被熱した礫が出土している。他の集石と同様に５～ 10 ㎝程の小礫が主体で

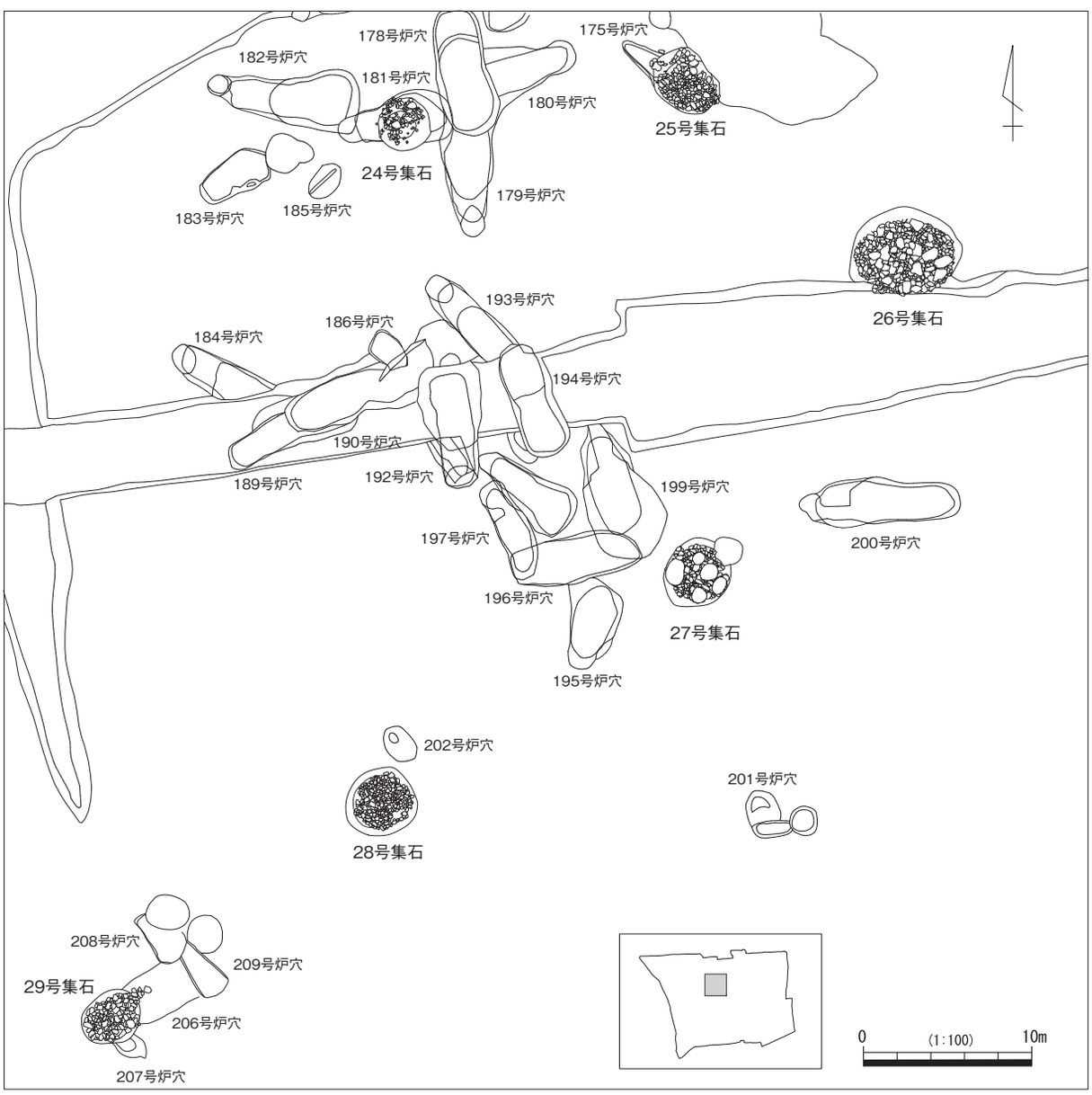


図 154　24 ～ 29 号集石配置図

はあるが、20㎝以上の大型の礫も比較的多く出土している。埋土は図化されていないが、礫の上面から検出面までは地山に近似した黄褐色土が堆積し、ほとんど礫が含まれていなかったようである。壁面の下半には焼土面が検出されている。焼土は淡い赤色で１㎝程度と薄く、被熱の度合いは強くない。

底部付近で粉末状になった炭化物が検出されており、炭化材も出土している。採取された炭化材２点についてＣ 14 年代測定を行っており、9540 ± 50 yrBP と 9480 ± 50 yrBP という結果が得られている。

遺物としては、縄文土器の破片が出土している。108 ～ 110 は胴部の破片であり、108 と 109 の外面にはＲ撚糸文、110 にはＲＬ撚糸文が施されている。いずれも、礫の上に堆積する第１層から出土している。

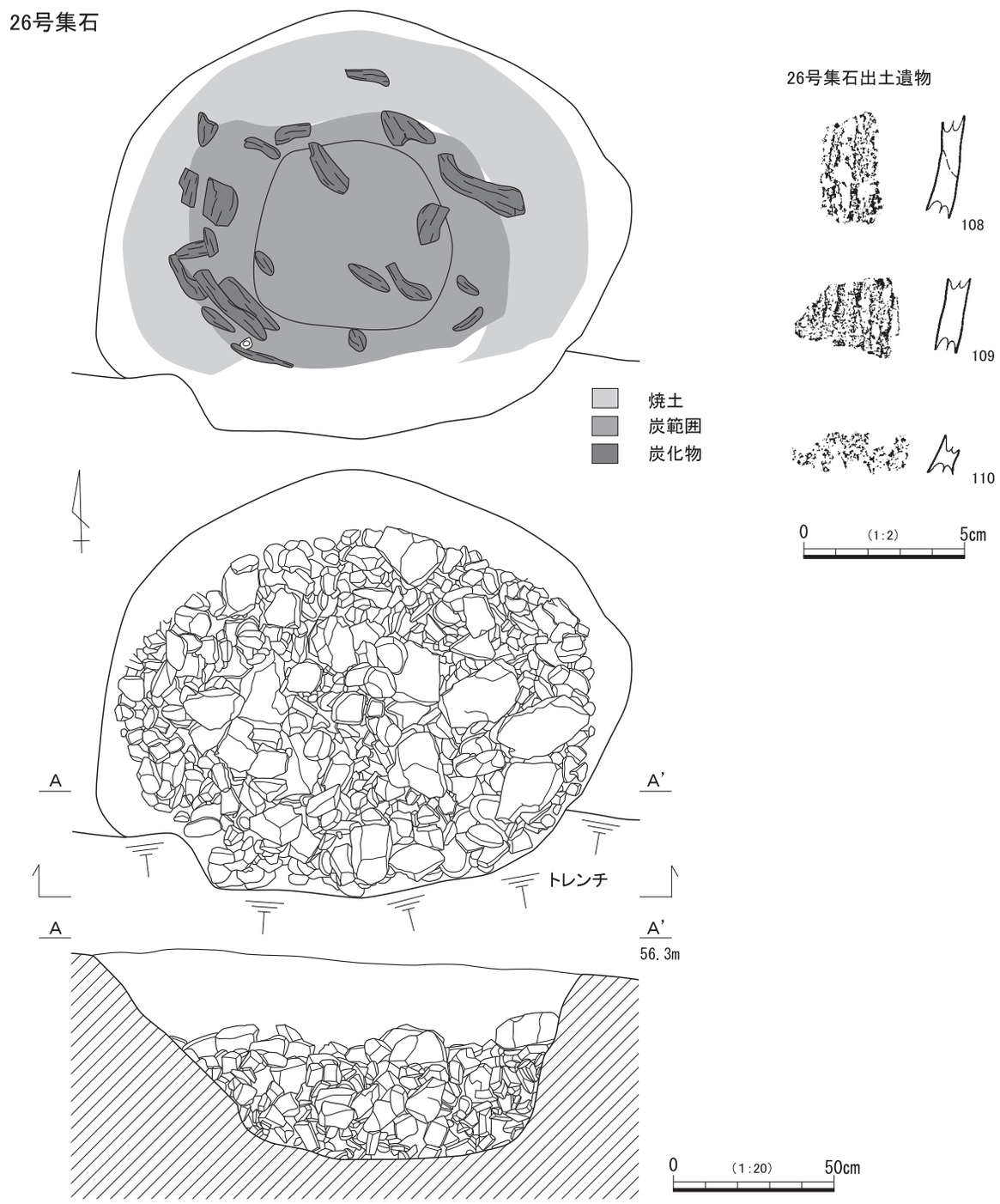


図 155　26 号集石実測図・出土遺物

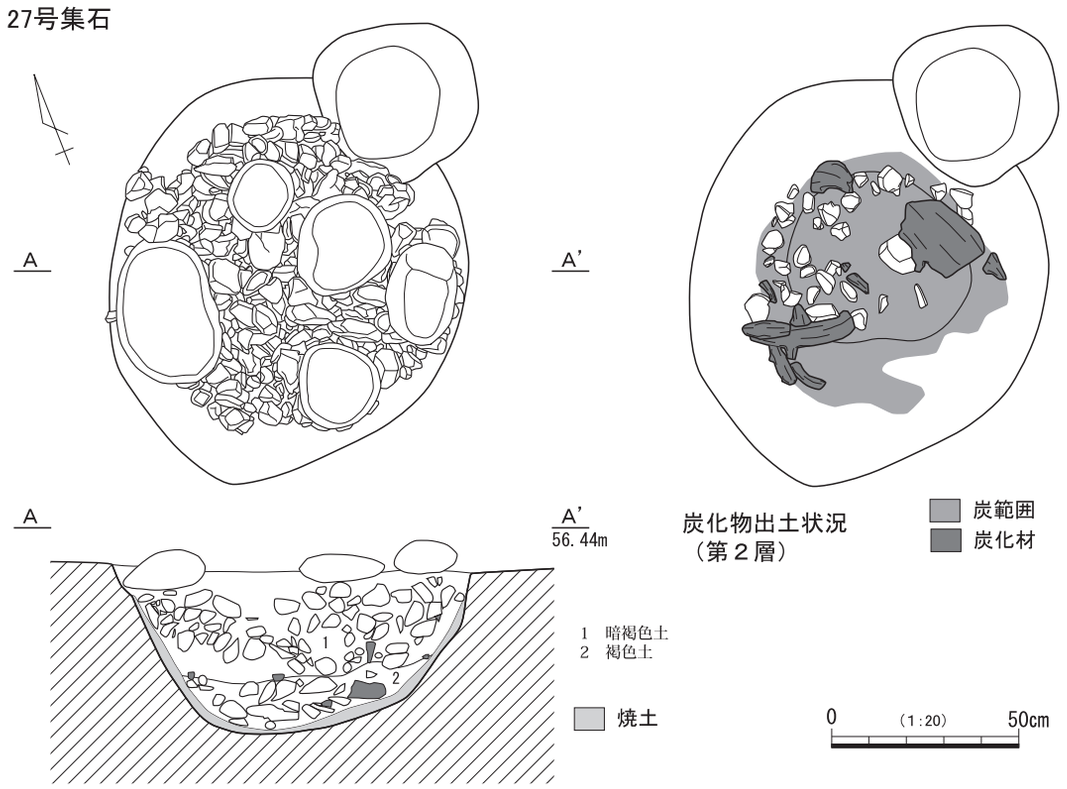


図 156　27 号集石実測図

27 号集石（図 154・156、図版 35・43）

26 号集石から約 6 m南西に位置する。第 1 検出面で検出されており、北東部は中・近世の遺構によって一部失われている。

土坑は、長径 105 cm・短径 98 cmのややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 42 cmとなっている。底部から湾曲しながら徐々に直立気味に立ち上がる。土坑内からは総点数 3116 点・総重量 188 kgの被熱した礫が出土している。５～ 10 cm程の小礫がほとんどであるが、小礫の上面には石皿 2 点を含む、20 ～ 40 cm程の大きさの扁平な礫が５個置かれた状態で出土している。他の小礫とは明らかに異なっており、意図的に置かれたものと理解される。埋土は大きく２層に分けられている。土坑の底部や壁面には、赤化した焼土面が確認されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約 4 cmとなっている。

遺物としては、石皿が２点（111・112）出土している。111 は直径 22 cmのややいびつな円形で、石材は珪質シルト岩である。112 は長径 39 cm・短径 26 cmの楕円形で、石材は花崗岩である。被熱による劣化のため、やや不明瞭になってはいるが、いずれも表面には使用による摩滅が確認できる。

炭化物は、上面で比較的多く確認されているほか、第２層からは細片とともに炭化材も出土している。採取された炭化材と埋土中の炭化物についてＣ 14 年代測定を行い、炭化材は 9560 ± 50yrBP、炭化物は 9650 ± 50 yrBP という結果が得られている。

28 号集石（図 154・158）

27 号炉穴から約 6 m南西に位置する。第 1 検出面で検出されている。

土坑は、長径 110 cm･短径 100 cmのややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 38 cmとなっている。中心部が深くなるすり鉢形となっており、底部からやや湾曲しながら上方へと立ち上がる。土坑内からは、総点数 1341 点・総重量 58 kgの被熱した礫が出土している。礫はいずれも 10 cm以下の大

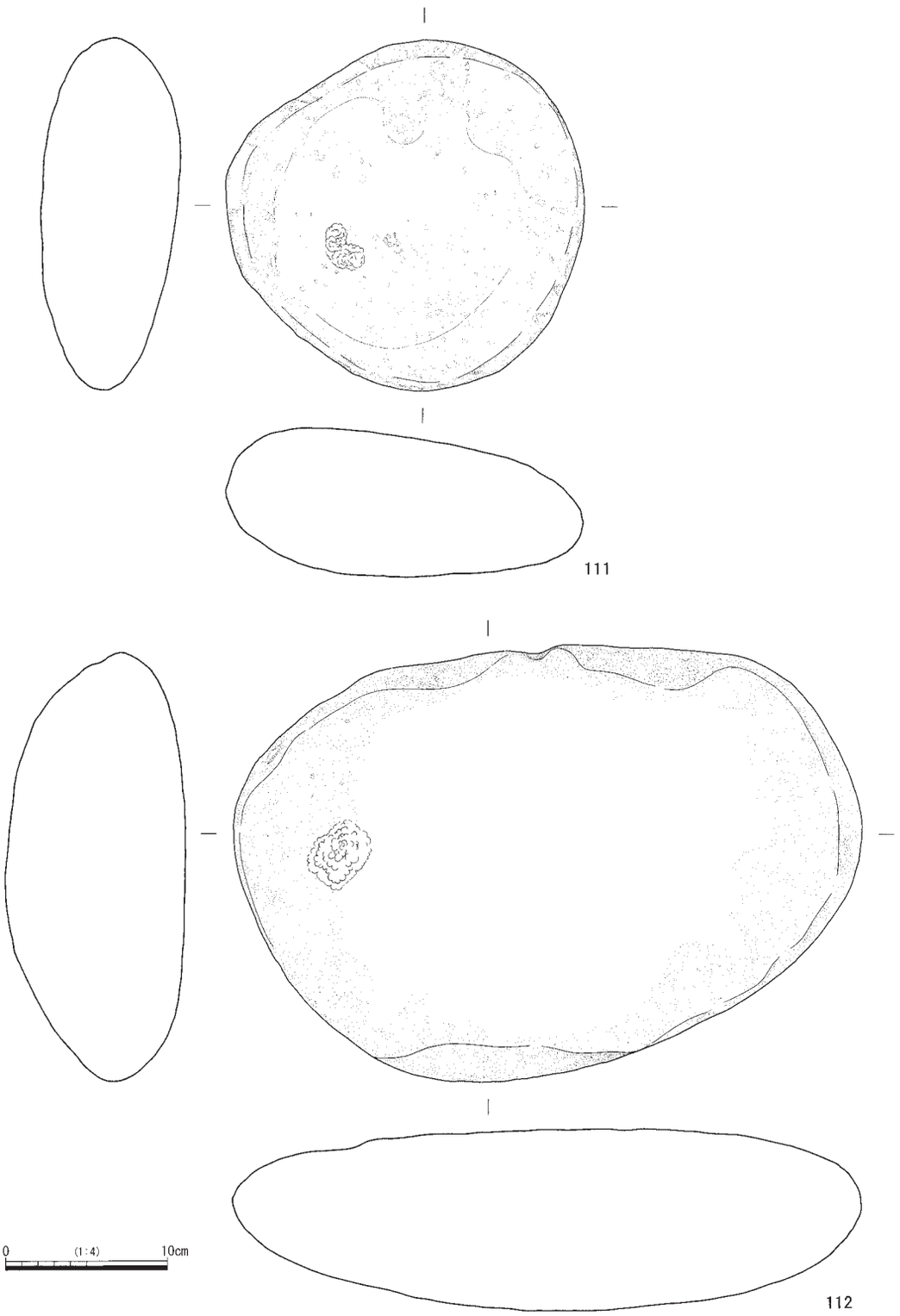


図 157　27 号集石出土遺物

きさで、特に破砕した５㎝程度の小型の角礫が目立つ。埋土は大きく３層に分けられており、下層（第２・３層）は礫をほとんど含んでいない。底部や壁面に、焼土面などの被熱の痕跡は確認されていない。

炭化物は、第２層の上面において細片が多く確認されているほか、炭化材も出土している。採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行い、9650 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

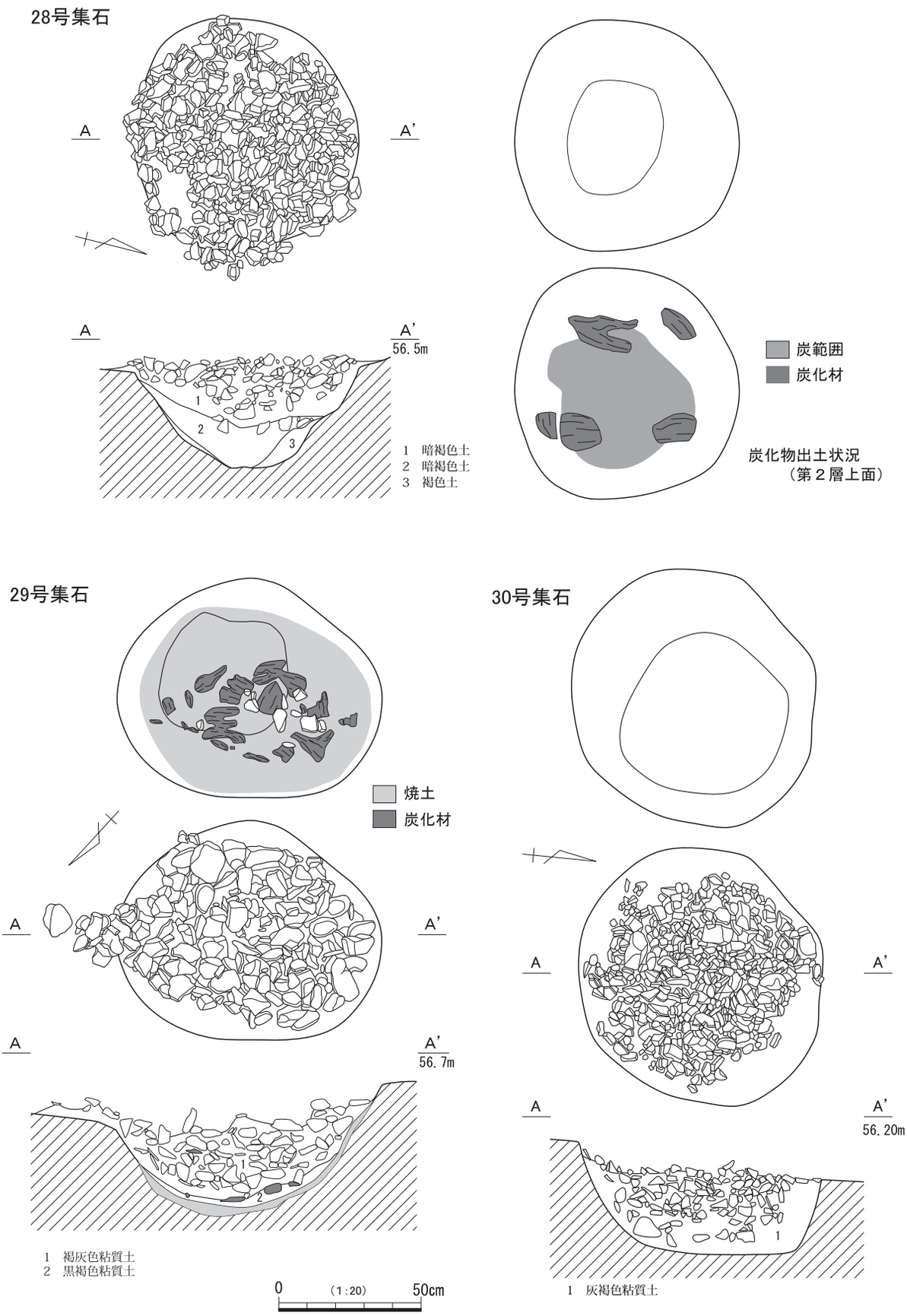


図 158　28 ～ 30 号集石実測図

29 号集石（図 154・158）

28 号炉穴から約５ｍ南西に位置する。第１検出面で検出されており、206・207 号炉穴を切っている。206 号炉穴の燃焼部直上に位置しており、奥壁部分を広げるような形で築かれていることから、炉穴の天井崩落後、埋没して浅い窪みとなった場所を掘り直して築かれたものと推測される。

土坑は、長径 115 ㎝・短径 77 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 43 ㎝となっている。底部から湾曲しながら上方へと立ち上がる。土坑内からは、総点数 1156 点・総重量 94 kgの被熱した礫が出土している。10 ～ 15 ㎝程の大きさのやや大型の礫が主体となっている。埋土は大きく２層に分けられており、底部には礫を含まない層（第２層）が薄く堆積している。底部と壁面のほぼ全面に、赤化した焼土面が検出されている。焼土の厚さは、最も厚い部分で約４㎝となっている。

炭化物は、礫の隙間などに細片が含まれるほか、第２層の上面からは炭化材も出土している。炭化材と埋土中に含まれていた炭化物について、Ｃ 14 年代測定を行っている。炭化材は 9590 ± 50 yrBP、炭化物は 9390 ± 50 yrBP という結果が得られている。遺物としては、礫に混じる形で、シルト岩製の剝片が１点出土しているのみである。

30 号集石（図 158）

26 号集石から約 10 ｍ北東に位置する。他の集石とはやや離れた位置に単独で築かれており、周辺には炉穴も確認されない。第１検出面で検出されている。

土坑は、長径 88 ㎝・短径 86 ㎝のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 30 ㎝となっている。底部からやや湾曲しながら直立気味に立ち上がる。土坑内からは、総点数 3197 点・総重量 83 kgの被熱した礫が出土している。５～ 10 ㎝程度の大きさの礫がみられるが、大半は５㎝以下の大きさの破砕した角礫である。埋土は単層とされているが、底部付近に礫をほとんど含んでいない状況が確認できる。底部や壁面に、焼土面などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は、埋土中に細片がわずかに確認できたのみであり、炭化材は出土していない。土器や石器などの遺物も出土していない。

31 号集石（図 159・161）

30 号集石から約 10 ｍ北東の、調査区北端に位置する。第１検出面で検出されている。東側に位置する 31 号集石と一体で検出されており、切り合い関係は判然としない。

土坑は、長径 133 ㎝・短径 120 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 56 ㎝となっている。平坦な底部から直立気味に立ち上がる。土坑内からは、総点数 6398 点・総重量 441 kgもの大量の被熱した礫が出土している。礫の大きさとしては、15 ㎝程のものもみられるが、大半は５～ 10 ㎝程の小型礫である。埋土は単層とされているが、底部および壁面の近くには、礫の少ない部分が確認できる。壁面の上方には、部分的に焼土面が検出されている。色調は淡い赤色であり、被熱はさほど強くなかったようである。

炭化物は、底部付近からやや集中する部分はみられたが、いずれも細片であり、炭化材と呼べるほど形状を保ったものは出土していない。埋土中から採取された炭化物についてＣ 14 年代測定を行っており、9630 ± 50 yrBP という結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

32 号集石（図 159・161）

31 号炉穴の東側に位置し、第１検出面で検出されている。先述のように、31 号炉穴と接する状態にあるが、切り合い関係についてはその有無も含めて明確でない。

土坑は、長径 104 ㎝･短径 100 ㎝の規模のややいびつな円形である。検出面から最深部までの深さは、

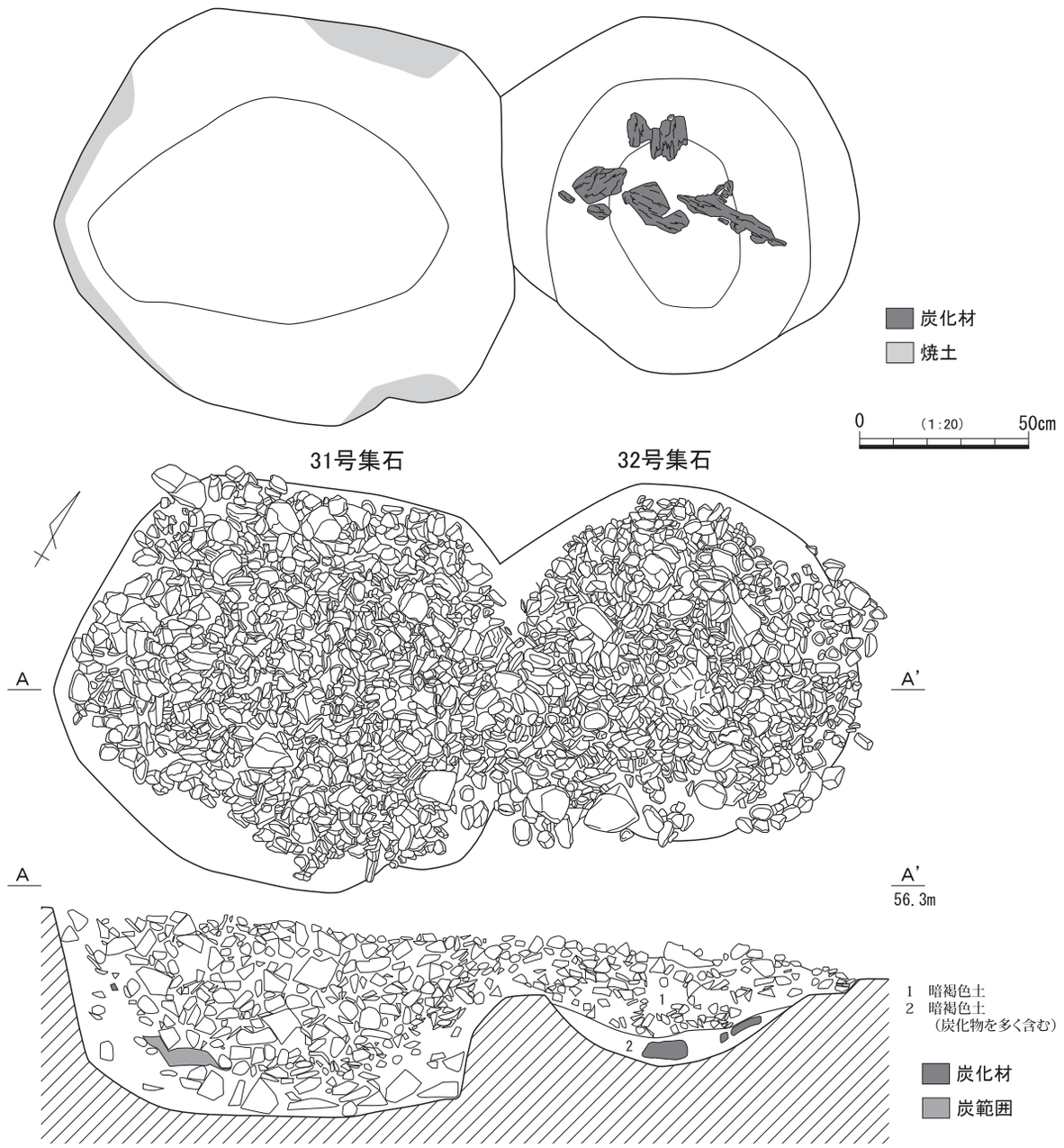


図 159　31・32 号集石実測図

37 ㎝となっている。中心部が深くなるすり鉢形となっており、底部からやや湾曲しながら斜めに立ち上がる。また上方には、幅 15 ～ 20 ㎝程の平らな面が設けられている。土坑内からは、総点数 2195 点・総重量 90 ㎏の被熱した礫が出土している。10 ～ 15 ㎝程のやや大型の礫もみられるが、大半は 5 ～ 10 ㎝程度の小型礫である。埋土は 2 層に分けられており、底部には礫をほとんど含まない部分（第 2 層）が確認されている。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は、礫の隙間などに細片が確認されており、底部からは炭化材も出土している。採取された炭化材についてＣ 14 年代測定を実施しており、9510 ± 50 yrBP という結果が得られている。

遺物としては、縄文土器の細片が 1 点出土しているのみである。細片である上に、表面の摩滅も著しく文様は明らかでない。

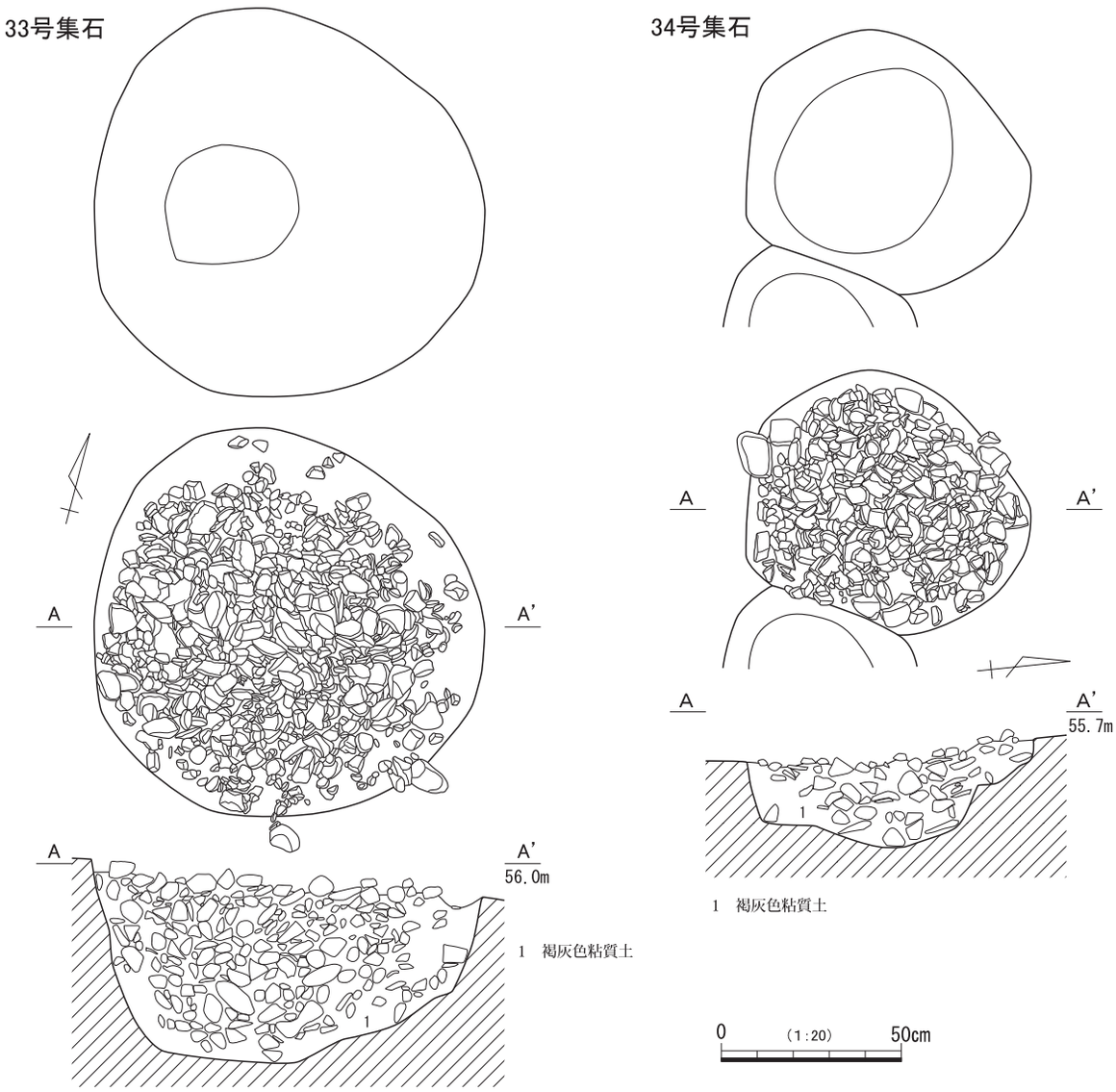


図 160　33・34 号集石実測図

33 号集石（図 160・161）

32 号炉穴の東側に隣接し、31 ～ 33 号集石が１列に並ぶような配置となっている。第１検出面で検出されている。

土坑は、直径 110 ㎝程のややいびつな円形で、検出面から最深部までの深さは 52 ㎝となっている。凹凸のある底部から直立気味に立ち上がる。土坑内からは、総点数 3514 点・総重量 215 kgの被熱した礫が出土している。礫は５～ 15 ㎝程の大きさであるが、10 ㎝程度のものがやや目立つ。埋土は単層となっているが、底部から５㎝程の高さまで礫の少ない部分があること確認できる。底部や壁面に、焼土などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は、埋土中に細片が少量含まれる程度であり、炭化材は確認されなかった。土器や石器などの遺物は出土していない。

34 号集石（図 160・161）

33 号集石から約 6 m東に位置する。第 1 検出面で検出されており、東側の一部が中・近世の遺構によって失われている。

土坑は、長径 78 ㎝・短径 71 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 26 ㎝と浅い。中心部分は一段深くなっており、壁面は直立気味に立ち上がる。土坑内からは、総点数 779 点・総重量 50 kgの被熱した礫が出土している。礫は 15 ㎝程の大きさのものも一部確認されるが、５～ 10 ㎝の小礫が主体となっている。埋土は単層で、側壁付近などには礫のまばらな部分が確認できる。底部や壁面に、焼土面などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は、細片がわずかに埋土中に含まれている程度であり、炭化材と呼べるような形状を保ったものは出土していない。土器や石器などの遺物は出土していない。

35 号集石（図 162）

調査区の南東部（５区）の南端に位置する。第 1 検出面で検出されており、南半は土留めの設置工事の際に失ってしまっている。

土坑は、残存部から直径 96 ㎝の円形と推定される。検出面から最深部までの深さは 20 ㎝と浅い。底部から湾曲しながら上方へ立ち上がる。土坑内からは、被熱した礫が出土している。礫の総点数と総重量に関しては、記録が残されていないため不明である。礫は 15 ㎝程の大きさのものも確認されるが、５～ 10 ㎝の小礫が主体となっている。上層では多くの礫が検出されているが、下層では礫がまばらとなっている。底部や壁面に、焼土面などの被熱の痕跡は検出されていない。

炭化物は、細片がわずかに埋土中に含まれている程度であり、炭化材と呼べるような形状を保ったものは出土していない。埋土中から出土したとされる炭化物についてＣ 14 年代測定を実施したが、Modern という結果となった。採取した位置や層位の記録がないため原因は不明であるが、現代の構造物とは考えにくく、試料採取の方法に何らかの問題があったものと推測される。土器や石器などの遺物は出土していない。

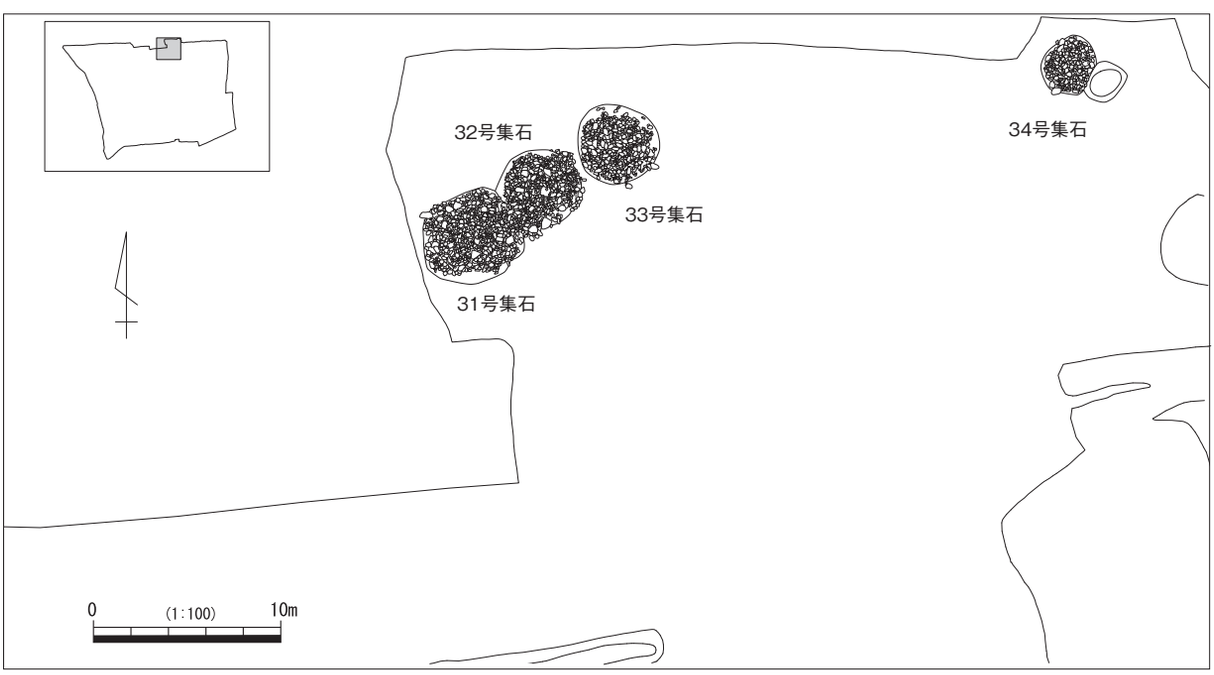


図 161　31 ～ 34 号集石配置図

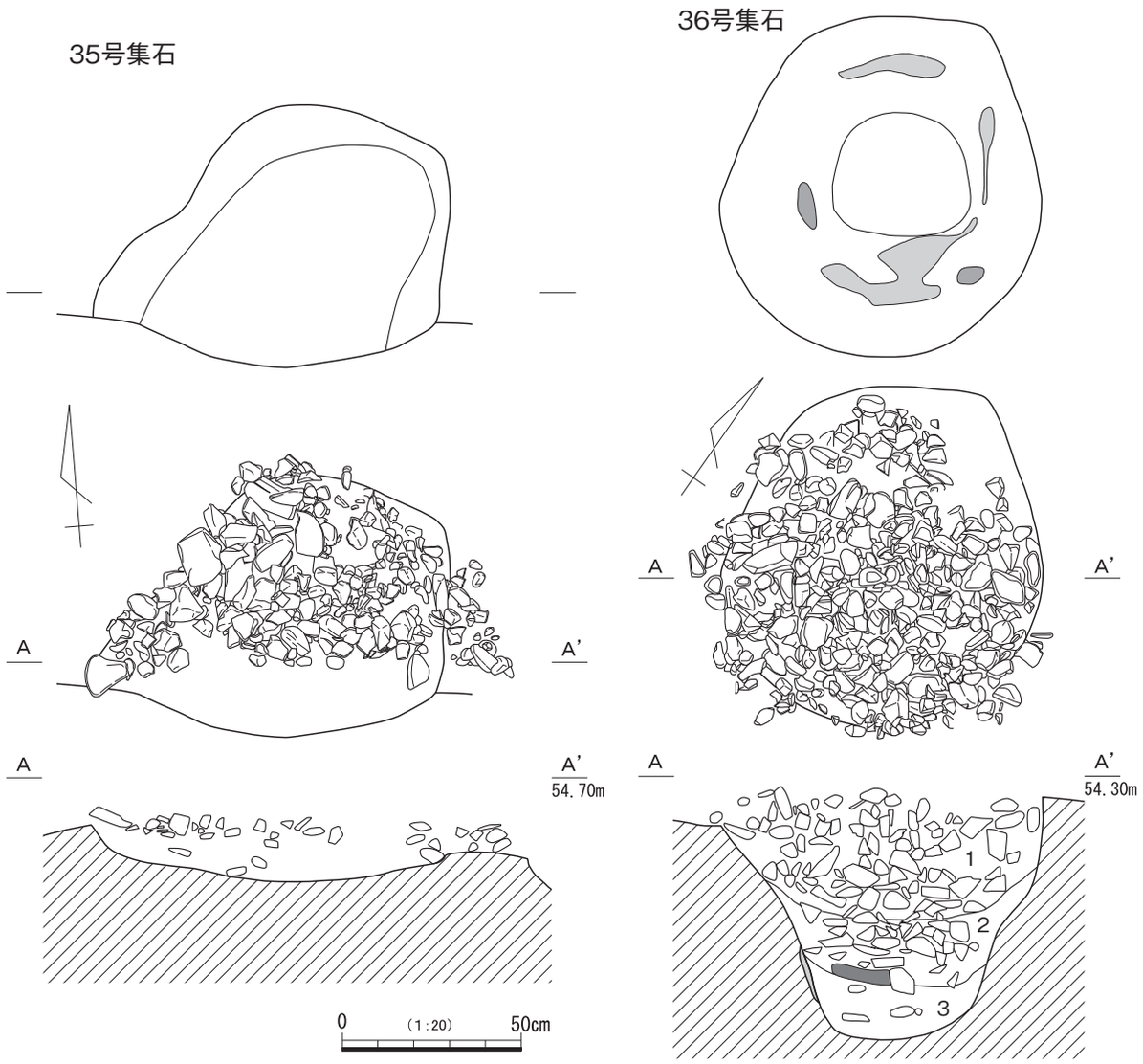


図 162　35・36 号集石実測図

36 号集石（図 162、図版 35）

35 号集石から約 19 m北東に位置する。第１検出面で検出されている。

土坑は、長径 96 ㎝・短径 90 ㎝の楕円形で、検出面から最深部までの深さは 70 ㎝となっている。底部から斜め上方へ立ち上がる。土坑内からは、被熱した礫が出土している。礫の総点数と総重量に関しては、35 号集石と同様、記録が残されていないため不明である。礫は 20 ㎝程の大きさのものまでみられるが、10 ㎝前後の大きさの礫が主体となっている。埋土は大きく３層に分けられており、最下層（第３層）には礫が少量しか含まれない。壁面の下半には、部分的に赤化した焼土面が検出されている。

炭化物は、第２層と第３層の上面で比較的集中して出土している。採取された炭化物２点についてＣ 14 年代測定を行い、9480 ± 50 yrBP と 9440 ± 50 yrBP という測定結果が得られている。土器や石器などの遺物は出土していない。

4　包含層・攪乱出土遺物

縄文土器（図 163・164、図版 38）

包含層や攪乱から、少量ではあるが縄文土器が出土している。縄文土器としては、炉穴や集石から出土している早期の土器のほかに、明確な遺構は認識されていないが中期の土器も確認される。

113 ～ 129 は早期の土器である。いずれも 3 区から出土している。128 は攪乱から出土しているが、他はすべて第 1 検出面から掘り下げる過程で出土したものである。具体的な遺構が明示できないためその他の遺物として扱うが、実際は炉穴に伴う遺物である可能性が高い。

113 ～ 124 は撚糸文土器である。113 は口縁部の破片で、口縁部は端部で大きく外反する。外面には RL 撚糸文が施されている。117 ～ 122 は胴部の破片であり、外面には RL 撚糸文が施されている。123 と 124 も胴部の破片であり、123 と 119 の外面には R 撚糸文、114 と 124 には L 撚糸文が施されている。128 は表裏縄文の胴部の破片である。外面には RL の横走縄文、内面には RL の縦走縄文が施されている。115 ～ 125 は外面に RL 縄文が施されている。115 は口縁部の破片であり、やや厚手で口縁はハの字状に広がる。120 と 125 は胴部の破片である。116 と 121 は外面に RLR 縄文が施されている。116 は口縁部の破片で、口縁は端部でわずかに外反する。126 ～ 129 は外面に組紐による施文が行われているものである。いずれも胴部の破片である。

130 ～ 142 は中期の土器である。136 は 1 区の包含層、140 は 4 区の包含層の出土である。その他は、

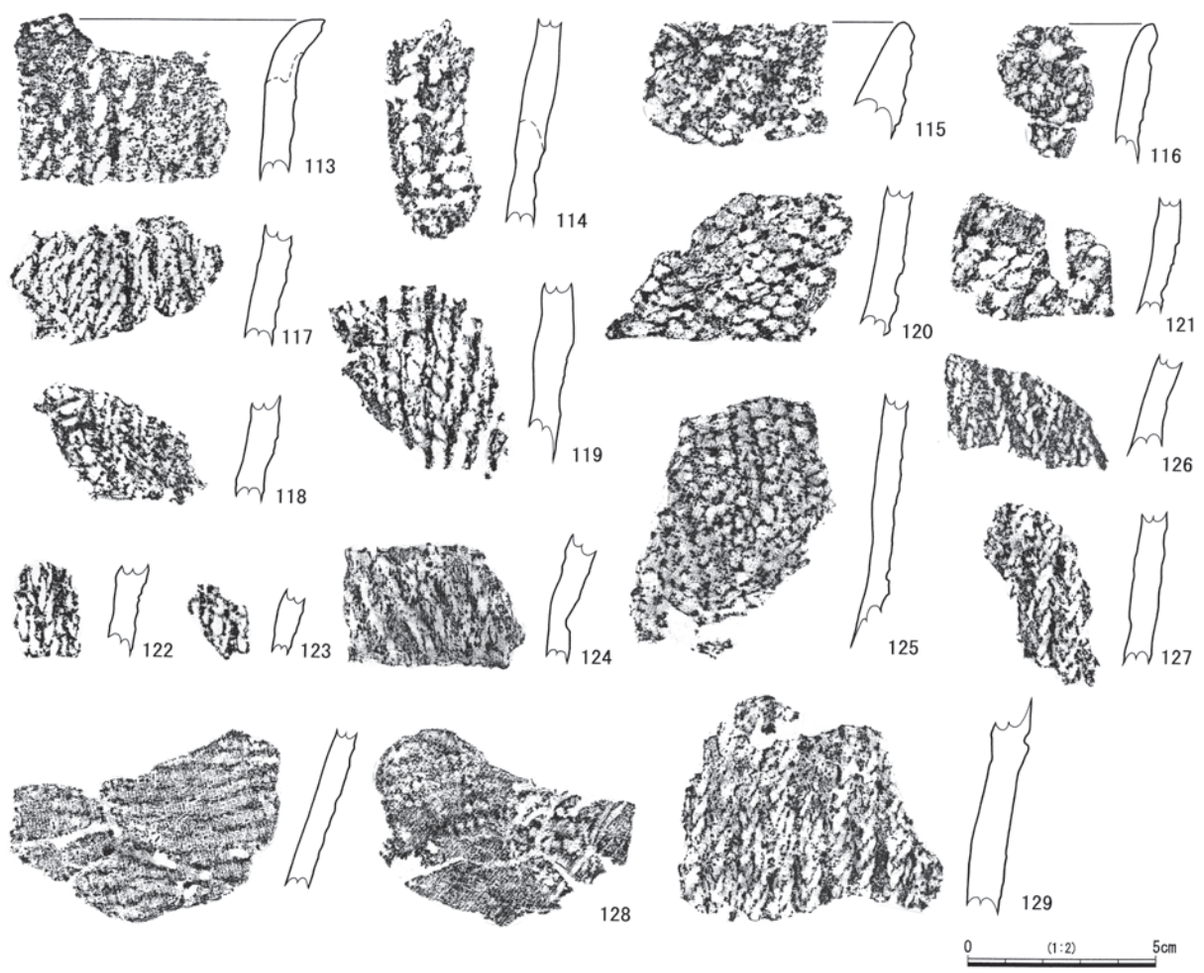


図 163　包含層・攪乱出土縄文土器（1）

いずれも３区の攪乱からの出土している。

130・131・139 は波状口縁となるものである。130・131 は比較的薄手のつくりで、隆帯には爪形文が施されている。139 は厚手のつくりであり、刺突文と単節縄文が施されている。134 と 135 は口縁部の破片であり、口縁は斜めに開く。横位に隆帯を巡らし、隆帯には爪形文が施されている。138 は口縁部の破片であり、口縁は内湾する。竹管によって横位に円形の文様を施し、隆帯の両側には刺突が施されている。141 と 142 は、五領ヶ台Ⅰ式の土器である。132 ～ 137 は沈線による施文が施されている。132 は横方向に平行沈線が施されており、口縁部は斜めに開く。133 は横方向の平行沈線と刺突が施されており、口縁端部は受口状に内湾する。136 は弧状に沈線が施されており、口縁部は直立気味である。137 は胴部の破片であり、横方向の平行沈線と縦方向の沈線が施されている。140 は胴部の破片であり、渦巻状の隆帯が施されている。

中期の土器は図示したもの以外にも、胴部の破片を中心にして 20 点程出土している。調査面積に比べると出土量は乏しく、中期の明確な遺構が確認されていないことも考慮すると、まとまった形での集落が存在したとは考えにくい状況といえる。

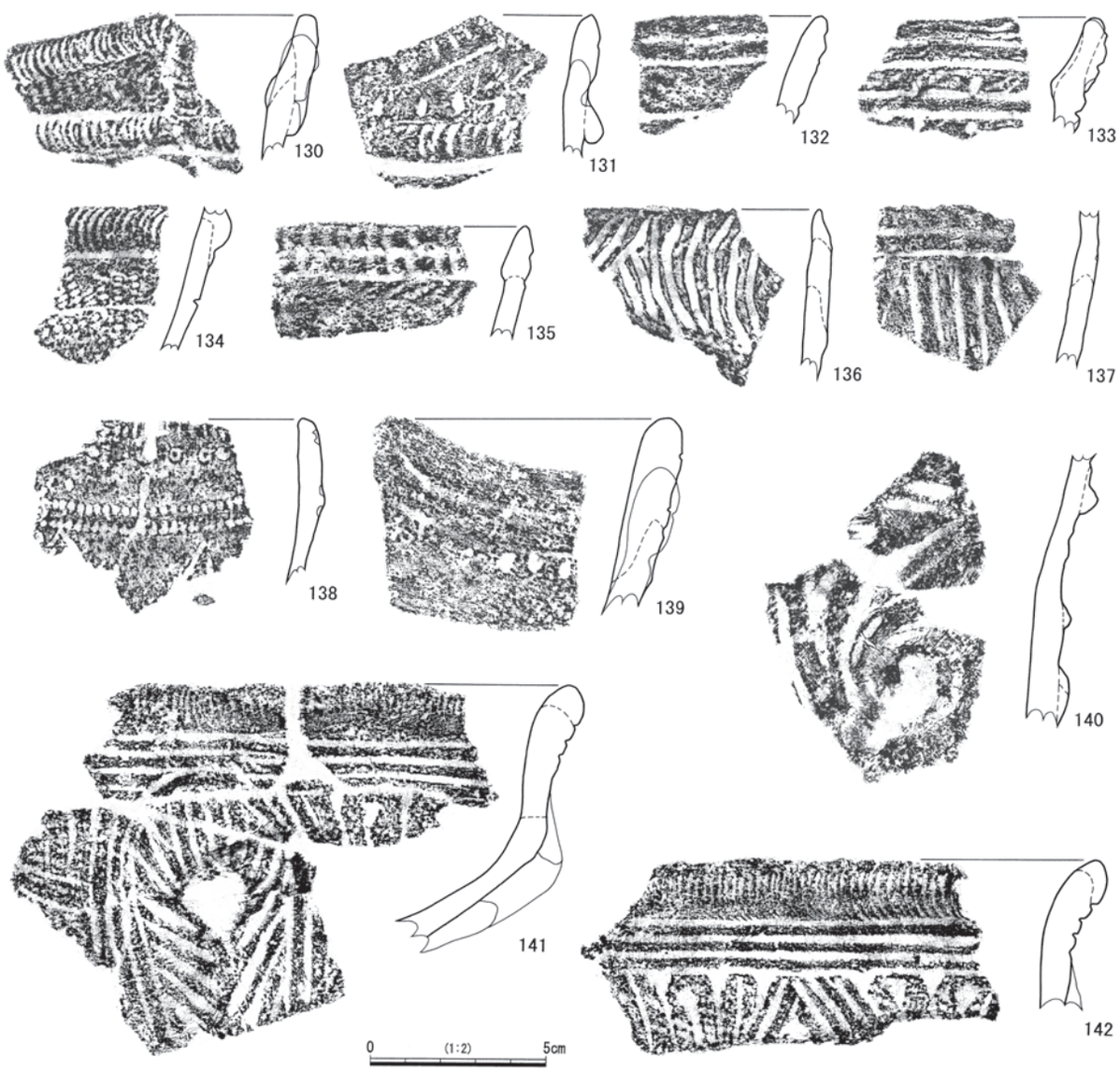


図 164　包含層・攪乱出土縄文土器（２）

表２　出土遺物観察表（土器）

No.	区	新遺構名	層位	部位	文様、調整（外面）	文様、調整（内面）	色調：外面		色調：内面		煤・コゲ
3	3	12 号炉穴	上層	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/4	暗褐	10YR3/3	内面
4	3	52 号炉穴	上層	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	明褐	7.5YR5/6	褐	7.5YR4/6	
8	3	67 号炉穴	第４層	胴部	山形押型文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
10	3	75 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	7.5YR4/3	暗褐	10YR3/3	
12	3	79 号炉穴	第６層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	明褐	7.5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/4	
13	3	79 号炉穴	第６層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	明褐	7.5YR5/6	
14	3	80 号炉穴	埋土	口縁～胴部	ＲＬ縦走縄文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
18	3	90 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縦走縄文	口縁にＲＬ横走縄文	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/4	
19	3	90 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縦走縄文	口縁にＲＬ横走縄文	褐	10YR4/4	にぶい黄褐	10YR4/3	外面
20	3	90 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縦走縄文	口縁にＲＬ横走縄文	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	
21	3	90 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縦走縄文	口縁にＲＬ横走縄文	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/4	
22	3	90 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ＲＬ縄文	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	
23	3	90 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	
24	3	90 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	指頭痕　ナデ	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄褐	10YR5/3	
25	3	90 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	指頭痕　ナデ	黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
26	3	90 号炉穴	埋土	底部	ＲＬ縄文	指頭痕　ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	
27	3	90 号炉穴	埋土	口縁部	Ｒ撚糸文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	
28	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	灰黄褐	10YR5/2	
29	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	灰褐	7.5YR4/2	にぶい褐	7.5YR5/4	
30	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	
31	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	黒褐	10YR3/2	にぶい黄褐	10YR5/3	
32	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ組紐の撚糸文	ナデ	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄褐	10YR5/3	
33	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	褐	10YR4/4	
34	3	90 号炉穴	埋土	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR4/2	
35	3	90 号炉穴	埋土	胴部	ＬＲ撚糸文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
48	3	93 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
51	3	95 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄褐	7.5YR5/3	
52	3	95 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	黒褐	10YR3/2	
53	3	95 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縄文	－	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
54	3	95 号炉穴	埋土	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/4	
55	3	95 号炉穴	埋土	口縁部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
56	3	95 号炉穴	埋土	口縁部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
57	3	95 号炉穴	埋土	口縁部	ＬＲ撚糸文・口縁に施文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
59	3	98 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	
62	3	107 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	
63	3	107 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
64	3	107 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/4	にぶい褐	7.5YR5/4	
65	3	107 号炉穴	埋土	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/4	
67	3	126 号炉穴	第１層	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	褐	7.5YR4/4	
68	3	126 号炉穴	第１層	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	褐	7.5YR4/3	暗褐	10YR3/4	
69	3	126 号炉穴	第１層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
70	3	135 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/3	黒褐	10YR3/1	内面
72	3	154 号炉穴	埋土	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/4	褐	10YR4/4	
74	3	165 号炉穴	埋土	胴部	山形押型文	ナデ	褐	7.5YR4/3	にぶい褐	7.5YR5/4	
75	3	165 号炉穴	埋土	胴部	山形押型文	ナデ	褐	7.5YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
76	3	165 号炉穴	埋土	胴部	山形押型文	ナデ	褐	7.5YR4/3	にぶい褐	7.5YR5/4	
77	3	166 号炉穴	埋土	口縁部	楕円押型文（幅広）口縁に刺突文	指頭痕　ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/4	
78	3	166 号炉穴	埋土	胴部	楕円押型文（幅狭）	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/4	
80	3	172 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬＲ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
85	3	179 号炉穴	埋土	口縁部	ＲＬ縄文	口縁に圧痕　ナデ	褐	10YR4/4	にぶい黄橙	10YR6/4	
86	3	179 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/4	
87	3	180 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬＲ縄文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
88	3	182 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	明褐	7.5YR5/6	
89	3	182 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	10YR4/4	明黄褐	10YR7/6	
91	3	184 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/4	
92	3	187 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/4	
93	3	189 号炉穴	埋土	口縁～胴部	ＲＬＲ縄文＋ＲＬＲ撚戻し	口縁にＲＬＲ縄文　ナデ	橙	7.5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/4	
95	3	195 号炉穴	第３層	胴部	組紐の撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
96	3	200 号炉穴	埋土	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR6/4	
98	3	205 号炉穴	埋土	口縁部	Ｒ撚糸文	指頭痕　ナデ	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR6/4	
99	3	205 号炉穴	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	
102	5	213 号炉穴	埋土	胴部	RL 縄文	指頭痕	褐	7.5YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
103	3	２号集石	第２層	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	10YR4/6	にぶい黄褐	10YR5/4	
104	3	３号集石	埋土	口縁部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	7.5YR4/6	にぶい黄褐	10YR5/4	
105	3	22 号集石	埋土	口縁部	Ｌ撚糸文	－	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/4	外面
106	3	23 号集石	埋土	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
107	3	23 号集石	埋土	胴部下半	ＲＬ縄文	ナデ	褐	10YR4/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
108	3	26 集石	第１層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	褐	10YR4/4	
109	3	26 集石	第１層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	
110	3	26 集石	第１層	胴部	ＲＬ撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
113	3		包含層	口縁部	ＲＬ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	褐	10YR4/4	外面
114	3		包含層	胴部	Ｌ撚糸文	指頭痕　ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	10YR4/6	
115	3		包含層	口縁部	ＲＬ縄文	ナデ	褐	10YR4/6	褐	10YR4/4	
116	3		包含層	口縁部	ＲＬＲ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	褐	10YR4/4	
117	3		包含層	胴部	ＲＬ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	褐	10YR4/6	
118	3		包含層	胴部	ＲＬ撚糸文	ナデ	橙	7.5YR6/6	明褐	7.5YR5/6	
119	3		包含層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	橙	7.5YR6/6	明褐	7.5YR5/6	
120	3		包含層	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	灰黄褐	10YR4/2	
121	3		包含層	胴部	ＲＬＲ縄文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
122	3		包含層	胴部	ＬＲ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
123	3		包含層	胴部	Ｒ撚糸文	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	褐	7.5YR4/4	
124	3		包含層	胴部	Ｌ撚糸文	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/4	

表３　出土遺物観察表（土器）

No.	区	遺構名	層位	部位	文様、調整（外面）	文様、調整（内面）	色調：外面		色調：内面		煤・コゲ
125	3		包含層	胴部	ＲＬ縄文	ナデ	暗褐	10YR3/4	褐	10YR4/4	
126	3		包含層	胴部	組紐	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
127	3		包含層	胴部	組紐	ナデ	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	
128	3		撹乱	胴部	RL 横走縄文	RL 縦走縄文	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	
129	3		包含層	胴部	組紐	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	明褐	7.5YR5/6	
130	3		撹乱	口縁部	爪形文	ナデ	褐	7.5YR4/4	黒褐	10YR3/2	
131	3		撹乱	口縁部	爪形文	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	暗褐	7.5YR3/4	
132	3		撹乱	口縁部	沈線	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
133	3		撹乱	口縁部	沈線＋刺突	ナデ	褐	7.5YR4/6	褐	7.5YR4/6	
134	3		撹乱	口縁部	爪形文	ナデ	黒褐	7.5YR3/2	暗褐	7.5YR3/3	
135	3		撹乱	口縁部	爪形文	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/4	明黄褐	10YR6/6	
136	1		包含層	口縁部	沈線（一本描き、弧線モチーフ）	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/6	
137	3		撹乱	胴部	沈線	ナデ	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR5/4	
138	3		撹乱	口縁部	円形刺突　隆帯沿刺突　山形沈線	ナデ	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	10YR3/1	内面
139	3		撹乱	口縁部	刺突　単節縄文	ナデ	褐	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/4	
140	4		包含層	胴部	渦巻モチーフ（隆帯）	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	暗褐	7.5YR3/4	
141	3		撹乱	口縁～胴部上半	五領ヶ台Ⅰ式	ナデ	褐	7.5YR4/4	明褐	7.5YR5/6	
142	3		撹乱	口縁部	五領ヶ台Ⅰ式	ナデ	褐	7.5YR4/6	褐	7.5YR4/4	
266	2	SR1001	埋土	口縁～胴部上半		ナデ	黒褐	10YR3/2	にぶい黄褐	10YR4/3	
267	2	SR1001	埋土	口縁～胴部上半	無文	ナデ	暗褐	7.5YR3/3	褐	7.5YR4/6	
268	2	SR1001	埋土	口縁～胴部上半	北裏Ｃ式	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/6	
269	2	SR1001	埋土	口縁～胴部上半	北裏Ｃ式	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/6	
270	2	SR1001	埋土	口縁部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/6	褐	7.5YR4/6	
271	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/6	
272	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/3	明褐	7.5YR5/6	
273	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	褐	7.5YR4/4	
274	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/6	
275	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/6	
276	2	SR1001	埋土	胴部	沈線＋楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/6	褐	7.5YR4/6	
277	2	SR1001	埋土	胴部	諸磯Ｃ式	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	暗褐	7.5YR3/4	
278	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	褐	7.5YR4/6	黒褐	7.5YR3/1	
279	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	暗褐	7.5YR3/3	黒褐	7.5YR3/1	
280	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	褐	7.5YR4/6	
281	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	明褐	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	
282	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	褐	10YR4/6	褐	10YR4/6	
283	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	橙	7.5YR6/6	明褐	7.5YR5/6	
284	2	SR1001	埋土	胴部	楔形刺突	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	
285	2	SR1001	埋土	口縁部	楔形刺突	ナデ	明褐	7.5YR5/6	褐	7.5YR4/3	
286	2	SR1001	埋土	口縁部	半裁竹管押引き	ナデ	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/3	
287	2	SR1001	埋土	口縁部	半裁竹管押引き	ナデ	褐	7.5YR4/6	褐	7.5YR4/4	
288	2	SR1001	埋土	口縁部	隆帯→刺突→平行沈線	ナデ	にぶい褐	7.5YR5/4	褐	7.5YR4/4	
289	2	SR1001	埋土	口縁部	単節縄文	ナデ	褐	10YR4/4	褐	10YR4/4	
290	2	SR1001	埋土	口縁部	単節縄文	ナデ	暗褐	10YR3/3	暗褐	10YR3/3	
291	1	SR1001	埋土	胴部	沈線→円形刺突	ナデ	にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	
292	2	SR1001	埋土	胴部	楔状刺突	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	暗褐	7.5YR3/4	
293	2	SR1001	埋土	胴部	楔状刺突	ナデ	にぶい黄橙	10YR6/4	灰黄橙	10YR5/2	
294	2	SR1001	埋土	口縁部	無文	ナデ	暗褐	7.5YR3/4	暗褐	7.5YR3/4	
295	2	SR1001	埋土	口縁部	格子	ナデ	褐	7.5YR4/4	暗褐	7.5YR3/4	

表４　出土遺物観察表（石器）

No.	区	新遺構名	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
1		3 号炉穴	スクレイパー	メノウ	3.2	2.25	0.65	2.98
2		3 号炉穴	石鏃（未製品）	シルト岩	2.5	1.8	0.55	1.50
5		64 号炉穴	石鏃（未製品）	チャート	2.6	1.7	0.5	1.75
6		64 号炉穴	楔形石器	メノウ	1.95	1.35	0.8	1.85
7		64 号炉穴	石核	シルト岩	4.4	4.2	1.6	36.53
9		67 号炉穴	石匙	シルト岩	4.5	2.1	0.8	4.90
11		75 号炉穴	石鏃（未製品）	黒曜石	2.2	2.05	0.65	2.34
15		86 号炉穴	石槍（未製品）	シルト岩	3.9	2.6	0.8	5.81
16		86 号炉穴	石皿	巨晶花崗岩	15.6	18.3	10.2	3270
17		88 号炉穴	石鏃	チャート	1.65	1.15	0.3	0.55
36		90 号炉穴	石鏃	シルト岩	1.65	1.3	0.4	0.42
37		90 号炉穴	石鏃	メノウ	1.6	1.3	0.25	0.33
38		90 号炉穴	石鏃	シルト岩	1.5	1.2	0.35	0.39
39		90 号炉穴	石鏃	シルト岩	2.0	1.5	0.35	0.62
40		90 号炉穴	石槍	流紋岩	5.8	2.75	0.95	12.99
41		90 号炉穴	楔形石器	チャート	2.05	2.4	1.3	5.08
42		90 号炉穴	楔形石器	チャート	2.25	2.1	0.5	2.36
43		90 号炉穴	楔形石器	シルト岩	3.6	1.8	0.6	2.81
44		90 号炉穴	楔形石器	チャート	3.1	2.9	0.8	6.37
45		90 号炉穴	楔形石器	シルト岩	1.85	3.25	0.7	3.23
46		90 号炉穴	局部磨製石斧	シルト岩	7.45	4.25	1.3	34.63

No.	区	新遺構名	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
47		90 号炉穴	石核	珪質シルト岩	3.5	4.2	2.05	33.22
49		93 号炉穴	石鏃	シルト岩	1.8	1.35	0.3	0.32
50		93 号炉穴	石核	安山岩	9.65	7.1	3.35	270
58		95 号炉穴	石鏃	凝灰岩	1.0	1.6	0.25	0.24
60		99 号炉穴	二次加工のある剥片	シルト岩	5.55	3.45	1.1	15.33
61		101 号炉穴	スクレイパー	シルト岩	7.6	4.35	1.3	40.98
66		107 号炉穴	石皿	花崗岩	16.5	18.7	6.75	3160
71		144 号炉穴	石核	シルト岩	5.1	6.4	4.7	110.59
73		162 号炉穴	石皿・台石	石英斑岩	20.8	13.3	7.9	3260
79		170 号炉穴	楔形石器	チャート	1.9	2.15	0.95	3.75
81		172 号炉穴	石核	シルト岩	4.2	7.5	4.2	116.82
82		176 号炉穴	石槍（有舌尖頭器）	黒曜石	2.95	1.45	0.8	2.58
83		177 号炉穴	石皿・台石	珪質シルト岩	27.5	28.3	15	11800
84		177 号炉穴	台石・石皿	珪質シルト岩	44.95	35.55	9	21300
90		182 号炉穴	石鏃（未製品）	メノウ	2.25	1.5	0.4	1.24
94		194 号炉穴	楔形石器	シルト岩	1.6	1.9	0.75	1.89
97		200 号炉穴	石鏃	シルト岩	1.2	1.15	0.25	0.14
100		205 号炉穴	磨石	花崗岩	14.1	12	6.15	1490
101		211 号炉穴	石核	シルト岩	4.8	3.1	2.35	31.08
111		１号集石	石皿・台石	花崗岩	22.2	21.8	8.4	5600
112		１号集石	石皿・台石	珪質シルト岩	33.75	26.6	11.3	16500

第４章　中通遺跡 －古代～近世－

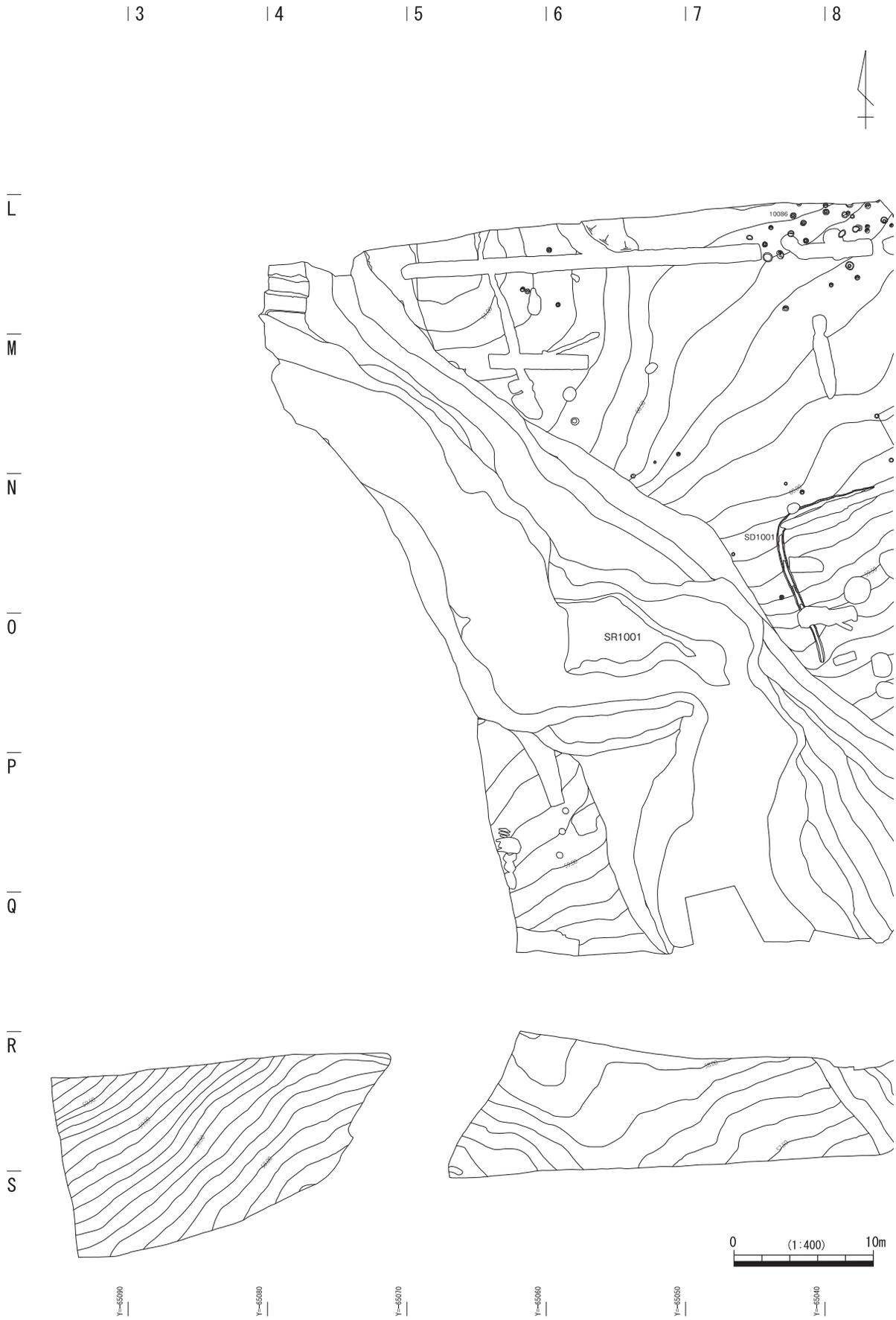


図 165　中通遺跡（古代～近世）遺構配置図（１）

図 166　中通遺跡（古代～近世）遺構配置図（2）

図 167　中通遺跡（古代～近世）遺構配置図（３）

1　概要

掘立柱建物

掘立柱建物は、合計 41 棟検出されている。中世前期の建物として明確に認識できるものは、SH1003 の１棟のみである。中世後期の建物は７棟、近世の建物は 11 棟確認でき、中世後期から近世にかけての建物も 16 棟ある。中でも 16 世紀以降とみられる建物が、最も多く確認できる。また、遺物がなく時期の特定できないものも６棟あるが、ほかの建物からみて、中世後期から近世にかけての建物である可能性が高いと推測される。建物規模は、建床面積が 20 ㎡程度の小型の建物から、60 ㎡をこえる大型の建物まで様々であるが、全体としては、50 ㎡以下の建物が多い。主軸の方位は、北側で西に 30 度程振るものと、10 ～ 20 度前後西に振るのもの、ほぼ座標北となる建物とに分けられる。多くの建物で柱痕跡が検出されているが、柱痕跡の規模はほとんどが直径 20 ㎝前後となっている。

河川

１区と２区の西側において、河川の跡が検出されている。北側の谷から流れ出る河川で、約２ｍの深さまで砂礫の堆積を確認しているが、遺物が出土しているのは検出面から約１ｍの深さまでである。遺物のほとんどが須恵器や土師器、灰釉陶器であることから、平安時代までにはほぼ埋没していたものと考えられる。

溝

区画溝とみられるＬ字形に曲がる溝が多く検出されている。それらはいずれも近世のものであり、幅は 20 ～ 40 ㎝程で、断面は箱形に近い形状である。SD3003 と SD4002 では、両側に壁面の崩落を防ぐための石積みが確認されている。18 世紀以降の溝は現在の地割と一致するものが多く、この頃の土地区画が現在までほぼ踏襲されていることがわかる。中世前期の溝は、５区の東端で SD5005 が検出されているのみである。山茶碗や土師質土器皿に加え、中世瓦が出土している。

井戸

井戸は、３・４・５区から各１基検出されている。SE3002 と SE4001 は、19 世紀頃まで使用されていたことが確認されている。SE5001 では井筒として使用された桶が残されていた。年代の決め手となる遺物が乏しいが、井筒として桶が使用されていることから、江戸時代の井戸である可能性が高い。また４区では、近現代の井戸も発見されており、継続的に井戸が掘られる場所であったといえる。

墓・土器埋納遺構

16 世紀から 17 世紀の土坑墓が２基検出されている。SX3001 では土師質土器皿が９枚墓坑の木口に副葬されていた。SX3227 では、墓坑の北東隅から６枚の銭貨が緡銭の状態で出土している。４区の中央では、近世常滑窯の甕の中に、土師質土器皿が 15 枚納められた状態で出土している。地鎮などの祭祀行為に伴う土器埋納遺構であると推測される。

遺物

調査区のほぼ全域から、中世後期から近世にかけての瀬戸美濃産の陶器や、肥前産の磁器などが多数出土している。また、特殊な遺物としては、包含層から瓦塔や古代と中世の瓦が出土している。

２　掘立柱建物

SH1001（図 168・169・222、図版 64・87）

１区の中央に位置する。梁行３間・桁行４間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－33°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 7.0 ｍ×桁行 9.3 ｍと比較的大型である。柱間は、梁行が北から 250 ＋ 210 ＋ 240 ㎝、桁行が西から 220 ＋ 250 ＋ 230 ＋ 230 ㎝と、ややばらつきがある。北側には建物内部に柱が通る。北側の片面庇とは考えにくいため、束柱または間仕切り柱と推測される。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 16 ～ 23 ㎝で、建物内部の柱はやや小規模となる傾向がみられる。柱穴掘方は、直径 28 ～ 52 ㎝の円形である。深さは 14 ～ 38 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物としては、柱穴 SP10103 から銭貨が錆着した状態で２枚出土している。剥離できない状態ではあるが、１枚は元豊通宝（233）である。そのほかには、柱穴 SP10111・10114 から土師質土器片が各１点出土している。詳細な年代は不明ではあるが、中世後期の建物とみてよいであろう。

SH1002（図 168・170、図版 64）

SH1001 の東側に隣接する。東側で柱列が検出されていないことから、建物の東端は調査区外へ続くものと推測される。梁行３間･桁行３間以上の側柱建物で､南北の主軸がＮ－27°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は梁行 5.8 ｍ×桁行 5.5 ｍ以上、柱間は梁行が北から 200 ＋ 180 ＋ 200 ㎝、桁行が西から 200 ＋ 180 ㎝となっている。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 38 ～ 54 ㎝の円形と比較的大型である。深さは 16 ～ 50 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物としては、柱穴 SP10119 から土師質土器片が１点出土しているのみである。SH1001 と隣接し、主軸も近似していることから、近い年代の可能性が高いと推測される。

図 168　SH1001・1002 配置図

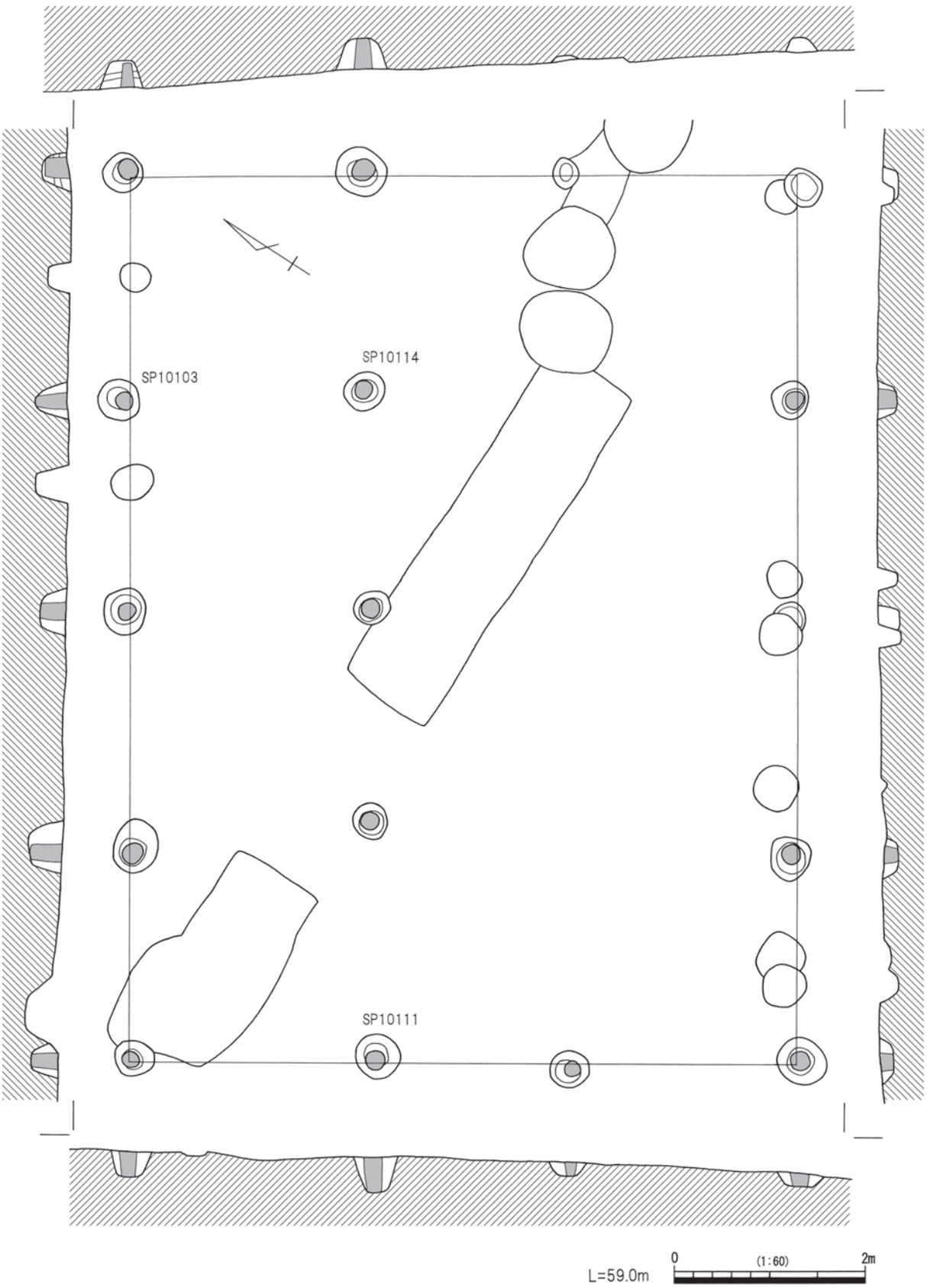


図 169　SH1001 実測図

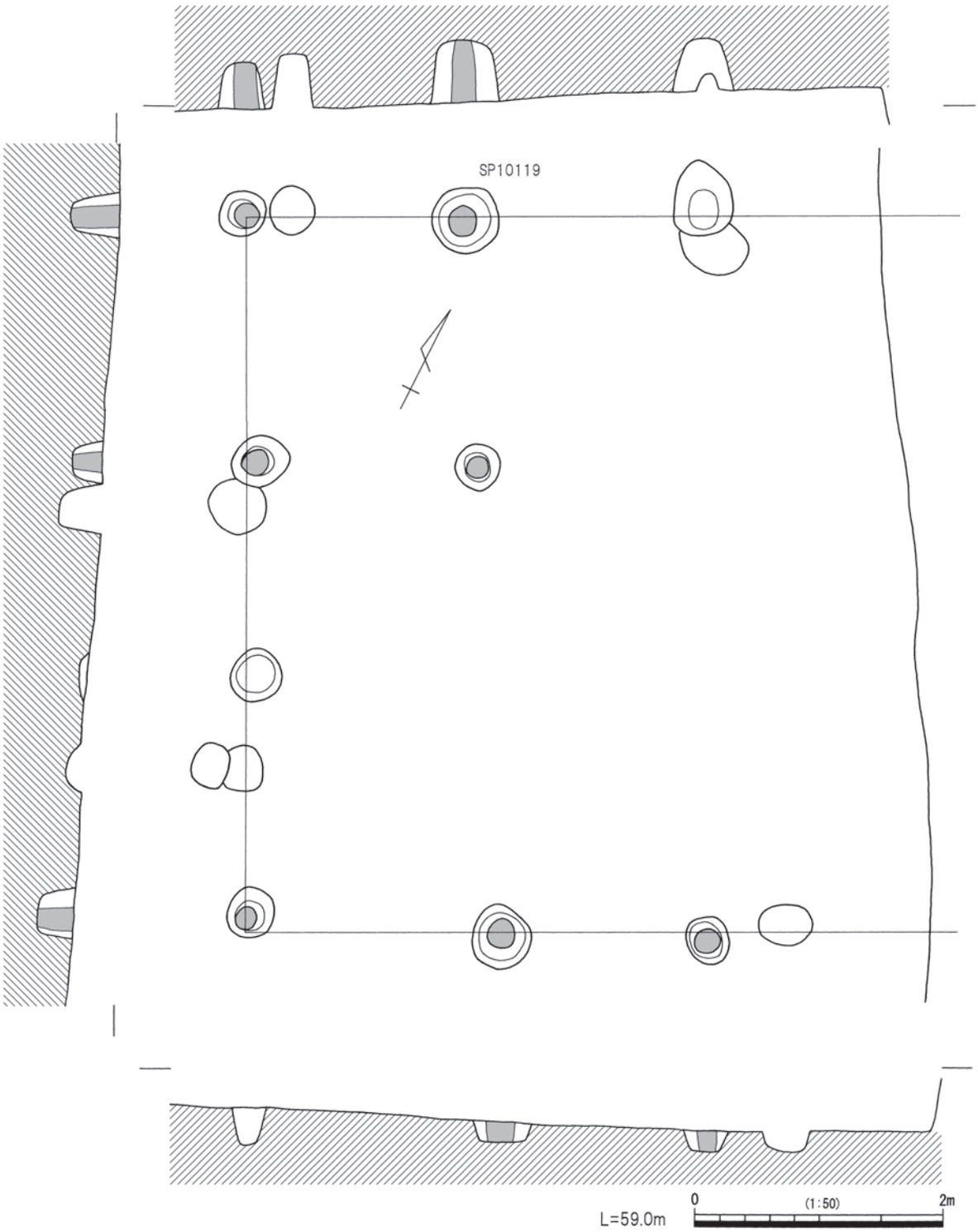


図 170　SH1002 実測図

SH1003（図 171）

SH1001 から約 15 m北西に位置する。梁行２間・桁行１間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－29°－Ｗの正方形の建物である。建物規模は、梁行 4.2 m×桁行 4.2 mと小型である。柱間は、梁行が西から 200 ＋ 250 ㎝、桁行は 420 ㎝で、南側の妻柱は検出されていない。

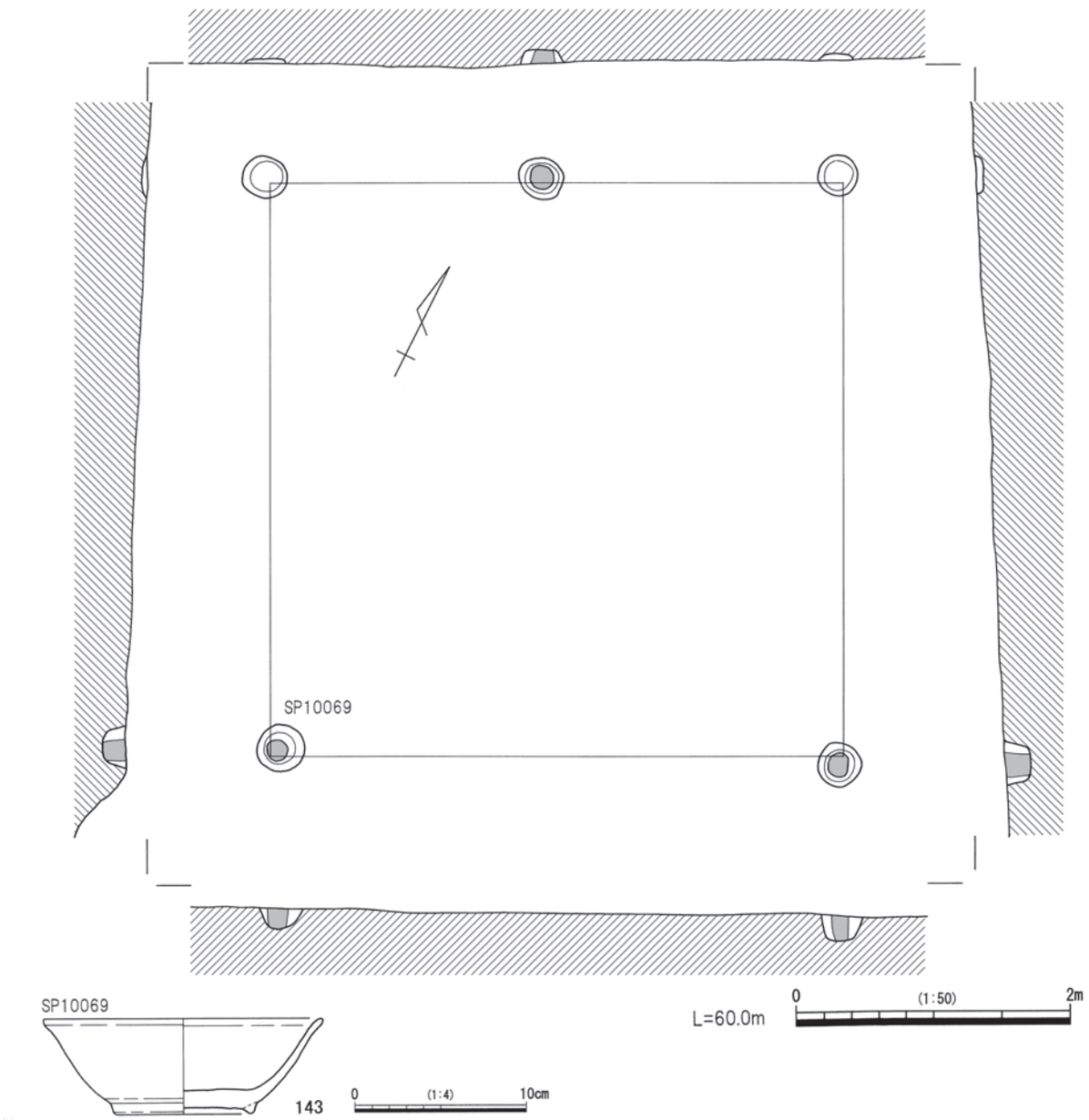


図 171　SH1003 実測図・出土遺物

柱痕跡は北側の妻柱と南側の隅柱で確認されている。柱痕跡の規模は直径 16 ～ 18 ㎝で、柱穴掘方は直径 30 ～ 34 ㎝の円形である。深さは 10 ～ 20 ㎝と浅く、根入れの高さは北側が高い。

遺物としては、柱穴 SP10069 から山茶碗（143）が 1 点出土している。渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－1 期のものである。掘方埋土から、柱痕跡に沿うように立った状態で出土しており、ほぼ完形であることから、意図的に埋納された可能性が高い。この遺物から、13 世紀前半に建造された建物とみてよい。

SH2001（図 172、図版 64）

SH1001 から約 25 ｍ南に位置する。梁行 3 間・桁行 5 間の側柱建物で、南北の主軸は N－13°－W の東西棟である。建物規模は、梁行 6.2 ｍ×桁行 9.6 ｍと比較的大型である。柱間は、梁行が北から 260 ＋ 190 ＋ 170 ㎝、桁行は西から 200 ＋ 160 ＋ 200 ＋ 180 ＋ 220 ㎝とばらつきが大きい。

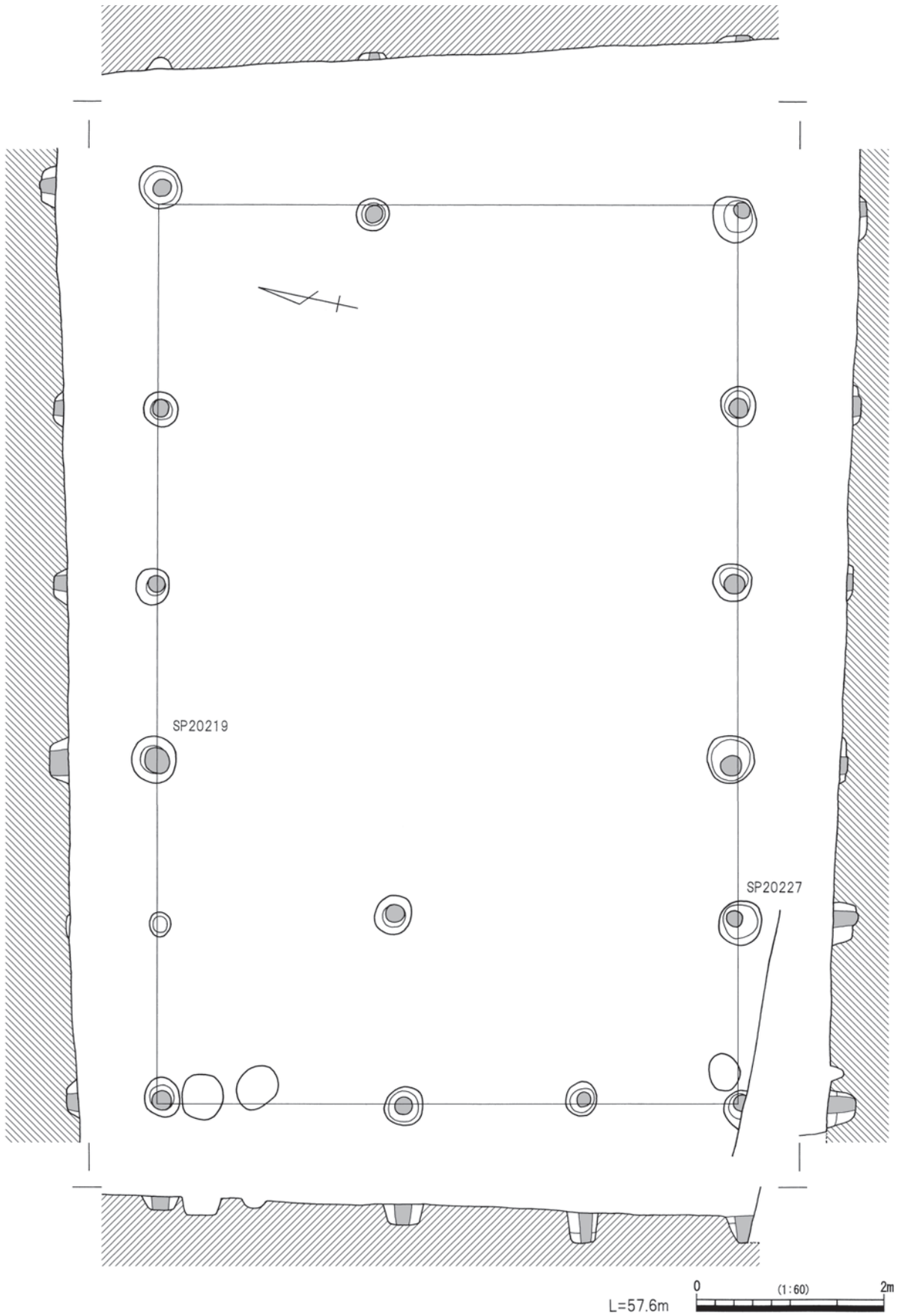


図 172　SH2001 実測図

柱痕跡は１ヶ所を除きすべてで確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 28 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 52 ㎝の円形である。深さは８～ 24 ㎝と浅く、根入れの高さは一定しない。柱筋の通りも悪く、北東の隅柱はやや外側にはずれている。なお、西側にもやや柱筋がずれる柱列が確認でき、連結された建物があった可能性も考えられる。

遺物としては、柱穴 SP20227 から尾呂茶碗、柱穴 SP20219 から土師質土器皿が各１点出土している。いずれも図化できない小片ではあるが、尾呂茶碗は瀬戸美濃窯の登窯６～７期のものである。少なくとも建物の建造時期は 18 世紀中頃以降である。

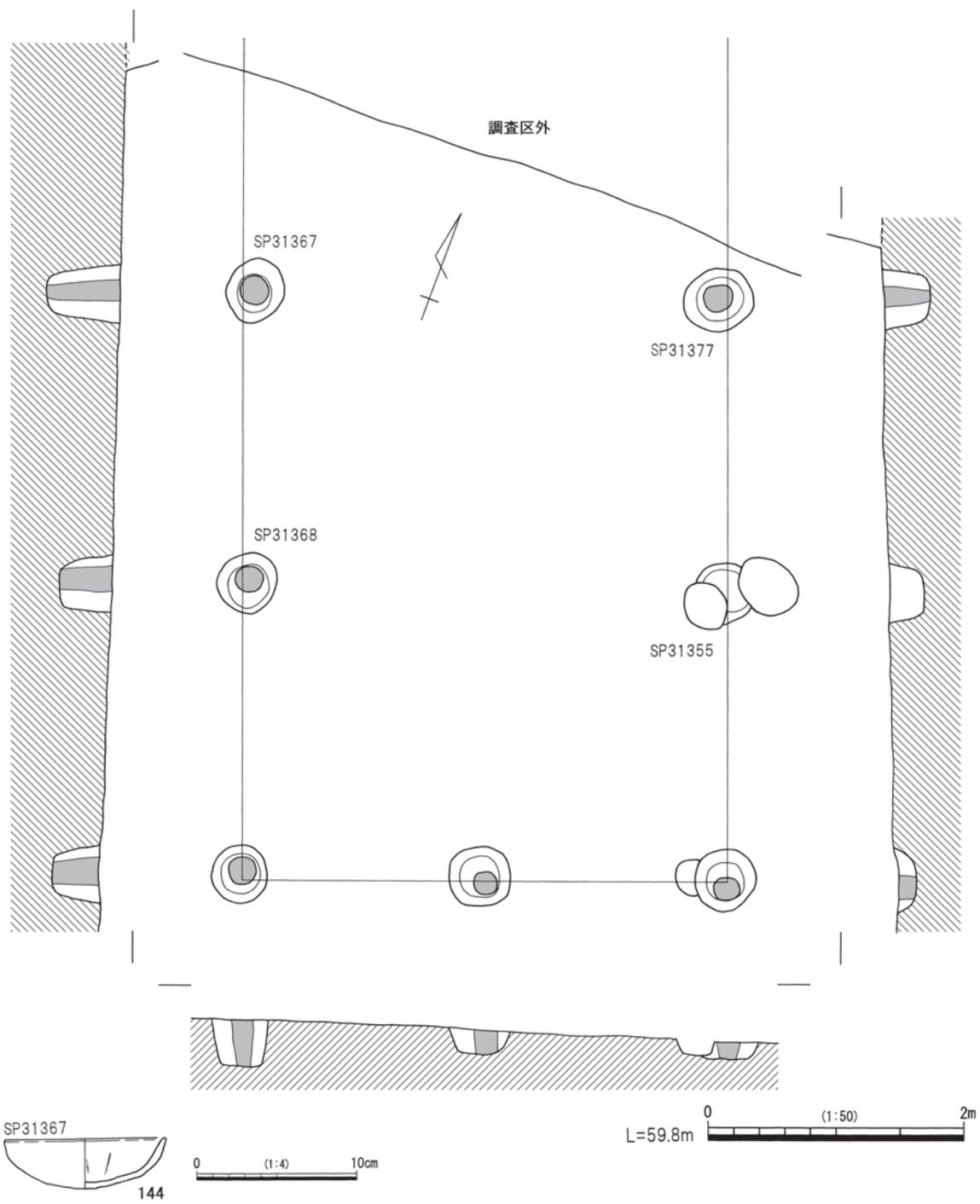


図 173　SH3001 実測図・出土遺物

SH3001（図 173・175・222、図版 65・87）

３区の北東隅に位置する。北側の妻柱が検出されていないことから、建物の北端は調査区外へ続く可能性が高い。梁行２間･桁行３間以上の側柱建物で、南北の主軸がＮ－22°－Ｗの南北棟である。建物規模は、梁行 3.8 ｍ×桁行 6.35 ｍ以上である。柱間は、梁行が 190 ㎝の等間で、桁行も明確な南側２間は 230 ㎝の等間となっている。

柱痕跡は１ヶ所を除き、すべてで確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 44 ～ 54 ㎝の円形である。深さは 12 ～ 58 ㎝と場所によってややばらつきが大きいが、根入れの高さはほぼ一定となっている。

遺物は比較的多く出土している。柱穴 SP31367 から土師質土器皿が２点、柱穴 SP31377 から土師質土器皿が１点、柱穴 SP31368 からは掘方から擂鉢と土師質土器皿、キセルが各１点、柱痕跡埋土から土師質土器が３点出土している。144 は SP31367 の掘方から出土した土師質土器皿である。器壁は薄く、内面にはヘラナデの痕跡が確認される。中世末から近世にかけてのものである。また、小片ではあるが SP31368 の掘方から出土している擂り鉢は、志戸呂窯産の近世のものとみられる。234 はキセルの雁首で、火皿の下部には補強体が設けられている。17 世紀後半から 18 世紀前半のものである。

これらの遺物から、SH3001 は 17 世紀後半以降に築造された建物と推定される。

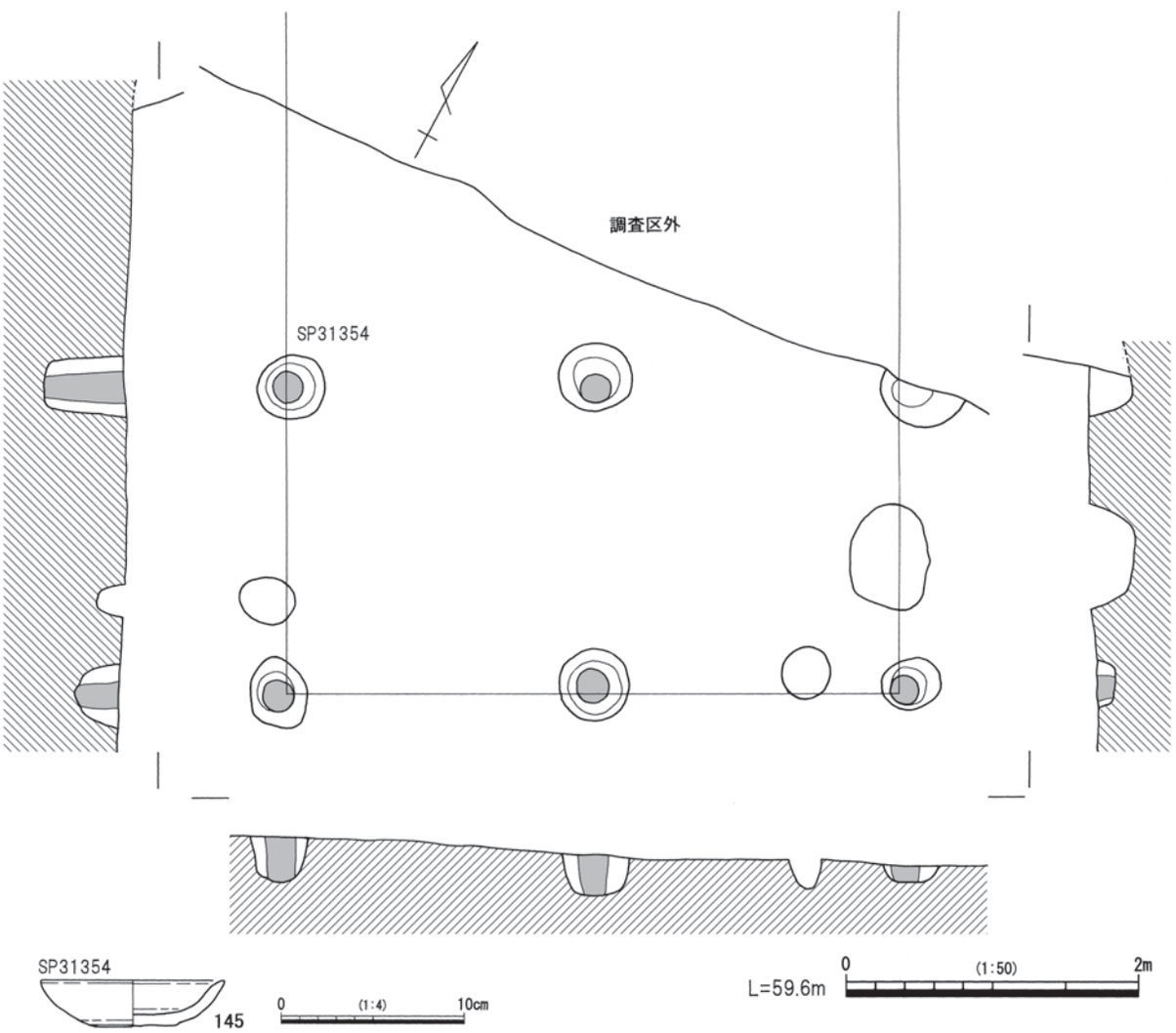


図 174　SH3002 実測図

SH3002（図 174・175、図版 65）

SH3001 の東側に隣接する。梁行 1 間・桁行 2 間の建物の可能性もあるが、あまりにも小規模なことから北側の調査区外へ続く建物ととらえておく。梁行 2 間・桁行 2 間以上の建物で、総柱建物の可能性がある。南北の主軸は N－26°－W で、南北棟の可能性が高い。建物規模は、梁行 4.2 m×桁行 4.0 m以上となっている。柱間は、梁行が 210 cmの等間で、桁行は南側 1 間が同じく 210 cmとなっており、梁行と同じく 210 cmの等間である可能性が高い。建物内には、妻柱の内側に柱穴が検出されている。

柱痕跡は 1 ヶ所を除くすべての柱穴で確認されており、柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 cmとなっている。柱穴掘方は、直径 40 ～ 55 cmの円形である。深さは 12 ～ 56 cmで、南東側に向かって浅くなる。根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物としては、柱穴 SP31354 から縁釉小皿（145）が 1 点出土している。瀬戸窯産の製品で、古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。掘方・柱痕跡のいずれから出土したものか記録がないが、底部付近から出土したようである。この遺物から、15 世紀後半以降に建造された建物とみてよい。

SH3003（図 175・176）

SH3002 から約 5 m南東に位置する。南側は南西の隅柱しか検出されておらず、北側柱列のみで構成される柵列の可能性もあるが、南西の隅柱が浅いことから、南側の柱列が削平で失われた建物としてとらえておく。梁行 1 間・桁行 3 間の側柱建物で、南北の主軸が N－24°－W となる東西棟である。建物規模は、梁行 4.8 m×桁行 8.4 mである。柱間は梁行が 480 cm、桁行が西から 280 + 270 + 290 cmと、ばらつきがある。梁行は柱間が広過ぎることから、失われてはいるが中間に妻柱が存在した可能性が高いと推測される。

柱痕跡は北側の 3 つの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 cmで、柱穴掘方は直径 40 ～ 48 cmの円形となっている。深さは 8 ～ 32 cmとばらつきがみられる。根入れの高さは、東側に向かってやや低くなる。

遺物が出土していないため、建物の詳細な年代は不明ではあるが、SH3001 と SH3002 と主軸方位が近く、隣接して建てられていることから、中世後期から近世にかけての建物である可能性が高いと推測される。

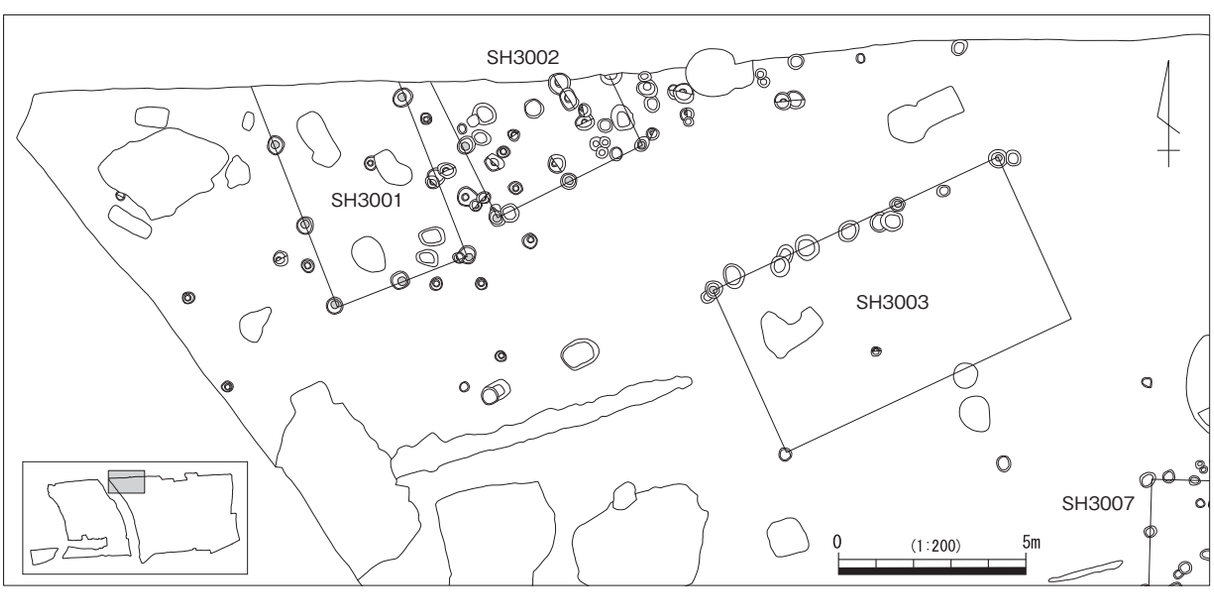


図 175　SH3001 ～ 3003 配置図

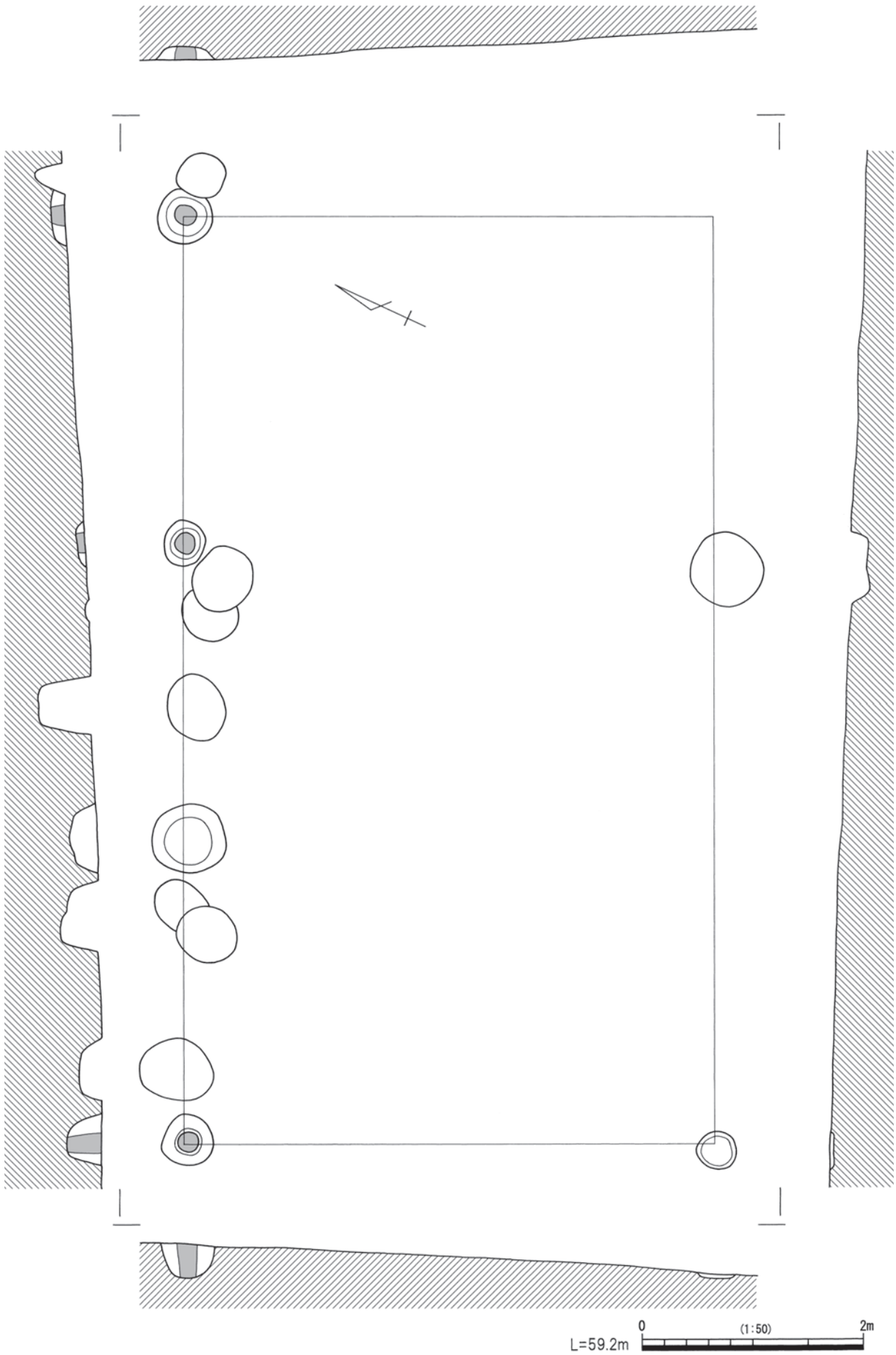


図 176　SH3003 実測図

SH3004（図 177・179）

SH3003 から約 8 m東に位置し、SH3005 と重複する。梁行 2 間・桁行 2 間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−2°−Ｅとなる東西棟である。建物規模は、梁行 3.92 m×桁行 5.0 mと小型である。柱間は、梁行が北から 196 ㎝の等間、桁行は西から 196 + 304 ㎝である。南西の隅柱は検出されておらず、SD3008 と重なる位置に想定されるが、切り合い関係については判然としない。

柱痕跡は 1 ヶ所を除く、ほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 〜 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 〜 52 ㎝の円形である。深さは 14 〜 24 ㎝で、根入れの高さは東側が低くなる。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高いと推測される。

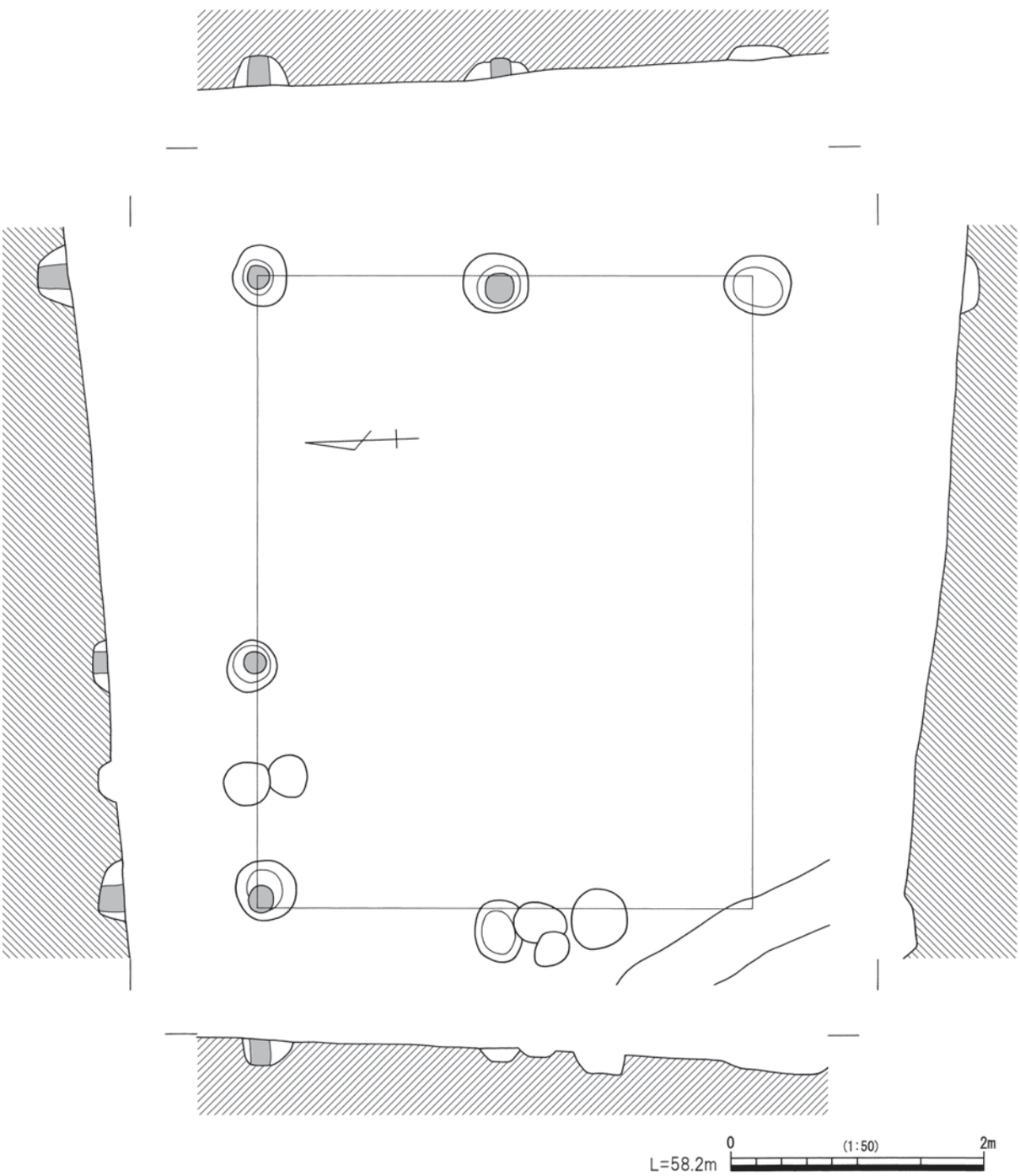


図 177　SH3004 実測図

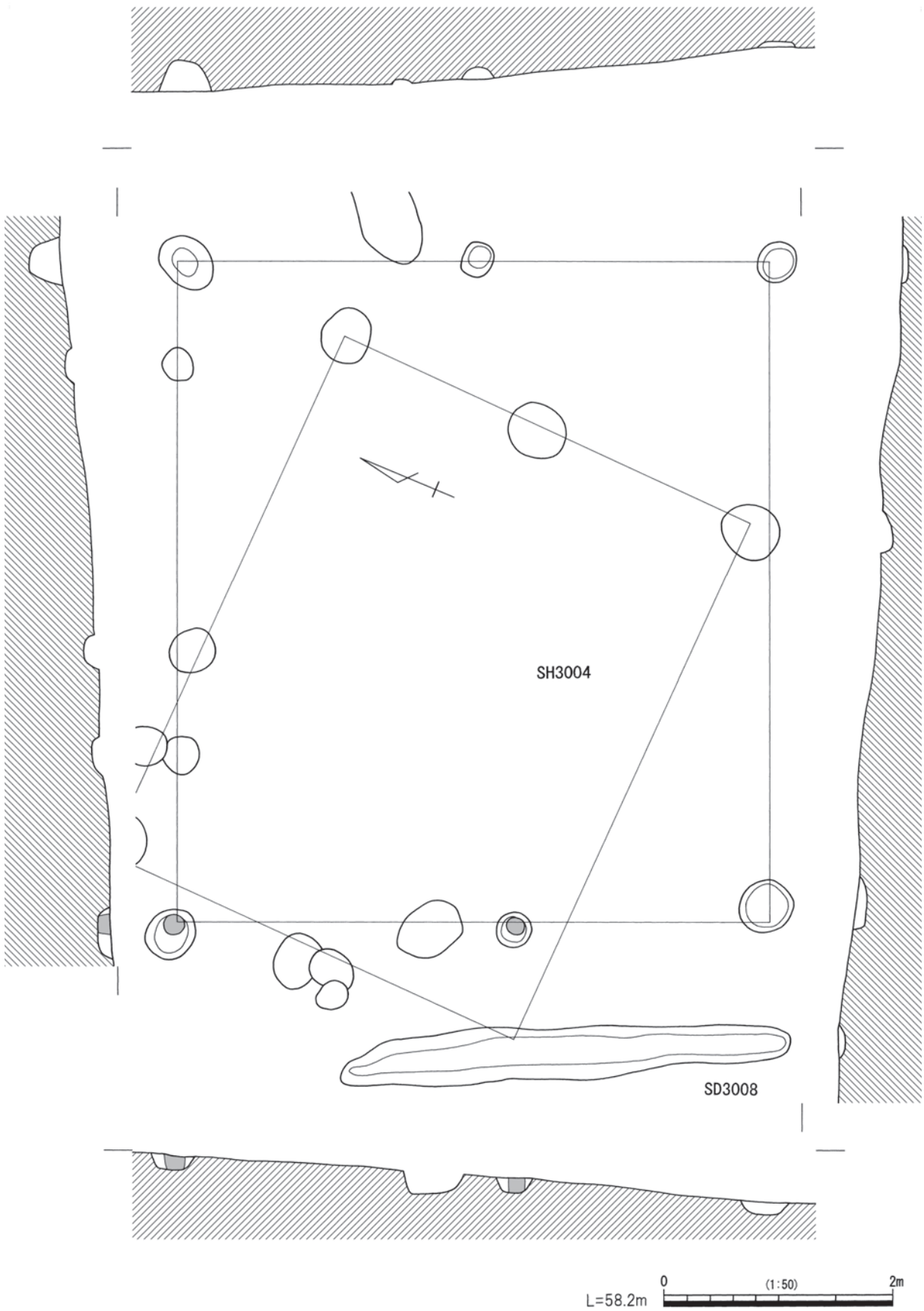


図 178　SH3005 実測図

SH3005（図 178・179）

SH3004 と重複する場所に位置する。梁行 2 間・桁行 1 間の側柱建物で、南北の主軸が N－25°－W となる東西棟である。建物規模は、梁行 4.7 m × 桁行 5.8 m である。柱間は、梁行は西側が北から 300 ㎝ + 170 ㎝、東側は 260 + 210 ㎝と異なる。桁行の柱間は 580 ㎝と広過ぎることから、間の柱穴が削平等により失われている可能性が高い。

柱痕跡は、西側の 2 ヶ所で確認されている。柱痕跡の規模は直径 16 ㎝と 18 ㎝で、柱穴掘方は直径 30 ㎝と 46 ㎝の円形である。深さはいずれも 12 ㎝で、根入れの高さは南東に向かって低くなる。

西側には、建物から 90 ㎝離れた位置に、溝 SD3008 が検出されている。幅 45 ㎝・長さ 4 m の規模で検出されており、深さは最も深い部分で 45 ㎝となっている。建物と平行することから、雨落ち溝などの建物に伴う溝と推測される。前述のように、SH3004 の柱穴との切り合い関係は明らかでない。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、主軸の方位が SH3001 や SH3002 と近似していることから、中世後期から近世にかけての建物である可能性が高いと推測される。

SH3006（図 179・180）

SH3005 の南側に隣接する。梁行 2 間・桁行 1 間の側柱建物で、南北の主軸は N－8°－W となる。建物規模は梁行 4.2 m × 桁行 4.2 m の正方形で、柱間は梁行が西から 210 ㎝の等間である。北東の隅柱は検出されていない。

柱穴はすべて抜き取り穴で、柱の規模は確認できない。抜き取り穴は、直径（長径）30 ～ 50 ㎝の円形または楕円形である。深さは 5 ～ 18 ㎝と浅い。底部の高さは、東に向かって低くなっており、柱の根入れも同様であったとみてよい。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高いと推測される。

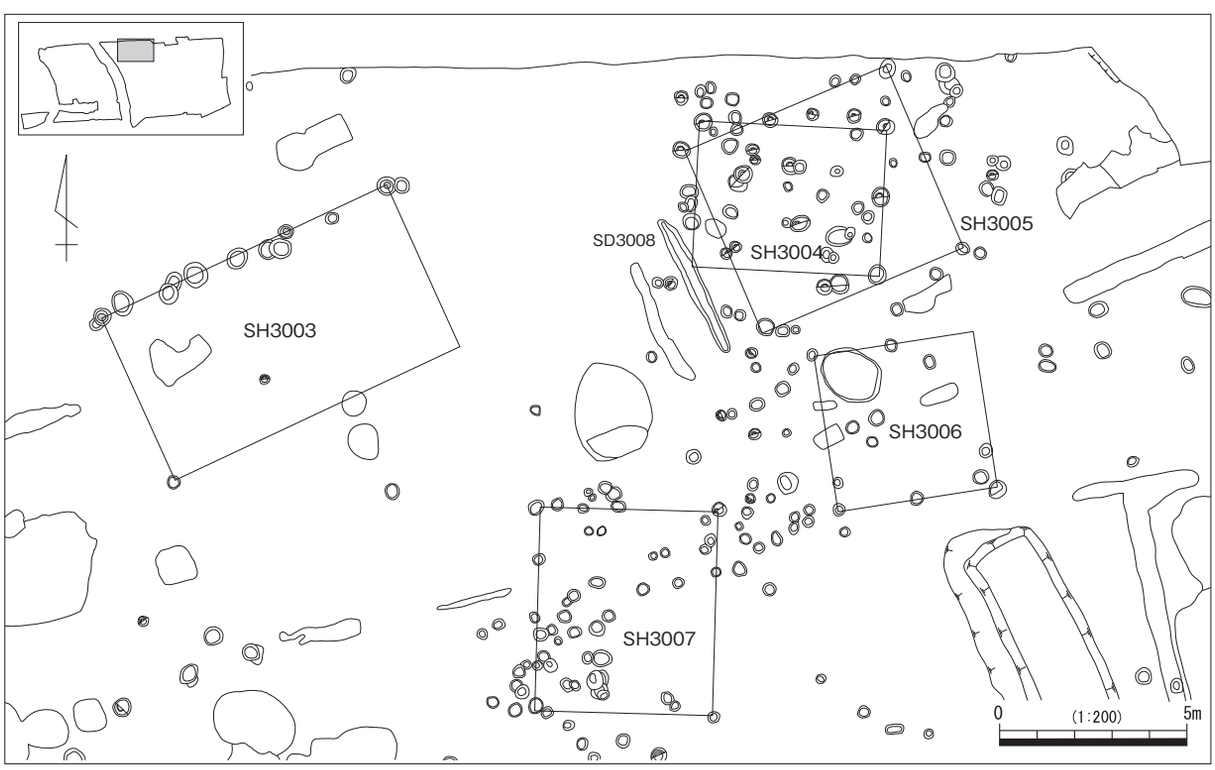


図 179　SH3004 ～ 3007 配置図

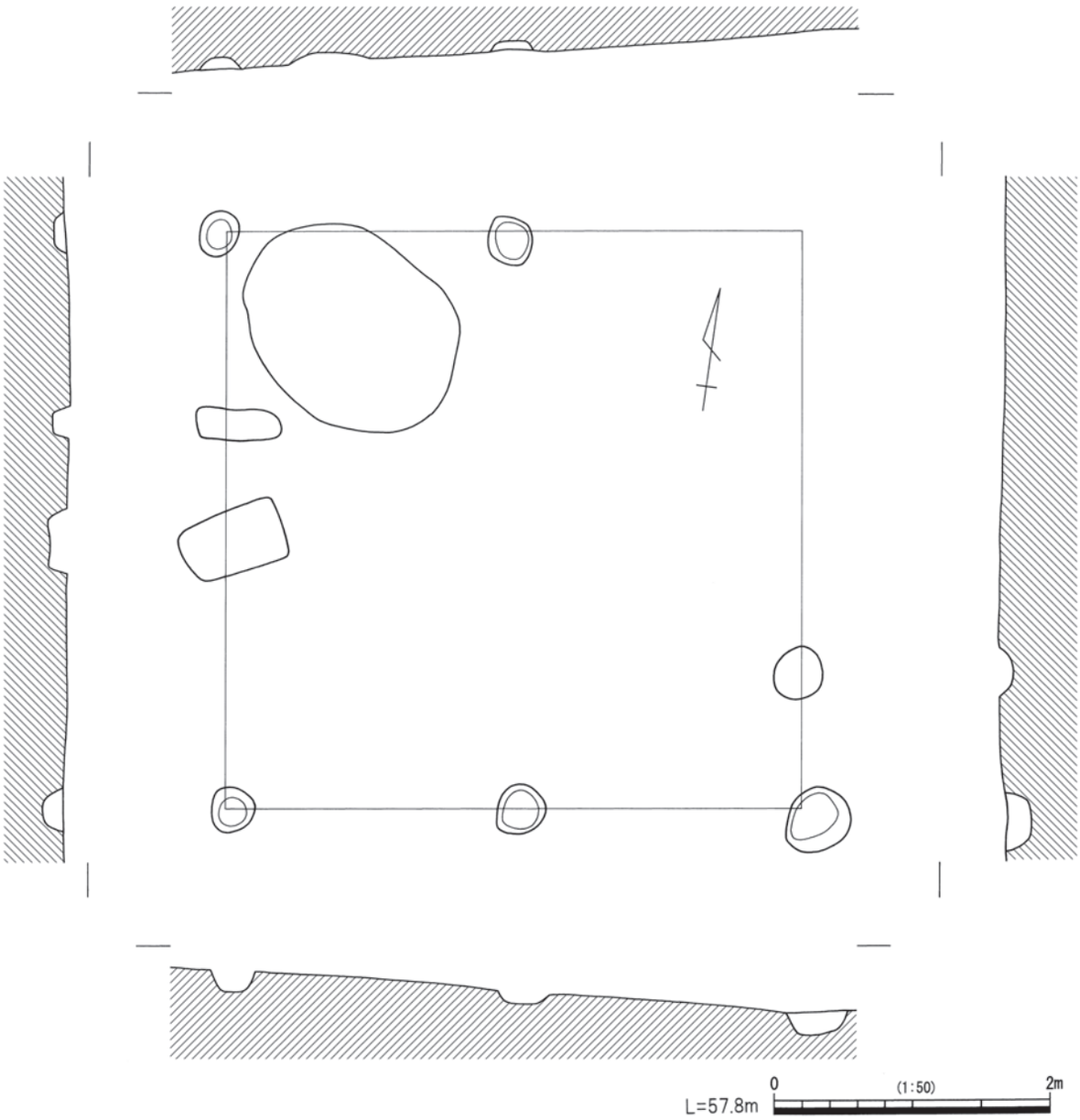


図 180　SH3006 実測図

SH3007（図 179・181）

SH3006 から約５ｍ南西に位置する。梁行２間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－3°－Ｅとなる南北棟である。建物規模は梁行 4.8 ｍ×桁行 5.0 ｍで、建物の形状は正方形に近い。柱間は、梁行が西から 200 ＋ 280 ㎝、桁行が北から 150 ＋ 150 ＋ 200 とばらつきがみられる。南東側の柱穴は検出されていないが、低くなっていることから削平などで失われたものと推測される。

柱痕跡は、北東の隅柱で確認されているのみである。ただし、南側の妻柱については、規模も小さく深いことから、柱痕跡が柱穴とほぼ同規模であったため検出できなかった可能性もある。柱痕跡の規模は直径 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ㎝の円形となっている。柱抜き取り穴は、直径（長径）25 ～ 45 ㎝の大きさで、楕円形となるものが多い。柱穴の深さは 30 ㎝であり、抜き取り穴の深さも東に向かって

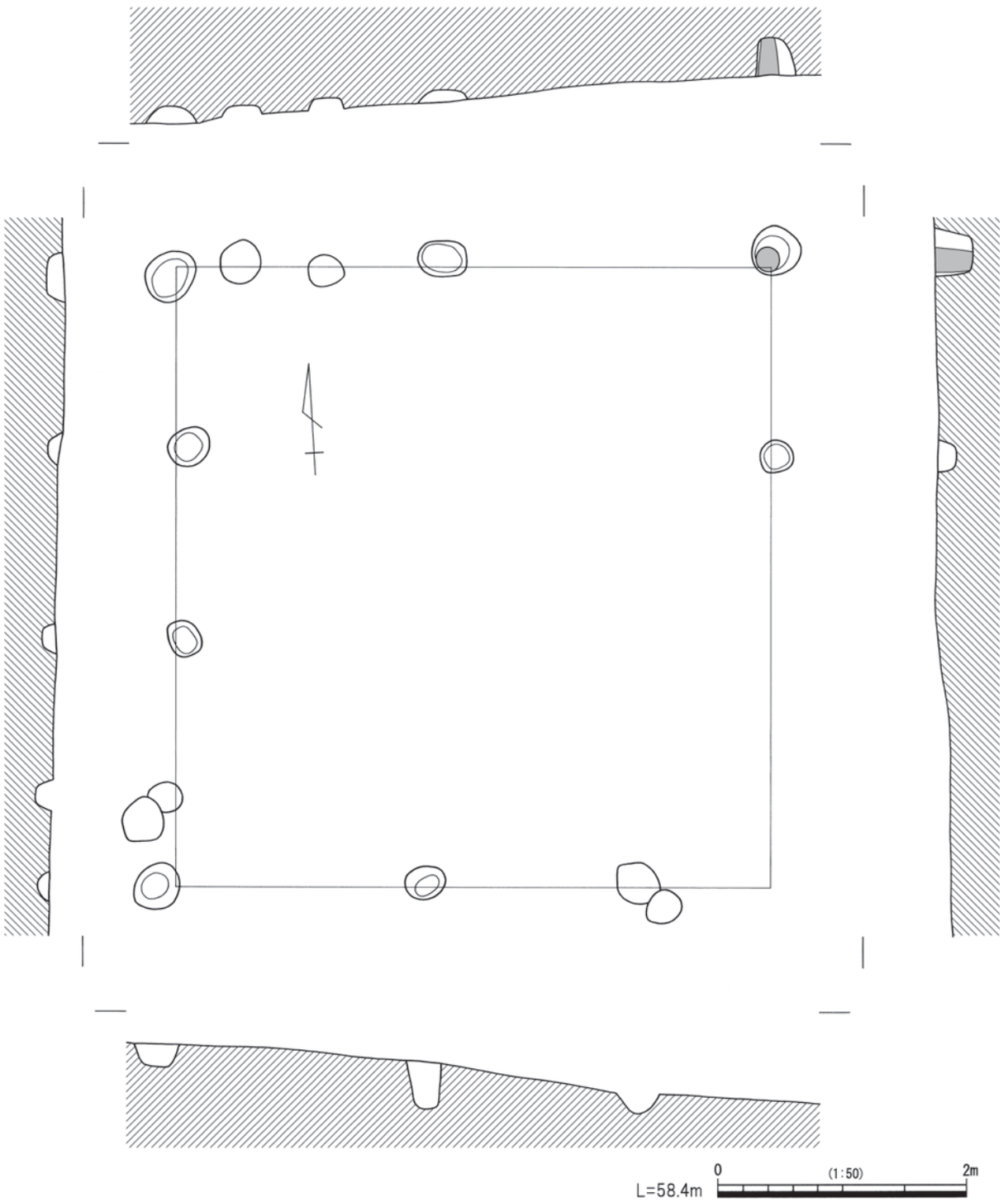


図 181　SH3007 実測図

下がっていることから、柱の根入れの高さも同様であったものと推定される。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高い。また、北側の SH3004 とは主軸の方位が近似しており、近い年代の建物であると推測される。

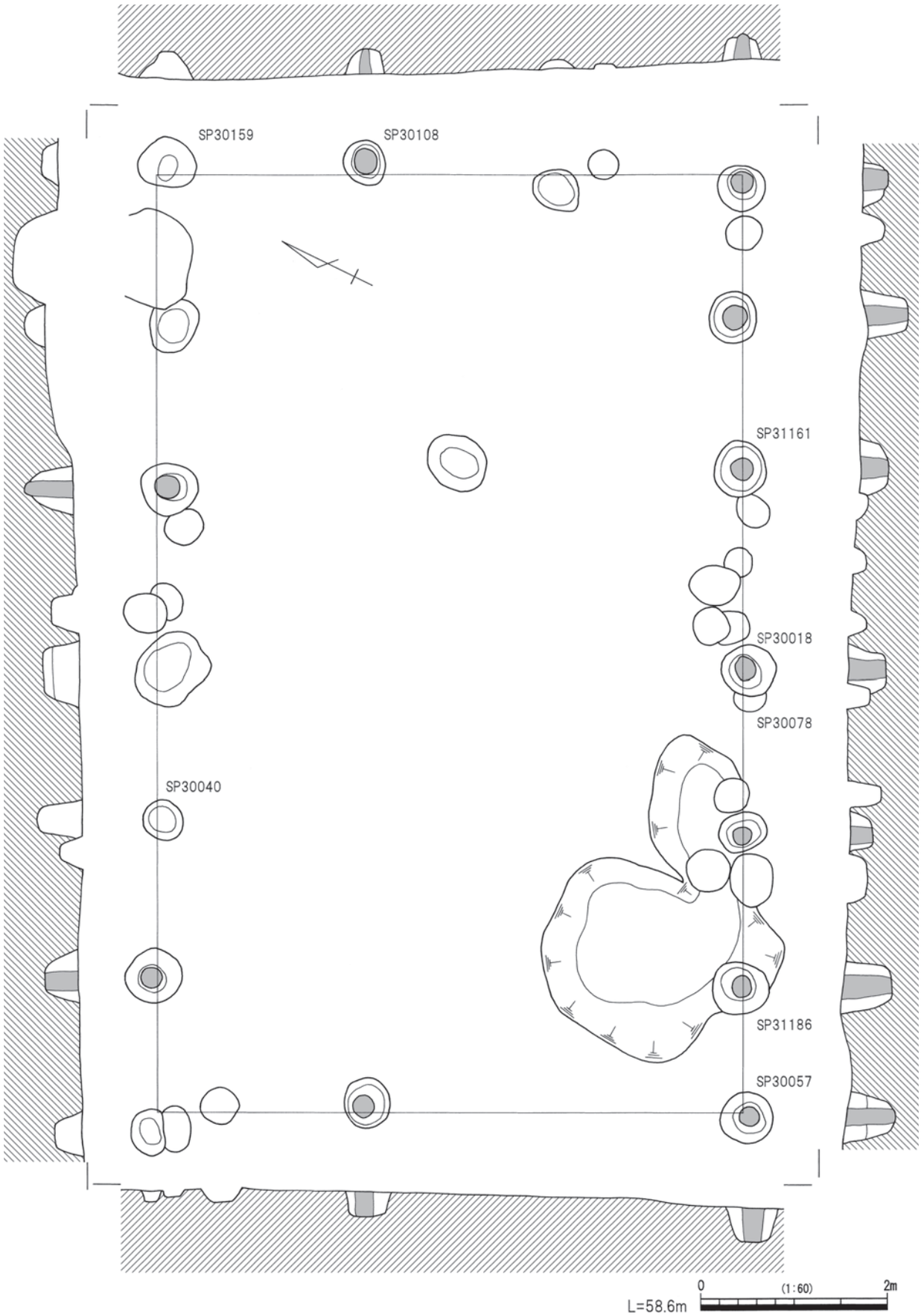


図 182　SH3008 実測図

SH3008（図 182 ～ 184、図版 65・87）

SH3007 から約 7 m南西に位置する。梁行 3 間・桁行 6 間の側柱建物で、南北の主軸が N－26°－ W となる東西棟である。建物規模は、梁行 6.3 m × 桁行 10.1 m と大型である。柱間は、梁行が北から 220 ＋ 220 ＋ 190 ㎝、桁行が西から 140 ＋ 160 ＋ 190 ＋ 190 ＋ 180 ＋ 150 ㎝と、ややばらつきがある。東側の 2 間目には、建物内部に柱穴が確認される。屋内棟持ち柱か間仕切り柱と推測される。

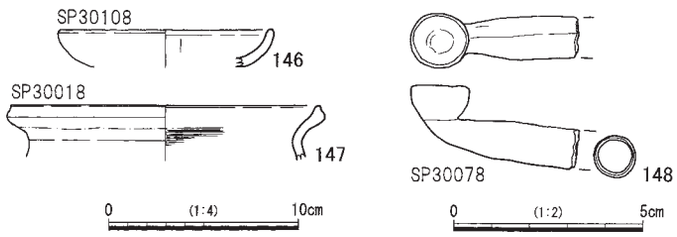


図 183　SH3008 出土遺物

柱痕跡は多くの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 26 ㎝で、柱穴掘方は直径 44 ～ 58 ㎝の円形である。深さは 26 ～ 52 ㎝と全体的に深く、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物は比較的多く出土している。146 は土師質土器皿で、柱穴 SP30108 の掘方から出土している。比較的硬質で、薄手のつくりである。内面にはヘラナデの痕跡が確認される。147 はくの字形内耳鍋である。口縁部の破片で、柱穴 SP30018 から出土している。図示したものの他に、柱穴 SP30018・31161 と抜取り穴 SP30159・30040 からは土師質土器皿が各 1 点、柱穴 SP31186 からは土師質土器皿と羽釜、柱穴 SP30057 からは内耳鍋とみられる破片が 2 点出土している。また、柱穴 SP30018 を切る小穴 SP30078 からは、キセルと小碗が出土している。キセル（148）は、火皿の補強体が消失しているなど、形態から 19 世紀代のものとみられる。小碗は図示できない小片であるが、美濃窯産の製品で、登窯 7 ・ 8 期のものである。

これらの遺物から、SH3008 は 17 ～ 18 世紀代の建物と推定される。

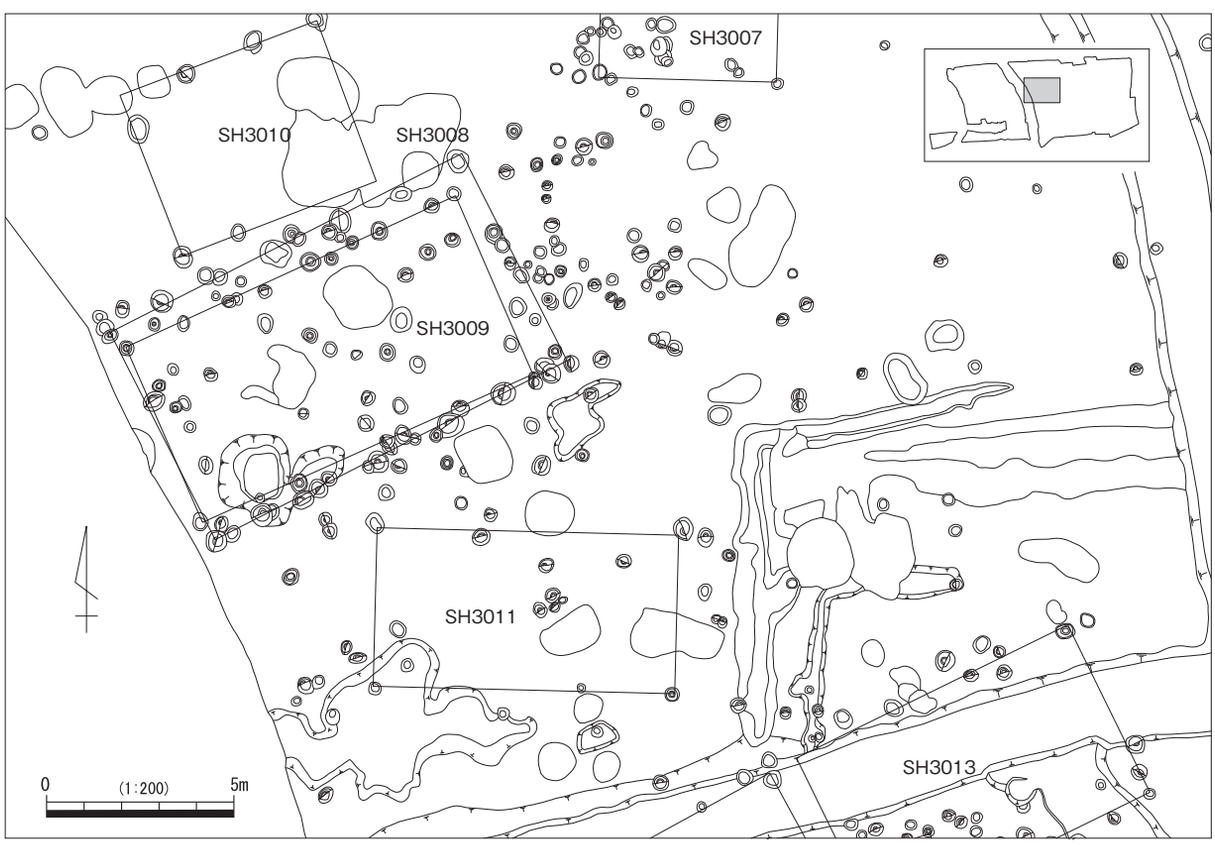


図 184　SH3008 ～ 3011 配置図

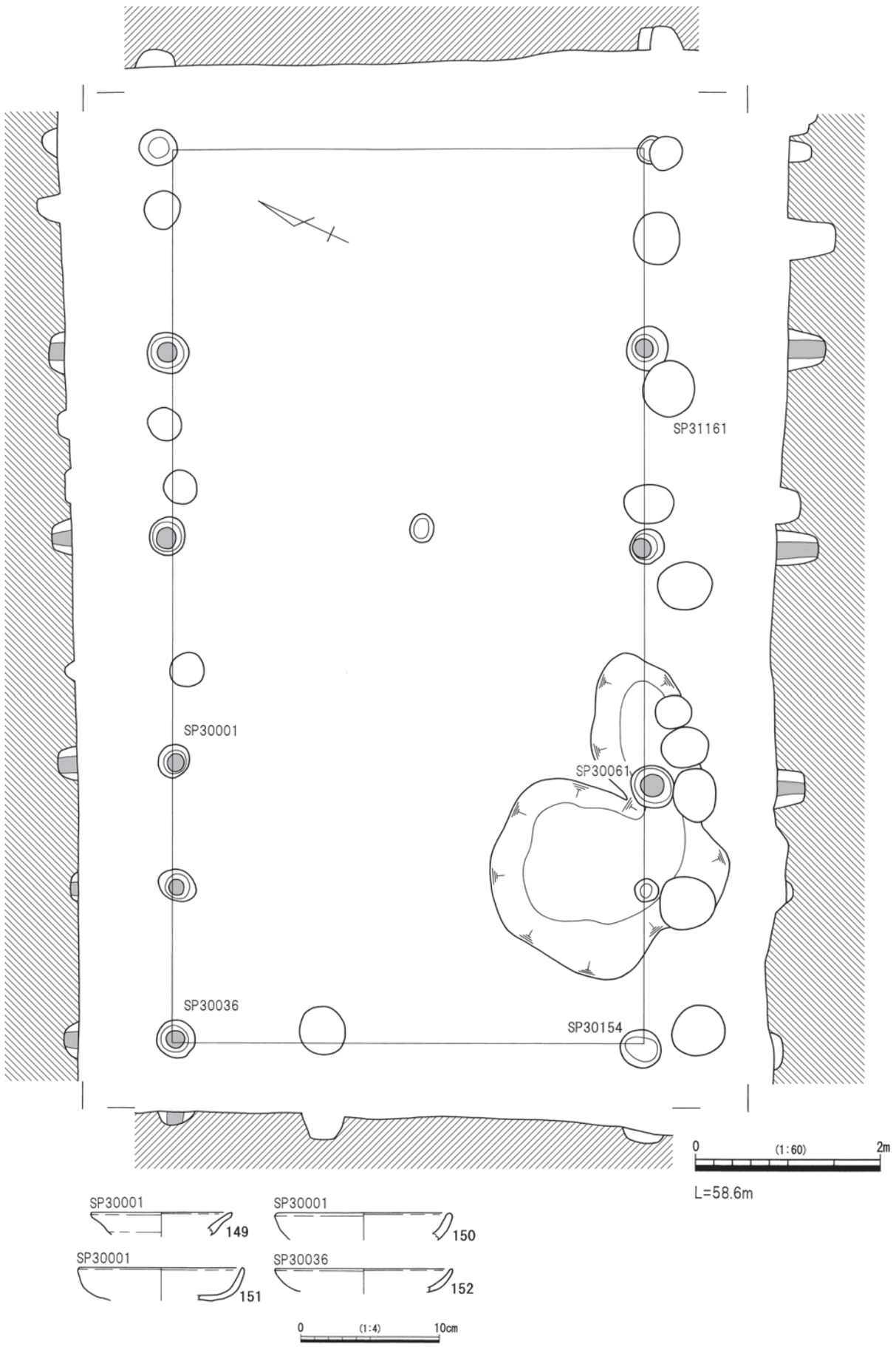


図 185　SH3009 実測図・出土遺物

SH3009（図 184・185・222、図版 48・65）

SH3008 とほぼ重複して位置しており、SH3008 の柱穴 SP31161 に柱穴を切られていることから、SH3008 に先行する建物であることが確かめられている。梁行 1 間・桁行 5 間の側柱建物で、南北の主軸が N－25°－W となる東西棟である。建物規模は、梁行 5.1 m×桁行 9.7 m と大型である。柱間は、桁行が西から 170 + 120 + 250 + 210 + 220 ㎝と、ばらつきがある。SH3008 と同様に、東側の 2 間目には、建物内部に柱穴が確認される。屋内棟持ち柱か間仕切り柱と推測される。

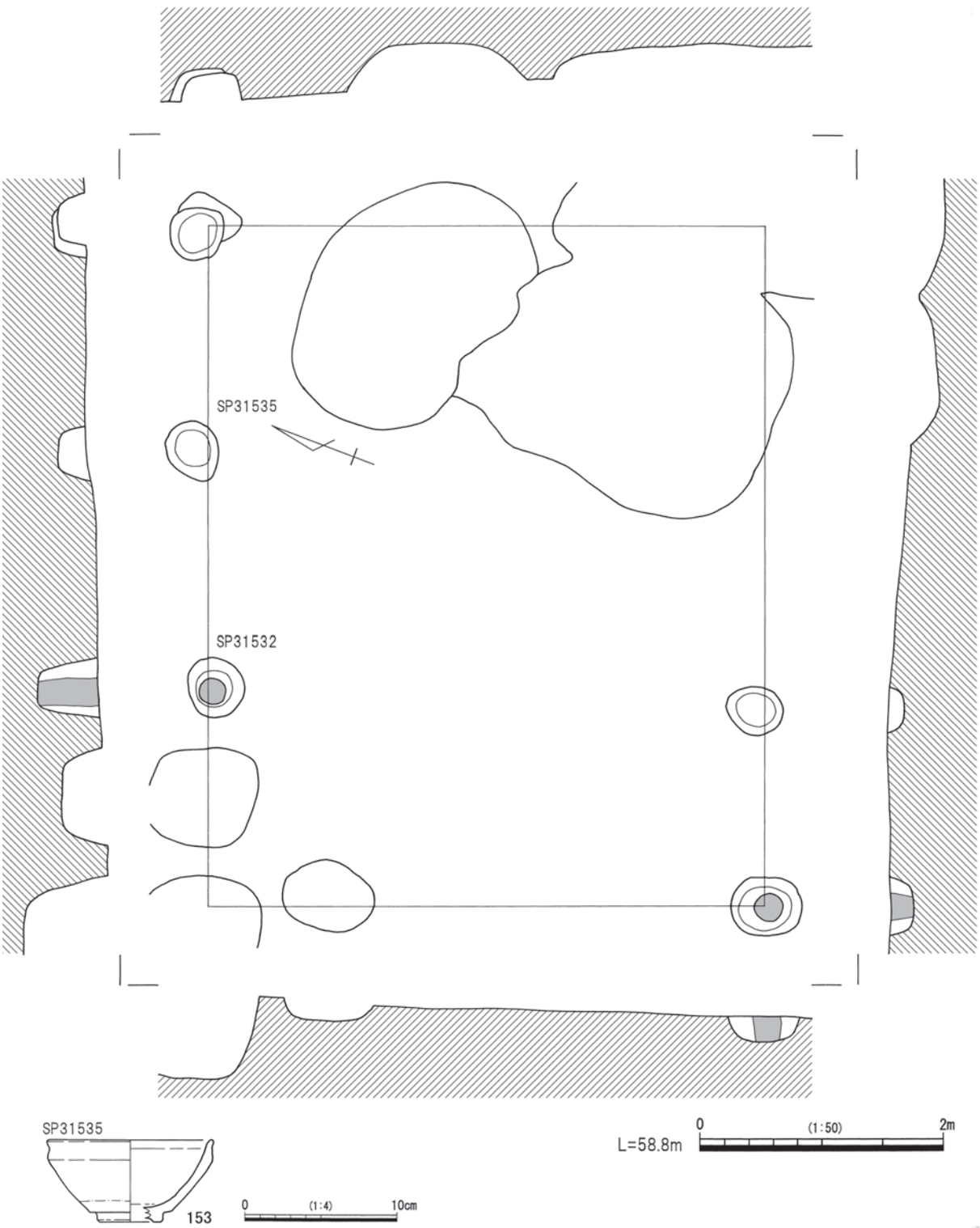


図 186　SH3010 実測図・出土遺物

多くの柱穴で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 25 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 46 ㎝の円形である。深さは８～ 44 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っているが、わずかに南東側が低くなる。

遺物は、柱穴 SP30001・30036・30061・30154 から出土している。149 ～ 151 は SP30001 から出土した遺物である。149 は瀬戸美濃窯産の稜皿で、大窯３期のものである。150 と 151 は土師質土器皿である。152 は土師質土器皿で、SP30036 から出土している。232 は皇宋通宝で、抜取り穴 SP30154 から出土している。図示したもののほかに破片ではあるが、SP30061 から内耳鍋とみられる破片１点と、土師質土器皿の破片が２点出土している。

これらの遺物と後出する SH3008 が 17 ～ 18 世紀の建物とみられることから、SH3009 は 16 世紀後半～ 17 世紀代の建物であると推定される。建物の構造が近似しており、ほぼ同じ位置に建てられていることから、SH3009 の建て替えにより SH3008 が築造されたものとみてよい。

SH3010（図 184・186、図版 65）

SH3008・3009 の北側に隣接する。梁行１間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－20°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 4.6 ｍ×桁行 5.6 ｍと SH3008・3009 に比べて小型である。柱間は、桁行が西から 170 ＋ 220 ＋ 170 ㎝と、中央の柱間がやや広い。いくつかの柱穴は、攪乱により失われている。また、梁行が１間では広過ぎることから、間には棟柱が存在した可能性が高い。

柱痕跡は２ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模はいずれも直径 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 60 ㎝と 50 ㎝の円形である。深さは 20 ㎝と 50 ㎝で、根入れの高さは北側がやや低い。

遺物としては、抜取り穴 SP31535 から天目茶碗（153）が出土している。瀬戸美濃窯産の製品で、大窯４期のものである。このほかに、柱穴 SP31532 の掘方から、土師質土器皿の破片が１点出土している。

これらの遺物から、建物の廃絶時期は 16 世紀後半以降であるといえる。どちらの建物かは特定できないが、建物の主軸や年代が近似していることから、SH3008 か SH3009 とセットとなる建物とみてよいであろう。

SH3011（図 184・187）

SH3008・3009 から約４ｍ南に位置する。梁行１間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－2°－Ｅとなる東西棟である。建物規模は、梁行 4.2 ｍ×桁行 8.0 ｍである。失われている柱穴もあるが、柱間は桁行が西から 270 ＋ 280 ＋ 250 ㎝であると推定される。

柱痕跡は３ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 30 ～ 50 ㎝の円形である。深さは 12 ～ 30 ㎝で、根入れの高さは南東側に向かって低くなっている。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高いと推測される。また、建物の主軸方位は、SH3004 や Sh3005 と近似しており、これらは近い時期の建物である可能性が高い。

SH3012（図 188・190・221、図版 66）

SH3011 から約５ｍ南に位置する。梁行３間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸はＮ－29°－Ｗとなる。建物規模が梁行 6.4 ｍ×桁行 6.6 ｍとなる、正方形に近い南北棟である。柱間は、梁行は西から 220 ＋ 220 ＋ 200 ㎝であり、桁行は西側が南から 260 ＋ 150 ＋ 250 ㎝、東側が南から 220 ＋ 190 ＋ 250 ㎝とばらつきがある。北東側には、建物内部にも柱穴が検出されている。南側が攪乱により失われているためやや不明瞭ではあるが、間仕切り柱の可能性が高いと推測される。柱抜き取り穴が多いが、柱痕跡は４ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 42 ㎝の円形であ

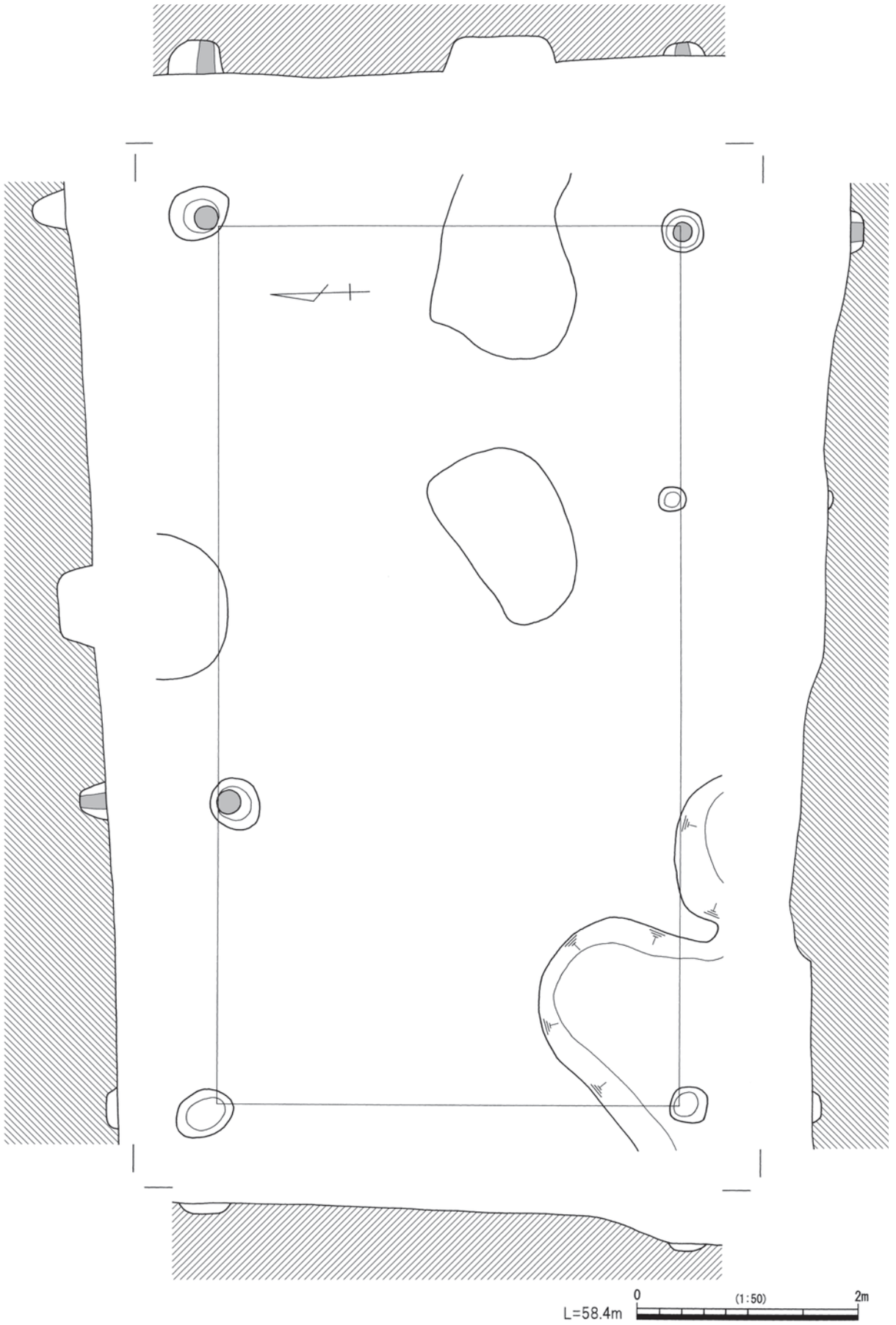


図 187　SH3011 実測図

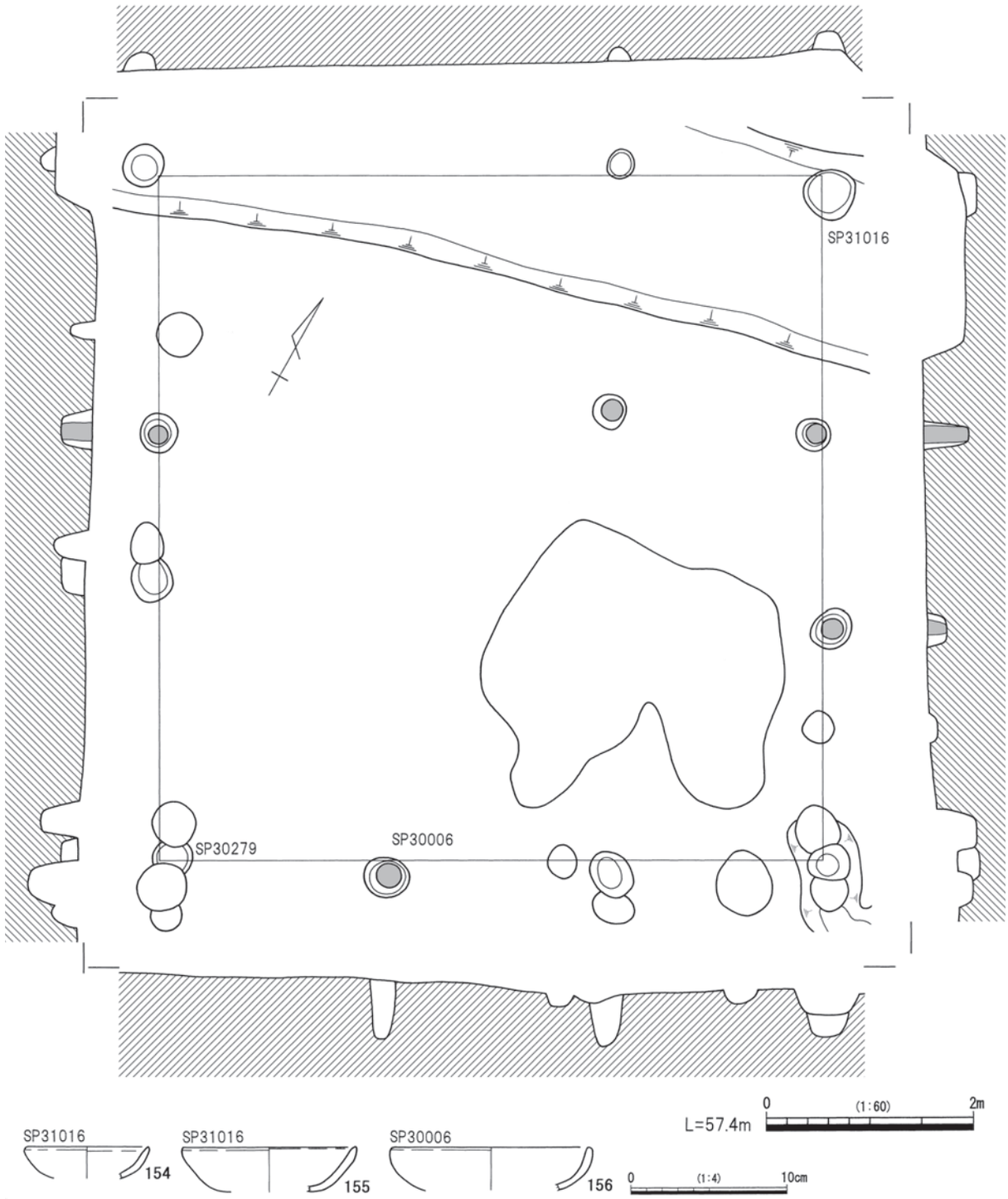


図 188　SH3012 実測図・出土遺物

る。深さは 18 ～ 44 ㎝で、根入れの高さにはばらつきがみられる。

遺物としては、土師質土器片が出土している。154 と 155 は、抜取り穴 SP31016 から出土した土師質土器皿である。156 と 201 は柱穴 SP30006 から出土した土師質土器皿である。SP30006 からは、このほかに土師質土器の破片が 4 点出土している。図示したもの以外には、細片ではあるが、抜取り穴 SP30279 から皿とみられる土師質土器が 1 点出土している。

これらの遺物から、SH3012 は中世後期から近世の建物と推定される。なお、建物の主軸が SH3008 などと近似することを考慮すると、中世後期後半から近世にかけての建物である可能性が高い。

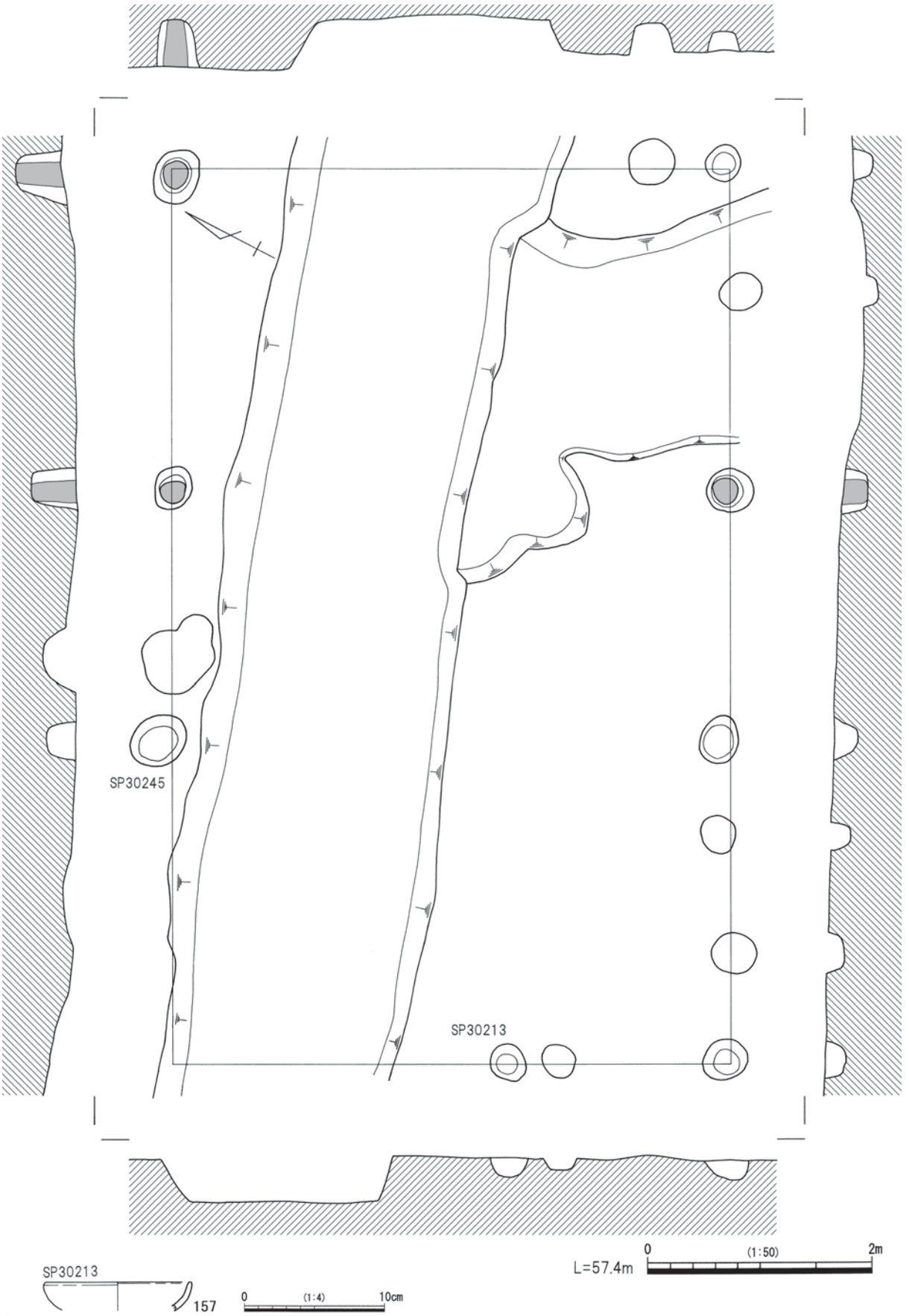


図 189　SH3013 実測図・出土遺物

SH3013（図 189・190）

SH3012 の東側に隣接する。攪乱などにより失われている部分も多いためやや不明確ではあるが、梁行２間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－26°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 5.0 ｍ×桁行 8.0 ｍである。柱間は、梁行が北から 300 ＋ 200 ㎝、桁行が西から 290 ＋ 220 ＋ 290 ＋ 230 ㎝である。桁行は中央の柱間が両端に比べて狭く、梁行の柱間は均等でない。

柱痕跡は３ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 46 ㎝の円形である。深さは 22 ～ 40 ㎝で、根入れの高さは北側が少し低い。

遺物としては、抜取り穴 SP30213・30245 から土師質土器片が出土している。157 は SP30213 から出土した土師質土器皿である。口縁部の破片であり、薄手のつくりのものである。SP30245 からは、図化できない小片ではあるが、土師質土器皿とみられる破片が２点出土している。

これらの遺物から、SH3013 は中世後期から近世の建物と推定される。また、隣接する SH3012 とは北側の面がほぼ揃っており、建物の主軸も近似していることから、対になる建物として建造されている可能性が高い。建物として使用された時期もほぼ同様とみてよいであろう。

SH3014（図 190・191）

SH3012・3013 と重複する場所に位置する。当然異なる時期の建物とみてよいが、柱穴に切り合い関係はなく、これらの建物との前後関係は遺構の上からは判断できない。梁行２間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－20°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 3.5 ｍ×桁行 6.3 ｍとやや小型である。

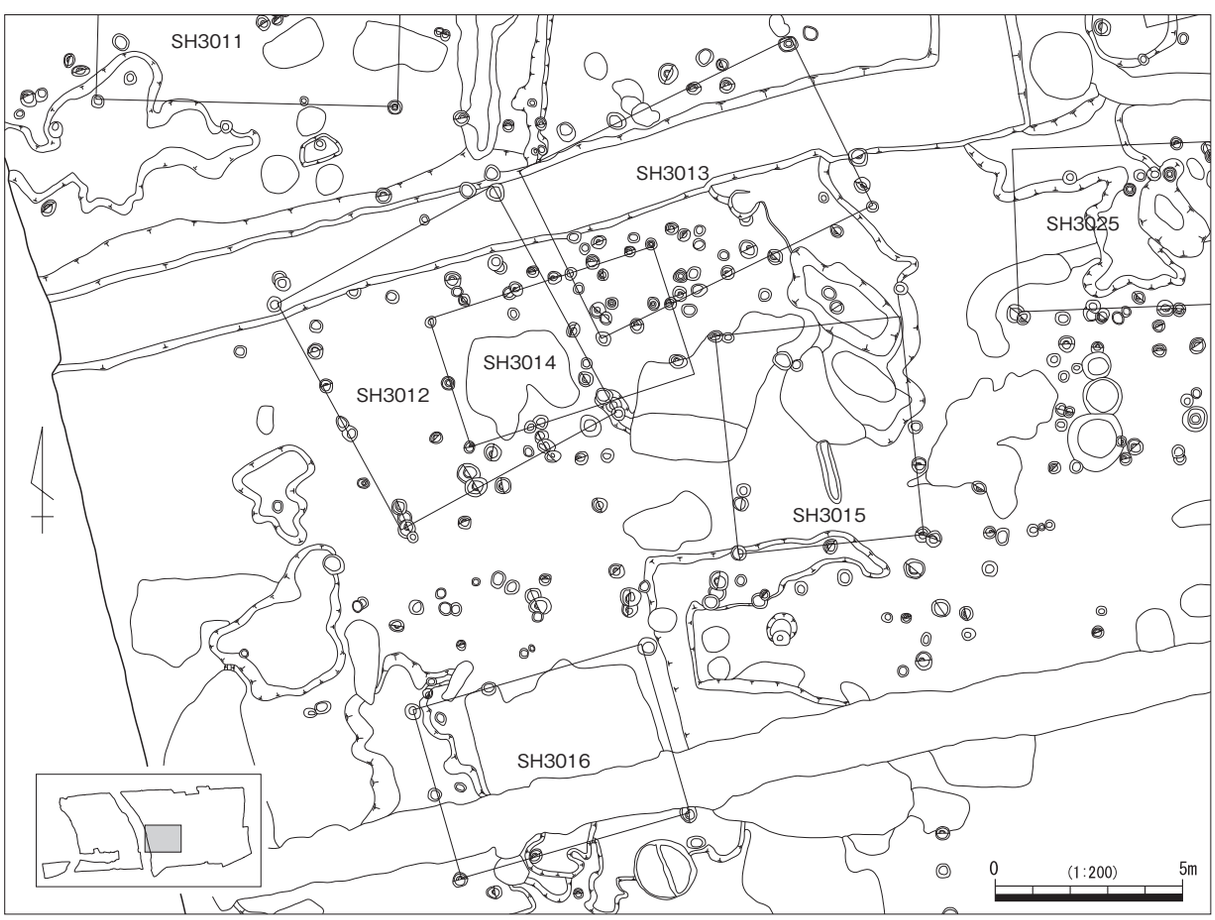


図 190　SH3012 ～ 3016 配置図（S ＝ 1：200）

柱間は、梁行が北から 170 + 180 ㎝、桁行が西から 230 + 240 + 230 + 160 ㎝と、ばらつきがある。

柱痕跡は多くの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模はいずれも直径 18 ㎝前後で、柱穴掘方は直径 32 ～ 40 ㎝の円形である。深さは 18 ～ 32 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなる。

遺物としては、柱穴 SP30198・30907 と抜取り穴 SP31272 から土師質土器片が各 1 点出土している。いずれも皿の破片と推測されるが、図化できない細片であり、遺物の詳細な年代は不明ではある。遺物の上からも、SH3012・3013 との先後関係は明らかにし得ないが、土師質土器皿の特徴から、少なくとも中世後期から近世の建物であることは確実といえる。

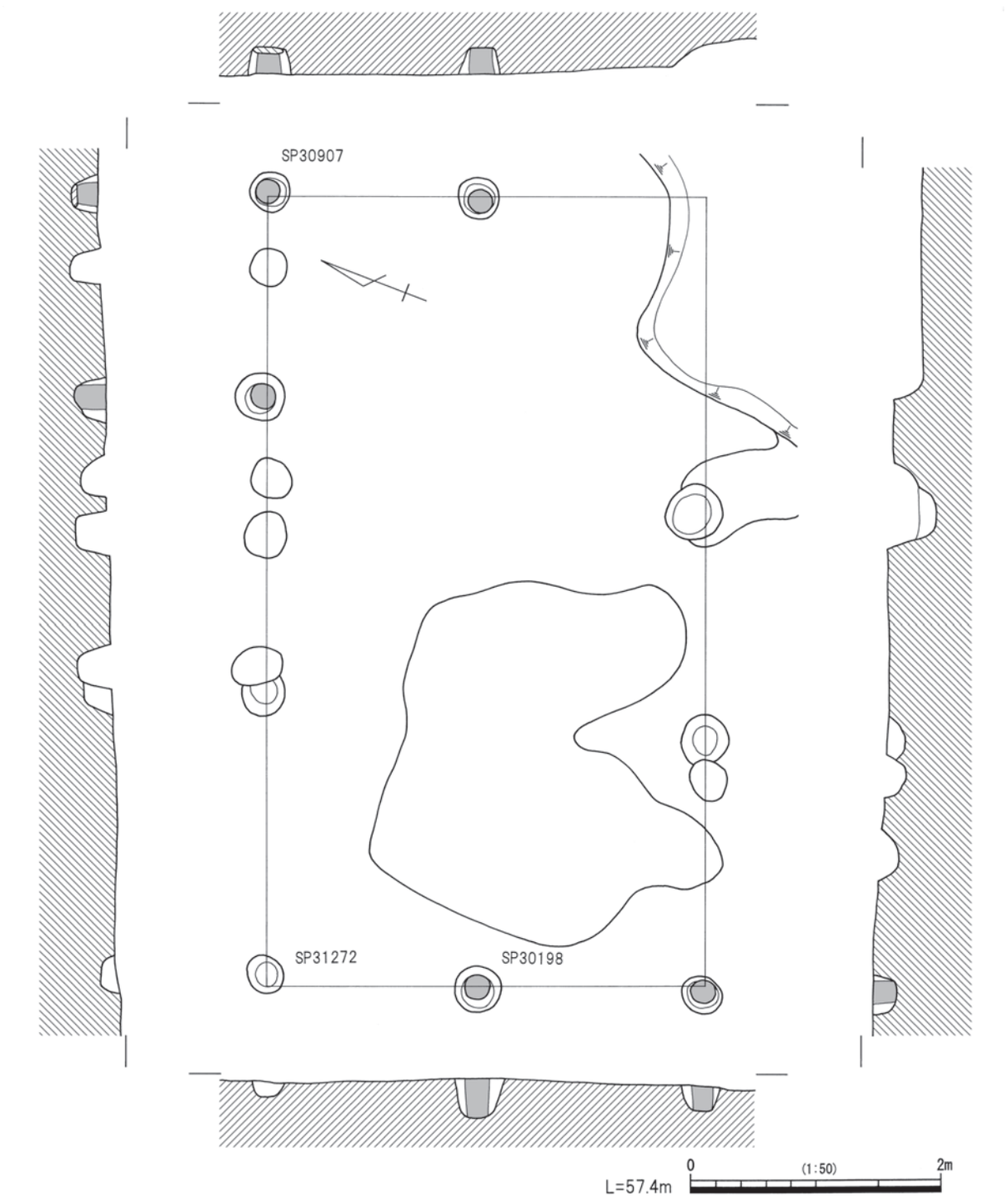


図 191　SH3014 実測図

SH3015（図 190・192、図版 66）

SH3014 の南東に隣接する。攪乱などにより、多くの柱穴が失われている。梁行２間・桁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－6°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 5.0 ｍ×桁行 5.8 ｍである。柱間は、梁行が 250 ㎝の等間、桁行は 290 ㎝の等間である。

柱痕跡は３ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 38 ～ 40 ㎝の円形である。深さは 20 ～ 36 ㎝で、根入れの高さは西側がやや低い。

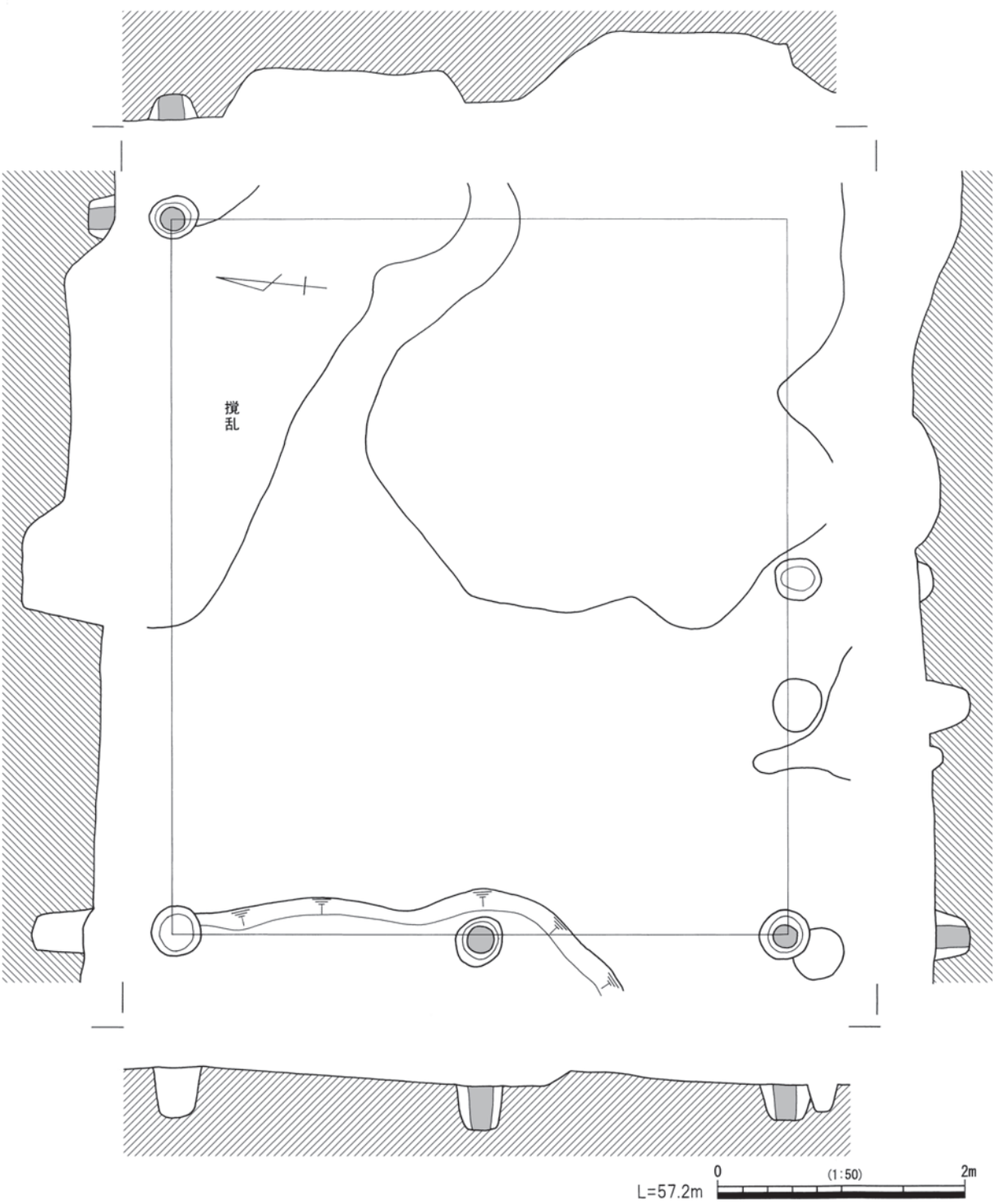


図 192　SH3015 実測図

遺物が出土していないため詳細な年代については不明ではあるが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物とみてよい。建物の主軸方位が、後述する SH3017 と近似しており、近い時期の建物である可能性が高いと推測される。

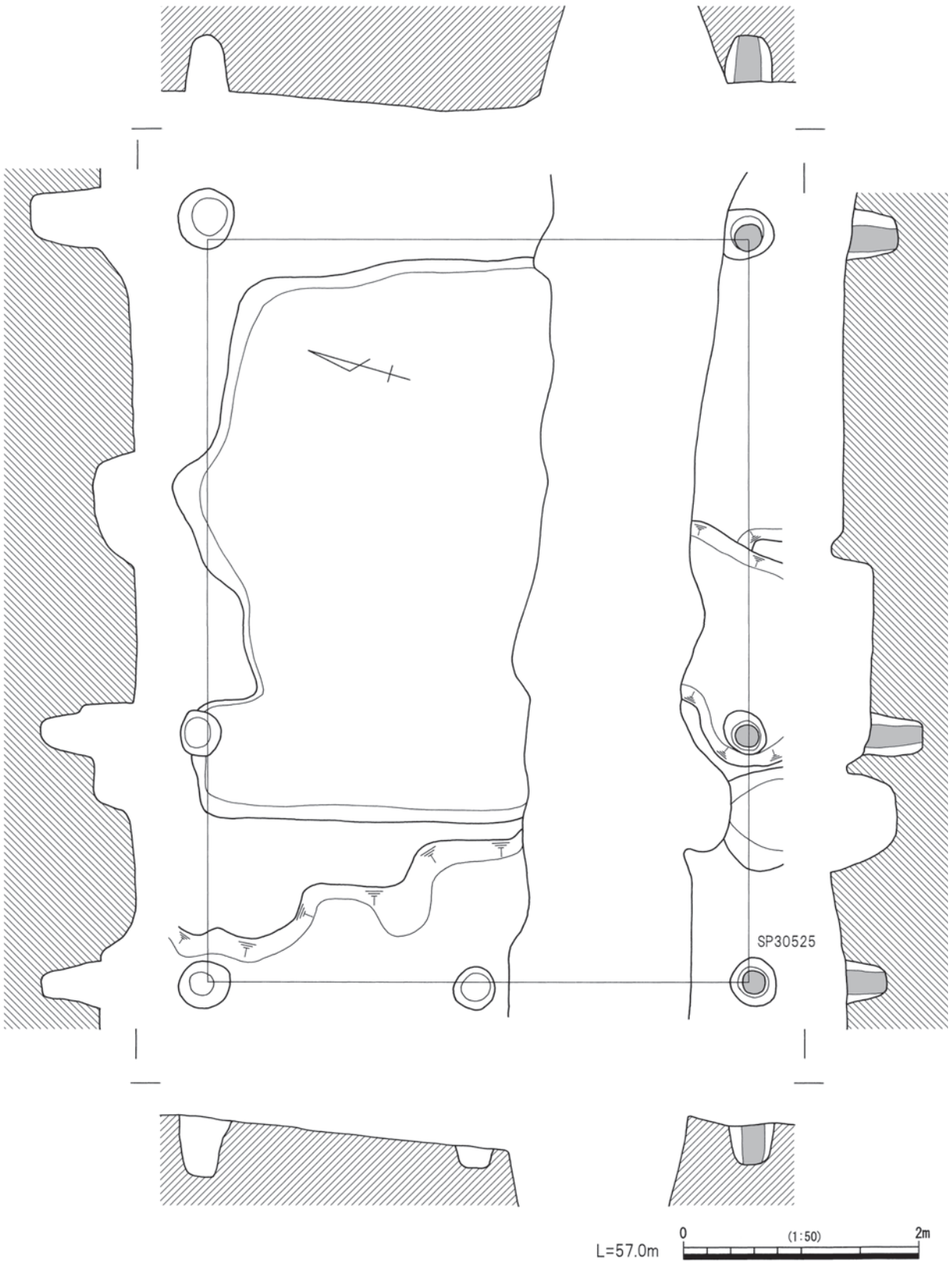


図 193　SH3016 実測図

SH3016（図 190・193）

SH3015 から約５ｍ南西に位置する。攪乱などにより失われている柱穴もあるが、梁行２間・桁行３間の側柱建物と推定される、南北の主軸がＮ－16°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 4.6 ｍ×桁行 6.3 ｍとなっている。柱間は、梁行が北から 230 ㎝の等間、桁行は東側の柱穴が失われてはいるが 210 ㎝の等間と推測される。

柱痕跡は南側の３ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ～ 44 ㎝である。深さは 32 ～ 46 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなっている。

遺物としては、柱穴 SP30525 から土師質土器片が１点出土しているのみである。図化できない小片であるが、土師質土器の羽釜の破片である。この遺物から、建物の年代は概ね 16 世紀以降とみてよい。

SH3017（図 194・195、図版 66）

SH3016 から約５ｍ南西に位置する。梁行３間・桁行５間の建物で、攪乱により一部失われているため確実ではないが、総柱建物の可能性がある。南北の主軸がＮ－8°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 6.6 ｍ×桁行 11.0 ｍと大型である。柱間は、梁行が北から 280 ＋ 190 ＋ 190 ㎝、桁行が西から 270 ＋ 190 ＋ 190 ＋ 240 ＋ 210 ㎝と、190 ㎝となるものが多いがややばらつきがみられる。北側と東側には建物内部に柱列が通る。束柱または間仕切り柱であると推測される。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 25 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ～ 54 ㎝の円形である。深さは 22 ～ 44 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。SP30554 では掘方の底部に根石が、SP30020 と SP30643 には礎板石が確認されている。

遺物は比較的多く出土している。158 は土師質土器皿であり、柱穴 SP30542 から出土している。159 は擂鉢の破片で、柱穴 SP30642 から出土している。志戸呂窯産の製品で、大窯４期に併行するものである。図示したもののほかには、柱穴 SP30549・31104・30020・30554 から土師質土器が出土している。いずれも土師質土器皿とみられる小片である。

これらの出土遺物から、SH3017 は 16 世紀後半以降の建物と推定される。

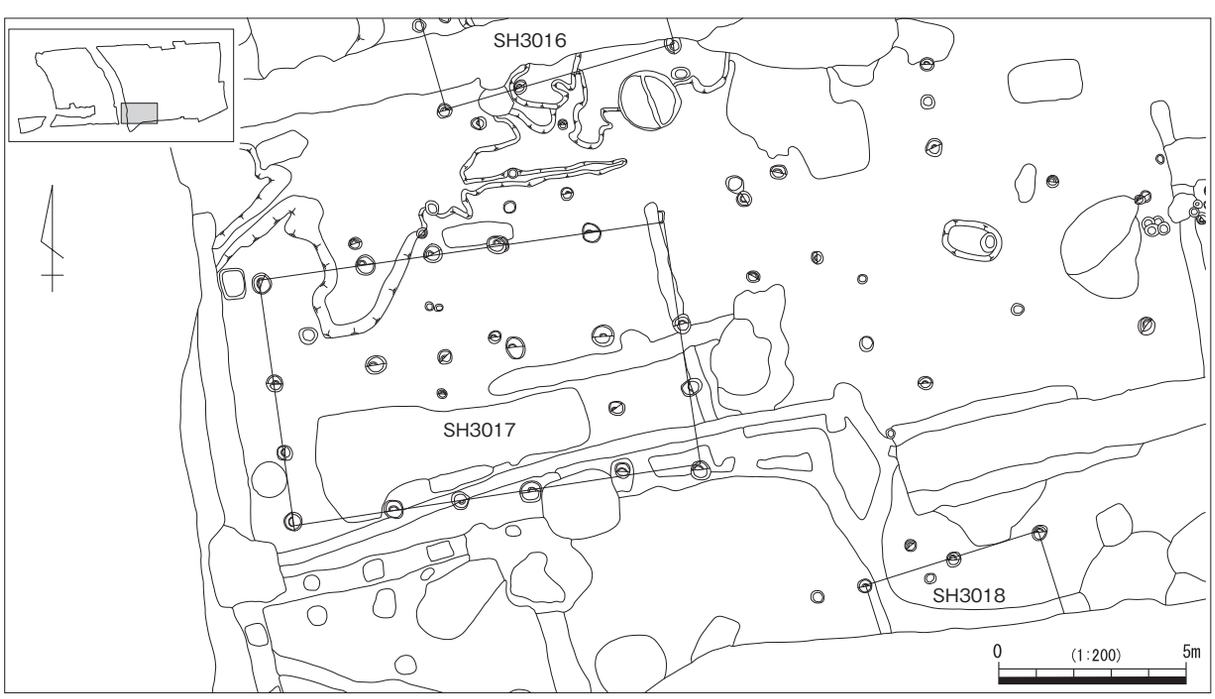


図 194　SH3017・3018 配置図

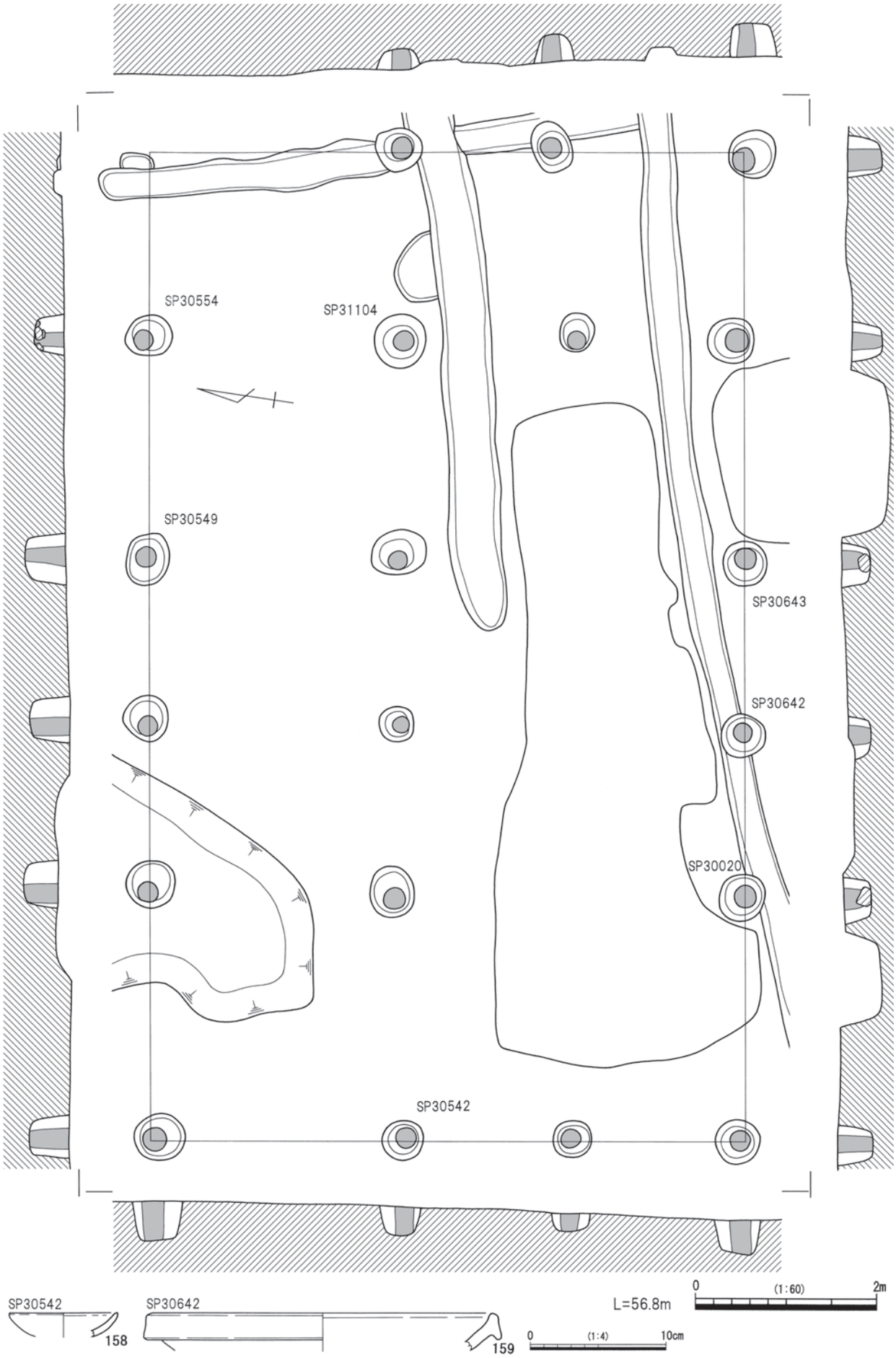


図 195　SH3017 実測図・出土遺物

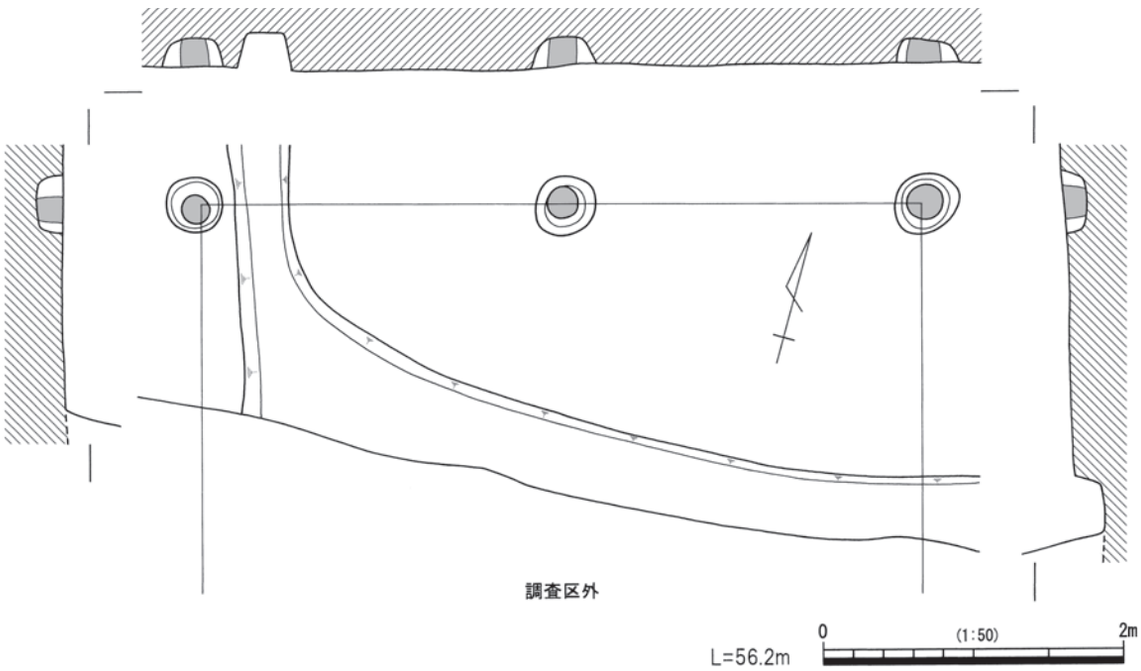


図 196　SH3018 実測図

SH3018（図 194・196）

SH3017 から約 10 ｍ南東の調査区境に位置しており、建物の大半は調査区外となっている。梁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－17°－Ｗとなる南北棟と推定される。建物規模は、梁行 4.8 ｍと小型である。梁行の柱間は、240 ㎝の等間である。

柱痕跡はすべての柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 38 ～ 40 ㎝の円形である。深さは 12 ～ 18 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高いと推測される。建物の主軸が SH3014 や SH3016 などと近似していることから、近い時期の建物である可能性が高い。

SH3019（図 197・199）

SH3006 から約 12 ｍ南東の、３区中央やや北側に位置する。攪乱等により一部失われているが、梁行３間・桁行５間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－13°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 6.6 ｍ×桁行 10.3 ｍと大型である。柱間は、梁行が北から 270 ＋ 210 ＋ 180 ㎝、桁行は北側が西から 230 ＋ 220 ＋不明＋不明＋ 200 ㎝、南側が 210 ＋ 220 ＋ 190 ＋ 200 ＋ 200 ㎝と、ややばらつきがある。北側には建物内部に柱列が通る。北側の片面庇とは考えにくいため、束柱または間仕切り柱と推測される。

多くは柱抜き取り穴であるが、３ヶ所の柱穴で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 42 ㎝の円形である。深さは 24 ～ 40 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物としては、土師質土器などが出土している。160 は初山窯産の丸皿で、抜取り穴 SP31251 から出土している。大窯３期に併行する時期のものである。161 と 162 は土師質土器皿で、抜取り穴 SP30838 から出土している。比較的硬質で、薄手のつくりのものである。図示したもののほかに、柱穴 SP31220 の柱痕跡埋土から土師質土器皿とみられる破片が１点出土している。

これらの遺物から、建物の廃絶時期は 16 世紀後半以降と推定される。

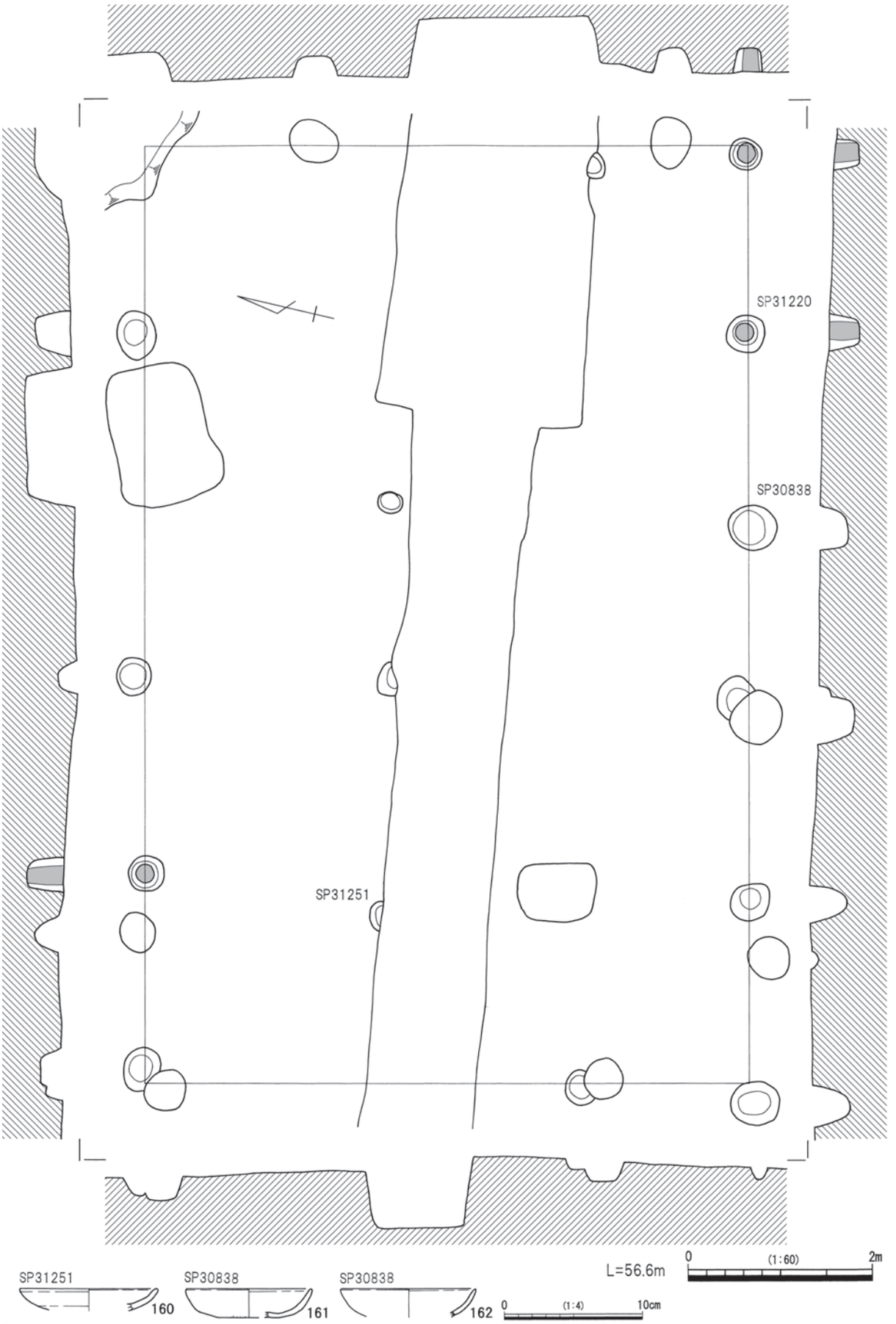


図 197　SH3019 実測図・出土遺物

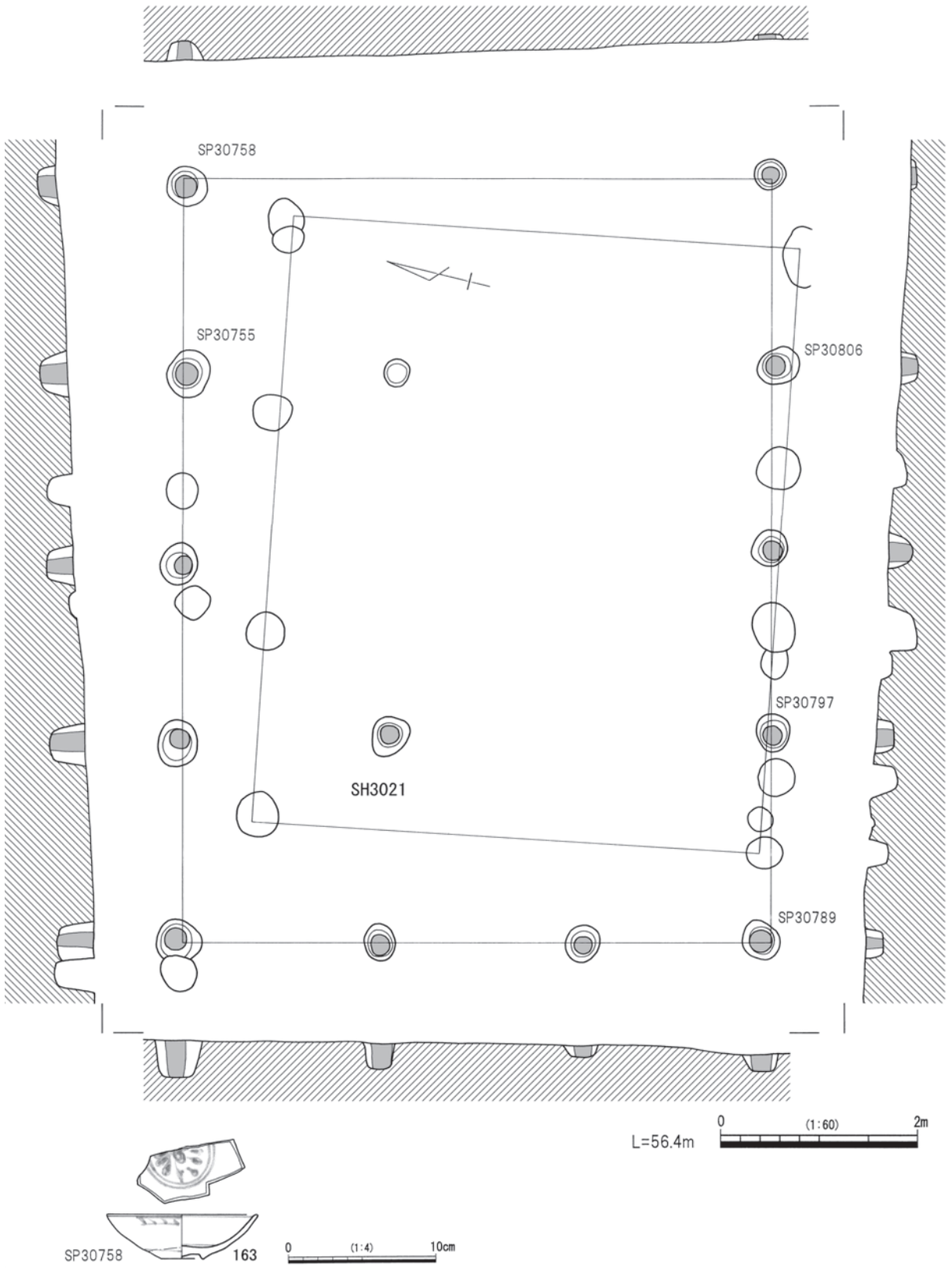


図 198　SH3020 実測図・出土遺物

SH3020（図 198・199、図版 67）

SH3019 の東側に隣接する。後述の SH3021 とは重複する位置関係にあるが、柱穴の切り合い関係がないため、建物の前後関係は遺構の上からは判断できない。梁行 3 間・桁行 4 間の側柱建物で、南北の主軸が N－15°－ W となる東西棟である。建物規模は、梁行 6.0 m × 桁行 7.8 m である。柱間は、梁行が北から 210 ＋ 200 ＋ 190 ㎝、桁行が西から 210 ＋ 180 ＋ 200 ＋ 190 ㎝と、概ね 2 m前後ではあるがややばらつきがみられる。北側には建物内部に柱穴が確認される。東柱または間仕切り柱であろう。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 34 ～ 48 ㎝の円形である。深さは 10 ～ 40 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなる。

遺物としては、土師質土器と磁器が出土している。163 は磁器染付の皿であり、柱穴 SP30758 から出土している。見込には圏線と花文が描かれている。このほかに、柱穴 SP30789・30755・30806 からは土師質土器皿の破片が各 1 点、柱穴 SP30797 からは内耳鍋とみられる破片が 1 点出土している。

これらの遺物から、SH3020 は近世の建物であると推定される。

SH3021（図 199・200、図版 67）

SH3020 と重複する場所に位置する。梁行 1 間・桁行 3 間の側柱建物で、南北の主軸が N－20°－ W となる東西棟である。建物規模は、梁行 5.2 m × 桁行 6.3 m である。桁行の柱間は 210 ㎝の等間である。検出はされていないが、梁行が広いため間には妻柱が設けられていたものと推測される。

柱痕跡は 5 ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 46 ㎝の円形である。深さは 12 ～ 20 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなる。

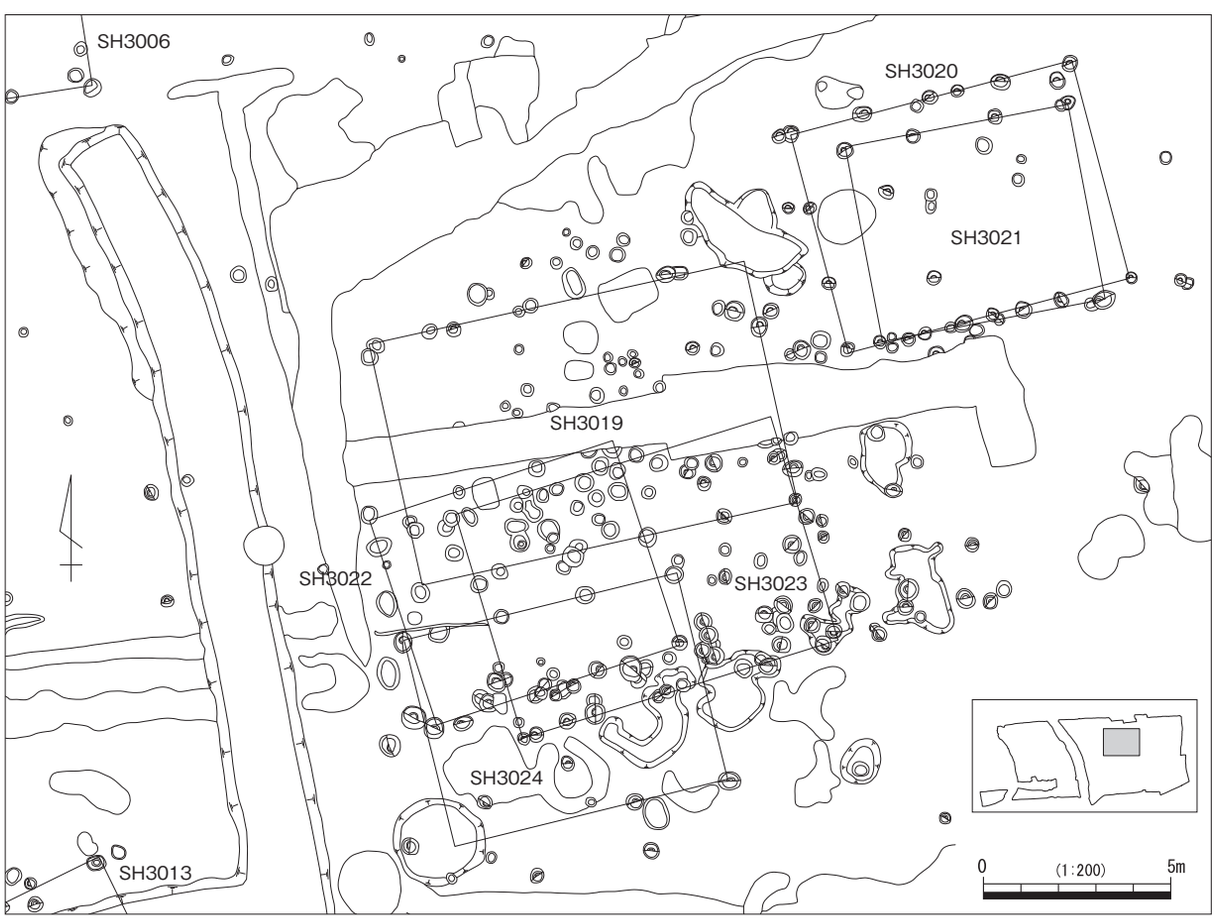


図 199　SH3019 ～ 3024 配置図

遺物は瀬戸窯産の製品が２点出土している。164 は縁釉はさみ皿である。大窯１期のもので、柱穴 SP30795 の柱痕跡の埋土から出土している。165 は四耳壺である。古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期のもので、抜取り穴 SP30807 の埋土から出土している。

柱痕跡から出土した遺物がどのように流入したかが問題ではあるが、SH3021 は概ね 15 ～ 16 世紀頃の建物であるとみてよいであろう。

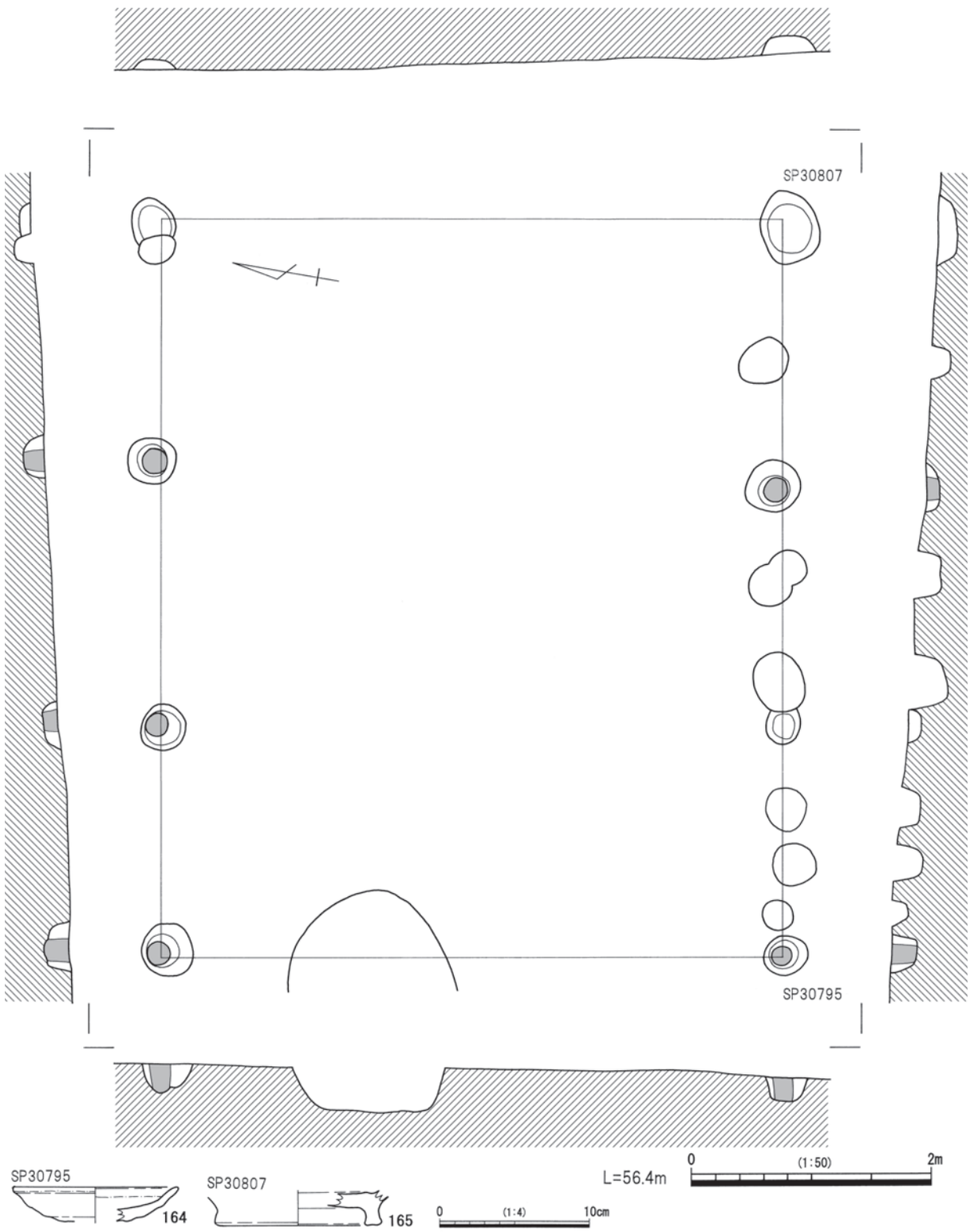


図 200　SH3021 実測図・出土遺物

SH3022（図 199・201、図版 67）

SH3019 の南西に位置する。SH3019・3023・3024 とは一部重複する位置関係にある。SH3019 の柱穴を切っていることが確認されている。SH3023 と 3024 とは、遺構の切り合い関係がないため遺構の上からは前後関係が判断できないが、SH3019 より後出する建物であることは明らかである。梁行 2 間・

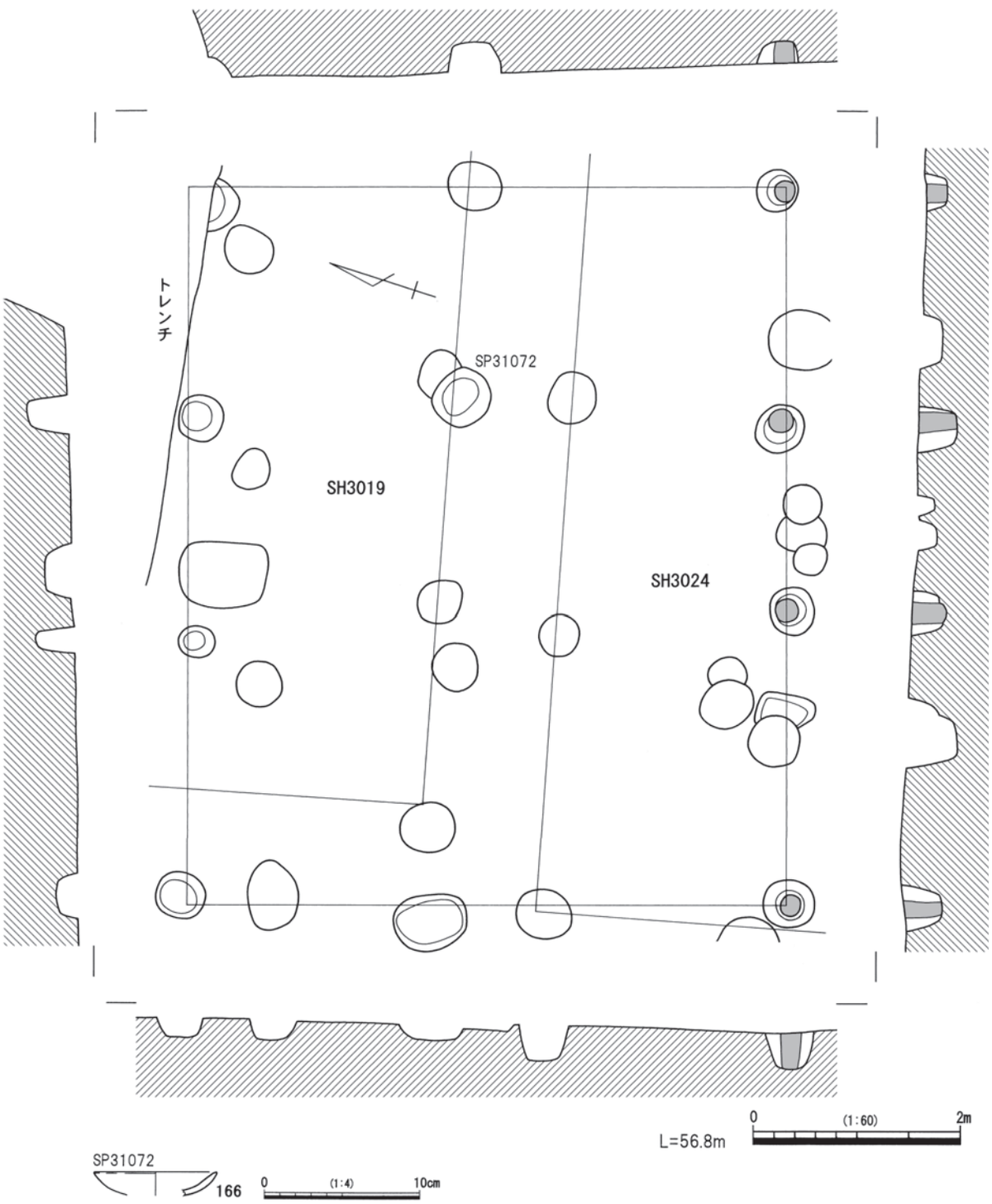


図 201　SH3022 実測図・出土遺物

桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－18°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 5.8 ｍ×桁行 7.0 ｍである。柱間は、梁行が北から 260 ＋ 320 ㎝、桁行は北側が西から 260 ＋ 220 ＋ 220 ㎝、南側が 280 ＋ 200 ＋ 220 ㎝とばらつきがある。東側には建物内部に柱抜き取り穴が確認される。束柱または間仕切り柱の跡と推測される。

柱痕跡は南側の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 28 ～ 52 ㎝の円形である。深さは 14 ～ 38 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物としては、抜取り穴 SP31072 から土師質土器皿（166）が１点出土しているのみである。比較的硬質で、薄手のつくりである。遺物の詳細な年代は不明ではあるが、先行する建物である SH3019 が 16 世紀後半以降の建物と推定されることから、SH3022 は近世の建物である可能性が高い。

SH3023（図 199・202、図版 67）

SH3019 の南側に位置する。SH3019・3022・3024 とは一部重複する位置関係にある。いずれの建物とも遺構の切り合い関係はなく、遺構の上からは前後関係が判断できない。梁行３間・桁行４間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－17°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 6.3 ｍ×桁行 8.8 ｍである。柱間は、梁行が北から 220 ＋ 250 ＋ 160 ㎝、桁行が西から 200 ＋ 210 ＋ 210 ＋ 260 ㎝と、不統一である。

柱痕跡は南側の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 48 ㎝の円形である。深さは 20 ～ 30 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなっている。

遺物は比較的多く出土している。167 は瀬戸窯産の天目茶碗である。抜取り穴 SP31064 から出土しており、大窯３期のものである。168 と 169 は土師質土器皿である。いずれも柱穴 SP30730 から出土している。SP30730 では、内耳鍋とみられる破片も出土している。これらのほかに、柱穴 SP30728 からくの字形内耳鍋の破片が出土している。

これらの遺物から、SH3023 の建造時期は 15 世紀以降、廃絶時期は 16 世紀後半以降であることがわかる。明確な近世の遺物は出土していないが、建物の主軸方位は SH3022 と近似しており、近世の建物である可能性も考えられる。

SH3024（図 199・203、図版 67）

SH3022 の南側に位置する。SH3022・3023 とは一部重複する位置関係にある。南西の隅柱は、攪乱により失われている。いずれの建物とも遺構の切り合い関係はなく、遺構の上からは前後関係が判断できない。梁行２間･桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－13°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 5.7 ｍ×桁行 7.6 ｍである。柱間は、梁行が北から 210 ＋ 360 ㎝、桁行が西から 260 ＋ 240 ＋ 260 と、ややばらつきがある。東側には建物内部に柱穴が確認される。間仕切り柱であると推測される。

柱痕跡は多くの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 44 ～ 60 ㎝の円形である。深さは 22 ～ 34 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなっている。

遺物は、いずれも図化できない小片であるが、土師質土器の破片が出土している。柱穴 SP30875 からは、くの字形内耳鍋とみられる破片が２点出土している。柱穴 SP30872 と柱穴 SP31230 からは、土師質土器皿とみられる破片が各１点出土している。

これらの遺物から、詳細な年代については不明であるが、SH3024 は 15 世紀以降の建物である。なお、場所が重複せず、建物の主軸が近似する SH3019 とは、セットになる建物の可能性が高い。SH3024 の廃絶時期は、SH3019 と同じ 16 世紀後半以降とみてよいであろう。重複する位置関係にある SH3022・3023 との前後関係は、SH3022 が SH3019 より後出する建物であることから、SH3022・3023 よりも先行する建物である可能性が高いと推測される。

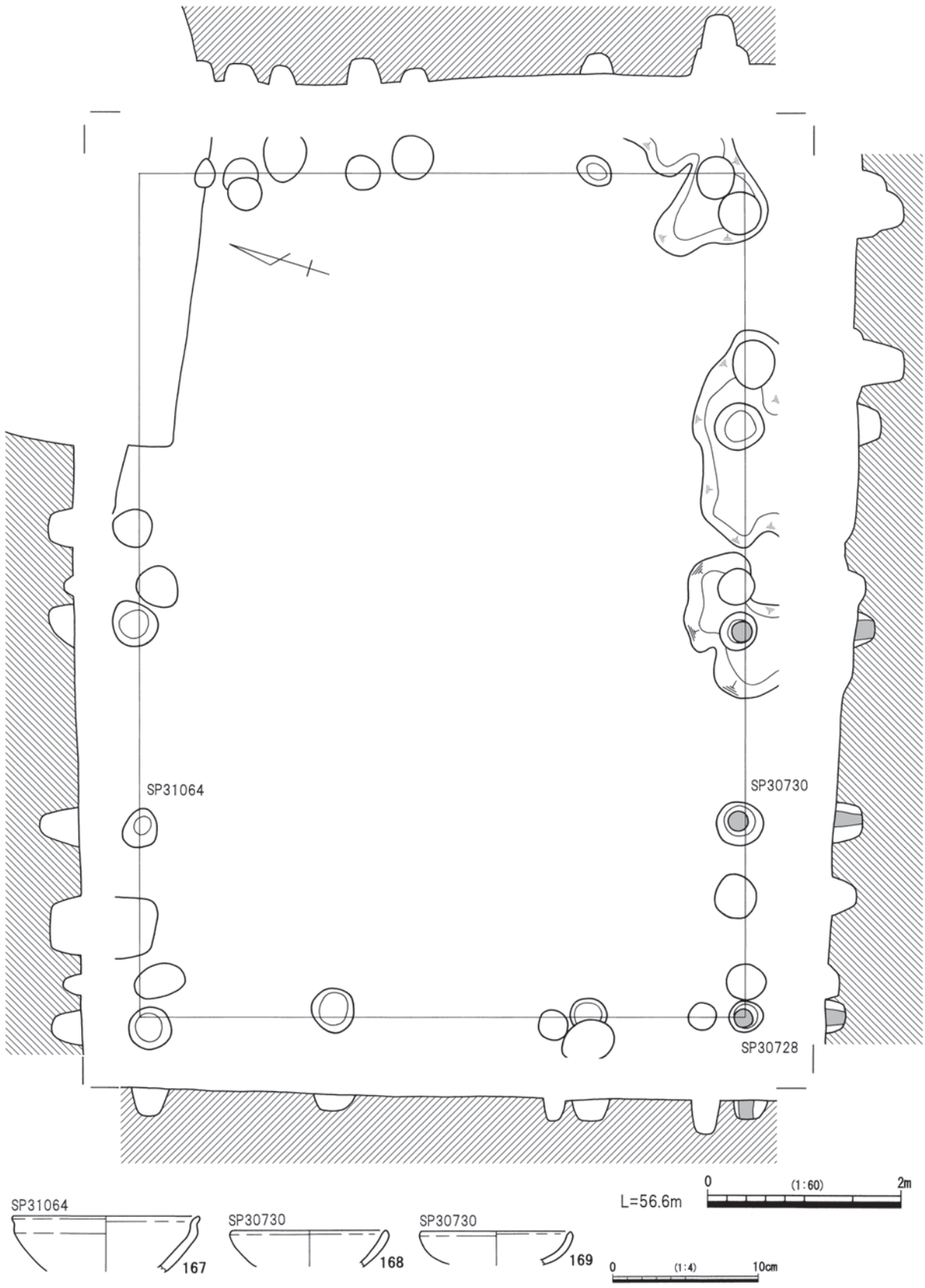


図 202　SH3023 実測図・出土遺物

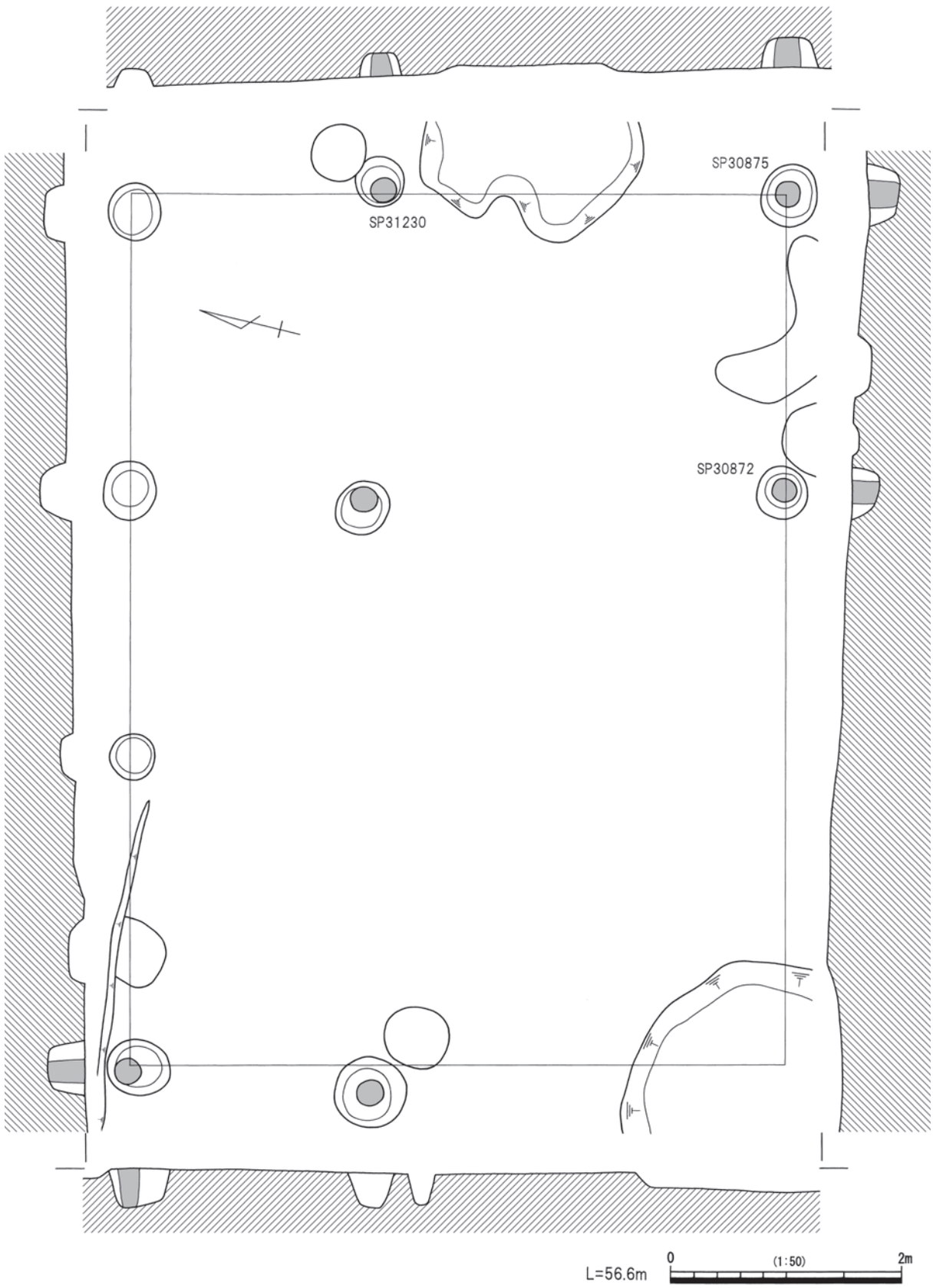


図 203　SH3024 実測図

SH3025（図 204・206）

SH3024 から約 5 m南西に位置する。梁行 1 間・桁行 3 間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−5°−Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 3.6 m × 桁行 6.0 mである。桁行の柱間は、北側が西から 160 + 260 + 180 ㎝、南側が西から 180 + 240 + 180 ㎝である。SH3027 と接しており、建物の主軸も同じであることから、連結した建物であった可能性も考えられる。

柱痕跡は 4 ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 〜 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 34 〜 40 ㎝の円形である。深さは 20 〜 30 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなる。

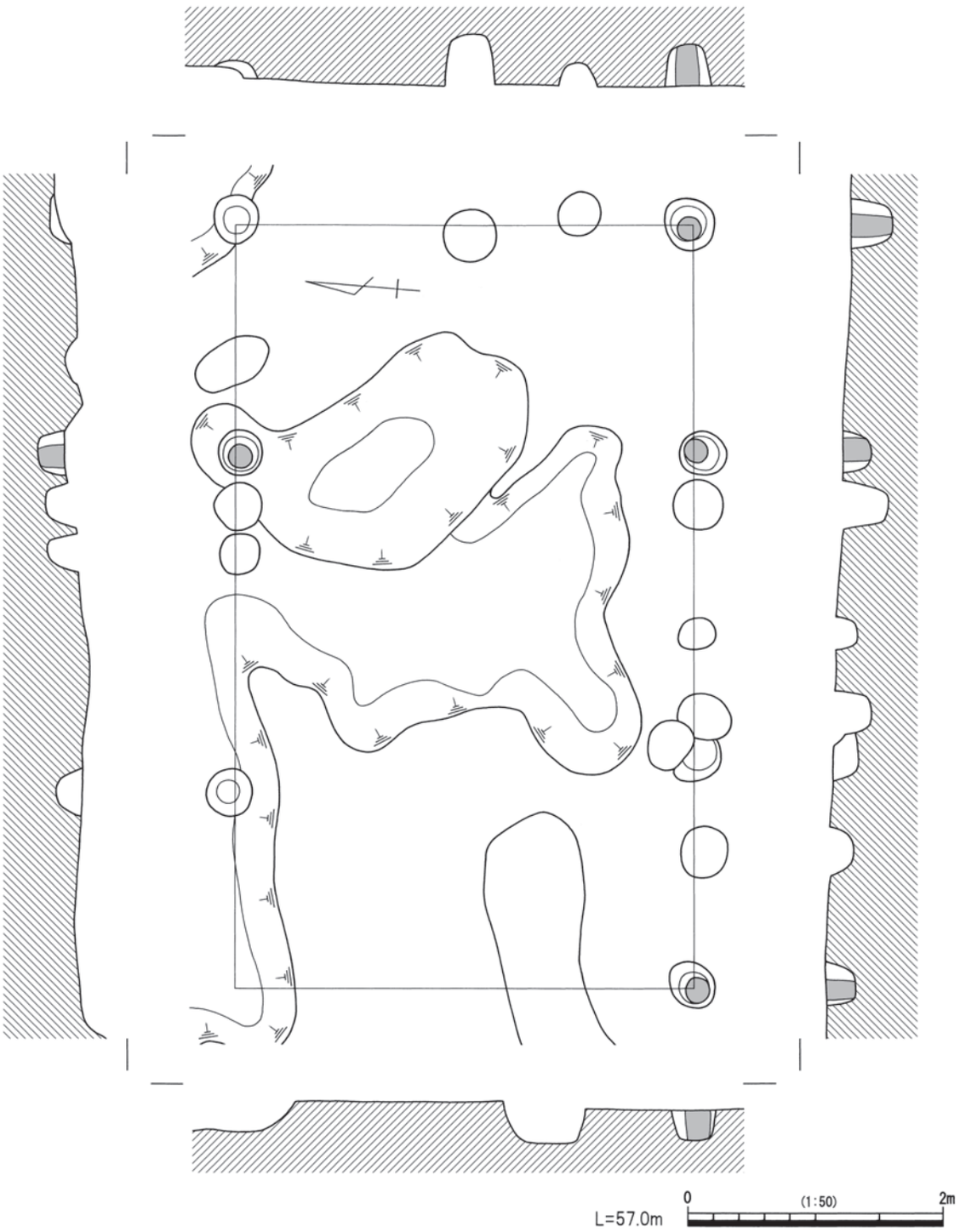


図 204　SH3025 実測図

遺物が出土していないため詳細な年代については不明ではあるが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高い。また、前述のようにSH3027と連結する建物であるとすると、増築の可能性はあるにせよ、近接した時期の建物とみてよい。

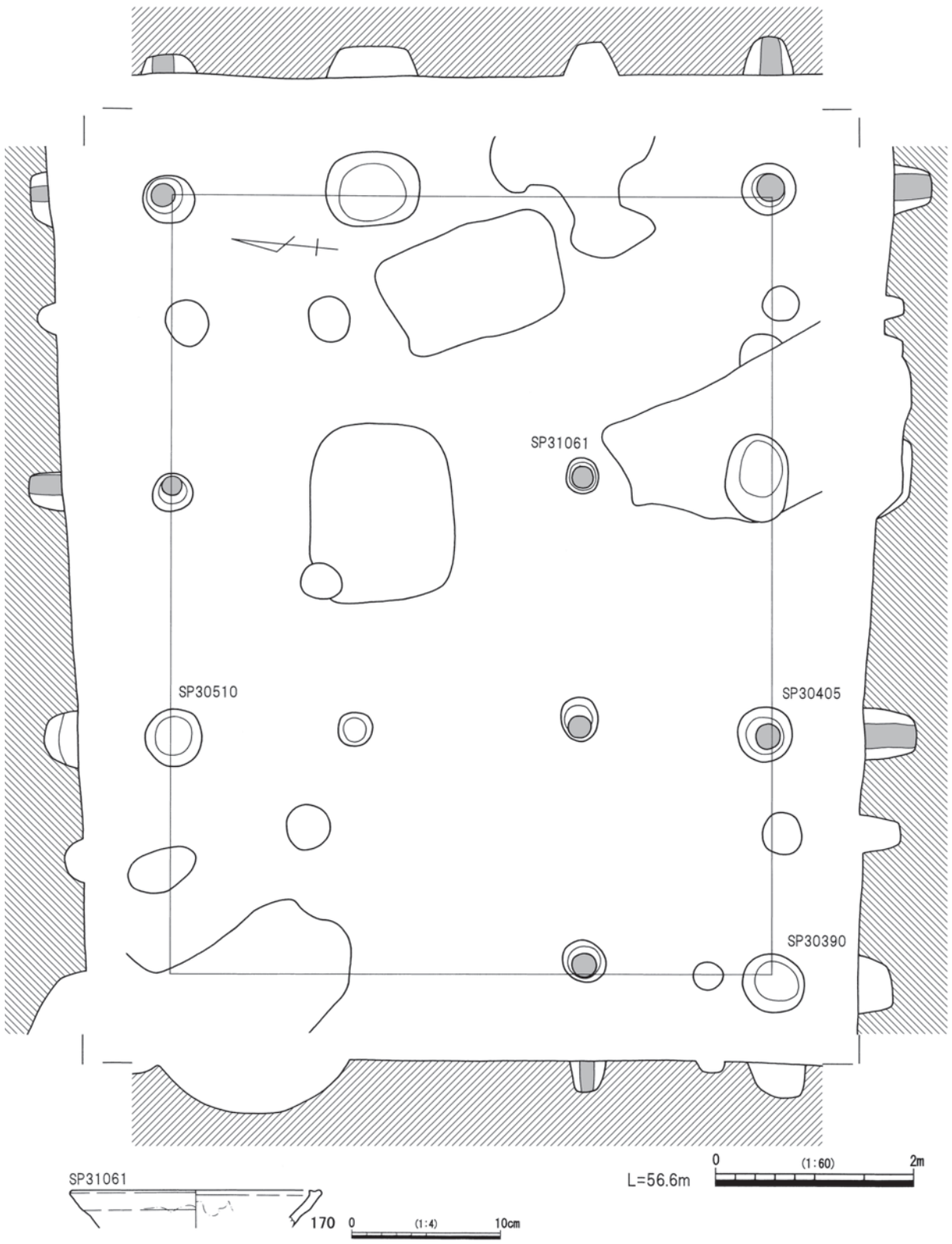


図 205　SH3026 実測図・出土遺物

SH3026（図 205・206）

SH3025 の東側に位置する。SH3025・3027・3028 と一部重複する位置関係にあるが、いずれの建物とも遺構の切り合い関係はなく、遺構の上からは前後関係が判断できない。攪乱などにより一部の柱穴を欠くが、梁行 3 間・桁行 3 間の総柱建物と推定される。南北の主軸がＮ−5°−Ｗとなる東西棟で、建物規模は梁行 6.1 ｍ×桁行 7.9 ｍである。柱間は、梁行が北から 190 ＋ 230 ＋ 190 ㎝、桁行が西から 240 ＋ 260 ＋ 290 ㎝と、ややばらつきがある。建物内部にも柱列が通る。側柱に比べてやや小規模であることから、束柱の可能性が高いと推測される。

柱痕跡は多くの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 25 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ～ 54 ㎝の円形である。深さは 18 ～ 50 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなっている。

遺物は比較的多く出土している。170 は瀬戸窯産の卸皿である。古瀬戸後Ⅲ期のものであり、柱穴 SP31061 の掘方から出土している。このほかにも、小片ではあるが遺物がいくつか出土している。抜取り穴 SP30510 からは、古瀬戸後期の祖母懐茶壺とくの字形内耳鍋の破片が出土している。柱穴 SP30405 からは内耳鍋とみられる破片が 1 点、SP31061・30390 からは土師質土器皿とみられる破片が各 1 点出土している。これらの遺物から、SH3026 は 15 世紀代の建物と推定される。

SH3027（図 206・207）

SH3026 の南東側に重複して位置する。一部失われている柱穴もあるが、梁行 2 間・桁行 3 間の総柱建物であると推定される。南北の主軸がＮ−5°−Ｗとなる東西棟である。建物規模は梁行 5.6 ｍ×桁行 8.0 ｍで、SH3026 に比べてやや小型ではあるがほぼ同規模の建物といえる。柱間は、梁行が北から 270 ＋ 290 ㎝、桁行が西から 260 ＋ 260 ＋ 280 ㎝と、ややばらつきがある。建物内部には柱列が通る。柱の規模や根入の深さ等が側柱と比べてさほど変わらないため、屋内棟持柱の可能性が高いと推測される。

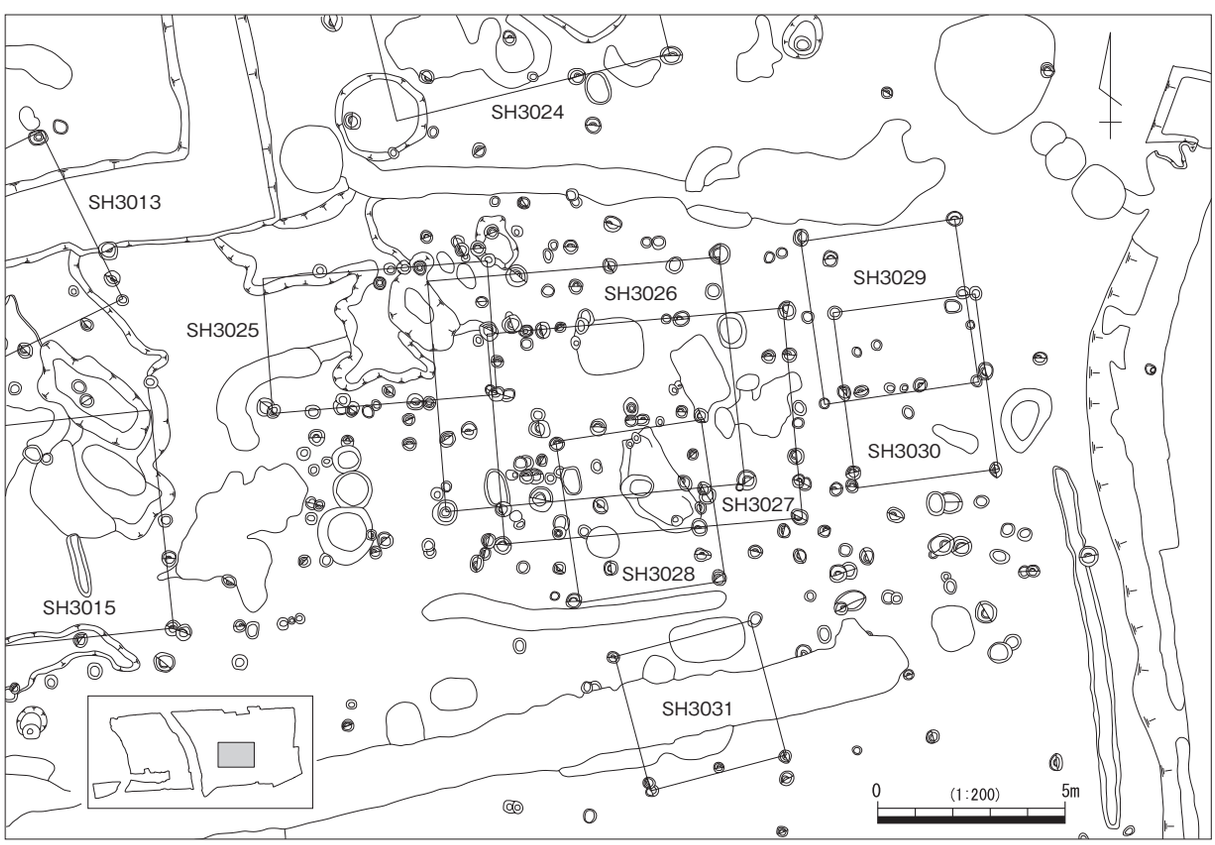


図 206　SH3025 ～ 3031 配置図

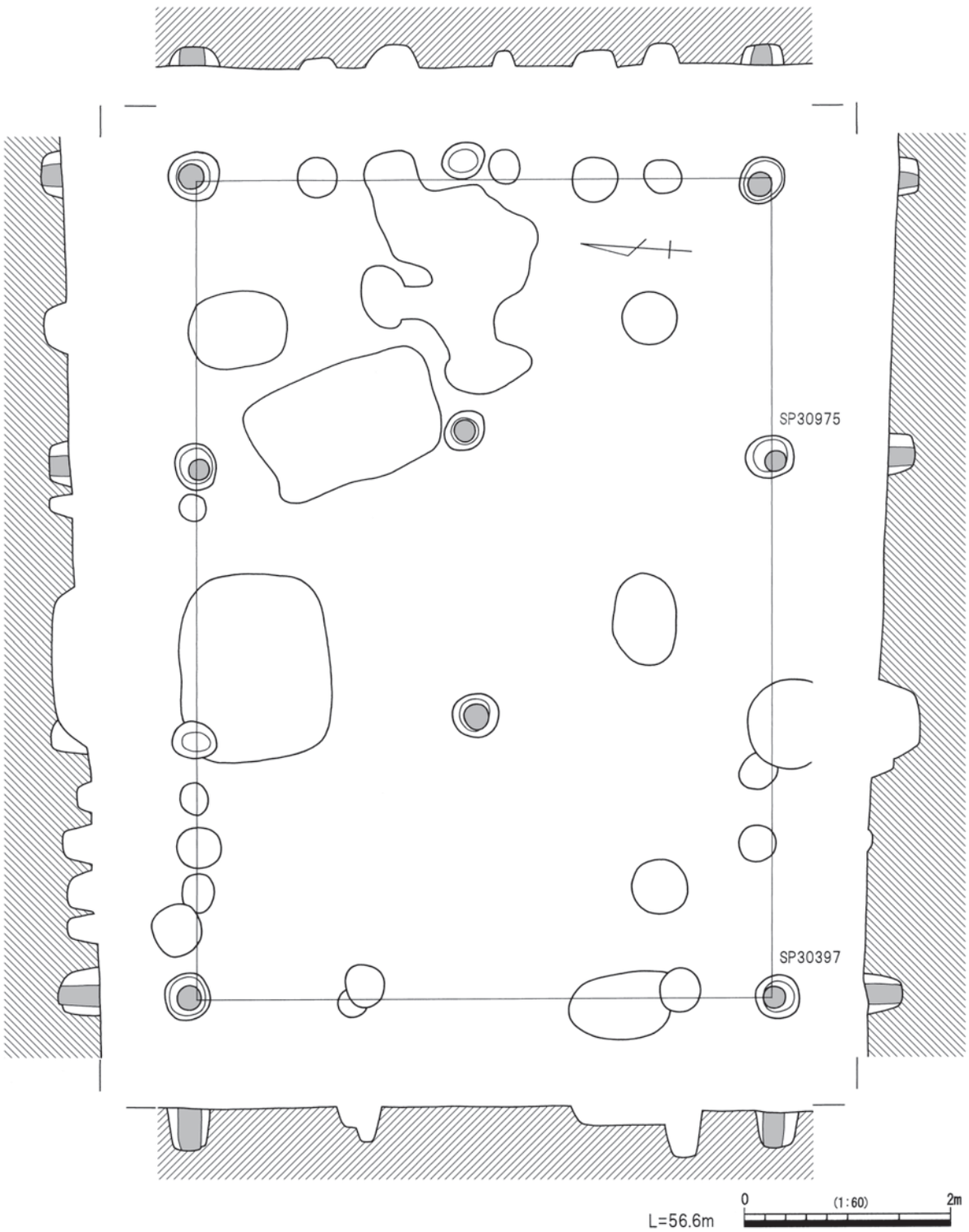


図 207　SH3027 実測図

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ～ 50 ㎝の円形である。深さは 20 ～ 42 ㎝で、根入れの高さはやや東側が低くなっている。

遺物としては、柱穴 SP30397・30975 から土師質土器片が出土している。SP30397 からは内耳鍋の破片が２点、SP30975 からは土師質土器皿の破片が１点出土している。これらの遺物から、詳細な年代は不明であるが、中世後期以降の建物であると推定される。

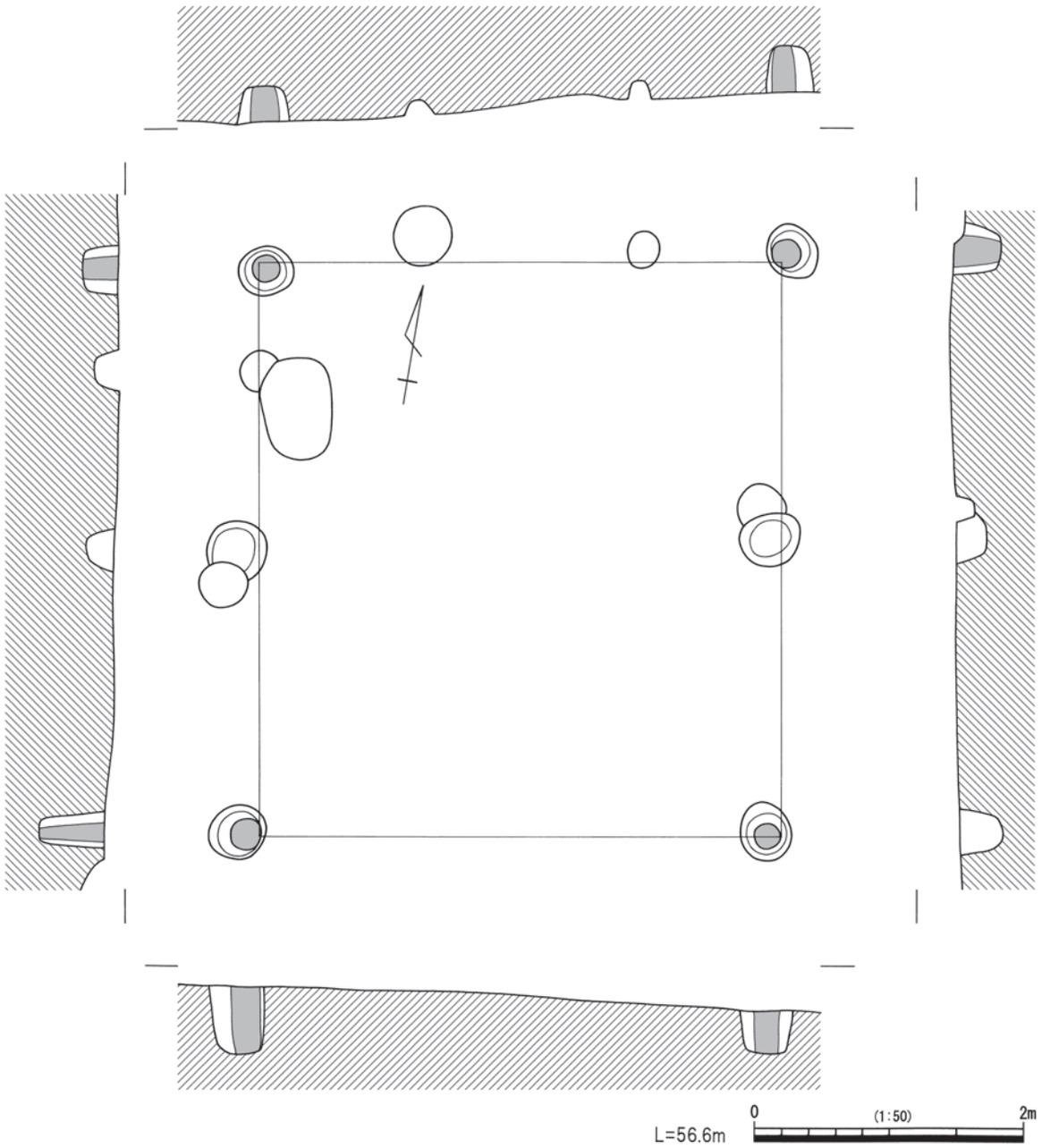


図 208　SH3028 実測図

SH3028（図 206・208）

SH3027 の南側に位置し、SH3026・3027 と一部重複している。梁行 1 間・桁行 2 間の側柱建物で、南北の主軸が N −9°− W となる南北棟である。建物規模は、梁行 3.9 m × 桁行 4.3 m と小型である。桁行きの柱間は、215 ㎝の等間である。

柱痕跡は隅柱で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 24 ㎝で、柱穴掘方は直径 38 ～ 44 ㎝の円形である。深さは 26 ～ 50 ㎝で、根入れの高さはややばらつきがある。

遺物が出土していないため詳細な年代については不明ではあるが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高い。また、建物の主軸方位が、SH3017 と近似していることから、近い時期の建物である可能性が高いものと推測される。

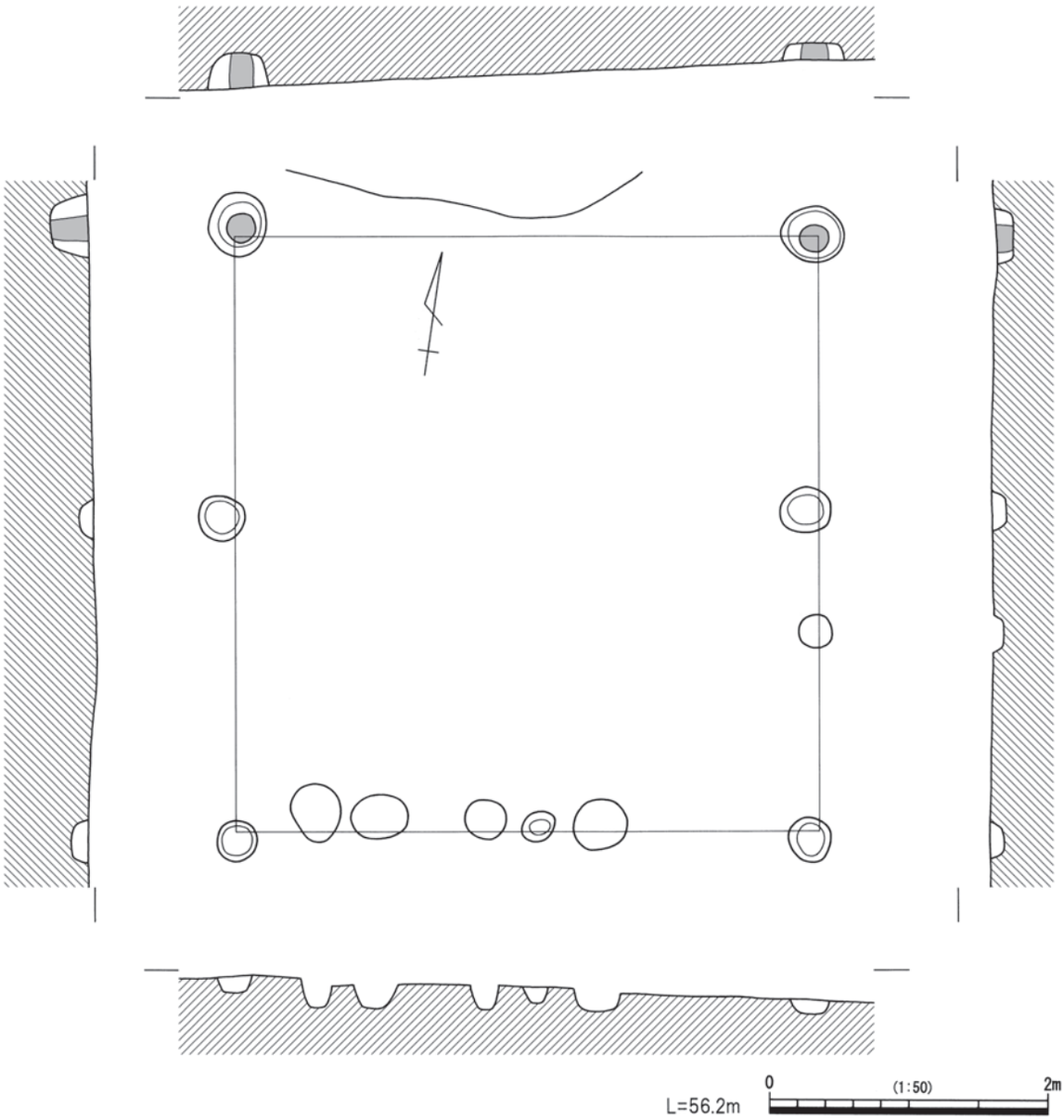


図 209　SH3029 実測図

SH3029（図 206・209）

SH3028 から約５ｍ北東に位置している。SH3030 とは一部重複する位置関係にあるが、遺構の切り合いはなく、先後関係に関しては遺構の上では判断できない。梁行２間・桁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−8°−Ｗとなる南北棟である。建物規模が梁行 4.2 ｍ×桁行 4.3 ｍの小型の建物である。柱間は、梁行が 210 ㎝の等間で、桁行は南から 230 ＋ 200 ㎝となっている。

柱痕跡は北側の隅柱で確認されている。いずれも柱痕跡の規模は直径 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ㎝の円形である。深さは異なるが、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物が出土していないため詳細な年代については不明ではあるが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高い。また、SH3028 と同様に、建物の主軸方位が SH3017 と近似していることから、近い時期の建物であると推測される。

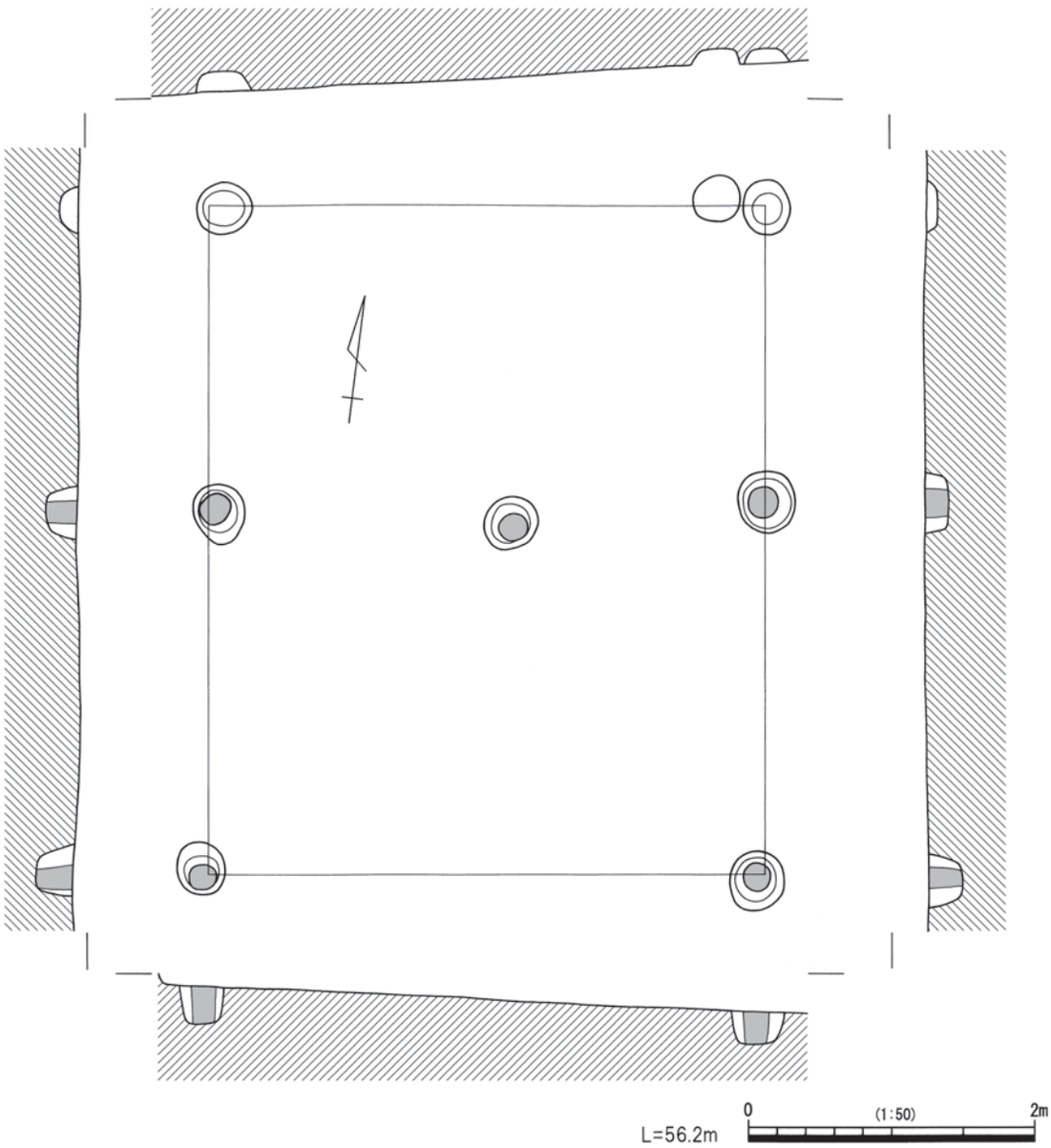


図 210　SH3030 実測図

SH3030（図 206・210）

SH3029 の南側に位置し、一部重複する位置関係にある。前述のように遺構の切り合い関係がないため、遺構の上では前後関係が判断できない。梁行 1 間・桁行 2 間の側柱建物で、南北の主軸が N −7°− W となる南北棟である。建物規模は、梁行 3.9 m × 桁行 4.7 m と小型である。桁行の柱間は、南から 250 + 220 ㎝である。建物内部の中央にも柱穴が検出されている。規模や深さが側柱とほとんど変わらないことから、屋内棟持柱であると推測される。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 42 ㎝の円形である。深さは 16 ～ 22 ㎝で、根入れの高さは南東に向かって低くなっている。

遺物は出土していないが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、他の建物と同様に中世から近世の建物である可能性が高い。SH3028・3029 と同様に、建物の主軸方位が SH3017 と近似していることから、近い時期の建物と推測される。規模や位置関係からみると、SH3029 の建替えである可能性も考えられる。

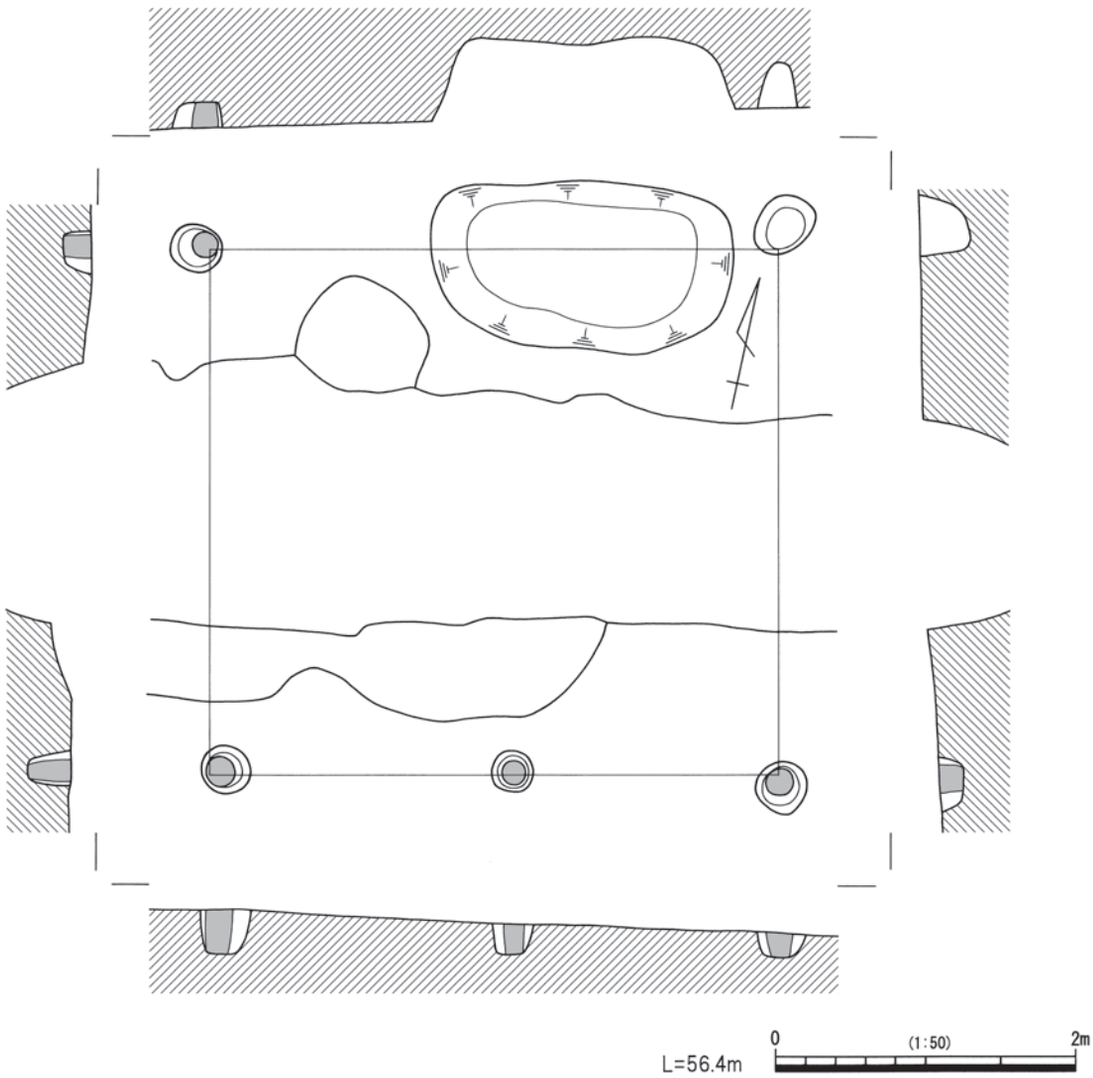


図 211　SH3031 実測図

SH3031（図 206・211）

SH3028 から約２ｍ南に位置する。梁行１間・桁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－13°－Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 3.5 ｍ×桁行 3.8 ｍと小型で、正方形に近い建物である。建物の中央付近にトレンチが入り、建物の妻柱に当たる部分が失われているため、本来は２間×２間の建物であった可能性もある。桁行の柱間は、西から 200 ＋ 180 ㎝となっている。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 14 ～ 18 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 34 ㎝の円形である。深さは 14 ～ 18 ㎝で、根入れの高さにはややばらつきがある。北東の隅柱の抜き取り穴は、ほかの柱穴と比べて一回り大きく、楕円形である。

遺物が出土していないため詳細な年代については不明であるが、中通遺跡では明確に古代のものと位置付けられる建物が確認されていないことから、中世から近世の建物である可能性が高い。また、建物の主軸方位が SH3019 と同じであり、近い時期の建物であると推測される。16 世紀後半以降の建物とみてよいであろう。

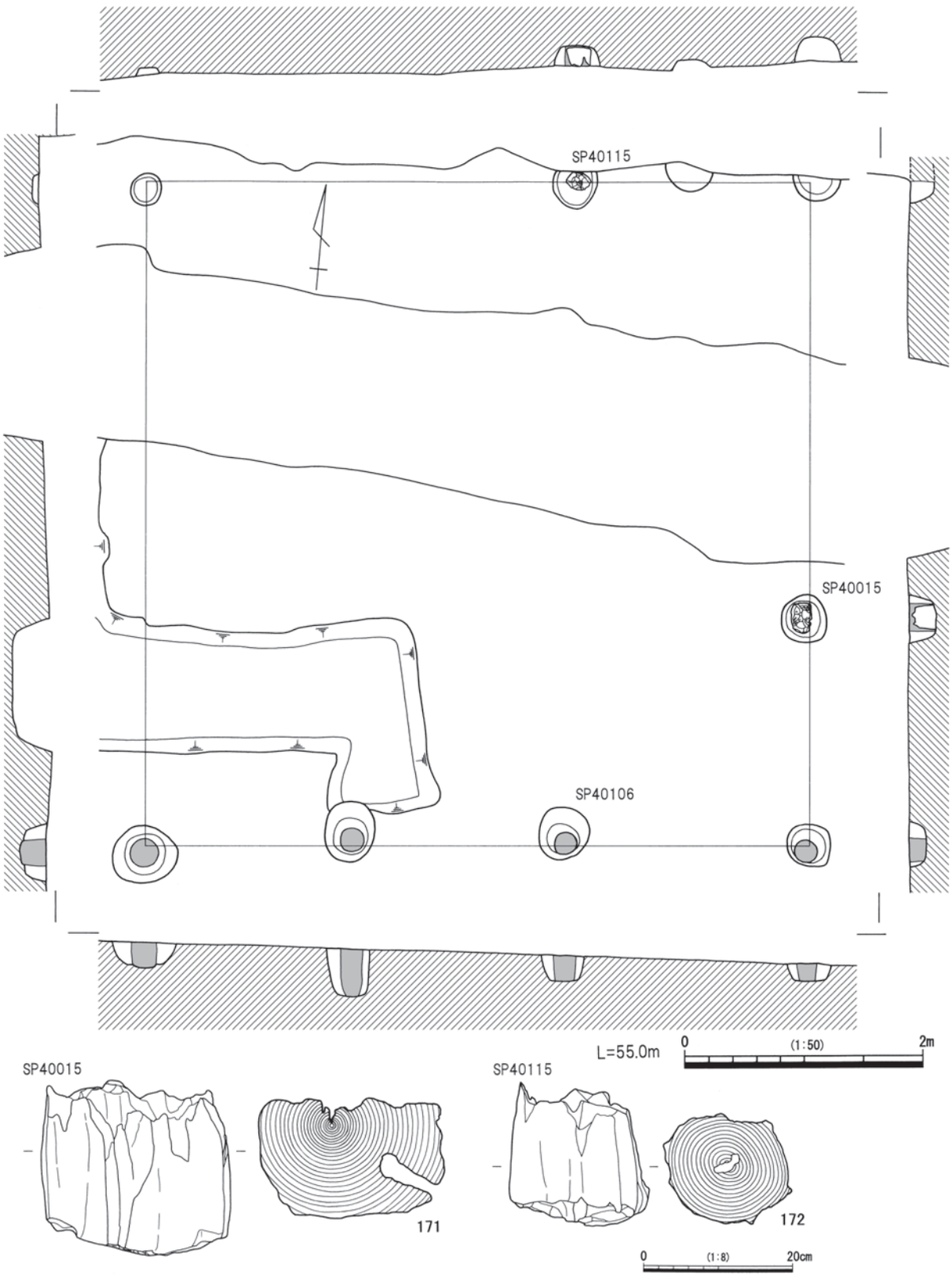


図 212　SH4001 実測図・柱根

SH4001（図 212・213）

調査区の北東側、４区の北端に位置する。攪乱等により失われている柱穴も多いため不明な部分もあるが、３間×３間の正方形の側柱建物である。南北の主軸はＮ−5°−Ｗで、建物規模は 5.6 ｍ× 5.6 ｍとなっている。失われている柱穴が多いが、南側の柱間は西から 180 ＋ 180 ＋ 200 ㎝となっている。

柱痕跡は多くの柱穴で確認されており、２ヶ所には柱根が遺存する。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 54 ㎝の円形である。深さは 18 ～ 22 ㎝で、根入れの高さにはややばらつきが認められる。

171 は、柱穴 SP40015 から出土した柱根である。24.8 × 16.0 ㎝の長方形で、22 ㎝程の長さが遺存する。腐食により痩せてしまってはいるが、角材であったとみてよい。樹種はヒノキである。172 は、柱穴 SP40115 から出土した柱根である。直径 15.2 ㎝程の不正円形で、18 ㎝程の長さが遺存する。全体が痩せてしまっており、本来の形状は明確でない。樹種はアカマツである。

遺物としては、柱穴 SP40106 の掘方から、内耳鍋の胴部の破片が２点出土しているのみである。詳細な年代は不明であるが、中世後期以降の建物とみてよい。

SH4002（図 213・214、図版 48）

SH4001 から約８ｍ南東に位置する。梁行２間・桁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−9°−Ｗとなる南北棟である。建物規模は、梁行 3.6 ｍ×桁行 4.7 ｍと小型である。柱間は、梁行が西から 160 ＋ 200 ㎝、桁行が南から 210 ＋ 260 ㎝とばらつきがある。

柱痕跡は４ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 50 ㎝の円形である。深さは 10 ～ 40 ㎝で、根入れの高さにはばらつきがある。

遺物としては、近世陶器と土師質土器が出土している。173 は美濃窯産の天目茶碗である。柱穴 SP40066 から出土しており、登窯３期のものである。174 ～ 176 は土師質土器皿である。174 は柱穴 SP40055 の掘方から、175 は柱穴 SP40051 から、176 は柱穴 SP40066 から出土している。これらのほかに、柱穴 SP40067 からは近世の瀬戸美濃窯産の天目茶碗と土師質土器の破片が出土している。

これらの遺物から、SH4002 は 17 世紀後半以降の建物であると推定される。

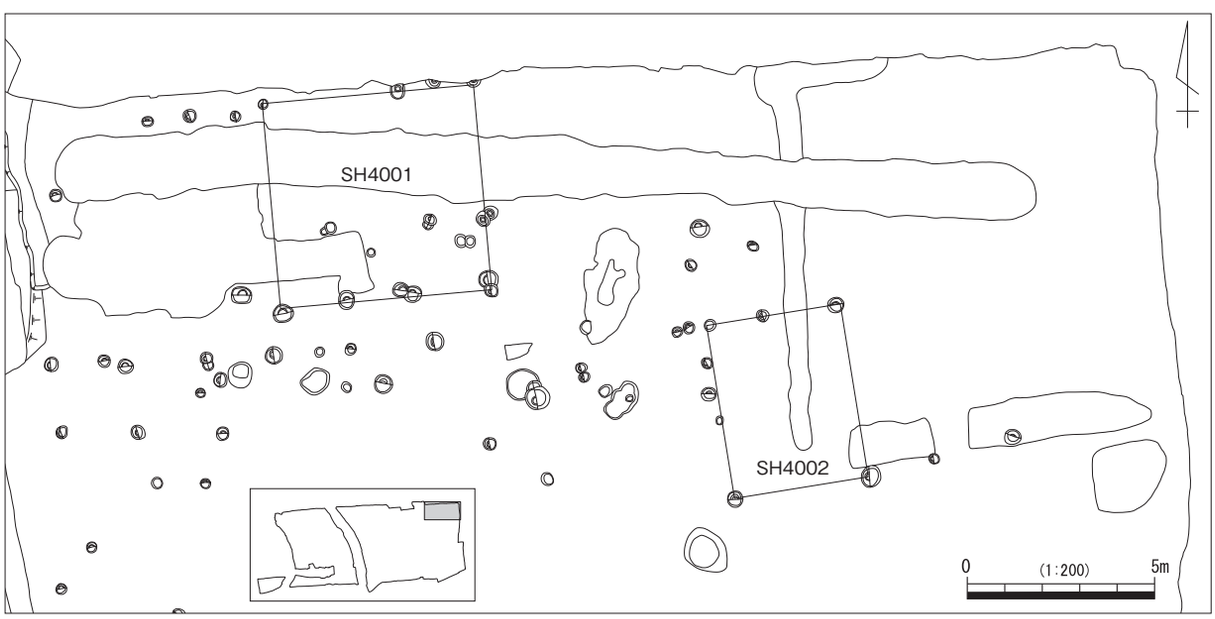


図 213　SH4001・4002 配置図

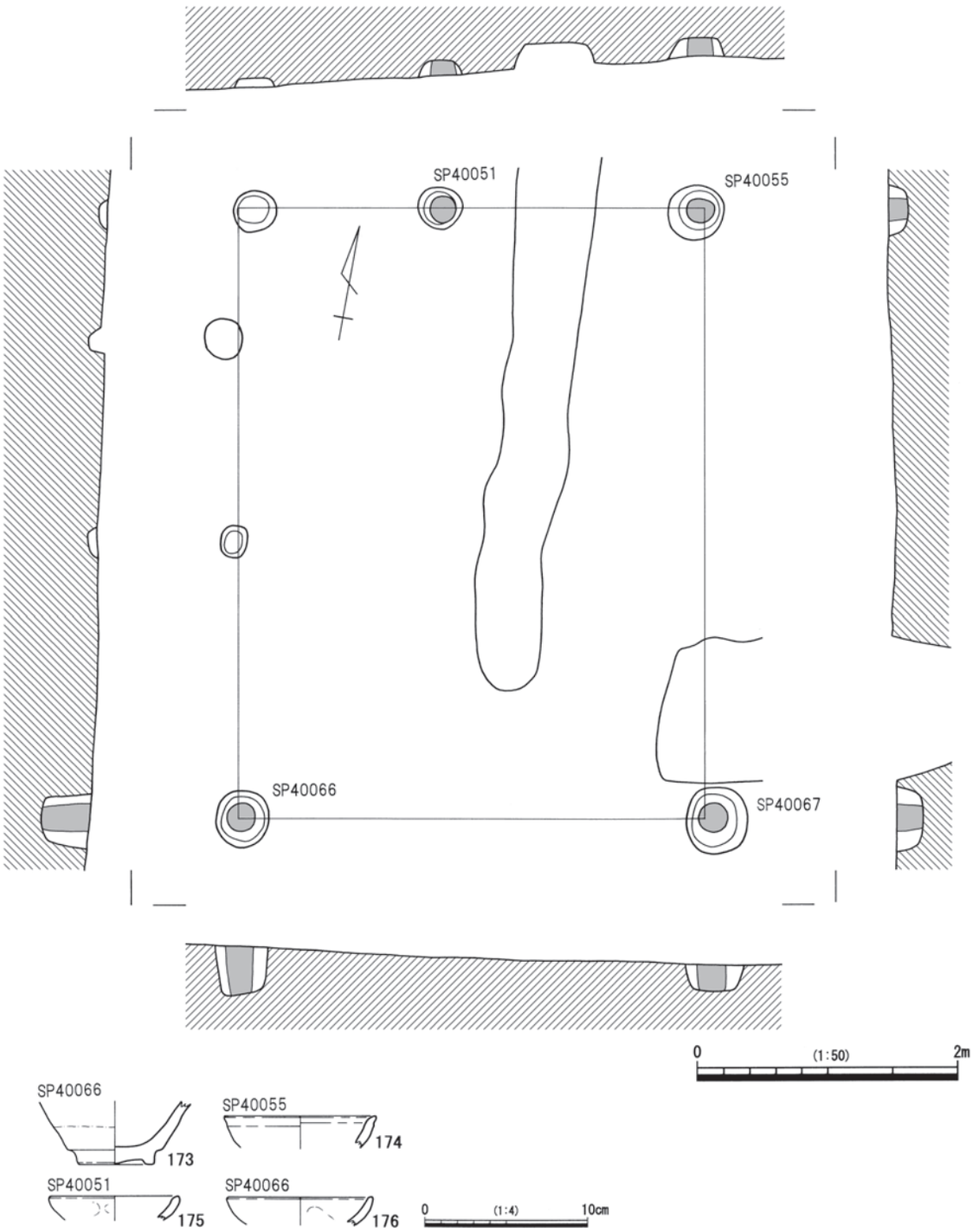


図 214　SH4002 実測図・出土遺物

SH4003（図 215・216）

SH4001 から約 16 m南の 4 区と 5 区の境に位置する。南側の隅柱が確認されていないが、北側の柱筋が通ることから、桁行 5 間の側柱建物と推定される。なお、建物のほぼ中心が調査区境となっており、調査の際の排水溝が東西に掘られている。梁行は 1 間では広過ぎるため、検出はされていないが、間に棟柱が存在した可能性が高い。南北の主軸が座標北となる東西棟である。建物規模は、梁行6.1 m × 桁行9.3

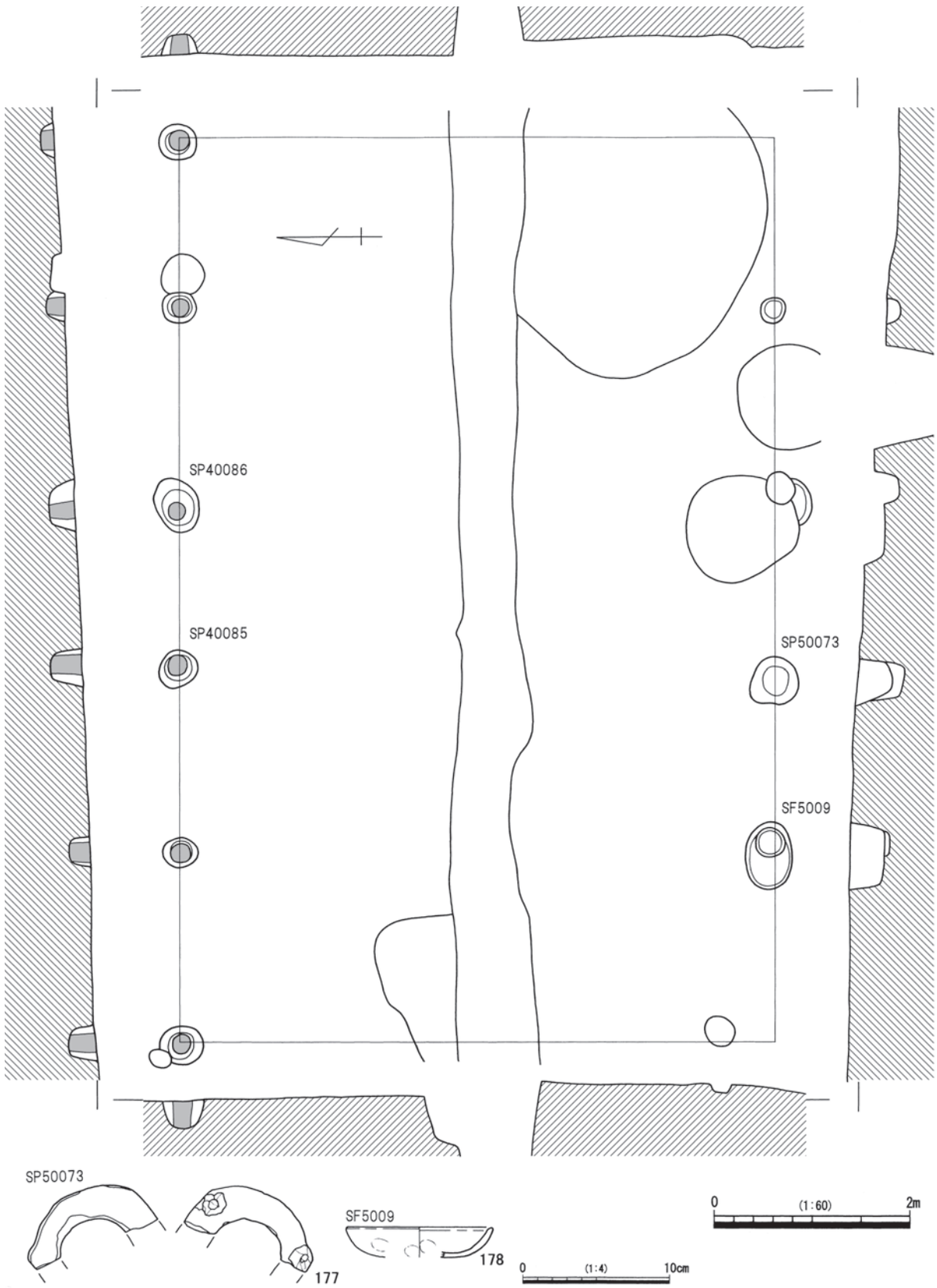


図 215　SH4003 実測図・出土遺物

mと比較的大型である。桁行の柱間は、西から 200 + 180 + 170 + 200 + 180 cmと、ややばらつきがある。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 cmで、柱穴掘方は直径 34 ～ 42 cmの円形である。深さは 14 ～ 30 cmで、根入れの高さは、東側に向かって低くなる。

遺物としては、窯道具と土師質土器が出土している。177 は脚付輪ドチである。抜き取り穴 SP50073 から出土しており、近世の志戸呂窯のものである。このほかに、図化できない小片ではあるが、柱穴 SP40086・40085 から土師質土器皿とみられる破片が出土している。また、178 は柱穴を切る SF5009 から出土した土師質土器皿である。比較的硬質で、薄手のつくりである。

これらの遺物から、詳細な年代については明らかでないが、近世の建物とみてよいであろう。

SH5001（図 217・219、図版 68）

SH4003 から約 22 m南の、調査区南東部に位置する。柱穴が溝 SD5002 に切られていることが確認されている。梁行 1 間･桁行 3 間の側柱建物で、南北の主軸が N −8°− W となる東西棟である。建物規模は、梁行 3.7 m × 桁行 6.1 mである。桁行の柱間は、西から 200 + 200 + 210 cmと、東側がやや広いもののほぼ揃っている。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 24 cmで、柱穴掘方は直径 36 ～ 46 cmの円形である。深さは 14 ～ 56 cmで、根入れの高さにはややばらつきがみられる。

遺物としては、磁器と土師質土器が出土している。179 は磁器染付の小杯である。柱穴 SP50013 の掘方から出土している。やや浅いタイプで、外面には山水文が描かれている。17 世紀後半のものである。このほかに、柱穴 SP50002 の柱痕跡から土師質土器の小片が 1 点出土している。

出土遺物に加えて、柱穴を切る SD5002 は 18 世紀後半の溝とみられることから、SH5001 は 17 世紀後半から 18 世紀にかけての建物であると推定される。

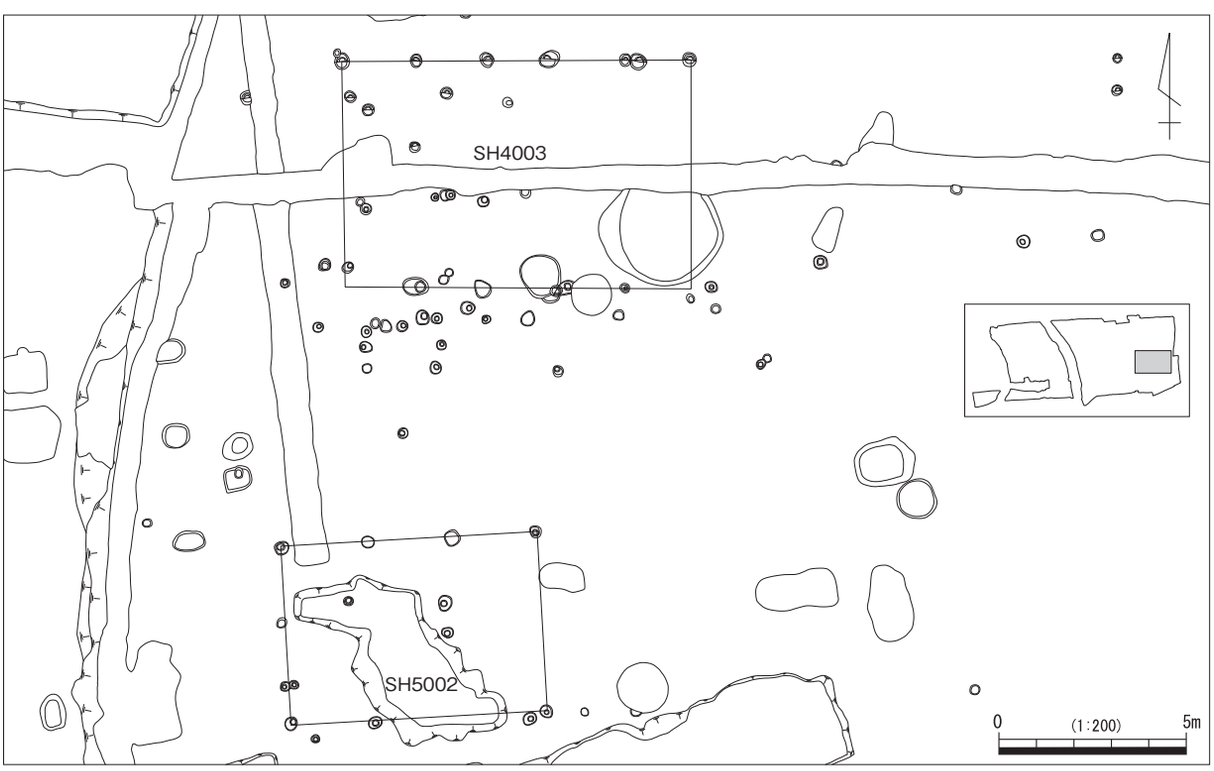


図 216　SH4003・5002 配置図

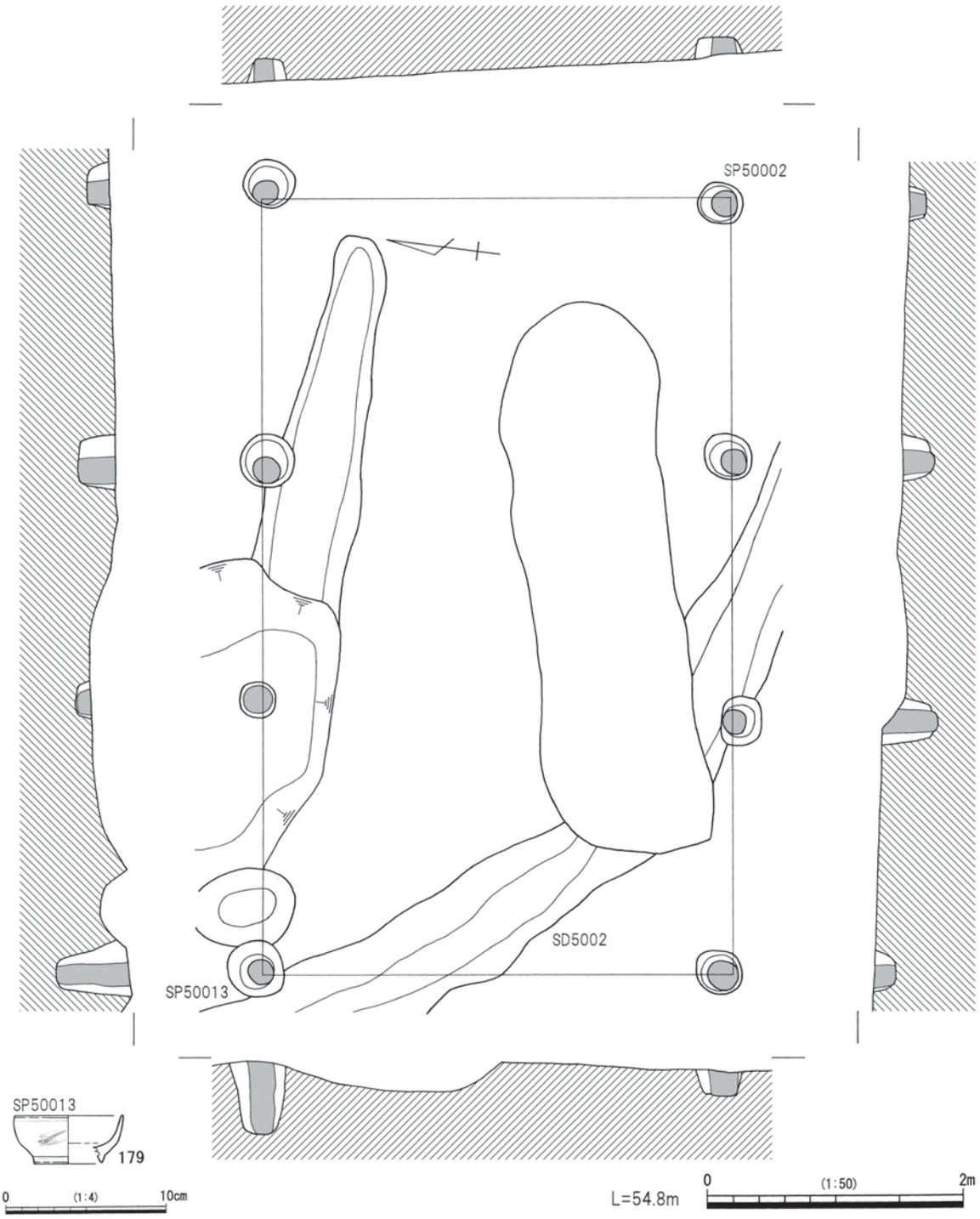


図 217　SH5001 実測図・出土遺物

SH5002（図 218・219、図版 68）

SH5001 から約 10 m北に位置する。梁行３間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－3°－Ｗとなる南北棟である。建物規模は、梁行 4.8 m × 桁行 6.8 mである。柱間は、梁行が北から 210 + 170 + 100 ㎝、桁行が西から 230 + 220 + 230 ㎝と、ややばらつきがある。なお、柱筋が通ることから柱穴として捉えた SP50039 は、柱間が他と比べて極端に狭く、この建物に伴うものではない可能性も考えられる。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径

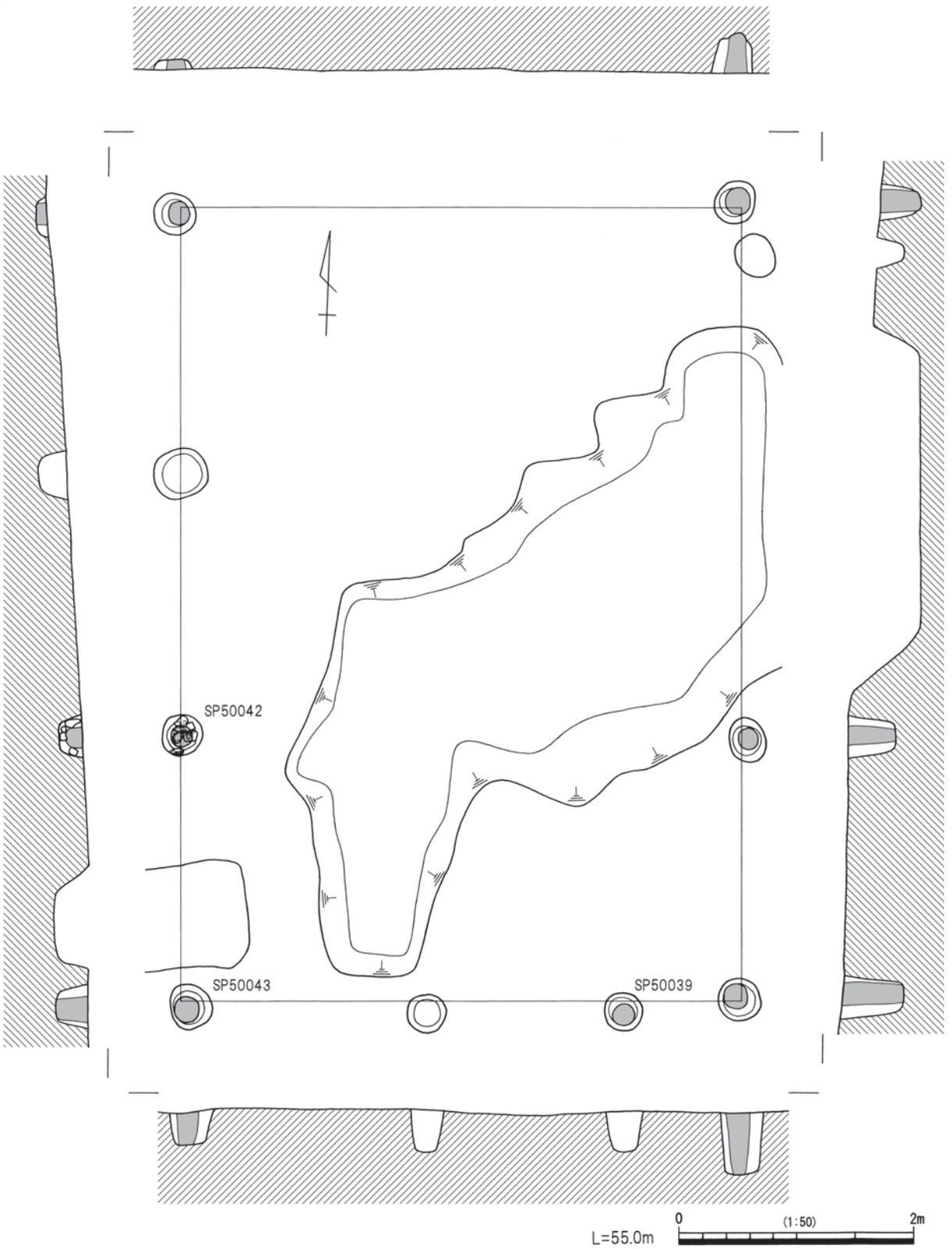


図 218　SH5002 実測図

36 ～ 40 ㎝の円形である。深さは 8 ～ 52 ㎝で、根入れの高さは、ややばらつきが認められる。柱穴 SP50042 の底部には、根石が確認される。

遺物は、柱穴 SP50043 から土師質土器片が 1 点出土しているのみである。掘方から出土しており、

図化できない細片ではあるが土師質土器皿とみられる。

遺物の詳細な年代は不明ではあるが、中世後期から近世の建物とみてよい。隣接する SH5001 と後述する SH5003 がともに近世の建物であることからみて、この建物も近世前半の建物である可能性が高いと推定される。

SH5003（図 219・220、図版 68・87）

SH5002 から約２ｍ南に位置する。柱穴が溝 SD5002 に切られていることが確認されており、北西の隅柱は未検出である。梁行１間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−3−Ｗとなる東西棟である。建物規模は、梁行 4.0 ｍ×桁行 6.3 ｍである。桁行の柱間は、西から 200 + 230 + 200 ㎝と、２間目がやや広くなっている。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 20 ～ 22 ㎝で、柱穴掘方は直径 40 ～ 54 ㎝の円形である。深さは 28 ～ 64 ㎝で、根入れの高さにはややばらつきが認められる。

遺物は比較的多く出土している。180 は、柱穴 SP50022 から出土した尾呂茶碗である。美濃窯産の製品で、登窯５・６期のものである。SP50022 からは、このほかに土師質土器の破片が６点出土している。181 は、柱穴 SP50020 の柱痕跡から出土した擂鉢である。瀬戸美濃産の製品で、大窯１期のものである。SP50020 からは、このほかに常滑産の甕の破片が３点と、土師質土器の破片が５点出土している。182 は柱穴 SP50123 から出土した鉄釘である。柱痕跡から出土しており、柱に打ち込まれていた可能性がある。

出土遺物の年代にやや幅はあるが、尾呂茶碗が出土していることから、近世の建物であると推定される。SH5001 と同様に、18 世紀後半の溝とみられる SD5002 に切られていることから、18 世紀前後の建物とみてよいであろう。

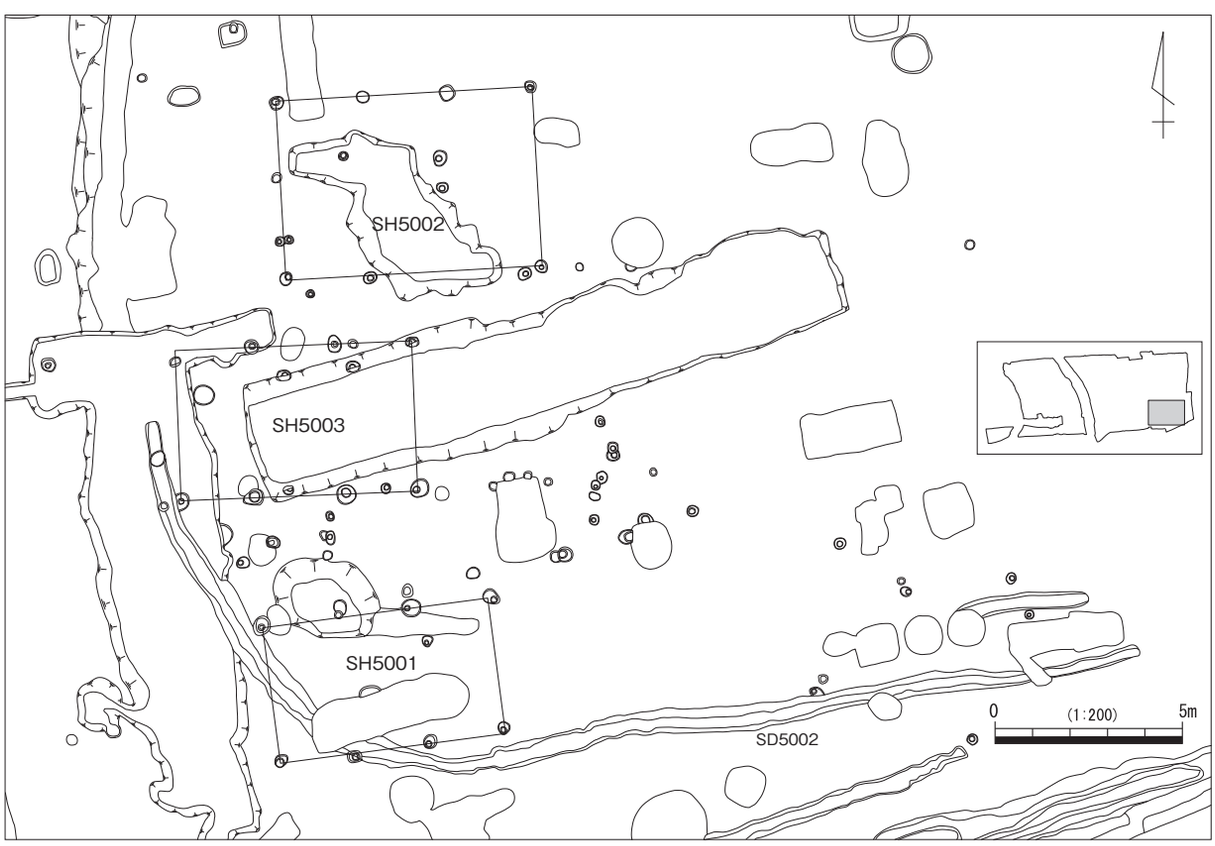


図 219　SH5001 ～ 5003 配置図（S ＝ 1：200)

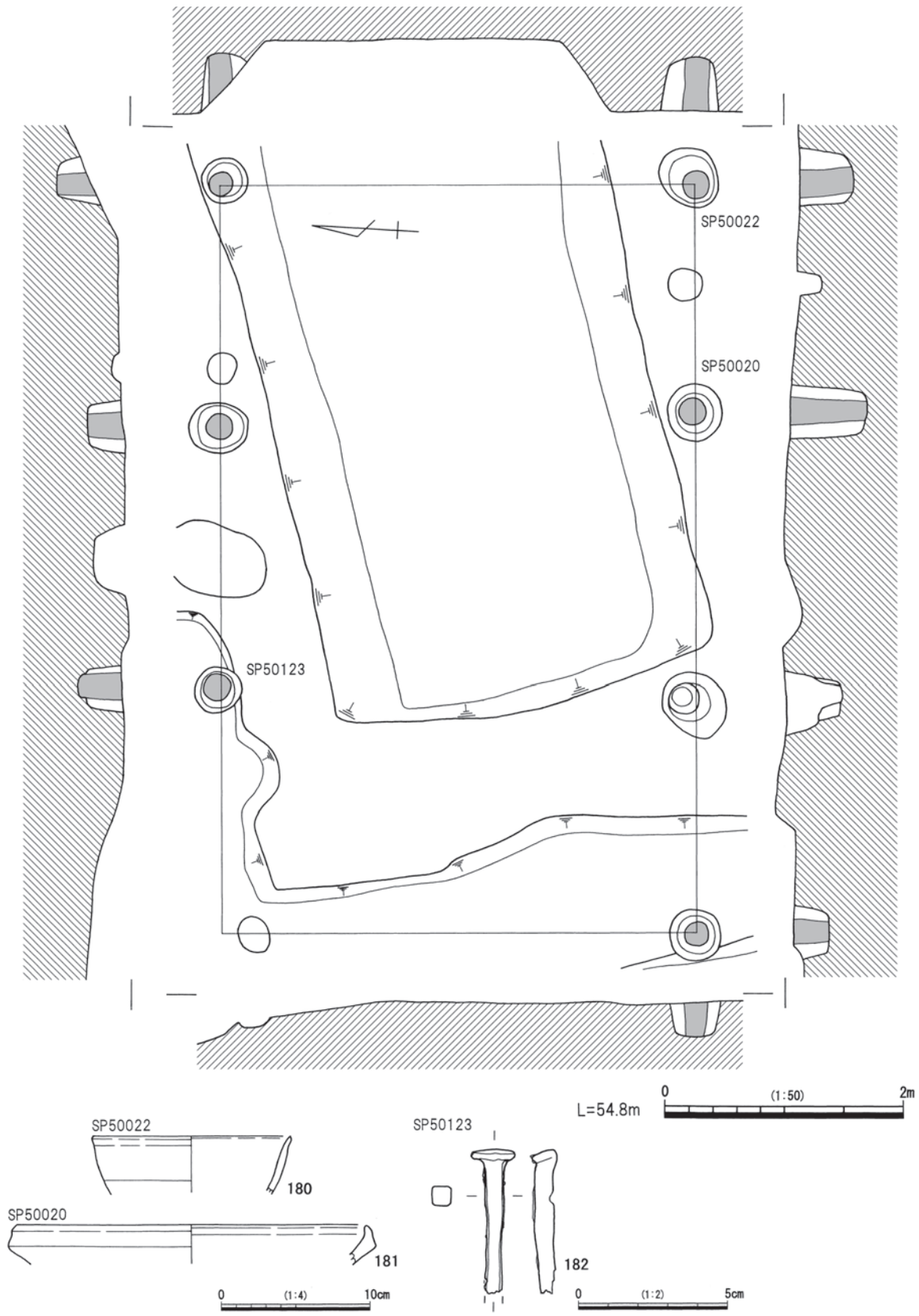


図 220　SH5003 実測図・出土遺物

3　小穴

中通遺跡では、明確な建物としては認識できないが、全体では千基をこえる数の小穴が検出されている。時期の特定できないものがほとんどであるが、いくつかの小穴で遺物が出土している。

1区（図 221・222、図版 87）

192 と 193 は土師質土器皿である。226 は瀬戸窯産の徳利で、登窯 10 ～ 11 期のものである。233 は

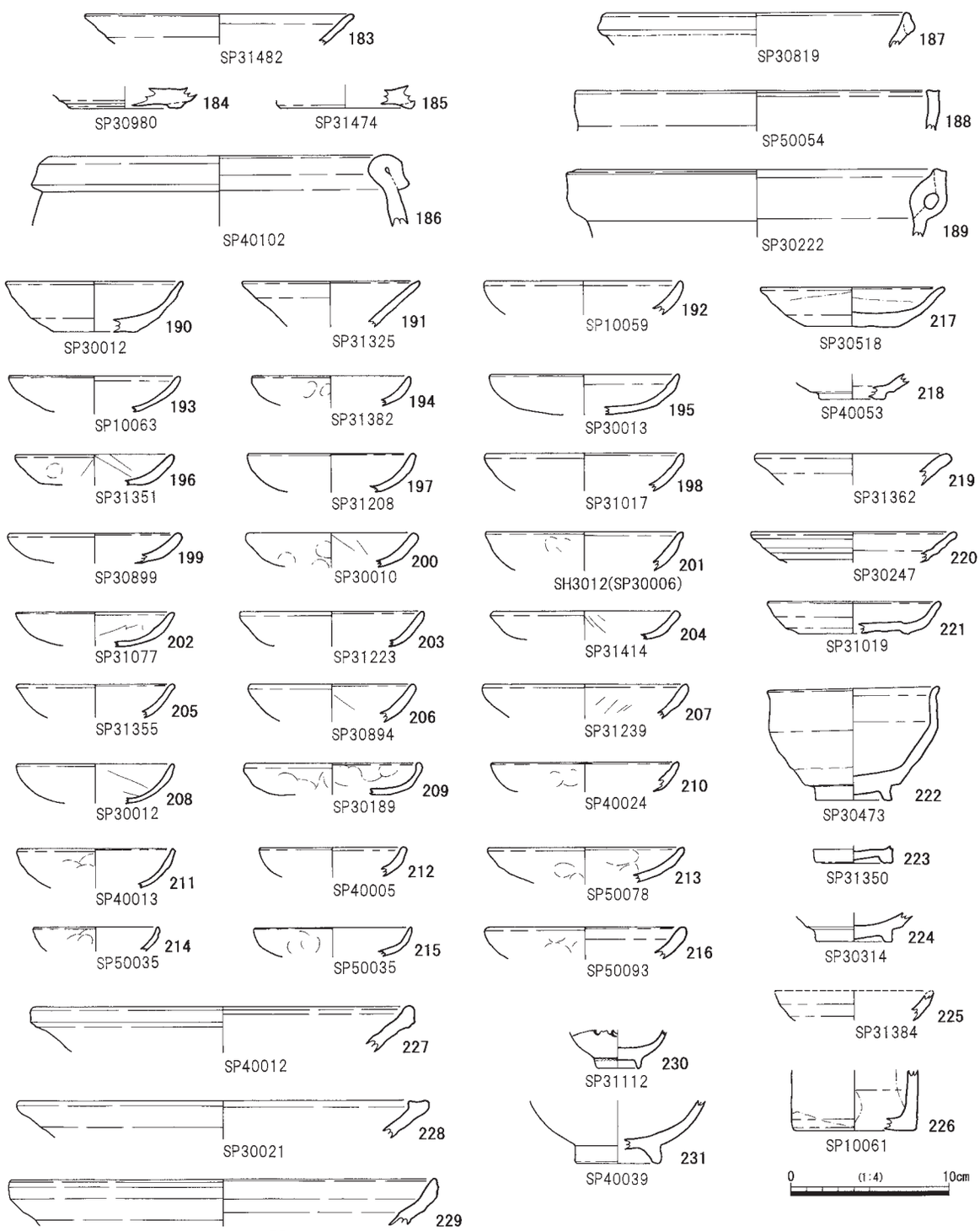


図 221　小穴出土遺物（１）

２枚錆着した銭貨であり、１枚は元豊通宝である。236 は小型の鉄釘である。図化したもののほかに、土師質土器や近世の陶磁器の破片も出土している。

３区（図 221・222、図版 87）

183 ～ 185 は山茶碗である。187 と 189 は内耳鍋である。190 と 191 はロクロ成形の土師質土器皿である。194 ～ 209 は手づくね成形の土師質土器皿である。228 は志戸呂窯産の擂鉢で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。217 は瀬戸窯産の縁釉小皿であり、古瀬戸後Ⅲ期のものである。219・220 は瀬戸窯産の皿であり、大窯期のものである。221 は初山窯産の内禿皿である。230 は肥前窯産の染付磁器の小杯である。222 ～ 225 は瀬戸美濃窯産の製品で、222 ～ 224 は天目茶碗、225 は瀬戸窯産の志野丸皿である。図化したもの以外にも、多くの小穴から山茶碗や土師質土器、中・近世の陶器、金属製品などの遺物が出土している。

４区（図 221・222、図版 86）

186 は常滑産の甕、210 ～ 212 は土師質土器皿である。227・218 は瀬戸窯産の製品で、227 は擂鉢、218 は平碗である。231 は肥前窯産の磁器碗である。４区では柱根（237 ～ 239）も出土している。図化したもの以外にも、中・近世の陶器や土師質土器などが出土している。

５区（図 221・222）

188 は内耳鍋、213 ～ 216 は土師質土器皿である。229 は瀬戸窯産の擂鉢で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。４区と同様に柱根（240）も出土している。このほかに中・近世の陶器や土師質土器などが出土している。

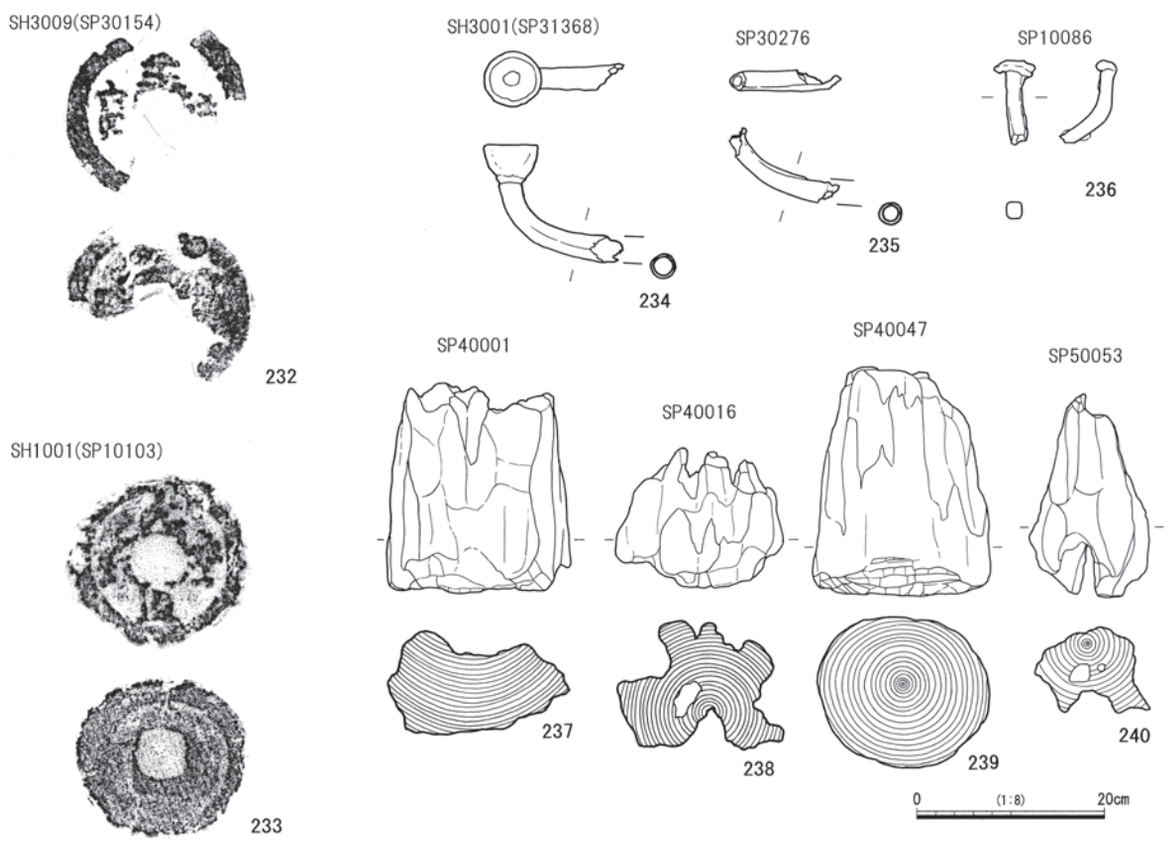


図 222　小穴出土遺物（２）

４　河川

SR1001（図 223 ～ 226、図版 44・80・81）

１区と２区を縦断し、北西から南東に向かって流れる河川である。長さ 80 m・幅 20 mの規模で検出されている。河川内は凹凸が激しく、複雑に流路を変えながら流れていた様子が伺える。現在でも北側には谷があり、谷からは１・２区の調査区西端を沿うように水路が設けられている。晴天時には水が枯れているが、雨天には急激に水量を増す。検出面から約２mの深さまで、砂礫の堆積を確認しているが、遺物が出土するのは、検出面より約１mの深さまでに堆積する暗褐色土である。

遺物は、ほとんどが平安時代までのものである。241 ～ 247 は須恵器である。241 ～ 244 は坏蓋、245・246 は坏、247 は甕である。須恵器については、これらのほかにも破片が出土しているが、大半が７世紀から８世紀にかけてのものである。248 ～ 250 は土師器である。248 は坏、249・250 は甕である。

図 223　SR1001 実測図

いずれも破片であり、このほかに甕の胴部の破片が出土している。251 ～ 260 は灰釉陶器である。251 ～ 259 は碗、260 は壷である。252 は完形品で、253 と 260 は口縁部を欠くが形状を保っており、いずれも検出面付近から出土している。碗については、胎土などから宮口窯産の製品とみられる。

中世以降の遺物は、破片を含めてもごくわずかである。261 と 262 は土師質土器皿である。中通遺跡において、土師質土器皿とみられる破片は大量に出土しているが、SR1001 に関しては不明確な破片を含めても数えるほどしか出土していない。263 は香炉で、焼成不良のためか土師質となっている。265 は半球形の内耳鍋である。中世後期の遺物についても、これらのほかに内耳鍋の胴部とみられる破片が数点出土している程度である。264 は瀬戸窯産の練り鉢で、登窯 10 期のものである。明確な近世の遺物はこの１点のみである。

出土遺物の状況からみて、SR1001 は平安時代までにほぼ埋没していたものと推測される。わずかに確認される中世～近世の遺物に関しては、埋土が近似するため検出できなかったが、切り合う後世の遺構に伴う遺物であった可能性が高い。

また、SR1001 からは、数は少ないが縄文土器（266 ～ 295）も出土している。266 は斜位に縄文が施され、口縁部と頸部に爪形文を巡らしている。267 は波状口縁の土器で文様は施されていない。268 と 269 は北浦Ｃ式の土器である。270 ～ 276 には、半裁竹管による沈線と楔形の刺突が施されている。277 は磨滅が著しいが、沈線と円形浮文が確認できる。諸磯Ｃ式であろう。278 ～ 285 には、口縁の文様帯の両端に楔形の刺突が施されている。286 と 288 は、半裁竹管の押し引きによって施文されている。289 と 290 には単節縄文、291 と 292 には沈線と刺突、295 には格子状の文様が施されている。

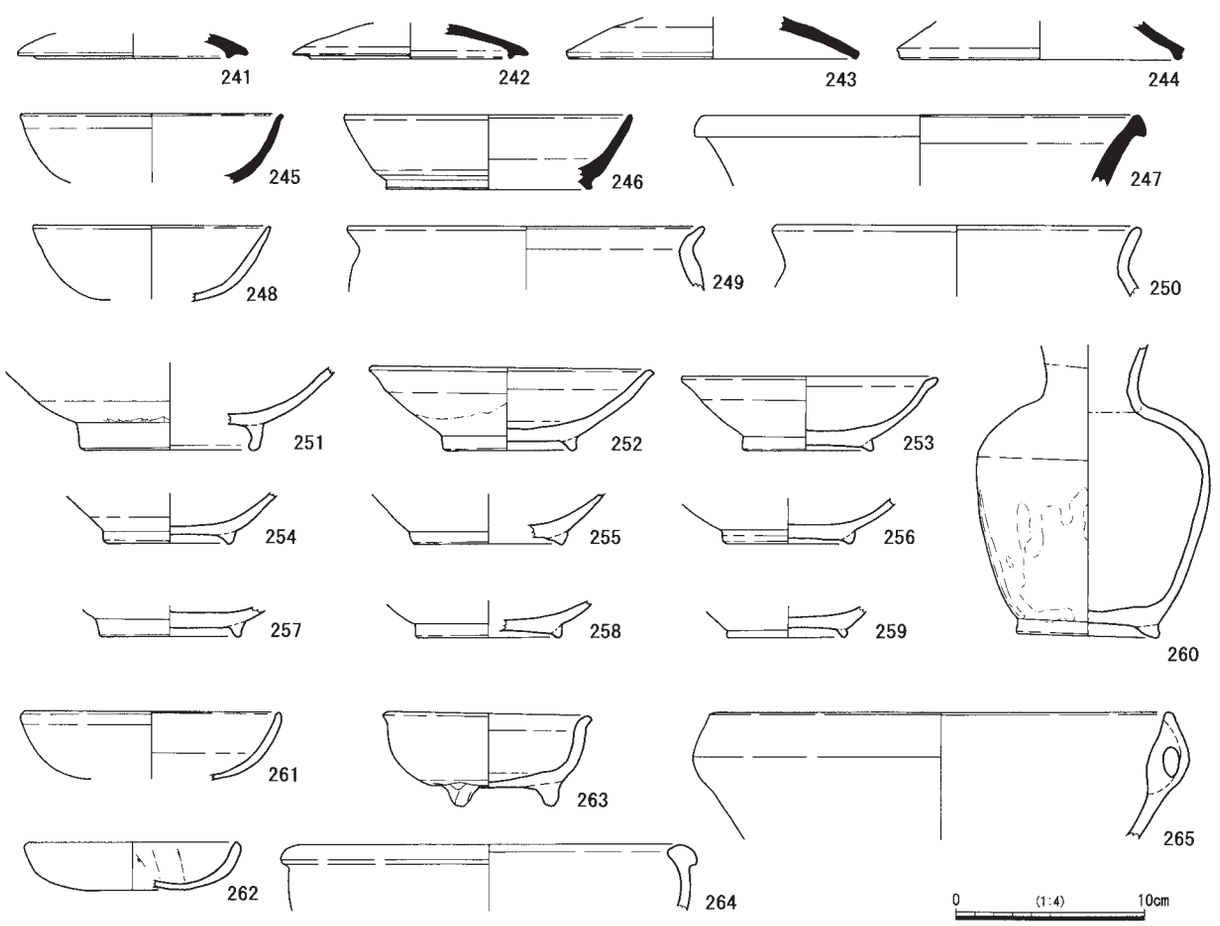


図 224　SR1001 出土遺物（１）

いずれも中期の土器であり、包含層から出土しているものと内容的には大差ない。北屋敷式などの東海系の土器が大半である。このほかに細片で表面の磨滅が著しいが、撚糸文土器などの早期の土器とみられる破片も少量出土している。ただし、縄文土器に関しては、須恵器や土師器の破片などと同じ層位から出土している。谷の出口にあたり、大規模な開析と埋没を繰り返しているため、SR1001 の初源の時期は明らかでないが、少なくともこれらの縄文土器については、後世に周辺から流れ込んだものとみてよい。

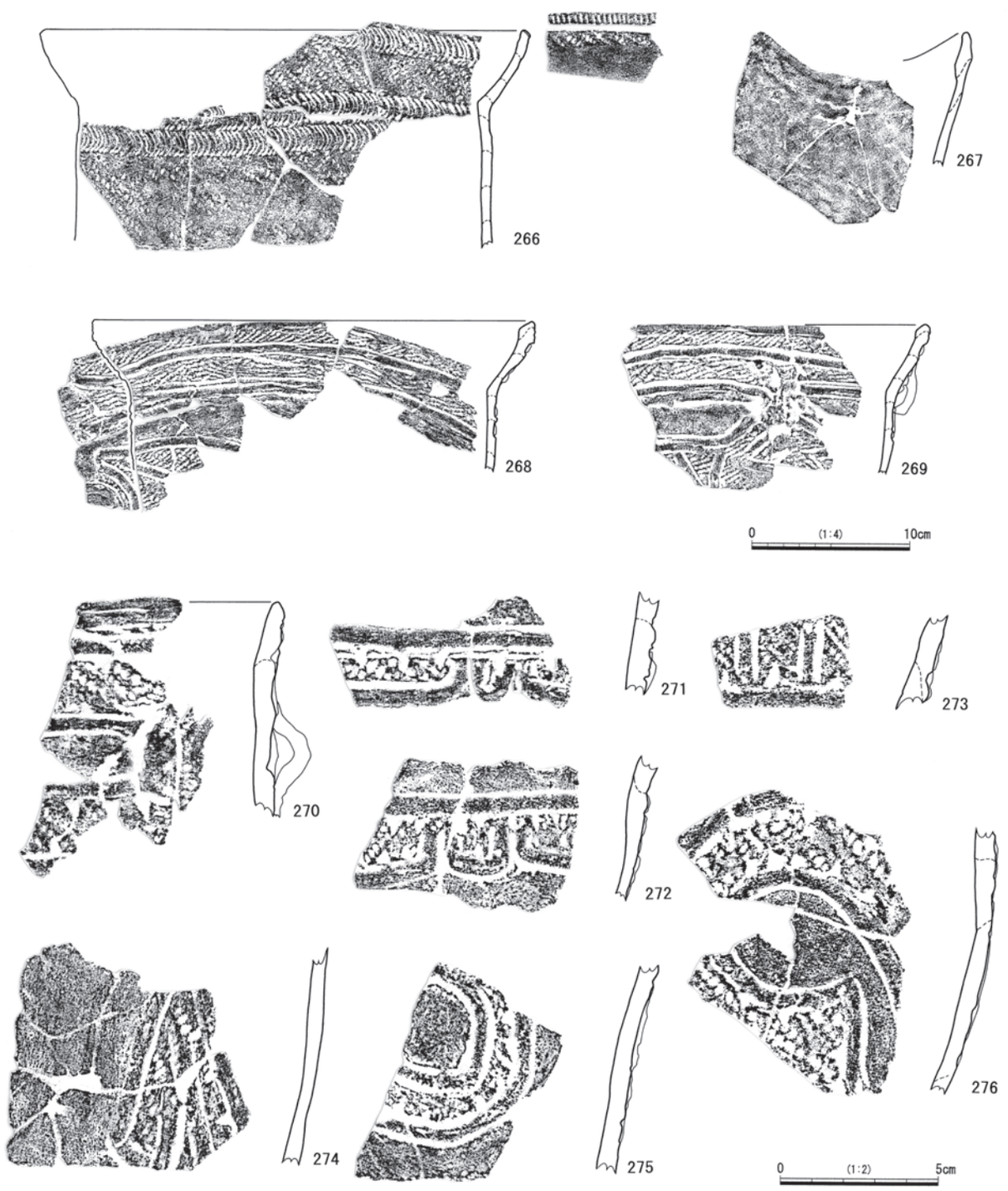


図 225　SR1001 出土遺物（２）

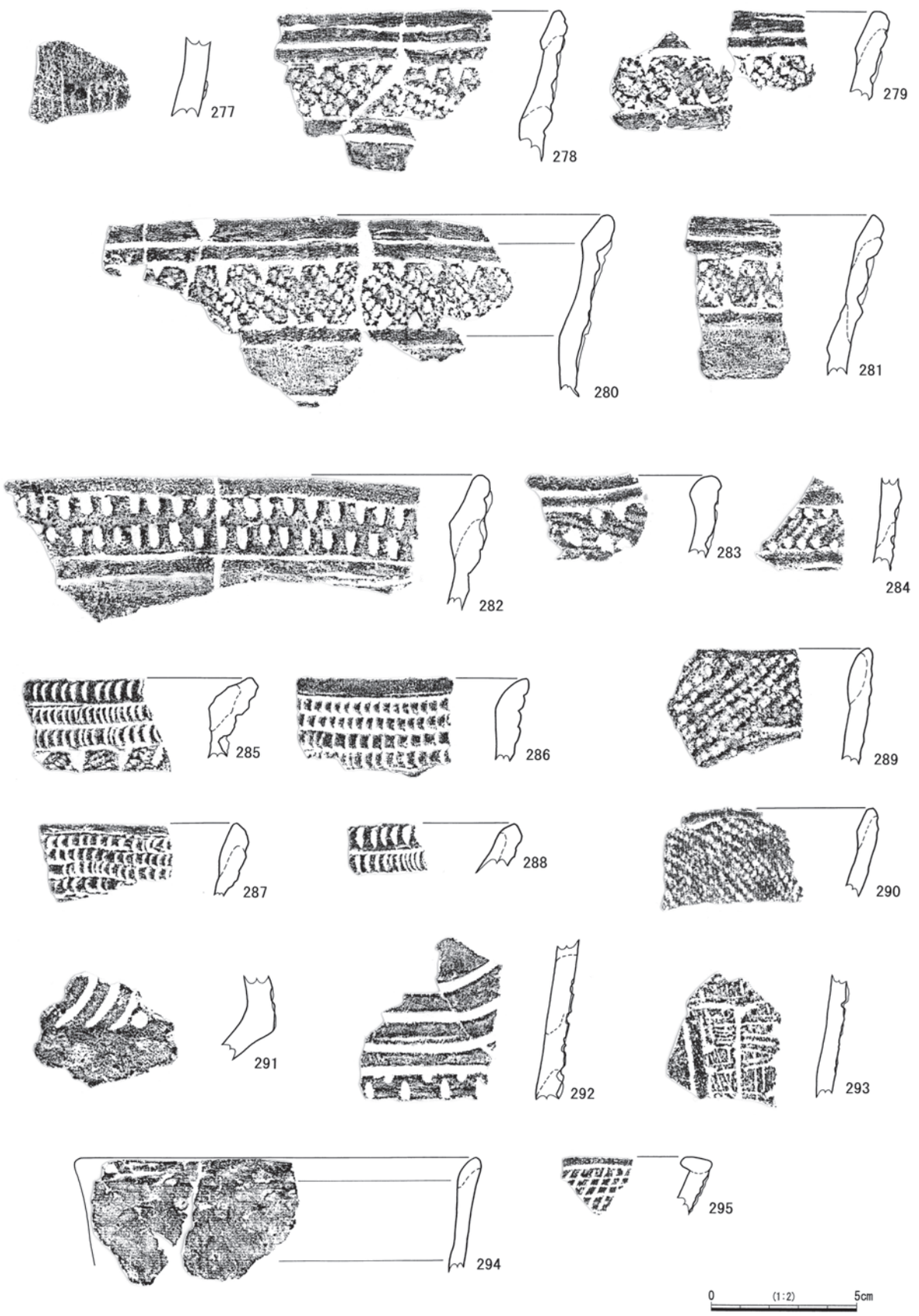


図 226　SR1001 出土遺物（3）

5　溝

SD1001（図 227、図版 45）

１区の北東部に位置する溝で、北西側でほぼ直角にＬ字形に曲がる。幅は約 40 ㎝で、南に向かって徐々に浅くなるが、北側では深さが 10 ㎝程となっている。東側は、ほぼ並行する現代の地境の溝によって失われている。埋土は暗褐色土を主体とし、下層には礫が多く投げ込まれていた。

遺物はほとんど含んでおらず、破片が５点出土しているのみである。296 と 300 は瀬戸美濃製品である。296 は登窯７期の尾呂茶碗、300 は登窯４期の擂鉢である。297 と 298 は、手づくね成形の土師質土器皿である。299 は内彎形内耳鍋で、浅いつくりのものである。

SD1001 は近世の地境溝で、18 世紀後半頃までには大半が埋没していたものと推測される。

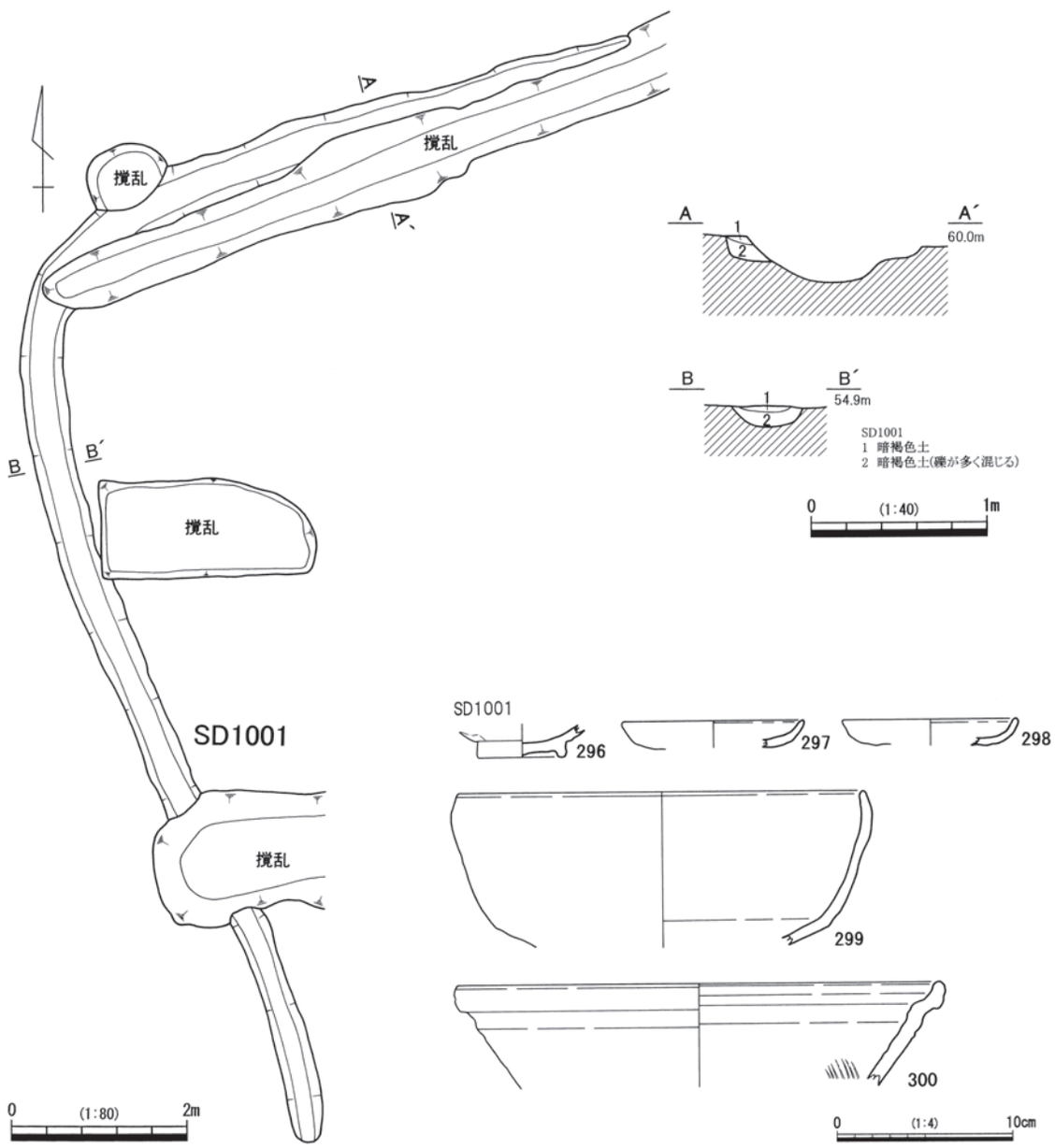


図 227　SD1001 実測図・出土遺物

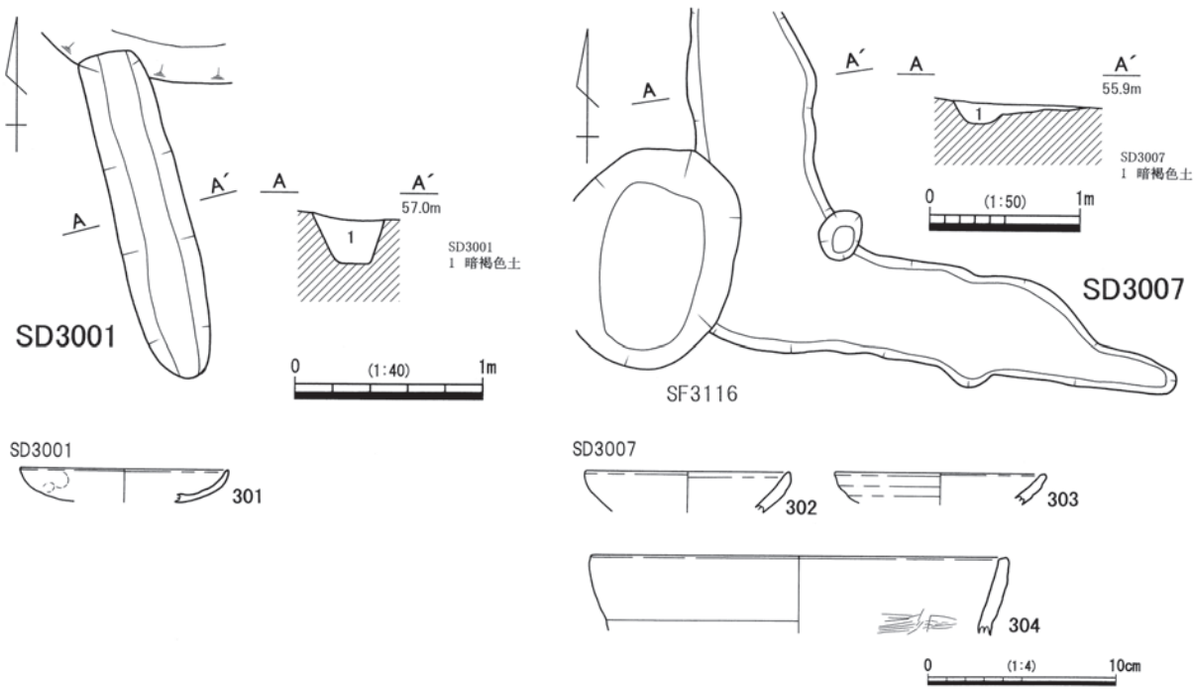


図 228　SD3001・3007 実測図・出土遺物

SD3001（図 228）

３区の西側に位置する南北溝である。北側が攪乱により失われており、長さ約 1.8 m残存するのみである。南に向かって徐々に浅くなるが、深さは平均 20 ㎝程度である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は乏しく、図化できたのは１点のみである。301 は土師質土器皿である。薄手のつくりとなっており、橙白色の色調を呈し、外面には指頭痕が残る。この他に土師質土器皿の小片が３点出土している。

遺構の年代は判然としないが、土師質土器皿の特徴から、近世の溝である可能性が高い。

SD3007（図 228）

３区の北東隅に位置する溝であり、北側は調査区外へと続く。溝は調査区端から南に延び、約 1.5 m の場所で東に向かってＬ字形に曲がる。深さは 10 ㎝程度と浅く、底面の凹凸も激しい。南西部において、土坑 SF3116 と切り合っているが、前後関係については記録がなく明らかでない。

遺物は乏しく、検出面から破片が３点出土しているのみである。302 は土師質土器皿である。口縁部の破片で、表面は磨滅が著しい。303 は近世の志戸呂窯産の皿である。304 は内彎形内耳鍋である。

詳細な年代は不明であるが、303 が出土していることから、近世に機能していた溝とみてよい。

SD3003（図 229、図版 45・70・82）

SD3001 の約 10 m北に位置する溝である。北西部を頂点としてＬ字形に曲がり、東と南に向かって徐々に浅くなっている。南北溝の一部には、溝の両側に石組みが検出されている。石組みには、人頭大程度の角礫が用いられており、残存状態の良好な部分で２段に積まれている。埋土は、暗褐色土を主体とし、上層には石積みの石材とみられる角礫が落ち込んでいた。

遺物としては、瀬戸美濃製品や土師質土器皿が出土している。305 ～ 308 は瀬戸美濃製品で、305 と 307 は登窯７期の尾呂茶碗、306 は登窯８・９期の染付皿、308 は登窯６期の擂鉢である。309 ～ 312 は土師質土器皿で、いずれも比較的硬質の焼成である。

出土遺物の年代から、SD3003 は主に 18 世紀代に機能した溝であり、19 世紀の初め頃にはほぼ埋没していたものとみてよい。この溝の伴う明確な建物は検出されていないが、屋敷地の区画溝または礎石建物の雨落ち溝として設けられた溝と推定される。

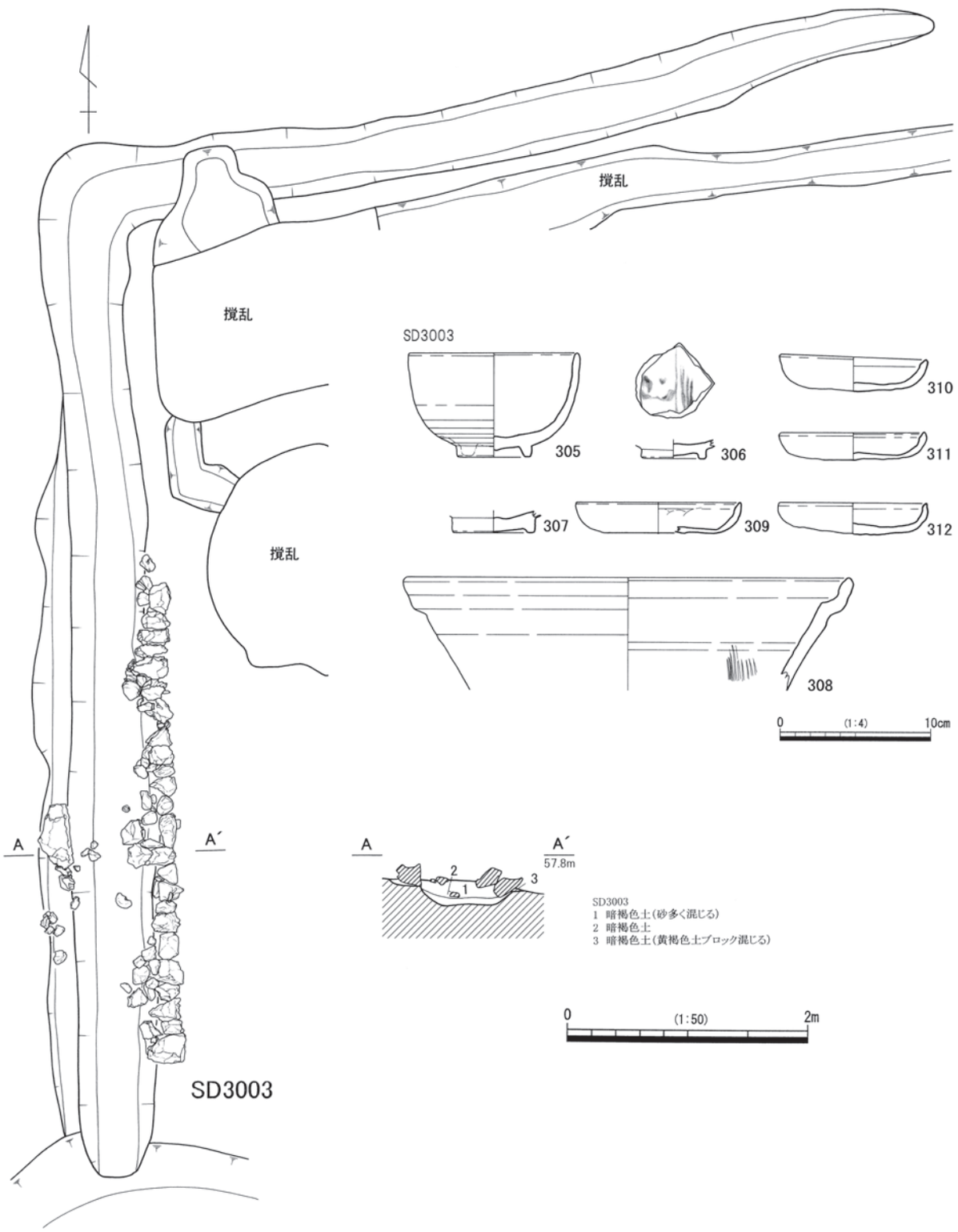


図 229　SD3003 実測図・出土遺物

SD4002（図 230、図版 45・69）

SD4002 は、4 区の西端に位置する南北溝である。SD4003 の埋没後に設けられている。石組みの溝で、現代の地割りとほぼ一致している。近代の陶磁器が出土しており、近代に埋没した溝とみてよい。

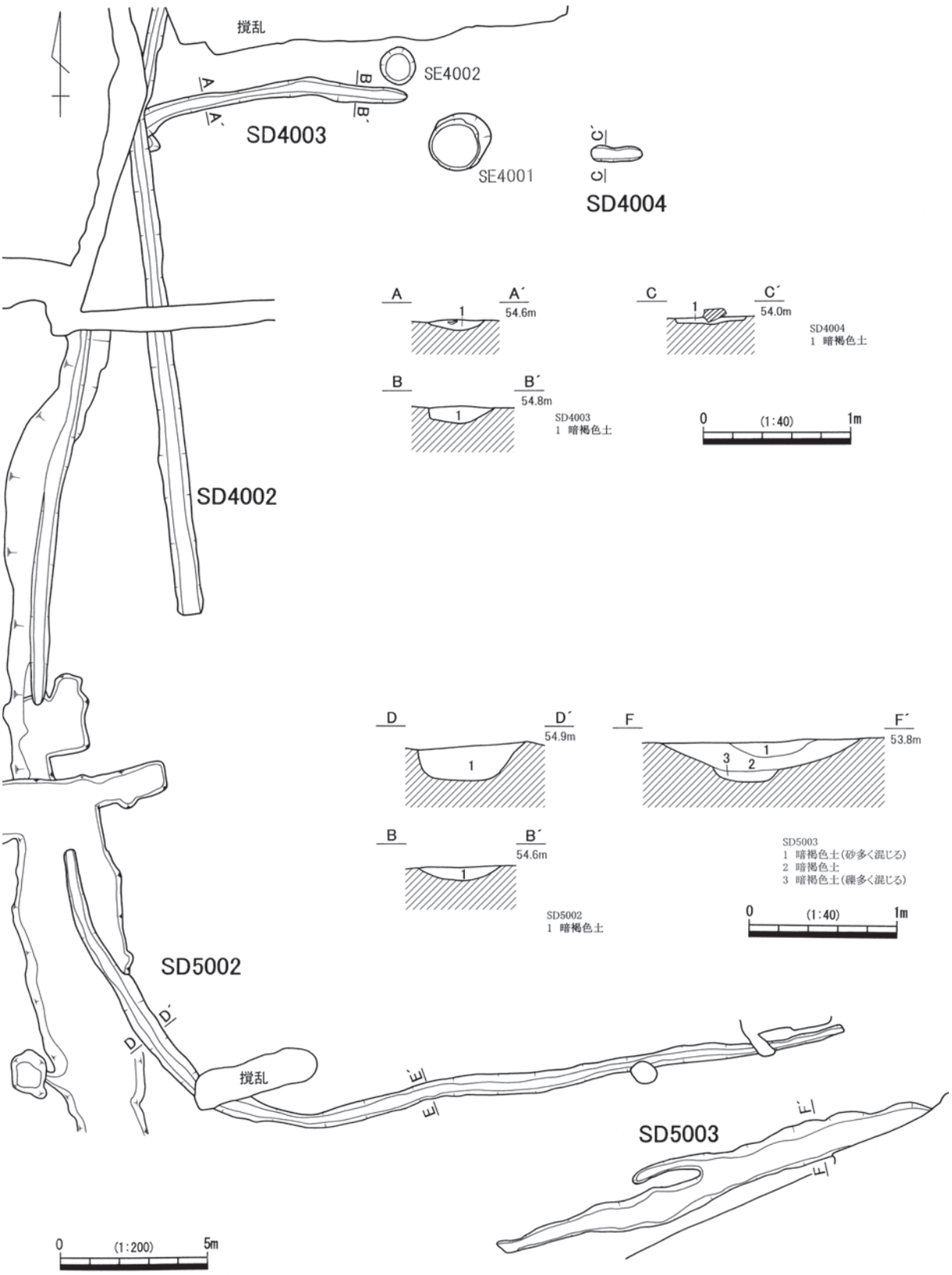


図 230　SD4002 ～ 4004・5002・5003 実測図

SD4003・5002（図 230・231、図版 45・69・82）

いずれも、４区の南半から５区に位置する溝である。調査時の排水溝で分断されてはいるが、位置関係からみて同一の区画溝である可能性が高い。東側は削平により失われているが、南北溝が約 32 m、南側の東西溝が約 20 mの規模で残存する。幅は平均 40 ～ 50 ㎝で、深さは約 20 ㎝となっている。

遺物は比較的豊富に出土している。313 ～ 317 は肥前の磁器である。313 は碗蓋であり、外面には山水文、見込には五弁花が描かれている。314 ～ 316 は碗で、314 には菊花文が描かれている。317 は瓶であり、蛸唐草文が描かれている。318 ～ 323 は瀬戸美濃製品で、318 は登窯５期の尾呂茶碗、321 は登窯９期の腰錆茶碗、322 と 323 は登窯８・９期の筒形碗、319 は登窯８・９期の箱形湯呑、334 は登窯４期の天目茶碗である。324 ～ 331 は土師質土器皿である。出土遺物の大半は 18 世紀後半のものであり、溝が機能していた時期についても、この範囲で捉えることができる。

SD4004（図 230・231）

SD4003 から東へ約６ mに位置する東西溝である。大半が削平されており、幅約 50 ㎝・長さ約 1.5 m の範囲のみ検出されている。非常に浅く、深さは５㎝程しか残存していない。遺物は２点出土しているのみである。332 は瀬戸美濃産の片口で、登窯 10・11 期のものである。この他に、土師質土器皿の小片が１点出土している。出土遺物は乏しいが、主に 19 世紀代に機能した溝と推定される。

SD5003（図 230・231、図版 70）

５区の南端に位置する東西溝である。幅が最大で約 130 ㎝、深さは西に向かって徐々に浅くなるが、中央付近で約 25 ㎝となっている。遺物は、わずかに３点出土したのみである。333 は山茶碗、335 は渥美産の甕である。いずれも中世前期の遺物であるが、近世の溝 SD5002 とほぼ平行しており、SD5002 に近い時期の遺構の可能性も考えられる。

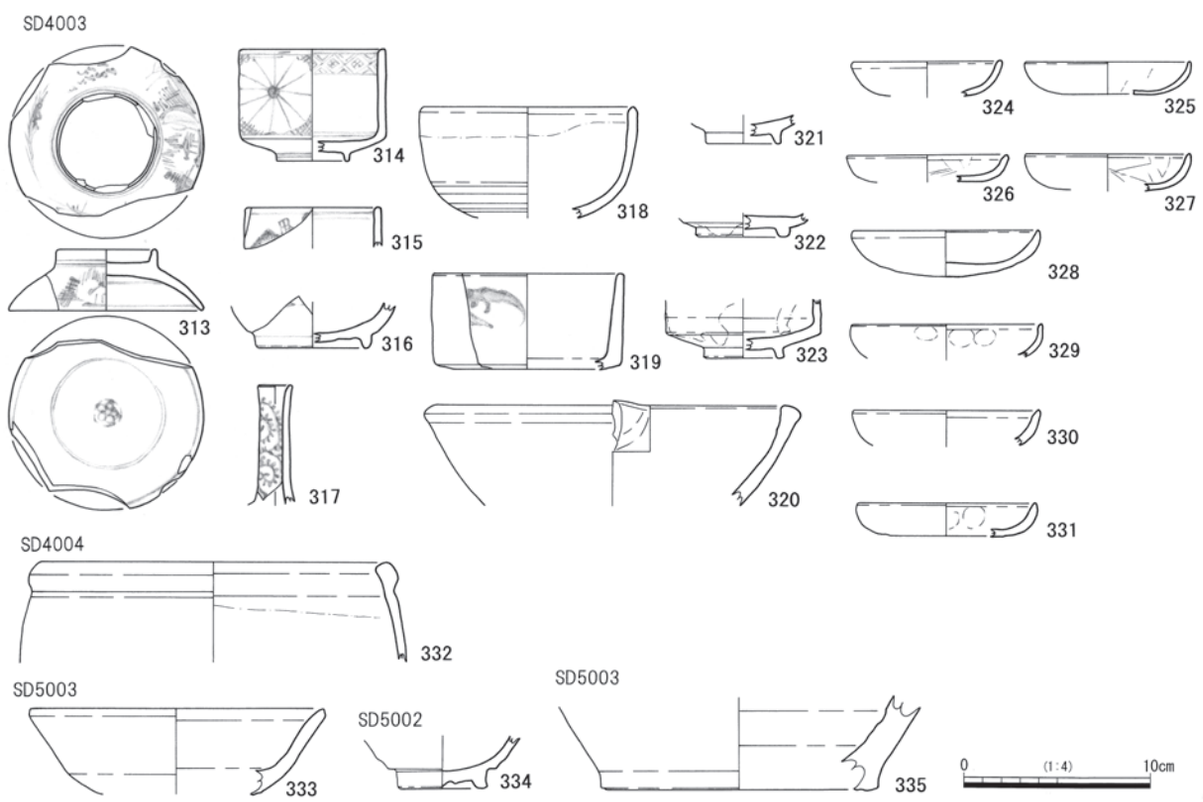


図 231　SD4003・4004・5002・5003 出土遺物

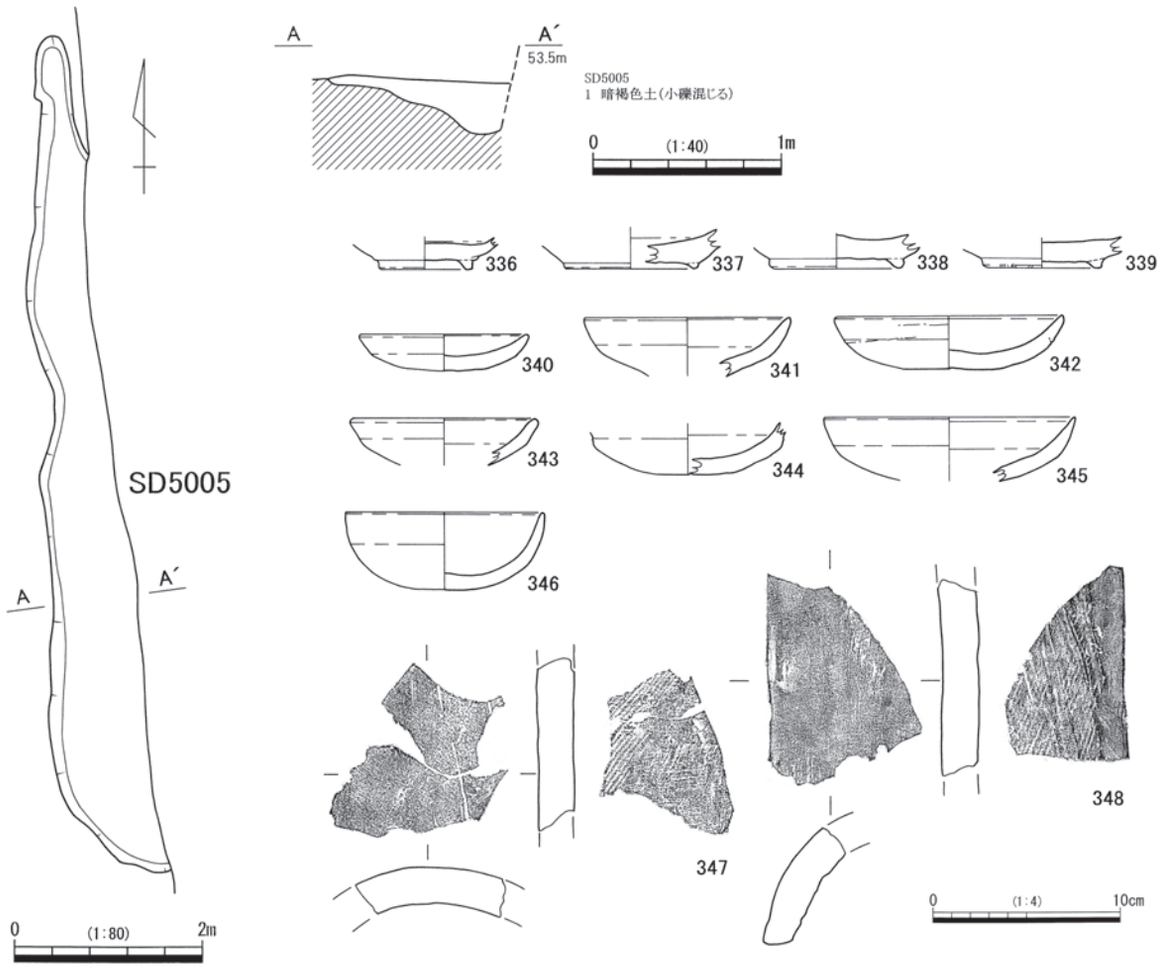


図 232　SD5005 実測図・出土遺物

SD5005（図 232、図版 45・70・82）

5 区の東端に位置する南北溝である。東側の大半は、調査区外となっており、上部がかなり削平されてしまっているため正確な規模は把握できないが、幅約 1 m、長さ約 9 m、最深部の深さ約 25 ㎝の規模で検出されている。北側と南側で徐々に浅くなり検出できなくなるが、南側に位置する寺海土遺跡の方へと延びている。溝の内部には、小礫を含む暗褐色土が堆積していた。

遺物としては、山茶碗や土師質土器皿、瓦などが出土している。336 ～ 339 は、渥美湖西産の山茶碗である。336 は小碗、337 ～ 339 は碗であり、Ⅰ～Ⅲ期のものまで確認できる。340 ～ 346 は、手づくね成形の土師質土器皿である。340 は小皿、341 ～ 346 は坏形の形状のものである。いずれも厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が認められる。

347 と 348 は丸瓦である。凹面には布目と吊り紐痕がみられ、隣接する中屋遺跡出土のものに近似している。比較的硬質のつくりで、表面と断面には被熱による変色や煤の付着が確認できる。

いずれの遺物も 13 世紀から 14 世紀にかけてのものであり、他に年代の降る遺物が出土していないことから、SD5005 は中通遺跡では明確に認識できる遺構の少ない、中世前期に機能した溝の可能性が高いと考えられる。

6　井戸

SE3002（図 233、図版 47・82）

３区の南西部に位置する井戸である。掘方は、直径 1.6 ｍの円形である。調査途中で崩落してしまい、安全上それ以上の深掘りが困難であったため、深さは約 2.3 ｍまでしか確認できていない。井戸枠等は残存していないが、土層には裏込め土が確認されることから、素掘りではなく井戸枠を有していたものと推定される。

遺物としては、瀬戸美濃窯産の陶器や土師質土器皿、磁器などが出土している。349 ～ 352 は瀬戸美濃窯の製品で、349 は登窯９期の鎧茶碗、350 は登窯９期の筒形湯呑、351 は登窯 10・11 期の秉燭、352 は登窯８期の片口である。このうち、350 はほぼ完形で、井戸の下層から出土している。353 は土師質土器皿であり、裏込め土から出土している。354 ～ 356 は、18 世紀後半の肥前窯の磁器である。354 は皿であり、見込みにコンニャク版の五弁花、底部外面に渦福銘がみられる。355 は蓋物で、外面には竹文が描かれている。356 は瓶であり、体部上半に草花文が描かれている。いずれも埋土の下層から出土している。

出土遺物の年代から、SE3002 は主に 18 世紀から 19 世紀にかけて使用され、19 世紀の後半頃までには廃絶していたものと推測される。

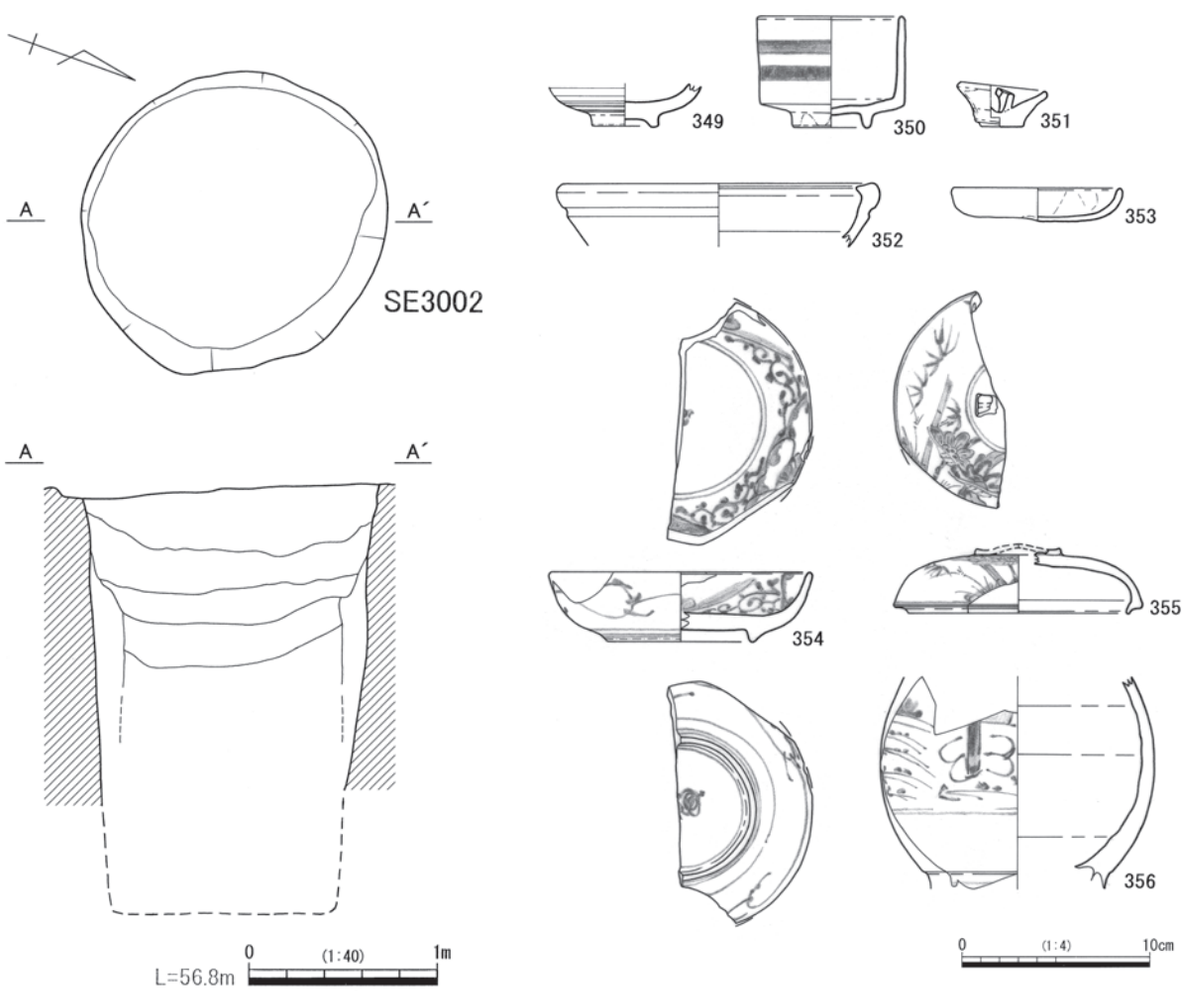


図 233　SE3002 実測図・出土遺物

SE4001（図 234、図版 47）

４区の南側に位置する井戸である。直径 1.7m の円形で、深さは 1.3m である。井戸枠などは残存していなかった。埋土は大きく２層に分けられている。いずれも暗褐色土を主体とし、上層には地山とみられる黄褐色土ブロック、下層には礫を多量に含んでいた。土層の堆積状況から、井戸枠は廃絶時に抜き取られている可能性が高く、下層にみられる礫の多くは裏込めに用いられていた石の可能性が高い。井戸枠を抜き取った後、井戸の大半は人為的に埋められたものとみてよい。

埋土からは、陶磁器や土師質土器皿、内耳鍋などが出土している。いずれも上層からの出土である。357 ～ 360・368 は瀬戸美濃窯産の製品で、357 は登窯５期の丸碗、358 は登窯４期の反皿、359 は登窯８期の小碗、360 は登窯 10 期の広東碗、368 は登窯５～７期の擂鉢である。361 は肥前窯の磁器である。筒形碗で、外面には菊花文が描かれている。362 ～ 365 は、手づくね成形の土師質土器皿である。いずれも比較的硬質で、薄手のつくりとなっており、内面にはヘラナデの痕跡が明瞭に残る。367 は志戸呂窯産の甕である。

遺物はいずれも埋土の上層に混入したものであり、井戸の使用時に伴うものではない。使用期間については明確でないが、19 世紀前葉の遺物が含まれていることから、廃絶年代はそれ以降であることがわかる。井戸として機能していた時期も、近世とみてよいであろう。

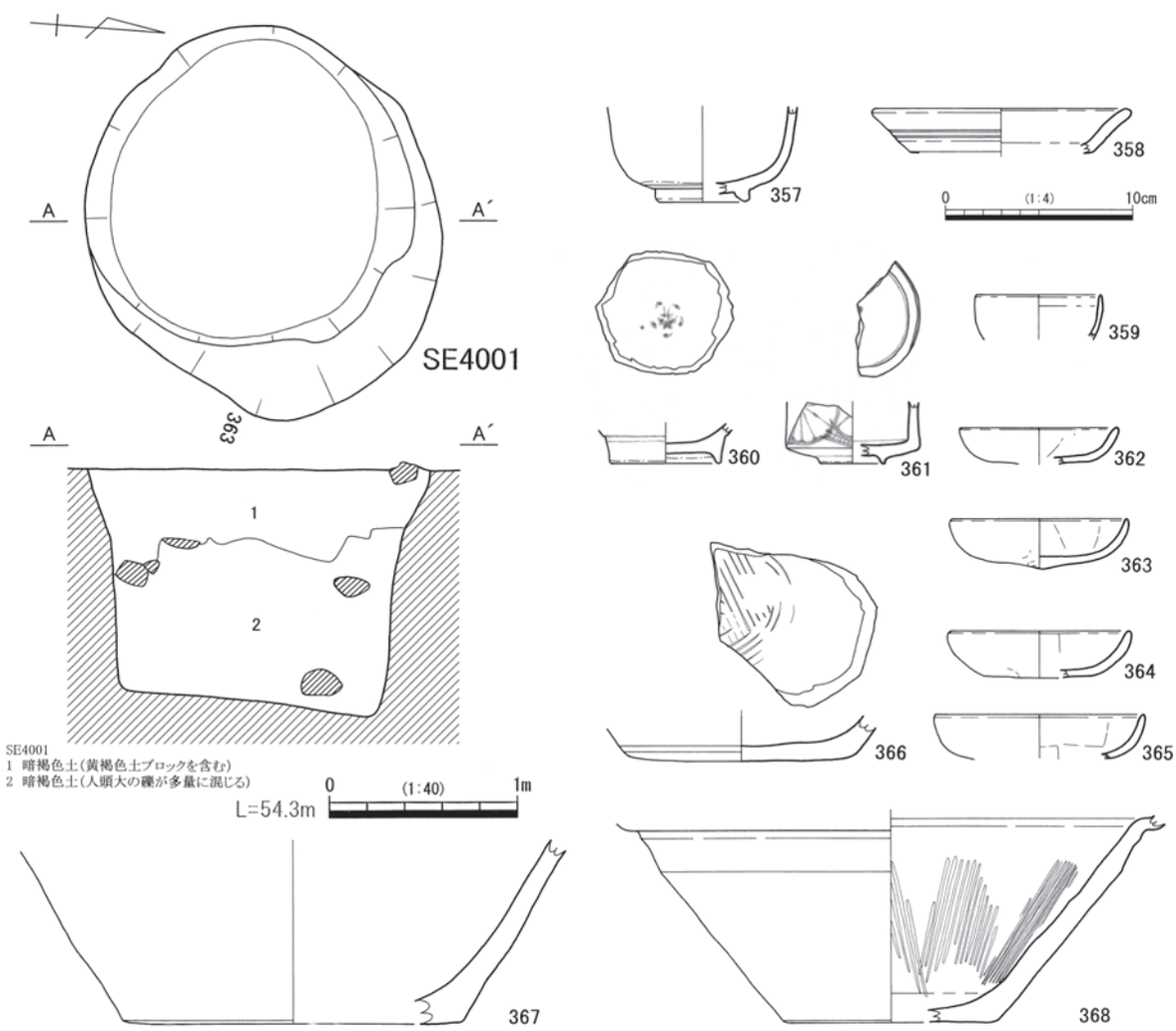


図 234　SE4001 実測図・出土遺物

SE5001（図 235・236、図版 71・85）

SE4001 から南東へ約 13 ｍに位置する井戸である。規模は、上部が長径 1.6m、短径 1.8m の楕円形、下部が直径１ｍの円形となっており、深さは現存で 78 ㎝である。桶の上端付近で穴が大きくなっており、土層もほぼその高さで明確に分かれることから、上部は井戸側の抜き取り穴とみてよい。裏込めには、人頭大程度までの大きさの礫が多く用いられている。

井戸側には、桶が使用されている。桶材（369 ～ 383）は、幅 6.5 ～ 15.1 ㎝、長さ 74.4 ～ 80.6 ㎝、厚さ３～５㎝程の円周に沿って彎曲する板材で、合計 15 枚用いられていた。樹種はいずれもサワラである。底部に底板はなく、明確な石敷き等の施設は検出されていない。井戸側内からは、廃棄の際に投棄された礫や木片などが出土している。384 は桶内から出土した木材である。礫については、裏込めに用いられていたものと考えられる。土器については、裏込め土から内耳鍋の図化できない小破片が２点出土しているのみである。

遺物が乏しいため詳細な年代は不明であるが、井戸材に桶が使用されていることから、近世の井戸である可能性が高いと推測される。

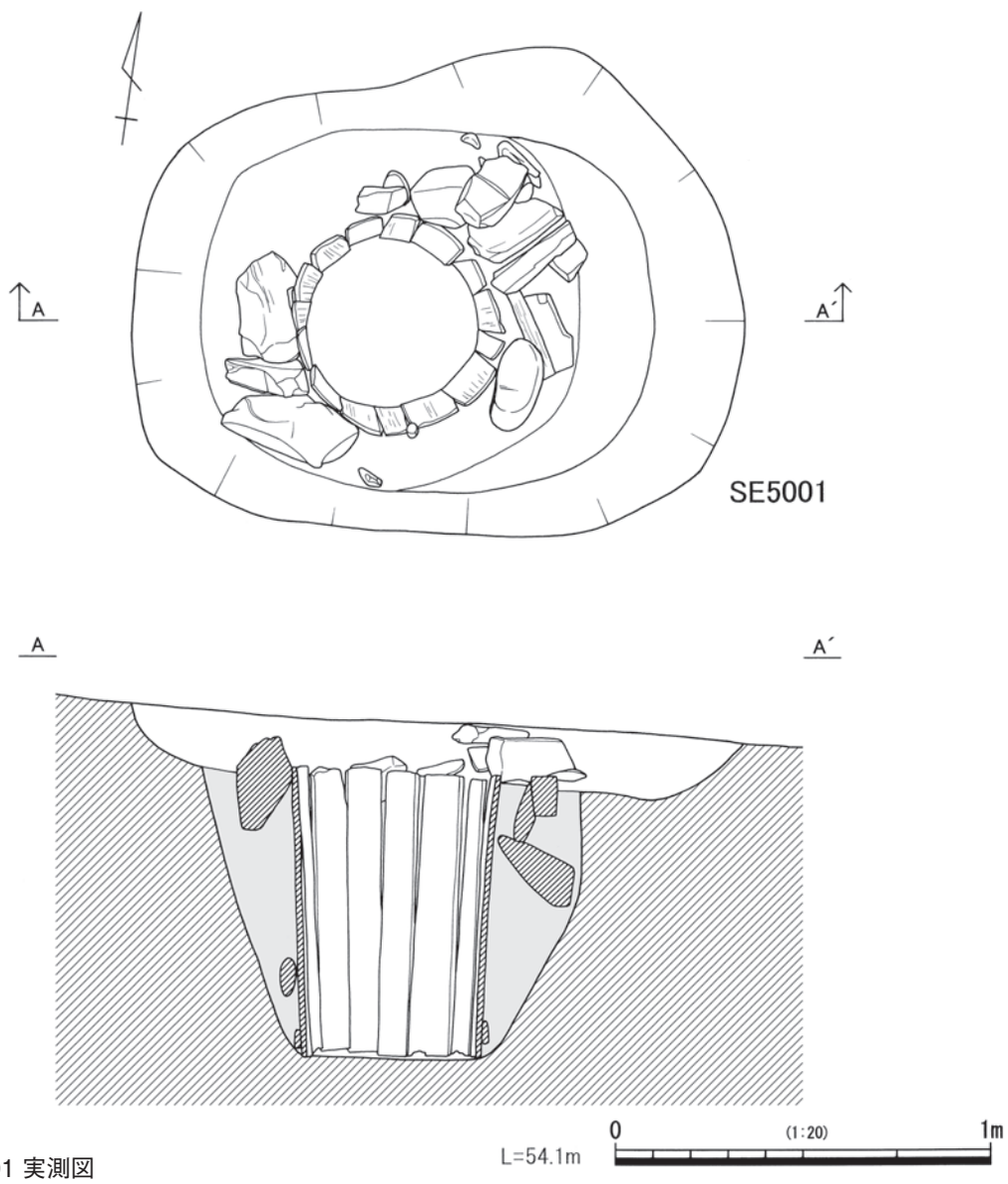


図 235　SE5001 実測図

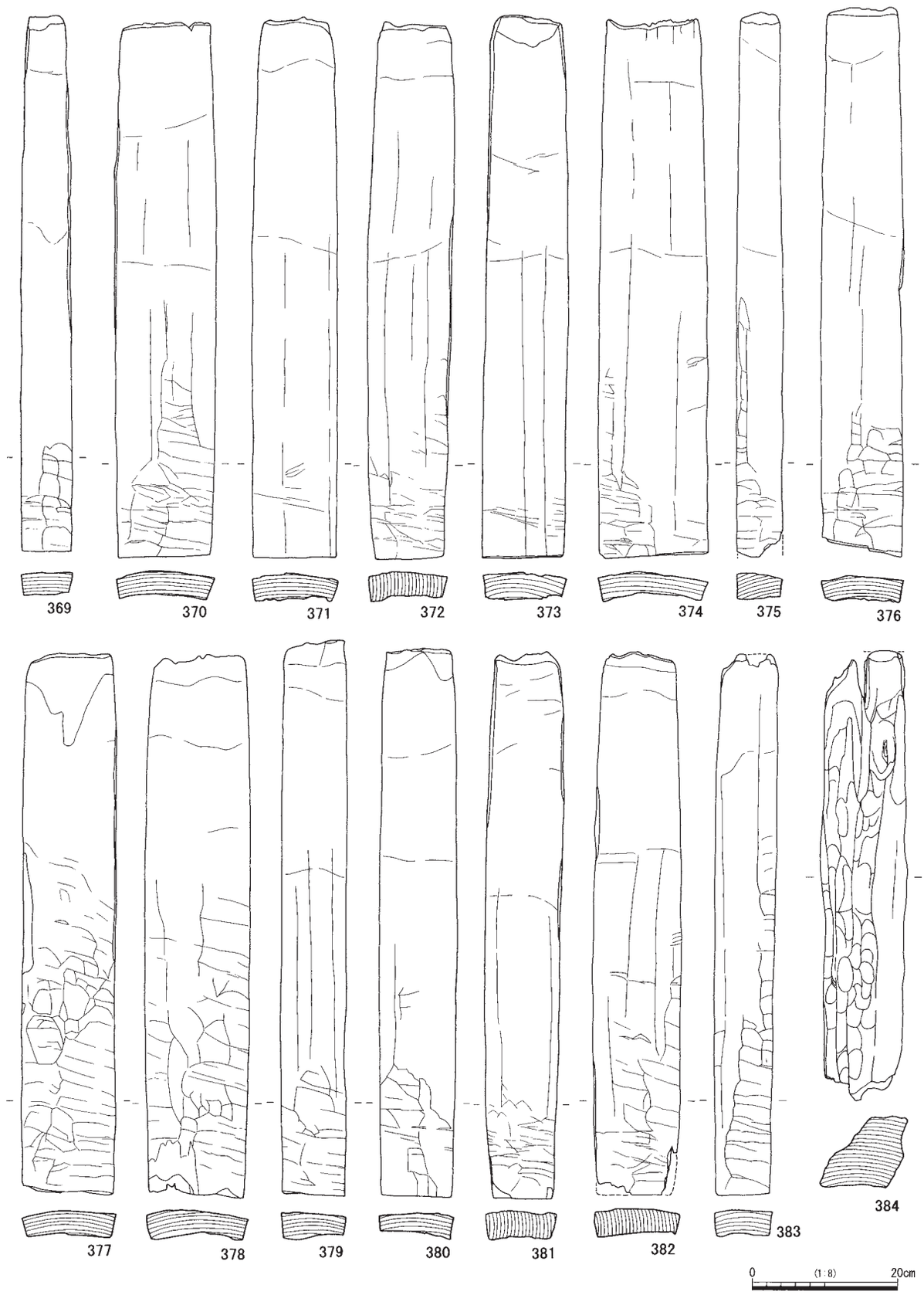


図 236　SE5001 出土木製品

7　土坑

SF3011（図 237）

３区の中央部に位置する土坑である。切り合い関係から、SF3012 に先行する遺構であることが確認されている。直径約 90 ㎝の円形で、深さは現存で 36 ㎝となっている。埋土は、大きく２層に分けることができる。上層に地山を起源とする黄褐色土ブロックが混在していることから、人為的に埋められたものと判断される。遺物はいずれも下層から出土している。385 は初山窯産の鉄釉をかけた内禿小皿である。386 は手づくね成形の土師質土器皿、387 は内彎形の内耳鍋である。これらの遺物から、SF3011 は 16 世紀後葉の遺構と推定される。

SF3012（図 237）

SF3011 の南側に隣接する土坑である。直径 1.4 ｍのややいびつな円形で、深さは現存で 40 ㎝である。切り合い関係から、SF3011 の埋没後に掘られたことが確認されている。埋土は、SF3011 とほぼ同様で、暗褐色土を主体とし、上層には黄褐色土ブロックが混入している。遺物は破片ではあるが、３点出土している。388 は志戸呂窯産の擂鉢で、上層から出土している。389 は美濃窯産の小皿である。登窯３・４期のもので、下層から出土している。これらの他に、擂鉢の破片が１点出土している。遺物は乏しいが、17 世紀後半以降に掘られた遺構と推定される。

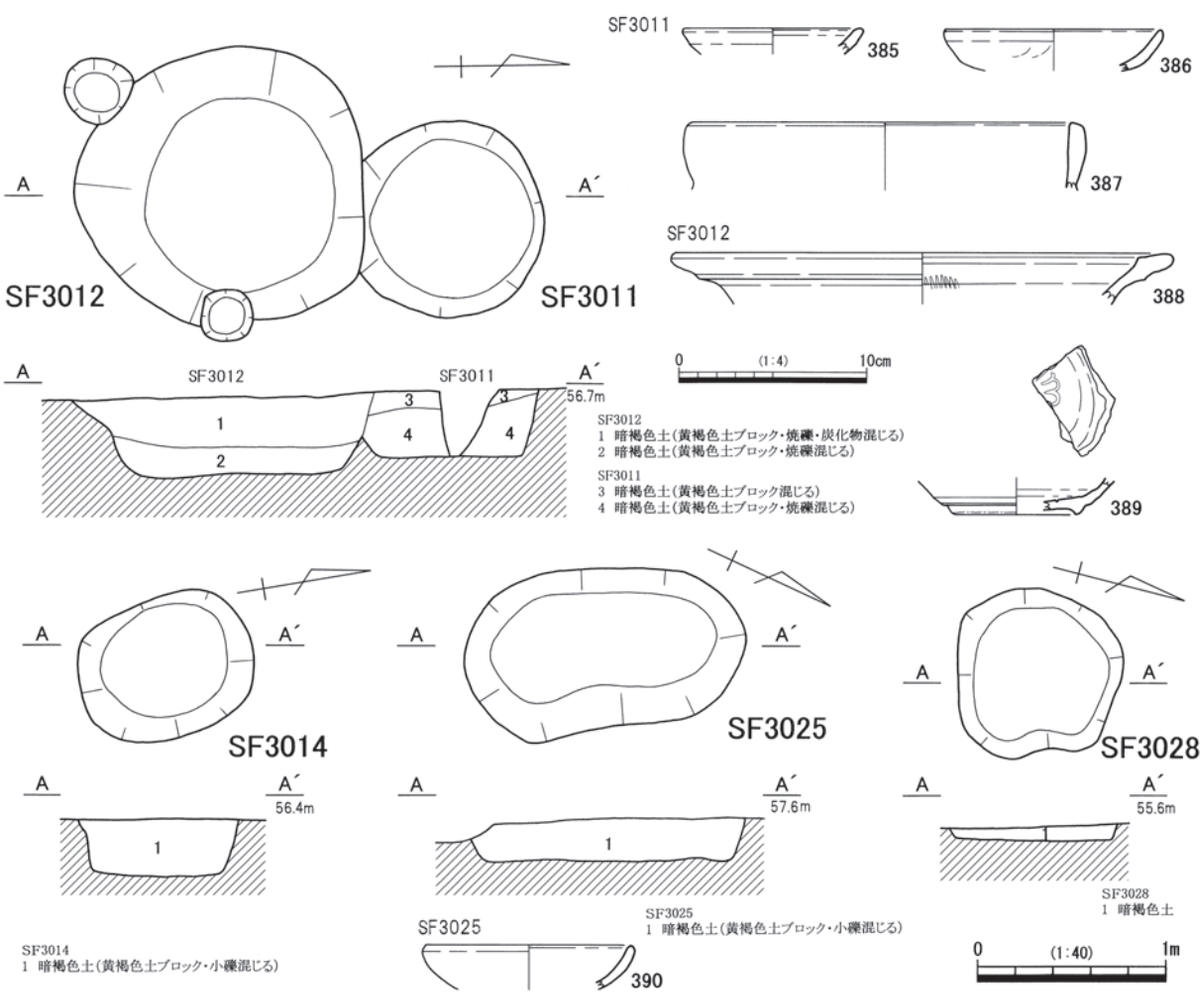


図 237　SF3011 ～ 3028 実測図・出土遺物

SF3014（図 237）

SF3011 から東に約 10 ｍの場所に位置する小型の土坑である。長径約 1 ｍ・短径約 70 ㎝の楕円形で、深さは現存で 33 ㎝となっている。埋土は、黄褐色土ブロックや小礫が混じる暗褐色土の単層である。

遺物は擂鉢の小片が 1 点出土しているのみである。時期の特定は困難ではあるが、出土した擂鉢が近世のものとみられることから、近世の遺構とみてよいであろう。

SF3025（図 237）

3 区の中央、やや北西側に位置する土坑である。長径 1.4m・短径 73 ㎝の楕円形で、深さは現存で 20 ㎝である。切り合い関係から、溝 SD3003 より先行する遺構であることが確認されている。埋土は、黄褐色土ブロックや小礫が混じる暗褐色土の単層である。

遺物は乏しく、土師質土器の破片が数点出土している程度である。390 は手づくね成形の土師質土器皿である。詳細な年代は不明であるが、SF3025 の埋没後に設けられた溝 SD3003 が 18 ～ 19 世紀のものであることから、SF3025 は概ね 17 世紀代の遺構とみてよいであろう。

SF3028（図 237）

3 区の南東隅に位置する土坑である。直径 90 ㎝前後のややいびつな円形であり、深さは浅く、現存で 10 ㎝程度しかない。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物としては、山茶碗と伊勢型鍋みられる破片が各 1 点出土しているが、図化できない小片である。出土遺物から、中世前期の遺構であると推定される。

SF3048（図 238）

SF3028 から約 14 ｍ北に位置する小型の土坑である。長径 70 ㎝・短径 50 ㎝の楕円形で、深さは 7 ㎝程しか残存しない。埋土は暗褐色土の単層である。西側の一部が小穴によって失われている。

遺物は、古志戸呂の擂鉢片（391）が 1 点出土しているのみである。この遺物から、SF3048 は 15 世紀後葉以降に設けられた遺構であると推測される。

SF3060（図 238）

SF3048 から約 4 ｍ南西に位置する小型の土坑である。長径 90 ㎝・短径 60 ㎝の楕円形で、大部分が攪乱によって失われているが、攪乱を逃れた部分では深さは 30 ㎝程となっている。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は、土師質土器皿の小片が 1 点出土しているのみである。表面の磨滅も著しく、年代の特定は困難であるが、SF3060 は周辺の土坑と同様に中世末から近世にかけての遺構である可能性が高い。

SF3121（図 238、図版 47）

3 区の北西隅に位置する土坑である。長径 80 ㎝・短径 50 ㎝の楕円形で、東西方向を長軸とする。規模に比べて比較的深く、深さは現存で 36 ㎝ある。埋土は大きく 2 層に分けられ、下層には黄褐色土ブロックが混じる暗褐色土が堆積していた。

遺物としては、土師質土器皿や内耳鍋、羽釜が出土している。いずれも、上層からの出土である。393 ～ 400 は手づくね成形の土師質土器皿で、色調は灰白色～橙白色を呈する。401 はくの字形内耳鍋、402 は羽釜であり、ともに 15 世紀後半のものである。これらの遺物から、SF3121 の年代は 15 世紀後半頃と推定される。

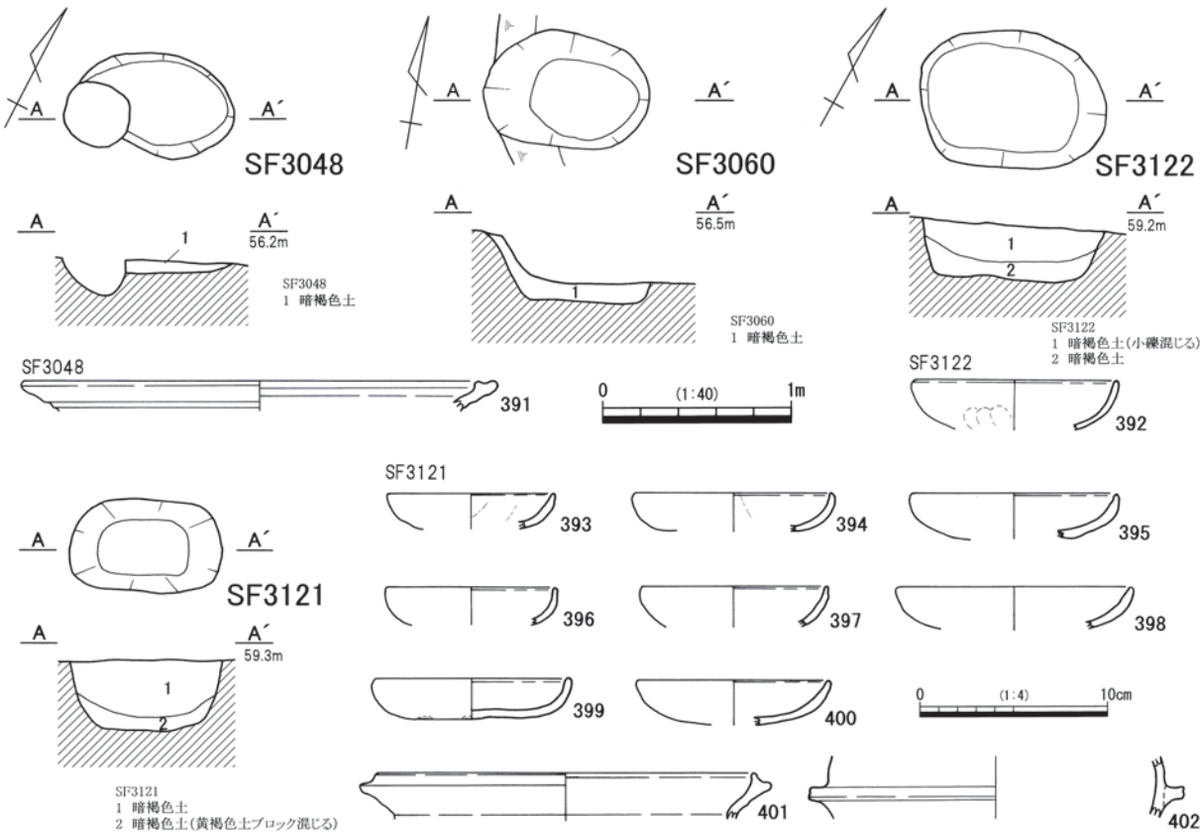


図 238　SF3048 ～ 3122 実測図・出土遺物

SF3122（図 238）

SF3121 から 1.5m 東に位置する土坑である。長径１ｍ・短径 70 ㎝の楕円形で、深さは現存で約 30 ㎝となっている。埋土は大きく２層に分けられており、ともに暗褐色土であるが、上層には小礫が混じっていた。

遺物としては、土師質土器皿が４点出土している。392 は下層から出土した土師質土器皿である。やや磨滅しているが、灰白色の色調を呈し、底部には指頭痕が明瞭に残る。他の３点は上層から出土しており、図化できない小片であるが、胎土と色調ともに 392 とほぼ同様のものである。隣接する SF3121 と同様に、SF3122 は 15 ～ 16 世紀の遺構と推測される。

SF4001（図 239、図版 82）

４区の西側に位置する土坑である。長径 65 ㎝・短径 52 ㎝の楕円形で、深さは 12 ㎝程しかない。埋土は暗褐色土の単層で、小礫が混じっていた。

遺物は、常滑産の壺（403）が１点出土しているのみである。口縁の二分の一程度の破片であり、口縁部を下にした状態で出土している。発見時には、検出面から浮いた状態となっており、周辺からも他の破片は出土していない。判然としない部分も多いが、土坑の底から浮いた位置にあることから、意図的に倒置させた状態で埋納されたものとは考えにくい。埋土とともに流入する過程において、偶然このような状態になったとみた方がよいであろう。この壺は、常滑編年９型式のものである。

他に遺物が出土していないこともあり、遺構の詳細な年代については特定できないが、403 の年代から、遺構の上限年代は 15 世紀前半に位置付けられる。

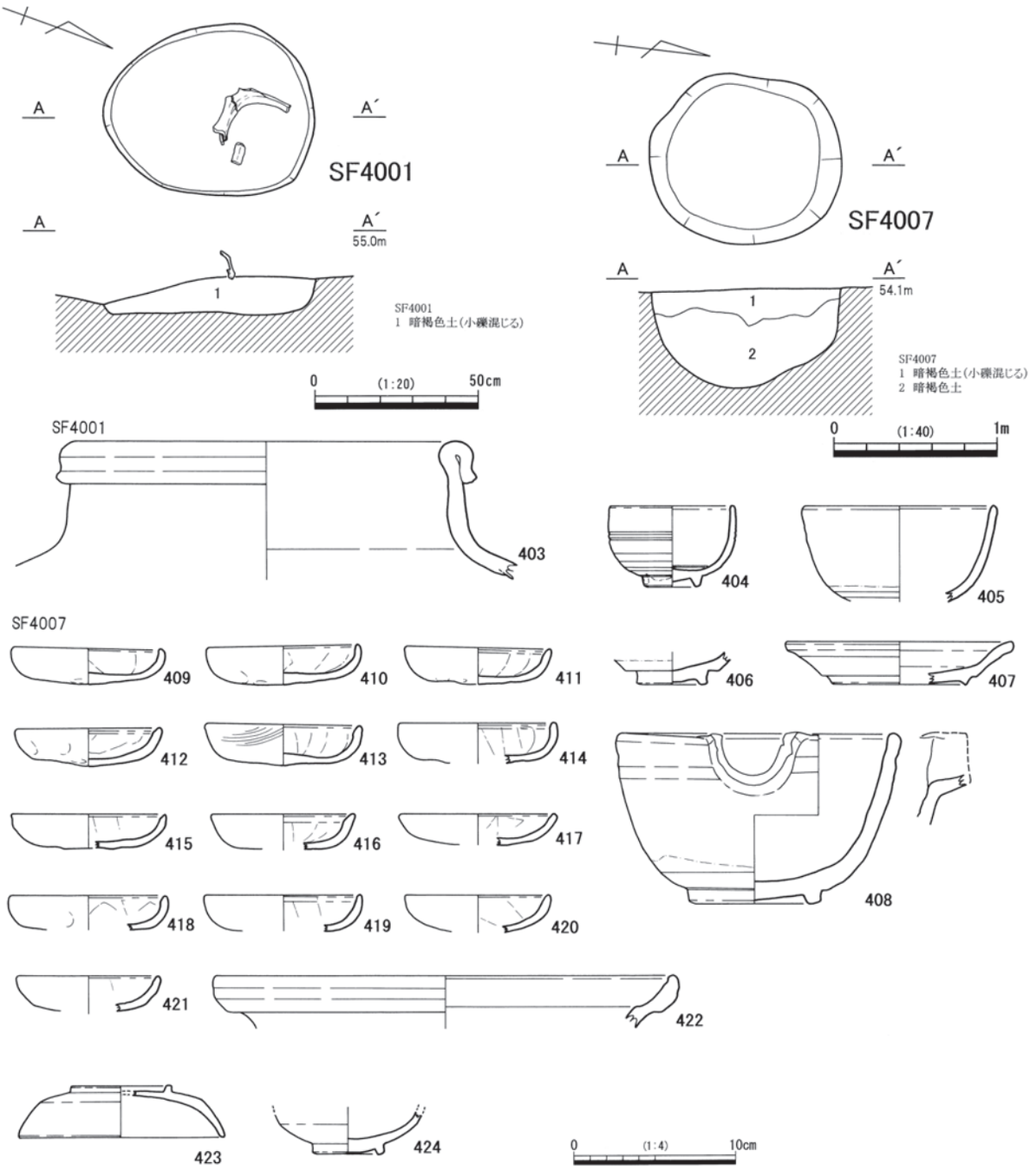


図 239　SF4001・4007 実測図・出土遺物

SF4007（図 239、図版 46・71・82・83）

４区の南側ほぼ中央に位置する土坑である。直径約 1.1 ｍの円形で、深さは現存で約１ｍとなっている。底部は擂鉢状になっており、中央部が最も深くなっている。埋土は大きく２層に分けられ、いずれも暗褐色土を主体とするが、上層には小礫が多く混じっていた。

遺物は、比較的豊富に出土している。404 ～ 408・422 は瀬戸美濃窯の製品である。404 は登窯６・７期の小碗で、完形品である。405 は登窯６・７期の尾呂茶碗、406 は登窯４期の天目茶碗、407 は登窯４期の反皿である。408 は登窯８期の片口で、口の先端を欠くがほぼ完形品である。422 は登窯６期の

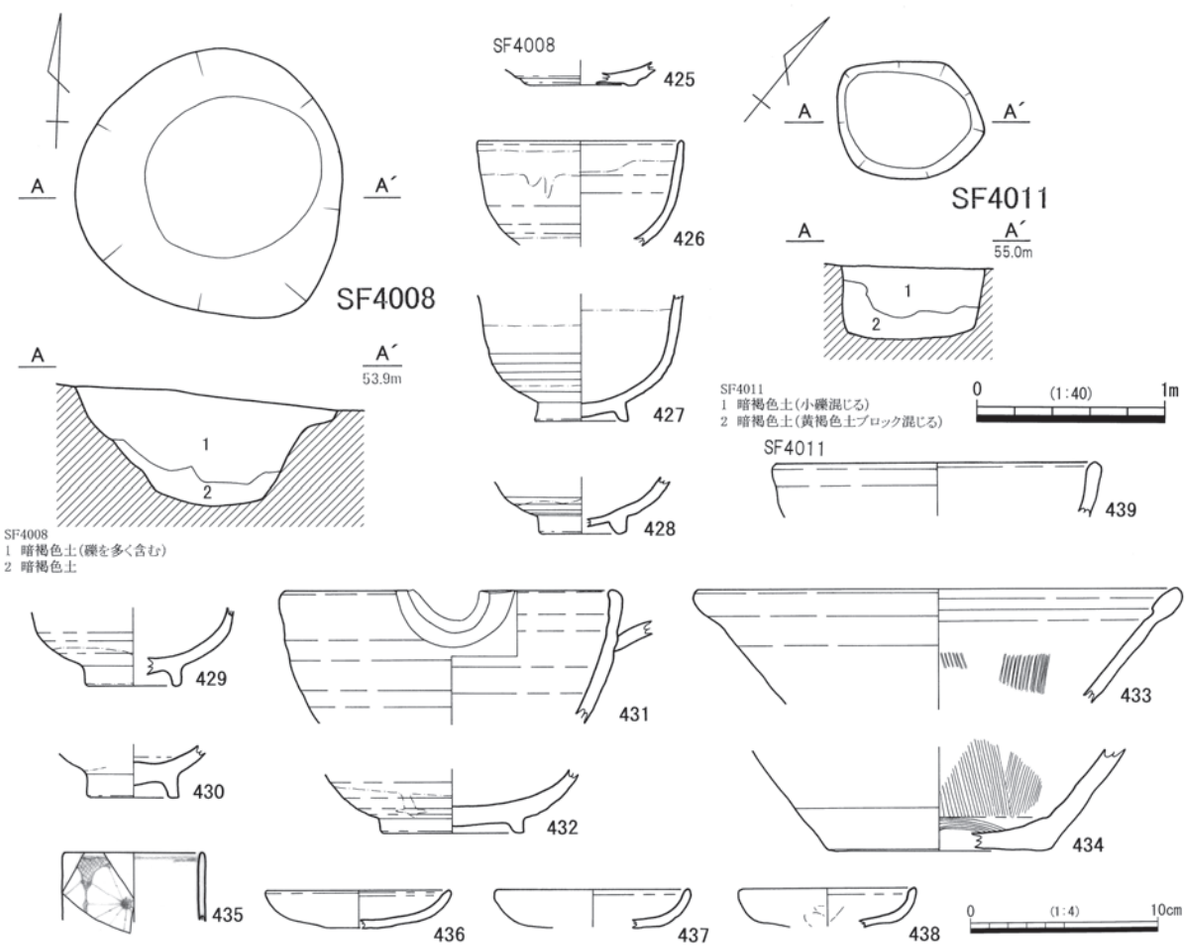


図 240　SF4008・4011 実測図・出土遺物

擂鉢であり、部分的に二次焼成を受けている。409 ～ 421 は手づくね成形の土師質土器皿であり、このうち 409 ～ 413 はほぼ完形である。いずれも色調は、灰白色からにぶい黄橙色である。土器・陶磁器の他には、漆椀などの木製品も出土している。423 は漆椀の蓋である。ブナ属の樹種が使用されており、内外面には赤漆が塗られている。424 は漆椀の底部の破片である。腰丸碗で、やや薄手のつくりである。423 と同じブナ属の樹種が使用されており、内外面には赤漆が塗布されている。

遺物には多くの完形品が含まれており、これらに関しては土坑内に一括投棄されたものとみてよい。出土遺物から、SF4007 の年代は 18 世紀後半と推定される。

SF4008（図 240、図版 47・48）

SF4007 の約 4 m東に位置する土坑である。直径 1.4m のややいびつな円形で、深さは現存で約 90 ㎝となっている。埋土は大きく２層に分かれ、ともに暗褐色を主体とするが、上層は礫を多く含んでいる。

遺物は上層から比較的豊富に出土している。425 ～ 429・433・434 は瀬戸美濃製品である。425 は登窯１・２期の志野皿である。426 ～ 428 は登窯６・７期の尾呂茶碗で、飴釉の上に白濁色の釉が掛けられている。429 は登窯４期の丸碗である。畳付を除き漆黒色の釉が掛けられている。431 と 432 は登窯８・９期の片口であり、口縁部には御深井釉の上に別の釉薬を二重掛けされている。433 と 434 は擂鉢で、433 が登窯６期、434 は登窯５～７期のものである。430 は白釉をかけた肥前陶器の碗である。他の陶器とともに、一部に二次焼成を受けている。435 は肥前磁器の筒形碗であり、外面には菊花文が描かれ

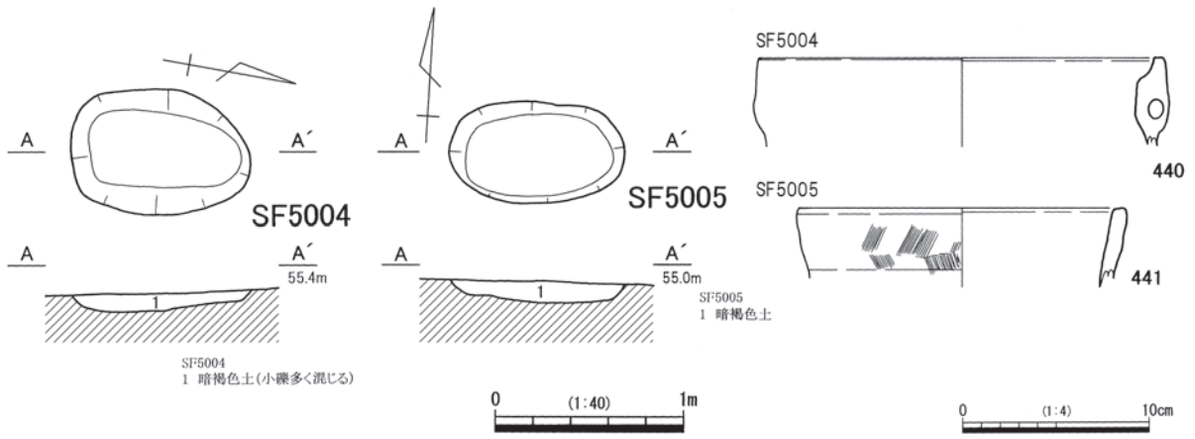


図 241　SF5004・5005 実測図・出土遺物

ている。436 ～ 438 は土師質土器皿である。いずれも手づくね成形で、灰白色からにぶい黄橙色を呈している。図化したもののほかに、内耳鍋の破片なども出土している。

出土した遺物は、古い時期のものも多少含まれているが、大半は 18 世紀中葉から後葉にかけてのものである。これらの遺物から、SF4008 は 18 世紀後半の遺構であると推定される。

SF4011（図 240）

４区の北西側に位置する小型の土坑である。長径 80 ㎝・短径 60 ㎝の楕円形で、深さは現存で約 40 ㎝である。埋土は暗褐色土を主体とするが、大きく２層に分けることができ、下層には黄褐色土ブロックが、上層には小礫が多く混じっていた。

遺物は乏しく、破片が２点出土しているのみである。439 は瀬戸美濃窯産の片口鉢で、登窯 10・11 期のものである。出土したもう１点は、体部の破片であるが、おそらくは同一個体であろう。

破片がわずかに２点しか出土していないため、遺構の詳細な年代は不明であるが、出土した遺物から、SF4011 は 19 世紀中頃以降に掘られたものとみてよい。

SF5004（図 241）

５区の西端に位置する土坑である。南北方向を長軸とする長径 95 ㎝・短径 65 ㎝の楕円形で、深さは浅く８㎝程しか残存しない。埋土は暗褐色土で、小礫が多く混じっていた。

遺物は、内耳鍋が１点出土しているのみである。440 は内彎形の内耳鍋であり、16 世紀後半から 17 世紀前半のものと考えられる。遺物は乏しいが、遺構の年代は同様の時期と考えられる。

SF5005（図 241）

SF5004 から北東へ約５ｍに位置する土坑である。東西方向を長軸とする長径 94 ㎝・短径 52 ㎝の楕円形で、深さは浅く 10 ㎝程しか残存しない。規模や形状、深さが SF5004 と近似している。

遺物としては、内耳鍋の破片が１点出土しているのみである。441 は内彎形の内耳鍋で、16 世紀後半から 17 世紀前半のものである。SF5004 と同様に、この時期の遺構であると考えられる。

8　その他の遺構

SX3001（図 242、図版 47・71・83）

調査区南西隅で発見された土坑墓である。南側は調査区外となっているが、掘方の西側が調査区境で東へやや湾曲していることから、墓坑は南北方向を長軸とする、長さ約 1.2 m・幅 1 mの隅丸長方形であると推測される。深さは 20 ㎝残存していた。埋土は大きく 2 層に分けられるが、いずれも黄褐色土（地山）ブロックを含む暗褐色土であり、人為的に埋められたことが確認できる。

副葬品としては、墓坑の北側隅から土師質土器皿が 9 点出土している。449 は口を上に向け、少し西側に離れた位置に置かれていた。他の 8 点は口を伏せた状態で、折り重なって出土している。下になっていたものは割れていたが、接合するとほぼ完形となる。ただし、442 と 446 については破片がやや散らばっており、破砕したものを埋納した可能性がある。墓坑の南側が未調査のため不明ではあるが、副葬品が北側に集中していることから、頭位は北側であった可能性が高い。

442 ～ 449 は、手づくね成形の土師質土器皿である。色調は淡い黄色系である。450 はロクロ成形のもので、浅い黄橙色を呈する。

出土した遺物が土師質土器皿のみであり、詳細な年代を特定することは困難ではあるが、概ね 16 世紀代の土坑墓とみてよいであろう。

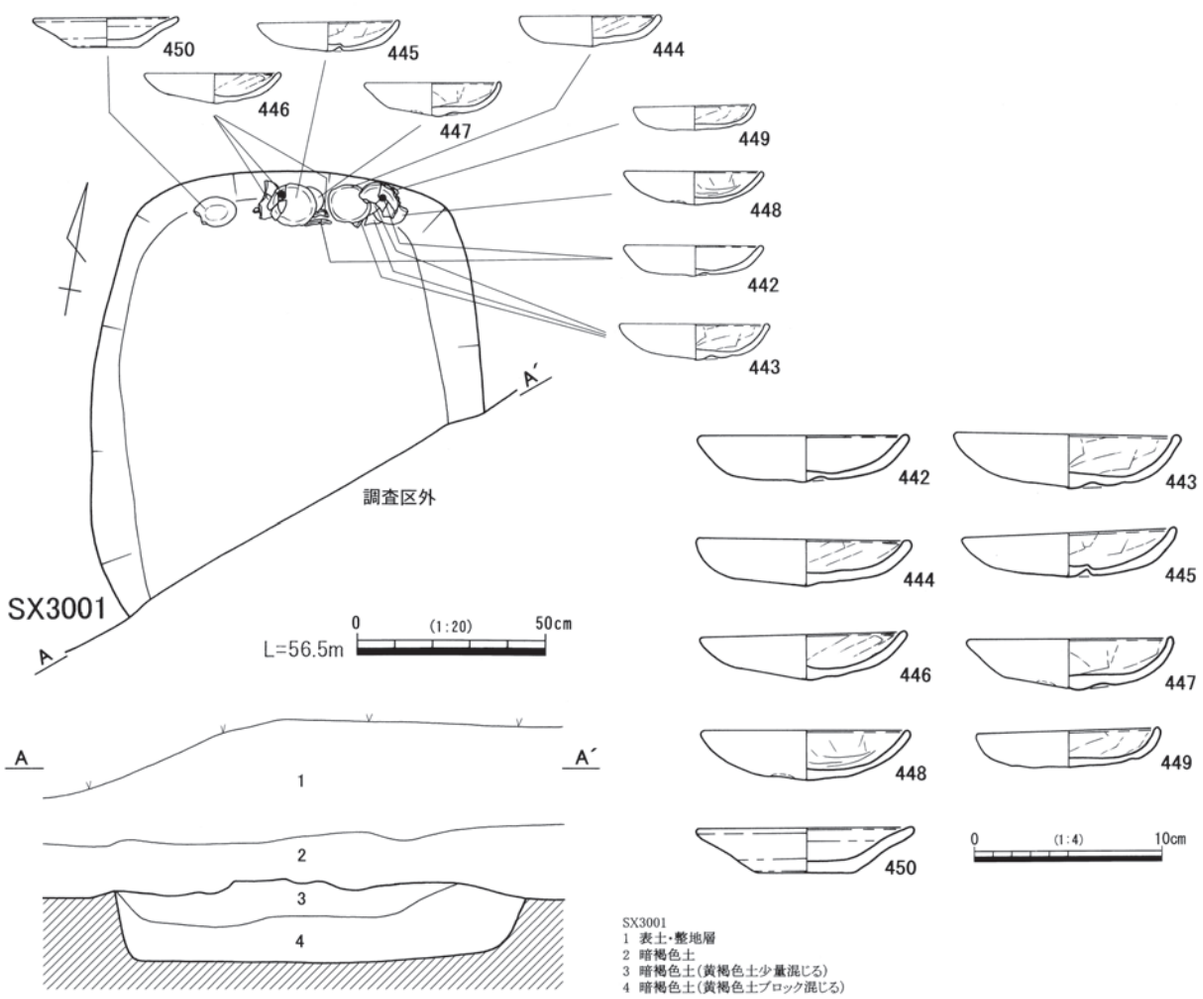


図 242　SX3001 実測図・出土遺物

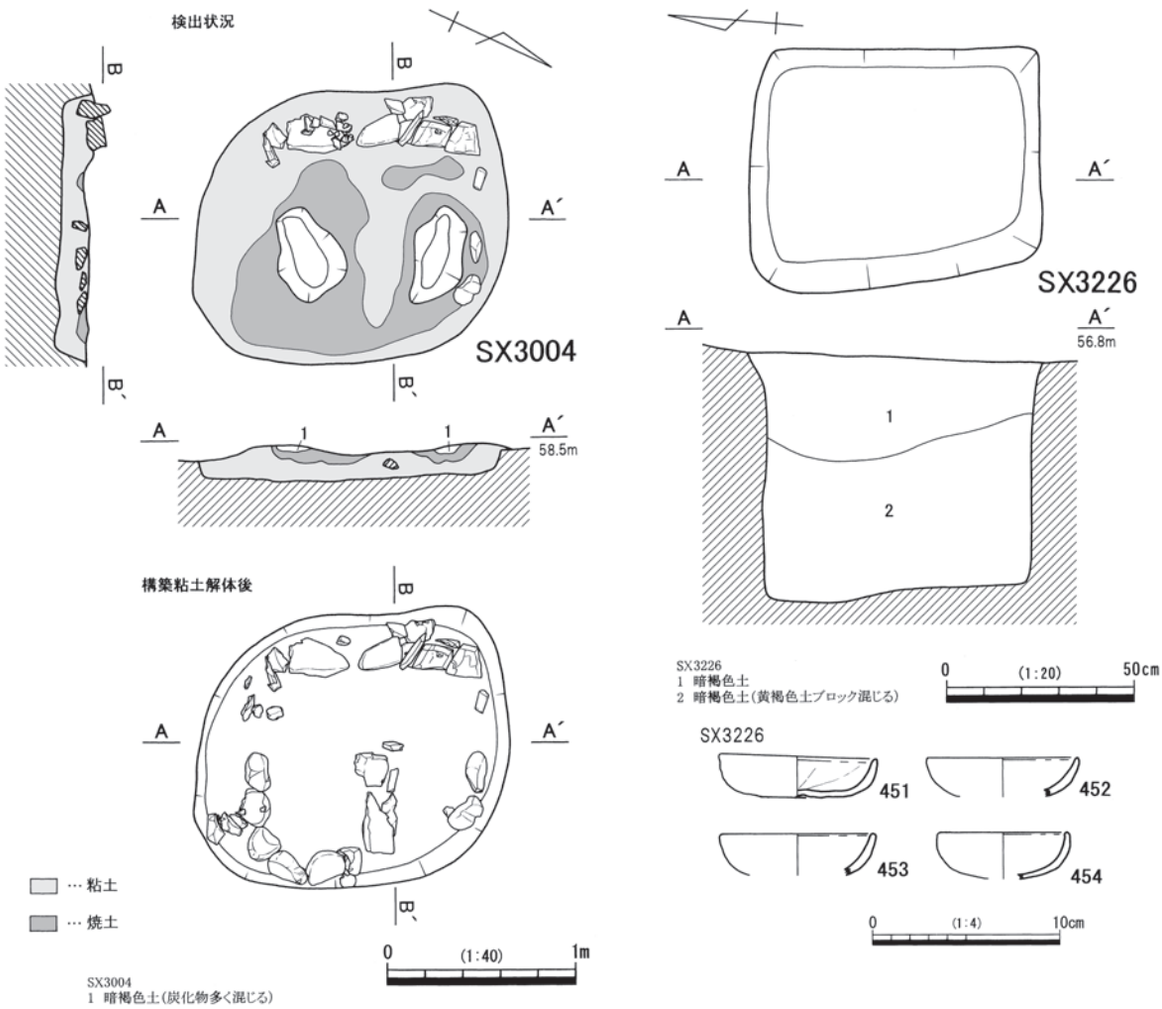


図 243　SX3004・3226 実測図・出土遺物

SX3004（図 243）

調査区北西部で検出された竈である。1.6 × 1.4 mの範囲で粘土が貼られ、焼土は南側と北側の２つに分かれて検出されている。焼土の中央はやや窪んでおり、その部分には炭化物を含む暗褐色土が堆積している。構築粘土には石材が埋め込まれていた。東西方向の石列は３列になっており、竈を２つに仕切っている。これらの石は竈の壁の芯材とみられ、焼土の範囲も石の区画の内側にほぼ一致している。

遺物としては、構築粘土中から瓦が 10 点出土しているのみである。瓦はいずれも小片であるが、屈曲の様子からみて桟瓦である。瓦の詳細な年代については不明であるが、東へ約 200 mに位置する中屋遺跡では、19 世紀後半までにはすでに桟瓦葺きの建物が存在したことが明らかとなっている。SX3004についても、おそらくは近世末～近代に築かれたものと推測される。

なお、この竈が設置された建物については、検出されていない。この竈の検出状態から当時の生活面の高さが推し量れるが、礎石建物の場合に礎石や浅い据え付け穴については、削平によって失われている可能性が高い。屋外に設けられた竈とは考えにくいため、遺構として認識できなかった礎石建物の屋内に設置された竈とみてよいであろう。

SX3226（図 243、図版 47・83・84）

SX3001 の 14 m北に位置する。長さ 80 ㎝・幅 65 ㎝の長方形で、深さは約 60 ㎝残存する。垂直に近い形で深く掘り込まれており、直葬墓や木棺墓の可能性が考えられる。埋土は大きく２層に分かれ、ともに暗褐色土を主体とするが、下層には黄褐色土（地山）ブロックが多く含まれている。

遺物としては、埋土上層から土師質土器皿が出土している。451 ～ 454 は、手づくね成形の土師質土器皿である。いずれも薄手で、比較的硬質のものである。完形のものは 451 のみであり、452 ～ 454 は破片である。

出土した遺物が土師質土器皿のみであり、詳細な年代を特定することは困難ではあるが、近世の遺構とみてよいであろう。

SX3227（図 244、図版 71・87）

SX3226 の 13 m北に位置する埋葬遺構である。上面は直径約 50 ㎝の円形で、底部は長さ 37 ㎝・幅 27 ㎝の長方形となっている。深さは検出面から 20 ㎝程である。埋土は、黄褐色土（地山）ブロックが混じる暗褐色土の単層となっており、人為的に埋められたものと判断できる。人骨は遺存していなかったが、墓坑の大きさからみて、火葬骨を納めた墓の可能性が高い。

副葬品は、墓坑の北東隅から、六道銭とみられる銭貨が６枚出土している。緡銭の状態で出土しており、錆着が著しいために２つに分離することしかできなかった。銭銘が確認できるのは２枚（455・456）のみであるが、いずれも永楽通宝である。銭種の構成から、16 世紀～ 17 世紀前葉の埋葬遺構であると推定される。

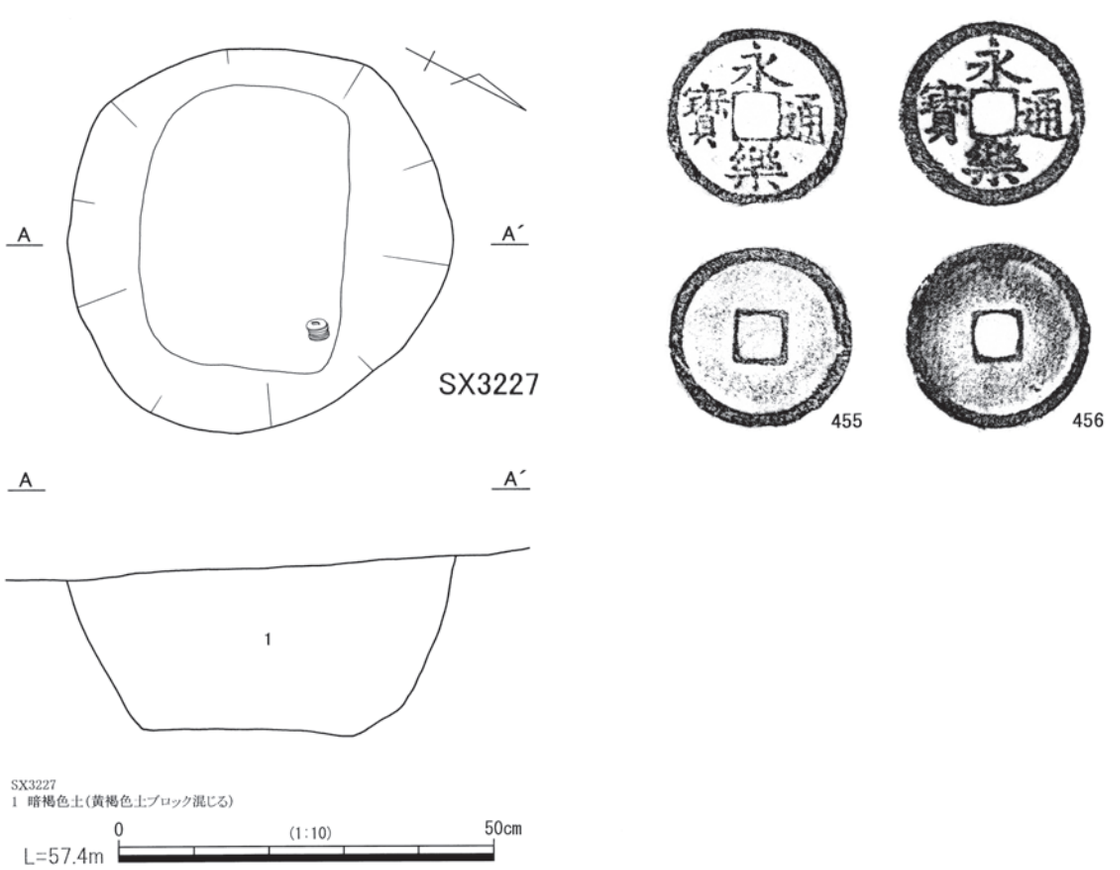


図 244　SX3227 実測図・出土遺物

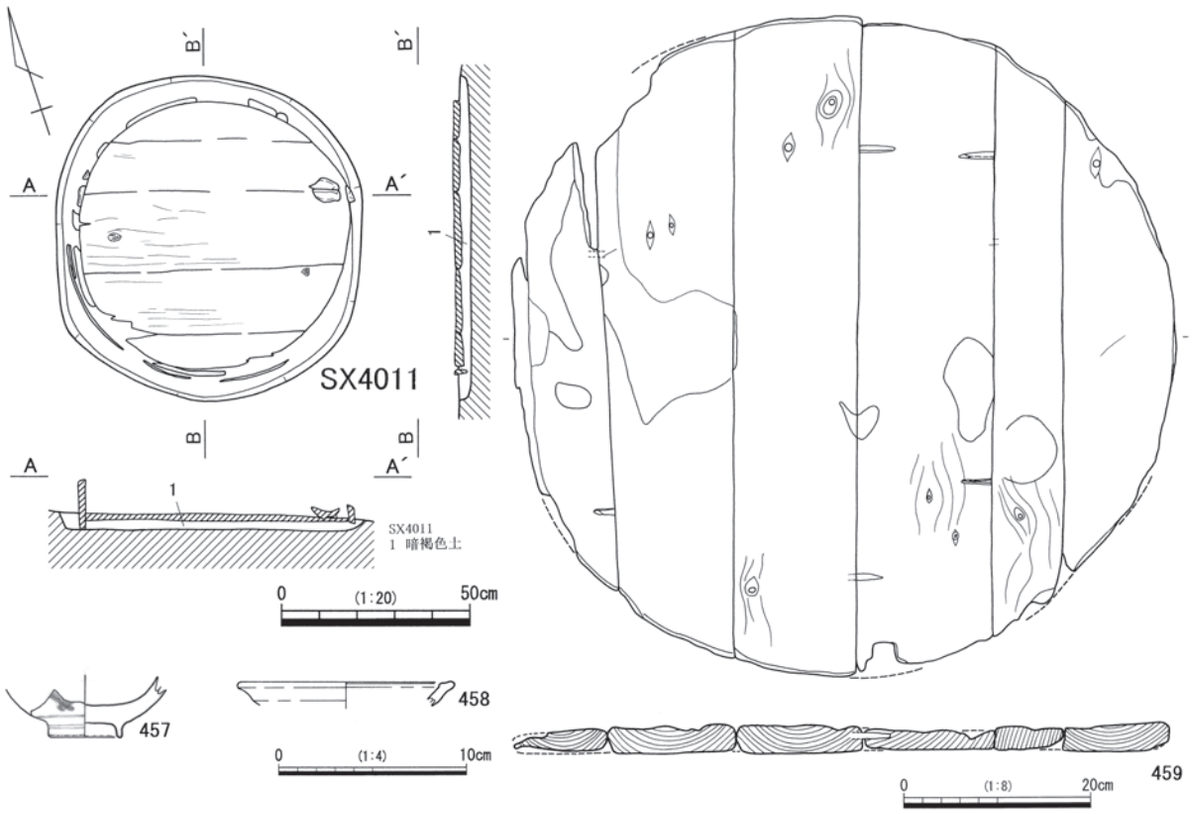


図 245　SX4011 実測図・出土遺物

SX4011（図 245、図版 71・86）

４区の北側ほぼ中央に位置する。直径 90 ㎝の円形の土坑で、削平によって上部のほとんどが失われており、深さは４㎝程しか残存しなかった。土坑の底部から、直径約 70 ㎝の桶の底板が埋設された状態で出土している。

桶の底板（459）は、５枚の板で構成され、各板は側面に穴を穿ち、木釘によって連結されている。検出状況の実測図にあるように、発見時には底部の側面に薄板上の木片が一部残存していたが、遺存状態が悪く形状を保った状態で取り上げることができなかった。実物が残っていないため不明な点も多いが、箍の残片と推測される。

桶以外には、陶磁器の破片が２点出土している。457 は肥前産の磁器染付の碗である。18 世紀中葉～後葉のものである。底板の直上から出土しているが、破片であり埋納品とは考えにくい。遺構が埋没する過程で混入した遺物とみてよい。458 は古瀬戸後Ⅳ期新段階の卸皿で、桶の下の埋土から出土している。桶を埋設した際に土砂とともに混入した遺物と判断できる。

上部構造が不明のため、遺構の性格は判然としないが、桶棺を納めた墓か便所の可能性が想定できる。458 の遺物を重視すると遺構の上限年代は 15 世紀後半となるが、内部から出土した 457 との年代の隔たりが大きい。それほど長期にわたって存続した遺構とは考えにくいことから、SX4011 は 18 世紀頃の遺構の可能性が高いとみてよいであろう。

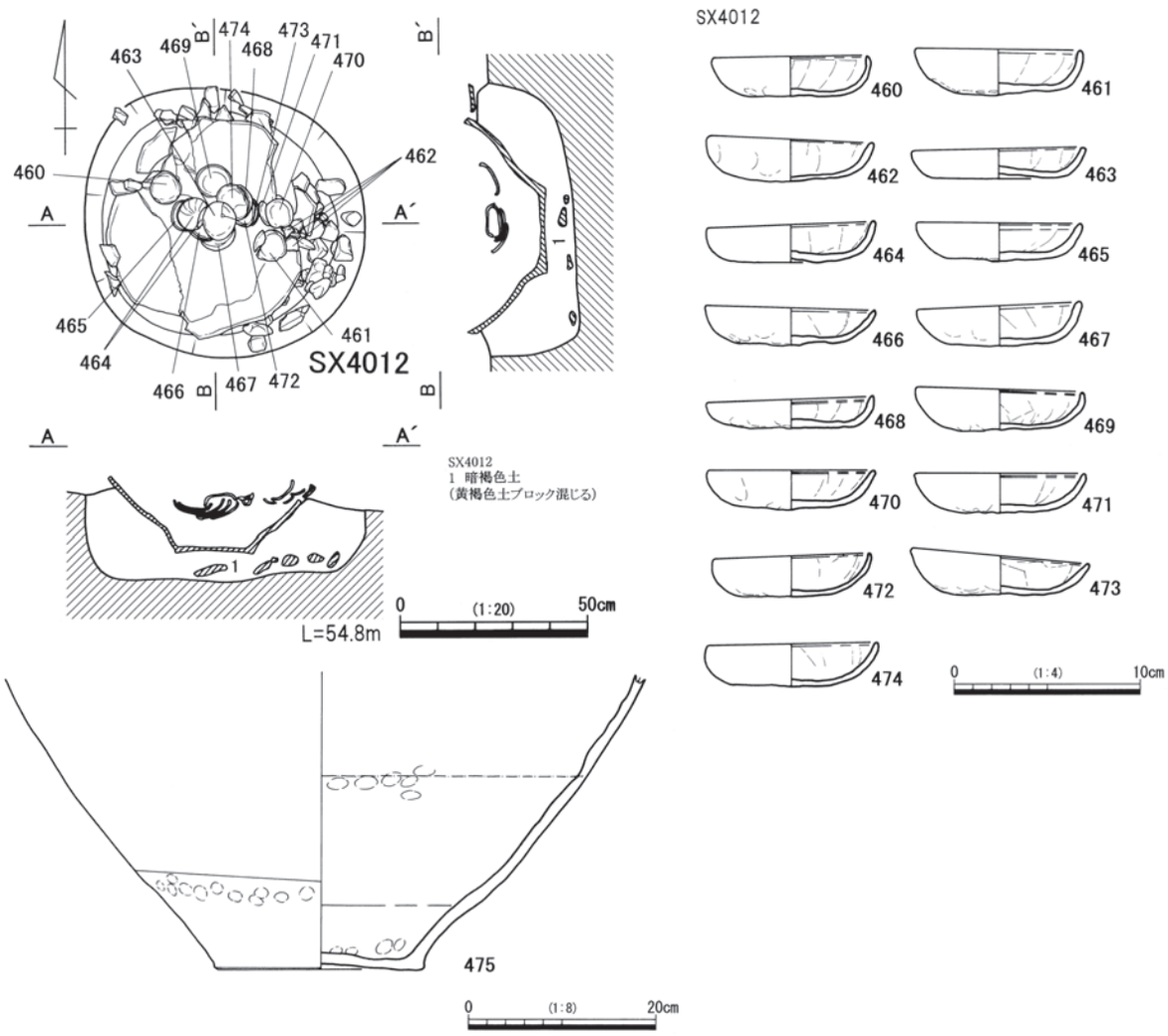


図 246　SX4021 実測図・出土遺物

SX4012（図 246、図版 48・71・84）

SX4011 から南へ 10 ｍに位置する。土坑内に常滑窯の甕が置かれ、その中に土師質土器皿が納められた状態で出土している。土坑は直径 76 ㎝・深さ 30 ㎝の円形で、底面には拳大程の小礫がまばらに敷かれていた。

土師質土器皿（460 ～ 474）は、15 枚が重ねられた状態で出土している。いずれも手づくね成形で、完形品である。口径は８～９㎝程度で、橙白色から黄橙色の色調を呈する。器壁は薄く、比較的硬質の焼きである。内面には、放射状に板状工具によるナデの痕跡が明瞭に残っている。最上部から出土した 463 のみ口縁を下にして被せるように置かれており、その他はいずれも口縁を上にして置かれていた。容器となっていた甕（475）は、近世常滑窯の製品である。上面が削平されているため明確ではないが、胴部中位から口縁部にかけては、埋納時に既に割られていた可能性も考えられる。

いずれも詳細な年代を特定することが困難な遺物ではあるが、容器となっている甕からみて、近世の遺構であることは明らかである。地鎮儀礼など、何らかの儀礼に伴う遺構であると推測される。

9　包含層・攪乱出土遺物

須恵器・灰釉陶器・土師器（図 247）

遺物全体から見ると少量ではあるが、須恵器や灰釉陶器、土師器が出土している。476 と 477 は須恵器である。476 は坏蓋、477 は坏身で、ともに 4 区から出土している。478 は灰釉陶器であり、1 区から出土している。灰釉陶器については、須恵器や土師器に比べてさらに少なく、ほぼ 1 区からの出土に限られる。479 ～ 481 は土師器である。479 と 480 は坏、481 は高盤であり、いずれも内外面に赤彩が施されている。480 と 481 は 4 区から出土している。

瓦塔・瓦（図 247、図版 49）

古代の遺物の中で特殊な遺物としては、瓦塔と瓦が出土している。485 は瓦塔の破片であり、4 区から出土している。表面の色調は灰白色で、丸瓦列と垂木は突帯で表現されている。486 ～ 489 は平瓦で

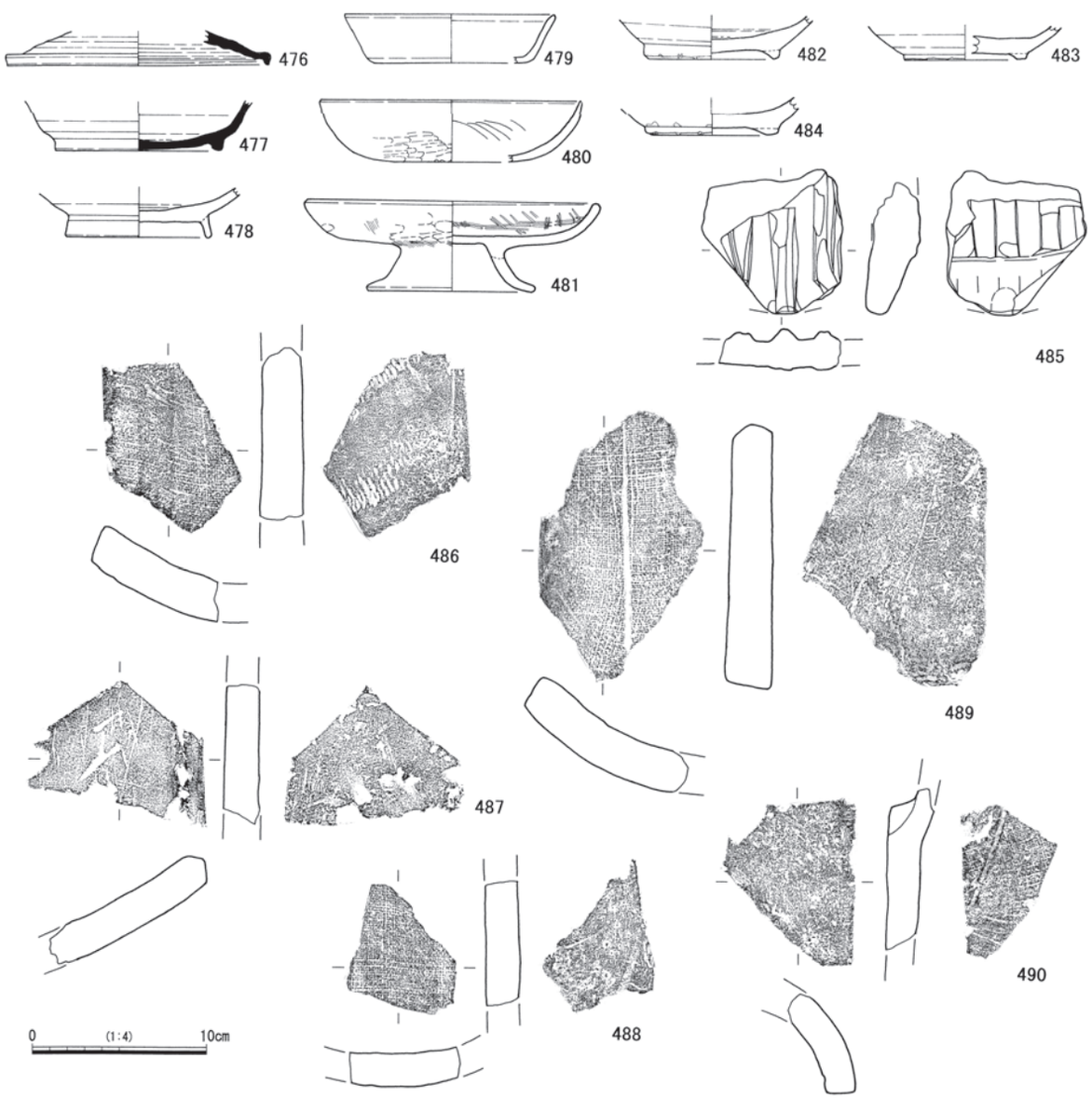


図 247　包含層・攪乱出土遺物（1）

ある。486 は桶巻作りで、凸面にはナデ調整が施されているが、わずかに縄目叩きの痕跡が残る。487 は凹凸面ともにナデ調整で、凹面の側端には面取りが施されている。胎土は灰白色である。他の平瓦はすべて橙白色であり、調整や色調が異なっている。488 と 489 は一枚作りの平瓦で、凸面はナデ調整が施されているが、488 にはわずかに縄目叩きの痕跡が残る。490 は有段式の丸瓦である。筒部から玉縁部にかけての破片であり、凸面にはナデ調整が施されている。色調は橙白色である。いずれも３区の包含層や攪乱から出土している。瓦はわずか５点ではあるが、複数の技法が確認でき、ある程度の年代幅が想定される。個々の瓦の年代は特定できないが、製作技法からいずれも古代の瓦とみてよい。瓦塔とともに、古代の宗教施設に関連する遺物として注目される。

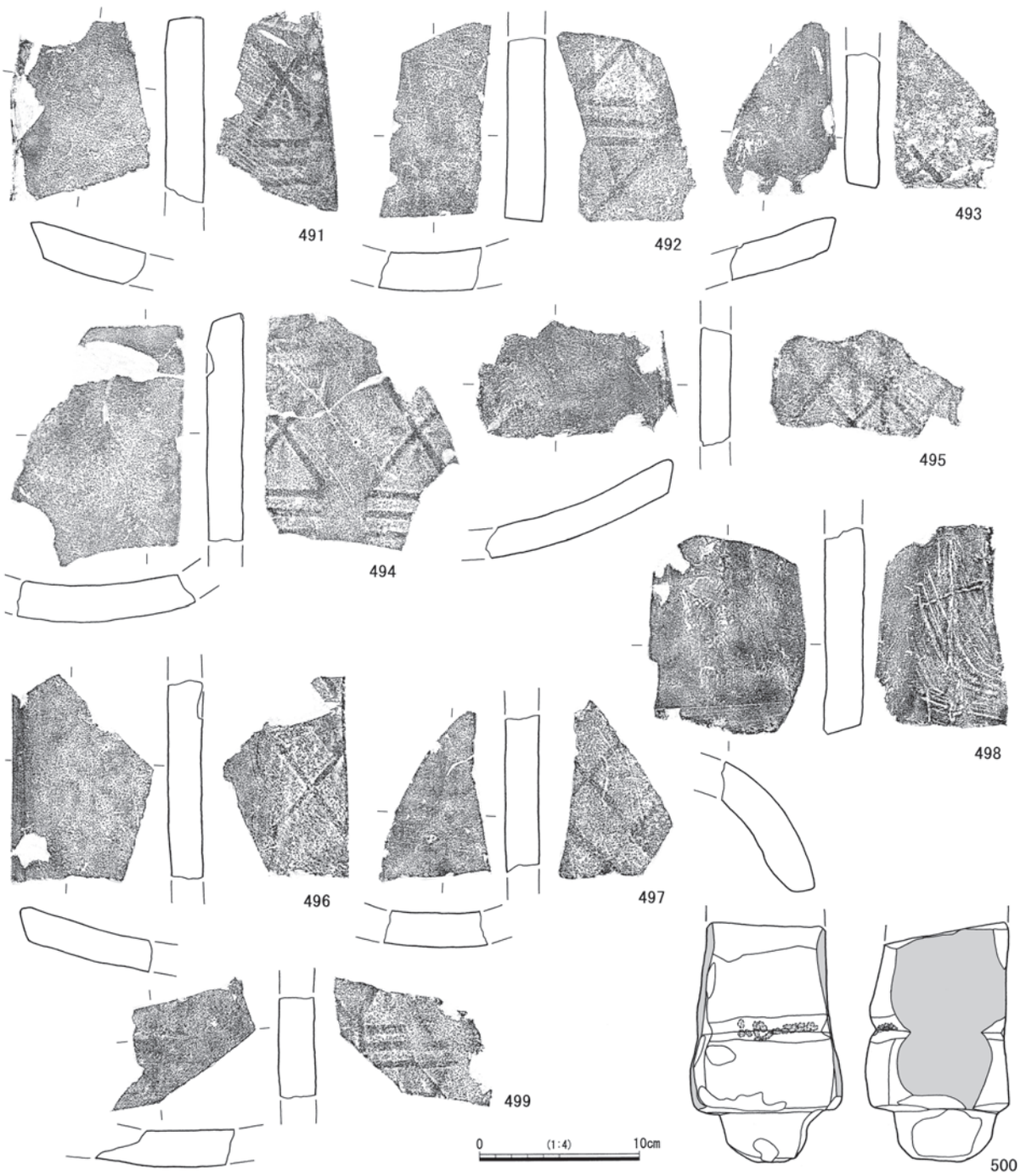


図 248　包含層・攪乱出土遺物（２）

山茶碗・中世瓦（図 247・248、図版 49）

482 ～ 484 は山茶碗である。渥美湖西窯産の製品で、Ⅲ－２期のものである。482 と 483 は寺海土遺跡に近い５区から、484 は中世前期の建物が確認されている１区から出土している。中世前期の土器としては、これらのほかに山茶碗の小片や土師質土器の破片が少量出土している程度である。

一方で、中世前期の瓦は一定量確認できる。491 ～ 497・499 は平瓦である。凸面の叩き目は、いずれも斜格子＋横線の叩き目で、やや不鮮明ではあるが花菱様の文様も確認できる。491 ～ 497 には凹凸面に離れ砂が付着し、499 の凹面には布目が残る。いずれも中屋遺跡の平瓦ⅡＢ類に相当するものである。498 は丸瓦である。広端部の破片であり、凹面には布目とともに吊り紐痕が確認される。498 は４区、それ以外は５区の包含層や攪乱から出土している。

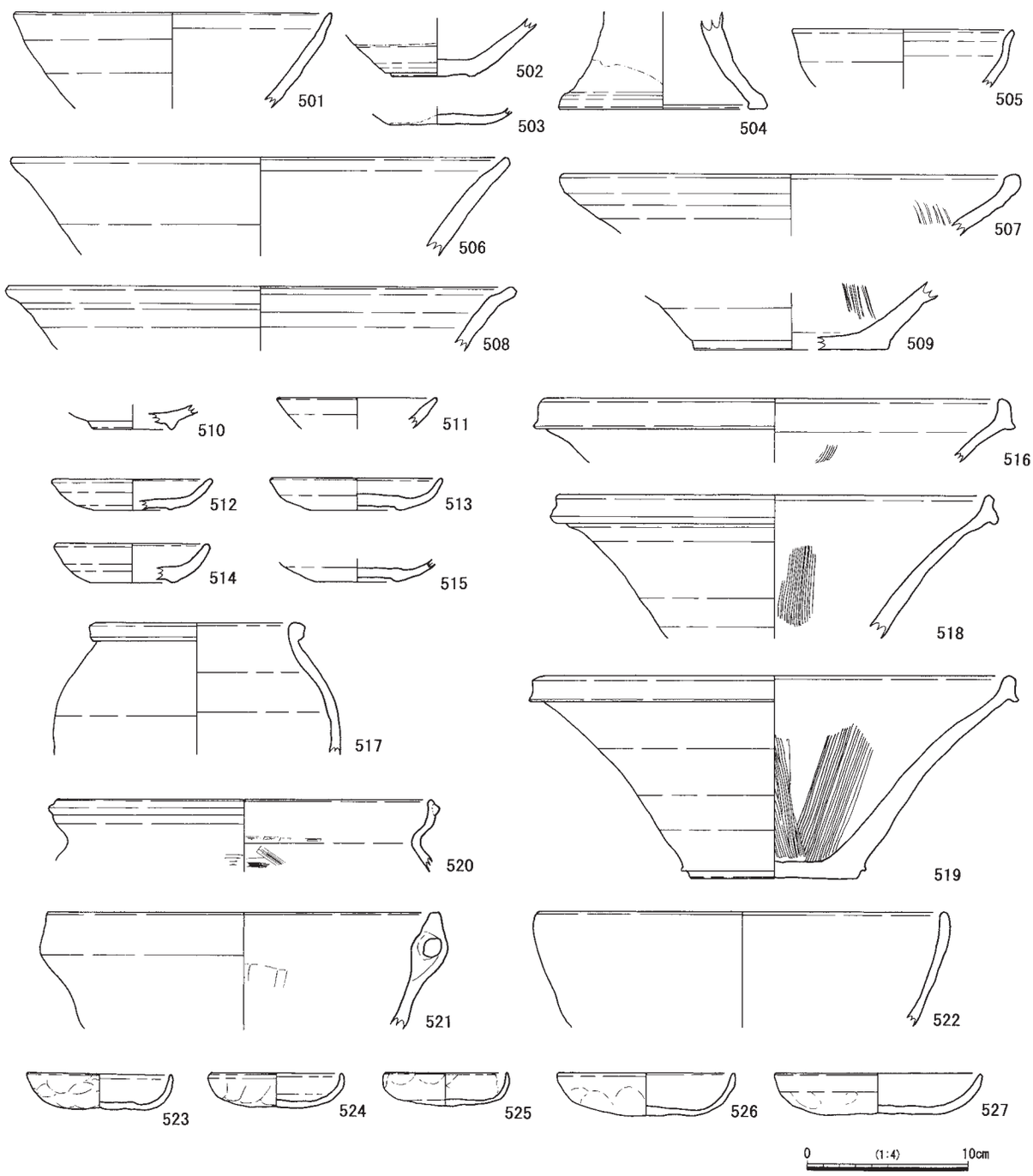


図 249　包含層・攪乱出土遺物（３）

石塔（図 248、図版 49）

中世の宗教施設に関連する遺物としては、瓦の他に石塔の一部が出土している。500 は宝筐印塔の相輪部である。砥石に転用されており、側面が研ぎ減っている。第１章に記した、この遺跡が当初雲岩寺中世墓群として認識される根拠となっていた石塔である。

中世陶器・土師質土器（図 249）

中世後期の遺物は、比較的豊富に出土している。全域で出土しているが、特に３区から５区にかけて多く出土している。501 ～ 504 は古瀬戸後期の瀬戸窯の製品である。501 と 502 は平碗で､501 が後Ⅰ期、502 は後Ⅲ・Ⅳ期のものである。503 は後Ⅲ期の縁釉小皿、504 は後Ⅳ期の根来形瓶子である。505 ～ 509 は、古瀬戸後Ⅳ期の志戸呂窯の製品である。505 は天目茶碗、506 は直縁大皿、508 は卸目付大皿である。507 と 509 は擂鉢の破片である。

510 ～ 516 は、大窯期の瀬戸窯の製品である。510 と 511 は大窯２期の丸皿で、516 は大窯３期の擂鉢である。512 ～ 515 は、大窯３期の初山窯産の内禿皿である。517 ～ 519 は、大窯４期の志戸呂窯の

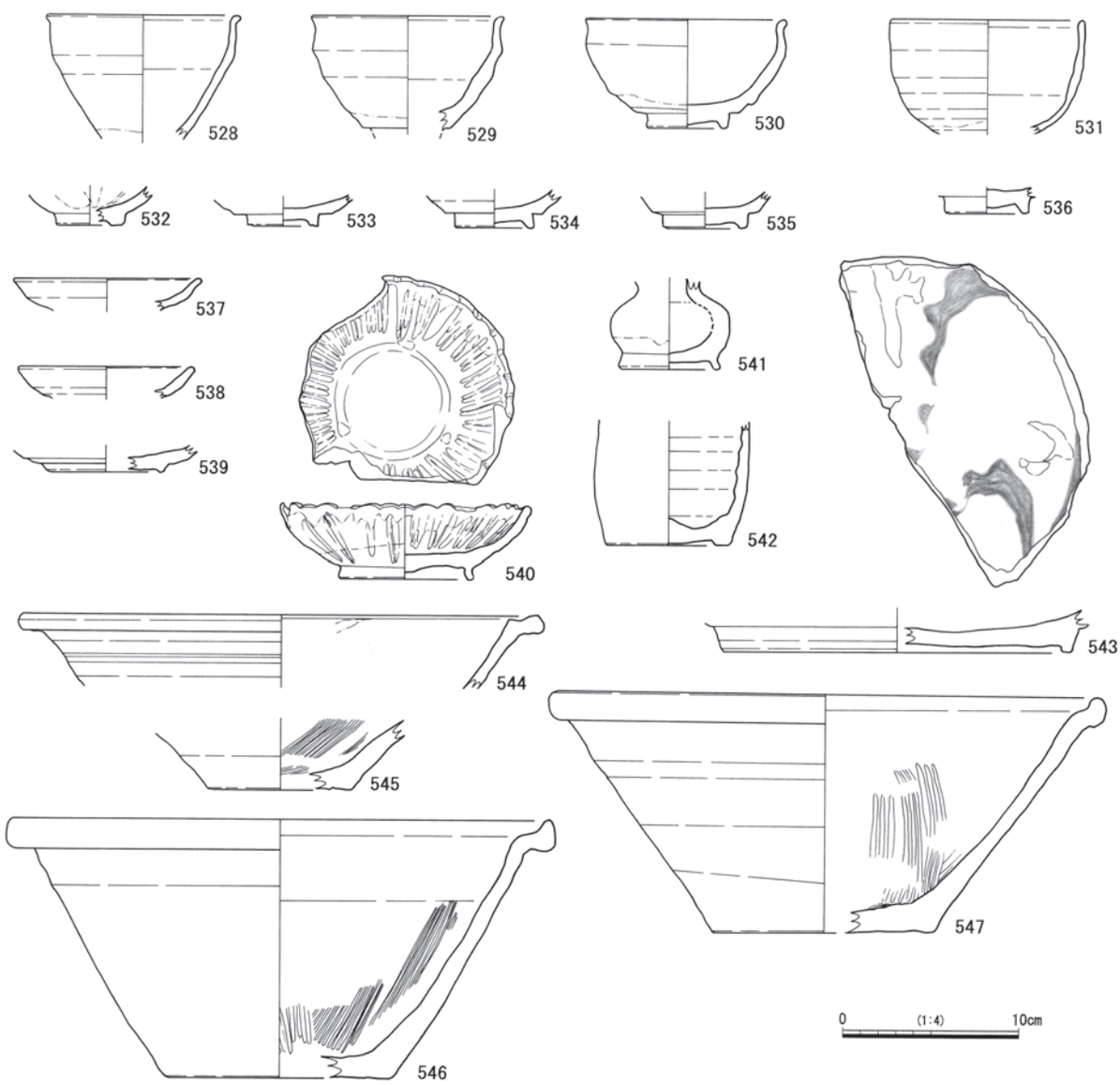


図 250　包含層・攪乱出土遺物（４）

製品である。517 は壷で、518 と 519 は擂鉢である。

520 ～ 527 は土師質土器である。520 はくの字形、521 は内彎形、522 は半球形の内耳鍋で、中世後期のものである。523 ～ 527 は土師質土器皿で、いずれも比較的硬質で薄手のつくりである。個々の詳細な年代は不明であるが、中世末から近世にかけてのものであろう。

近世陶器（図 250 ～ 253、図版 50）

包含層・攪乱から出土している遺物の大半は、近世陶器である。

528 ～ 547 は 17 世紀代の陶器である。528 ～ 530・532 ～ 535 は瀬戸美濃窯産の天目茶碗である。532 は登窯 1 期、528 は 2 期、529 と 533 は 3 期、530 と 535 は 4 期のものである。531 と 536 は丸碗である。531 は美濃窯産の製品で、登窯 3 ～ 4 期のものである。536 は瀬戸窯産の製品で、登窯 3 期のものである。537 と 539 は瀬戸窯産の志野の丸皿である。537 は登窯 1 期、539 は 2 期のもので製品である。538 は瀬戸窯産の丸皿で、登窯 1 ～ 2 期のものである。540 は美濃窯産の菊皿で、登窯 4 期の製品である。542 は瀬戸窯産の徳利で、登窯 3 ～ 4 期の製品である。543 と 544 は美濃窯産の鉄絵鉢である。いずれも登窯 3 ～ 4 期の製品である。545 ～ 547 は瀬戸窯産の擂鉢である。545 は登窯 1 ～ 2 期、546 は登窯 3 期、547 は登窯 4 期のものである。529・532・536・539・546 は 2 区、528・533・540・541 は 4 区、544・543 は 5 区から出土しており、そのほかは 3 区から出土している。

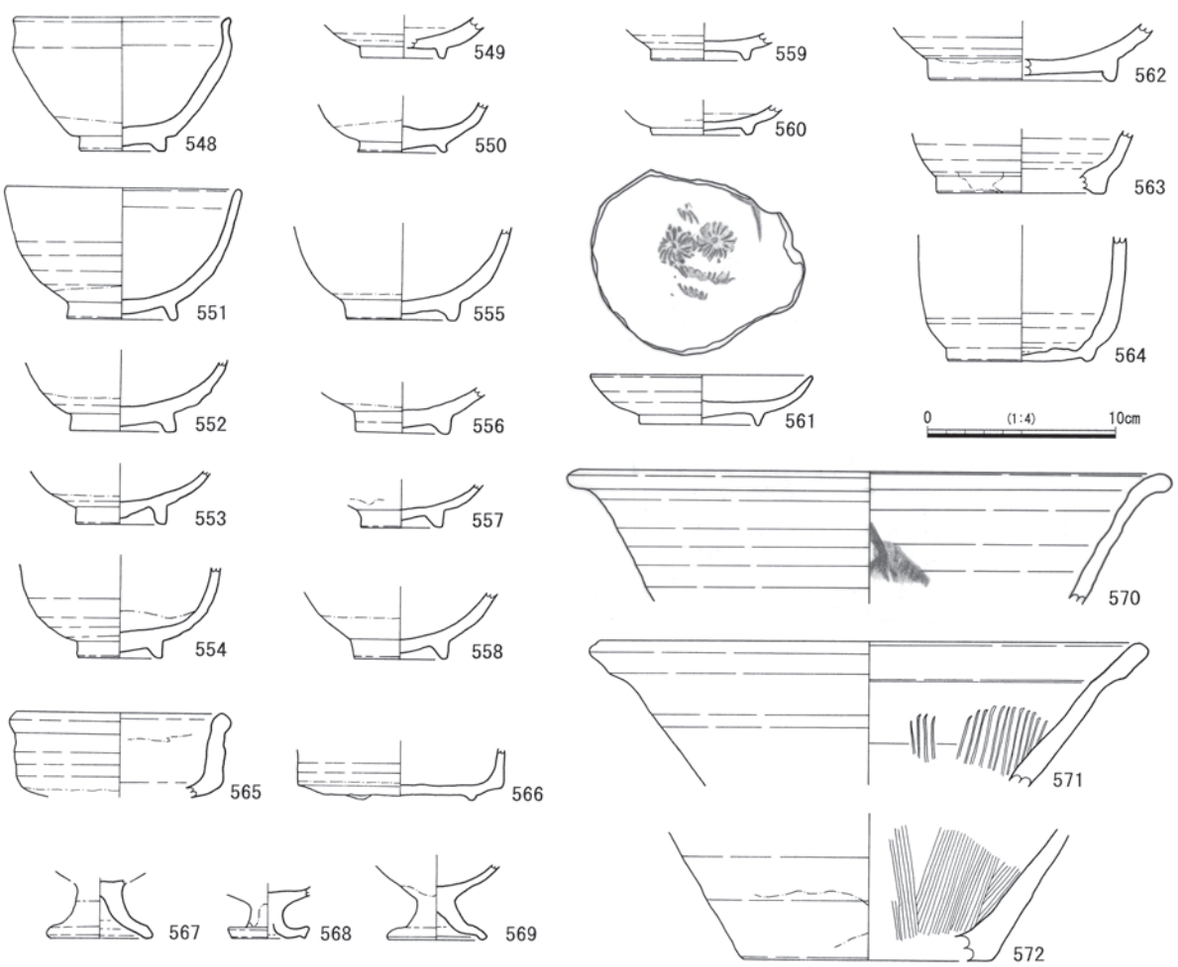


図 251　包含層・攪乱出土遺物（5）

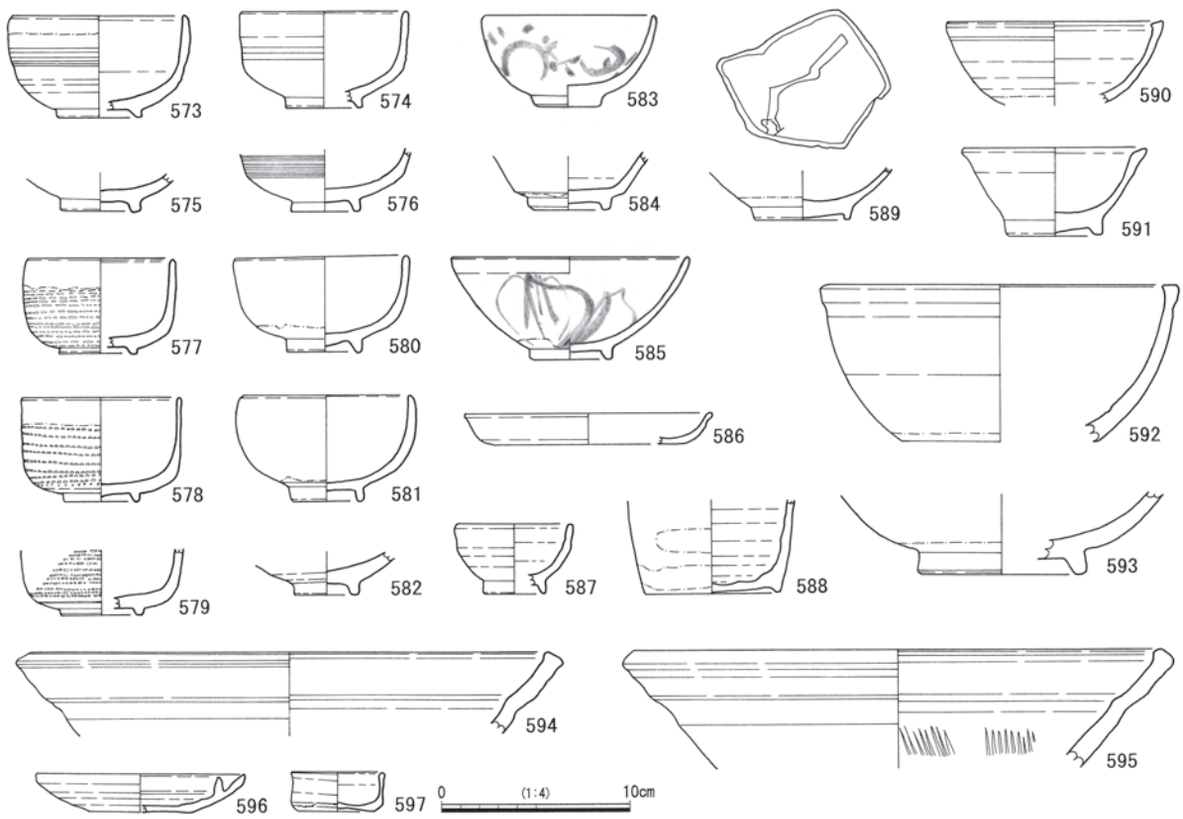


図 252　包含層・攪乱出土遺物（６）

548 ～ 572 は、18 世紀前葉から中葉の陶器である。548 は登窯５期の瀬戸窯産の天目茶碗である。549 と 550 は丸碗で、549 は瀬戸窯産、550 は美濃窯産の製品である。いずれも登窯５～６期のものである。551 ～ 558 は美濃窯産の尾呂茶碗で、登窯５～７期の製品である。559 は登窯６期の瀬戸窯産の腰錆茶碗である。560 は登窯５～６期の美濃窯産の鉢、561 は登窯７期の美濃窯産の摺絵皿、562 は登窯７期の美濃窯産の片口である。563 は美濃窯産の壷で、登窯５～６期の製品である。564 は美濃窯産の徳利で、登窯７期の製品である。565 は登窯５期の瀬戸窯産の袴腰形香炉で、566 は登窯７期の美濃窯産の筒形香炉である。567 ～ 569 は美濃窯産の仏餉具である。567 は登窯４～５期、568 と 569 は７期のものである。570 は美濃窯産の鉄絵鉢で、登窯５～６期のものである。571 と 572 は擂鉢である。571 は登窯７期、572 は５～７期の製品である。543・552 は１区、549・560・564・565・567 ～ 569 は４区、562・563・566 は５区から出土しており、そのほかは３区から出土している。

573 ～ 595 は、18 世紀後葉から 19 世紀前葉のものである。573 ～ 575 は腰錆湯呑である。573 は美濃窯産の製品で、登窯８期のものである。574 と 575 は瀬戸窯産の製品で、575 が登窯８期、574 は９期のものである。577 ～ 579 は美濃窯産の鎧湯呑である。577 と 578 は登窯８期、579 は９期の製品である。580 ～ 582 は、登窯８～９期の瀬戸窯産の湯呑である。583 は登窯９期の瀬戸窯産の小中である。584 と 585 は、美濃窯産の柳茶碗である。584 は登窯８期、585 は９期の製品である。586 は登窯８～９期の瀬戸窯産の皿である。587 は登窯８期の美濃窯産の小杯、588 は登窯８～９期の美濃窯産の徳利である。589 は美濃窯産の鉢である。内面にはヘラ書きによる文様のようなものが確認できる。登窯８～９期の製品である。590 ～ 593 は片口で、590 ～ 592 は美濃窯産、593 は瀬戸窯産のものである。590 と 592 は登窯８期、591 と 593 は登窯８～９期の製品である。584 は１区、573・576・579 は２区、577・

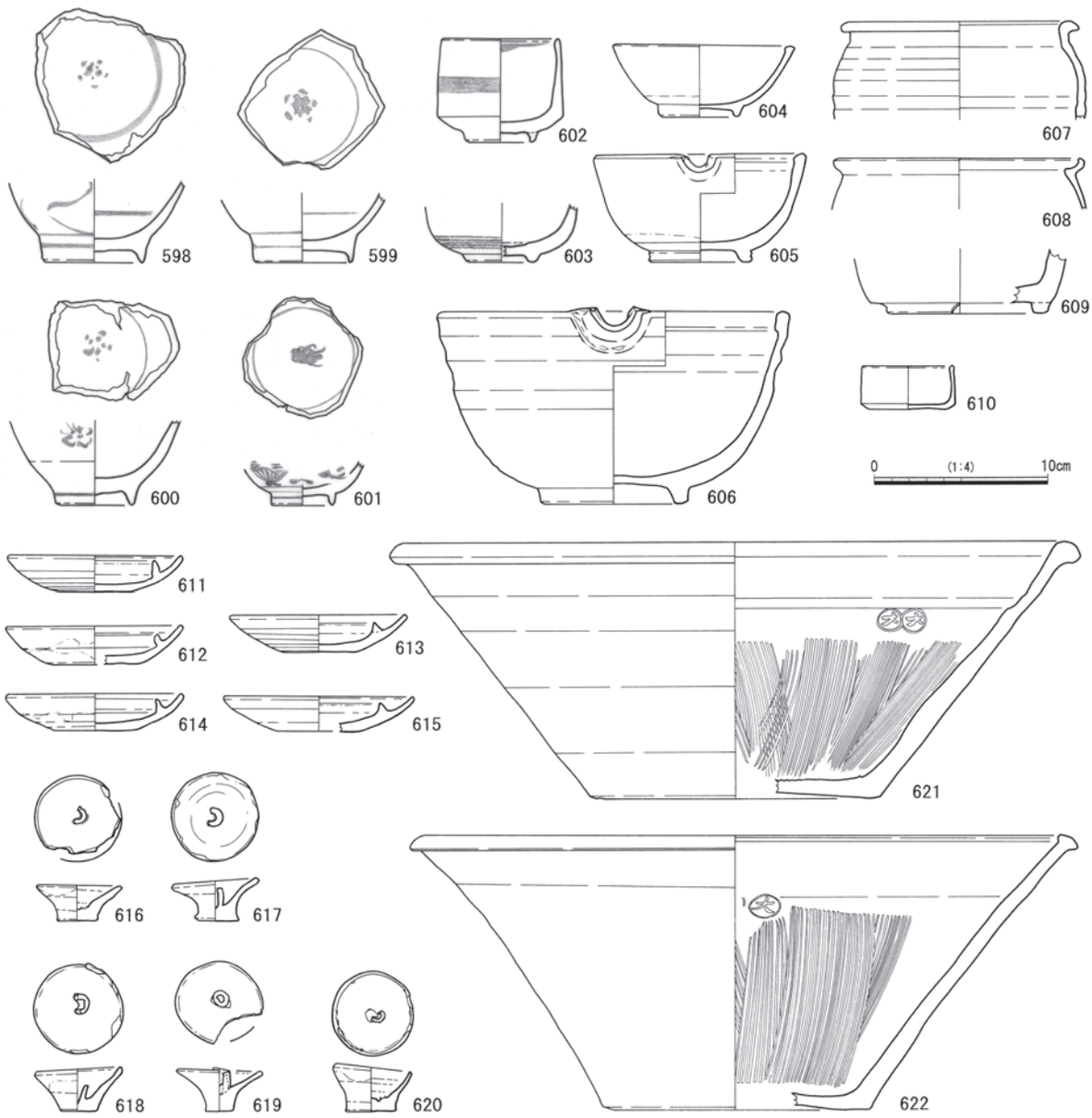


図 253　包含層・攪乱出土遺物（7）

586・587・594・595 は 4 区、580・583・588・589・591・593・596 は 5 区から出土している。そのほかは 3 区からの出土である。

598 ～ 622 は、19 世紀中葉から後葉のものである。598 ～ 600 は登窯 10 期の瀬戸窯産の広東茶碗である。602 は登窯 10 期の瀬戸窯産の箱形湯呑、603 は登窯 10 ～ 11 期の瀬戸窯産の鎧湯呑である。604 ～ 606 は登窯 11 期の瀬戸窯産の片口である。607 と 608 は登窯 10 ～ 11 期の瀬戸窯産の製品で、607 は小甕、608 は行平である。609 は登窯 10 期の瀬戸窯産の植木鉢、610 は登窯 10 ～ 11 期の美濃窯産の餌鉢である。611 ～ 615 は美濃窯産の灯明皿である。611・612・614 は登窯 10 期、613 と 615 は 11 期の製品である。616 ～ 620 は瀬戸窯産の秉燭である。619 は登窯 10 ～ 11 期、そのほかは 11 期のものである。621 と 622 は登窯 11 期の瀬戸窯産の擂鉢である。602・604・600・613・615・619 は 1 区、599・620 は 2 区、605・606・611・621・622 は 4 区、598・610 は 5 区から、そのほかは 3 区から出土している。

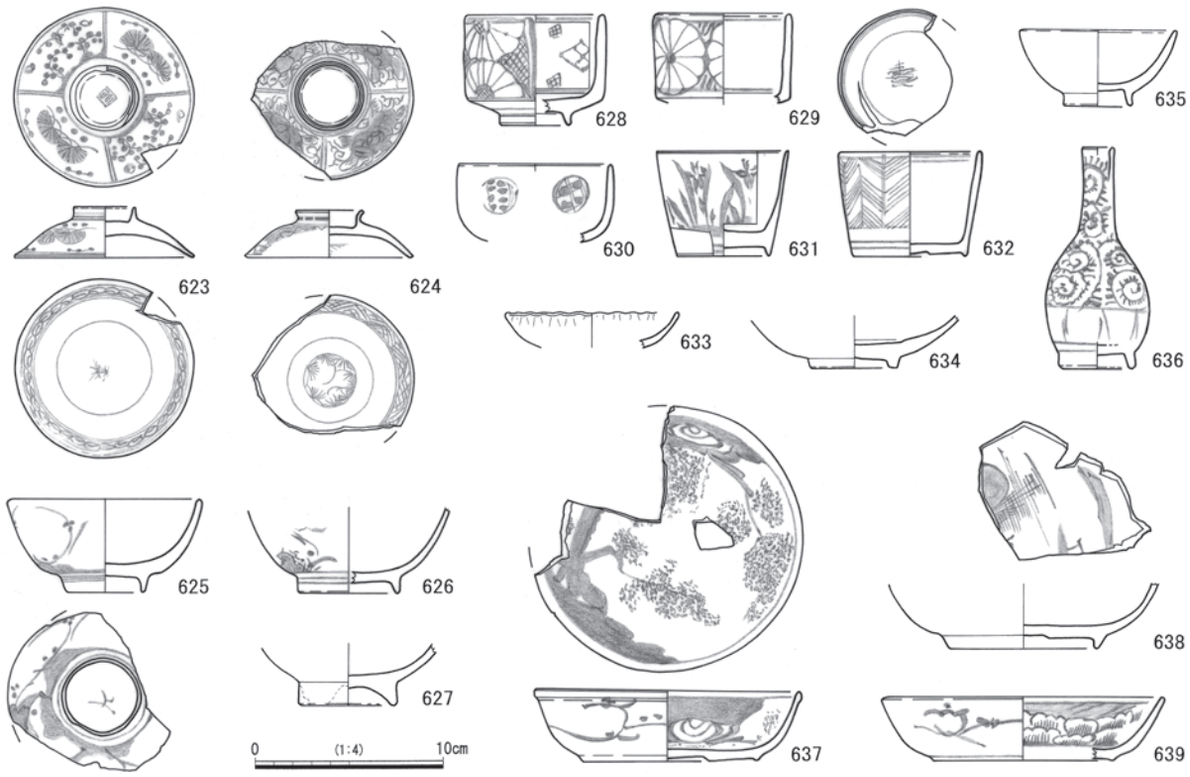


図 254　包含層・攪乱出土遺物（８）

近世磁器（図 253・254、図版 50）

包含層・攪乱からは、近世の磁器も比較的多く出土している。

601 は瀬戸美濃窯産の磁器染付で、登窯 11 期の端反碗である。全体としても、瀬戸美濃窯産の磁器は少なく、磁器の大半は肥前窯産の製品である。

623 ～ 639 は肥前窯産の磁器である。623 と 624 は磁器染付の碗蓋である。623 には松花文、624 は花唐草文が描かれている。いずれも 19 世紀のものである。625 と 626 は磁器染付の碗である。625 には雪輪梅樹文が描かれており、高台には大明年製銘の崩れがある。626 は草花文であろうか。ともに 18 世紀のものである。628 と 629 は磁器染付の筒形碗であり、菊花文が描かれている。18 世紀のものである。630 は磁器染付の碗で、丸文が描かれている。18 世紀後半から 19 世紀のものである。

631 と 632 は磁器染付の猪口である。631 には草花文が描かれている。632 には矢羽根文と見込に寿字が描かれており、蛇目凹形高台である。いずれも 18 世紀のものである。633 は白磁の菊花形皿で、19 世紀のものである。635 は青磁の小碗である。636 は磁器染付の瓶であり、蛸唐草文が描かれている。18 世紀後半から 19 世紀のものである。637 ～ 639 は磁器染付の皿である。637 の内面には山水文が描かれている。高台はいずれも蛇目凹形高台で、18 世紀後半から 19 世紀のものである。

なお、肥前窯産の製品としては、唐津系の陶器も出土している。627 は碗で高台には砂目が残る。634 は青緑釉皿で、見込には蛇の目釉剥ぎが施されている。17 世紀後半から 18 世紀のものである。

630・635・634 は３区、628・629・627・636・638 は５区、そのほかは４区から出土している。近世陶器と同様に、調査区東側の３～５区に集中する傾向が認められる。

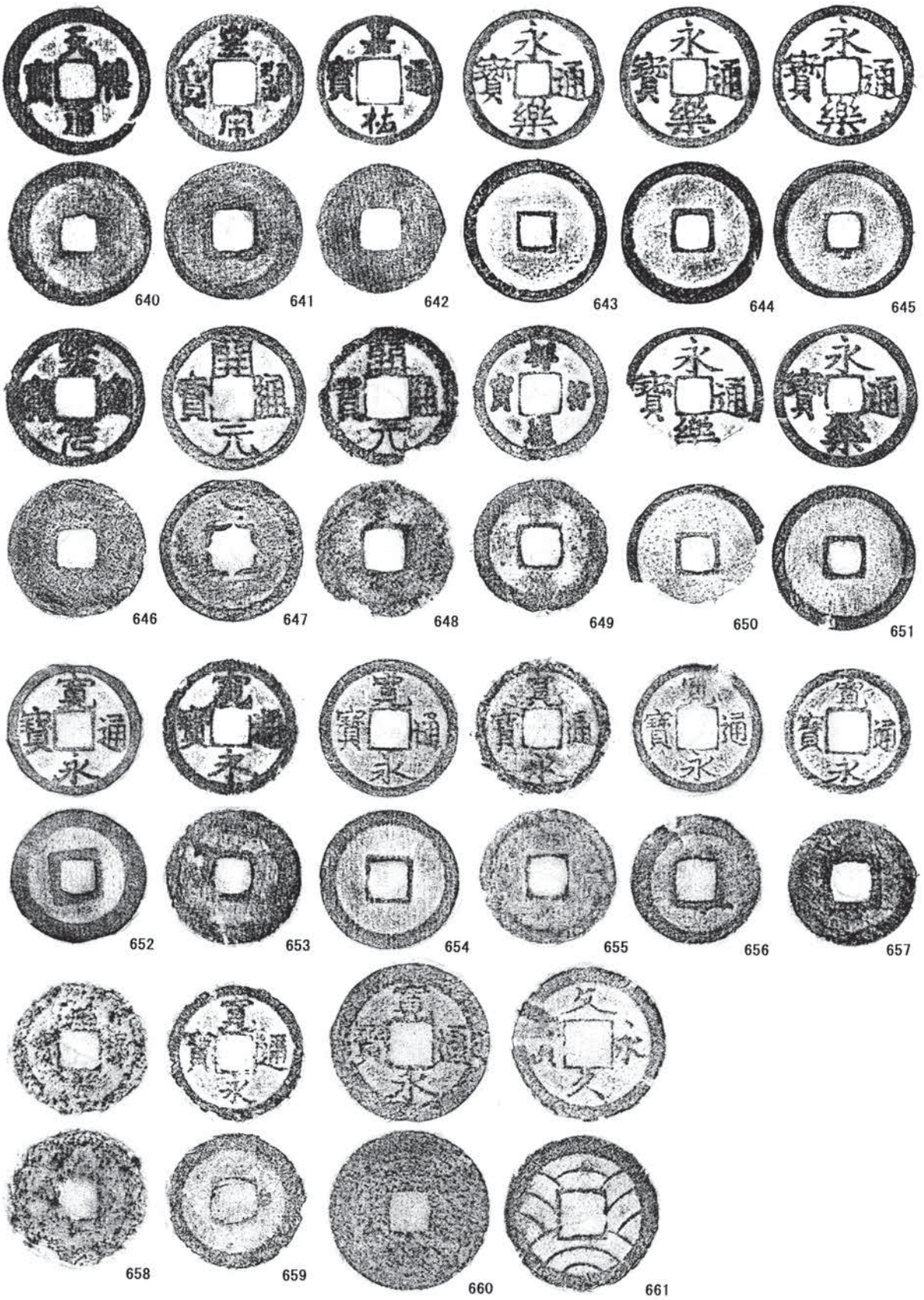


図 255　包含層・攪乱出土遺物（9）

銭貨（図 255、図版 87）

数量は少ないが、包含層・攪乱からも銭貨が出土している。主に中世の銭貨は西側の１区から、寛永通宝など近世の銭貨は東側の３～５区から出土している。

640 ～ 645 は、１区の南側で６枚が錆着した緡銭の状態で出土している。640 は天禧通宝、641 は皇宋通宝、642 は嘉祐通宝、643 ～ 645 は永楽通宝である。遺構としては確認できなかったが、周囲には墓が存在した可能性が高い。646 と 647 は、１区の攪乱から２枚が錆着して出土している。646 は熙寧元宝、647 は開元通宝である。648 ～ 651 は、１区から単独で出土している。648 は開元通宝、649 は祥符通宝、650 と 651 は永楽通宝である。

652 ～ 658 は寛永通宝である。652 と 653 は古寛永で、652 は３区、653 は５区から出土している。654 ～ 658 は新寛永で、654 は５区、655・656・658 は３区、657 は４区から出土している。656 は被熱し変形している。659 は寛永鉄銭で、１区から出土している。660 は寛永通宝の四文銭で、３区から出土している。背は錆が著しいが、Ｘ線写真から波文が確認できる。661 は文久永宝の四文相当銭で、３区から出土している。背には十一波文がみられる。

包含層・攪乱からは、古代から近世まで幅広い遺物が出土している。しかし、遺物の大半は中世後期以降のものであり、特に近世のものが圧倒的に多い。これは検出されている遺構の状況とも一致しており、中通遺跡における各時代の有り様を反映しているものとみてよいであろう。

表５　出土遺物観察表（１）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
143	SP10069	１区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.0)	5.6		(7.8)	口縁～底部	1/2	灰白	SH1003
144	SP31367	３区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)	3.1			口縁～底部	完形	灰白	SH3001
145	SP31354	３区	下層	陶器	緑釉小皿	瀬戸美濃	後期Ⅳ新	(9.9)	2.55	(3.6)		口縁～底部	1/4	灰白	SH3002
146	SP30108	３区	掘方	土師質土器	皿			(11.2)				口縁部	1/8	浅黄橙	SH3008
147	SP30018	３区	埋土	土師質土器	内耳鍋		くの字型	(16.0)				口縁部	1/10	灰白	SH3008
148	SP30018	３区	埋土	金属	キセル（雁首）				残存長 4.5						SH3008
149	SP30001	３区	埋土	陶器	稜皿	瀬戸美濃	大窯３	(10.1)				口縁部	1/6		SH3009
150	SP30001	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部	1/10	灰白	SH3009
151	SP30001	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)	2.4	(7.3)		口縁～底部	1/4	にぶい黄橙	SH3009
152	SP30036	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)				口縁部	1/11	灰白	SH3009
153	SP31535	３区	埋土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大窯４前半	(10.7)	5.4		(4.0)	口縁～底部	1/4		SH3010
154	SP31016	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.8)				口縁部	1/5	灰白	SH3012
155	SP31016	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部	1/4	灰白	SH3012
156	SP30006	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部	1/6	灰白	SH3012
157	SP30213	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部	1/5	にぶい黄橙	SH3013
158	SP30542	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁部	1/5	灰白	SH3017
159	SP30642	３区	埋土	陶器	擂鉢	志戸呂	大窯４	(25.0)				口縁部	1/10	褐灰	SH3017
160	SP31251	３区	埋土	陶器	丸皿	初山	大窯３後半	(10.0)				口縁部	1/10		SH3019
161	SP30838	３区	下層	土師質土器	皿			(9.0)	2.1	(4.0)		口縁～底部	1/4	にぶい黄橙	SH3019
162	SP30838	３区	上層	土師質土器	皿			(9.8)				口縁部	1/10	にぶい黄橙	SH3019
163	SP30758	３区	埋土	磁器	皿			(10.2)	3.0	(2.7)		口縁～底部	1/8		SH3020
164	SP30795	３区	埋土	陶器	緑釉はさみ皿	瀬戸美濃	大窯１	(10.1)	2.2	(4.7)		口縁～底部	1/4		SH3021
165	SP30807	３区	埋土	近世陶器	四耳壺	瀬戸	後Ⅰ・Ⅱ				(9.6)	底部	1/3		SH3021
166	SP31072	３区	埋土	土師質土器	皿			(7.9)				口縁部	1/16	にぶい黄橙	SH3022
167	SP31064	３区	下層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大３	(12.7)				口縁～体部	1/12	浅黄橙 / 暗褐	SH3023
168	SP30730	３区	埋土	土師質土器	皿			(10.6)				口縁～体部	1/4	灰白 / 浅黄橙	SH3023
169	SP30730	３区	埋土	土師質土器	皿			(10.3)				口縁～体部	1/5	浅黄橙	SH3023
170	SP31061	３区	掘方	陶器	卸皿	瀬戸美濃	後期Ⅱ	(16.7)				口縁部	1/9		SH3026
173	SP40066	４区	埋土	陶器	天目茶碗	美濃	登３				4.5	体部～底部	1/3	黒褐 / 褐	SH4002
174	SP40055	４区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部	1/10	にぶい黄橙	SH4002
175	SP40051	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.8)				口縁部	1/8	にぶい黄橙	SH4002
176	SP40066	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部	1/8	にぶい黄橙	SH4002
177	SP50073	５区	埋土	窯道具	脚付輪ドチ	志戸呂								にぶい黄橙	SH4003
178	SF5009	５区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁～体部	1/4	淡黄	SH4003
179	SP50013	５区	埋土	磁器	小杯			(6.7)	3.0		(4.1)	口縁～底部	1/16	灰白	SH5001
180	SP50022	５区	掘方	陶器	尾呂茶碗	美濃	登５・６	(13.2)				口縁部		オリーブ褐	SH5003

表６　出土遺物観察表（２）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
181	SP50020	5区	柱痕跡	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	大１	(23.5)				口縁部	1/20	にぶい褐	SH5003
182	SP50123	5区	埋土	金属	鉄釘				残存長 4.8						SH5003
183	SP31482	3区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.9)				口縁部	1/16	灰白	
184	SP30980	3区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.6)	底部	1/2	灰白	
185	SP31474	3区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ-1				(8.0)	底部	1/7	灰白	
186	SP40102	4区	埋土	陶器	甕	常滑		(21.6)				口縁部	1/20	灰白	
187	SP30819	3区	埋土	土師質土器	内耳鍋		くの字型	(18.9)				口縁部	1/12	浅黄橙	
188	SP50054	5区	掘方	土師質土器	内耳鍋		内湾型	(22.9)				口縁部	1/20	にぶい黄橙	
189	SP30222	3区	埋土	土師質土器	内耳鍋		内湾型	(22.4)				口縁部	1/16	にぶい橙	煤付着
190	SP30012	3区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(11.1)	3.15	(6.1)		口縁～底部	1/3	にぶい黄橙	
191	SP31325	3区	検出面	土師質土器	皿		ロクロ	(11.1)				口縁～体部	1/6	浅黄橙	
192	SP10059	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁部	1/10	灰白	
193	SP10063	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁部	1/4	灰白 / 浅黄橙	
194	SP31382	3区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部	1/8	灰白	
195	SP30013	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)				口縁～体部	1/4	にぶい黄橙	
196	SP31351	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁～体部	1/4	灰白	
197	SP31208	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部	1/4	灰白	
198	SP31017	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部	1/6	にぶい黄橙	
199	SP30899	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.7)				口縁部	1/7	灰白	
200	SP30010	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部	1/4	灰白	
201	SP40006	4区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部	1/10	浅黄橙	SH3012
202	SP31077	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)	2.1	4.0		口縁～底部		灰白	
203	SP31223	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁部	1/6	灰白	
204	SP31414	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁部	1/5	褐灰	
205	SP31355	3区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部	1/8	灰白	
206	SP30894	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部	1/4	灰白	
207	SP31239	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)				口縁部	1/8	灰白	
208	SP30012	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁～体部	1/6	浅黄橙	
209	SP30189	3区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)	2.0	(7.1)		口縁～底部	1/4	灰白	
210	SP40024	4区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)				口縁部	1/10	にぶい黄橙	
211	SP40013	4区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部	1/6	にぶい黄橙	
212	SP40005	4区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部	1/12	にぶい黄橙	
213	SP50078	5区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.3)				口縁部	1/8	橙 / にぶい橙	
214	SP50035	5区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.8)				口縁部	1/8	灰黄褐	
215	SP50035	5区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部	1/8	灰褐	
216	SP50093	5区	柱痕上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁部	1/10	灰白	
217	SP30518	3区	埋土	施釉陶器	緑釉小皿	瀬戸美濃	後期Ⅲ	(11.5)	2.5	(5.6)		口縁～底部	1/6	灰白 / 褐	
218	SP40053	4区	柱痕跡	陶器	平碗	瀬戸美濃	後期Ⅳ古				(4.0)	底部	1/6	にぶい黄	
219	SP31362	3区	埋土	陶器	緑釉はさみ皿	瀬戸美濃	大窯１	(12.1)				口縁部	1/8		
220	SP30247	3区	埋土	陶器	灰釉丸皿	瀬戸美濃	大窯３	(12.8)				口縁部	1/16	灰オリーブ	
221	SP31019	3区	埋土	陶器	内禿皿	初山	大３後	(10.8)	2.0	(6.8)		口縁～底部	1/4	暗褐色	
222	SP30473	3区	埋土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登２	(10.7)	7.1		4.75	口縁～底部	3/4		
223	SP31350	3区	埋土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登３・４				3.8	底部			
224	SP30314	3区	埋土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登３				4.75	底部			
225	SP31384	3区	埋土	陶器	志野皿	瀬戸美濃	登１・２					体部	1/8		
226	SP10062	1区	埋土	陶器	徳利	瀬戸	登 10・11			(7.2)		底部	1/2		
227	SP40012	4区	埋土	陶器	擂鉢	瀬戸	後Ⅳ新	(23.5)				口縁部	1/8	暗灰	
228	SP30021	3区	埋土	陶器	擂鉢	古志戸呂	後期Ⅳ古	(25.6)				口縁部	1/12		
229	SP50055	5区	掘方	陶器	擂鉢	瀬戸	後Ⅳ新	(26.8)				口縁部	1/24	褐灰	
230	SP31112	3区	掘方	磁器染付	小杯	肥前					2.55	体部～底部			
231	SP40039	4区	埋土	磁器	碗	肥前					(5.2)	底部	1/3	灰白 / 浅黄	
234	SP31368	3区	埋土	金属	キセル（雁首）				長さ 3.7						SH3001
235	SP30276	3区	埋土	金属	キセル（雁首）				長さ 2.95						
236	SP10086	1区	埋土	金属	釘				長さ 2.25						
241	SR1001	1区	上層	須恵器	坏蓋			(10.2)				口縁部	1/10	灰	
242	SR1001	1区	上層	須恵器	坏蓋			(10.6)				口縁部	1/12	灰	
243	SR1001	1区	上層	須恵器	坏蓋			(15.3)				口縁部	1/12	灰白 / 灰黄	
244	SR1001	1区	上層	須恵器	坏蓋			(14.6)				口縁部	1/20	灰黄	
245	SR1001	1区	上層	須恵器	坏			(13.8)				口縁～体部	1/12	灰黄	
246	SR1001	1区	上層	須恵器	坏身			(15.0)	4.0		(10.5)	口縁～底部	1/10	にぶい黄橙	
247	SR1001	1区	上層	須恵器	甕			(23.0)				口縁部	1/20	オリーブ黒	
248	SR1001	1区	上層	土師器	坏			(12.5)	4			口縁～底部		浅黄橙	赤彩
249	SR1001	1区	上層	土師器	鍋			(18.8)				口縁部	1/4	浅黄橙	
250	SR1001	1区	上層	土師器	甕			(19.2)				口縁部	1/8	浅黄橙	
251	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(8.9)	底部	1/5	淡黄 / 灰白	
252	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗			14.75	4.55		6.7	口縁～底部	完形	灰黄	
253	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗			(13.3)	4.0		(6.5)	口縁～底部	1/3	浅黄	
254	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						6.3	底部		灰黄	
255	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(7.9)	底部	1/4	浅黄	
256	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(6.5)	底部	1/2	にぶい黄橙	
257	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(7.2)	底部		灰黄	
258	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(7.6)	底部	1/2	灰白	
259	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	碗						(6.2)	底部		灰白 / 灰黄	
260	SR1001	1区	上層	灰釉陶器	壺						7.2	頸部～底部		浅黄橙	
261	SR1001	1区	上層	土師器	坏			(13.5)				口縁～体部	1/8	にぶい黄橙	
262	SR1001	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)	2.6	(5.6)		口縁～底部	1/5	灰白	
263	SR1001	2区	上層	土師質土器	香炉			10.75	5.05	5.8		口縁～脚部	完形	灰白	
264	SR1001	1区	上層	陶器	練り鉢	瀬戸	登 10	(20.3)				口縁部	1/8	灰黄	
265	SR1001	1区	上層	土師質土器	内耳鍋		半球型	(24.0)				口縁部	1/10	にぶい橙	

表７　出土遺物観察表（３）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
296	SD1001	１区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登７				(4.8)	底部		暗褐	
297	SD1001	１区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部	1/8	浅黄橙	
298	SD1001	１区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部	1/8	浅黄橙	
299	SD1001	１区	埋土	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(23.0)				口縁～体部	1/10	にぶい黄橙	
300	SD1001	１区	埋土	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登４	(27.6)				口縁部	1/10	褐色	
301	SD3001	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部	1/12	にぶい黄橙	
302	SD3007	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)				口縁部	1/10	灰白	
303	SD3007	３区	埋土	陶器	皿	志戸呂		(11.1)				口縁部	1/12	褐灰	
304	SD3007	３区	埋土	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.2)				口縁部	1/20	浅黄橙	
305	SD3003	３区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登７	(11.2)	6.95		(4.8)	口縁～底部	1/2	暗オリーブ	
306	SD3003	３区	埋土	陶器	染付皿	瀬戸美濃	登８・９				4.2	底部		浅黄	
307	SD3003	３区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登７				5.4	底部		褐	
308	SD3003	３区	埋土	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登６	(29.6)				口縁部	1/16	にぶい赤褐	
309	SD3003	３区	埋土	土師質土器	皿	非ロクロ	非ロクロ	(10.8)	2.0	(6.9)		口縁～底部	1/3	灰白	
310	SD3003	３区	埋土	土師質土器	皿	非ロクロ	非ロクロ	9.75	2.4	4.5		口縁～底部	完形	にぶい橙	
311	SD3003	３区	埋土	土師質土器	皿	非ロクロ	非ロクロ	(9.6)	1.8	(6.2)		口縁～底部	1/4	浅黄橙	
312	SD3003	３区	埋土	土師質土器	皿	非ロクロ	非ロクロ	9.8	2.0	4.0		口縁～底部	完形	にぶい黄橙	
313	SD4003	４区	埋土	磁器染付	碗蓋	肥前		(10.3)	3.2		頭頂５．１	頭頂～口縁	3/4		山水文
314	SD4003	４区	埋土	磁器染付	碗	肥前		(7.7)	6.0		(3.8)	口縁～底部	1/2		菊花文
315	SD4003	４区	埋土	磁器染付	碗	肥前		(6.9)				口縁部	1/6		
316	SD4003	４区	埋土	磁器染付	碗	肥前					(5.8)	底部	1/2		
317	SD4003	４区	埋土	磁器染付	瓶	肥前		1.7				口縁～頸部			蛸唐草文
318	SD4003	４区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登５	(11.2)				口縁～体部			
319	SD4003	４区	埋土	陶器	箱形湯呑	瀬戸美濃	登８・９	(9.8)				口縁～体部	1/5		
320	SD4003	４区	埋土	陶器	片口鉢	瀬戸美濃		(18.5)				口縁～体部	1/9		
321	SD4003	４区	埋土	陶器	腰錆茶碗	瀬戸美濃	登９				(3.8)	底部	1/2		
322	SD4003	４区	埋土	陶器	筒形碗	瀬戸美濃	登８・９				(4.7)	底部	1/2		
323	SD4003	４区	埋土	陶器	筒形碗	瀬戸美濃	登８・９				(4.0)	底部	1/3		
324	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.7)				口縁部	1/3	灰白	
325	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)	1.75	(4.8)		口縁～底部	1/4	浅黄橙	
326	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.5)	1.4	(5.4)		口縁～底部	1/5	浅黄橙	
327	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁～体部	1/4	淡黄	
328	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)	2.45	(5.4)		口縁～底部	1/3	浅黄橙	
329	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部	1/6	にぶい黄橙	
330	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部	1/8	灰黄	
331	SD4003	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)	1.75	(6.0)		口縁～底部	1/5	灰白	
332	SD4004	４区	上層	陶器	片口	瀬戸美濃	登 10・11	(18.3)				口縁部	1/5	灰白	
333	SD5003	５区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西		(15.6)				口縁～体部	1/4		
334	SD5003	５区	検出面	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登４				4.4	底部			
335	SD5003	５区	埋土	陶器	甕	渥美				(14.0)		底部	1/6	灰白 / 黄白	
336	SD5005	５区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西					(4.6)	底部	1/2	灰白	
337	SD5005	５区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西					(6.8)	底部	1/5	灰白	
338	SD5005	５区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西					(6.6)	底部	1/3	灰白	
339	SD5005	５区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西					5.8	底部		灰白	
340	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)	1.95	(4.1)		口縁～底部	1/2	灰白	
341	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁～体部	1/4	淡黄	
342	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)	2.85	(4.8)		口縁～底部	1/2	淡黄	
343	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)				口縁部	1/5	淡黄	
344	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ			(4.6)		体部～底部	1/3	淡黄	
345	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.2)				口縁～体部	1/4	淡黄	
346	SD5005	５区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)	4.1	(2.6)		口縁～底部	1/3	灰白	
347	SD5005	５区	埋土	中世瓦	丸瓦		無段式	長 ()	幅 ()						吊り紐痕
348	SD5005	５区	埋土	中世瓦	丸瓦		無段式	長 ()	幅 ()			側端部			吊り紐痕
349	SE3002	３区	埋土	陶器	鎧茶碗	瀬戸美濃	登９				3.4	底部	1/2	淡黄	
350	SE3002	３区	下層	陶器	筒形湯呑	瀬戸美濃	登９	7.55	5.95	3.9		口縁～底部	4/5	灰白 / 灰白	
351	SE3002	３区	埋土	陶器	秉燭	瀬戸美濃	登 10・11	4.45	2.15	2.45		完形		灰白 / 淡黄	
352	SE3002	３区	中層	陶器	片口	瀬戸美濃	登８	(16.2)				口縁部	1/12	灰白	
353	SE3002	３区	裏込	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	1.7	6.55		口縁～底部	3/4	灰白	
354	SE3002	３区	下層	磁器染付	皿	肥前		13.7	3.7	7.6		口縁～底部	1/2	灰白 / 明緑灰	渦福銘
355	SE3002	３区	下層	磁器染付	蓋物	肥前		(11.7)				頭頂～口縁	1/2	染付	竹文
356	SE3002	３区	下層	磁器染付	瓶	肥前						体部		灰白 / 明緑灰	草花文
357	SE4001	４区	上層	陶器	丸碗	瀬戸美濃	登５				(4.5)	体部～底部	1/3	黒褐 / 灰白	
358	SE4001	４区	上層	陶器	反皿	瀬戸美濃	登４	(13.5)				口縁～体部	1/5	灰白	
359	SE4001	４区	上層	陶器	小碗	瀬戸美濃	登８	(6.6)				口縁部	1/9	黄灰	
360	SE4001	４区	上層	陶器	広東碗	瀬戸美濃	登 10				(5.6)	底部		灰白 / 灰白	
361	SE4001	４区	上層	磁器染付	碗	肥前					(3.3)	底部	1/3	灰白 / 灰白	菊花文
362	SE4001	４区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.3)				口縁～体部	1/4	にぶい黄橙	
363	SE4001	４区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.3)	2.7	(7.3)		口縁～底部	1/6	にぶい黄橙	
364	SE4001	４区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)				口縁～体部	1/7	浅黄橙	
365	SE4001	４区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.1)				口縁部	1/6	にぶい黄橙	
366	SE4001	４区	上層	陶器	擂鉢	志戸呂				(12.5)		底部	1/5	赤灰	
367	SE4001	４区	上層	陶器	甕	志戸呂				(18.2)		体部～底部	40548	灰褐	
368	SE4001	４区	上層	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登５～７			11.6		体部～底部	1/5	褐 / 灰白	
385	SF3011	３区	埋土	陶器	小皿	初山	大窯３後	(9.3)				口縁部	1/10	灰黄褐 / 黒	
386	SF3011	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁部	1/8	灰白	
387	SF3011	３区	埋土	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.0)				口縁部	1/16	灰白	
388	SF3012	３区	上層	陶器	擂鉢	志戸呂		(26.1)				口縁部	1/22	浅黄	
389	SF3012	３区	下層	陶器	小皿	美濃	登３・４				(6.3)	底部	1/4	灰白 / 淡黄	
390	SF3025	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)				口縁部	1/14	灰白	

表８　出土遺物観察表（４）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
391	SF3048	３区	埋土	陶器	擂鉢	志戸呂		(25.0)				口縁部	1/28	にぶい橙	
392	SF3122	３区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
393	SF3121	３区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部	1/7	淡黄	
394	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部	1/6	灰白	
395	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁部	1/5	灰白	
396	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.0)				口縁部	1/5	灰白	
397	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部	1/12	灰白	
398	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部	1/10	浅黄橙	
399	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部	1/6	浅黄橙	
400	SF3121	３区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部	1/12	灰白	
401	SF3121	３区	上層	土師質土器	内耳鍋		くの字	(20.1)				口縁部	1/20	浅黄橙	
402	SF3121	３区	埋土	土師質土器	羽釜							羽部	1/10	淡黄	
403	SF4001	４区	埋土	陶器	壺	常滑	９型式	(23.3)				口縁部	5/12	にぶい黄	
404	SF4007	４区	埋土	陶器	小碗	瀬戸美濃	登６・７	7.4	5.0		2.9	口縁～底部	9/10	淡黄	
405	SF4007	４区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登６・７	(11.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
406	SF4007	４区	埋土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登４				(3.6)	底部	1/4	黒 / 灰白	
407	SF4007	４区	２層	陶器	反皿	瀬戸美濃	登４	(13.7)	2.6		(8.2)	口縁～底部	1/4	灰白 / 浅黄	
408	SF4007	４区	埋土	陶器	片口鉢	瀬戸美濃	登８	16.55	10.5		7.1	口縁～底部	2/3	灰白	
409	SF4007	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.0)				口縁部	3/4	にぶい黄橙	
410	SF4007	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	9.15	2.4	7.5		口縁～底部	1/2	淡黄	
411	SF4007	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	2.25	6.6		完形		にぶい黄橙	
412	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)	2.3	(6.95)		口縁～体部	3/4	灰白	
413	SF4007	４区	３層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.35)	2.55	7.0		ほぼ完形		にぶい黄橙	
414	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)				口縁～体部	1/4	灰白	
415	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)	2.1	(4.9)		口縁～底部	1/12	にぶい黄橙	
416	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁～体部	1/4	浅黄橙	
417	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)				口縁～体部	1/2	にぶい黄橙	
418	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)				口縁部	1/4	にぶい黄橙	
419	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)				口縁部	1/4	灰白	
420	SF4007	４区	３層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁～体部	1/4	淡黄	
421	SF4007	４区	２層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.5)				口縁～体部	1/6	にぶい黄橙	
422	SF4007	４区	２層	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登６	(28.0)				口縁部	1/8	灰白 / 灰褐	
425	SF4008	４区	埋土	陶器	志野皿	瀬戸美濃	登１～２				(6.0)	底部	1/4	灰白	
426	SF4008	４区	２層	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登６・７	(10.8)				口縁～体部	1/4	黄瀬戸	
427	SF4008	４区	埋土	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登６・７				(4.9)	体部～底部	1/4	灰白	
428	SF4008	４区	２層	陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登６・７				(4.6)	底部	1/3	黄瀬戸	
429	SF4008	４区	埋土	陶器	丸碗	瀬戸美濃	登４				(4.8)	体部～底部	1/3	黒褐 / 明赤褐	
430	SF4008	４区	埋土	陶器	碗	肥前					(4.8)	底部		灰白 / 黄灰	
431	SF4008	４区	埋土	陶器	片口	瀬戸美濃	登８・９	(17.4)				口縁部	1/3	灰白 / 灰白	
432	SF4008	４区	埋土	陶器	片口	瀬戸美濃	登８・９				(7.6)	底部	3/4	灰白 / 灰白	
433	SF4008	４区	２層	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登６	(25.4)				口縁部	1/8	にぶい黄褐	
434	SF4008	４区	２層	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登５～７			(11.2)		底部	1/5	にぶい黄褐	
435	SF4008	４区	２層	磁器染付	筒形碗	肥前		(7.3)				口縁部	1/5	灰白 / 灰白	菊花文
436	SF4008	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)	2.0	(3.3)		口縁～底部	1/2	浅黄橙	
437	SF4008	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)				口縁部	1/8	淡黄	
438	SF4008	４区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部	1/6	灰白	
439	SF4011	４区	６層	陶器	片口	瀬戸美濃	登 10・11	(16.8)				口縁部	1/10	灰白	
440	SF5004	５区	埋土	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.4)				口縁部	1/16	淡黄	
441	SF5005	５区	検出面	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(17.2)				口縁部	1/9	淡黄	
442	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	10.9	2.5	7.8		口縁～底部	3/4	淡黄	
443	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	11.8	2.9	7.65		口縁～底部	ほぼ完形	浅黄橙	
444	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	11.1	2.5	7.95		完形		浅黄橙	
445	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	11.2	2.3	7.8		完形		浅黄橙	
446	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	10.7	2.4	7.35		ほぼ完形		淡黄	
447	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	10.65	2.65	7.25		完形		浅黄橙	
448	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)	2.6	(5.15)		口縁～底部	1/2	灰白	
449	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)	1.9	(6.6)		口縁～底部	1/2	浅黄橙	
450	SX3001	３区	床面	土師質土器	皿		ロクロ	11.4	2.4	5.25		ほぼ完形		浅黄橙	
451	SX3226	３区	３層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.2	2.05	5.4		完形		淡黄	
452	SX3226	３区	３層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部	1/4	淡黄	
453	SX3226	３区	３層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)				口縁部	1/6	淡黄	
454	SX3226	３区	４層	土師質土器	皿		非ロクロ	(6.8)				口縁～体部	1/3	浅黄橙	
457	SX4011	４区	桶内埋土	磁器染付	染付	肥前					(3.65)	底部		灰白 / 明緑灰	
458	SX4011	４区	桶下埋土	陶器	卸皿	瀬戸	後Ⅳ期新	(11.0)				口縁部	1/20	灰白	
460	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.2	2.15	4.15		完形		にぶい黄橙	
461	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.75	2.4	5.3		ほぼ完形		浅黄橙	
462	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.7	2.35	6.4		ほぼ完形		浅黄橙	
463	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	9.1	1.35	6.65		ほぼ完形		浅黄橙	
464	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	1.8	6.9		ほぼ完形		浅黄橙	
465	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.7	2.1	5.55		ほぼ完形		にぶい黄橙	
466	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.9	2.05	5.35		完形		浅黄橙	
467	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.65	2.2	5.8		完形		浅黄橙	
468	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	1.6	6.9		ほぼ完形		淡黄	
469	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	2.2	5.8		完形		にぶい黄橙	
470	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	2.15	6.25		完形		浅黄橙	
471	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	9.1	2.15	6.35		ほぼ完形		浅黄橙	
472	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	8.3	2.25	5.6		完形		浅黄橙	
473	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	9.35	2.05	6.1		完形		浅黄橙	
474	SX4012	４区	甕内	土師質土器	皿		非ロクロ	9.0	2.3	5.5		ほぼ完形		浅黄橙	

表９　出土遺物観察表（５）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
475	SX4012	４区	底部	陶器	甕	常滑				22.3		体部～底部		淡橙	
476		４区	包含層	須恵器	蓋			(15)				口縁～胴部	1/4	灰黄	
477		４区	包含層	須恵器	坏						(9.4)	底部～胴部	4/5	灰白	
478		１区	包含層	灰釉陶器	碗						8.0	体～底部	3/4	灰白	
479			包含層	土師器	坏			(12)	2.8	(8.8)		口縁～底部	1/8	にぶい橙	赤彩
480		４区	包含層	土師器	坏			(15.0)	3.6	(6.6)		口縁～底部	1/4	にぶい黄橙	赤彩
481		４区	包含層	土師器	高盤			(16.5)	5.1	9.3		口縁～底部	4/5	にぶい黄橙	赤彩
482		５区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２			7.2		体～底部	3/4	灰白	
483		５区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				6.6	底部	1/4	灰白	
484		１区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.6	底部	1/2	褐灰	
485		４区	包含層	瓦塔					8.3(高さ)	8.1(幅)		軒先部			
486		３区	撹乱	瓦	平瓦		桶巻作り	現存長 9.9	現存幅 8.1			側端		橙白	
487		３区	撹乱	瓦	平瓦		桶巻か	現存長 8.0	現存幅 10.2			側端		灰白	凹凸面ナデ
488		３区	包含層	瓦	平瓦		一枚作り	現存長 7.0	現存幅 6.2					橙白	
489		３区	包含層	瓦	平瓦		一枚作り	現存長 15.0	現存幅 10.0			側端・広端		橙白	
490		３区	撹乱	瓦	丸瓦		有段式	現存長 8.5	現存幅 6.5			側端		橙白	
491		５区	撹乱	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 11.6	現存幅 7.5			側端・狭端		橙白	離れ砂
492		５区	包含層	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 11.5	現存幅 6.0			広端		橙白	離れ砂
493		５区	包含層	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 8.1	現存幅 7.0			側端・広端		橙白	離れ砂
494		５区	撹乱	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 13.9	現存幅 11.4			狭端		橙白	離れ砂
495		５区	撹乱	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 7.3	現存幅 12.9			側端		橙白	離れ砂
496		５区	包含層	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 12.0	現存幅 8.8			側端		橙白	離れ砂
497		５区	撹乱	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 9.4	現存幅 6.5					橙白	離れ砂
498		４区	撹乱	中世瓦	丸瓦		中屋Ⅱ類	現存長 12.3	現存幅 9.5			側端・広端		橙白	吊り紐痕
499		５区	包含層	中世瓦	平瓦		中屋ⅡＢ類	現存長 6.2	現存幅 8.3					橙白	凹面布目
500		２区	表採	石塔	宝篋印塔（相輪）				高さ 15.2	幅 9				橙白	砥石に転用
501		４区	包含層	陶器	平碗	瀬戸	後期Ⅰ	(19.6)				口縁	1/8	淡黄 / 灰白	
502		５区	包含層	陶器	平碗	瀬戸	後期Ⅲ・Ⅳ			(5.2)		体部～底部	4/5	にぶい黄橙	
503		４区	包含層	陶器	緑釉小皿	瀬戸	後期Ⅲ			5.7		底部	1/1	灰白 / 褐	
504		４区	包含層	陶器	根来型瓶子	瀬戸	後期Ⅳ古			(12.8)		底部	1/4	灰白 / 黒	
505		４区	包含層	陶器	天目茶碗	志戸呂	後期Ⅳ	(13.7)				口縁	1/7	黄灰 / 暗赤灰	
506		３区	包含層	陶器	直縁大皿	志戸呂	後期Ⅳ	(30.8)				口縁	1/20	灰褐	
507		３区	包含層	陶器	擂鉢	志戸呂	後期Ⅳ	(28.4)				口縁	1/8	にぶい橙	
508		３区	撹乱	陶器	御目付大皿	志戸呂	後期Ⅳ	(31.3)				口縁	1/5	灰黄	
509		３区	包含層	陶器	擂鉢	志戸呂	後期Ⅳ			(11.8)		底部	1/8	にぶい褐	
510		３区	包含層	陶器	丸皿	瀬戸美濃	大窯２				(4.7)	底部	1/6	灰白 / 浅黄	
511		３区	包含層	陶器	丸皿	瀬戸美濃	大窯２	(9.7)				口縁	1/8	黒褐	
512		３区	包含層	陶器	内香皿	初山	大窯３	(9.7)	1.9	(4.6)		口縁～底部	1/2	灰褐	
513		３区	包含層	陶器	内香皿	初山	大窯３	(10.4)	2	(5.6)		口縁～底部	1/2	灰褐	
514		３区	包含層	陶器	内禿皿	初山	大窯３	(9.3)	2.4	(4.9)		口縁～底部	1/4	灰褐 / 赤灰	
515		３区	包含層	陶器	内禿皿	初山	大窯３			(5.2)		底部	1/2	灰褐	
516		３区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	大窯３	(28.2)				口縁	1/16	褐灰	
517		５区	包含層	陶器	壷	志戸呂	大窯４	(12.4)				口縁～体部	1/5	にぶい橙	
518		５区	包含層	陶器	擂鉢	志戸呂	大窯４	(26.5)				口縁～体部	1/5	灰褐 / 褐灰	
519		３区	包含層	陶器	擂鉢	志戸呂	大窯４	(29)	12.7	(10.1)		口縁～底部	1/3	褐灰	
520			包含層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.0)				口縁部	1/12	灰黄褐	
521			包含層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.2)				口縁部	1/12	にぶい黄橙	外面にスス
522			包含層	土師質土器	内耳鍋		半球形	(25.0)				口縁部	1/5	浅黄橙	外面にスス
523			包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.9	2.3	8.9		ほぼ完形		にぶい橙色	
524			撹乱	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)	2.2	3.5		口縁～底部	2/3		
525			包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	7.6	2.15	5.4		完形		浅黄橙	
526			包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	10.8	2.7	3.6		口縁～底部	4/5		
527			撹乱	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)	2.6	(7)		口縁～底部	1/3	にぶい黄橙	スス付着
528		４区	包含層	陶器	天目茶碗	美濃	登２	(10.4)				体部～底部	1/8	にぶい橙	
529		２区	包含層	陶器	天目茶碗	美濃	登３	(10.7)	6.5			口縁～体部	1/4	浅黄	
530		３区	包含層	陶器	天目茶碗	美濃	登４	11.1	6.25	3.8		口縁～底部	ほぼ完形	黒褐	
531		３区	包含層	陶器	丸碗	美濃	登３・４	(10.8)				口縁～体部	1/8	にぶい赤褐	
532		２区	包含層	陶器	天目茶碗	瀬戸	登１				(3.6)	底部	1/4	灰白	
533		４区	包含層	陶器	天目茶碗	瀬戸	登３				(4)	底部	1/4	灰白 / 黒	
534		３区	包含層	陶器	天目茶碗	瀬戸	登４				4.15	底部	1/1	灰白 / 黒	
535		３区	包含層	陶器	天目茶碗	瀬戸	登４				4.2	底部	一部欠	灰白 / 黒褐	
536		２区	包含層	陶器	丸碗	瀬戸	登３				4.2	底部	1/1	灰白 / 黒	
537		３区	包含層	陶器	志野丸皿	瀬戸	登１	(10.6)				口縁	1/6	灰白	
538		３区	包含層	陶器	丸皿	瀬戸	登１・２	(9.8)				口縁	1/8	灰白	
539		２区	包含層	陶器	志野丸皿	瀬戸	登２			(6.2)		底部	1/2	灰白	
540		４区	包含層	陶器	菊皿	美濃	登４	(13.6)	4.25		(7.5)	口縁～底部	1/4	灰白 / 浅黄	
541		４区	包含層	陶器	花瓶	美濃	登５				5.35	体部～底部		灰赤・黒	
542		３区	包含層	陶器	徳利	瀬戸	登３・４			6.8		底部	1/1	灰白 / 浅黄橙	
543		５区	包含層	陶器	鉄絵鉢	美濃	登３・４				(19.6)	底部		灰白	砂目
544		５区	包含層	陶器	鉄絵鉢	美濃	登３・４	(29.2)				口縁	1/12	灰白	
545		３区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登１・２	(8)				体部～底部	1/4	褐灰	
546		２区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登３	(30.4)	14.85	(12.6)		口縁～底部	1/3	灰赤	
547		３区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登４	(30.65)	13.5	(12.35)		口縁～底部	1/4	にぶい赤褐	
548		１区	包含層	陶器	天目茶碗	瀬戸	登５	(11.3)	7.1		4.4	口縁～底部	1/6 ～ 1/1	灰黄褐 / 黒褐	
549		４区	包含層	陶器	丸碗	瀬戸	登５・６				4.4	体部～底部	1/3 ～ 1/2	灰白 / 淡黄	
550		３区	包含層	陶器	丸碗	美濃	登５・６				4.7	体部～底部	1/5 ～ 1/1	灰白 / 褐	
551		３区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登５	(12.4)	7.1		5.8	口縁～底部	1/3 ～ 1/1	暗褐	
552		１区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登５・６				5.0	体部～底部	3/5 ～ 1/1	赤褐 / 黒褐	
553		３区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登６				4.7	体部～底部	3/5 ～ 1/1	浅黄	

表 10　出土遺物観察表（6）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
554		3区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登7				4.5	体部～底部		にぶい黄	
555		3区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登6				(5.6)	体部～底部	1/2	灰白 / 黒褐	
556		3区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登6				4.9	体部～底部	1/3～1/1	にぶい黄橙	
557		3区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登7				4.3	底部	1/1	浅黄	
558		3区	包含層	陶器	尾呂茶碗	美濃	登7				(4.9)	体部～底部	1/6～1/2	浅黄 / 黒褐	
559		3区	包含層	陶器	腰錆茶碗	瀬戸	登6				5.2	底部	1/1	灰白	
560		4区	包含層	陶器	鉢	美濃	登5.6			5.3		底部	1/1	灰黄	
561		3区	包含層	陶器	摺絵皿	美濃	登7	(11.7)	2.7		6.35	口縁～底部	4/5	灰白	
562		5区	包含層	陶器	片口	美濃	登7				(9.8)	底部	1/4	浅黄	
563		5区	包含層	陶器	壷	美濃	登5.6				(8.8)	体部～底部	1/8	淡黄 / 黄褐	
564		4区	包含層	陶器	徳利	美濃	登7			7.6		体部～底部	1/3～1/1	灰黄 / 灰白	
565		4区	包含層	陶器	袴腰形香炉	瀬戸	登5	(10.9)				口縁～体部	1/10	灰白 / 暗褐	
566		5区	包含層	陶器	筒型香炉	美濃	登7			(7.7)		体部～底部	1/4	淡黄 / 黄褐	
567		4区	包含層	陶器	仏餉具	美濃	登5.6			(5.2)		底部	3/4	灰黄	
568		4区	包含層	陶器	仏餉具	美濃	登7			3.9		体部～底部	?～1/1	灰白	
569		4区	包含層	陶器	仏餉具	美濃	登7			(4.9)		体部～底部	1/2	灰黄	
570		3区	包含層	陶器	鉄絵鉢	美濃	登5か6	(30.8)				口縁	1/8	灰黄 / 灰白	
571		3区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登7	(28.8)				口縁	1/12	暗褐	
572		3区	包含層	陶器	擂鉢	美濃	登5～7			(13.4)		体部～底部	1/8	暗褐	
573		2区	包含層	陶器	腰錆湯呑	美濃	登8	(9.1)	5.45		(4.2)	口縁～底部	1/2	灰白 / 黒褐	
574			包含層	陶器	腰錆湯呑	瀬戸	登9	(8.8)	5.15		(3.6)	口縁～底部	1/3	黒褐 / 灰白	
575		3区	包含層	陶器	腰錆湯呑	瀬戸	登8				4.0	底部	1/1	暗褐	
576		2区	包含層	陶器	糸目湯呑	瀬戸	登9				5.3	体部～底部	1/4～1/1	黒褐	
577		4区	包含層	陶器	鎧湯呑	美濃	登8	(7.7)	5.1		4.1	口縁～底部	1/3～1/1	灰白	
578		2区	包含層	陶器	鎧湯呑	美濃	登8	(8.2)	5.6		(3.8)	口縁～底部	1/2	黒褐	
579		3区	包含層	陶器	鎧湯呑	美濃	登9				(4.2)	体部～底部	1/3	灰白	
580		5区	包含層	陶器	湯呑	瀬戸	登8.9	(9.0)	5.2		3.8	口縁～底部	1/2	灰白	
581		3区	包含層	陶器	湯呑	瀬戸	登8.9	(8.7)	5.65		3.6	口縁～底部	1/5～1/1	灰白	
582		3区	包含層	陶器	湯呑	瀬戸	登8.9				3.2	底部	1/1	灰白	
583		5区	包含層	陶器	小中	瀬戸	登9	(8.9)	4.9		3.15	口縁～底部	1/2	灰白	
584		1区	包含層	陶器	柳茶碗	美濃	登8				3.5	体部～底部	1/5～1/1	灰白	
585		3区	包含層	陶器	柳茶碗	美濃	登9	(14.4)	5.5		(3.8)	口縁～底部	4/5	灰白	
586		4区	包含層	陶器	皿	瀬戸	登8.9	(13)	1.65	(12.0)		口縁～底部	1/6	灰白	
587		4区	包含層	陶器	小杯	美濃	登8	(5.7)	3.75		(3.1)	口縁～底部	1/3	灰白	
588		5区	包含層	陶器	徳利	美濃	登8.9			(7.0)		体部～底部	1/2	灰白	
589		5区	包含層	陶器	鉢	美濃	登8.9				5.0	底部	1/1	オリーブ黄	
590		3区	包含層	陶器	片口	美濃	登8	(11.4)				口縁～体部	1/3	にぶい黄橙	
591		5区	包含層	陶器	片口	美濃	登8.9	(9.6)	4.7		4.8	口縁～底部	2/3	灰黄	
592		3区	包含層	陶器	片口鉢	美濃	登8	18.2	8.45			口縁～体部	1/4	明黄褐	
593		5区	包含層	陶器	片口	瀬戸	登8.9				(7.8)	体部～底部	1/5	灰黄	
594		4区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登9	(27.5)				口縁	1/10	灰白 / 褐	
595		4区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登8	(28.0)				口縁	1/10	灰白	
596		5区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登9	(11)	2.0	(5.3)		口縁～底部	1/4	にぶい褐	内外スス
597		3区	包含層	陶器	餌鉢	瀬戸	登8.9	(4.8)	2.1	4.0		口縁～底部	4/5	オリーブ黄	
598		5区	包含層	陶器	広東茶碗	瀬戸	登10			5.5		体部～底部	1/3～1/1	灰白	
599		2区	包含層	陶器	広東茶碗	瀬戸	登10				5.35	体部～底部	1/6～1/1	灰白	
600		1区	包含層	陶器	広東茶碗	瀬戸	登10				4.2	体部～底部	1/4～1/1	灰白	
601		5区	包含層	磁器	端反碗	瀬戸美濃	登11		2.5	3.35		体部～底部	1/1	灰白	
602		1区	包含層	陶器	箱形湯呑	瀬戸	登10	(6.6)	6.05		(3.5)	口縁～底部	1/2	灰白	
603		3区	包含層	陶器	鎧湯呑	瀬戸	登10.11			(3.6)		体部～底部	1/3	淡黄 / 灰白	
604		1区	包含層	陶器	片口	瀬戸	登10.11	(10.05)	4.05		4.3	口縁～底部	1/3	浅黄	
605		4区	包含層	陶器	片口	瀬戸	登11	(11.9)	6.25		(5.6)	口縁～底部	1/2	浅黄	
606		4区	包含層	陶器	片口	瀬戸	登11	(19.7)	11.15		(7.8)	口縁～底部	1/2	灰オリーブ	
607		3区	包含層	陶器	小甕	瀬戸	登10.11	(10.8)				口縁～体部	1/5	赤褐 / 暗赤褐	
608		3区	包含層	陶器	行平	瀬戸	登10.11	(13.8)				口縁	1/8	灰オリーブ	
609		3区	包含層	陶器	植木鉢	瀬戸	登10.11				(8.4)	底部	1/4	緑灰 (釉)	
610		5区	包含層	陶器	餌鉢	美濃	登10.11	(5.1)	2.5	(4.4)		口縁～底部	1/3	灰白	
611		4区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登10	(9.9)	2.05	(4.1)		口縁～底部	1/3	にぶい黄橙	
612		3区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登10	(9.8)	2.25	(4.6)		口縁～底部	1/2	にぶい赤褐	
613		1区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登11	(10)	2.15	(3.8)		口縁～底部	3/4	浅黄	
614		3区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登10	9.8	2.1	4.8		口縁～底部	1/2	灰白	
615		1区	包含層	陶器	灯明皿	美濃	登11	(10.8)	2.0	(4.6)		口縁～底部	1/5	灰白 / 淡黄	
616		3区	包含層	陶器	秉燭	瀬戸	登11	4.75	2.1	2.2		口縁～底部	ほぼ完形	灰黄 / 灰白	
617		3区	包含層	陶器	秉燭	瀬戸	登11	4.75	2.5	2.2		口縁～底部	完形	浅黄 / 淡黄	
618		3区	包含層	陶器	秉燭	瀬戸	登11	4.9	2.6	2.1		口縁～底部	ほぼ完形	黄橙 / 淡黄	
619		1区	包含層	陶器	秉燭	瀬戸	登10.11	(4.7)	2.45	1.5		口縁～底部	ほぼ完形	灰黄褐 / 灰白	
620		1区	包含層	陶器	秉燭	瀬戸	登11	4.3	2.85	2.8		口縁～底部	ほぼ完形	灰白	
621		4区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登10	(38)	14.85	(15)		口縁～底部	1/3	にぶい赤褐	
622		4区	包含層	陶器	擂鉢	瀬戸	登11	(36.6)	16	(14.7)		口縁～底部	1/2	にぶい赤褐	
623		4区	包含層	磁器染付	碗蓋	肥前		9.5	2.7			摘み～口縁	ほぼ完形	灰白	松花文
624		4区	包含層	磁器染付	碗蓋	肥前		(8.7)	2.55			摘み～口縁	3/5	灰白	花唐草文
625		4区	包含層	磁器染付	碗	肥前		(10)	5		4.0	口縁～底部	1/4～1/1	灰白	雪輪梅樹文
626		4区	包含層	磁器染付	碗	肥前					(5.2)	体部～底部	1/3	灰白	草花文
627		5区	包含層	磁器	碗	唐津					4.9	底部	1/1	灰白	
628		5区	包含層	磁器染付	筒形碗	肥前		(7.0)				口縁～体部	1/3	灰白	菊花文
629		5区	包含層	磁器染付	筒形碗	肥前		(7.2)	5.9		(3.6)	口縁～底部	1/2	灰白	菊花文
630		3区	包含層	磁器染付	碗	肥前		(8.0)				口縁～体部	1/5	灰白	丸文
631		4区	包含層	磁器染付	猪口	肥前		(6.9)	5.65		(4.9)	口縁～底部	1/3	灰白	草花文
632		4区	包含層	磁器染付	猪口	肥前		(7.3)	5.6	(5.9)		口縁～底部	1/2	灰白	矢羽根文

表 11　出土遺物観察表（７）

No.	遺構名	グリッド	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
633		４区	包含層	磁器染付	菊花形皿	肥前		(9.0)				口縁～体部	1/8	灰白	
634		３区	包含層	磁器染付	青緑釉皿	肥前					4.5	底部	1/1	にぶい黄橙	
635		３区	包含層	青磁	小碗	唐津		(8.3)	4.1		(3.5)	口縁～底部	1/4	オリーブ灰	
636		５区	包含層	磁器染付	瓶	肥前		1.55	11.9		3.65	口縁～底部	完形	明青灰	蛸唐草文
637		４区	包含層	磁器染付	皿	肥前		(13.75)	3.9	(9.3)		口縁～底部	3/5	灰白	山水文
638		５区	包含層	磁器染付	皿	肥前					(7.8)	底部	1/4	灰白	
639		４区	包含層	磁器染付	皿	肥前		(14.8)	3.4	(9.4)		口縁～底部	1/5	灰白	

表 12　出土銭貨観察表

No.	遺構名	区	層位	銭名	銭種	初鋳年	銭経（ｃｍ）	内径（ｃｍ）	孔（ｃｍ）	重量 (g)	残存率	備考
232	SP30154	３区		皇宋通宝	宋銭	1039	—	—	—	—	破片	
233	SP10103	１区		元豊通宝	宋銭	1078	2.35	1.85	0.65	4		
455	SX3227	３区		永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.10	0.55	4		
456	SX3227	３区		永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.05	0.60	3		
630		１区	表土	天禧通宝	宋銭	1017	2.60	2.10	0.60	5		
631		１区	表土	皇宋元宝	宋銭	1253	2.50	2.05	0.70	4		
632		１区	表土	嘉祐通宝	宋銭	1056	2.30	1.90	0.70	3	周囲欠損	
633		１区	表土	永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.10	0.60	4		
634		１区	表土	永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.10	0.60	4		
635		１区	表土	永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.10	0.60	4		
636		３区	撹乱	熙寧通宝	宋銭	1068	2.50	2.00	0.70	1		
637		３区	撹乱	開元通宝	唐銭	631	2.60	2.20	0.70 ～ 0.90	2		
638		３区	撹乱	開元通宝	唐銭	631	2.50	2.00	0.70	2	周囲欠損	
639		３区	撹乱	祥符通宝	宋銭	1008	2.40	1.90	0.65	3		
640		３区	撹乱	永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.05	0.60	2	下部 1/4 欠損	
641		３区	撹乱	永楽通宝	明銭	1408	2.50	2.10	0.55	2		
642		３区	排土	寛永通宝	古寛永		2.35	2.00	0.55	2		
643		５区	撹乱	寛永通宝	古寛永		2.40	1.95	0.60	3		
644		５区		寛永通宝	新寛永		2.45	2.00	0.65	2		
645		３区	撹乱	寛永通宝	新寛永		2.35	1.90	0.65	2		
646		３区	撹乱	寛永通宝	新寛永		2.30	1.90	0.70	2	一部欠損、	変形
647		４区	撹乱	寛永通宝	新寛永		2.25	1.85	0.65	1		
648		３区	撹乱	寛永通宝	新寛永		2.40	1.70	0.60	3		
649		１区	撹乱	寛永通宝	鉄銭		2.45	1.90	0.60	3		
650		３区		寛永通宝	四文銭		2.80	2.05	0.70	4		
651		３区	確認調査	文久永宝	四文銭		2.70	2.10	0.70	3		

表 13　出土木製品観察表

No.	遺構名		種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	樹種		備考
171	SH4001	SP40015	柱根	23.6	25.5	16.3	ヒノキ	芯持ち	
172	SH4001	SP40115	柱根	19.5	18.8	15.0	アカマツ	芯持ち	
238	SP40016		柱根	14.8	17.8	13.8	アカマツ	芯持ち	
239	SP40047		柱根	24.4	19.0	16.1	アカマツ	芯持ち	
237	SP40001		柱根	22.7	19.6	11.1	サワラ	芯持ち	
240	SP50053		柱根	21.7	12.8	9.3	針葉樹	芯持ち	
369	SE5001		桶側板	74.4	7.0	3.0	サワラ	板目	
370	SE5001		桶側板	74.5	14.0	3.9	サワラ	板目	
371	SE5001		桶側板	75.0	11.7	3.7	サワラ	板目	
372	SE5001		桶側板	74.7	12.0	4.1	サワラ	柾目	
373	SE5001		桶側板	75.7	11.9	3.6	サワラ	板目	
374	SE5001		桶側板	74.8	15.1	4.0	サワラ	板目	
375	SE5001		桶側板	75.6	6.5	3.5	サワラ	板目	
376	SE5001		桶側板	75.6	11.3	3.7	サワラ	板目	
377	SE5001		桶側板	75.0	13.1	3.6	サワラ	板目	
378	SE5001		桶側板	75.3	14.6	4.1	サワラ	板目	
379	SE5001		桶側板	77.0	9.1	3.7	サワラ	板目	
380	SE5001		桶側板	76.0	10.9	3.5	サワラ	板目	
381	SE5001		桶側板	75.9	10.8	3.9	サワラ	柾目	
382	SE5001		桶側板	75.2	11.8	3.5	サワラ	柾目	
383	SE5001		桶側板	80.6	8.8	3.6	サワラ	板目	
384	SE5001		用途不明	62.3	12.1	9.8	サワラ	板目	
423	SF4007		碗蓋	口径（12.6）	器高 3.2	高台径（6.1）	ブナ属	柾目	横木取り　内外下地黒で塗布
424	SF4007		椀	口径（8.9）	器高（2.4）	高台径（4.3）	ブナ属	柾目	内外に赤漆　横木取り
459	SX4011		曲物底板	71.6	69.9	3.1	アカマツ		５枚・木釘残る

第５章　寺海土遺跡

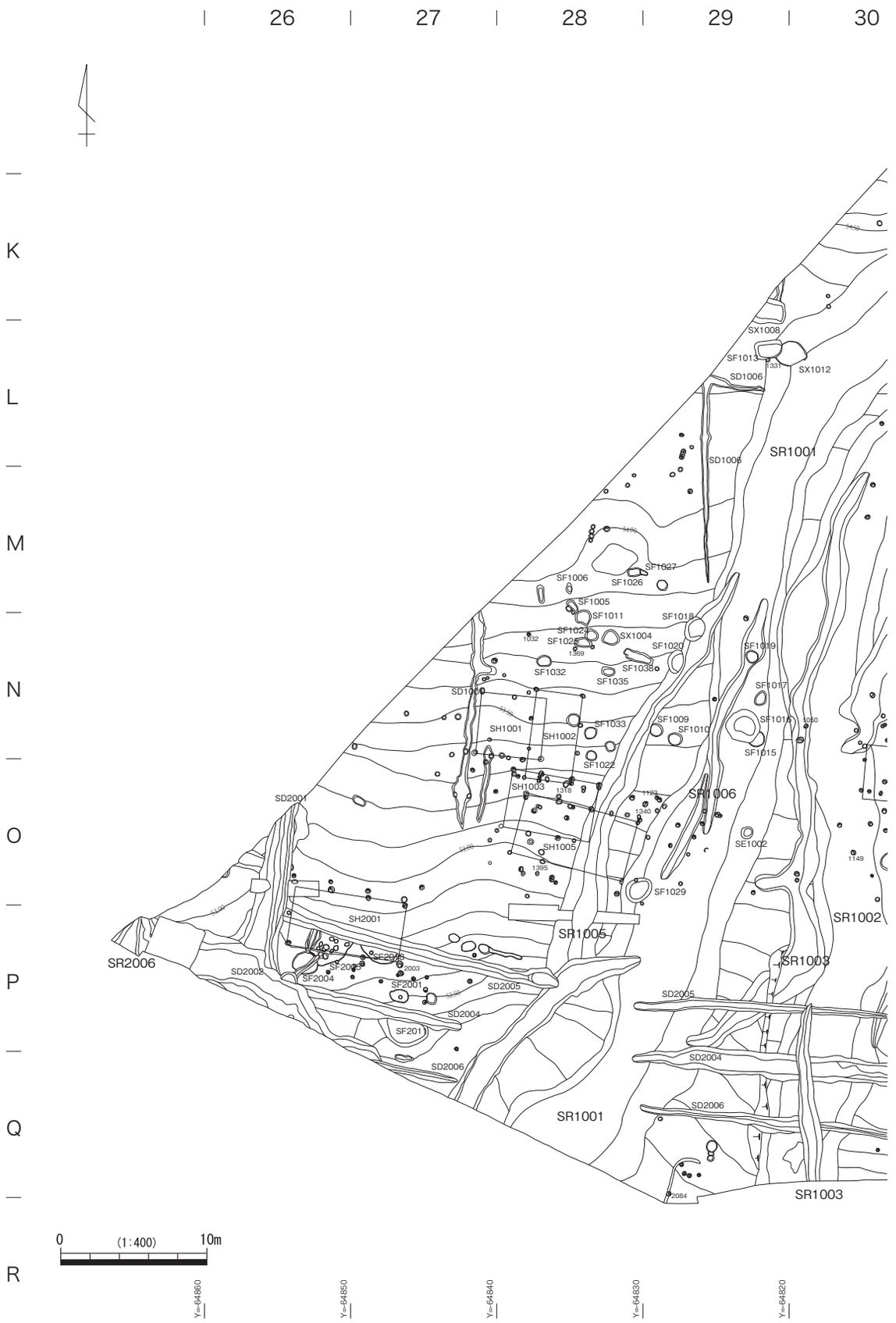


図 256　寺海土遺跡遺構配置図（1）

図 257　寺海土遺跡遺構配置図（2）

１　概要

掘立柱建物

調査区の南側で８棟検出されている。いずれも、その立地からみて河川 SR1001・1002 の埋没後に建設されたものとみられる。年代としては、河川が埋没した 13 世紀の前葉以降と推定される。建物はいずれも小規模なものであり、最も建床面積の大きい SH2001 でも 37 ㎡ほどしかない。柱痕跡の規模も、直径 20 ㎝以下のものがほとんどとなっている。建物の主軸は、いずれも北側で東に振っており、基本的に主軸が西に振る傾向のある中通遺跡とは対照的な状況となっている。

河川

調査区の中央を流れる河川は、検出面から約 130 ㎝の深さまで砂礫の堆積が確認されているが、遺物を含むのは上層のみである。上層の河川は、SR1001 ～ SR1008 の８本に分けられる。SR1001 と SR1002 は、幅７～８ｍ・深さ 50 ～ 60 ㎝の大規模なものであり、SR1001 は 13 世紀前葉、SR1002 は 13 世紀初頭までにほぼ埋没している。SR1003 ～ SR1008 はその後の流路であるが、いずれも幅が 1.5 ～３ｍ程と規模が縮小しており、降雨の際に水が流れる程度のものである。調査区東端では、中世後期から近世にかけての河川 SR2002 ～ SR2004 が検出されている。また、調査区の南西隅では SR2006 が検出されている。13 世紀後半から 14 世紀頃の流路とみられ、東岸には護岸施設が築造されている。

溝

合計８条の溝が検出されている。SD1006 は近世の溝であるが、他はいずれも中世のものである。調査区の南側では、東・西側が後の遺構によって失われているが、長さ 64 ｍにわたって調査区を東西に横断する SD2004 ～ SD2006 が検出されている。これらの溝は、ほぼ平行して直線的に掘られており、道路の側溝の可能性が高い。SD2005 と SD2006 は、ともに 13 世紀前葉から中葉にかけての溝であり、規模も近似している。両溝は道路の両側溝とみられ、道路幅は約７ｍとなっている。SD2004 は、13 世紀中葉から 14 世紀にかけての溝であり、道路の北側側溝にあたるものと推測される。道路は 13 世紀中葉に、平行する形で南側に移ったとみてよい。

井戸

合計３基確認されている。このうち、調査区北側の SE1001 では、井戸枠材と水溜に用いられた曲物が良好な状態で出土している。いずれも、河川 SR1001 が埋没した 13 世紀前葉以降に築かれたものと推定される。

祭祀関連遺構

祭祀に関連するとみられる遺構が３基確認されている。SX1004 は 13 世紀前半の遺構であり、土坑内から土師質土器皿が埋納された状態で出土している。SX1008 は 12 世紀の遺構である。土坑内に壷と山茶碗が横転した状態で出土しており、上方から大型の礫が落ち込んだ様子が確認されている。壷と山茶碗はセットで埋納されており、山茶碗は壷の蓋に用いられていた可能性が高い。SX1012 では、土坑内から完形の山茶碗（碗・小皿）や、箸などの木製品、スモモの種実が大量に出土している。また、土坑の上面では、土坑を覆い隠すようなかたちで置かれたヤマグワの枝が出土している。13 世紀前葉の遺構と推定される。

2　掘立柱建物

SH1001（図 258・261、図版 72）

調査区中央の西側に位置する。東側の SH1002 とは一部重複する位置関係にあるが、遺構の切り合い関係がなく、遺構の上から前後関係は判断できない。梁行 1 間・桁行 2 間の側柱建物で、南北の主軸が N−6°−E となる東西棟である。建物規模は梁行 4.2 m × 桁行 4.4 m と小型であり、正方形に近い建物である。桁行の柱間は、220 ㎝の等間である。

柱穴の内部に関する土層等の記録が残されていないため、柱痕跡の有無に関しては明らかでない。検出された柱穴は直径 28 ～ 42 ㎝の円形である。深さは 14 ～ 42 ㎝で、底部の高さは隅柱がやや深くなっている。隅柱に関しては、穴の規模も大きい。

遺物としては山茶碗が出土している。662 は山茶碗の小皿である。SP1026 から出土しており、Ⅲ－1 期のものである。このほかに、SP1031 と SP1043 からも破片が各 1 点出土している。いずれも渥美湖西産の製品である。これらの遺物から、SH1001 は 13 世紀中頃の建物と推定される。

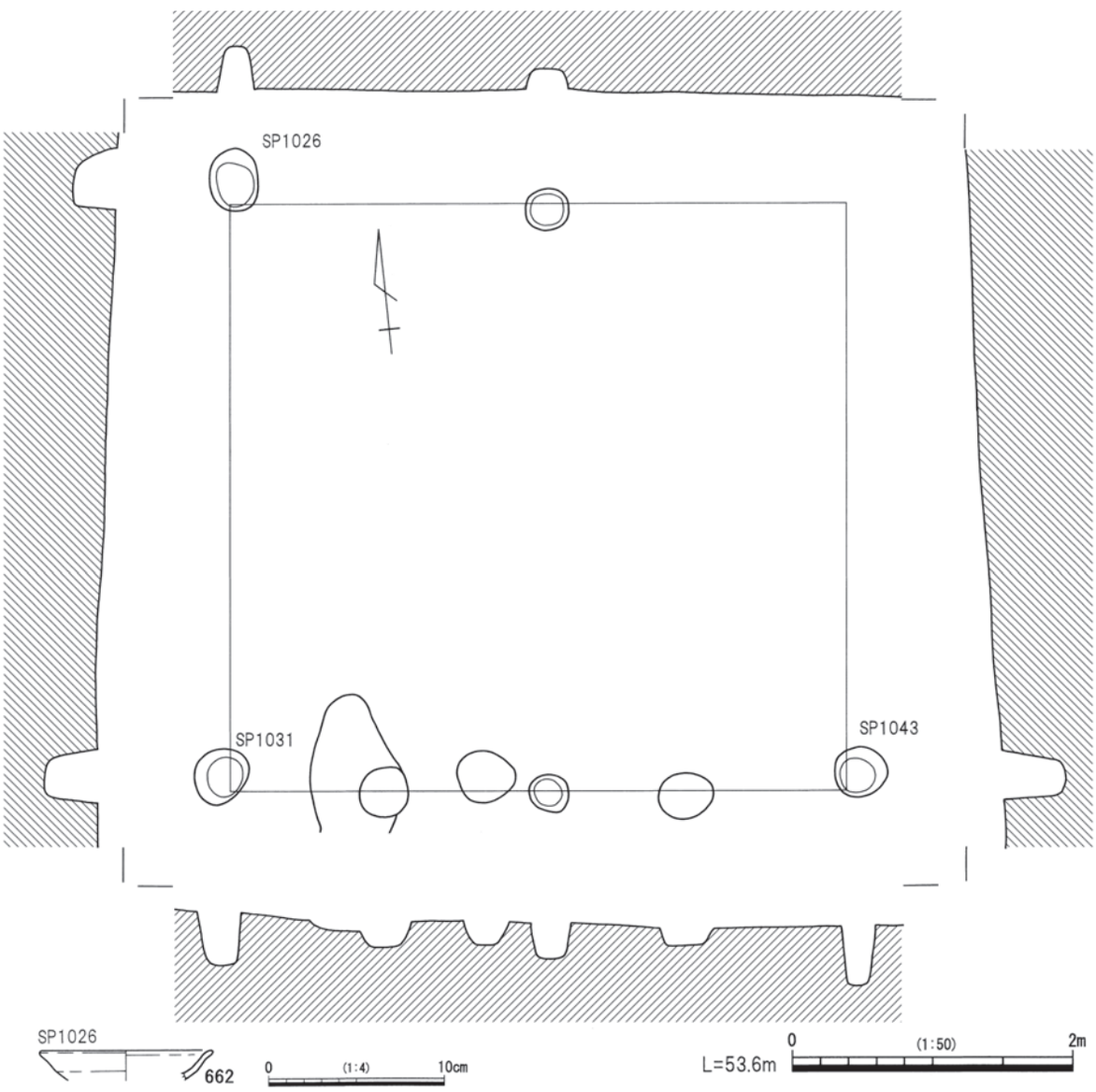


図 258　SH1001 実測図・出土遺物

SH1002（図 259・261、図版 72）

SH1001 の東側に一部重複して位置する。梁行２間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−8°−Ｅとなる南北棟である。建物規模は梁行 3.3 ｍ×桁行 6.0 ｍである。柱間は、梁行が西から 160 ＋ 170 ㎝、桁行は 200 ㎝の等間である。

いずれの柱穴でも柱痕跡は確認されていない。検出された柱穴は直径 24 ～ 32 ㎝の円形である。深さは 10 ～ 26 ㎝で、底部の高さは南側に向かって深くなる。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、寺海土遺跡で確認されている建物はいずれも中世前期の建物である。建物の主軸が SH1001 と近似していることから、この建物も中世前期の建物である可能性が高いと推測される。

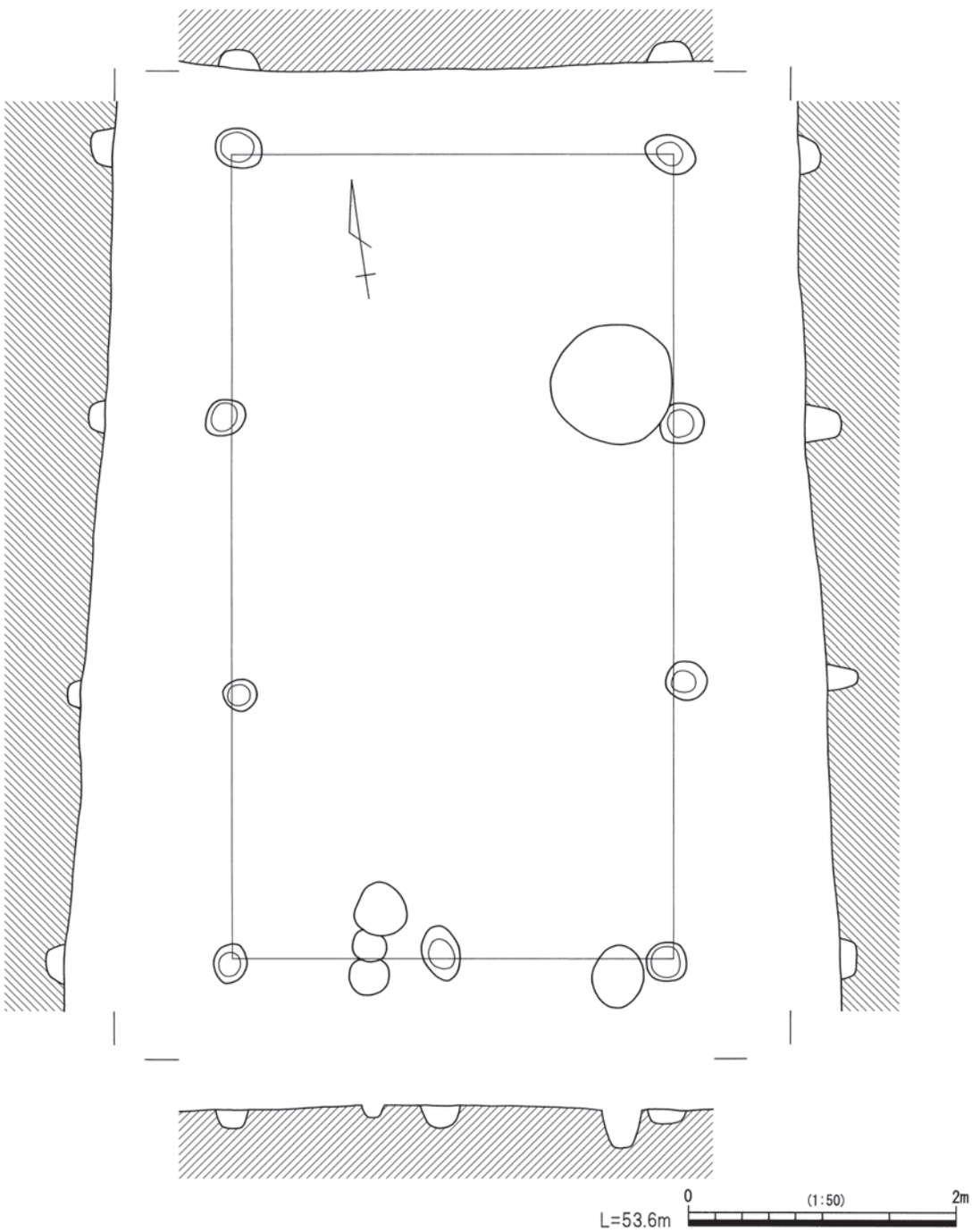


図 259　SH1002 実測図

SH1003（図 260・261、図版 72）

SH1002 の南側に位置し、一部重複する位置関係にある。SP1102 が SH1002 の柱穴に切られており、SH1002 に先行する建物であることが確認されている。一部未検出の柱穴もあるが、梁行 2 間・桁行 3 間の総柱建物と推定される。南北の主軸が N－12°－E となる東西棟である。建物規模は、梁行 4.1 m ×

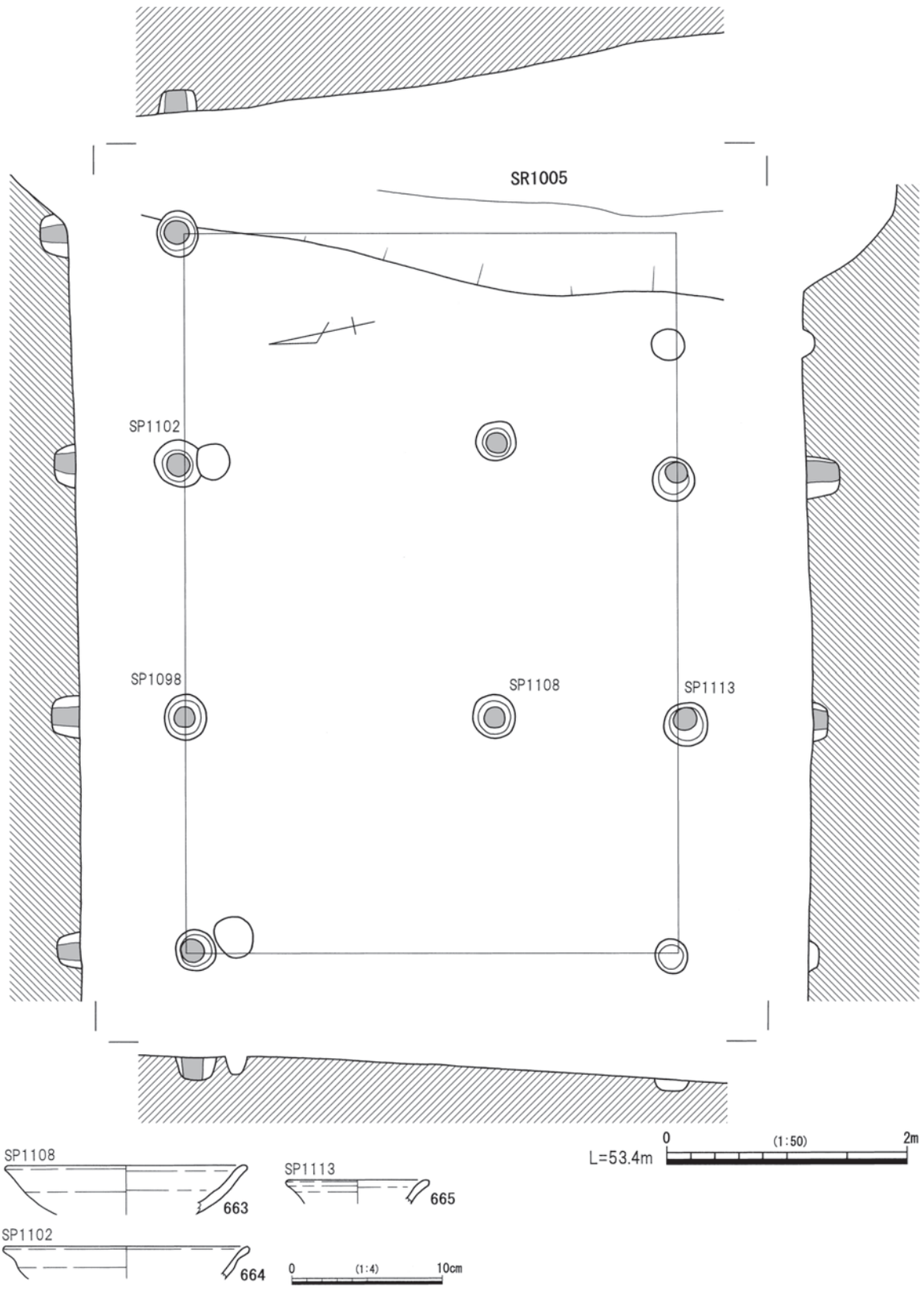


図 260　SH1003 実測図・出土遺物

桁行 6.0 ｍである。柱間は、梁行が北から 260 ＋ 150 ㎝、桁行は 200 ㎝の等間である。なお、東側の河川 SR1005 と重複する部分の柱穴が検出されていないが、埋土の色調が非常に近似していたことから、検出しきれなかった可能性が高く、切り合い関係を正確に示しているとは考えにくい。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 16 ～ 18 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 40 ㎝の円形である。深さは 12 ～ 28 ㎝で、根入れの高さは東側に向かって低くなる。

遺物としては、山茶碗が出土している。663 は柱穴 SP1108 から出土した山茶碗である。口縁部の破片で、Ⅱ期のものである。664 は柱穴 SP1102 の掘方から出土した山茶碗である。665 は柱穴 SP1113 から出土した山茶碗の小皿である。口縁部の破片で、Ⅲ－１期のものである。これらのほかに、柱穴 SP1098 からも山茶碗の小片が１点出土している。いずれも渥美湖西窯産の製品である。

これらの遺物から、SH1003 は 13 世紀中頃の建物と推定される。

SH1005（図 261・262、図版 62・72・88）

SH1003 の南東側に位置する。SH1003 とは重複する位置関係にあるが、柱穴の切り合い関係はなく、遺構の上からは前後関係が判断できない。梁行１間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸が N－14°－W となる東西棟である。建物規模は、梁行 4.2 ｍ×桁行 7.5 ｍである。桁行の柱間は、西から 240 ＋ 240 ＋ 270 ㎝と、ややばらつきがある。なお、一部の柱穴が、河川 SR1005 によって失われているように図化されているが、SH1003 と同様に切り合い関係を正確に示しているとは考えにくい。

柱痕跡は２ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模はいずれも直径 18 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ㎝と 40 ㎝の円形である。深さは 22 ㎝と 24 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

遺物は、山茶碗と土師質土器が出土している。666 は抜き取り穴 SP1104 から出土した山茶碗である。渥美湖西産の製品で、Ⅱ期のものである。底部外面には、「＊」のような記号が墨書されている。667

図 261　SH1001 ～ 1005・2001 配置図

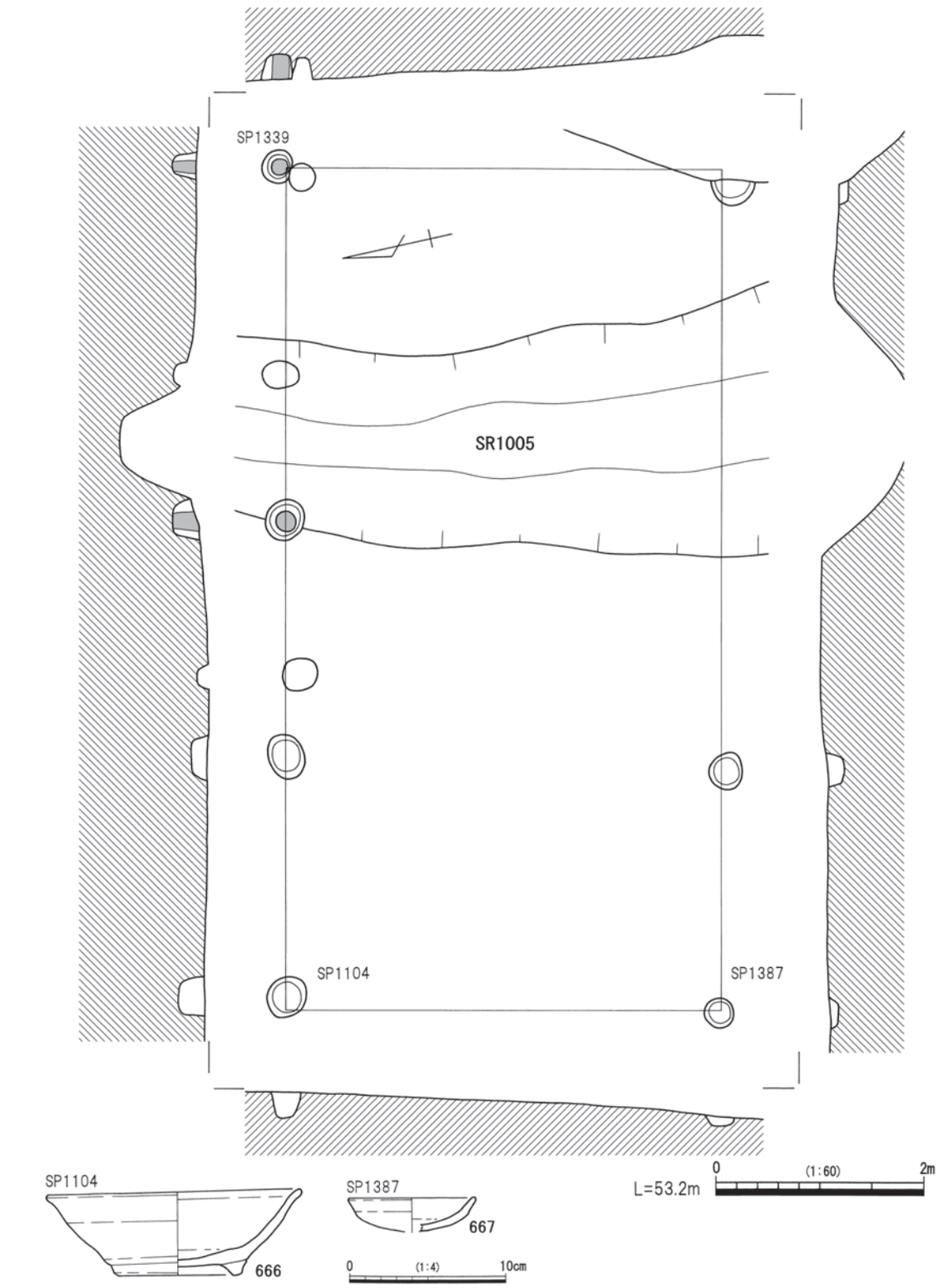


図 262　SH1005 実測図・出土遺物

は抜き取り穴 SP1387 から出土した土師質土器皿である。小皿であり、口縁部には強いナデ調整が施されている。SP1387 からはこのほかに土師質土器の破片が 4 点出土している。また、柱穴 SP1339 の掘方からは、山茶碗の破片が 1 点出土している。

これらの遺物から、建物の廃絶時期は 13 世紀代であると推定される。

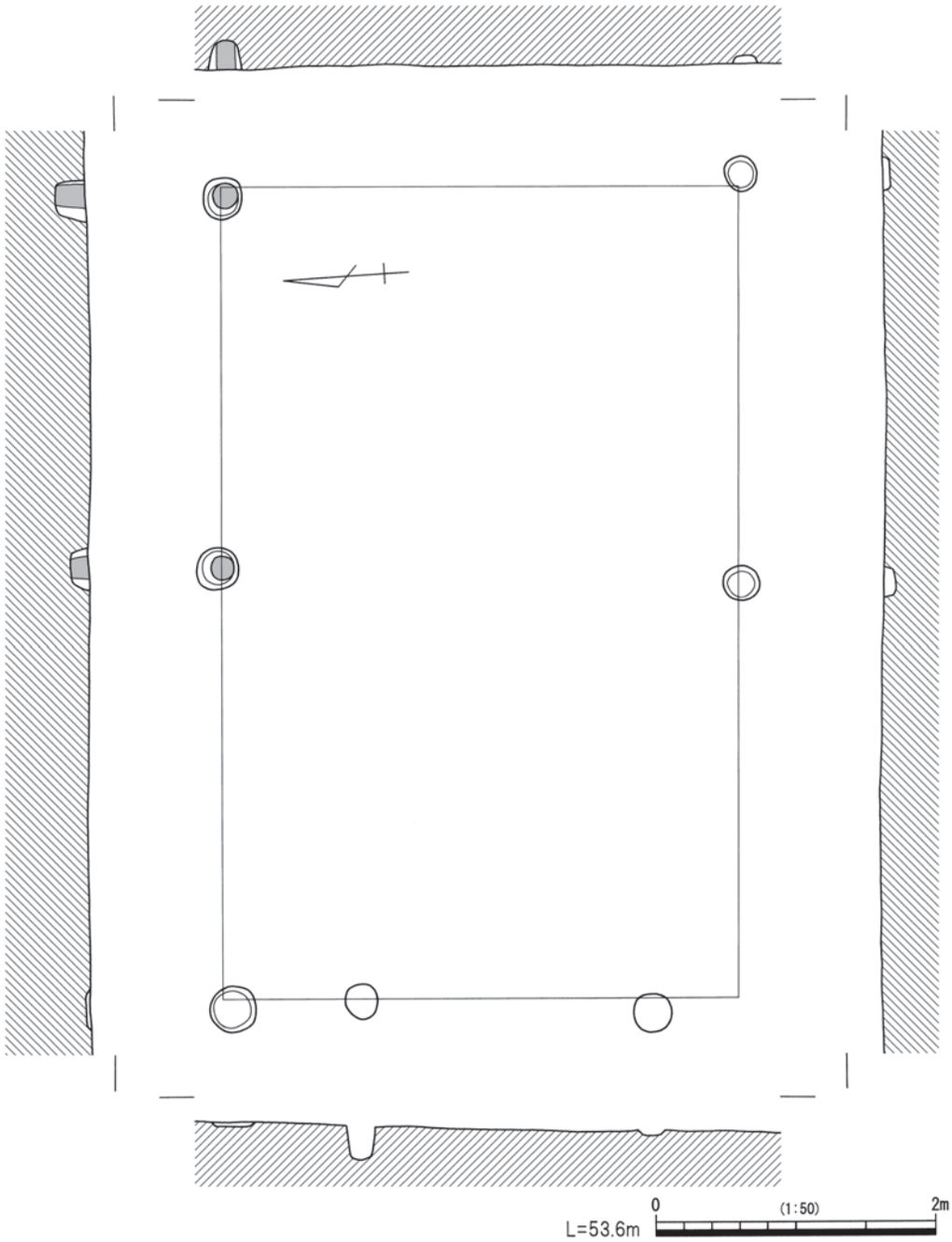


図 263　SH1006 実測図

SH1006（図 263・265）

SH1005 から約 18 m北東に位置する。梁行 1 間・桁行 2 間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−4°−Ｅとなる南北棟である。建物規模は、梁行 3.7 m×桁行 5.8 mである。桁行の柱間は、南から 300 + 280 ㎝とやや広い。

柱痕跡は 2 ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ㎝と 16 ㎝で、柱穴掘方は直径 26 ㎝と 30 ㎝の円形である。深さは 20 ㎝と 12 ㎝で、根入れの高さは東側がやや低くなっている。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明ではあるが、寺海土遺跡で確認されている建物はいずれも中世前期の建物である。建物の主軸が隣接する SH1007 と近似していることから、この建物も 13 世紀代の建物である可能性が高い。

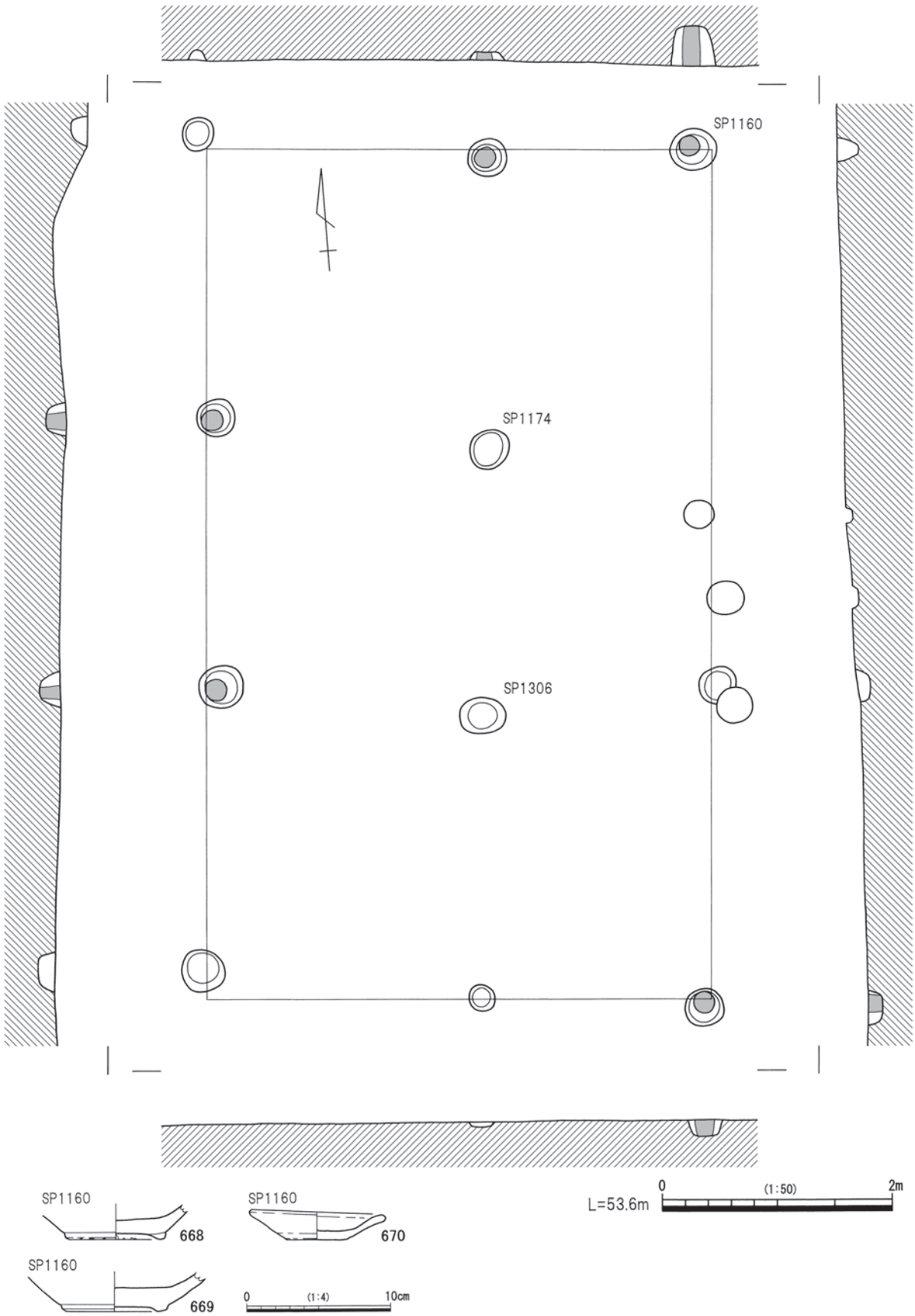


図 264　SH1007 実測図・出土遺物

SH1007（図 264・265、図版 62・88）

SH1006 から約２ｍ東に位置する。梁行２間・桁行３間の総柱建物で、南北の主軸がＮ−4°−Ｅとなる南北棟である。建物規模は、梁行 4.4 ｍ×桁行 7.4 ｍである。柱間は、梁行が西から 240 ＋ 200 ㎝、桁行が南から 270 ＋ 230 ＋ 240 ㎝と、ばらつきがある。建物内部にも柱列が確認される。規模や深さが側柱と同様であることから、屋内棟持柱の可能性が高いと推測される。

柱痕跡は５ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 32 ～ 40 ㎝の円形である。深さは８～ 34 ㎝で、根入れの高さは南側に向かって低くなる。

遺物は比較的多く出土している。668 ～ 670 は、柱穴 SP1160 から出土した山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅲ－１期のものである。670 の小皿は、柱痕跡に沿って立った状態で掘方から出土している。SP1160 からは、土師質土器皿の破片も１点出土している。SP1160 以外では、抜き取り穴 SP1174 から山茶碗の破片が２点、抜き取り穴 SP1306 から山茶碗が１点出土している。

これらの遺物から、SH1007 は 13 世紀中頃に建造された建物と推定される。

SH2001（図 261・266）

調査区西側の、SH1005 から約 10 ｍ南西に位置する。梁行２間・桁行３間の側柱建物で、南北の主軸がＮ−7°−Ｅとなる南北棟である。建物規模は、梁行 4.7 ｍ×桁行 7.8 ｍである。柱間は、梁行が西から 200 ＋ 270 ㎝で、桁行は西側が 260 ㎝の等間、東側が南から 240 ＋ 290 ＋ 250 ㎝とややばらつきがある。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ～ 20 ㎝で、柱穴掘方は直径 36 ～ 42 ㎝の円形である。深さは 16 ～ 22 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。北西の隅柱では、根石が確認されている。調査所見によると、抜き取り穴 SP2004 は溝 SD2005 を切っていたようである。

遺物は比較的多く出土している。671 は土師質土器皿である。厚手のつくりで、強いナデ調整が施されている。672 は小型の碗形滓である。いずれも、抜き取り穴 SP2004 から出土している。このほかに、

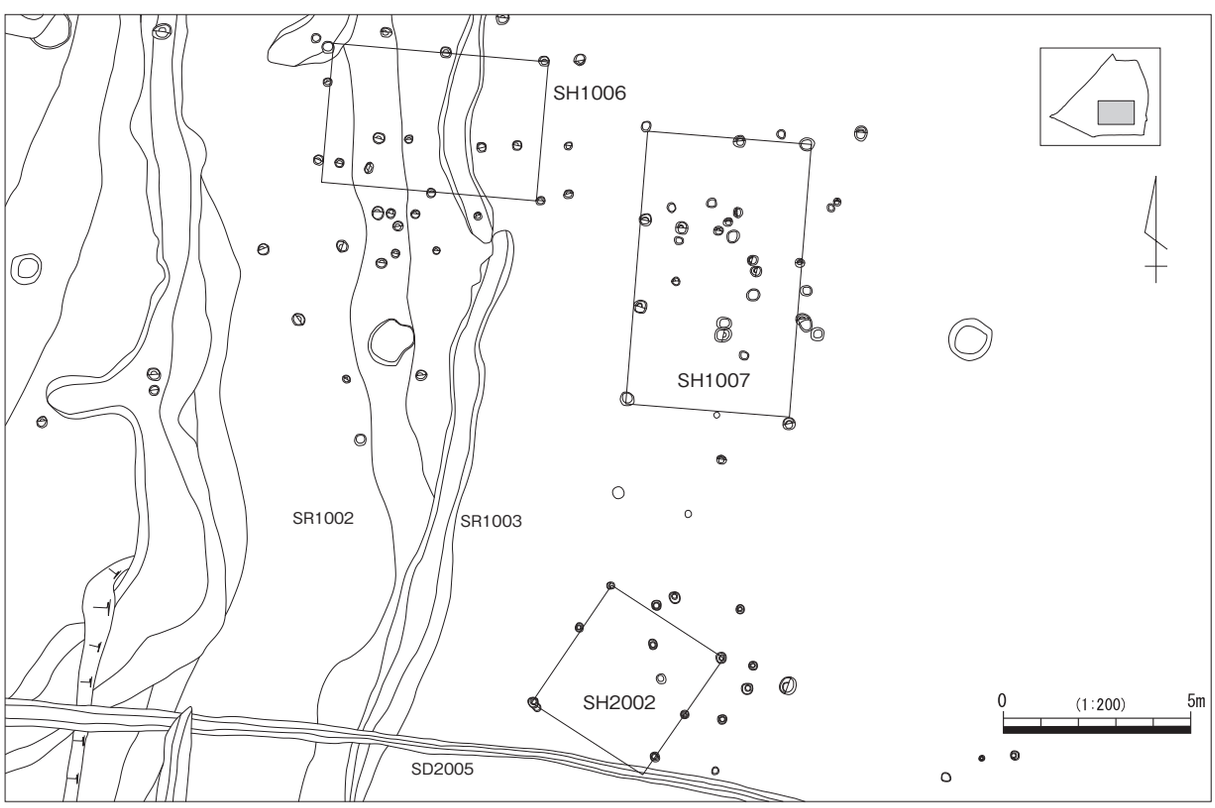


図 265　SH1006・1007・2002 配置図

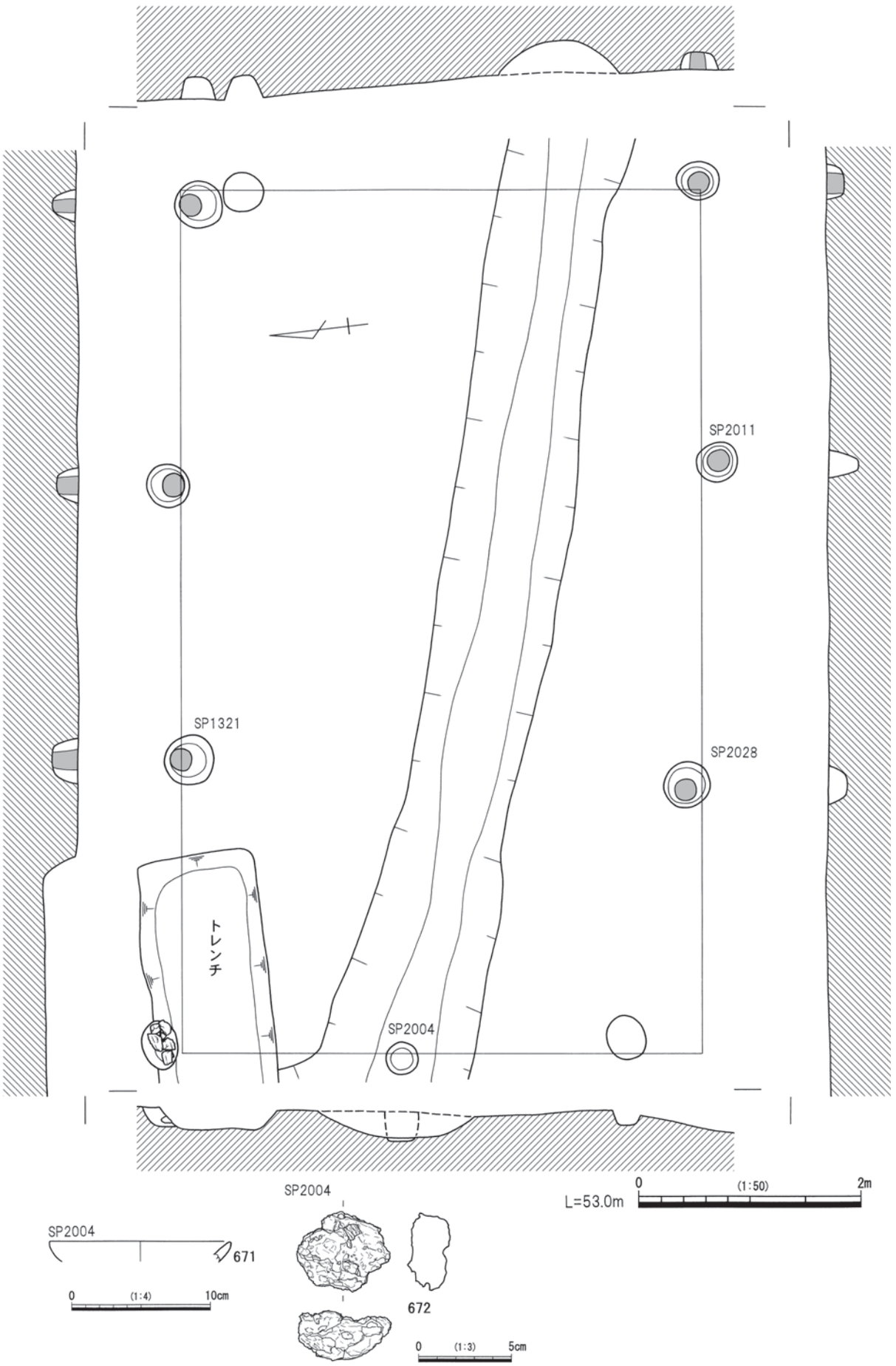


図 266　SH2001 実測図・出土遺物

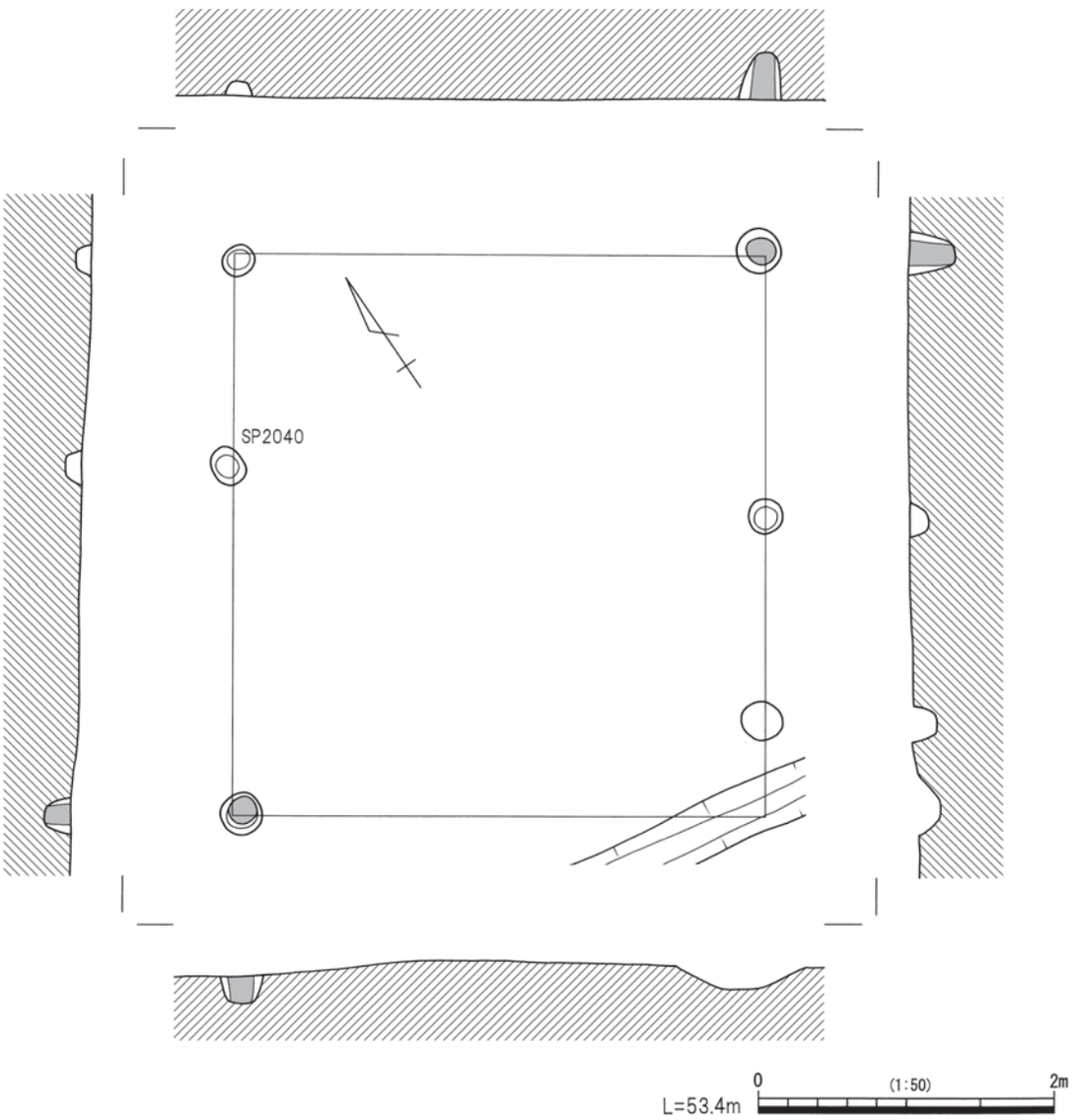


図 267　SH2002 実測図

柱穴 SP1321 からは山茶碗が１点、柱穴 SP2011・2028 からは甕などの土師器片が出土している。

これらの遺物に加え、柱穴 SP2004 が溝 SD2005 を切っていたとされていることから、SD2005 が埋没した 13 世紀中葉以降に建造された建物と推定される。

SH2002（図 265・267）

調査区東側の、SH1007 から約７ｍ南に位置する。梁行１間・桁行２間の側柱建物で、南北の主軸がＮ－34°－Ｅとなる南北棟である。建物規模は、梁行 3.6 ｍ×桁行 3.8 ｍと小型である。桁行の柱間は、西側が南から 240 ＋ 140 ㎝、東側が 200 ＋ 180 ㎝とばらつきがある。なお、溝 SD2005 と重複する位置にあたる隅柱が確認されていないが、溝との切り合い関係は不明である。

柱痕跡は２ヶ所の柱穴で確認されている。柱痕跡の規模は直径 18 ㎝と 23 ㎝で、柱穴掘方は直径 25 ㎝と 28 ㎝の円形である。深さは 18 ㎝と 30 ㎝で、根入れの高さは、南側に向かって低くなる。

遺物としては、抜き取り穴 SP2040 から土師質土器皿が１点出土しているのみである。図化できない細片ではあるが、中世前期のものと推測される。

遺物が１点のみのため、建物の詳細な年代は不明であるが、中世前期の建物である可能性が高い。

3　小穴

混入品と考えられる古代のものを除き、小穴から出土している遺物は、いずれも中世前期のものである。寺海土遺跡では中世前期を中心とする時期に建物が展開したと推定される。

1区（図 268、図版 88）

673 ～ 693 は、渥美湖西産の山茶碗である。673 ～ 679 は碗、690 ～ 693 は小皿であり、Ⅰ－２期からⅢ－１期のものである。690 の底部外面には、「山」のような形の記号が墨書されている。695 ～ 697 は土師質土器皿である。695 と 696 はロクロ成形、697 は手づくね成形のものである。699 は丸瓦である。凹凸面に離れ砂が付着し、凹面には吊り紐痕が残る。

2区（図 268、図版 88・100）

680 ～ 689・694 は、渥美湖西産の山茶碗である。680 ～ 689 は碗、694 は小皿であり、Ⅰ－２期からⅢ－１期のものである。698 は土師質土器皿である。２区の小穴からは、須恵器や土師器などの古代の遺物も出土している。

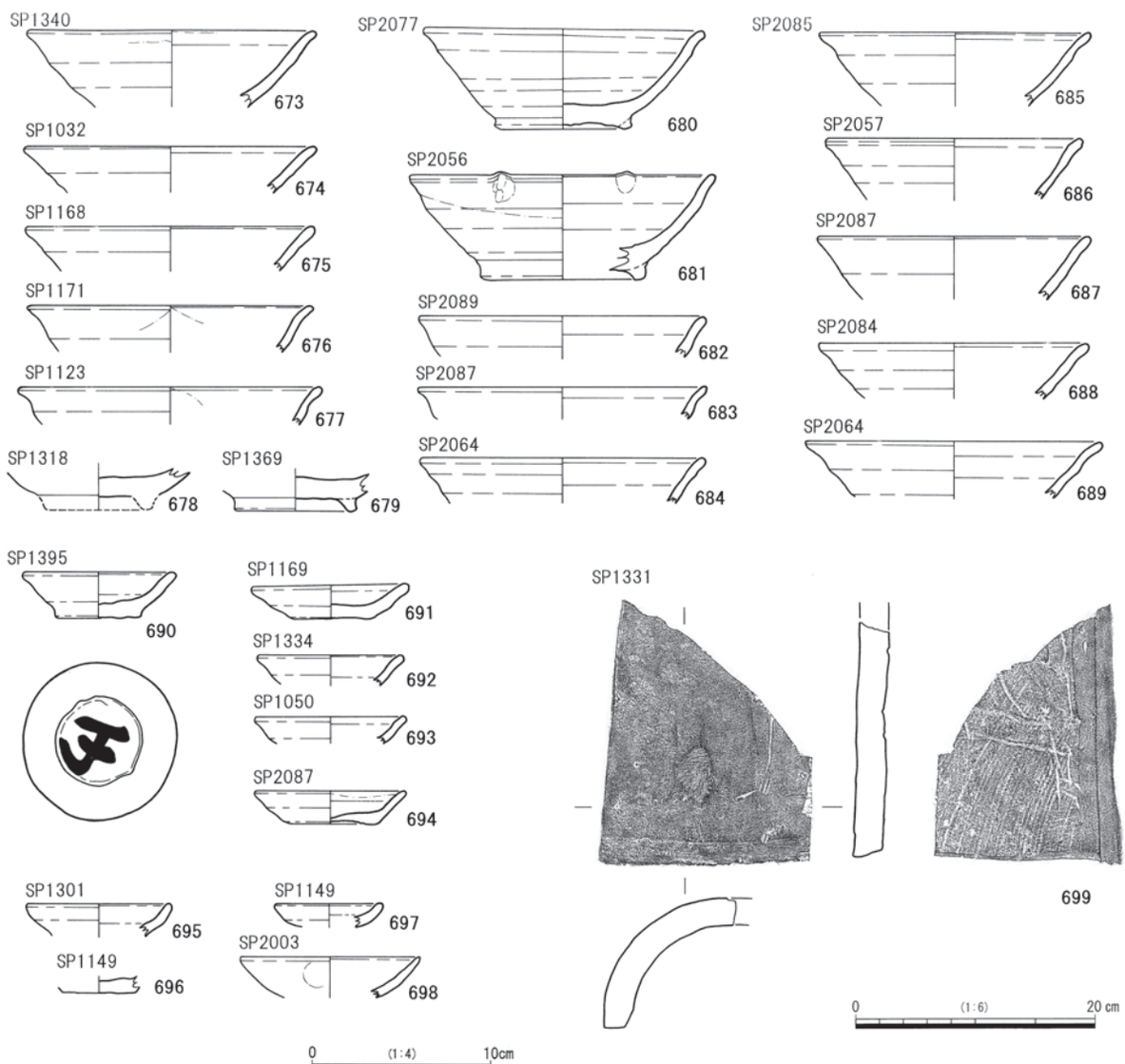


図 268　小穴出土遺物

４　河川

SR1001（図 269・270・271、図版 51・73）

調査区のほぼ中央には、北東から南西に向かってやや蛇行しながら流れる河川が確認されている。河川は流路によって SR1001 ～ 1008 に分けられるが、１つの河川として調査が進められたこともあり、どの流路に属するものか不確かな遺物も多い。以下、SR1008 まで図示する遺物は、出土位置が明確であるなど、各流路に分離できた遺物である。

SR1001 は、西側を流れる流路である。土層の切り合いから、SR1002 より新しく、SR1004・1005・1006 よりも古い流れであることが確かめられている。場所によって異なるが、幅４～８ｍ・深さ 15 ～ 50 ㎝の規模で検出されている。

図 269　SR1001 ～ 1008 実測図

遺物としては、山茶碗や土師質土器が出土している。700 ～ 717 は、渥美湖西産の山茶碗である。700 ～ 703 は口縁部の破片で、700 はⅠ－１期、702 はⅡ期のものである。704 ～ 715 は高台部の破片である。704・705 はⅠ－１期、706 はⅠ－２期、707 ～ 711 はⅡ期、712 ～ 717 はⅢ－１期のものである。706・710・715 には、内面に煤が付着している。718 ～ 727 は小碗または小皿で、いずれも渥美湖西産の製品である。719 は小碗で、Ⅰ－２期のものである。718･720 ～ 727 は小皿であり、721 と 722 がⅡ期、そのほかはⅢ－１期のものである。734 は白磁の碗の破片である。728 ～ 733・735 は土師質土器皿である。728 ～ 732 は手づくね成形で、坏形の形状のものである。いずれも、口縁部には強いナデ調整が施されている。733 と 735 はロクロ成形で、735 は小型の皿、733 は碗形の形状になるものである。

これらの遺物から、SR1001 は 13 世紀前葉までにはほぼ埋没していたものと推定される。

SR1002（図 269・270・271、図版 51・73）

SR1001 の東側を流れている。土層の切り合いから、SR1001 ～ 1008 の中では最も古い流れであることが確認されている。なお、調査では、検出面から 130 ㎝程の深さまで、砂や礫などの河川堆積物が存在することを確認している。ただし、これらの層からは遺物が出土しておらず、遺物が出土するのは SR1002 以降の流れである。やや場所によって異なるが、幅５～７ｍ・深さ 30 ～ 60 ㎝の規模で検出されている。SR1001 と同程度の大規模な河川である。

遺物としては、山茶碗や片口鉢、土師質土器などが出土している。736 ～ 794 は、渥美湖西産の山茶碗である。736 ～ 741 は口縁部の破片で、736 はⅠ－１期、738 はⅡ期のものである。742 ～ 744 は高台部の破片で、いずれもⅡ期のものである。745 は小皿の口縁部である。746 は渥美湖西産の片口鉢で、Ⅰ期のものである。747 ～ 751 は土師質土器皿である。747 ～ 750 はロクロ成形によるもので、747 と 749 は大型で碗形の形状となるもの、748 と 750 は小型の皿である。751 は手づくね成形で、表面の磨滅が著しいが、口縁部にはナデ調整が確認できる。

遺構の規模に比べて掲載した遺物は少ないが、SR1002 に伴う可能性のある遺物は大量に出土している。しかしながら、SR1003 と流路の大部分が重なっているため、確実に SR1002 に伴うものを抽出した結果、非常に限られた遺物となってしまった。本来は、掲載した遺物よりも遙かに多くの遺物が含まれていたものと推測される。

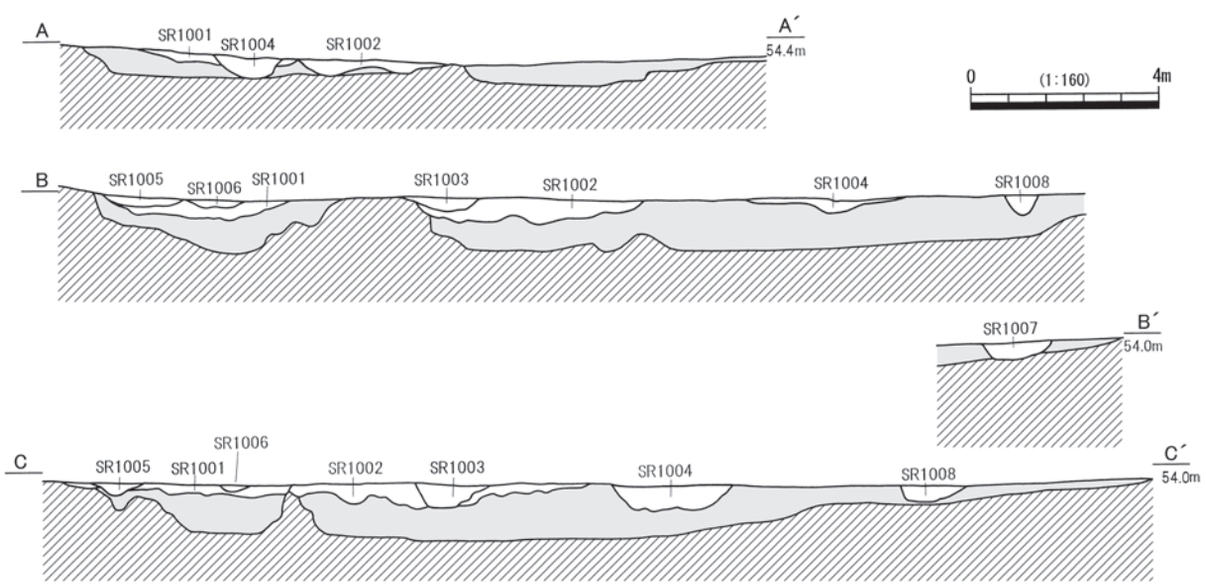


図 270　SR1001 ～ 1008 土層断面図

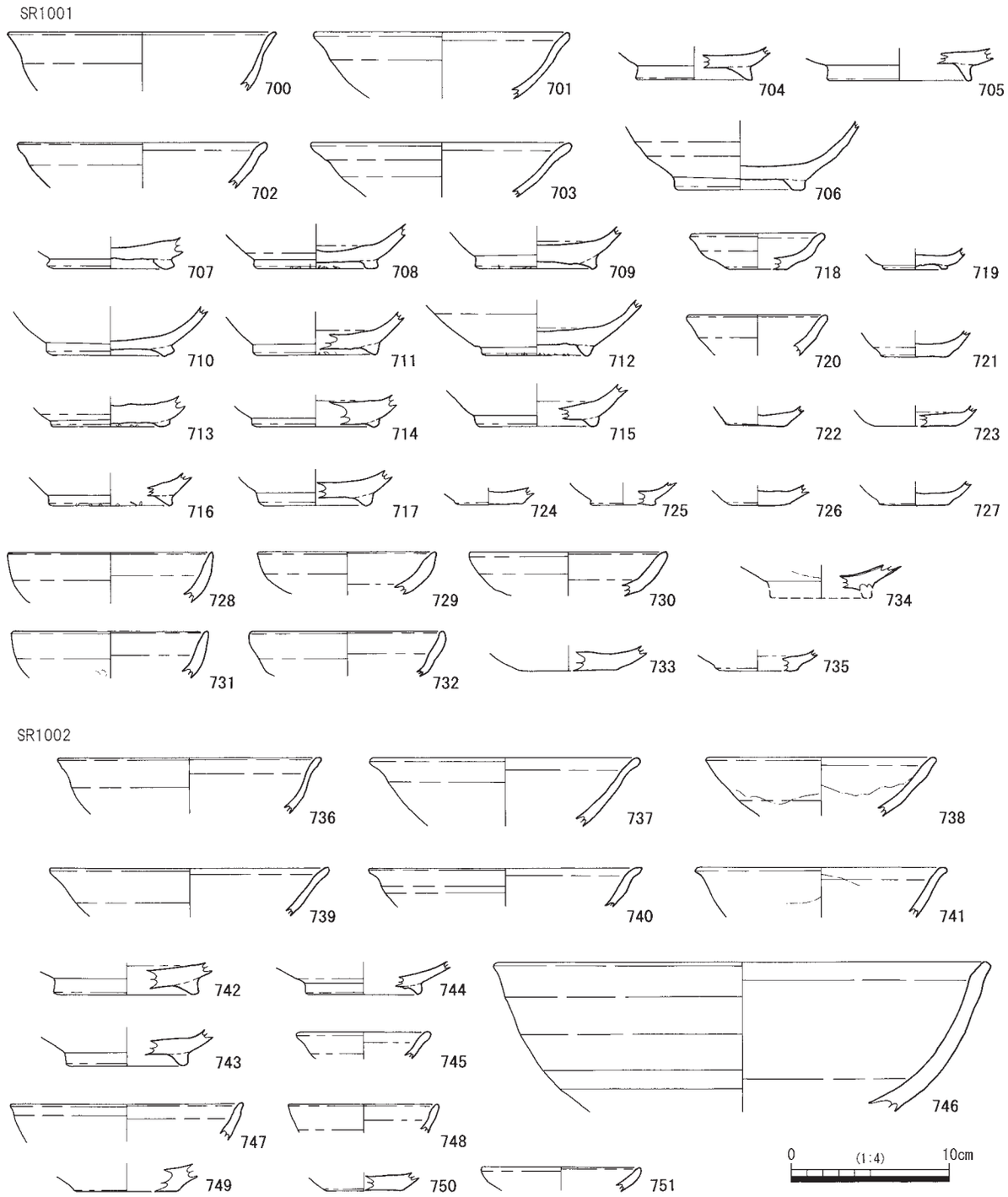


図 271　SR1001・1002 出土遺物

これらの遺物から、SR1002 は 13 世紀の初頭までには、ほぼ埋没していたものと推定される。流路は西側の SR1001 に移ったものとみてよい。

SR1003（図 269・270・272、図版 51・73・89）

SR1002 に沿うように流れる流路である。土層の切り合いから、SR1002 よりも新しい流れであることが確認されている。北側で SR1004 と連結しており、SR1004 とはほぼ同時期の流れである可能性が高い。幅１～３ｍ・深さ 30 ～ 60 ㎝の規模で検出されている。深さは SR1002 とさほど変わらないが、幅は極

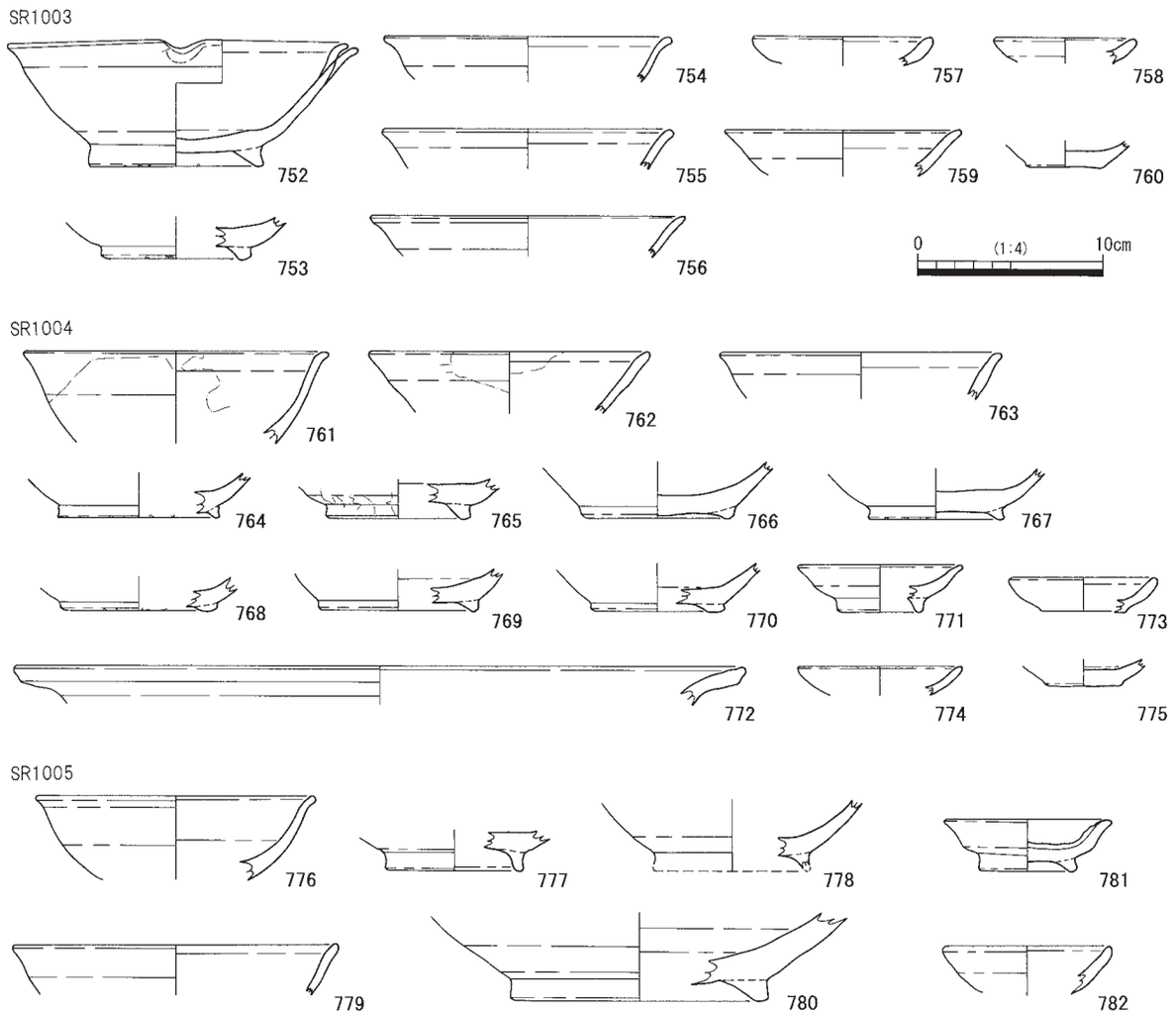


図 272　SR1003 ～ 1005 出土遺物

端に狭くなっており、水量の減少が明らかにみてとれる。

遺物としては、山茶碗や土師質土器が出土している。752 は渥美湖西産の片口碗である。ほぼ完形で出土している。753 ～ 756 は渥美湖西産の山茶碗である。口縁部のみのものは時期の特定が難しいが、753 はⅠ－２期のものである。760 は山茶碗の小皿である。渥美湖西産の製品で、Ⅱ期のものである。757 ～ 759 は土師質土器皿である。757 と 758 は手づくね成形のものであり、厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が施されている。759 はロクロ成形で、碗形の形状のものである。

遺物は SR1002 と同様の年代であるが、これらの遺物は SR1002 の埋土から流れ込んだものであろう。先述のように、明らかに SR1002 よりも後出する流れであり、SR1004 とは同時期の流路と推測される。SR1004 と同様に、13 世紀の前葉から中頃に形成された流路であろう。

SR1004（図 269・270・272、図版 55・73）

SR1003 の東側を流れており、北側で SR1003 が接続している。土層から、SR1001 と SR1002 より新しい流れであることが確認されている。南側は徐々に浅くなり、確認できなくなる。方向からみて、SR1003 と再度接続していた可能性もある。幅は１～ 2.5 ｍで、深さは場所によって異なるが、深い所で 50 ㎝程である。SR1003 とほぼ同規模の小規模な流れである。

遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。761 ～ 770 は渥美湖西窯産の山茶碗である。761 と 762 はⅠ－２期、764 と 765 はⅡ期、766 ～ 770 はⅢ－Ⅰ期のものである。768 の内面には煤が付着しており、770 には被熱の痕跡が確認される。771 は山茶碗の小碗である。渥美湖西窯産の製品で、Ⅰ－２期のものである。772 は甕の口縁部の破片である。773 ～ 775 はロクロ成形の土師質土器皿である。

遺物の内容は、SR1001 とほぼ同様であるが、土層の切り合いからは SR1004 の方が新しいことが確認されている。SR1001 の大半が埋没した段階で、豪雨等により形成された流路であろう。年代としては、SR1001 の埋没時期と近い、13 世紀前葉から中頃にかけての時期と推定される。

SR1005（図 269・270・272、図版 55・73・89）

SR1001 の西側を流れる流路である。土層の切り合いから、SR1001 よりも新しい流れであることが確認されている。幅 1.2 ～ 3 m・深さ 20 ～ 30 ㎝の規模で検出されている。下流では幅が広く深さも増す。

遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。776 ～ 781 は、渥美湖西産の山茶碗である。776 ～ 779 は碗であり、777 はⅠ－１期、778 はⅠ－２期のものである。781 は小碗で、内面には漆が付着している。Ⅰ－２期のものである。780 は渥美湖西産の片口鉢である。782 は土師質土器皿である。手づくね成形で、口縁部には強いナデ調整が施されている。

遺物は 12 世紀のものであるが、前述のように土層から SR1001 よりも新しい流れであることは明らかである。規模などからみて、SR1003・1004 と同様の経緯で形成された流路の可能性が高い。新しい遺物が出土していないことから、年代も同じ頃とみてよいであろう。

SR1006（図 269・270・273、図版 52・73・88・89・99）

SR1001 に沿うように上層を流れている流路である。土層の切り合いから、SR1001 よりも新しい流れであることが確認されている。幅は１～ 1.5 m、深さは 10 ～ 15 ㎝と小規模である。北側は徐々に浅くなり、調査区の北端では確認できなくなる。

遺物としては、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。なお、他に比べて図示した遺物が多いが、これは遺物の出土した場所がポイントで記録されており、この遺構に伴う遺物の認定が容易であったためであり、他の河川と比べて著しく多いわけではない。783 ～ 819 は山茶碗で、東遠江産の 796 を除きほかはすべて渥美湖西産である。783 ～ 809 は碗であり、Ⅰ－２期からⅢ－２期のものまで確認できる。810 と 812 は小碗、811・813 ～ 819 は小皿である。Ⅰ－２期からⅢ－１期のものまで確認できる。811 には高台部に「M」のような記号が墨書されている。820 ～ 825 は土師質土器皿である。820 ～ 823 は手づくね成形のもので、いずれも口縁部には強いナデ調整が施されている。824 と 825 はロクロ成形のものである。826 は渥美湖西産の片口鉢で、827 と 830 は甕である。826 と 830 は被熱しており、断面も含めて全体が煤けている。828 は青磁、829 は白磁の碗である。

これらの出土遺物と SR1001 の年代などから、SR1006 は 13 世紀中頃の流路であると推定される。

SR1007（図 269・270）

SR1008 の東側に、ほぼ沿うような形で流れる流路である。調査区の北東部に、約 17 m の長さで検出されている。幅は 1.3 m で、深さは最も深い部分で 40 ㎝程である。

他の流路との切り合いがなく、遺物も出土していないため詳細な年代は不明であるが、規模からみて SR1003 ～ 1008 とほぼ同様の時期の流路と推定される。おそらくは、13 世紀前葉から中頃に形成された流路であろう。

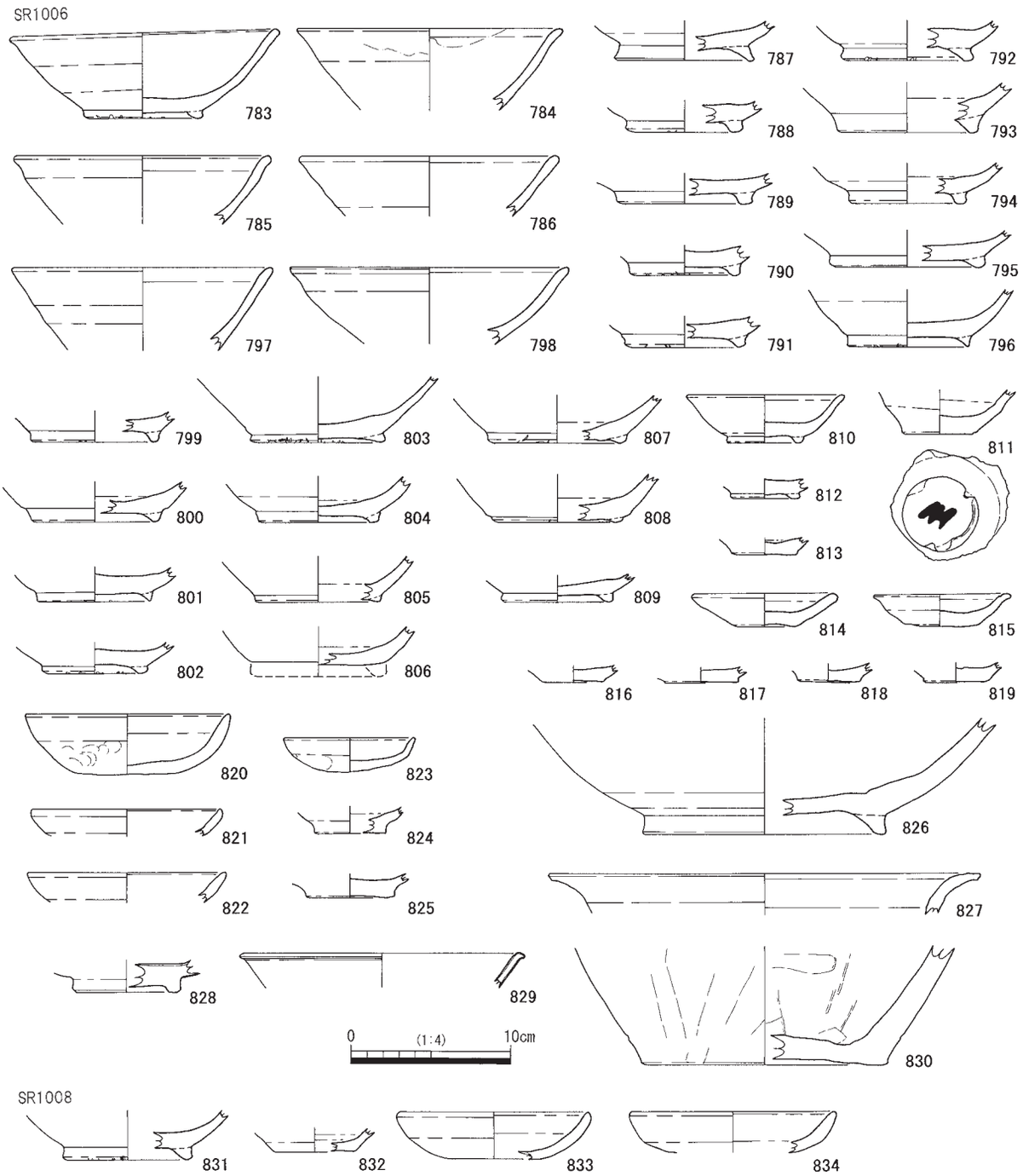


図 273　SR1006・1008 出土遺物

SR1008（図 269・270・273）

SR1004 と SR1007 の中間に、両者にほぼ平行する形で流れている。幅 0.5 ～ 1 m・深さ 30 ～ 50 ㎝の規模で検出されている。

遺物は少ないが、山茶碗や土師質土器などが出土している。831 と 832 は、渥美湖西産の山茶碗である。833 と 834 は土師質土器皿である。いずれも厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が施されている。遺物が乏しく詳細な年代は不明であるが、平行して流れる SR1004 や 1007 と近い時期の流路とみてよいであろう。

SR2002（図 274・275、図版 53・88・89）

調査区の南東隅で検出されている河川である。北東から南西に向かって流れる。上面および北側には SR2003 と SR2004 が重複しており、土層の切り合いから最も古い流れであることが確かめられている。検出面からの深さは 1.1 ｍで、全体の形状はつかめないが、幅は 8.5 ｍ以上の規模となる。溝 SD2004

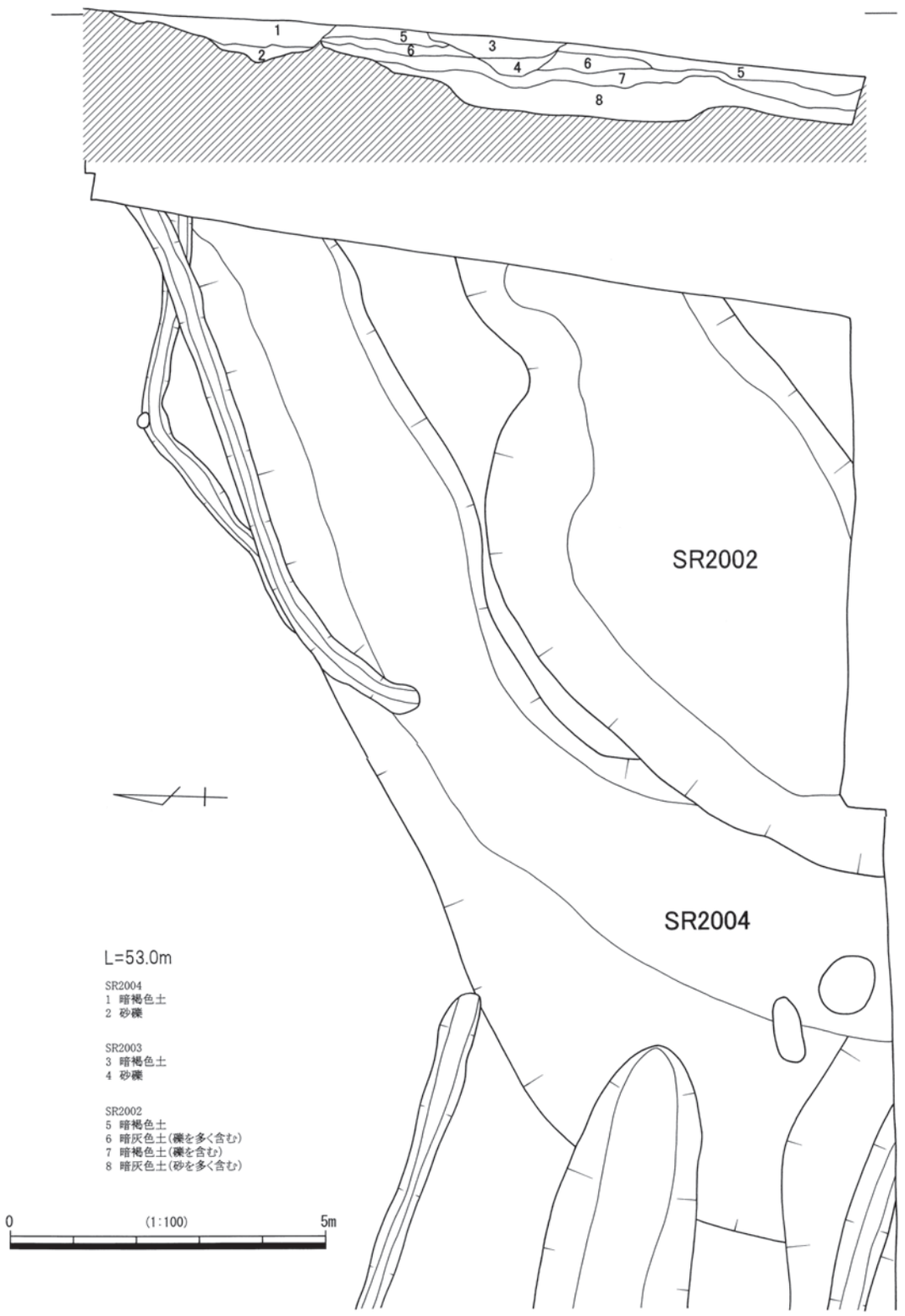


図 274　SR2002 ～ 2004 実測図

～ 2006 を切っており、明らかにこれらの溝よりも後出する遺構である。

遺物としては、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。835 ～ 872 は、渥美湖西産の山茶碗である。835 ～ 866 は碗であり、Ⅰ－１期からⅢ－２期のものまで確認できる。836・846・853 には、被熱の痕跡が認められ、断面にまで煤が付着している。859・864・865 は焼成不良のもので、土師質の焼きとなっている。867 は小碗で、Ⅰ－２期のものである。868 ～ 872 は小皿であり、868 はⅡ期、そのほかはⅢ－Ⅰ期のものである。873 ～ 882 は土師質土器皿である。873 ～ 875 は手づくね成形のものである。874 と 875 は小型のものであり、口縁部には強いナデ調整が認められる。876 ～ 882 はロクロ成形のものである。876 ～ 879 は小型の皿、881 と 882 は碗形となるものである。873 と 880 は技法や形状などがやや異質である。873 は厚手のつくりで、口縁部にはナデ調整が施されていない。中世後

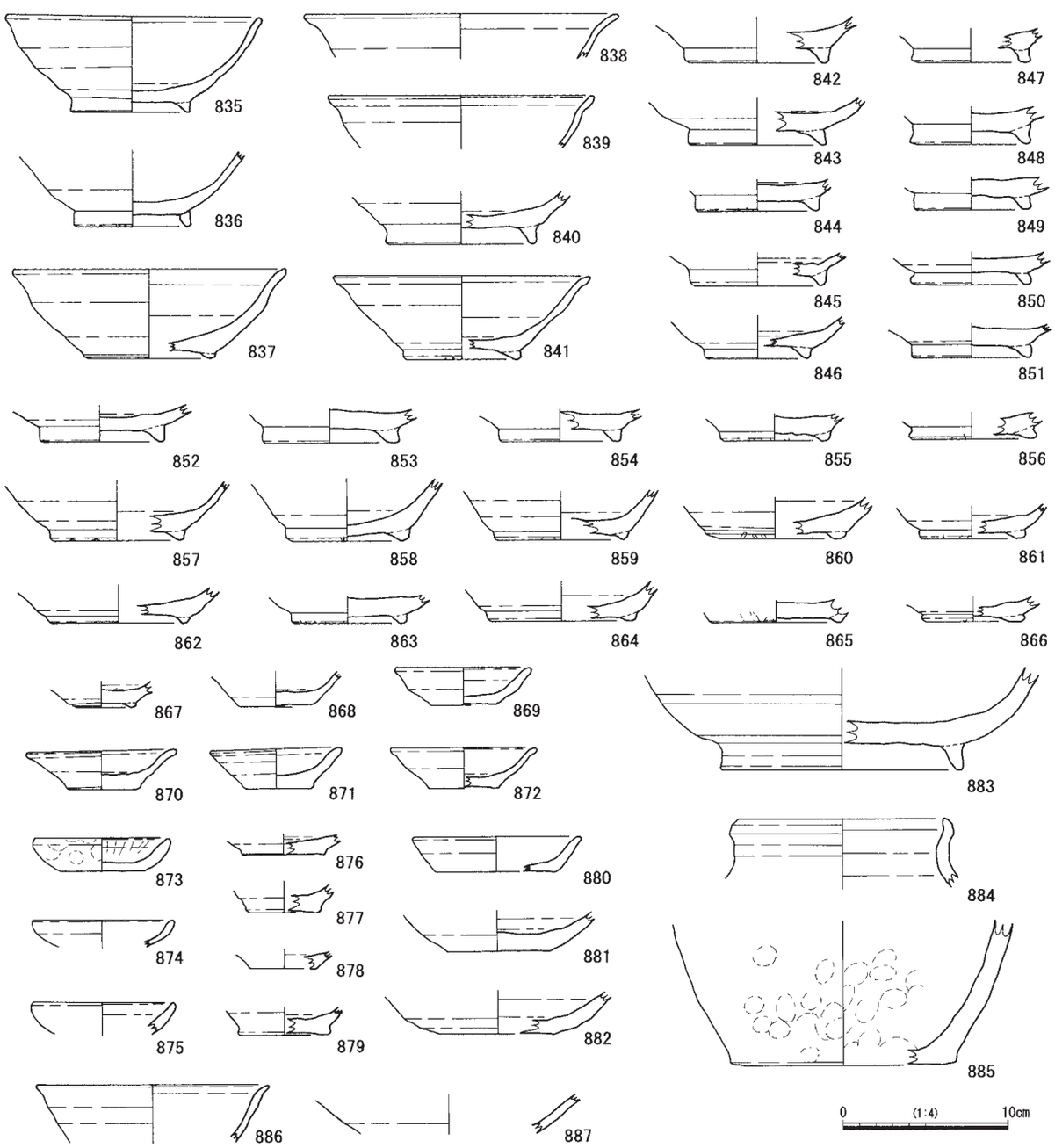


図 275　SR2002 出土遺物

期以降のものとみてよい。880 は箱形に近い形状で、湖西地域で確認される 17 世紀のものである。883 は渥美湖西産の片口鉢である。884 と 885 は壷であり、884 は渥美湖西産、885 は常滑産のものである。886 と 887 は貿易陶磁で、886 は青磁碗、887 は白磁碗である。

出土している遺物は、一部を除き 13 世紀後半までのものである。ただし、切り合い関係では、13 世紀後半以降の溝とみられる SD2004 ～ 2006 よりも、明らかに後出する遺構である。873 や 880 などわずかではあるが、中世後期～近世の遺物が認められることから、この頃の流路と推定される。多量に出土している中世前期の遺物は、周辺から流入したものであろう。

SR2003（図 274・276、図版 54・74・89・97）

SR2001 の上層に位置し、SR2001 の埋没後に形成された流れである。幅２ｍ・深さ 0.6 ｍの規模で検出されている。

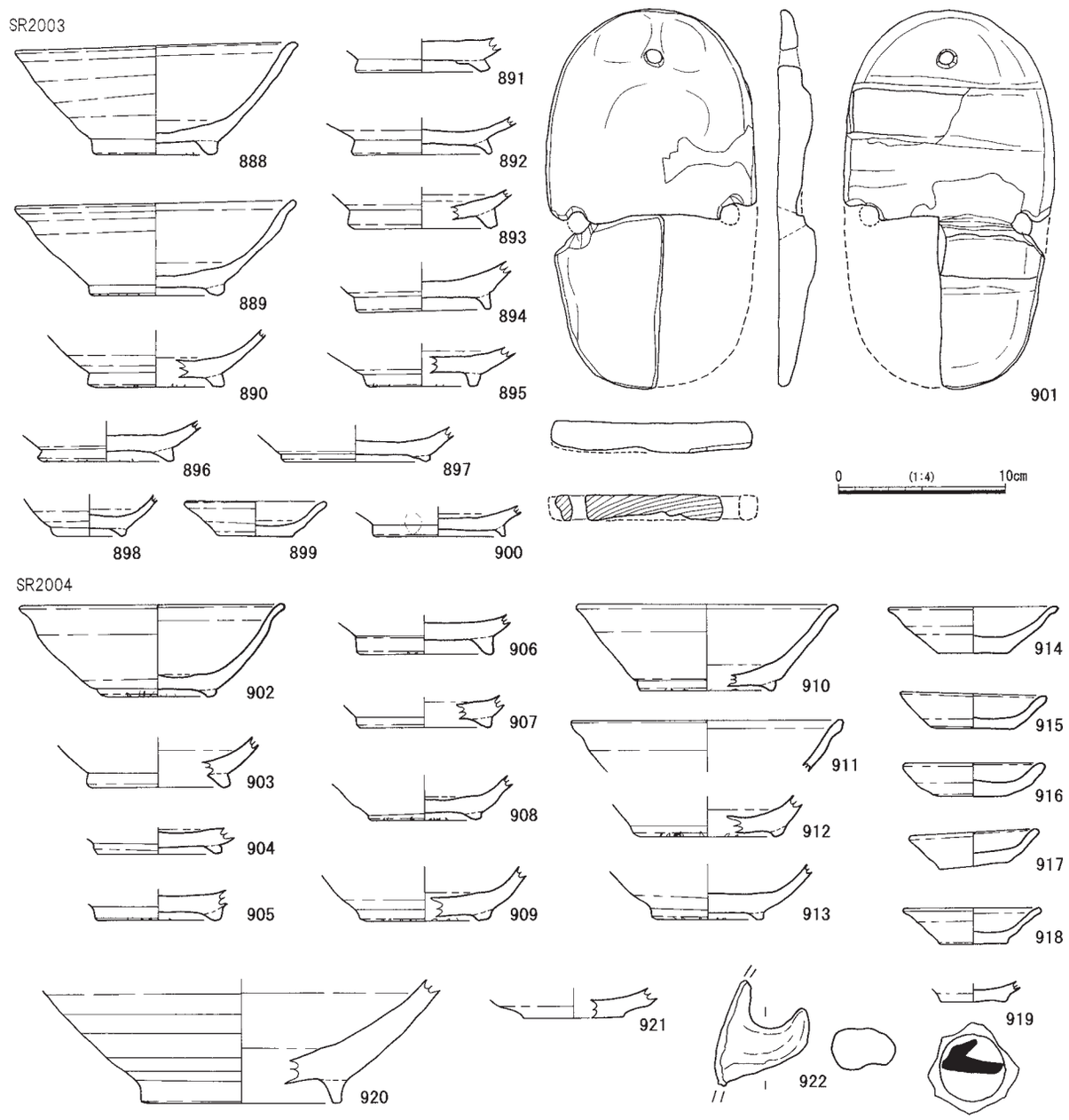


図 276　SR2003・2004 出土遺物

遺物としては、山茶碗や土師質土器、灰釉陶器、木製品などが出土している。888 ～ 899 は渥美湖西産の山茶碗である。888 ～ 897 は碗で、Ⅰ－１期からⅢ－２期のものまで確認される。898 はⅠ－２期の小碗、899 はⅢ－１期の小皿である。888・889・899 は完形品である。900 は灰釉陶器の碗である。901 は連歯下駄である。長さ 23 ㎝・幅 12.6 ㎝の大きさで、爪先側の幅がやや広く、歯の高さは低い。横緒穴は後歯の前方に位置している。樹種はクスノキである。

年代が明確な出土遺物は、大半が中世前期のものであり、SR2002 と同様の状況である。下駄は爪先側の幅が広いなど、やや新しい特徴が認められるものの、年代の特定は困難である。土層の切り合いから SR2002 よりも新しい流れであることは確実であることから、当該期の明確な遺物は出土していないものの、中世後期から近世の流路である可能性が高いと推定される。

SR2004（図 274・276、図版 54・75・89・90・99）

SR2002 の北側をほぼ沿うように流れている。土層の切り合いから、SR2002 よりも新しい流れであることが確認されている。幅 3.5 ～７m・深さ 0.8 ～１m程の規模で検出されている。

遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。902 ～ 919 は、渥美湖西産の山茶碗である。902 ～ 913 は碗であり、Ⅰ－２期からⅢ－２期のものまで確認される。912 は被熱して変色しており、表面には煤が付着している。914 ～ 919 は小皿である。Ⅰ－２期からⅢ－１期のもので、919 には記号状の墨書が確認される。920 は渥美湖西産の片口鉢である。921 はロクロ成形の土師質土器皿、922 は土師器の甕の把手である。

SR2003 と同様に、時期の明確な遺物は中世前期までのものである。しかし、土層の切り合いから SR2002 よりも新しい流れであることは確実である。SR2003 と同様に、出土した遺物は後世に周辺から流入したものとみてよい。当該期の明確な遺物は出土していないが、中世後期から近世の流路である可能性が高い。

SR2006（図 277、図版 55・74・88）

調査区の南西隅に位置し、北から南に向かって流れる。東岸の一部が検出されており、河川の大半は調査区外となる。位置的にみて、東側に隣接する SD2002 と接している可能性が高いが、接合部分に調査のための集水升が位置してしまったため、切り合い関係については明らかでない。

東岸では護岸施設が検出されている。直径５～ 10 ㎝程の杭を互い違いに打ち込み、その間に横木が入れられている。横木はいずれも調査区外へ続いているが、長さ 80 ㎝以上の割材である。これらの木材を包み込む形で粘土ブロックを積み、護岸施設が形成されている。水流によって失われている部分が多いが、幅 80 ㎝・高さ 20 ㎝の規模で遺存する。

遺物としては、山茶碗や土師質土器、中世瓦などが出土している。923・924・926 は土師質土器皿である。923 と 924 は坏形のもので下層（第７層）から出土している。926 は小皿であり、中層（第５層）から出土している。いずれも口縁部には、強いナデ調整が施されている。925 は渥美湖西産の山茶碗である。Ⅱ期のもので、中層（第６層）から出土している。927 は常滑産の甕である。護岸施設が築かれる以前の堆積層（第９層）から出土している。929 は平瓦で、下層（第７層）から出土している。凹凸面に離れ砂が付着し、凸面には斜格子＋横線の叩き目が残る。中屋遺跡出土瓦のⅡＢ類に相当する。928 は須恵器の坏蓋であり、護岸施設が築かれる以前の堆積層（第９層）から出土している。

図化したもののほかにも小片がいくつか出土しているが、遺物はいずれも中世前期のものである。ただし、遺構の年代を考える上においては、瓦の使用期間が土器等と比べて長いことに留意する必要がある。下層から出土した平瓦（929）は中屋遺跡の平瓦ⅡＢ類であり、13 世紀中頃～後半に製作されたも

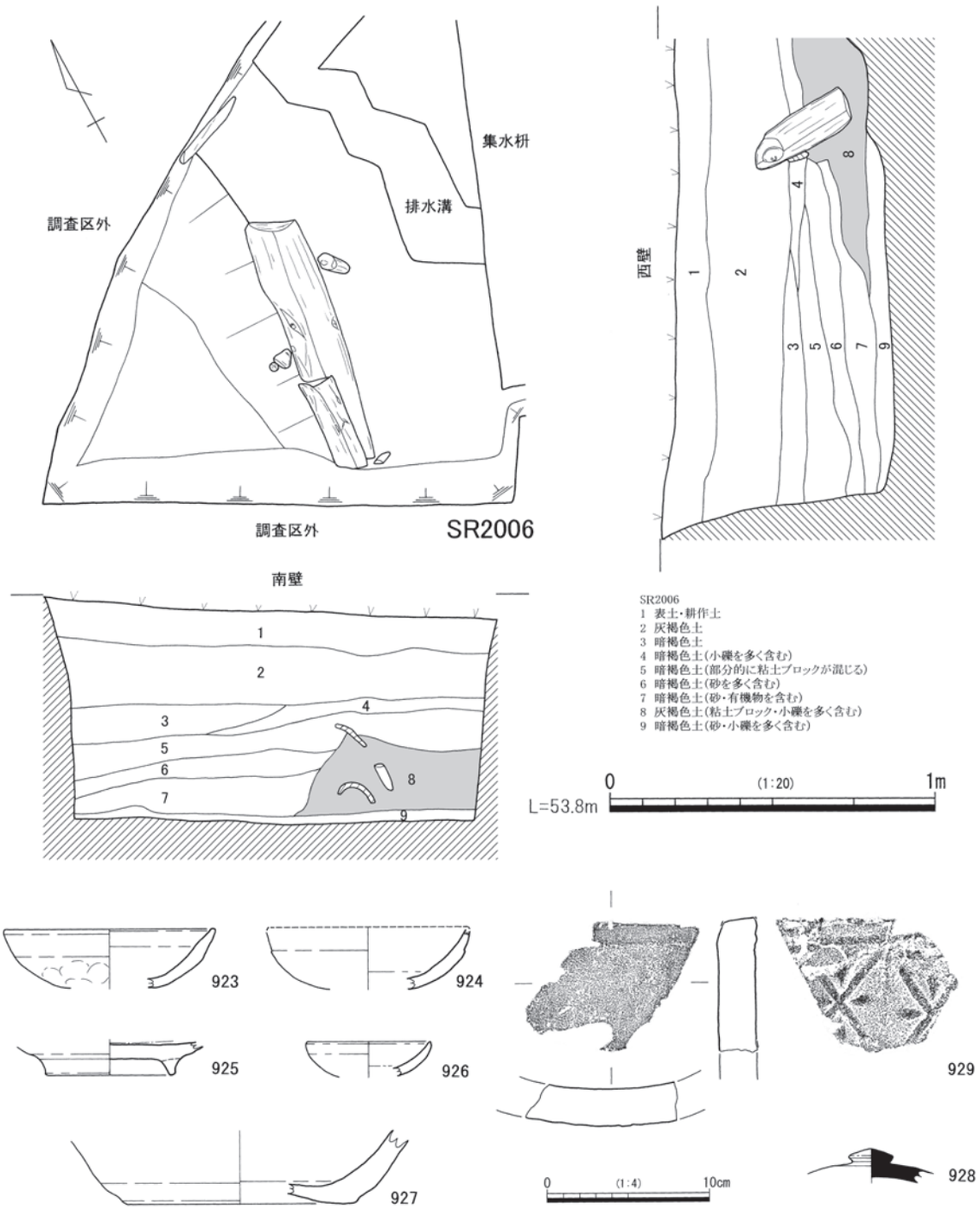


図 277　SR2006 実測図・出土遺物

のである。遺物からその使用期間を明らかにすることは困難であるが、投棄されたのは 14 世紀以降の可能性も残る。

SR2006 については、中世後期～近世の遺物が多く出土している中通遺跡の方角から流れる河川でありながら、その時期の遺物を含んでいないことから、さほど時代が降る遺構とは考えにくい。詳細な時期は不明であるが、13 世紀後半～ 14 世紀頃の河川であると推測される。

5　溝

SD1001（図 278、図版 58・76・92）

調査区の西側中央に位置する。ほぼ南北に掘られており、北側は調査区外へと続く。約 14 ｍの長さで検出されており、南側は徐々に浅くなって検出されなくなる。幅は 50 ～ 100 ㎝で、最も深い部分で深さは 18 ㎝程度となっている。

北側と南側の２ヶ所で、やや膨らんで検出されている部分もあるが、南側ではその場所に小穴が検出されており、これらの穴を一体のものと誤認して掘ってしまった可能性が高い。

遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。

930 ～ 934 は、渥美湖西産の山茶碗である。930 と 931 はⅠ－２期のもので、埋土中層から出土している。930 の内面には、煤の付着が確認される。932 ～ 934 は、底部付近から出土している。932 はⅠ－２期のものであり、口縁部が輪花となるものである。933 はⅠ－１期のものである。934 は灰釉陶器である。

図化したもの以外にも、山茶碗の破片や伊勢型鍋とみられる土師質土器の破片などが出土している。

遺物は 12 世紀のものが多く、底部からの出土していることから、12 世紀から 13 世紀にかけての溝と推定される。

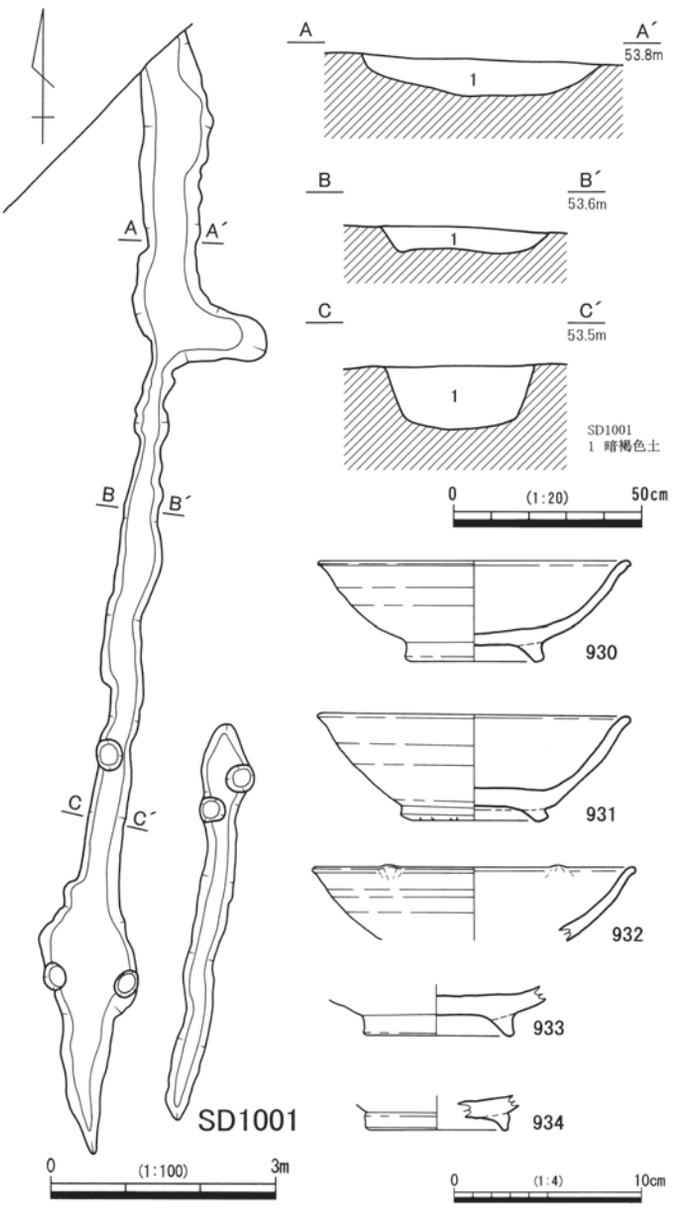


図 278　SD1001・1002 実測図・出土遺物

SD1002（図 278、図版 76）

SD1001 の東側にほぼ平行して設けられている溝である。掘立柱建物 SH1001 の柱穴を切っていることが確認されている。SD1001 の南端付近に、約５ｍの長さで確認されている。幅は 30 ～ 40 ㎝で、深さは５～ 10 ㎝程度と浅い。北側と南側は、徐々に浅くなり検出されなくなる。

遺物が出土していないため、年代の推定は困難であるが、掘立柱建物 SH1001 が 13 世紀中頃の建物であることから、それ以降に掘られた溝であることは確かである。また、SD1001 とほぼ平行していることから、SD1001 の掘り直しである可能性もあり、さほど年月が隔てられているとは考えにくい。13 世紀後半から 14 世紀頃の溝であろう。

SD1006（図 279）

調査区北東に位置する溝である。Ｌ字形に曲がっており、方位はほぼ南北と東西に一致している。

南北は約 14 ｍ、東西は約４ｍの長さで検出されている。場所によってやや異なるが、30 ～ 50 ㎝程の幅となっている。南北溝は南側、東西溝は東側に向かって徐々に浅くなる。深さは最も深い部分で 15 ㎝程である。

遺物は少なく、磁器の破片が１点と土師質土器の破片が２点出土しているのみである。

935 は土師質土器皿であり、口縁部にはナデ調整が施されている。小片のため不確実ではあるが、中世前期のものであろう。936 は肥前窯産の磁器である。磁器染付の小杯で、竹文が描かれている。17 世紀後半から 18 世紀にかけてのものである。

これらのほかに、土師質土器の小片が１点出土している。薄手のつくりでやや硬質の焼きのものであり、おそらくは中世後期から近世のものであろう。

出土している遺物から、SD1006 は近世の溝であるとみてよい。地境などに掘られた区画溝であろうか。

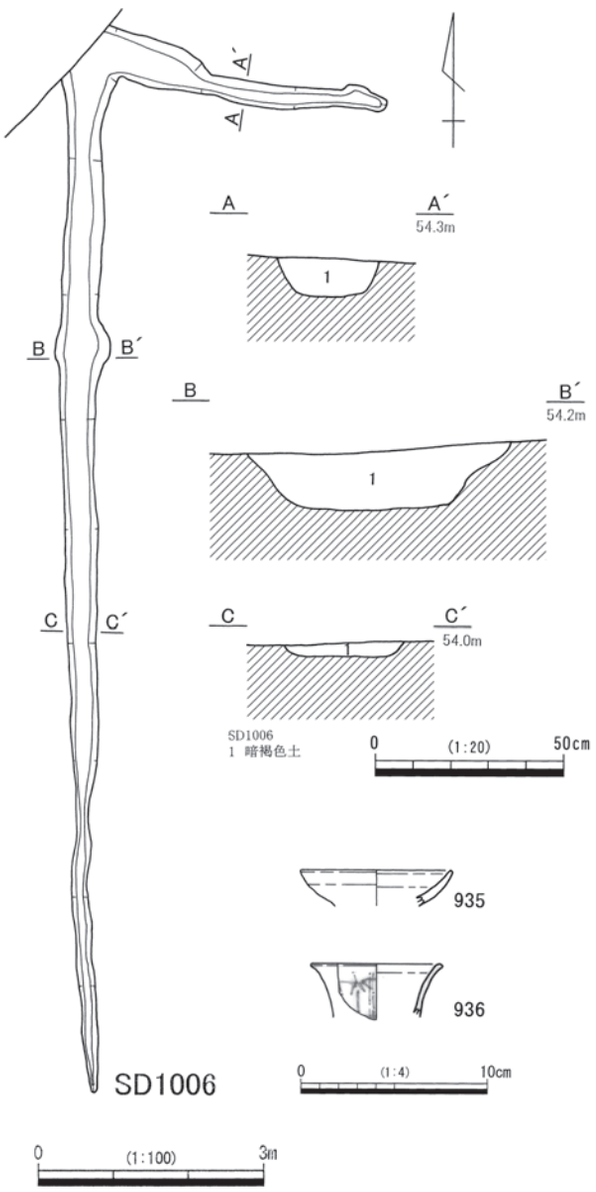


図 279　SD1006 実測図・出土遺物

SD2001（図 280、図版 55・76・97）

調査区の南東部に位置している南北溝である。幅は 85 ～ 240 ㎝で、深さは 20 ㎝程と浅い。約 10 ｍの長さで検出されており、南に向かって低くなる。北側は調査区外へ続き、南側で SD2002 に切られていることが確認されている。また、SD2014 や 2005 とも交差しているが、いずれも近似する埋土であったため、遺構の切り合い関係については明らかでない。埋土は３層に分けられており、埋土中に砂や礫の堆積が確認されていることから、水路として機能していた溝の可能性が高いと推測される。

遺物は、須恵器や土師器、山茶碗、土師質土器、木製品などが出土している。937 ～ 942 は、渥美湖西産の山茶碗である。937 ～ 941 は碗であり、Ⅱ期からⅢ－１期のものである。942 は小皿である。944 は渥美湖西産の片口鉢である。943 は、ロクロ成形の土師質土器皿である。945 ～ 948 は、手づくね成形の土師質土器皿である。945 と 946 は小皿、947 と 948 は坏形のものである。いずれも口縁部にはナデ調整が施されている。949 は伊勢型鍋である。図示したもののほかに、土器としては須恵器や土師器が多数出土している。

950 ～ 952 は木製品である。951 は脚であり、接地部には摩耗した痕跡が確認できる。高さは 12.5 ㎝で、

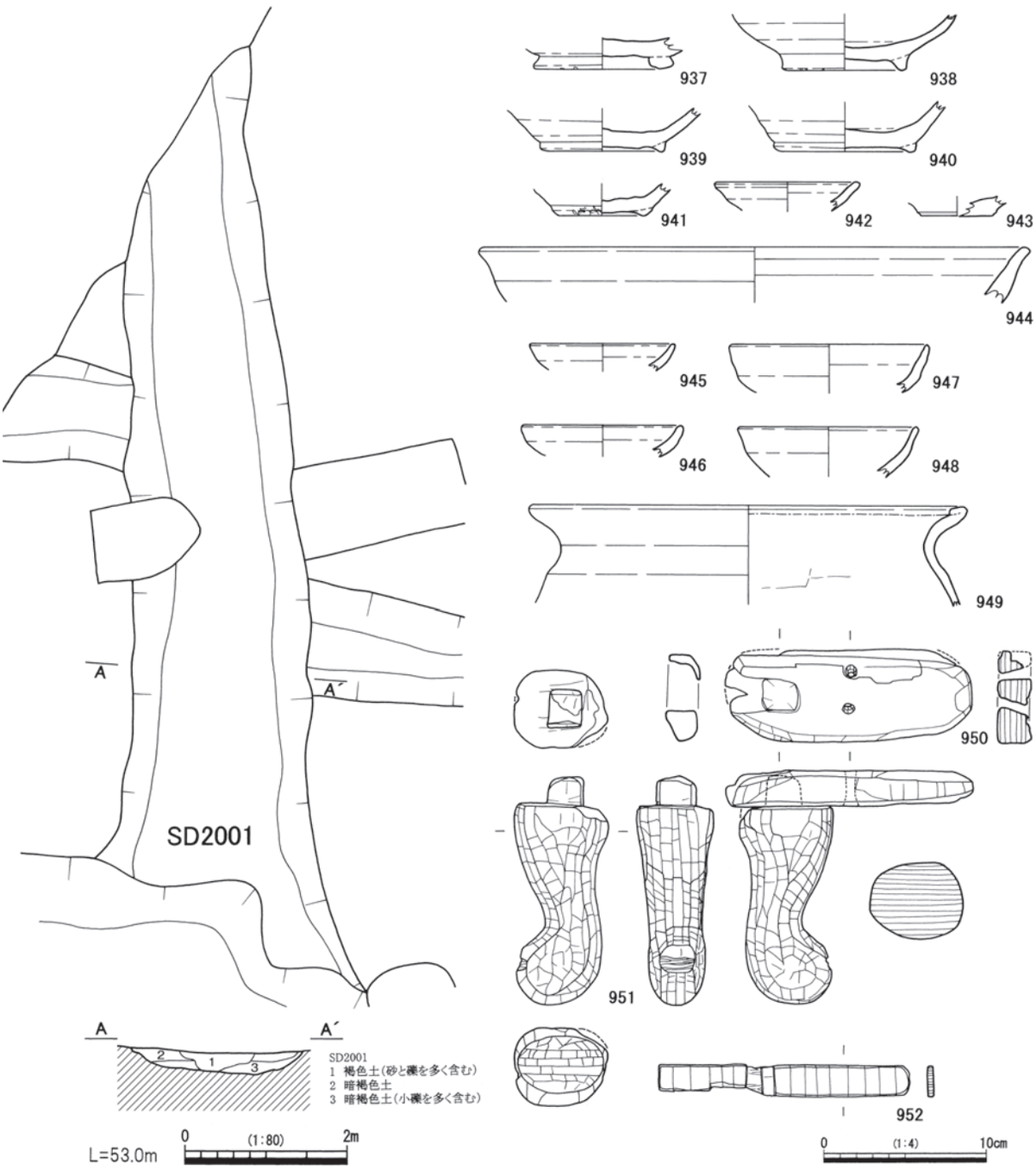


図 280　SD2001 実測図・出土遺物

鳥首状の形態となっている。上部には枘が設けられており、950 に差し込む形になっている。950 は、幅 4.8 ㎝・長さ 5.8 ㎝の隅丸長方形の板で、厚さは２㎝程である。片隅に枘孔が設けられており、中央には固定用とみられる穴が２つ空けられている。几台や容器などの脚部であろうか。952 は曲物の側板で、表面には挽き目が確認できる。また、これらの他にモモの種が 67 点出土している。

出土遺物の年代は、周辺から流入したとみられる古代の遺物を除くと、12 世紀から 13 世紀前葉までのものに限られる。また、後述するように、この溝を切っている SD2002 は、13 世紀中頃の遺構であると考えられる。SD2001 は、出土遺物の年代が示すように、12 世紀から 13 世紀前葉に機能していた溝と推定される。

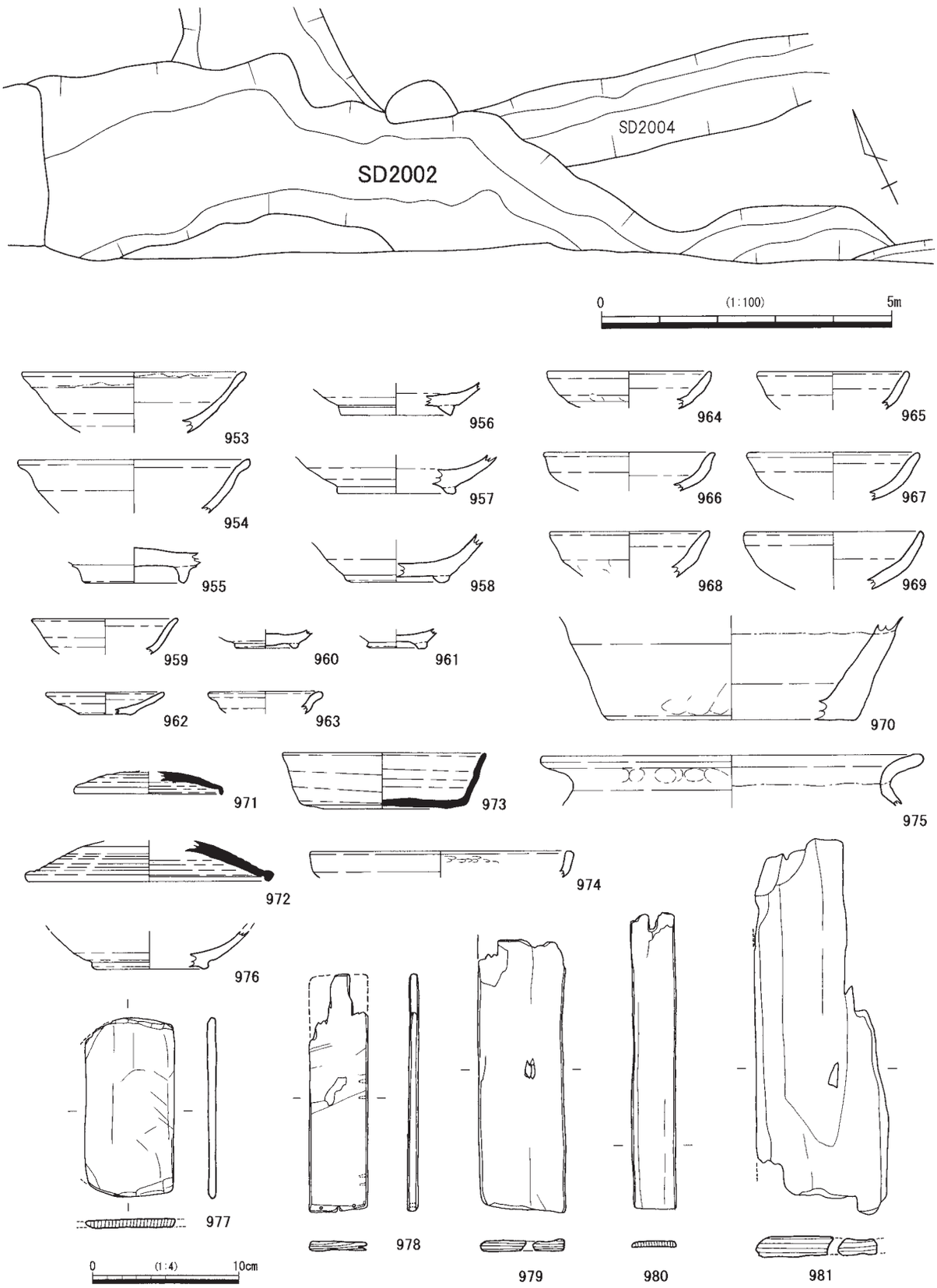


図 281　SD2002 実測図・出土遺物

SD2002（図 281、図版 55）

SD2001 の南側に位置する。切り合い関係から、SD2001 より新しい遺構であることが確認されている。東側は SD2004 と SD2005 と重なっているが、埋土が近似していたこともあり、切り合い関係は確認できなかったようである。

東西に約 14 ｍの長さで検出されており、Ｓ字形に蛇行する。幅は一定しておらず、西側では３ｍ程あるが、東へ行くにしたがって狭くなる。深さに関しても、底部は波打っており、西側では 30 ㎝程の深さがあるが、東側では浅くなって検出できなくなる。現地での認識を踏襲して溝に含めたが、このような形状からみると、流路である可能性が高い。

遺物としては、山茶碗や土師質土器、中世陶器、木製品などが出土している。953 ～ 963 は、渥美湖西産の山茶碗である。953 ～ 958 は碗で、Ⅰ－２期からⅢ－１期のものである。959 ～ 961 は小碗、962 と 963 は小皿である。Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。964 ～ 969 は土師質土器皿である。いずれも厚手のつくりであり、口縁部には強いナデ調整が施されている。970 は渥美窯産の甕である。

971 ～ 973 は須恵器であり、971 と 972 は坏蓋、973 は坏である。974 と 975 は土師器であり、974 は盤、975 は甕の破片である。図示したもの以外にも、須恵器や土師器の破片は多数出土している。これら古代の遺物については、周辺の古代の遺構から流入したものとみてよい。

977 ～ 981 は木製品である。977 は曲物の底板で、一部が欠損している。978 は指物の部材である。幅４㎝・長さ 16 ㎝の板材で、側面には釘穴が穿たれている。979 ～ 981 は板材で、979 と 981 には中央に、980 には端部に穴があけられている。

古代の遺物も流入しているが、遺物は 13 世紀中葉までのものとなっている。前述のように、この遺構は、人工的に掘られた溝ではなく流路である可能性が高い。調査時に設置された集水升が位置するため、遺構の切り合いがはっきりしないが、方向からみて SD2002 の西側は SR2006 と接する位置関係にある。SR2006 では 13 世紀後半から 14 世紀頃に護岸施設が築かれているが、大規模な護岸ではなく、氾濫によって決壊した河岸の補修・強化のための治水工事であった可能性も考えられる。

これらのことから、SD2002 は 13 世紀中頃から後半に形成された、河川 SR2006 の氾濫の跡であると推定される。

SD2004・2005・2006（図 282 ～ 294、図版 56・57・76・90 ～ 93・97・99）

調査区の南側に位置し、調査区を東西に横断する形で掘られている東西溝である。平行して３条の溝が掘られている。いずれも、東側は河川 SR2002 ～ 2005 に切られていることが確認されている。調査区中央を南北に流れる諸河川や、流路跡 SD2002 との切り合い関係は、埋土が近似していたために現地調査では把握できなかったようである。いずれも河川が先に掘り下げられているため、中央付近で途中途切れるが、東西約 60 ｍの長さでほぼ直線的に検出されている。

SD2004 は、場所によってやや異なるが、幅は 130 ～ 200 ㎝と広く、深さは 30 ～ 80 ㎝程である。西から東に向かって低くなり、西側と東側では高低差が１ｍ程ある。やや凹凸のある底部から、大きく広がる形で斜め上方へと立ち上がる。埋土は大きく４層に分けられており、いずれも暗褐色土であるが、下層と中層には砂や小礫の堆積が確認されている。

SD2005 は、SD2004 から約３ｍ北に位置する。幅は 60 ～ 120 ㎝であり、西側はやや広いが東側は狭くなっている。SD2004 と比べて狭く、特に東側ではその差は顕著である。深さは 30 ～ 40 ㎝であり、SD2004 と同様に西から東に向かって下がっている。西側と東側との高低差は、20 ㎝程である。断面は箱形で、平らな底部から、直線的に斜め上方へ立ち上がる。埋土は大きく３層に分けられている。いずれも暗褐色土であるが、上層には小礫が多く含まれている。

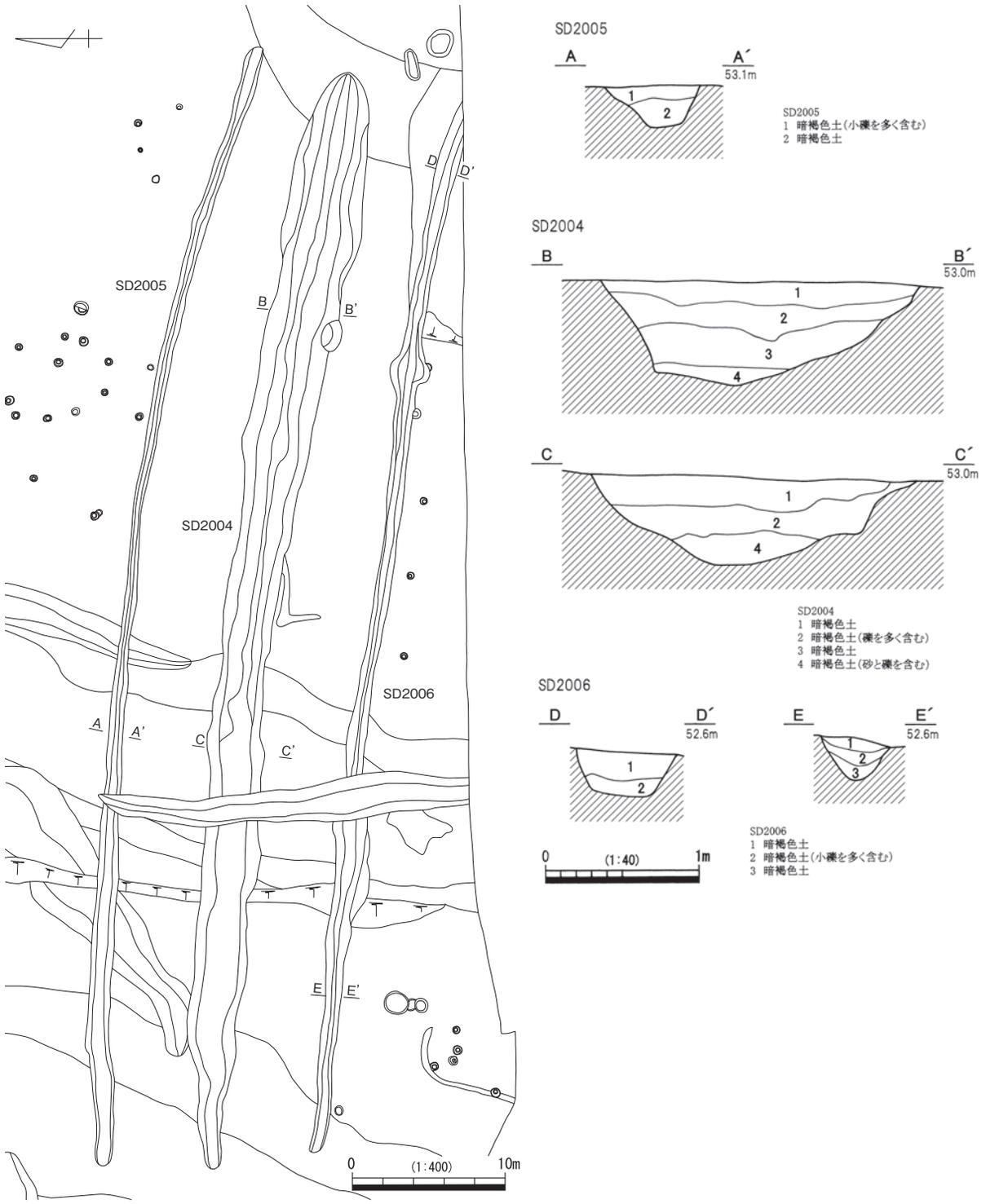


図 282　SD2004 ～ 2006 実測図（西側）

SD2006 は、SD2004 から約 3 m南に位置する。幅は 40 ～ 60 ㎝で、全体的にほぼ一定している。幅に関しては、SD2005 と近い規模といえる。深さは 10 ～ 30 ㎝で、全体としては西から東に向かって低くなっているが、高低差は 10 ㎝程である。場所によってはやや崩れている部分もあるが、断面は箱形で、平らな底部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。埋土は大きく 3 層に分けられている。いずれも暗褐色土であるが、下層には小礫が多く含まれている。

いずれの溝からも、埋土からは遺物が大量に出土している。

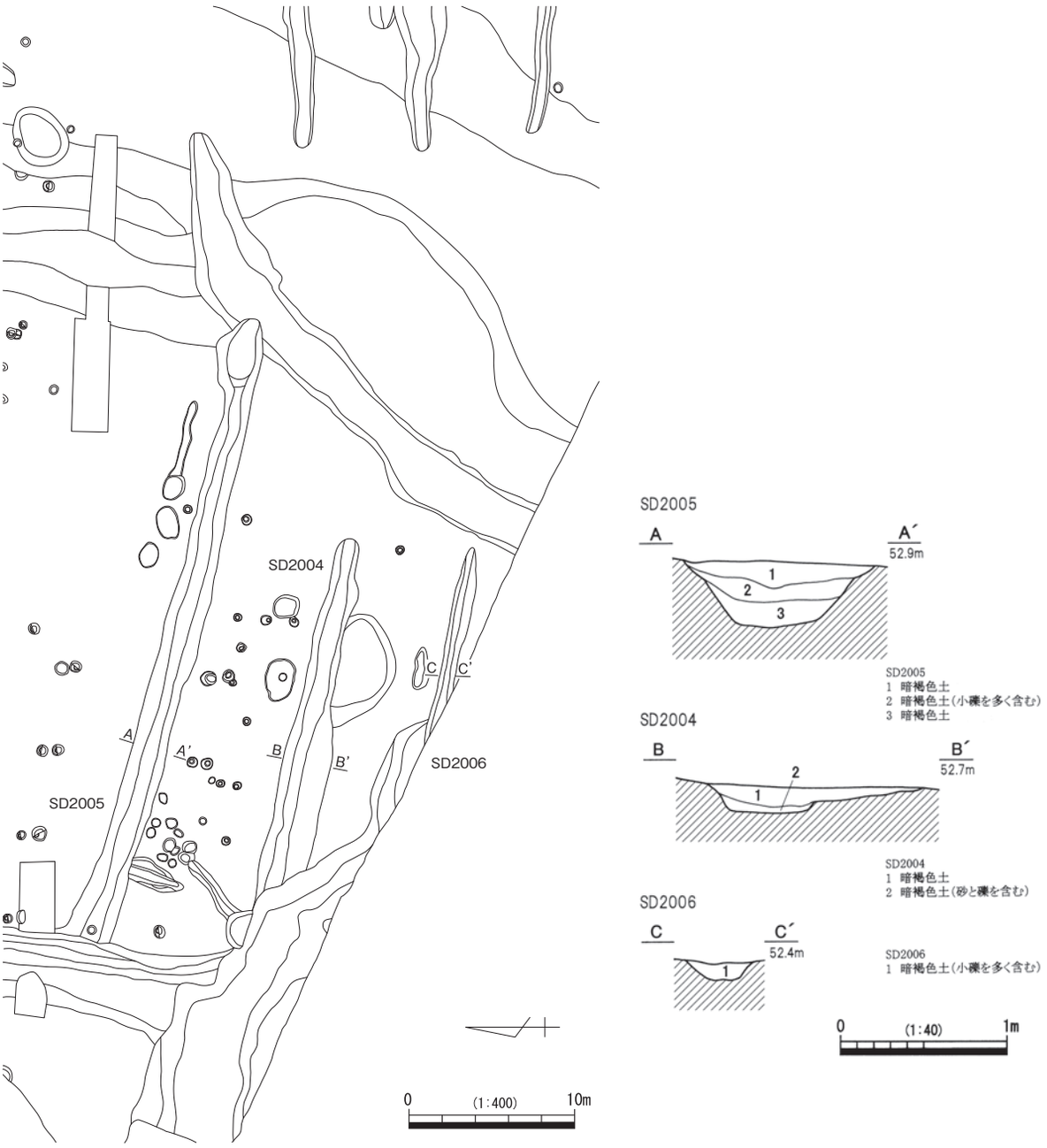


図 283　SD2004 ～ 2006 実測図（東側）

SD2004 では、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁、瓦、木製品などが出土している。下層からは、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。982 ～ 1011 は渥美湖西産の山茶碗である。982 ～ 1005 は碗で、Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。1006 はⅠ－２期の小碗、1007 ～ 1011 はⅢ－１期の小皿である。1012 ～ 1014 は、渥美湖西産の片口鉢である。1012 と 1013 はⅠ期のものであり、1014 はⅡ期のものである。1014 は全体が被熱しており、内外面と断面には煤が付着している。1015 ～ 1024 は、土師質土器皿である。1015 ～ 1023 は手づくね成形のものである。1015 ～ 1017 は皿形のもので、1015 にはナデの上部に面取りがみられる。1018 ～ 1021 は深く坏形になるものである。1022 と 1023 は小皿である。いずれも口縁部にはナデ調整が施されている。1024 はロクロ成形の小皿である。1025 は伊勢型鍋で、口縁部は折り返し成形されている。1026 ～ 1029 は貿易陶磁で、1026 は白磁碗、1027 ～ 1029 は青磁碗である。

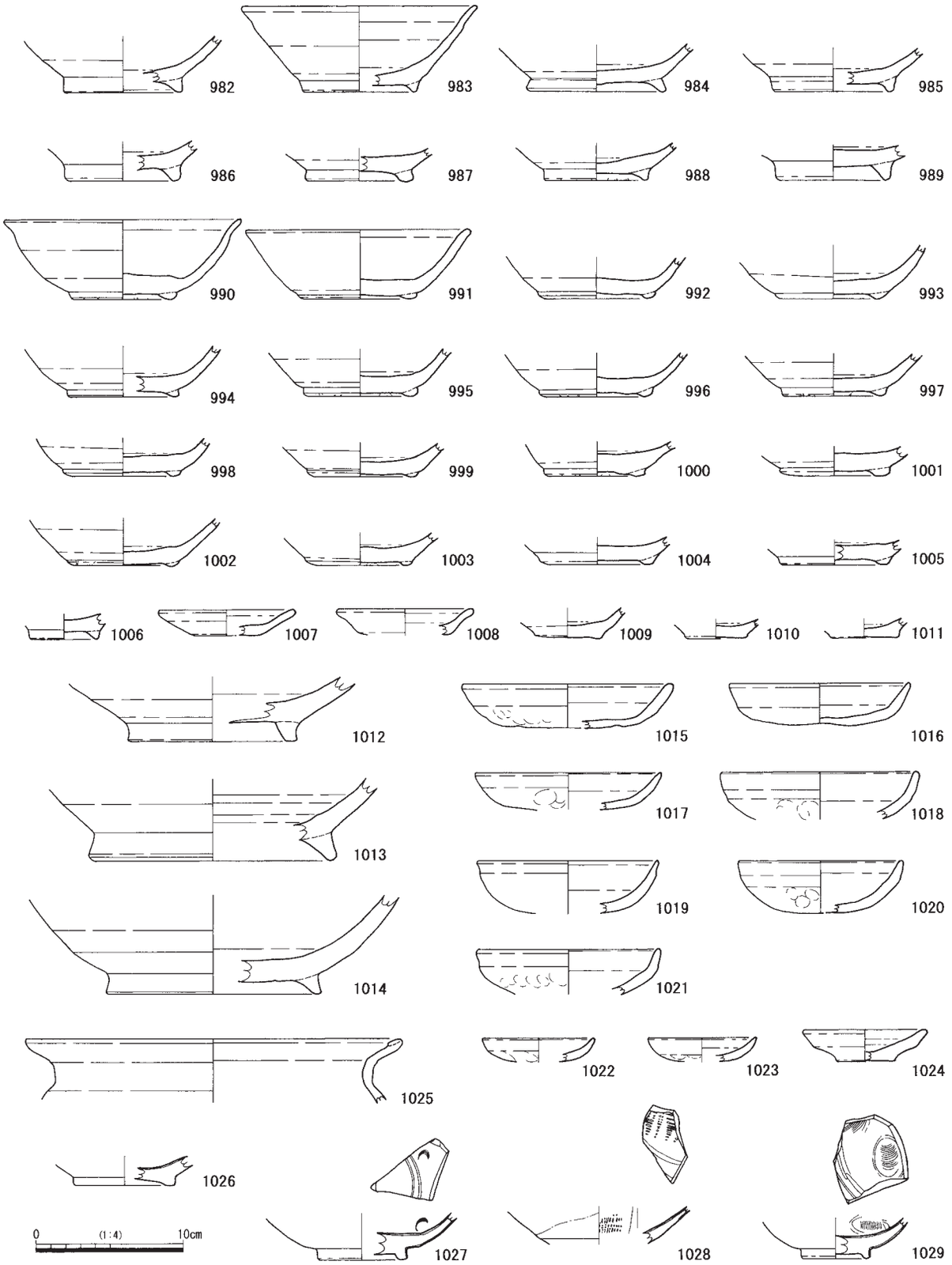


図 284　SD2004 下層出土遺物

中層からも同様に、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。1030 ～ 1086 は山茶碗である。1050 のみ知多産で、ほかはすべて渥美湖西産の製品である。1030 ～ 1070 は碗であり、Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。1052 は全体が被熱しており、外面には煤が付着している。1071・1077・1083 は

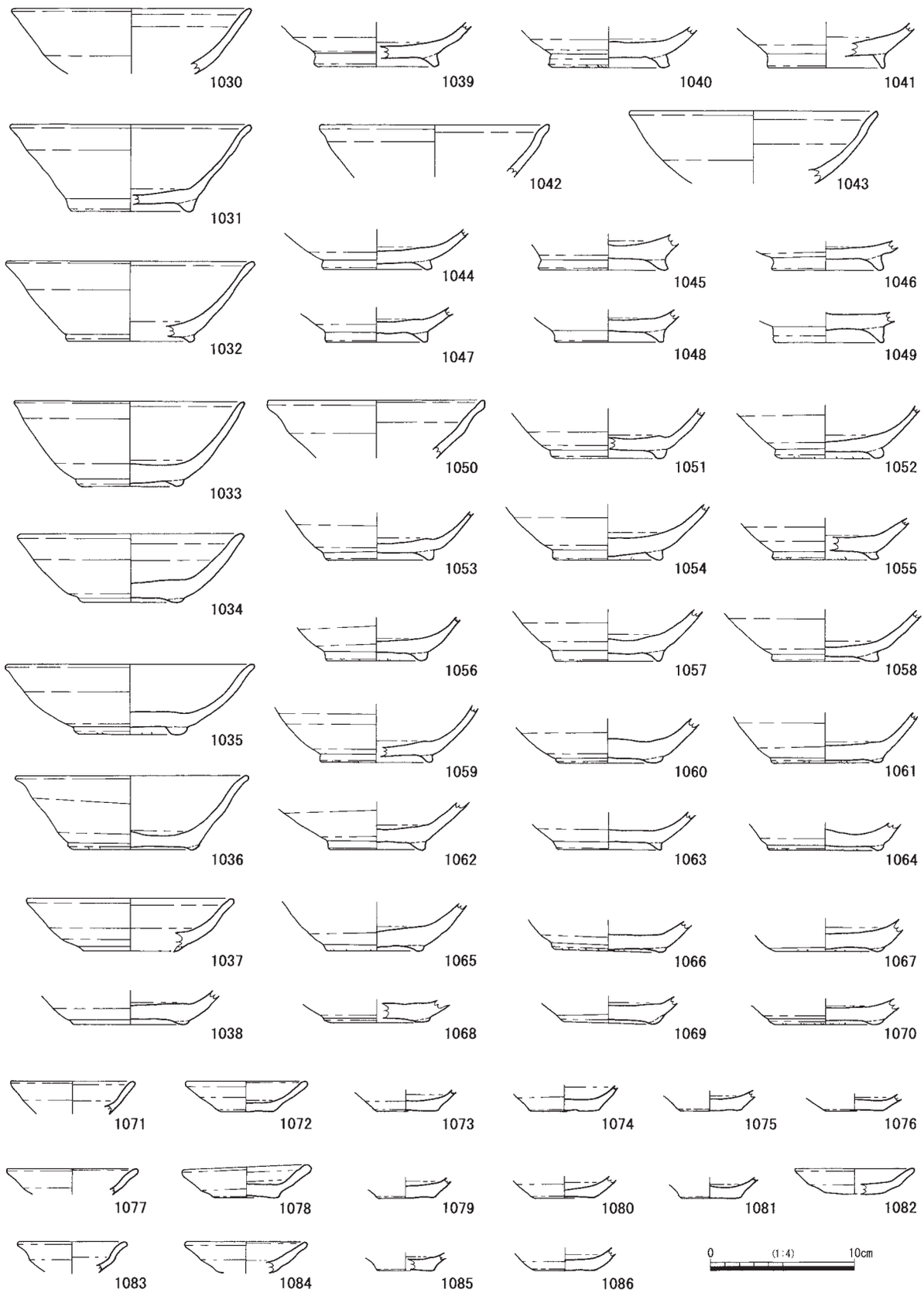


図 285　SD2004 中層出土遺物（１）

小碗、1072 ～ 1076・1078 ～ 1082・1084 ～ 1086 は小皿である。Ⅰ期からⅢ－２期のものである。1087 ～ 1090 は片口鉢である。1090 は知多産で、そのほかは渥美湖西産の製品である。1092 と 1093 は渥美

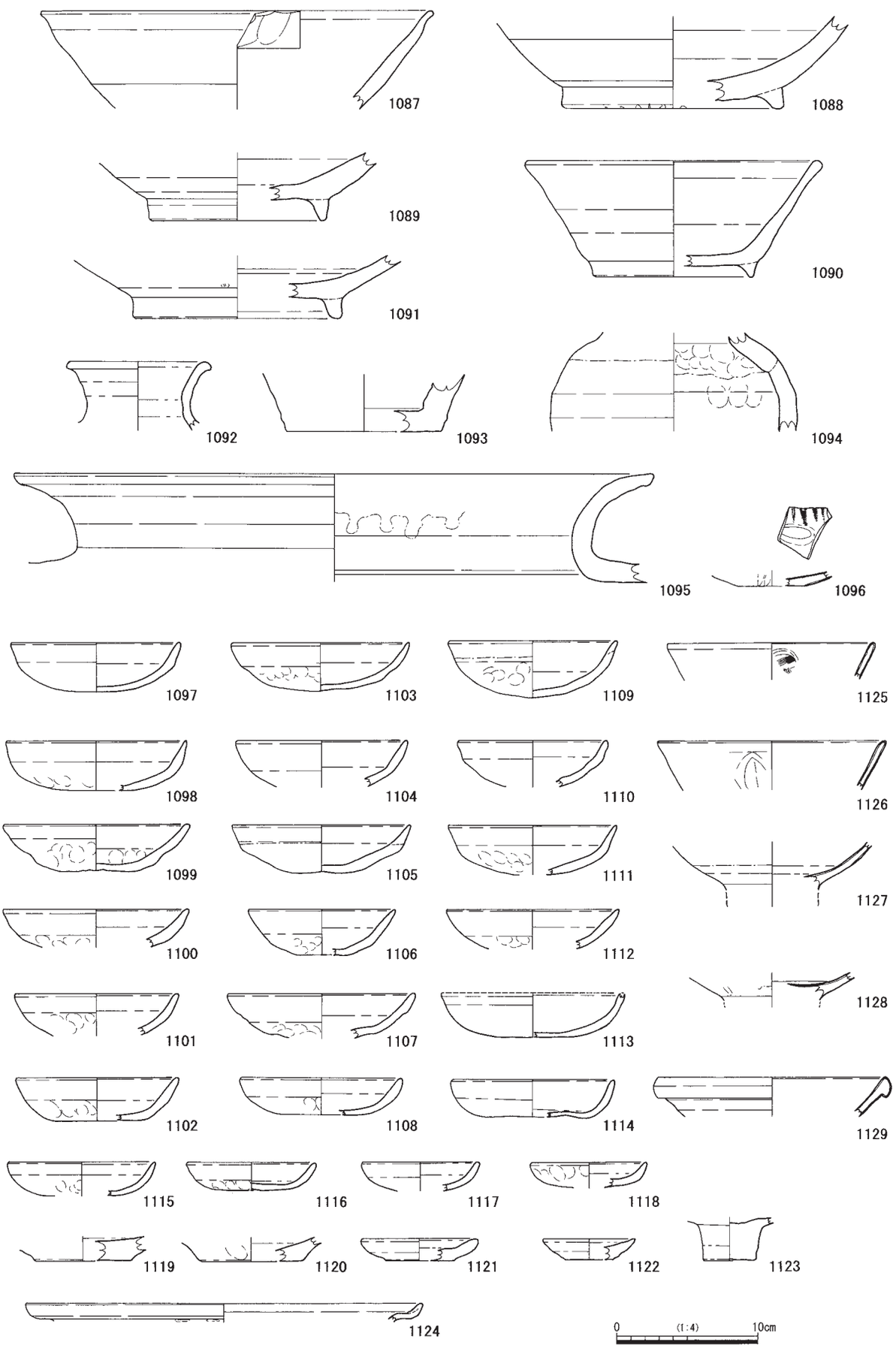


図 286　SD2004 中層出土遺物（２）

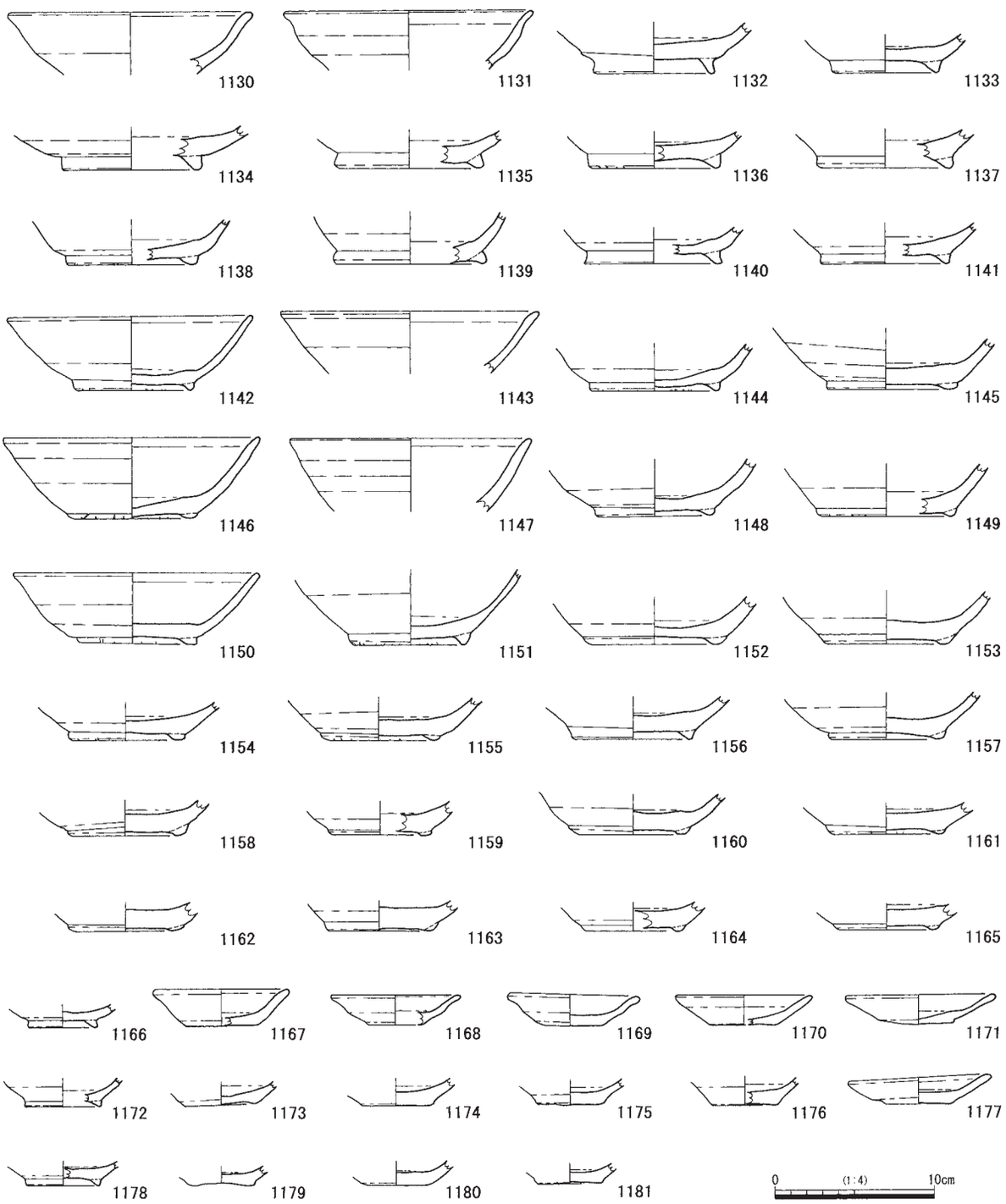


図 287　SD2004 上層出土遺物（1）

産の壷、1094 は常滑産の壷である。1095 は渥美産の甕である。1097 ～ 1118 は、手づくね成形の土師質土器皿である。大半が厚手のつくりで口縁部には強いナデ調整が施されているが、1113 ～ 1115 はやや薄手のつくりでナデ調整が弱い。1119 ～ 1122 は、ロクロ成形の土師質土器皿である。1123 は、いわゆる柱状高台である。1124 は伊勢型鍋であり、口縁部の折り返しには上からナデ調整が施されている。1096・1125 ～ 1129 は貿易陶磁である。1096 は青磁の皿、1125 と 1126 は青磁の碗、1127 ～ 1129 は白磁の碗である。

上層からも、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。1130 ～ 1181 は、渥美湖西産の山

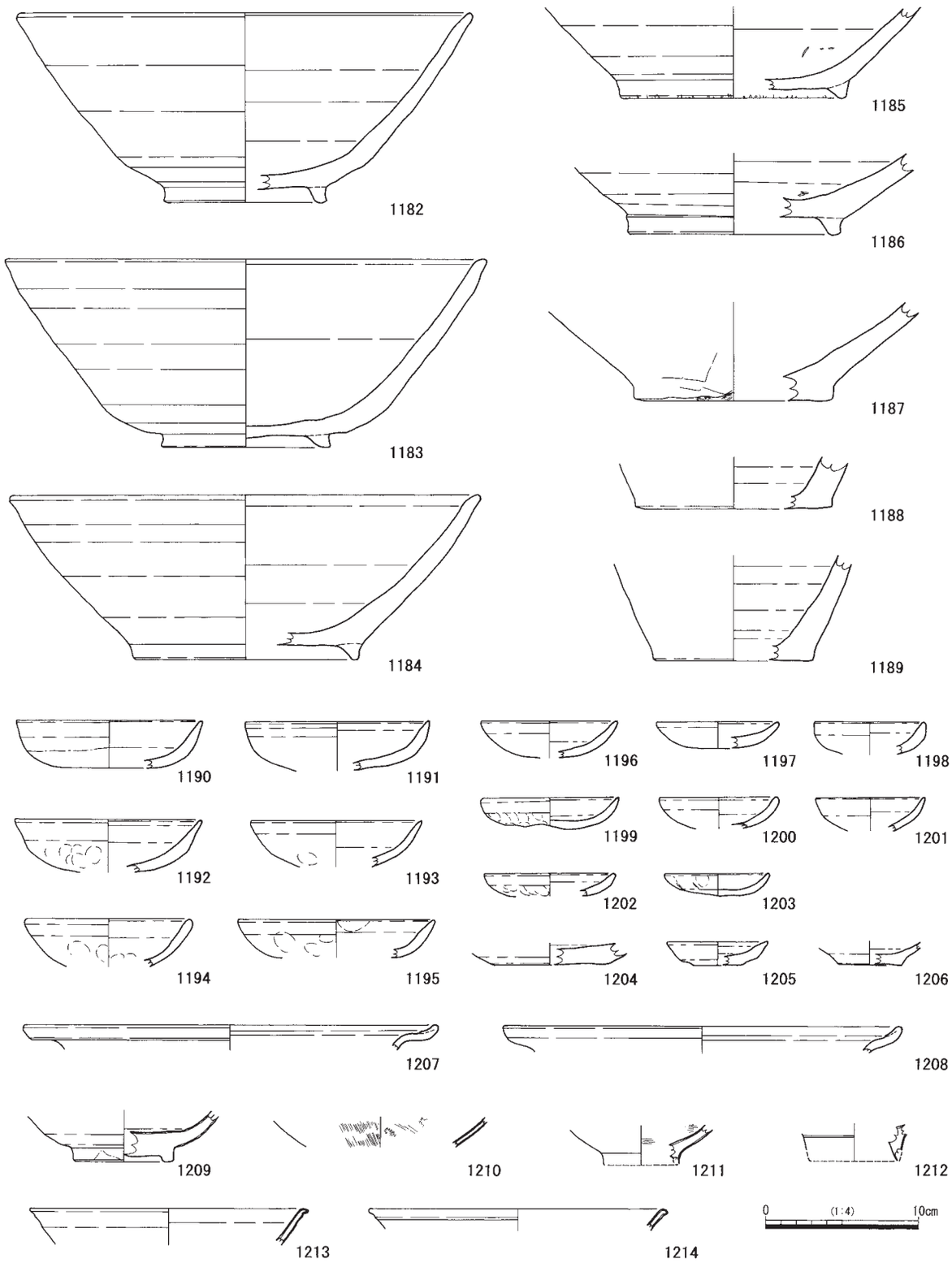


図 288　SD2004 上層出土遺物（２）

茶碗である。1130 ～ 1165 は碗であり、Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。1166・1172・1178 は小碗、1167 ～ 1171・1173 ～ 1177・1179 ～ 1181 は小皿である。Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。1182 ～ 1186 は、渥美湖西産の片口鉢である。1187 は渥美産の甕、1188 と 1189 は常滑産の壷である。1190 ～ 1203 は、手づくね成形の土師質土器皿である。1190 ～ 1202 には口縁部に強いナデ調整が施されてい

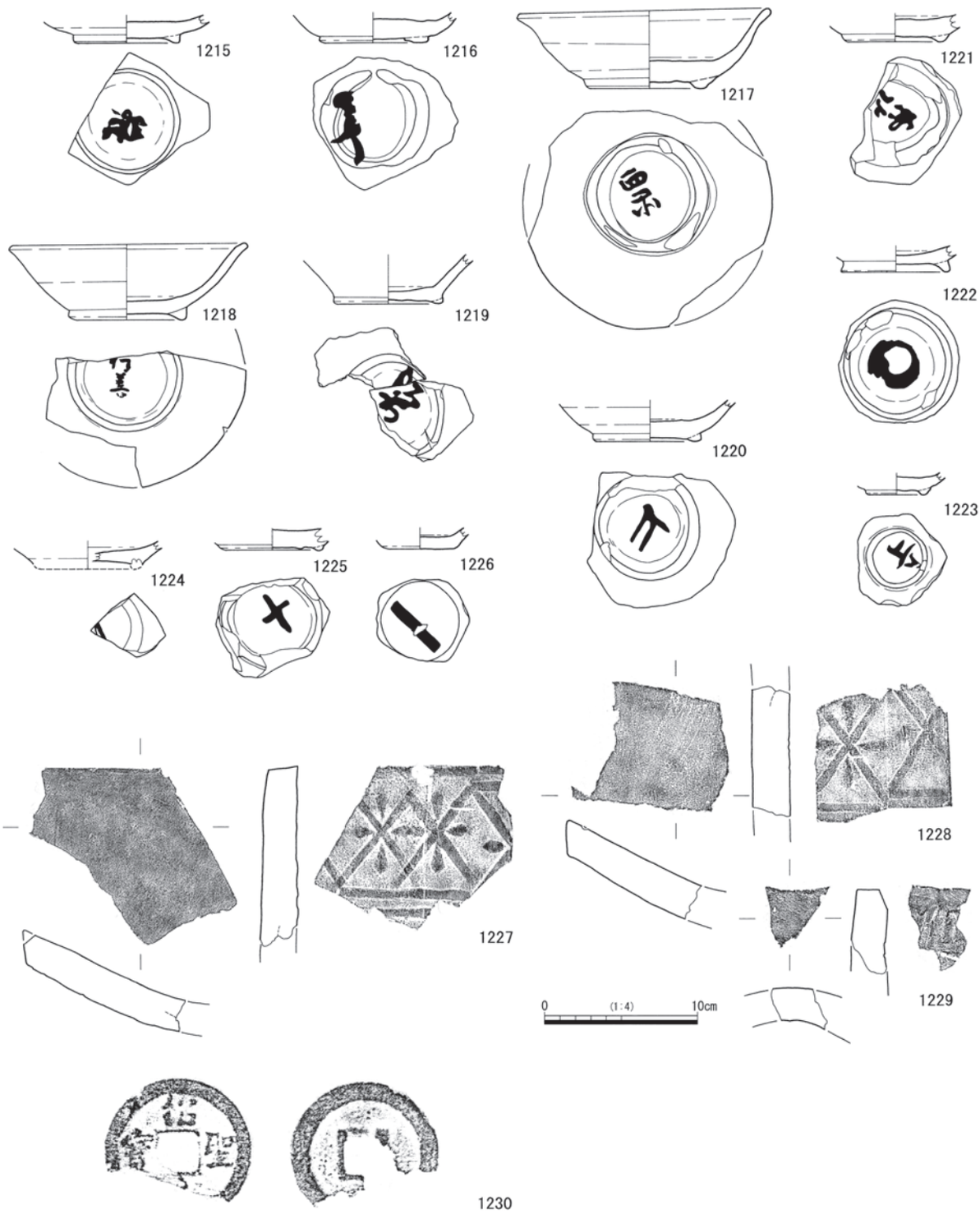


図 289　SD2004 出土墨書土器・瓦・銭貨

るが、1203 には口縁部のナデ調整が確認できない。1204 ～ 1206 はロクロ成形の土師質土器皿である。1207 と 1208 は伊勢型鍋で、口縁部の折り返しには、上からナデ調整が施されている。1209 と 1210 は青磁の碗、1211 ～ 1214 は白磁の碗である。

SD2004 からは、大量の山茶碗が出土しているが、墨書の残るものも確認できる。墨書は、いずれも底部外面に残されている。記号状のものや判読できないものが多いが、1218 は「得善」、1217 は「粟」

である。1225 は「十」、1226 は「一」と書かれている。1219 と 1221 は、判読できないが 2 文字確認できる。1223 は「吉」とも読めるが、おそらくは「上」＋記号であろう。1220 には「↑」、1222 には「○」のような記号が書かれている。

特殊な遺物としては、瓦が出土している。1227 と 1228 は平瓦である。凹凸面には離れ砂が付着し、凸面には斜格子＋横線の叩き目が残る。斜格子内には花菱状の模様が施されている。中通遺跡や

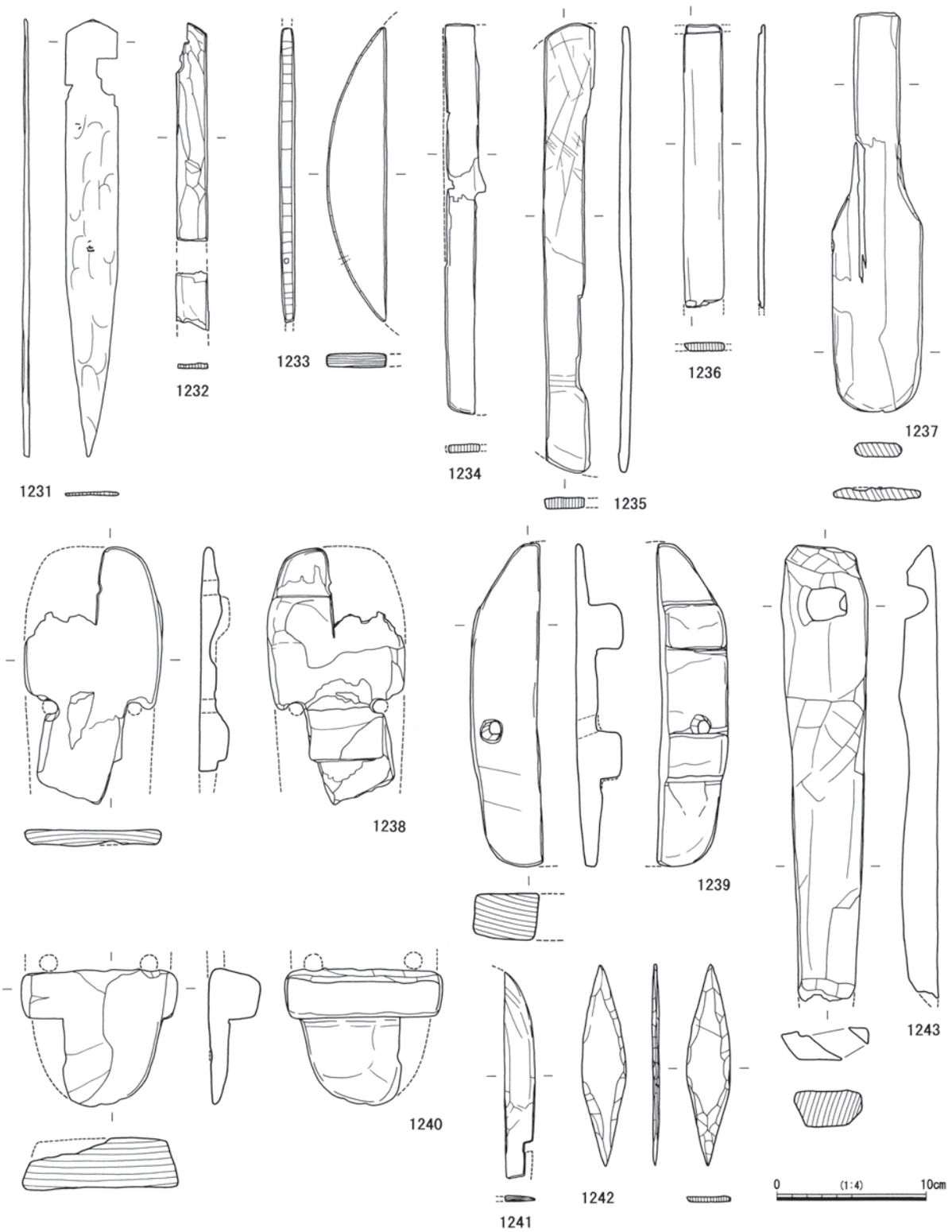


図 290　SD2004 出土木製品

SR2006 から出土しているものと同じく、中屋遺跡の平瓦ⅡＢ類に相当するものである。1229 は丸瓦の狭端部である。凹面には吊り紐痕が確認できる。小破片ではあるが、厚さや復原径などからみて無段式であると推測される。また、１点だけではあるが、銭貨も出土している。1230 は紹聖元宝である。

SD2004 では、木製品も出土している。1231 は笹塔婆である。上部は圭頭形となり、下部は細く尖っている。文字は認識できないが、わずかに墨痕が残されている。1232 は不明木製品である。端部が圭頭形になることから、笹塔婆の可能性もあるが、端部付近に小さな穴が空けられており、墨痕も確認されていない。1233 ～ 1236 は曲物の底板である。1233 の側面には木釘穴が空けられている。1237 は杓子である。柄も含め、全体が板状のものである。1238 ～ 1240 は連歯下駄である。1238 はやや長方形に近い形状であり、歯は低い。1239 と 1240 は、1238 に比べてやや高い歯が付けられている。いずれも後歯の前に、横緒穴が空けられている。1241 は草履芯である。厚さ３㎜の薄板でつくられている。1242 と 1243 は用途不明品である。1242 は、厚さ４㎜の板材を側面から削り両端を尖らせている。1243 は棒状の木製品で、2.0 × 2.5 ㎝程の四角形の穴が端部付近に空けられている。何らかの部材の一部であろうか。有機物としては、木製品以外にモモの種子が 26 点出土している。後述する SD2005・2006 に比べて点数は少ない。

SD2004 から出土した遺物の年代は、大半が 13 世紀中葉までのものであり、層位による違いもあまり見出せない。ただし、13 世紀中葉よりも新しい時期とみられる遺物もいくつか確認できる。中層や上層から出土している土師質土器皿のうち、口縁部のナデ調整がみられないものは、中世後期のものである可能性も考えられる。また、中屋遺跡において明らかにされているように、瓦は 13 世紀中頃から後半にかけてのものであり、使用期間を考慮すると廃棄された年代は 14 世紀以降の可能性も十分にある。このような点からみて、SD2004 の埋没時期は 13 世紀後半から 14 世紀にかけてである可能性が高い。開削された時期は、後述する SD2005 が埋没した 13 世紀中葉頃であると推定される。

SD2005 からは、山茶碗や土師質土器、須恵器、灰釉陶器、木製品などが出土している。1244 ～ 1256・1274・1279・1282 は下層から出土した土器である。1244 ～ 1255 は、渥美湖西産の山茶碗である。1244 ～ 1247 は碗であり、Ⅱ期～Ⅲ－１期のものである。1250 の底部外面には、「一」のような墨書が書かれている。1251 ～ 1253 は小碗で、Ⅰ－１期のものである。1254 と 1255 は小皿で、Ⅲ－１期のものである。1256 は白磁の碗である。1274 ～ 1282 は須恵器で、1274 は坏蓋、1279 は坏、1282 は高坏である。これらは、周辺にある古代の遺構から流入したものとみてよい。

1257 ～ 1273・1275 ～ 1277・1283・1284 は、上層から出土した土器である。1257 ～ 1271 は、渥美湖西産の山茶碗である。1257 ～ 1268 は碗で、Ⅰ－２期からⅢ－１期のものである。1268 は、体部上半を欠いた破片であるが、その破片を意図的に丸くなるように打ち欠いているものである。何らかの特殊な用途があったのであろうか。1269 は小碗で、Ⅰ－２期のものである。1270 と 1271 は小皿で、Ⅲ－１期のものである。1271 の底部外面には、横棒の上に点を書いたような記号の墨書が残る。1274 ～ 1282 は須恵器であり、1274 ～ 1277 は坏蓋、1278 ～ 1281 は坏である。1283 と 1284 は灰釉陶器の碗である。

1285 ～ 1292 は木製品である。1285 と 1286 は連歯下駄である。いずれも爪先側の幅がやや広く、歯は低い。1287 は木錘である。一部樹皮が残存していることから、元々中心に抉りを入れた程度のものであったことがわかる。1288 は角錐状に削られた製品であるが、用途は不明である。1289 は燃えさしで、幅 2.9 ㎝・厚さ３㎜程の薄板である。1290 ～ 1292 は棒状の木製品である。いずれも一方を削って尖らせている。1292 には、尖らせた側の反対側の端部付近に穴が空けられている。これらの他に、モモの種が合計 116 点出土している。いずれも溝の全域で埋土中から出土しており、特別集中する様な場所は確認されていない。

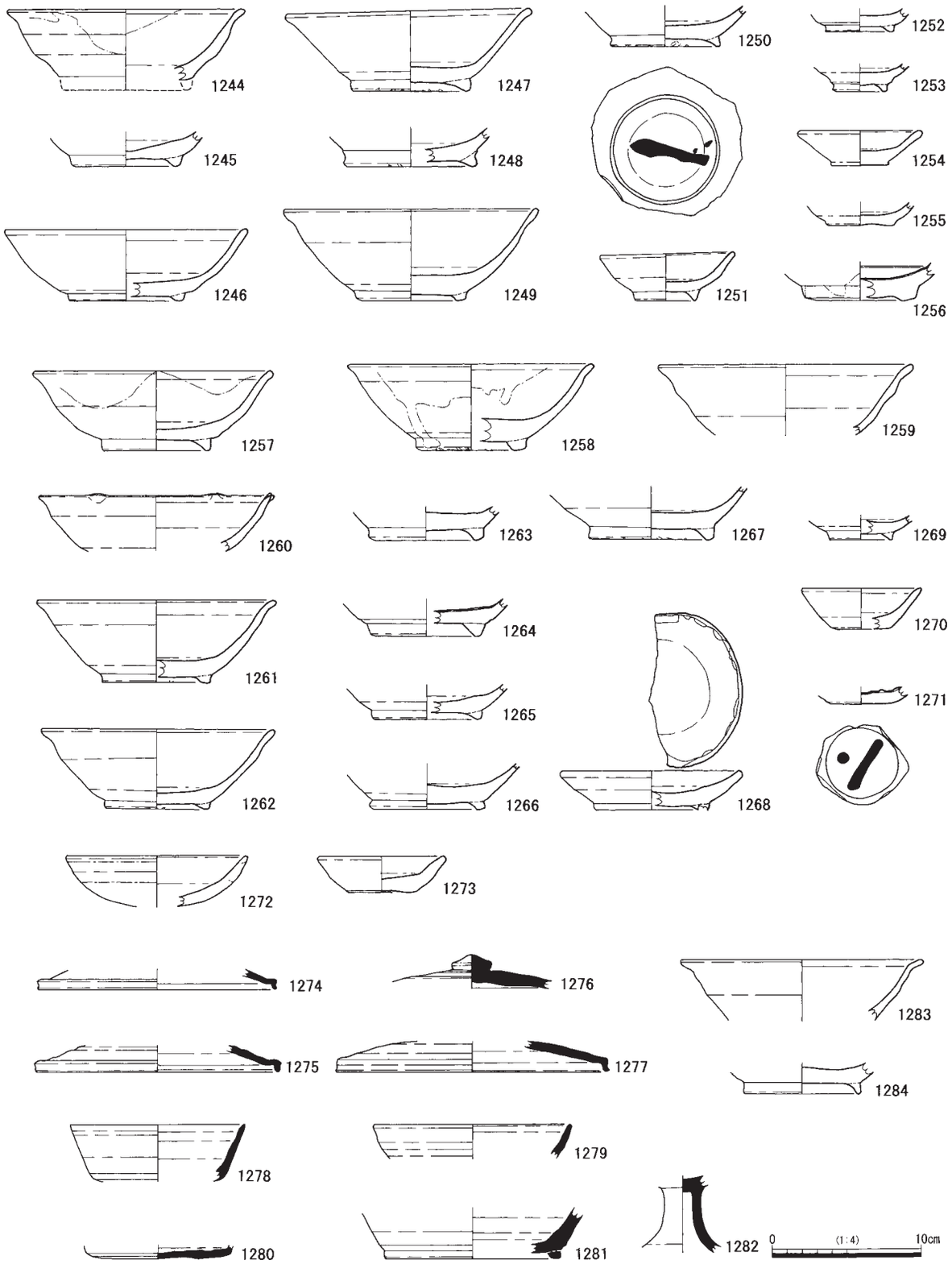


図 291　SD2005 出土遺物（１）

SD2005 から出土した遺物の年代は、上層と下層に差異はなく、13 世紀前葉までのものである。隣接する SD2004 には 13 世紀中葉の遺物が含まれていることから、偶然その時期の遺物が入らなかったとは考えにくい。遺物が示すとおり、13 世紀前葉の溝とみてよいであろう。前述のように、13 世紀前

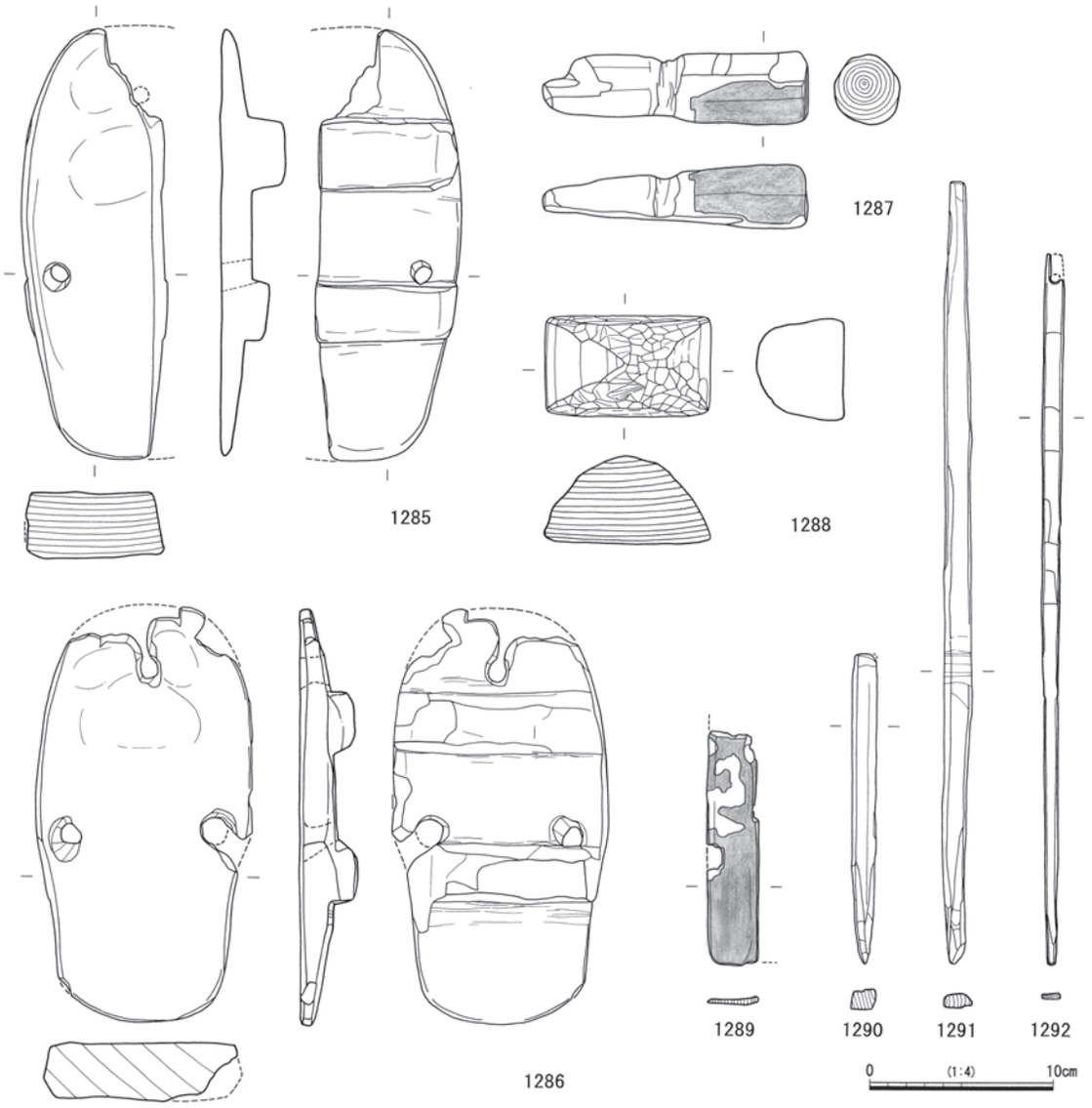


図 292　SD2005 出土遺物（２）

葉までには、遺跡を南北に貫く大規模な河川である SR1001 がほぼ埋没しており、その後は雨天時に SR1003 などの小規模な流路が形成される程度となっている。SD2005 の埋土には砂や小礫の堆積が確認されていることから、13 世紀前葉に河川 SR1001 が埋没した後に開削され、13 世紀中葉までには小規模な流路の土砂が流入して埋没してしまったものと推測される。

SD2006 からは、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。下層からは、山茶碗と土師質土器が出土している。1293 ～ 1323 は渥美湖西産の山茶碗である。1293 ～ 1313 は碗で、Ⅰ－１期からⅢ－１期のものである。1311 と 1312 の底部外面には、墨書が残されている。1311 は「大」、1312 は「一」と読める。1313 には、底部内面に矢印のようなヘラ書きの記号が残されている。1314 は小碗で、Ⅰ－２期のものである。1319 ～ 1323 は小皿で、いずれもⅢ－１期のものである。1324 と 1325 は、ロクロ成形の土師質土器皿である。1326 はいわゆる柱状高台である。

上層からは、山茶碗や土師質土器、貿易陶磁などが出土している。1327 ～ 1359 は、渥美湖西産の山茶碗である。1327 ～ 1349 は碗で、Ⅰ－１期からⅢ－１期のものである。1349 の底部外面には、「山」

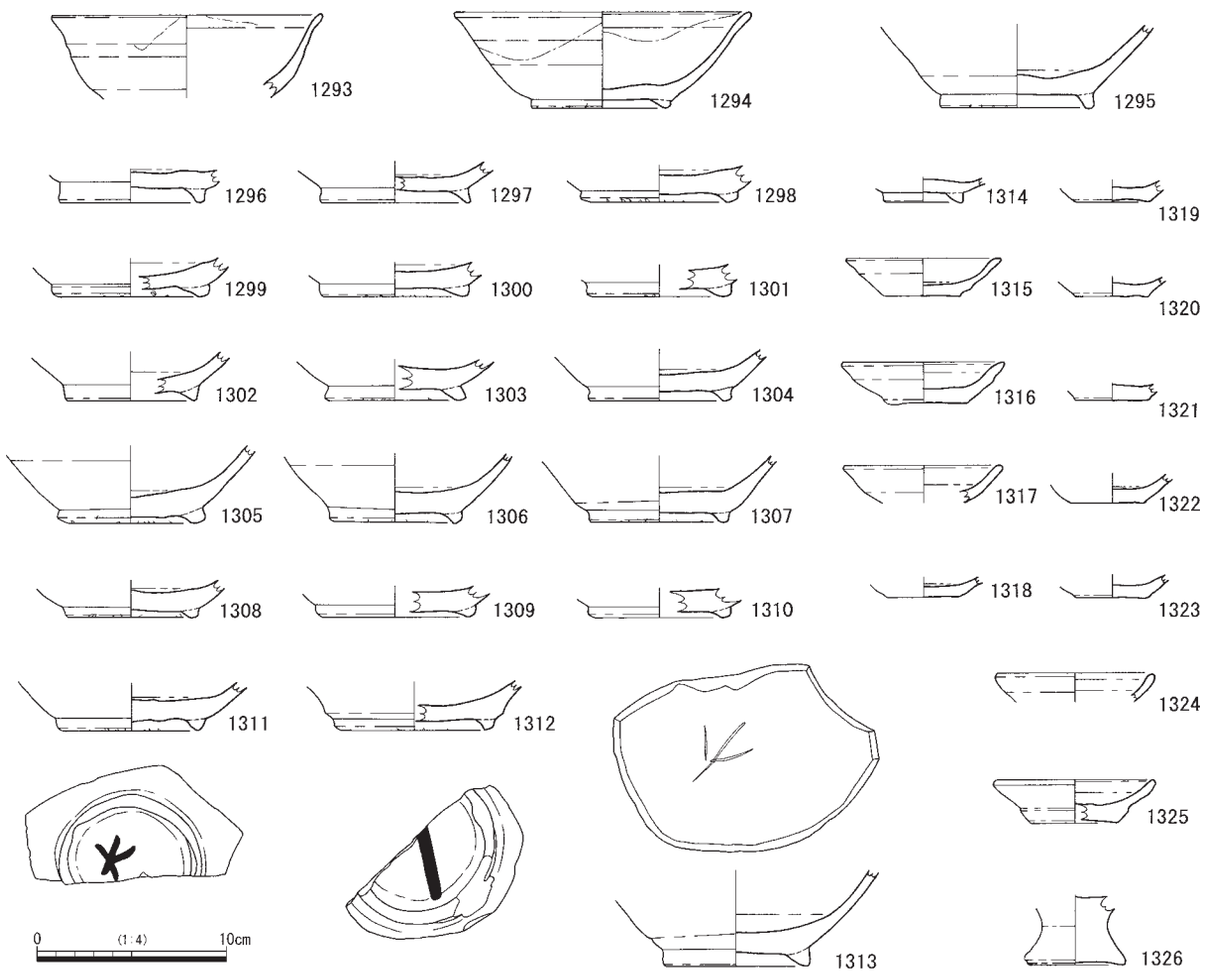


図 293　SD2006 下層出土遺物

と書かれた墨書が残されている。1356 ～ 1359 は小皿で、いずれもⅢ－１期のものである。1360 と 1361 は、渥美湖西産の鉢、1362 は片口鉢である。1363 はロクロ成形の土師質土器皿、1364 は白磁碗である。有機物としては、SD2005 と同様にモモの種が多数出土している。モモの種は、溝の全域から出土しており、合計 88 点採取されている。

SD2006 の出土遺物も、上層と下層から出土したものとの間に年代的な差はみられない。いずれも 13 世紀前葉までのものである。SD2005 と同様に、隣接する SD2004 には 13 世紀中葉の遺物が含まれており、偶然その時期の遺物が入らなかったとは考えにくい。遺物の年代が示すとおり、SD2005 と同時期の 13 世紀前葉の溝であり、13 世紀中葉までには埋没していたものと推定される。

以上のように、SD2004 は 13 世紀後半から 14 世紀、SD2005 と SD2006 は 13 世紀前葉から中葉の溝と推定される。ここで注目されるのは、その形状や位置関係である。同時期に開削された SD2005 と SD2006 は、規模や形状が近似しており、約７ｍの間隔で平行して直線的に掘られている。この２条の溝は、道路の側溝の可能性が高い。現在では、国道 362 号線は調査区の北側に位置しているが、明治時代の地図には北側に道路はなく、調査区の東側で南に曲がり調査区の南側を通っている。中世前期に設置された幹線道路の位置が、近代までほぼ踏襲されていた可能性も考えられる。

SD2004 についても、SD2005 と SD2006 と平行する位置にあることから、SD2005 と SD2006 の埋没後に改削された道路の側溝とみてよいであろう。対になる側溝が確認されていないが、おそらくは南側

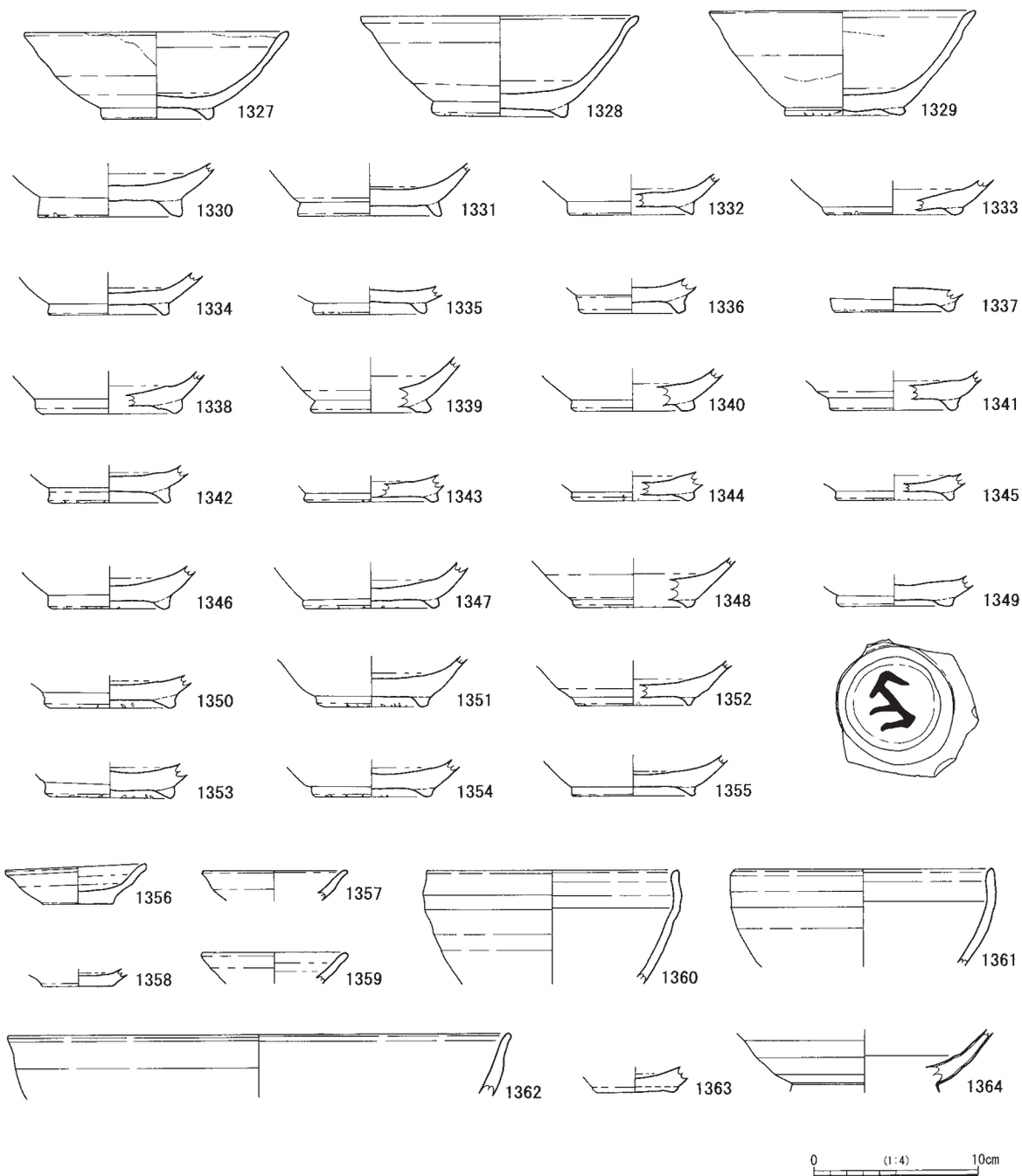


図 294　SD2006 上層出土遺物

の調査区外に位置し、道路の全体が南側に移ったものと推測される。溝が SD2005・2006 より大規模になっているのは、SD2005・2006 が比較的短期間で埋没してしまったことを考慮したのかもしれない。河川が埋没した中世前期に、寺海土遺跡において新たな幹線道路の設置という、それまでの土地利用や区画を変える大規模な事業が行われていた点は、注目すべき事象である。

また、モモの種子が比較的豊富に出土している点も注目される。SD2004 ～ 2006 のいずれからも出土しているが、SD2004 では 26 点しかなく、100 点近く採取されている SD2005・2006 に比べて大きく減少している。モモは、祭祀にも広く用いられた果実であるが、溝の全体に散らばる形で出土しており、積極的に祭祀行為を裏付けるような出土状況は確認されていない。樹木の痕跡は検出されていないが、古代と同様に、食用可能な樹木として道路の周囲にモモが植えられていた可能性も考えられる。

6　井戸

SE1001（図 295 ～ 298、図版 58・75・93・98・100）

調査区の北東隅に位置する。掘方は、直径 1.9 ｍ程のややいびつな円形で、検出面からの深さは 1.2 ｍである。井戸枠と水溜に用いられた曲物が良好な状態で残されていた。

井戸は 70 ㎝四方の正方形である。井戸枠は２段分が完全に残り、東側のみ３段目が遺存していた。上段の井戸枠は、廃絶時に抜き取られたものとみてよい。井戸枠材（1378 ～ 1385）は、長さ 82 ～ 120 ㎝・幅 20 ～ 35 ㎝の板材で、厚さは４㎝程である。対角の隅を切り欠き、鍵の手状にしている。４枚を井桁に組み、それを積み重ねて井戸枠に使用している。土層断面からは、水溜を据えた後に底部を粘土ブロックで固め、その後井戸枠を１段積むごとに裏込めが行われている様子がみてとれる。

底部には小礫が敷き詰められており、中央には曲物を用いた水溜が設置されている。曲物（1377）は、

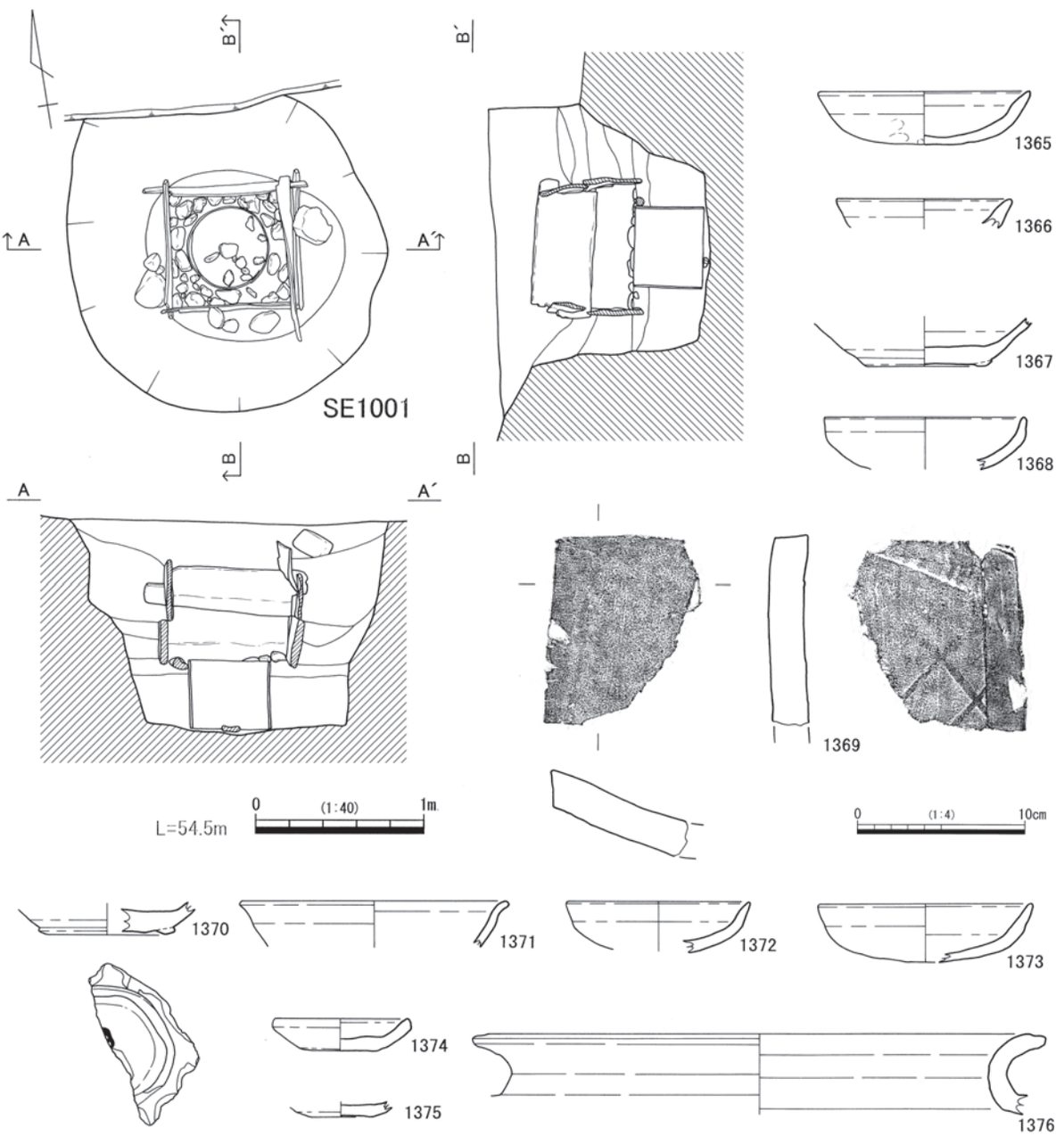


図 295　SE1001 実測図・出土遺物

直径 50 ㎝・高さ 40 ㎝の大きさで、厚さ４㎜の１枚の側板でつくられており、合わせ目は綴じ皮で固定されている。外側には、箍状に３枚の幅の狭い板が回されている。下部には、多くの穴が端部に沿って１列に空けられている。底板は出土しておらず、側板のみの状態で井戸に使用されたとみてよい。

遺物としては、山茶碗や土師質土器、瓦などが出土している。1365 と 1366 は、裏込めの土から出土した土師質土器皿である。いずれも厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が施されている。

1367 ～ 1369 は、埋土の中層から出土したものである。1367 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－２期のも

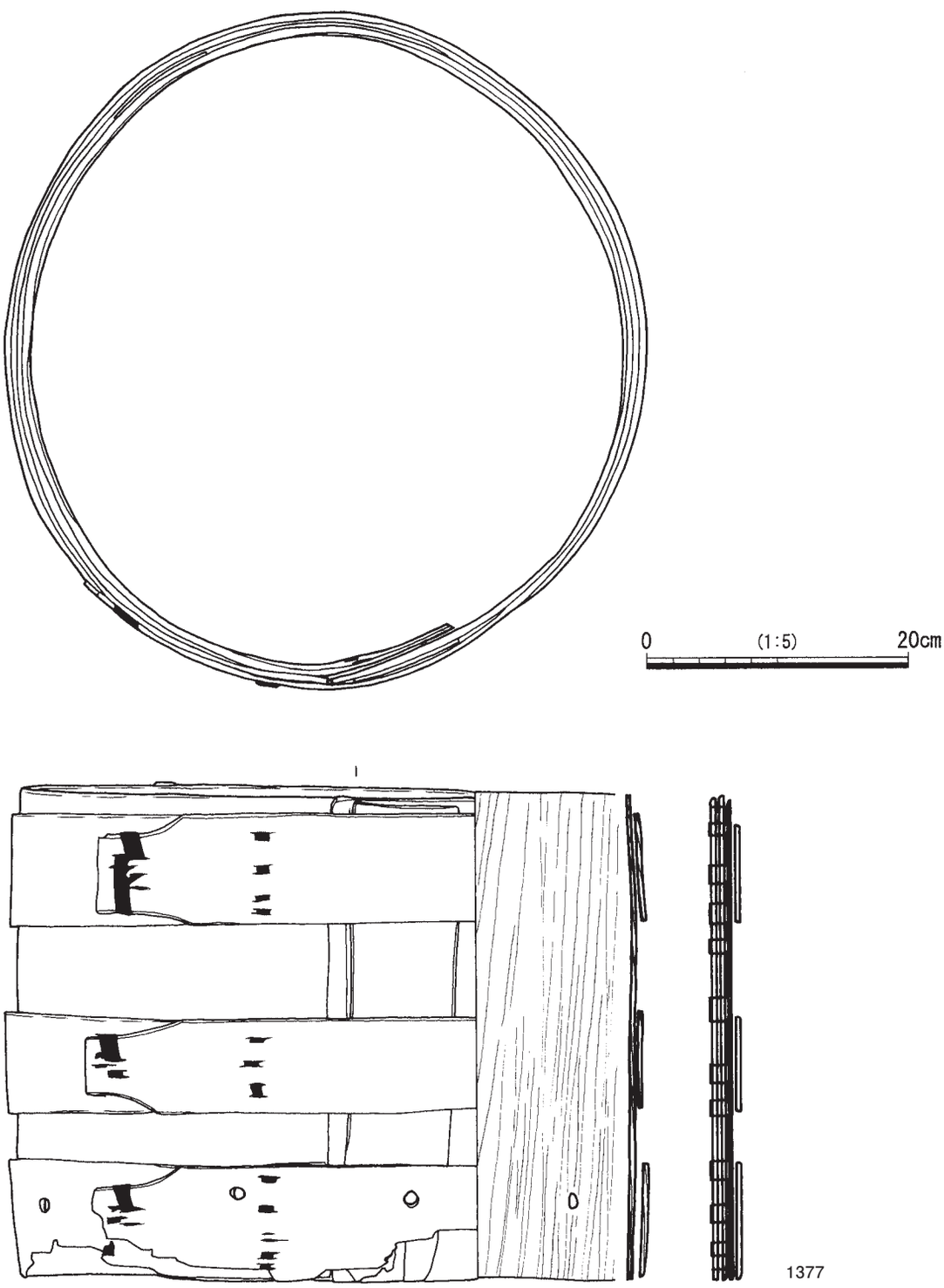


図 296　SE1001 出土曲物

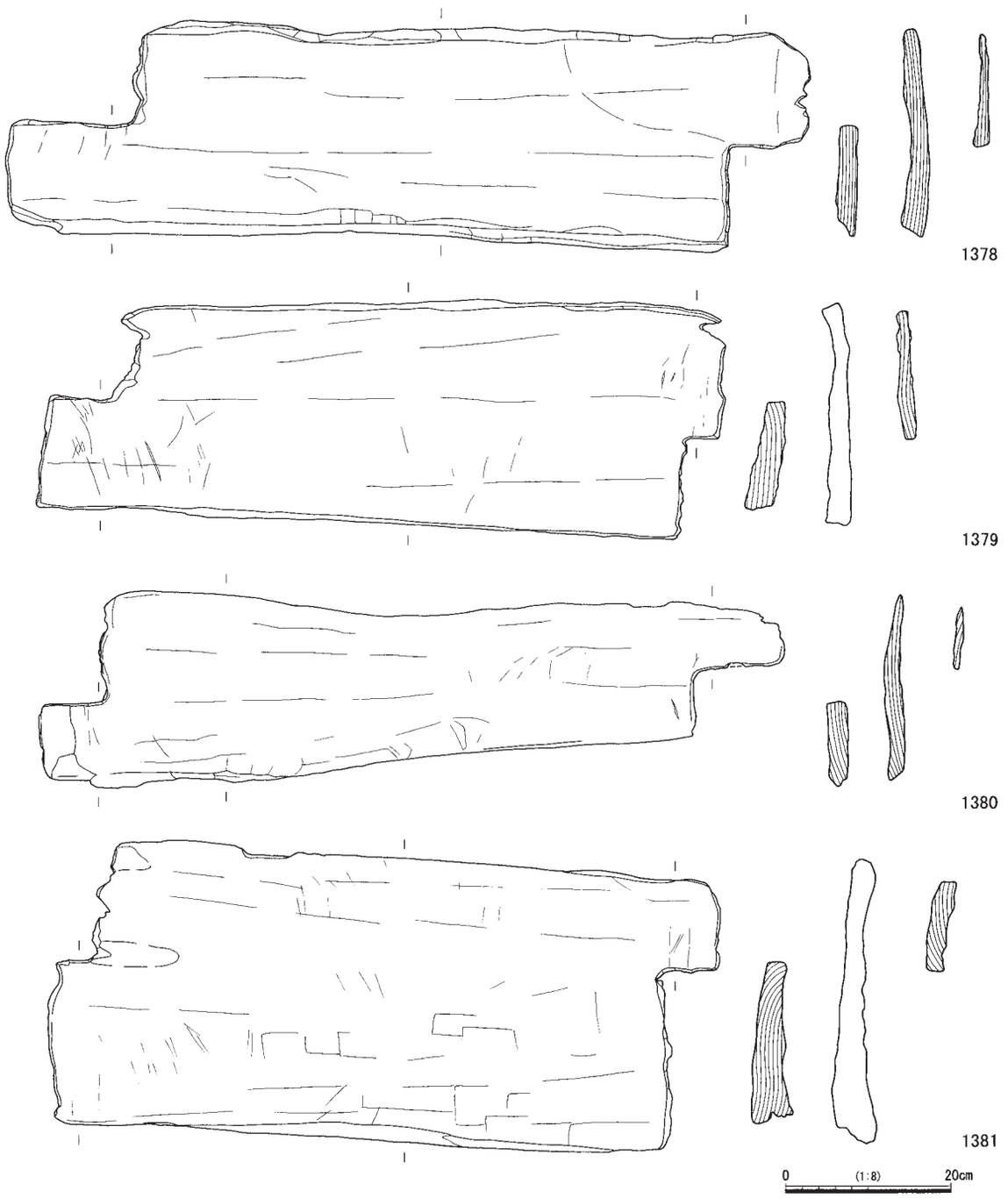


図 297　SE1001 出土井戸枠（上段）

のである。1368 は土師質土器皿である。1369 は平瓦の狭端部の破片である。凹凸面には離れ砂が付着し、凸面には斜格子＋横線の叩き目が残る。中屋遺跡の平瓦ⅡＢ類に相当するものである。

1370 ～ 1376 は、埋土の上層から出土したものである。1370 ～ 1375 は渥美湖西産の山茶碗である。1370 と 1371 は碗で、Ⅲ－２期のものである。1370 には底部外面にわずかに墨書が残っている。1374 と 1375 は小皿で、Ⅲ－２期のものである。1372 と 1373 は土師質土器皿、1376 は渥美産の甕である。

裏込め土より出土した土師質土器皿から、SE1001 は中世前期に築かれた井戸と推定される。おそらくは、大規模な河川 SR1001 が埋没した 13 世紀前葉以降であろう。廃絶時期は、中屋遺跡平瓦ⅡＢ類の瓦が出土していることから、13 世紀後半から 14 世紀頃と推測される。

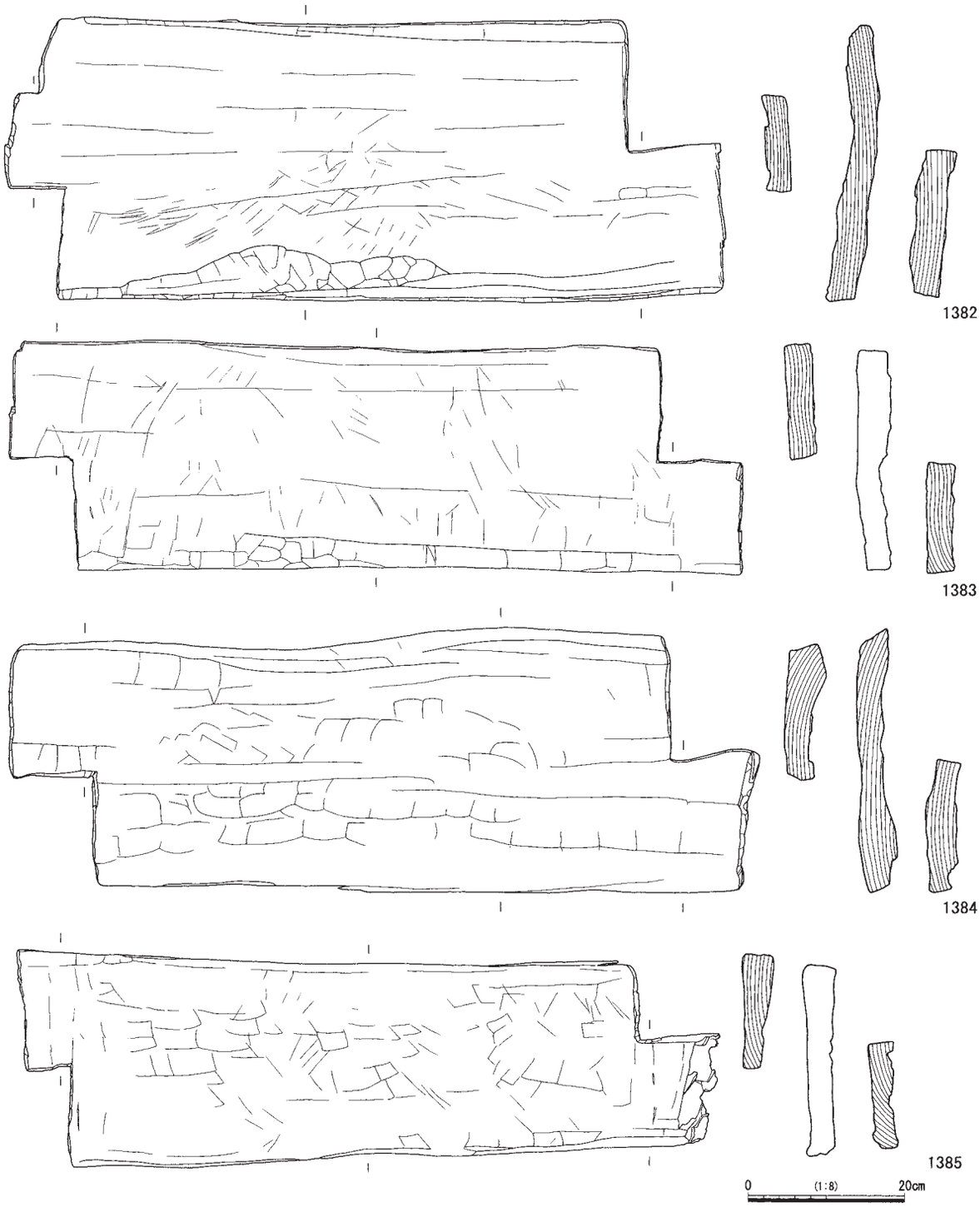


図 298　SE1001 出土井戸枠（下段）

SE1002（図 299、図版 58・93）

調査区のほぼ中央に位置する。SR1001 の掘り下げ後、河床において検出されている。上面は長径 1.6 m・短径 1.4 mの楕円形で、深さは 0.9 mである。平坦な底部から直立気味に立ち上がり、上半は八の字形に大きく開く。井戸枠は出土しておらず、廃絶時に抜き取られたものと推測される。

遺物はいずれも上層から出土している。1386 ～ 1390 は、渥美湖西産の山茶碗である。1386 ～ 1389 は碗であり、Ⅰ期からⅡ期のものである。1390 は小皿であり、Ⅲ－ 1 期のものである。出土している

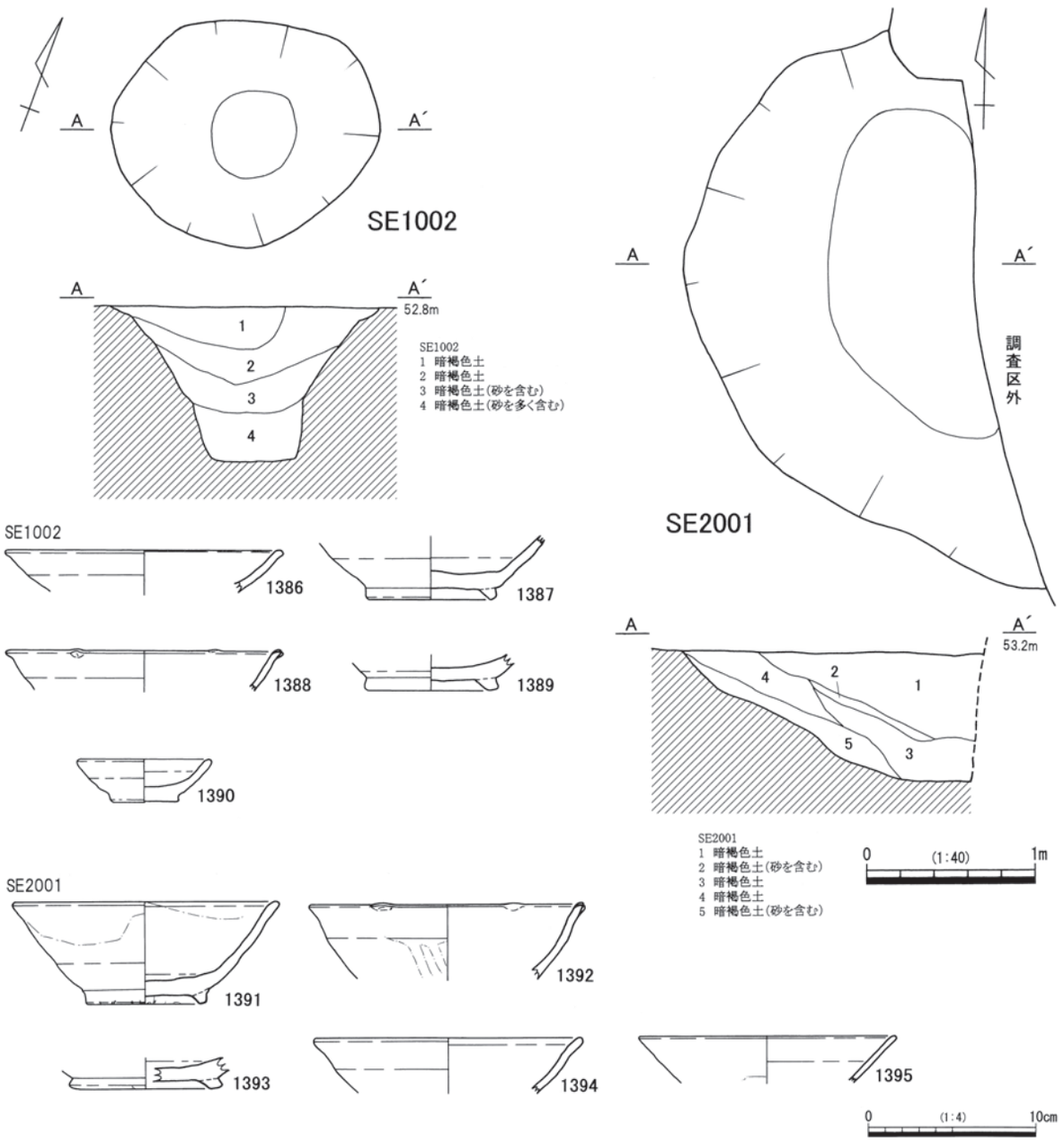


図 299　SE1002・2001 実測図・出土遺物

遺物は、SR1001 が埋没した 13 世紀前葉までのものである。川底に井戸が掘られたとは考えにくく、実際は SR1001 の埋没後の井戸の可能性が高い。13 世紀中葉以降に築かれた井戸であると推定される。

SE2001（図 299、図版 58・93）

調査区の南東に位置しており、東側は調査区外となっている。上面は長径 3.4 ｍの楕円形で、検出面からの深さは 80 ㎝程である。現地での所見に従い井戸として報告するが、大きさの割に浅く、底部からの立ち上がりも緩い傾斜であることから、井戸ではなく大型の土坑の可能性が高い。

遺物としては、山茶碗が 7 点と白磁が 1 点出土している。1391 ～ 1394 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅰ期～Ⅱ期のものである。1395 は白磁の碗である。遺物は乏しいが、中世前期の遺構とみてよいであろう。

7　土坑

SF1001（図 300）

調査区中央やや南側に位置し、SR1002 の河床で検出されている円形の土坑である。直径 1.2 ｍの円形で、底部から 10 ㎝程の深さで検出されている。埋土は暗褐色土の単層である。

なお、調査所見によると、十分な精査を行わないまま河川内を掘り下げてしまったため、河川の底部で検出されている遺構に関しては、その前後関係が明らかでないとのことである。前述のように、SR1001・1002 の下層では大規模な河川の跡が確認されており、SR1001・1002 の以前に、河川の中に遺構が掘られていたとは考えにくい。検出された順序は逆ではあるが、これらの遺構については、いずれも SR1001 や SR1002 の埋没後に掘られた遺構とみるのが妥当であろう。

遺物は、山茶碗が２点出土しているのみである。1396 と 1397 は、いずれも渥美湖西産の山茶碗で、Ⅰ－２期のものである。出土している遺物は 12 世紀のものであるが、先に述べた理由から、遺構の年代は SR1002 が埋没した 13 世紀初頭以降であると推定される。

SF1005（図 300）

調査区中央の西側に位置する。長径 90 ㎝・短径 40 ㎝のややいびつな楕円形の土坑である。深さは 24 ㎝で、埋土は暗褐色土の単層である。一部が小穴により失われている。

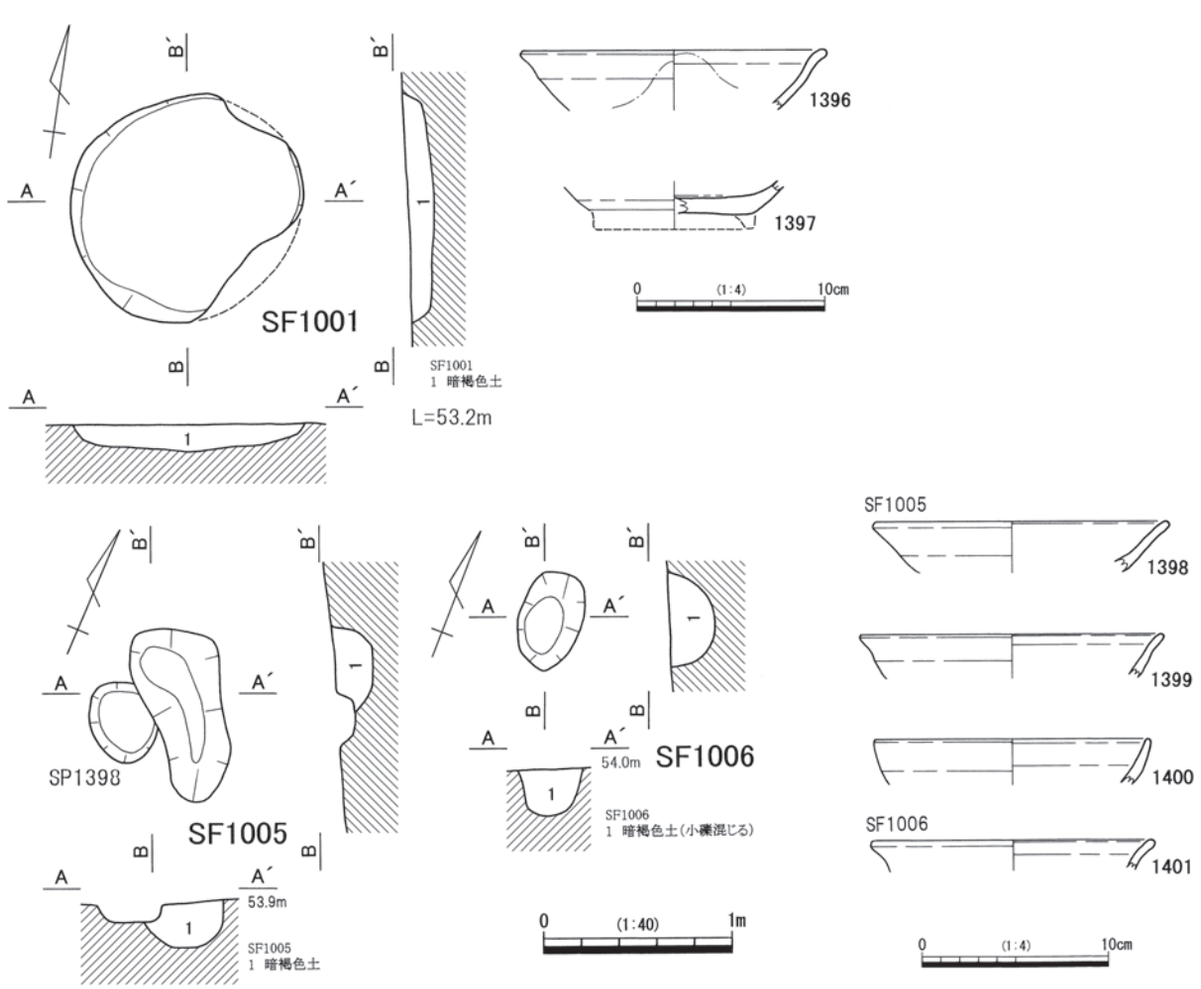


図 300　SF1001・1005・1006 実測図・出土遺物

遺物としては、いずれも破片であるが、埋土から山茶碗４点と土師質土器１点が出土している。1398と1399は、渥美湖西産の山茶碗で、Ⅰ期からⅡ期のものである。1400は土師質土器皿で、口縁部にナデ調整が施されている。遺物は乏しいが、13世紀以降の遺構と推定される。

SF1006（図300）

SF1005の北側に隣接する楕円形の小型土坑である。長径50㎝・短径40㎝で、検出面からの深さは24㎝である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は、埋土から山茶碗の破片が２点出土しているのみである。1401は渥美湖西産の山茶碗である。遺物が乏しいため、詳細な年代は不明であるが、中世前期以降の遺構である。

SF1009（図301、図版79・96）

SF1006から約11ｍ南東に位置する。長径80㎝・短径68㎝の楕円形の土坑で、底部から５㎝程の深さで検出されている。埋土は暗褐色土の単層である。

1402は渥美湖西産の山茶碗で、口縁部が一部欠損しているもののほぼ完形である。土坑の南側に、口を上に向けた状態で置かれていた。何らかの理由により、土坑内に埋納したものとみてよい。この遺物から、SF1009は13世紀前葉の遺構であると推定される。

SF1010（図301）

SF1009から東へ約１ｍに隣接する。長径92㎝･短径84㎝の楕円形の土坑で、深さは10㎝程である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は、埋土から破片が３点出土している。1403と1404は、渥美湖西産の山茶碗で、Ⅱ期のものである。1406は渥美産の甕の口縁部である。遺物は乏しいが、概ね13世紀以降の遺構とみてよい。

SF1011（図301、図版94）

SF1005の南東に隣接する。直径１ｍ程のややいびつな円形で、深さは12㎝である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物としては、土師質土器が出土している。1405は、ほぼ完形の土師質土器皿であり、口縁部には

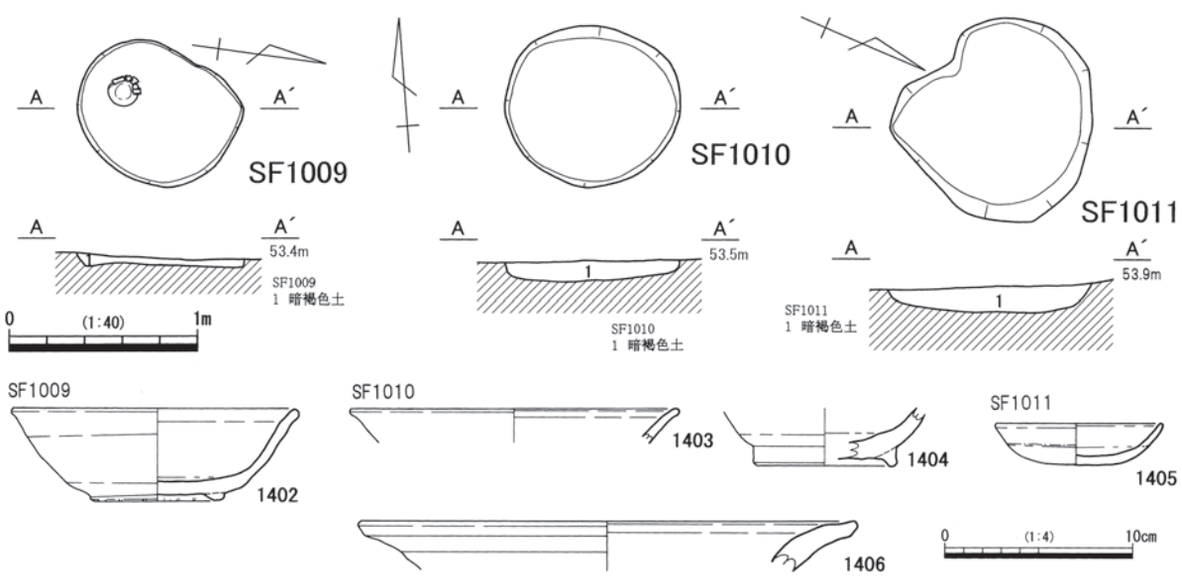


図301　SF1009 ～ 1011 実測図・出土遺物

強いナデ調整が施されている。出土状況についての記録がないため、出土した状況は不明ではあるが、土坑に埋納された遺物の可能性もある。このほかに、皿とみられる土師質土器の小片が1点出土している。詳細な年代の特定は困難であるが、中世前期の遺構と推定される。

SF1013（図302、図版61・77・95・96・100）

調査区北東部に位置する。主軸を東西方向とする隅丸長方形の土坑である。東側がSX1012に切られていることが確認されている。幅は120㎝で、長さは180㎝程と推定される。深さは検出面から45㎝である。埋土は3層に分けられており、いずれも暗褐色土であるが、中層（第2層）には地山ブロックが混じっており、人為的に埋め戻されていることがわかる。

底部からは、山茶碗の小皿が2点（1407・1408）、口を上に向けて置かれた状態で出土している。1407と1408は、いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅲ－1期のものである。1408の底部外面には、記号状の墨書が確認できる。1409～1411は、埋土から出土した破片である。1409と1410は、渥美湖西産の山茶碗で、Ⅱ期のものである。1411は土師質土器皿である。

埋納された1407と1408の年代から、13世紀前葉の遺構であると推定される。土坑の形状からすると、土坑墓の可能性も考えられる。

SF1015・1016（図303、図版58・79・96）

SF1010から約5ｍ東に位置する。SR1001の河床において検出されており、SF1016がSF1015を切っていることが確認されている。

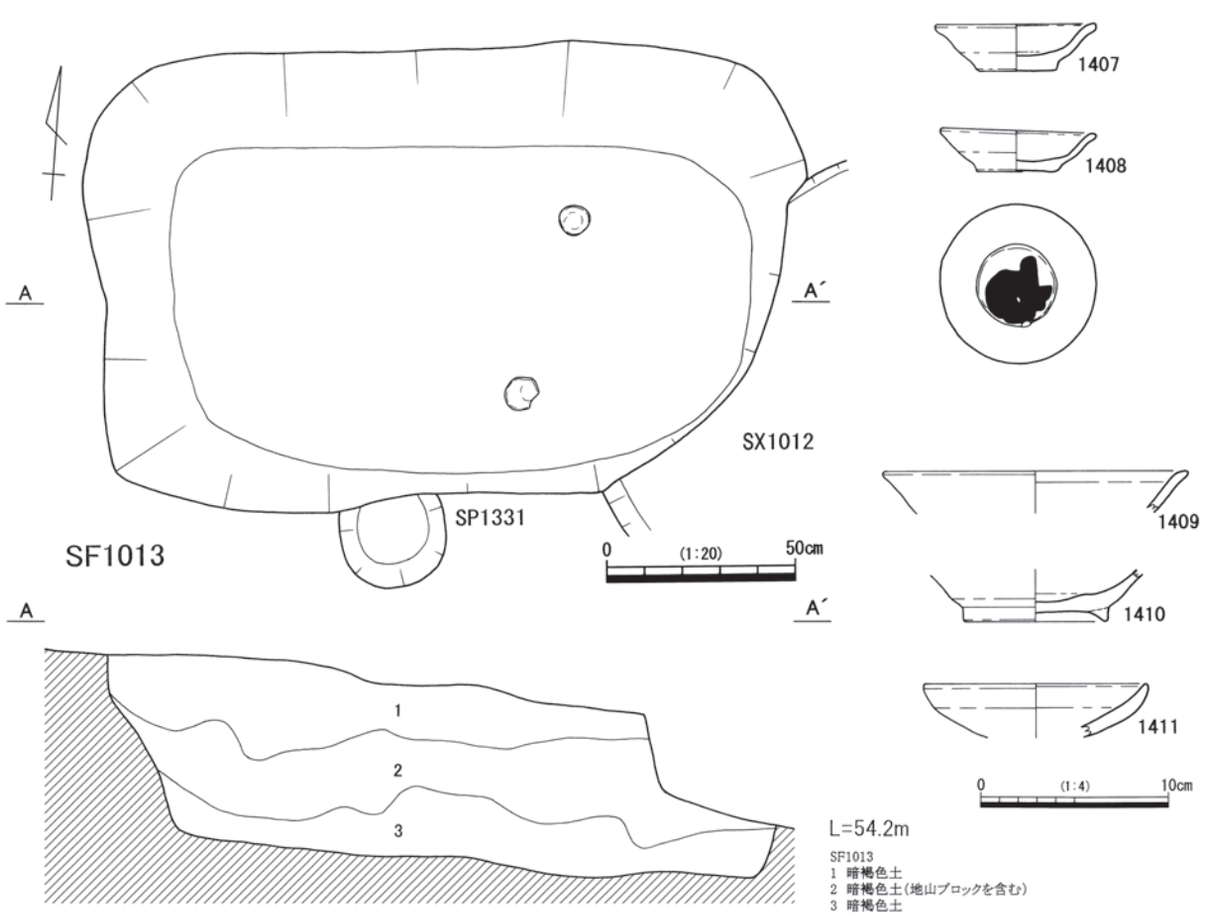


図302　SF1013実測図・出土遺物

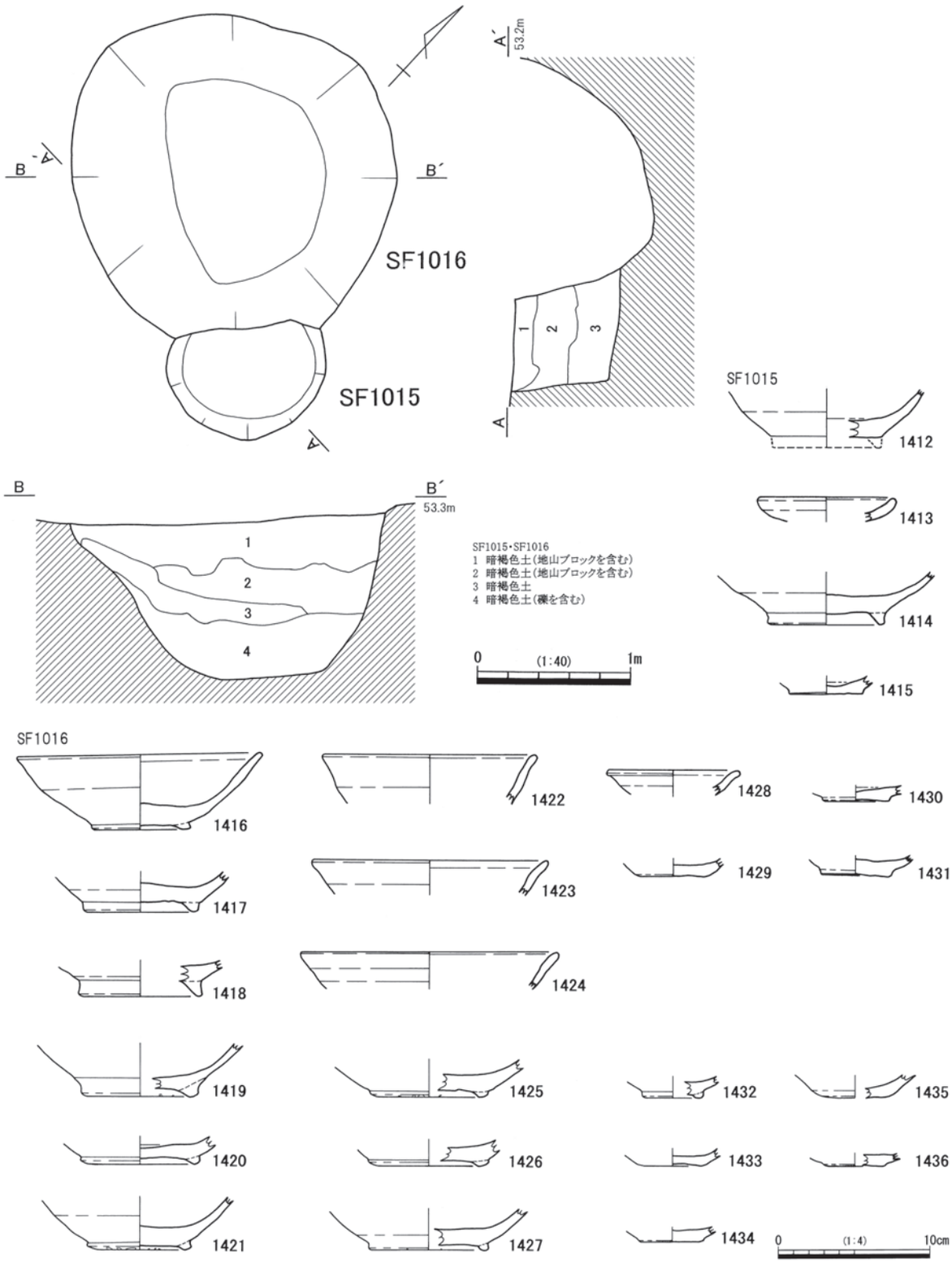


図 303　SF1015・1016 実測図・出土遺物

SF1015 は、直径１㎝程度の円形と推定され、深さは検出面から 0.7 ｍとなっている。埋土は３層に分けられており、いずれも暗褐色土であるが、中層には地山ブロックが混じる。

遺物は少なく、下層からは山茶碗が４点と土師質土器が２点、中層からは山茶碗が２点、上層からは山茶碗が１点出土している程度である。1412 と 1413 は下層から出土した遺物である。1412 は渥美湖西

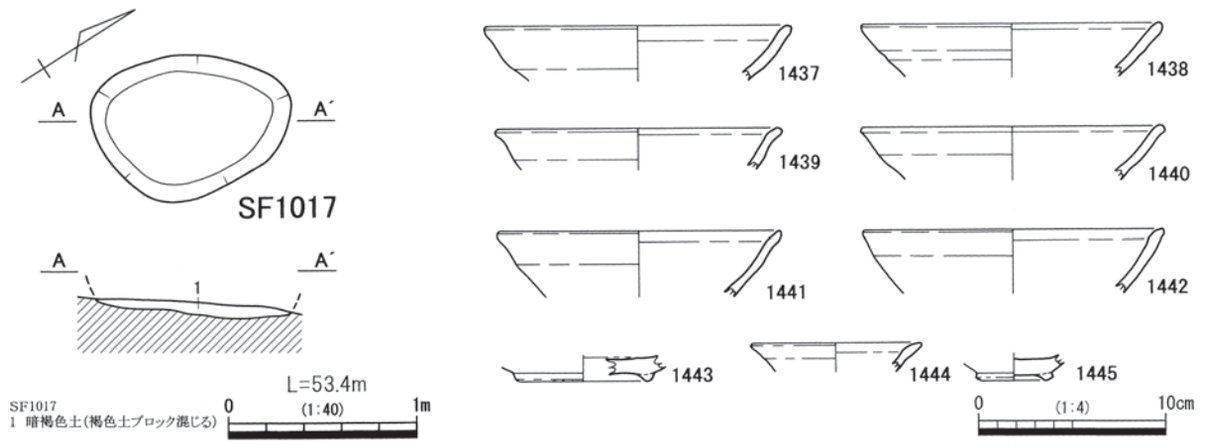


図 304　SF1017 実測図・出土遺物

産の山茶碗で、Ⅲ－１期のものである。1413 は土師質土器皿である。1414 は中層から出土した山茶碗である。渥美湖西産の製品で、Ⅰ－２期のものである。被熱しており、全体に煤が付着している。1415 は知多産の山茶碗の小皿で、５期のものである。

SF1016 は、直径 2.2 ｍのややいびつな円形で、深さは検出面から１ｍである。埋土は４層に分けられている。上層に地山ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻されていることがわかる。

遺物は、山茶碗や土師質土器を中心に、比較的多く出土している。1416 は下層から出土した、渥美湖西産の山茶碗である。Ⅲ－１期のもので、口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。1417 ～ 1427 は、上層から出土した山茶碗である。1427 は知多産で、そのほかは渥美湖西産の製品である。Ⅰ－２期からⅢ－２期のものである。1428 は中層から出土した山茶碗の小皿である。渥美湖西産の製品で、Ⅱ期のものである。1430 と 1431 は、上層から出土したロクロ成形の土師質土器皿である。1429・1433 ～ 1436 は、上層から出土した山茶碗の小皿である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅲ－１期のものである。1432 は山茶碗の小碗で、上層から出土している。渥美湖西産の製品で、Ⅰ－２期のものである。

両遺構ともに、先述のように SR1001 の河床で検出されてはいるが、実際は SR1001 が埋没した後の遺構である可能性が高い。SR1001 が 13 世紀前葉にほぼ埋没していることから、SF1015 はその直後の 13 世紀前葉、SF1016 は 13 世紀中頃以降に掘られたものと推定される。規模や深さなどからみて、SF1016 は井戸の可能性も考えられる。

SF1017（図 304、図版 61）

SF1016 から約１ｍ北に隣接しており、SR1001 の河床で検出されている。長径 105 ㎝・短径 75 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは５㎝程しかない。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は、埋土から山茶碗の破片が９点出土している。1437 ～ 1445 は、渥美湖西産の山茶碗である。1437 ～ 1443 は碗、1444 と 1445 は小碗で、Ⅰ－２期からⅢ－１期のものである。SR1001 が埋没した後の遺構である可能性が高いことから、13 世紀前葉以降に掘られた遺構であると推定される。

SF1018 ～ 1020（図 305）

SF1018 と SF1020 は SR1005、1019 は SR1006 と重複する位置にある土坑である。いずれも流路に切られていることが確認されている。

いずれも遺物は出土していないが、SR1005 と 1006 が 13 世紀中葉頃の流路と推定されることから、いずれもそれ以前の 13 世紀前半頃の遺構である可能性が高いと推測される。

SF1022（図 305、図版 96）

SF1020 から約８ｍ南西に位置する。直径 65 ㎝の円形で、検出面からの深さは６㎝程しかない。埋土は暗褐色土で、地山ブロックが混じっている。

遺物は山茶碗が１点出土しているのみである。1446 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅱ期のものである。３分の１程度を欠く破片であり、土砂とともに流入した遺物である。遺物が１点のみのため、遺構の詳細な年代は不明であるが、概ね 13 世紀以降であるとみてよいであろう。

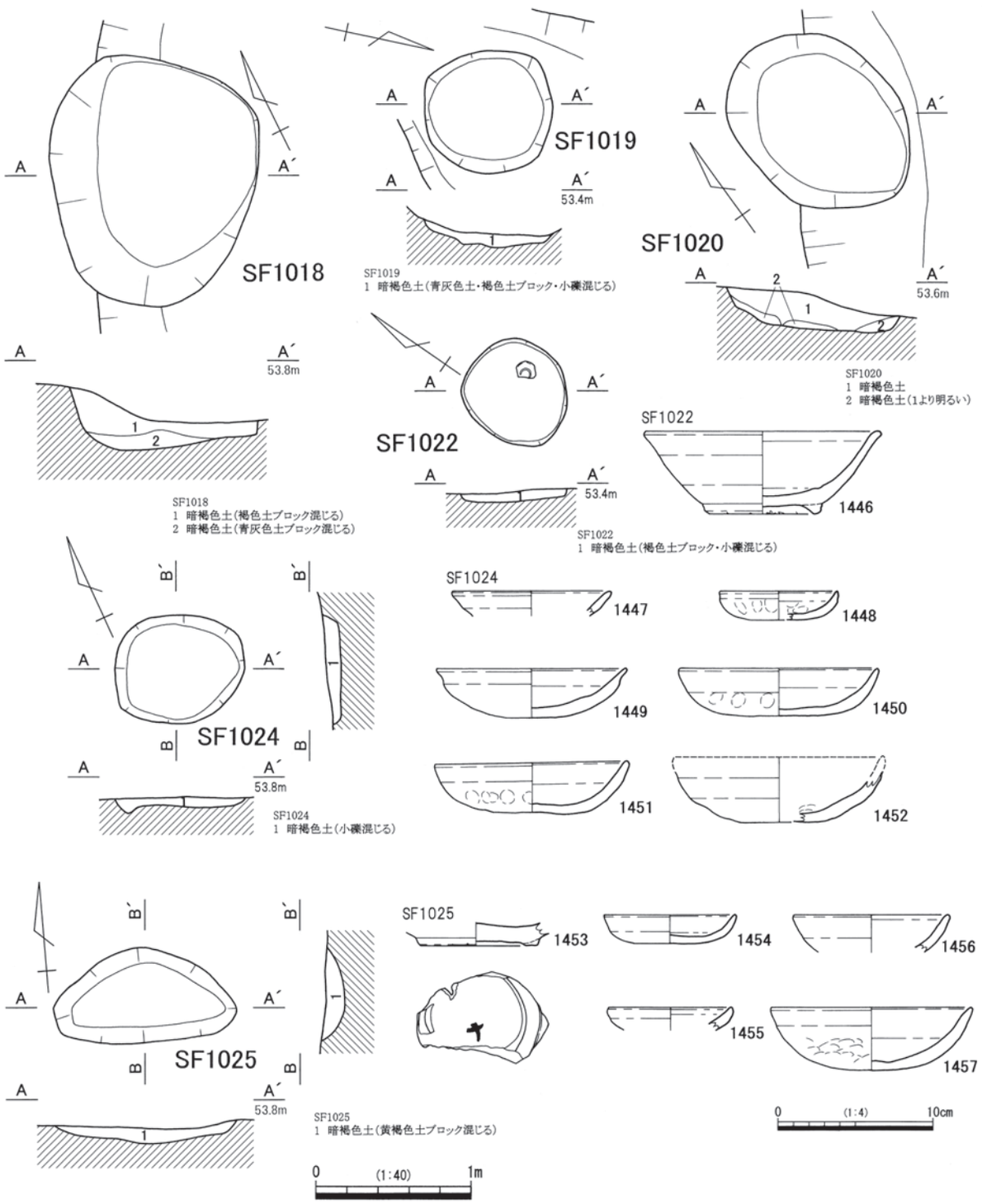


図 305　SF1018 ～ 1025 実測図・出土遺物

SF1024（図 305、図版 61・94）

SF1022 から約 8 m北に位置する。長径 80 ㎝・短径 68 ㎝の楕円形の土坑で、検出面からの深さは 8 ㎝程である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物としては、山茶碗と土師質土器皿が出土している。1447 は渥美湖西産の山茶碗である。口縁部の破片で、Ⅲ期のものとみられる。1448 ～ 1452 は、手づくね成形の土師質土器皿である。1448 は小皿、1449 ～ 1452 は坏形のもので、口縁部には強いナデ調整が施されている。1451 は割れてはいたが、接合されてほぼ完形になっている。このほかにも、土師質土器皿の破片が 3 点出土しており、土師質土器皿の廃棄土坑の可能性がある。詳細な年代は不明であるが、13 世紀代の遺構と推定される。

SF1025（図 305、図版 61・94・100）

SF1024 の南側にほぼ接するように位置している。長径 120 ㎝・短径 60 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 10 ㎝程である。埋土は暗褐色土で、地山ブロックが混じっている。

遺物としては、埋土から山茶碗と土師質土器皿が出土している。1453 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－ 2 期のものである。底部外面には「十」のような記号が墨書されている。1454 ～ 1457 は、手づくね成形の土師質土器皿である。いずれも口縁部には強いナデ調整が施されている。図示したもの以外には、山茶碗の破片が 1 点と土師質土器皿の破片が 6 点出土している。出土遺物から、SF1025 は 13 世紀後半頃の遺構と推定される。

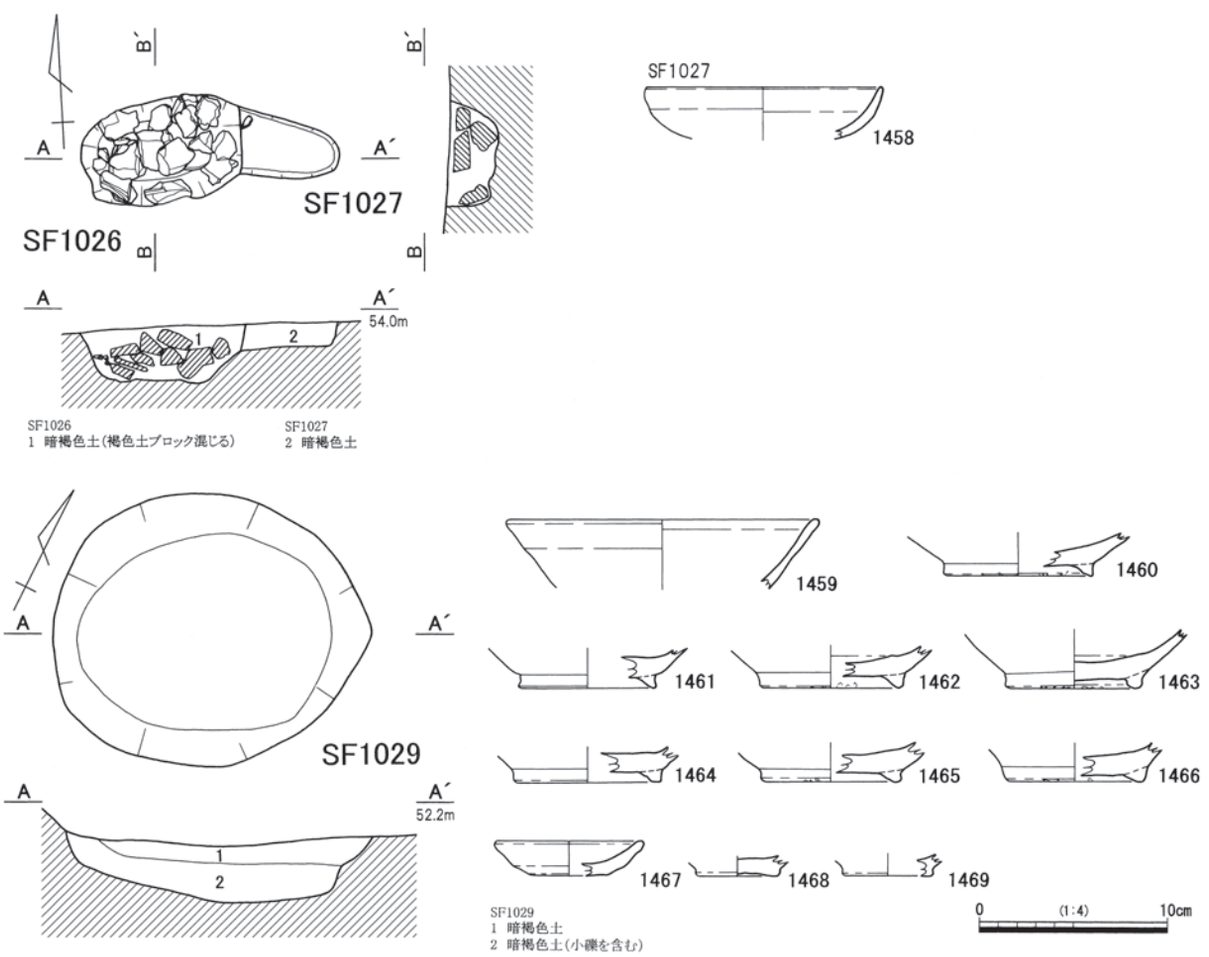


図 306　SF1026 ～ 1029 実測図・出土遺物

SF1026・1027（図 306、図版 93）

SF1025 から約６ｍ北東に位置する。SF1026 は SF1027 を切っていることが確認されている。

SF1026 は、長径 86 ㎝・短径 56 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 30 ㎝である。土坑の内部には、10 ～ 20 ㎝程の大きさの角礫が詰め込まれていた。SF1027 は、短径 30 ㎝・長径 50 ㎝以上の規模の楕円形であると推定される。検出面からの深さは 15 ㎝程である。いずれも埋土は暗褐色土であるが、SF1026 には地山ブロックが混じっていた。

遺物は、SF1027 から土師質土器皿（1458）が１点出土しているのみである。詳細な年代は不明であるが、いずれの土抗も中世前期以降に掘られた遺構とみてよい。

SF1029（図 306、図版 61）

SF1026 から約 21 ｍ南に位置し、SR1001 の河床で検出されている。長径 160 ㎝・短径 150 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 30 ㎝程である。埋土は２層に分けられているが、いずれも暗褐色土である。

遺物としては、山茶碗や土師質土器などが出土している。1459 ～ 1469 は、渥美湖西産の山茶碗である。1459 ～ 1466 は碗であり、Ⅰ－１期からⅢ－１期のものである。1467 ～ 1469 は小皿であり、いずれもⅢ－１期のものである。図化したものほかに、山茶碗 19 点、土師質土器１点、渥美産の甕２点が出土している。ほかの遺構と同様に、SF1029 は SR1001 の埋没後に掘られた遺構である可能性が高い。出土している遺物と総合すると、13 世紀前葉の遺構であると推定される。

SF1032（図 307、図版 94・95）

SF1025 から約３ｍ南西に位置する。長径 100 ㎝・短径 70 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは５㎝程しかない。埋土は、地山ブロックと小礫の混じる暗褐色土である。

遺物は、埋土から、山茶碗１点と土師質土器皿が２点出土しているのみである。1470 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－１期のものである。1471 と 1472 は手づくね成形の土師質土器皿である。同一個体の破片かもしれない。遺構の詳細な年代は不明であるが、概ね 13 世紀代の遺構と推定される。

SF1033（図 307）

SF1032 から約６ｍ南東に位置する。直径 80 ㎝の円形で、底部が辛うじて検出できたような状態である。埋土は、地山ブロックが混じる暗褐色土である。

遺物は山茶碗の破片が２点（1473・1474）出土しているのみである。遺物が乏しいため、詳細な年代は不明であるが、中世以降の土坑である。

SF1034（図 307、図版 61・94・96）

調査区の南東側に位置する。長径 110 ㎝・短径 96 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 40 ㎝程である。埋土は３層に分けられている。いずれも暗褐色土であるが、中層には地山ブロックが混じる。

遺物としては、山茶碗や土師質土器が出土している。1475 ～ 1483 は渥美湖西産の山茶碗である。1475・1476・1479・1480・1483・1484 は碗であり、Ⅰ－２期からⅡ期のものである。1483 は小碗で、Ⅰ－２期のものである。完形品で、内面には漆が厚く付着する。1484 は手づくね成形の土師質土器皿である。以上は下層からの出土である。1477・1478・1481・1482 は、渥美湖西産の山茶碗で、1477 と 1478 は碗、1481 と 1482 は小碗である。1485 はロクロ成形の土師質土器皿である。これらは中層からの出土である。下層の遺物と中層の遺物との間に、大きな年代の差はみられない。出土遺物から、12 世紀後半から 13 世紀にかけての遺構であると推定される。

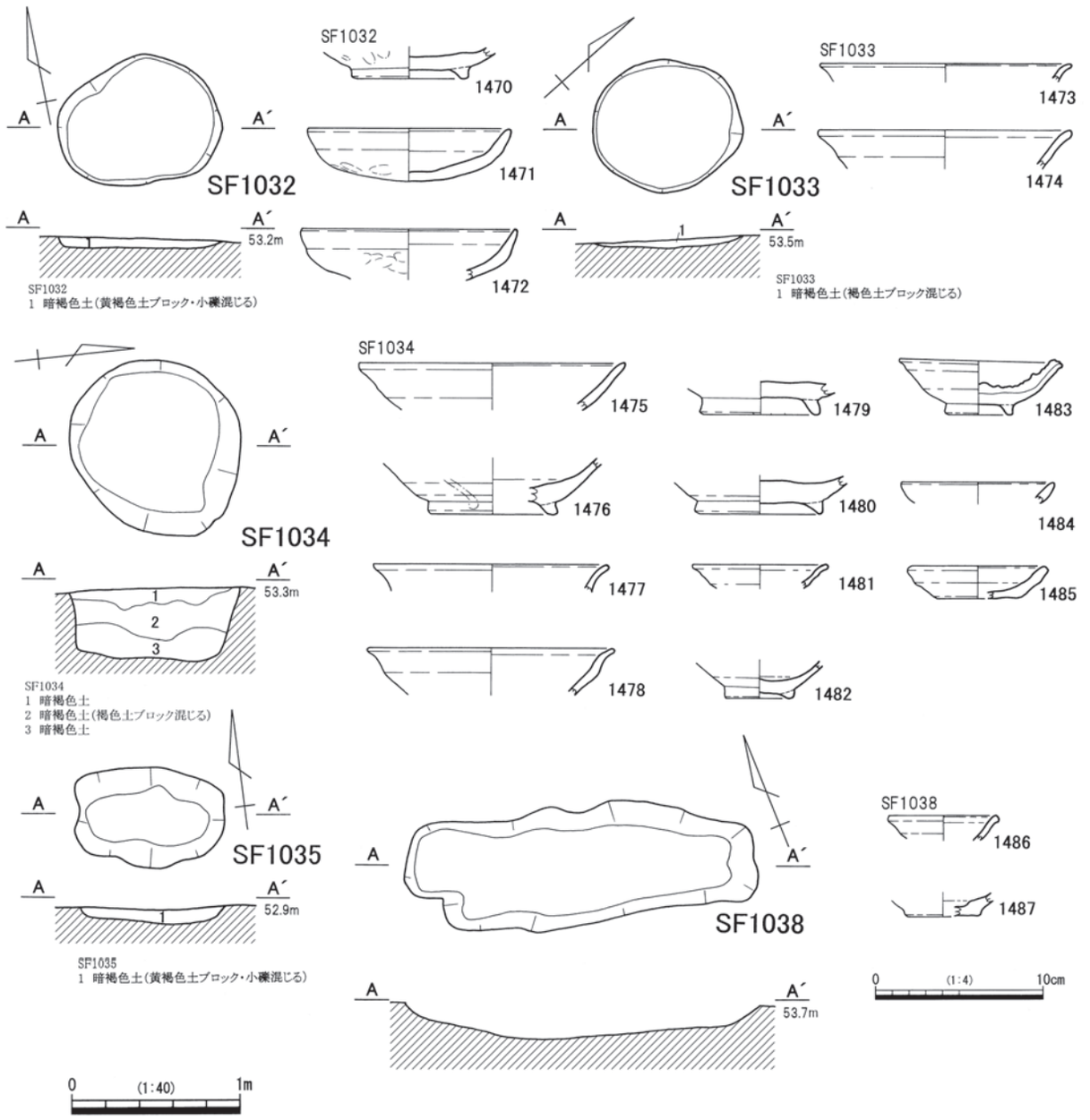


図 307　SF1032 ～ 1038 実測図・出土遺物

SF1035（図 307）

SF1033 から約 4 m北に位置する。長径 84 ㎝・短径 60 ㎝の楕円形で、検出面からの深さは 10 ㎝程である。埋土は、地山ブロックと小礫が混じる暗褐色土である。

遺物としては、土師質土器皿の破片が 2 点出土しているのみである。手づくね成形のものであり、厚手のつくりで口縁部には強いナデ調整が施されている。中世前期のものとみてよい。遺物が乏しいため詳細な年代は不明であるが、中世以降に掘られた土坑である。

SF1038（図 307）

SF1035 から約 2 m北東に位置する。長さ 210･幅 70 ㎝の長方形で、検出面からの深さは 20 ㎝程である。調査時の認識に従い土坑としたが、溝の可能性もある。埋土の状況については、記録がないため不明である。

遺物は、山茶碗２点と土師質土器１点が出土している。1486 は、渥美湖西産の山茶碗の小皿である。山茶碗はこのほかに碗の小片が１点出土している。1487 はロクロ成形の土師質土器皿である。遺物が乏しいため、詳細な年代は不明であるが、中世以降の遺構である。

SF2001（図 308）

調査区の南西部に位置する。長径 128 ㎝･短径 84 ㎝のややいびつな楕円形で､深さは５㎝程しかなく､底部付近でかろうじて検出できたような状況である。埋土は暗褐色土の単層である。

遺物は、山茶碗の破片が２点と須恵器の破片が１点が出土しているのみである。1488 は渥美湖西産

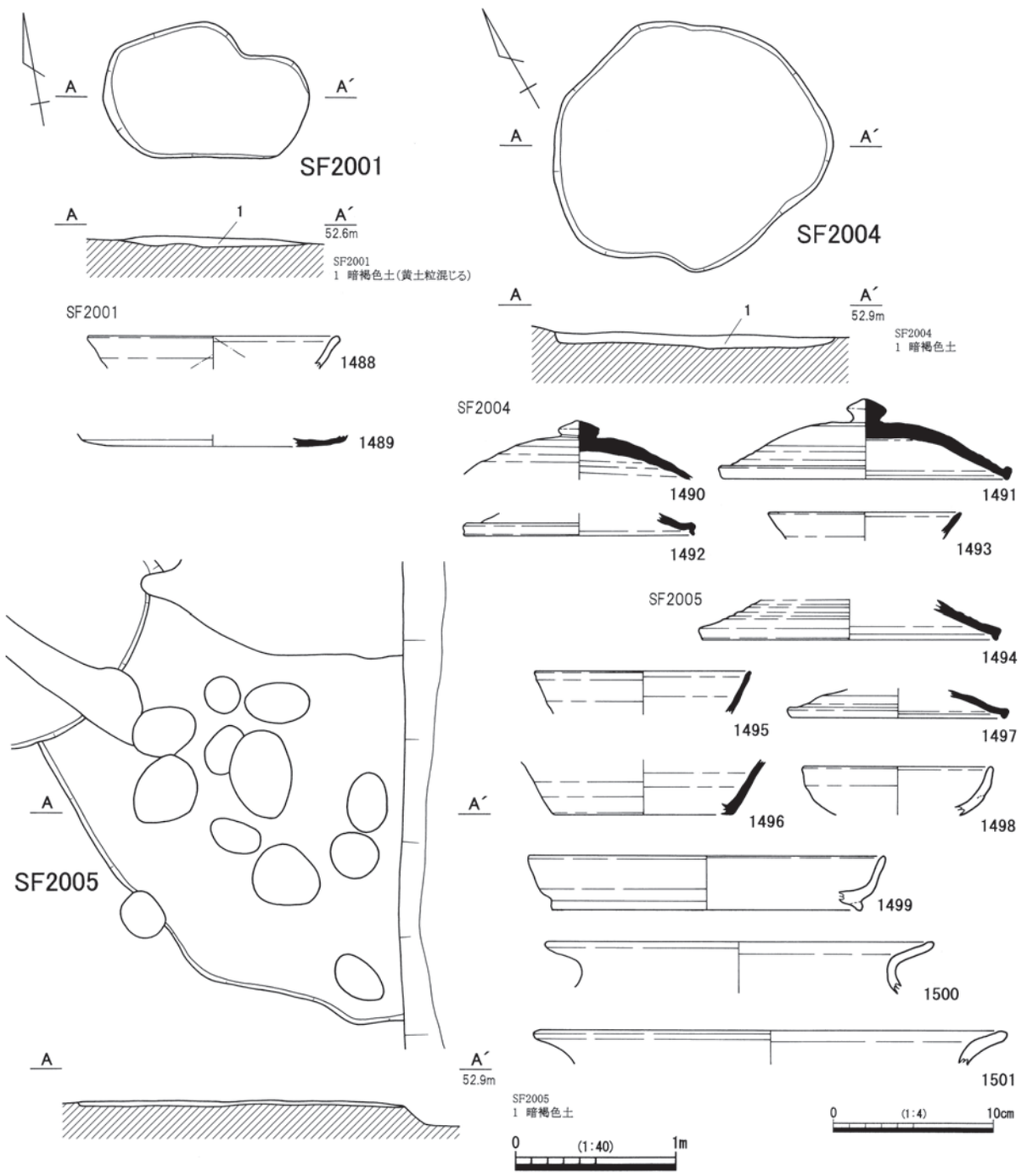


図 308　SF2001・2004・2005 実測図・出土遺物

の山茶碗で、Ⅰ期からⅡ期のものである。1489 は須恵器の坏身であり、埋没の過程で周辺から流入したものである。遺物が乏しいため、詳細な年代は不明であるが、中世以降の遺構である。

SF2004（図 308、図版 62）

SF2001 から約 6 m西に位置する。長径 176 ㎝・短径 144 ㎝のややいびつな楕円形で、深さは 10 ㎝程である。埋土は暗褐色土である。SF2005 と切り合っており、SF2005 より後出する遺構であることが確認されている。

遺物としては、須恵器が 4 点出土している。1490 ～ 1492 は坏蓋、1493 は坏である。底部付近しか遺存しないこともあり遺物は乏しいが、寺海土遺跡で多数出土している中世の遺物が 1 点も含まれていないことから、出土遺物が示すように 8 世紀の遺構とみてよいであろう。

SF2005（図 308、図版 62）

SF2004 の北側に位置する。北・西・南側が他の遺構によって失われており、全体の形状や規模は明らかでない。また、内部も多くの小穴によって、虫食い状に失われている。南北に約 2 m、東西に約 2.2 mの範囲が残存している。検出面からの深さは 5 ㎝程で、底部付近がわずかに残る程度である。埋土は暗褐色土である。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。1494 ～ 1497 は須恵器である。1494 と 1497 は坏蓋、1495 と 1496 は坏である。1498 ～ 1501 は土師器である。1498 は坏身、1499 は高台付きの皿であり、全面に赤彩が施されている。1500 と 1501 は甕である。図化したもののほかに、須恵器と土師器の破片が多数出土している。これらの遺物から、 8 世紀の遺構であると推定される。

寺海土遺跡で確認された明確な古代の遺構は、SF2005 と SF2004、後述の SF2018 の 3 基のみである。いずれも底部付近しか遺存していなため出土遺物も限られているが、周辺の中世の遺構からは須恵器や土師器などの古代の遺物が多く出土している。いずれも比較的規模の大きな土坑であり、多量の遺物が投棄された廃棄土坑であった可能性が高い。

SF2011（図 309、図版 100）

SF2001 から約 2 m南に位置する。南北に 1.7 m、東西に 3.2 mの規模で検出されている大型の土坑である。深さは検出面から 5 ㎝程度しかなく、底部付近でかろうじて検出された程度である。SD2004 の掘り下げ後に検出されたため、SD2004 に切られる形で図化されているが、現地において両遺構の前後関係は把握できていない。埋土は暗褐色土である。

遺物としては、山茶碗や土師質土器が出土している。1502 ～ 1504 は、渥美湖西産の山茶碗である。1502 ～ 1503 は碗、1504 は小皿であり、Ⅲ－ 1 期からⅢ－ 2 期のものである。1503 の底部外面には、墨書が残されている。1505 はロクロ成形の土師質土器皿である。これらのほかに、細片ではあるが山茶碗が 6 点と土師質土器が 5 点出土している。SD2004 との切り合い関係が定かでないこともあり、詳細な年代は不明であるが、13 世紀中葉以降に掘られた遺構である。

SF2018（図 309）

SF2005 の東側に隣接している。北側は SD2005 によって失われている。北側が失われているため全体の形状や規模は不明であるが、東西約 2.7 m・南北約 1 mの規模で確認された大型の土坑である。深さは検出面から 10 ㎝程と浅い。埋土は暗褐色土である。

遺物は少ないが、須恵器 1 点と土師器 3 点が出土している。1506 は須恵器の坏蓋で、復原径 12 ㎝程

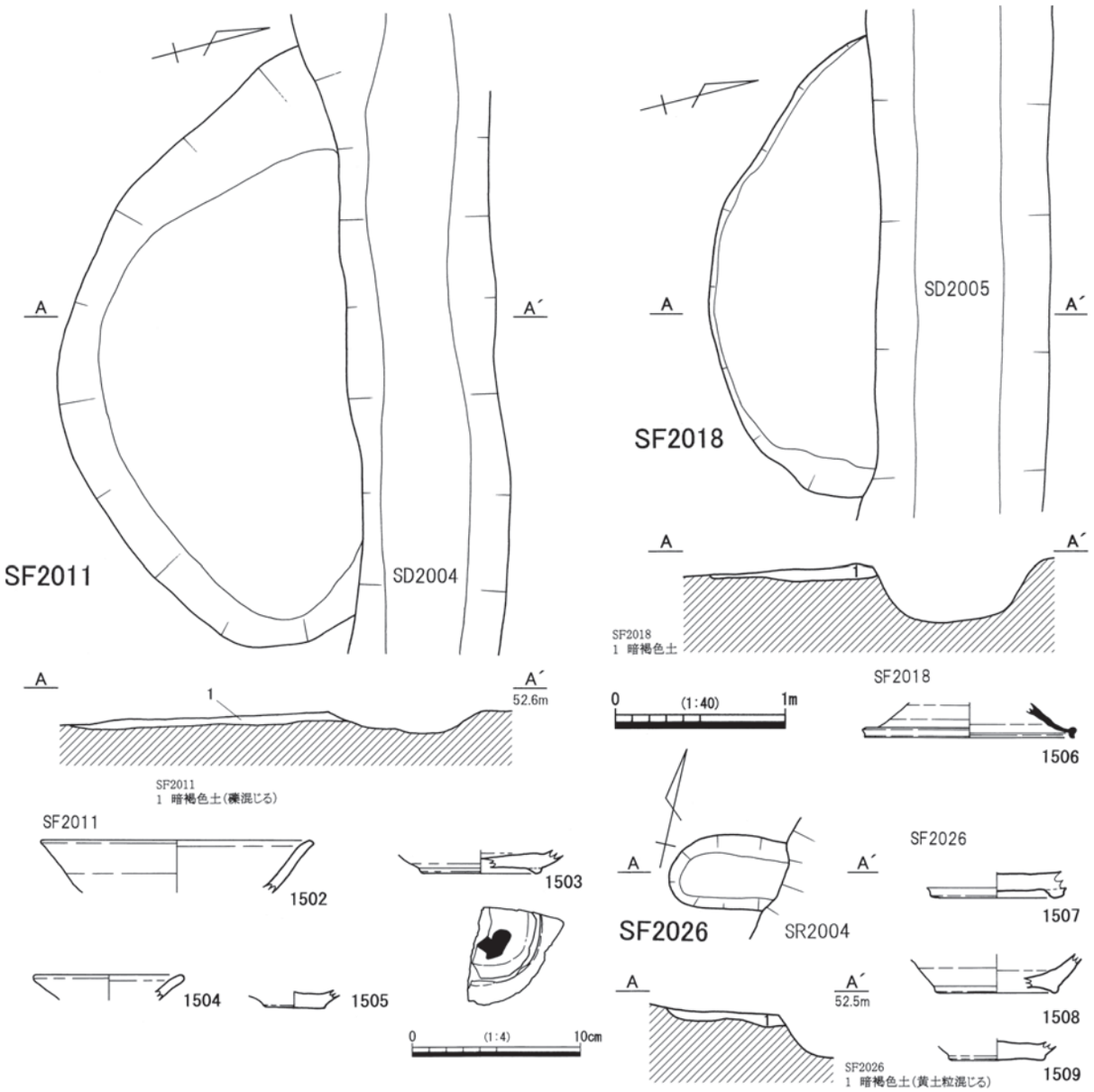


図 309　SF2011・2018・2026 実測図・出土遺物

の小型のものである。土師器は甕の胴部とみられる破片である。遺物は乏しいが、寺海土遺跡で多数出土している中世の遺物が１点も含まれていないことから、古代の遺構であると推定される。

SF2026（図 309）

調査区の南東部に位置する。河川 SR2004 の掘り下げ後に西岸で検出されているが、切り合い関係は把握できていない。東側が失われているため、正確な規模や形状は不明であるが、短径 45 ㎝、長径 70 ㎝以上の楕円形であると推定される。深さは検出面から５㎝程度と浅い。埋土は暗褐色土である。

遺物は、埋土から山茶碗と土師質土器が出土している。1507 と 1508 は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－１期のものである。1509 はロクロ成形の土師質土器皿である。図示したもののほかに、山茶碗の破片が５点出土している。詳細な年代は不明であるが、SF2026 は 13 世紀前葉以降に掘られた遺構とみてよい。

8　その他の遺構

SX1004（図 310、図版 60・77・93 ～ 96）

調査区の西側中央に位置する、土師質土器皿の廃棄土坑である。直径 110 ㎝の円形で、深さは検出面から 12 ㎝である。底部から土師質土器皿がまとまって出土している。

1510 と 1511 は、渥美湖西産の山茶碗である。Ⅲ－ 1 期の破片であり、土砂とともに混入したものとみてよい。1512 ～ 1521 は土師質土器皿である。1518 は小皿である。1512 の下から出土しており、割れた状態ではあるが、ほぼ完形に接合できている。1512 ～ 1517・1519 ～ 1521 は坏形となる皿で、いずれも口縁部には強いナデ調整が施されている。1512 と 1514 は完形品であり、中央やや北側から口を上に向けた状態で出土している。1513 は 1512・1514 の南側から、同じく口を上に向けた状態で出土している。押しつぶされた状態で割れていたが完形に接合できている。ほかのものは、全体の 2 分の 1 以下の破片であり、1516 のように破片が散らばった状態で出土しているものもある。1517 の内面と 1515 の口縁部には、わずかに煤の付着が確認できる。

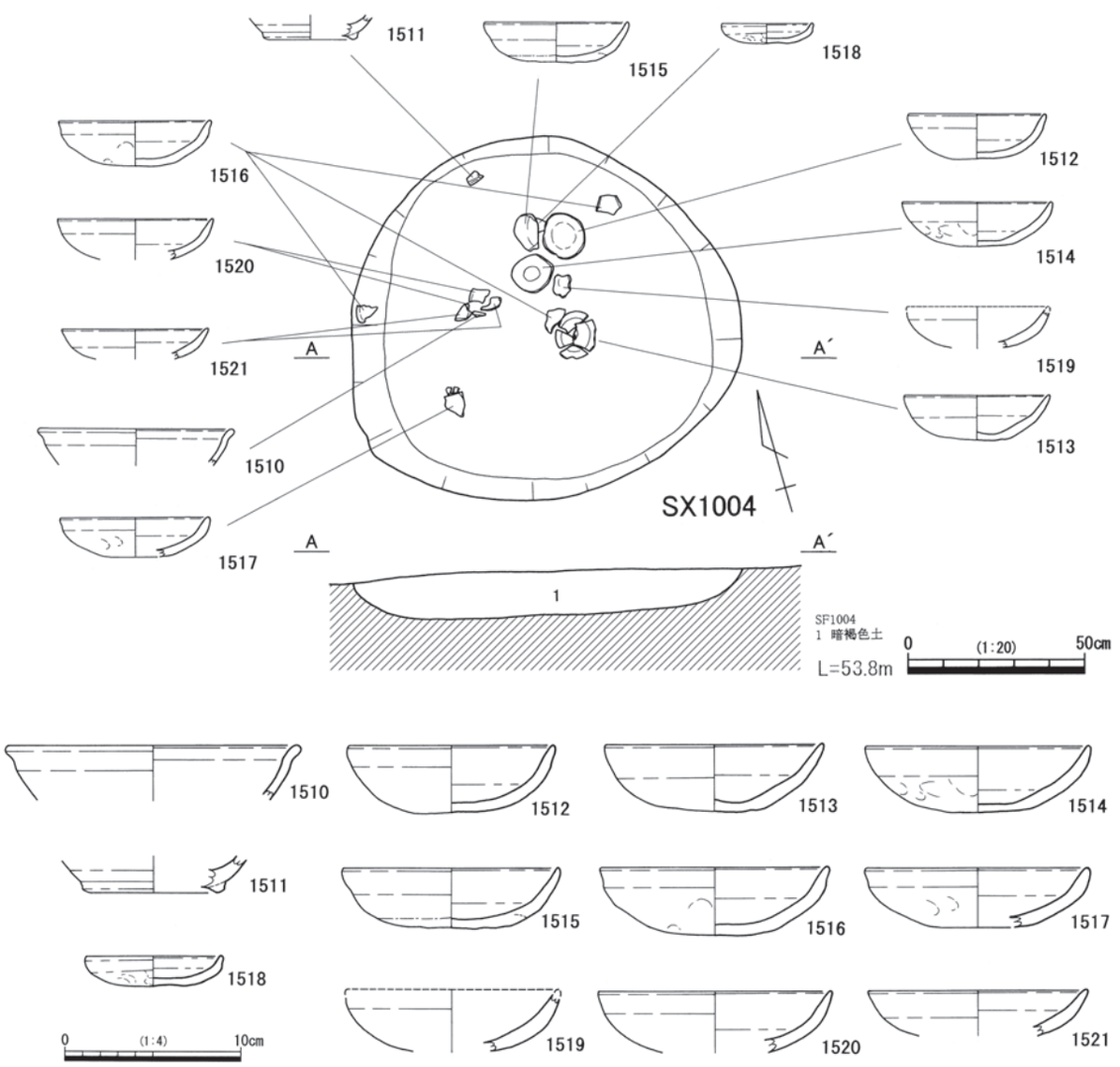


図 310　SX1004 実測図・出土遺物

破片が混在し、煤が付着するものも確認されるため、SX1004 は使用後の土師質土器皿を一括して廃棄した土坑であると推測される。ただし、完形のものはすべて口を上に向けて置かれており、その扱いは非常に丁寧であることがわかる。単純に穴に投棄したというのではなく、埋納するという意図も一定程度働いていたとみた方がよいかもしれない。土師質土器の年代を特定するのは困難であるが、出土している山茶碗の年代から、時期は 13 世紀前半と推定される。

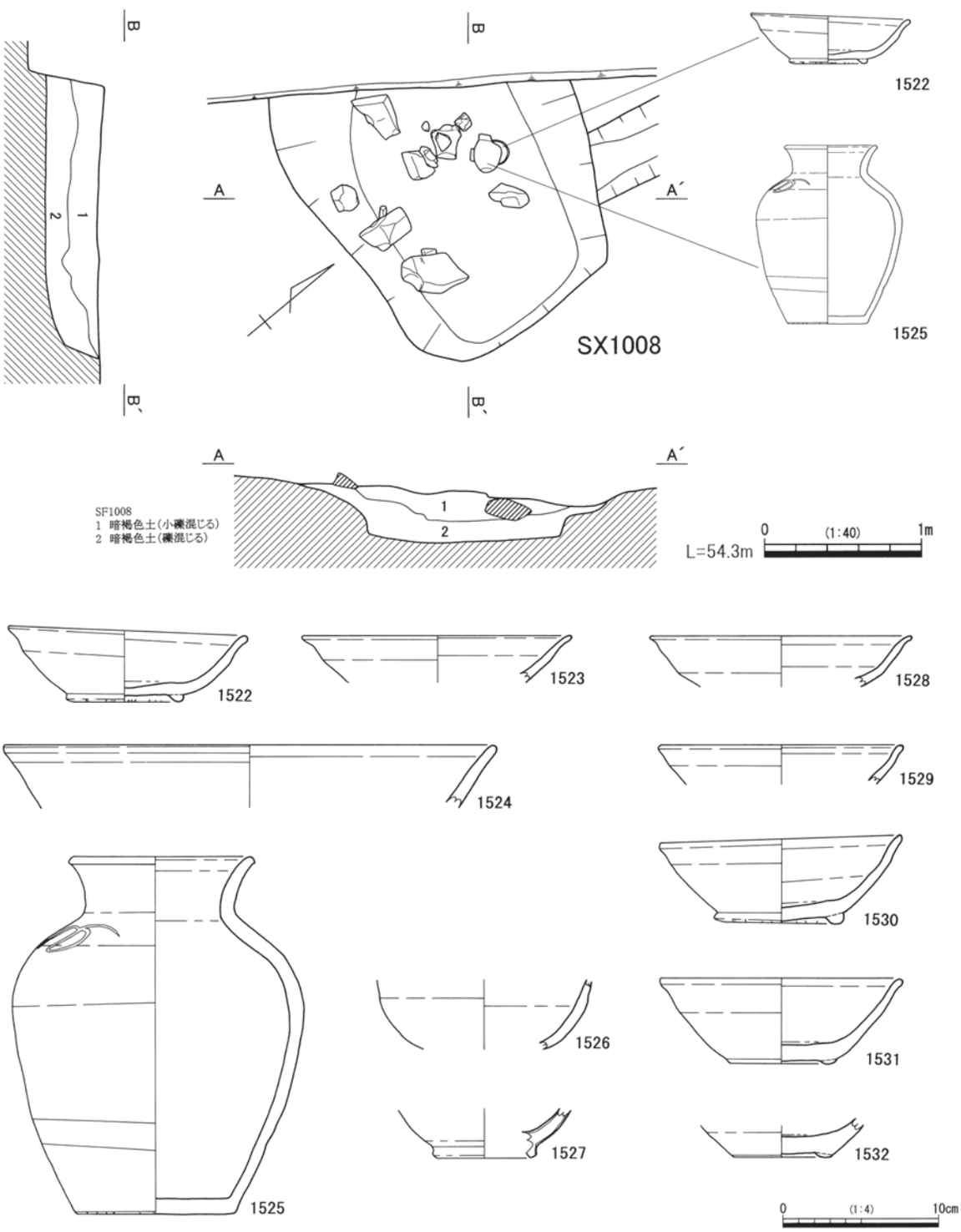


図 311　SX1008 実測図・出土遺物

SX1008（図 311、図版 60・79・95）

調査区の北西部に位置し、西側は調査の際に掘られた排水溝によって失われている。東西を主軸とする、隅丸長方形の土坑である。幅は 180 ㎝、長さは２ｍ前後と推定され、深さは検出面から 30 ㎝となっている。東側の壁面は直立気味に立ち上がるが、北側と南側の壁面は上半が大きく広がっている。埋土は大きく２層に分けられており、いずれも暗褐色土である。内部からは、大型の礫がいくつか出土している。南壁近くから出土した礫は、壁に沿って崩れ落ちたような状態で発見されている。

底部からは、壷（1525）と山茶碗（1522）が出土している。口を上に向けた山茶碗の上に、被さるような形で壷が横転していた。1525 は渥美湖西産の壷で、Ⅱ期のものである。はほぼ完形であるが、口を一部欠いている。肩部には螺旋状の形の記号がヘラ書きされている。1522 は渥美湖西産の山茶碗である。完形品で、壷と同じⅡ期のものである。1523 と 1524 は、埋土の下層から出土した遺物である。1523 は渥美湖西産の山茶碗、1524 は片口鉢で、ともにⅡ期のものである。1526 ～ 1532 は上層から出土した遺物である。1526 は土師質土器皿であり、全体が被熱し煤けている。1527 は青磁の碗である。1528 ～ 1532 は渥美湖西産の山茶碗でⅡ期からⅢ－２期のものである。

底部から出土した完形の山茶碗（1522）と壷（1525）はセットで埋納されたものとみてよい。壷が横倒しになった状態で発見されているが、山茶碗は壷の蓋として被せられていた可能性も考えられる。また、大型の礫が滑り落ちるような状態で出土していることから、土坑内には箱や棺などが納置されており、それが腐敗したことで上部の土や礫が落ち込んだものと推測される。横転している壷も、その際に倒れたのであろう。埋納された壷と山茶碗の年代から、12 世紀末～ 13 世紀初頭の遺構と推定される。

SX1012（図 312・313、図版 59・78・95 ～ 97・100）

SX1008 から約３ｍ南東に位置する。SF1013 と切り合っており、SF1013 よりも後出する遺構であることが確認されている。東西方向を長軸とする、長径 226 ㎝・短径 138 ㎝の楕円形の土坑である。深さは検出面から約 30 ㎝である。SR1001 に切られるような形で図化されているが、現地において先後関係は把握できていない。他の遺構と同様に、実際は SR1001 の埋没後に築かれた遺構とみてよい。埋土は２層に分けられているが、いずれも暗褐色土である。

遺物としては、検出面から木の枝が出土している。ヤマグワの枝であり、根元をもって中心に向かって土坑の上に被せたような状態で出土している。

底部からは、完形の山茶碗が出土している。1533 ～ 1536 は碗、1537 ～ 1541 は小皿である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅲ－１期のものである。1533 と 1540 は被熱しており、外面に煤の付着が確認できる。1538 の底部外面には、墨書が確認できる。「十人」とも読めるが、記号の可能性もある。1535 と 1536 は立ったような状態で出土しているが、ほかはすべて口を上に向けた状態で置かれている。1542 ～ 1549 は、埋土上層から出土した山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅲ－１期のものである。1550 と 1551 は渥美湖西産の片口鉢で、1550 は上層、1551 は下層から出土している。

木製品に関しては、一部底部から出土したものもあるが、基本的には層位に関係なく検出面まで出土する様な状況である。1552 ～ 1562 は箸である。箸は層位に関係なく比較的多く出土している。1563 は木錘であり、底部から出土している。1564 は曲物の側板、1565 は曲物の底板である。1566 や 1567 のような杭も出土している。また、埋土からはスモモの種子が 223 点と大量に出土している。

上面に被せられた枝や底部に置かれた山茶碗は、丁寧に扱われている様子が伺え、その行為自体に祭祀的な意味合いが含まれているとみてよいが、他の土器の破片や木製品は、土坑内に投げ込まれたような状況である。スモモの種を大量に含んでいることなどから、SX1012 は祭祀に使用された器物の廃棄土坑の可能性が高い。年代は、出土遺物から SR1001 が埋没した直後の、13 世紀前葉と推定される。

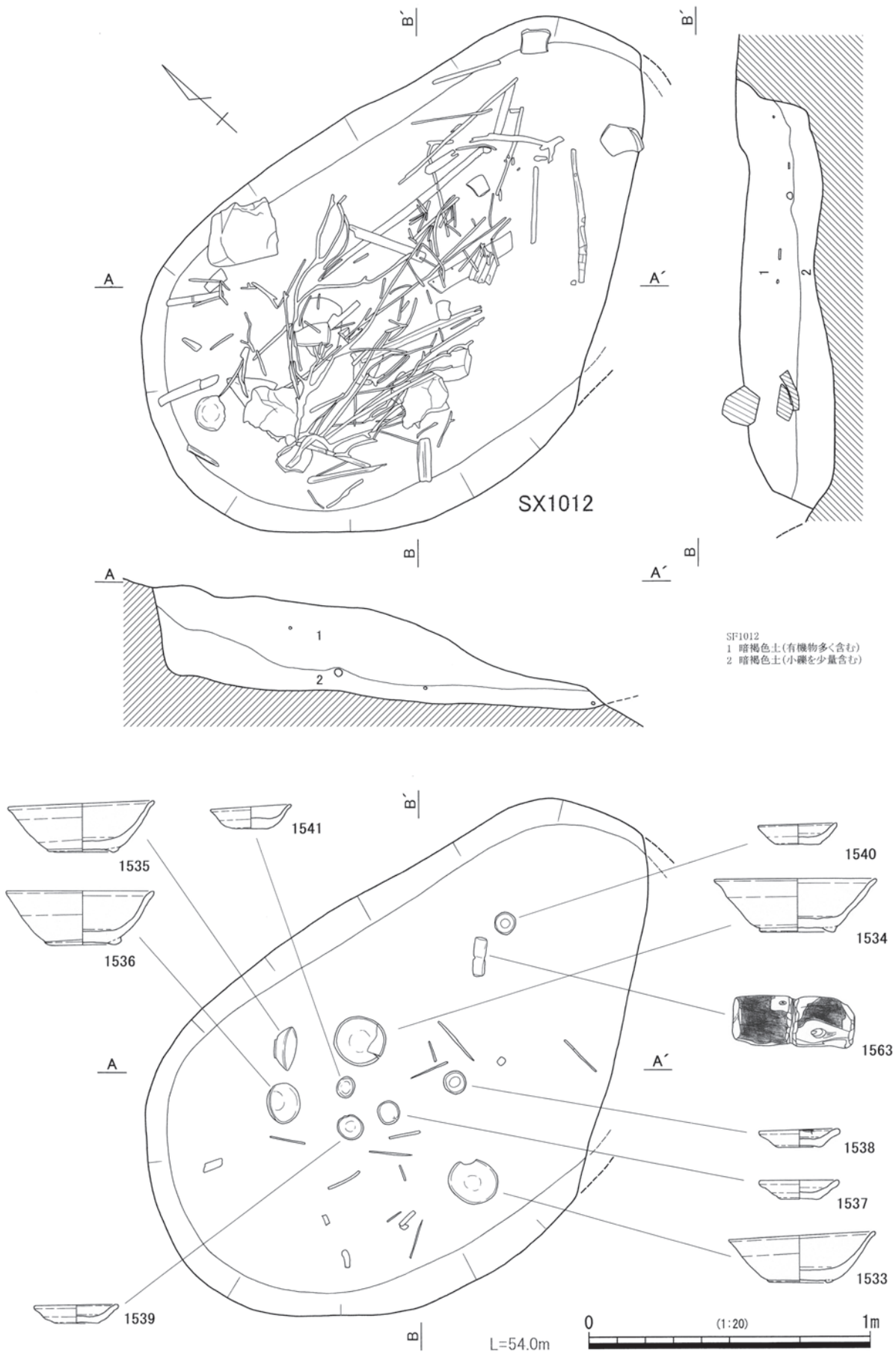


図 312　SX1012 実測図

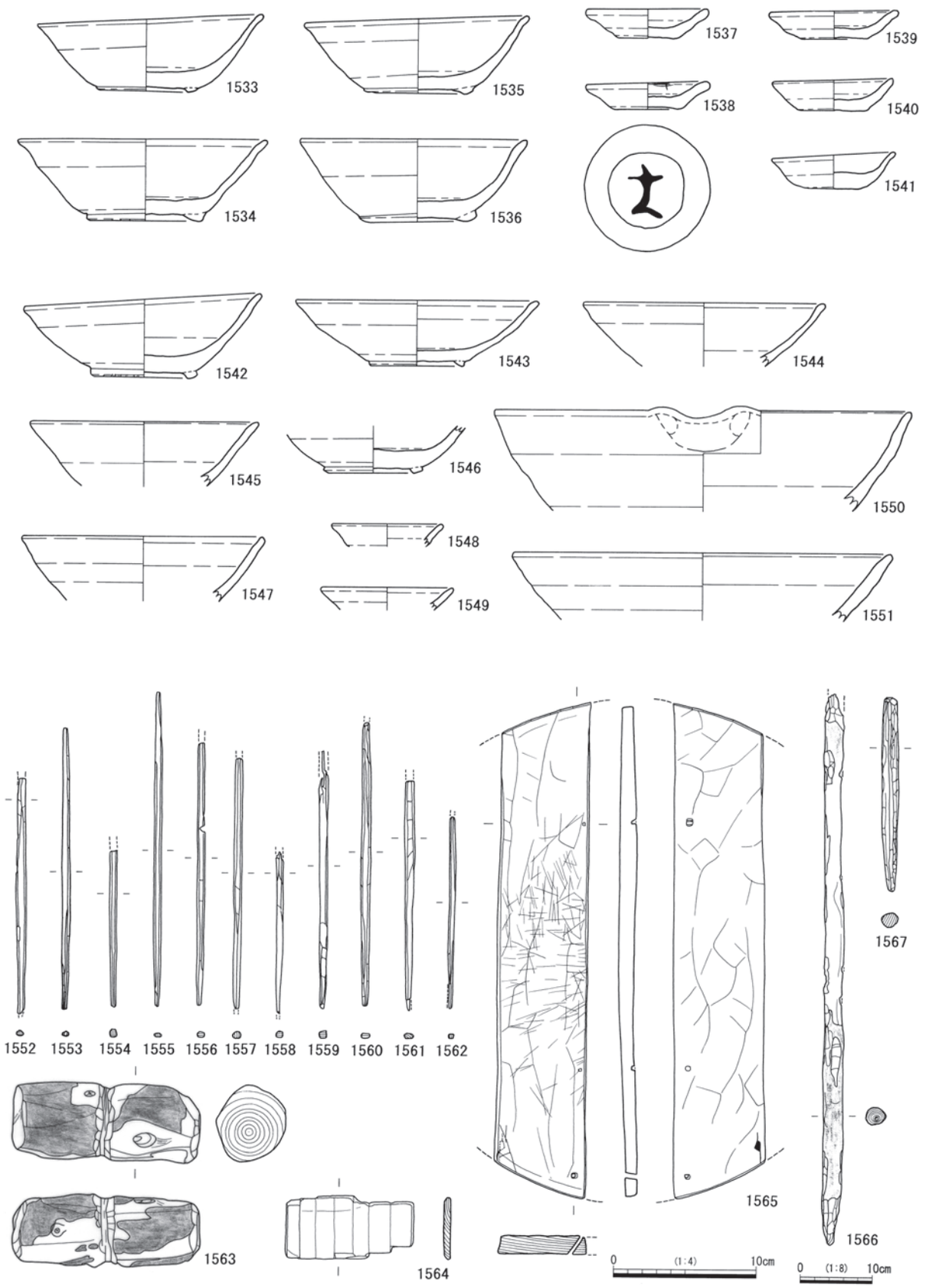


図 313　SX1012 出土遺物

９　包含層・攪乱出土遺物

山茶碗（図 314、図版 63・96）

包含層・攪乱から出土したものの中で、最も多い遺物は山茶碗である。調査区のほぼ全域から出土している。Ⅰ－２期からⅢ－１期までのものは比較的豊富にみられるが、Ⅰ－１期とⅢ－２期のものは少ない。遺構から出土する遺物とほぼ同様の傾向がみられる。

1568 ～ 1601 は、山茶碗の碗である。1599 は常滑産であるが、そのほかはすべて渥美湖西産の製品である。1568 はⅠ－１期、1573 ～ 1577 はⅠ－２期、1578 ～ 1596 はⅡ期、1597 と 1598 はⅢ－１期、1599 は常滑５期、1600 と 1601 はⅢ－２期のものである。

1602 と 1603 は小碗、1604 ～ 1619 は小皿である。1619 は常滑産であるが、ほかはすべて渥美湖西産の製品である。1602 と 1603 はⅠ－２期のもので、1604 ～ 1610 はⅡ期、1611 ～ 1617 はⅢ－Ⅰ期、1618 はⅢ－２期、1619 は常滑５期のものである。

墨書土器（図 315、図版 100・101）

山茶碗には、墨書土器も出土している。1633 は断片であるが２文字確認でき、「行□」と推定される。1634 は「上」＋記号である。SD2004 からも同様のもの（1223）が出土している。1635 は「又」、1637 は「奉」と読める。1638 は縦に４本、横に３本の棒線が書かれている。本数が合計７本ではあるが、いわゆる早九字様の墨書である。1639 は「＊」のような記号、1640 は「○」に花押状の記号が書かれている。1641 と 1646 は同様のものと推測され、「子」のような形の記号が書かれている。1645 と 1648 は「土」のようにもみえるが、おそらくは「上」であろう。1642 は「一」、1647 と 1643 は「十」の文字または記号である。墨書はいずれも底部外面に書かれており、判読できない記号状のものも多い。

中世陶器・貿易陶磁（図 314、図版 63・96）

1620 ～ 1625 は渥美湖西産の片口鉢で、Ⅰ期からⅡ期のものである。1626 は入子である。完形品であり、寺海土遺跡からはこの１点しか出土していない。1627 は渥美湖西産の鉢、1628 は常滑産の壷である。1629 は渥美産の甕である。図示したもの以外にも、胴部の破片を中心に比較的多く出土している。1630 と 1631 は貿易陶磁である。1630 は白磁の碗、1631 は同安窯系の青磁の碗である。

土師質土器（図 315、図版 63）

土師質土器は、細片になっているものが多いが、皿の破片を中心に一定量確認できる。ただし、山茶碗にくらべると、全体量では明らかに少量である。また、中通遺跡で多く出土している中世後期から近世にかけての皿は、細片の場合峻別が難しいが、明確なものはほとんど確認できない。

1649 ～ 1660 は土師質土器皿である。1649 ～ 1652 は小皿で、いずれも口縁部にはナデ調整が施されている。1653 ～ 1660 は坏形に近い形となる皿である。1659 はやや薄手のつくりで、ナデ調整も弱い。そのほかは、いずれも厚手のつくりである。口縁部には強いナデ調整が施されて、境が段になるものもある。1661 はいわゆる柱状高台で、1662 は伊勢型鍋である。

須恵器・土師器（図 315、図版 62）

須恵器や土師器などの古代の遺物は、出土量自体はさほど多くないが、ほぼ調査区の南西部に限定されるような形で出土している。古代の遺構の分布範囲と合致しており、これらの遺構に伴う遺物が拡散したものと推定される。

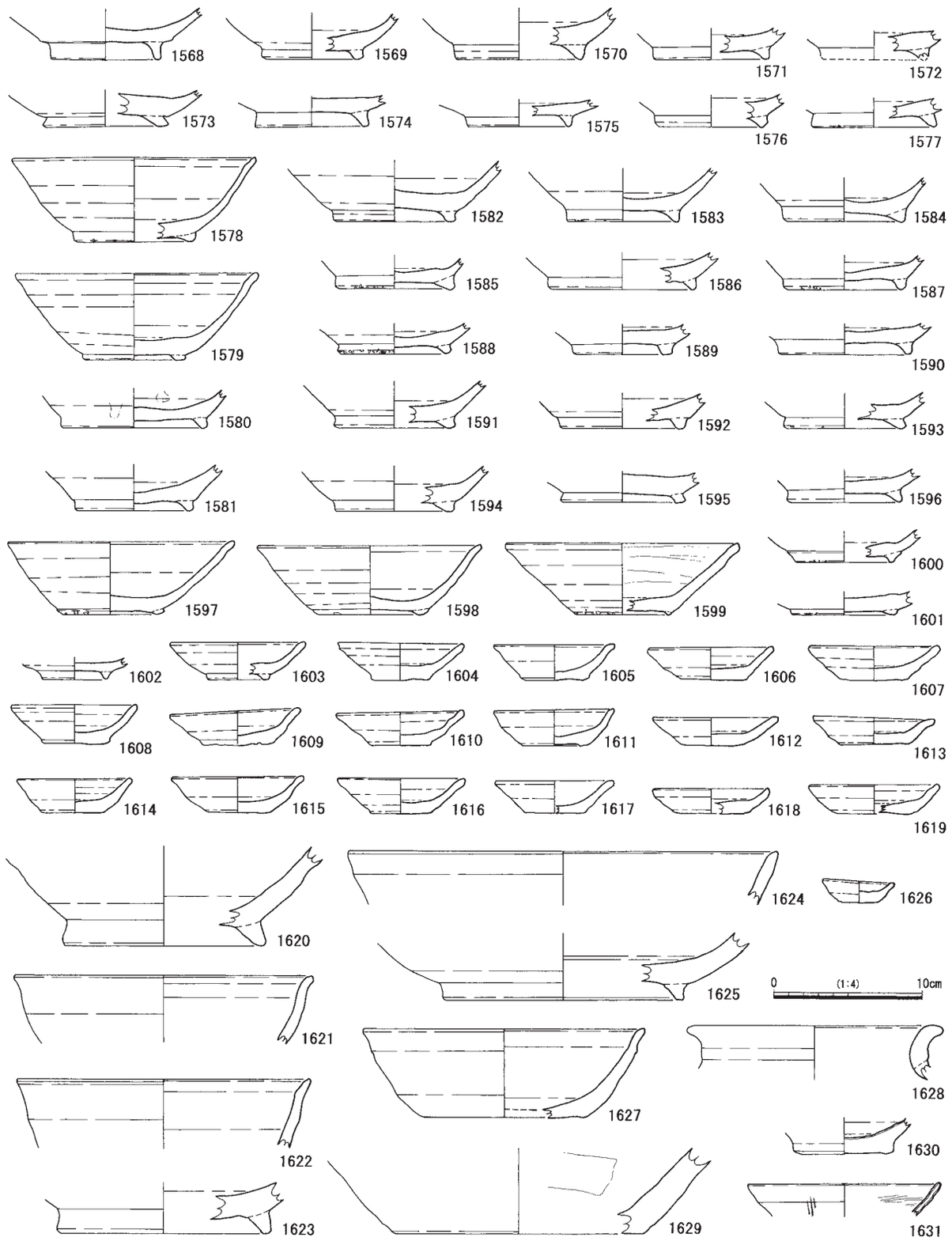


図 314　包含層・攪乱出土遺物（1）

1663 ～ 1669 は須恵器である。1663 と 1664 は坏蓋で、1665 と 1666 は無高台の坏、1667 ～ 1669 は高台坏である。1670 と 1671 は土師器である。1670 は甕、1671 は壷である。

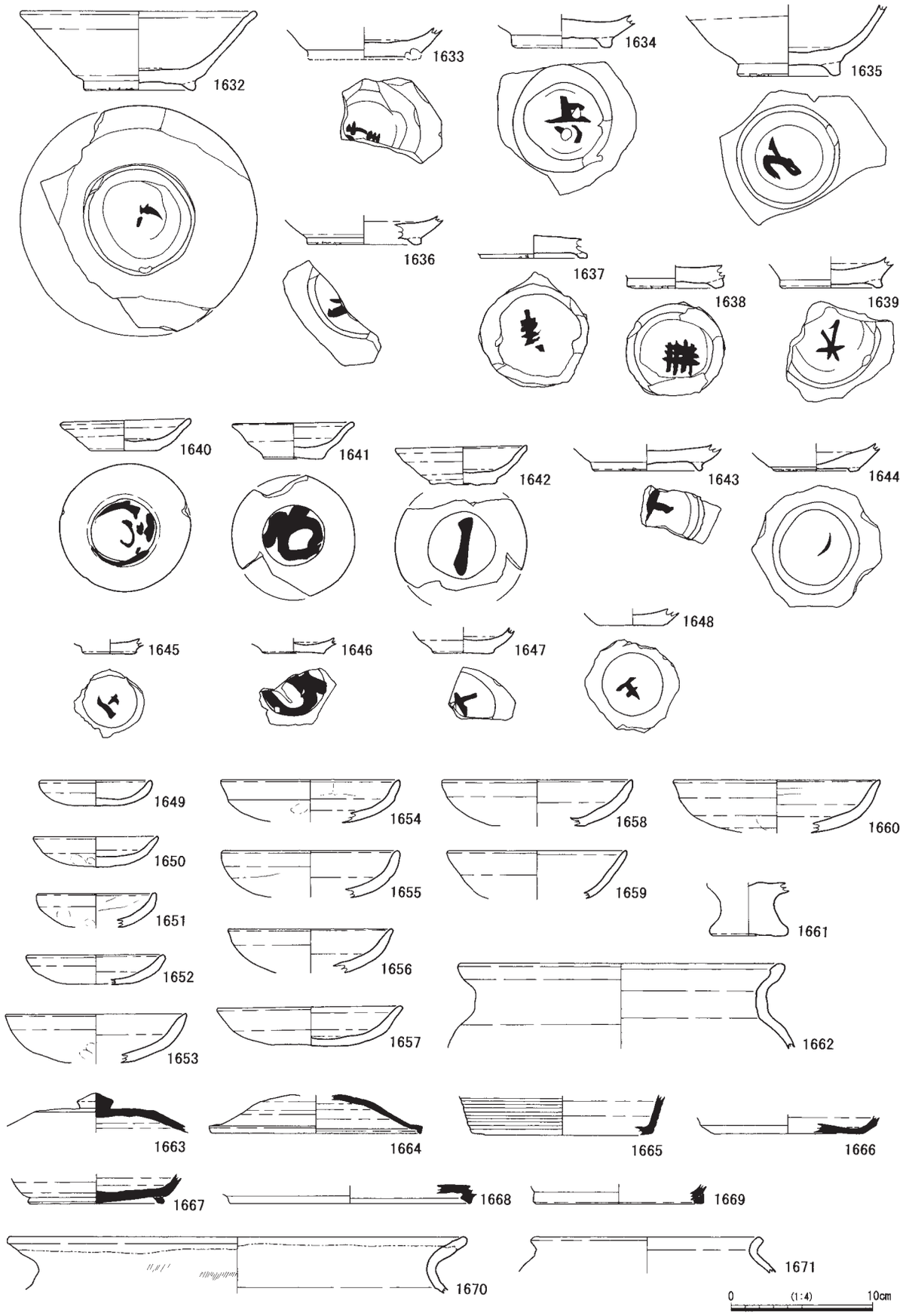


図 315　包含層・攪乱出土遺物（２）

表 14　出土遺物観察表（1）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
662	SP1026	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(9.7)				口縁部	1/8	灰白	SH1001
663	SP1108	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.7)				口縁部	1/6	灰白	SH1003
664	SP1102	1区	堀方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.1)				口縁部	1/28	灰白	SH1003
665	SP1113	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(9.3)				口縁部	1/12	灰白	SH1003
666	SP1104	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.5)	5.4	7.35		口縁～底部	1/2	灰白	SH1005
667	SP1387	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁～体部	1/2	灰白	SH1005
668	SP1160	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.1	底部のみ		灰白	SH1007
669	SP1160	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.15	底部のみ		灰白	SH1007
670	SP1160	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	9.1	1.95	4.35		完形		灰白	SH1007
671	SP2004	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁部	1/16	灰白	SH2001
672	SP2004	2区	埋土	金属	鉄滓		碗形滓		残存径 5.0						SH2001
673	SP1340	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.8)				口縁～体部	1/8	灰白	
674	SP1032	1区	堀方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/14	灰白	
675	SP1168	1区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.9)				口縁部	1/18	灰白	
676	SP1171	1区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.6)				口縁部	1/16	灰白	
677	SP1123	1区	堀方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.6)				口縁部	1/20	灰白	
678	SP1138	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1					底部	1/3	灰白	
679	SP1369	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(6.2)	底部	1/2	灰白	煤付着
680	SP2077	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.45	5.7		6.75	口縁～底部	2/3	灰白	
681	SP2056	2区	柱痕跡	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2	(16.6)	6.05		(8.0)	口縁～底部	1/4	灰白	輪花
682	SP2089	2区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(9.2)				口縁部	1/12	灰白	
683	SP2087	2区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/16	灰白	焼成不良
684	SP2064	2区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/16	灰白	
685	SP2085	2区	柱痕跡	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.1)				口縁部	1/8	灰白	
686	SP2057	2区	柱痕跡	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(14.0)				口縁部	1/6	灰白	
687	SP2087	2区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.2)				口縁～体部	1/7	灰白	焼成不良
688	SP2084	2区	柱痕跡	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.0)				口縁部	1/16	灰白	
689	SP2064	2区	掘方	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/10	灰白	
690	SP1395	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	7.2	2.55	4.8		完形		灰白	墨書
691	SP1169	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.45	1.85	4.8		完形		灰白	
692	SP1334	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.9)				口縁部	1/8	灰白	
693	SP1050	1区	掘方	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明	(8.2)				口縁部	1/10	灰白	
694	SP2087	2区	掘方	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.3	1.85	4.6		完形		灰白	
695	SP1301	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(7.9)				口縁部	1/8	灰白	
696	SP1149	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ				(4.1)	底部	1/4	にぶい黄橙	
697	SP1149	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(5.8)				口縁部	1/10	浅黄橙	
698	SP2003	2区	掘方	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部	1/5	淡黄	
699	SP1331	1区	埋土	丸瓦											
700	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1	(18.2)				口縁部	1/14	灰白	
701	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.9)				口縁～体部	1/8	灰白	
702	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.5)				口縁部	1/6	灰白	
703	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.2)				口縁～体部	1/4	灰白	
704	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				(7.2)	底部	1/2	灰白	
705	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				(8.6)	底部	1/4	灰白	
706	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.8)	底部～体部	2/3	灰白	煤付着
707	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/2	灰白	
708	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.2)	底部	1/4	灰白	
709	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.1)	底部のみ		灰白	
710	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部のみ		灰白	煤付着
711	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.35)	底部	1/2	灰白	
712	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.3)	底部～体部	4/5	灰白	
713	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.9)	底部のみ		灰白	
714	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.3)	底部	1/4	灰白	
715	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.3)	底部	1/3	灰白	煤付着
716	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.4)	底部	1/4	灰白	
717	SR1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.5)	底部	1/4	灰白	
718	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.2)	(2.25)	(3.5)		底部～口縁	1/3	灰白	
719	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(3.7)	底部	1/2	灰白	
720	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)				口縁部	1/3	灰白	
721	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ				4.4	底部～体部		灰白	
722	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ				(3.9)	底部のみ		灰白	
723	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(5.1)	底部	1/3	灰白	
724	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				4.35	底部のみ		灰白	
725	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(4.1)	底部～体部	1/3	灰白	
726	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				4.0	底部のみ		灰白	
727	SR1001	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				4.4	底部～体部		灰白	
728	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.9)				口縁部	1/12	灰白	
729	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.1)				口縁部	1/6	淡黄	
730	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.3)				口縁部	1/12	淡黄	
731	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁部	1/8	灰白	
732	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁部	1/12		
733	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(6.2)		底部～体部	1/4	灰白	
734	SR1001	1区	埋土	白磁	碗		Ⅱ～Ⅳ類か					底部	1/8	灰白 / 灰白	
735	SR1001	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(5.2)		底部	1/4	浅黄橙	
736	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1	(16.5)				口縁部	1/14	灰白	
737	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.6)				口縁～体部	1/9	灰白	
738	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(14.2)				口縁～体部	1/5	灰白	
739	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(17.5)				口縁部	1/8	灰白	
740	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(17.0)				口縁部	1/14	灰白	
741	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.4)				口縁部	1/18	灰白	
742	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.3)	底部	1/8	灰白	
743	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/3	灰白	
744	SR1002	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部	1/4	灰白	
745	SR1002	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明	(8.0)				口縁部	1/8	灰白	
746	SR1002	1区	埋土	陶器	片口鉢	渥美	Ⅰ	(30.8)				口縁～体部	1/4	灰白	
747	SR1002	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(14.5)				口縁部	1/16	淡黄	
748	SR1002	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(9.4)				口縁部	1/8	にぶい黄橙	
749	SR1002	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(6.6)		底部	1/4	浅黄橙	
750	SR1002	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(5.0)		底部	1/2	浅黄橙	
751	SR1002	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部	1/12	浅黄橙	
752	SR1003	1区	埋土	山茶碗	片口碗	渥美湖西	Ⅰ－1	(18.05)	6.65		9.0	口縁～体部	2/3	灰白	
753	SR1003	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.3)	底部	1/6	灰白	
754	SR1003	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.3)				口縁部	1/20	灰白	
755	SR1003	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.4)				口縁部	1/11	灰白	
756	SR1003	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.7)				口縁部	1/10	灰白	
757	SR1003	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)				口縁部	1/10	浅黄橙	
758	SR1003	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.4)				口縁部	1/8	浅黄橙	
759	SR1003	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(12.6)				口縁部	1/9	灰白	
760	SR1003	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ				4.25	底部のみ		灰白	
761	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.0)				口縁～体部	1/5	灰白	
762	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(14.8)				口縁部	1/9	灰白	
763	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(14.8)				口縁部	1/12	灰白	
764	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.5)	底部	1/6	灰白	
765	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.2)	底部	1/3	灰白	
766	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.6)	底部	1/4	灰白	
767	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部	1/3		
768	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.7)	底部	1/4	灰白	煤付着
769	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(8.2)	底部	1/6	灰白	
770	SR1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.5)	底部	1/6	灰白	煤付着
771	SR1004	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(8.7)	(2.5)		(4.1)	口縁～底部	1/6	灰白	
772	SR1004	1区	埋土	陶器	甕	渥美	不明	(39.1)				口縁部	1/16	灰白	
773	SR1004	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(7.6)	(1.85)	(4.6)		底部	1/6	浅黄橙	
774	SR1004	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ	(8.8)				口縁部	1/8	浅黄橙	
775	SR1004	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.2)		底部	1/3	灰白	
776	SR1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1	(14.7)				口縁～体部	1/5	灰白	
777	SR1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				(7.1)	底部	1/2	灰白	
778	SR1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2					底部～体部	1/8	灰白	
779	SR1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(17.3)				口縁部	1/24	灰白	
780	SR1005	1区	埋土	陶器	片口鉢	渥美	不明				(13.0)	底部	1/5	灰白	
781	SR1005	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(8.6)	2.8	4.85		底部～口縁	1/2	灰白	漆付着

表 15　出土遺物観察表（２）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
782	SR1005	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部	1/8	灰白	
783	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(16.5)	5.35		6.7	底部～口縁	1/2	灰白	
784	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(16.4)				口縁～体部	1/9	灰白	
785	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(15.7)				口縁～体部	1/6	灰白	
786	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ	(15.9)				口縁部	1/3	灰白	
787	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(8.2)	底部	1/4	灰白	
788	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(6.1)	底部	1/4	灰白	
789	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/4	灰白	
790	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.3)	底部	1/3	灰白	
791	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.7)	底部	1/2	灰白	
792	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(7.4)	底部	1/2	灰白	
793	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.1)	底部	1/3	灰白	
794	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.9)	底部	1/10	灰白	
795	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.8)	底部	1/3	灰白	
796	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	東遠江	Ⅱ				(7.45)	底部～体部		灰白	
797	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ	(16.0)				口縁～体部	1/14	灰白	
798	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ	(17.2)				口縁～体部	1/10	灰白	
799	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.2)	底部	1/4	灰白	
800	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.6)	底部	1/4	灰白	
801	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.9)	底部	2/3	灰白	
802	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(5.8)	底部	1/2	灰白	
803	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.55)	底部～体部		灰白	
804	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部	1/3	灰白	
805	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.4)	底部	1/6	灰白	
806	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１					底部	1/3	灰白	
807	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(7.9)	底部～体部	1/4	灰白	
808	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(7.2)	底部	1/3	灰白	
809	SR1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(6.45)	底部のみ		灰白	
810	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(9.6)	3.0		4.4	口縁～底部	1/2	灰白	
811	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ				4.7	底部～体部		灰白	墨書
812	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(3.65)	底部のみ		灰白	
813	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ				(4.0)	底部のみ		灰白	
814	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	8.7	2.05		4.3	ほぼ完形		灰白	
815	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.2)	(2.0)		(4.6)	底部～口縁	2/3	灰白	
816	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１				3.9	底部のみ		灰白	
817	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１				(4.55)	底部	1/2	灰白	
818	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１				3.9	底部のみ		灰白	
819	SR1006	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１				4.1	底部のみ		灰白	
820	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)	(3.8)	(5.95)		口縁～底部	1/2	灰白	
821	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)				口縁部	1/6	灰白	
822	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.3)				口縁部	1/9	灰白	
823	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)	(2.15)	(5.05)		ほぼ完形		灰白	
824	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.5)		底部	1/4	橙	
825	SR1006	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(5.55)		底部	1/2	浅黄橙	
826	SR1006	1区	埋土	陶器	片口鉢	渥美湖西					(14.8)	底部～体部	1/4	灰白	煤付着
827	SR1006	1区	埋土	陶器	甕	渥美		(53.7)				口縁部	1/12	灰	
828	SR1006	1区	埋土	青磁	碗		A類				(6.2)	底部	1/6	灰オリーブ	
829	SR1006	1区	埋土	白磁	碗		V類	(17.1)				口縁部	1/20	灰白	
830	SR1006	1区	埋土	陶器	甕	渥美	不明				(15.4)	底部～体部	1/2	灰白	煤付着
831	SR1008	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(7.4)	底部	1/4	灰白	
832	SR1008	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１			(4.9)		底部	1/5	灰白	
833	SR1008	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)	(2.9)	(5.8)		口縁～底部	1/10	淡黄	
834	SR1008	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)				底部～口縁	1/4	灰白	
835	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１	15.5	5.95	6.85		口縁～底部	4/5	灰白	
836	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(6.4)	底部～体部	1/2	灰白	漆付着
837	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(7.6)	(5.5)		(7.6)	底部～口縁	1/4	灰白	
838	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１	(19.0)				口縁部	1/14	灰白	
839	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１	(16.0)				口縁部	1/20	灰白	
840	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(8.5)	底部	1/4	灰白	
841	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.3)	(5.05)		(6.6)	底部～口縁	1/4	灰白	
842	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(8.2)	底部	1/4	灰白	
843	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(8.0)	底部	1/3	灰白	
844	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				7.0	底部のみ		灰白	
845	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.8)	底部	1/4	灰白	
846	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.0)	底部	1/3	灰白	煤付着
847	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(6.2)	底部	1/4	灰白	
848	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				6.8	底部のみ		灰白	
849	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				6.4	底部のみ		灰白	漆付着
850	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.5	底部のみ		灰白	
851	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.8	底部のみ		灰白	
852	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.1	底部のみ		灰白	
853	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.4	底部のみ		灰白	煤付着
854	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/3	灰白	
855	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(5.7)	底部	1/4	灰白	
856	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.2)	底部	1/6	灰白	
857	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.6)	底部～体部	1/4	灰白	
858	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.6)	底部～体部	1/2	灰白	
859	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.8)	底部	1/3	灰白	焼成不良
860	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.95)	底部	2/3	灰白	
861	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(5.4)	底部	1/4	灰白	
862	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.8)	底部	1/4	灰白	
863	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.3	底部のみ		灰白	
864	SR2002	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(8.4)	底部	1/3	灰白	焼成不良
865	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.4	底部のみ		灰白	焼成不良
866	SR2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(5.7)	底部	1/4	灰白	
867	SR2002	2区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－２				4.2	底部のみ		灰白	
868	SR2002	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ			4.2		底部～退部		灰白	
869	SR2002	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.1)	2.3	(4.1)		底部～口縁	1/3	灰白	
870	SR2002	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.7)	2.4	(4.0)		底部～口縁	1/3	灰白	
871	SR2002	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	7.6	2.45	3.9		完形		灰白	
872	SR2002	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.6)	(2.45)	(4.4)		底部～口縁	1/3	灰白	
873	SR2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)	(2.05)	(5.0)		底部～口縁	1/2	褐灰	
874	SR2002	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)				口縁部	1/8	灰白	
875	SR2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.5)				口縁部	1/6	灰白	
876	SR2002	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			(5.0)		底部	1/2	灰黄褐	
877	SR2002	2区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.0)		底部	1/2	灰白	
878	SR2002	2区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.0)		底部	1/5	浅黄橙	
879	SR2002	2区	中層	土師質土器	皿		ロクロ			(5.3)		底部～体部	1/3	にぶい橙	
880	SR2002	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ	(10.2)	(2.15)	(7.2)		底部～口縁	1/3	灰白	
881	SR2002	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			(6.0)		底部	1/3	淡黄	
882	SR2002	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			(7.0)		底部～体部	1/4	灰白	
883	SR2002	2区	中層	陶器	片口鉢	渥美湖西					(14.6)	底部～体部	1/4	灰白	
884	SR2002	2区	埋土	陶器	壺	渥美湖西		(12.2)				口縁部	1/7	灰白	
885	SR2002	2区	上層	陶器	壺	常滑				(13.7)		底部～体部	1/4	灰白	
886	SR2002	2区	上層	青磁	青磁碗		V－２	(14.0)				口縁部	1/6	灰白	
887	SR2002	2区	上層	白磁	白磁碗		V					体部片		灰白	
888	SR2003	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１	16.75	6.6		6.7	完形		灰白	
889	SR2003	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	16.4	5.7		7.5	完形		灰白	
890	SR2003	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部～体部	1/3	灰白	
891	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				7.5	底部のみ		灰白	
892	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－１				(8.0)	底部	1/2	灰白	
893	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(8.0)	底部	1/3	灰白	
894	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				7.6	底部のみ		灰白	
895	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.0)	底部	1/2	灰白	
896	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.3)	底部	2/3	灰白	
897	SR2003	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(8.4)	底部	1/4	灰白	
898	SR2003	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(3.9)	底部～体部		灰白	
899	SR2003	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	8.1	2.1	4.2		完形		灰白	
900	SR2003	2区	下層	灰釉陶器	碗						(7.6)	底部	1/3	灰白	二次焼成
902	SR2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	15.45	5.5		6.0	完形		灰白	

表 16　出土遺物観察表（3）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
903	SR2004	2区	下	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(8.0)	底部	1/5	灰白	
904	SR2004	2区	下	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.1	底部のみ		灰白	
905	SR2004	2区	下	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.85	底部のみ		灰白	
906	SR2004	2区	中	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.8)	底部のみ		灰白	
907	SR2004	2区	中	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.7)	底部	1/8	灰白	
908	SR2004	2区	中	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.3	底部のみ		灰白	
909	SR2004	2区	中	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部～体部	1/4	灰白	
910	SR2004	2区	上	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(13.3)	5.2		(7.7)	口縁～底部	1/6	灰白	
911	SR2004	2区	上	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/16	灰白	
912	SR2004	2区	中	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(8.1)	底部	1/3	明褐灰	煤付着
913	SR2004	2区	上	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.1	底部～体部		灰白	
914	SR2004	2区	上	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅰ－2	(9.9)	(2.8)	(4.2)		底部～口縁	1/2	灰白	
915	SR2004	2区	上	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)	(2.1)	(4.5)		底部～口縁	1/2	灰白	
916	SR2004	2区	上	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.05	1.95	4.7		口縁～底部	1/2	灰白	
917	SR2004	2区	上	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.35)	2.0	4.25		口縁～底部	1/2	灰白	
918	SR2004	2区	上	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.05	2.2	4.1		完形		灰白	
919	SR2004	2区	中	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ			3.9		底部のみ		灰白	墨書
920	SR2004	2区	中	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(11.2)	底部～体部	1/6	灰	
921	SR2004	2区	中	土師質土器	皿		ロクロ			(5.9)		底部	1/2	浅黄橙	
922	SR2004	2区	埋土	土師器	甑							把手のみ		にぶい黄橙	
923	SR2006	2区	7層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)				口縁～体部		灰白	
924	SR2006	2区	7層	土師質土器	皿		非ロクロ					体部	1/12	灰白	
925	SR2006	2区	6層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/6	灰白	
926	SR2006	2区	5層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.5)				口縁～体部	1/6	灰白	
927	SR2006	2区	9層	陶器	甕	常滑						底部			
928	SR2006	2区	9層	須恵器	坏蓋							頭頂部	1/4	灰白	
929	SR2006	2区	7層	平瓦											
930	SD1001	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.4)	5.3		(6.6)	口縁～底部	1/2	灰白	煤付着
931	SD1001	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.2)	5.5		6.6	口縁～底部	1/5	灰白	
932	SD1001	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.8)				口縁～体部	1/12	灰白	輪花
933	SD1001	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				7.8	底部のみ		灰白	
934	SD1001	1区	下層	灰釉陶器	碗						(7.1)	底部	1/2	灰白	
935	SD1006	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部	1/24	灰白	
936	SD1006	1区	埋土	染付磁器	小坏	肥前		(6.7)				口縁～体部	1/6	灰白	竹文
937	SD2001	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.5	底部のみ		灰白	
938	SD2001	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/4	灰白	煤付着
939	SD2001	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.4	底部のみ		灰白	煤付着
940	SD2001	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.7	底部のみ		灰白	
941	SD2001	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(5.2)	底部	1/4	灰白	
942	SD2001	2区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明	(8.6)				口縁部	1/5	灰白	
943	SD2001	2区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.4)		底部	1/4	灰白	
944	SD2001	2区	埋土	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(33.2)				口縁部		灰白	
945	SD2001	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部	1/6	灰白	
946	SD2001	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)				口縁部	1/12	にぶい黄橙	
947	SD2001	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部	1/5	灰白	
948	SD2001	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁～体部	1/10	灰白	
949	SD2001	2区	埋土	土師質土器	伊勢型鍋			(26.6)				口縁部	1/12	にぶい黄橙	煤付着
953	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(15.3)				口縁～体部	1/5	灰白	
954	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.6)				口縁～体部	1/6	灰白	
955	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(6.7)	底部	1/3	灰白	
956	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/6	灰白	
957	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.9)	底部	1/5	灰白	
958	SD2002	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部～体部	1/4	灰白	
959	SD2002	2区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(9.8)				口縁～体部	1/8	灰白	
960	SD2002	2区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				3.8	底部のみ		灰白	
961	SD2002	2区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				3.6	底部のみ		灰白	
962	SD2002	2区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2	(8.0)	1.48	(3.4)		口縁～底部	1/4	灰白	
963	SD2002	2区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明	(7.4)				口縁部	1/8	灰 / 灰白	
964	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.1)				口縁部	1/6	灰白	
965	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)				口縁～体部	1/8	灰白	
966	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁～体部	1/5	灰白	
967	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
968	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)				口縁～体部	1/6	灰白	
969	SD2002	2区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)				口縁～体部	1/6	灰白	
970	SD2002	2区	埋土	陶器	甕	渥美	不明			(16.9)		底部	1/8	灰白	
971	SD2002	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(10.0)				口縁～体部	1/4	灰白	
972	SD2002	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(16.4)				口縁～体部	1/8	灰白	
973	SD2002	2区	埋土	須恵器	坏			(13.6)	3.85	9.5		口縁～底部	3/4	灰白	
974	SD2002	2区	埋土	土師器	盤			(17.7)				口縁部	1/12	黄灰 / 灰黄	
975	SD2002	2区	埋土	土師器	甕			(25.8)				口縁部	1/6	にぶい黄橙	
982	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.6)	底部～体部	1/3	灰白	
983	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.7)	5.8		(7.4)	口縁～底部	1/4	灰白	
984	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.8)	底部～体部	1/3	灰白	
985	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.5)	底部～体部	1/2	灰白	煤付着
986	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(6.9)	底部	1/3	灰白	
987	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.6	底部	1/2	灰白	
988	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.4	底部	1/2	灰白	
989	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.0	底部のみ		灰白	
990	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(15.6)	5.35		(6.6)	口縁～底部	1/5	灰白	
991	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(14.6)	4.7		6.55	口縁～底部	1/3	灰白	
992	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部～体部	1/2	灰白	
993	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.35	底部	2/3	灰白	
994	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.9)	底部～体部	1/2	灰白	
995	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部	2/3	灰白	
996	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.15	底部のみ		灰白	
997	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.2)	底部	2/3	灰白	
998	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.8	底部のみ		灰白	
999	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部のみ		灰白	
1000	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				5.7	底部のみ		灰白	
1001	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				5.1	底部のみ		灰白	煤付着
1002	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.6	底部～体部		灰白	
1003	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				5.8	底部のみ		灰白	
1004	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(6.3)	底部	1/3	灰白	
1005	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部	1/4	灰白	
1006	SD2004	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				4.4	底部のみ		灰白	
1007	SD2004	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.9)	1.75	(5.4)		口縁～底部	1/3	灰白	
1008	SD2004	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)				口縁～体部	1/5	灰白	
1009	SD2004	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.55		底部～体部		灰白	
1010	SD2004	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(4.2)		底部	1/2	灰白	
1011	SD2004	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.7		底部のみ		灰白	
1012	SD2004	2区	下層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅰ				(11.2)	底部	1/4	灰	
1013	SD2004	2区	下層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅰ				(15.8)	底部	1/4	灰白	
1014	SD2004	2区	下層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(14.0)	底部～体部	1/5	灰白	煤付着
1015	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.0)				口縁～底部	1/4	浅黄橙	
1016	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.1)	2.8	(5.5)		口縁～底部	1/5	淡黄	
1017	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁～体部	1/12	淡黄	
1018	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.2)				口縁～体部	1/8	淡黄	
1019	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～底部	1/4	灰白	
1020	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)	3.55	(4.5)		口縁～体部	1/8	淡黄	
1021	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部	1/3	灰白	
1022	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.4)				口縁～底部	1/4	灰白	
1023	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.2)				口縁～体部	1/4	浅黄橙	
1024	SD2004	2区	下層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.2)	2.15	(3.8)		口縁～底部	1/3	淡黄	
1025	SD2004	2区	下層	土師質土器	伊勢型鍋			(25.2)				口縁部	1/10	灰黄褐 / 褐灰	
1026	SD2004	2区	下層	白磁	碗		Ⅳ類				(6.7)	底部	1/6	灰白	
1027	SD2004	2区	下層	青磁	碗		A2 類				(5.5)	底部	1/8	灰オリーブ	
1028	SD2004	2区	下層	青磁	碗	同安窯	B					体部片		灰白	
1029	SD2004	2区	下層	青磁	碗		A6				(4.2)	底部	1/2	明緑灰	
1030	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.2)				口縁～体部	1/3	灰白	
1031	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.3)	5.95		(7.8)	口縁～底部	1/2	灰白	

表 17　出土遺物観察表（４）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
1032	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.8)	5.55		(8.2)	口縁～底部	1/4	灰白	煤
1033	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.6)	5.85		(6.6)	口縁～底部	1/3	灰白	
1034	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(14.9)	4.7		(5.8)	口縁～底部	1/2	灰白	
1035	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.6)	4.8		(5.7)	口縁～底部	1/6	灰白	
1036	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	15.7	5.1		7.9	口縁～底部	2/3	灰白	
1037	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２	(14.1)	(3.6)		(6.2)	口縁～底部	1/5	灰白	
1038	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.6	底部	3/4	灰白	
1039	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(7.8)	底部	1/4	灰白	
1040	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(7.6)	底部	1/4	灰白	
1041	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(7.8)	底部	1/3	灰白	
1042	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.5)				口縁～体部	1/5	灰白	
1043	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.8)				口縁～体部	1/7	灰白	
1044	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.9)	底部～体部	1/2	灰白	
1045	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				8.4	底部のみ		灰白	
1046	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.0	底部のみ		灰白	
1047	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.6)	底部	1/2	灰白	
1048	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.0	底部のみ		灰白	
1049	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.2	底部	高台部欠損	灰白	
1050	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	知多	5	(14.7)				口縁部	1/8	灰白	
1051	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.7)	底部～体部	1/2	灰白	
1052	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.55	底部のみ		灰白	外面煤付着
1053	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.8	底部のみ		灰白	内面煤付着
1054	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部～体部	2/3	灰白	
1055	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部	1/2	灰白	内面煤付着
1056	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.3	底部のみ		灰白	内面煤付着
1057	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.0)	底部のみ		灰白	
1058	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.8	底部～体部		灰白	
1059	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.2)	底部	1/2	灰白	
1060	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.0	底部のみ		灰白	
1061	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.6	底部～体部		灰白	
1062	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.2	底部のみ		灰白	
1063	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.8	底部のみ		灰白	
1064	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.1)	底部～体部		灰白	
1065	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				6.2	底部～体部		灰白	内面漆付着
1066	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.4	底部のみ		灰白	
1067	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.05	底部のみ		灰白	
1068	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				(5.6)	底部	1/4	灰白	
1069	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				6.2	底部のみ		灰白	
1070	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－２				7.0	底部	2/3	灰白	
1071	SD2004	2区	中層	山茶碗	小椀	渥美湖西		(8.3)				口縁～体部	1/5	灰白	
1072	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.0)	2.05	(4.1)		口縁～底部	1/4	灰白	
1073	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.55		底部のみ		灰白	
1074	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.8		底部のみ		灰白	
1075	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.5		底部	1/2	灰白	
1076	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－２			(4.2)		底部	2/3	灰白	
1077	SD2004	2区	中層	山茶碗	小椀	渥美湖西		(8.8)				口縁～体部	1/6	灰白	
1078	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	8.45	2.3	4.6		口縁～底部	1/2	灰白	
1079	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.15		底部のみ		灰白	
1080	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			(4.6)		底部	1/3	灰白	
1081	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.25		底部のみ		灰白	
1082	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－２	(8.0)	1.75	(4.2)		口縁～底部	1/4	灰白	
1083	SD2004	2区	中層	山茶碗	小椀	渥美湖西	不明	(7.1)				口縁～体部	1/4	灰白	
1084	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.0)				口縁～体部	1/3	灰白	
1085	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明				(4.0)	底部	1/4	灰白	
1086	SD2004	2区	中層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			(4.6)		底部	1/3	灰白	
1087	SD2004	2区	中層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(27.4)				口縁部	1/8	灰	
1088	SD2004	2区	中層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(15.2)	底部～体部	1/4	灰白	
1089	SD2004	2区	中層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅰ		(4.85)		(12.0)	底部～体部	1/5	灰	
1090	SD2004	2区	中層	陶器	片口鉢	知多	6a	(20.6)	8.3		(21.0)	口縁～底部	1/4	灰白	
1091	SD2004	2区	中層	陶器	片口鉢	渥美	Ⅰ		(4.5)		(14.0)	底部～体部	1/4	灰白	
1092	SD2004	2区	中層	陶器	壷	渥美	Ⅰ	(9.6)				口縁部	1/4	灰白 / 灰	
1093	SD2004	2区	中層	陶器	壷	渥美				(11.0)		底部	1/4	灰 / 灰白	
1094	SD2004	2区	中層	陶器	壷	常滑						肩部	1/5	にぶい橙	
1095	SD2004	2区	中層	陶器	甕	渥美湖西	Ⅰ	(45.0)				口縁部	1/10	灰 / 灰白	
1096	SD2004	2区	中層	青磁	皿	同安窯	B 類			(4.6)		底部	1/4	明オリーブ灰	
1097	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)	3.5	3.3		口縁～体部	1/5	にぶい黄橙	
1098	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	3.0	(8.0)		口縁～底部	1/2	灰白	外面煤付着
1099	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)	3.35	5.0		口縁～底部	1/6	淡黄	
1100	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	13.1				口縁～体部	1/6	淡黄	
1101	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁～体部	1/8	灰白	
1102	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁～体部	1/6	淡黄	
1103	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.35	3.35	7.5		口縁～底部	2/3	灰白	
1104	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部	1/4	淡黄	
1105	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	3.4	(5.3)		口縁～底部	1/4	灰白	
1106	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁～体部	1/8	淡黄	
1107	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.1)				口縁～底部	1/4	灰白	
1108	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁～体部	1/8	灰白	
1109	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)	4.0	(4.5)		口縁～底部	1/2	灰白	
1110	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁～底部	1/8	灰白	
1111	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)				口縁～底部	1/3	淡黄	
1112	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部	1/6	灰白	
1113	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁～底部	1/8	灰白	
1114	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁～底部	3/4	淡黄	
1115	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部	1/12	浅黄橙	
1116	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.0)	2.0	(6.6)		口縁～底部	1/2	灰白	
1117	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)				口縁～体部	1/3	灰白	
1118	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁～底部	1/5	灰白	
1119	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		ロクロ				(6.8)	底部～体部	1/3	灰白	
1120	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		ロクロ				(9.0)	底部	1/4	浅黄橙	
1121	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		ロクロ	(7.9)	1.55	(5.0)		口縁～底部	1/8	にぶい黄橙	
1122	SD2004	2区	中層	土師質土器	皿		ロクロ	(6.4)	1.6	(3.4)		口縁～底部	1/4	灰白	
1123	SD2004	2区	中層	土師質土器	柱状高台		ロクロ				3.76	高台部	1/1	浅黄橙	
1124	SD2004	2区	中層	土師質土器	伊勢型鍋			(28.0)				口縁部	1/10	浅黄橙	
1125	SD2004	2区	中層	青磁	碗		A2 類	(14.6)				口縁部	1/16	灰オリーブ	
1126	SD2004	2区	中層	青磁	碗		B1 類	(16.0)				口縁部	1/16	オリーブ灰	
1127	SD2004	2区	中層	白磁	碗		Ⅴ類					底部	1/6	灰白	
1128	SD2004	2区	中層	白磁	碗		Ⅳ類					底部	1/4	灰白	
1129	SD2004	2区	中層	白磁	碗		Ⅳ類	(16.0)				口縁部	1/16	灰白	
1130	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(14.8)				口縁～体部	1/6	灰白	
1131	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２	(15.4)				口縁～体部	1/ 5	灰白	
1132	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				7.1	底部	3/4	灰白	
1133	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－２				(6.3)	底部	1/5	灰白	
1134	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.0)	底部	1/3	灰白	
1135	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.7)	底部	1/2	灰白	
1136	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/3	灰白	
1137	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.0)	底部	1/4	灰白	重ね焼き痕
1138	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.9)	底部～体部	1/4	灰白	
1139	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ					底部	1/5	灰白	
1140	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.9)	底部	1/3	灰白	
1141	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/3	灰白	
1142	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.2)	(4.7)		6.95	口縁～底部	1/10	灰白	
1143	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.2)				口縁～体部	1/4	灰白	
1144	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.7)	底部～体部	1/2	灰白	
1145	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				7.8	底部のみ		灰白	
1146	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.0)	5.1		(7.0)	口縁～底部	1/4	灰白	
1147	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(14.7)				口縁～体部	1/12	灰白	
1148	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.8	底部のみ		灰白	
1149	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(8.3)	底部～体部	1/2	灰白	
1150	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.2)	4.5		6.8	口縁～底部	1/3	灰白	
1151	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.7	底部～体部		灰白	

表 18　出土遺物観察表（5）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
1152	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.8)	底部～体部		灰白	煤付着
1153	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部～体部	1/2	灰白	
1154	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.4	底部のみ		灰白	
1155	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部～体部	1/2	灰白	
1156	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.85	底部のみ		灰白	
1157	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.6	底部のみ		灰白	
1158	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.4	底部のみ		灰白	
1159	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(5.5)	底部	1/4	灰白	
1160	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.45	底部のみ		灰白	
1161	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.6	底部のみ		灰白	
1162	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				5.7	底部のみ		灰白	
1163	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.35	底部のみ		灰白	
1164	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(5.4)	底部	1/3	灰白	
1165	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				5.8	底部	1/2	灰白	
1166	SD2004	2区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(4.2)	底部	1/2	灰白	
1167	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.2)	2.3	(4.4)		口縁～底部	1/3	灰白	
1168	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.8)	1.85	(3.4)		口縁～底部	1/5	灰白	
1169	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.8)	2.1	(3.4)		口縁～底部	1/3	灰白	
1170	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.4)	1.9	(3.6)		口縁～底部	1/5	灰白	
1171	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	9.2	1.9	4.8		口縁～底部	1/2	灰白	
1172	SD2004	2区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(4.7)	体部～底部	1/4	灰白	
1173	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.6		底部のみ		灰白	
1174	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.65		底部のみ		灰白	
1175	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.2		底部のみ		灰白	
1176	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(4.2)		底部	1/2	灰白	
1177	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2	8.45	1.9	4.2		完形		灰白	
1178	SD2004	2区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(4.4)	底部	1/3	灰白	
1179	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				3.9	底部のみ		灰白	
1180	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.55		底部	2/3	灰白	
1181	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.2		底部のみ		灰白	
1182	SD2004	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(29.4)	12.5		(10.0)	口縁～底部	1/5	灰白	
1183	SD2004	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(30.9)	12.4		(8.8)	口縁～底部	1/3	灰白	
1184	SD2004	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(30.6)	10.8		(14.6)	口縁～底部	1/6	褐灰	
1185	SD2004	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(14.5)	底部～体部	1/3	灰白	煤付着
1186	SD2004	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(11.5)	底部	2/3	褐灰	
1187	SD2004	2区	上層	陶器	甕	渥美湖西	Ⅰ			(11.4)		底部	1/4	明オリーブ灰	
1188	SD2004	2区	上層	陶器	壷	常滑				(11.0)		底部	1/8	にぶい橙	
1189	SD2004	2区	上層	陶器	壷	常滑				(10.0)		底部	1/4	灰褐	
1190	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部	1/6	灰白	
1191	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.0				口縁～底部	1/2	灰白	
1192	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁～体部	1/3	灰白	
1193	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁～体部	1/8	灰白	
1194	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)				口縁～体部	1/8	灰白	
1195	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)				口縁～体部	1/8	灰白	
1196	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁～底部	1/4	灰白	
1197	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁～体部	1/5	灰白	
1198	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.2)				口縁～体部	1/4	灰白	
1199	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.9)	2.1	6.4		口縁～底部	3/4	灰白	
1200	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
1201	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.1)				口縁～体部	1/6	灰白	
1202	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.3)				口縁～体部	1/4	浅黄橙	
1203	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	6.95	1.45	4.0		口縁～底部	ほぼ完形	淡黄	
1204	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ				(7.2)	底部	1/6	灰白	
1205	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ	(6.6)	1.52	(3.0)		口縁～底部	1/4	浅黄橙	
1206	SD2004	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ				4.15	底部のみ		灰白 / 浅黄橙	
1207	SD2004	2区	上層	土師質土器	伊勢型鍋			(26.8)				口縁部	1/8	にぶい黄橙	
1208	SD2004	2区	上層	土師質土器	伊勢型鍋			(25.8)				口縁部	1/16	にぶい黄橙	
1209	SD2004	2区	上層	青磁	碗		A1 類				(6.0)	底部	1/4	灰オリーブ	
1210	SD2004	2区	上層	青磁	碗	同安窯	B					体部片		灰白	
1211	SD2004	2区	上層	白磁	碗		Ⅳ類				(4.8)	底部	1/4	明オリーブ灰	
1212	SD2004	2区	上層	白磁	壷		不明					底部片		灰白	
1213	SD2004	2区	上層	白磁	碗		Ⅴ類	(17.3)				口縁部	1/16	灰白	
1214	SD2004	2区	上層	白磁	碗		Ⅴ -4	(18.8)				口縁部	1/20	明オリーブ灰	
1215	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.2	底部	2/3	灰白	墨書
1216	SD2004	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.2	底部のみ		灰白	墨書
1217	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(16.2)	5.2		7.3	口縁～底部	1/2	灰白	墨書「栗」
1218	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.0)	5.0		(6.7)	口縁～底部	1/2	灰白	墨書「得善」
1219	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	知多	5				(6.4)	底部	1/2	灰白	墨書
1220	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.15	底部のみ		灰白	墨書（記号）
1221	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				5.8	底部	2/3	灰白	墨書
1222	SD2004	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.5	底部のみ		灰白	墨書「○」
1223	SD2004	2区	中層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				3.4	底部のみ		灰白	墨書『上』
1224	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2					底部	1/6	灰白	墨書
1225	SD2004	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.0	底部のみ		灰白	墨書「十」
1226	SD2004	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			5.0		底部のみ		灰白	墨書「一」
1227	SD2004	2区	中層	中世瓦	平瓦			現存長 11.5	現存幅 11.0			側端・狭端		灰	離れ砂
1228	SD2004	2区	中層	中世瓦	平瓦			現存長 7.9	現存幅 9.6			側端		灰	離れ砂
1229	SD2004	2区	下層	中世瓦	丸瓦			現存長 5.5	現存幅 3.1			狭端		灰	吊り紐痕
1244	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.4)				口縁～体部	1/5	明褐灰	
1245	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.5)	底部	1/3	黄灰	
1246	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(15.9)	(4.75)		(7.2)	口縁～底部	1/4	灰白	
1247	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(11.1)	5.35		7.55	口縁～底部	1/5	灰白	
1248	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.3)	底部	1/5	灰白	
1249	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	16.7	6.15		6.25	口縁～底部	ほぼ完形	灰黄	煤付着
1250	SD2005	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.85	底部のみ		黄灰	墨書「一」
1251	SD2005	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－1	8.8	3.15		3.8	口縁～底部	ほぼ完形	灰白	
1252	SD2005	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－1				3.9	底部		黄灰	
1253	SD2005	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－1				3.3	底部～体部		灰白	
1254	SD2005	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.9)	2.35	(3.8)		口縁～底部	1/3	灰白	
1255	SD2005	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.6		底部	1/2	灰白	
1256	SD2005	2区	下層	白磁	碗		Ⅳ類				(5.5)	底部	1/3	灰白	
1257	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.65)	(5.3)		(6.75)	口縁～底部	1/2	灰白	墨書
1258	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.0)	(5.75)		(6.1)	口縁～底部	1/6	灰白	
1259	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
1260	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.4)				口縁～体部	1/6	灰白	輪花
1261	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.7)	(5.5)		(7.0)	口縁～底部	1/2	灰白	
1262	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.3	5.3		6.6	ほぼ完形		灰白	
1263	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(6.5)	底部	1/3	灰白	
1264	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.6)	底部	1/2	灰白	
1265	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部	1/2	灰白	
1266	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.9)	底部～体部	1/2	灰白	
1267	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.6)	体部～底部	2/3	灰白	
1268	SD2005	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.2)	底部～体部	1/2	灰白	円形に加工
1269	SD2005	2区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(4.0)	底部	1/2	灰白	
1270	SD2005	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.9)	(2.7)	(4.0)		口縁～底部	1/10	灰白	
1271	SD2005	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(3.65)		底部のみ		灰白	墨書
1272	SD2005	2区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)				口縁～体部	1/4	にぶい黄橙	
1273	SD2005	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.3)	2.4	(4.4)		口縁～底部	1/2	橙	
1274	SD2005	2区	下層	須恵器	坏蓋			(15.9)				口縁部	1/13	灰白	
1275	SD2005	2区	上層	須恵器	坏蓋			(16.0)				口縁～体部	1/7	灰白	
1276	SD2005	2区	上層	須恵器	坏蓋							頭頂部		黄灰	
1277	SD2005	2区	上層	須恵器	坏蓋			(17.9)				口縁～体部	1/6	灰白	
1278	SD2005	2区	上層	須恵器	坏			(11.5)				口縁～体部	1/4	灰白	
1279	SD2005	2区	下層	須恵器	坏			(13.1)				口縁部	1/10	灰白	
1280	SD2005	2区	上層	須恵器	坏身					(5.6)		底部	1/3	灰白	
1281	SD2005	2区	上層	須恵器	壷						(11.6)	底部～体部	1/7	灰白	
1282	SD2005	2区	下層	須恵器	高坏							脚部		黄灰	
1283	SD2005	2区	上層	灰釉陶器	碗			(15.9)				口縁～体部	1/7	灰白	
1284	SD2005	2区	下層	灰釉陶器	碗						(7.4)	底部	1/2	灰黄褐	
1293	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(14.3)				口縁～体部	1/8	灰白	

表 19　出土遺物観察表（６）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
1294	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.6)	5.1		(7.1)	口縁～底部	1/3	灰白	
1295	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				8.0	底部～体部		灰白	
1296	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				7.6	底部のみ			
1297	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.8)	底部	1/4	灰白	
1298	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.1)	底部	1/4	灰白	
1299	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/4	灰白	
1300	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.3)	底部	1/2	灰白	
1301	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.5)	底部	1/10	灰白	
1302	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.6)	底部	1/5	灰白	
1303	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.6)	底部	1/2	灰白	
1304	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.9	底部のみ		灰白	外面煤付着
1305	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.7	底部～体部		灰白	
1306	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.35	底部～体部		灰白	
1307	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.1	底部～体部		灰白	
1308	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.4	底部のみ		灰白	煤付着
1309	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.5)	底部	1/2	灰白	
1310	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部	1/5	灰白	
1311	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.9	底部～体部	1/2	灰白	墨書「大」
1312	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.7)	底部	1/2	灰白	墨書「一」
1313	SD2006	2区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				7.6	底部～体部		灰白	線刻
1314	SD2006	2区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				3.85	底部のみ		灰白	
1315	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.1	2.0	4.0		口縁～底部	ほぼ完形	褐灰	
1316	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)	2.2	4.3		口縁～底部	1/2	灰白	
1317	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.3)				口縁部	1/4	灰白	
1318	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			3.7		底部のみ		灰白	
1319	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(3.8)		底部	1/2	灰白	
1320	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(3.8)		底部	1/2	褐灰	
1321	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(3.9)		底部	1/2	黄灰	
1322	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			3.8		底部のみ		灰白	
1323	SD2006	2区	下層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			3.7		底部のみ		灰白	
1324	SD2006	2区	下層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.2)				口縁部	1/16	にぶい橙	
1325	SD2006	2区	下層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.2)	2.2	(4.6)		口縁～底部	1/4	浅黄橙	
1326	SD2006	2区	下層	土師質土器	柱状高台		ロクロ			5.0		高台部		灰白	
1327	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.0)	5.3		(6.4)	口縁～底部	1/2	灰白	
1328	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.8)	6.2		7.4	口縁～底部	2/3	灰白	
1329	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.2)	6.4		(7.1)	口縁～底部	ほぼ完形	灰白	
1330	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				8.6	底部～体部		灰白	
1331	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(8.6)	底部	3/5	灰白	
1332	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.4)	底部	1/2	灰白	
1333	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(8.0)	底部	1/3	灰白	
1334	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				7.0	底部のみ		灰白	
1335	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(6.6)	底部	1/6	灰白	
1336	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(5.6)	底部	1/4	灰白	
1337	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.0)	底部	3/5	灰白	
1338	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.0)	底部	1/2	灰白	
1339	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.9)	底部	1/4	灰白	外面煤付着
1340	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部	1/5	灰白	
1341	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/6	灰白	
1342	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.9)	底部	1/2	灰白	
1343	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/8	灰白	
1344	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.7)	底部	1/8	灰白	
1345	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.7)	底部	1/8	灰白	
1346	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.8	底部のみ		灰白	
1347	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.75	底部のみ		灰白	
1348	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部	1/8	灰白	
1349	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部のみ		灰白	墨書「山」
1350	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.2	底部のみ		灰白	
1351	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				5.7	底部のみ		灰白	外面煤付着
1352	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.7)	底部	1/2	灰白	
1353	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.35	底部のみ		灰白	
1354	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.75	底部のみ		灰白	
1355	SD2006	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				7.2	底部のみ		灰白	
1356	SD2006	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.5	2.4	4.2		ほぼ完形		灰	
1357	SD2006	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)				口縁部	1/12	灰白	
1358	SD2006	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			(4.4)		底部	1/2	灰白	
1359	SD2006	2区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.6)				口縁部	1/5	灰白	
1360	SD2006	2区	上層	陶器	鉢	渥美湖西	不明	(15.4)				口縁～体部	1/6	灰白	
1361	SD2006	2区	上層	陶器	鉢	渥美湖西	不明	(15.6)				口縁～体部	1/6	灰白	
1362	SD2006	2区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	不明	(30.5)				口縁部	1/20	褐灰	
1363	SD2006	2区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			(4.7)		底部	1/4	浅黄橙	
1364	SD2006	2区	上層	白磁	碗		Ⅴ類					底部～体部	1/5	灰白 / 灰黄	高台欠損
1365	SE1001	1区	裏込め	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.5)	3.1	(8.9)		口縁～底部	1/3	灰白	
1366	SE1001	1区	裏込め	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部	1/8	灰白	
1367	SE1001	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.6	底部～体部		灰白	
1368	SE1001	1区	中層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)				口縁～体部	1/8	灰白	
1369	SE1001	1区	中層	中世瓦	平瓦			現存長 11.2	現存幅 8.8			側端・狭端		灰	離れ砂
1370	SE1001	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(7.1)	底部	1/3	灰白	墨書
1371	SE1001	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2	(15.8)				口縁部	1/16	灰白	
1372	SE1001	1区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)				口縁～底部	1/4	灰白	
1373	SE1001	1区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)	3.45	(9.9)		口縁～底部	1/2	灰白	
1374	SE1001	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2	7.9	1.9	4.7		口縁～底部	2/3	灰白	
1375	SE1001	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2			3.6		底部	2/3	灰白	
1376	SE1001	1区	上層	中世陶器	甕	渥美		(32.2)				口縁部	1/20	灰白	
1386	SE1002	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.1)				口縁部	1/10	灰白	
1387	SE1002	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.1	底部～体部		灰白	煤付着
1388	SE1002	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.9)				口縁部	1/16	灰白	輪花
1389	SE1002	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.15	底部		灰白	被熱
1390	SE1002	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.65)	(2.55)		(4.05)	底部～口縁	1/3	灰白	
1391	SF2001	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(15.5)	6.15		6.55	口縁～底部	2/3	灰白	内面煤付着
1392	SE2001	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西		(15.9)				口縁部	1/8	灰黄	輪花
1393	SE2001	2区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.8)	底部片	1/4	褐灰	
1394	SE2001	2区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西		(15.8)				口縁～体部	1/24	灰白	
1395	SE2001	2区	上層	白磁	碗		Ⅶ－2	(15.1)				口縁部	1/20	灰白	
1396	SF1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.0)				口縁部	1/10	灰白	つけ掛け
1397	SF1001	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2					底部	1/4	灰白	高台欠損
1398	SF1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.4)				口縁部	1/10	灰白	
1399	SF1005	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.0)				口縁部	1/10	灰黄	
1400	SF1005	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.4)				口縁部	1/8	灰白	
1401	SF1006	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西		(14.8)				口縁部	1/12	灰白	
1402	SF1009	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.0	5.0		5.9	ほぼ完形		灰白	
1403	SF1010	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(17.3)				口縁部	1/14	灰白	
1404	SF1010	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/6	灰オリーブ	
1405	SF1011	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	8.8	2.2	3.3		ほぼ完形		灰白	
1406	SF1010	1区	埋土	陶器	甕	渥美	Ⅰ	(26.0)				口縁部	1/12	灰	
1407	SF1013	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(8.3)	2.45	4.3		口縁～底部	1/2	灰白	
1408	SF1013	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.05	2.25	4.3		完形		灰黄	墨書
1409	SF1013	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西		(15.9)				口縁部	1/12	灰白	
1410	SF1013	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/3	灰白	
1411	SF1013	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)				口縁～体部	1/7	灰白	
1412	SF1015	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ					底部	1/2	灰白	高台欠損
1413	SF1015	1区	下層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部	1/10	灰白	磨滅激しい
1414	SF1015	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				7.2	底部～体部		灰白	煤付着
1415	SF1015	1区	中層	山茶碗	小皿	知多	5			(4.9)		底部	1/6	灰白	
1416	SF1016	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.8	4.95		5.85	口縁～底部	1/2	灰白	
1417	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				6.95	底部のみ		灰白	
1418	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.4)	底部	1/8	灰白	
1419	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部～体部	1/3	灰白	
1420	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.85)	底部	3/4	灰白	
1421	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(5.7)	底部～体部		灰白	
1422	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.7)				口縁部	1/14	灰白	

表 20　出土遺物観察表（7）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
1423	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.3)				口縁部	1/18	灰白	
1424	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(13.8)				口縁部	1/12	灰白	
1425	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部	1/2	灰白	
1426	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				(6.7)	底部	1/4	灰白	
1427	SF1016	1区	上層	山茶碗	碗	知多	4				(7.6)	底部～体部	1/3	灰白	
1428	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	(8.4)				口縁部	1/6	灰白	
1429	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1			4.0		底部	1/2	灰白	
1430	SF1016	1区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			4.45		底部のみ		浅黄橙	
1431	SF1016	1区	上層	土師質土器	皿		ロクロ			4.7		底部のみ		灰白	
1432	SF1016	1区	上層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(3.7)	底部	1/3	灰白	
1433	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(3.7)	底部	1/3	灰白	
1434	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				4.2	底部のみ		灰白	
1435	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明				(4.4)	底部	1/5	灰白	
1436	SF1016	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(4.0)	底部	1/2	灰白	
1437	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ	(16.0)				口縁部	1/3	灰白	
1438	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.8)				口縁部	1/8	灰白	
1439	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(14.9)				口縁部	1/12	灰白	
1440	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.0)				口縁部	1/12	灰白	
1441	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(14.9)				口縁～体部	1/8	灰白	
1442	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	東遠		(16.0)				口縁部	1/10	灰白	
1443	SF1017	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部	1/4	灰白	
1444	SF1017	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	不明	(8.9)				口縁部	1/8	灰白	
1445	SF1017	1区	埋土	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(3.3)	底部のみ		灰白	
1446	SF1022	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.0)	5.35		6.7	口縁～底部	2/3	灰白	
1447	SF1024	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ	(10.0)				口縁部	1/8	黄灰	
1448	SF1024	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.5)	(1.9)	(3.7)		口縁～底部	1/4	灰白	
1449	SF1024	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)	(3.2)	(3.3)		口縁～底部	1/6	灰白	
1450	SF1024	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	3.1	(6.8)		口縁～底部	1/2	灰白	
1451	SF1024	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	12.2	3.4	5.2		口縁～底部	7/8	灰白	
1452	SF1024	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ					体部～底部	1/6	灰白	
1453	SF1025	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.4	底部	2/3	灰白	墨書『十』
1454	SF1025	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	8.4	1.85	5.0		口縁～底部	1/2	灰白	
1455	SF1025	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁部	1/12	灰白	
1456	SF1025	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部	1/20	灰白	
1457	SF1025	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.9)	4.1	5.8		口縁～底部	1/3	灰白	
1458	SF1027	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ					口縁～体部	1/4		
1459	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(16.4)				口縁部	1/6	灰白	
1460	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－1				(7.6)	底部	1/6	褐灰	
1461	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.0)	底部	1/8	灰白	
1462	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				(7.2)	底部	1/3	灰白	
1463	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部のみ		灰白	
1464	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.5)	底部	1/2	灰白	
1465	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部	1/3	灰白	
1466	SF1029	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部	1/4	灰白	
1467	SF1029	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	(7.7)	(1.85)		(4.1)	底部～口縁	1/6	灰白	
1468	SF1029	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(4.2)	底部	2/3	灰白	
1469	SF1029	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1				(4.9)	底部	1/4	灰白	
1470	SF1032	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				6.0	底部のみ		灰白	
1471	SF1032	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)	3.1	(5.6)		口縁～底部	2/3	灰白	
1472	SF1032	1区	埋土	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)				口縁～体部	1/12	灰白	
1473	SF1033	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(14.8)				口縁部	1/18	灰白	
1474	SF1033	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(15.0)				口縁部	1/16	灰白	
1475	SF1034	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(15.8)				口縁部	1/12	灰白	
1476	SF1034	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/4	灰白	
1477	SF1034	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(14.0)				口縁部	1/12	灰白	
1478	SF1034	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2	(14.4)				口縁部	1/8	灰オリーブ	
1479	SF1034	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ－2				6.6	底部のみ		灰白	
1480	SF1034	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.1	底部のみ		灰白	
1481	SF1034	1区	中層	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(8.0)				口縁部	1/8	灰白	
1482	SF1034	1区	中層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2				3.8	底部～体部		灰白	
1483	SF1034	1区	下層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ－2	9.5	3.3		3.45	ほぼ完形		灰白	漆付着
1484	SF1034	1区	下層	土師質土器	皿		ロクロ	(9.0)				口縁部	1/4	淡黄	
1485	SF1034	1区	中層	土師質土器	皿		ロクロ	(7.8)	(1.95)	(4.9)		口縁～底部	1/2	淡黄	
1486	SF1038	1区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	不明	(6.4)				口縁部	1/8	灰白	
1487	SF1038	1区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(4.0)		底部	1/4	灰白	磨滅
1488	SF2011	2区	埋土	山茶碗	椀	渥美湖西	不明	(15.5)				口縁部	1/18	灰白	
1490	SF2004	2区	埋土	須恵器	坏蓋							頭頂～体部	3/4	灰白	
1491	SF2004	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(17.8)	5.05			頭頂～口縁	1/2	灰白	
1492	SF2004	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(14.4)				口縁部	1/18	灰白	
1493	SF2004	2区	埋土	須恵器	坏			(12.0)				口縁部	1/16	灰白	
1494	SF2005	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(18.4)				口縁部	1/8	灰	
1495	SF2005	2区	埋土	須恵器	坏			(13.4)				口縁部	1/18	灰白	
1496	SF2005	2区	埋土	須恵器	坏身					(11.1)		底部	1/6	灰白	
1497	SF2005	2区	埋土	須恵器	坏蓋			(13.3)				口縁部	1/10	灰	
1498	SF2005	2区	埋土	土師器	坏身			(11.7)				口縁部	1/16	灰白	赤彩
1499	SF2005	2区	埋土	土師器	坏			(22.3)	3.4		(19.2)	口縁～底部	1/10	灰黄	赤彩
1500	SF2005	2区	埋土	土師器	甕			(23.9)				口縁部	1/8	にぶい黄橙	
1501	SF2005	2区	埋土	土師器	甕			(18.8)				口縁部	1/30	灰黄褐	
1502	SF2011	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(15.7)				口縁部	1/12	灰白	
1503	SF2011	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.5)	底部	1/3	灰白	墨書
1504	SF2011	2区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2	(8.5)				口縁部	1/10	灰白	
1505	SF2011	2区	埋土	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－2			3.65		底部のみ		灰白	
1506	SF2018	2区	埋土	須恵器	高坏					(12.3)		脚部	1/16	灰白	
1507	SF2026	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部	1/2	灰白	
1508	SF2026	2区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部	1/6	灰白	
1509	SF2026	2区	埋土	土師質土器	皿		ロクロ			(5.7)		底部	1/4	にぶい黄橙	
1510	SX1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	不明	(16.5)				口縁部	1/20	灰白	
1511	SX1004	1区	埋土	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1				(7.1)	底部	1/6	灰白	
1512	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	11.65	3.8	7.6		完形		灰白	
1513	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	12.3	3.85	6.7		完形		灰白	
1514	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	12.6	3.85	7.2		完形		灰白	
1515	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.3)	3.45	6.9		口縁～底部	3/8	灰白	煤付着
1516	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.9)	(3.9)	(7.4)		口縁～底部	1/4	灰白	
1517	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁～底部	1/6	灰白	内面煤付着
1518	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	7.7	1.75	6.0		口縁～底部	3/4	灰白	
1519	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ					体部～底部	1/4	灰白	磨滅
1520	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.2)				口縁～底部	1/6	灰白	
1521	SX1004	1区	底部	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁～底部	1/4	灰白	
1522	SX1008	1区	底部	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	14.85	4.9		6.5	完形		灰白	
1523	SX1008	1区	下層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(17.1)				口縁部	1/12	灰白	
1524	SX1008	1区	下層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(31.0)				口縁部	1/20	褐灰	
1525	SX1008	1区	底部	陶器	壷	渥美湖西	Ⅱ	11.9	22.85	10.0		口縁～底部	ほぼ完形	灰白	ヘラ記号
1526	SX1008	1区	上層	土師質土器	皿		非ロクロ					体部～底部	1/6	灰白	煤付着
1527	SX1008	1区	上層	青磁	碗		A1				(5.8)	底部	1/8		
1528	SX1008	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	(16.5)				口縁部	1/12	明赤灰	
1529	SX1008	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(15.3)				口縁部	1/14	灰白	
1530	SX1008	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.4	5.65		6.6	口縁～底部	2/3	灰白	
1531	SX1008	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2	15.3	5.45		6.1	口縁～底部	2/5	灰白	
1532	SX1008	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－2				6.1	底部のみ		灰白	
1533	SX1012	1区	底部	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.65	5.0		6.25	ほぼ完形		灰白	煤付着
1534	SX1012	1区	底部	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	17.0	5.7		7.6	完形		灰白	
1535	SX1012	1区	底部	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.4	5.2		6.3	ほぼ完形		灰白	
1536	SX1012	1区	底部	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	15.65	5.8		6.25	完形		灰白	
1537	SX1012	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.3	2.05	4.65		完形		灰白	
1538	SX1012	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.3	1.9	5.25		完形		灰白	墨書『土』
1539	SX1012	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.75	2.0	4.9		完形		灰白	
1540	SX1012	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.3	2.2	5.0		完形		灰白	煤付着
1541	SX1012	1区	底部	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－1	8.35	2.4	4.1		口縁～底部	ほぼ完形	灰白	
1542	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	16.4	5.45		6.5	口縁～底部	1/2	灰白	
1543	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－1	(16.7)	4.6		(6.3)	口縁～底部	1/2	灰白	

表 21　出土遺物観察表（８）

No.	遺構名	区	層位	種類	器種	産地	型式	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	高台径（cm）	残存部位	残存率	色調	備考
1544	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.7)				口縁部	1/3	灰白	
1545	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.6)				口縁～体部	1/2	灰白	
1546	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(5.95)	底部～体部	1/2	灰白	
1547	SX1012	1区	上層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(16.5)				口縁～体部	1/6	灰白	
1548	SX1012	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(7.4)				口縁部	1/7	灰白	
1549	SX1012	1区	上層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(9.0)				口縁部	1/8	灰白	
1550	SX1012	1区	上層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(28.9)				口縁部	1/6	灰	
1551	SX1012	1区	下層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(26.2)				口縁部	1/10	灰	
1568		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-1				7.0	底部	3/4	灰白	
1569		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(6.0)	底部	1/4	灰白	
1570		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(8.3)	底部	1/4	灰白	
1571		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(7.4)	底部	1/2	灰白	
1572		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2					底部	1/6	灰白	
1573		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(7.9)	底部	1/2	灰白	
1574		1区	検出面	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(7.2)	底部	3/4	灰白	
1575		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(6.7)	底部	1/5	灰白	
1576		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(7.0)	底部	1/5	灰白	
1577		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(8.0)	底部	1/4	灰白	
1578		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ					口縁～底部	1/6		
1579		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/2	灰白	
1580		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(9.4)	底部	1/3	灰白	
1581		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/2	灰白	
1582		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(8.0)	底部	1/4	灰白	
1583		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(5.2)	底部～体部	1/7	灰白	
1584		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.55	底部のみ		灰白	
1585		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.5	底部のみ		灰白	
1586		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(9.6)	底部	1/6	灰白	
1587		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/4	灰白	
1588		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部	1/5	灰白	
1589		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				5.9	底部のみ		灰白	
1590		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				8.6	底部	3/4	灰白	
1591		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.4)	底部	1/4	灰白	
1592		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ	2.4	(8.0)			底部	1/3	灰白	
1593		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/3	灰白	
1594		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/3	灰白	
1595		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				8.0	底部のみ		灰白	
1596		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				7.2	底部のみ		灰白	
1597		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.15)	4.9		6.5	口縁～底部	1/2	灰白	
1598		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１	(15.0)	4.7	6.65		口縁～底部	1/4	灰白	
1599		2区	包含層	山茶碗	碗	常滑	5	(15.6)	4.8	(6.0)		口縁～底部	1/5	灰白	
1600		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ-2				(6.3)	底部	1/4	灰白	
1601		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ-2				(6.8)	底部	1/2	灰白	
1602		1区	包含層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ-2				(4.1)	底部	1/4	灰白	
1603		2区	包含層	山茶碗	小碗	渥美湖西	Ⅰ-2	(9.0)	3.5	(3.8)		口縁～底部	1/3	灰白	
1604		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	(8.1)	2.4	3.8		口縁～底部	3/4	灰白	
1605		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	(8.0)	2.4	(3.8)		口縁～底部	1/3	灰白	
1606		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	(8.2)	2.25	4.4		完形		灰黄	
1607		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	8.52	2.35	4.65		ほぼ完形		黄灰	
1608		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	8.35	2.65	4.0		口縁～底部	1/5	灰白	
1609		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	8.5	2.5	4.8		口縁～底部	3/4	灰白	
1610		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	8.3	2.3	3.9		完形		灰白	墨書
1611		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	8.0	2.4	4.55		口縁～底部	3/4	灰白	
1612		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.1)	1.9	4.15		口縁～底部	1/3	灰白	
1613		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	7.85	3.0	4.7		完形		灰白	墨書
1614		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	7.6	2.25	3.9		口縁～底部	ほぼ完形	灰白	
1615		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.65)	2.45	4.15		口縁～底部	4/5	灰白	
1616		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(8.15)	2.3	4.0		口縁～底部	3/4	灰白	
1617		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	(7.6)	2.2	(4.0)		口縁～底部	1/4	灰白	
1618		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ-2	(7.6)	1.65	(5.2)		口縁～底部	1/2	灰白	
1619		2区	包含層	山茶碗	小皿	常滑	5	(8.3)	1.95	(4.9)		口縁～底部	1/2	灰白	
1620		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅰ				(13.3)	底部～体部	1/6	灰	
1621		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(19.9)				口縁部	1/10	オリーブ灰	
1622		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(19.7)				口縁部	1/10	灰白	
1623		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(13.9)	底部	1/6	灰	
1624		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ	(28.8)				口縁部	1/12	灰／灰白	
1625		1区	包含層	陶器	片口鉢	渥美湖西	Ⅱ				(16.0)	底部	1/4	灰	
1626		2区	包含層	山茶碗	小坏			4.75	1.6	2.4		完形		灰白	
1627		2区	包含層	陶器	鉢	渥美湖西	Ⅰ～Ⅱ	(18.9)	6.0	(10.7)		口縁～底部	1/6	黄灰	
1628		1区	包含層	陶器	壺	常滑		(16.0)				口縁部		淡黄	
1629		1区	包含層	陶器	甕	渥美				(16.8)		底部	1/8	灰黄	
1630		1区	表採	白磁	碗		Ⅳ類			(5.5)		底部	3/5	灰／灰白	
1631		2区	包含層	青磁	碗	同安窯	B	(12.9)				口縁部	1/8	灰白／灰黄	
1632		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-2	(16.6)	6.6		7.5	口縁～底部	1/2	灰白	墨書「□」
1633		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ					底部	1/2	灰白	墨書［行□］
1634		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				5.5	底部のみ		灰白	墨書「上」
1635		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅰ-1				6.7	底部～体部		灰白	墨書
1636		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部	1/3	灰白	墨書「又」
1637		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				7.4	底部のみ		灰白	墨書「奉」
1638		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅱ				(5.6)	底部のみ		灰白	墨書
1639		1区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部	1/2	灰白	墨書
1640		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１	8.9	2.25	4.5		完形		灰白	墨書「○」
1641		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	8.3	2.5	4.1		口縁～底部	2/3	灰白	墨書「子」
1642		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅱ	9.15	2.75	4.7		口縁～底部	1/3	灰白	墨書「一」
1643		2区	包含層	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				(7.3)	底部	1/8	灰	墨書「十」
1644		1区	表採	山茶碗	碗	渥美湖西	Ⅲ－１				6.4	底部のみ		灰白	墨書
1645		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ-2			3.8		底部のみ		灰白	墨書「上」
1646		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			(4.4)		底部	1/2	灰白	墨書「子」
1647		1区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			(4.4)		底部～体部	1/4	灰白	墨書「十」
1648		2区	包含層	山茶碗	小皿	渥美湖西	Ⅲ－１			4.3		底部～体部		灰白	墨書「上」
1649		1区	表採	土師質土器	皿		非ロクロ					口縁～体部	1/3		
1650		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ					口縁～体部	1/5		
1651		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)				口縁～体部	1/5	浅黄橙	
1652		2区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)	2.05	3.0		口縁～底部	1/6	浅黄橙	
1653		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)	3.4			口縁～体部	1/6		
1654		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.7)				口縁～体部	1/5	浅黄橙	
1655		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ					口縁～体部	1/5		
1656		2区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁～体部	1/3	浅黄橙	
1657		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	13.0	2.8			口縁～底部	3/4	灰白	
1658		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ					口縁～体部	1/5		
1659		1区	表採	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)				口縁～体部	1/4	灰白	
1660		1区	包含層	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.5)	3.7			口縁～底部	1/5	灰白	
1661		1区	包含層	土師質土器	柱状高台		ロクロ			(5.2)		基部～脚部	2/3	灰白	
1662		2区	包含層	土師質土器	伊勢鍋			(22.8)				口縁～体部	1/2	にぶい橙色	
1663		確認調査	包含層	須恵器	坏蓋							摘み～体部	1/4	黄灰／灰	
1664		1区	包含層	須恵器	坏蓋			(15.0)				口縁～体部	1/10	灰白	
1665		確認調査	包含層	須恵器	坏					(11)		体～底部	1/8	灰白	
1666		1区	包含層	須恵器	坏					(10.4)		体～底部	1/4	灰白	
1667		2区	包含層	須恵器	坏					9.6		体～高台部	1/3	灰白	
1668		1区	包含層	須恵器	坏					17.0		高台部	1/10	灰白	
1669		1区	包含層	須恵器	坏					(11.6)		底部	1/8	にぶい黄色	赤彩
1670		確認調査	包含層	土師器	甕			(32)				口縁部	1/10	にぶい橙色	赤彩
1671		1区	包含層	土師器	坪			(15.8)				口縁部	1/12	浅黄橙	

第６章　理化学的分析

１　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）

（１）測定対象試料

測定対象の試料は、中通遺跡で検出された炉穴や土坑、集石炉から採取された炭化物である。

（２）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ～ 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（３）測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}C/^{12}C$ の測定も同時に行う。

（４）算出方法

１）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。

２）BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、χ ２検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）$\delta\ ^{13}C$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta\ ^{13}C$ の値を用いることもある。

$\delta\ ^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta\ ^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta\ ^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / 13_{APDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta\ ^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定

中に同時に $^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta\ ^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta\ ^{14}C$ は、試料炭素が $\delta\ ^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、$\delta\ ^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta\ ^{13}C / 1000))^2$（$^{14}A_S$ として $^{14}C/^{12}C$ を使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta\ ^{13}C / 1000))$（$^{14}AS$ として $^{14}C/^{13}C$ を使用するとき）

$\Delta\ ^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta\ ^{14}C$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern　Carbon) がよく使われており、$\Delta\ ^{14}C$ との関係は次のようになる。

$\Delta\ ^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta\ ^{14}C / 10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この $\Delta\ ^{14}C$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age；yrBP) が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta\ ^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$

5）^{14}C 年代値と誤差は，1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10 較正プログラム（Bronk Ransey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（5）測定結果（表 22 ～ 25）

ほとんどの遺構は、およそ 9400 ～ 9700yrBP であり、縄文時代草創期末から早期初頭に相当し、ほぼ同時期の所産と考えられる。若干の試料混入はあるものの、全体的に処理および炭素含有量、測定状況に問題は無く、ほとんどの試料が調査所見と整合的であることから、妥当な年代であると考えられる。

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363

Bronk Ramsey C. (1995)　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2) :425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A): 355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43 (2A) :381-389

Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, :1029-1058

表 22　炉穴出土炭化物分析結果一覧表（1）

炉穴№	区	層位	Libby Age(yrBP)	δ ^{13}C（‰）	Δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	Age（yrBP）	備考
1	3	埋土	9440 ± 50	-29.15 ± 0.89	-691.4 ± 1.9	30.86 ± 0.19	-694.0 ± 1.8	30.60 ± 0.18	9510 ± 50	
3	3	埋土	9440 ± 50	-26.29 ± 0.73	-691.4 ± 1.8	30.86 ± 0.18	-692.2 ± 1.7	30.78 ± 0.17	9460 ± 50	
4	3	埋土	9460 ± 40	-26.32 ± 0.84	-692.0 ± 1.7	30.80 ± 0.17	-692.8 ± 1.6	30.72 ± 0.16	9480 ± 40	
5	3	埋土	9500 ± 50	-28.75 ± 0.76	-693.5 ± 2.0	30.65 ± 0.20	-695.9 ± 1.9	30.41 ± 0.19	9560 ± 50	
6	3	埋土	9530 ± 50	-23.90 ± 0.81	-694.5 ± 1.7	30.55 ± 0.17	-693.8 ± 1.7	30.62 ± 0.17	9510 ± 40	
7	3	埋土	9530 ± 50	-24.63 ± 0.85	-694.8 ± 1.8	30.52 ± 0.18	-694.6 ± 1.7	30.54 ± 0.17	9530 ± 40	
9	3	埋土	9520 ± 50	-24.85 ± 0.77	-694.3 ± 1.8	30.57 ± 0.18	-694.2 ± 1.7	30.58 ± 0.17	9520 ± 50	
10	3	埋土	9610 ± 50	-23.51 ± 0.84	-697.6 ± 1.8	30.24 ± 0.18	-696.7 ± 1.7	30.33 ± 0.17	9580 ± 50	
11	3	下層	9380 ± 50	-26.98 ± 0.85	-689.0 ± 2.0	31.10 ± 0.20	-690.3 ± 1.9	30.97 ± 0.19	9420 ± 50	
12	3	埋土	9480 ± 60	-31.54 ± 0.73	-692.8 ± 2.2	30.72 ± 0.22	-696.9 ± 2.1	30.31 ± 0.21	9590 ± 60	
12	3	埋土	9680 ± 50	-28.30 ± 0.95	-700.2 ± 1.8	29.98 ± 0.18	-702.2 ± 1.7	29.78 ± 0.17	9730 ± 50	
13	3	下層	9490 ± 50	-24.51 ± 0.94	-693.3 ± 1.9	30.67 ± 0.19	-693.0 ± 1.8	30.70 ± 0.18	9490 ± 50	
14	3	下層	9460 ± 50	-25.98 ± 0.88	-692.0 ± 2.0	30.80 ± 0.20	-692.6 ± 2.0	30.74 ± 0.20	9480 ± 50	
16	3	埋土	9450 ± 50	-25.48 ± 0.91	-691.7 ± 2.0	30.83 ± 0.20	-692.0 ± 1.9	30.80 ± 0.19	9460 ± 50	
17	3	埋土	9630 ± 50	-27.64 ± 0.83	-698.4 ± 1.9	30.16 ± 0.19	-700.1 ± 1.8	29.99 ± 0.18	9670 ± 50	
18	3	埋土	9570 ± 50	-28.80 ± 0.79	-696.3 ± 1.8	30.37 ± 0.18	-698.6 ± 1.8	30.14 ± 0.18	9640 ± 50	
20	3	埋土	9500 ± 50	-25.14 ± 0.75	-693.6 ± 1.8	30.64 ± 0.18	-693.7 ± 1.8	30.63 ± 0.18	9510 ± 50	
21	3	埋土	9500 ± 50	-26.32 ± 0.83	-693.6 ± 1.8	30.64 ± 0.18	-694.4 ± 1.7	30.56 ± 0.17	9520 ± 50	
22	3	埋土	9670 ± 60	-32.62 ± 0.74	-700.0 ± 2.2	30.00 ± 0.22	-704.7 ± 2.1	29.53 ± 0.21	9800 ± 60	
23	3	埋土	9510 ± 50	-26.50 ± 0.87	-694.1 ± 1.8	30.59 ± 0.18	-695.0 ± 1.7	30.50 ± 0.17	9540 ± 50	
26	3	下層	9580 ± 50	-24.74 ± 0.82	-696.5 ± 1.7	30.35 ± 0.17	-696.3 ± 1.6	30.37 ± 0.16	9570 ± 40	
27	3	埋土	9480 ± 50	-23.70 ± 0.86	-692.9 ± 1.8	30.71 ± 0.18	-692.1 ± 1.7	30.79 ± 0.17	9460 ± 40	
29	3	埋土	9670 ± 50	-29.41 ± 0.89	-699.9 ± 1.9	30.01 ± 0.19	-702.6 ± 1.8	29.74 ± 0.18	9740 ± 50	
30	3	埋土	9520 ± 50	-26.51 ± 0.86	-694.3 ± 1.8	30.57 ± 0.18	-695.2 ± 1.7	30.48 ± 0.17	9540 ± 50	
31	3	埋土	9570 ± 50	-26.42 ± 0.88	-696.0 ± 1.8	30.40 ± 0.18	-696.9 ± 1.8	30.31 ± 0.18	9590 ± 50	
32	3	埋土	9500 ± 50	-25.43 ± 0.82	-693.6 ± 1.8	30.64 ± 0.18	-693.9 ± 1.7	30.61 ± 0.17	9510 ± 50	
34	3	埋土	9650 ± 50	-26.89 ± 0.87	-699.0 ± 1.8	30.10 ± 0.18	-700.2 ± 1.8	29.98 ± 0.18	9680 ± 50	
38	3	埋土	9620 ± 50	-23.98 ± 0.85	-698.2 ± 1.8	30.18 ± 0.18	-697.6 ± 1.8	30.24 ± 0.18	9610 ± 50	
39	3	埋土	9510 ± 50	-23.70 ± 0.92	-693.9 ± 1.8	30.61 ± 0.18	-693.1 ± 1.7	30.69 ± 0.17	9490 ± 50	
40	3	埋土	9450 ± 60	-25.11 ± 0.86	-691.4 ± 2.2	30.86 ± 0.22	-691.5 ± 2.1	30.85 ± 0.21	9450 ± 60	
40	3	埋土	9530 ± 50	-27.31 ± 0.87	-694.5 ± 1.9	30.55 ± 0.19	-696.0 ± 1.8	30.40 ± 0.18	9560 ± 50	
40	3	埋土	9630 ± 50	-26.45 ± 0.80	-698.4 ± 1.9	30.16 ± 0.19	-699.3 ± 1.8	30.07 ± 0.18	9650 ± 50	
42	3	埋土	9590 ± 50	-28.22 ± 0.85	-696.9 ± 1.7	30.31 ± 0.17	-698.9 ± 1.6	30.11 ± 0.16	9640 ± 40	
43	3	埋土	9440 ± 50	-26.13 ± 0.63	-691.0 ± 1.8	30.90 ± 0.18	-691.8 ± 1.7	30.82 ± 0.17	9450 ± 50	
44	3	埋土	9560 ± 50	-26.02 ± 0.87	-695.6 ± 1.9	30.44 ± 0.19	-696.3 ± 1.8	30.37 ± 0.18	9570 ± 50	
45	3	埋土	9520 ± 50	-26.75 ± 0.92	-694.1 ± 1.7	30.59 ± 0.17	-695.2 ± 1.6	30.48 ± 0.16	9550 ± 40	
50	3	埋土	9590 ± 50	-25.74 ± 0.84	-697.1 ± 2.0	30.29 ± 0.20	-697.6 ± 1.9	30.24 ± 0.19	9610 ± 50	
52	3	埋土	9420 ± 50	-30.72 ± 0.76	-690.3 ± 1.9	30.97 ± 0.19	-694.0 ± 1.8	30.60 ± 0.18	9510 ± 50	
53	3	下層	9450 ± 50	-26.92 ± 0.79	-691.5 ± 1.8	30.85 ± 0.18	-692.7 ± 1.7	30.73 ± 0.17	9480 ± 50	
54	3	下層	9500 ± 50	-25.79 ± 0.79	-693.4 ± 1.7	30.66 ± 0.17	-693.9 ± 1.7	30.61 ± 0.17	9510 ± 40	
55	3	埋土	9520 ± 50	-22.48 ± 0.86	-694.3 ± 1.7	30.57 ± 0.17	-692.7 ± 1.6	30.73 ± 0.16	9480 ± 40	
62	3	埋土	9670 ± 50	-24.65 ± 0.84	-700.0 ± 1.8	30.00 ± 0.18	-699.7 ± 1.7	30.03 ± 0.17	9660 ± 50	
63	3	埋土	9560 ± 50	-24.52 ± 0.87	-695.7 ± 1.8	30.43 ± 0.18	-695.4 ± 1.7	30.46 ± 0.17	9550 ± 50	
64	3	埋土	9520 ± 50	-27.48 ± 0.61	-694.2 ± 2.0	30.58 ± 0.20	-695.7 ± 1.9	30.43 ± 0.19	9560 ± 50	
64	3	埋土	9540 ± 50	-25.61 ± 0.87	-695.0 ± 1.8	30.50 ± 0.18	-695.3 ± 1.7	30.47 ± 0.17	9550 ± 50	
67	3	埋土	9530 ± 50	-28.40 ± 0.83	-694.6 ± 1.8	30.54 ± 0.18	-696.8 ± 1.7	30.32 ± 0.17	9590 ± 50	炭化材
68	3	埋土	9690 ± 50	-21.45 ± 0.82	-700.5 ± 1.7	29.95 ± 0.17	-698.3 ± 1.6	30.17 ± 0.16	9630 ± 40	
69	3	埋土	9560 ± 50	-26.49 ± 0.81	-696.0 ± 1.8	30.40 ± 0.18	-696.9 ± 1.7	30.31 ± 0.17	9590 ± 50	
70	3	埋土	9600 ± 50	-25.32 ± 0.83	-697.3 ± 1.7	30.27 ± 0.17	-697.5 ± 1.7	30.25 ± 0.17	9600 ± 40	
71	3	埋土	9580 ± 50	-25.31 ± 0.82	-696.7 ± 1.8	30.33 ± 0.18	-696.9 ± 1.7	30.31 ± 0.17	9590 ± 50	
73	3	埋土	9580 ± 50	-24.46 ± 0.84	-696.7 ± 1.7	30.33 ± 0.17	-696.4 ± 1.6	30.36 ± 0.16	9580 ± 40	
74	3	埋土	9450 ± 50	-31.78 ± 0.84	-691.7 ± 1.9	30.83 ± 0.19	-696.0 ± 1.7	30.40 ± 0.17	9560 ± 50	
75	3	埋土	9520 ± 60	-30.76 ± 0.83	-694.1 ± 2.1	30.59 ± 0.21	-697.7 ± 2.0	30.23 ± 0.20	9610 ± 50	
76	3	埋土	9750 ± 50	-29.76 ± 0.70	-702.9 ± 1.7	29.71 ± 0.17	-705.8 ± 1.7	29.42 ± 0.17	9830 ± 50	
77	3	埋土	9700 ± 50	-26.78 ± 0.82	-701.0 ± 1.8	29.90 ± 0.18	-702.1 ± 1.8	29.79 ± 0.18	9730 ± 50	
78	3	埋土	9440 ± 50	-29.06 ± 0.74	-691.2 ± 1.8	30.88 ± 0.18	-693.8 ± 1.7	30.62 ± 0.17	9510 ± 40	
79	3	下層	9760 ± 50	-30.90 ± 0.76	-703.3 ± 1.7	29.67 ± 0.17	-706.9 ± 1.7	29.31 ± 0.17	9860 ± 50	
80	3	埋土	9540 ± 50	-29.32 ± 0.96	-695.0 ± 1.9	30.50 ± 0.19	-697.7 ± 1.8	30.23 ± 0.18	9610 ± 50	
80	3	埋土	9540 ± 50	-33.78 ± 0.67	-695.1 ± 1.9	30.49 ± 0.19	-700.5 ± 1.8	29.95 ± 0.18	9690 ± 50	
81	3	埋土	9560 ± 50	-27.90 ± 0.86	-695.9 ± 1.9	30.41 ± 0.19	-697.7 ± 1.8	30.23 ± 0.18	9610 ± 50	

表 23　炉穴出土炭化物分析結果一覧表（2）

炉穴№	区	層位	Libby Age(yrBP)	δ ^{13}C（‰）	Δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	Age（yrBP）	備考
85	3	埋土	9250 ± 60	-31.22 ± 0.78	-683.8 ± 2.3	31.62 ± 0.23	-687.8 ± 2.2	31.22 ± 0.22	9350 ± 60	炭化材
85	3	埋土	9520 ± 50	-24.83 ± 0.85	-694.1 ± 1.8	30.59 ± 0.18	-694.0 ± 1.7	30.60 ± 0.17	9510 ± 50	
88	3	埋土	9580 ± 60	-26.70 ± 0.89	-696.5 ± 2.2	30.35 ± 0.22	-697.6 ± 2.1	30.24 ± 0.21	9610 ± 60	
90	3	埋土	9580 ± 50	-24.71 ± 0.86	-696.7 ± 1.9	30.33 ± 0.19	-696.5 ± 1.8	30.35 ± 0.18	9580 ± 50	
92	3	埋土	9560 ± 50	-31.47 ± 0.71	-695.8 ± 1.8	30.42 ± 0.18	-699.8 ± 1.7	30.02 ± 0.17	9670 ± 50	
93	3	埋土	9560 ± 50	-28.83 ± 0.75	-695.7 ± 1.8	30.43 ± 0.18	-698.1 ± 1.8	30.19 ± 0.18	9620 ± 50	
95	3	埋土	9540 ± 50	-23.90 ± 0.82	-695.1 ± 1.8	30.49 ± 0.18	-694.4 ± 1.7	30.56 ± 0.17	9520 ± 50	
96	3	埋土	9580 ± 50	-28.20 ± 0.86	-696.5 ± 1.8	30.35 ± 0.18	-698.5 ± 1.8	30.15 ± 0.18	9630 ± 50	
96	3	埋土	9600 ± 50	-26.30 ± 0.88	-697.3 ± 1.9	30.27 ± 0.19	-698.1 ± 1.8	30.19 ± 0.18	9620 ± 50	
99	3	埋土	9580 ± 50	-27.53 ± 0.84	-696.7 ± 1.8	30.33 ± 0.18	-698.3 ± 1.7	30.17 ± 0.17	9630 ± 50	炭化材
103	3	埋土	9470 ± 50	-25.86 ± 0.90	-692.3 ± 1.9	30.77 ± 0.19	-692.9 ± 1.8	30.71 ± 0.18	9480 ± 50	
104	3	埋土	9690 ± 50	-26.01 ± 0.83	-700.7 ± 1.7	29.93 ± 0.17	-701.3 ± 1.7	29.87 ± 0.17	9710 ± 50	
106	3	埋土	9560 ± 50	-24.02 ± 0.99	-695.9 ± 1.9	30.41 ± 0.19	-695.3 ± 1.8	30.47 ± 0.18	9550 ± 50	炭化材
106	3	埋土	9490 ± 50	-23.62 ± 0.82	-693.0 ± 1.8	30.70 ± 0.18	-692.2 ± 1.7	30.78 ± 0.17	9460 ± 50	炭化材
107	3	埋土	9610 ± 50	-25.30 ± 0.67	-697.5 ± 1.8	30.25 ± 0.18	-697.7 ± 1.7	30.23 ± 0.17	9610 ± 50	
109	3	埋土	9530 ± 50	-26.64 ± 0.92	-694.6 ± 1.9	30.54 ± 0.19	-695.6 ± 1.8	30.44 ± 0.18	9550 ± 50	
110	3	埋土	9450 ± 50	-29.11 ± 0.84	-691.7 ± 1.8	30.83 ± 0.18	-694.3 ± 1.7	30.57 ± 0.17	9520 ± 50	
114	3	埋土	9580 ± 50	-21.05 ± 0.84	-696.5 ± 1.7	30.35 ± 0.17	-694.0 ± 1.6	30.60 ± 0.16	9510 ± 40	
115	3	埋土	9540 ± 50	-29.78 ± 0.80	-695.1 ± 2.0	30.49 ± 0.20	-698.0 ± 1.9	30.20 ± 0.19	9620 ± 50	
117	3	埋土	9620 ± 50	-26.18 ± 0.82	-698.0 ± 1.8	30.20 ± 0.18	-698.7 ± 1.8	30.13 ± 0.18	9640 ± 50	
118	3	埋土	9610 ± 50	-25.19 ± 0.85	-697.6 ± 1.8	30.24 ± 0.18	-697.7 ± 1.7	30.23 ± 0.17	9610 ± 50	
124	3	埋土	9550 ± 50	-26.28 ± 0.83	-695.4 ± 1.8	30.46 ± 0.18	-696.2 ± 1.7	30.38 ± 0.17	9570 ± 50	
125or126	3	埋土	9610 ± 50	-21.47 ± 0.82	-697.8 ± 1.7	30.22 ± 0.17	-695.6 ± 1.7	30.44 ± 0.17	9560 ± 40	
127	3 北	埋土	9470 ± 50	-26.38 ± 0.66	-692.5 ± 1.9	30.75 ± 0.19	-693.4 ± 1.8	30.66 ± 0.18	9500 ± 50	炭化材
128	3 北	埋土	9580 ± 50	-25.46 ± 0.60	-696.5 ± 1.8	30.35 ± 0.18	-696.8 ± 1.8	30.32 ± 0.18	9590 ± 50	
130	3 北	埋土	9680 ± 60	-25.15 ± 1.03	-700.2 ± 2.2	29.98 ± 0.22	-700.2 ± 2.1	29.98 ± 0.21	9680 ± 60	
133	3 北	埋土	3920 ± 40	-24.68 ± 0.71	-386.0 ± 3.0	61.40 ± 0.30	-385.6 ± 2.8	61.44 ± 0.28	3910 ± 40	
135	3	埋土	9600 ± 50	-27.83 ± 0.71	-697.3 ± 1.8	30.27 ± 0.18	-699.0 ± 1.8	30.10 ± 0.18	9650 ± 50	
136	3	埋土	9500 ± 50	-27.74 ± 0.79	-693.7 ± 1.9	30.63 ± 0.19	-695.4 ± 1.8	30.46 ± 0.18	9550 ± 50	
139	3	埋土	9600 ± 50	-25.14 ± 0.81	-697.2 ± 1.8	30.28 ± 0.18	-697.3 ± 1.7	30.27 ± 0.17	9600 ± 50	
141	3	埋土	9650 ± 50	-24.14 ± 0.83	-699.1 ± 1.7	30.09 ± 0.17	-698.5 ± 1.7	30.15 ± 0.17	9630 ± 50	
143	3	埋土	9550 ± 50	-23.25 ± 0.84	-695.5 ± 1.7	30.45 ± 0.17	-694.4 ± 1.7	30.56 ± 0.17	9520 ± 40	
144	3	埋土	9540 ± 50	-27.31 ± 0.86	-695.0 ± 1.9	30.50 ± 0.19	-696.4 ± 1.8	30.36 ± 0.18	9580 ± 50	
144	3	埋土	9430 ± 50	-26.43 ± 0.78	-691.0 ± 1.9	30.90 ± 0.19	-691.9 ± 1.8	30.81 ± 0.18	9460 ± 50	
146	3	埋土	9600 ± 50	-26.81 ± 0.88	-697.1 ± 1.8	30.29 ± 0.18	-698.3 ± 1.7	30.17 ± 0.17	9630 ± 50	
152or153	3	埋土	9720 ± 50	-26.00 ± 0.87	-701.9 ± 1.8	29.81 ± 0.18	-702.5 ± 1.7	29.75 ± 0.17	9740 ± 50	
154	3	埋土	9610 ± 50	-27.59 ± 0.90	-697.6 ± 1.9	30.24 ± 0.19	-699.2 ± 1.8	30.08 ± 0.18	9650 ± 50	
161	3	埋土	9540 ± 50	-23.19 ± 0.82	-695.0 ± 1.7	30.50 ± 0.17	-693.9 ± 1.7	30.61 ± 0.17	9510 ± 40	
165or166	3	床面	9700 ± 60	-30.53 ± 0.86	-701.2 ± 2.2	29.88 ± 0.22	-704.6 ± 2.1	29.54 ± 0.21	9800 ± 60	炭化材
165or166	3	埋土	9500 ± 50	-25.78 ± 0.81	-693.4 ± 1.9	30.66 ± 0.19	-693.9 ± 1.8	30.61 ± 0.18	9510 ± 50	
168	3	埋土	9690 ± 60	-31.07 ± 0.71	-700.5 ± 2.3	29.95 ± 0.23	-704.2 ± 2.2	29.58 ± 0.22	9790 ± 60	炭化材
168	3	埋土	9540 ± 50	-26.50 ± 0.83	-695.1 ± 1.9	30.49 ± 0.19	-696.0 ± 1.8	30.40 ± 0.18	9570 ± 50	炭化材
170	3	埋土	9610 ± 50	-27.65 ± 0.82	-697.8 ± 1.8	30.22 ± 0.18	-699.4 ± 1.7	30.06 ± 0.17	9660 ± 50	
172	3	埋土	9610 ± 50	-27.63 ± 0.90	-697.7 ± 1.9	30.23 ± 0.19	-699.3 ± 1.8	30.07 ± 0.18	9650 ± 50	
173	3	埋土	9510 ± 50	-23.76 ± 0.85	-693.9 ± 1.8	30.61 ± 0.18	-693.1 ± 1.7	30.69 ± 0.17	9490 ± 50	
174	3	埋土	9550 ± 50	-23.78 ± 0.82	-695.3 ± 1.8	30.47 ± 0.18	-694.6 ± 1.7	30.54 ± 0.17	9530 ± 50	
177	3	埋土	9560 ± 60	-26.19 ± 0.79	-695.6 ± 2.3	30.44 ± 0.23	-696.4 ± 2.2	30.36 ± 0.22	9570 ± 60	
178	3	埋土	9500 ± 50	-31.44 ± 0.89	-693.7 ± 1.7	30.63 ± 0.17	-697.7 ± 1.6	30.23 ± 0.16	9610 ± 40	
179	3	埋土	9310 ± 50	-26.56 ± 0.81	-686.3 ± 1.9	31.37 ± 0.19	-687.3 ± 1.8	31.27 ± 0.18	9340 ± 50	
180	3	最下層	9570 ± 60	-31.19 ± 0.95	-696.0 ± 2.0	30.40 ± 0.20	-699.9 ± 1.9	30.01 ± 0.19	9670 ± 50	
181	3	埋土	9450 ± 50	-29.29 ± 0.79	-691.5 ± 1.8	30.85 ± 0.18	-694.2 ± 1.8	30.58 ± 0.18	9520 ± 50	
182	3	埋土	9520 ± 70	-25.60 ± 0.65	-694.1 ± 2.5	30.59 ± 0.25	-694.5 ± 2.5	30.55 ± 0.25	9530 ± 70	
184	3	埋土	9550 ± 50	-25.21 ± 0.70	-695.6 ± 1.8	30.44 ± 0.18	-695.7 ± 1.8	30.43 ± 0.18	9560 ± 50	
186	3	埋土	9560 ± 50	-23.19 ± 0.88	-695.8 ± 1.8	30.42 ± 0.18	-694.7 ± 1.7	30.53 ± 0.17	9530 ± 50	炭化材
187	3	埋土	9550 ± 50	-26.81 ± 0.85	-695.5 ± 1.9	30.45 ± 0.19	-696.7 ± 1.8	30.33 ± 0.18	9580 ± 50	
189	3	埋土	9550 ± 50	-24.97 ± 0.88	-695.5 ± 1.9	30.45 ± 0.19	-695.5 ± 1.8	30.45 ± 0.18	9550 ± 50	
191	3	埋土	9550 ± 50	-28.65 ± 0.79	-695.6 ± 1.8	30.44 ± 0.18	-697.9 ± 1.7	30.21 ± 0.17	9620 ± 50	
192	3	埋土	9570 ± 50	-22.75 ± 0.85	-696.2 ± 1.8	30.38 ± 0.18	-694.8 ± 1.7	30.52 ± 0.17	9530 ± 50	
193	3	最下層	9610 ± 50	-32.55 ± 0.69	-697.8 ± 1.7	30.22 ± 0.17	-702.5 ± 1.6	29.75 ± 0.16	9740 ± 40	
194	3	埋土	9660 ± 50	-22.48 ± 0.90	-699.6 ± 1.8	30.04 ± 0.18	-698.0 ± 1.7	30.20 ± 0.17	9620 ± 50	

表24　炉穴出土炭化物分析結果一覧表（3）

炉穴№	区	層位	Libby Age(yrBP)	δ ^{13}C（‰）	Δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	Age（yrBP）	備考
195	3	埋土	9690 ± 50	-32.38 ± 0.82	-700.7 ± 1.8	29.93 ± 0.18	-705.2 ± 1.7	29.48 ± 0.17	9810 ± 50	
196	3	埋土	9530 ± 50	-28.07 ± 0.80	-694.8 ± 2.0	30.52 ± 0.20	-696.7 ± 1.9	30.33 ± 0.19	9580 ± 50	
197	3	埋土	9440 ± 40	-26.04 ± 0.86	-691.1 ± 1.7	30.89 ± 0.17	-691.8 ± 1.6	30.82 ± 0.16	9450 ± 40	
198	3	埋土	9580 ± 50	-22.81 ± 0.87	-696.7 ± 1.7	30.33 ± 0.17	-695.4 ± 1.6	30.46 ± 0.16	9550 ± 40	
199	3	埋土	9550 ± 50	-25.20 ± 0.78	-695.4 ± 1.8	30.46 ± 0.18	-695.5 ± 1.8	30.45 ± 0.18	9550 ± 50	
200	3	埋土	9590 ± 60	-26.50 ± 0.77	-696.8 ± 2.1	30.32 ± 0.21	-697.7 ± 2.0	30.23 ± 0.20	9610 ± 50	
201	3	埋土	9630 ± 50	-27.29 ± 0.89	-698.6 ± 1.9	30.14 ± 0.19	-700.0 ± 1.8	30.00 ± 0.18	9670 ± 50	
203	3	埋土	9560 ± 50	-26.52 ± 0.86	-695.8 ± 1.8	30.42 ± 0.18	-696.8 ± 1.8	30.32 ± 0.18	9580 ± 50	
204	3	埋土	9500 ± 50	-26.08 ± 0.83	-693.7 ± 1.9	30.63 ± 0.19	-694.4 ± 1.8	30.56 ± 0.18	9520 ± 50	
206	3	埋土	9460 ± 60	-29.64 ± 0.81	-691.9 ± 2.3	30.81 ± 0.23	-694.8 ± 2.2	30.52 ± 0.22	9530 ± 60	
206	3	埋土	9580 ± 50	-26.22 ± 0.89	-696.6 ± 1.8	30.34 ± 0.18	-697.4 ± 1.7	30.26 ± 0.17	9600 ± 50	
207	3	埋土	9600 ± 50	-26.71 ± 0.86	-697.4 ± 1.9	30.26 ± 0.19	-698.4 ± 1.8	30.16 ± 0.18	9630 ± 50	
211	5	埋土	9440 ± 50	-26.75 ± 0.66	-691.1 ± 1.9	30.89 ± 0.19	-692.2 ± 1.8	30.78 ± 0.18	9470 ± 50	
212	5	埋土	9350 ± 50	-25.61 ± 0.61	-687.8 ± 1.9	31.22 ± 0.19	-688.1 ± 1.9	31.19 ± 0.19	9360 ± 50	
213	5	埋土	9510 ± 50	-26.20 ± 0.66	-693.9 ± 1.9	30.61 ± 0.19	-694.7 ± 1.8	30.53 ± 0.18	9530 ± 50	
214	5	埋土	9610 ± 50	-29.92 ± 0.74	-697.7 ± 1.9	30.23 ± 0.19	-700.7 ± 1.8	29.93 ± 0.18	9690 ± 50	
215	5	埋土	9500 ± 50	-25.53 ± 0.70	-693.6 ± 1.9	30.64 ± 0.19	-694.0 ± 1.8	30.60 ± 0.18	9510 ± 50	
216	5	埋土	9570 ± 50	-30.16 ± 0.83	-696.1 ± 1.9	30.39 ± 0.19	-699.3 ± 1.8	30.07 ± 0.18	9650 ± 50	
217	5	埋土	9600 ± 50	-25.24 ± 0.61	-697.4 ± 1.8	30.26 ± 0.18	-697.6 ± 1.8	30.24 ± 0.18	9610 ± 50	

表25　集石出土炭化物分析結果一覧表

集石№	区	層位	Libby Age(yrBP)	δ ^{13}C（‰）	Δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	δ ^{14}C（‰）	pMC（%）	Age（yrBP）	備考
1	3	埋土	9460 ± 50	-25.21 ± 0.69	-691.9 ± 1.8	30.81 ± 0.18	-692.0 ± 1.8	30.80 ± 0.18	9460 ± 50	
1	3	埋土	9620 ± 50	-28.39 ± 0.61	-698.1 ± 1.7	30.19 ± 0.17	-700.2 ± 1.7	29.98 ± 0.17	9680 ± 50	
2	3	埋土	9610 ± 50	-26.41 ± 0.66	-697.7 ± 1.8	30.23 ± 0.18	-698.6 ± 1.8	30.14 ± 0.18	9630 ± 50	炭化材
2	3	2層	9640 ± 50	-27.93 ± 0.65	-698.8 ± 1.8	30.12 ± 0.18	-700.6 ± 1.7	29.94 ± 0.17	9690 ± 50	炭化材
3	3	埋土	9640 ± 50	-30.05 ± 0.62	-698.9 ± 1.8	30.11 ± 0.18	-702.0 ± 1.7	29.8 ± 0.17	9730 ± 50	
5	3	埋土	9560 ± 50	-27.59 ± 0.63	-695.8 ± 1.8	30.42 ± 0.18	-697.4 ± 1.8	30.26 ± 0.18	9600 ± 50	
6	3	埋土	9760 ± 50	-27.81 ± 0.58	-703.1 ± 1.9	29.69 ± 0.19	-704.8 ± 1.9	29.52 ± 0.19	9800 ± 50	
7	3	埋土	9560 ± 50	-26.55 ± 0.86	-695.6 ± 1.8	30.44 ± 0.18	-696.6 ± 1.7	30.34 ± 0.17	9580 ± 50	炭化材
8	3	埋土	9510 ± 50	-26.45 ± 0.62	-694.1 ± 1.9	30.59 ± 0.19	-695.0 ± 1.9	30.50 ± 0.19	9540 ± 50	
9	3	埋土	9470 ± 50	-26.31 ± 0.72	-692.5 ± 1.8	30.75 ± 0.18	-693.3 ± 1.8	30.67 ± 0.18	9490 ± 50	炭化材
10	3	埋土	9640 ± 50	-29.95 ± 0.63	-698.8 ± 1.8	30.12 ± 0.18	-701.8 ± 1.7	29.82 ± 0.17	9720 ± 50	
11	3	埋土	9550 ± 50	-26.83 ± 0.67	-695.3 ± 1.8	30.47 ± 0.18	-696.4 ± 1.8	30.36 ± 0.18	9580 ± 50	
11	3	埋土	9540 ± 50	-26.15 ± 0.73	-695.1 ± 1.8	30.49 ± 0.18	-695.8 ± 1.7	30.42 ± 0.17	9560 ± 50	
12	3	埋土	9390 ± 50	-25.52 ± 0.73	-689.2 ± 2.0	31.08 ± 0.20	-689.5 ± 1.9	31.05 ± 0.19	9390 ± 50	
13	3	埋土	9550 ± 50	-26.52 ± 0.71	-695.3 ± 1.8	30.47 ± 0.18	-696.2 ± 1.7	30.38 ± 0.17	9570 ± 50	
14	3	埋土	9620 ± 50	-29.17 ± 0.69	-698.0 ± 1.9	30.20 ± 0.19	-700.5 ± 1.8	29.95 ± 0.18	9690 ± 50	
15	3	埋土	9550 ± 50	-26.41 ± 0.89	-695.6 ± 1.7	30.44 ± 0.17	-696.4 ± 1.6	30.36 ± 0.16	9580 ± 40	炭化材
15	3	埋土	9530 ± 50	-24.66 ± 0.65	-694.6 ± 1.8	30.54 ± 0.18	-694.4 ± 1.7	30.56 ± 0.17	9520 ± 50	炭化材
16	3	埋土	9630 ± 50	-27.89 ± 0.58	-698.6 ± 1.9	30.14 ± 0.19	-700.3 ± 1.9	29.97 ± 0.19	9680 ± 50	
16	3北	2層	9630 ± 50	-29.45 ± 0.60	-698.3 ± 1.9	30.17 ± 0.19	-701.1 ± 1.8	29.89 ± 0.18	9700 ± 50	炭化材
16	3北	2層	9530 ± 50	-26.70 ± 0.59	-694.6 ± 1.9	30.54 ± 0.19	-695.7 ± 1.9	30.43 ± 0.19	9560 ± 50	炭化材
17	3北	埋土	9670 ± 50	-24.84 ± 0.71	-699.9 ± 1.7	30.01 ± 0.17	-699.8 ± 1.7	30.02 ± 0.17	9670 ± 50	
21	3	最下層	9470 ± 50	-25.06 ± 0.83	-692.3 ± 1.9	30.77 ± 0.19	-692.3 ± 1.8	30.77 ± 0.18	9470 ± 50	炭化材
21	3	最下層	9510 ± 50	-27.12 ± 0.64	-693.8 ± 2.0	30.62 ± 0.20	-695.2 ± 1.9	30.48 ± 0.19	9540 ± 50	炭化材
22	3	埋土	9530 ± 50	-24.38 ± 0.69	-694.8 ± 1.8	30.52 ± 0.18	-694.4 ± 1.8	30.56 ± 0.18	9520 ± 50	炭化材
24	3	埋土	9470 ± 50	-26.62 ± 0.94	-692.4 ± 1.8	30.76 ± 0.18	-693.4 ± 1.7	30.66 ± 0.17	9500 ± 40	炭化材
24	3	埋土	9580 ± 50	-24.29 ± 0.96	-696.5 ± 1.9	30.35 ± 0.19	-696.0 ± 1.8	30.40 ± 0.18	9570 ± 50	炭化材
25	3	埋土	9450 ± 50	-28.68 ± 0.69	-691.5 ± 2.0	30.85 ± 0.20	-693.9 ± 1.9	30.61 ± 0.19	9510 ± 50	炭化材
26	3	埋土	9540 ± 50	-24.47 ± 0.65	-694.9 ± 1.8	30.51 ± 0.18	-694.6 ± 1.8	30.54 ± 0.18	9530 ± 50	炭化材
26	3	埋土	9480 ± 50	-25.48 ± 0.96	-692.8 ± 1.8	30.72 ± 0.18	-693.2 ± 1.7	30.68 ± 0.17	9490 ± 50	炭化材
27	3	埋土	9560 ± 50	-23.97 ± 0.65	-695.9 ± 1.8	30.41 ± 0.18	-695.3 ± 1.8	30.47 ± 0.18	9550 ± 50	炭化材
27	3	埋土	9650 ± 50	-27.09 ± 0.85	-699.1 ± 1.8	30.09 ± 0.18	-700.4 ± 1.7	29.96 ± 0.17	9680 ± 50	
28	3	埋土	9650 ± 50	-25.09 ± 0.59	-699.1 ± 1.9	30.09 ± 0.19	-699.2 ± 1.8	30.08 ± 0.18	9650 ± 50	
29	3	埋土	9590 ± 50	-28.78 ± 0.85	-696.8 ± 1.9	30.32 ± 0.19	-699.1 ± 1.8	30.09 ± 0.18	9650 ± 50	炭化材
29	3	埋土	9390 ± 50	-27.27 ± 0.58	-689.2 ± 2.0	31.08 ± 0.20	-690.6 ± 1.9	30.94 ± 0.19	9420 ± 50	
32	3	埋土	9510 ± 50	-29.35 ± 0.59	-694.1 ± 1.9	30.59 ± 0.19	-696.8 ± 1.9	30.32 ± 0.19	9590 ± 50	炭化材
35	5	埋土	Modern	-30.14 ± 0.75	223.0 ± 4.7	122.30 ± 0.47	210.1 ± 4.2	121.01 ± 0.42	Modern	
36	5	最下層	9440 ± 50	-29.89 ± 0.77	-691.4 ± 1.9	30.86 ± 0.19	-694.5 ± 1.8	30.55 ± 0.18	9530 ± 50	
36	5	上層	9480 ± 50	-26.65 ± 0.95	-692.8 ± 2.0	30.72 ± 0.20	-693.8 ± 1.9	30.62 ± 0.19	9510 ± 50	

2　種実同定

（1）はじめに

本分析調査では、浜松市浜北区根堅に所在し、天龍川西岸の低位段丘上に位置する寺海土遺跡より出土した種実遺体の同定を実施し、当時の植物利用と植生に関する情報を得る。

（2）試料

試料は、寺海土遺跡から出土した種実遺体のうちの 136 点（資料 No. 1 ～ 136）である。試料の詳細は結果と共に表 26・27 に示す。

（3）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本と石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照より、種実遺体の種類と部位を同定し、デジタルノギスを用いて長さと幅、厚さを計測する。分析後は、種実遺体を容器に入れて保存する。

（4）結果

結果を表 26・27 に示す。全試料を通じて、針葉樹のマツ属複維管束亜属の球果 11 個、スギの球果 1 個、落葉広葉樹のウメの核 1 個、スモモの果実 18 個、核 14 個、モモの核 90 個、センダンの核 1 個が確認された。ウメ、スモモ、モモは、渡来種である。

①遺構別出土状況

SD2001・2002・2013　モモ 27 個、マツ属複維管束亜属 5 個、スギ 1 個、計 33 個が確認された。

SD2004・2005・2006　モモ 55 個、マツ属複維管束亜属 6 個、計 61 個が確認された。

SX1012　スモモ 32 個、モモ 4 個、ウメ、センダン各 1 個、計 38 個が確認された。

SE1001　モモが 1 個確認された。

SF2028　モモが 2 個確認された。

SR1001　モモが 1 個確認された。

②形態的特徴

種実遺体の保存状態は、全て乾燥しているため収縮個体を含む。各分類群の写真を図 316 に示し、形態的特徴等を以下に記す。

マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon)　マツ科

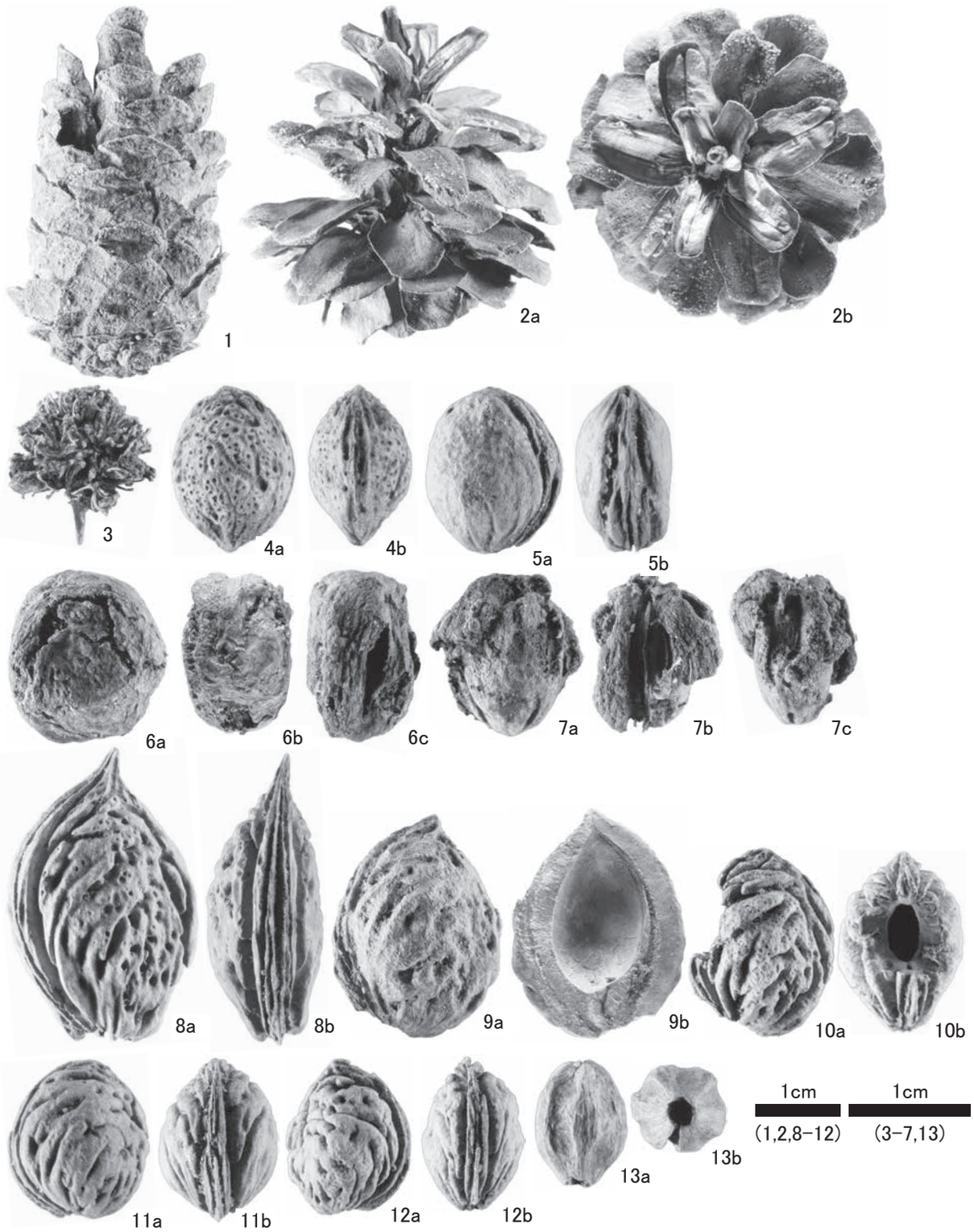
球果は灰褐色、長さ 2.5 ～ 4.5cm、径 2 ～ 3.8cm 程度の円錐状広卵体。大きさは、最大で長さ 44.43mm、幅 25.65mm、厚さは側部をやや欠損するため 19.01mm 以上（資料 No.56；図 316 － 1）、最小で長さ 25.14mm、幅 21.77mm、厚さ 20.26mm（資料 No.32）。球果は木質で、長楕円状矩形の種鱗が覆瓦状、螺旋状に配列する。種鱗外面は不規則な四・五角形で肥厚し、横の稜線とその中央部に短く突起する臍点がある。種鱗内面には 1 ～ 2 個の種子が入る。球果は閉じた状態（資料 No.56；図 316 － 1）と開いた状態（資料 No.16；図 316 － 2）が確認され、開いた球果の種鱗内面に種子が入る状態が確認された。種子は灰褐色、長さ 4.5mm、幅 2.0mm、厚さ 1.5mm 程度のやや偏平な非対称倒狭卵体。側面は稜をなし、頂部や基部はやや尖る。頂部には長さ 1 cm 程度の倒三角形で膜質の翼がつく。種皮は木質で表面は粗面。

表 26　種実同定計測結果（1）

No.	遺構名	分類群	部位	状態	食痕	頂部	長さ（mm）	+	幅（mm）	+	厚さ（mm）	+	備考
1	SD2001	モモ	核	完形		やや尖る	21.07		19.72		15.33		
2	SD2001	モモ	核	完形		やや尖る	19.56		18.34		14.05		
3	SD2001	モモ	核	完形	基部	やや尖る	20.5	+	16.4		13.55		
4	SD2001	モモ	核	完形		やや尖る	19.32		16.77		14.05		
5	SD2001	モモ	核	完形	基部	やや尖る	19.74	+	15.21		12.59		
6	SD2001	モモ	核	完形		尖る	21.28		19.86		15.65		
7	SD2001	モモ	核	完形		尖る	26.29		18.53		14.17		
8	SD2001	モモ	核	完形		鋭く尖る	25.8		18.55	+	14.59		縫合線摩耗
9	SD2001	モモ	核	完形		やや尖る	23.57		20.3		15.89		
10	SD2001	モモ	核	完形		やや尖る	24.48		21.25		15.98		
11	SD2001	モモ	核	完形		尖る	31.96		22.29		15.38		
12	SD2001	モモ	核	完形		鋭く尖る	34.17		22.25		14.67		
13	SD2001	モモ	核	完形			33.2		25.05		19.4		
14	SD2001	モモ	核	完形			33.99		24.48		15.89		
15	SD2001	モモ	核	完形			32.52		22.19		13.79		
16	SD2001	マツ属複維管束亜属	球果	完形			39.46		37.74		38.96		種鱗は開く 内部に種子確認
17	SD2001	マツ属複維管束亜属	球果	完形			29.89	+	22.4		19.53		頂部欠損
18	SD2001	スギ	球果	完形			10.41		12.35		8.31		状態悪い
19	SD2001	モモ	核	完形		鋭く尖る	28.09		21.63		15.05		
20	SD2001	マツ属複維管束亜属	球果	完形			42.05		29.59		18.59	+	側面欠損
21	SD2002	モモ	核	完形		尖る	28.25		20.65		17.11		
22	SD2002	モモ	核	完形		鋭く尖る	28.09		18.78		13.62		
23	SD2002	モモ	核	完形		やや尖る	21.45		15.71		12.59		
24	SD2002	モモ	核	破片			20.9	+	15.24	+	7.87	+	頂部欠損 半分未満
25	SD2002	マツ属複維管束亜属	球果	完形			34.28	+	25.83		17.67	+	頂部側部欠損
26	SD2002	マツ属複維管束亜属	球果	完形			38.95		35.78		26.83		頂部側部欠損
27	SD2004	モモ	核	完形		尖る	20.22		18.46		14.55		
28	SD2004	モモ	核	完形		やや尖る	22.4		17.44		13.36		
29	SD2004	モモ	核	完形		尖る	23.79		18.68		14.67		
30	SD2004	モモ	核	完形		鋭く尖る	27.82		21.93		15.98	+	側部欠損
31	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			39.27		35.31		34.31		種鱗は開く
32	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			25.14		21.77		20.26		種鱗は開く
33	SD2004	モモ	核	完形		鋭く尖る	29.08		23.02		17.47		
34	SD2004	モモ	核	完形		尖る	22.64		18.9		14.09		
35	SD2004	モモ	核	完形		尖る	26.32		21.89		18.36		
36	SD2004	モモ	核	完形		やや尖る	22.78		15.46		14.04		表面摩耗
37	SD2004	モモ	核	完形		やや尖る	19.92		15.81		10.81	+	表面摩耗
38	SD2005	モモ	核	完形		尖る	29.15		20.87		12.96		
39	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	31.88		20.59		13.13		
40	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	34.79		23.17		13.6		
41	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	29.85		19.67		11.97		
42	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	31.3		21.77		14.34		
43	SD2005	モモ	核	完形		やや尖る	31.04		19.27		12.53		頂部側部欠損
44	SD2005	モモ	核	完形		尖る	25.57		18.72		14.91		
45	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	29.62		18.65	+	16.65	+	縫合線摩耗
46	SD2005	モモ	核	完形		鋭く尖る	31.09		19.57		9.54		扁平
47	SD2005	モモ	核	完形		やや尖る	22.78		19.79		14.76		
48	SD2005	モモ	核	完形		やや尖る	17.95		14.31		11.49		小型
49	SD2005	モモ	核	完形		やや尖る	22.57		18.62		14.83		
50	SD2005	モモ	核	完形		やや尖る	19.42	+	18.38		14.41		頂部欠損
51	SD2005	モモ	核	完形		尖る	23.45		18.73		14.84		
52	SD2005	モモ	核	完形		尖る	23.35		17.94		14.05		
53	SD2005	モモ	核	完形		尖る	24.02		17.97		14.42		
54	SD2005	モモ	核	完形		尖る	22.49		19.76		16.64		
55	SD2005	モモ	核	完形		尖る	28.91	+	20.84		12.95		基部欠損
56	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			44.43		25.65		19.01	+	側部欠損
57	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			41.83		36.74		36.72		種鱗は開く
58	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			40.03		34.44		32.27	+	種鱗は開く 側部欠損
59	SD2004	モモ	核	完形	側部	やや尖る	22.89		16.36	+	10.31	+	摩耗
60	SD2004	モモ	核	完形		やや尖る	21.48		15.86	+	15.28		縫合線摩耗
61	SD2004	モモ	核	完形		尖る	23.17		18.11		12.63	+	表面摩耗
62	SD2004	モモ	核	完形		尖る	23.68		17.86		13.19		
63	SD2004	モモ	核	完形	縫合線	尖る	22.22		16.68	+	14.59		
64	SD2004	モモ	核	完形		尖る	24.01		18.11		10.62	+	表面摩耗
65	SD2004	マツ属複維管束亜属	球果	完形			32.78		21.44		14.27		
66	SD2004	モモ	核	完形		尖る	25.42		20.97		15.3		
67	SD2004	モモ	核	完形		鋭く尖る	28.27		19.23		13.42		
68	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	23.7	+	21.14		15.48		頂部やや欠損

表 27　種実同定計測結果（2）

No.	遺構名	分類群	部位	状態	食痕	頂部	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	備考
69	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	19.89	15.96	12.72 +	表面摩耗
70	SD2006	モモ	核	完形		尖る	24.36	19.15	14.68	
71	SD2006	モモ	核	完形		尖る	23.57	20.04	15.09 +	表面摩耗
72	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	19.34	15.44	11.97 +	表面摩耗
73	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	21.33	15.99 +	12.81	表面摩耗
74	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	19.02	14.93 +	13.08	表面摩耗
75	SD2006	モモ	核	完形		尖る	21.58	17.51	12.53	表面摩耗
76	SD2006	モモ	核	完形		尖る	28.71	21.06	16.52	
77	SD2006	モモ	核	完形		鋭く尖る	20.52 +	13.58 +	8.96 +	側部基部欠損 表面摩耗
78	SD2006	モモ	核	完形		鋭く尖る	26.49	17.2	11.34	
79	SD2006	モモ	核	完形		尖る	32.49	20.15	12.81	
80	SD2006	モモ	核	完形		尖る	30.81	21.83	13.45	
81	SD2006	モモ	核	完形		鋭く尖る	34.97	22.85	14.25	
82	SD2006	モモ	核	完形		尖る	21.23	13.5 +	12.21	摩耗
83	SD2006	モモ	核	完形		尖る	28.25	20.53	12.8	
84	SD2006	モモ	核	完形		尖る	19.43	13.92	11.31	
85	SD2006	モモ	核	完形		尖る	20.93	17.49	13.91	
86	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	21.98	18.17	13.74	頂部欠損
87	SD2006	モモ	核	完形		やや尖る	18.27	15.67 +	13.52	縫合線摩耗
88	SD2013	モモ	核	完形		やや尖る	19.55	17.17	13.04	
89	SD2013	モモ	核	完形		やや尖る	19.81	16.43	13.27	
90	SD2013	モモ	核	完形		やや尖る	17.3	14.47	11.32	
91	SD2013	モモ	核	完形		尖る	21.92	17.71	13.2	
92	SD2013	モモ	核	完形		尖る	24.93	17.31 +	13.89	縫合線欠損
93	SD2013	モモ	核	完形		やや尖る	19.35	15.52	12.56	
94	SD2013	モモ	核	完形		やや尖る	17.86 +	15.6	11.16	頂部欠損
95	SE1001	モモ	核	完形		鋭く尖る	40.12	20.14	15.67	
96	SF2028	モモ	核	完形		やや尖る	23.17 +	18.89	13.62	頂部欠損
97	SF2028	モモ	核	破片			20.51 +	15.77 +	5.88 +	半分未満
98	SX1012	モモ	核	完形		尖る	26.57 +	20.88 +	17.24	縫合線頂部欠損
99	SX1012	モモ	核	破片		尖る	26.21	20.04	8.01 +	半分
100	SX1012	モモ	核	破片		やや尖る	20.61	16.95	7.77 +	半分
101	SX1012	モモ	核	破片			19.66 +	15.18	6.54 +	頂部欠損 半分未満
102	SX1012	スモモ	果実・核	完形			13.14 +	9.22 +	10.23 +	
103	SX1012	スモモ	果実	完形			13.95	12.04 +	8.39 +	
104	SX1012	スモモ	果実・核	完形			13.38 +	9.77 +	8.02 +	
105	SX1012	スモモ	果実・核	完形			9.76 +	8.85 +	6.79 +	
106	SX1012	スモモ	果実・核	完形			13.17 +	10.41 +	8.66 +	果皮の厚さ :3mm
107	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.58 +	9.34 +	8.09 +	
108	SX1012	スモモ	果実・核	完形			12.13	8.73	7.24 +	
109	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.28	9.25	7.82 +	
110	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.13 +	9.29 +	7.15 +	
111	SX1012	スモモ	果実	完形			11.57	9.37	7.97	
112	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.37	9.17	7.63	縫合線に割れ目 内部に核確認
113	SX1012	スモモ	果実・核	完形			12.03	10.27	10.79 +	
114	SX1012	スモモ	果実・核	完形			10.06	6.97 +	7.69 +	
115	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.66 +	8.89 +	5.22 +	
116	SX1012	スモモ	果実・核	完形			10.38 +	9.35 +	5.78 +	
117	SX1012	スモモ	果実・核	完形			11.69	8.37 +	6.82	
118	SX1012	スモモ	核	完形			11.25	9.44	6.83	
119	SX1012	スモモ	核	完形			13.44	10.76	7.79	
120	SX1012	スモモ	核	完形			11.27	8.95	6.2 +	側部摩耗
121	SX1012	スモモ	核	完形			11.84	9.64	6.81	
122	SX1012	ウメ	核	完形			13.52	9.7	8.14	
123	SX1012	スモモ	核	完形			12.48	10.14	7.49	
124	SX1012	スモモ	核	完形			11.98	9.37	6.84	
125	SX1012	スモモ	核	完形			12.23	9.37	6.76	
126	SX1012	スモモ	核	完形			11.97	9.83	7.37	
127	SX1012	スモモ	核	完形			9.33	8.19	6.52	
128	SX1012	スモモ	核	完形			9.2	6.14	5.61	
129	SX1012	センダン	核	完形			10.23	7.41	7.18	
130	SX1012	スモモ	核	完形			9.2	7.18	5.03	収縮
131	SX1012	スモモ	果実・核	完形			10.02	6.05 +	4.41 +	収縮 表面摩耗
132	SX1012	スモモ	核	完形			7.66	6.25	4.9	
133	SX1012	スモモ	果実・核	完形			7.51	6.23 +	4.15 +	表面摩耗
134	SX1012	スモモ	核	完形			5.91	4.09	2.99 +	収縮 表面摩耗
135	SX1012	スモモ	核	完形			7.29	4.78	2.91 +	収縮
136	SR1001	モモ	核	完形	側部	やや尖る	20.54	15.84	9.79 +	



1　マツ属複維管束亜属 球果（試料番号 56）
2　マツ属複維管束亜属 球果・種子（試料番号 16）
3　スギ 球果（試料番号 18）
4　ウメ 核（試料番号 122）
5　スモモ 核（試料番号 119）
6　スモモ 果実（試料番号 103）
7　スモモ 果実・核（試料番号 106）
8　モモ 核（試料番号 81）
9　モモ 核（試料番号 90）
10　モモ 核 食痕（試料番号 63）
11　モモ 核（試料番号 4 ）
12　モモ 核（試料番号 48）
13　センダン 核（試料番号 129）

図 316　種実遺体

スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D.)　スギ科スギ属

球果は灰褐色、長さ 10.41mm、幅 12.35mm、厚さ 8.31mm の球体。保存状態が悪く、表面には大きさ５～６mm 程度の木質の楯状楔形で内側に湾曲し、基部は細く、頂部に４～６個の歯牙をもつ球果鱗片が 20 ～ 30 個配列する状態は確認できず、摩耗した残りの繊維が球果軸から配列する状態が確認されるのみであった（図 316 － 3）。

ウメ (Prunus mume (Sieb.) Sieb. et Zucc.)　バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、長さ 13.52mm、幅 9.7mm、厚さ 8.14mm のやや偏平な広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の小凹点が分布する（図 316 － 4）。

スモモ (Prunus salicina Lindley)　バラ科サクラ属

核（内果皮）は淡～灰褐色、果実（外果皮・中果皮）は赤みを帯びた灰褐色。レンズ状広楕円体。核の大きさは、最大で長さ 13.44mm、幅 10.76mm、厚さ 7.79mm（資料 No.119；図 316 － 5）、最小で長さ 5.91mm、幅 4.09mm、厚さ 2.99（資料 No.134）であった。ただし、資料 No.127,128,130,132,134,135 は乾燥収縮している。基部に丸く臍点がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

核の表面に果実が付着する個体も確認された。果実の完形個体の大きさは、長さ 13.95mm、幅 12.04mm 以上、厚さ 8.39mm 以上（資料 No.103；図 316 － 6）と、長さ 11.57mm、幅 9.37mm、厚さ 7.97mm（資料 No.111）。外果皮と中果皮をあわせた厚さは２～３mm 程度。果皮（外果皮）は薄く、表面はやや平滑～粗面。中果皮（果肉）は多汁質の水分が抜けてボソボソとした状態であった。

モモ (Prunus persica Batsch)　バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、やや偏平な広楕円体。欠損部位がない完形 58 個について計測を行ったところ（表 28）、長さは最大 47.01（資料 No.95）～最小 17.3（資料 No.90）（平均 26.002 ± 標準偏差 5.597）mm、幅は最大 25.05（資料 No.13）～最小 13.92（資料 No.84）（平均 19.341 ± 標準偏差 2.438）mm、厚さは最大 19.4（資料 No.13）～最小 9.54（資料 No.46）（平均 14.163mm ± 標準偏差 1.770）mm、大きさ（長さ×幅）は最大 946.78（資料 No.95）～最小 250.33（資料 No.90）（平均 512.656 ± 標準偏差 161.935）、扁平率（厚さ / 幅）は、最大 0.91（資料 No.36）～最小 0.49（資料 No.46）（平均 0.737 ± 標準偏差 0.08）であった。

大型核は偏平で頂部が鋭く尖り（例 : 資料 No.81；図版 316 － 8）、小型核は丸く、頂部も丸みを帯びる（例 : 資料 No.4；図 316 － 11、資料 No.48；図 316 － 12）傾向がある。

基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた半分以下（例 : 資料 No.99；図 316 － 9）や、齧歯類（ネズミなど）による食痕と考えられる円形の孔をもつ個体（例 : 資料 No.63；図 316 － 10）がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。半割した内側表面は平滑で、種子１個が入る楕円状の窪みがみられる。

表 28　モモ核の大きさと扁平率

資料№	遺構名	計測値 (mm)			大きさ	扁平率	核頂部
		長さ	幅	厚さ	長さ×幅	幅 / 厚さ	
1	SD2001	21.07	19.72	15.33	415.50	0.78	やや尖る
2	SD2001	19.56	18.34	14.05	358.73	0.77	やや尖る
4	SD2001	19.32	16.77	14.05	324.00	0.84	やや尖る
6	SD2001	21.28	19.86	15.65	422.62	0.79	尖る
7	SD2001	26.29	18.53	14.17	487.15	0.76	尖る
9	SD2001	23.57	20.3	15.89	478.47	0.78	やや尖る
10	SD2001	24.48	21.25	15.98	520.20	0.75	やや尖る
11	SD2001	31.96	22.29	15.38	712.39	0.69	尖る
12	SD2001	34.17	22.25	14.67	760.28	0.66	鋭く尖る
13	SD2001	33.2	25.05	19.4	831.66	0.77	
14	SD2001	33.99	24.48	15.89	832.08	0.65	
15	SD2001	32.52	22.19	13.79	721.62	0.62	
19	SD2001	28.09	21.63	15.05	607.59	0.70	鋭く尖る
21	SD2002	28.25	20.65	17.11	583.36	0.83	尖る
22	SD2002	28.09	18.78	13.62	527.53	0.73	鋭く尖る
23	SD2002	21.45	15.71	12.59	336.98	0.80	やや尖る
27	SD2004	20.22	18.46	14.55	373.26	0.79	尖る
28	SD2004	22.4	17.44	13.36	390.66	0.77	やや尖る
29	SD2004	23.79	18.68	14.67	444.40	0.79	尖る
33	SD2004	29.08	23.02	17.47	669.42	0.76	鋭く尖る
34	SD2004	22.64	18.9	14.09	427.90	0.75	尖る
35	SD2004	26.32	21.89	18.36	576.14	0.84	尖る
36	SD2004	22.78	15.46	14.04	352.18	0.91	やや尖る
62	SD2004	23.68	17.86	13.19	422.92	0.74	尖る
66	SD2004	25.42	20.97	15.3	533.06	0.73	尖る
67	SD2004	28.27	19.23	13.42	543.63	0.70	鋭く尖る
38	SD2005	29.15	20.87	12.96	608.36	0.62	尖る
39	SD2005	31.88	20.59	13.13	656.41	0.64	鋭く尖る
40	SD2005	34.79	23.17	13.6	806.08	0.59	鋭く尖る
41	SD2005	29.85	19.67	11.97	587.15	0.61	鋭く尖る
42	SD2005	31.3	21.77	14.34	681.40	0.66	鋭く尖る
43	SD2005	31.04	19.27	12.53	598.14	0.65	やや尖る
44	SD2005	25.57	18.72	14.91	478.67	0.80	尖る
46	SD2005	31.09	19.57	9.54	608.43	0.49	鋭く尖る
47	SD2005	22.78	19.79	14.76	450.82	0.75	やや尖る
48	SD2005	17.95	14.31	11.49	256.86	0.80	やや尖る
49	SD2005	22.57	18.62	14.83	420.25	0.80	やや尖る
51	SD2005	23.45	18.73	14.84	439.22	0.79	尖る
52	SD2005	23.35	17.94	14.05	418.90	0.78	尖る
53	SD2005	24.02	17.97	14.42	431.64	0.80	尖る
54	SD2005	22.49	19.76	16.64	444.40	0.84	尖る
70	SD2006	24.36	19.15	14.68	466.49	0.77	尖る
75	SD2006	21.58	17.51	12.53	377.87	0.72	尖る
76	SD2006	28.71	21.06	16.52	604.63	0.78	尖る
78	SD2006	26.49	17.2	11.34	455.63	0.66	鋭く尖る
79	SD2006	32.49	20.15	12.81	654.67	0.64	尖る
80	SD2006	30.81	21.83	13.45	672.58	0.62	尖る
81	SD2006	34.97	22.85	14.25	799.06	0.62	鋭く尖る
83	SD2006	28.25	20.53	12.8	579.97	0.62	尖る
84	SD2006	19.43	13.92	11.31	270.47	0.81	尖る
85	SD2006	20.93	17.49	13.91	366.07	0.80	尖る
86	SD2006	21.98	18.17	13.74	399.38	0.76	やや尖る
88	SD2013	19.55	17.17	13.04	335.67	0.76	やや尖る
89	SD2013	19.81	16.43	13.27	325.48	0.81	やや尖る
90	SD2013	17.3	14.47	11.32	250.33	0.78	やや尖る
91	SD2013	21.92	17.71	13.2	388.20	0.75	尖る
93	SD2013	19.35	15.52	12.56	300.31	0.81	やや尖る
95	SE1001	47.01	20.14	15.67	946.78	0.78	鋭く尖る
	最大	47.01	25.05	19.4	946.78	0.91	
	最小	17.3	13.92	9.54	250.33	0.49	
	平均	26.002	19.341	14.163	512.656	0.737	
	標準偏差	5.597	2.438	1.770	161.935	0.080	
	標本数	58	58	58	58	58	

センダン (Melia azedarach L. var. subtripinnata Miquel)　センダン科センダン属

核（内果皮）は灰褐色、長さ 10.23mm、幅 7.41mm、厚さ 7.18mm の楕円体で、基部には大きく深い孔がある。背面は浅く広い５～６個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面観は星型。縦隆条に沿った亀裂が１箇所確認される。内果皮表面は粗面（図 316 － 13）。

（４）考察

各遺構から出土した種実遺体群には、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ、落葉広葉樹のウメ、スモモ、モモ、センダンが確認された。各遺構から出土したモモと、SX1012 から出土したウメ、スモモは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や種子が食用、薬用などに広く利用される。これらの栽培種の可食部位である種実遺体の出土は、当時の寺海土遺跡周辺域で食用や祭祀等に利用されていたものに由来すると考えられる。

本分析で最も多く確認されたモモは、SE1001 から出土した核が最も大きく、大型核は偏平で頂部が鋭く尖り、小型核は丸く、頂部も丸みを帯びる傾向が得られた。これらの核の大きさや形状の違いを遺構間や時代変遷に反映させるはできなかったが、少なくとも当時の寺海土遺跡周辺域では、複数の系統のモモが利用されていたことが示唆される。

ところで、SX1012 より出土したスモモの果実は注目に値する。スモモの果実は腐りやすいため、短期間で消費する必要があり、加工しない限り貯蔵は不可能である。核に比べて堆積物中に残りにくい果実が祭祀遺構より出土した状況を考慮すると、急な埋積過程を示唆している。埋積した時季は、結実期である６～７月頃と推定され、遺構内に埋納した季節性を反映している可能性がある。

栽培種を除いた分類群は、溝からマツ属複維管束亜属とスギが、SX1012 からセンダンが確認された。これらは当時の寺海土遺跡周辺域に生育していた樹種に由来すると考えられる。複維管束亜属は尾根筋や海岸の砂浜や岩山など土壌のやせた場所や乾燥地に、スギは沢沿いなどの土壌の深いところに生育する常緑高木で、祭祀遺構から出土したセンダンは海岸近くの日当たりの良い場所に生育する落葉高木であるが、いずれも古くから植栽される樹種であることから、出土種実は植栽樹に由来する可能性もある。

引用文献

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

３　土器付着黒色物の赤外分光分析

（１）はじめに

寺海土遺跡の調査では、内面に黒色物が付着した山茶碗が出土した。ここでは、これらの遺物内面付着物の赤外分光分析を行い、付着物の材料について検討した。

（２）試料と方法

分析試料は、山茶碗４点の各内面に付着する黒色物である（表 29・図 318）。

各試料は、典型的な部分から小片を採取した。分析試料は、表面において手術用メスを用いて削り取り、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

表 29　試料と特徴

分析 No.	遺物 No.	遺物名	遺構	付着位置	付着物の特徴
1	1090	山茶碗・小碗	SF1034	内面	黒色～暗褐色、光沢
2	885	山茶碗・小碗	SR1005	内面	黒色、光沢、皺有り
3	190	山茶碗・小皿	SD2005	内面	黒色、光沢、滑らか
4	193	山茶碗・碗	SD2005	内面	黒色、光沢無、コークス状

（３）結果および考察

各遺物の内面に付着する黒色物の赤外吸収スペクトル図を図１に示した。縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber (cm^{-1})；カイザー）である。各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表 30）。

分析 No. １は、内面に付着する光沢のある黒色～暗褐色物である。赤外吸収スペクトルは、生漆の吸収位置と一致し、ウルシオールの吸収（吸収 No. ６～ No. ８）が確認された。

分析 No. ２は、内面に付着する光沢のある黒色物である。赤外吸収スペクトルは、生漆の吸収位置と一致し、ウルシオールの吸収（吸収 No. ６～ No. ８）が確認された。

分析 No. ３は、内面に付着する光沢のある黒色物である。赤外吸収スペクトルは、生漆の吸収位置と一致し、ウルシオールの吸収（吸収 No. ６～ No. ８）が確認された。

これら分析 No. １～ No. ３の付着物は、漆と同定される。

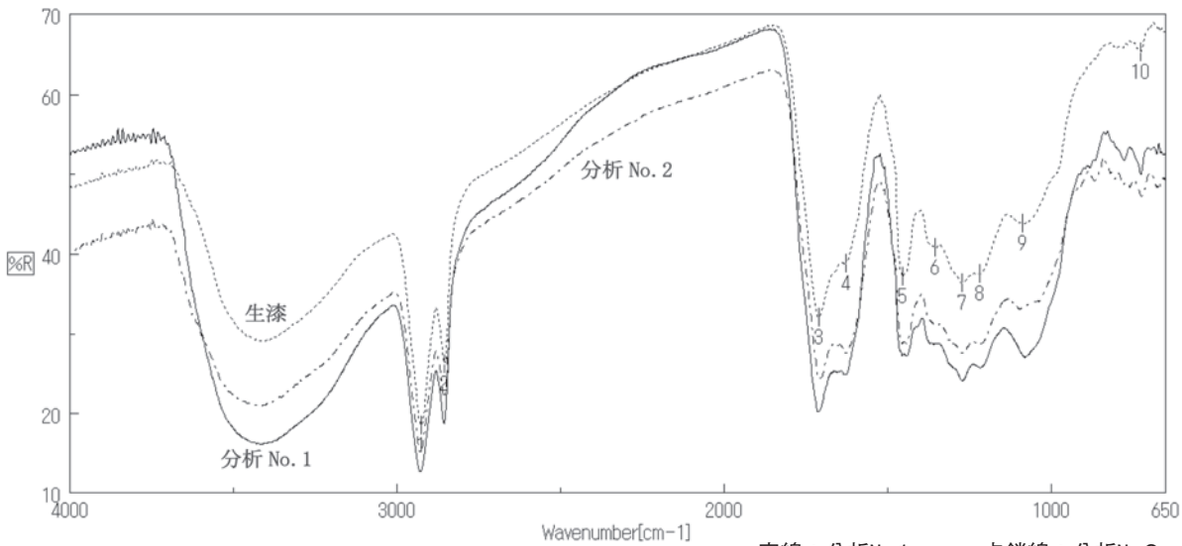
分析 No. ４は、内面に付着する光沢のないコークス状の黒色物である。赤外吸収スペクトルは、有機物由来の吸収 No. １や No. ２が見られないことから、炭化した付着物と考えられ、もともとは付着していた漆などの有機物が、火災などの熱により炭化した可能性が考えられる。

表 30　生漆の赤外吸収位置と強度

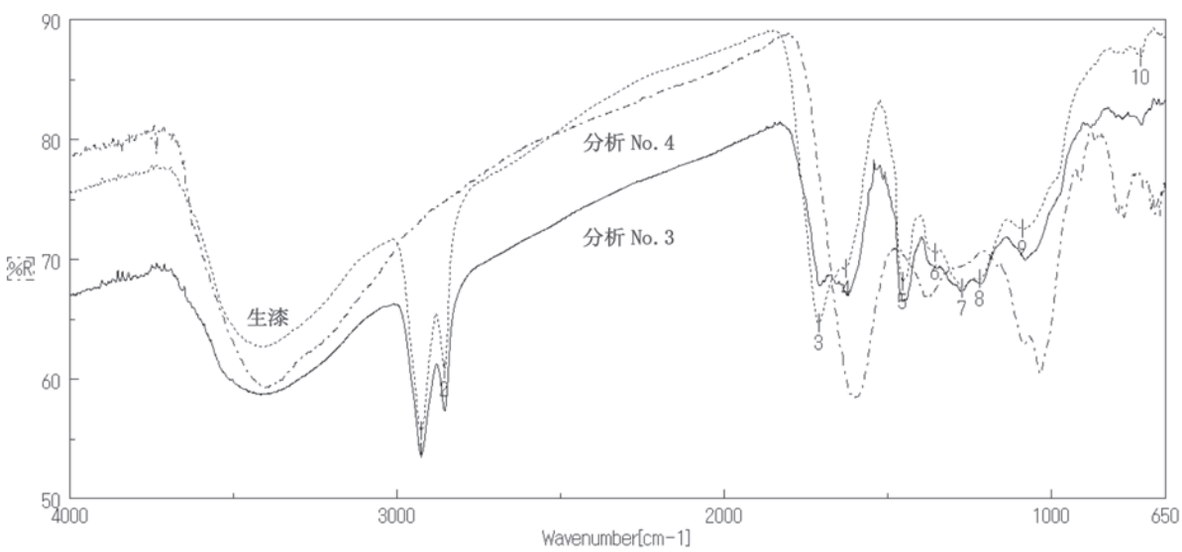
吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ｳﾙｼｵｰﾙ
7	1270.86	46.3336	ｳﾙｼｵｰﾙ
8	1218.79	47.5362	ｳﾙｼｵｰﾙ
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

（4）おわりに

山茶碗４点の各内面に付着する黒色物について、赤外分光分析を行った。その結果、分析 No. １～３の付着物は光沢があり、赤外分光分析によりウルシオールの吸収が確認され、漆と同定された。また、分析 No. ４は、有機物由来の吸収が見られないことから、炭化した付着物と考えられた。



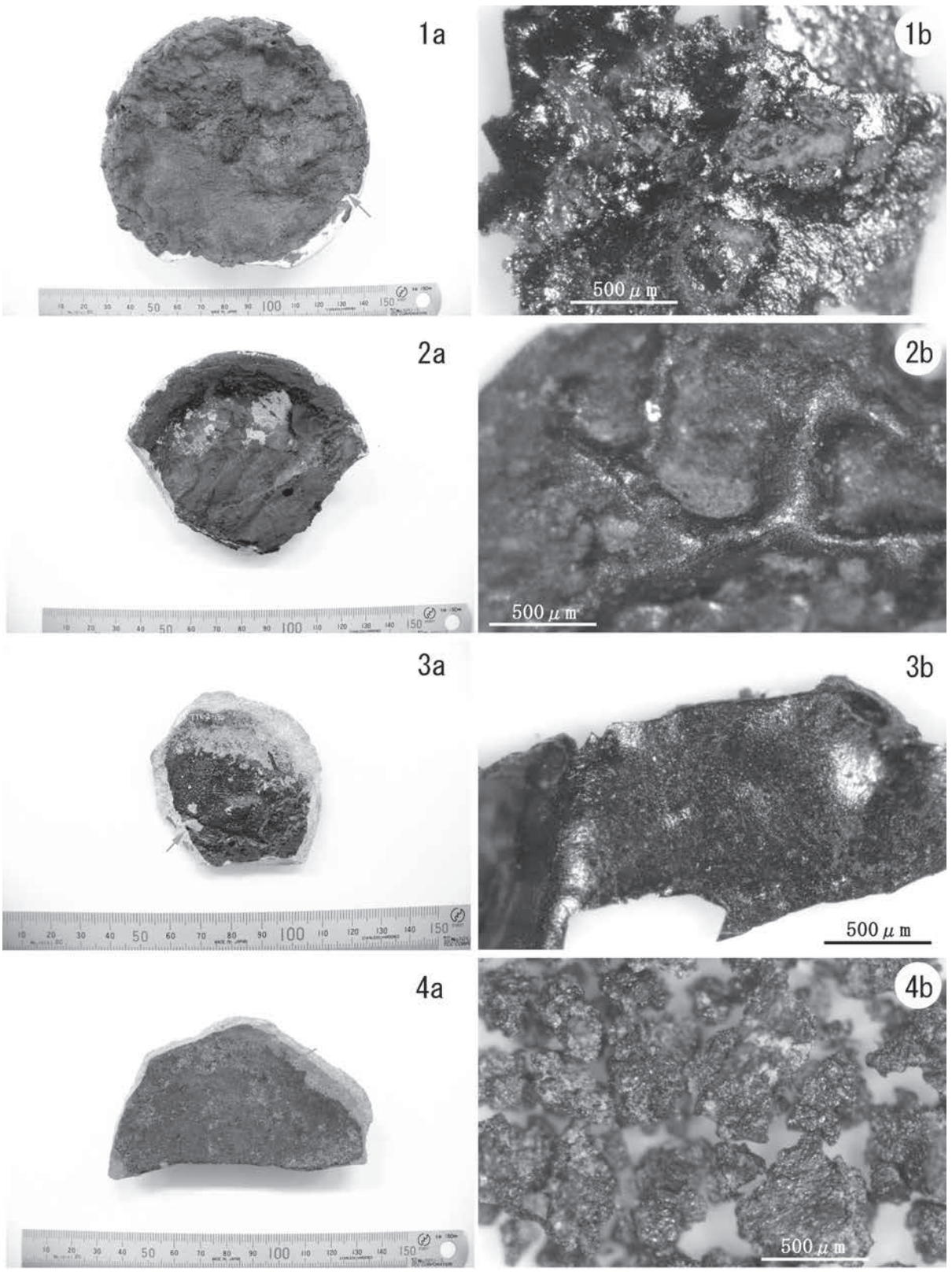
実線：分析No.１　　一点鎖線：分析No.２



実線：分析No.３　　一点鎖線：分析No.４

＊点線の吸収スペクトルの数字は、生漆の吸収位置を示す

図 317　土器付着黒色物の赤外分光スペクトル図



＊矢印が試料の採取位置

1a・1b：分析No.１　　2a・2b：分析No.２　　3a・3b：分析No.３　　4a・4b：分析No.４

図 318　試料と付着物の実体顕微鏡写真

4　樹種同定

静岡県浜松市浜北区の寺海土遺跡とそれに隣接する中通遺跡から出土した平安時代～近世の木製品等169点の樹種を調べた結果、次に記載する21の樹種が同定された。これらの同定に用いたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターが作成し、鈴木らが光学顕微鏡で観察同定した。このプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

（1）同定された樹種

1. アカマツ　Pinus densiflora Siebold et Zucc.　マツ科（図319－1：試料番号13402）

年輪幅の広い針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道を持つ。早材から晩材への移行はゆるやか、晩材部は厚い。仮道管の有縁壁孔は1列、らせん肥厚はない。放射組織は単列と紡錘形があり、後者に水平樹脂道がある。単列放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状、放射仮道管の内壁は著しい歯牙状突起がある。これらの形質からマツ属複維管束亜属のアカマツの材と同定した。

当遺跡出土材は7点で、平安～鎌倉時代の2点は杭、室町～江戸時代の4点は柱根、それに江戸時代の曲物の底板1点である。

2. スギ　Cryptomeria japonica (Linn.f.) D.Don　スギ科（図319－2：試料番号13396）

年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂道はない。晩材は普通厚く、早材から晩材への移行は漸移的である。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は薄く平滑なことが多い。仮道管の有縁壁孔は1列でらせん肥厚はない。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめのスギ型で1分野あたり2個である。これらの形質から杉の材と同定した。

鎌倉時代の祭祀遺構（寺海土遺跡SX1012）から出土した枝材が1点、江戸時代の板材が4点、時期不明の杓子と曲物底板が1点、合計7点で、静岡県内の弥生時代以降の遺跡としてはずいぶんと少ない。

3. ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc.　ヒノキ科（図319－3：試料番号13385）

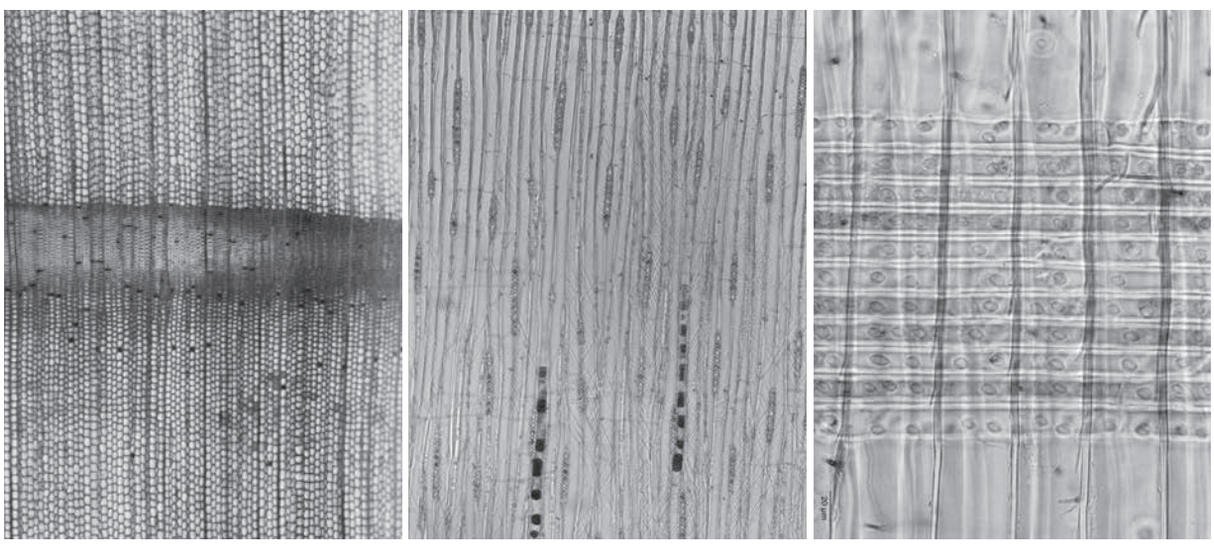
年輪の目立たない均質な材質の針葉樹材で一般に年輪幅は狭い。晩材はわずかしか無く、早材から晩材へは急に変わる。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は厚くなって単壁孔を持つことが多い。放射組織は単列で柔細胞のみからなり分野壁孔はヒノキ型で2個ある。これらの形質からヒノキ科ヒノキ属のヒノキの材と同定した。

ヒノキ材は77点と当遺跡から最も多量に出土しており、鎌倉時代のものが70点を占める。それらは箸（15点）、井戸材（8点）、板材（10点）、曲物（12点）などのほか、卒塔婆、下駄、杓子、杭や用途が分からない材などであり、また祭祀遺構（寺海土遺跡SX1012）に伴う枝材が1点ある。その他の時期のものは平安～鎌倉が5点、室町～江戸が2点で、それらの用途に特段の傾向は認められないが、江戸時代のものが少ないことに特徴があると言える。

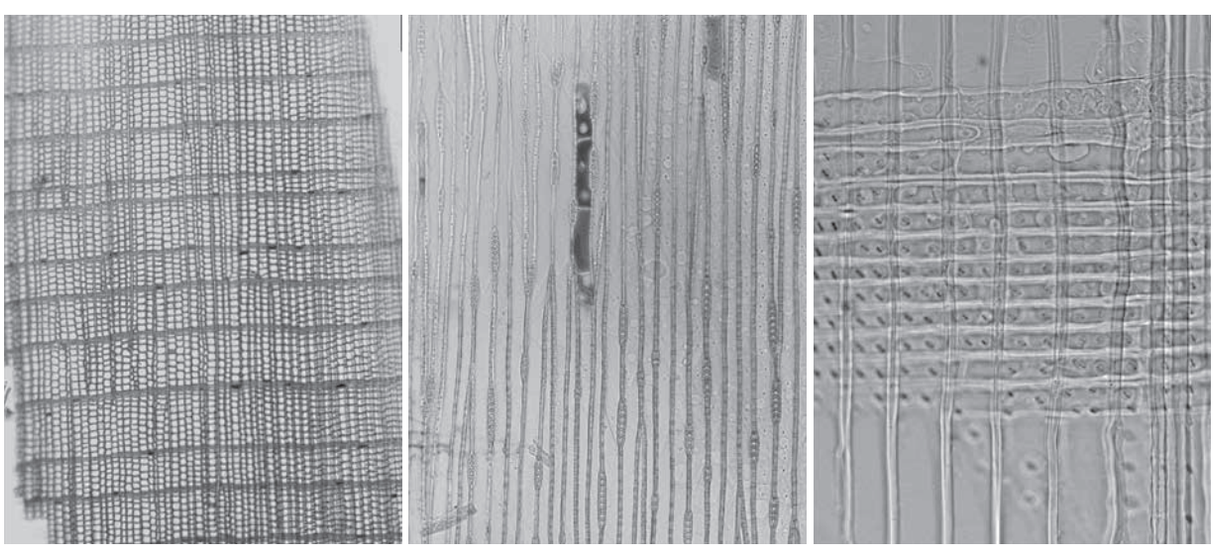
4. サワラ　Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.　ヒノキ科（図320－4：試料番号13403）

ヒノキによく似た材で、一般に年輪幅はヒノキよりやや広いことが多い。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は厚くなって単壁孔を持つことが多い。放射組織は単列で柔細胞のみからなり分野壁孔はヒノキ型～スギ型で2個ある。これらの形質からヒノキ科ヒノキ属のサワラの材と同定した。

1 a　アカマツ（13402）　木口× 30　1 b　板目× 60　1 c　柾目× 240

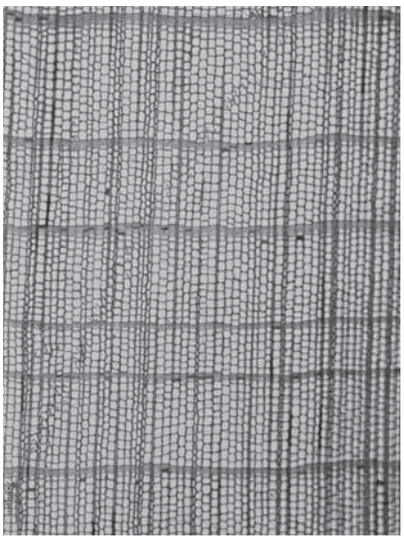


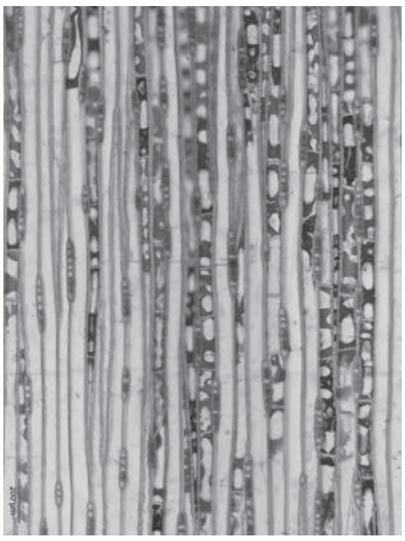
2 a　スギ（13396）　木口× 30　2 b　板目× 60　2 c　柾目× 240

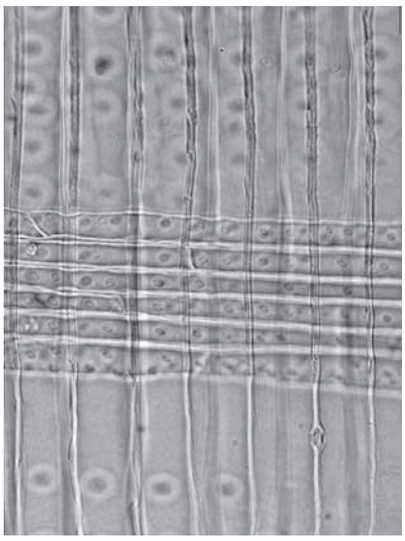


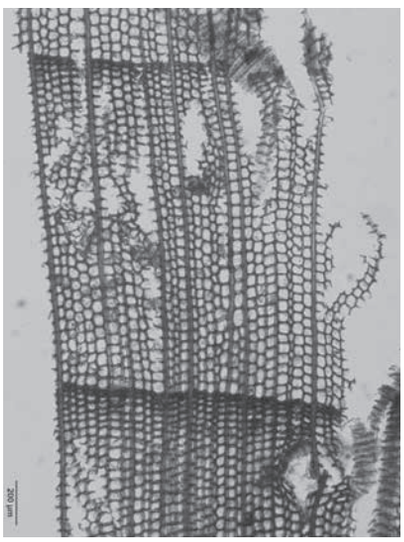
3 a　ヒノキ（13385）　木口× 30　3 b　板目× 60　3 c　柾目× 240

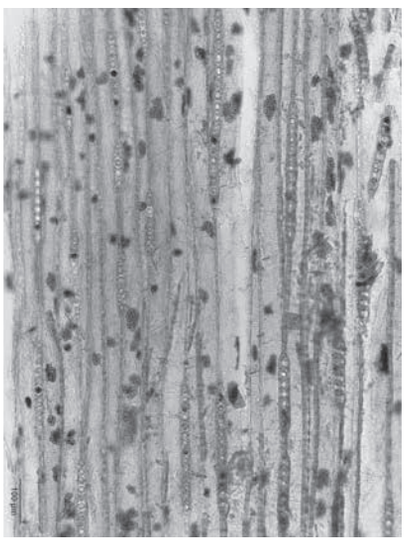
図 319　顕微鏡写真（１）

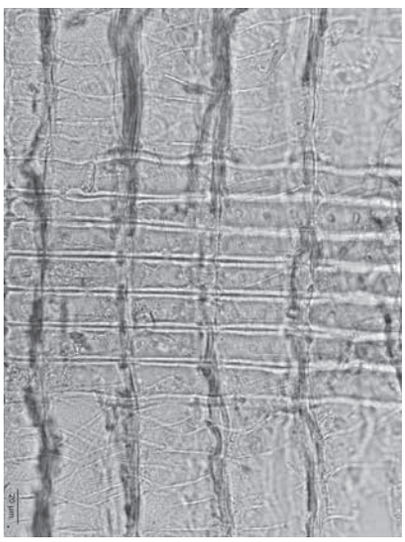

4a　サワラ（13403）　木口× 30

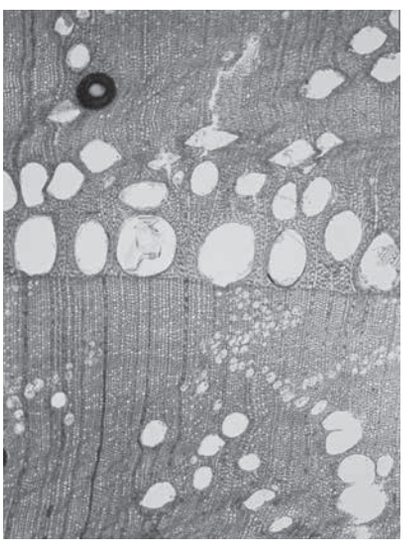

4b　板目× 60

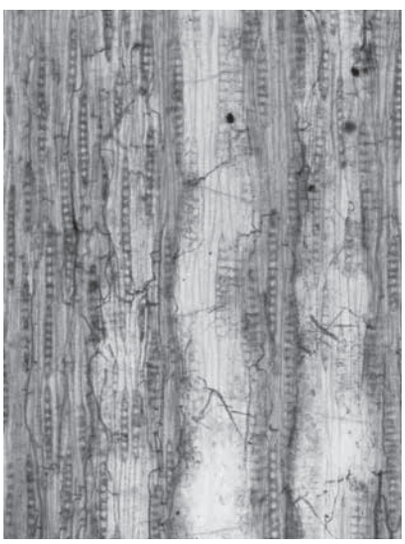

4c　柾目× 240


5a　スギ（13396）　木口× 30


5b　板目× 60


5c　柾目× 240


6a　クリ（13535）　木口× 30


6b　板目× 60

6c　柾目× 240

図 320　顕微鏡写真（2）

サワラは 24 点が出土し、ヒノキに次いで多い。しかし、その大部分（15 点）は江戸時代の井戸材として用いられた桶の側板であり、鎌倉時代の７点は板材、卒塔婆、曲物など７点でその用途はヒノキと変わらないと言える。鎌倉時代には井戸材としてヒノキを使っていたものが江戸時代にはサワラに取って代わるのが見て取れる。

４’. ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科

基本構造はヒノキ、サワラと同様だが保存が悪いため分野壁孔が十分に観察できずそのいずれであるかが識別できなかったものである。

鎌倉時代の板材、下駄など５点だがヒノキの用途と変わらない。

５. カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.（図 320 － 5 ：試料番号 11448）

年輪が目立たない針葉樹で樹脂道も樹脂細胞もない。晩材は量わずかで早材から晩材への移行はゆるやか。仮道管の内壁には顕著ならせん肥厚があり、２・３本ずつまとまって走る。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は小さいヒノキ～トウヒ型で１分野に２～４個ある。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

出土材は鎌倉時代の下駄１点で、カヤの下駄の類例はあまりない。

６. クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.（図 320 － 6 ：試料番号 13525）

丸い大道管が年輪始めに並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が緩く集まって火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋でやや大振り小道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列同性､背は比較的低い。以上の形質からブナ科のクリの材と同定した。

出土材は鎌倉時代の木錘、室町～江戸時代の柱根と木片の３点である。

７. コジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky（図 321 － 7 ：試料番号 13546）

丸い大道管が間隔をあけて年輪始めに配列し、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様に火炎状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋でやや大振り小道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列同性と集合状～複合状の大きなものがあり、前者は背は比較的低い。以上の形質からブナ科のシイ属のコジイの材と同定した。スダジイとは集合状～複合状の放射組織を持つことで区別される。

出土材は、鎌倉時代の祭祀遺構（寺海土遺跡 SX1012）に関連する小枝１点である。

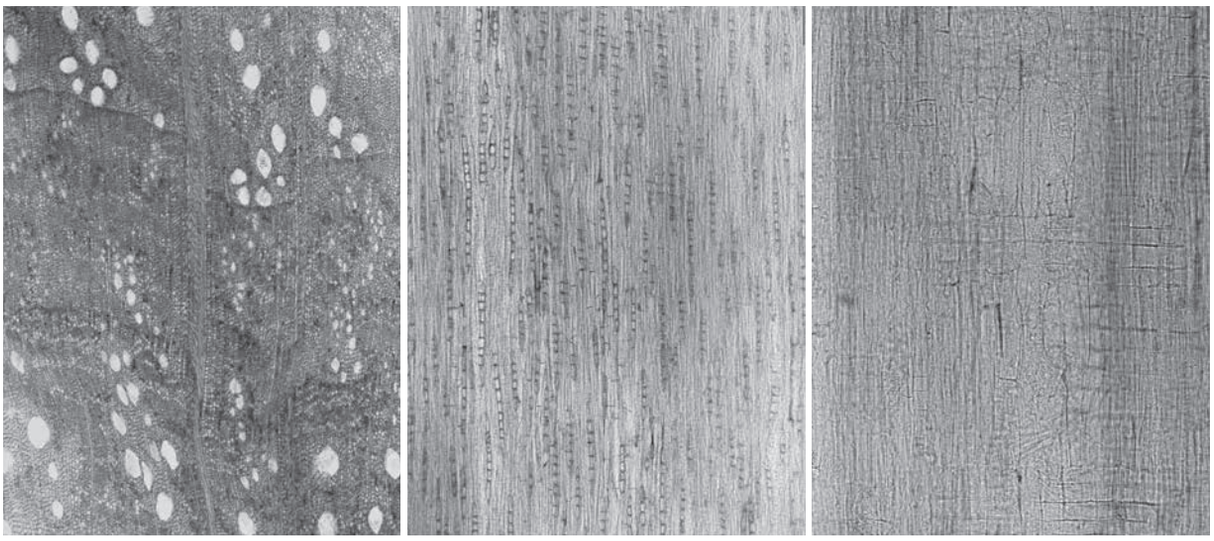
８. ブナ属　Fagus　ブナ科（図 321 － 8 ：試料番号 11403）

丸みをおびた小道管が密に分布する散孔材で､道管は単独あるいは２～数個が様々な方向に複合する。道管の穿孔はほとんどが単一、横棒が 10 本以下の階段状のものがわずかに混じる。放射組織はほぼ同性で１～ 10 細胞幅ほどになり、大きいものは肉眼で認められ、接線面での形状は綺麗な紡錘形となる。これらの形質からブナ科のブナ属の材と同定した。ブナ属には全国の温帯林にあるブナと、本州太平洋岸の温帯にあるイヌブナとがあるが材構造での区別は困難である。

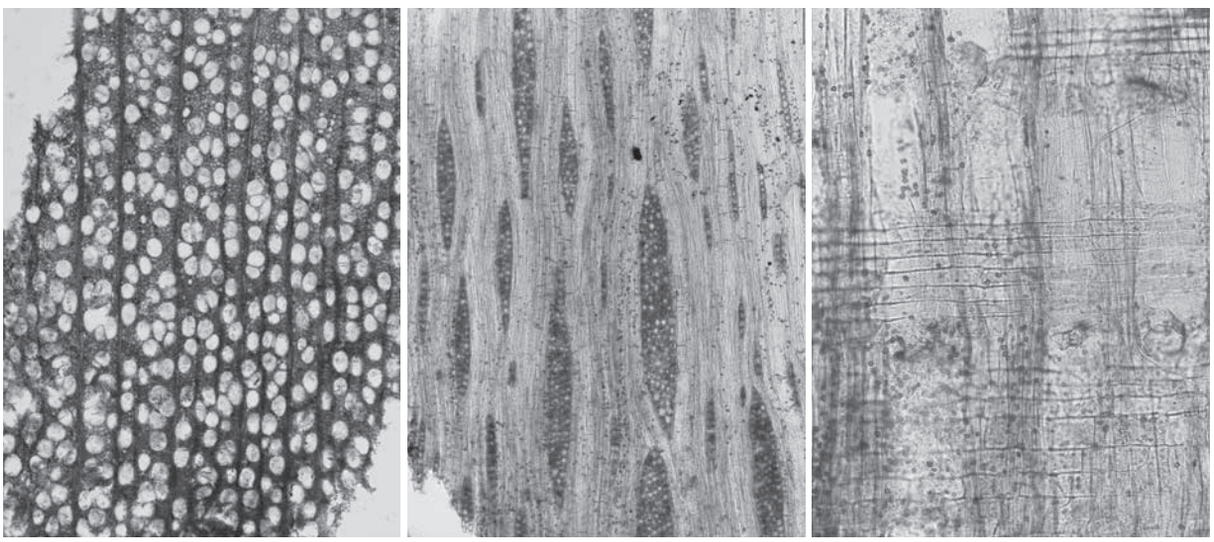
出土材は江戸時代の漆椀３点で、ブナ湾は庶民の漆器として最も普通なものである。

９. コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科（図 321 － 9 ：試料番号 11433）

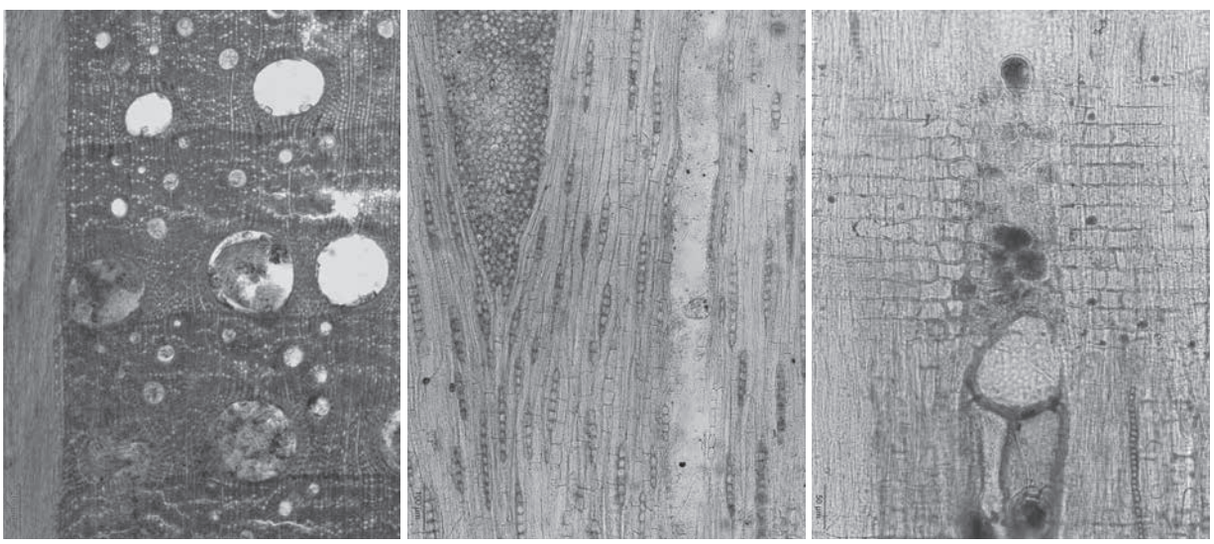
年輪始めに丸い大道管が並び､晩材部では丸く壁の厚い中～小形の道管が緩く放射方向に並ぶ環孔材。



7a　コジイ（13546）　木口× 30　7b　板目× 60　7c　柾目× 240



8a　ブナ属（11403）　木口× 30　8b　板目× 60　8c　柾目× 240



9a　クヌギ節（11433）　木口× 30　9b　板目× 60　9c　柾目× 240

図 321　顕微鏡写真（3）

道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性と非常に大きな複合放射組織の２つがあり、後者ではしばしば大型の細胞に結晶を含む。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属のクヌギ節の材と同定した。クヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが材構造での区別は困難である。

出土材は鎌倉時代の用途不明品１点である。

10. ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科（図 322 － 10 試料番号 11449）

年輪の始めに丸い大道管が１層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が密に集まって繊維塊と紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は幅広く大型の紡錘形で、上下辺に大型の結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

出土材は鎌倉時代の漆椀と下駄各１点で、前者はブナ椀に比べて一般に「高級」なものとされる。

11. ヤマグワ　Morus bombycis Koidz.　クワ科（図 322 － 11：試料番号 13399）

年輪始めに丸い単独あるいは２個複合した大道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部ではやや薄壁の小道管が数個複合して周囲状柔組織と共に波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状、晩材部では接線状に連なる。放射組織は１～５細胞幅ほどで、接線面で比較的綺麗な紡錘形となり、単列の翼部が飛び出すものもある。単列の翼部が方形～やや直立で、多列部は平伏からなる異性放射組織である。これらの形質からクワ科のヤマグワの材と同定した。

ヤマグワと同定されたものは、鎌倉時代の枝材９点と江戸時代の杭１点である。これらの枝材は直径１～２センチほどで年輪が数年から 10 年を超えるものもあり、桑畑の刈り取られたクワの枝のように当年枝のみということはない。

12. ヤブマオ属　Boehmeria　イラクサ科（図 322 － 12：試料番号 13382）

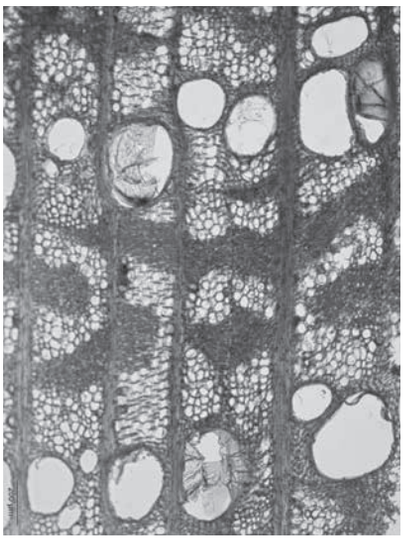
薄壁で断面多角形の微細な道管が数個、主に放射方向に複合したものが均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に配列する。放射組織は３～６細胞幅ほどで非常に背が高い。直立細胞、方形細胞、平伏細胞が混ざって構成し、壁が薄く形が不整なので粗雑に見える。これらの形質からイラクサ科のヤブマオ属の材と同定した。ヤブマオ属にはカラムシ、アカソ、コアカソ等の種があるが材構造での区別は困難である。

出土材は鎌倉時代の「杭」とされるもの１点であるが、直径１センチほどの茎であり、出土地点で埋没された株から立って出ていた茎が「杭」と誤認されたものと考えられる。

13. クスノキ Cinnamomum camphora (Linn.) Siebold et Zucc. クスノキ科（図 323 － 13：試料番号 11447）

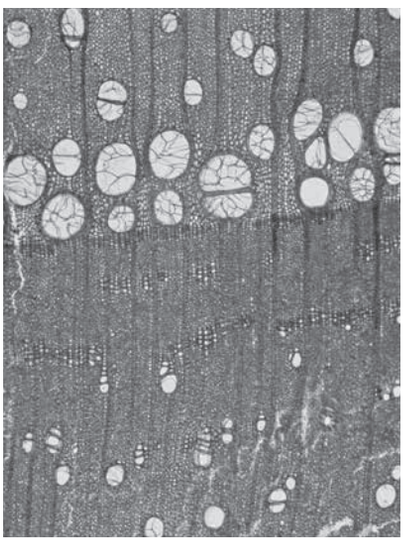
中型の楕円形の道管が単独あるいは２・３個放射方向に複合したものが均一に分布する散孔材で、周囲状の木部柔組織が目立つ。柔組織細胞のあるものは大きく膨らみ、精油成分を持つ。道管の穿孔は多くは単一、時に横棒が数本の階段穿孔が混じる。放射組織は１～３細胞幅で異性、背は比較的低い。時に上下辺の細胞が大きく膨らみ精油を持つ。これらの形質からクスノキ科のクスノキの材と同定した。クスノキ科の他の樹種からは大きく膨らんだ木部柔細胞と放射柔細胞（油細胞）を多く持つことで区別される。

出土材は鎌倉時代の漆塗り下駄、室町～江戸時代の下駄、時期不詳の挽物破片の３点である。


10a　ケヤキ（11449）　木口× 30

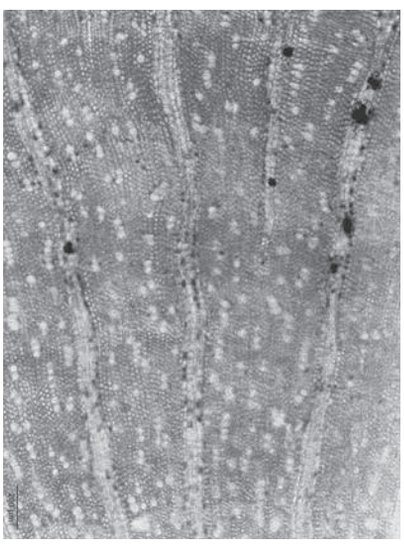
10b　板目× 60

10c　柾目× 240


11a　ヤマグワ（13399）　木口× 30

11b　板目× 60

11c　柾目× 240


12a　ヤブマオ属（13382）　木口× 30

12b　板目× 60

12c　柾目× 240

図 322　顕微鏡写真（4）

14. カツラ　Cercidiphyllum japonicum Siebold et Zucc.（図 323 － 14：試料番号 11404）

薄壁多角形の小道管が単独で均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が 20 本くらいの階段状である。放射組織は異性で２列、単列部は直立細胞、多列部は平伏細胞からなり、接線断面ではスマートな紡錘形である。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

出土材は江戸時代の漆椀で、カツラ材が漆器木地に使われるのは知られているが量が少なく出土する例はほとんど聞かない。

15. モモ　Prunus persica (L.) Batsch.　バラ科（図 323 － 15：試料番号 13526）

年輪始めに中型の丸道管がほぼ一列に並び、その外にはやや小さい丸い道管が単独あるいは 2,3 個複合したものが数層に密に並び、その外側（晩材部）では丸い小道管が単独あるいは数個様々な方向に複合したものが比較的密に均一に分布する半環孔材。道管の穿孔は単一、内壁らせん肥厚がある。放射組織は異性で幅１～５細胞くらい、背は比較的高くて大型となり、接線面では綺麗な紡錘形となる。これらの形質からバラ科サクラ属のうち、モモの材と同定した。山桜など、野生の桜類からは年輪始めに大きめの道管が並ぶことで区別される。ウメ、スモモもよく似るが年輪はじめの大きい道管のサイズ等で区別される。

出土材は祭祀遺構（SX1012）から出土した、鎌倉時代の木錘と枝の２点である。土坑内からはスモモの種実（核）が大量に出土したとの報告があり、スモモの栽培がなされていたということはモモ、ウメなども栽培されていたことは充分に考えられる。

16. ユズリハ属　Daphniphyllum　ユズリハ科（図 324 － 16：試料番号 13415）

薄壁断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が多数の階段状である。放射組織は２列、典型的な異性で直立細胞の背が高い。これらの形質からユズリハ科ユズリハ属の材と同定した。ユズリハ属には暖地に自生ししばしば庭に植えられるユズリハと海岸近くに多いヒメユズリハがあるが両者の材構造での区別は困難である。

出土材は鎌倉時代の枝２点である。

17. キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科（図 324 － 17：試料番号 11452）

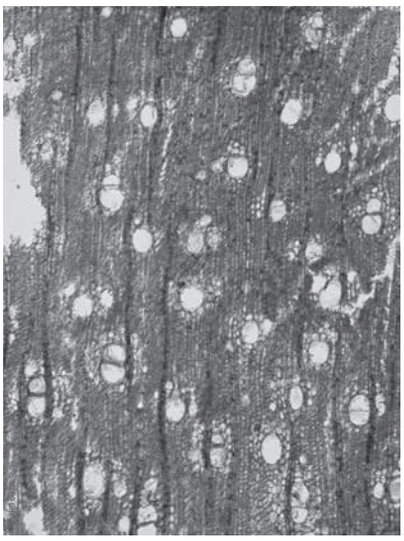
年輪幅の広い年輪の一部のみが観察できる材で、中型の丸い道管が単独あるいは複合してあり、木部柔組織が周囲状にある。年輪界附近では断面が四角みを帯び、数個が複合したものが木部柔組織と一緒になって散在する。道管の穿孔は単一、小道管内壁にらせん肥厚がある。放射組織は４～５細胞幅の同性で、接線面での断面は綺麗な紡錘形となる。これらの形質からミカン科キハダの材と同定した。

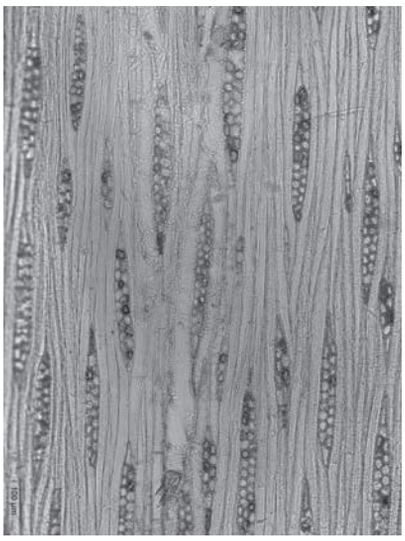
出土材は室町～江戸時代の用途不明品３点、江戸時代の杭２点、鎌倉時代の下駄１点である。

18. カラスザンショウ Zanthoxylum ailanthoides Siebold et Zucc. ミカン科（図 324 － 18：試料番号 13423）

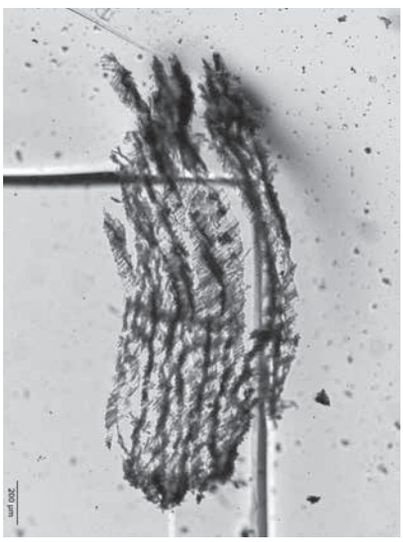
年輪始めにやや大きめの丸い道管が単独あるいは２個複合してあり、その外側ではわずかに径の小さい同様の道管が散在し、晩材部では道管径がかなり小さくなる半環孔材で、障害ゴム道がある。道管の穿孔は単一。放射組織は幅１～５細胞ほどで背が高く、構成細胞が大きく、粗雑である。これらの形質からミカン科のカラスザンショウの材と同定した。我が国に生育する広葉樹で障害ゴム道を形成するのはミカン科、センダン科、バラ科（サクラ属）などに限られるが、カラスザンショウに障害ゴム道が形成されるとの現生材での報告は知られていない。

出土材は鎌倉時代の枝１点である。


13a　クスノキ（11447）　木口× 30

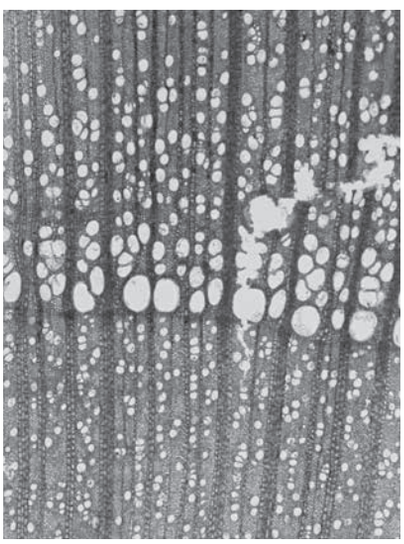

13b　板目× 60

13c　柾目× 240


14a　カツラ（11404）　木口× 30

14b　板目× 60

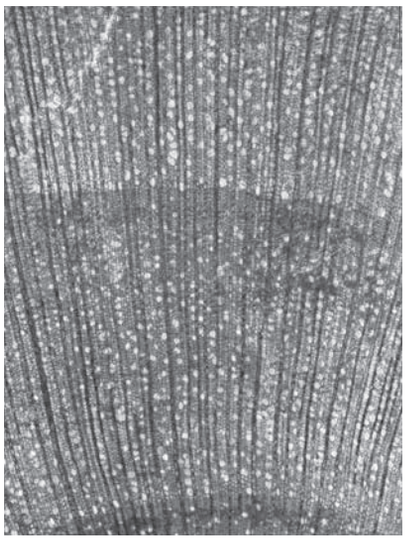
14c　柾目× 240


15a　モモ（13526）　木口× 30

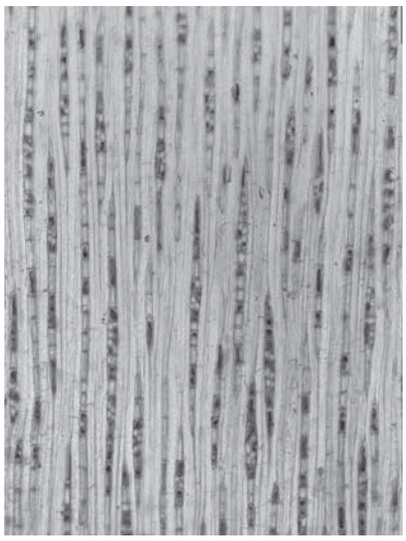
15b　板目× 60

15c　柾目× 240

図 323　顕微鏡写真（5）

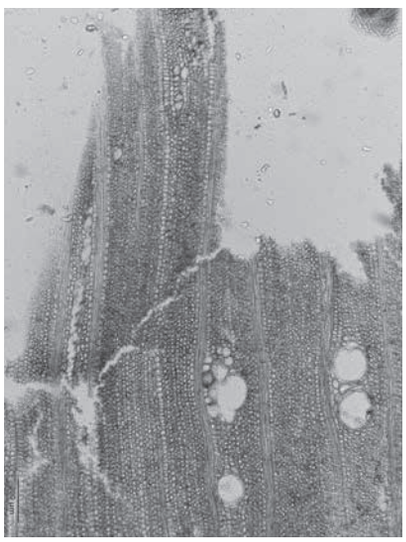


16a　ユズリハ属（13402）　木口× 30



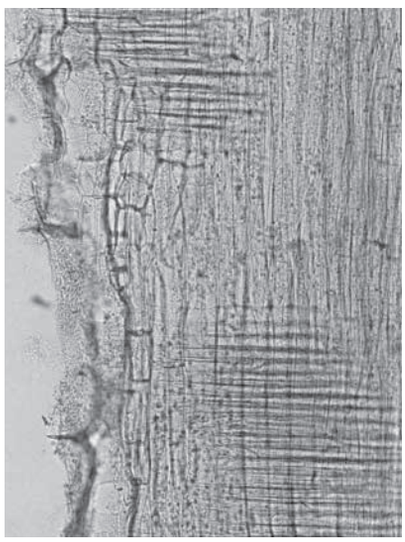
16b　板目× 60

16c　柾目× 240



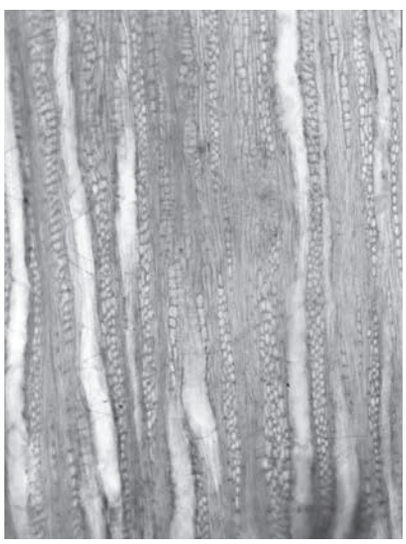
17a　キハダ（13396）　木口× 30

17b　板目× 60



17c　柾目× 240

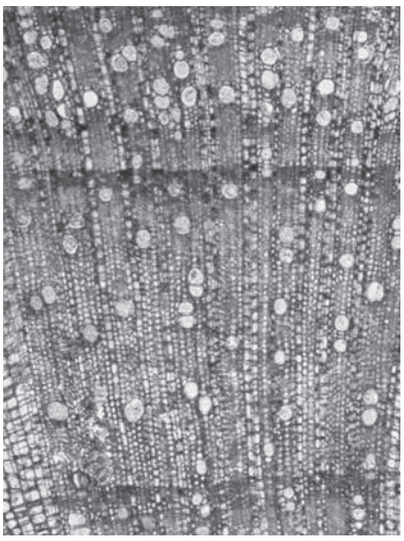
18a　カラスザンショウ（13385）木口× 30



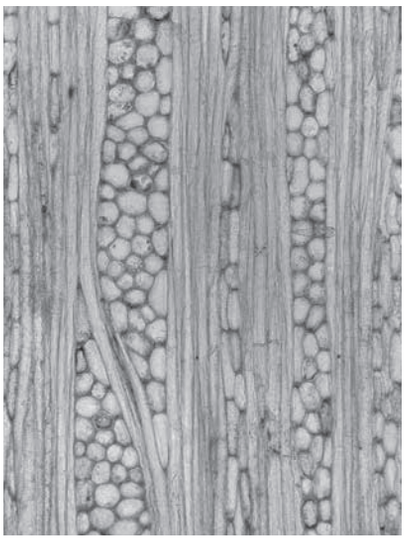
18b　板目× 60

18c　柾目× 240

図 324　顕微鏡写真（６）

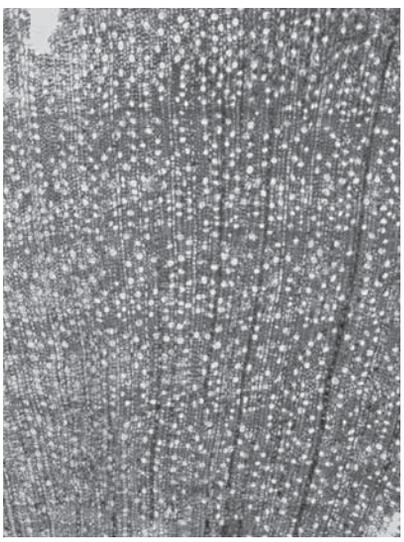


19a　ヤマビワ（13544）　木口× 30

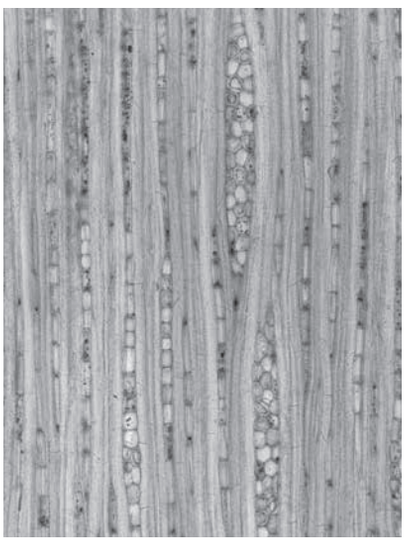


19b　板目× 60

19c　柾目× 240

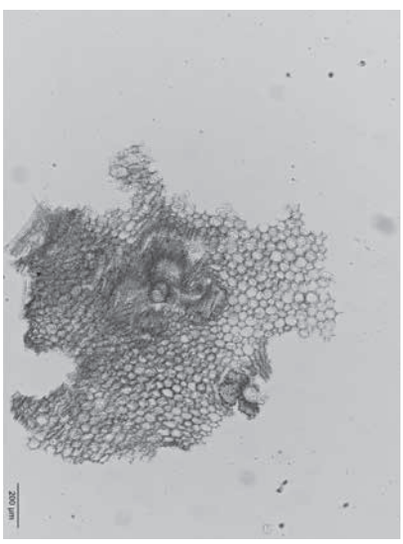


20a　ガマズミ属（13548）　木口× 30



20b　板目× 60

20c　柾目× 240



21a　竹笹類（8781）　木口× 30

図 325　顕微鏡写真（7）

19.　ヤマビワ　Meliosma rigida Sieboldold et Zucc.　アワブキ科（図 325 － 19：試料番号 13544）

丸い中小型の道管が単独あるいは 2-3 個、主に放射方向に複合してまばらで均一に分布する散孔材。周囲状木部柔組織が目立つ。道管の穿孔は横棒が 10 本以下の階段状。放射組織は 1-5 細胞幅で背が高く、構成細胞は大振りで粗雑である。これらの形質からアワブキ科アワブキ属のヤマビワの材と同定した。

当遺跡出土材は鎌倉時代の祭祀遺構に関わる枝材１点である。

20. ガマズミ属　Viburnum　スイカズラ科（図 325 － 20：試料番号 13548）

薄壁で断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が多数の階段状である。放射組織は１～４細胞幅ほどで、直立細胞からなる背の高い単列の翼部と平伏細胞からなる多列部からなる。これらの形質からスイカズラ科のガマズミ属の材と同定した。ガマズミ属には常緑のサンゴジュや落葉のガマズミなど多数の種があるが、材構造での識別は困難である。

出土材は鎌倉時代の枝材２点である。

21. 竹笹類　Bambusoideae　イネ科（図 325 － 21：試料番号 8781）

基本組織中に原生木部稿と１対の後生木部道管、篩部とそれらを取り囲む繊維の塊からなる維管束が散在することから単子葉類イネ科のタケ亜科（竹笹類）であることが分かる。この仲間には多数の種があり維管束構造での区別は出来ない。

出土品は江戸時代の曲物底板に打ち込まれていた木釘１点で、現在での利用例から竹（恐らくマダケ）である可能性が考えられる。

22. その他の樹種

以上同定されたもの以外に、鎌倉時代では散孔材であるとしか分からなかったもの２点、環孔材であるとしか分からなかったもの１点、広葉樹としか分からなかったもの１点、時期不詳の針葉樹材（曲物）１点、それに同定できなかったもの３点がある。これらは、乾燥収縮や劣化出会い組織が十分に観察できなかったものである。

（２）寺海土・中通遺跡出土材樹種組成の特徴

ヒノキとスギ

静岡県地方では弥生時代以降の遺跡において建築材、土木用材から刳物容器、挽物、曲物、組み物などありとあらゆる場面においてスギ材が多用されるのが一般的である。しかし本遺跡では鎌倉時代～江戸時代を通してスギ材の出土は少なく、それに対して鎌倉時代ではヒノキ材、江戸時代ではサワラ材の出土が顕著である。

これはもちろん出土材が遺構の種類や出土品等に偏りがあるためその出土数が偏っている可能性はあるが、それにしてもスギ材の使用頻度の低さが目立つ。特に井戸施設材が鎌倉時代ではヒノキであったものが江戸時代のそれがサワラ材に入れ替わることは、材質に叶った用材であることはもちろんだが、その時代毎に「高級」な木材を使用した結果で、樹種の交代はヒノキ材資源の枯渇と代替え品としてのサワラ材の多用を示していると言える。

その他の特徴的な樹種

今回の同定された樹種の中で「めずらしい」樹種にヤマビワがある。ヤマビワはアワブキ科アワブキ

属の常緑小高木で伊豆半島以西に分布するが、決してたくさん生える木ではない。材が硬いので傘や鎌などの柄にするといい、また伊勢神宮では火起こし棒に使っていると言うが、普通屋敷や庭で栽培することはない。

今回の出土品は次項に述べる祭祀関連（寺海土遺跡 SX1012）の枝材で、遺跡近くに自生していたものと考えられる。この材の遺跡からの出土例は恐らく初めてだろう。

鎌倉時代の祭祀遺構に関連した枝材

寺海土遺跡では、土坑内に土師質の皿や山茶碗が埋納された遺構（SX1012）があり、この土坑を覆い隠すように樹木の枝があったとのことである。

これらの枝材 29 点の樹種同定が行われたが、その結果は、ヤマグワ（９点）、ヒノキ（１点）、ガマズミ属（２点）、ユズリハ属（２点）、カラスザンショウ、コジイ、スギ、桃、ヤマビワ（以上各１点）、それに散孔材（２点）、環孔材（１点）、広葉樹（１点）、そして同定できなかったもの３点である。

これを見ると、実にさまざまな樹種が混在しているが、出土状況からして土坑を覆い隠すように使用されていたのはヤマグワである。その他の枝材はいずれもが小片で、特徴的な樹種として挙げたヤマビワを除いては、屋敷地やその周辺ですぐに枝葉が手に入るものであり、これらを得るために特別に集めたものとは考えられない。祭祀場のすぐ近くに生えているヤマグワの枝を切り取って覆いとし、その他は何らかの理由で土坑に混入したものと考えられる。

表 31　出土木材の時期別樹種組成

樹種名	平安～鎌倉	鎌　倉	室町～江戸	江　戸	時期不詳	総　計
ヒノキ	5	70	2			77
サワラ		7	1	16		24
ヤマグワ		9		1		10
スギ		1		4	2	7
アカマツ	2		4	1		7
キハダ		1	3	2		6
ヒノキ属		5				5
クスノキ		1	1		1	3
ブナ属				3		3
クリ		1	2			3
ガマズミ属		2				2
ケヤキ		2				2
モモ		2				2
ユズリハ属		2				2
カヤ		1				1
カラスザンショウ		1				1
クヌギ節		1				1
コジイ		1				1
ヤブマオ属		1				1
ヤマビワ		1				1
カツラ				1		1
竹笹類				1		1
環孔材小枝		1				1
広葉樹小枝		1				1
散孔材小枝		2				2
針葉樹					1	1
同定不可		3				3
総計	7	116	13	29	4	169

表 32　出土木材の器種別樹種組成

樹種名	卒塔婆	箸	下駄	曲物	漆椀	杓子	井戸枠	桶（井戸材）	柱根	角材	杭	板状	その他	枝	総計
ヒノキ	1	15	1	13		1	8		1		2	11	23	1	77
サワラ	1		1	1				15	1	1		3	1		24
ヤマグワ											1			9	10
アカマツ				1					4		2				7
スギ				1		1						4		1	7
キハダ			1								2		3		6
ヒノキ属			1									2	2		5
クスノキ			2										1		3
クリ									1				2		3
ブナ属					3										3
ガマズミ属														2	2
ケヤキ			1		1										2
モモ													1	1	2
ユズリハ属														2	2
カツラ					1										1
カヤ			1												1
カラスザンショウ														1	1
クヌギ節													1		1
コジイ														1	1
ヤブマオ属											1				1
ヤマビワ														1	1
竹笹類													1		1
環孔材小枝														1	1
広葉樹小枝														1	1
散孔材小枝														2	2
針葉樹				1											1
同定不可														3	3
総　計	2	12	8	15	5	2	11	15	7	1	8	20	34	29	169

表 33　出土木材の器種別樹種組成（1）

プレパラートNo.	遺跡名	遺物No.	地区	遺構名	同定結果	遺物の種類	時　代
11382	中通	171	4区	SH4001	ヒノキ	柱根	室町～江戸
11377	中通	172	4区	SH4001	アカマツ	柱根	室町～江戸
11379	中通	237	4区	SP40001	サワラ	柱根	室町～江戸
11380	中通	238	4区	SP40016	アカマツ	柱根	室町～江戸
11378	中通	239	4区	SP40047	アカマツ	柱根	室町～江戸
13402	中通	240	5区	SP50053	アカマツ	柱根	室町～江戸
11384	中通	-	4区	SP40047	クリ	木片	室町～江戸
11404	中通	-	4区	SE4001	カツラ	漆椀	江戸
13530	中通	369	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13531	中通	370	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13532	中通	371	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13533	中通	372	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13534	中通	373	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13535	中通	374	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13536	中通	375	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13537	中通	376	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13538	中通	377	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13539	中通	378	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13540	中通	379	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13406	中通	380	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13403	中通	381	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13404	中通	382	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13405	中通	383	5区	SE5001	サワラ	桶側板（井戸材）	江戸
13398	中通	384	5区	SE5001	サワラ	角材	江戸

表 34　出土木材の器種別樹種組成（2）

プレパラートNo.	遺跡名	遺物No.	地区	遺構名	同定結果	遺物の種類	時　代
13399	中通	-	5 区	SE5001	ヤマグワ	杭	江戸
13400	中通	-	5 区	SE5001	キハダ	杭	江戸
13401	中通	-	5 区	SE5001	キハダ	杭	江戸
11403	中通	423	4 区	SF4007	ブナ属	漆椀（蓋）	江戸（18 世紀後半）
11402	中通	423	4 区	SF4007	ブナ属	漆椀（蓋）	江戸（18 世紀後半）
11401	中通	424	4 区	SF4007	ブナ属	漆椀	江戸（18 世紀後半）
8782 ＋ 8781(釘)	中通	459	4 区	SX4011	竹笹類	曲物底板（竹釘）	江戸
8782 ＋ 8781(釘)	中通	459	4 区	SX4011	アカマツ	曲物底板	江戸
13394	中通	-	4 区	SX4012	スギ	板状	江戸（17 ～ 18 世紀）
13395	中通	-	4 区	SX4012	スギ	板状	江戸（17 ～ 18 世紀）
13396	中通	-	4 区	SX4012	スギ	板状	江戸（17 ～ 18 世紀）
13397	中通	-	4 区	SX4012	スギ	板状	江戸（17 ～ 18 世紀）
11405	中通	-	4 区	攪乱	スギ	杓子	不明
11383	中通	-	4 区	トレンチ内	クリ	柱材	室町～江戸
11406	中通	-	4 区	包含層	スギ	曲物（底板）	不明
11407	中通	-	4 区	包含層	クスノキ	挽物	不明
11408	中通	-	4 区	包含層	針葉樹	曲物（底板）	不明
13524	寺海土	-	2 区	SR2002	ヒノキ	矢板	室町～江戸
	寺海土	-	2 区	SR2002	キハダ	用途不明品	室町～江戸
	寺海土	-	2 区	SR2002	キハダ	用途不明品	室町～江戸
	寺海土	-	2 区	SR2002	キハダ	用途不明品	室町～江戸
11450	寺海土	901	2 区	SR2003	クスノキ	下駄	室町～江戸
10298	寺海土	-	2 区	SR2006	ヒノキ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11423	寺海土	-	2 区	SR2006	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11424	寺海土	-	2 区	SR2006	ヒノキ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11425	寺海土	-	2 区	SR2006	ヒノキ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13397	寺海土	-	2 区	SR2006	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13522	寺海土	950	2 区	SD2001	ヒノキ	脚（台部）	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
13523	寺海土	951	2 区	SD2001	ヒノキ	脚	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
10131	寺海土	952	2 区	SD2001	ヒノキ	曲物（側板）	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
10296	寺海土	-	2 区	SD2001	ヒノキ	板状	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
11439	寺海土	-	2 区	SD2001	アカマツ	杭	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
13385	寺海土	-	2 区	SD2001	ヒノキ	燃えさし	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
13529	寺海土	-	2 区	SD2001	アカマツ	杭	平安～鎌倉（12 世紀～ 13 世紀前葉）
11409	寺海土	976	2 区	SD2002	ケヤキ	漆椀	鎌倉（13 世紀後半）
10233	寺海土	977	2 区	SD2002	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半）
11411	寺海土	978	2 区	SD2002	ヒノキ	指物	鎌倉（13 世紀後半）
11426	寺海土	979	2 区	SD2002	ヒノキ属	板状	鎌倉（13 世紀後半）
10132	寺海土	980	2 区	SD2002	サワラ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀後半）
13527	寺海土	981	2 区	SD2002	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半）
13387	寺海土	1231	2 区	SD2004	ヒノキ	卒塔婆	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13390	寺海土	1232	2 区	SD2004	サワラ	卒塔婆	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
10300	寺海土	1233	2 区	SD2004	ヒノキ	曲物（底板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
10297	寺海土	1234	2 区	SD2004	ヒノキ	曲物（底板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
10299	寺海土	1235	2 区	SD2004	ヒノキ	曲物（底板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
10295	寺海土	1236	2 区	SD2004	ヒノキ属	指物	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13389	寺海土	1237	2 区	SD2004	ヒノキ	杓子	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11447	寺海土	1238	2 区	SD2004	クスノキ	下駄（漆塗り）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11448	寺海土	1239	2 区	SD2004	カヤ	下駄	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11449	寺海土	1240	2 区	SD2004	ケヤキ	下駄	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11453	寺海土	1241	2 区	SD2004	ヒノキ	金剛草履	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11440	寺海土	1243	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
10294	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11412	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11413	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11414	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11415 ② 11416	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11415 ② 11416	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11417	寺海土	-	2 区	SD2004	サワラ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11420	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ属	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11421	寺海土	-	2 区	SD2004	サワラ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11422	寺海土	-	2 区	SD2004	サワラ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11427	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11428	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11429	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
	寺海土	-	2 区	SD2004	クヌギ節	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11434 ② 11435	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ属	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11434 ② 11435	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11441 ② 11442	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
① 11441 ② 11442	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11444	寺海土	-	2 区	SD2004	サワラ	下駄の歯？	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13386	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	杭	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13388	寺海土	-	2 区	SD2004	ヒノキ	燃えさし	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
11451	寺海土	1285	2 区	SD2005	ヒノキ属	下駄	鎌倉（13 世紀前半）

表 35　出土木材の器種別樹種組成（3）

プレパラートNo.	遺跡名	遺物No.	地区	遺構名	同定結果	遺物の種類	時　代
11452	寺海土	1286	2区	SD2005	キハダ	下駄	鎌倉（13 世紀前半）
13525	寺海土	1287	2区	SD2005	クリ	木錘	鎌倉（13 世紀前半）
11443	寺海土	1288	2区	SD2005	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀前半）
11418	寺海土	1289	2区	SD2005	ヒノキ	燃えさし	鎌倉（13 世紀前半）
13392	寺海土	1290	2区	SD2005	ヒノキ	棒状	鎌倉（13 世紀前半）
13391	寺海土	1291	2区	SD2005	サワラ	棒状	鎌倉（13 世紀前半）
11419	寺海土	1292	2区	SD2005	ヒノキ	用途不明品	鎌倉（13 世紀前半）
11445	寺海土	-	2区	SD2005	ヒノキ	下駄の歯？	鎌倉（13 世紀前半）
13528	寺海土	-	2区	SD2006	ヒノキ	燃えさし	鎌倉（13 世紀前半）
	寺海土	1377	1区	SE1001	ヒノキ	曲物（井筒）	鎌倉（13 世紀前葉）
	寺海土	1377	1区	SE1001	ヒノキ	曲物（井筒）	鎌倉（13 世紀前葉）
	寺海土	1377	1区	SE1001	ヒノキ	曲物（井筒）	鎌倉（13 世紀前葉）
10125	寺海土	1378	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10126	寺海土	1379	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10123	寺海土	1380	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10124	寺海土	1381	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10130	寺海土	1382	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10129	寺海土	1383	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10128	寺海土	1384	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
10127	寺海土	1385	1区	SE1001	ヒノキ	井戸枠材	鎌倉（13 世紀前葉）
13384	寺海土	-	1区	SF1013	ヒノキ	燃えさし	鎌倉（13 世紀前葉）
13480	寺海土	-	1区	SF1013	ヒノキ	燃えさし	鎌倉（13 世紀前葉）
13481	寺海土	-	1区	SF1013	ヒノキ	板状	鎌倉（13 世紀前葉）
13471	寺海土	-	1区	SF1021	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀後半～ 14 世紀）
13475	寺海土	1554	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13469	寺海土	1555	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13477	寺海土	1556	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13474	寺海土	1557	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13478	寺海土	1558	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13472	寺海土	1559	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13470	寺海土	1560	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13468	寺海土	1561	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13473	寺海土	1562	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13476	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13479	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13526	寺海土	1563	1区	SX1012	モモ	木錘	鎌倉（13 世紀前葉）
13383	寺海土	1564	1区	SX1012	ヒノキ	曲物（側板）	鎌倉（13 世紀前葉）
11446	寺海土	1565	1区	SX1012	ヒノキ	曲物（底板）	鎌倉（13 世紀前葉）
13382	寺海土	1566	1区	SX1012	ヤブマオ属	杭	鎌倉（13 世紀前葉）
13381	寺海土	1567	1区	SX1012	ヒノキ	杭	鎌倉（13 世紀前葉）
	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	箸	鎌倉（13 世紀前葉）
13591	寺海土	-	1区	SX1012	ヒノキ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13589	寺海土	-	1区	SX1012	スギ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
8830	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
3331	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13416	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13417	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13418	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13420	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13422	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13545	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13547	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマグワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13415	寺海土	-	1区	SX1012	ユズリハ属	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13419	寺海土	-	1区	SX1012	ガマズミ属	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13421	寺海土	-	1区	SX1012	ユズリハ属	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13423	寺海土	-	1区	SX1012	カラスザンショウ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13544	寺海土	-	1区	SX1012	ヤマビワ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13546	寺海土	-	1区	SX1012	コジイ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13548	寺海土	-	1区	SX1012	ガマズミ属	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13549	寺海土	-	1区	SX1012	モモ	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13584	寺海土	-	1区	SX1012	広葉樹小枝	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13585	寺海土	-	1区	SX1012	散孔材小枝	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13588	寺海土	-	1区	SX1012	散孔材小枝	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13590	寺海土	-	1区	SX1012	環孔材小枝	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13583	寺海土	-	1区	SX1012	同定不可	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13586	寺海土	-	1区	SX1012	同定不可	枝	鎌倉（13 世紀前葉）
13587	寺海土	-	1区	SX1012	同定不可	枝	鎌倉（13 世紀前葉）

第７章　総括

１　縄文時代

縄文時代の遺構では、中通遺跡において炉穴と集石が検出され、縄文土器や石器が出土している。それらの遺構や遺物の中でも､改築のものも含めて 241 基もの炉穴が密集した状態で発見されている点は、この遺跡での最大の特徴である。

炉穴は、関東や九州においては、以前から比較的多く発見されている遺構である。2003 年には、九州縄文研究会が「九州縄文時代の集石遺構と炉穴」と題した研究集会を開催し、九州における集石遺構と炉穴の集成と他地域との比較・検討が行われるなど、徐々に研究が進められつつある。また近年、発見事例の少なかった東海地域でも事例が増えており、縄文時代初期の生活を知る上で注目されている遺構である。しかし、その一方で炉穴の機能や用途といった基本的な問題も諸説あり、未だ解明されていない問題も多い。

東海地域における炉穴の様相は、愛知･岐阜･三重県は小濱学氏（小濱 2003)、静岡県は筒井京氏（筒井 2006）の論考が詳しいため、ここでは中通遺跡で発見された炉穴の特徴を抽出し、遺跡における様相をまとめた上で、その築造原理や機能などについて考察することとする。

（１）中通遺跡の炉穴

炉穴の特徴　まずは、中通遺跡で発見された炉穴の特徴を整理してみたい。中通遺跡では 200 をこえる数の炉穴が検出されており、炉穴ごとに調査の条件なども異なるが、全体としては次の６つの特徴が認められる。

①奥へ掘り進めて改築される炉穴が多い。
②放射状になる形で築かれている炉穴群が確認される。
③西側には単独で築かれている炉穴が多く、第１検出面から床面までの深さが深い。
④燃焼部の長さは、大半が１ｍ前後の規模となる。
⑤奥壁から橙化した焼土の中央までの距離は、ほぼ 40 ～ 60 ㎝の範囲におさまる。
⑥奥壁は、被熱により赤化していないものが大半である。

①～③は炉穴の築造過程や選地、④～⑥は炉穴の機能や使用方法に関わる特徴である。以下、大きくこの２つの要素に分けて、確認された事例を具体的に見て行きながら検討を行う。

（２）炉穴築造の原理

前進タイプ　先にあげた特徴①については、多くの炉穴で確認されている。個々の事例に関しては、すでに第３章で詳細を記しており、ここで個々の事例を繰り返すことは避ける。多くの事例では、古い炉穴の崩落土を除去した後に奥壁からトンネルを掘って、新たな炉穴を築いている。別の場所に炉穴を築いてもよいようにも思えるが、この地の地盤は小礫を含む硬い土壌であり、鉄製のシャベルでも掘るのが困難な程である。調査では、深く掘り下げる際には専ら鍬で掘り起こした後に、その土を取り除くといった方法をとった。そのような地質を考えれば、別の場所を新たに穴を掘るよりも、崩れた天井の土を除去する方が、明らかに効率的といえる。

放射状タイプ　特徴②に関しても、複数の事例が確認できる。64 ～ 70 号炉穴は、合計７基の炉穴で炉穴群を構成している（図 328)。まず最初に 68・70 号炉穴が築かれている。次の段階では、前庭部を振り返る形で 65・67 号炉穴が築かれる。65 号炉穴の廃絶後には、横に 64 号炉穴①を築き、さらに奥へ 64 号炉穴②を築く。また、67 号炉穴の天井崩落後には、やや主軸を変えて 66 号炉穴が築かれている。

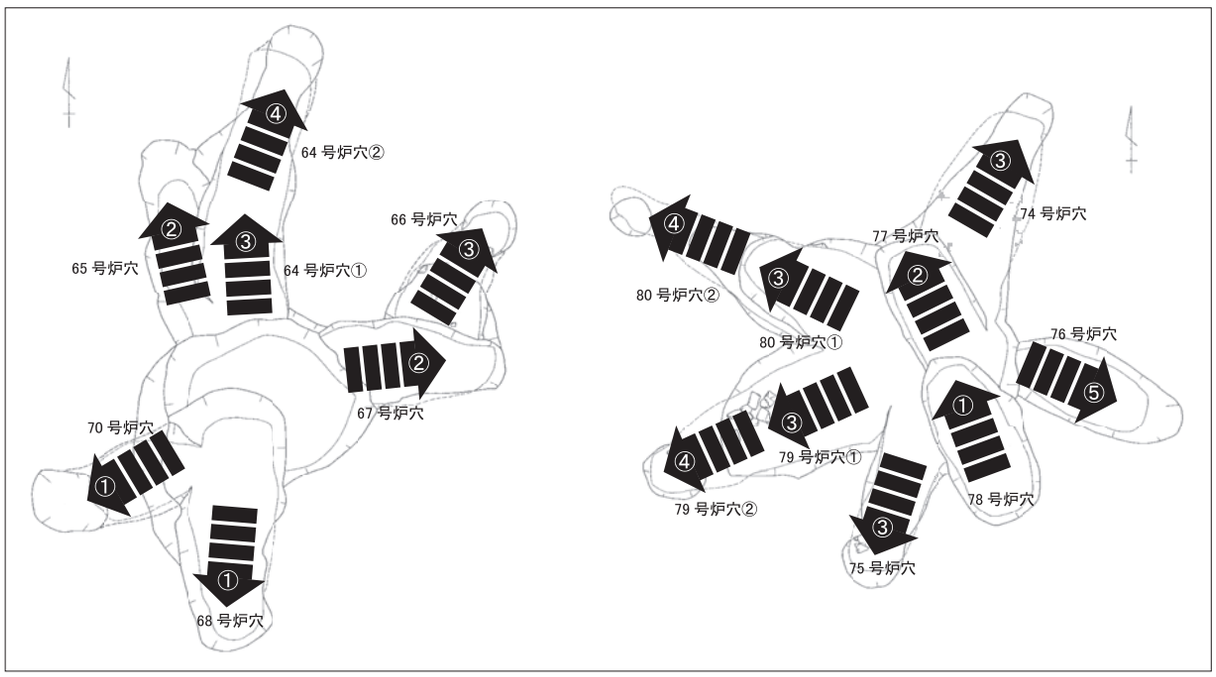


図 328　炉穴の構築過程

この南側に位置する 74 ～ 80 号炉穴は、合計 7 基の炉穴により炉穴群を構成している（図 328）。ここでは、まず 78 号炉穴が築かれている。次に、奥へ掘り進める形で 77 号炉穴が築かれる。第 3 段階では、78・77 号炉穴の跡を広い前庭部として利用し、西側に向かって前方と左右に、74 号炉穴・75 号炉穴・79 号炉穴①・80 号炉穴①が築かれる。また、79 号炉穴①と 80 号炉穴①の天井崩落後には、さらに奥へ向かって前進する形で 79 号炉穴②と 80 号炉穴②が築かれる。そして最後に、巨大な前庭部の東側に 76 号炉穴が築かれている。このように、64 ～ 70 号炉穴では、最初に築かれた 68・70 号炉穴の前庭部を利用して、その後次々に築かれている。また、74 ～ 80 号炉穴では、縦長の大きな穴となった 78・77 号炉穴の跡を前庭部として利用する形で、前後左右に炉穴が築かれている。

同様の状況は他の炉穴群でも確認でき、このことは、炉穴の築造においては、前庭部の構築にかかる労力の省力化が志向されていたことを示している。なお、この論理は集石の築造にも働いている。中通遺跡では炉穴と重なっている集石が多く、炉穴が埋没する過程で形成された窪みを掘り直す形で、集石の土坑がつくられている。

西側の炉穴　それでは、単独で構築されている特徴③の事例は、どのように理解したらよいのであろうか。ここで注目しなければならないのは、第 1 検出面から床面までの深さである。配置図にその数値を加えると、その状況は明確となる（図 329）。炉穴ごとに深さは様々であるが、西側の炉穴を除けば、多くが 50 ～ 60 ㎝程であり、120 ㎝の深さとなる 79 号炉穴が最も深い。一方で西側の炉穴は、100 ㎝を越えるものがほとんどで、150 ㎝前後のものも多く確認できる。調査所見によれば、西側では地山と認識した土に礫が多く含まれていたとのことである。この土が地山ではなかったとすると、西側には土石流や地滑りなどによって運ばれた土が堆積していた可能性が高い。礫が詰まっているため比較的検出が容易な集石は、多くが第 1 検出面で検出されているが、西側のものだけが 40 ～ 100 ㎝近く掘り下げた高さで発見されている。このことは、西側に谷が存在していたことを示していよう。

西側に単独で築かれている炉穴は、いずれも奥側を東から北東方向に向けて築かれている。これは、

図 329　第１検出面から床面までの深さ

斜面の下側を前庭部とし、斜面にトンネルを掘って炉穴を築いたことを示している。この場合、縦穴を掘って前庭部を築く必要はなく、極めて効率的な構築方法といえる。労力の省力化という志向性は、これらの炉穴においても共通していることが見て取れる。

省力化の志向　以上のように、中通遺跡で検出された炉穴からは、①崩落した炉穴を利用して奥へ奥へと掘り進める、②崩落した炉穴から前後左右に放射状に築いていく、③斜面を利用して築くという、３つの築造パターンを見出せる。もちろん、この３つに当てはまらない、単独で築かれている炉穴も検出されてはいるが、この①～③のパターンとなる事例が多いことは、基本的には前庭部を構築するための労力を少しでも省力化しようという原理が働いていたことを示しているとみてよいであろう。

（３）炉穴の機能

燃焼部の様相　炉穴の機能に関しては諸説あるが、九州などで主張されている燻製施設、竈のように使用した調理施設、土器の焼成施設という３つの説に大別できる。

　特徴④と⑤について、個々の炉穴の規模を示したのが表 36 である。平面図では、一見長大にみえる炉穴もあるが、前庭部の遺存状態が良好であったり、改築により複数の炉穴が重なっていたものであり、

表 36　炉穴一覧表（1）

炉穴No.	燃焼部 長さ（cm）	燃焼部 最大幅（cm）	奥壁－橙色焼土（cm）	C14 年代測定 (yrBP)
1	85	65	-	9440 ± 50
2	-	70	-	-
3①	90	65	40	-
3②	80	60	40	9440 ± 50
4	70	70	34	9460 ± 40
5	85	60	25	9500 ± 50
6	90	45	35	9530 ± 50
7	95	75	-	9530 ± 50
8①	(30)	(40)	-	-
8②	60	55	-	-
9	90	60	35	9520 ± 50
10	90	55	40	9610 ± 50
11	105	70	-	9380 ± 50
12①	130	70	50	-
12②	115	65	70	9480 ± 50・9680 ± 50
13	100	55	55	9490 ± 50
14	105	75	40	9460 ± 50
15	(60)	(50)	-	-
16	(65)	(50)	-	-
17	105	60	50	9630 ± 50
18	135	60	60	9570 ± 50
19	100	(40)	35	-
20	115	55	55	9570 ± 50
21	105	70	50	9500 ± 50
22	85	50	25	9670 ± 50
23	70	(25)	25	9510 ± 50
24	80	75	45	9670 ± 50
25	90	65	35	-
26	110	60	55	9580 ± 50
27	60	50	-	9480 ± 50
28	(40)	(45)	-	-
29	75	60	-	9670 ± 50
30	85	50	-	9520 ± 50
31①	60	60	-	-
31②	120	65	75	9570 ± 50
32	60	45	-	9500 ± 50
33	(70)	(60)	55	-
34	65	45	25	9650 ± 50
35	90	65	40	-
36	(80)	60	45	-
37	(55)	(35)	-	-
38①	60	50	25	-
38②	105	60	60	9620 ± 50
39	115	60	65	9510 ± 50
40①	90	90	40	9450 ± 50・9630 ± 50
40②	100	60	40	9530 ± 50
40③	(50)	(15)	-	-
41	(65)	(40)	-	-
42	95	50	60	9440 ± 50
43	(50)	(45)	-	9590 ± 50
44	100	85	50	9560 ± 50
45	85	70	50	9520 ± 50
46	(45)	(30)	-	-
47	(35)	(35)	-	-
48	80	45	-	-
49	(25)	55	-	-
50①	(45)	45	-	-
50②	85	40	-	9520 ± 50
51	110	55	-	-
52	95	55	30	9420 ± 50
53①	65	50	20	-
53②	75	50	50	9450 ± 50
54	90	65	30	9500 ± 50

炉穴No.	燃焼部 長さ（cm）	燃焼部 最大幅（cm）	奥壁－橙色焼土（cm）	C14 年代測定 (yrBP)
55①	55	50	-	-
55②	65	50	-	9520 ± 50
56①	50	40	-	-
56②	60	45	30	-
57	55	45	-	-
58	(40)	(30)	-	-
59	(60)	(30)	-	-
60	55	(20)	-	-
61	(60)	(40)	-	-
62	70	45	-	9670 ± 50
63	50	45	25	9560 ± 50
64①	(70)	70	30	-
64②	95	55	40	9450 ± 50
65	115	50	60	9540 ± 50
66	(70)	70	45	-
67	120	65	55	9530 ± 50
68	115	70	-	9690 ± 50
69①	(55)	(40)	-	-
69②	(85)	(70)	-	-
70	95	60	60	9600 ± 50
71	85	65	-	9580 ± 50
72	(55)	(45)	-	-
73①	(90)	(40)	-	-
73②	(60)	(60)	-	-
73③	100	70	(80)	9580 ± 50
74	120	70	60	9450 ± 50
75	115	50	45	9520 ± 50
76	75	60	40	9570 ± 50
77	100	65	50	9700 ± 50
78	100	65	35	9440 ± 50
79①	80	65	40	-
79②	115	70	60	9760 ± 50
80①-1	100	70	50	-
80①-2	100	70	30	-
80②	110	55	60	9540 ± 50
81	68	38	-	9560 ± 50
82	54	42	-	-
83	(66)	(54)	35	-
84	(60)	(38)	-	-
85	(66)	(38)	30	9250 ± 50・9520 ± 50
86	90	68	35	-
87	76	42	-	-
88	68	50	25	9580 ± 60
89	110	58	70	-
90	72	60	40	(9580 ± 50)
91	94	78	(40)	-
92	80	60	30	9560 ± 50
93	115	68	50	9560 ± 50
94	(35)	(30)	-	-
95	115	70	50	9540 ± 50
96	100	45	-	9580 ± 50・9600 ± 50
97	85	40	60	-
98	70	40	-	-
99	60	50	-	9580 ± 50
100	(60)	(20)	-	-
101	(55)	(50)	-	-
102	(75)	(45)	-	-
103	80	50	45	9470 ± 50
104	75	50	-	9690 ± 50
105	(115)	(50)	-	-
106	(90)	(45)	(40)	9490 ± 50・9560 ± 50

表 37　炉穴一覧表（２）

炉穴No.	燃焼部長さ（cm）	燃焼部最大幅（cm）	奥壁－橙色焼土（cm）	C14 年代測定 (yrBP)
107	85	40	40	9610 ± 50
108	(95)	60	-	-
109	100	55	60	9530 ± 50
110	(75)	(44)	-	9450 ± 50
111	(40)	(57)	-	-
112	70	80	-	-
113	(56)	(44)	15	-
114 ①	(70)	(60)	-	-
114 ②	100	70	60	9540 ± 50・9580 ± 50
115	(90)	(60)	-	-
116	(40)	(75)	-	-
117	135	70	90	9620 ± 50
118	95	70	45	9610 ± 50
119	110	56	-	-
120	(56)	(75)	-	-
121 ①	85	65	40	-
121 ②	95	65	70	-
122	(18)	(10)	-	-
123	70	70	30	-
124	95	68	40	9550 ± 50
125	(95)	(65)	-	-
126	(35)	(30)	-	9610 ± 50
127	(50)	(45)	-	9470 ± 50
128	95	50	50	9500 ± 50
129	82	60	-	-
130	100	60	35	9680 ± 60
131	(75)	(50)	-	-
132	(45)	(40)	-	-
133	(94)	(40)	-	-
134	(64)	(50)	-	-
135	120	63	-	9600 ± 50
136	80	50	40	9500 ± 50
137	114	68	60	-
138	112	45	60	-
139	(60)	(65)	-	-
140	90	46	40	-
141	(70)	(17)	30	-
142	(30)	(35)	-	-
143	60	(25)	30	9550 ± 50
144	115	55	30	9540 ± 50・9430 ± 50
145	(50)	(30)	-	-
146	(35)	(40)	-	-
147	80	70	-	-
148	115	48	-	-
149	100	60	30	-
150	115	65	60	-
151	(80)	(65)	25	-
152	100	65	-	-
153	70	45	-	9720 ± 50
154	115	75	60	9610 ± 50
155	(90)	(60)	35	-
156	110	70	55	-
157	(40)	(50)	-	-
158	120	60	-	-
159	(100)	(70)	40	-
160	-	-	-	-
161	120	85	50	9540 ± 50
162	90	70	35	-
163	(60)	(25)	-	-
164	(90)	(35)	-	-
165	(55)	(40)	-	-
166	75	55	-	9700 ± 50・9500 ± 50
167	-	-	-	-
168	135	80	80	9690 ± 60・9540 ± 50
169	(65)	(66)	-	-
170	(120)	70	-	9610 ± 50
171	(100)	(40)	45	-
172 ①	(52)	(38)	-	-
172 ②	70	60	-	9610 ± 50
173	(70)	(53)	25	9510 ± 50
174	70	55	35	9550 ± 50
175	(75)	(46)	60	-
176	70	74	40	-
177 ①	95	75	-	-
177 ②	110	78	-	9560 ± 60
178	115	80	(50)	-
179	110	75	50	9310 ± 50
180	95	65	50	9570 ± 50
181	100	70	45	9450 ± 50
182	100	60	60	9520 ± 70
183	100	60	-	-
184	(115)	(55)	40	9550 ± 50
185	(42)	(48)	-	-
186	(60)	(40)	-	9560 ± 50
187	(35)	(50)	-	9550 ± 50
188	(20)	(40)	-	-
189	100	58	60	9550 ± 50
190	90	60	50	-
191	85	(65)	30	9550 ± 50
192	95	70	50	9570 ± 50
193	93	53	50	9610 ± 50
194	(70)	(68)	35	9660 ± 50
195	108	80	45	9690 ± 50
196	115	70	60	9530 ± 50
197	95	48	55	9440 ± 50
198	80	55	40	9580 ± 50
199	95	80	30	9550 ± 50
200	120	68	60	9590 ± 50
201	(38)	(48)	-	9630 ± 50
202	(50)	(40)	-	-
203	(55)	(38)	35	9560 ± 50
204	(60)	(44)	-	9500 ± 50
205	100	65	-	-
206	85	68	-	9460 ± 60・9580 ± 50
207	(75)	(35)	-	9600 ± 50
208	85	50	35	-
209	(80)	(50)	-	-
210	(65)	(45)	-	-
211 ①	(90)	(65)	-	-

燃焼部に限ってみれば、長さは１ｍ前後となるものがほとんどである。

特徴⑤は、炉穴が使用された最終段階で、燃料が焚かれた位置を示している。特徴④を考慮すると、奥壁から 40 ～ 60 ㎝という距離は、燃焼部のほぼ中央にあたる。また、天井の遺存する炉穴をみると、

床面から天井までの高さは、30㎝前後しかない。実際に炉穴内において、どの程度の量の燃料が使用されたのかは明らかにし得ないが、少なくとも燃焼部内に燃料以外のものを入れる隙間はほとんどないであろう。中通遺跡の炉穴については、燃焼部内で土器を焼成するための施設である可能性は低いといえる。

被熱の範囲　特徴⑥に関しては、個々の実測図を参照していただきたいが、多くの炉穴で奥壁付近の床面や側壁に厚い明確な焼土が認められるが、それが奥壁にまでおよぶものはごくわずかである。また、奥壁にも焼土が検出されている炉穴でも、上部が失われているものを除けば、焼土は下半までしか至っていないものがほとんどである。

天井が遺存する炉穴に限って言えば、奥壁の焼土が上端まで確認されたのは192号炉穴のみである。ただし、この192号炉穴でさえ、焼土が上端まで至ってはいるものの、上端では表面がわずかに赤化している程度で厚さはほとんど認識できず、強い火熱を受けたとは言い難い状況にある。このことは、強い火熱がほぼ燃焼部内に収まってしまっていることを示している。

炉穴の機能　火熱が上部に達していないことは、竈のような施設であれば、直火よりも熱効率を下げてしまっており、致命的な欠陥と言わねばならない。先にみたように、築造の際に効率性を志向していた集団が、そのような欠陥のある施設を数百基も造り続けていたとは考えられない。むしろ、火熱が上部に達しないような使用法をとっていたとみるのが妥当である。この火熱調整を行っていた点を重視すると、中通遺跡の炉穴の機能として最も妥当性が高いのは、燻製施設である。

燻製施設とした場合、加工する食品を配置する空間は、燃焼部の上半から煙道にかけてであろう。しかしそこは、最も崩落しやすい場所でもある。ここで注目されるのは、189号炉穴における土器の出土状況である。土器は上から落ちてバラバラになったような状態で、煙道直下の床面から出土している。当初竈としての使用法を裏付けるものとも考えられたが、接合作業を行ったところ、土器の上半しか存在しないことが判明している。この土器の口径は33㎝に復原されている。煙道は直径38㎝の規模で検出されているが、築造時のまま遺存しているとは考えにくく、崩落して広がっている可能性が高い。両者の径からみると、この底部を欠いた土器は、煙道を保護する目的で、煙道に嵌めこまれていた可能性が高いと推測される。

（4）縄文時代の中通遺跡

燻製の目的　燻製といえば、現在ではソーセージやスモークサーモンなど、主にチップのバリエーションによってその独特の風味を楽しむという色彩が強い。しかし、そもそも燻製は、食品の保存の観点から生まれたものとされる。燻製には、「燻煙諸成分の殺菌力と燻煙処理中に食料品の水分が次第に減少し、水分活性が減少して微生物が成育しにくくなる」という効能があるという（太田ほか1997）。もちろん、食事としては美味であるに越したことはないが、年間を通じての安定的な食糧確保が困難であった縄文時代早期において、保存性という観点がより重視されていたであろうことは想像に難くない。

定住化と炉穴の消失　ところで、燻製される食材は、肉や魚が一般的ではあるが、果たしてそれだけであろうか。縄文時代を通じて貴重なカロリー源であったとされる食材の一つが、ドングリなどの堅果類である。飛騨歴史民俗学会の竹原淑美氏によれば、かつて飛騨地域では、飢饉に備えてドングリなどの堅果類を貯蔵する風習があったが、それらは囲炉裏の上で燻してから貯蔵していたという。そして実際に実験したところ、燻さずに貯蔵したものはしばらくして虫が発生したが、燻したものは何年経っても

虫が入らなかったそうである。

炉穴は、九州などでは一つの遺跡で百基をこえる遺跡がみられるなど、縄文時代早期を中心に盛んにつくられているが、関東地方以外では前期になると急速に姿を消す。炉穴がつくられなくなる時期と、前期という定住化が進行した時期とはまさに軌を一にしている。竪穴住居内に設けられた炉は、調理施設や暖房施設として主に利用されるが、加えて先述の飛騨地域の民俗例のように、簡易な燻蒸施設としても利用されていたはずである。定住化の進行とともに、屋外に専用の燻蒸施設を築く意味合いが薄れた結果、次第に炉穴が築造されなくなっていったのではないだろうか。もし、土器焼成施設であれば定住化が進めば集落にはさらに多くの遺構が残るはずである。また、優れた調理施設であれば住居内に持ち込まれても不思議はないが、周知のように住居内にカマドが導入されるのは古墳時代以降のことである。

中通遺跡の炉穴と集石　中通遺跡の炉穴は、出土している土器から、いずれも縄文時代早期に位置付けられる。その具体的な年代については、放射性炭素年代測定によって、一定の目安が示されている。ただし、炉穴から出土した炭化物は、いずれも埋没の過程で土砂とともに流入したもので、直接的に炉穴の年代を示すものとはいえない。実際に遺構における切り合い関係と、炭化物の年代が逆転しているものも少なくない。あくまでも、埋没年代の上限を示すものでしかない。一方で、炉穴とともに検出されている集石からは、より確実性の高い年代を知ることができる。集石は、炉穴と重複する位置にあるものが多く、それらは炉穴の天井崩落後、その窪みを掘り直して築かれている。これは、完全に埋没する以前に築かれていることを意味しており、炉穴と集石とは、築かれた年代が大きく異なっていないことを示している。集石からは、比較的良好な状態で炭化材が出土しており、放射性炭素年代測定の結果は、土砂とともに流入した炭化物の小片を含めると、炉穴とほぼ同様の 9400yrBP ～ 9700yrBP となるが、炭化材に限った場合には 9470yrBP ～ 9640yrBP という年代にしぼられる（表 25）。炉穴が築かれたのも、集石と同様に 9500yrBP を中心とする年代であるとみてよいであろう。

今回の調査では住居跡は確認されていないが、検出された 200 基以上の炉穴は、この地に人びとが繰り返し訪れては、燻製作業を行っていたことを示している。なぜここでなければならなかったのか、現在明確な回答は持ち合わせていないが、中通遺跡では近くに谷川が流れており、西側と北側に丘陵が位置するため強風を避けることができる。このような立地も、深く関係していたものと推測される。繰り返し築かれたおびただしい数の炉穴は、少なくとも当時、この地において燻製作業を行うことが、一年の生活サイクルの中で明確に位置付けられていたことを物語る。中通遺跡は、安定的な食糧の確保が困難であった縄文時代早期において、まさに人びとの命をつなぐための重要な場所であったとみてよいであろう。

引用・参考文献

小濱学　2003「煙道付炉穴及び炉穴に関する一考察」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』六一書房
筒井京　2006「炉穴考」『研究紀要　第 12 号』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
太田静行、高坂和久、グュエン・ヴァン・チュエン　1997『スモーク食品』恒星社厚生閣
九州縄文研究会編　2003『第 13 回九集縄文研究会宮崎大会　九州縄文時代の集石遺構と炉穴』

2　古代～近世

中通遺跡と寺海土遺跡では、数量の多寡はあるものの、古代から近世までという幅広い年代の遺構や遺物が発見されている。個々の遺構や遺物についての詳細は、第４・５章を参照いただくとして、ここでは各時代における特徴的な遺構や遺物を取り上げた上で、両遺跡の様相について明らかにしたい。

なお、中通遺跡と寺海土遺跡は現在国道 362 号線によって隔てられているため、便宜的に別の遺跡名称が付けられているが、当然遺跡が展開した時代にはそのようなものは存在しない。各時代の様相を考える上においては、両遺跡は一体のものとして扱うことにする。煩雑になるのを避けるため、遺跡の名称はそのまま用いるが、それはこのエリアにおける地区を示すという程度にとらえていただきたい。

（１）古代

遺構と遺物　古代の遺構に関しては、中通遺跡の東端で河川跡や、寺海土遺跡の南西部で土坑が検出されている程度であり、遺物もそれほど多くない。この状況からは、この場所に集落が形成されていた様子はうかがえない。ただし、包含層・攪乱からは、瓦塔や瓦といった特殊な遺物も出土している。

瓦塔と瓦　瓦塔（511）は軒先の部位の破片であり、中通遺跡の４区から出土している。詳細な年代は不明であるが、平安時代のものとみてよいであろう。

古代のものとみられる瓦は、中通遺跡の３区から平瓦が４点出土している。平瓦は、大きく桶巻き作りのものと、一枚作りのものとに分けられる。桶巻き作りの平瓦（340）は、凸面が全面ナデ調整で、縄叩きの痕跡が残る。凹面には側板痕が明瞭に残り、側端に面取り調整が施されている。尾根を越えた西側に所在する東ノ谷瓦窯の出土品から、桶巻き作りの平瓦は、この地域では少なくとも８世紀中葉までは生産されていたとみられている（武田 2008）。凹凸面ナデ調整のもの（343）も出土しているが、おそらくはこれも桶巻き作りのものであろう。一枚作りの平瓦は、橙白色の色調で、凸面にはナデ調整が施されており、わずかに縄叩きの痕跡が残る。一枚作りの平瓦は、東に隣接する中屋遺跡でも出土している（中屋遺跡平瓦Ⅰ類）が、凸面にはナデ調整が施されておらず、灰白色の色調であるなどの相違点がみられる。詳細な年代は不明であるが、奈良時代の後半から平安時代にかけてのものとみてよい。また、同様の胎土・色調である有段式の丸瓦（341）も、古代の瓦である可能性が高い。平瓦と同じく、中通遺跡の３区から出土している。

瓦塔や瓦は、仏教施設の存在を想起させる遺物ではあるが、中通遺跡と寺海土遺跡では、出土量が少なく寺院の存在は想定することは難しい。仏堂程度の施設であれば、存在した可能性も考え得るが、それも小規模なものであろう。いずれにせよ、古代においてこの地では、大勢の人びとが暮らしていたような集落の展開は確認できない。

（２）中世前期

土師質土器皿　中世前期になると、寺海土遺跡において、遺構や遺物の量は急激に増加する。遺物の大半は山茶碗であるが、土師質土器皿が多く出土している点は、この遺跡の大きな特徴といえる。寺海土遺跡のものは、東に隣接する中屋遺跡のものと技法や形状、胎土などで共通する要素が多い（図 330）。まず手づくね成形のものをみてみると、中屋遺跡では口径が８～９㎝の小型のものと、12 ～ 13 ㎝の中型のもの、14 ～ 15 ㎝の大型のものの３法量確認できる。小型のものは浅い皿形で、中型と大型のものは深い坏形の形状である。全体的に厚手のつくりとなるものが多く、口縁部は一段ナデが施される。中型と大型のものには、強いナデ調整によって境に段ができているものも多い。寺海土遺跡では、このう

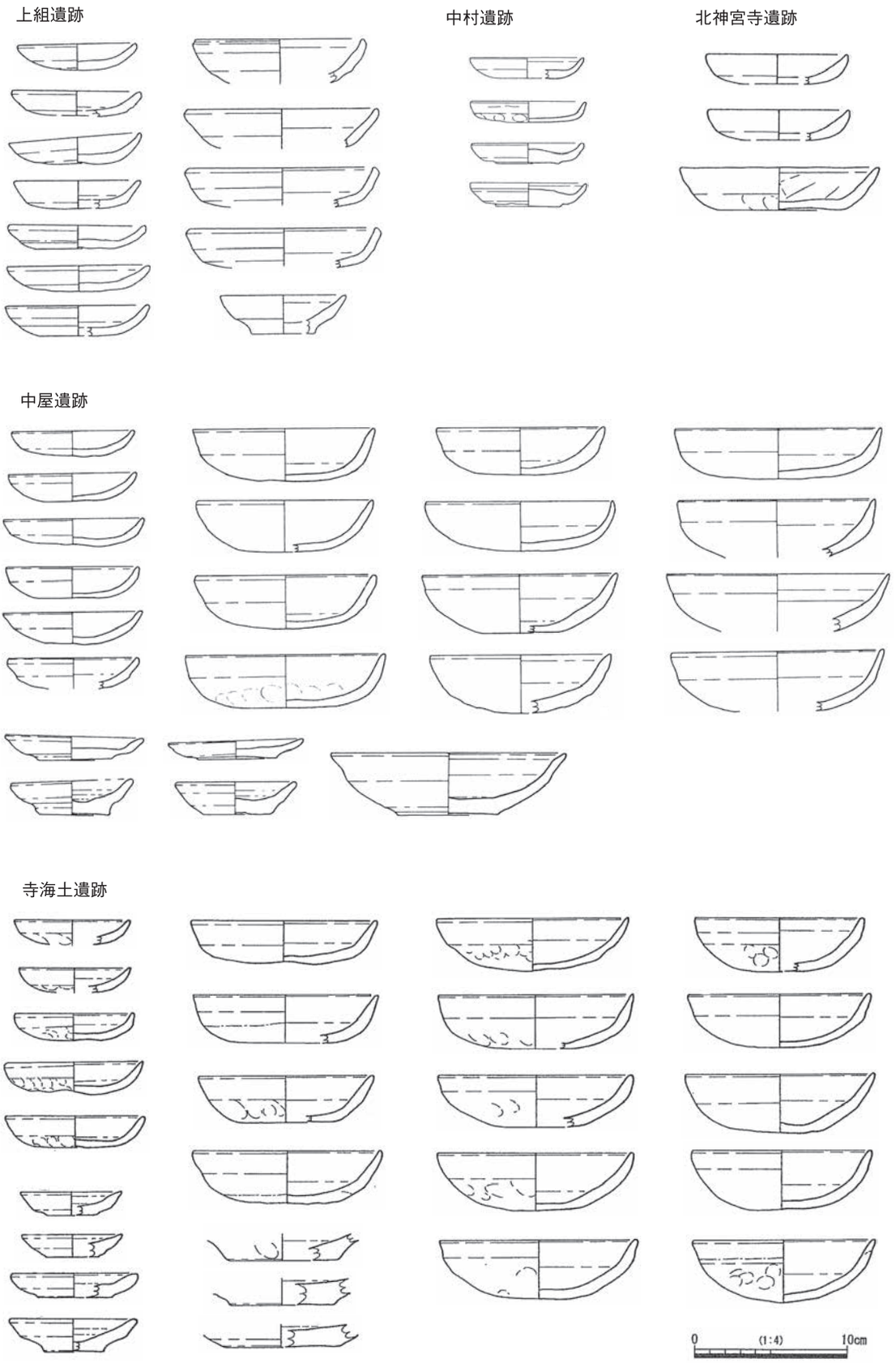


図 330　中世前期の土師質土器皿（浜松市内）

ち小型のものと中型のものがみられる。これらは、口縁部に共通して１段ナデが施されており、一部に口縁部に面取りが施されるものがあるなど、京都系土師器の流れのなかで捉えられるものである。報告書に掲載されているだけでも、中屋遺跡では 110 点、寺海土遺跡では 120 点あり、掲載できなかった破片も含めれば当然これ以上の数が出土していることになる。両遺跡の手づくね成形の土師質土器皿は、１段ナデ調整の技法は残るものの、厚手で深身となるなどの在地化の要素も多くみられる。この点はネガティブに捉えられることが多いが、在地の工人が多くの需要に応じるために行った創意工夫の結果と捉えることも可能である。

また、ロクロ成形のものは、小型のものと大型のものの２法量が確認できる。小型のものは浅い皿形で、大型のものは深く碗に近い形状である。ただし、掲載されているものでも中屋遺跡では 19 点、寺海土遺跡では 26 点と、手づくね成形のものと比べるとその出土量ははるかに少ない。

土師質土器皿は、中世後期、特に戦国期から近世にかけてのものは、多くの遺跡で大量に出土しているが、中世前期のものに限ってみると、遠江では意外なほどその出土例は少ない。浜松市域では、近年中世前期の遺跡の調査例が増えているが、ある程度まとまった形での出土となると、上組遺跡で確認されている程度しかない。

上組遺跡は、浜松市南区渡瀬町に所在する遺跡で、屋敷地の区画溝の可能性のある大規模な溝や土坑などが検出されている。土師質土器皿は、溝や土坑、小穴などから出土している（図 330）。手づくね成形のもとロクロ成形のものがみられるが、ロクロ成形のものはわずかであり、主体は手づくね成形のものである。手づくね成形の皿は、大型のものと小型のものとがある。いずれも厚手のつくりであり、口縁部には強いナデ調整が施される。また、大型のものには、２段ナデや口縁部の面取りが施されているものも出土している（財浜松 2011）。このほかには、北神宮寺遺跡（財浜松 2009）や中村遺跡（財浜松 2006）などでも出土は確認できるが、数点程度とごく少量の出土に過ぎない。

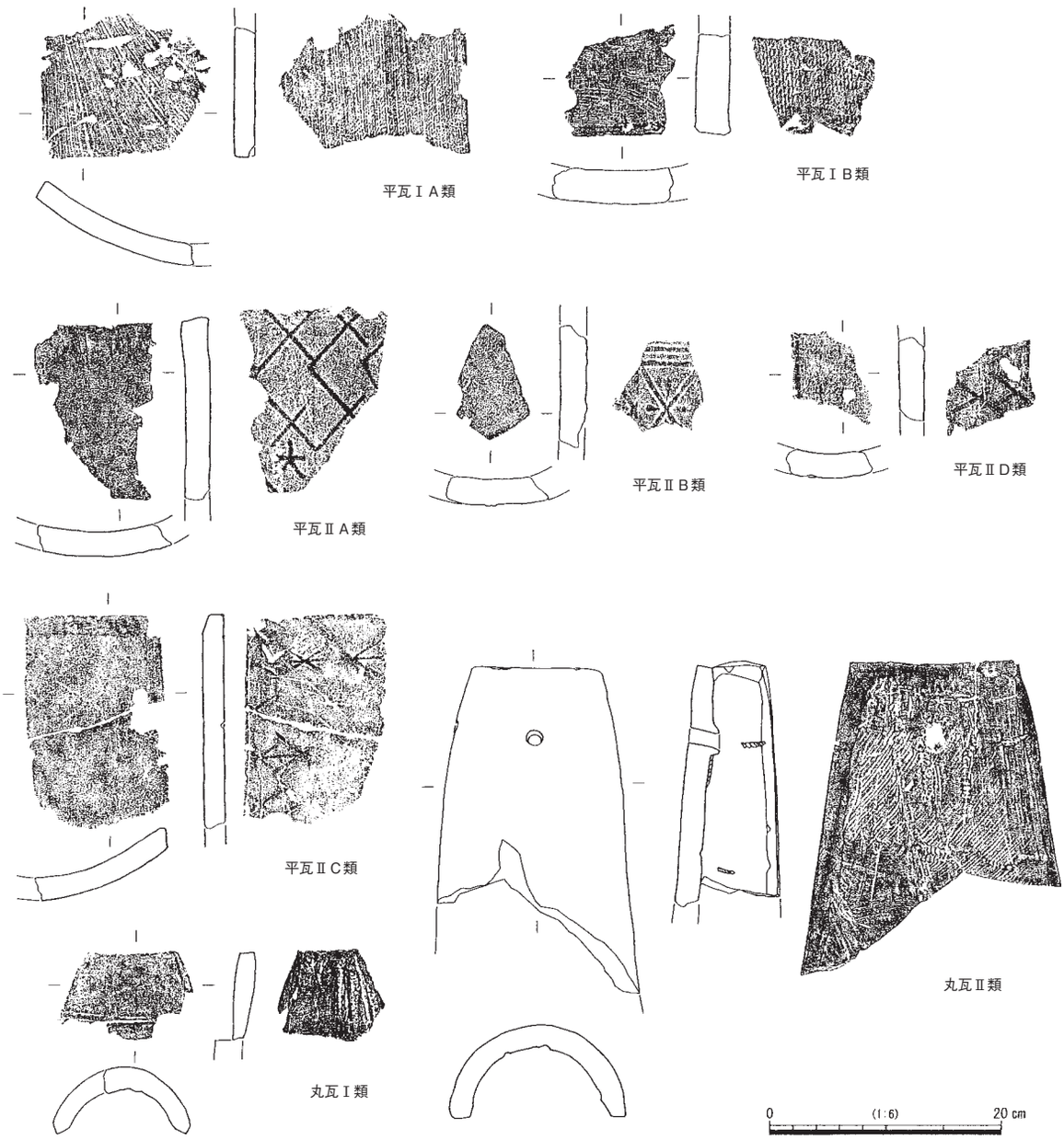
土師質土器皿は、武家儀礼との関係が強調されることが多いが、武家に限るものではなく寺社や公家でも使用されていた（中井 2011）とされる。寺海土遺跡から出土している土師質土器皿については、形態や胎土が中屋遺跡のものと類似することから、中屋遺跡との関係からとらえるのが妥当である。中屋遺跡は岩水寺と関係する寺院の可能性が高いとされており、中屋遺跡との関係とはすなわち岩水寺との関係を意味している。岩水寺に関しては、中屋遺跡の報告書（静埋研 2010）で詳しく述べられているが､中世前期にはこの地域で大きな勢力を誇った寺院である。岩水寺における京都や鎌倉との関係が、京都系の土師質土器皿がつくられる背景にあったとみてよいであろう。

中世瓦　中通遺跡と寺海土遺跡から出土している中世瓦からも、中屋遺跡との関係がうかがえる。両遺跡から出土している平瓦は中屋遺跡の平瓦ⅡＢ類であり、丸瓦は無段式とみられることから中屋遺跡の丸瓦Ⅱ類に相当すると推定される（図 331）。胎土や焼成も中屋遺跡のものと近似しており、同一の窯で焼成された製品とみてよい。

ただし、一方で中屋遺跡で出土している平瓦ⅡＡ・ⅡＣ・ⅡＤ類が出土していない点にも注目しておく必要がある。これらはⅡＢ類と同時期の瓦とみられており、中通遺跡と寺海土遺跡ではそれらの内の一部しか使用されていないことになる。出土している瓦の数も少ないことから、中屋遺跡に比べ建物の規模は小さく、屋根の一部に瓦を使用する程度であった可能性が高い。中通遺跡の周辺には、中屋遺跡（岩水寺）に関連する小規模な建物が建てられていたと推測される。

墨書土器　中屋遺跡と同様に、寺海土遺跡では墨書土器も多く出土している（図版 99 ～ 101）。２字のものは、「得善」「行□」の２点確認できる。「得善」は、「得善果」の意と解すれば、仏教的な意味合い

中屋遺跡



中通遺跡・寺海土遺跡

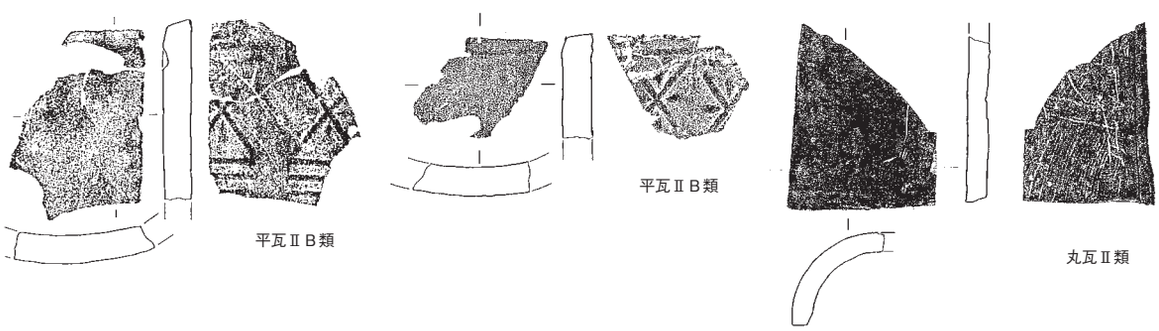


図 331　中世瓦

の強いものといえる。１字のものは、「奉」「粟」「上」「大」「十」「一」「又」などがある。「奉」の墨書は、古代にも比較的多くの出土例があり、儀礼や祭祀に関連するものとみてよい。「粟」は土器に入れる穀物の名称を記したものであろう。ほかの「上」「大」「十」「一」「又」などの画数の少ない文字は、中世の墨書土器で多用される文字であり（静文研 2010）、記号の可能性も考えられる。花押状のものは、「○」に花押状のものを書いた１点のみである。記号としては、早九字様のものが１点出土している。これらのほかは、断片のものを除くとすべて略押状の記号である。

墨書土器に関しては、画数の少ない１文字のものや略押状の記号など、県内の中世遺跡で一般的にみられるものが大半であるが、「得善」や「奉」、早九字様の記号など、仏教や儀礼に関連する墨書が出土している点が特徴といえる。このような点からすれば、画数の多い「粟」の文字は、おそらく供物の名称であろう。墨書土器からも、遺跡の周辺に仏教関連施設の存在が想定される。

道路遺構　また、遺構の中で最も注目されるのは、寺海土遺跡の南側で検出された道路遺構である。道路は位置をずらして２条確認されるが、いずれも東西 60 ｍにわたって直線的に設けられている。規模が確認できる北側の道路幅は約７ｍで、13 世紀の前葉から中葉にかけてのものである。

直線的な形状や規模から見て、その敷設には権力者の介在が想定される。この地域において、この時期それだけの大事業を行い得た存在となると、それはやはり岩水寺以外には考えにくい。当時寺院は、宗教組織というだけでなく、為政者として公共事業を行う責務も担っていた。中屋遺跡においては、河川の護岸工事が行われているが、周辺の道路整備も行っていたのであろう。13 世紀の中葉から後葉には、道路をやや南側へ移す形で道がつくられ、側溝の幅も以前のものより広くなる。これは、中屋遺跡において、護岸工事が行われるとともに、寺院の大規模な再整備が行われた時期とも一致する。道路の改修は、この地域一帯で実施された岩水寺による大規模な土地整備事業の一環として行われたものととらえてよいであろう。

祭祀遺構　寺海土遺跡では、SF1008･1012 など、祭祀･儀礼に関連する遺構がいくつか確認されている。個々の具体的な内容を指し示す遺物は出土していないが、墨書土器と同様に、北側に想定される仏教施設の存在が大きく関わっているものと考えられる。

また、明治期の地図（図 10）をみるとより鮮明となるが、おそらくはこの場所の立地とも関係があるものと推測される。中屋遺跡の周辺は、北側の丘陵と南側の低地に挟まれた比較的広い微高地が広がっているが、中通遺跡・寺海土遺跡の場所では微高地が急激に狭くなる。中屋遺跡からみれば、中通遺跡と寺海土遺跡は領域の境界にあたるとの認識が可能である。検出されている祭祀関連遺構のなかには、仏教に関連するものだけでなく、境界に関わるものも含まれているかもしれない。

（３）中世後期～近世

龍泉寺　中世後期から近世における遺跡の様相をみるにあたっては、北側に隣接する龍泉寺との関係を無視することはできない。龍泉寺は、明徳４（1393）年に、大隅国の洞巌玄鑑によって開かれたとされる曹洞宗の寺院である。当初寺院の名は、洞龍山雲岩寺であったとされる。洞巌は、応永元（1394）年には豊後泉福寺に戻り、応永 16（1409）年に亡くなっている。洞巌が去った後は、弟子達が開いた９ヶ寺が輪番で住職を務めたとされる。ほかにも、寺の開創や洞巌和尚に関する伝承はいくつか残っているようであるが、中世後期の寺の様相は史料がなく、明確なことはわからない。

近世には、宋山和尚を伝法開山として、可睡斎の末寺となり、寺名を現在の太白山龍泉寺に改めている。末寺は 20 ヶ寺あり、現在でもその関係は保たれているそうである。また文政 10（1827）年２月９

日には、失火により寺院が全焼している。その後しばらくは再建できず、再建されたのは大正６（1917）年の４月であったという（静文研 2010・桐畑 2002）。

中世後期　中世後期の遺構としては、中通遺跡において掘立柱建物や土坑が検出されている。遺物は、同じく中通遺跡から瀬戸美濃産の製品や内耳鍋などが出土している。しかし、いずれも数は多くなく、遺跡が大規模に展開したような様子はうかがえない。前段階における岩水寺との関係からすると、岩水寺の衰退が大きく影響しているのであろう。

中世後期になると、この地域には多くの禅宗寺院が建てられている。雲岩寺もその一つであるが、遺跡の周辺だけをみても、西には大宝寺、常光院、庚申寺、陽泰院が、東には安泰寺が位置するなど、国道の付近に数百ｍごとに寺院が林立するような状況である。禅宗寺院が全国的に拡散する時期ではあるが、この地域においては岩水寺の衰退も、これに大きく関係しているような印象を受ける。

なお、寺伝の通りであれば 14 世紀の末に、中通遺跡の北側に雲岩寺（龍泉寺）が開かれることになるが、遺跡の状況に大きな変化は見出せない。中屋遺跡でも、応永年中に遺跡の北側に臨済宗の安泰寺が創建されるが、遺跡の状況に大きな変化は確認されておらず、中屋遺跡の状況とほぼ同様のあり方といえる。仏教関係の遺物も、宝篋印塔の部材が１点出土しているのみであり、少なくとも中通遺跡の範囲まで伽藍が広がっていたとは考えにくい。この頃の雲岩寺の寺域は、さほど大規模なものではなく、建物も比較的小規模であった可能性が高い。

近世　中通遺跡では近世になると、遺構や遺物が飛躍的に増加する。遺構としては、建物や土坑の数が増えるとともに、区画溝が掘られ、遺跡の西側には井戸が設けられる。遺物は、瀬戸美濃産の陶磁器を中心に、土師質土器皿や肥前産の磁器などが豊富に出土している。寺の周囲に建物が建てられ、それが継続的に建て替えられるという、安定的な村落経営がなされたのは、近世以降であるとみてよい。また、18 世紀以降の溝などは、現在の地割りや道路とほぼ一致するものが多い。現在につながる土地利用のあり方は、近世後半に形づくられている。

この時期の大きな出来事としては、文政 10（1827）年に龍泉寺が全焼している。全焼ということから、おそらくは周囲の家屋もいくらか延焼を被ったものと推測される。しかし、陶磁器は 19 世紀以降にも継続して出土しており、その数が大きく減少するような傾向もうかがえない。寺院の堂舎の再建は大正時代までかなわなかったようであるが、周辺の民家は支障なく補修・再建された様子がみてとれる。

また、寺海土遺跡では、中通遺跡とは対照的に近世の遺物がほとんど出土していない。遺構に関しても、地境溝とみられる小規模な溝 SD1006 が検出されているのみである。寺海土遺跡は、近世には現在と同様に水田として利用されていたのであろう。

引用・参考文献

中井淳史　2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
財団法人浜松市文化振興財団　2011『上組遺跡』
財団法人浜松市文化振興財団　2006『中村遺跡－中世編－』
財団法人浜松市文化振興財団　2009『北神宮寺遺跡』
桐畑守昌　2002「太白山龍泉寺起立縁起」『岩水寺の里』雲岩寺組世話人会
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『中屋遺跡』